

IMS
バージョン 15.1.0

コマンド 第 2 巻:
IMS コマンド N - V

IBM

IMS

バージョン 15.1.0

コマンド 第 2 巻:
IMS コマンド N - V

IBM

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、1495 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IMS 15 (プログラム番号 5635-A06)、IMS Database Value Unit Edition V15.01.00 (プログラム番号 5655-DS5)、IMS Transaction Manager Value Unit Edition V15.01.00 (プログラム番号 5655-TM4)、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリソースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： SC27-6781-00

IMS

Version 15.1.0

Commands, Volume 2:

IMS Commands N - V

(November 5, 2017 edition)

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

© Copyright IBM Corporation 1974, 2017.

目次

本書について	vii	QUERY ODBM TYPE(SCIMEMBER) コマンド	499
前提知識	vii	QUERY ODBM TYPE(THREAD) コマンド	502
新規および変更された情報の識別方法	vii	QUERY ODBM TYPE(TRACE) コマンド	510
構文図の読み方	viii	QUERY OLC コマンド	513
IMS 15 のアクセシビリティ機能	x	QUERY OLREORG コマンド	523
第 1 章 /NRESTART コマンド	1	QUERY OTMADESC コマンド	530
第 2 章 /OPNDST コマンド	13	QUERY OTMATI コマンド	544
第 3 章 /PSTOP コマンド	23	QUERY PGM コマンド	553
第 4 章 /PURGE コマンド	35	QUERY PGMDESC コマンド	582
第 5 章 QUERY コマンド	41	QUERY POOL コマンド	601
QUERY AREA コマンド	42	QUERY RM コマンド	626
QUERY DB コマンド	56	QUERY RTC コマンド	633
QUERY DBDESC コマンド	109	QUERY RTCDESC コマンド	652
QUERY IMS コマンド	126	QUERY STRUCTURE コマンド	665
QUERY IMSCON コマンド	138	QUERY TRACE コマンド	670
QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) コマンド	139	QUERY TRAN コマンド	675
QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) コマンド	145	QUERY TRANDESC コマンド	720
QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンド	158	QUERY USER コマンド	746
QUERY IMSCON TYPE(CONVERTER) コマ ンド	172	QUERY USEREXIT コマンド	766
QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) コマン ド	177	QUERY USERID コマンド	774
QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンド	190	第 6 章 QUEUE コマンド	785
QUERY IMSCON TYPE(ISC) コマンド	195	QUEUE LTERM コマンド	785
QUERY IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンド	206	QUEUE TRAN コマンド	791
QUERY IMSCON TYPE(LINK) コマンド	216	第 7 章 /QUIESCE コマンド	799
QUERY IMSCON TYPE(MSC) コマンド	224	第 8 章 /RCLSDST コマンド	803
QUERY IMSCON TYPE(ODBM) コマンド	234	第 9 章 /RCOMPT コマンド	805
QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンド	241	第 10 章 /RDISPLAY コマンド	809
QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンド	264	第 11 章 /RECOVER コマンド	811
QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマン ド	274	/RECOVER ADD コマンド	811
QUERY IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンド	286	/RECOVER REMOVE コマンド	817
QUERY IMSCON TYPE(UOR) コマンド	295	/RECOVER START コマンド	822
QUERY IMSPLEX コマンド	305	/RECOVER STOP コマンド	827
QUERY LE コマンド	316	/RECOVER TERMINATE コマンド	830
QUERY LTERM コマンド	324	第 12 章 REFRESH USEREXIT コマン ド	833
QUERY MEMBER コマンド	352	第 13 章 /RELEASE コマンド	841
QUERY MSLINK コマンド	375	第 14 章 /RESET コマンド	843
QUERY MSNAME コマンド	414	第 15 章 /RMxxxxxx コマンド	845
QUERY MSPLINK コマンド	431	第 16 章 /RSTART コマンド	857
QUERY NODE コマンド	460		
QUERY ODBM コマンド	486		
QUERY ODBM TYPE(ALIAS) コマンド	487		
QUERY ODBM TYPE(CONFIG) コマンド	490		
QUERY ODBM TYPE(DATASTORE) コマンド	494		

第 17 章 /SECURE コマンド	865
第 18 章 /SET コマンド	871
第 19 章 /SIGN コマンド	875
第 20 章 /SMCOPY コマンド	885
第 21 章 /SSR コマンド	887
第 22 章 /START コマンド	889
/START APPC コマンド	890
/START AREA コマンド	891
/START AUTOARCH コマンド	895
/START CLASS コマンド	896
/START DATAGRP コマンド	897
/START DB コマンド	900
/START DC コマンド	910
/START DESC コマンド	911
/START LINE コマンド	911
/START LTERM コマンド	913
/START LUNAME コマンド	915
/START MADSIOT コマンド	916
/START MSNAME コマンド	917
/START NODE コマンド	918
/START OLDS コマンド	920
/START OTMA コマンド	921
/START PGM コマンド	922
/START REGION コマンド	924
/START RTC コマンド	926
/START SB コマンド	928
/START SLDSREAD コマンド	929
/START SUBSYS コマンド	929
/START SURV コマンド	931
/START THREAD コマンド	932
/START TMEM コマンド	933
/START TRAN コマンド	936
/START USER コマンド	939
/START VGR コマンド	941
/START WADS コマンド	942
第 23 章 /STOP コマンド	945
/STOP ADS コマンド	946
/STOP APPC コマンド	947
/STOP AREA コマンド	948
/STOP AUTOARCH コマンド	952
/STOP BACKUP コマンド	953
/STOP CLASS コマンド	953
/STOP DATAGRP コマンド	955
/STOP DB コマンド	956
/STOP DC コマンド	961
/STOP DESC コマンド	962
/STOP LINE コマンド	962
/STOP LTERM コマンド	964
/STOP LUNAME コマンド	965
/STOP MADSIOT コマンド	967

/STOP MSNAME コマンド	968
/STOP NODE command	969
/STOP OLDS コマンド	971
/STOP OTMA コマンド	972
/STOP PGM コマンド	973
/STOP REGION コマンド	974
/STOP RTC コマンド	983
/STOP SB コマンド	984
/STOP SLDSREAD コマンド	985
/STOP SUBSYS コマンド	985
/STOP SURV コマンド	987
/STOP THREAD コマンド	988
/STOP TMEM コマンド	991
/STOP TRAN コマンド	993
/STOP USER command	995
/STOP VGR コマンド	997
/STOP WADS コマンド	998

第 24 章 /SWITCH コマンド 999

第 25 章 TERMINATE コマンド 1005
TERMINATE OLC コマンド 1005
TERMINATE OLREORG コマンド 1017

第 26 章 /TEST コマンド 1023

第 27 章 /TRACE コマンド 1027

/TRACE EXIT コマンド	1028
/TRACE LINE コマンド	1029
/TRACE LINK コマンド	1032
/TRACE LUNAME コマンド	1035
/TRACE MONITOR コマンド	1036
/TRACE NODE コマンド	1040
/TRACE OSAMGTF コマンド	1044
/TRACE PI コマンド	1045
/TRACE PGM コマンド	1048
/TRACE PSB コマンド	1050
/TRACE TABLE コマンド	1051
/TRACE TCO コマンド	1056
/TRACE TIMEOUT コマンド	1057
/TRACE TMEMBER コマンド	1059
/TRACE TRAN コマンド	1060
/TRACE TRAP コマンド	1062
/TRACE UNITYPE コマンド	1063

第 28 章 /UNLOCK コマンド 1067

/UNLOCK DB コマンド	1067
/UNLOCK LTERM コマンド	1069
/UNLOCK NODE コマンド	1070
/UNLOCK PGM コマンド	1071
/UNLOCK PTERM コマンド	1072
/UNLOCK SYSTEM コマンド	1073
/UNLOCK TRAN コマンド	1075

第 29 章 UPDATE コマンド 1079

UPDATE AREA コマンド	1079
------------------	------

UPDATE DATAGRP コマンド	1095	UPDATE ODBM コマンド	1321
UPDATE DB コマンド	1114	UPDATE ODBM START(CONNECTION) コマンド	1322
UPDATE DBDESC コマンド	1146	UPDATE ODBM START(TRACE) コマンド	1325
UPDATE IMS コマンド	1153	UPDATE ODBM STOP(CONNECTION) コマンド	1328
UPDATE IMSCON コマンド	1167	UPDATE ODBM STOP(TRACE) コマンド	1331
UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) コマンド	1168	UPDATE ODBM TYPE(CONFIG) コマンド	1334
UPDATE IMSCON TYPE(CLIENT) コマンド	1173	UPDATE OLREORG コマンド	1339
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンド	1178	UPDATE OTMADESC コマンド	1345
UPDATE IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンド	1191	UPDATE PGM コマンド	1355
UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンド	1195	UPDATE PGMDESC コマンド	1374
UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンド	1210	UPDATE POOL コマンド	1386
UPDATE IMSCON TYPE(ISC) コマンド	1217	UPDATE RM コマンド	1399
UPDATE IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンド	1224	UPDATE RTC コマンド	1410
UPDATE IMSCON TYPE(LINK) コマンド	1229	UPDATE RTCDESC コマンド	1417
UPDATE IMSCON TYPE(MSC) コマンド	1234	UPDATE TRACE コマンド	1424
UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) コマンド	1240	UPDATE TRAN コマンド	1429
UPDATE IMSCON TYPE(PORT) コマンド	1246	UPDATE TRANDESC コマンド	1467
UPDATE IMSCON TYPE(RACFUID) コマンド	1258	第 30 章 /UNLOAD コマンド 1493	
UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンド	1262	特記事項 1495	
UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンド	1268	商標	1497
UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンド	1276	製品資料に関するご使用条件	1497
UPDATE LE コマンド	1283	IBM オンライン・プライバシー・ステートメント	1498
UPDATE MSLINK コマンド	1289	参考文献 1499	
UPDATE MSNAME コマンド	1302	索引 X-1	
UPDATE MSPLINK コマンド	1310		

本書について

これらのトピックでは、IMS™ タイプ 1 およびタイプ 2 コマンド (/NRESTART から /VUNLOAD まで) の構文と使用法を提供します。また、IMS コマンド言語と、さまざまな環境で IMS にコマンドを送信する方法についても説明しています。タイプ 1 およびタイプ 2 以外のすべての IMS コマンドの情報は「IMS V15 コマンド 第 3 巻: IMS コンポーネントおよび z/OS コマンド」に記載されています。

この情報は、IBM® Knowledge Center で参照できます。

前提知識

本書を使用する際には、IMS Database Manager (DB) または IMS Transaction Manager (TM) のいずれかの知識が必要となります。また、z/OS® および IMS の基本概念、インストールされている IMS システムを理解しており、プロジェクト計画に関するタスクの一般的な知識を持っていることが必要です。

推奨事項: 本書をお読みになる前に、以下の資料をよく理解しておいてください。

- IMS V15 オペレーションおよびオートメーション
- z/OS JES2 コマンド
- z/OS JES3 コマンド
- OS/390 MVS™ システム・コマンド

z/OS の詳細については、IBM Knowledge Center の「z/OS basic skills」トピックを参照してください。

IMS の基本概念を理解するには、「*An Introduction to IMS*」(IBM Press 出版)をお読みになると役立ちます。

IBM では、IMS の学習に役立つような講習会や自習講座を数多く提供しています。利用可能な講習の詳しいリストについては、IBM Skills Gateway にアクセスして、IMS を検索してください。

新規および変更された情報の識別方法

IMS ライブラリーの PDF 資料のほとんどの新規および変更された情報は、左マージン内の文字 (改訂マーカー) によって示されています。「リリース計画」、ならびに「*Program Directory*」および「*Licensed Program Specifications*」の第 1 版 (-00) には、改訂マーカーは含まれていません。

改訂マーカーは、以下の一般的な規則に従っています。

- 技術的な変更のみにマークが付けられています。形式上の変更や文法的な変更には、マークは付けられていません。

- 段落、構文図、リスト項目、操作手順、または図などの要素の一部が変更された場合、その要素の一部だけの変更であっても、要素全体に改訂マークが付けられています。
- トピックの変更が 50% を超えた場合には、そのトピック全体に改訂マークが付けられています (そのため、新規トピックではなくても、新規トピックのように見えることがあります)。

改訂マークは情報に加えられたすべての変更を示しているとは限りません。削除されたテキストとグラフィックスには、改訂マークでマークを付けることはできないためです。

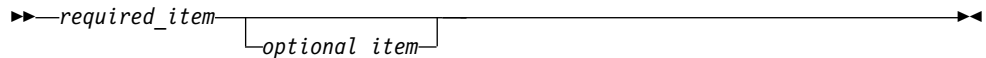
構文図の読み方

本書で使用されている構文図には、以下の規則が適用されています。

- 構文図は、経路を示す線に沿って、左から右、上から下に読み取ります。以下の規則が使用されます。
 - >>--- 記号は、構文図の始まりを示します。
 - ---> 記号は、構文図が次の行に続くことを示します。
 - >--- 記号は、この構文図が直前の行から続いていることを示します。
 - --->< 記号は、構文図の終わりを示します。
- 必須項目は、水平線 (メインパス) 上に表示されます。



- オプション項目は、メインパスより下に示されます。

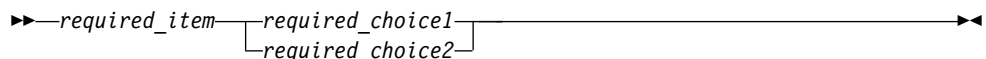


メインパスより上にオプション項目が示されている場合は、その項目が構文エレメントの実行に影響することはない、読みやすくするためのみの表記です。

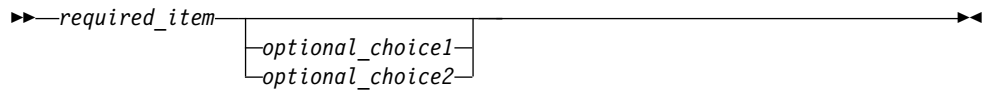


- 複数の項目から選択できる場合は、縦方向に並べて (スタック) 示されます。

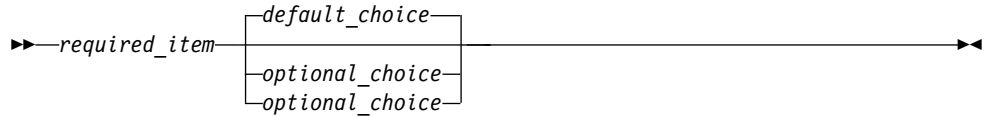
それらの項目の中から 1 つを選択する必要がある場合は、スタックの中の 1 つの項目がメインパス上に表示されます。



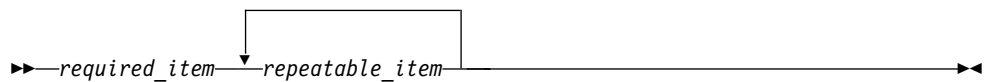
それらの項目から 1 つを選択することがオプションである場合は、スタック全体がメインパスの下に表示されます。



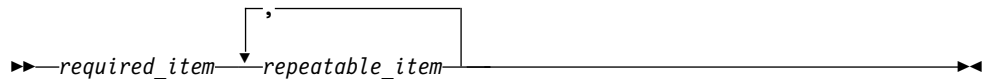
デフォルト項目が含まれている場合、その項目はメインパスより上に示され、他の選択項目はメインパスより下に示されます。



- メインパスの上方にある左に戻る矢印線は、項目が反復可能であることを示します。

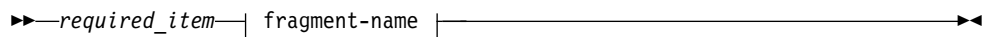


反復矢印線にコンマが含まれている場合は、反復項目をコンマで区切る必要があります。

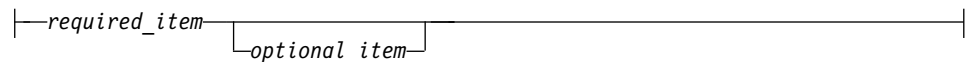


スタック上方の反復矢印線は、スタック内の項目を反復できることを示しています。

- 1 つの構文図を複数のフラグメントに分割しなければならない場合もあります。構文フラグメントはメインの構文図とは別に示されますが、フラグメントの内容は、図のメインパス上にあるものとして読む必要があります。



fragment-name:



- IMS では、b 記号は、該当位置に空白が 1 つあることを示します。
- キーワード、および該当する場合はキーワードの最小の省略語は、大文字で表されます。これらは、示されているとおりに入力する必要があります。変数は、すべて小文字のイタリック文字で示されます (例えば、`column-name`)。これらは、ユーザーが指定する名前または値を表します。
- キーワードとパラメーターは、構文図で間に句読点が表示されていない場合は、少なくとも 1 つのスペースで分離します。
- 句読記号、括弧、算術演算子、およびその他の記号は、構文図で示されたとおりに入力します。

- 脚注は、例えば (1) のように、数字を括弧で囲んで示してあります。

IMS 15 のアクセシビリティ機能

アクセシビリティ機能は、運動障害または視覚障害など身体に障害を持つユーザーが情報技術製品を快適に使用できるようにサポートします。

アクセシビリティ機能

以下のリストは、IMS 15 を含む z/OS 製品の主なアクセシビリティ機能を示しています。これらの機能は、以下をサポートしています。

- キーボードのみの操作。
- スクリーン・リーダー (読み上げソフトウェア) およびスクリーン拡大鏡によって通常使用されるインターフェース。
- 色、コントラスト、フォント・サイズなど表示属性のカスタマイズ。

キーボード・ナビゲーション

IMS 15 ISPF パネル機能には、キーボードまたはキーボード・ショートカット・キーを使用してアクセスできます。

TSO/E または ISPF を使用して IMS 15 ISPF パネルをナビゲートする詳細については、「z/OS TSO/E 入門」、「z/OS TSO/E ユーザーズ・ガイド」、および「z/OS 対話式システム生産性向上機能 (ISPF) ユーザーズ・ガイド 第 1 巻」を参照してください。上記の資料には、キーボード・ショートカットまたはファンクション・キー (PF キー) の使用方法を含む、各インターフェースのナビゲート方法が記載されています。それぞれの資料では、PF キーのデフォルトの設定値とそれらの機能の変更方法についても説明しています。

関連のアクセシビリティ情報

IMS 15 のオンライン資料は、IBM Knowledge Center で参照できます。

IBM におけるアクセシビリティ

IBM のアクセシビリティに対する取り組みについて詳しくは、*IBM Human Ability and Accessibility Center* (www.ibm.com/able) を参照してください。

第 1 章 /NRESTART コマンド

/NRESTART は、/CHECKPOINT シャットダウン・コマンドにより通常終了が行われた後で、IMSのコールド・スタートまたは IMS のウォーム・スタートを行うために使用されます。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 3 ページの『キーワード』
- 6 ページの『使用上の注意』
- 8 ページの『例』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

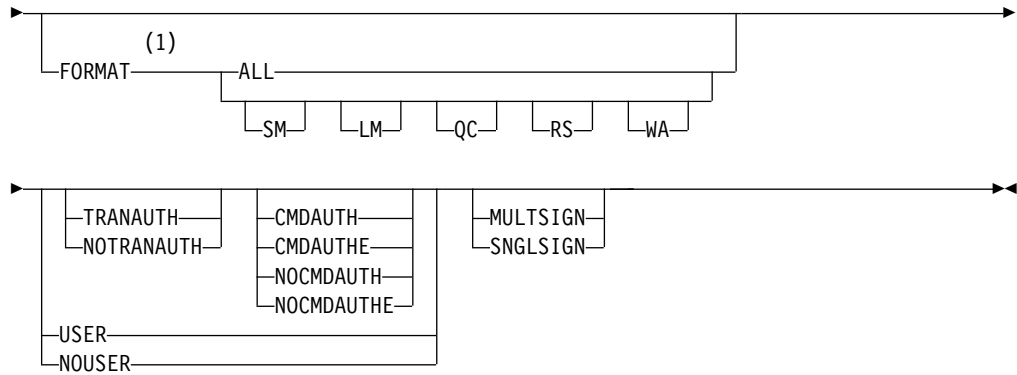
表 1. /NRESTART コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/NRESTART	X	X	X
BUILDQ	X		X
CHKPT	X	X	X
CMDAUTH	X		X
CMDAUTHE	X		X
FORMAT	X	X	X
MSDBLOAD	X		
MULTSIGN	X		X
NOBUILDQ	X		X
NOCMDAUTH	X		X
NOCMDAUTHE	X		X
NOTRANAUTH	X		X
NOUSER	X		X
SNGLSIGN	X		X
TRANAUTH	X		X
USER	X		X

構文

前にシャットダウンされていないコールド・スタート

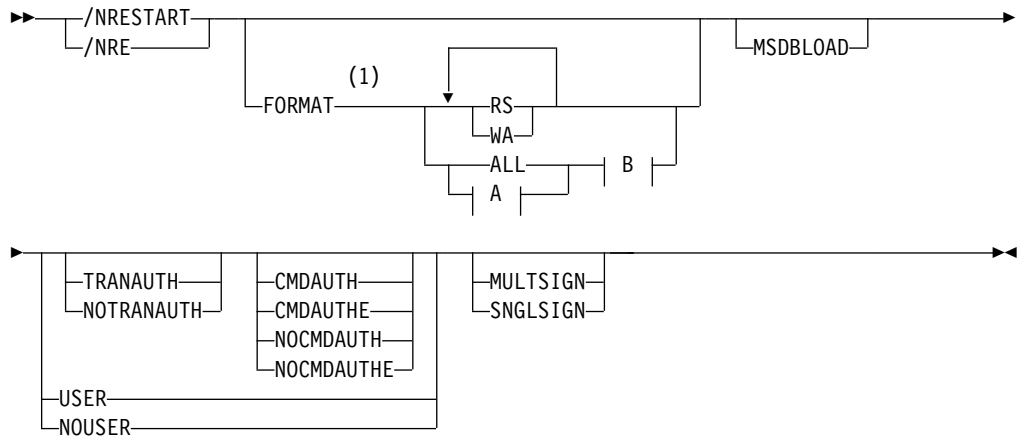




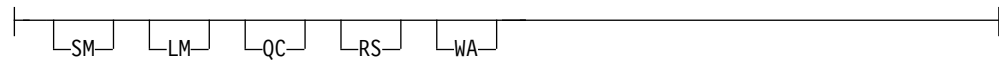
注:

- 1 FORMAT キーワードの後には、SM、LM、QC、RS、WA、あるいは ALL の中の少なくとも 1 つのパラメーターを続けなければなりません。

/CHECKPOINT FREEZE コマンドに続くウォーム・スタート



A:



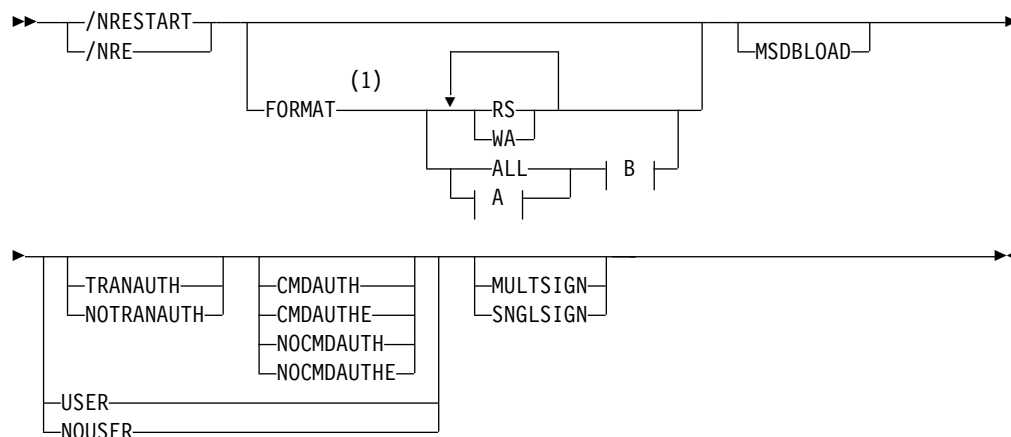
B:



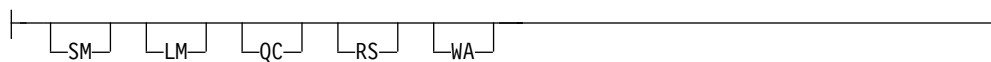
注:

- 1 FORMAT キーワードの後には、SM、LM、QC、RS、WA、あるいは ALL の中の少なくとも 1 つのパラメーターを続けなければなりません。

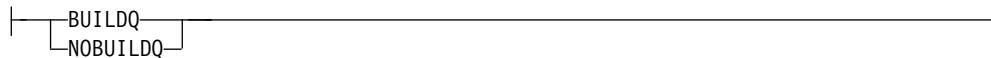
/CHECKPOINT PURGE コマンドまたは **/CHECKPOINT DUMPQ** コマンドに続くウォーム・スタート



A:



B:



注:

- 1 FORMAT キーワードの後には、SM、LM、QC、RS、WA、あるいは ALL の中の少なくとも 1 つのパラメーターを続けなければなりません。

キーワード

以下のキーワードは、/NRESTART コマンドに有効です。

BUILDQ | NOBUILDQ

BUILDQ は、ログ上にダンプしたメッセージ・キューを、メッセージ・キュー・データ・セットにロードするように要求します。 /CHECKPOINT PURGE または /CHECKPOINT DUMPQ 後のウォーム・スタートの場合、BUILDQ はオプションです。

メッセージ・キューをフォーマット設定した後で復元する時は、BUILDQ キーワードを組み込み必要があります。 BUILDQ キーワードが指定されている場合、最新の /CHECKPOINT DUMPQ あるいは /CHECKPOINT PURGE からのログが必要になります。これは再始動プロセスの速度を落とします。

BUILDQ キーワードなしに /NRESTART FORMAT を指定する場合、NOBUILDQ キーワードを指定しなければなりません。 NOBUILDQ を指定すると問題のキューは再フォーマット設定され、すべてのメッセージが失われるので、NOBUILDQ キーワードは注意して使用しなければなりません。

/NRESTART BUILDQ コマンドが失敗した場合に、/ERESTART CHECKPOINT 0、/ERESTART COLDCOMM、あるいは /ERESTART

COLDSYS コマンドが実行されると、メッセージは失われます。IBM IMS Queue Control Facility for z/OS を使用すると、ローカル・メッセージ・キューをリカバリーできます。

共用キュー環境では、メッセージ・キュー・データ・セットは使用されないため、BUILDQ キーワードは無視されます。

CHECKPOINT

シャットダウン/再始動シーケンスを示しています。コールド・スタートの場合は、CHECKPOINT 0 を指定する必要があります。

CMDAUTH

緊急時再始動時に、静的端末および ETO 端末に対するサインオン (ユーザー ID 検査) とコマンド許可の両方が有効であることを指定します。(コマンド許可は、始動パラメーターに、RCF=S と指定するのと同じです。)

CMDAUTH を指定するには、初期設定 EXEC パラメーターとして RCF=A|Y|T|C|S を指定する必要があります。

CMDAUTHE

緊急時再始動の終了時に、ETO 端末に対するコマンド許可 (始動パラメーターでの RCF=S と同様) が有効であることを指定します。CMDAUTHE はさらに、静的端末に対するコマンド許可が設定されている場合は、その許可のリセットも行います。

CMDAUTHE を指定するには、初期設定 EXEC パラメーターとして RCF=A|Y|T|C|S を指定する必要があります。

FORMAT

以下に挙げる場合に、どのキューまたはデータ・セットを再始動プロセスの部分としてフォーマット設定する必要があるかを指定します。

- メッセージ・キューまたはデータ・セットに入出力エラーが発生した。
- メッセージ・キューまたはデータ・セットのサイズを変更する。
- メッセージ・キューまたはデータ・セットを再割り振りする。

次に示すものを 1 つ以上、あるいは ALL を指定します。

SM 短メッセージ・キュー

LM 長メッセージ・キュー

QC 制御レコード・データ・セット

RS 再始動データ・セット

WA 先行書き込みデータ・セット

ALL すべてのメッセージ・キュー (SM と LM) とデータ・セット (QC、WA、および RS)。

FORMAT ALL が指定される場合、SM、LM、QC、WA、または RS は指定しないでください。FORMAT ALL が必要なのは、IMS の初期設定時 (システムを最初に使用するとき) のみです。

SM、LM、QC、WA、および RS は、例えば FORMAT LM RS のように任意に組み合わせて指定することができます。

共用キュー環境では、メッセージ・キュー・データ・セットは使用されないの
 で、LM、SM および QC パラメーターは無視されます。 ALL を指定した場
 合は、IMS はメッセージ・キュー・データ・セットのフォーマット設定を行お
 うとしません。

以下の表は、パラメーターが有効な環境を示しています。

表 2. /NRESTART FORMAT コマンドのパラメーター環境

パラメーター	DB/DC	DBCTL	DCCTL
SM	X		X
LM	X		X
QC	X		X
RS	X	X	X
WA	X	X	X
ALL	X	X ¹	X

注:

1. RS と WA パラメーターのみサポートします。

MSDBLOAD

MSDB を、MSDB チェックポイント・データ・セットからでなく、z/OS 順次
 データ・セット MSDBINIT からロードすることを要求します。 MSDBLOAD
 キーワードは、MSDB 初期ロードが必要な場合だけ使用します。その他の場
 合、/NRESTART コマンドでは、このキーワードを省略してください。
 MSDB DBD を変更した後は、次回に IMS のウォーム・スタートを行うとき
 に、変更を有効にするために MSDBLOAD を指定する必要があります。

以下に挙げる場合、MSDBLOAD は必要ありません。

- MSDB チェックポイント・データ・セットが使用されている時に、ウォー
 ム・スタートする場合。
- コールド・スタートの場合。この場合は、MSDB は z/OS 順次データ・セ
 ット MSDBINIT からロードされ、MSDB チェックポイント・データ・セ
 ットがフォーマット設定されるからです。

MULTSIGN

それぞれのユーザー ID ごとに複数のサインオンを許可します。

Resource Manager とリソース構造をもつ IMSplex では、MULTSIGN がその
 IMSplex のシングル・ユーザー・サインオン定義と競合していると、警告メッ
 セージが出されます。

NOCMDAUTH

静的端末および ETO 端末に対するコマンド許可をリセットします。

NOCMDAUTHE

静的端末および ETO 端末に対するコマンド許可をリセットします。 ETO 端
 末のコマンド許可が無い場合には静的端末のコマンド許可は存在できないため、
 静的端末のコマンド許可はリセットされます。

NOTRANAUTH

トランザクション許可をオフにします。 NOTRANAUTH は、TRANAUTH の

正反対ではありません。TRANAUTH はトランザクションの許可を設定し、またサインオン (ユーザー ID 検査) をオンにします。

JCL EXEC パラメーターとして TRN=F が指定されていた場合、NOTRANAUTH を指定すると、拒否されてエラー・メッセージが発行されません。

NOUSER

緊急時再始動の終了時には、次のものはいずれも無効になるように指定します。

- トランザクション許可
- ユーザー ID 検査
- コマンド許可

/NRESTART NOUSER はウォーム・スタートの場合も使用できますが、トランザクション許可またはコマンド許可がチェックポイント・データに基づいて設定されている場合は、NOUSER は無視され、サインオン (ユーザー ID 検査) がオンに設定されます。

SNGLSIGN

それぞれのユーザー ID ごとに、シングル・サインオンを許可します。

Resource Manager をもつ IMSplex、およびリソース構造では、SNGLSIGN が IMSplex のシングル・ユーザー・サインオン定義と矛盾する場合、警告メッセージが出されます。

TRANAUTH

RACF[®] あり、または RACF なしの、トランザクション許可およびユーザー ID 検査の両方を指定します。

TRANAUTH を指定するには、初期設定 EXEC パラメーターとして RCF=A|Y|T|C|S を指定する必要があります。

USER

ユーザー ID 検査を指定します。ユーザー ID 検査は、静的端末によってサインオンが要求されていることを意味します。このキーワードは、ETO 端末が常にサインオンを行う必要があるため、それらの端末に影響を与えません。

TRANAUTH または CMDAUTH キーワードによって、ユーザー ID 検査を強制することができます。

USER を指定するには、初期設定 EXEC パラメーターとして RCF=A|Y|T|C|S を指定する必要があります。

使用上の注意

このコマンドは、バッチ SPOC ユーティリティーを使用する IMSplex に対して発行できます。

/NRESTART コマンドには 3 つの形式があります。どの形式を選択するかは以下の条件によって決まります。

- コールド・スタートあるいはウォーム・スタートのどちらが必要であるか
- ウォーム・スタートの場合、前の正常シャットダウンが以下に挙げたコマンドで完了したかどうか
 - /CHECKPOINT FREEZE

- /CHECKPOINT PURGE または DUMPQ

重要: 処理が失敗した後で、コールド・スタートを行うと、コミットされていないデータに対して処理が行われる恐れがあります。データ保全性を確実にするために、再始動する前に必ず必要なバックアウト操作またはリカバリー操作を行ってください。

IMS の初期設定の際には、初期設定のために使用するシステム・パラメーターが IMS システム生成、PROCLIB メンバー、または EXEC ステートメント (これはデフォルトと PROCLIB メンバーの両方をオーバーライドできる) から取られます。したがって、この特定の初期設定に使用されるシステム・パラメーターを示したメッセージ DFS1929I が表示されます。また、システム・パラメーターは、ジョブ・ログにも書き込まれます。

IMS コールド・スタートの場合は、IMS システム定義および EXEC パラメーター指定に基づいて、基本セキュリティー定義が作成されます。/NRESTART ウォーム・リスタートの場合は、IMS チェックポイント・データから基本セキュリティー定義が作成されます。

コールド・スタートで基本のセキュリティー定義をオーバーライドするには、/NRESTART コマンドのセキュリティー・キーワードを使用する必要があります。

SGN=、TRN=、および RCF= 始動パラメーターは、/NRESTART コマンドで、以下の表に示されているセキュリティー・キーワードを使用することにより、オーバーライドできます。キーワードについての簡略説明も含まれています。

表 3. セキュリティー・キーワードおよび同等の始動パラメーター

キーワード	説明	始動パラメーター
CMDAUTH	RACF コマンド許可は、静的端末および ETO 端末でのみ使用されます。	RCF=S
CMDAUTHE	RACF コマンド許可は、ETO 端末でのみ使用されます。	RCF=C
MULTSIGN	それぞれのユーザー ID ごとに複数のサインオンを許可します。	SGN=M
NOCMDAUTH	静的端末と ETO 端末に対してコマンド許可をリセットします。	RCF=S ではありません。
NOCMDAUTHE	ETO 端末に対してのみコマンド許可をリセットします。	RCF=C ではありません。
NOTRANAUTH	トランザクション許可をリセットします。	TRN=F または Y ではありません。
NOUSER	ユーザー ID 検査、トランザクション許可、およびコマンド許可をリセットします。	SGN=F または Y ではありません。 (G または Z が M になります) TRN=F または Y ではありません。 RCF=C または S ではありません。

表 3. セキュリティー・キーワードおよび同等の始動パラメーター (続き)

キーワード	説明	始動パラメーター
SNGLSIGN	それぞれのユーザー ID ごとに、シングル・サインオンを許可します。	SGN=F と Y SGN=M ではありません。 (G または Z が F または Y になります)
TRANAUTH	トランザクション許可	TRN=F または Y
USER	ユーザー ID 検査を設定します。	SGN=Y

IMS で IMSRSC リポジトリの使用が有効になっている場合、IMS はウォーム・スタート時にリソース・マネージャー (RM) を呼び出して IMS の変更リストを読み取ります (存在する場合)。IMS 変更リストは RM によって維持され、IMS がダウンしている間に SCOPE(ALL) キーワードを指定した IMPORT コマンドが発行された場合に作成されます。

再始動を行っている IMS 用の変更リストが存在する場合、IMS 変更リスト内において IMS 環境に適用されるデータベース、プログラム、トランザクション、および宛先コードのリソースと記述子は静止されており、リポジトリから保管済みリソース定義がインポートされるまでは使用することができません。

IMS ログが処理された後、IMS は、IMS 変更リスト内のデータベース、プログラム、トランザクション、および宛先コードのリソースと記述子について、リポジトリから保管済みリソース定義をインポートします。その後、変更を IMS 内の実行時リソース定義および記述子定義に適用します。

IMS 変更リスト内において IMS 内に存在しないリソースまたは記述子については、リポジトリ内の保管済みリソース定義から実行時リソース定義が作成されます。IMS 内に存在するリソースまたは記述子については、リポジトリからの保管済みリソース定義を使用して実行時リソース定義が更新されます。IMS システムの変更リストは、ウォーム・スタートの最後に削除されます。

IMS でリポジトリの使用が有効になっている場合、コールド・スタート時に保管済みリソース定義がリポジトリから読み取られます。すべてのリソース定義がコールド・スタート処理の一環としてインポートされるため、コールド・スタート時に変更リストを処理することはできません。再始動されている IMS の RM 内にあつてすべての変更リストが削除されます。

例

以下に示すのは /NRESTART コマンドの例です。

/NRESTART コマンドの例 1

新規メッセージ・キュー・データ・セットでコールド・スタートする例。

入力 ET:

```
/NRESTART CHECKPOINT 0 FORMAT ALL
```

応答 ET:

```
DFS058I (time stamp) NRESTART COMMAND IN PROGRESS
DFS994I *CHKPT 82274/114447**SIMPLE*
```

説明: IMS は、82274 (年間通算日) の 114447 (時刻) に開始されます。システム・ログには単純チェックポイントが書き込まれます。すべてのメッセージ・キュー・データ・セットのフォーマット設定が行われます。チェックポイント番号は、82274/114447 です。

/NRESTART コマンドの例 2

FREEZE チェックポイントからウォーム・スタートする例。

入力 ET:

```
/NRESTART
```

応答 ET:

```
DFS058I (time stamp) NRESTART COMMAND IN PROGRESS
DFS680I USING CHKPT 82273/180000
DFS994I *CHKPT 82274/082217**SIMPLE*
```

説明: 最新の IMS シャットダウン時に書き込まれたチェックポイント 82273/180000 から再始動が行われています。IMS は、82274 (年間通算日) の 082217 (時刻) に再始動されます。単純チェックポイントは、このシステム・ログに書き込まれます。チェックポイント番号は、82274/082217 です。

/NRESTART コマンドの例 3

ウォーム・スタートして WADS をフォーマット設定する例。

入力 ET:

```
/NRESTART FORMAT WA
```

応答 ET:

```
DFS058I (time stamp) NRESTART COMMAND IN PROGRESS
DFS680I USING CHKPT 82119/230000
DFS994I *CHKPT 82120/101318**SIMPLE*
```

説明: 最新の IMS シャットダウン時に書き込まれたチェックポイント 82119/230000 から再始動が行われています。IMS は、82120 (年間通算日) の 101318 (時刻) に再始動されます。システム・ログには単純チェックポイントが書き込まれます。チェックポイント番号は、82120/101318 です。

/NRESTART コマンドの例 4

これは、PURGE または DUMPQ チェックポイントからのウォーム・スタートの例です。

入力 ET:

```
/NRESTART BUILDQ
```

応答 ET:

```
DFS058I (time stamp) NRESTART COMMAND IN PROGRESS
DFS680I USING CHKPT 82080/214240
DFS994I *CHKPT 82081/060000**SIMPLE*
```

説明: IMS は、82081 (年間通算日) の 060000 (時刻) に、最新の IMS シャットダウン時に書き込まれたチェックポイント 82080/214240 から再始動されます。チェックポイント番号は、82081/060000 です。

/NRESTART コマンドの例 5

これは、PURGE または DUMPQ チェックポイントからのウォーム・スタートの例です。大小のメッセージ・キュー・データ・セットの再割り振りが行われます。

入力 ET:

```
/NRESTART BUILDQ FORMAT SM LM
```

応答 ET:

```
DFS058I (time stamp) NRESTART COMMAND IN PROGRESS  
DFS680I USING CHKPT 82170/085236  
DFS994I *CHKPT 82170/085820**SIMPLE*
```

説明: IMS は、82170 (年間通算日) の 085820 (時刻) に、最新の IMS シャットダウン時に書き込まれたチェックポイント 82170/085236 から再始動されます。大小のメッセージ・キュー・データ・セットが再フォーマットされます。チェックポイント番号は、82170/085820 です。

/NRESTART コマンドの例 6

これは、PURGE または DUMPQ チェックポイントからのウォーム・スタートの例です。MSDB の初期セットが必要です。

入力 ET:

```
/NRESTART BUILDQ MSDBLOAD
```

応答 ET:

```
DFS058I (time stamp) NRESTART COMMAND IN PROGRESS  
DFS680I USING CHKPT 82068/180000  
DFS2554 MSDB MSDBHJ01 LOADED  
DFS2554 MSDB MSDBHJ02 LOADED  
DFS2554 MSDB MSDBAK01 LOADED  
DFS2554 MSDB MSDBAK02 LOADED  
DFS2554 MSDB MSDBPS01 LOADED  
DFS994I *CHKPT 82069/080000**SIMPLE*
```

説明: IMS は、82069 (年間通算日) の 080000 (時刻) に、最新の IMS シャットダウン時に書き込まれたチェックポイント 82068/180000 から再始動されます。システム・ログには単純チェックポイントが書き込まれます。チェックポイント番号は、82069/080000 です。MSDB の初期セットが z/OS 順次データ・セット MSDBINIT がロードされます。

/NRESTART コマンドの例 7

トランザクション・コマンド・セキュリティーに対する要求によって、PURGE または DUMPQ チェックポイントからウォーム・スタートする例。

入力 ET:

```
/NRESTART TRANCMS
```

応答 ET:

```
DFS058I (time stamp) NRESTART COMMAND IN PROGRESS
DFS680I USING CHKPT 82080/214240
DFS994I *CHKPT 82274/114447**SIMPLE*
```

説明: マスター端末オペレーターは IMS のウォーム・スタートを実行中で、正常再始動の完了時にトランザクション・コマンド・セキュリティが有効になっていることを要求しています。

/NRESTART コマンドの例 8

トランザクション・コマンド・セキュリティを否定する要求によって、PURGE または DUMPQ チェックポイントからウォーム・スタートする例。

入力 ET:

```
/NRESTART NOTRANCMS
```

応答 ET:

```
DFS2181I CANNOT OVERRIDE FORCED COMMAND SECURITY
```

説明: マスター端末オペレーターは IMS のウォーム・スタートを実行中で、トランザクション・コマンド・セキュリティを無効にすることを要求しています。IMS システム定義により、マスター端末オペレーターが NOTRANCMS キーワードを入力する権限が除外されることがあります。その場合は、IMS は DFS2181 メッセージを戻します。

/NRESTART コマンドの例 9

これは、PURGE または DUMPQ チェックポイントからのウォーム・スタートの例です。データ・セットを再フォーマット設定し、メッセージ・キューは再作成しません。

入力 ET:

```
/NRESTART FORMAT SM LM NOBUILDQ
```

応答 ET:

```
DFS058 NRESTART COMMAND IN PROGRESS
```

説明: マスター端末オペレーターは IMS のウォーム・スタートを実行中で、メッセージ・キューを再作成せずにデータ・セットを再フォーマット設定することを要求しています。IMS は起動されますが、メッセージはすべて失われます。

関連資料:

 [IMS Queue Control Facility overview](#)

第 2 章 /OPNDST コマンド

/OPNDST コマンドは、複数セグメントのコマンドです。このコマンドを使用すると、IMS が ISC TCP/IP 端末または VTAM® 端末とのセッションを開始します。

VTAM 端末の場合、USER キーワードが指定されると、セッションが正常に開始された後、ユーザーは自動的に端末にサインオンします。

ISC TCP/IP 端末の場合、セッションが正常に開始された後、ユーザーは自動的にサインオンします。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 14 ページの『キーワード』
- 18 ページの『使用上の注意』
- 18 ページの『例』

環境

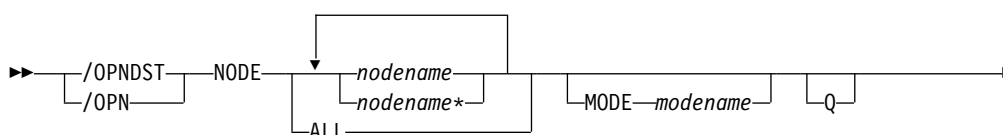
以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 4. /OPNDST コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/OPNDST	X		X
ID	X		X
LOGOND	X		X
MODE	X		X
NODE	X		X
Q	X		X
UDATA	X		X
USER	X		X
USERD	X		X

構文

USER キーワードなしの /OPNDST コマンド: この形式のコマンドは、ETO SLU P 端末および金融機関用の端末、ETO 出力専用装置、およびすべての ISC 並列セッションを除き、すべての静的端末および ETO 端末で使用します。



▶ LOGOND—*logondname* ▶

非 **ISC** の **USER** キーワードを使用する **/OPNDST** コマンド。以下の場合に、この形式のコマンドを使用します。

- ETO SLU P 端末および金融機関用の端末
- ETO 出力専用装置、例えば、PRINTER1 の単一コンポーネントの 3284、3286 と SLU P1

▶ /OPNDST—NODE—*nodename*—USER—*username*—MODE—*modename*—Q ▶

▶ LOGOND—*logondname*—USERD—*useridname*—UDATA—*useridname* ▶

ISC TCP/IP の **USER** キーワードを使用する **/OPNDST** コマンド。この形式のコマンドは、静的でも ETO の場合でも、すべての **ISC** 並列セッションで使用します。

▶ /OPNDST—NODE—*nodename*—USER—*username*—ID—*idname* ▶

▶ LOGOND—*logondname* ▶

ISC VTAM の **USER** キーワードを使用する **/OPNDST** コマンド。この形式のコマンドは、静的でも ETO の場合でも、すべての **ISC** 並列セッションで使用します。

▶ /OPNDST—NODE—*nodename*—USER—*username*—ID—*idname* ▶

▶ MODE—*modename*—Q ▶

キーワード

以下のキーワードは、**/OPNDST** コマンドに有効です。

ID これは、**USER** キーワードが指定されていて、ノードが並列セッション **ISC VTAM** ノードの場合にのみ適用されます。**ID** は、単一セッション **ISC** ノードに対しては指定してはなりません。

ISC VTAM 並列セッションの場合、**ID** は、他方のシステムのハーフセッション修飾子を識別します。**ID idname** は、ユーザーが定義した **ISC** ノードをオープンするように指定する必要があります。**ID idname** は、セッション開始要求によって相手側のハーフセッションに渡されます。相手側システムが別の **IMS** システムである場合は、**idname** はそのシステム内の **ISC** ユーザーの名前です。

ISC TCP/IP 並列セッションの場合、ID キーワードは適用されません。ID キーワードが指定された場合、無視されます。

LOGOND

セッションを確立するために使用されるログオン記述子を指示します。LOGOND は、動的 ISC TCP/IP ノードと動的非 ISC ノードの両方でサポートされます。

ログオン出口ルーチン (DFSLGNX0) によってログオン記述子名が提供された場合、出口ルーチンによって提供された名前が LOGOND キーワードで指定された名前をオーバーライドします。

ISC TCP/IP ノードの場合、LOGOND キーワードで指定される名前は、TCP/IP サポートの LCLICON キーワードを指定するログオン記述子と一致している必要があります。ログオン記述子で TCP/IP サポートが指定されない場合、IMS は、VTAM ノードとしてセッションを開こうと試みます。

MODE

VTAM が使用する必要がある LOGON MODE テーブル項目を識別し、特定の VTAM 端末の操作特性を判別することができます。ノード名のリストが与えられている場合、MODE キーワードが、それぞれに適用されます。このコマンドは、それぞれのノードが、IMS が開始した接続を受け入れるように定義されているかどうかを検査します。ノードが NOPNDST として定義されていた場合、/OPNDST コマンドは、NOPNDST と定義されているノードを除き、すべてのノードを受け入れます。

ISC TCP/IP セッションは、MODE キーワードをサポートしていません。

NODE

IMS がセッションを開始するノードとのセッションを指定します。

/OPNDST NODE ALL コマンドは、ISC 並列セッションを除き、すべての静的端末のセッションをオープンします。このコマンドは、IMS と VTAM の両方について、かなりの量の並行アクティビティーをもちます。システムが十分なプール・サイズ、バッファ・サイズ、および定義されている並行 IMS タスク数をもっていることを確認してください。

コマンド内に USER キーワードが指定されていない場合、NODE パラメーターは、総称または ALL、あるいは静的ノードの範囲となることができます。あるいは NODE パラメーターが複数存在すること可能です。総称、ALL、またはノード名の範囲が指定されている場合、ユーザーが定義したノードはすべて無視され、エラー・メッセージのフラグが付けられます。

/OPNDST NODE USER コマンドは、ISC 端末を除き、ユーザーのログオンとサインオンを同時に行います。ISC 端末では、セッションが割り振られます。

以下のリストには、サンプルの /OPNDST NODE USER コマンドが含まれています。

- 静的非 ISC 端末にログオンおよびサインオンする場合。

```
/OPNDST NODE nodename USER username UDATA userdata
```

このコマンドは、ユーザーがサインオンすると、静止状態で定義された端末にマークを付けます。

- ETO 非 ISC 端末にログオンおよびサインオンする場合。

```
/OPNDST NODE nodename USER username MODE modename
LOGOND logondname USERD userdname UDATA userdata
```

このコマンドは、端末構造およびユーザー構造を作成し、サインオン状況を示すために、新規に作成したユーザー構造を、作成されている端末構造に割り振ります。

- 静的 ISC 端末にログオンおよびサインオンする場合。

```
/OPNDST NODE nodename USER username ID idname
```

このコマンドは、サブプール構造を検出し、そのサブプール (ユーザー) 構造を、静的に定義された ISC 端末に割り振ります。端末が ISC TCP/IP を使用するように定義されている場合、ID キーワードは適用されず、IMS によって無視されます。

- ETO ISC VTAM 端末にログオンおよびサインオンする場合。

```
/OPNDST NODE nodename USER username ID idname MODE modename
LOGOND logondname USERD userdname UDATA userdata
```

このコマンドは、端末構造およびサブプール (ユーザー) 構造を作成し、新規に作成されたユーザー構造を、作成されている端末構造に割り振ります。また、このコマンドは、username (このユーザー名は RACF に対して定義済みでなければなりません) を持つユーザーのサインオンも実行します。このユーザーは、自ら /SIGN OFF コマンドを発行するまで、またはセッションが終了するまで、サインオンしたままとなります。

- ETO ISC TCP/IP 端末にログオンおよびサインオンする場合。

```
/OPNDST NODE nodename USER username LOGOND logondname
```

このコマンドは、端末構造およびサブプール (ユーザー) 構造を作成し、新規に作成されたユーザー構造を、作成されている端末構造に割り振ります。また、このコマンドは、username (このユーザー名は RACF に対して定義済みでなければなりません) を持つユーザーのサインオンも実行します。このユーザーは、自ら /SIGN OFF コマンドを発行するまで、またはセッションが終了するまで、サインオンしたままとなります。

ISC TCP/IP 並列セッションの場合、TCP/IP サポートの LCLICON キーワードを指定するログオン記述子が存在している必要があります。IMS は、LOGOND キーワードが指定されない場合にのみ、NODE キーワードの値を使用してログオン記述子を検索します。ログオン記述子が存在していない、あるいは TCP/IP サポートを指定しない場合、IMS は、VTAM ノードとしてセッションを開こうと試みます。

障害のある ETO セッションを再始動するために、(例えば、ETO のみ、またはプリンター・セッション) /OPNDST NODE USER コマンドを使用します。

IMSplex では、/OPNDST NODE は、IMS がセッションを開始する相手の VTAM ノードを指定します。ノードを特定の IMS にログオンする場合は、ROUTE(imsid) を指定してください。ROUTE(imsid) が指定されておらず、/OPNDST がすべての IMS システムに経路指定された場合は、IMS は、コマンド・マスターとして指定されている IMS システムでのみこのコマンドを処理します。/OPNDST コマンドが複数の IMS システムに経路指定されるように、ROUTE キーワードに複数の IMS システムが指定されている場合には、

IMS は、コマンド・マスターとして指定されている IMS システム上でのみ、このコマンドを処理します。他の IMS システム上では、/OPNDST コマンドはリジェクトされます。

- Q** VTAM/SNA サポート端末に対する SIMLOGON 要求をキューに入れることを IMS が VTAM に要求するようにさせます。

また、/OPNDST NODE Q コマンドを使用すると、IMS は、他のサブシステムと IMS が 1 つのノード (通常はプリンター) を共用するようそのサブシステムに要求することができます。相手方のサブシステムがプリンターを使用している場合は、VTAM は、IMS のためにプリンターに対する SIMLOGON 要求をキューに入れ、プリンターを所有しているサブシステムの RELREQ VTAM 出口をスケジュールし、そして、現在の所有システムがプリンターを解放した後で、IMS 用にプリンターを獲得します。同じプリンターに対する複数の要求は、処理のために VTAM によりキューに入れられます。

IMS がプリンターを獲得したかどうかを判別するには、/DISPLAY NODE コマンドを使用します。

ISC TCP/IP セッションは、Q キーワードをサポートしていません。

UDATA

サインオンで使用するユーザー・データを表示します。

また、UDATA キーワードは、USER キーワードおよびパラメーターを指定する場合にのみ有効です。UDATA キーワードは、静的ユーザーと動的ユーザーに有効です。このキーワードは、ISC ノードでは無効です。ユーザー・データの長さは、256 バイト長までです。パスワードは、DFSPBxxx IMS.PROCLIB メンバー内の PSWDC キーワードの指定に応じて、大/小文字混合または小文字を使用できます。

ISC TCP/IP セッションは、UDATA キーワードをサポートしていません。

RACF パスワード・フレーズは UDATA ではサポートされません。

USER

NODE キーワードで指定された ISC ノード用に作成するハーフセッションに割り振る論理端末ユーザーを識別します。

動的な非 ISC ユーザーでは、動的ノード *nodename* をサインオンするユーザー ID を指定します。

USER キーワードは、ISC ノードにユーザーの割り振りを行う場合は ISC セッションに適用され、動的ノードに動的ユーザーをサインオンする場合は動的ユーザーに適用され、静的ノードにユーザーをサインオンする場合には静的ユーザー ID に適用されます。

USER *username* は、ユーザーを指定して ISC 並列セッション・ノードをオープンするために、指定する必要があります。ISC ノードの単一セッションに関しては、指定してはなりません。

NODE および **USER** パラメーターを一緒に使用する場合の制約事項:

- 次のような場合にのみ、NODE USER キーワードの対を使用したコマンドは有効です。
 - USER が NODE にサインオンされています。
 - ISC 環境で、USER を NODE に割り振られています。

- ノードおよびユーザーは既に存在しています。
- /OPNDST NODE USER コマンドは、ISC および非 ISC のノードおよびユーザーに対して有効です。

USERD

サインオンで使用されるユーザー記述子を指定します。USER キーワードおよびパラメーターが指定されている場合にのみ有効です。USERD は、動的ユーザーだけをサポートし、動的な非 ISC ノードに対してのみ有効です。また、ユーザー記述子は、ログオンの出口あるいはサインオンの出口でも提供されます。

ISC TCP/IP セッションは、USERD キーワードをサポートしていません。

使用上の注意

/OPNDST の使用も含めて、リモート VTAM 端末を IMS にログオンする形式はどれも、/START DC コマンドが入力されて IMS に受け入れられるまでは、機能しません。

すべての /OPNDST のフォーマットは、メッセージ終結を示すために EOM 指示を必要とします。最後のセグメントより前にあるすべてのセグメントについて、EOS 指示を含める必要があります。

クラス 1 の ETO 端末用の、障害を起こしたバックアップ・セッションを再始動するために、代替 XRF で /OPNDST を出すことができます。これを行うためには、ノード構成とユーザー構造が存在する必要があるため、また相互の結合が必要となります。また、アクティブ・セッションはアクティブ・システム上に存在していなければなりません。ノードとユーザーが結合されていない場合、またはアクティブ・セッションがアクティブ・システムに存在しない場合は、このコマンドはリジェクトされます。

このコマンドは、バッチ SPOC ユーティリティーを使用する IMSplex に対して発行できます。

ピリオドは、通常は IMS コマンドの最後に区切り文字として使用されます。RACF 内で特殊文字のサポートが使用可能になっている場合、ピリオドは RACF パスワードに有効な文字になります。このため、/OPNDST コマンドの最後にパスワードを指定する場合は、コマンドの終わりの区切り文字として使用するピリオドの前にスペースを挿入する必要があります。コマンドの終わりの区切り文字として使用するピリオドの前にスペースを追加しない場合に、RACF 内で特殊文字のサポートが使用可能になっていると、ピリオドはパスワードの一部として扱われ、区切り文字としては扱われません。

例

以下に示すのは /OPNDST コマンドの例です。

/OPNDST コマンドの例 1

入力 ET:

```
/DIS NODE L3270*
```

応答 ET:

NODE-USR	TYPE	CID	RECD	ENQCT	DEQCT	QCT	SENT	
L3270A	3277	00000000	0	0	0	0	0	IDLE C1INOP STATIC
L3270B	3277	00000000	0	0	0	0	0	IDLE C1INOP STATIC
L3270C	3277	08000002	44	45	45	0	80	CON STATIC
L3270D	3277	00000000	2	0	0	0	7	IDLE STATIC

94307/145048

入力 ET:

/OPNDST NODE L3270*

応答 ET:

DFS058I OPNDST COMMAND COMPLETED

入力 ET:

/DIS NODE L3270*

応答 ET:

NODE-USR	TYPE	CID	RECD	ENQCT	DEQCT	QCT	SENT	
L3270A	3277	06000004	0	0	0	0	1	IDLE CON STATIC
L3270B	3277	04000005	0	0	0	0	1	IDLE CON STATIC
L3270C	3277	08000002	46	46	46	0	82	CON STATIC
L3270D	3277	04000006	2	0	0	0	8	IDLE CON STATIC

94307/145750

説明: ノード L3270A から L3270D までが IMS にログオンされます。

/OPNDST コマンドの例 2

入力 ET:

/OPNDST NODE DT327002 USER IMSUS01 MODE LU032NT4 USERD DFSUSER
UDATA= IMSPW01.

応答 ET:

DFS058I 11:07:48 OPNDST COMMAND COMPLETED

説明: 動的ノード DT327002 とのセッションが、モード・テーブル LU032NT4 を使用して確立されます。ユーザー IMSUS01 は、記述子 DFSUSER、username IMSUS01、およびパスワード IMSPW01 を使用してノードにサインオンします。

/OPNDST コマンドの例 3

入力 ET:

/OPNDST NODE DTSLU201 USER IMSUS01 MODE SLU2MOD1 USERD DFSUSER
LOGOND DFSSLU2 UDATA=IMSPW01.

応答 ET:

DFS058I 11:07:48 OPNDST COMMAND COMPLETED

説明: DTSLU201 がログオンされます。動的ノード DTSLU201 とのセッションが、ログオン記述子 DFSSLU2 (SLU2 型) とモード・テーブル SLU2MOD1 を使用して確立されます。動的ユーザー IMSUS01 が、ユーザー記述子 DFSUSER とパスワード IMSPW01 を使用してノードにサインオンされます。

/OPNDST コマンドの例 4

入力 ET:

```
/OPNDST NODE WEST-EAST
```

応答 ET:

```
DFS058I OPNDST COMMAND COMPLETED
```

応答 RT:

```
DFS3650 TERMINAL CONNECTED TO IMS XXXXXXXX
```

説明: ノード WEST から EAST までが IMS にログオンされます。

/OPNDST コマンドの例 5

次のコマンドのセットは、*/OPNDST* コマンドの *MODE* キーワードの使い方を示しています。

入力 ET:

```
/DIS NODE LUTYPEP1 MODE
```

応答 ET:

```
NODE-USR TYPE   DEF MODETBL  ACT MODETBL  
LUTYPEP1 SLUP   DEFRESP  
*90179/100206*
```

説明: DEFRESP は、システム定義時にノード LUTYPEP1 用に定義されたモード・テーブル名です。セッションはアクティブではありません。したがって、ACT MODETBL フィールドはブランクです。

入力 ET:

```
/OPN NODE LUTYPEP1.
```

応答 ET:

```
DFS058I OPNDST COMMAND COMPLETED
```

入力 ET:

```
/DIS NODE LUTYPEP1 MODE
```

応答 ET:

```
NODE-USR TYPE   DEF MODETBL  ACT MODETBL  
LUTYPEP1 SLUP   DEFRESP      DEFRESP  
*90179/100508*
```

説明: */OPNDST* コマンドでモード・テーブル名が指定されていなかったため、セッションを開始するために、システム定義時に定義されたデフォルトが使用されました。

入力 ET:

```
/CLS NODE LUTYPEP1
```

応答 ET:

```
DFS058I CLSDST COMMAND COMPLETED
```


入力 ET:

```
/DIS NODE LUTYPEP1 MODE
```

応答 ET:

```
NODE-USR TYPE  DEF MODETBL  ACT MODETBL
LUTYPEP1 SLUP  DEFRESP
*90179/100630*
```

説明: 通常のセッション終了時には、アクティブ・モード・テーブル名は、空白として表示されます。

入力 ET:

```
/OPN NODE LUTYPEP1 MODE ALPHA.
```

応答 ET:

```
DFS058I OPNDST COMMAND COMPLETED
```

入力 ET:

```
/DIS NODE LUTYPEP1 MODE
```

応答 ET:

```
NODE-USR TYPE  DEF MODETBL  ACT MODETBL
LUTYPEP1 SLUP  DEFRESP      ALPHA
*90179/100805*
```

説明: セッションを開始するために、/OPNDST コマンドで指定されたモード・テーブル名 (ALPHA) が使用されます。システム定義時に指定されたデフォルト (DEFRESP) は、/OPNDST コマンドでオーバーライドされます。

/OPNDST コマンドの例 6

以下の例では、ISC TCP/IP 並列セッションで /OPNDST NODE コマンドが発行されています。

入力 ET:

```
/OPN NODE CICS USER CICD.
```

応答 ET:

```
DFS058I OPNDST COMMAND COMPLETED
```

入力 ET:

```
/DISPLAY NODE CICS USER CICD
```

応答 ET:

```
NODE-USR TYPE  CID      RECD ENQCT DEQCT  QCT  SENT
CICS      TCP
-CICD      *****    0    0    0    0    0 SIGN(CICD  )
                                IDLE CON
*13175/200817*
```


第 3 章 /PSTOP コマンド

/PSTOP コマンドは、特定の通信回線、端末、または論理リンクとの間のメッセージの送受信を停止するために使用します。

また、このコマンドを使用して、特定のトランザクション・コードを含むメッセージのスケジューリングを停止したり、出力メッセージおよび入力メッセージのキューイングの続行を許可したり、停滞している同期プログラム間通信要求を停止したり、端末オペレーターが入力したすべてのパラメーターの妥当性検査を実行したりすることもできます。

サブセクション:

- 『環境』
- 24 ページの『構文』
- 24 ページの『キーワード』
- 28 ページの『使用上の注意』
- 28 ページの『同等の IMS タイプ 2 コマンド』
- 29 ページの『例』

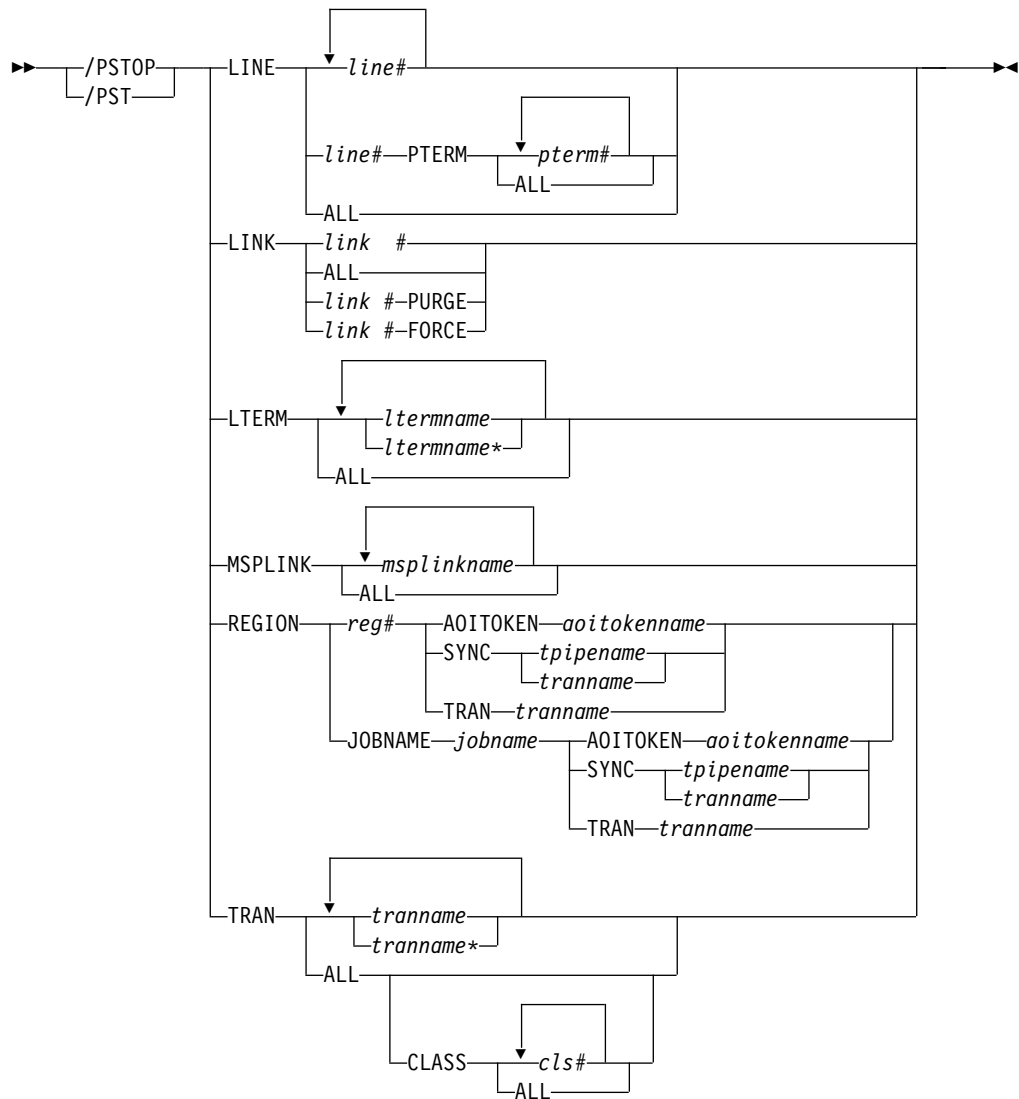
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 5. /PSTOP コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/PSTOP	X	X	X
AOITOKEN	X	X	X
CLASS	X		X
FORCE	X		X
JOBNAME	X	X	X
LINE	X		X
LINK	X		X
LTERM	X		X
MSPLINK	X		X
PTERM	X		X
PURGE	X		X
REGION	X	X	X
SYNC	X		X
TRAN	X		X

構文



キーワード

以下のキーワードは、/PSTOP コマンドに有効です。

LINE

停止する IMS 通信回線を指定します。

LINK

停止するリンクを指定します。別の IMS システム内のパートナー・リンクは自動的に停止し、そのシステムのマスター端末オペレーターに通知します。

PURGE

PURGE は、物理リンクがチャンネル間結合である 1 つの論理リンクの場合にのみ使用できます。パートナー・リンクが障害のあるシステム内にある場合は、PURGE を使用する必要があります。そうしないと、そのシステムが停止した後、リンクがアイドル状態になりません。

FORCE

このキーワードは TCP/IP リンクおよび VTAM リンクを対象とし、セッションが終了しても、通常の PSTOP 処理中にリンクがクリーンアップされず、PSTOPPED IDLE 状況にならない場合に使用します。

リンクの片側で /PSTOP 処理が完了した後、もう一方の側が表示されます。もう一方の側が PSTOPPED IDLE 状態になっていない場合は、この操作をパートナー IMS システムで繰り返す必要があります。両側が PSTOPPED IDLE 状態になっている場合は、/RSTART LINK コマンドを発行して、リンクを再始動することができます。

TCP/IP リンクの場合、FORCE オプションは、パートナー IMS システムでリンクがシャットダウンされた後、正常にシャットダウンされない MSC TCP/IP リンクをシャットダウンするために役立ちます。正常にシャットダウンされないリンクは、NOTIDLE-C 状況になっているか、あるいは別の形で PSTOPPED IDLE 状況になっていない可能性があります。

TCP/IP リンクの場合は、いつでも FORCE オプションを指定した /PSTOP を発行できます。FORCE オプションを使用する前にリンクを正常にシャットダウンする必要はありません。

IMS では、TCP/IP リンクに対する FORCE オプションを処理する場合、以下のアクションを実行します。

- コマンドが発行された IMS 内でリンクをシャットダウンします
- 送信ソケットをクリーンアップすることを、ローカル IMS Connect インスタンスに通知します
- エラー・メッセージ DFS3177E MSC DETECTED AN ERROR RETCODE = 00000000, RSNCODE = 00000070, LOSTSESS = FORCESTO を発行します
- 通知メッセージ DFS2169I DISCONNECTION COMPLETED ON LINK を発行します
- リンクを PSTOPPED ERE IDLE 状況にします

注: IMS Connect 内の TCP/IP リンク・セッションがまだアクティブであるかどうかを判別するには、ローカル IMS Connect インスタンス上で WTOR コマンド VIEWMSC *lclplkid* を発行します。z/OS MODIFY コマンド QUERY MSC または IMS タイプ 2 コマンド QUERY IMSCON TYPE(MSC) も使用できます。

VTAM リンクの場合、FORCE オプションは、IMS 内の VTAM リンクをアイドル状態にしてクリーンアップするために、一部の VTAM コマンドで使用できます。

IMS では、VTAM リンクの FORCE オプションを処理する場合、以下のアクションを実行します。

1. リンクが PSTOP 処理を開始しているかどうかを判別します。PSTOP 処理が開始されている場合、リンクは PSTOPPED NOTIDLE として表示されます。
2. ハング状態の原因が、未処理の VTAM 要求にあるかどうかをテストします。そうであった場合、IMS は、VTAM に対して照会要求を発行し、セッションが非アクティブであるかどうかを判別します。非アクテ

ィブである場合、IMS は VTAM 要求の完了をシミュレートして、リンクが PSTOP 処理を完了できるようにします。

コマンド DISPLAY

NET,SESSIONS,LU1=applid1,LU2=applid2,SCOPE=ALL,LIST=ALL を発行することで、セッションがまだ VTAM に対してアクティブであるかどうかを判別できます。アクティブである場合は、セッションの SID を書き留めます。

VTAM セッションがアクティブではなく、IMS に対して PSTOPPED NOTIDLE 状況にある場合は、/PSTOP LINK x FORCE を発行します。

VTAM に対してセッションがまだアクティブになっている場合は、VTAM に対して VARY NET,TERM,SID=x,NOTIFY=YES,SCOPE=ALL,TYPE=FORCE を発行して、セッションを終了します。

通常の条件下では、VTAM VARY NET,TERM コマンドによって VTAM でのセッションが終了し、IMS が VTAM セッションに関連付けられたリンクの PSTOP および IDLE を行います。VTAM VARY コマンドにより VTAM セッションは終了したが、リンクの PSTOP および IDLE は行われないう場合は、IMS /PSTOP LINK FORCE コマンドを使用して、IMS での PSTOP とクリーンアップ処理を完了することができます。

以下のいずれかの理由で /PSTOP LINK x FORCE を実行できない場合は、IMS は応答として DFS058 /PSTOP LINK COMPLETED EXCEPT LINK x を返します。

- VTAM にとってセッションがまだアクティブになっている。
- 通常の PSTOP 処理が開始していない (この場合は、FORCE キーワードを指定せずに /PSTOP を出します)。
- VTAM 要求が未完了であること以外の理由で、PSTOP 処理が完了しない。

LTERM

メッセージの送受信を停止させる論理端末を指定します。

/PSTOP LTERM コマンドは、QLOCK 状態の LTERM またはリモート論理端末の LTERM には無効です。総称パラメーターが既存の LTERM を指定する場合、LTERM パラメーターは総称になれます。

/PSTOP LTERM コマンドは、ログオンされるノードに属する LTERM に対してのみ有効です。

時間制御操作 (TCO) がアクティブな場合は、DFSTCF LTERM がノードに割り振られていなくても、DFSTCF TCO LTERM に対して /PSTOP LTERM コマンドが有効です。

MSPLINK

MSC TCP/IP または VTAM 物理リンクへのログオンを停止し、オペレーターがその物理リンクに論理リンクを再割り当てするために /MSASSIGN コマンドを発行できるようにします。/PSTOP コマンドで停止されなかったセッション内のリンクは、/MSASSIGN コマンドの影響を受けません。

/PSTOP コマンドが発行された後、リンクの状況は PSTOPPED、または TCP/IP 汎用リソース・グループの場合は PSTOPGEN になります。

論理リンクの割り当てが完了した後、/RSTART コマンドを発行して、物理リンクへのログオンを許可します。

/PSTOP MSPLINK コマンドは、CTC リンクおよび MTM リンクには適用されません。

REGION

TRAN キーワードを指定する場合、メッセージ領域は停止しません。指定した領域内で現在アクティブ・アプリケーション・プログラムに QC 状況 (これ以上のメッセージなし) が戻されます。スケジューラーは、参照される領域内の使用可能なトランザクションのスケジュールを続けます。

/PSTOP REGION コマンドは、次の両方が該当しない場合は無視されます。

- アクティブ・トランザクション・タイプが指定されている。
- 使用されているメッセージ領域が、入力待ちオプションを使用してトランザクションを処理中であるか、または領域が MPP である。

AOITOKEN キーワードを指定すると、AOI トークン待機状態の AO アプリケーションはポストされ、AIB 戻りコード X'00000004' と理由コード X'0000004C' を受信します。

JOBNAME キーワードを指定する場合、従属領域のジョブ名は 1 から 8 文字の英数字か国別文字 (\$、#、@) でなければなりません。ジョブ名の先頭文字は英字または国別文字のいずれかでなければなりません。

SYNC キーワードが指定されている場合、同期コールアウト待機状態のユーザー・アプリケーションがポストされ、AIB 戻りコード X'00000100' と理由コード X'0000010C' を受け取ります。

ユーザー・アプリケーションが同期プログラム間通信要求に対する応答を待っている間に SYNC キーワードが使用された場合にも、X'00000100' 戻りコードと X'0000010C' 理由コードが返されます。

TRAN

トランザクションのスケジューリングを停止します。ただし、そのトランザクションの処理は、限界カウントに達するまで継続されます。限界カウントが大きい場合は、処理インターバルが長くなります。/DISPLAY コマンドは、トランザクションの状況を確認します。/ASSIGN コマンドは、トランザクションの状況を変更します。

処理停止トランザクションに対して領域がスケジュールされ、そのトランザクション用のメッセージがない場合、その領域は次のメッセージを待ちません (入力待ちモード)。その代わりに、QC 状況コード (これ以上のメッセージなし) がアプリケーションに戻されます。コマンド入力時に、領域がスケジュールされ、次のメッセージを待っている場合には、領域に通知され、QC 状況コードがアプリケーションに戻されます。

入力待ちトランザクション (WFI) に対してスケジュールされたバッチ・メッセージ処理領域 (BMP) は /PSTOP REGION、/DBD、/DBR、または /STA のそれぞれのコマンドだけに対応する QC 状況コード (これ以上のメッセージなし) を戻します。

/PSTOP コマンドは、高速機能専用トランザクションのスケジューリングを停止させることはできませんが、可能性のある高速機能トランザクションを停止させるために使用することができます。

/PSTOP TRAN コマンドは、高速機能専用トランザクションまたは CPI Communications ドリブン・トランザクション・プログラムには使用できません。

既存のトランザクションを総称パラメーターが指定する場合、TRAN パラメーターは総称になれます。

共用キュー環境では、/PSTOP TRAN コマンドの結果として、IMS はそのトランザクションに対するインタレストを登録解除することになります。これは、そのトランザクションはその IMS ではスケジュールできないことを示します。

NOTINIT-15-REPOCHGLIST 理由コードで「不良」のマークが付けられたトランザクションには、/PSTOP TRAN コマンドは許可されません。これは、そのトランザクションの IMS 変更リスト処理が完了していないか、変更リスト処理が失敗したためです。

使用上の注意

相互に独立したパラメーターにエラーが検出された場合、無効なパラメーターのみがエラーとして示され、残りのパラメーターは、/PSTOP コマンドが処理します。

/PSTOP コマンドは、以前に /START、/RSTART、/PURGE、または /MONITOR コマンドを使用して設定された条件をリセットするために使用できません。

単一 IMS システム、または複数システム構成内のローカル・システムでは、ブロードキャスト・テキスト・メッセージおよび端末状況メッセージ (DFS059 TERMINAL STARTED) などの IMS システム・メッセージは、/PSTOP コマンドの影響を受けません。複数システム構成では、ブロードキャスト・メッセージはキューに入れられますが、停止されたリンクを介しては送信されません。

このコマンドは、バッチ SPOC ユーティリティーを使用する IMSplex に対して発行できます。

同期プログラム間通信要求 (IMS トランザクションに対する DL/I ICAL 要求) が長時間停止している場合、/DISPLAY ACTIVE REGION コマンドを使用して、どの領域のアプリケーションが停止しているかを判別することができます。その後、/PSTOP を使用して、アプリケーションを停止し、要求を停止することができます。

同等の IMS タイプ 2 コマンド

以下の表は、各種の /PSTOP コマンドと、類似の機能を実行する IMS タイプ 2 コマンドを示しています。

表 6. /PSTOP コマンドと同等のタイプ 2 コマンド

タスク	/PSTOP コマンド	類似の IMS タイプ 2 コマンド
トランザクションのスケジューリングを停止する。	/PSTOP TRAN <i>trannname</i>	UPDATE TRAN(<i>trannname</i>) START(Q) STOP(SCHD)
物理リンクへのログオンを停止します (MSC VTAM リンクの場合のみ)。	/PSTOP MSPLINK <i>msplinkname</i> ALL	UPDATE MSPLINK NAME(<i>msplinkname</i> *) STOP(LOGON)

表 6. /PSTOP コマンドと同等のタイプ 2 コマンド (続き)

タスク	/PSTOP コマンド	類似の IMS タイプ 2 コマンド
プログラムがスケジュールされている領域をポストします。これにより、プログラムの次のスケジュールで、新しいリフレッシュされたプログラムのコピーを取得することができます。	/PSTOP REGION TRAN <i>trannname</i>	UPDATE PGM START(REFRESH)

例

以下に示すのは /PSTOP コマンドの例です。

/PSTOP コマンドの例 1

入力 ET:

```
/PSTOP LINE 4 PTERM 1
```

応答 ET:

```
DFS058I PSTOP COMMAND COMPLETED
```

応答 RT:

```
DFS059I TERMINAL PSTOPPED
```

説明: LINE 4 PTERM 1 には、アプリケーション・プログラムまたはメッセージ通信出力は送信されず、入力を送信することは許可されません。その端末向けの出力メッセージは、引き続きキューに入れられます。

/PSTOP コマンドの例 2

入力 ET:

```
/PSTOP LINE 4 6 200
```

応答 ET:

```
DFS058I PSTOP COMMAND COMPLETED EXCEPT LINE 200
```

説明: LINE 4 と LINE 6 は、メッセージを送受信することは許可されません。メッセージ・キューイングは継続します。回線 200 は無効な回線番号です。

/PSTOP コマンドの例 3

入力 ET:

```
/PSTOP LINK 2 3 4
```

応答 ET:

```
DFS058I PSTOP COMMAND COMPLETED
```

応答 ET:

```
DFS2169I DISCONNECTION COMPLETED ON LINK 2
```

説明: 論理リンク 2 は切断されます。このメッセージは、切断された各論理リンクごとに受信されます。

応答リモート MT:

```
DFS2161I LINK 2 STOPPED BY PARTNER
DFS2161I LINK 3 STOPPED BY PARTNER
DFS2161I LINK 4 STOPPED BY PARTNER
```

説明: 論理リンク 2、3、および 4 は、メッセージ処理を停止します。出力キューイングは継続します。

応答 ET:

```
DFS2169I DISCONNECTION COMPLETED ON LINK 3
```

説明: 論理リンク 3 は切断されます。このメッセージは、論理リンク 4 が切断される時にも受信されます。

/PSTOP コマンドの例 4

入力 ET:

```
/PSTOP LINK ALL
```

応答 ET:

```
DFS058I PSTOP COMMAND COMPLETED
```

応答リモート MT:

```
A DFS2161 LINK n STOPPED BY PARTNER message
is received for each logical link that was
operational when /PSTOP was entered.
```

説明: 論理リンクへのすべての出力は停止します。出力キューイングは継続します。入力は許可されません。

応答 ET:

```
DFS2169I DISCONNECTION COMPLETED ON LINK XXX
```

説明: 各論理リンクが切断されるたびに、このメッセージが受信されます。

/PSTOP コマンドの例 5

入力 ET:

```
/PSTOP LINK 1 2 3 PURGE
```

応答 ET:

```
DFS2272I PURGE KEYWORD INVALID, ONLY ONE
CTC LINK ALLOWED
```

説明: PURGE キーワードで指定できるリンクは 1 つだけです。

/PSTOP コマンドの例 6

入力 ET:

```
/PSTOP LINK 2 PURGE
```

応答 ET:

```
DFS2273I PURGE KEYWORD REJECTED, CURRENT STATUS  
OF LINK IS NORMAL
```

説明: パートナー・システムに障害は起こっていないため、リンクは作動しているように見えます。

/PSTOP コマンドの例 7

入力 ET:

```
/PSTOP LTERM APPLE, TREE
```

応答 ET:

```
DFS058I PSTOP COMMAND COMPLETED
```

応答 RT:

```
DFS059I TERMINAL PSTOPPED
```

説明: 論理端末 APPLE および TREE に関連する物理端末には、論理端末 APPLE または TREE 用に予定されている出力が送信されないか、または入力を行うことができません。出力キューイングは継続します。

/PSTOP コマンドの例 8

入力 ET:

```
/PSTOP MSPLINK ALL
```

応答 ET:

```
DFS058I COMMAND COMPLETED
```

説明: すべての VTAM 物理リンクでログオンの受信が停止されます。セッション中のリンクは影響を受けません。

/PSTOP コマンドの例 9

入力 ET:

```
/PSTOP TRAN SEED
```

応答 ET:

```
DFS058I PSTOP COMMAND COMPLETED
```

説明: トランザクション・コード SEED は、もはやスケジュールされません。トランザクションのキューイングは継続します。

/PSTOP コマンドの例 10

入力 ET:

```
/PSTOP TRAN ALL CLASS 3
```

応答 ET:

```
DFS058I PSTOP COMMAND COMPLETED
```

説明: クラス 3 に関連する全トランザクションは、もはやスケジュールできません。トランザクションのキューイングは継続します。

/PSTOP コマンドの例 11

入力 ET:

```
/PSTOP REGION 1 TRAN XYZ
```

応答 ET:

```
DFS058I PSTOP COMMAND IN PROGRESS
```

応答 ET:

```
DFS0569I PSTOP COMPLETE FOR REGION 1 TRAN XYZ  
DFS0566I PSTOP NOT VALID FOR TRAN XYZ
```

説明: メッセージ DFS0569I が印刷された場合、トランザクション・タイプ xyz の処理は、メッセージ領域 1 では停止されます。メッセージ DFS0566I が印刷された場合は、2 つの必要な条件が満たされなかったため、コマンドは無視されました。

/PSTOP コマンドの例 12

入力 ET:

```
/PSTOP REGION 2 AOITOKEN AOITOK2
```

応答 ET:

```
DFS058I PSTOP COMMAND IN PROGRESS
```

応答 MT:

```
DFS0569I PSTOP OR STOP COMPLETE FOR REGION 2 AOIT AOITOK2.
```

説明: DFS0569I メッセージが印刷され、AOI トークン AOITOK2 用のメッセージを待つ領域 2 の AO アプリケーションがポストされます。そのアプリケーションは AIB 戻りコード X'00000004' および理由コード X'0000004C' を受信します。

/PSTOP コマンドの例 13

入力 ET:

```
/PSTOP REGION 2 AOITOKEN AOITOK2
```

応答 ET:

```
DFS058I PSTOP COMMAND IN PROGRESS
```

応答 MTO:

```
DFS1190I REGION 2 NOT WAITING ON AOITOKEN AOITOK2
```

説明: 領域 2 は AOI トークン AOITOK2 を待機していないので、DFS1190I メッセージが印刷される場合、そのコマンドは無視されます。

/PSTOP コマンドの例 14

入力 ET:

```
/DIS ACTIVE REG
```

応答 ET:

```
REGID JOBNAME  TYPE  TRAN/STEP  PROGRAM  STATUS  CLASS
   1 MPP610C    TP    NQF1      PMVAPZ12 ACTIVE  1, 2, 3, 4
      BATCHREG  BMP    NONE
      FPRGN     FP    NONE
      DBTRGN    DBT   NONE
      DBRECTA9  DBRC
      DLIECTA9  DLS
      *96081/150611*
```

説明: メッセージ処理プログラム PMVAPZ12 がトランザクション NQF1 を処理しています。領域のジョブ名は MPP610C です。

入力 ET:

```
/PSTOP REGION JOBNAME MPP610C TRAN NQF1
```

応答 ET:

```
DFS058I PSTOP COMMAND IN PROGRESS
DFS0569I PSTOP OR STOP COMPLETE FOR REGION 00001 TRAN NQF1
```

応答 ET:

```
DFS058I PSTOP COMMAND IN PROGRESS
DFS0566I PSTOP NOT VALID FOR TRAN NQF1
```

説明: メッセージ DFS0569I が表示された場合、トランザクション・タイプが NQF1 であれば、その処理は、メッセージ領域 1 で停止されます。メッセージ DFS0566I が表示された場合は、2 つの必要な条件が満たされなかったため、コマンドは無視されました。

/PSTOP コマンドの例 15

入力 ET:

```
/DIS ACTIVE REG
```

応答 ET:

```
REGID JOBNAME  TYPE  TRAN/STEP  PROGRAM  STATUS  CLASS
   1 MPP1A      TP    APOL11    APOL1    WAIT-CALLOUT  1
      TMEM:    HWS1          TPIPE:  TPIPE1
      JMPRGN   JMP    NONE
      JBPGRN   JBP    NONE
      BATCHREG BMP    NONE
      FPRGN    FP    NONE
      DBTRGN   DBT   NONE
      DBRZCSAJ DBRC
      DLIZCSAJ DLS
      *08235/173441*
```

説明: メッセージ処理プログラム APOL1 がトランザクション APOL11 を処理中です。これは、トランザクション・パイプ TPIPE1 からの同期コールアウト要求 (WAIT-CALLOUT) に対する応答を待っています。

入力 ET:

```
/PSTOP REGION 1 SYNC TPIPE1
```

応答 ET:

```
DFS058I PSTOP COMMAND IN PROGRESS
DFS0569I PSTOP OR STOP COMPLETE FOR REGION 00001 SYNC TPIPE1
```

応答 ET:

```
DFS058I PSTOP COMMAND IN PROGRESS
DFS1190I REGION 00001 NOT WAITING ON SYNTPIPE TPIPE1
```

説明: DFS0569I メッセージが印刷されている場合、同期コールアウト待機状態のユーザー・アプリケーションがポストされています。アプリケーションは AIB 戻りコード X'00000100' と理由コード X'0000010C' を受け取ります。DFS1190I メッセージが印刷されている場合、領域 1 はトランザクション・パイプ TPIPE1 からの同期コールアウト要求に対する応答を待っていなかったため、コマンドは無視されています。

/PSTOP コマンドの例 16

この例は、停滞している同期プログラム間通信要求を停止するために PSTOP を使用する場合のシナリオを示しています。待機しているプログラムの状況を判別するために、次のコマンドを発行します。

```
/DIS ACTIVE REG
```

以下の応答が戻されます。

```
REGID JOBNAME  TYPE TRAN/STEP PROGRAM STATUS      CLASS
      1 MPP1A    TP  APOL11    APOL1  WAIT-CALLOUT 1
                TRAN:SKS1                END TIME: 2010.172 12:45:04
      JMPRGN   JMP  NONE
      JBPRGN   JBP  NONE
      BATCHREG BMP  NONE
      FPRGN    FP   NONE
      DBTRGN   DBT  NONE
      DBRZCSAJ DBRC
      DLIZCSAJ DLS
```

```
*10172/120101*
*
```

メッセージ処理プログラム APOL1 は、トランザクション APOL12 を処理しています。このトランザクションは、トランザクション SKS2 からの同期プログラム間通信応答を待っています。待ち状態を終了するために、次のコマンドを発行します。

```
/PSTOP REGION 1 SYNC SKS2
```

このコマンドでは、考えられる 2 つの応答のいずれかを受け取ります。以下の応答は、PSTOP コマンドが待ち状態を正常に終了させたことを示しています。

```
DFS058I PSTOP COMMAND IN PROGRESS
DFS0569I PSTOP OR STOP COMPLETE FOR REGION 00001 SYNC SKS2
```

PSTOP コマンドは正常に実行されたが、指定された領域が指定されたトランザクションの応答を待っていない場合は、次のような別の応答を受け取ります。

```
DFS058I PSTOP COMMAND IN PROGRESS
DFS1190I REGION 00001 NOT WAITING ON TRAN SKS2
```

関連資料:

857 ページの『第 16 章 /RSTART コマンド』

1429 ページの『UPDATE TRAN コマンド』

第 4 章 /PURGE コマンド

/PURGE コマンドは、特定の通信回線、端末、または論理リンク・パスへの入力を停止させるか、特定のトランザクション・コード向けの入力メッセージを停止させます。

メッセージを指定された通信回線または端末へ送ることはでき、トランザクションのスケジュールは依然として行えます。

APPC/IMS フラッディング制御の結果として 64 ビット・ストレージのキューに入った APPC 要求は、センス・コード TP_Not_Available_No_Retry でリジェクトされます。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 36 ページの『キーワード』
- 38 ページの『使用上の注意』
- 38 ページの『同等の IMS タイプ 2 コマンド』
- 38 ページの『例』

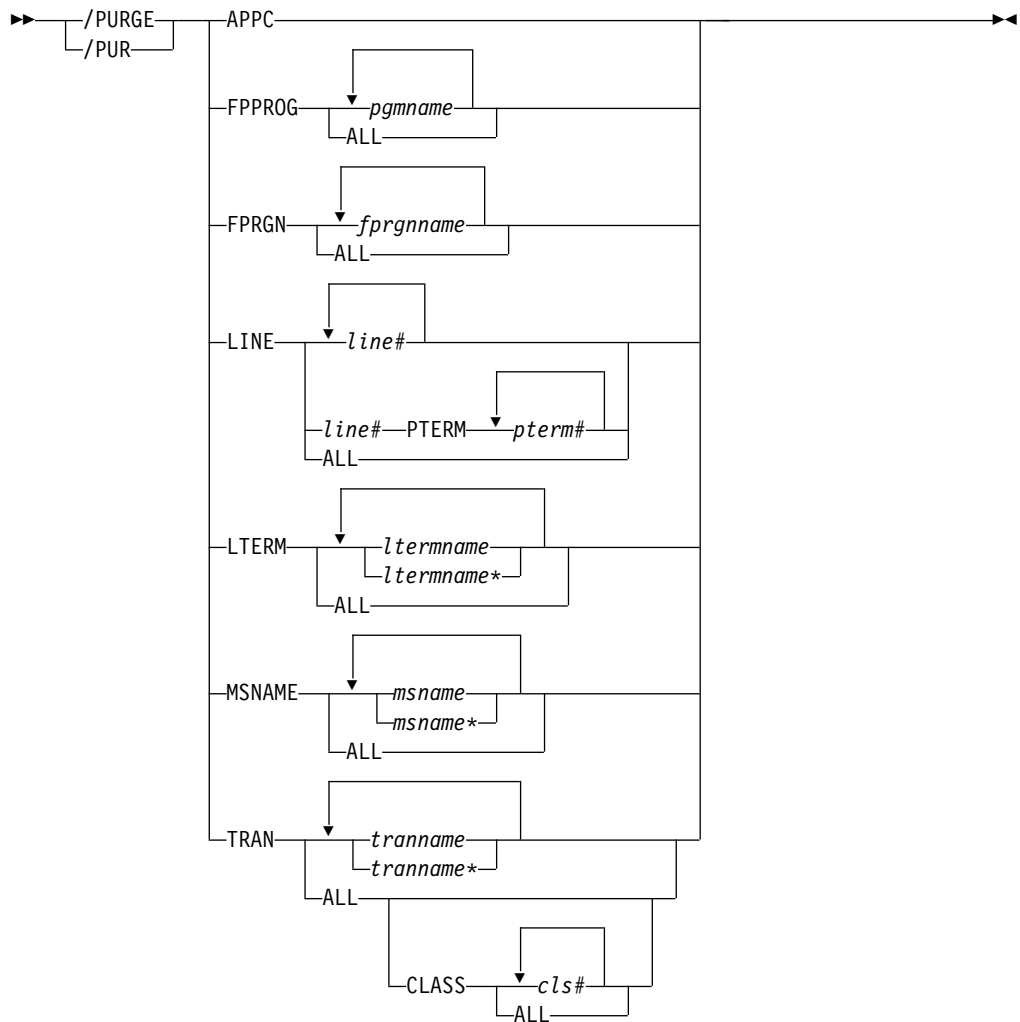
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 7. /PURGE コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/PURGE	X		X
APPC	X		X
CLASS	X		X
FPPROG	X		X
FPRGN	X		X
LINE	X		X
LTERM	X		X
MSNAME	X		X
PTERM	X		X
TRAN	X		X

構文



キーワード

以下のキーワードは、/PURGE コマンドに有効です。

APPC

着信したトランザクションをパージするために使用されます。IMS 内のトランザクションをスケジュールするよう求める APPC/z/OS からの新しい要求は、すべてリジェクトされ、TP_Not_Available_No_Retry が戻されます。既に IMS が受信しているトランザクションは、正常に処理されます。出力を LU 6.2 装置への出力は、通常どおり進行します。/PURGE APPC は APPC/z/OS を呼び出さないため、トランザクション・スケジュールングのリジェクトは、IMS のスケジュール出口のみによって実行されます。

注: パージされた APPC/IMS システムへの着信 ATTACH についての、LU 6.2 リモート装置に戻されるセンス・コードは、APPC/z/OS システムによって決定され、リリース間で異なることがあります。一般に、リモート LU 6.2 アプリケーションは、リジェクトされた後、IMS とのセッションの再設定が試みられるまで、一定時間待つ必要があります。

/PURGE APPC コマンドは、PURGING 状態を設定し、/START APPC コマンドで以前に設定された条件をリセットします。APPC が既に DISABLED、FAILED、STOPPED または CANCEL のそれぞれの状態にある場合は、コマンドはリジェクトされます。

FPPROG

終了させるメッセージ・ドリブン・プログラムの PSB 名を指定します。

/PURGE は、メッセージ・ドリブン・プログラムを「入力待ち」モードから取り出し、そのロード・バランシング・グループのメッセージ・キューが空になると、すぐにこれらのプログラムを終了します。

FPPROG キーワードは、注意して使用しなければなりません。これは、同じ名前の PSB を使用している高速機能メッセージ・ドリブン・プログラムを、すべて終了させてしまうためです。

FPRGN

終了させるメッセージ・ドリブン・プログラムの領域 ID を指定します。

LINE

入力を停止させる通信回線を指定します。

LTERM

入力を停止させる論理端末を指定します。

/PURGE LTERM コマンドは、QLOCK 状態の LTERM の場合にはリジェクトされます。(QLOCK は、LTERM がロックされているため、セッションで特定の要求が受信されてこの状態がリセットされるまでは、これ以上出力を送信できず、また、同じ LTERM に対する追加の出力を作成する可能性のある入力を受信することはできないことを示します。) /PURGE LTERM は、リモート論理端末の場合もリジェクトされます。総称パラメーターが既存の LTERM を指定する場合、LTERM は、総称パラメーターをサポートします。

/PURGE LTERM コマンドは、ログオンされるノードに属する LTERM に対してのみ有効です。

MSNAME

入力を停止する複数システム構成内の論理リンク・パスを指定します。

MSNAME キーワードは、総称パラメーターをサポートします。

TRAN

入力メッセージを停止するトランザクション・コードを指定します。

既存のトランザクションを総称パラメーターが指定する場合、TRAN パラメーターは総称になれます。

NOTINIT-15-REPOCHLIST 理由コードで「不良」のマークが付けられたトランザクションには、/PURGE TRAN コマンドは許可されません。これは、そのトランザクションの IMS 変更リスト処理が完了していないか、変更リスト処理が失敗したためです。

使用上の注意

/PURGE は、端末オペレーターが入力したすべてのパラメーターの妥当性を検査します。相互に独立したパラメーターにエラーが検出された場合、無効なパラメーターのみがエラーとして示され、残りのパラメーターは、/PURGE コマンドが処理します。

/PURGE コマンドは、/START、/RSTART、/STOP、/PSTOP、または /MONITOR のいずれかのコマンドで以前に設定された条件をリセットするために使用することができます。

このコマンドは、バッチ SPOC ユーティリティーを使用する IMSplex に対して発行できます。

同等の IMS タイプ 2 コマンド

以下の表は、各種の /PURGE コマンドと、類似の機能を実行する IMS タイプ 2 コマンドを示しています。

表 8. /PURGE コマンドと同等のタイプ 2 コマンド

タスク	/PURGE コマンド	類似の IMS タイプ 2 コマンド
特定のトランザクション・コードについて、入力メッセージを停止する。	/PURGE TRAN <i>trannname</i>	UPDATE TRAN NAME(<i>trannname</i>) START(SCHD) STOP(Q)

例

以下に示すのは /PURGE コマンドの例です。

/PURGE コマンドの例 1

入力 ET:

```
/PURGE FPPROG ALL
```

応答 ET:

```
DFS058I PURGE COMMAND COMPLETED
```

説明: すべてのメッセージ・ドリブン・プログラムは、「入力待ち」モードから取り出され、そのロード・balancing・グループのメッセージ・キューが空になると、すぐに PSB 名によって終了されます。

/PURGE コマンドの例 2

入力 ET:

```
/PURGE FPRGN ALL
```

応答 ET:

```
DFS058I PURGE COMMAND COMPLETED
```

説明: すべてのメッセージ・ドリブン・プログラムは、「入力待ち」モードから取り出され、そのロード・balancing・グループのメッセージ・キューが空になると、すぐに領域 ID によって終了されます。

/PURGE コマンドの例 3

入力 ET:

```
/PURGE LINE 4
```

応答 ET:

```
DFS058I PURGE COMMAND COMPLETED
```

応答 RT:

```
DFS059I TERMINAL PURGING
```

説明: 回線 4 に関連するすべての物理端末は、送られてきた出力を受信できますが、入力をするには許可されません。

/PURGE コマンドの例 4

入力 ET:

```
/PURGE LINE 5 7 400
```

応答 ET:

```
DFS058I PURGE COMMAND COMPLETED EXCEPT LINE 400
```

説明: 回線 5 と 7 に関連するすべての物理端末は、出力を受信できますが、入力することはできません。回線 400 は無効な回線番号です。

/PURGE コマンドの例 5

入力 ET:

```
/PURGE MSNAME BOSTON
```

応答 ET:

```
DFS058I PURGE COMMAND COMPLETED
```

説明: 会話を続けているメッセージを除き、端末からのすべてのメッセージ (基本要
求) は、MSNAME BOSTON で表された宛先用のキューには入れられません。この
中には、MSNAME の SYSID をもつリモート・トランザクション向けと、この
MSNAME に関連するリモート論理端末向けのすべてのメッセージが含まれます。

/PURGE コマンドの例 6

入力 ET:

```
/PURGE TRAN PIT, SEED
```

応答 ET:

```
DFS058I PURGE COMMAND COMPLETED
```

説明: トランザクション PIT と SEED は依然としてスケジュールできますが、入
力がアプリケーション・プログラムからの出力として発生しない場合は、これらの
トランザクション用の入力をキューに入れることはできません。

/PURGE コマンドの例 7

入力 ET:

```
/PURGE TRAN ALL CLASS 2
```

応答 ET:

```
DFS058I PURGE COMMAND COMPLETED
```

説明: クラス 2 に関連する全トランザクションは、除去されたものとしてマークが付けられます。これ以後、トランザクションは端末からキューに入れられません。

関連資料:

1429 ページの『UPDATE TRAN コマンド』

1302 ページの『UPDATE MSNAME コマンド』

第 5 章 QUERY コマンド

IMS QUERY コマンドは、IMS リソースに関する情報を表示するために使用します。

QUERY コマンドは、指定されたキーワードに基づいて情報を戻します。QUERY コマンドはすべてタイプ 2 コマンドであり、OM API から発行することができます。

これらのコマンドは、TSO SPOC、IBM Management Console for IMS and DB2[®] for z/OS、IMS Application Menu の Manage Resources オプション、またはその他の OM API を介してコマンドを発行するユーザー作成プログラムを介して発行することができます。また、これらのコマンドは、バッチ SPOC ユーティリティを使用して、IMSplex に対して発行することもできます。

コマンド出力の QCNT 列に表示される値は、個々の QUERY コマンドのトピックで説明されているように、コマンドによって異なる意味を持ちます。

QUERY コマンドは以下のとおりです。

- 42 ページの『QUERY AREA コマンド』
- 56 ページの『QUERY DB コマンド』
- 109 ページの『QUERY DBDESC コマンド』
- 126 ページの『QUERY IMS コマンド』
- 138 ページの『QUERY IMSCON コマンド』
- 305 ページの『QUERY IMSPLEX コマンド』
- 316 ページの『QUERY LE コマンド』
- 324 ページの『QUERY LTERM コマンド』
- 352 ページの『QUERY MEMBER コマンド』
- 375 ページの『QUERY MSLINK コマンド』
- 414 ページの『QUERY MSNAME コマンド』
- 431 ページの『QUERY MSPLINK コマンド』
- 460 ページの『QUERY NODE コマンド』
- 486 ページの『QUERY ODBM コマンド』
- 513 ページの『QUERY OLC コマンド』
- 523 ページの『QUERY OLREORG コマンド』
- 530 ページの『QUERY OTMADESC コマンド』
- 544 ページの『QUERY OTMATI コマンド』
- 553 ページの『QUERY PGM コマンド』
- 582 ページの『QUERY PGMDESC コマンド』
- 601 ページの『QUERY POOL コマンド』
- 626 ページの『QUERY RM コマンド』

- 633 ページの『QUERY RTC コマンド』
- 652 ページの『QUERY RTCDESC コマンド』
- 665 ページの『QUERY STRUCTURE コマンド』
- 675 ページの『QUERY TRAN コマンド』
- 720 ページの『QUERY TRANDESC コマンド』
- 746 ページの『QUERY USER コマンド』
- 766 ページの『QUERY USEREXIT コマンド』
- 774 ページの『QUERY USERID コマンド』

関連概念:

- ➡ CSL RM、IMS、およびリポジトリ・サーバーの終了 (システム管理)
- ➡ IMSRSC リポジトリの管理 (システム管理)
- ➡ IMSRSC リポジトリのリソース・リスト (システム定義)

QUERY AREA コマンド

QUERY AREA コマンド (タイプ 2 コマンド) は、DEDB エリアに関する情報およびエリア・データ・セット情報を表示するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 43 ページの『構文』
- 43 ページの『キーワード』
- 46 ページの『使用上の注意』
- 48 ページの『同等の IMS タイプ 1 コマンド』
- 48 ページの『出力フィールド』
- 50 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 51 ページの『例』

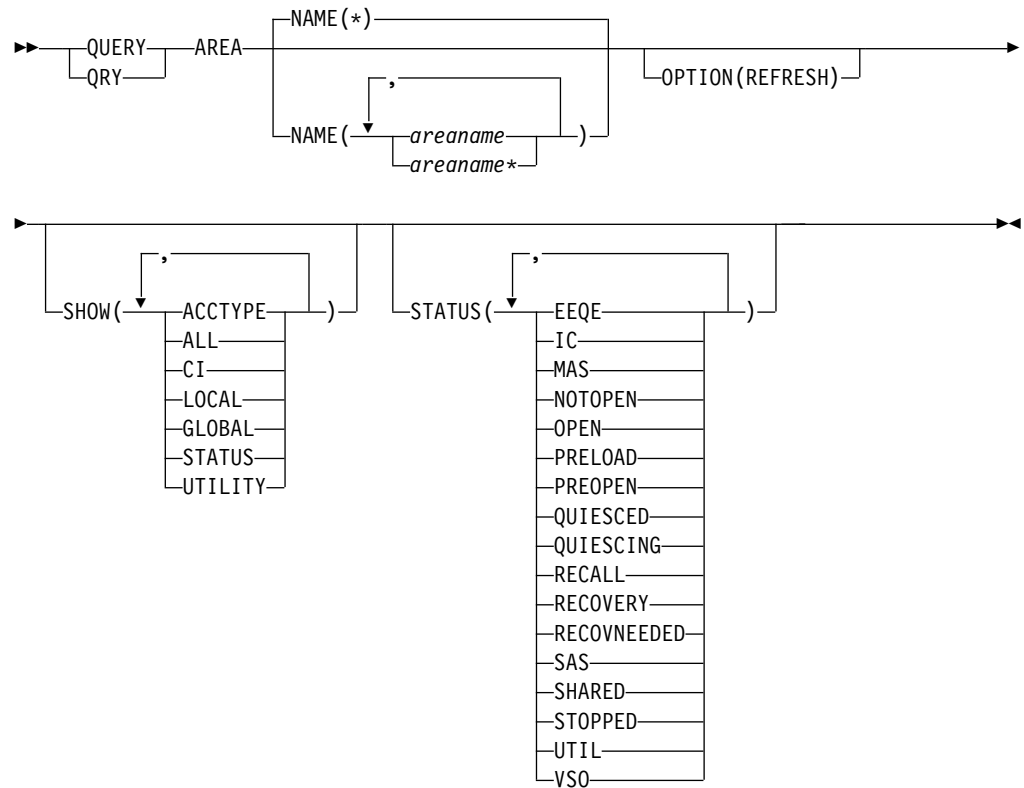
環境

以下の表には、QUERY AREA コマンドおよびキーワードを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 9. QUERY AREA コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUERY AREA	X	X	
NAME	X	X	
OPTION	X	X	
SHOW	X	X	
STATUS	X	X	

構文



キーワード

以下のキーワードは、QUERY AREA コマンドに有効です。

NAME()

処理する特定のエリアの名前、または、名前が、指定された総称またはワイルドカード・パラメーターに一致するエリアのグループを指定します。

STATUS フィルターを指定しなかった場合は、NAME パラメーターに一致するすべてのエリア名が戻されます。NAME キーワードはオプションであり、デフォルト値は NAME(*) です。

OPTION(REFRESH)

実行する追加の機能を指定します。

REFRESH

順次従属スペース、および該当エリア用の直接アクセス可能スペースの独立オーバーフロー部分について、制御インターバル情報をリフレッシュします。OPTION(REFRESH) を指定すると、SHOW(CI) が指定されていなくても CI 情報が戻されます。該当エリアがコマンド・マスター IMS でオープンされている場合に OPTION(REFRESH) を使用すると、そのコマンド・マスターでのみ実行される入出力要求が出されます。コマンドが IMSplex 内の複数の IMS システムに送付される場合は、マスター以外のすべての IMS システムがローカル CI 情報を戻します。マスター以外の

IMS システムについて表示されるローカル情報の経過時間は、最大でも、IMS 制御領域始動パラメーター IOVFI= で設定されている値です。

CI 情報が戻されるのは、該当エリアが IMS でオープンされている場合に限られます。そのエリアがオープンされていない場合は、出力 CI 列 SDAT、SDAU、LDAT、および LDAU には空白が戻されます。該当エリアがコマンド・マスター IMS でオープンされていない場合は、制御インターバルのリフレッシュは行われません。現行の SDEP および IOVF CI 情報を取得するには、QRY AREA NAME(areaname)SHOW(CI) OPTION(REFRESH) を、エリアがオープンされている IMS に経路指定する必要があります。

REFRESH キーワードにデフォルトの NAME(*) を使用した場合、または REFRESH キーワードにより多数のエリアを処理する場合は、関与するエリアのサイズと数によっては、パフォーマンスに影響が出ることがあります。大きいエリア、多数のエリア、またはその両方が関与している場合は、コマンドを処理している制御領域が停止しているように見えることがあります。

SHOW()

戻されるエリア出力フィールドを指定します。常に、エリア名、DEDB 名、およびエリア・データ・セット情報が、エリアに関する出力を作成した IMS の名前および完了コードと共に戻されます。

SHOW キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあります。

ACCTYPE

UPDATE AREA START(ACCESS) SET(ACCTYPE()) コマンドでエリア・アクセスが明示的に変更された場合、DEDB エリア・アクセスを戻します。UPDATE AREA コマンドでエリア・アクセスが明示的に変更されない場合、エリア・アクセスは空白です。

QUERY AREA NAME() SHOW(ACCTYPE|ALL) コマンドの NAME() キーワードで指定されたエリアがどれも明示的なエリア・アクセス値を持っていない場合には、エリア・アクセス (LAcc) 出力フィールド列は表示されません。

DEDB エリアへのアクセスのタイプは、次のいずれかです。

- BRWS: 読み取り専用
- EXCL: 排他的
- READ: 読み取り
- UPD: 更新

ALL すべての出力フィールドを戻します。

グローバル・エリア状況が維持されている場合、QUERY AREA コマンドは、RM リソース構造からグローバル情報を戻します。コマンド・マスター IMS は、別個の応答行で状況を戻します。エリアは、コマンド・マスターで定義されている必要はありません。

CI 制御インターバル。

順次従属スペース用として定義されている合計および未使用の制御インターバル数、および直接アドレス可能スペースの独立オーバーフロー部分についての合計および未使用の制御インターバル数を戻します。

LOCAL

ローカル値とグローバル値の両方を持つ出力フィールドの場合、このオプションはローカル値のみを戻します。特定の出力フィールドを要求するために別の SHOW キーワードと一緒に使用された場合、このオプションは指定された出力フィールドのローカル値のみを戻すことを要求します。ローカル出力は、コマンドを処理する各 IMS によって戻されます。

GLOBAL

ローカル値とグローバル値の両方を持つ出力フィールドの場合、このオプションはグローバル値のみを戻します。特定の出力フィールドを要求するために別の SHOW キーワードと一緒に使用された場合、このオプションは指定された出力フィールドのグローバル値のみを戻すことを要求します。IMS は RM からグローバル情報を取り出します。グローバル出力は、コマンド・マスター IMS によってのみ戻されます。

グローバル・エリア状況が維持されている場合、QUERY AREA コマンドは、RM リソース構造からグローバル情報を戻します。コマンド・マスター IMS は、別個の応答行で状況を戻します。エリアは、コマンド・マスターで定義されている必要はありません。

STATUS

ローカル・エリアおよびグローバル・エリアの状況。

グローバル・エリア状況が RM に維持されている場合、グローバル状況が戻されます。グローバル状況は、コマンド・マスター IMS によってのみ戻され、別個の応答行に戻されます。

エリアが EEQE 状況にある場合は、そのエリアについての入出力エラーのカウンタまたは書き込みエラー EEQE も戻されます。エリアの状況が OPEN の場合、その状況は RM リソース構造内に維持されません。

グローバル・エリア状況が維持されている場合、QUERY AREA コマンドは、RM リソース構造からグローバル情報を戻します。コマンド・マスター IMS は、別個の応答行で状況を戻します。エリアは、コマンド・マスターで定義されている必要はありません。

UTILITY

該当エリアをオープンしたユーティリティーに関するユーティリティー情報を戻します。ユーティリティー名、専用プール内の合計バッファ数と使用可能バッファ数、およびユーティリティーの UOW が戻されます。

STATUS()

NAME パラメーターに一致し、指定されたエリア状況の少なくとも 1 つをローカルで保有するエリアを表示用を選択します。

この状況フィルターは、エリア状況によるさらに細密なフィルタリングを可能にします。 STATUS フィルターを指定した場合に戻される出力には、SHOW(STATUS) が指定されていないなくても、エリア名が表示される原因となったエリア状況が含まれます。

状況パラメーターは、QUERY AREA のローカル状況出力列に表示される値と同じです。表 11を参照してください。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ指定でき、DB/DC および DBCTL 環境でのみ処理できます。

QUERY AREA コマンドは XRF 代替システムで有効です。

このコマンドのコマンド構文は XML で定義されており、OM と通信する自動化プログラムで使用できます。

QUERY AREA の SHOW キーワードが出力のタイプを決定する方法

以下の表は、SHOW キーワードによって、QUERY AREA コマンドで戻される出力のタイプを決める方法について、いくつかの例を示しています。

表 10. QUERY AREA の SHOW キーワードが出力のタイプを決定する方法

使用される SHOW キーワードの形式	戻される出力のタイプ
SHOW(LOCAL)	IMS システムにローカルのフィールドのみ。 SHOW(ALL,LOCAL) は、これと同じ出力を提供します。
SHOW(GLOBAL)	グローバルに維持されている出力フィールドのみ (RM によって維持されているデータなど)。 SHOW(ALL,GLOBAL) は、これと同じ出力を提供します。
SHOW(ALL)	ローカル・データとグローバル・データの両方を持つフィールドのすべての出力フィールド。両方の値が出力に戻されます。
SHOW(STATUS,GLOBAL)	グローバル STATUS 値のみ。
SHOW(STATUS,LOCAL)	ローカル STATUS 値のみ。
SHOW(STATUS)	ローカル STATUS 値とグローバル STATUS 値の両方。
SHOW(ALL,GLOBAL)	グローバルに維持されている出力フィールドのみ (RM によって維持されているデータなど)。 SHOW(GLOBAL) は、これと同じ出力を提供します。
SHOW(ALL,LOCAL)	IMS システムにローカルの出力フィールドのみ。 SHOW(LOCAL) は、これと同じ出力を提供します。

QUERY AREA 状況

以下の表は、SHOW(STATUS) を指定した場合に戻される可能性があるローカル・エリア状況条件およびグローバル・エリア状況条件をリストしています。

表 11. QUERY AREA の状況条件

Status	意味
EEQE	エリアには EEQE があります。
IC	エリア・イメージ・コピーがアクティブです。

表 11. QUERY AREA の状況条件 (続き)

Status	意味
MAS	エリアは多重エリア構造上にあります。
NONE	エリアは RM リソース構造内にグローバル状況がありません。
NOTOPEN	エリアはオープンされていません。
OPEN	エリアはオープンされています。RM リソース構造内に維持されません。
PRELOAD	エリアはプリロードすべきものとして定義されています。
PREOPEN	エリアは事前オープンすべきものとして定義されています。
QUIESCED	コマンドで指定された DEDB エリアは、前の UPDATE DB START(QUIESCE) または UPDATE AREA START(QUIESCE) コマンドによって現在静止された状態です。
QUIESCING	コマンドで指定された DEDB エリアは、前の UPDATE DB START(QUIESCE) または UPDATE AREA START(QUIESCE) コマンドによって現在静止されようとしています。
RECALL	エリアは再呼び出し中です。
RECOVERY	エリア・リカバリーが進行中です。
RECOVNEEDED	エリアはリカバリーを必要としています。
SAS	エリアは単一エリア構造上にあります。
SHARED	エリアは共用されています。
STA	エリアはグローバルに開始されています。
STOACC	エリアはグローバルにアクセスが停止され、オフラインです。
STOPPED	エリアはローカルまたはグローバルに停止されています。
UTIL	エリアはユーティリティによりオープンされています。
VSO	エリアは VSO エリアです。

以下の表は、SHOW(STATUS) を指定した場合に、AREA に関連した ADS について戻される可能性がある ADS 状況条件をリストしています。

表 12. QUERY AREA の場合の ADS 状況条件

Status	意味
COPY-PHASE	この ADS で CREATE ユーティリティがアクティブであり、現在 COPY フェーズにあります。この ADS に対するアクションを処理できるようにするには、まず CREATE ユーティリティが完了している必要があります。
FORMAT-PHASE	この ADS で CREATE ユーティリティがアクティブであり、現在 FORMAT フェーズにあります。この ADS に対するアクションを処理できるようにするには、まず CREATE ユーティリティが完了している必要があります。
LONGBUSY	エリアは、長時間使用中状態または長時間使用中リカバリー・モードになっています。
PREOPEN-FAIL	この ADS について XRF PREOPEN が失敗しました。
SEVERE-ERROR	ADS に重大な入出力エラー (第 2 CI への書き込みエラー) がありました。

表 12. QUERY AREA の場合の ADS 状況条件 (続き)

Status	意味
UNAVAIL	入出力エラーのため、ADS には使用不可のマークが付けられています。

同等の IMS タイプ 1 コマンド

以下の表は、各種の QUERY AREA コマンドと、類似の機能を実行するタイプ 1 IMS コマンドを示しています。

表 13. QUERY AREA コマンドと同等のタイプ 1 コマンド

QUERY AREA コマンド	類似の IMS タイプ 1 コマンド
QUERY AREA	/DIS AREA area1...arean ALL, /DIS STATUS AREA

出力フィールド

以下の表は、QUERY AREA の出力フィールドを示しています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。ゼロ以外の完了コードの場合に表示される出力フィールドには *error* が表示されます。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。

有効範囲

出力フィールドの有効範囲を識別します。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 14. QUERY AREA コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
ADS	ADSName	N/A	N/A	ADS 名。AREA に関連したエリア・データ・セット名 (1 つ以上)。
AREA	AreaName	N/A	N/A	エリア名。エリア名は常に戻されます。
CC	CC	N/A	N/A	完了コード。完了コードは、IMS が、指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示します。完了コードは常に戻されます。QUERY AREA の戻りコード、理由コード、および完了コードの表を参照してください。

表 14. QUERY AREA コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
CCTXT	CCText	<i>error</i>	LCL	完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。完了コード・テキストは、最大 32 バイトの長さです。
DB	DBName	N/A	N/A	DEDB 名。エリアに関連した DEDB 名。
LDAT	Dir-T	CI	LCL	直接アドレス可能スペースの独立オーバーフロー部分に関する合計制御インターバル数のローカル値。この値は、エリアがオープンされている場合のみ表示されます。
LDAU	Dir-U	CI	LCL	直接アドレス可能スペースの独立オーバーフロー部分に関する未使用制御インターバル数のローカル値。この値が表示されるのは、エリアがオープンされており、かつ、IMS 制御領域始動プロシージャで IOVFI=1 が指定されているときに IOVF カウント ITASK が使用不可にされていない場合に限られます。 QUERY AREA コマンドで OPTION(IOVF) が入力された場合は、この値はコマンド処理中にリフレッシュされます。OPTION(IOVF) が指定されていない場合は、この値は、最後の IOVF カウント ITASK から更新された値を示します。
LEQ	EQCnt	STATUS	LCL	直接アドレス可能スペースの独立オーバーフロー部分に関する合計制御インターバル数のローカル値。この値は、エリアがオープンされている場合のみ表示されます。
LPBA	PBuf-A	UTILITY	LCL	専用プール内の使用可能な専用バッファ数。
LPBT	PBuf-T	UTILITY	LCL	専用プール内の専用バッファの総数。
LSDT	SDep-T	CI	LCL	順次従属スペースについて定義されている合計制御インターバル数のローカル値。この値は、エリアがオープンされており、かつ SDEP が定義されている場合のみ表示されます。
LSDU	SDep-U	CI	LCL	順次従属スペースについて定義されている未使用の制御インターバル数のローカル値。この値は、エリアがオープンされており、SDEP が定義されており、かつ未使用の SDEP が使用可能である場合のみ表示されます。
LSTT	LclStat	STATUS	LCL	ローカル・エリア状況。適用されるすべてのエリア状況条件が戻されます。エリア状況は、46 ページの表 11に記載されている状況条件のいずれか (複数可) です。
LUOW	UOW	UTILITY	LCL	HSREORG および HSSP に関する現行のユーティリティー UOW、あるいはブランク。
LUTIL	UtilName	UTILITY	LCL	エリアを OPEN したユーティリティー名。

表 14. QUERY AREA コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
MBR	MbrName	N/A	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。出力を作成した IMS の IMS ID。IMS ID は常に戻されます。
STT	Status	STATUS, GLOBAL	GBL	グローバル・エリア状況。状況には以下のものがあります。 STA エリアのグローバル状況は「開始済み」です。 STO エリアのグローバル状況は「停止」です。 STOACC エリアのグローバル状況は「アクセスの停止」です。

戻りコード、理由コード、および完了コード

IMS 戻りコードと理由コードは、QUERY AREA コマンドによって OM に戻されます。QUERY AREA コマンドの結果として戻される OM 戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 15. QUERY AREA コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY AREA コマンドは正常に完了しました。
X'00000004'	X'00001010'	戻されるリソースは検出されませんでした。指定されたリソース名が無効であるか、指定されたフィルターに一致するリソースがありませんでした。
X'00000008'	X'0000200C'	STATUS() キーワードに指定されている状況のいずれかに該当するリソースがないため、QUERY AREA コマンドは処理されません。
X'00000008'	X'00002014'	エリア名パラメーターの中で無効文字が検出されたため、QUERY AREA コマンドは処理されません。
X'00000008'	X'00002040'	QUERY AREA コマンドで、複数のフィルター値またはキーワード値が指定されています。複数のキーワード値、または無効な組み合わせのフィルターが指定されていました。入力コマンドを検査し、正しい組み合わせを再入力してください。

表 15. QUERY AREA コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'0000000C'	X'00003000'	QUERY AREA コマンドは、少なくとも 1 つのリソース名については正常に実行されました。1 つ以上のリソース名について、QUERY AREA コマンドは正常に実行されていません。完了コードに、エラーの理由とリソース名が示されています。QUERY AREA コマンドにより戻される可能性がある完了コードは、表 16 にリストされています。
X'0000000C'	X'00003004'	指定されたリソース名のすべてについて、QUERY AREA コマンドが成功しませんでした。完了コードに、エラーの理由とリソース名が示されています。QUERY AREA コマンドにより戻される可能性がある完了コードは、表 16 にリストされています。
X'00000010'	X'00004024'	QUERY AREA コマンドは、非高速機能システムでは処理できません。
X'00000010'	X'00004025'	QUERY AREA コマンドは、高速機能エリアが定義されていないためにリジェクトされました。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できなかったため、QUERY AREA コマンド処理は終了しました。
X'00000014'	X'00005FFF'	内部エラーが原因で、QUERY AREA コマンド処理は終了しました。

以下の表には、完了コードの説明が記載されています。QUERY AREA コマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 16. QUERY AREA コマンドの完了コード

完了コード	意味
0	リソースに対する QUERY AREA コマンドは正常に完了しました。
10	リソースが見つかりません。リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。

例

以下に示すのは QUERY AREA コマンドの例です。

QUERY AREA コマンドの例 1

この例では、このコマンドは、IMSplex 内のすべての IMS システムから、エリア DB21AR0 に関する CI および STATUS 情報を戻します。使用可能な ADS 情報があれば、その情報もそれぞれの IMS ごとに戻されます。

TSO SPOC 入力:

```
QRY AREA NAME(DB21AR10) SHOW(STATUS,CI)
```

TSO SPOC 出力:

AreaName	ADSName	MbrName	DBName	CC	SDep-T	SDep-U	Dir-T	Dir-U	EQCnt	LclStat
DB21AR0		IMS2	DEDBJN21	0						PREOPEN,NOTOPEN
DB21AR0		SYS3	DEDBJN21	0	1303	1302	74	74		PREOPEN,OPEN,SHARED
DB21AR0	DB21AR01	SYS3		0					10	
DB21AR0	DB21AR02	SYS3		0					10	

OM API 入力:

CMD(QRY AREA NAME(DB21AR10) SHOW(STATUS,CI))

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.2.0</omvsn>
<xmlvsn>1 </xmlvsn>
<statime>2003.132 16:10:52.861123</statime>
<stotime>2003.132 16:10:52.862301</stotime>
<staseq>B968A1B61BEC302F</staseq>
<stoseq>B968A1B61C35D38E</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10091052</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS2 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>AREA </kwd>
<input>QRY AREA NAME(DB21AR0) SHOW(CI,STATUS) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="AREA" l1b1="AreaName" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="ADS" l1b1="ADSName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="DB" l1b1="DBName" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="LSDT" l1b1="SDep-T" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="7" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="LSDU" l1b1="SDep-U" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="7" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="LDAT" l1b1="Dir-T" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="7" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="LDAU" l1b1="Dir-U" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="7" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="LEQ" l1b1="EQCnt" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="LSTT" l1b1="LclStat" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>AREA(DB21AR0 ) MBR(IMS2 ) DB(DEDBJN21) CC( 0) LSDT( ) LSDU( )
  LDAT( ) LDAU( ) LSTT(PREOPEN,NOTOPEN) </rsp>
<rsp>AREA(DB21AR0 ) MBR(SYS3 ) DB(DEDBJN21) CC( 0) LSDT( 1303)
  LSDU( 1302) LDAT( 74) LDAU( 74) LSTT(PREOPEN,OPEN,SHARED)
</rsp>
<rsp>AREA(DB21AR0 ) ADS(DB21AR01) MBR(SYS3 ) DB( ) CC( 0) LEQ( 10) </rsp>
<rsp>AREA(DB21AR0 ) ADS(DB21AR02) MBR(SYS3 ) DB( ) CC( 0) LEQ( 10) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```


QUERY AREA コマンドの例 2

この例では、このコマンドは、ワイルドカード名に一致し、かつ SHARED の状況をもつすべてのエリアを戻します。状況も戻されます。さらに、エリアに関する ADS 情報が使用可能であれば、その情報も戻されます。IMS2 については、指定された状況に該当するエリアがないため、コマンド応答行は戻されません。IMS2 からは、戻りコードと理由コードが戻されます。

TSO SPOC 入力:

```
QRY AREA NAME(DB21AR1*) STATUS(SHARED)
```

TSO SPOC 出力:

```
Log for . . . : QRY AREA NAME(DB21AR1*) STATUS(SHARED)
IMSpIex . . . . . : PLEX1
Routing . . . . . :
Start time . . . . : 2003.132 09:13:37.93
Stop time . . . . . : 2003.132 09:13:37.94
Return code . . . . : 0200000C
Reason code . . . . : 00003000
Command master. . . : IMS2
```

Member	Return Code	Reason Code	AreaName	ADSName	MbrName	DBName	CC	EQCnt	LclStat
IMS2	00000008	0000200C							
DB21AR10			DB21AR10	DB21AR10	SYS3	DEDBJN21	0	10	PREOPEN,OPEN,SHARED
DB21AR11			DB21AR11	DB21AR11	SYS3	DEDBJN21	0	10	PREOPEN,OPEN,SHARED

OM API 入力:

```
CMD(QRY AREA NAME(DB21AR1*) STATUS(SHARED))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.2.0</omvsn>
<xmlvsn>1 </xmlvsn>
<statime>2003.132 16:13:37.940282</statime>
<stotime>2003.132 16:13:37.940959</stotime>
<staseq>B968A2538A73A707</staseq>
<stoseq>B968A2538A9DF027</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10091337</rqsttkn1>
<rc>0200000C</rc>
<rsn>00003000</rsn>
</ctl>
<cmderr>
<mbr name="IMS2 ">
<typ>IMS </typ>
<styp>DBDC </styp>
<rc>00000008</rc>
<rsn>0000200C</rsn>
<rsntext>No resources found</rsntext>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>IMS2 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>AREA </kwd>
```

```

<input>QRY AREA NAME(DB21AR1*) STATUS(SHARED) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="AREA" l1b1="AreaName" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="ADS" l1b1="ADSName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="DB" l1b1="DBName" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="LEQ" l1b1="EQCnt" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="LSTT" l1b1="LclStat" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>AREA(DB21AR10) MBR(SYS3 ) DB(DEDBJN21) CC( 0)
  LSTT(PREOPEN,OPEN,SHARED) </rsp>
<rsp>AREA(DB21AR10) ADS(DB21AR10) MBR(SYS3 ) DB( ) CC( 0) LEQ( 10) </rsp>
<rsp>AREA(DB21AR11) MBR(SYS3 ) DB(DEDBJN21) CC( 0)
  LSTT(PREOPEN,OPEN,SHARED) </rsp>
<rsp>AREA(DB21AR11) ADS(DB21AR11) MBR(SYS3 ) DB( ) CC( 0) LEQ( 10) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

QUERY AREA コマンドの例 3

この例では、QUERY AREA SHOW(STATUS) コマンドは、エリアのグローバル状況も戻します。グローバル状況は、マスター IMS によって、別個のグローバル応答行に戻されます。

TSO SPOC 入力:

```
QRY AREA NAME(DB21AR0,DB21AR1) SHOW(STATUS)
```

TSO SPOC 出力:

AreaName	ADSName	MbrName	DBName	CC	Status	LclStat
DB21AR0		IMS1	DEDBJN21	0	STOPPED	
DB21AR0		IMS1	DEDBJN21	0		STOPPED,NOTOPEN
DB21AR0		IMS2	DEDBJN21	0		STOPPED,NOTOPEN
DB21AR1		IMS1	DEDBJN21	0	STA	
DB21AR1		IMS1	DEDBJN21	0	OPEN	
DB21AR1	DB21AR1	IMS1		0		
DB21AR1		IMS2	DEDBJN21	0	OPEN	
DB21AR1	DB21AR1	IMS2		0		

QUERY AREA コマンドの例 4

この例では、QUERY AREA SHOW(STATUS) コマンドは、エリアのグローバル状況も戻します。グローバル状況は、マスター IMS によって、別個のグローバル応答行に戻されます。

TSO SPOC 入力:

```
QRY AREA NAME(DB21AR0,DB21AR1) SHOW(STATUS)
```

TSO SPOC 出力:

AreaName	ADSName	MbrName	DBName	CC	Status	Lc1Stat
DB21AR0		IMS1	DEDBJN21	0	STOPPED	
DB21AR0		IMS1	DEDBJN21	0		STOPPED,NOTOPEN
DB21AR0		IMS2	DEDBJN21	0		STOPPED,NOTOPEN
DB21AR1		IMS1	DEDBJN21	0	STA	
DB21AR1		IMS1	DEDBJN21	0		OPEN
DB21AR1	DB21AR1	IMS1		0		
DB21AR1		IMS2	DEDBJN21	0		OPEN
DB21AR1	DB21AR1	IMS2		0		

QUERY AREA コマンドの例 5

以下は、状況が QUIESCED であるデータベースの照会の例です。

TSO SPOC 入力:

```
QRY AREA NAME(*) SHOW(STATUS) STATUS(QUIESCED)
```

TSO SPOC 出力:

AreaName	MbrName	DBName	CC	Lc1Stat
AXZY01	IM01	FPDBXYZ	0	OPEN,QUIESCED
AXZY01	IM02	FPDBXYZ	0	OPEN,QUIESCED
AXZY01	IM03	FPDBXYZ	0	OPEN,QUIESCED

QUERY AREA コマンドの例 6

TSO SPOC 入力:

```
QUERY AREA NAME(DB21AR1*) SHOW(ACCTYPE)
```

TSO SPOC 出力:

AreaName	ADSName	MbrName	DBName	CC	LAcc
DB21AR1		IMS1	DEDBJN21	0	READ
DB21AR1	DB21AR1	IMS1		0	
DB21AR1		IMS2	DEDBJN21	0	READ
DB21AR1	DB21AR1	IMS2		0	
DB21AR10		IMS1	DEDBJN21	0	
DB21AR10		IMS2	DEDBJN21	0	
DB21AR11		IMS1	DEDBJN21	0	
DB21AR11		IMS2	DEDBJN21	0	

説明: DEDB DEDBJN21 のデータベース・アクセスは UPD (更新) です。エリア DB21AR1 のエリア・アクセスは READ です。エリア DB21AR10 と DB21AR11 のエリア・アクセスは UPD で、これは DEDB DEDBJN21 から暗黙的に継承しています。エリア DB21AR10 と DB21AR11 のエリア・アクセスは表示されていません。これらのエリア・アクセスは UPDATE AREA START(ACCESS) SET(ACCTYPE()) コマンドによって明示的に変更されていないからです。

QUERY AREA コマンドの例 7

TSO SPOC 入力:


```
QUERY AREA NAME(DB21AR2) SHOW(ACCTYPE)
```

TSO SPOC 出力:

AreaName	ADSName	MbrName	DBName	CC
DB21AR2		IMS1	DEDBJN21	0
DB21AR2	DB21AR2	IMS1		0
DB21AR2		IMS2	DEDBJN21	0
DB21AR2	DB21AR2	IMS2		0


説明: DEDB DEDBJN21 のデータベース・アクセスは UPD (更新) です。エリア DB21AR2 のエリア・アクセスは UPD で、これは DEDB DEDBJN21 から暗黙的に継承しています。エリア DB21AR2 のエリア・アクセスは表示されていません。そのエリア・アクセスは UPDATE AREA START(ACCESS) SET(ACCTYPE()) コマンドによって明示的に変更されていないからです。エリア DB21AR2 は、NAME() キーワード内の唯一のエリアであり、そのエリア・アクセスは UPDATE AREA START(ACCESS) SET(ACCTYPE()) コマンドで変更されていないため、出力フィールド列 『LAcc』 は表示されません。

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 /DISPLAY AREA コマンド (コマンド)

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

QUERY DB コマンド

QUERY DB コマンド (タイプ 2 コマンド) は、データベースに関する情報を表示するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 57 ページの『構文』
- 57 ページの『キーワード』
- 66 ページの『使用上の注意』
- 67 ページの『同等の IMS タイプ 1 コマンド』
- 67 ページの『出力フィールド』
- 79 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 82 ページの『例』

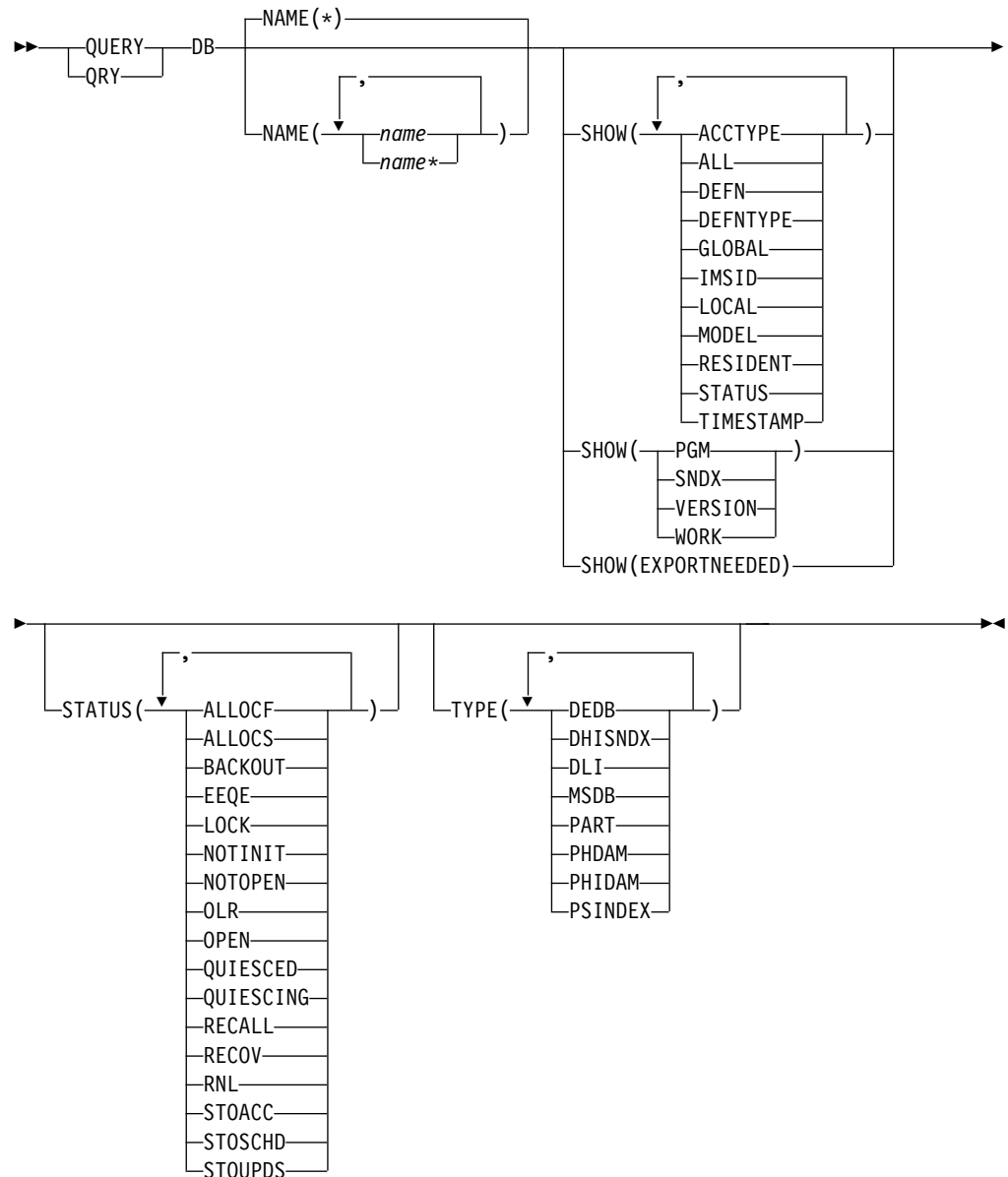
環境

以下の表には、QUERY DB コマンドおよびキーワードを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 17. QUERY DB コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUERY DB	X	X	
NAME	X	X	
SHOW	X	X	
STATUS	X	X	
TYPE	X	X	

構文



キーワード

以下のキーワードは、`QUERY DB` コマンドに有効です。

NAME()

1 文字から 8 文字のデータベース名 (DBD 名) を指定します。名前にはワイルドカードを指定することができます。名前は反復可能なパラメーターです。デフォルトは `NAME(*)` で、これはすべてのデータベース・リソースを戻します。

`STATUS` フィルターを指定しなかった場合は、`NAME` パラメーターに一致するすべてのデータベース名が戻されます。

総称またはワイルドカード・パラメーターに一致するデータベース名が処理されます。処理されたすべてのデータベース名について、応答行が戻されます。

指定されるデータベース名は、HALDB マスターまたは HALDB 区画が可能です。データベース名が HALDB マスターである場合は、HALDB マスターとそのすべての区画について応答行が戻されます。データベース名が HALDB 区画である場合は、HALDB マスターがオフラインにされていなければ、HALDB マスターと、指定した区画名について、応答行が戻されます。

指定されたデータベース名が DEDB 名である場合は、その DEDB 名とすべての DEDB エリアについて、応答行が戻されます。

SHOW(DEFN) が指定されている場合、DEDB エリア情報は戻されません。

SHOW()

戻されるデータベース出力フィールドを指定します。常に、データベース名とタイプが、データベースに関する出力を作成した IMS の名前および完了コードと共に戻されます。SHOW キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあります。

ACCTYPE

データベースまたはエリアのアクセス・タイプを返します。

SHOW(ACCTYPE) が指定され、IMS が IMSRSC リポジトリを使用しておらず、グローバル DB 状況が維持されている場合、リソース構造からのグローバル・アクセス・タイプが返されます。

SHOW(ACCTYPE) が指定され、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用しており、グローバル状況も有効になっている場合、リソース構造からのグローバル・アクセス・タイプは返されません。リポジトリからのアクセス・タイプが返されます。

SHOW(DEFN)、SHOW(DEFN,ACCTYPE)、SHOW(DEFN,GLOBAL)、または SHOW(DEFN,ACCTYPE,GLOBAL) が指定されている場合、リポジトリからのアクセス・タイプが返されます。

ALL

データベース自体に関するすべての情報を返します。データベースに関連したリソースについての情報を戻すために、他の SHOW キーワードを指定することもできます。

コマンド・マスター IMS は、そのデータベースがコマンド・マスターで定義されていない場合でも、RM リソース構造からのグローバル情報を、別個の行で返します。

制約事項: SHOW(EXPORTNEEDED) を指定した場合に返される ExportNeeded 列は、SHOW(ALL) では戻されません。

DEFN

リソース定義を戻すように指定します。

戻されるデータベース属性には、ACCTYPE、RESIDENT、リポジトリ内の作成および更新のタイム・スタンプ、および IMS ランタイムの作成、更新、インポート、およびアクセスのタイム・スタンプがあります。

SHOW(DEFN) でその他の SHOW フィルターが指定されない場合、または IMSID フィルターが指定されている場合、リポジトリでグローバルに

定義された定義属性および IMS システム内でローカルに定義された定義属性を含む、すべての定義属性が戻されます。IMS システムのランタイム・リソース定義は、コマンドを受信する各 IMS によって戻されます。リポジトリ内の保管済みリソース定義は、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合、コマンド・マスター IMS によって戻されます。

コマンド・マスター IMS は、リポジトリから取得した汎用保管済みリソース定義ごとに応答行を戻します。それぞれの応答行には、汎用リソース定義の属性が表示されます。SHOW(DEFN) を IMSID フィルターなしで指定し、すべての IMS システムに定義されている属性値が同一の場合、汎用定義の応答行のみが戻されます。保管済みリソース定義が定義されている IMS システムの IMS ID は戻されません。IMS システムの保管済みリソース定義に、汎用保管済みリソース定義と異なる属性値が 1 つ以上含まれている場合は、属性値が異なる IMS ごとに追加の応答行が戻されます。

SHOW(DEFN,LOCAL) が指定されている場合、コマンドを受信した各 IMS により、IMS システムのランタイム・リソース定義が戻されます。

SHOW(DEFN,GLOBAL) が指定されている場合、コマンド・マスター IMS により、リポジトリの保管済みリソース定義が戻されます。

SHOW(DEFN,GLOBAL) は、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合のみ有効です。

SHOW(DEFN) にその他のパラメーターが指定されている場合、要求された定義属性のみが戻されます。例えば SHOW(DEFN,TIMESTAMP) が指定されている場合、タイム・スタンプのみが戻されます。

制約事項:

- SHOW(DEFN) を DEFNTYPE、MODEL、STATUS、WORK、または PGM と共に指定することはできません。
- リポジトリからデータベース情報を照会する場合、SHOW(DEFN) フィルターを TYPE フィルターまたは STATUS フィルターと一緒に使用することはサポートされません。TYPE および STATUS のランタイム・フィルターは、SHOW(DEFN)、SHOW(DEFN,GLOBAL)、SHOW(DEFN,LOCAL)、SHOW(DEFN,IMSID)、SHOW(DEFN,IMSID,GLOBAL)、または SHOW(DEFN,IMSID,LOCAL) との併用は無効です。
- QUERY DB SHOW(ALL) コマンドで戻される AreaName 列、LclStat 列、LModelName 列、LModelType 列、および LDefnType 列は、SHOW(DEFN) では戻されません。
- SHOW(DEFN) を指定した場合に戻される Repo 列および IMSid 列は、SHOW(ALL) では戻されません。

SHOW(DEFN,IMSID) を指定すると、IMS の保管済みリソース定義が汎用リソース定義と同一であるかどうかにかかわらず、汎用保管済みリソース定義に対して応答行が返され、リポジトリにリソースが定義されている IMS ごとに追加の応答行が戻されます。SHOW(DEFN,IMSID) の場合は、リソース定義に加えて、定義されたリソースを持つ IMS システムのリストも取得されるため、パフォーマンス上のオーバーヘッドが多少生じます。

DEFNTYPE

定義タイプを戻します。これは、リソースが定義された方法です。

EXPORTNEEDED

NAME パラメーターに一致し、作成されたか最後に更新されて以降
IMSRSC リポジトリにエクスポートされたことがないデータベース・リ
ソースだけを QUERY コマンドで戻すよう指定します。

NAME キーワードが省略されたか NAME(*) が指定された場合、リポジ
トリにエクスポートする必要があるリソースの名前だけが戻されます。

NAME キーワードで特定の名前が指定されたか NAME(*) 以外の総称名が
指定された場合、コマンドで指定されたリソース名ごとに 1 行ずつ、応答
行が戻されます。指定されたリソースをリポジトリにエクスポートする必
要がない場合は、ExportNeeded 列に N が戻されます。

SHOW(EXPORTNEEDED) は、他のいかなる SHOW パラメーターや他の
キーワードとも一緒に指定することはできず、IMS で IMSRSC リポジトリ
が使用可能になっている場合にのみ有効です。

QUERY DB SHOW(EXPORTNEEDED) コマンドは、XRF 代替システムで
は無効です。

ヒント: IMSRSC リポジトリにエクスポートされたことがないリソースお
よび記述子の場合、EXPORT DEFN TARGET(REPO) OPTION
(CHANGESONLY) コマンドを発行して、リソース定義および記述子定義を
リポジトリに書き込み、次の IMS のコールド・スタートで使用できる
ようにすることができます。

GLOBAL

ローカル値とグローバル値の両方を持つ出力フィールドの場合、このオプシ
ョンはグローバル値のみを戻します。特定の出力フィールドを要求するた
めに別の SHOW キーワードと一緒に使用された場合、このオプションは指定
された出力フィールドのグローバル値のみを戻すことを要求します。IMS
は RM からグローバル状況情報を取り出します。グローバル出力は、コマ
ンド・マスター IMS によってのみ戻されます。

コマンド・マスター IMS は、そのデータベースがコマンド・マスターで定
義されていない場合でも、RM リソース構造からのグローバル状況情報を別
個の行で戻します。

データベース名が HALDB マスターの場合、グローバル情報はマスター・
データベースについてのみ戻され、マスターに関連付けられた HALDB 区
画についての情報は戻されません。指定されたデータベース名が DEDB の
場合、グローバル情報は DEDB についてのみ戻され、DEDB に関連した
DEDB エリアについての情報は戻されません。

SHOW(GLOBAL) が指定され、SHOW(DEFN) が指定されていない場合、
リポジトリ情報は戻されません。IMS で GSTSDB=Y が設定されている
場合、SHOW(GLOBAL) は RM リソース構造からグローバル状況情報を
戻します。

SHOW(GLOBAL,DEFN) が指定される場合、コマンド・マスター IMS により、リポジトリのグローバル・リソース定義が戻されます。
SHOW(GLOBAL,DEFN) は、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合のみ有効です。

IMSID

指定されたリソース名がリソース・リストに含まれている IMS システムの IMSID を戻します。

SHOW(IMSID) は、コマンド・マスター IMS によってのみ処理され、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合にのみ有効です。

SHOW(IMSID) が DEFN フィルターとともに指定されている場合、保管済みリソース定義に加えて、定義済みのリソースが存在する各 IMS に、別個の行が戻されます。

SHOW(IMSID) が DEFN フィルターなしで指定されている場合、リソース名とともに定義済みのリソースが存在する各 IMS に別個の行が戻されます。リソース定義は戻されません。

SHOW(IMSID) は、DEFN および GLOBAL 以外の SHOW フィルターとともに指定することはできません。SHOW(IMSID,GLOBAL) が指定されている場合、GLOBAL は無視されます。つまり、SHOW(IMSID,GLOBAL) は SHOW(IMSID) として扱われます。SHOW(DEFN,IMSID,LOCAL) は SHOW(DEFN,LOCAL) として扱われます。

LOCAL

ローカル値とグローバル値の両方を持つ出力フィールドの場合、このオプションはローカル値のみを戻します。特定の出力フィールドを要求するために別の SHOW キーワードと一緒に使用された場合、このオプションは指定された出力フィールドのローカル値のみを戻すことを要求します。ローカル出力は、コマンドを処理する各 IMS によって戻されます。

SHOW(DEFN,LOCAL) は、コマンドを処理する IMS システムからローカルの定義属性のみを戻します。

MODEL

このリソースを作成するために使用されたモデル名とモデル・タイプ。
MODBLKS データ・セット内に生成されたデータベースの場合、モデル名とモデル・タイプはブランクです。LIKE キーワードなしで指定された CREATE コマンドは、デフォルト記述子をモデルとして使用してリソースを作成します。デフォルト記述子は、IMS 記述子 DFSDSDB1 またはユーザー定義のいずれかです。LIKE キーワードが指定された CREATE コマンドは、モデルを使用してリソースを作成します。リソースは、すべてモデルと同じ属性を使用して作成されます。属性は、モデル属性をオーバーライドする CREATE コマンドにより明示的に設定されます。モデル・タイプは、記述子 (DESC) またはリソース (RSC) のいずれかです。モデル名およびモデル・タイプは参照用のみです。属性が CREATE または UPDATE コマンドの値によってオーバーライドされた場合、あるいはモデルが後で更新された場合、リソースの属性はモデルと一致しないことがあります。モデル名とモデル・タイプを使用すると、同じモデルを使って作成されたリソースを識別できます。リソースのモデル名およびモデル・タイプはエクスポートおよび

びインポートされます。IMPORT コマンドは、リソースを作成する際にモデル名とモデル・タイプを使用しません。

PGM

指定されたデータベースを参照するプログラムの名前。

QRY DB SHOW(PGM) コマンドは、エリア名 (DB が DEDB の場合) または区画名 (DB が HALDB マスターの場合) を表示しません。

QRY DB SHOW(PGM) コマンドでは、動的 (DOPT) PSB および DOPT PSB がインテントを持つデータベース名は表示されません。

注: このフィルターは他の SHOW フィルターと共に指定することはできません。SHOW(PGM) を単独で指定する必要があります。

RESIDENT

常駐オプションのローカル・ランタイム値を戻します。高速機能 DEDB の場合、戻される値は常に RESIDENT(Y) です。ランタイム値と異なる場合には、常駐オプション定義も表示されます。RESIDENT(Y) オプションは、次の再始動時に有効になります。ただし、この IMS で実行中の緊急時再始動の開始点であるチェックポイントの後でデータベースが RESIDENT(Y) として作成または更新された場合を除きます。

SNDX

DEDB データベースに関連する高速機能副次索引データベースの名前を戻します。

制約事項: このフィルターは、他の SHOW フィルターと一緒に指定することはできません。SHOW(SNDX) を単独で指定する必要があります。

STATUS

ローカルおよびグローバルのデータベース状況を戻します。

グローバル状況が維持されている場合、コマンド・マスター IMS は、RM リソース構造からのグローバル情報を、別個の行で戻します。そのデータベースがコマンド・マスターで定義されていない場合でも、グローバル状況情報は戻されます。戻される可能性のあるデータベース状況についての説明は、67 ページの『出力フィールド』の下の「出力フィールド」表の中の STATUS キーワードを参照してください。

TIMESTAMP

作成時間 (TIMECREATE)、最終更新時間 (TIMEUPDATE)、最終アクセス時間 (TIMEACCESS)、およびインポート時間 (TIMEIMPORT) のタイムスタンプが戻されます。時刻は現地時間で、YYYY.JJJ HH:MM:SS.TH の形式で戻されます。ここで、

- YYYY は年です。
- JJJ はユリウス日 (001 から 365) です。
- HH は時 (01 から 24) です。
- MM は分 (00 から 59) です。
- SS は秒 (00 から 59) です。
- TH は 10 分の 1 秒および 100 分の 1 秒 (00 から 99) です。

VERSION

現在、オンライン IMS システム上でアクティブなデータベースのバージョン番号を返します。データベースのアクティブ・バージョン番号は、オンライン IMS システムによってロードされるデータベース制御ブロックに保管されます。制御ブロックは、オンライン IMS システムに対して実際のデータベースの物理構造を定義します。

バージョン番号の可能な範囲は 0 から 2147483647 です。

このフィルターは他の SHOW フィルターと共に指定することはできません。SHOW(VERSION) を単独で指定する必要があります。

SHOW(VERSION) は、以下のデータベース・アクセス・タイプに対してのみ有効です。

- HDAM
- HIDAM
- PHDAM
- PHIDAM
- DEDB

サポートされないデータベース・アクセス・タイプに対して SHOW(VERSION) が指定された場合、出力の CC 列に完了コード BD が返されます。この完了コードは、データベースのアクセス・タイプに対する照会が無効であることを示します。

HALDB マスターに対して SHOW(VERSION) が指定された場合、出力には、HALDB マスター名およびその各区画に関する応答行が含まれます。HALDB の各区画は、HALDB マスターからバージョン番号を継承するため、各応答行には同じバージョン番号が表示されます。

HALDB 区画に対して SHOW(VERSION) が指定された場合、出力にはその区画に関する応答行のみがリストされます。表示されるバージョン番号は、HALDB マスターのバージョン番号です。区画が HALDB マスターから切り離されると (データベースで /DBR コマンドが実行された場合などに発生する可能性があります)、出力の CC 列に完了コード 10 が返され、リソースが見つからなかったことを示します。

DEDB に対して SHOW(VERSION) が指定された場合、出力には、その DEDB に関する応答行のみがリストされます。出力応答にエリア情報はリストされません。

WORK

NAME パラメーターで指定されたデータベースおよびそのデータベースに関連するリソースに対する作業が進行中です。DELETE、IMPORT、または UPDATE コマンドの前に QRY DB SHOW(WORK) コマンドを発行することで、指定されたデータベースおよびそれに関連したリソースに対して進行中の作業があるかどうかを確認できます。進行中の作業があると、後続の DELETE、IMPORT、または UPDATE コマンドが失敗する原因になることがあります。QRY DB SHOW(WORK) コマンドは、NAME パラメーターで指定されたデータベースに対して進行中の作業の状況を返します。

SHOW(WORK) で NAME(*) を指定すると、処理に長時間かかることがあります。

HALDB マスター・データベースに対する QRY DB SHOW(WORK) コマンドを実行すると、マスターに進行中の作業がある場合、マスター名が表示されます。HALDB 区画名は、区画に進行中の作業がある場合にのみ表示されます。

注:

1. このフィルターは他の SHOW フィルターと共に指定することはできません。SHOW(WORK) を単独で指定する必要があります。
2. QRY DB SHOW(WORK) コマンドは、XRF 代替に対しては無効です。

STATUS()

NAME パラメーターに一致し、指定されたデータベース状況の少なくとも 1 つに一致するデータベースを選択して表示します。これを選択すると、データベース状況による追加のフィルタリングが可能になります。

STATUS フィルターを指定した場合に戻される出力には、SHOW(STATUS) が指定されていなくても、データベース名が表示される原因となったデータベース状況が含まれます。

ALLOCF

割り振りに失敗したデータベースに関する情報を戻すように STATUS() フィルターを設定します。

ALLOCS

正常に割り振られたデータベースに関する情報を戻すように STATUS() フィルターを設定します。

BACKOUT

データベースの使用を妨げる不完全なバックアウトが存在する、データベースに関する情報を戻すように STATUS() フィルターを設定します。

EEQE

1 つ以上の拡張エラー・キュー・エレメントが存在するデータベースに関する情報を戻すように STATUS() フィルターを設定します。

LOCK

ロックされているデータベースに関する情報を戻すように STATUS() フィルターを設定します。

NOTINIT

初期化されていないために使用できないデータベースに関する情報を戻すように STATUS() フィルターを設定します。

NOTOPEN

オープンされていないデータベースに関する情報を戻すように STATUS() フィルターを設定します。

OLR

QUERY DB STATUS(OLR) コマンドは、HALDB OLR が進行中のすべての「許可された」区画の状況を表示します。率に関する情報は戻されません。代わりに、QUERY OLREORG コマンドの出力に、率に関する情報が戻されます。区画を許可するには、/START DB *partname* OPEN または UPDATE DB NAME(*partname*) OPTION(OPEN) コマンドを発行するか、あるいはアプリケーションからその区画にアクセスします。RECON リスト

からの SSYS レコードを使用して、区画が許可されているかどうかと、どのサブシステムに対して許可されているかを判別できます。

OPEN

オープンされているデータベースに関する情報を戻すように STATUS() フィルターを設定します。

QUIESCED

前の UPDATE DB START(QUIESCE) コマンドによって現在静止された状態のデータベースに関する情報を戻すように STATUS() フィルターを設定します。

QUIESCING

前の UPDATE DB START(QUIESCE) コマンドによって静止されようとしているデータベースに関する情報を戻すように STATUS() フィルターを設定します。

RECALL

データベース再呼び出しが進行中のデータベースに関する情報を戻すように STATUS() フィルターを設定します。

RECOV

データベース・リカバリーが進行中のデータベースに関する情報を戻すように STATUS() フィルターを設定します。

RNL

ランダムマイザがロードされていないデータベースに関する情報を戻すように STATUS() フィルターを設定します。

STOACC

ローカルまたはグローバルにアクセスが停止され、オフラインになっているデータベースに関する情報を戻すように STATUS() フィルターを設定します。QUERY DB コマンドの SHOW(STATUS) キーワードは、DEDB について STOACC の状況を戻します。STOACC の状況は、前の /DBR DB または UPDATE DB STOP(ACCESS) コマンドのために、DEDB の以降のアクセスが停止されていることを示します。

STOSCHD

ローカルに停止されているデータベースに関する情報を戻すように STATUS() フィルターを設定します。

STOUPDS

ローカルに更新が停止されているデータベースに関する情報を戻すように STATUS() フィルターを設定します。

TYPE()

NAME パラメーターと特定の TYPE フィルターに一致するデータベースを選択して表示します。サポートされる TYPE フィルターは以下のとおりです。

- DEDB
- DHISNDX (高速機能の副次索引データベースを指します)
- DLI
- MSDB
- PART

- PHDAM
- PHIDAM
- PSINDEX

TYPE は STATUS フィルターと一緒に指定できます。TYPE フィルターと STATUS フィルターの両方を指定した場合、NAME パラメーターと指定された TYPE フィルターおよび STATUS フィルターに一致するデータベースごとに、応答行が戻されます。

使用上の注意

このコマンドは、OM API を介してのみ指定でき、DB/DC および DBCTL 環境でのみ処理できます。

QUERY DB コマンドは XRF 代替システムで有効です。

QUERY DB のコマンド構文は XML で定義されており、OM と通信する自動化プログラムに使用できます。

このコマンドを入力する場合、データベース名は既存の非 HALDB、HALDB マスター、または HALDB 区画のいずれかにすることができます。HALDB 区画に対するコマンドは、/START DB コマンドおよび UPDATE DB START(ACCESS) コマンドを除き、非 HALDB に対するコマンドとまったく同じ働きをします。HALDB 区画は、「それが前に許可されたが割り振られていない、OPEN キーワードが指定されている、または区画が EEQE をもっている」ということがない限り、コマンドの実行中に割り振られません。区画は最初の参照時に割り振られます。

HALDB データベースの場合、IMS は、区画の状況とマスター・データベースの状況を別々に追跡します。例えば、区画が停止されていて、マスター・データベースは開始されていることがあります。また、区画が開始されていて、マスター・データベースは停止されていることもあります。区画のオープン、許可、またはスケジューリングの前に、IMS は必ず区画とマスター・データベースの状況を検査します。区画とマスター・データベースのいずれかがアクションを妨げる状況になっている場合、IMS はそのアクションを実行しません。

各区画には、それ自体とマスター・データベースのアクセス制限が設定されます。例えば、マスター・データベースに読み取り (READ) のアクセス・インテントが設定されていて、いずれかの区画に更新 (UPD) のアクセス・インテントが設定されている場合、区画を更新することはできません。また、マスター・データベースに更新 (UPD) のアクセス・インテントが設定されていて、いずれかの区画に読み取り (READ) のアクセス・インテントが設定されている場合も、区画を更新できません。停止またはロックなど、アクセス制限に影響を与える他の状況にも同様の考慮事項が適用されます。

例外: HALDB マスター・データベースに更新アクセス権 (UPD) が設定されている場合、区画に、マスターのアクセス権を超える排他的 (EXCL) のアクセス・インテントを設定することができます。

区画名を指定して発行されるコマンドは、区画の状況にのみ影響を与えます。マスター・データベースに対して発行されるコマンドは、マスター・データベースの状況にのみ影響を与えます。そのため、マスター・データベースを開始しても、その

区画の状況は更新されません。区画が停止されている場合は、停止されたままになります。HALDB 区画は、明示的に停止される場合は、明示的に再び開始される必要があります。キーワード ALL が指定されたタイプ 1 コマンド、NAME(*) が指定されたタイプ 2 コマンド、および HALDB マスターに対するコマンドは、それぞれの HALDB 区画の STOPPED (QUERY DB では STOACC、STOSCHD、または STROUPDS として表示) および LOCKED 標識を変更しません。

コマンドのターゲットが HALDB マスターである場合、処理はすべての HALDB 区画を対象に行われます。例えば、IMS コマンドが HALDB マスターでの UPDATE DB STOP(ACCESS) である場合は、すべての HALDB 区画がクローズされ、割り振り解除され、無許可にされます。ただし、停止状況はマスター・データベースでのみ設定されます。QUERY DB コマンドが発行される場合、HALDB マスターのみが STOACC の状況を表示します (各 HALDB 区画は、それ自体が停止された場合を除き、STOACC を表示しません)。UPDATE DB STOP(ACCESS) コマンドが HALDB マスターに対して出された場合は、/DISPLAY DB コマンドの表示出力は HALDB マスターを示しますが (STOPPED のように)、区画の状況は表示しません。

リソース定義に関する情報を表示するには、SHOW(DEFN) を指定します。リソースが定義されている IMS システムを判別し、また各 IMS システムの属性またはリソース定義を知るには、SHOW(DEFN,IMSID) を指定します。リソースが定義されている IMS システムを判別するには、SHOW(IMSID) を指定します。

同等の IMS タイプ 1 コマンド

以下の表は、各種の QUERY DB コマンドと、類似の機能を実行するタイプ 1 IMS コマンドを示しています。

表 18. QUERY DB コマンドと同等のタイプ 1 コマンド

QUERY DB コマンド	類似の IMS タイプ 1 コマンド
QUERY DB	/DIS DB dbname1...dbnamen ALL, /DIS STATUS DB

出力フィールド

以下の表は、QUERY DB の出力フィールドを示しています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、error が表示されます。

有効範囲

出力フィールドの有効範囲を識別します。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 19. QUERY DB コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
ACC	Acc	ACCTYPE, GLOBAL	GBL	RM からのグローバル・アクセス・タイプ情報。以下のいずれかの値です。 BRWS データベースのグローバル・アクセス・タイプは BRWS です。 EXCL データベースのグローバル・アクセス・タイプは EXCL です。 READ データベースのグローバル・アクセス・タイプは READ です。 UPD データベースのグローバル・アクセス・タイプは UPD です。
AREA	AreaName	N/A	N/A	エリア名。エリア名は、出力内に DEDB エリアに関する応答行が 1 つ以上ある場合に戻されます。
CC	CC	N/A	N/A	完了コード。完了コードは、IMS が、指定されたりソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示します。完了コードは常に戻されます。QUERY DB の戻りコード、理由コード、および完了コードを参照してください。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	LCL	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
DB	DBName	DB	N/A	データベース名

表 19. QUERY DB コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
DFNT	LDefnType	DEFNTYPE	N/A	定義タイプ。以下のいずれかの値です。 CREATE CREATE コマンドにより定義されます。 DDLCRE DDL CREATE DATABASE コマンドにより定義されます。 IMPORT IMPORT コマンドにより定義されます。 IMS IMS により定義されます。 MODBLKS MODBLKS データ・セット内のシステム定義により定義されます。 PGMCREAT プログラム作成ユーザー出口により定義されます。エクスポート・オプションが設定された場合に、データベースをエクスポートすることができます。 UPDATE MODBLKS データ・セット内のシステム定義により定義されますが、UPDATE コマンドによって変更されて動的リソースに入れられます。
EXPN	ExportNeeded	EXPORTNEEDED	LCL	データベースが IMSRSC リポジトリにエクスポートされたかどうかを示します。値は Y または N のどちらかです。
IMSID	IMSid	IMSID	GBL	定義されたりソースを持つ IMSID をリポジトリから返します。

表 19. QUERY DB コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
LACC	LAcc	ACCTYPE	LCL	データベースまたはエリアへのアクセスのタイプ。これは、以下のいずれかの値です。

BRWS

データベースは、この IMS サブシステムでは読み取り専用処理に使用できます。このサブシステムでデータベースを使用できるのは、GO (PROCOPT=GO) という PCB 処理オプションをもつプログラムだけです。GO 処理オプションを使用してデータにアクセスするプログラムは、コミットされていないデータを見ることがあります。これは、共用する IMS サブシステムがデータベースを更新中の場合があるためです。データベースは読み取り専用処理用にオープンされます。

EXCL

指定されたデータベースは、この IMS サブシステムによって排他的に使用されます。この排他的アクセスは、データベースが DBRC に登録してあるときのみ保証されます。

READ

データベースは、この IMS サブシステムでは読み取り専用処理に使用できます。更新意図をもつプログラムは、スケジュールすることはできませんが、データベースを更新することはできません。アクセス・タイプ READ では、データは保全性付きの読み取りで読み取られ (ロックが行われます)、GO 処理オプションを使用するプログラムだけでなく、すべてのプログラムがデータにアクセスできます。これが、アクセス・タイプ BRWS とは異なる点です。データベースは読み取り専用処理用にオープンされます。

UPD

データベースは、IMS サブシステムで読み取り処理だけでなく更新にも使用できます。

表 19. QUERY DB コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
LRSNT	LRsdnt	ALL, RESIDENT	LCL	<p>常駐オプションのローカル・ランタイム値。データベース DMB がローカル・ストレージに常駐するかどうかを示します。</p> <p>N 指定されたデータベース・リソースに関連する DMB は、ストレージに常駐にされません。データベースは常駐として定義されているが IMS の再始動時にエラーが発生した場合は、N が設定されます。DMB はスケジュールされた時間にロードされます。</p> <p>Y 指定されたデータベース・リソースに関連する DMB は、次回の IMS の再始動時にストレージに常駐にされます。次回の IMS の再始動時に、IMS は DMB をロードし、それを初期化します。常駐データベースはローカル・ストレージからアクセスされるため、ACBLIB への入出力が不要になります。</p>
LSTT	LclStat	STATUS	LCL	ローカル・データベース状況。適用されるすべてのデータベース状況条件が戻されます。データベース状況は、75 ページの表 20に記載されている状況条件のいずれか (複数可) です。
MBR	MbrName	N/A	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。出力を作成した IMS の IMS ID。IMS ID は常に戻されます。
MDLN	LModelName	MODEL	N/A	モデル名。このリソースを作成するためのモデルとして使用されたリソースまたは記述子の名前。DFSDSDB1 は、データベース用の IMS 記述子名です。
MDLT	LModelType	MODEL	N/A	モデル・タイプ、RSC または DESC。RSC は、別のリソースをモデルとして使用してリソースが作成されたことを意味します。DESC は、記述子をモデルとして使用してリソースが作成されたことを意味します。
PART	PartName	N/A	N/A	HALDB 区画名。区画名は、出力内に HALDB 区画に関する応答行が 1 つ以上ある場合に戻されます。
PGM	LPgmName	PGM	LCL	ローカル IMS からの、データベースを参照するプログラム名。
RACC	Acc	DEFN	GBL	SHOW(DEFN) が指定され、リポジトリーが使用可能な場合、リポジトリーからのアクセス・タイプ情報。
REPO	Repo	DEFN	GBL	<p>その行に関する情報に、保管済みリソース定義が含まれているかどうかを示します。</p> <p>Y リポジトリー定義を示します。</p> <p>(ブランク) ローカル定義を示します。</p>
RRSDNT	Rsdnt	DEFN, RESIDENT	GBL	リポジトリーからの常駐値。

表 19. QUERY DB コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
RSDNT	LDRsdnt	ALL, RESIDENT	LCL	<p>次回の IMS 再始動時に有効になる、ローカル据え置き常駐値。データベースが常駐として定義されていたが、ACBLIB 内に DMB が存在しないために IMS の再始動時に常駐できなかった場合、値 Y が表示されます。このデータベースは、次回の IMS の再始動時に ACBLIB 内に DMB がある場合にのみ、常駐になることができます。</p>
RTMCR	TimeCreate	DEFN	GBL	<p>リポジトリでの作成時刻。これは、リポジトリ内で最初にリソースが作成された時刻です。</p>
RTMUP	TimeUpdate	DEFN	GBL	<p>リポジトリでの更新時刻。これは、リポジトリ内で最後にリソースが更新された時刻です。</p>
SNDX	SndxName	SNDX	LCL	<p>DEDB データベースの高速機能副次索引データベースの名前。</p>
STT	Status	STATUS, GLOBAL	GBL	<p>RM からのグローバル状況情報。以下のいずれかの値です。</p> <p>ALLOC データベースのグローバル状況は「割り振り済み」です。</p> <p>LOCKED データベースのグローバル状況は「ロック」です。</p> <p>OPEN データベースのグローバル状況は「オープン」です。</p> <p>STA データベースのグローバル状況は「開始済み」です。</p> <p>STOACC データベースのグローバル状況は「アクセスの停止」です。</p> <p>STOSCHD データベースのグローバル状況は「停止」です。</p> <p>STOUPDS データベースのグローバル状況は「更新の停止」です。</p>

表 19. QUERY DB コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
TMAC	LTimeAccess	TIMESTAMP	LCL	<p>リソースが最後にアクセスされた時刻。最終アクセス時間は、ウォーム・スタート、緊急時再始動、エクスポート、およびインポートにまたがって保持されます。最終アクセス時間の更新はログに記録されません。再始動後は、最終アクセス時間は再始動チェックポイント・ログ・レコードに記録された時間を反映します。</p> <p>このアクセス・タイム・スタンプは、ローカル IMS から取得されます。</p> <p>データベース・リソースの場合、以下のアクションは最終アクセス時間を更新します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • データベースがアプリケーション・プログラムによってアクセスされる。 • CREATE コマンドが、モデルとしてリソースを参照する。 <p>HALDB および DEDB データベースの場合、最終アクセス時間のタイム・スタンプが、HALDB 区画エントリーまたは AREA エントリーに戻されます。HALDB マスター・エントリーおよび DEDB エントリーでは、最終アクセス時間のタイム・スタンプはブランクのままです。</p>
TMCR	LTimeCreate	TIMESTAMP	LCL	<p>リソースが作成された時刻。これは、CREATE DB コマンド、データベースを作成する IMPORT コマンド、または IMS の初期設定の結果です。作成時刻は、ウォーム・スタート、緊急時再始動、EXPORT および IMPORT にまたがって保持されます。</p> <p>この作成タイム・スタンプは、ローカル IMS から取得されます。</p>
TMIM	LTimeImport	TIMESTAMP	LCL	<p>リソースが最後にインポートされた時刻 (該当する場合)。インポート時刻は、ウォーム・スタートと緊急時再始動にまたがって保持されます。</p> <p>このインポート・タイム・スタンプは、ローカル IMS から取得されます。</p>
TMUP	LTimeUpdate	TIMESTAMP	LCL	<p>UPDATE DB コマンド (タイプ 1 コマンド) または IMPORT コマンドの結果として実行時リソース定義の属性が更新された最終時刻。更新時刻は、ウォーム・スタートや緊急時再始動を越えて保持されます。出力値は、ローカル IMS から取得されます。</p>

表 19. QUERY DB コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
TYP	タイプ	N/A	N/A	<p>データベースのタイプ。</p> <ul style="list-style-type: none"> • AREA: 応答行が DEDB エリアに関するものであることを示します。 • ブランク: データベース状況が NOTINIT である場合。 • DEDB: データベースが DEDB であることを示します。 • DHISNDX - データベースが DEDB HISAM または SHISAM 副次索引データベースであることを示します。 • DL/I: データベースが全機能非パーティション・データベースであることを示します。 • MSNR: データベースが MSDB 非関連データベースであることを示します。 • MSRD: データベースが MSDB 関連動的データベースであることを示します。 • MSRF: データベースが MSDB 関連固定データベースであることを示します。 • PART: データベースが HALDB 区画であることを示します。 • PHDAM: データベースが区分 HDAM データベースのマスターであることを示します。 • PHIDAM: データベースが区分 HIDAM データベースのマスターであることを示します。 • PSINDEX: データベースが区分副次索引データベースのマスターであることを示します。
VER	Version	VERSION	LCL	現在 IMS システム上でアクティブなデータベースのバージョン番号。

表 19. QUERY DB コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
WRK	Work	WORK		データベースまたはそれに関連したリソースの 1 つで作業が進行中です。進行中の作業は、以下のいずれかの値です。 AREA OPEN FP DEDB に関連するエリアがオープンされました。 DB STOP ACCESS IN PROGRESS データベースに対して、データベース・アクセスを停止するための /DBRECOVERY または UPDATE DB STOP(ACCESS) コマンドが進行中です。これはデータベースをオフラインにします。 DB STOP UPDATES IN PROGRESS データベースに対して、データベースの更新を停止するための /DBDUMP または UPDATE DB STOP(UPDATES) コマンドが進行中です。 IN USE データベースは使用中です。 RECOVER CMD ACTIVE データベース・リカバリー・サービスを使用して 1 つ以上のデータベースをリカバリーするために、/RECOVER START コマンドが進行中です。

QUERY DB 状況

次の表は、SHOW(STATUS) を指定した場合に返される可能性のあるローカル・エリア状況条件をリストしています。

表 20. QUERY DB のローカル状況条件

Status	意味
ALLOCF	データベースに割り振り失敗が起きています。
ALLOCS	データベースは正常に割り振られています。
BACKOUT	データベースについて、データベースの使用を妨げる不完全バックアウトが存在します。
EEQE	データベースについて 1 つ以上の拡張エラー・キュー・エレメントが存在します。
IC	エリア・イメージ・コピーがアクティブです。
LOCK	データベースはローカルにロックされています。
NONE	データベースにはグローバル状況は何もありません。

表 20. QUERY DB のローカル状況条件 (続き)

Status	意味
NOTINIT-xx-reason	データベースは初期化されていないため、使用できません。NOTINIT は、NOTINIT-xx-reason 形式で表示されます。ここで、xx は理由コードで、この理由コードが設定された 1 つのモジュール内の固有の位置を示します。NOTINIT-00 は、理由が不明であることを示します。アクション: 1。 DFSDDIR MACRO は、データベース不良理由コード (フィールド DDIRBADR) に設定される可能性がある各理由コードを定義し、それを設定するモジュールを識別します。reason は、最大 13 文字の短縮テキスト形式で、理由コード xx を説明します。
NOTOPEN	エリアまたはデータベースはオープンされていません。
OLR	データベース区画でオンライン再編成が進行中です。 QUERY DB STATUS(OLR) コマンドは、HALDB OLR が進行中のすべてのデータベースの状況を表示します。率に関する情報は戻されません。代わりに、QUERY OLREORG コマンドの出力に、率に関する情報が戻されます。
OPEN	エリアまたはデータベースはオープンされています。RM リソース構造内に維持されません。
PRELOAD	エリアはプリロードすべきものとして定義されています。
PREOPEN	エリアは事前オープンすべきものとして定義されています。
QUIESCED	前の UPDATE DB START(QUIESCE) コマンドまたは UPDATE AREA START(QUIESCE) コマンドにより、エリアまたはデータベースが現在静止しています。
QUIESCING	前の UPDATE DB START(QUIESCE) コマンドまたは UPDATE AREA START(QUIESCE) コマンドにより、現在エリアまたはデータベースの静止が進行しています。
RECALL	エリアまたはデータベースの再呼び出しが進行中です。
RECOVINP	エリアまたはデータベースのリカバリーが進行中です。
RECOVNEEDED	エリアはリカバリーを必要としています。
RNL	DEDB データベースでランダムマイザーがロードされていません。
STOACC	データベースはローカルにアクセスが停止され、オフラインです。QUERY DB コマンドの SHOW(STATUS) キーワードは、DEDB について STOACC の状況に戻します。STOACC の状況は、前の /DBR DB または UPDATE DB STOP(ACCESS) コマンドのために、DEDB の以降のアクセスが停止されていることを示します。
STOPPED	エリアはローカルまたはグローバルに停止されています。
STOSCHD	データベースはローカルに停止されています。
STOUPDS	データベースはローカルに更新が停止されています。
VSO	エリアは VSO エリアです。

表 21. NOTINIT-xx-reason 状況の理由情報

理由	意味
ALIAS	別名エラー。
BLDL	ACBLIB ディレクトリーの作成を試行中の BLDL の各種のエラー。

表 21. NOTINIT-xx-reason 状況の理由情報 (続き)

理由	意味
DBINIT	データベースの初期設定が失敗しました。
DFLTCATALIASN	デフォルト・カタログ別名は使用されません。
DMBINCOMPTBL	DMB の非互換性。
DMBLEVEL	ACBGEN を使用してこの DMB を生成したときの IMS リリース・レベルが、この IMS の IMS リリース・レベルと一致していません。必要に応じて DBDGEN、PSBGEN、ACBGEN、および ACBLIB のオンライン変更を実行して、正しい IMS リリース・レベルでこの DMB を生成してください。アクション: 4。
DMBNAME	DMB 名が欠落しています。
DMBPOOL	DMB のプール不足。
DMBPOOLDELETE	DMB プールからの DMB の削除が失敗しました。
DUPLICATEAREA	この DEDB で重複エリア名が検出されました。アクション: 4。
EOD	DMB の前に EOD マーカーが検出されました。
FPDB	データベースは、非高速機能 (FP=N) システムに定義されている高速機能 MSDB または DEDB です。データベースは使用できません。
FPRESTART	再始動時に高速機能エラーが発生しました。アクション: 1。
LOADCOMPRESS	圧縮ルーチンのロード中にエラーが発生しました。
LOADRANDOMIZE	ランダムマイザ・ルーチンのロード中にエラーが発生しました。
MAXDBEXCEED	データベースは、データベース数の最大限度である 32767 を超えました。データベースは使用できません。ローカル・システム内のデータベースの総数が 32767 より少ない場合、データベースは IMS のコールド・スタート時に RDDS の自動インポートによりリカバリーすることができます。
MOLCCOMMIT	メンバー OLC COMMIT MEMBER が失敗しました。
MSDBCHANGE	MSDB がオンライン変更によって追加または変更されました。これは許可されません。アクション: 4。
MSDBLEVEL	ACBLIB 内の MSDB の MSDB レベルが正しくありません。アクション: 4。
NODB	データベース DDIR 制御ブロックが存在しません。アクション: 5。
NODMB	ACBLIB 内にデータベース DMB が存在しません。高速機能データベースの場合は、これは MSDB または DEDB です。アクション: 2。
NOMSDB	システム内に MSDB が定義されていません。
NOSHRINDDIR	索引共用データベース DDIR 制御ブロックがありません。アクション: 5。
NOSHRINDMB	ACBLIB 内に共用索引の DMB がありません。アクション: 2。
NOTDMB	DMB ではありません。DMB の代わりに、データベースと同じ名前の PSB が ACBLIB に定義されています。このリソースがプログラムであるべきである場合は、CREATE PGM コマンドを使用してプログラムを作成してください。このリソースがデータベースであるべきである場合は、DBDGEN、PSBGEN、ACBGEN、および ACBLIB のオンライン変更を実行して、このリソースを、PSB ではなく、DMB として定義してください。アクション: 4。

表 21. NOTINIT-xx-reason 状況の理由情報 (続き)

理由	意味
PARTBUILD	区画の作成が失敗しました。
PSBINCOMPTBL	PSB の非互換性。
REPOCHGLIST	データベース名がこの IMS の IMSRSC リポジトリ内の変更リストに存在しており、その変更リストが処理中であるか、エラーによって処理が失敗しました。データベースが正常にインポートされて実行時データベース定義とリポジトリ内の保管済み定義が同期化されない限り、このデータベースをモデルとして使用、スケジュール、更新、エクスポート、あるいは参照することはできません。アクション : 6。
RSCNEEDOLC	IMPORT DEFN コマンドで、高速機能 DEDB データベースが作成されています。IMPORT DEFN コマンドで使用するために、この DEDB データベースをオンラインにすることができません。高速機能 DEDB データベースをオンラインにするには、ACBLIB のオンライン変更を実行してください。アクション 2。
RSCNEEDSTADB	IMPORT DEFN コマンドで、全機能 HALDB が作成されています。HALDB マスターは作成されています。HALDB 区画データベースを作成するには、HALDB マスター・データベースで /START DB コマンドまたは UPDATE DB コマンドのいずれかを発行してください。
SEGMENTNUM	セグメント数エラー。ACBGEN エラー、127 セグメントを超えています。アクション: 4。
WRONGDMB	誤った DMB。
WRONGPSB	誤った PSB。

注: データベースを初期化するには、以下のアクションを取ることができます。

1. IBM に連絡する。
2. ACBLIB のオンライン変更を実行して、DMB を ACBLIB に追加する。
3. ACBLIB のオンライン変更を実行して、PSB を ACBLIB に追加する。
4. ACBLIB のオンライン変更を実行して、PSB または DMB を修正する。
5. MODBLKS のオンライン変更または CREATE DB コマンドを実行して、データベースを作成する。
6. IMS 変更リスト処理が失敗してメッセージ DFS4411E が発行された場合は、問題を修正して以下のいずれかのアクションを実行します。
 - IMS をシャットダウンし、再始動して変更リストの処理を再試行します。
 - IMPORT DEFN SOURCE(REPO) NAME(*dbname*) TYPE(DB) コマンドを発行し、データベースをインポートします。ここで、*dbname* はデータベース名です。

QUERY DB の SHOW キーワードが出力のタイプを決定する方法

SHOW キーワードが QUERY DB コマンドで戻される出力のタイプを決定する方法について、いくつかの例を以下の表に示します。

表 22. QUERY DB の SHOW キーワードが出力のタイプを決定する方法

使用される SHOW キーワードの形式	戻される出力のタイプ
SHOW(LOCAL)	IMS システムにローカルの出力フィールドのみ。SHOW(ALL,LOCAL) は、これと同じ出力を提供します。

表 22. QUERY DB の SHOW キーワードが出力のタイプを決定する方法 (続き)

使用される SHOW キーワードの形式	戻される出力のタイプ
SHOW(GLOBAL)	グローバルに維持されている出力フィールドのみ (RM によって維持されているデータなど)。SHOW(ALL,GLOBAL) は、これと同じ出力を提供します。
SHOW(ALL)	ローカル・データとグローバル・データの両方を持つフィールドのすべての出力フィールド。両方の値が出力に戻されます。
SHOW(STATUS,GLOBAL)	グローバル STATUS 値のみ。
SHOW(STATUS,LOCAL)	ローカル STATUS 値のみ。
SHOW(STATUS)	ローカル STATUS 値とグローバル STATUS 値の両方。
SHOW(ALL,GLOBAL)	グローバルに維持されている出力フィールドのみ (RM によって維持されているデータなど)。SHOW(GLOBAL) は、これと同じ出力を提供します。
SHOW(ALL,LOCAL)	IMS システムにローカルの出力フィールドのみ。SHOW(LOCAL) は、これと同じ出力を提供します。
SHOW(DEFN)	IMS からランタイム定義およびリポジトリから保管された定義が戻されます。
SHOW(DEFN,IMSID)	IMS からランタイム定義およびリポジトリから保管された定義が戻されます。リポジトリ内に定義されたリソースを持つ IMS ごとに応答行が定義属性と共に戻されます。
SHOW(DEFN,LOCAL)	IMS からランタイム定義が戻されます。
SHOW(DEFN,GLOBAL)	リポジトリから保管された定義が戻されます。
SHOW(DEFN,IMSID,LOCAL)	IMS からランタイム定義が戻されます。SHOW(DEFN,IMSID,LOCAL) は、SHOW(DEFN,LOCAL) と同じです。
SHOW(DEFN,IMSID,GLOBAL)	リポジトリから保管された定義が戻されます。リポジトリ内に定義されたリソースを持つ IMS ごとに応答行が定義属性と共に戻されます。
SHOW(EXPORTNEEDED)	定義がリポジトリへエクスポートされたことがないランタイム・リソースのみ。

戻りコード、理由コード、および完了コード

IMS 戻りコードと理由コードは、QUERY DB コマンドによって OM に戻されます。QUERY DB コマンドの結果として戻される OM 戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 23. QUERY DB コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY DB コマンドは正常に完了しました。
X'00000004'	X'00001010'	戻されるリソースは検出されませんでした。指定されたリソース名が無効であるか、以下のことが考えられます。 <ul style="list-style-type: none"> 指定したフィルターと一致するリソースがありませんでした。 指定された SHOW(WORK) で表示される作業を持つリソースがありませんでした。 SHOW(EXPORTNEEDED) が指定されていた場合は、IMSRSC リポジトリにエクスポートする必要があるリソースがありませんでした。
X'00000008'	X'00002004'	無効なコマンド・キーワードまたは無効なコマンド・キーワードの組み合わせ。
X'00000008'	X'00002014'	データベース名パラメーターに無効文字が検出されたため、QUERY DB コマンドは処理されません。
X'00000008'	X'00002040'	QUERY DB コマンドで、複数のフィルター値またはキーワード値が指定されています。複数のキーワード値、または無効な組み合わせのフィルターが指定されていました。入力コマンドを検査し、正しい組み合わせを再入力してください。
X'0000000C'	X'00003000'	一部のリソースでは QUERY DB コマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。完了コードに、エラーの理由とリソース名が示されています。QUERY DB コマンドにより戻される可能性がある完了コードのリストは、QUERY DB 完了コード表に示されています。
X'0000000C'	X'00003004'	QUERY DB コマンドは、指定されたとのリソース名に対しても正常に実行されませんでした。完了コードに、エラーの理由とリソース名が示されています。QUERY DB コマンドにより戻される可能性がある完了コードのリストは、QUERY DB 完了コード表に示されています。
X'00000010'	X'00004004'	CQS アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'00004018'	リソース構造がありません。または、リソース構造が使用できません。
X'00000010'	X'00004100'	リソース構造が満杯です。
X'00000010'	X'00004104'	RM アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'00004108'	SCI アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'00004300'	MODBLKS のオンライン変更が有効なため、コマンドが許可されません (DFSDFxxx または DFSCGxxx が MODBLKS=OLC で定義されているか、または MODBLKS が定義されていません)。

表 23. QUERY DB コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000010'	X'00004500'	IMS はリポジトリを使用できません。
X'00000010'	X'00004501'	RM はリポジトリを使用できません。
X'00000010'	X'00004502'	リポジトリは使用できません。
X'00000010'	X'00004503'	リポジトリは停止しています。
X'00000010'	X'00004504'	リポジトリ・スベアのリカバリーが進行中です。
X'00000010'	X'00004505'	IMS リソース・リストが存在しないか、IMS リソース・リスト内に該当するリソース・タイプのリソースが存在しません。
X'00000010'	X'00004507'	リポジトリ・アクセスが拒否されました。
X'00000010'	X'00004508'	リポジトリの最大入力長を超過しました。
X'00000010'	X'00004509'	RM データのバージョンは IMS データのバージョンよりも低いバージョンです。
X'00000010'	X'0000450A'	リポジトリ・サーバー (RS) をシャットダウンしています。
X'00000010'	X'0000450B'	RS が使用できません。
X'00000010'	X'0000450C'	RS が使用中です。
X'00000010'	X'0000450D'	RM は、IMSRSC リポジトリに関連した一部の内部フィールドの定義に失敗しました。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できなかったため、QUERY DB コマンド処理は終了しました。
X'00000014'	X'0000501C'	IMODULE GETMAIN エラー。
X'00000014'	X'00005100'	RM 要求エラー。
X'00000014'	X'00005104'	CQS エラー。
X'00000014'	X'00005108'	SCI 要求エラー。
X'00000014'	X'00005110'	リポジトリ・エラー。
X'00000014'	X'0000551C'	破損したリソース・リストが検出されたため、リポジトリ内のデータを表示する要求は拒否されました。リソース・リストが使用できないため、QUERY DB コマンドは拒否されました。IBM ソフトウェア・サポートに連絡してください。エラーになったコマンドの出力と、コマンドが実行されたローカル RM アドレス・スペースのダンプまたは IMSplex 内のすべての RM アドレス・スペースのダンプを送信してください。また、IMSRSC リポジトリ RID データ・セットと RMD データ・セットのコピーも送信してください。
X'00000014'	X'00005FFF'	内部エラーが原因で、QUERY DB コマンド処理は終了しました。

以下の表には、完了コードの説明が記載されています。QUERY DB コマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 24. QUERY DB コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		リソースに対する QUERY DB コマンドは正常に完了しました。
10	RESOURCE NOT FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。コマンドで指定されたリソース名のスペルが正しいことを確認してください。
193	NOT A DEDB	SHOW(SNDX) キーワードが指定されましたが、データベース・リソースが DEDB ではありません。
194	NO SECONDARY INDEX DEFINED	SHOW(SNDX) キーワードが指定されましたが、データベース・リソースには定義済みの高速機能副次索引データベースがありません。
195	INVALID DB ACCESS TYPE	このデータベース・アクセス・タイプでは、データベース・バージョン管理はサポートしません。

例

以下に示すのは QUERY DB コマンドの例です。

QUERY DB コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QUERY DB NAME(BANKATMS,DEDBJN21,DBHDOK01) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

DBName	AreaName	MbrName	CC TYPE	LAcc	LRsdnt	LclStat
BANKATMS		IMS1	0	EXCL	N	NOTINIT-1E-NODMB,NOTOPEN
DBHDOK01		IMS1	0 DL/I	UPD	N	NOTOPEN
DEDBJN21		IMS1	0 DEDB	UPD	Y	NOTOPEN
DEDBJN21	DB21AR0	IMS1	0 AREA			NOTOPEN
DEDBJN21	DB21AR1	IMS1	0 AREA			NOTOPEN
DEDBJN21	DB21AR10	IMS1	0 AREA			NOTOPEN
DEDBJN21	DB21AR11	IMS1	0 AREA			NOTOPEN
DEDBJN21	DB21AR2	IMS1	0 AREA			NOTOPEN
DEDBJN21	DB21AR3	IMS1	0 AREA			NOTOPEN
DEDBJN21	DB21AR4	IMS1	0 AREA			NOTOPEN
DEDBJN21	DB21AR5	IMS1	0 AREA			NOTOPEN
DEDBJN21	DB21AR6	IMS1	0 AREA			NOTOPEN
DEDBJN21	DB21AR7	IMS1	0 AREA			NOTOPEN
DEDBJN21	DB21AR8	IMS1	0 AREA			NOTOPEN
DEDBJN21	DB21AR9	IMS1	0 AREA			NOTOPEN

(右にスクロールして、画面 2 へ)

DBName	AreaName	MbrName	LModelName	LModelType	LTimeCreate
BANKATMS		IMS1			2011.181 10:22:15.10
DBHDOK01		IMS1			2011.181 10:22:15.10
DEDBJN21		IMS1			2011.181 10:22:15.10
DEDBJN21	DB21AR0	IMS1			
DEDBJN21	DB21AR1	IMS1			
DEDBJN21	DB21AR10	IMS1			
DEDBJN21	DB21AR11	IMS1			

```

DEDBJN21 DB21AR2 IMS1
DEDBJN21 DB21AR3 IMS1
DEDBJN21 DB21AR4 IMS1
DEDBJN21 DB21AR5 IMS1
DEDBJN21 DB21AR6 IMS1
DEDBJN21 DB21AR7 IMS1
DEDBJN21 DB21AR8 IMS1
DEDBJN21 DB21AR9 IMS1

```

(右にスクロールして、画面 3 へ)

DBName	AreaName	MbrName	LTimeUpdate	LTimeAccess	LTimeImport
BANKATMS		IMS1			
DBHDOK01		IMS1			
DEDBJN21		IMS1			
DEDBJN21	DB21AR0	IMS1			
DEDBJN21	DB21AR1	IMS1			
DEDBJN21	DB21AR10	IMS1			
DEDBJN21	DB21AR11	IMS1			
DEDBJN21	DB21AR2	IMS1			
DEDBJN21	DB21AR3	IMS1			
DEDBJN21	DB21AR4	IMS1			
DEDBJN21	DB21AR5	IMS1			
DEDBJN21	DB21AR6	IMS1			
DEDBJN21	DB21AR7	IMS1			
DEDBJN21	DB21AR8	IMS1			
DEDBJN21	DB21AR9	IMS1			

(右にスクロールして、画面 4 へ)

DBName	AreaName	MbrName	LDefnType
BANKATMS		IMS1	MODBLKS
DBHDOK01		IMS1	MODBLKS
DEDBJN21		IMS1	MODBLKS
DEDBJN21	DB21AR0	IMS1	
DEDBJN21	DB21AR1	IMS1	
DEDBJN21	DB21AR10	IMS1	
DEDBJN21	DB21AR11	IMS1	
DEDBJN21	DB21AR2	IMS1	
DEDBJN21	DB21AR3	IMS1	
DEDBJN21	DB21AR4	IMS1	
DEDBJN21	DB21AR5	IMS1	
DEDBJN21	DB21AR6	IMS1	
DEDBJN21	DB21AR7	IMS1	
DEDBJN21	DB21AR8	IMS1	
DEDBJN21	DB21AR9	IMS1	

OM API 入力:

```
CMD(QUERY DB NAME(BANKATMS,DEDBJN21,DBHDOK01) SHOW(ALL) )
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.181 18:44:59.208162</statime>
<stotime>2011.181 18:44:59.209123</stotime>
<staseq>C80029508EDE234E</staseq>
<stoseq>C80029508F1A3B8E</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10114459</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>DB </kwd>
<input>QUERY DB NAME(BANKATMS,DEDBJN21,DBHDOK01) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="DB" l1b1="DBName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />

```

```

<hdr s1bl="AREA" l1bl="AreaName" scope="LCL" sort="a" key="4"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="PART" l1bl="PartName" scope="LCL" sort="a" key="5"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TYP" l1bl="TYPE" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="LACC" l1bl="LAcc" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="RSDNT" l1bl="LDRsdnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LRSNT" l1bl="LRsdnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="LSTT" l1bl="Lc1Stat" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MDLN" l1bl="LModelName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="MDLT" l1bl="LModelType" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMCR" l1bl="LTimeCreate" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMUP" l1bl="LTimeUpdate" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1bl="TMAC" l1bl="LTimeAccess" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMIM" l1bl="LTimeImport" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1bl="DFNT" l1bl="LDefnType" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DB(BANKATMS) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP( ) LACC(EXCL)
  LSTT(NOTINIT-1E-NODMB,NOTOPEN) DFNT(MODBLKS) LRSNT(N) TMCR(2011.181
  10:22:15.10) TMUP( ) TMIM( )
  TMAC( ) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(DEDB ) LACC(UPD)
  LSTT(NOTOPEN) DFNT(MODBLKS) LRSNT(Y) TMCR(2011.181 10:22:15.10) TMUP(
  ) TMIM( ) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) AREA(DB21AR0 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(AREA )
  LSTT(NOTOPEN) TMAC( ) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) AREA(DB21AR1 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(AREA )
  LSTT(NOTOPEN) TMAC( ) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) AREA(DB21AR2 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(AREA )
  LSTT(NOTOPEN) TMAC( ) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) AREA(DB21AR3 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(AREA )
  LSTT(NOTOPEN) TMAC( ) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) AREA(DB21AR4 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(AREA )
  LSTT(NOTOPEN) TMAC( ) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) AREA(DB21AR5 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(AREA )
  LSTT(NOTOPEN) TMAC( ) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) AREA(DB21AR6 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(AREA )
  LSTT(NOTOPEN) TMAC( ) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) AREA(DB21AR7 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(AREA )
  LSTT(NOTOPEN) TMAC( ) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) AREA(DB21AR8 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(AREA )
  LSTT(NOTOPEN) TMAC( ) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) AREA(DB21AR9 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(AREA )
  LSTT(NOTOPEN) TMAC( ) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) AREA(DB21AR10) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(AREA )
  LSTT(NOTOPEN) TMAC( ) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) AREA(DB21AR11) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(AREA )
  LSTT(NOTOPEN) TMAC( ) </rsp>

```



```

<rsp>DB(DBHDOK01) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(DL/I ) LACC(UPD)
LSTT(NOTOPEN) DFNT(MODBLKS) LRSNT(N) TMC(2011.181 10:22:15.10) TMUP(
) TMIM( ) TMAC(
) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: 常駐属性およびデータベース状況を表示するために、QUERY DB コマンドが SHOW キーワードと共に指定されています。IMS1 からデータベース BANKATMS、DEDBJN21、および DBHDOK01 のすべての定義情報および状況情報が戻されています。データベース出力フィールドはすべてを 1 つの画面に収めることができないため、右にスクロールして追加の出力フィールドを表示する必要があります。データベース名、エリア名、およびその出力行を作成したメンバー名が、各画面に表示されています。データベース BANKATMS は、NOTINIT-1E-NODMB の状況です。これは、BANKATMS 用の ACBLIB 内に DMB がないため、BANKATMS は使用できないことを意味しています。DEDBJN21 は DEDB であり、DEDB 情報とともにエリア情報も戻されています。データベースは MODBLKS からロードされたもので、モデルから作成されていないため、モデル情報は戻されていません。DEDB エリアのタイム・スタンプは維持されていないため、戻されていません。

QUERY DB コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
QUERY DB NAME(BE3PARTS,CUSTDB) SHOW(PGM)
```

TSO SPOC 出力:

DBName	MbrName	CC	TYPE	LPgmName
BE3PARTS	IMS1	0	DL/I	PE4CODEL
BE3PARTS	IMS1	0	DL/I	PE4COINQ
BE3PARTS	IMS1	0	DL/I	PE4CORDR
BE3PARTS	IMS1	0	DL/I	PE4CPINV
BE3PARTS	IMS1	0	DL/I	PE4CPPUR
CUSTDB	IMS1	0	DEDB	PSBBA
CUSTDB	IMS1	0	DEDB	PSBNO
CUSTDB	IMS1	0	DEDB	PSBOS
CUSTDB	IMS1	0	DEDB	PSBPA

OM API 入力:

```
CMD(QUERY DB NAME(BE3PARTS,CUSTDB) SHOW(PGM))
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<stime>2011.181 18:53:06.988049</stime>
<stotime>2011.181 18:53:06.989553</stotime>
<staseq>C8002B21BDC11F98</staseq>
<stoseq>C8002B21BE1F14D8</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10115306</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT005 </userid>

```

```

<verb>QRY </verb>
<kwd>DB           </kwd>
<input>QUERY DB NAME(BE3PARTS,CUSTDB) SHOW(PGM) </input>
</cmd>
<cmdsphdr>
<hdr s1b1="DB" l1b1="DBName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="AREA" l1b1="AreaName" scope="LCL" sort="a" key="4"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="PART" l1b1="PartName" scope="LCL" sort="a" key="5"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="TYP" l1b1="TYPE" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="PGM" l1b1="LPgmName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
</cmdsphdr>
<cmdsphdata>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(DL/I ) PGM(PE4CODEL)
</rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(DL/I ) PGM(PE4COINQ)
</rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(DL/I ) PGM(PE4CORDR)
</rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(DL/I ) PGM(PE4CPINV)
</rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(DL/I ) PGM(PE4CPPUR)
</rsp>
<rsp>DB(CUSTDB ) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(DEDB ) PGM(PSBBA )
</rsp>
<rsp>DB(CUSTDB ) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(DEDB ) PGM(PSBNO )
</rsp>
<rsp>DB(CUSTDB ) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(DEDB ) PGM(PSBOS )
</rsp>
<rsp>DB(CUSTDB ) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(DEDB ) PGM(PSBPA )
</rsp>
</cmdsphdata>
</imsout>

```

説明: データベース BE3PARTS では、プログラム BE3PARTS、PE4COINQ、および PE4CORDR がそのデータベースを参照しています。データベース CUSTDB では、プログラム CUSTDB、PSBOS、および PSBPA がそのデータベースを参照しています。

QUERY DB コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
QRY DB NAME(DEDNRN01,DX41M401,DB000001) SHOW(RESIDENT,STATUS)
```

TSO SPOC 出力:

DBName	AreaName	MbrName	CC	TYPE	LDRsdnt	LRsdnt	LclStat
DB000001		IMS1	0		Y	N	NOTINIT-34-NODMB,NOTOPEN
DEDNRN01		IMS1	0	DEDB		Y	NOTOPEN
DEDNRN01	DEDB01D1	IMS1	0	AREA			NOTOPEN
DX41M401		IMS1	0	DL/I		N	NOTOPEN

OM API 入力:

```
CMD(QRY DB NAME(DEDBRN01,DX41M401,DB000001) SHOW(RESIDENT,STATUS) )
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.181 18:59:00.325804</statime>
<stotime>2011.181 18:59:00.326647</stotime>
<staseq>C8002C72B5DAC610</staseq>
<stoseq>C8002C72B60F7B50</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10115900</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>DB </kwd>
<input>QRY DB NAME(DEDBRN01,DX41M401,DB000001) SHOW(RESIDENT,STATUS)
</input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="DB" l1bl="DBName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="AREA" l1bl="AreaName" scope="LCL" sort="a" key="4"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="PART" l1bl="PartName" scope="LCL" sort="a" key="5"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TYP" l1bl="TYPE" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="RSDNT" l1bl="LDRsdnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LRSDNT" l1bl="LRsdnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="LSTT" l1bl="Lc1Stat" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DB(DEDBRN01) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(DEDB ) LSTT(NOTOPEN)
  LRSNT(Y) </rsp>
<rsp>DB(DEDBRN01) AREA(DEDB01D1) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(AREA )
  LSTT(NOTOPEN) </rsp>
<rsp>DB(DX41M401) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(DL/I ) LSTT(NOTOPEN)
  LRSNT(N) </rsp>
<rsp>DB(DB000001) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP( )
  LSTT(NOTINIT-34-NODMB,NOTOPEN) RSDNT(Y) LRSNT(N) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>
```

説明: いくつかの異なるタイプのデータベースの常駐属性とデータベース状況を表示するために、QUERY DB コマンドが SHOW キーワードと共に指定されています。DEDBRN01 は DEDB です。DEDB は常に常駐でありし、RESIDENT(Y) で定義されています。DX41M401 は DLI データベースです。DX41M401 は Resident(N) として定義され、そのローカル・ランタイム常駐値は RESIDENT(N) です。データベース DX41M401 の Rsdnt 値と LRsdnt 値は同じなので、LRsdnt

値のみが表示されています。DB000001 は、CREATE DB コマンドによって作成された新規データベースです。DB000001 は、NOTINIT-34-NODMB の状況を示しています。これは、ACBLIB 内に DMB が定義されていないために、使用できないことを意味しています。DMB がないので、データベース・タイプはブランクとして表示されています。これは、DB000001 をどのタイプのデータベースにする意図であるか IMS には分からないためです。DB000001 は RESIDENT(Y) として定義されていますが、常駐オプションは次回の IMS の再始動まで有効にならないため、ローカル常駐値は N です。表示されているすべてのデータベースの LRsdnt (ローカル常駐) 値が Rsdnt (定義常駐) 値と同じである場合、QRY DB 出力は LRsdnt のヘッダーと値を表示しますが、Rsdnt のヘッダーと値は表示しません。データベース DB000001 は RESIDENT(Y) で定義されていますが、そのローカル・ランタイム常駐値は N であるため、Rsdnt 列と LRsdnt 列の両方が QUERY DB 出力に表示されています。

QUERY DB コマンドの例 4

TSO SPOC 入力:

```
QRY DB NAME(*) SHOW(STATUS) STATUS(QUIESCING)
```

TSO SPOC 出力:

DBName	MbrName	CC TYPE	LclStat
DBXYZ	IM03	0 DLI	ALLOCS,OPEN,QUIESCING
KCIRDBAZ	IM03	0 DLI	ALLOCS,OPEN,QUIESCING
GONLXYZ	IM03	0 DLI	ALLOCS,OPEN,QUIESCING

説明: この例では、状況が QUIESCING であるデータベースを照会します。

QUERY DB コマンドの例 5

TSO SPOC 入力:

```
QUERY DB NAME(DEDBJ001) SHOW(ACCTYPE,STATUS)
```

TSO SPOC 出力:

DBName	AreaName	MbrName	CC TYPE	LAcc	LclStat
DEDBJ001		IMS1	0 DEDB	UPD	OPEN
DEDBJ001	D0010001	IMS1	0 AREA	READ	OPEN,PREOPEN
DEDBJ001	D0010002	IMS1	0 AREA	BRWS	OPEN,PREOPEN
DEDBJ001	D0010003	IMS1	0 AREA		OPEN,PREOPEN
DEDBJ001	D0010004	IMS1	0 AREA	UPD	OPEN,PREOPEN
DEDBJ001	D0010005	IMS1	0 AREA		OPEN,PREOPEN

OM API 入力:

```
CMD(QUERY DB NAME(DEDBJ001) SHOW(ACCTYPE,STATUS))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xm1vsn>20 </xm1vsn>
<statime>2011.188 23:38:28.734794</statime>
<stotime>2011.188 23:38:28.735444</stotime>
<staseq>C80937F889B4AC94</staseq>
<stoseq>C80937F889DD4554</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10163828</rqsttkn1>
```

```

<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>DB </kwd>
<input>QRY DB NAME(DEDBJ001) SHOW(ACCTYPE,STATUS) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="DB" l1bl="DBName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="AREA" l1bl="AreaName" scope="LCL" sort="a" key="4"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="PART" l1bl="PartName" scope="LCL" sort="a" key="5"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TYP" l1bl="TYPE" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="LACC" l1bl="LAcc" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="LSTT" l1bl="LclStat" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DB(DEDBJ001) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(DEDDB ) LACC(UPD)
  LSTT(OPEN) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJ001) AREA(D0010001 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(AREA )
  LACC(READ)LSTT(OPEN,PREOPEN) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJ001) AREA(D0010002 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(AREA )
  LACC(BRWS) LSTT(OPEN,PREOPEN) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJ001) AREA(D0010003 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(AREA )
  LSTT(OPEN,PREOPEN) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJ001) AREA(D0010004 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(AREA )
  LACC(UPD)LSTT(OPEN,PREOPEN) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJ001) AREA(D0010005 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(AREA )
  LSTT(OPEN,PREOPEN) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: DEDB DEDBJ001 は、UPD (更新) のデータベース・アクセスを持っています。エリア D0010001、D00010002、および D0010004 のエリア・アクセスが、コマンドで変更されました。つまり、エリア D0010001 は READ (読み取り) のエリア・アクセス、エリア D0010002 は BRWS (読み取り専用) のエリア・アクセス、およびエリア D0010004 は UPD (更新) のエリア・アクセスを持ちます。エリア D0010003 と D0010005 は、DEDBJ001 のデータベース・アクセス UPD (更新) を継承します。

QUERY DB コマンドの例 6

TSO SPOC 入力:

```
QUERY DB NAME(BANKATMS,DEDBJN21,BE3PARTS,NEWDB1) SHOW(DEFN,ACCTYPE,RESIDENT)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

DBName	MbrName	CC	CCText	Repo	IMSid	TYPE
BANKATMS	IMS1	0		Y		
BANKATMS	IMS1	0			IMS1	
BANKATMS	IMS2	0			IMS2	
BANKATMS	IMS3	0			IMS3	
BE3PARTS	IMS1	0		Y		
BE3PARTS	IMS1	0		Y	IMS2	
BE3PARTS	IMS1	0		Y	IMS3	
BE3PARTS	IMS1	0			IMS1	DL/I
BE3PARTS	IMS2	0			IMS2	DL/I
BE3PARTS	IMS3	0			IMS3	DL/I
DEDBJN21	IMS1	0		Y		
DEDBJN21	IMS1	0			IMS1	DEDB
DEDBJN21	IMS2	0			IMS2	DEDB
DEDBJN21	IMS3	0			IMS3	DEDB
NEWDB1	IMS1	1D3	REPOSITORY MEMBER NOT FOUND	Y		
NEWDB1	IMS1	0			IMS1	
NEWDB1	IMS2	10	NO RESOURCES FOUND			
NEWDB1	IMS3	10	NO RESOURCES FOUND			

(右にスクロールして、画面 2 へ)

DBName	MbrName	Repo	IMSid	TYPE	Acc	LAcc	Rsdnt	LDRsdnt	LRsdnt
BANKATMS	IMS1	Y			EXCL		N		
BANKATMS	IMS1		IMS1			EXCL			N
BANKATMS	IMS2		IMS2			EXCL			N
BANKATMS	IMS3		IMS3			EXCL			N
BE3PARTS	IMS1	Y			EXCL		N		
BE3PARTS	IMS1	Y	IMS2		UPD		N		
BE3PARTS	IMS1	Y	IMS3		EXCL		Y		
BE3PARTS	IMS1		IMS1	DL/I		EXCL			N
BE3PARTS	IMS2		IMS2	DL/I		UPD			N
BE3PARTS	IMS3		IMS3	DL/I		EXCL	Y		N
DEDBJN21	IMS1	Y			UPD		Y		
DEDBJN21	IMS1		IMS1	DEDB		UPD			Y
DEDBJN21	IMS2		IMS2	DEDB		UPD			Y
DEDBJN21	IMS3		IMS3	DEDB		UPD			Y
NEWDB1	IMS1	Y							
NEWDB1	IMS1		IMS1			UPD			N
NEWDB1	IMS2								
NEWDB1	IMS3								

OM API 入力:

```
CMD(QUERY DB NAME(BANKATMS,DEDBJN21,BE3PARTS,NEWDB1) SHOW(DEFN,ACCTYPE,RESIDENT))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.181 19:51:43.997358</statime>
<stotime>2011.181 19:51:44.021469</stotime>
<staseq>C800383BD29AEE9C</staseq>
<stoseq>C800383BD87DDE80</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10125143</rqsttkn1>
<rc>0200000C</rc>
<rsn>00003008</rsn>
<rsnmsg>CSLN054I</rsnmsg>
<rsntxt>None of the clients were successful.</rsntxt>
</ctl>
<cmderr>
<mbr name="IMS1 ">
<typ>IMS </typ>
```

```

<styp>DBDC </styp>
<rc>0000000C</rc>
<rsn>00003000</rsn>
<rsntxt>At least one request successful</rsntxt>
</mbr>
<mbr name="IMS3 ">
<typ>IMS </typ>
<styp>DBDC </styp>
<rc>0000000C</rc>
<rsn>00003000</rsn>
<rsntxt>At least one request successful</rsntxt>
</mbr>
<mbr name="IMS2 ">
<typ>IMS </typ>
<styp>DBDC </styp>
<rc>0000000C</rc>
<rsn>00003000</rsn>
<rsntxt>At least one request successful</rsntxt>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>DB </kwd>
<input>QUERY DB NAME(BANKATMS,DEDBJN21,BE3PARTS,NEWDB1)
SHOW(DEFN,ACCTYPE,RESIDENT) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="DB" l1b1="DBName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="AREA" l1b1="AreaName" scope="LCL" sort="a" key="4"
scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="PART" l1b1="PartName" scope="LCL" sort="a" key="5"
scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="REPO" l1b1="Repo" scope="LCL" sort="d" key="2" scroll="no"
len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="IMSID" l1b1="IMSid" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="TYP" l1b1="TYPE" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="RACC" l1b1="Acc" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="LACC" l1b1="LAcc" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="RRSDNT" l1b1="Rsdnt" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="RSDNT" l1b1="LDRsdnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="LRSDNT" l1b1="LRsdnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DB(BANKATMS) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP( ) LACC(EXCL)
IMSID(IMS1 ) LRSNT(N) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(DEDB ) LACC(UPD)
IMSID(IMS1 ) LRSNT(Y) </rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(DL/I ) LACC(EXCL)
IMSID(IMS1 ) LRSNT(N) </rsp>
<rsp>DB(NEWDB1 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP( ) LACC(UPD)
IMSID(IMS1 ) LRSNT(N) </rsp>

```

```

<rsp>DB(BANKATMS) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RACC(EXCL) RRSNT(N)
</rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RACC(UPD ) RRSNT(Y)
</rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RACC(EXCL) RRSNT(N)
</rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS2 )
RACC(UPD ) RRSNT(N) </rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS3 )
RACC(EXCL) RRSNT(Y) </rsp>
<rsp>DB(NEWDB1 ) MBR(IMS1 ) CC( 1D3) CCTXT(REPOSITORY MEMBER NOT
FOUND) REPO(Y) </rsp>
<rsp>DB(BANKATMS) MBR(IMS3 ) CC( 0) TYP( ) LACC(EXCL)
IMSID(IMS3 ) LRSNT(N) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) MBR(IMS3 ) CC( 0) TYP(DEDB ) LACC(UPD)
IMSID(IMS3 ) LRSNT(Y) </rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS3 ) CC( 0) TYP(DL/I ) LACC(EXCL)
IMSID(IMS3 ) RRSNT(Y) LRSNT(N) </rsp>
<rsp>DB(NEWDB1 ) MBR(IMS3 ) CC( 10) CCTXT(NO RESOURCES FOUND)
</rsp>
<rsp>DB(BANKATMS) MBR(IMS2 ) CC( 0) TYP( ) LACC(EXCL)
IMSID(IMS2 ) LRSNT(N) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) MBR(IMS2 ) CC( 0) TYP(DEDB ) LACC(UPD)
IMSID(IMS2 ) LRSNT(Y) </rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS2 ) CC( 0) TYP(DL/I ) LACC(UPD)
IMSID(IMS2 ) LRSNT(N) </rsp>
<rsp>DB(NEWDB1 ) MBR(IMS2 ) CC( 10) CCTXT(NO RESOURCES FOUND)
</rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: この例は、IMS1、IMS2、および IMS3 が含まれた IMSplex について、データベース BANKATMS、BE3PARTS、DEDBJN21、および NEWDB1 用のランタイム定義およびリポジトリに保管された定義を照会した結果を表示しています。

IMS1 は、コマンド・マスター IMS です。

- TSO SPOC 出力では、応答行の 1 行目から 4 行目に、DB BANKATMS 用のリポジトリ情報およびローカル情報が表示されています。
 - 1 行目は、データベース BANKATMS がリポジトリに対して定義されており、この行はコマンド・マスター IMS1 によって作成されたこと、およびこのデータベースはグローバル・アクセス・タイプ EXCL とグローバル常駐値 N を持つことを示しています。Repo 列は Y の値を表示しており、これがリポジトリ内のデータベース BANKATMS 用のグローバル値であることを示しています。IMSID 列は空白で、これは定義されているすべての IMS システム用の BANKATMS のグローバル定義であることを示しています。
 - 2 行目、3 行目、および 4 行目は、データベース BANKATMS が IMS1、IMS2、および IMS3 に対してローカルで定義され、ローカル・アクセス・タイプと常駐ランタイム値はリポジトリの値と同じであることを示しています。MbrName 列は、この応答行を作成した IMS の IMSID です。IMSID 列は、そのリソースまたは記述子が定義されている IMS の IMSID を示しています。コマンド・マスター IMS1 は既に BANKATMS のリポジトリ情報を作成しています。SHOW(IMSID) が指定されなかったため、この出力には、データベース BANKATMS が IMS1、IMS2、または IMS3 用のリソース・リスト内に定義されているかどうかは示されていません。
- 応答行の 5 行目から 10 行目には、DB BE3PARTS のリポジトリ情報およびローカル情報が表示されています。

- 5 行目は、データベース BE3PARTS がリポジトリに対して定義されており、この行はコマンド・マスター IMS1 によって作成されたこと、およびこのデータベースはグローバル・アクセス・タイプ EXCL とグローバル常駐値 N を持つことを示しています。Repo 列は Y の値を表示しており、これがリポジトリ内のデータベース BE3PARTS 用のグローバル値であることを示しています。IMSid 列はブランクで、これは定義されているすべての IMS システム用の BE3PARTS のグローバル定義であり、それぞれのシステムに独自の固有の定義はないことを示しています。
- 6 行目は、データベース BE3PARTS がリポジトリに定義されており、IMS2 に対してグローバル値とは異なる固有値 (アクセス・タイプが EXCL の代わりに UPD) を指定していることを示しています。IMS2 は、次回にリポジトリからデータベース BE3PARTS をインポートすると、固有のアクセス・タイプ値 UPD を取得しますが、グローバル常駐値は N です。IMS2 用のリソース・リストにはデータベース BE3PARTS が含まれています。このデータベースは固有の属性を持っているため、リポジトリに保管する必要があるからです。
- 7 行目は、データベース BE3PARTS がリポジトリに定義されており、IMS3 に対してグローバル値とは異なる固有値 (常駐値が N の代わりに Y) を指定していることを示しています。IMS3 は、次回にリポジトリからデータベース BE3PARTS をインポートすると、固有の常駐値 Y を取得しますが、グローバル・アクセス・タイプは EXCL です。IMS3 用のリソース・リストにはデータベース BE3PARTS が含まれています。このデータベースは固有の属性を持っているため、リポジトリに保管する必要があるからです。
- 8 行目から 10 行目は、データベース BE3PARTS が IMS1、IMS2、および IMS3 に対してローカルで定義されており、さまざまなローカル・アクセス・タイプおよび常駐ランタイム値が指定されていることを示しています。SHOW(IMSID) が指定されなかったため、この出力には、データベース BE3PARTS が IMS1、IMS2、または IMS3 用のリソース・リスト内にあるかどうかは示されていません。これらの IMS システムはリポジトリ情報にアクセスしません。コマンド・マスター IMS1 は既にリポジトリ情報にアクセスしています。IMS1、IMS2、および IMS3 のランタイム値は、リポジトリに保管されている値に一致しているため、それらの定義はリポジトリと同期化されており、インポートする必要はありません。
- 応答行の 11 行目から 14 行目は、データベース DEDBJN21 のリポジトリ情報およびローカル情報を表示しています。
 - 11 行目は、データベース DEDBJN21 がリポジトリに対して定義されており、この行はコマンド・マスター IMS1 によって作成されたこと、およびデータベースはグローバル・アクセス・タイプ UPD とグローバル常駐値 Y を持っていることを示しています。Repo 列は Y の値を表示しており、これがリポジトリ内のデータベース DEDBJN21 用のグローバル値であることを示しています。
 - 12 行目から 14 行目は、データベース DEDBJN21 が IMS1、IMS2、および IMS3 に対してローカルで定義されており、ローカル・アクセス・タイプ UPD および常駐ランタイム値 Y を持つことを示しています。コマンド・マスター IMS1 は既に DEDBJN21 のリポジトリ情報を作成しています。IMS1、IMS2、および IMS3 のランタイム値は、リポジトリに保管されている値に一致しているため、それらの定義はリポジトリと同期化されてお

り、インポートする必要はありません。SHOW(IMSID) が指定されなかったため、この出力には、データベース DEDBJN21 が IMS1、IMS2、または IMS3 用のリソース・リストに定義されているかどうかは示されていません。

- 応答行の 15 行目から 18 行目は、DB NEWDB1 に関する情報を表示しています。
 - 15 行目は、データベース NEWDB1 がリポジトリに対して定義されていないことを示しています。
 - 16 行目は、データベース NEWDB1 が IMS1 に対してローカルで定義されていることを示しています。
 - 17 行目から 18 行目は、データベース NEWDB1 が IMS2 および IMS3 に対してローカルで定義されていないことを示しています。

QUERY DB コマンドの例 7

TSO SPOC 入力:

```
QUERY DB NAME(BA*) SHOW(DEFN)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

DBName	MbrName	CC	Repo	IMSid	TYPE	Acc	LAcc	Rsdnt	LRsdnt
BANKATMS	IMS1	0	Y			EXCL		N	
BANKATMS	IMS1	0		IMS1			EXCL		N
BANKATMS	IMS2	0		IMS2			EXCL		N
BANKFNCL	IMS1	0	Y			EXCL		N	
BANKFNCL	IMS1	0		IMS1			EXCL		N
BANKFNCL	IMS2	0		IMS2			EXCL		N
BANKLDGR	IMS1	0	Y			EXCL		N	
BANKLDGR	IMS1	0		IMS1			EXCL		N
BANKLDGR	IMS2	0		IMS2			EXCL		N
BANKTERM	IMS1	0	Y			EXCL		N	
BANKTERM	IMS1	0		IMS1			EXCL		N
BANKTERM	IMS2	0		IMS2			EXCL		N

(右にスクロールして、画面 2 へ)

DBName	MbrName	Repo	TimeCreate	LTimeCreate
BANKATMS	IMS1	Y	2011.181 10:22:15.10	
BANKATMS	IMS1			2011.181 10:22:15.10
BANKATMS	IMS2			2011.181 10:20:47.82
BANKFNCL	IMS1	Y	2011.181 10:22:15.10	
BANKFNCL	IMS1			2011.181 10:22:15.10
BANKFNCL	IMS2			2011.181 10:20:47.82
BANKLDGR	IMS1	Y	2011.181 10:22:15.10	
BANKLDGR	IMS1			2011.181 10:22:15.10
BANKLDGR	IMS2			2011.181 10:20:47.82
BANKTERM	IMS1	Y	2011.181 10:22:15.10	
BANKTERM	IMS1			2011.181 10:22:15.10
BANKTERM	IMS2			2011.181 10:20:47.82

(右にスクロールして、画面 3 へ)

DBName	MbrName	Repo	LTimeUpdate	LTimeAccess	LTimeImport
BANKATMS	IMS1	Y			
BANKATMS	IMS1				
BANKATMS	IMS2				
BANKFNCL	IMS1	Y			
BANKFNCL	IMS1				
BANKFNCL	IMS2				
BANKLDGR	IMS1	Y			
BANKLDGR	IMS1				

```
BANKLDGR IMS2
BANKTERM IMS1      Y
BANKTERM IMS1
BANKTERM IMS2
```

OM API 入力:

```
CMD(QUERY DB NAME(BA*) SHOW(DEFN))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.181 20:08:12.066851</statime>
<stotime>2011.181 20:08:12.152198</stotime>
<staseq>C8003BEA1E823B0C</staseq>
<stoseq>C8003BEA335864C2</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10130812</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>DB </kwd>
<input>QRY DB NAME(BA*) SHOW(DEFN) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="DB" l1b1="DBName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="AREA" l1b1="AreaName" scope="LCL" sort="a" key="4"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="PART" l1b1="PartName" scope="LCL" sort="a" key="5"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="REPO" l1b1="Repo" scope="LCL" sort="d" key="2" scroll="no"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="IMSID" l1b1="IMSid" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="TYP" l1b1="TYPE" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="RACC" l1b1="Acc" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="LACC" l1b1="LAcc" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="RRSDNT" l1b1="Rsdnt" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="RSDNT" l1b1="LDRsdnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="LRSDNT" l1b1="LRsdnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="RTMCR" l1b1="TimeCreate" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="TMCR" l1b1="LTimeCreate" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="RTMUP" l1b1="TimeUpdate" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="TMUP" l1b1="LTimeUpdate" scope="LCL" sort="n" key="0"
```

```

scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1b1="TMAC" l1b1="LTimeAccess" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="TMIM" l1b1="LTimeImport" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DB(BANKATMS) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP( ) LACC(EXCL)
IMSID(IMS1 ) LRSNT(N) TMC(2011.181 10:22:15.10) TMUP(
) TMIM( ) TMAC( ) </rsp>
<rsp>DB(BANKFNCL) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP( ) LACC(EXCL)
IMSID(IMS1 ) LRSNT(N) TMC(2011.181 10:22:15.10) TMUP(
) TMIM( ) TMAC( ) </rsp>
<rsp>DB(BANKLDGR) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP( ) LACC(EXCL)
IMSID(IMS1 ) LRSNT(N) TMC(2011.181 10:22:15.10) TMUP(
) TMIM( ) TMAC( ) </rsp>
<rsp>DB(BANKTERM) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP( ) LACC(EXCL)
IMSID(IMS1 ) LRSNT(N) TMC(2011.181 10:22:15.10) TMUP(
) TMIM( ) TMAC( ) </rsp>
<rsp>DB(BANKATMS) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RACC(EXCL) RRSNT(N)
RTMC(2011.181 10:22:15.10) </rsp>
<rsp>DB(BANKFNCL) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RACC(EXCL) RRSNT(N)
RTMC(2011.181 10:22:15.10) </rsp>
<rsp>DB(BANKLDGR) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RACC(EXCL) RRSNT(N)
RTMC(2011.181 10:22:15.10) </rsp>
<rsp>DB(BANKTERM) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RACC(EXCL) RRSNT(N)
RTMC(2011.181 10:22:15.10) </rsp>
<rsp>DB(BANKATMS) MBR(IMS2 ) CC( 0) TYP( ) LACC(EXCL)
IMSID(IMS2 ) LRSNT(N) TMC(2011.181 10:20:47.82) TMUP(
) TMIM( ) TMAC( ) </rsp>
<rsp>DB(BANKFNCL) MBR(IMS2 ) CC( 0) TYP( ) LACC(EXCL)
IMSID(IMS2 ) LRSNT(N) TMC(2011.181 10:20:47.82) TMUP(
) TMIM( ) TMAC( ) </rsp>
<rsp>DB(BANKLDGR) MBR(IMS2 ) CC( 0) TYP( ) LACC(EXCL)
IMSID(IMS2 ) LRSNT(N) TMC(2011.181 10:20:47.82) TMUP(
) TMIM( ) TMAC( ) </rsp>
<rsp>DB(BANKTERM) MBR(IMS2 ) CC( 0) TYP( ) LACC(EXCL)
IMSID(IMS2 ) LRSNT(N) TMC(2011.181 10:20:47.82) TMUP(
) TMIM( ) TMAC( ) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: ワイルドカード名に一致するリソースごとに 1 行が返されています。定義されたリソースを持つ各 IMS からのリソース定義と、グローバル・リポジトリ定義が返されています。リポジトリ情報は、コマンド・マスター IMS によって返されています。リポジトリ内には、ワイルドカード名に一致するリソース名ごとの IMS 固有のセクションはありません。

QUERY DB コマンドの例 8

TSO SPOC 入力:

```

QRY DB NAME(BANKATMS,DEDBJN21,BE3PARTS,NEWDB1)
SHOW(DEFN,IMSID,ACCTYPE,RESIDENT)

```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

DBName	MbrName	CC	CCText	Repo	IMSid	TYPE	Acc
BANKATMS	IMS1	0		Y			EXCL
BANKATMS	IMS1	0		Y	IMS1		EXCL
BANKATMS	IMS1	0		Y	IMS2		EXCL
BANKATMS	IMS1	0		Y	IMS3		EXCL
BANKATMS	IMS1	0		Y	IMS4		EXCL
BANKATMS	IMS1	0			IMS1		

BANKATMS	IMS2	0				IMS2		
BANKATMS	IMS3	0				IMS3		
BE3PARTS	IMS1	0		Y				EXCL
BE3PARTS	IMS1	0		Y		IMS1		EXCL
BE3PARTS	IMS1	0		Y		IMS2		UPD
BE3PARTS	IMS1	0		Y		IMS3		READ
BE3PARTS	IMS1	0		Y		IMS4		EXCL
BE3PARTS	IMS1	0				IMS1	DL/I	
BE3PARTS	IMS2	0				IMS2	DL/I	
BE3PARTS	IMS3	0				IMS3	DL/I	
DEDBJN21	IMS1	0		Y				UPD
DEDBJN21	IMS1	0		Y		IMS1		UPD
DEDBJN21	IMS1	0		Y		IMS2		UPD
DEDBJN21	IMS1	0		Y		IMS3		UPD
DEDBJN21	IMS1	0		Y		IMS4		UPD
DEDBJN21	IMS1	0				IMS1	DEDB	
DEDBJN21	IMS2	0				IMS2	DEDB	
DEDBJN21	IMS3	0				IMS3	DEDB	
NEWDB1	IMS1	10	REPOSITORY MEMBER NOT FOUND			Y		
NEWDB1	IMS1	0				IMS1		
NEWDB1	IMS2	10	NO RESOURCES FOUND					
NEWDB1	IMS3	10	NO RESOURCES FOUND					

(右にスクロール、画面 2)

DBName	MbrName	Repo	IMSid	TYPE	Acc	LAcc	Rsdnt	LDRsdnt	LRsdnt
BANKATMS	IMS1	Y			EXCL		N		
BANKATMS	IMS1	Y	IMS1		EXCL		N		
BANKATMS	IMS1	Y	IMS2		EXCL		N		
BANKATMS	IMS1	Y	IMS3		EXCL		N		
BANKATMS	IMS1	Y	IMS4		EXCL		N		
BANKATMS	IMS1		IMS1			EXCL			N
BANKATMS	IMS2		IMS2			EXCL			N
BANKATMS	IMS3		IMS3			EXCL			N
BE3PARTS	IMS1	Y			EXCL		N		
BE3PARTS	IMS1	Y	IMS1		EXCL		N		
BE3PARTS	IMS1	Y	IMS2		UPD		N		
BE3PARTS	IMS1	Y	IMS3		READ		Y		
BE3PARTS	IMS1	Y	IMS4		EXCL		N		
BE3PARTS	IMS1		IMS1	DL/I		EXCL			N
BE3PARTS	IMS2		IMS2	DL/I		UPD			N
BE3PARTS	IMS3		IMS3	DL/I		READ	Y		N
DEDBJN21	IMS1	Y			UPD		Y		
DEDBJN21	IMS1	Y	IMS1		UPD		Y		
DEDBJN21	IMS1	Y	IMS2		UPD		Y		
DEDBJN21	IMS1	Y	IMS3		UPD		Y		
DEDBJN21	IMS1	Y	IMS4		UPD		Y		
DEDBJN21	IMS1		IMS1	DEDB		UPD			Y
DEDBJN21	IMS2		IMS2	DEDB		UPD			Y
DEDBJN21	IMS3		IMS3	DEDB		UPD			Y
NEWDB1	IMS1	Y							
NEWDB1	IMS1		IMS1			UPD			N
NEWDB1	IMS2								
NEWDB1	IMS3								

OM API 入力:

```
CMD(QRY DB NAME(BANKATMS,DEDBJN21,BE3PARTS,NEWDB1)
SHOW(DEFN,IMSID,ACCTYPE,RESIDENT))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.181 22:47:45.395196</statime>
```

```

<stotime>2011.181 22:47:45.414012</stotime>
<staseq>C8005F93F4DFC05C</staseq>
<stoseq>C8005F93F977C345</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10154745</rqsttkn1>
<rc>0200000C</rc>
<rsn>00003008</rsn>
<rsnmsg>CSLN054I</rsnmsg>
<rsntxt>None of the clients were successful.</rsntxt>
</ctl>
<cmderr>
<mbr name="IMS1  ">
<typ>IMS      </typ>
<styp>DBDC    </styp>
<rc>0000000C</rc>
<rsn>00003000</rsn>
<rsntxt>At least one request successful</rsntxt>
</mbr>
<mbr name="IMS3  ">
<typ>IMS      </typ>
<styp>DBDC    </styp>
<rc>0000000C</rc>
<rsn>00003000</rsn>
<rsntxt>At least one request successful</rsntxt>
</mbr>
<mbr name="IMS2  ">
<typ>IMS      </typ>
<styp>DBDC    </styp>
<rc>0000000C</rc>
<rsn>00003000</rsn>
<rsntxt>At least one request successful</rsntxt>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>IMS1  </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>DB          </kwd>
<input>QRY DB NAME(BANKATMS,DEDBJN21,BE3PARTS,NEWDB1)
      SHOW(DEFN,IMSID,ACCTYPE,RESIDENT) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="DB" l1b1="DBName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="AREA" l1b1="AreaName" scope="LCL" sort="a" key="4"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="PART" l1b1="PartName" scope="LCL" sort="a" key="5"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="REPO" l1b1="Repo" scope="LCL" sort="d" key="2" scroll="no"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="IMSID" l1b1="IMSid" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="TYP" l1b1="TYPE" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="RACC" l1b1="Acc" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="LACC" l1b1="LAcc" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="RRSDNT" l1b1="Rsdnt" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="RSDNT" l1b1="LDRsdnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />

```

```

<hdr s1b1="LRSDNT" l1b1="LRsdnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DB(BANKATMS) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP( ) LACC(EXCL)
  IMSID(IMS1 ) LRSNT(N) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(DEDB ) LACC(UPD)
  IMSID(IMS1 ) LRSNT(Y) </rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(DL/I ) LACC(EXCL)
  IMSID(IMS1 ) LRSNT(N) </rsp>
<rsp>DB(NEWDB1 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP( ) LACC(UPD)
  IMSID(IMS1 ) LRSNT(N) </rsp>
<rsp>DB(BANKATMS) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RACC(EXCL) RRSNT(N)
</rsp>
<rsp>DB(BANKATMS) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS1 )
  RACC(EXCL) RRSNT(N) </rsp>
<rsp>DB(BANKATMS) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS2 )
  RACC(EXCL) RRSNT(N) </rsp>
<rsp>DB(BANKATMS) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS3 )
  RACC(EXCL) RRSNT(N) </rsp>
<rsp>DB(BANKATMS) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS4 )
  RACC(EXCL) RRSNT(N) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RACC(UPD ) RRSNT(Y)
</rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS1 )
  RACC(UPD ) RRSNT(Y) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS2 )
  RACC(UPD ) RRSNT(Y) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS3 )
  RACC(UPD ) RRSNT(Y) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS4 )
  RACC(UPD ) RRSNT(Y) </rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RACC(EXCL) RRSNT(N)
</rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS1 )
  RACC(EXCL) RRSNT(N) </rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS2 )
  RACC(UPD ) RRSNT(N) </rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS3 )
  RACC(READ) RRSNT(Y) </rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS4 )
  RACC(EXCL) RRSNT(N) </rsp>
<rsp>DB(NEWDB1 ) MBR(IMS1 ) CC( 103) CCTXT(REPOSITORY MEMBER NOT
  FOUND) REPO(Y) </rsp>
<rsp>DB(BANKATMS) MBR(IMS3 ) CC( 0) TYP( ) LACC(EXCL)
  IMSID(IMS3 ) LRSNT(N) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) MBR(IMS3 ) CC( 0) TYP(DEDB ) LACC(UPD)
  IMSID(IMS3 ) LRSNT(Y) </rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS3 ) CC( 0) TYP(DL/I ) LACC(READ)
  IMSID(IMS3 ) RSDNT(Y) LRSNT(N) </rsp>
<rsp>DB(NEWDB1 ) MBR(IMS3 ) CC( 10) CCTXT(NO RESOURCES FOUND)
</rsp>
<rsp>DB(BANKATMS) MBR(IMS2 ) CC( 0) TYP( ) LACC(EXCL)
  IMSID(IMS2 ) LRSNT(N) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) MBR(IMS2 ) CC( 0) TYP(DEDB ) LACC(UPD)
  IMSID(IMS2 ) LRSNT(Y) </rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS2 ) CC( 0) TYP(DL/I ) LACC(UPD)
  IMSID(IMS2 ) LRSNT(N) </rsp>
<rsp>DB(NEWDB1 ) MBR(IMS2 ) CC( 10) CCTXT(NO RESOURCES FOUND)
</rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: SHOW(IMSID) が指定されているため、リポジトリに定義されたリソースを持つ IMS ごとに 1 行が返されます。5 行目は、IMS4 に対する BANKATMS 定義は IMS4 用のリポジトリに定義されていますが、その定義はまだ IMS4 にイ

ンポートされていないことを示しています。IMS4 にはデータベース BANKATMS 用のローカル行が表示されていないからです。

QUERY DB コマンドの例 9

TSO SPOC 入力:

```
QRY DB NAME(BANKATMS,DEDBJN21,BE3PARTS,NEWDB1) SHOW(DEFN,GLOBAL)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

DBName	MbrName	CC	CCText	Repo	IMSid	Acc	Rsdnt	
BANKATMS	IMS1	0		Y		EXCL	N	
BE3PARTS	IMS1	0		Y		EXCL	N	
BE3PARTS	IMS1	0		Y	IMS2	UPD	N	
BE3PARTS	IMS1	0		Y	IMS3	READ	Y	
DEDBJN21	IMS1	0		Y		UPD	Y	
NEWDB1	IMS1	1D3 REPOSITORY MEMBER NOT FOUND						Y

(右にスクロールして、画面 2 へ)

DBName	MbrName	Repo	TimeCreate	TimeUpdate
BANKATMS	IMS1	Y	2011.181 15:22:52.65	
BE3PARTS	IMS1	Y	2011.181 15:22:52.65	
BE3PARTS	IMS1	Y	2011.181 15:21:25.99	
BE3PARTS	IMS1	Y	2011.181 15:22:07.39	2011.181 15:45:37.08
DEDBJN21	IMS1	Y	2011.181 15:22:52.65	
NEWDB1	IMS1	Y		

OM API 入力:

```
CMD(QRY DB NAME(BANKATMS,DEDBJN21,BE3PARTS,NEWDB1) SHOW(DEFN,GLOBAL) )
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.181 22:57:34.679151</statime>
<stotime>2011.181 22:57:34.700833</stotime>
<staseq>C80061C5F106F650</staseq>
<stoseq>C80061C5F652109E</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10155734</rqsttkn1>
<rc>0200000C</rc>
<rsn>0000300C</rsn>
<rsnmsg>CSLN055I</rsnmsg>
<rsntxt>The command completed with warning(s).</rsntxt>
</ctl>
<cmderr>
<mbr name="IMS1 ">
<typ>IMS </typ>
<styp>DBDC </styp>
<rc>0000000C</rc>
<rsn>00003000</rsn>
<rsntxt>At least one request successful</rsntxt>
</mbr>
<mbr name="IMS3 ">
<typ>IMS </typ>
<styp>DBDC </styp>
<rc>00000004</rc>
<rsn>00001000</rsn>
<rsntxt>IMS not master, cmd ignored</rsntxt>
</mbr>
<mbr name="IMS2 ">
```



```

</typ>IMS      </typ>
<styp>DBDC     </styp>
<rc>00000004</rc>
<rsn>00001000</rsn>
<rsntxt>IMS not master, cmd ignored</rsntxt>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>IMS1   </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>DB        </kwd>
<input>QRY DB NAME(BANKATMS,DEDBJN21,BE3PARTS,NEWDB1) SHOW(DEFN,GLOBAL)
</input>
</cmd>
<cmdsphdr>
<hdr slbl="DB" llbl="DBName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr slbl="AREA" llbl="AreaName" scope="LCL" sort="a" key="4"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr slbl="PART" llbl="PartName" scope="LCL" sort="a" key="5"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr slbl="MBR" llbl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr slbl="CC" llbl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr slbl="CCTXT" llbl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr slbl="REPO" llbl="Repo" scope="LCL" sort="d" key="2" scroll="no"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr slbl="IMSID" llbl="IMSid" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr slbl="RACC" llbl="Acc" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr slbl="RRSDNT" llbl="Rsdnt" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr slbl="RTMCR" llbl="TimeCreate" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr slbl="RTMUP" llbl="TimeUpdate" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
</cmdsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DB(BANKATMS) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RACC(EXCL) RRSNT(N)
  RTMCR(2011.181 15:22:52.65) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RACC(UPD ) RRSNT(Y)
  RTMCR(2011.181 15:22:52.65) </rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RACC(EXCL) RRSNT(N)
  RTMCR(2011.181 15:22:52.65) </rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS2 )
  RACC(UPD ) RRSNT(N) RTMCR(2011.181 15:21:25.99) </rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS3 )
  RACC(READ) RRSNT(Y) RTMUP(2011.181 15:45:37.08) RTMCR(2011.181
  15:22:07.39) </rsp>
<rsp>DB(NEWDB1 ) MBR(IMS1 ) CC( 1D3) CCTXT(REPOSITORY MEMBER NOT
  FOUND) REPO(Y) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: SHOW(DEFN,GLOBAL) が指定されているため、指定されたリソース名について、リポジトリから保管済みリソース定義情報が返されています。リポジトリ内の保管済みリソース定義から、アクセス・タイプ、常駐、作成時刻、および更新時刻が返されています。出力には、汎用リソース定義および IMS 固有のセクションが含まれています。汎用リソース定義は、IMSID 列がブランクになっています。IMS 固有のセクションには、汎用定義とは異なる定義を持つ IMS の IMSID

が入っています。読みやすくするために、DBName 列と MbrName 列は、出力を右にスクロールしたときに繰り返し表示されます。

QUERY DB コマンドの例 10

TSO SPOC 入力:

```
QRY DB NAME(BANKATMS,DEDBJN21,BE3PARTS,NEWDB1) SHOW(DEFN,LOCAL)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

DBName	MbrName	CC	CCText	IMSid	TYPE	LAcc	LDRsdnt	LRsdnt
BANKATMS	IMS1	0		IMS1		EXCL		N
BANKATMS	IMS2	0		IMS2		EXCL		N
BANKATMS	IMS3	0		IMS3		EXCL		N
BE3PARTS	IMS1	0		IMS1	DL/I	EXCL		N
BE3PARTS	IMS2	0		IMS2	DL/I	UPD		N
BE3PARTS	IMS3	0		IMS3	DL/I	READ Y		N
DEDBJN21	IMS1	0		IMS1	DEDB	UPD		Y
DEDBJN21	IMS2	0		IMS2	DEDB	UPD		Y
DEDBJN21	IMS3	0		IMS3	DEDB	UPD		Y
NEWDB1	IMS1	0		IMS1		UPD		N
NEWDB1	IMS2	10	NO RESOURCES FOUND					
NEWDB1	IMS3	10	NO RESOURCES FOUND					

(右にスクロールして、画面 2 へ)

DBName	MbrName	LTimeCreate	LTimeUpdate	LTimeAccess
BANKATMS	IMS1	2011.181 15:22:52.65		
BANKATMS	IMS2	2011.181 15:21:25.99		
BANKATMS	IMS3	2011.181 15:22:07.39		
BE3PARTS	IMS1	2011.181 15:22:52.65		
BE3PARTS	IMS2	2011.181 15:21:25.99	2011.181 15:42:22.19	
BE3PARTS	IMS3	2011.181 15:22:07.39	2011.181 15:45:32.27	
DEDBJN21	IMS1	2011.181 15:22:52.65		
DEDBJN21	IMS2	2011.181 15:21:25.99		
DEDBJN21	IMS3	2011.181 15:22:07.39		
NEWDB1	IMS1	2011.181 15:42:43.01		
NEWDB1	IMS2			
NEWDB1	IMS3			

OM API 入力:

```
CMD(QRY DB NAME(BANKATMS,DEDBJN21,BE3PARTS,NEWDB1) SHOW(DEFN,LOCAL) )
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.181 23:06:01.535261</statime>
<stotime>2011.181 23:06:01.559762</stotime>
<staseq>C80063A95131DA82</staseq>
<stoseq>C80063A9572D2645</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10160601</rqsttkn1>
<rc>0200000C</rc>
<rsn>00003000</rsn>
<rsnmsg>CSLN023I</rsnmsg>
<rsntxt>At least one request was successful.</rsntxt>
</ctl>
<cmderr>
<mbr name="IMS3 ">
<typ>IMS </typ>
```

```

<styp>DBDC </styp>
<rc>0000000C</rc>
<rsn>00003000</rsn>
<rsntxt>At least one request successful</rsntxt>
</mbr>
<mbr name="IMS2 ">
<typ>IMS </typ>
<styp>DBDC </styp>
<rc>0000000C</rc>
<rsn>00003000</rsn>
<rsntxt>At least one request successful</rsntxt>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>DB </kwd>
<input>QRY DB NAME(BANKATMS,DEDBJN21,BE3PARTS,NEWDB1) SHOW(DEFN,LOCAL)
</input>
</cmd>
<cmdsphdr>
<hdr s1bl="DB" l1bl="DBName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="AREA" l1bl="AreaName" scope="LCL" sort="a" key="4"
scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="PART" l1bl="PartName" scope="LCL" sort="a" key="5"
scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="IMSID" l1bl="IMSid" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TYP" l1bl="TYPE" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="LACC" l1bl="LAcc" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="RSDNT" l1bl="LDRsdnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LRSDNT" l1bl="LRsdnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMCR" l1bl="LTimeCreate" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMUP" l1bl="LTimeUpdate" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TMAC" l1bl="LTimeAccess" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMIM" l1bl="LTimeImport" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
</cmdsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DB(BANKATMS) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP( ) LACC(EXCL)
IMSID(IMS1 ) LRSNT(N) TMCR(2011.181 15:22:52.65) TMUP(
) TMIM( ) TMAC( ) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(DEDB ) LACC(UPD)
IMSID(IMS1 ) LRSNT(Y) TMCR(2011.181 15:22:52.65) TMUP(
) TMIM( ) </rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP(DL/I ) LACC(EXCL)
IMSID(IMS1 ) LRSNT(N) TMCR(2011.181 15:22:52.65) TMUP(
) TMIM( ) TMAC( ) </rsp>
<rsp>DB(NEWDB1 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP( ) LACC(UPD)
IMSID(IMS1 ) LRSNT(N) TMCR(2011.181 15:42:43.01) TMUP(
) TMIM( ) TMAC( ) </rsp>
<rsp>DB(BANKATMS) MBR(IMS3 ) CC( 0) TYP( ) LACC(EXCL)

```

```

    IMSID(IMS3    ) LRSNT(N) TMCR(2011.181 15:22:07.39) TMUP(
      ) TMIM(      ) TMAC(      ) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) MBR(IMS3    ) CC(  0) TYP(DEDB    ) LACC(UPD)
    IMSID(IMS3    ) LRSNT(Y) TMCR(2011.181 15:22:07.39) TMUP(
      ) TMIM(      ) </rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS3    ) CC(  0) TYP(DL/I    ) LACC(READ)
    IMSID(IMS3    ) LRSNT(Y) LRSNT(N) TMCR(2011.181 15:22:07.39)
    TMUP(2011.181 15:45:32.27) TMIM(      ) TMAC(
      ) </rsp>
<rsp>DB(NEWDB1  ) MBR(IMS3    ) CC( 10) CCTXT(NO RESOURCES FOUND)
</rsp>
<rsp>DB(BANKATMS) MBR(IMS2    ) CC(  0) TYP(      ) LACC(EXCL)
    IMSID(IMS2    ) LRSNT(N) TMCR(2011.181 15:21:25.99) TMUP(
      ) TMIM(      ) TMAC(      ) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) MBR(IMS2    ) CC(  0) TYP(DEDB    ) LACC(UPD)
    IMSID(IMS2    ) LRSNT(Y) TMCR(2011.181 15:21:25.99) TMUP(
      ) TMIM(      ) </rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS2    ) CC(  0) TYP(DL/I    ) LACC(UPD)
    IMSID(IMS2    ) LRSNT(N) TMCR(2011.181 15:21:25.99) TMUP(2011.181
    15:42:22.19) TMIM(      ) TMAC(      )
</rsp>
<rsp>DB(NEWDB1  ) MBR(IMS2    ) CC( 10) CCTXT(NO RESOURCES FOUND)
</rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: 指定されたリソース名について、IMS システムのランタイム・リソース定義が返されます。SHOW(LOCAL) が指定されているため、各 IMS システムからのローカル・ランタイム定義のみが返されています。リポジトリからの保管済みリソース定義は返されていません。

QUERY DB コマンドの例 11

TSO SPOC 入力:

```
QRY DB NAME(BANKATMS,DEDBJN21,BE3PARTS) SHOW(IMSID)
```

TSO SPOC 出力:

DBName	MbrName	CC	Repo	IMSid
BANKATMS	IMS1	0	Y	IMS1
BANKATMS	IMS1	0	Y	IMS2
BANKATMS	IMS1	0	Y	IMS3
BANKATMS	IMS1	0	Y	IMS4
BE3PARTS	IMS1	0	Y	IMS1
BE3PARTS	IMS1	0	Y	IMS3
BE3PARTS	IMS1	0	Y	IMS2
BE3PARTS	IMS1	0	Y	IMS4
DEDBJN21	IMS1	0	Y	IMS3
DEDBJN21	IMS1	0	Y	IMS1
DEDBJN21	IMS1	0	Y	IMS2
DEDBJN21	IMS1	0	Y	IMS4

OM API 入力:

```
CMD(QRY DB NAME(BANKATMS,DEDBJN21,BE3PARTS) SHOW(IMSID))
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OMIOM </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.181 23:14:08.509271</statime>

```

```

<stotime>2011.181 23:14:08.533678</stotime>
<staseq>C8006579BB557B48</staseq>
<stoseq>C8006579C14AE3CA</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10161408</rqsttkn1>
<rc>02000004</rc>
<rsn>00001014</rsn>
<rsnmsg>CSLN055I</rsnmsg>
<rsntxt>At least one request completed with warning(s).</rsntxt>
</ctl>
<cmderr>
<mbr name="IMS3  ">
<typ>IMS      </typ>
<styp>DBDC    </styp>
<rc>00000004</rc>
<rsn>00001000</rsn>
<rsntxt>IMS not master, cmd ignored</rsntxt>
</mbr>
<mbr name="IMS2  ">
<typ>IMS      </typ>
<styp>DBDC    </styp>
<rc>00000004</rc>
<rsn>00001000</rsn>
<rsntxt>IMS not master, cmd ignored</rsntxt>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>IMS1  </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>DB          </kwd>
<input>QRY DB NAME(BANKATMS,DEDBJN21,BE3PARTS) SHOW(IMSID) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="DB" l1bl="DBName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="AREA" l1bl="AreaName" scope="LCL" sort="a" key="4"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="PART" l1bl="PartName" scope="LCL" sort="a" key="5"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="REPO" l1bl="Repo" scope="LCL" sort="d" key="2" scroll="no"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="IMSID" l1bl="IMSId" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DB(BANKATMS) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS1 ) </rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS1 ) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS1 ) </rsp>
<rsp>DB(BANKATMS) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS2 ) </rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS2 ) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS2 ) </rsp>
<rsp>DB(BANKATMS) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS3 ) </rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS3 ) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS3 ) </rsp>
<rsp>DB(BANKATMS) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS4 ) </rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS4 ) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN21) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS4 ) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: DEFN フィルターなしで SHOW(IMSID) キーワードが指定されています。指定されたリソース名について、リポジトリーからの IMSID 情報が返されています。リポジトリーの IMS リソース・リストに指定されたリソース名を持つ IMSID が、IMSid 列に返されています。すべての IMSID 情報が IMSid 列に返されています。

QUERY DB コマンドの例 12

この例では、TYPE が HISAM または SHISAM 副次索引データベース用の DHISNDX に設定されています。

TSO SPOC 入力:

```
QUERY DB NAME(D*) SHOW(ACCTYPE)
```

TSO SPOC 出力:

DATABASE	TYPE	TOTAL UNUSED	TOTAL UNUSED	ACC	CONDITIONS	IMS1
DBHDOJ01	PHDAM			UP		IMS1
PDHDOJA	PART			UP	NOTOPEN	IMS1
PDHDOJB	PART			UP	NOTOPEN	IMS1
PDHDOJC	PART			UP	NOTOPEN	IMS1
PDHDOJD	PART			UP	NOTOPEN	IMS1
DEDBJN24	DEDB	SEQ DEPEND	DIRECT ADDRES	UP	NOTOPEN	IMS1
DB24A000	AREA	N/A	N/A	N/A	NOTOPEN	IMS1
DB24A001	AREA	N/A	N/A	N/A	NOTOPEN	IMS1
DB24A239	AREA	N/A	N/A	N/A	NOTOPEN	IMS1
DEHSJX24	DHISNDX			UP	NOTOPEN	IMS1
09043/155658		IMS1				

説明: DBHDOJ01 は、4 つの区画 (PDHDOJA、PDHDOJB、PDHDOJC、および PDHDOJD) を持つ PHDAM データベースです。DEDBJN24 は、3 つのエリア (DB24A000、DB24A001、および DB24A239) を持つ HISAM または SHISAM 副次索引データベースです。DEHSJX24 は、HISAM または SHISAM 副次索引データベースです。各データベースのローカル・アクセスは UPDATE です。

QUERY DB コマンドの例 13

この例では、TYPE が HISAM または SHISAM 副次索引データベース用の DHISNDX に設定されています。

TSO SPOC 入力:

```
QUERY DB NAME(D*) SHOW(ACCTYPE)
```

TSO SPOC 出力:

DBName	AreaName	PartName	MbrName	CC	TYPE	LAcc
DBHDOJ01			IMS1	0	PHDAM	UPD
DBHDOJ01		PDHDOJA	IMS1	0	PART	UPD
DBHDOJ01		PDHDOJB	IMS1	0	PART	UPD
DBHDOJ01		PDHDOJC	IMS1	0	PART	UPD
DBHDOJ01		PDHDOJD	IMS1	0	PART	UPD
DEDBJN24			IMS1	0	DEDB	UPD
DEDBJN24	DB24A000		IMS1	0	AREA	
DEDBJN24	DB24A001		IMS1	0	AREA	
DEDBJN24	DB24A239		IMS1	0	AREA	
DEHSJX24			IMS1	0	DHISNDX	UPD

説明: DBHDOJ01 は、4 つの区画 (PDHDOJA、PDHDOJB、PDHDOJC、および PDHDOJD) を持つ PHDAM データベースです。DEDBJN24 は、3 つのエリア (DB24A000、DB24A001、および DB24A239) を持つ HISAM または SHISAM 副次索引データベースです。DEHSJX24 は、HISAM または SHISAM 副次索引データベースです。各データベースのローカル・アクセス・タイプは UPDATE です。

QUERY DB コマンドの例 14

TSO SPOC 入力:

```
QUERY DB NAME(D*) TYPE(DHISNDX,DEDB)
```

TSO SPOC 出力:

DBName	AreaName	MbrName	CC	TYPE
DEDBJN24		IMS1	0	DEDB
DEDBJN24	DB24A000	IMS1	0	AREA
DEDBJN24	DB24A001	IMS1	0	AREA
DEDBJN24	DB24A239	IMS1	0	AREA
DEHSJX24		IMS1	0	DHISNDX

説明: DEDBJN24 は、3 つのエリア (DB24A000、DB24A001、および DB24A239) を持つ HISAM または SHISAM 副次索引データベースです。DEHSJX24 は、DEDB 1 次データベースの HISAM または SHISAM 副次索引データベースです。

QUERY DB コマンドの例 15

TSO SPOC 入力:

```
QUERY DB NAME(DEDBGS1A,FPSI1AH*) SHOW(SNDX)
```

TSO SPOC 出力:

```
Response for: QUERY DB NAME(DEDBGS1A,FPSI1AH*) SHOW(SNDX)
```

DBName	AreaName	SndxName	MbrName	CC	CCText	TYPE
DEDBGS1A			IMS1	0		DEDB
DEDBGS1A		FPSI1AHA	IMS1	0		DHISNDX
DEDBGS1A		FPSI1AH1	IMS1	0		DHISNDX
DEDBGS1A		FPSI1AH2	IMS1	0		DHISNDX
DEDBGS1A	GS1AAR0		IMS1	0		AREA
DEDBGS1A	GS1AAR1		IMS1	0		AREA
DEDBGS1A	GS1AAR2		IMS1	0		AREA
DEDBGS1A	GS1AAR3		IMS1	0		AREA
DEDBGS1A	GS1AAR4		IMS1	0		AREA
DEDBGS1A	GS1AAR5		IMS1	0		AREA
DEDBGS1A	GS1AAR6		IMS1	0		AREA
FPSI1AHA			IMS1	193	NOT A	DEDB
FPSI1AH1			IMS1	193	NOT A	DEDB
FPSI1AH2			IMS1	193	NOT A	DEDB

説明: DEDBGS1A は 7 つのエリア (GS1AAR0、GS1AAR1、GS1AAR2、GS1AAR3、GS1AAR4、GS1AAR5、および GS1AAR6) を持つ DEDB データベースです。DEDBGS1A は、3 つの HISAM または SHISAM 副次索引データベース (FPSI1AHA、FPSI1AH1、および FPSI1AH2) を持っています。データベース FPSI1AHA、FPSI1AH1、および FPSI1AH2 は、DEDB データベースではないので、定義された高速機能副次索引データベースを持つことはできません。これらのデータベースは完了コード 193 を取得しています。これは、それらが DEDB データベースではないことを示しています。

QUERY DB コマンドの例 16

以下の例は、現在 HALDB オンライン変更機能によって処理されている HALDB マスター・データベース (DBVHDJ05) と 2 つの区画 (PVHDJ5B および PVHDJ5D) を示しています。

TSO SPOC 入力:

```
QRY DB NAME(DBVHDJ05) SHOW(WORK)
```

TSO SPOC 出力:

DBName	PartName	MbrName	CC	TYPE	Work
DBVHDJ05		IMS1	0	PHDAM	ALTER INCOMPLETE
DBVHDJ05	PVHDJ5B	IMS1	0	PART	ALTER INCOMPLETE
DBVHDJ05	PVHDJ5D	IMS1	0	PART	ALTER INCOMPLETE

QUERY DB コマンドの例 17

TSO SPOC 入力:

```
QUERY DB NAME(DB0*) SHOW(EXPORTNEEDED)
```

TSO SPOC 出力:

DBName	MbrName	CC	TYPE	ExportNeeded
DB000001	IMS1	0		N
DB000002	IMS1	0		Y

OM API 入力:

```
CMD(QUERY DB SHOW(EXPORTNEEDED))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.7.0</omvsn>
<xm1vsn>20</xm1vsn>
<statime>2014.337 22:30:51.302415 22:30:51</statime>
<stotime>2014.337 22:30:51.302792</stotime>
<staseq>CE267AE1EFA0F110</staseq>
<stoseq>CE267AE1EFB88990</stoseq>
<rqsttkn1>1234 </rqsttkn1>
<rc>00000000</rc><rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>DB </kwd>
<input>QUERY DB NAME(DB%0000%) SHOW(EXPORTNEEDED) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="DB" l1b1="DBName" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="AREA" l1b1="AreaName" scope="LCL" sort="a" key="4"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="PART" l1b1="PartName" scope="LCL" sort="a" key="5"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="3"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
```



```

<hdr s1b1="TYP" l1b1="TYPE" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="EXPN" l1b1="ExportNeeded" scope="LCL" sort="y" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DB(DBR000001) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP( ) EXPN(Y) </rsp>
<rsp>DB(DB000002) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYP( ) EXPN(Y) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

QUERY DB コマンドの例 18

TSO SPOC 入力:

```
QUERY DB NAME(PSSH1VA) SHOW(DEFNTYPE)
```

TSO SPOC 出力:

DBName	MbrName	CC	DEFNTYPE
PSSH1VA	IMS1	0	PGMCREAT

関連概念:

[🔗](#) CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

[🔗](#) /DISPLAY DB コマンド (コマンド)

[🔗](#) /DISPLAY DBD コマンド (コマンド)

[🔗](#) /DISPLAY MODIFY コマンド (コマンド)

[🔗](#) /DISPLAY STATUS コマンド (コマンド)

[🔗](#) コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

QUERY DBDESC コマンド

QUERY DBDESC コマンドは、データベース記述子に関する情報を照会するために使用します。記述子は、記述子またはリソースの作成に使用できるモデルです。

サブセクション:

- 『環境』
- 110 ページの『構文』
- 110 ページの『キーワード』
- 114 ページの『使用上の注意』
- 114 ページの『出力フィールド』
- 120 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 122 ページの『例』

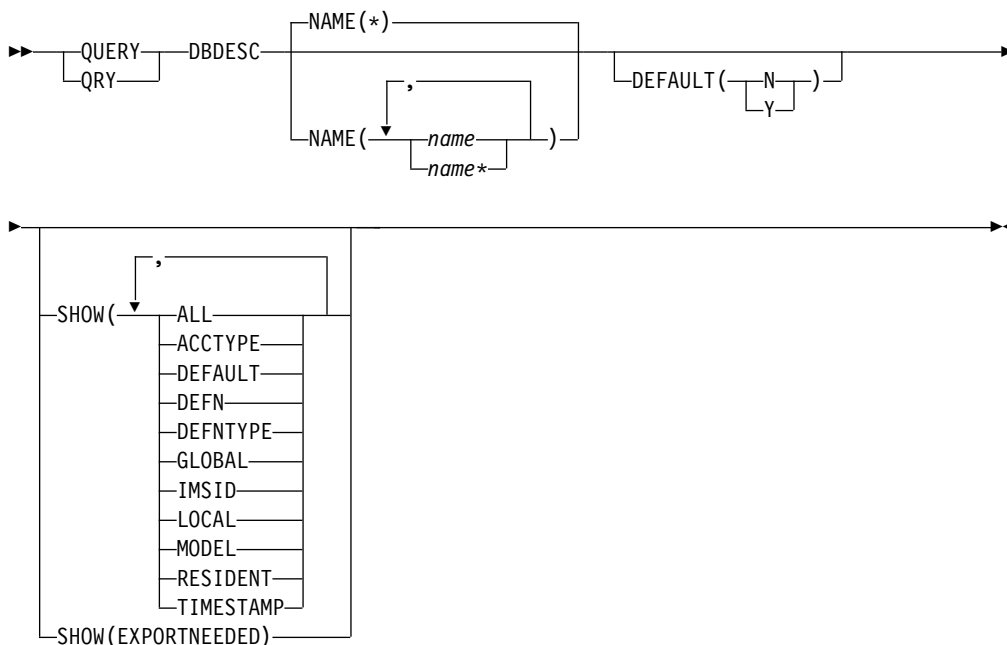
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 25. QUERY DBDESC コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUERY DBDESC	X	X	
NAME	X		X
DEFAULT	X		X
SHOW	X		X

構文



キーワード

以下のキーワードは、QUERY DBDESC コマンドに有効です。

DEFAULT ()

どの記述子 (複数可) を表示するかを指定します。

N デフォルト以外のすべてのデータベース記述子を表示します。

Y デフォルトのデータベース記述子を表示します。

NAME ()

データベース記述子の名前 (1 から 8 文字) を指定します。名前にはワイルドカードを指定することができます。名前は反復可能なパラメーターです。デフォルトは NAME(*) で、これはすべてのデータベース記述子を戻します。

SHOW ()

戻されるデータベース記述子出力フィールドを指定します。常にデータベース記述子名が、そのデータベース記述子に関する出力を作成した IMS の名前および完了コードと共に戻されます。SHOW キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあります。

ALL

データベース記述子自体に関するすべての情報を返します。

制約事項: SHOW(EXPORTNEEDED) を指定した場合に返される ExportNeeded 列は、SHOW(ALL) では返されません。

ACCTYPE

このデータベース記述子を使用して作成されたデータベースへのアクセスのタイプ。

DEFAULT

デフォルト記述子オプション。

DEFN

リソース定義を戻すように指定します。

戻されるデータベース記述子属性には、

ACCTYPE、DEFAULT、RESIDENT、リポジトリ内の作成および更新のタイム・スタンプ、および IMS ランタイムの作成、更新、インポート、およびアクセスのタイム・スタンプがあります。

SHOW(DEFN) でその他の SHOW フィルターが指定されない場合、または IMSID フィルターが指定されている場合、リポジトリでグローバルに定義された定義属性および IMS システム内でローカルに定義された定義属性を含む、すべての定義属性が戻されます。IMS システムのランタイム・リソース定義は、コマンドを受信する各 IMS によって戻されます。

IMSRSC リポジトリ内の保管済みリソース定義は、コマンド・マスター IMS がそのリポジトリを使用できる場合、コマンド・マスター IMS によって戻されます。

コマンド・マスター IMS は、リポジトリから取得した汎用保管済みリソース定義ごとに応答行を返します。それぞれの応答行には、汎用リソース定義の属性が表示されます。SHOW(DEFN) を IMSID フィルターなしで指定し、すべての IMS システムに定義されている属性値が同一の場合、汎用定義の応答行のみが戻されます。保管済みリソース定義が定義されている IMS システムの IMS ID は戻されません。IMS システムの保管済みリソース定義に、汎用保管済みリソース定義と異なる属性値が 1 つ以上含まれている場合は、属性値が異なる IMS ごとに追加の応答行が戻されます。

SHOW(DEFN,LOCAL) が指定されている場合、コマンドを受信した各 IMS により、IMS システムのランタイム・リソース定義が戻されます。

SHOW(DEFN,GLOBAL) が指定されている場合、コマンド・マスター IMS により、リポジトリの保管済みリソース定義が戻されます。

SHOW(DEFN,GLOBAL) は、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合のみ有効です。

SHOW(DEFN) にその他のパラメーターが指定されている場合、要求された定義属性のみが戻されます。例えば SHOW(DEFN,TIMESTAMP) が指定されている場合、タイム・スタンプのみが戻されます。

制約事項:

- SHOW(DEFN) は、DEFNTYPE および MODEL と一緒に指定することはできません。

- QRY DBDESC SHOW(ALL) コマンドで戻される LModelName 列、LModelType 列、および LDefnType 列は、SHOW(DEFN) では戻されません。
- SHOW(DEFN) を指定した場合に戻される Repo 列および IMSid 列は、SHOW(ALL) では戻されません。

リポジトリからデータベース記述子情報を照会する場合、リポジトリに保管されたリソース定義を使用してリポジトリ情報を持つ応答行を判別し、ランタイム・リソース定義を使用して IMS ランタイム・リソース情報を持つ応答行を判別します。指定されたフィルターと一致する保管済みリソース定義またはランタイム・リソース定義のそれぞれに、応答行が戻されます。SHOW(DEFN,GLOBAL) が指定されている場合、指定されたフィルターと一致する保管済みリソース定義のみが戻されます。SHOW(DEFN,LOCAL) が指定されている場合、指定されたフィルターと一致するランタイム・リソース定義のみが戻されます。

SHOW(DEFN,IMSID) を指定すると、IMS の保管済みリソース定義が汎用リソース定義と同一であるかどうかにかかわらず、汎用保管済みリソース定義に対して応答行が返され、リポジトリにリソースが定義されている IMS ごとに追加の応答行が返されます。

DEFNTYPE

定義タイプ。これは、記述子が定義された方法です。

EXPORTNEEDED

NAME パラメーターに一致し、作成されたか最後に更新されて以降 IMSRSC リポジトリにエクスポートされたことがないデータベース記述子だけを QUERY コマンドで戻すよう指定します。

NAME キーワードが省略されたか NAME(*) が指定された場合、リポジトリにエクスポートする必要があるデータベース記述子の名前だけが戻されます。

NAME キーワードで特定の名前が指定されたか NAME(*) 以外の総称名が指定された場合、コマンドで指定されたデータベース記述子名ごとに 1 行ずつ、応答行が戻されます。指定されたデータベース記述子をリポジトリにエクスポートする必要がない場合は、ExportNeeded 列に N が戻されます。

SHOW(EXPORTNEEDED) は、他のいかなる SHOW パラメーターや他のキーワードとも一緒に指定することはできず、IMS で IMSRSC リポジトリが使用可能になっている場合にのみ有効です。

QUERY DBDESC SHOW(EXPORTNEEDED) コマンドは、XRF 代替システムでは無効です。

ヒント: IMSRSC リポジトリにエクスポートされたことがないリソースおよび記述子の場合、EXPORT DEFN TARGET(REPO) OPTION (CHANGESONLY) コマンドを発行して、リソース定義および記述子定義をリポジトリに書き込み、次回の IMS のコールド・スタートで使用できるようにすることができます。

GLOBAL

リポジトリの保管済みリソース定義を戻すように指定します。

SHOW(GLOBAL,DEFN) が指定される場合、コマンド・マスター IMS により、リポジトリのグローバル・リソース定義が戻されます。
SHOW(GLOBAL,DEFN) は、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合のみ有効です。

IMSID

指定されたリソース名がリソース・リストに含まれている IMS システムの IMSID を返すことを指定します。

SHOW(IMSID) は、コマンド・マスター IMS によってのみ処理され、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合にのみ有効です。

SHOW(IMSID) が DEFN フィルターとともに指定されている場合、保管済みリソース定義に加えて、定義済みのリソースが存在する各 IMS に、別個の行が戻されます。

SHOW(IMSID) が DEFN フィルターなしで指定されている場合、リソース名とともに定義済みのリソースが存在する各 IMS に別個の行が戻されます。リソース定義は戻されません。

SHOW(IMSID) は、DEFN および GLOBAL 以外の SHOW フィルターとともに指定することはできません。SHOW(IMSID,GLOBAL) が指定されている場合、GLOBAL は無視されます。つまり、SHOW(IMSID,GLOBAL) は SHOW(IMSID) として扱われます。SHOW(DEFN,IMSID,LOCAL) は SHOW(DEFN,LOCAL) として扱われます。

LOCAL

IMS システムのランタイム・リソース定義を戻すように指定します。

SHOW(DEFN,LOCAL) は、コマンドを処理する IMS システムからローカルの定義属性のみを戻します。

MODEL

この記述子を作成するために使用されたモデル名とモデル・タイプ。IMS 定義の記述子 DFSDSDB1 の場合、モデル名とモデル・タイプはブランクです。LIKE キーワードなしで指定された CREATE コマンドは、デフォルト記述子をモデルとして使用して記述子を作成します。デフォルト記述子は、IMS 記述子 DFSDSDB1 またはユーザー定義のいずれかです。LIKE キーワードが指定された CREATE コマンドは、モデルを使用して記述子を作成します。記述子は、すべてモデルと同じ属性を使用して作成されます。属性は、モデル属性をオーバーライドする CREATE コマンドにより明示的に設定されます。モデル・タイプは、記述子 (DESC) またはリソース (RSC) のいずれかです。モデル名およびモデル・タイプは参照用のみです。属性が CREATE または UPDATE コマンドの値によってオーバーライドされた場合、あるいはモデルが後で更新された場合、記述子の属性はモデルと一致しないことがあります。モデル名とモデル・タイプを使用すると、同じモデルを使って作成された記述子を識別できます。記述子のモデル名とモデル・タイプは、エクスポートおよびインポートされます。IMPORT コマンドは、記述子を作成する際にモデル名とモデル・タイプを使用しません。

RESIDENT

常駐オプションを指定します。高速機能 DEDB の場合、値は常に RESIDENT(Y) です。RESIDENT(Y) オプションは、次の再始動時に有効

になります。ただし、この IMS で実行中の緊急時再始動の開始点であるチェックポイントの後でデータベース記述子が RESIDENT(Y) として作成または更新された場合を除きます。

TIMESTAMP

作成時間 (TIMECREATE)、最終更新時間 (TIMEUPDATE)、最終アクセス時間 (TIMEACCESS)、およびインポート時間 (TIMEIMPORT) のタイムスタンプが戻されます。時刻は現地時間で、YYYY.JJJ HH:MM:SS.TH の形式で戻されます。ここで、

- YYYY は年です。
- JJJ はユリウス日 (001 から 365) です。
- HH は時 (01 から 24) です。
- MM は分 (00 から 59) です。
- SS は秒 (00 から 59) です。
- TH は 10 分の 1 秒および 100 分の 1 秒 (00 から 99) です。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager API を介してのみ出すことができます。このコマンドは DB/DC システムおよび DBCTL システムに適用されます。

このコマンドは、XRF 代替システムで使用できます。

MODBLKS のオンライン変更が使用可能な場合 (DFSDFxxx または DFSCGxxx が MODBLKS=OLC で定義されているか、MODBLKS が定義されていない場合)、QUERY DBDESC コマンドは無効です。

リソース定義に関する情報を表示するには、SHOW(DEFN) を指定します。リソースが定義されている IMS システムを判別し、また各 IMS システムの属性またはリソース定義を知るには、SHOW(DEFN,IMSID) を指定します。リソースが定義されている IMS システムを判別するには、SHOW(IMSID) を指定します。

出力フィールド

以下の表は、QUERY DBDESC の出力フィールドを示しています。表の各列は、以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

有効範囲

出力フィールドの有効範囲を識別します。

意味

出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 26. QUERY DBDESC コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
CC	CC	N/A	N/A	完了コード。完了コードは、IMS が、指定された記述子に対するコマンドを処理できたかどうかを示します。完了コードは常に戻されます。QUERY DBDESC の戻りコード、理由コード、および完了コードを参照してください。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	LCL	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
DESC	DescName	DBDESC	N/A	データベース記述子名。
DFLT	LDflt	DBDESC	LCL	デフォルト記述子であるか (Y) ないか (N)。 <p>N 記述子はデフォルトではありません。</p> <p>Y 記述子はデフォルトです。LIKE キーワードなしで記述子またはリソースが作成される時、CREATE コマンドで指定されない属性は、デフォルト記述子に定義されている値を取ります。リソース・タイプのデフォルトとして、記述子 1 つだけが定義できます。IMS は、DFSDSDB1 と呼ばれるデータベース記述子を定義しています。ここでは、すべての属性がデフォルト値で定義されています。ユーザー定義記述子をデフォルトに定義すると、現在のデフォルト記述子がオーバーライドされます。</p>

表 26. QUERY DBDESC コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
DFNT	LDefnType	DEFNTYPE	N/A	<p>定義タイプ。次のうちのいずれか 1 つが可能です。</p> <p>CREATE CREATE コマンドにより定義されます。</p> <p>IMPORT IMPORT コマンドにより定義されます。UPDATE コマンドで記述子またはリソースが更新されても、DEFNTYPE は変更されません。</p> <p>IMS IMS により定義されます。DFSDSDB1 は、デフォルトのデータベース記述子値が入っている IMS 定義のデータベース記述子です。</p>
EXPN	ExportNeeded	EXPORTNEEDED	LCL	データベース記述子が IMSRSC リポジトリーにエクスポートされたかどうかを示します。値は Y または N のどちらかです。
IMSID	IMSid	IMSID	GBL	リポジトリーから定義済みリソースを持つ IMS ID を返します。

表 26. QUERY DBDESC コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
LACC	LAcc	ACCTYPE	LCL	データベース記述子へのアクセスのタイプ。これは以下のいずれかです。

BRWS

データベースは、この IMS サブシステムでは読み取り専用処理に使用できます。このサブシステムでデータベースを使用できるのは、GO (PROCOPT=GO) という PCB 処理オプションをもつプログラムだけです。GO 処理オプションを使用してデータにアクセスするプログラムは、コミットされていないデータを見ることがあります。これは、共用する IMS サブシステムがデータベースを更新中の場合があるためです。データベースは読み取り専用処理用にオープンされます。

EXCL

指定されたデータベースは、この IMS サブシステムによって排他的に使用されます。この排他的アクセスは、データベースが DBRC に登録してあるときのみ保証されます。

READ

データベースは、この IMS サブシステムでは読み取り専用処理に使用できます。更新意図をもつプログラムは、スケジュールすることはできませんが、データベースを更新することはできません。アクセス・タイプ READ では、データは保全性付きの読み取りで読み取られ (ロックが行われます)、GO 処理オプションを使用するプログラムだけでなく、すべてのプログラムがデータにアクセスできます。これが、アクセス・タイプ BRWS とは異なる点です。データベースは読み取り専用処理用にオープンされます。

UPD

データベースは、IMS サブシステムで読み取り処理だけでなく更新にも使用できます。

表 26. QUERY DBDESC コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
MBR	MbrName	N/A	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。出力を作成した IMS の IMS ID。IMS ID は常に戻されます。
MDLN	LModelName	MODEL	N/A	モデル名。この記述子を作成するためのモデルとして使用されたリソースまたは記述子の名前。DFSDSDB1 は、データベース用の IMS 記述子名です。
MDLT	LModelType	MODEL	N/A	モデル・タイプ、RSC または DESC。RSC は、別のリソースをモデルとして使用して記述子が作成されたことを意味します。DESC は、ある記述子をモデルとして使用して記述子が作成されたことを意味します。
PGM	LPgmName	PGM	LCL	ローカル IMS からのプログラム名。
RACC	Acc	DEFN	GBL	リポジトリから取得したアクセス・タイプ。
RDFLT	Dflt	DEFN	GBL	リポジトリからのデフォルト値。
REPO	Repo	DEFN	GBL	その行に保管済みリソース定義が含まれているかどうかを示します。 Y リポジトリ定義を示します。 (ブランク) ローカル定義を示します。
RRSDNT	Rsdnt	DEFN	GBL	リポジトリから取得した常駐値。

表 26. QUERY DBDESC コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
RSDNT	LDRsdnt	RESIDENT	LCL	<p>常駐オプション値。記述子から作成されたデータベースの場合、DMB を次回の IMS の再始動時にローカル・ストレージに常駐させるかどうかを示します。</p> <p>N 指定されたデータベース記述子リソースから作成されたデータベースの DMB は、ストレージに常駐にされません。DMB はスケジュールされた時間にロードされます。</p> <p>Y 指定されたデータベース記述子リソースから作成されたデータベースの DMB は、次回の IMS の再始動時にストレージに常駐にされます。次回の IMS の再始動時に、IMS は DMB をロードし、それを初期化します。常駐データベースはローカル・ストレージからアクセスされるため、ACBLIB への入出力が不要になります。</p>
RTMCR	TimeCreate	DEFN	GBL	<p>リポジトリでの作成時刻。これは、リポジトリ内で最初にリソースが作成された時刻です。</p>
RTMUP	TimeUpdate	DEFN	GBL	<p>リポジトリでの更新時刻。これは、リポジトリ内で最後にリソースが更新された時刻です。</p>
TMAC	LTimeAccess	TIMESTAMP	LCL	<p>記述子が最後にアクセスされた時刻。最終アクセス時間は、ウォーム・スタート、緊急時再始動、EXPORT および IMPORT にまたがって保持されます。最終アクセス時間の更新はログに記録されません。再始動後は、最終アクセス時間は再始動チェックポイント・ログ・レコードに記録された時間を反映します。</p> <p>このアクセス・タイム・スタンプ値は、ローカル IMS から取得されます。</p> <p>データベース記述子の場合、CREATE コマンドがその記述子をモデルとして参照すると、最終アクセス時間が更新されます。</p>

表 26. QUERY DBDESC コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
TMCR	LTimeCreate	TIMESTAMP	LCL	記述子が作成された時刻。これは、CREATE DB コマンド、データベース記述子を作成する IMPORT コマンド、または IMS の初期設定の結果です。作成時刻は、ウォーム・スタート、緊急時再始動、EXPORT および IMPORT にまたがって保持されます。 この作成タイム・スタンプ値は、ローカル IMS から取得されます。
TMIM	LTimeImport	TIMESTAMP	LCL	記述子が最後にインポートされた時刻 (該当する場合)。インポート時刻は、ウォーム・スタートと緊急時再始動にまたがって保持されます。 このインポート・タイム・スタンプ値は、ローカル IMS から取得されません。
TMUP	LTimeUpdate	TIMESTAMP	LCL	UPDATE DBDESC コマンドまたは IMPORT コマンドの結果として実行時リソース定義の属性が更新された最終時刻。更新時刻は、ウォーム・スタートや緊急時再始動を越えて保持されます。出力値は、ローカル IMS から取得されます。

戻りコード、理由コード、および完了コード

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 27. QUERY DBDESC コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000004'	X'00001010'	戻されるリソースは検出されませんでした。指定された記述子名が無効であるか、以下のことが考えられます。 <ul style="list-style-type: none"> 指定したフィルターと一致するリソースがありませんでした。 SHOW(EXPORTNEEDED) が指定されていた場合は、IMSRSC リポジトリーにエクスポートする必要があるリソースがありませんでした。
X'00000008'	X'00002004'	無効なコマンド・キーワードまたは無効なコマンド・キーワードの組み合わせ。
X'0000000C'	X'00003004'	No requests were successful.
X'00000010'	X'00004004'	CQS アドレス・スペースがありません。

表 27. QUERY DBDESC コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000010'	X'00004018'	リソース構造がないか、リソース構造が使用できません。
X'00000010'	X'00004100'	リソース構造が満杯です。
X'00000010'	X'00004104'	RM アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'00004108'	SCI アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'00004300'	MODBLKS のオンライン変更が有効なため、コマンドが許可されません (DFSDFxxx または DFSCGxxx が MODBLKS=OLC で定義されているか、または MODBLKS が定義されていません)。
X'00000010'	X'00004500'	IMS はリポジトリーを使用できません。
X'00000010'	X'00004501'	RM はリポジトリーには使用できません。
X'00000010'	X'00004502'	リポジトリーは使用できません。
X'00000010'	X'00004503'	リポジトリーは停止しています。
X'00000010'	X'00004504'	リポジトリー・スベアのリカバリーが進行中です。
X'00000010'	X'00004505'	IMS リソース・リストが存在しないか、IMS リソース・リスト内に該当するリソース・タイプのリソースが存在しません。
X'00000010'	X'00004507'	リポジトリー・アクセスが拒否されました。
X'00000010'	X'00004508'	リポジトリーの最大入力長を超過しました。
X'00000010'	X'00004509'	RM データのバージョンは IMS データのバージョンよりも低いバージョンです。
X'00000010'	X'0000450A'	リポジトリー・サーバーをシャットダウンしています。
X'00000010'	X'0000450B'	リポジトリー・サーバーは使用できません。
X'00000010'	X'0000450C'	リポジトリー・サーバーは使用中です。
X'00000010'	X'0000450D'	RM は、IMSRSC リポジトリーに関連した一部の内部フィールドの定義に失敗しました。
X'00000014'	X'0000501C'	IMODULE GETMAIN エラー。
X'00000014'	X'00005100'	RM 要求エラー。
X'00000014'	X'00005104'	予期しない CQS エラー。
X'00000014'	X'00005108'	SCI 要求エラー。
X'00000014'	X'00005110'	リポジトリー・エラー。
X'00000014'	X'0000551C'	破損したリソース・リストが検出されたため、リポジトリー内のデータを表示する要求は拒否されました。リソース・リストが使用できないため、QUERY DBDESC コマンドは拒否されました。IBM ソフトウェア・サポートに連絡してください。エラーになったコマンドの出力と、コマンドが実行されたローカル RM アドレス・スペースのダンプまたは IMSplex 内のすべての RM アドレス・スペースのダンプを送信してください。また、IMSRSC リポジトリー RID データ・セットと RMD データ・セットのコピーも送信してください。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。以下の表には、完了コードの説明が記載されています。

表 28. QUERY DBDESC コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		データベースまたはデータベース記述子に対するコマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	データベース記述子名が無効であるか、指定されたワイルドカード・パラメーターがどのデータベース記述子名にも一致しません。

例

以下に示すのは QUERY DBDESC コマンドの例です。

QUERY DBDESC コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

QRY DBDESC SHOW(ALL)

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

```
DescName MbrName    CC LAcc LDRsdnt LDflt LModelName LModelType LTimeCreate
DFSDSDB1 IMS1      0 UPD  N      Y                2011.181 10:22:15.10
```

(右にスクロール、画面 2)

```
DescName MbrName  LTimeUpdate          LTimeAccess          LTimeImport
```

```
DFSDSDB1 IMS1
```

(右にスクロール、画面 3)

```
DescName MbrName  LDefnType
```

```
DFSDSDB1 IMS1    IMS
```

OM API 入力:

CMD(QUERY DBDESC SHOW(ALL))

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.181 17:40:56.620170</statime>
<stotime>2011.181 17:40:56.621294</stotime>
<staseq>C8001AFFFB08A640</staseq>
<stoseq>C8001AFFFB4EE240</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10104056</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>DBDESC </kwd>
<input>QUERY DBDESC SHOW(ALL) </input>
</cmd>
```

```

<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="DESC" l1bl="DescName" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LACC" l1bl="LAcc" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="RSDNT" l1bl="LDRsdnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="DFLT" l1bl="LDflt" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MDLN" l1bl="LModelName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="MDLT" l1bl="LModelType" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMCR" l1bl="LTimeCreate" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMUP" l1bl="LTimeUpdate" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1bl="TMAC" l1bl="LTimeAccess" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMIM" l1bl="LTimeImport" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1bl="DFNT" l1bl="LDefnType" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DESC(DFSDSDB1) MBR(IMS1 ) CC( 0) LACC(UPD) DFNT(IMS)
  RSDNT(N) TMCR(2011.181 10:22:15.10) TMUP( )
  TMIM( ) TMAC( ) DFLT(Y) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: データベース記述子が表示されています。システムには 1 つのデータベース記述子 (IMS 定義の記述子 DFSDSDB1) があります。その記述子について、すべての出力フィールドが戻されています。データベース記述子の出力フィールドはすべてを 1 つの画面に収めることができないため、右にスクロールして追加の出力フィールドを表示する必要があります。データベース記述子名およびその出力行を作成したメンバー名が、各画面に表示されています。DFSDSDB1 記述子が作成された時刻は、IMS のコールド・スタート時刻です。IMS 定義の記述子は、それを作成するためにモデルは使用しないので、LModelName と LModelType はブランクで表示されています。Dflt 列は Y の値を示しています。これは、DFSDSDB1 がデフォルト・データベース記述子として定義されていることを示しています。

QUERY DBDESC コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
QUERY DBDESC NAME(*) SHOW(DEFN,ACCTYPE,RESIDENT)
```

TSO SPOC 出力:

DescName	MbrName	CC	Repo	IMSid	Acc	LAcc	Rsdnt	LDRsdnt
DBDESC1	IMS1	0	Y		EXCL		N	
DBDESC1	IMS1	0		IMS1		EXCL		N
DBDESC1	IMS2	0		IMS2		EXCL		N
DBDESC1	IMS3	0		IMS3		EXCL		N
DEDBDESC	IMS1	0	Y		EXCL		N	
DEDBDESC	IMS1	0		IMS1		EXCL		N

DEDBDESC	IMS2	0	IMS2	EXCL	N
DEDBDESC	IMS3	0	IMS3	EXCL	N
DFSDSDB1	IMS1	0	IMS1	UPD	N
DFSDSDB1	IMS2	0	IMS2	UPD	N
DFSDSDB1	IMS3	0	IMS3	UPD	N
NEWDESC	IMS1	0	IMS1	READ	N

OM API 入力:

```
CMD(QUERY DBDESC NAME(*) SHOW(DEFN,ACCTYPE,RESIDENT))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.181 18:22:06.526302</statime>
<stotime>2011.181 18:22:06.610106</stotime>
<staseq>C80024337775E358</staseq>
<stoseq>C80024338BEBAB18</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10112206</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>DBDESC </kwd>
<input>QUERY DBDESC NAME(*) SHOW(DEFN,ACCTYPE,RESIDENT) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="DESC" l1bl="DescName" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="REPO" l1bl="Repo" scope="LCL" sort="d" key="2" scroll="no"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="IMSID" l1bl="IMSid" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RACC" l1bl="Acc" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="LACC" l1bl="LAcc" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="RRSDNT" l1bl="Rsdnt" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RSDNT" l1bl="LDRsdnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DESC (DEDBDESC) MBR(IMS1 ) CC( 0) LACC(EXCL) IMSID(IMS1 )
  RSDNT(N) </rsp>
<rsp>DESC (DBDESC1 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) LACC(EXCL) IMSID(IMS1 )
  RSDNT(N) </rsp>
<rsp>DESC (NEWDESC ) MBR(IMS1 ) CC( 0) LACC(READ) IMSID(IMS1 )
  RSDNT(N) </rsp>
<rsp>DESC (DFSDSDB1) MBR(IMS1 ) CC( 0) LACC(UPD) IMSID(IMS1 )
  RSDNT(N) </rsp>
<rsp>DESC (DBDESC1 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RACC(EXCL) RRSNT(N)
  </rsp>
<rsp>DESC (DEDBDESC) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RACC(EXCL) RRSNT(N)
```



```

</rsp>
<rsp>DESC(DEDDBDESC) MBR(IMS3 ) CC( 0) LACC(EXCL) IMSID(IMS3 )
RSDNT(N) </rsp>
<rsp>DESC(DBDESC1 ) MBR(IMS3 ) CC( 0) LACC(EXCL) IMSID(IMS3 )
RSDNT(N) </rsp>
<rsp>DESC(DFSDSDB1) MBR(IMS3 ) CC( 0) LACC(UPD) IMSID(IMS3 )
RSDNT(N) </rsp>
<rsp>DESC(DEDDBDESC) MBR(IMS2 ) CC( 0) LACC(EXCL) IMSID(IMS2 )
RSDNT(N) </rsp>
<rsp>DESC(DBDESC1 ) MBR(IMS2 ) CC( 0) LACC(EXCL) IMSID(IMS2 )
RSDNT(N) </rsp>
<rsp>DESC(DFSDSDB1) MBR(IMS2 ) CC( 0) LACC(UPD) IMSID(IMS2 )
RSDNT(N) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: 指定されたリソースの保管済みリソース定義およびランタイム・リソース定義が戻されます。DBDESC1 と DEDDBDESC は、保管済みリソース定義がリポジトリ内にあり、IMS システムにもあります。記述子 NEWDESC は、IMS1 で作成されていますが、リポジトリにも、他のどの IMS システムにも存在しません。

SHOW(ACCTYPE,RESIDENT) が指定されているため、常駐情報とアクセス・タイプ情報のみが返されています。DFSDSDB1 はデフォルト記述子であり、それぞれの IMS システムにのみ存在します。デフォルト記述子定義は、リポジトリにはありません。

QUERY DBDESC コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
QUERY DBDESC DEFAULT(Y)
```

TSO SPOC 出力:

DescName	MbrName	CC	LDfltt
DFSDSDB1	IMS1	0	Y
DFSDSDB1	IMS2	0	Y
DFSDSDB1	IMS3	0	Y

OM API 入力:

```
CMD(QUERY DBDESC DEFAULT(Y))
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xm1vsn>20 </xm1vsn>
<statime>2011.181 18:26:10.474718</statime>
<stotime>2011.181 18:26:10.498099</stotime>
<staseq>C800251C1D2DEC12</staseq>
<stoseq>C800251C22E33512</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10112610</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>DBDESC </kwd>
<input>QUERY DBDESC DEFAULT(Y) </input>

```

```

</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="DESC" l1b1="DescName" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="DFLT" l1b1="LDflt" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DESC(DFSDSDB1) MBR(IMS1 ) CC( 0) DFLT(Y) </rsp>
<rsp>DESC(DFSDSDB1) MBR(IMS3 ) CC( 0) DFLT(Y) </rsp>
<rsp>DESC(DFSDSDB1) MBR(IMS2 ) CC( 0) DFLT(Y) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: ローカル・デフォルト記述子のみが返されます。

QUERY DBDESC コマンドの例 4

TSO SPOC 入力:

```
QUERY DBDESC SHOW(EXPORTNEEDED)
```


TSO SPOC 出力:

MbrName	Return Code	Reason Code	Reason text
IMS1	00000004	00001010	No resources or matches found


OM API 入力:

```
CMD(QUERY DBDESC SHOW(EXPORTNEEDED))
```

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

QUERY IMS コマンド

QUERY IMS コマンド (タイプ 2 コマンド) は、IMS からの状況情報および属性情報を表示するために使用します。

ユーザーに戻される情報は IMS 状況で、これは UPDATE IMS コマンドを使用して変更できます。QUERY MEMBER コマンドは、その他の IMS 状況に戻すために使用されます。

サブセクション:

- 127 ページの『環境』
- 127 ページの『構文』
- 127 ページの『キーワード』

- 128 ページの『使用上の注意』
- 128 ページの『出力フィールド』
- 131 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 132 ページの『例』

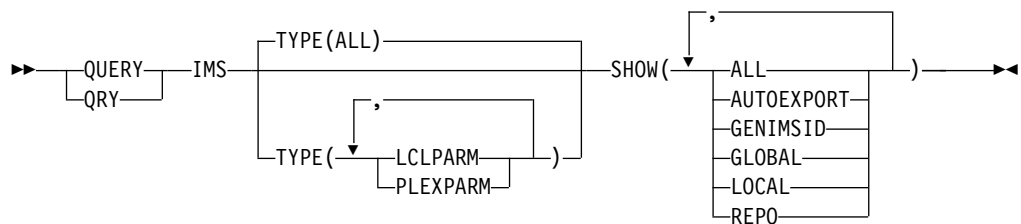
環境

以下の表には、QUERY IMS コマンドおよびキーワードを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 29. QUERY IMS コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUERY IMS	X	X	X
SHOW	X	X	X
TYPE	X	X	X

構文



キーワード

以下のキーワードは、QUERY IMS コマンドに有効です。

SHOW()

(必須) - 戻される出力フィールドを指定します。

ALL

TYPE パラメーターで指定されたデータに関するすべての可能な出力フィールドを戻します。

AUTOEXPORT

AUTOEXPORT 状況を返します。AUTOEXPORT は TYPE(LCLPARM) にのみ適用されます。

GENIMSID

IMS DFSDCxxx PROCLIB メンバーの GENIMSID パラメーターの値を返します。GENIMSID パラメーターは、MSC TCP/IP 汎用リソース・グループの共用汎用 IMS ID を定義します。

GLOBAL

指定された TYPE オプションのグローバル値を戻します。

LOCAL

指定された TYPE オプションのローカル値を戻します。

REPO

IMSRSC リポジトリ・パラメーターを返し、IMS でリポジトリが使用可能かどうかを示します。IMS でリポジトリが使用可能になっていない場合、「IMS でリポジトリが使用可能になっていない」ことを示す戻りコードと理由コードが返されます。REPO は TYPE(LCLPARM) にのみ適用されます。

TYPE()

戻されるデータを指定します。

ALL

すべての可能なタイプのデータを返します。ALL がデフォルトです。

LCLPARM

現行の IMS のローカル LCLPARM 値を表示します。情報は、指定された SHOW オプションに基づいて返されます。

SHOW(GLOBAL) を TYPE(LCLPARM) と共に指定することはできません。SHOW(ALL) と SHOW(LOCAL) は、同じローカル・パラメーター情報を返します。

PLEXPARM

現行の IMS のグローバル PLEXPARM 値を表示します。

グローバル値が要求されている場合、RM 内のグローバル PLEXPARM エントリからの値が IMS コマンド・マスターによって戻されます。ローカル値が要求されている場合、コマンドを処理する各 IMS から値が戻されません。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager API を介してのみ指定できます。

出力フィールド

以下の表は、QUERY IMS によって提供される出力について説明しています。SHOW パラメーター・オプションの指定によって、出力内に戻されるものが決まります。SHOW(ALL) を指定すると、すべての出力フィールドを返します。

表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

有効範囲

出力フィールドの有効範囲を識別します。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 30. QUERY IMS 出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
AUTEXP	AutoExport	LCLPARM、 LCL AUTOEXPORT	LCL	AUTOEXPORT 状況の値。これは、以下のいずれかです。 N 自動エクスポートは使用不可です。 Y 自動エクスポートは、システム RDDS または IMSRSC リポジトリ、あるいはその両方に対して使用可能です。
BMP	BMP	LCLPARM	LCL	BMP 領域に対するロック要求がタイムアウトになるまでに IMS が待機する時間の長さ。BMP 領域には、IMS BMP 領域と JBP 領域が含まれます。時間を秒単位で表す値は、1 から 32767 の範囲です。
BMPOPT	BMPOPT	LCLPARM	LCL	IMS がタイムアウトになったタスクを異常終了するか (ABEND)、状況コードをアプリケーションに返すか (STATUS) を示します。
CC	CC	n/a	n/a	完了コード。完了コードは、IMS が指定のリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示します。完了コードは常に戻されます。
CCTXT	CCText	error	LCL	追加情報を提供するために、完了コードと一緒に戻されるテキスト。サービスからの戻りコードが含まれることがあります。完了コード・テキストは、完了コードがゼロ以外の場合にのみ戻されます。
FP64STAT	FPBP64STAT	LCLPARM	LCL	従属領域の作業単位ごとの高速機能 64 ビット・バッファ使用統計。FPBP64STAT 出力は、高速機能 64 ビット・バッファ・マネージャーが使用可能になっている場合のみ表示されます。高速機能 64 ビット・バッファ使用統計は、X'5945' ログ・レコードに記録されます。値は、以下のとおりです。 N X'5945' ログ・レコード内の従属領域の作業単位ごとの高速機能 64 ビット・バッファ使用統計を OLDS に書き込みません。 Y X'5945' ログ・レコード内の従属領域の作業単位ごとの高速機能 64 ビット・バッファ使用量を OLDS に書き込みます。

表 30. QUERY IMS 出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
GSTSAREA	GSTSAREA	PLEXPARM	LCL または GBL	<p>エリアのグローバル状況。値は、以下のとおりです。</p> <p>Y エリアのグローバル状況が維持されています。</p> <p>N エリアのグローバル状況は維持されていません。</p> <p>NULL エリアのグローバル状況は設定されていません。</p>
GSTSDB	GSTSDB	PLEXPARM	LCL または GBL	<p>データベースのグローバル状況。値は、以下のとおりです。</p> <p>Y データベースのグローバル状況が維持されています。</p> <p>N データベースのグローバル状況は維持されていません。</p> <p>NULL データベースのグローバル状況は設定されていません。</p>
GSTSTRAN	GSTSTRAN	PLEXPARM	LCL または GBL	<p>トランザクションのグローバル状況。値は、以下のとおりです。</p> <p>Y トランザクションのグローバル状況が維持されています。</p> <p>N トランザクションのグローバル状況は維持されていません。</p> <p>NULL トランザクションのグローバル状況は設定されていません。</p>
LEXPTM	LastExportTime	LCLPARM, REPO	LCL	<p>リポジトリへの最後の成功したエクスポートのタイム・スタンプ。コールド・スタート時にリポジトリから定義が正常にインポートされた場合、または DFSDFxxx PROCLIB メンバーの動的リソース定義セクションに AUTOIMPORT=REPO が指定されており、コールド・スタート時にリポジトリが空であった場合、最終エクスポート時刻はインポート時刻に初期設定されます。</p>
MBR	MbrName	n/a	n/a	<p>出力を作成した IMS の IMS ID。IMS ID は常に戻されます。</p>

表 30. QUERY IMS 出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
MSG	MSG	LCLPARM	LCL	MSG 領域に対するロック要求がタイムアウトになるまでに IMS が待機する時間の長さ。MSG 領域には、IMS MPP 領域、JMP 領域、および IFP 領域、ならびに DRA スレッドが含まれます。時間を秒単位で表す値は、1 から 32767 の範囲です。
MSGOPT	MSGOPT	LCLPARM	LCL	IMS がタイムアウトになったタスクを異常終了するか (ABEND)、状況コードをアプリケーションに返すか (STATUS) を示します。
REPONM	RepositoryName	LCLPARM, REPO	LCL	リポジトリ名。
REPOTP	RepositoryType	LCLPARM, REPO	LCL	リポジトリ・タイプ。
TGN	TcpipGenImsID	LCLPARM, GENIMSID	LCL	MSC TCP/IP 汎用リソースに使用される汎用 IMS ID 名を示します。これは、DFSDCxxx PROCLIB メンバーの GENIMSID パラメーターで指定されています。リモート MSC 対応の IMS システムは、特定の IMS システムを指定せずに、GENIMSID 値を使用して IMSplex に接続できます。
VGN	VtamGenName	LCLPARM, GENIMSID	LCL	VTAM 汎用リソース・グループの名前を示します。これは、IMS または DCC 始動プロシージャあるいは /START VGR コマンドの GRSNAME パラメーターで指定されています。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY IMS コマンドの結果として戻される戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 31. QUERY IMS コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY IMS コマンドは正常に完了しました。
X'00000004'	X'00001000'	この IMS システムはコマンド・マスターではないため、この IMS システムでは QUERY IMS コマンドは処理されません。
X'00000008'	X'00002040'	SHOW キーワードでフィルターが指定されていないか、無効なフィルターが指定されていたため、QUERY IMS コマンドは処理されません。
X'0000000C'	X'00003004'	No requests were successful.

表 31. QUERY IMS コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000010'	X'00004500'	IMS はリポジトリを使用できません。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD0 GETBUF ストレージを取得できなかったため、QUERY IMS コマンドは処理されません。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

以下の表には、QUERY IMSPLEX コマンドで戻される可能性のある完了コードが記載されています。

表 32. QUERY IMS コマンドの完了コード

完了コード	意味
0	QUERY IMS コマンドは正常に完了しました。
50	CQS が利用不可のため、QUERY IMS コマンドは処理されません。
51	リソース構造がないため、QUERY IMS コマンドは処理されません。
52	リソース構造が満杯のため、QUERY IMS コマンドは処理されません。
53	RM が利用不可のため、QUERY IMS コマンドは処理されません。
54	SCI が利用不可のため、QUERY IMS コマンドは処理されません。
90	IMS 内部エラーが原因で、QUERY IMS コマンドは処理されませんでした。
94	RM エラーが原因で、QUERY IMS コマンドは処理されませんでした。
95	RM エラーが原因で、QUERY IMS コマンドは処理されませんでした。
98	CQS エラーが原因で、QUERY IMS コマンドは処理されませんでした。

例

以下に示すのは QUERY IMS コマンドの例です。

QUERY IMS コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

QRY IMS SHOW(ALL)

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

MbrName	CC	GLOBAL	GSTSAREA	GSTSDB	GSTSTRAN	FPBP64STAT	MSG	MSGOPT	BMP
IMS2	0	Y	Y	Y	Y				
IMS1	0		Y	Y	Y	Y	N/A	ABEND	N/A
IMS2	0		Y	Y	Y		N/A	ABEND	N/A

(右にスクロール、画面 2)

MbrName	BMPOPT	AutoExport	RepositoryType
IMS2			
IMS1	ABEND	N	IMSRSC

IMS2 ABEND N

(右にスクロール、画面 3)

Member Name	Repository Name	LastExportTime
IMS2		
IMS1	IMSRSC_REPOSITORY	2011.188 16:48:30.07
IMS2		

(右にスクロール、画面 4)

Member Name	TcpipGenImmsID	VtamGenName
IMS2		
IMS1	IMS	AAA
IMS2		

OM API 入力:

CMD(QRY IMS SHOW(ALL))

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.189 00:02:23.704750</statime>
<stotime>2011.189 00:02:23.720449</stotime>
<staseq>C8093D51082AE9CC</staseq>
<stoseq>C8093D510C00161C</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10170223</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS2 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMS </kwd>
<input>QRY IMS SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="GLOBAL" l1b1="GLOBAL" scope="GBL" sort="d" key="1"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="GSTSAREA" l1b1="GSTSAREA" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="GSTSDB" l1b1="GSTSDB" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="GSTSTRAN" l1b1="GSTSTRAN" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="FP64STAT" l1b1="FPBP64STAT" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="MSG" l1b1="MSG" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="CHAR" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="MSGOPT" l1b1="MSGOPT" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="6" dtype="CHAR" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="BMP" l1b1="BMP" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="CHAR" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="BMPOPT" l1b1="BMPOPT" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="6" dtype="CHAR" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="AUTEXP" l1b1="AutoExport" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
```

```

<hdr s1bl="REPOTP" l1bl="RepositoryType" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="REPONM" l1bl="RepositoryName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="44" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LEXPTM" l1bl="LastExportTime" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TGN" l1bl="TcipGenImSID" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="VGN" l1bl="VtamGenName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MBR(IMS2 ) CC( 0) GLOBAL(Y) GSTSAREA(Y ) GSTSDB(Y )
  GSTSTRAN(Y ) </rsp>
<rsp>MBR(IMS2 ) CC( 0) GSTSAREA(Y ) GSTSDB(Y ) GSTSTRAN(Y )
  MSG( N/A) MSGOPT(ABEND ) BMP( N/A) BMPOPT(ABEND ) AUTEXP(N) </rsp>
<rsp>MBR(IMS1 ) CC( 0) GSTSAREA(Y ) GSTSDB(Y ) GSTSTRAN(Y )
  MSG( N/A) MSGOPT(ABEND ) BMP( N/A) BMPOPT(ABEND ) FP64STAT(Y)
  AUTEXP(N) REPOTP(IMSRSC) REPONM(IMSRSC_REPOSITORY
    ) LEXPTM(2011.188 16:48:30.07) TGN(IMS ) VGN(AAA ) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: すべての IMS システム (IMS1 および IMS2) からすべてのローカル・パラメーター情報が返されます。IMS1 では、IMSRSC リポジトリ、高速機能 64 ビット・バッファー、MSC TCP/IP 汎用 IMS ID、および VTAM 汎用 IMS ID が有効にされており、一方、IMS2 では、これらのパラメーターのいずれも有効にされていません。IMS2 (これは、コマンド・マスター) は、IMSplex パラメーター情報を返します。

QUERY IMS コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

QRY IMS TYPE(LCLPARM) SHOW(ALL)

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

MbrName	CC	FPBP64STAT	MSG	MSGOPT	BMP	BMPOPT	AutoExport	RepositoryType
IMS1	0	Y	N/A	ABEND	N/A	ABEND	N	IMSRSC

(右にスクロール、画面 2)

MbrName	RepositoryName	LastExportTime
IMS1	IMSRSC_REPOSITORY	2011.188 16:48:30.07

(右にスクロール、画面 3)

MbrName	TcipGenImSID	VtamGenName
IMS1	IMS	AAA

OM API 入力:

CMD(QRY IMS TYPE(LCLPARM) SHOW(ALL))

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.188 23:49:21.164614</statime>
<stotime>2011.188 23:49:21.165415</stotime>
<staseq>C8093A66BE5460C2</staseq>

```

```

<stoseq>C8093A66BE8678C2</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10164921</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMS </kwd>
<input>QRY IMS TYPE(LCLPARM) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdsphdr>
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="FP64STAT" l1bl="FPBP64STAT" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MSG" l1bl="MSG" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="CHAR" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MSGOPT" l1bl="MSGOPT" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="6" dtype="CHAR" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="BMP" l1bl="BMP" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="CHAR" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="BMPOPT" l1bl="BMPOPT" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="6" dtype="CHAR" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="AUTEXP" l1bl="AutoExport" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="REPOTP" l1bl="RepositoryType" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="REPONM" l1bl="RepositoryName" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="44" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LEXPTM" l1bl="LastExportTime" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TGN" l1bl="TcipGenImsID" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="VGN" l1bl="VtamGenName" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdsphdr>
<cmdspdata>
<rsp>MBR(IMS1 ) CC( 0) MSG( N/A) MSGOPT(ABEND ) BMP( N/A)
BMPOPT(ABEND ) FP64STAT(Y) AUTEXP(N) REPOTP(IMSRSC) REPONM(IMSRSC_REPO
SITORY ) LEXPTM(2011.188 16:48:30.07) TGN(IMS
) VGN(AAA ) </rsp>
</cmdspdata>
</imsout>

```

説明: IMS1 からすべてのローカル・パラメーター情報が返されます。IMS1 では、IMSRSC リポジトリ、高速機能 64 ビット・バッファー、MSC TCP/IP 汎用 IMS ID、および VTAM 汎用 IMS ID が有効にされています。

QUERY IMS コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
QUERY IMS TYPE(LCLPARM) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

MbrName	CC	MSG	MSGOPT	BMP	BMPOPT	AutoExport	RepositoryType
IMS1	0	N/A	ABEND	N/A	ABEND	N	IMSRSC
IMS2	0	N/A	ABEND	N/A	ABEND	N	IMSRSC

IMS3 0 N/A ABEND N/A ABEND N IMSRSC

(右にスクロールして、画面 2 へ)

MbrName	RepositoryName	LastExportTime
IMS1	IMSRSC_REPOSITORY	2011.182 14:15:36.43
IMS2	IMSRSC_REPOSITORY	
IMS3	IMSRSC_REPOSITORY	2011.182 14:11:44.28

OM API 入力:

CMD(QRY IMS TYPE(LCLPARM) SHOW(ALL))

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.182 21:32:47.301031</statime>
<stotime>2011.182 21:32:47.315601</stotime>
<staseq>C80190AFB35A7900</staseq>
<stoseq>C80190AFB6E9181A</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10143247</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMS </kwd>
<input>QRY IMS TYPE(LCLPARM) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="FP64STAT" l1bl="FPBP64STAT" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MSG" l1bl="MSG" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="CHAR" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MSGOPT" l1bl="MSGOPT" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="6" dtype="CHAR" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="BMP" l1bl="BMP" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="CHAR" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="BMPOPT" l1bl="BMPOPT" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="6" dtype="CHAR" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="AUTEXP" l1bl="AutoExport" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="REPOTP" l1bl="RepositoryType" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="REPNM" l1bl="RepositoryName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="44" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LEXPTM" l1bl="LastExportTime" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TGN" l1bl="TcipGenImsID" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="VGN" l1bl="VtamGenName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MBR(IMS1 ) CC( 0) MSG( N/A) MSGOPT(ABEND ) BMP( N/A)
  BMPOPT(ABEND ) AUTEXP(N) REPOTP(IMSRSC) REPNM(IMSRSC_REPOSITORY
```

```

) LEXPTM(2011.182 14:15:36.43) </rsp>
<rsp>MBR(IMS3 ) CC( 0) MSG( N/A) MSGOPT(ABEND ) BMP( N/A)
  BMOPT(ABEND ) AUTEXP(N) REPOTP(IMSRSC) REPONM(IMSRSC_REPOSITORY
) LEXPTM(2011.182 14:11:44.28) </rsp>
<rsp>MBR(IMS2 ) CC( 0) MSG( N/A) MSGOPT(ABEND ) BMP( N/A)
  BMOPT(ABEND ) AUTEXP(N) REPOTP(IMSRSC) REPONM(IMSRSC_REPOSITORY
) LEXPTM( ) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: この例は、IMS で IMSRSC リポジトリが有効にされているが、高速機能 64 ビット・バッファ・マネージャーまたは汎用 IMS ID が有効にされていない場合の、TYPE(LCLPARM) に対する QUERY IMS コマンド出力を表示しています。

QUERY IMS コマンドの例 4

TSO SPOC 入力:

```
QUERY IMS TYPE(LCLPARM) SHOW(REPO)
```

TSO SPOC 出力:

MbrName	CC	RepositoryType	RepositoryName	LastExportTime
IMS1	0	IMSRSC	IMSRSC_REPOSITORY	2011.213 08:57:00.39
IMS2	0	IMSRSC	IMSRSC_REPOSITORY	2011.213 08:57:08.14

OM API 入力:

```
CMD(QUERY IMS TYPE(LCLPARM) SHOW(REPO))
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OMIOM </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.213 15:57:56.076888</statime>
<stotime>2011.213 15:57:56.095315</stotime>
<staseq>C8283FA881558D6E</staseq>
<stoseq>C8283FA885D538EE</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10085755</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS2 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMS </kwd>
<input>QUERY IMS TYPE(LCLPARM) SHOW(REPO) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="REPOTP" l1b1="RepositoryType" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="REPONM" l1b1="RepositoryName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="44" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="LEXPTM" l1b1="LastExportTime" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />

```


```

</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MBR(IMS2 ) CC( 0) MSG( N/A) MSGOPT(ABEND ) BMP( N/A)
  BMPOPT(ABEND ) REPOTP(IMSRSC) REPONM(IMSRSC_REPOSITORY
    ) LEXPTM(2011.213 08:57:08.14) </rsp>
<rsp>MBR(IMS1 ) CC( 0) MSG( N/A) MSGOPT(ABEND ) BMP( N/A)
  BMPOPT(ABEND ) REPOTP(IMSRSC) REPONM(IMSRSC_REPOSITORY
    ) LEXPTM(2011.213 08:57:00.39) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>


```

説明: リポジトリー設定に関する IMS のローカル・パラメーターが返されます。SHOW(REPO) キーワードが指定されているため、リポジトリー情報のみが返されます。

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

QUERY IMSCON コマンド

QUERY IMSCON コマンドは、1 つ以上の IMS Connect リソースの状況およびアクティビティーを表示するために使用します。

TYPE キーワードは、表示する IMS Connect リソースのタイプを指定します。デフォルトは TYPE(CONFIG) です。これは、汎用 IMS Connect 情報を表示します。

QUERY IMSCON コマンドは、OM が特定の IMS Connect をコマンド・マスターとして指定しているかどうかに関係なく、OM によるコマンドの経路指定先のすべての IMS Connect によって処理されます。

サブセクション:

- 139 ページの『QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) コマンド』
- 145 ページの『QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) コマンド』
- 158 ページの『QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンド』
- 172 ページの『QUERY IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンド』
- 177 ページの『QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンド』
- 190 ページの『QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンド』
- 195 ページの『QUERY IMSCON TYPE(ISC) コマンド』
- 206 ページの『QUERY IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンド』
- 216 ページの『QUERY IMSCON TYPE(LINK) コマンド』
- 224 ページの『QUERY IMSCON TYPE(MSC) コマンド』
- 234 ページの『QUERY IMSCON TYPE(ODBM) コマンド』
- 241 ページの『QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンド』
- 264 ページの『QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンド』

- 274 ページの『QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンド』
- 286 ページの『QUERY IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンド』
- 295 ページの『QUERY IMSCON TYPE(UOR) コマンド』

関連資料:

📄 同等の IMS Connect WTOR、z/OS、およびタイプ 2 コマンド (コマンド)

QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) コマンド

QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) コマンドは、IMS Connect に対して定義された 1 つ以上の IMS 別名と関連の ODBM の状況およびアクティビティーを表示するために使用します。

サブセクション:

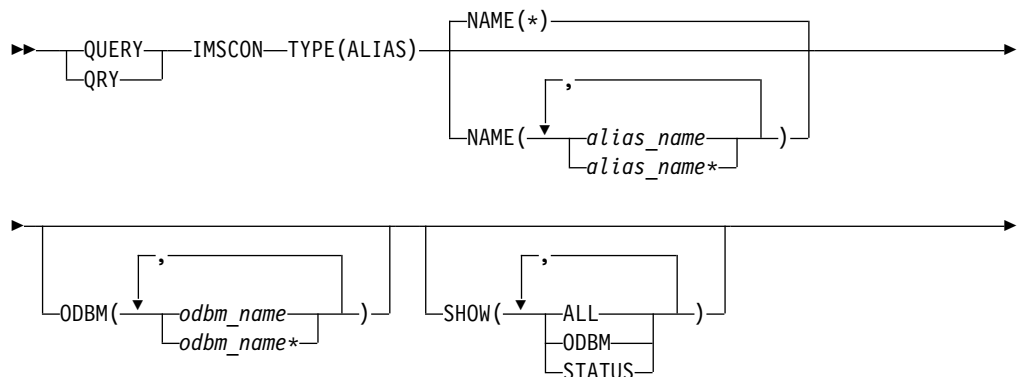
- 『環境』
- 『構文』
- 140 ページの『キーワード』
- 141 ページの『使用上の注意』
- 141 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』
- 141 ページの『出力フィールド』
- 142 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 143 ページの『例』

環境

QUERY IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文





キーワード

以下のキーワードは、`QUERY IMSCON TYPE(ALIAS)` コマンドに有効です。

NAME

表示する 1 つ以上の IMS 別名を指定します。単一の別名、またはコンマで区切った別名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

すべての IMS 別名を表示するには、`NAME(*)` を指定できます。デフォルト値は `NAME(*)` です。

ODBM

指定された ODBM 名に関連付けられた別名を表示用に選択します。単一の ODBM 名、または、コンマで区切った ODBM 名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

指定された ODBM 名に関連付けられている別名のみが表示されます。NAME パラメーターに一致しているが、指定された ODBM 名に関連付けられていない別名は、表示されません。

ODBM キーワードを指定した場合、`SHOW(ODBM)` が指定されていなくても、ODBM 情報が表示されます。

SHOW

オプションの出力フィールドを表示することを指定します。SHOW が指定されているかどうかに関係なく、常に表示される出力フィールドには、別名、コマンドを処理する IMS Connect の名前、および完了コードがあります。

SHOW キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

ALL

すべての出力フィールドを表示します。

ODBM

別名が定義されている ODBM の名前を表示します。

STATUS

別名の状況を表示します。返される可能性がある別名の状況についての説明は、142 ページの表 34 内の STATUS キーワードを参照してください。

STATUS

指定された状態の少なくとも 1 つに該当する ODBM 別名を表示します。単一の状況、またはコンマで区切った状況のリストを、任意の順序で指定できます。

ACTIVE

別名はアクティブです。

NOTACTIVE

別名は、IMS Connect 内、ODBM 内、またはその両方で非アクティブです。

STATUS キーワードを指定した場合は、SHOW(STATUS) が指定されていなくても、状況情報が表示されます。

使用上の注意

QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) コマンドと同様の機能を実行する、WTOR (Write to Operator with Reply) コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

注:

- IMS Connect WTOR コマンドは、未解決の IMS Connect 応答メッセージに対する応答です。
- IMS Connect z/OS コマンドは、z/OS (MVS) インターフェースを介して、IMS Connect *jobname* を使用して発行されます。

表 33. QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWIA ALL	QUERY ALIAS NAME(*)
QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) NAME(<i>alias_name</i>) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWIA <i>alias_name</i>	QUERY ALIAS NAME(<i>aliasName</i>)
QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) NAME(<i>alias_name</i>) ODBM(<i>odbm_name</i>)	VIEWIA <i>alias_name</i> <i>odbm_name</i>	QUERY ALIAS NAME(<i>aliasName</i>) ODBM(<i>odbmName</i>)

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。 N/A (適用

外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されません。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 34. QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
ALIAS	AliasName	N/A	ODBM のインスタンスに対して定義された IMS データ・ストアの別名。別名は常に戻されます。
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたりソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。143 ページの表 36 を参照してください。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。
ODBM	ODBMName	ODBM	別名に関連付けられた ODBM の名前。
STT	Status	STATUS	別名の状況。これは、以下のいずれかです。

ACTIVE

別名はアクティブです。

NOTACTIVE(IMSCON)

別名は、IMS Connect 内で STOPIA コマンド (または、同等のコマンド) を使用して非活動化されています。

NOTACTIVE(ODBM)

別名は、ODBM 内で、ODBM タイプ 2 UPDATE ODBM STOP(CONNECTION) ALIAS コマンドを使用して非活動化されています。

NOTACTIVE(IMSCON,ODBM)

別名は、IMS Connect 内 (STOPIA コマンドまたは同等コマンドを使用して) および ODBM 内 (ODBM タイプ 2 UPDATE ODBM STOP(CONNECTION) ALIAS コマンドを使用して) の両方で非活動化されています。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) コマンドの結果として戻される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 35. *QUERY IMSCON TYPE(ALIAS)* コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 36. *QUERY IMSCON TYPE(ALIAS)* コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、 <i>QUERY IMSCON TYPE(ALIAS)</i> コマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。

例

QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) NAME(*) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

```
AliasName MbrName CC ODBMName Status
IMSA      HWS1      0  ODBM10D  NOTACTIVE(IMSCON)
IMSA      HWS1      0  ODBM20D  NOTACTIVE(ODBM)
IMS1      HWS1      0  ODBM10D  ACTIVE
IMS1      HWS1      0  ODBM20D  NOTACTIVE(IMSCON,ODBM)
IMS2      HWS1      0  ODBM20D  ACTIVE
IMS3      HWS1      0  ODBM30D  NOTACTIVE(IMSCON)
```

OM API 入力:

```
CMD ( QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) NAME(*) SHOW(ALL) )
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xm1vsn>20 </xm1vsn>
<statime>2010.298 15:26:08.249532</statime>
<stotime>2010.298 15:26:08.251073</stotime>
<staseq>C6C82E53FF2BCD37</staseq>
<stoseq>C6C82E53FF8C1EB7</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10082608</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) NAME(*) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="ALIAS" l1b1="AliasName" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="ODBM" l1b1="ODBMName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="STT" l1b1="Status" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>ALIAS(IMS1 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) ODBM(ODBM10D )
  STT(NOTACTIVE(IMSCON)) </rsp>
<rsp>ALIAS(IMS2 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) ODBM(ODBM20D )
  STT(NOTACTIVE(ODBM)) </rsp>
<rsp>ALIAS(IMS1 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) ODBM(ODBM10D )
  STT(ACTIVE) </rsp>
<rsp>ALIAS(IMS1 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) ODBM(ODBM20D )
  STT(NOTACTIVE(IMSCON,ODBM)) </rsp>
<rsp>ALIAS(IMS2 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) ODBM(ODBM20D )
  STT(ACTIVE) </rsp>
<rsp>ALIAS(IMS3 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) ODBM(ODBM30D )
  STT(NOTACTIVE(IMSCON)) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: 別名が現在定義されている ODBM リソースが 2 つあります。IMS1 と IMS2 は、ODBM10D および ODBM20D の両方に対して定義された別名です。IMS3 は ODBM30D に対してのみ定義された別名です。状況 NOTACTIVE(IMSCON) は、別名が IMS Connect STOPIA (または同等の) コマンドによって非活動化されていることを示しています。状況 NOTACTIVE(ODBM) は、別名が UPDATE ODBM STOP(CONNECTION) ALIAS コマンドによって非活動化されていることを示しています。

関連概念:

🔗 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

🔗 VIEWIA コマンド (コマンド)

QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) コマンド

QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) コマンドは、IMS Connect がクライアントからメッセージを受信する、1 つ以上のアクティブ・クライアント・ソケット接続の状況とアクティビティを表示するために使用します。

接続が別の IMS Connect または CICS® サブシステムのインスタンスへのものである場合、IMS Connect は異なるポート上の別個の送信ソケットを使用してトランザクションおよび応答データを送信します。QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) コマンドは、これらの送信クライアント・ソケット接続を表示しません。送信クライアント・ソケット接続に関する情報を表示するには、QUERY IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドを使用します。

サブセクション:

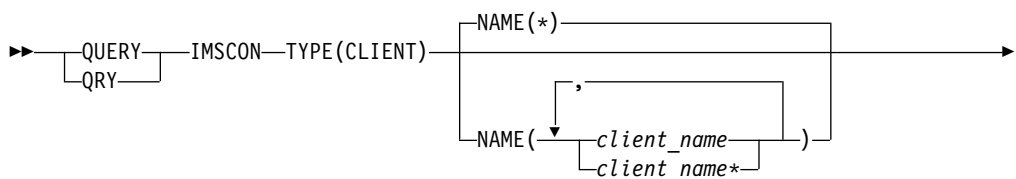
- 『環境』
- 『構文』
- 146 ページの『キーワード』
- 150 ページの『使用上の注意』
- 153 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』
- 150 ページの『出力フィールド』
- 152 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 153 ページの『例』

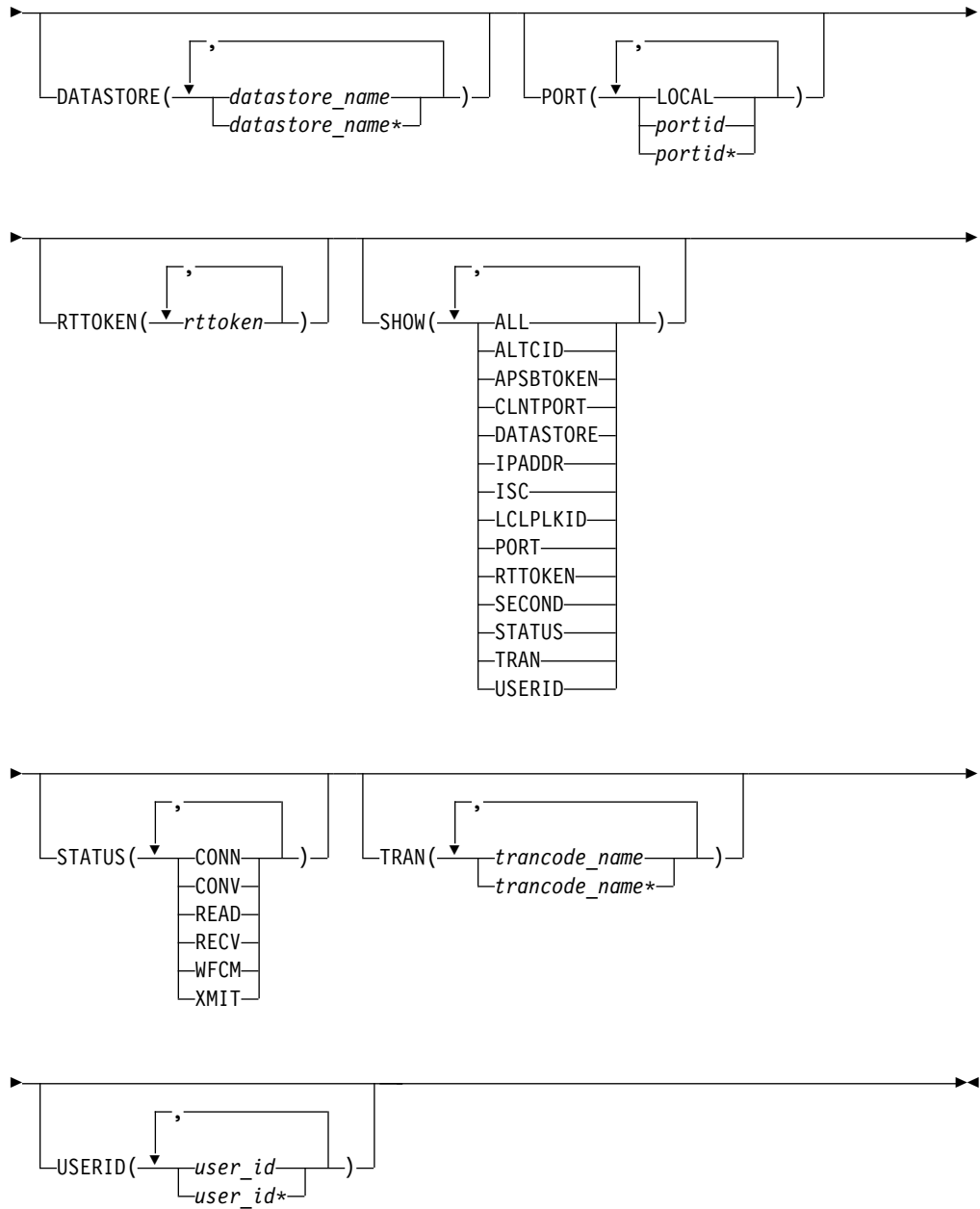
環境

QUERY IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文





キーワード

以下のキーワードは、`QUERY IMSCON TYPE(CLIENT)` コマンドに有効です。

DATASTORE

指定されたデータ・ストアに実行依頼されたトランザクションがあるクライアントを表示用を選択します。単一のデータ・ストア名、または、コンマで区切ったデータ・ストア名のリストを指定できます。ワイルドカードを使用することができます。

`DATASTORE` キーワードを指定した場合、`SHOW(DATASTORE)` が指定されていなくても、データ・ストア情報が表示されます。

NAME

表示する 1 つ以上のクライアントの名前を指定します。単一のクライアント名、または、コンマで区切ったクライアント名のリストを指定できます。ワイルドカードを使用することができます。

すべてのクライアントを表示するには、NAME(*) を指定できます。デフォルト値は NAME(*) です。

IMS Connect は、クライアント名を使用してクライアント・ソケット接続を識別します。IMS Connect クライアントの名前はクライアントが指定できます。また、クライアントが指定しない場合は、IMS Connect がランダムにその名前を生成します。

IMS Connect は、別の IMS Connect インスタンスまたは CICS サブシステムとの接続では常にクライアント名を生成します。これらの場合、クライアント名の最初の数文字が IMS 通信タイプを識別します。例えば、次のようになります。

ISC CICS サブシステムとの ISC 通信

MSC IMS システム間の MSC 通信

OTM IMS システム間の OTMA 通信

前述の IMS 通信タイプのいずれかについてアクティブ・ソケット接続を表示するには、文字 ID に続けて、ワイルドカード文字を指定できます。例えば、NAME(MSC*) を指定すると、MSC 通信用のすべての IMS 間送信ソケット接続が返されます。

PORT

指定されたポート上でアクティブのクライアントを表示用に選択します。単一ポート番号、またはコンマで区切ったポート番号のリストを指定できます。ワイルドカードを使用することができます。

IMS TM Resource Adapter によって使用されるローカル・ポートでフィルターに掛けるには、NAME(LOCAL) を指定します。

SSL ポートは、ポート番号の末尾に文字「S」を付けて表示されます。SSL ポートでフィルターに掛けるには、ポート番号の末尾に文字「S」を付けて、または付けずに、ポート番号を指定します。

ODBM 用に定義されているポートは、ポート番号の末尾に文字「D」を付けて表示されます。ODBM ポートでフィルターに掛けるには、ポート番号の末尾に文字「D」を付けて、または付けずに、ポート番号を指定します。

CICS への ISC リンク用に定義されているポートは、ポート番号の末尾に文字「C」を付けて表示されます。CICS ポートでフィルターに掛けるには、ポート番号の末尾に文字「C」を付けて、または付けずに、ポート番号を指定します。

PORT キーワードを指定した場合、SHOW(PORT) が指定されていなくても、ポート情報が表示されます。

RTOKEN

現在 RESUME TPIPE 呼び出しを発行しており、一致する RESUME TPIPE トークンを持つクライアントを選択して表示します。各 RESUME TPIPE トークンは最大長が 16 桁の 16 進数字です。単一の RESUME TPIPE トークン、または、コンマで区切った RESUME TPIPE トークンのリストを指定できます。

RTTOKEN フィルターを指定した場合は、SHOW(RTTOKEN) が指定されていなくても、RESUME TPIPE トークンが表示されます。

SHOW

オプションの出力フィールドを表示することを指定します。SHOW が指定されているかどうかに関係なく、常に表示される出力フィールドには、クライアント名、コマンドを処理する IMS Connect の名前、および完了コードがあります。

SHOW キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

ALL

すべての出力フィールドを表示します。

ALTCID

RESUME TPIPE を発行するクライアントによって指定された代替クライアント ID を表示します。

APSBTOKEN

ODBM アクセスのためにクライアントによって使用されている ODBM APSB トークンを表示します。

CLNTPORT

クライアント・ポート番号を表示します。これは、クライアントからの接続を表すために TCP/IP が生成する乱数です。

DATASTORE

トランザクションの実行依頼先のデータ・ストアを表示します。

IPADDR

IMS Connect へのクライアントの接続で使用されている IP アドレスを表示します。

ISC

このクライアントが関連付けられているシステム間連絡 (ISC) リソースの名前を表示します。この値は、IMS Connect 構成メンバーの中の ISC ステートメントの ID パラメーターで指定されています

LCLPLKID

この接続を使用しているローカル MSC 物理リンク ID を表示します。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの LCLPLKID パラメーターで指定されています。このフィルターは、MSC メッセージに対してのみ有効です。

PORT

クライアントがアクティブであるポートのポート番号を表示します。ポートが TM リソース・アダプターによって使用されるローカル・ポートの場合は、LOCAL が表示されます。ポートが SSL ポートの場合は、ポート番号の末尾に文字「S」が付加されます。ポートが ODBM ポートである場合は、ポート番号の末尾に文字「D」が付加されます。

ポートが CICS ポートの場合は、ポート番号の末尾に文字「C」が付加されます。

RTOKEN

RESUME TPIPE を発行しているクライアントの RESUME TPIPE トークンを表示します。

SECOND

クライアントが現在の状況にある秒数を表示します。

STATUS

クライアントの状況を表示します。返される可能性がある状況についての説明は、150 ページの表 37 内の STATUS キーワードを参照してください。

TRAN

クライアントによって実行依頼されたトランザクション・コードを表示します。

USERID

IMS Connect に渡されたユーザー ID を表示します。

STATUS

指定された状態の少なくとも 1 つに該当するクライアントを表示します。単一のクライアント状況、またはコンマで区切ったクライアント状況のリストを、任意の順序で指定できます。

CONN

IMS からの出力を待っています。

CONV

会話型状態にあります。

READ

クライアントから入力メッセージを読み取り中です。

RECV

クライアントからの入力を待機中 (受信状態) です。

WFCM

クライアントからの確認 (ACK、NAK、または DEALLOCATE) を待機中です。

XMIT

クライアントにデータを送信中です。

STATUS キーワードを指定した場合は、SHOW(STATUS) が指定されていなくても、状況情報が表示されます。

TRAN

指定されたトランザクションがデータ・ストアに実行依頼されているクライアントを表示用を選択します。単一のトランザクション名、またはコンマで区切ったトランザクション名のリストを指定できます。ワイルドカードを使用することができます。

TRAN キーワードを指定した場合、SHOW(TRAN) が指定されていなくても、トランザクション情報が表示されます。

USERID

指定されたユーザー ID の 1 つを持つクライアントを表示用を選択します。単

一のユーザー ID またはコンマで区切ったユーザー ID のリストを指定することができます。ワイルドカードを使用することができます。

USERID キーワードを指定した場合、SHOW(USERID) が指定されていなくても、ユーザー ID 情報が表示されます。

使用上の注意

QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されず。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 37. QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
ALTCID	AltCID	ALTCID	RESUME TPIPE 呼び出しを発行しているクライアントによって指定された代替クライアント ID。
APTK	ApsbToken	APSBTOKEN	ODBM 用の APSB トークン。
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたりソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。152 ページの表 39 を参照してください。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
CLID	ClientID	N/A	クライアントの名前。クライアント名は常に戻されます。
CPORT	ClntPort	CLNTPORT	クライアント・ポート番号。これは、クライアントからの接続を表すために TCP/IP が生成する乱数です。
DS	DataStore	DATASTORE	クライアントによってトランザクションが実行依頼されたデータ・ストア。

表 37. QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) コマンド出力フィールド (続き)

フィールド	長ラベル	キーワード	意味
IP	IpAddress	IPADDR	クライアントが IMS Connect との接続に使用している IP アドレス。
ISC	ISCName	ISC	このクライアントが関連付けられているシステム間連絡 (ISC) リソースの名前を表示します。この値は、IMS Connect 構成メンバーの中の ISC ステートメントの ID パラメーターで指定されています。
LPLK	LclPlkID	LCLPLKID	この接続を使用しているローカル MSC 物理リンク ID。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの LCLPLKID パラメーターで指定されています。このフィールドは、MSC メッセージの場合にのみ表示されます。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。
PORT	Port	PORT	クライアントがアクティブであるポート番号。TM リソース・アダプターによって使用されるローカル・ポートの場合、ポート番号は「LOCAL」です。SSL ポートの場合、ポート番号の末尾に文字「S」が付加されます。ODBM ポートの場合、ポート番号の末尾に文字「D」が付加されます。CICS ポートの場合、ポート番号の末尾に文字「C」が付加されます。
RTTK	RTToken	RTTOKEN	RESUME TPIPE 呼び出しを発行しているクライアントの RESUME TPIPE トークン。
SEC	第 2 版	SECOND	クライアントが現在の状態または状況にある秒数。
STT	Status	STATUS	クライアントのスレッドの状況または状態。これは、以下の 1 つ以上であることがあります。
			CONN IMS からの出力を待っています。
			CONV 会話型状態にあります。
			READ クライアントから入力メッセージを読み取り中です。
			RECV クライアントからの入力を待機中 (つまり、受信状態) です。
			WFCM クライアントからの確認 (ACK、NAK、または DEALLOCATE) を待機中です。
			XMIT クライアントにデータを送信中です。
TRAN	Trancode	TRAN	クライアントが実行依頼したトランザクション・コード。

表 37. QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) コマンド出力フィールド (続き)

フィールド名	長ラベル	キーワード	意味
UID	UserID	USERID	IMS Connect に渡されるクライアントのユーザー ID。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) コマンドの結果として戻される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 38. QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C000014'	X'00005008'	コマンド・プロセッサは、BPEGETM を介したストレージの取得に失敗しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 39. QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) コマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。

同等の **WTOR** コマンドおよび **z/OS** コマンド

CLIENT は、IMS Connect の WTOR コマンドおよび z/OS コマンドのリソース・タイプとしてサポートされていないため、これと同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンドはありません。VIEWPORT コマンドおよび QUERY PORT コマンドを使用してクライアント情報を表示できますが、クライアント名を検索指数として使用することはできません。

例

QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) NAME(CLIENT*,MSC*) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(Screen 1)

ClientID	MbrName	CC	Port	UserID	Lc1PlkID	Trancode	DataStore	Second
CLIENT01	HWS1	0	9999	USRT003		FESTX2	IMS1	2468
CLIENT02	HWS1	0	9999	USRT003		FESTX2	IMS1	1741
CLIENT03	HWS1	0	9999	USRT003			IMS1	7
CLIENT09	HWS1	0	9999	USRT003		FESTX2	IMS1	1658
CLIENT12	HWS1	0	9999	USRT002		FESTX2	IMS1	15
CLIENT25	HWS1	0	12345	USRT005		APOL11	IMS1	42
MSC33333	HWS1	0	9999		MSC12			14
MSC44444	HWS1	0	9999		MSC12			9

(Screen 2)

ClientID	MbrName	ClntPort	IpAddress	ApsbToken	Status
CLIENT01	HWS1	2363	0:0:0:0:0:FFFF:930:6E53		RECV
CLIENT02	HWS1	2277	0:0:0:0:0:FFFF:930:6E53		RECV
CLIENT03	HWS1	53742	0:0:0:0:0:FFFF:930:6E53		RECV WFCM
CLIENT09	HWS1	2280	0:0:0:0:0:FFFF:930:6E53		RECV
CLIENT12	HWS1	2323	0:0:0:0:0:FFFF:930:6E53		RECV
CLIENT25	HWS1	2348	0:0:0:0:0:FFFF:930:6E53		RECV
MSC33333	HWS1	1739	0:0:0:0:0:FFFF:A64:C802		CONN
MSC44444	HWS1	2684	0:0:0:0:0:FFFF:A64:C802		CONN

(Screen 3)

ClientID	MbrName	AltCID	RTToken
CLIENT01	HWS1		
CLIENT02	HWS1		
CLIENT03	HWS1	CLIENT99	CBB45E89AAF02E8A
CLIENT09	HWS1		
CLIENT12	HWS1		
CLIENT25	HWS1		
MSC33333	HWS1		
MSC44444	HWS1		

OM API 入力:

```
CMD ( QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) NAME(CLIENT*) SHOW(ALL) )
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2010.297 22:46:36.442739</statime>
<stotime>2010.297 22:46:36.444137</stotime>
<staseq>C6C74EEA6CC7302A</staseq>
<stoseq>C6C74EEA6D1E9C6A</stoseq>
```

```

<rqsttkn1>USRT001 10154636</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) NAME(CLIENT*,MSC*) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="CLID" l1b1="ClientID" scope="LCL" sort="a" key="2"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="PORT" l1b1="Port" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="UID" l1b1="UserID" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="LPLK" l1b1="Lc1PlkID" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="TRAN" l1b1="Trancode" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="DS" l1b1="DataStore" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="SEC" l1b1="Second" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="CPORT" l1b1="CIntPort" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="IP" l1b1="IpAddress" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="APTK" l1b1="ApsbToken" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="STT" l1b1="Status" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="ALTCID" l1b1="AltCID" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="RTTK" l1b1="RTToken" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="16" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>CLID(CLIENT25) MBR(HWS1 ) CC( 0) PORT(12345 )
  UID(USRT005 ) TRAN(APOL11 ) DS(IMS1 ) SEC(42) CPORT(2348)
  IP(0:0:0:0:FFFF:930:6E53) APTK( ) STT(RECV )
</rsp>
<rsp>CLID(CLIENT12) MBR(HWS1 ) CC( 0) PORT(9999 )
  UID(USRT002 ) TRAN(FESTX2 ) DS(IMS1 ) SEC(15) CPORT(2323)
  IP(0:0:0:0:FFFF:930:6E53) APTK( ) STT(RECV )
</rsp>
<rsp>CLID(CLIENT09) MBR(HWS1 ) CC( 0) PORT(9999 )
  UID(USRT003 ) TRAN(FESTX2 ) DS(IMS1 ) SEC(1658) CPORT(2280)
  IP(0:0:0:0:FFFF:930:6E53) APTK( ) STT(RECV )
</rsp>
<rsp>CLID(CLIENT03) MBR(HWS1 ) CC( 0) PORT(9999 )
  UID(USRT003 ) TRAN( ) DS(IMS1 ) SEC(7) CPORT(53742)
  IP(0:0:0:0:FFFF:930:6E53) STT(RECV WFCM) ALTCID(CLIENT99)
  RTTK(CBB45E89AAF02E8A) </rsp>
<rsp>CLID(CLIENT02) MBR(HWS1 ) CC( 0) PORT(9999 )
  UID(USRT003 ) TRAN(FESTX2 ) DS(IMS1 ) SEC(1741) CPORT(2277)
  IP(0:0:0:0:FFFF:930:6E53) APTK( ) STT(RECV )
</rsp>
<rsp>CLID(CLIENT01) MBR(HWS1 ) CC( 0) PORT(9999 )

```

```

UID(USRT003 ) TRAN(FESTX2 ) DS(IMS1 ) SEC(2468) CPORT(2363)
IP(0:0:0:0:FFFF:930:6E53) APTK( ) STT(RECV )
</rsp>
<rsp>CLID(MSC33333) MBR(HWS1 ) CC( 0) PORT(9999 )
LPLK(MSC12 ) SEC(14) CPORT(1739) IP(0:0:0:0:FFFF:A64:C802)
APTK( ) STT(CONN ) </rsp>
<rsp>CLID(MSC44444) MBR(HWS1 ) CC( 0) PORT(9999 )
LPLK(MSC12 ) SEC(9) CPORT(2684) IP(0:0:0:0:FFFF:A64:C802)
APTK( ) STT(CONN ) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: 前の例には 7 つのクライアントがあります。そのうちの 2 つはポート 9999 で MSC 物理リンクに関連付けられています。1 つのクライアントはやはりポート 9999 上にあり、代替クライアント ID を指定して RESUME TPIPE 呼び出しを発行しています。1 つのクライアントはポート 12345 上にあります。出力の各行は、ポート上でアクティブの各クライアントに固有の情報および状況を表示しています。

CLIENT03 は RESUME TPIPE 呼び出しを発行していて、代替クライアント ID CLIENT99 を指定しています。CLIENT03 を OTMA でその特定の RESUME TPIPE 呼び出しと突き合わせるには、次の例のような IMS コマンド /DISPLAY TMEMBER を発行します。

```

/DIS TMEM HWS1 TPIPE ALL OUTPUT
DFS000I MEMBER/TPIPE ENQCT DEQCT QCT INPCT STATUS
DFS000I HWS1
DFS000I -CLIENT99 0 0 0 0 PMRY
DFS000I -CLIENT99 0 0 0 0 HLDQ
DFS000I -CLIENT99 RT CBB45E89AAF02E8A OPT A MODE S

```

その後、次の例のように、RTTOKEN キーワードを SHOW(ALTCCID) とともに指定した QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) コマンドを発行します。

```

QRY IMSCON TYPE(CLIENT) RTTOKEN(CBB45E89AAF02E8A) SHOW(ALTCCID RTTOKEN)

```

RTTOKEN および ALTCCID に一致するクライアント ID が RTTOKEN 値および ALTCCID 値とともに表示されます。

```

ClientID MbrName CC ALTCCID RTToken
CLIENT03 IMSPLEX1 0 CLIENT99 CBB45E89AAF02E8A

```

QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```

QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) USERID(USRT002)

```

TSO SPOC 出力:

```

ClientID MbrName CC UserID
CLIENT12 HWS1 0 USRT002

```

OM API 入力:

```

CMD ( QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) USERID(USRT002) )

```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>

```

```

<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2010.297 23:08:15.607128</statime>
<stotime>2010.297 23:08:15.608263</stotime>
<staseq>C6C753C167958165</staseq>
<stoseq>C6C753C167DC71E5</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10160815</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) USERID(USRT002) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="CLID" l1bl="ClientID" scope="LCL" sort="a" key="2"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="PORT" l1bl="Port" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="UID" l1bl="UserID" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LPLK" l1bl="Lc1PlkID" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TRAN" l1bl="Trancode" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="DS" l1bl="DataStore" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="SEC" l1bl="Second" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CPORT" l1bl="CIntPort" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="IP" l1bl="IpAddress" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="APTK" l1bl="ApsbToken" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="STT" l1bl="Status" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>CLID(CLIENT12) MBR(HWS1 ) CC( 0) UID(USRT002) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: コマンドは、USRT002 というユーザー ID を持つ任意のクライアントを要求しています。CLIENT12 が、このユーザー ID を持つ唯一のクライアントです。SHOW キーワードは指定されませんでした。USERID キーワードが指定されたため、SHOW(USERID) が想定されています。

QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) コマンドの例 3

以下の例では、4 つのクライアントがシステム上でアクティブです。1 つのクライアントはポート 9999 上の OTMA クライアントで、IMS トランザクションを IMS1 データ・ストアに送信しました。2 つのクライアントは CICS ポート 9876 上の ISC クライアントで、IMS1CIC4 という名前の ISC データ・ストアに関連付

けられています。1つのクライアントはポート 9999 上の MSC クライアントで、MSC12 という名前の MSC データ・ストアに関連付けられています。

TSO SPOC 入力:

```
QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

ClientID	MbrName	CC	Port	UserID	Lc1PikID	ISCName
CLIENT01	HWS1	0	9999	USRT003		
ISC17C1B	HWS1	0	9876C			IMS1CIC4
ISC5A81F	HWS1	0	9876C			IMS1CIC4
MSC78E94	HWS1	0	9999		MSC12	

(screen 2)

ClientID	MbrName	Trancode	DataStore	Second	ClntPort
CLIENT01	HWS1	FESTX2	IMS1	26	4758
ISC17C1B	HWS1			80	1661
ISC5A81F	HWS1			77	1663
MSC78E94	HWS1			85	1659

(screen 3)

ClientID	MbrName	IpAddress	Status
CLIENT01	HWS1	0:0:0:0:FFFF:91E:1688	RECV
ISC17C1B	HWS1	0:0:0:0:FFFF:91E:72F3	RECV
ISC5A81F	HWS1	0:0:0:0:FFFF:91E:72F3	RECV
MSC78E94	HWS1	0:0:0:0:FFFF:91E:72F3	RECV

OM API 入力:

```
CMD ( QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) SHOW(ALL) )
```

OM API 出力:


```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.6.0</omvsn>
<xm1vsn>20 </xm1vsn>
<statime>2012.129 22:12:55.400673</statime>
<stotime>2012.129 22:12:55.402695</stotime>
<staseq>C989DF900E4E141C</staseq>
<stoseq>C989DF900ECC789C</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10151255</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="CLID" l1bl="ClientID" scope="LCL" sort="a" key="2"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="PORT" l1bl="Port" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
```

```

<hdr s1bl="UID" l1bl="UserID" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LPLK" l1bl="Lc1PlkID" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="ISC" l1bl="ISCName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TRAN" l1bl="Trancode" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="DS" l1bl="DataStore" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="SEC" l1bl="Second" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CPORT" l1bl="CIntPort" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="IP" l1bl="IpAddress" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="APTK" l1bl="ApsbToken" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="STT" l1bl="Status" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>CLID(CLIENT01) MBR(HWS1 ) CC( 0) PORT(9999 )
  UID(USRT003 ) TRAN(FESTX2 ) DS(IMS1 ) SEC(26) CPORT(4758)
  IP(0:0:0:0:FFFF:91E:1688) STT(RECV ) </rsp>
<rsp>CLID(MSC78E94) MBR(HWS1 ) CC( 0) PORT(9999 )
  LPLK(MSC12 ) SEC(85) CPORT(1659) IP(0:0:0:0:FFFF:91E:72F3)
  STT(RECV ) </rsp>
<rsp>CLID(ISC5A81F) MBR(HWS1 ) CC( 0) PORT(9876C )
  ISC(IMS1CIC4) SEC(77) CPORT(1663) IP(0:0:0:0:FFFF:91E:72F3) STT(RECV
  ) </rsp>
<rsp>CLID(ISC17C1B) MBR(HWS1 ) CC( 0) PORT(9876C )
  ISC(IMS1CIC4) SEC(80) CPORT(1661) IP(0:0:0:0:FFFF:91E:72F3) STT(RECV
  ) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンド

QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドは、IMS Connect の状況およびアクティビティを表示するために使用します。類似の WTOR コマンド VIEWHWS または z/OS コマンド QUERY MEMBER TYPE(IMSCON) とは異なり、このコマンドでは PORT および DATASTORE などの個別リソースは表示されません。

サブセクション:

- 159 ページの『環境』
- 159 ページの『構文』
- 159 ページの『キーワード』
- 162 ページの『使用上の注意』
- 163 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』
- 163 ページの『出力フィールド』
- 168 ページの『戻りコードおよび理由コード』
- 168 ページの『完了コード』

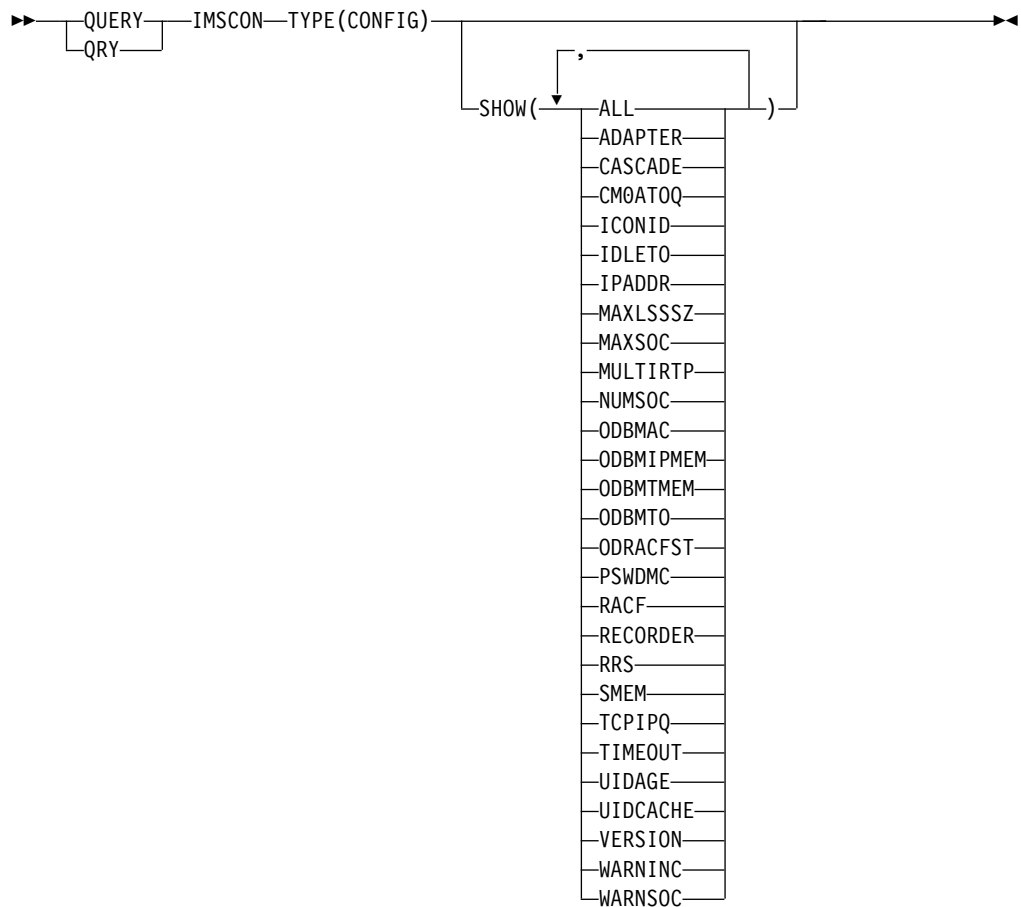
- 168 ページの『例』

環境

QUERY IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文



キーワード

以下のキーワードは、QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドに有効です。

SHOW

オプションの出力フィールドを表示することを指定します。SHOW が指定されているかどうかに関係なく、常に表示される出力フィールドには、コマンドを処理する IMS Connect の名前と、完了コードがあります。

SHOW キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

ALL

すべての出力フィールドを表示します。

ADAPTER

XML アダプター・サポートが有効になっているか、この IMS Connect のインスタンスがロード可能な XML コンバーターの最大数、この IMS Connect のインスタンスがロード済みの XML コンバーターの現行数を表示します。

CM0ATOQ

OTMA CM0 ACK タイムアウト・キューの名前を表示します。これは、IMS Connect 構成ファイルの CM0ATOQ= キーワードで指定されています。

CASCADE

この IMS Connect からのデータ・ストア接続が、IMS Connect とは異なる z/OS イメージ (LPAR) 上にある IMS TM データ・ストアへのグローバル z/OS リソース・リカバリー・サービス トランザクションのカスケードをサポートするかどうかに関する IMS Connect のデフォルト設定を表示します。カスケード・トランザクション・サポートに関する IMS Connect のデフォルトを設定するには、IMS PROCLIB データ・セットの HWSCFGxx メンバー内の HWS= ステートメントに CASCADE= パラメーターを指定するか、IMS タイプ 2 コマンド UPDATE IMSCONTYPE(CONFIG) SET(CASCADE()) を使用します。

ICONID

IMS Connect の名前を表示します。これは、HWSCFGxx 構成メンバー内で HWS 構成ステートメントの ID サブステートメントで定義されています。

IDLETO

オープン・ソケット接続が、非アクティブと見なされて終了されるまでに、アイドルのまま RECV 状態を維持できる時間のグローバル設定を表示します。グローバル設定は、IMS TM と通信するための TCPIP 構成ステートメントの PORT パラメーターまたは PORTID パラメーターで定義されるポートのデフォルトの IDLETO 値として機能します。

表示される値は、IMS Connect 構成ファイル内の TCPIP ステートメントの IDLETO= パラメーターの値です。

値は 100 分の 1 秒単位で表示されます。タイムアウト値は、0 から 2 147 483 647 (X'7FFFFFFF') です。値 0 は、このタイムアウト機能が無効であることを意味します。この場合、非アクティブ接続はタイムアウトになりません。

このグローバル・レベルのアイドル・タイムアウト値は、ポート・レベルのアイドル・タイムアウト値でオーバーライドできます。

IPADDR

IMS Connect のこのインスタンスの IP アドレスを表示します。クライアント・アプリケーション・プログラムは、この IP アドレスを使用して、IMS Connect に接続します。

MAXLSSZ

最大言語構造セグメント・サイズを表示します。この値は、XML コンバーターが呼び出されたときに、XML コンバーターに渡されます。

MAXSOC

IMS Connect のこのインスタンスがオープンできるソケットの最大合計数を表示します。作成できる物理接続の最大数は、MAXSOC= の値からポートの数を差し引いた数になります。これは、IMS Connect が各ポート上の 1 つのソケットを listen 用に使用するためです。

MULTIRTP

この IMS Connect インスタンスの MULTIRTP キーワードの現在の指定を表示します。表示される値は、MULTIRTP 値を独自に指定していないすべての DATASTORE 接続のデフォルト値になります。MULTIRTP 値は、OTMA T パイプが複数のアクティブな RESUME TPIPE 要求をサポートするかどうかを決定します。

NUMSOC

現在のソケット数を表示します。

ODBMAC

ODBM 自動接続値を表示します。これは、ID フィールドに識別されている IMS Connect のインスタンスは、IMS Connect がメンバーである IMSplex 内の ODBM のインスタンスに自動的に接続するように構成されているかどうかを示します。

ODBMIPMEM

ODBM IMSplex メンバー名を表示します。これは、SCI が IMS Connect と ODBM の間の通信を管理するために使用する IMS Connect の名前です。

ODBMTMEM

ODBM IMSplex TMEMBER 名を表示します。これは、IMS Connect と ODBM の間の通信を管理する SCI の名前です。

ODBMT0

ODBM タイムアウト値を表示します。これは、Open Database アーキテクチャーを使用するクライアント・アプリケーション・プログラムを切断するまでに IMS Connect が待機する時間間隔です。

ODRACFST

ODBM を介した IMS DB への接続が認証されている場合に RACF 統計を有効または無効にするために使用される RACF 統計オプション値を示します。

PSWDMC

IMS Connect のこのインスタンスについて、大/小文字混合パスワードのサポートが現在使用可能であるかどうかを示します。

RACF

IMS Connect のこのインスタンスについて、RACF サポートが現在使用可能であるかどうかを示します。

RECORDER

回線トレース・データ・セットがオープンされているか、クローズされているかを示します。

RRS

IMS Connect のこのインスタンスについて、以下の z/OS リソース・リカバリー・サービス (RRS) 情報を表示します。

- HWS 構成ファイルで RRS が使用可能になっているかどうか
- RRS の現在の状況

SMEM

OTMA スーパーメンバー名を表示します。

TCPIPQ

割り当てられたソケットがない状態でこの IMS Connect が維持できるキュー内の接続要求の最大数を表示します。

TIMEOUT

以下のいずれかの状態の後、クライアント・アプリケーション・プログラムを切断するまでに IMS Connect が待機する時間間隔を表示します。

- IMS からのクライアントに対する応答を待機中
- クライアントがソケット接続をオープンした後にクライアントからのデータを待機中

UIDAGE

RACF ユーザー ID エージング値を秒数で表示します。RACF ユーザー ID エージング値に達すると、IMS Connect は、そのユーザー ID の次の入力メッセージを処理する前にユーザー ID をリフレッシュします。有効な値は 0 秒から 2,147,483,647 秒です。UIDAGE は、RACF ユーザー ID キャッシングが使用可能な場合にのみ有効です。

UIDCACHE

RACF 認証が使用可能な場合、RACF ユーザー ID キャッシングが使用されるかどうかを表示します。

VERSION

IMS Connect のこのインスタンスのバージョンを表示します。

WARNINC

警告増分パーセンテージを表示します。これは、1 から 50 までの 10 進値です。警告レベル (TCPIP 構成ステートメント内の WARNSOC 値) に達した後、IMS Connect は、ソケット数が警告レベルの増分パーセンテージだけ増加するたびに HWSS0772W メッセージを再発行します。

WARNSOC

ソケットの最大限度数 (TCPIP 構成ステートメント内の MAXSOC= 値) のパーセンテージとして表される警告レベルを表示します。これは、50 から 99 までの 10 進数です。ソケット数がこの警告レベルに達すると、IMS Connect は HWSS0772W メッセージを発行します。

使用上の注意

QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドと同様の機能を実行する、WTOR (Write to Operator with Reply) コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

注:

- IMS Connect WTOR コマンドは、未解決の IMS Connect 応答メッセージに対する応答です。
- IMS Connect z/OS コマンドは、z/OS (MVS) インターフェースを介して、IMS Connect *jobname* を使用して発行されます。

表 40. QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWHWS	QUERY MEMBER TYPE(IMSCON) SHOW(ALL)

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 41. QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
ADAP	Adapter	ADAPTER	XML アダプター・サポートが使用可能であるか、使用不可であるか。 Y XML アダプター・サポートは使用可能です。 N XML アダプター・サポートは使用不可です。

表 41. QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CASCD	Cascade	CASCADE	IMS Connect と異なる LPAR 上にある IMS TM データ・ストアへのグローバル RRS トランザクションのカスケードのサポートに関する IMS Connect のデフォルト指定を表示します。この指定は、IMS PROCLIB データ・セットの HWSCFGxx メンバー内の HWS= ステートメントに CASCADE= パラメーターを指定するか、タイプ 2 UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(CASCADE()) コマンドを使用して設定されました。 ここに表示される値は、個々のデータ・ストア接続の定義でオーバーライドされる可能性があります。 以下のいずれかの値が表示されます。 Y IMS Connect と IMS データ・ストアが異なる z/OS イメージ (LPAR) 上にある場合に、IMS Connect では、個々の定義に異なる CASCADE 値を含んでいないすべてのデータ・ストア接続に対してカスケード・トランザクション・サポートが有効になることを示します。 N デフォルトでは、個々の定義に異なる CASCADE 値を含んでいないデータ・ストア接続に対してカスケード・トランザクション・サポートが無効であることを示します。
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。168 ページの表 43を参照してください。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
CM0ATOQ	Cm0Atoq	CM0ATOQ	OTMA CM0 ACK タイムアウト・キューの名前。これは、IMS Connect 構成ファイルの CM0ATOQ= キーワードで指定されています。
ICID	IconID	ICONID	IMS Connect の名前。これは、HWSCFGxx 構成メンバー内の HWS 構成ステートメントの ID サブステートメントで定義されている名前です。
IP	IpAddress	IPADDR	IMS Connect のこのインスタンスの IP アドレス。クライアント・アプリケーション・プログラムは、この IP アドレスを使用して、IMS Connect に接続します。
ITO	IdleTO	IDLETO	RECV 状態でアイドル中のソケット接続のタイムアウト値。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。
MCNV	MaxCvrt	ADAPTER	この IMS Connect インスタンスが同時にロードできる XML コンバーターの最大数。

表 41. QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
MLSS	MaxLSSsz	MAXLSSSZ	最大言語構造セグメント・サイズ。これは XML コンバーターに渡されます。
M RTP	MultiRTP	MULTIRTP	<p>この IMS Connect インスタンスの MULTIRTP の現在の指定。ここに表示される値は、DATASTORE 接続定義の MULTIRTP の指定によってオーバーライドされる可能性があります。可能な値は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ この値が空白の場合、MULTIRTP サポートは DATASTORE 接続定義または OTMA クライアント記述子によって決定されます。 Y デフォルトの場合、この IMS Connect インスタンスからのすべてのクライアント・ビッド要求では、複数のアクティブな RESUME TPIPE 要求をサポートする OTMA T パイプが求められます。 N デフォルトの場合、この IMS Connect インスタンスからのすべてのクライアント・ビッド要求では、単一のアクティブな RESUME TPIPE 要求のみをサポートする OTMA T パイプが求められます。
MSOC	MaxSoc	MAXSOC	IMS Connect のこのインスタンスが開くことができるソケットの最大合計数。作成できる物理接続の最大数は、MAXSOC= の値からポートの数を差し引いた数になります。これは、IMS Connect が各ポート上の 1 つのソケットを listen 用に使用するためです。
NCNV	NumCvrt	ADAPTER	この IMS Connect のインスタンス内で現在ロードされている XML コンバーターの数。
NSOC	NumSoc	NUMSOC	現在のソケット数。
OAC	ODBMAC	ODBMAC	<p>ODBM 自動接続値。これは、ID フィールドに識別されている IMS Connect のインスタンスは、IMS Connect がメンバーである IMSplex 内の ODBM のインスタンスに自動的に接続するように構成されているかどうかを示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> Y ODBM 自動接続は使用可能です。 N ODBM 自動接続は使用不可です。
OIMEM	ODBMipMem	ODBMIPMEM	ODBM IMSplex メンバー名。これは、SCI が IMS Connect と ODBM の間の通信を管理するために使用する IMS Connect の名前です。

表 41. QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
ORSTAT	ODBM RacfStat	ODRACFST	<p>IMS Connect が IMS DB に対して、ODBM クライアント接続を認証する RACF コマンド RACF RACROUTE REQUEST=VERIFY を発行したときに、RACF 統計が記録されて更新されるかどうかを示します。以下のいずれかの値が表示されます。</p> <p>Y RACF RACROUTE REQUEST=VERIFY 呼び出しが実行されると、RACF の統計およびメッセージが有効になり、更新されます。</p> <p>N RACF RACROUTE REQUEST=VERIFY 呼び出しが実行されても、RACF の統計およびメッセージは有効にならず、更新されません。</p>
OTIMO	ODBMT O	ODBMT O	<p>ODBM タイムアウト値。これは、Open Database アーキテクチャーを使用するクライアント・アプリケーション・プログラムを切断するまでに IMS Connect が待機する時間間隔です。</p>
OTMEM	ODBMT Mem	ODBMT MEM	<p>ODBM IMSplex TMEMBER 名。これは、IMS Connect と ODBM の間の通信を管理する SCI の名前です。</p>
PMC	PswdMc	PSWDMC	<p>IMS Connect のこのインスタンスの大/小文字混合パスワードのサポートが現在使用可能であるかどうか。以下のいずれかの値が表示されます。</p> <p>Y 大/小文字混合パスワード・サポートは使用可能です。</p> <p>N 大/小文字混合パスワード・サポートは使用不可です。</p> <p>R 大/小文字混合パスワード・サポートは、RACF での大/小文字混合パスワード指定によって決まります。</p>
RACF	Racf	RACF	<p>IMS Connect のこのインスタンスの RACF サポートが現在使用可能であるかどうか。以下のいずれかの値が表示されます。</p> <p>Y RACF サポートは使用可能です。</p> <p>N RACF サポートは使用不可です。</p>
RCDR	Recorder	RECORDER	<p>回線トレース・データ・セットがオープンされているか、クローズされているか。以下のいずれかの値が表示されます。</p> <p>Y 回線トレース・データ・セットはオープンされています。</p> <p>N 回線トレース・データ・セットはクローズされています。</p>
RRS	RRS	RRS	<p>HWS 構成ファイルで RRS が使用可能になっているかどうか。</p> <p>Y RRS サポートは使用可能です。</p> <p>N RRS サポートは使用不可です。</p>

表 41. QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
RSTT	RRSStat	RRS	RRS の現在の状況。 ACTIVE RRS による IMS Connect 再始動が完了しました。 NOTACTIVE IMS Connect は RRS に登録されていません。 REGISTERED IMS Connect は RRS に登録済みです。
SMEM	SMem	SMEMBER	OTMA スーパーメンバー名。
TCPQ	TCPIPQ	TCPIPQ	割り当てられたソケットがない状態でのキュー内の接続要求の最大数。
TIMO	TimeOut	TIMEOUT	以下のいずれかの状態の後、クライアント・アプリケーション・プログラムを切断するまでに IMS Connect が待機する時間間隔。 <ul style="list-style-type: none"> IMS からのクライアントに対する応答を待機中 クライアントがソケット接続をオープンした後にクライアントからのデータを待機中
UIDA	UidAge	UIDAGE	RACF ユーザー ID エージング値 (秒数)。RACF ユーザー ID エージング値に達すると、IMS Connect は、そのユーザー ID の次の入力メッセージを処理する前にユーザー ID をリフレッシュします。有効な値は 0 秒から 2,147,483,647 秒です。UIDAGE は、RACF ユーザー ID キャッシングが使用可能な場合にのみ有効です。
UIDC	UidCache	UIDCACHE	RACF 認証が使用可能な場合、RACF ユーザー ID キャッシングが使用されるかどうか。 Y RACF 認証が使用可能な場合、IMS Connect は RACF ユーザー ID をキャッシュします。 N IMS Connect は、旧セッション・レベル・キャッシングを使用します。
VER	Version	VERSION	IMS Connect のこのインスタンスのバージョン。
WINC	WarnInc	WARNINC	警告増分パーセンテージ。これは、1 から 50 までの 10 進値です。警告レベル (TCPIP 構成ステートメント内の WARNSOC 値) に達した後、IMS Connect は、ソケット数が警告レベルの増分パーセンテージだけ増加するたびに HWSS0772W メッセージを再発行します。
WSOC	WarnSoc	WARNSOC	ソケットの最大限度数 (TCPIP 構成ステートメント内の MAXSOC= 値) のパーセンテージとして表される警告レベル。これは、50 から 99 までの 10 進数です。ソケット数がこの警告レベルに達すると、IMS Connect は HWSS0772W メッセージを発行します。

戻りコードおよび理由コード

QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドの結果として戻される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 42. QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、『完了コード』表を参照してください。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C000014'	X'00005008'	コマンド・プロセッサは、BPEGETM を介したストレージの取得に失敗しました。

完了コード

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 43. QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキ スト	意味
0		該当リソースについて、QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドは正常に完了しました。

例

QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

```
MbrName CC Version IconID IpAddress MaxSoc TimeOut NumSoc WarnSoc WarnInc
HWS1 0 V14 HWS1 127.0.0.1 50 2147483647 4 80 5
```

(screen 2)

```
MbrName TCPIPQ UidCache UidAge Racf PswdMc RRS RRSStat Recorder
HWS1 2147483647 Y 2147483647 N N N REGISTERED N
```

```
(screen 3)
MbrName SMem Cm0Atoq Adapter MaxCvrt NumCvrt ODBMAC ODBMTO ODBMIPMem
HWS1 SM01 Y 400 15 Y 18000 IMSPLEX1
```

```
(screen 4)
MbrName SMem ODBMTMem MultiRTP Cascade
HWS1 SM01 PLEX1 N N
```

OM API 入力:

```
CMD ( QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) SHOW(ALL) )
```

OM API 出力:

```
<?xml version="1.0"?>
<!DOCTYPE imsout SYSTEM "imsout.dtd">
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.7.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime> 2014.118 22:49:29.653223</statime>
<stotime> 2014.118 22:49:29.663453</stotime>
<staseq>C9F23082045267A5</staseq>
<stoseq>C9F23082046F18A5</stoseq>
<rqsttkn1>USRT002 10142849</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT002 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="VER" l1bl="Version" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="3" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="ICID" l1bl="IconID" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="IP" l1bl="IPAddress" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="15" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MSOC" l1bl="MaxSoc" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TIMO" l1bl="TimeOut" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="10" dtype="int" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="NSOC" l1bl="NumSoc" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="WSOC" l1bl="WarnSoc" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="2" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="WINC" l1bl="WarnInc" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="2" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TCPQ" l1bl="TCPiPQ" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="UIDC" l1bl="UidCache" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="UIDA" l1bl="UidAge" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RACF" l1bl="RACF" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
```

```

    len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="PMC" l1bl="PswdMc" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
    len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RRS" l1bl="RRS" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
    len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RSTT" l1bl="RRSStat" scope="LCL" sort="n" key="0"
    scroll="yes" len="10" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RCDR" l1bl="Recorder" scope="LCL" sort="n" key="0"
    scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="SMEM" l1bl="SMem" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
    len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CM0ATOQ" l1bl="Cm0Atoq" scope="LCL" sort="n" key="0"
    scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="ADAP" l1bl="Adapter" scope="LCL" sort="n" key="0"
    scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MCNV" l1bl="MaxCvrt" scope="LCL" sort="n" key="0"
    scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="NCNV" l1bl="NumCvrt" scope="LCL" sort="n" key="0"
    scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="OAC" l1bl="ODBMAC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
    len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="OTIMO" l1bl="ODBMT0" scope="LCL" sort="n" key="0"
    scroll="yes" len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="OIMEM" l1bl="ODBMIPMem" scope="LCL" sort="n" key="0"
    scroll="yes" len="16" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="OTMEM" l1bl="ODBMTMem" scope="LCL" sort="n" key="0"
    scroll="yes" len="16" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MLSS" l1bl="MaxLSSSz" scope="LCL" sort="n" key="0"
    scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MRTP" l1bl="MultiRTP" scope="LCL" sort="n" key="0"
    scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CASCD" l1bl="Cascade" scope="LCL" sort="n" key="0"
    scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MBR(HWS1          ) CC( 0) VER(V14) ICID(HWS1          )
IP(127.0.0.1) MSOC( 50) TIMO(2147483647) NSOC( 4) WSOC(80)
WINC( 5) TCPQ(2147483647) UIDC(N) UIDA(2147483647) RACF(N) PMC(N) RRS(N)
RSTT(REGISTERED) RCDR(N) SMEM(SM01) CM0ATOQ(          ) ADAP(Y)
MCNV(400) NCNV(15) OAC(Y) OTIMO( 18000)
MLSS(32767) MRTP(N) CASCD(N)
</rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: このコマンドは、IMS Connect に関連した一般状況を表示します。

QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドの例 2

以下の例では、HWSCFGxx メンバーの ODACCESS ステートメントで定義されている ODRACFST= オプションの現行値を表示するために、ODRACFST キーワードが使用されています。

TSO SPOC 入力:

```
QRY IMSCON TYPE(CONFIG) SHOW(ODRACFST)
```

TSO SPOC 出力:

```
MbrName          CC ODBMRacFStat
HWS1              0 Y
```

OM API 入力:

```
CMD(QRY IMSCON TYPE(CONFIG) SHOW(ALL))
```

OM API 出力:

```
<?xml version="1.0"?>
<!DOCTYPE imsout SYSTEM "imsout.dtd">
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.7.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2017.111 00:29:35.253108</statime>
<stotime>2017.111 00:29:35.253390</stotime>
<staseq>D26B2A2D6B674CF1</staseq>
<stoseq>D26B2A2D6B78E8F1</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10172935</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>QRY IMSCON TYPE(CONFIG) SHOW(ODRACFST) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="ORSTAT" l1b1="ODBM RacfStat" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MBR(HWS1 ) CC( 0) ORSTAT(Y) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>
```

QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドの例 3

以下の例では、IMS Connect インスタンスのグローバル・レベルの IDLETO 値は 0 です。独自の IDLETO 値が定義されていないポートでは、このグローバル・レベルの IDLETO 値が使用され、そのポート接続アイドル・タイムアウト機能は無効になります。

TSO SPOC 入力:

```
QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) SHOW(IDLETO)
```

TSO SPOC 出力:

```
Response for: QRY IMSCON TYPE(CONFIG) SHOW(IDLETO)
MbrName          CC      IdleTO
HWS1              0        0
```

OM API 入力:

```
CMD(QRY IMSCON TYPE(CONFIG) SHOW(IDLETO))
```

OM API 出力:


```
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
```

```


<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="IT0" l1b1="IdleT0" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MBR(HWS1          ) CC(  0) IT0(0) </rsp>
</cmdrspdata>

```

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 VIEWHWS コマンド (コマンド)

 IMS Connect QUERY MEMBER コマンド (コマンド)

QUERY IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンド

QUERY IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンドを使用して、IMS Connect XML コンバーターの状況を表示します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 173 ページの『キーワード』
- 173 ページの『使用上の注意』
- 174 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』
- 174 ページの『出力フィールド』
- 175 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 176 ページの『例』

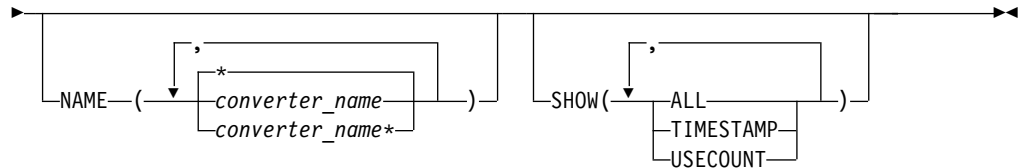
環境

QUERY IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文

►► QUERY IMSCON TYPE(CONVERTER) ►►



キーワード

以下のキーワードは、QUERY IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンドに有効です。

NAME

表示する 1 つ以上の XML コンバーター名を指定します。1 つ以上の絶対名および接頭部がワイルドカードの名前をコンマ区切りリストで指定することができます。このキーワードおよび値を指定しない場合、すべての XML コンバーターが表示されます。

SHOW

標準の出力フィールドの他に表示するオプションの出力フィールドを指定します。以下の追加出力フィールドを指定することができます。

ALL

有効なすべての出力フィールドを表示します。

TIMESTAMP

各コンバーターについて、最後に正常にロード (TimeCreate) および実行 (TimeAccess) されたタイム・スタンプを表示します。タイム・スタンプは現地時間です。タイム・スタンプは、次の形式で表示されます。

YYYY.JJJ HH:MM:SS.TH

YYYY 年

JJJ ユリウス日

HH 時間

MM 分

SS 第 2 版

TH 10 分の 1 秒および 100 分の 1 秒

USECOUNT

コンバーターがロードされて以降に実行された回数。

使用上の注意

QUERY IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

QUERY IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンドは、IMS Connect によってのみ処理されます。

同等の **WTOR** コマンドおよび **z/OS** コマンド

QUERY IMSCON TYPE(CONVERTER) タイプ 2 コマンドには、同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンドはありません。

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されます。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドには、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 44. QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
CVRTR	Converter	N/A	XML コンバーターの名前。
MBR	MbrName	N/A	コマンド出力を作成した IMS Connect メンバーの名前。
TMAC	TimeAccess	TIMESTAMP	この XML コンバーターが最後に実行された日時。このフィールドは、コマンドで SHOW(TIMESTAMP) が指定された場合にのみ返されます。タイム・スタンプは現地時間です。タイム・スタンプの形式は次のとおりです。 YYYY.JJJ HH:MM:SS.TH YYYY 年 JJJ ユリウス日 HH 時間 MM 分 SS 第 2 版 TH 10 分の 1 秒および 100 分の 1 秒
TMCR	TimeCreate	TIMESTAMP	この XML コンバーターがロードされた日時。このフィールドは、コマンドで SHOW(TIMESTAMP) が指定された場合にのみ返されます。フィールドの形式は TMAC 出力フィールドと同じで、タイム・スタンプは現地時間です。

表 44. QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
UCNT	UseCount	USECOUNT	最後に XML コンバーターがロードされて以降に、その XML コンバーターが実行された回数。このフィールドは、コマンドで SHOW(USECOUNT) が指定された場合にのみ返されます。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンドの結果として戻される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 45. QUERY IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンドは正常に完了しました。出力には、各リソースの完了コードが含まれます。
X'0C000004'	X'00001010'	指定された NAME 値に一致する値が見つかりませんでした。
X'0C000008'	X'00002004'	指定されたキーワードのいずれかが無効であったか、相互に排他的なキーワードが指定されたため、コマンドは処理されませんでした。
X'0C000008'	X'0000200C'	リソースが見つからなかった。
X'0C00000C'	X'00002014'	指定されたいずれかの NAME 値で無効な文字が使用されました。
X'0C00000C'	X'00003000'	指定された一部のリソースでコマンドが失敗しました。出力で各リソースの完了コードを確認してください。
X'0C00000C'	X'00003004'	指定されたすべてのリソースでコマンドが失敗しました。出力で各リソースの完了コードを確認してください。
X'0C000014'	X'00005004'	IMS Connect がコマンド応答データ用のストレージを取得できませんでした。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 46. QUERY IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、QUERY IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	OM コマンド処理クライアントが要求された名前に一致するリソースを見つけることができませんでした。リソース名のスペルが誤っているか、リソースが非アクティブである可能性があります。

例

QUERY IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンドの例 1

以下の例は、2 つのアクティブ XML コンバーターを使用する IMS Connect の TSO SPOC 出力を示しています。

TSO SPOC 入力:

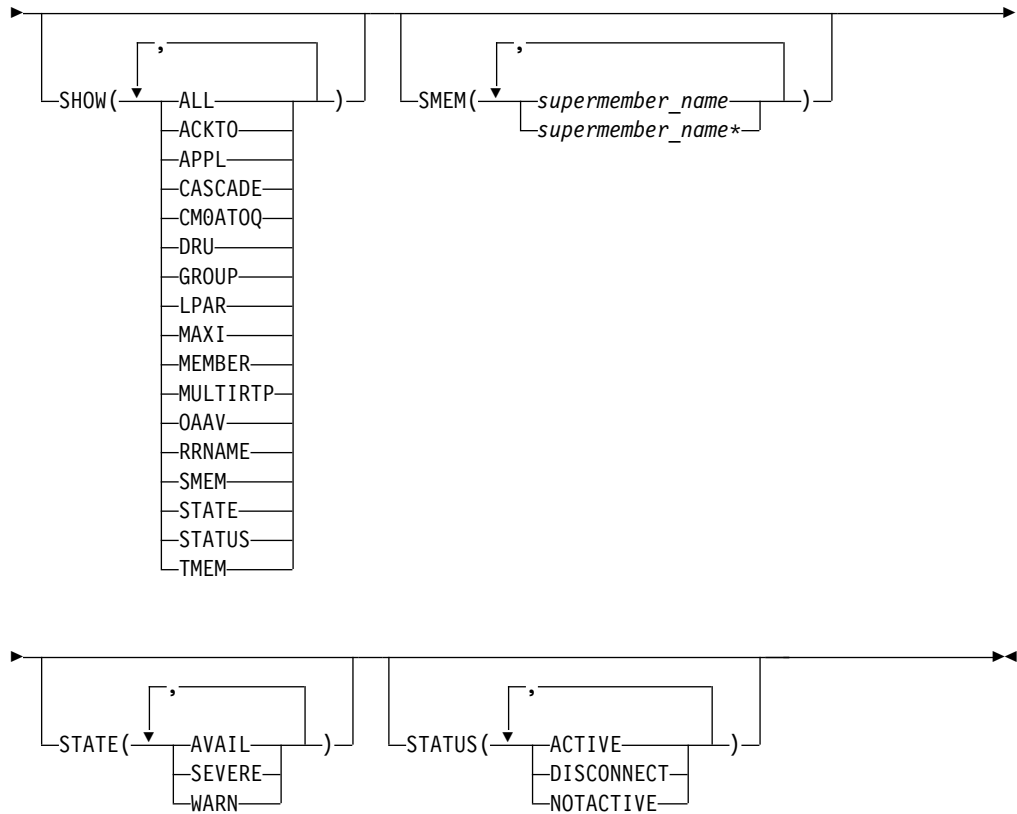
```
QUERY IMSCON TYPE(CONVERTER) SHOW(ALL)
```

出力:

```
Converter MbrName CC UseCount TimeAccess          TimeCreate
IMSCVRTD  HWS1    0      30 2012.250 13:15:55.88 2012.250 13:10:22.01
IMSPHBKD  HWS1    0       5 2012.251 22:30:42.28 2012.251 22:18:47.33
```

OM API インターフェースからの XML 出力:

```
<?xml version="1.0"?>
<!DOCTYPE imsout SYSTEM "imsout.dtd">
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.6.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2012.251 22:38:47.382725</statime>
<stotime>2012.251 22:38:47.383079</stotime>
<staseq>CA2348E2602C532A</staseq>
<stoseq>CA2348E260427D2A</stoseq>
<rqsttkn1>USER002 10153847</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USER002 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>QUERY IMSCON TYPE(CONVERTER) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="CVRTR" l1b1="Converter" scope="LCL" sort="a" key="1"
scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
```

キーワード

以下のキーワードは、`QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE)` コマンドに有効です。

NAME

表示する 1 つ以上のデータ・ストア名を指定します。単一のデータ・ストア名、または、コンマで区切ったデータ・ストア名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。すべてのデータ・ストアを表示するには、`NAME(*)` を指定できます。デフォルト値は `NAME(*)` です。

SHOW

オプションの出力フィールドを表示することを指定します。`SHOW` が指定されているかどうかに関係なく、常に表示される出力フィールドには、データ・ストア名、コマンドを処理する `IMS Connect` の名前、および完了コードがあります。

`SHOW` キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

ALL

すべての出力フィールドを表示します。

ACKTO

`OTMA CM1 ACK` タイムアウト値を表示します。これは `IMS Connect` 構成ファイルの `ACKTO=` キーワードで指定されています。

APPL

パスチケットおよびデータ・ストア・アクセス制御用の RACF APPL 名を表示します。これは、IMS Connect 構成ファイルの APPL= キーワードで指定されています。

CASCADE

データ・ストア定義に指定されている CASCADE 値、およびそのサポートが現在有効であるかどうかを表示します。CASCADE キーワードは、IMS Connect と異なる z/OS イメージ (LPAR) 上にある IMS TM データ・ストアに対するグローバル z/OS リソース・リカバリー・サービス トランザクションのカスケードのサポートに適用されます。

CM0ATOQ

OTMA CM0 ACK タイムアウト・キューの名前を表示します。これは、IMS Connect 構成ファイルの CM0ATOQ= キーワードで指定されています。

DRU

OTMA に渡される OTMA 宛先解決ユーザー出口の名前を表示します。これは、IMS Connect 構成ファイルの DRU= キーワードで指定されています。

GROUP

z/OS システム間カップリング・ファシリティ(XCF) グループの名前を表示します。これは、IMS Connect 構成ファイルの GROUP= キーワードで指定されています。これは、IMS Connect および IMS OTMA が属している XCF グループです。

LPAR

データ・ストアが稼働する z/OS イメージ (LPAR) の名前と、その LPAR が IMS Connect が稼働する LPAR と同じであるか異なるかを表示します。

MAXI

OTMA 入力メッセージあふれ制御値を表示します。これは IMS Connect 構成ファイルの MAXI= キーワードで指定されています。

MEMBER

XCF グループ内の IMS Connect メンバーの名前を表示します。これは、IMS Connect 構成ファイルの MEMBER= キーワードで指定されています。

MULTIRTP

データ・ストア接続定義の現在の MULTIRTP 設定を表示します。返される可能性のある値の説明については、182 ページの表 48の MRTTP の行を参照してください。

OAAV

現行の OTMA アクセサー環境エレメント (ACEE) エージング値を表示します。これは、IMS Connect 構成ファイルの OAAV= キーワードで指定されています。この値は、IMS Connect の ACEE にキャッシュされているセキュリティ定義を OTMA がリフレッシュする頻度を決定します。

RRNAME

クライアント・リルート要求で指定された代替宛先の名前を表示します。これは、IMS Connect 構成ファイルの RRNAME= キーワードで指定されています。

SMEM

OTMA スーパーメンバー名を表示します。これは IMS Connect 構成ファイルの SMEMBER= キーワードで指定されています。

STATE

OTMA サーバーの状態を表示します。返される可能性がある状態についての説明は、182 ページの表 48 内の STATE キーワードを参照してください。

STATUS

データ・ストアの状況を表示します。返される可能性がある状態についての説明は、182 ページの表 48 内の STATUS キーワードを参照してください。

TMEM

XCF グループ内の IMS OTMA メンバーの名前を表示します。これは、IMS Connect 構成ファイルの TMEMBER= キーワードで指定されています。

SMEM

指定されたスーパーメンバー名の 1 つが指定されているデータ・ストアを表示用に選択します。単一のスーパーメンバー名、またはコンマで区切ったスーパーメンバー名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

STATE

指定された状態の少なくとも 1 つに該当するデータ・ストアを表示用に選択します。STATE キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

AVAIL

AVAIL の状態にあるデータ・ストアを選択します。これは、OTMA サーバーが使用可能であることを意味しています。

WARN

WARN の状態にあるデータ・ストアを選択します。これは、OTMA サーバーに、警告状態の 1 つ以上のリソースがあることを意味しています。

SEVERE

SEVERE の状態にあるデータ・ストアを選択します。これは、OTMA サーバーに何らかの深刻なリソース問題があることを意味しています。

STATUS

指定された状況の少なくとも 1 つを持つデータ・ストアを表示用に選択します。STATUS キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

ACTIVE

ACTIVE の状況を持つデータ・ストアを選択します。これは、データ・ストアが接続されてアクティブであることを意味しています。

DISCONNECT

DISCONNECT の状況を持つデータ・ストアを選択します。これは、IMS Connect 内でデータ・ストア・リソースが正しく開始されましたが、IMS との実際の通信が現在は使用可能でないことを意味しています。

NOTACTIVE

NOTACTIVE の状況を持つデータ・ストアを選択します。これは、データ・ストア・リソースが IMS Connect 内で停止していることを意味しています。

使用上の注意

QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドと同様の機能を実行する、WTOR (Write to Operator with Reply) コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

注:

- IMS Connect WTOR コマンドは、未解決の IMS Connect 応答メッセージに対する応答です。
- IMS Connect z/OS コマンドは、z/OS (MVS) インターフェースを介して、IMS Connect *jobname* を使用して発行されます。

表 47. QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWWS ALL	QUERY DATASTORE NAME(*) SHOW(ALL)
QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(<i>datastore_name</i>) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWWS <i>datastore_name</i>	QUERY DATASTORE NAME(<i>datastore_name</i>)

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。 N/A (適用)

外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されません。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 48. QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
ACKTO	AckTO	ACKTO	OTMA CM1 ACK タイムアウト値。これは IMS Connect 構成ファイルの ACKTO= キーワードで指定されています。
APPL	Appl	APPL	パスチケットおよびデータ・ストア・アクセス制御用の RACF APPL 名。これは、IMS Connect 構成ファイルの APPL= キーワードで指定されています。
CASCD	Cascade	CASCADE	<p>IMS Connect とは異なる LPAR 上にある IMS TM データ・ストアへのグローバル RRS トランザクションのカスケードのサポートに関する、データ・ストア定義内の指定を表示します。</p> <p>この指定は、IMS PROCLIB データ・セットの HWSCFG_{xx} メンバー内の DATASTORE= ステートメントに CASCADE= パラメーターを指定するか、またはタイプ 2 コマンド CREATE IMSCON TYPE(DATASTORE) または UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) に SET(CASCADE()) キーワードを指定して設定されました。</p> <p>ここに表示される値は、CASCADE に関する IMS Connect のデフォルト値をオーバーライドします。</p> <p>以下のいずれかの値が表示されます。</p> <p>blank 値がブランクの場合、このデータ・ストアにはカスケード・トランザクション・サポートが指定されなかったことを示します。このデータ・ストアでのサポートは、IMS Connect のデフォルト指定によって決定されます。このデフォルト指定は、QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) SHOW(CASCADE) コマンドを使用して表示できます。</p> <p>Y IMS Connect と IMS データ・ストアが異なる z/OS イメージ (LPAR) 上にある場合に、このデータ・ストア接続はグローバル IMS TM トランザクションのカスケードをサポートすることを示します。</p> <p>N デフォルトでは、このデータ・ストア接続はグローバル IMS TM トランザクションのカスケードをサポートしないことを示します。</p>

表 48. QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CASCST	CascadeStatus	CASCADE	<p>データ・ストア接続で、IMS Connect とは異なる z/OS イメージ (LPAR) 上にある IMS TM データ・ストアへのグローバル RRS トランザクションをカスケードできるかどうかを示します。可能な値は以下のとおりです。</p> <p>blank IMS Connect でデータ・ストアが使用できないか、データ・ストア接続が停止していることを示します。</p> <p>ENABLED IMS Connect とデータ・ストアが異なる LPAR 上にあり、データ・ストア接続の定義または IMS Connect システム構成で CASCADE=Y が指定されているため、データ・ストアへのグローバル RRS トランザクションのカスケードのサポートが有効であることを示します。</p> <p>DISABLED 以下のいずれかの理由で、データ・ストアへのグローバル RRS トランザクションのカスケードのサポートが有効でないことを示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> IMS Connect とデータ・ストアが同じ LPAR 上にあるため、カスケードは必要ありません。 データ・ストア接続の定義で CASCADE=N が指定されています。 Cascade 列がブランクの場合、CASCADE=N は IMS Connect システム構成で指定されています。
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。186 ページの表 50を参照してください。
CCTXT	CCText	error	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されません。
CM0ATOQ	Cm0Atoq	CM0ATOQ	OTMA CM0 ACK タイムアウト・キューの名前。これは、IMS Connect 構成ファイルの CM0ATOQ= キーワードで指定されています。
DRU	DRU	DRU	OTMA に渡される OTMA 宛先解決ユーザー出口の名前。これは、IMS Connect 構成ファイルの DRU= キーワードで指定されています。
DS	DataStore	N/A	データ・ストア名。データ・ストア名は常に戻されます。
LPAR	LPAR	LPAR	<p>IMS Connect とデータ・ストアが、同じ z/OS イメージ上にあるか異なる z/OS イメージ上にあるかを示します。可能な値は、以下のとおりです。</p> <p>blank IMS Connect でデータ・ストアが使用できないか、データ・ストア接続が停止していることを示します。</p> <p>DIFFERENT IMS Connect と IMS データ・ストアが別々の LPAR 上で実行されていることを示します。</p> <p>SAME IMS Connect と IMS データ・ストアが同じ LPAR 上で実行されていることを示します。</p>

表 48. QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
LPARNM	LPARName	LPAR	データ・ストアが稼働している z/OS イメージの名前。
MAXI	MaxI	MAXI	OTMA 入力メッセージあふれ制御値。これは IMS Connect 構成ファイルの MAXI= キーワードで指定されています。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。
MEMBER	メンバー	MEMBER	XCF グループ内の IMS Connect メンバーの名前。これは、IMS Connect 構成ファイルの MEMBER= キーワードで指定されています。
MRTP	MultiRTP	MULTIRTP	複数のアクティブな RESUME TPIPE 要求のサポートに関する、データ・ストア定義内の現在の指定を表示します。MRTP では以下の値が表示される可能性があります。
<p>MRTP() このデータ・ストア接続の定義では、複数のアクティブな RESUME TPIPE 要求 (MULTIRTP) に対するサポートに関する指定は行っていません。MULTIRTP のサポートは、IMS Connect のデフォルト指定または OTMA クライアント記述子の指定によって決定されます。</p>			
<p>MRTP(#) IMS Connect のデフォルト指定に関係なく、このデータ・ストア接続のクライアント・ビッドには MULTIRTP の指定は含まれません。OTMA クライアント記述子は、複数のアクティブな RESUME TPIPE 要求がサポートされるかどうかを決定します。</p>			
<p>MRTP(N) このデータ・ストア接続のクライアント・ビッドは、単一のアクティブな RESUME TPIPE 要求のみをサポートする T パイプを要求します。</p>			
<p>MRTP(Y) このデータ・ストア接続のクライアント・ビッドは、複数のアクティブな RESUME TPIPE 要求をサポートする T パイプを要求します。</p>			
OAAV	OAAV	OAAV	OTMA ACEE エージング値。これは IMS Connect 構成ファイルの OAAV= キーワードで指定されています。この値は、IMS Connect の ACEE にキャッシュされているセキュリティ定義を OTMA がリフレッシュする頻度を決定します。
RRNAME	RRName	RRNAME	クライアント・リルート要求で指定された代替宛先の名前。IMS Connect 構成ファイルの RRNAME= キーワードで指定されています。
SMEM	SMem	SMEM	OTMA スーパーメンバー名。これは IMS Connect 構成ファイルの SMEMBER= キーワードで指定されています。

表 48. QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
STATE	状態	STATE	<p>OTMA サーバーの状態。状態は以下のいずれかが可能です。</p> <p>AVAIL OTMA サーバーが使用可能であることを示します。</p> <p>WARN OTMA サーバーに、警告状態の 1 つ以上のリソースがあることを示します。</p> <p>SEVERE OTMA サーバーに、何らかの深刻なリソース問題があることを示します。</p> <p>N/A OTMA で、このデータ・ストアの状況が報告されなかったことを示します。</p>
STT	Status	STATUS	<p>データ・ストアの状況。状況は次のいずれかです。</p> <p>ACTIVE データ・ストアは接続されてアクティブです。</p> <p>NOTACTIVE データ・ストア・リソースは、コマンド STOPDS または UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) STOP(COMM) を使用して IMS Connect 内で停止されています。通信を開始するには、コマンド STARTDS または UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) START(COMM) を使用して、IMS Connect 内のデータ・ストア・リソースを開始する必要があります。</p> <p>DISCONNECT IMS Connect 内のデータ・ストア・リソースは正しく開始されていますが、IMS との実際の通信が現在では使用可能ではありません。これは、IMS がダウンしているか、OTMA が開始されていないか (/STOP OTMA)、または XCF グループがダウンしているためです。IMS Connect コマンドから通信を復元することはできません。代わりに、IMS、OTMA、または XCF を開始する必要があります。</p> <p>データ・ストアが停止した場合、IMS Connect にデータ・ストアの状況が (IMS OTMA によって XCF を介して) 通知されます。データ・ストアがバックアップされ、再始動されると、IMS Connect は通知を受け、そのデータ・ストアに自動的に再接続します。</p>
TMEM	TMember	TMEM	XCF グループ内の IMS OTMA メンバーの名前。これは、IMS Connect 構成ファイルの TMEMBER= キーワードで指定されています。
XCFG	XCFGGroup	GROUP	XCF グループの名前。これは、IMS Connect 構成ファイルの GROUP= キーワードで指定されています。これは、IMS Connect および IMS OTMA が属している XCF グループです。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドの結果として戻される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 49. QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 50. QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。

例

例 1: QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) SHOW(ALL)

次の例では、IMS1 と IMSA は、IMS Connect 構成ファイルで定義されている 2 つのデータ・ストアを表します。NAME が省略されているため、IMS Connect はすべてのデータ・ストアを表示しています (デフォルトは NAME(*) です)。

TSO SPOC 入力:

```
QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

Datstore	MbrName	CC	XCFGGroup	Member	TMember	State	Status
IMS1	HWS1	0	XCFGGRP1	HWS1	IMS1	AVAIL	ACTIVE
IMSA	HWS1	0	XCFGGRP1	HWSA	IMSA	N/A	DISCONNECT

(screen 2)

Datstore	MbrName	RRName	App1	OAAV	AckTO	MaxI
IMS1	HWS1	HWS\$DEF	APPLID1	2147483647	120	5000
IMSA	HWS1	HWS\$DEF	APPLID2	2147483647	120	5000

(screen 3)

Datstore	Mbrname	SMem	Cm0Atoq	DRU	MultiRTP
IMS1	HWS1			HWSYDRU0	Y
IMSA	HWS1			HWSYDRU0	N

(screen 4)

Datstore	Mbrname	Cascade	CascadeStatus	LPAR	LPARName
IMS1	HWS1	Y	ENABLED	DIFFERENT	IMSLPAR1
IMSA	HWS1	N			

OM API 入力:

CMD (QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) SHOW(ALL))

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.7.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2014.119 15:04:07.393523</statime>
<stotime>2014.119 15:04:07.409958</stotime>
<staseq>C6BAB3AD2B13AAB8</staseq>
<stoseq>C6BAB3AD2B500C78</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10150810</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="DS" l1b1="DataStore" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="XCFG" l1b1="XCFGGroup" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="MEMBER" l1b1="Member" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="TMEM" l1b1="TMember" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="STATE" l1b1="State" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="STT" l1b1="Status" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
```

```

<hdr s1bl="RRNAME" l1bl="RRName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="APPL" l1bl="Appl" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="OAAV" l1bl="OAAV" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="ACKTO" l1bl="AckTO" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MAXI" l1bl="MaxI" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="6" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="SMEM" l1bl="SMem" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CM0ATOQ" l1bl="Cm0Atoq" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="DRU" l1bl="DRU" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MRTP" l1bl="MultiRTP" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CASC" l1bl="Cascade" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CASCST" l1bl="CascadeStatus" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LPAR" l1bl="LPAR" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="10" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LPARNM" l1bl="LPARName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="10" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DS(IMS1 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) XCFG(XCFGGRP1 )
  MEMBER(HWS1 ) TMEM(IMS1 ) STATE(N/A )
  STT(DISCONNECT ) RRNAME(HWS$DEF ) APPL(APPLID1 ) OAAV(2147483647)
  ACKTO(120) MAXI(5000) SMEM( ) CM0ATOQ( ) DRU(HWSYDRU0)
  MRTP(Y) CASC(Y) CASCST(ENABLED ) LPAR(DIFFERENT ) LPARNM(IMS1LPAR1) </rsp>
<rsp>DS(IMS2 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) XCFG(XCFGGRP1 )
  MEMBER(HWS2 ) TMEM(IMS2 ) STATE(N/A )
  STT(DISCONNECT ) RRNAME(HWS$DEF ) APPL(APPLID2 ) OAAV(2147483647)
  ACKTO(120) MAXI(5000) SMEM( ) CM0ATOQ( ) DRU(HWSYDRU0)
  MRTP(N) CASC(N) CASCST( ) LPAR( ) LPARNM( ) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

例 2: QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) SHOW (CASCADE,LPAR)

以下の例では、QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) SHOW(CASCADE,LPAR) を発行して、グローバル RRS (synchlevel=synpoint) トランザクションのカスケードをサポートする IMS データ・ストア接続を表示します。

SHOW() キーワードに LPAR を指定することにより、それぞれの IMS データ・ストアを実行している z/OS イメージ (LPAR) が表示されます。IMS データ・ストアが IMS Connect と同じ z/OS イメージ上で実行されている場合、カスケード・トランザクションのサポートは必要ないため、使用不可になっています。

データ・ストア IMS1 の場合、Cascade 列の「Y」は、データ・ストア接続の定義にカスケード・トランザクションのサポートが指定されていることを示します。CascadeStatus 列の「ENABLED」によって示されているとおり、このサポートは使用可能になっています。これは、IMS データ・ストアと IMS Connect が別々の LPAR 上で実行されているからです。

データ・ストア IMS2 の場合、カスケード・トランザクションのサポートは、データ・ストア接続の定義で明示的に使用可能にも使用不可にも設定されていません。

サポートの有無は IMS Connect に指定されたデフォルト設定によって決定されます。この設定は、QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) SHOW(CASCADE) コマンドを使用して確認できます。ただし、IMS データ・ストアおよび IMS Connect が同じ LPAR 上で実行されているため、サポートは使用不可になっています。

データ・ストア IMS3 の場合、カスケード・トランザクションのサポートは、データ・ストア接続の定義の中で明示的にオフ (CASCADE=N) になっています。このため、IMS データ・ストアと IMS Connect が別々の LPAR 上で実行されていても、カスケード・トランザクションのサポートは使用不可になります。

TSO SPOC 入力:

```
QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) SHOW(CASCADE,LPAR)
```

TSO SPOC 出力:

DataStore	MbrName	CC	Cascade	CascadeStatus	LPAR	LPARName
IMS1	HWS1	0	Y	ENABLED	DIFFERENT	IMSLPAR1
IMS2	HWS1	0		DISABLED	SAME	IMSLPAR2
IMS3	HWS1	0	N	DISABLED	DIFFERENT	IMSLPAR3

OM API 入力:

```
CMD ( QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) SHOW(CASCADE,LPAR) )
```

OM API 出力:


```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.7.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2014.119 15:26:53.969253</statime>
<stotime>2014.119 15:26:53.978307</stotime>
<staseq>C6BAB3AD2B13AAB8</staseq>
<stoseq>C6BAB3AD2B500C78</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10150810</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdsphdr>
<hdr s1b1="DS" l1b1="DataStore" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="CASCSD" l1b1="Cascade" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="CASCST" l1b1="CascadeStatus" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="LPAR" l1b1="LPAR" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="10" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="LPARNM" l1b1="LPARName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="10" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
```

```


</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DS(IMS1 ) MBR(HWS1 ) CC( 0)
  CASC(D) CASCST(ENABLED ) LPAR(DIFFERENT ) LPARNM(IMSLPAR1) </rsp>
<rsp>DS(IMS2 ) MBR(HWS1 ) CC( 0)
  CASC(D ) CASCST(DISABLED) LPAR(SAME ) LPARNM(IMSLPAR2) </rsp>
<rsp>DS(IMS3 ) MBR(HWS1 ) CC( 0)
  CASC(D) CASCST(DISABLED) LPAR(DIFFERENT ) LPARNM(IMSLPAR3) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 VIEWDS コマンド (コマンド)

 IMS Connect QUERY DATASTORE コマンド (コマンド)

QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンド

QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンドは、IMSpIex の状況およびアクティビティを表示するために使用します。

IMSpIex は主に IMS Connect 構成ファイルの IMSPLEX 構成ステートメントで定義されます。また IMSpIex は、IMS Connect 構成ファイルの ODACCESS 構成ステートメントまたは MSC 構成ステートメントの IMSPLEX キーワードを使用して定義することもできます。

サブセクション:

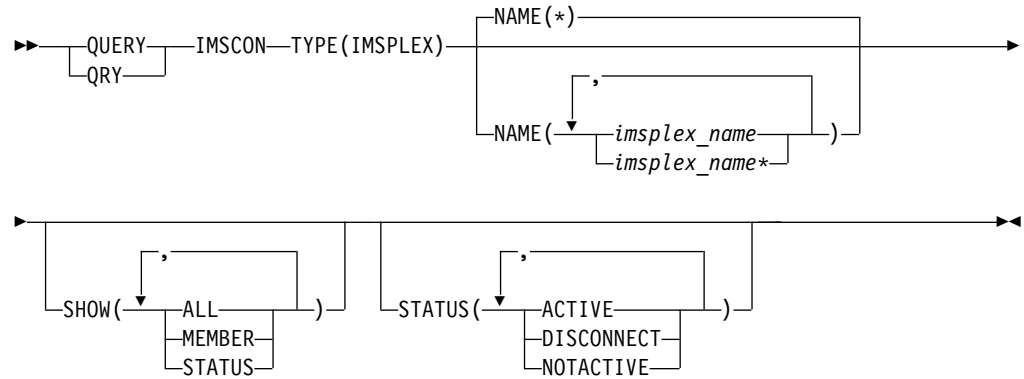
- 『環境』
- 191 ページの『構文』
- 191 ページの『キーワード』
- 192 ページの『使用上の注意』
- 192 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』
- 192 ページの『出力フィールド』
- 193 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 194 ページの『例』

環境

QUERY IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文



キーワード

以下のキーワードは、QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンドに有効です。

NAME

表示する 1 つ以上の IMSplex 名を指定します。IMSplex 名は、IMS Connect 構成ファイルの IMSplex 構成ステートメントの TMEMBER パラメーターで定義されます。

単一の IMSplex 名、またはコンマで区切った IMSplex 名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。すべての IMSplex リソースを表示するには、NAME(*) を指定できます。デフォルト値は NAME(*) です。

SHOW

オプションの出力フィールドを表示することを指定します。SHOW が指定されているかどうかに関係なく、常に表示される出力フィールドには、IMSplex 名、コマンドを処理する IMS Connect の名前、および完了コードがあります。

SHOW キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

ALL

すべての出力フィールドを表示します。

MEMBER

IMSplex 内の IMS Connect メンバーの名前を表示します。これは、IMS Connect 構成ファイル内の IMSPLEX ステートメントの MEMBER= キーワードで指定されています。

STATUS

IMSplex の状況を表示します。返される可能性がある状態についての説明は、193 ページの表 52 内の STATUS キーワードを参照してください。

IMSplex が停止した場合、IMS Connect に IMSplex の状況が (SCI を介して) 通知されます。IMSplex が再び稼働状態になり再始動されると、IMS Connect はその通知を受けて、自動的に IMSplex に再接続します。

STATUS

指定された状況の少なくとも 1 つを持つ IMSplex リソースを表示用に選択し

ます。 STATUS キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

ACTIVE

ACTIVE の状況を持つ IMSplex リソースを選択します。これは、IMSplex が接続されてアクティブであることを意味しています。

DISCONNECT

DISCONNECT の状況を持つ IMSplex リソースを選択します。これは、SCI がアクティブでないために IMS Connect と IMSplex の間の通信が現在使用不可であることを意味しています。

NOTACTIVE

NOTACTIVE の状況を持つ IMSplex リソースを選択します。これは、IMS Connect と IMSplex の間の通信が停止されていることを意味しています。

使用上の注意

QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンドと同様の機能を実行する、WTOR (Write to Operator with Reply) コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

注:

- IMS Connect WTOR コマンドは、未解決の IMS Connect 応答メッセージに対する応答です。
- IMS Connect z/OS コマンドは、z/OS (MVS) インターフェースを介して、IMS Connect *jobname* を使用して発行されます。

表 51. QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWIP ALL	QUERY IMSPLEX NAME(*) SHOW(ALL)
QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX) NAME(<i>IMSplex_name</i>) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWIP <i>IMSplex_name</i>	QUERY IMSPLEX NAME(<i>imsplexName</i>) SHOW(ALL)

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 52. QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。194 ページの表 54 を参照してください。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
IMSPLX	IMSplex	N/A	IMSplex 名。IMSplex 名は常に戻されます。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。
MEMBER	メンバー	MEMBER	IMSplex 内の IMS Connect メンバーの名前。これは、IMS Connect 構成ファイル内の IMSPLEX ステートメントの MEMBER= キーワードで指定されています。
STT	Status	STATUS	IMSplex の状況。状況は次のいずれかです。 ACTIVE IMSplex は接続されてアクティブです。 DISCONNECT SCI がアクティブでないため、IMS Connect と IMSplex の間の通信は現在使用不可です。 NOTACTIVE IMS Connect と IMSplex の間の通信は停止されています。 SCI がダウンすると、IMS Connect に IMSplex の状況が (SCI を介して) 通知されます。SCI が再び稼働状態になり再始動されると、IMS Connect はその通知を受けて、自動的に IMSplex に再接続します。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンドの結果として戻される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 53. *QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX)* コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 54. *QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX)* コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、 <i>QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX)</i> コマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。

例

QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

```
IMSpIex  MbrName CC Member  Status
PLEX1    HWS1    0  ICON1  ACTIVE
PLEX2    HWS1    0  ICON2  NOTACTIVE
```

OM API 入力:

```
CMD ( QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX) SHOW(ALL) )
```

OM API 出力:


```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2010.297 23:24:10.869666</statime>
<stotime>2010.297 23:24:10.870584</stotime>
<staseq>C6C7575069FA2038</staseq>
<stoseq>C6C757506A338578</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10162410</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>ICON1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="IMSPLEX" l1bl="IMSPlex" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MEMBER" l1bl="Member" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="16" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="STT" l1bl="Status" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>IMSPLEX(PLEX1 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) MEMBER(ICON1
  ) STT(ACTIVE ) </rsp>
<rsp>IMSPLEX(PLEX2 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) MEMBER(ICON2
  ) STT(NOTACTIVE ) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>


```

説明: PLEX1 と PLEX2 は、IMS Connect 構成ファイルに定義されている 2 つの IMSplex リソースを表しています。NAME が省略されているため、IMS Connect はすべての IMSplex リソースを表示しています (デフォルトは NAME(*) です)。

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 VIEWWIP コマンド (コマンド)

QUERY IMSCON TYPE(ISC) コマンド

QUERY IMSCON TYPE(ISC) コマンドは、IMS Connect に対して定義されている 1 つ以上の ISC リンクの状態および属性を表示するために使用します。

ISC リンクは、IMS 内の ISC ノードとリモート CICS サブシステムの間接続を表します。IMS Connect 内の ISC リンクと IMS 内の ISC ノードには、1 対 1 の関係があります。

ISC リンクは、複数の ISC 並列セッション (ISCUSERS) をサポートすることができます。ISCUSER は、アクティブの場合にのみ表示されます。

サブセクション:

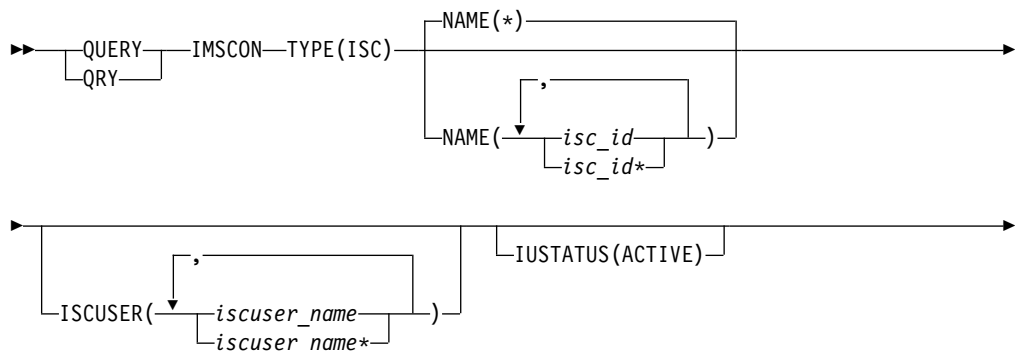
- 『環境』
- 『構文』
- 197 ページの『キーワード』
- 200 ページの『使用上の注意』
- 201 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』
- 201 ページの『出力フィールド』
- 203 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 204 ページの『例』

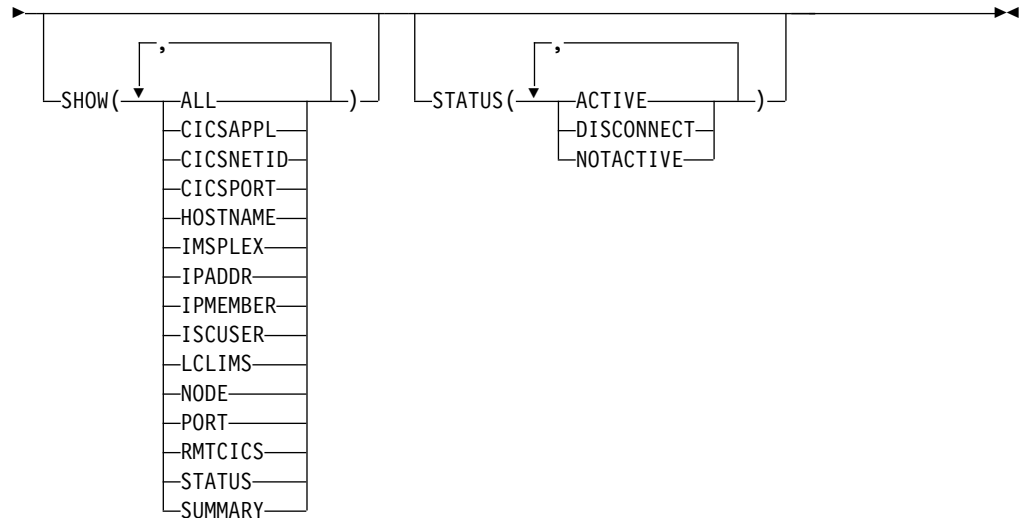
環境

QUERY IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文





キーワード

以下のキーワードは、QUERY IMSCON TYPE(ISC) コマンドに有効です。

ISCUSER

このフィルターは、指定された ISC 並列セッション (ISCUSER) のいずれかが定義されている ISC リンク・リソースを選択して表示します。単一の ISCUSER 名、ワイルドカード名、または、コンマで区切った ISCUSER 名のリストを指定できます。

指定された ISCUSER を持つ ISC リンク・リソースのみが表示されます。NAME() パラメーターに一致しているが、指定された ISCUSER を持っていない ISC リンク・リソースは表示されません。

ISCUSER フィルターを指定した場合は、SHOW(ISCUSER) が指定されていなくても、ISCUSER 情報が表示されます。

ISCUSER フィルターで指定された名前に一致する ISCUSER のみが表示されます。フィルターに一致しない ISC リンクに関連付けられた ISCUSER は、表示されません。

IUSTATUS

このフィルターは、指定された状態の ISC 並列セッション (ISCUSER) が少なくとも 1 つある ISC リンク・リソースを選択して表示します。

IUSTATUS キーワードでサポートされるパラメーターは以下のとおりです。

ACTIVE

この ISCUSER はアクティブです。

指定された状態の ISCUSER を持つ ISC リンクのみが表示されます。NAME() パラメーターに一致するが、そのような ISCUSER がない ISC リンクは、表示されません。

IUSTATUS フィルターを指定した場合は、SHOW(ISCUSER) が指定されていなくても、ISCUSER 情報が表示されます。

指定された状態の ISCUSER のみが表示されます。指定された状態でない ISCUSER は表示されません。

NAME

表示する 1 つ以上の ISC リンクを指定します。単一の ISC リンク名、またはコンマで区切った ISC リンク名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

すべての ISC リンク定義を表示するには、NAME(*) を指定できます。デフォルト値は NAME(*) です。

NAME キーワードを省略すると、すべての ISC リンク・リソースが表示されます。

SHOW

オプションの出力フィールドを表示することを指定します。

特定の出力フィールドは、SHOW キーワードで指定されていない場合でも、常に表示されます。常に表示される出力フィールドには、ISC リンク名、コマンドを処理する IMS Connect の名前、および完了コードがあります。

SHOW キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

ALL

すべての出力フィールドを表示します。

CICSAPPL

リモート CICS サブシステムの APPLID を表示します。これは、ISC 構成ステートメントの CICSAPPL パラメーターで IMS Connect に対して定義されています。この値は、DFHSITxx メンバーの APPLID パラメーターで CICS に対して定義されている APPLID 値と一致します。

CICSNETID

リモート CICS サブシステムのネットワーク ID を表示します。

CICSPORT

ISC リンクが CICS からトランザクションとデータ応答を受信するポートを表示します。この受信ポートは、TCPIP および ISC の両方の構成ステートメントの CICSPORT キーワードで、IMS Connect について定義されます。このポート番号は、IPCONN リソース定義の PORT キーワードで CICS サブシステムに対して指定する必要があります。

HOSTNAME

リモート CICS サブシステムのホスト名を表示します。リモート CICS のホスト名は、IMS Connect 構成メンバー内の ISC ステートメントの RMTICICS パラメーターで定義されます。

IMSPLEX

IMSpIex の名前を表示します。これは、IMS Connect 構成メンバー内にある ISC ステートメントの IMSPLEX パラメーターの TMEMBER サブパラメーターで定義されています。

IPADDR

リモート CICS サブシステムの IP アドレスを表示します。

IPMEMBER

IMSpIex メンバー名を表示します。これは、IMS Connect 構成メンバー内にある ISC ステートメントの IMSPLEX パラメーターの MEMBER サブパラメーターで定義されています。これは、IMSpIex に登録された IMS Connect メンバー名です。

ISCUSER

指定された ISC リンク上でアクティブな ISC 並列セッション (ISCUSER) の情報および状況を表示します。ISC リンクに 1 つ以上のアクティブな ISCUSER がある場合、コマンド出力には、各 ISCUSER に関する情報が含まれます。ISCUSER ごとに個別の出力行が表示されます。これは、一般的な ISC リンク情報を表示する出力行に追加して表示されます。アクティブな ISCUSER がない場合は、追加の出力行は表示されません。

ISCUSER に関して表示される情報には、以下のものが含まれます。

- ISCUSER の名前。

IMS 内で静的に定義された ISC 端末の場合、ISCUSER 名は IMS SUBPOOL ステージ 1 システム定義マクロの NAME キーワードに由来します。IMS 生成で動的に定義された ISC 端末の場合、ISCUSER 名は /OPNDST NODE コマンドの USER キーワードに由来します。

- 受信クライアント名。これは、IMS Connect がこの ISCUSER の受信ソケットに対して割り当てたクライアント名です。
- 送信クライアント名。これは、IMS Connect がこの ISCUSER の送信ソケットに対して割り当てたクライアント名です。
- ISCUSER の状況または状態。ISCUSER の状態には以下のものがあります。

ACTIVE

ISCUSER はアクティブです。

LCLIMS

ローカル IMS の名前を表示します。これは、IMS Connect 構成メンバー内の ISC ステートメントの LCLIMS パラメーターで定義されています。

NODE

ISC ノード名を表示します。この名前は、IMS Connect およびローカル IMS システムに対して定義されています。ノード名は、ISC リンクを定義する ISC ステートメントの NODE パラメーターで IMS Connect に対して定義されます。

PORT

リモート CICS サブシステムがこの ISC リンクで IMS Connect からトランザクションとデータ応答を受信するポートを表示します。このポートは、TCPIP SERVICE リソース定義の PORT キーワードで CICS について定義されます。このポートは、リモート CICS サブシステムへの接続を定義する RMT CICS ステートメントの PORT キーワードで IMS Connect について指定されます。

RMTCICS

リモート CICS 接続の名前を表示します。これは、IMS Connect 構成メンバー内の ISC ステートメントの RMTCICS パラメーターで定義されています。

STATUS

ISC リンクの状況を表示します。状況は次のいずれかです。

ACTIVE

リンクはアクティブです。

DISCONNECT

リンクはアクティブですが、IMS との通信は現在使用不可です。これは、IMS または SCI が終了しているか、ISC リンクに関連付けられた IMSplex データ・ストアが停止していることが原因です。

NOTACTIVE

リンクはアクティブではありません。

返される可能性がある状態についての説明は、201 ページの表 55 内の STATUS キーワードを参照してください。

SUMMARY

ISC リンク上でアクティブな ISC 並列セッション (ISCUSER) に関連する要約情報を表示します。特定の ISCUSER 情報を表示するには、SUMMARY パラメーターに加えて ISCUSER パラメーターを指定します。表示される情報は以下のとおりです。

- ISC リンク上でアクティブな ISCUSER の総数。
- ACTIVE 状態の ISCUSER の総数。
- 上記のどの状態でもない ISCUSER の総数。

STATUS

指定された状況の少なくとも 1 つを持つ ISC リンクを表示用に選択します。

STATUS フィルターを指定した場合は、SHOW(STATUS) が指定されていなくても、状況情報が表示されます。

STATUS キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

ACTIVE

ACTIVE の状況を持つ ISC リンクを選択します。

DISCONNECT

DISCONNECT の状況を持つ ISC リンクを選択します。

NOTACTIVE

NOTACTIVE の状況を持つ ISC リンクを選択します。

使用上の注意

QUERY IMSCON TYPE(ISC) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

通常、このコマンドでは、ISC リンク定義ごとに 1 つの出力表示行が表示されます。ただし、SHOW(ISCUSER) または ISCUSER(*iscuser_name*) を指定した場合、ISCUSER() フィルターに一致する、指定された ISC リンク定義に関連付けられた ISC 並列セッション (ISCUSER) ごとに 1 つの追加行が表示されます。

同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド

QUERY IMSCON TYPE(ISC) コマンドには、同等の WTOR コマンドも z/OS MODIFY コマンドもありません。

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 55. QUERY IMSCON TYPE(ISC) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。204 ページの表 57 を参照してください。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
CICAP	CICSAppid	CICSAPPL	リモート CICS の APPLID。
CICNT	CICSNetid	CICSNETID	リモート CICS のネットワーク ID。
CICPT	CICSPort	CICSPORT	CICSPORT ポート ID。これは、IMS Connect 構成メンバー内の TCPIP ステートメントで定義されています。
HOST	HostName	HOSTNAME	リモート CICS サブシステムのホスト名。リモート CICS サブシステムは、IMS Connect 構成メンバー内の ISC ステートメントの RMTICICS パラメーターで定義されます。

表 55. QUERY IMSCON TYPE(ISC) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
IMEM	IpMember	IPMEMBER	IMSplex メンバー名。これは、IMS Connect 構成メンバー内にある ISC ステートメントの IMSPLEX パラメーターの MEMBER サブパラメーターで定義されています。この名前は、IMSplex に登録された IMS Connect メンバー名です。
IMSPLX	IMSplex	IMSPLEX	IMSplex の名前。これは、IMS Connect 構成メンバー内にある ISC ステートメントの IMSPLEX パラメーターの TMEMBER サブパラメーターで定義されています。
IP	IpAddress	IPADDR	リモート CICS の IP アドレス。リモート CICS は、IMS Connect 構成メンバー内の ISC ステートメントの RMTCICS で定義されます。
ISC	ISCName	N/A	ISC リンクの名前。この名前は、IMS Connect 構成メンバー内の ISC ステートメントの ID キーワードで定義されています。 ISC 名は常に戻されます。
IUSER	ISCUser	ISCUSER	ISC リンク上でアクティブな ISC 並列セッション (ISCUSER) の名前。 IMS 内で静的に定義された ISC 端末の場合、ISCUSER 名は IMS SUBPOOL ステージ 1 システム定義マクロの NAME キーワードに由来します。IMS 生成で動的に定義された ISC 端末の場合、ISCUSER 名は /OPNDST NODE コマンドの USER キーワードに由来します。
IUSTT	IUStatus	ISCUSER	ISC リンク上の ISC 並列セッション (ISCUSER) の場合、これは ISCUSER の状況または状態です。ISCUSER の状態には、以下のものがあります。 • ACTIVE。ISCUSER はアクティブです。
LIMS	LclIMS	LCLIMS	ローカル IMS の名前。これは、IMS Connect 構成メンバー内の ISC ステートメントの LCLIMS パラメーターで定義されています。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。
NODE	Node	NODE	この接続を使用しているローカル ISC 端末名。これは、IMS Connect 構成メンバー内の ISC ステートメントの NODE パラメーターで指定されています。
PORT	Port	PORT	関連付けられたリモート CICS サブシステムのポート。リモート CICS は、ISC ステートメントの RMTCICS パラメーターで定義されます。
RCICS	RmtCICS	RMTCICS	リモート CICS 接続の名前。これは、IMS Connect 構成メンバー内の ISC ステートメントの RMTCICS パラメーターで定義されています。

表 55. QUERY IMSCON TYPE(ISC) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
RCL	RecvClnt	ISCUSER	IMS Connect が CICSSPORT 上のソケットに割り当てるクライアント名。この CICSSPORT は、対応する IUSER 出力フィールドで識別されている ISC 並列セッションについて、リモート CICS サブシステム (RMTCICS) からトランザクションとデータ応答を受信するために使用されます。
SCL	SendClnt	ISCUSER	IMS Connect がソケットに割り当てるクライアント名。このソケットは、対応する IUSER 出力フィールドで識別されている ISC 並列セッションについて、リモート CICS サブシステム (RMTCICS) にトランザクションとデータ応答を送信するために使用されます。
STT	Status	STATUS	ISC リンクの状況。状況は次のいずれかです。 ACTIVE ISC リンクはアクティブです。 DISCONNECT リンクはアクティブですが、IMS との通信は現在使用不可です。これは、IMS または SCI が終了しているか、ISC リンクに関連付けられた IMSplex データ・ストアが停止していることが原因です。 NOTACTIVE ISC リンクはアクティブではありません。
TACT	TotActiv	SUMMARY	ISC リンク上で状況が ACTIVE の ISC 並列セッション (ISCUSER) の総数。
TOTH	TotOther	SUMMARY	ISC リンク上で状況が ACTIVE 以外の ISC 並列セッション (ISCUSER) の総数。
TUSR	TotUsers	SUMMARY	ISC リンク上でアクティブな ISC 並列セッション (ISCUSER) の総数。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY IMSCON TYPE(ISC) コマンドの結果として戻される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 56. QUERY IMSCON TYPE(ISC) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY IMSCON TYPE(ISC) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C000008'	X'00002004'	無効なキーワードまたはキーワード・パラメーターが指定されました。
X'0C000008'	X'00002014'	NAME() パラメーターに無効な文字が指定されました。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C000014'	X'00005008'	コマンド・プロセッサは、BPEGETM を介したストレージの取得に失敗しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 57. QUERY IMSCON TYPE(ISC) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、QUERY IMSCON TYPE(ISC) コマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。

例

以下の例では、IMS1CIC4 は、IMS Connect への ISC リンクを定義する ISC ステートメントの ID です。このリンクは、ローカル IMS システム (名前が IMS1) とリモート CICS システム (APPLID が CICS1) の間のリンクです。

CICS サブシステムへの TCP/IP 接続は、RMTICICS ステートメントによって定義されます。RMTICICS ステートメントの ID は CICS4 です。

IMS では、接続はその ISC ノード名 (CIC4) によって識別されます。

ISC リンク上では、2 つの並列セッション CIC4U07 および CIC4U08 がアクティブです。

TSO SPOC 入力:

QUERY IMSCON TYPE(ISC) NAME(IMS1CIC4) SHOW(ALL)

TSO SPOC 出力:

```
(screen 1)
ISCName MbrName          CC Node   LclIMS   IpMember
IMS1CIC4 HWS1            0 CIC4    IMS1      HWS1
IMS1CIC4 HWS1            0
IMS1CIC4 HWS1            0

(screen 2)
ISCName MbrName          IMSplex   RmtCics  IpAddress
IMS1CIC4 HWS1            PLEX1     CICS4    127.0.0.1
IMS1CIC4 HWS1
IMS1CIC4 HWS1

(screen 3)
ISCName MbrName          HostName  Port CICSAppId CICSPort
IMS1CIC4 HWS1            WWW.EXAMPLE.COM 7777 CICS1    9876
IMS1CIC4 HWS1
IMS1CIC4 HWS1

(screen 4)
ISCName MbrName          CICSNetid Status   TotUsers TotActiv TotOther
IMS1CIC4 HWS1            IMSNET   ACTIVE   2         2         0
IMS1CIC4 HWS1
IMS1CIC4 HWS1

(screen 5)
ISCName MbrName          ISCUser   SendClnt RecvClnt IUStatus
IMS1CIC4 HWS1
IMS1CIC4 HWS1            CIC4U07  ISCC2714 ISC41218 ACTIVE
IMS1CIC4 HWS1            CIC4U08  ISCB5D1A ISCC279A ACTIVE
```

OM API 入力:

CMD (QUERY IMSCON TYPE(ISC) NAME(IMS1CIC4) SHOW(ALL))

OM API 出力:


```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.6.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2012.221 18:20:04.944914</statime>
<stotime>2012.221 18:20:04.946923</stotime>
<staseq>C9FD571B32812594</staseq>
<stoseq>C9FD571B32FEB114</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10112004</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>QUERY IMSCON TYPE(ISC) NAME(IMS1CIC4) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="ISC" l1b1="ISCName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="NODE" l1b1="Node" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="LIMS" l1b1="LclIMS" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
```

```

<hdr s1bl="IMEM" l1bl="IpMember" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="IMSPLX" l1bl="IMSPlex" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RIC" l1bl="RmtImsCon" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RCICS" l1bl="RmtCics" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="IP" l1bl="IpAddress" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="HOST" l1bl="HostName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="PORT" l1bl="Port" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CICAP" l1bl="CICSAppId" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CICPT" l1bl="CICSPort" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CICNT" l1bl="CICSNetid" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="STT" l1bl="Status" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TUSR" l1bl="TotUsers" scope="LCL" sort="d" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TACT" l1bl="TotActiv" scope="LCL" sort="d" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TOTH" l1bl="TotOther" scope="LCL" sort="d" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="IUSER" l1bl="ISCUser" scope="LCL" sort="a" key="3"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="SCL" l1bl="SendCnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RCL" l1bl="RecvCnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="IUSTT" l1bl="IUStatus" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>ISC(IMS1CIC4) MBR(HWS1 ) CC( 0) IUSER(CIC4U07 )
  SCL(ISCC2714) RCL(ISC41218) IUSTT(ACTIVE ) </rsp>
<rsp>ISC(IMS1CIC4) MBR(HWS1 ) CC( 0) IUSER(CIC4U08 )
  SCL(ISCB5D1A) RCL(ISCC279A) IUSTT(ACTIVE ) </rsp>
<rsp>ISC(IMS1CIC4) MBR(HWS1 ) CC( 0) NODE(CIC4 )
  LIMS(IMS1 ) IMEM(HWS1 ) IMSPLX(PLEX1 )
  RCICS(CICS4 ) IP(127.0.0.1) HOST(WWW.EXAMPLE.COM)
  PORT(7777) CICAP(CICS1 ) CICPT(9876 ) CICNT(IMSNET ) STT(ACTIVE
  ) TUSR(2) TACT(2) TOTH(0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

関連資料:

 [ISC ステートメント \(システム定義\)](#)

1217 ページの『UPDATE IMSCON TYPE(ISC) コマンド』

1262 ページの『UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンド』

QUERY IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンド

QUERY IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンドは、IMS Connect でアクティブになっている 1 つ以上の ISC 並列セッションの現行状況を表示するために使用します。

表示する必要がある ISC 並列セッションを、並列セッションのユーザー名で指定します。ISC 並列セッションは、ISC リンクに関連付けられています。ISC リンクは、IMS Connect 構成メンバー内の ISC ステートメントによって、IMS Connect に対して定義されています。

サブセクション:

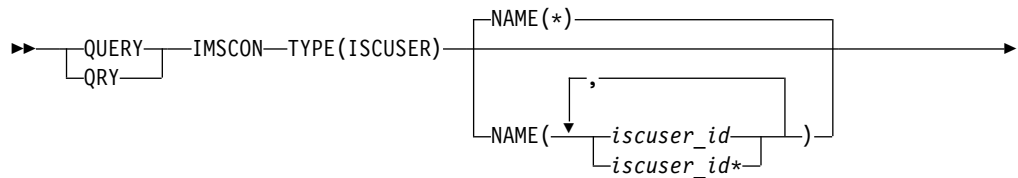
- 『環境』
- 『構文』
- 208 ページの『キーワード』
- 211 ページの『使用上の注意』
- 211 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』
- 211 ページの『出力フィールド』
- 213 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 214 ページの『例』

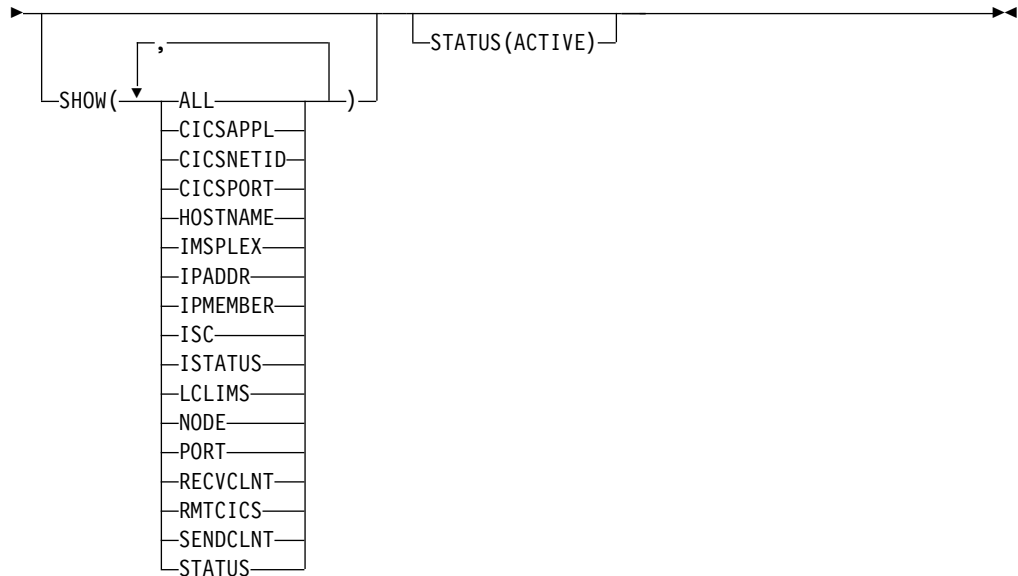
環境

QUERY IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文





キーワード

以下のキーワードは、`QUERY IMSCON TYPE(ISCUSER)` コマンドに有効です。

NAME

表示する必要がある並列セッションの ISC ユーザー名 (ISCUSER) を指定します。1 つ以上の ISC ユーザー名をコンマで区切って指定することができます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

指定する ISC ユーザー名は、並列セッションを開始したときに使用したユーザー名と一致している必要があります。

ISC 端末が IMS で静的に定義された場合、ユーザー名は SUBPOOL マクロの NAME キーワードで定義されています。

ISC 端末が動的に定義されており、並列セッションが IMS から開始された場合、ユーザー名はセッションを開始した `/OPNDST NODE` コマンドの USER キーワードで定義されています。動的に定義された端末の並列セッションが CICS から開始された場合、ユーザー名は IPCONN リソース定義の NAME パラメーターおよび APPLID パラメーターで定義されています。

すべての ISCUSER リソースを表示するには、`NAME(*)` を指定できます。デフォルト値は `NAME(*)` です。

NAME キーワードが省略された場合、すべての ISCUSER リソースが表示されます。

SHOW

オプションの出力フィールドを表示することを指定します。

特定の出力フィールドは、SHOW キーワードで指定されていない場合でも、常に表示されます。常に表示される出力フィールドには、ISCUSER 名、コマンドを処理する IMS Connect の名前、および完了コードがあります。

SHOW キーワードは、以下のパラメーターをサポートしています。これらのパラメーターは、任意の順序で指定することができます。

ALL

すべての出力フィールドを表示します。

CICSAPPL

リモート CICS サブシステムの APPLID を表示します。これは、ISC 構成ステートメントの CICSAPPL パラメーターで IMS Connect に対して定義されています。この値は、DFHSITxx メンバーの APPLID パラメーターで CICS に対して定義されている APPLID 値と一致します。

CICSNETID

リモート CICS サブシステムのネットワーク ID を表示します。

CICSPORT

ISC リンクが CICS からトランザクションとデータ応答を受信するポートを表示します。この受信ポートは、TCPIP および ISC の両方の構成ステートメントの CICSPORT キーワードで、IMS Connect について定義されます。このポート番号は、IPCONN リソース定義の PORT キーワードで CICS サブシステムに対して指定する必要があります。

HOSTNAME

リモート CICS サブシステムのホスト名を表示します。リモート CICS のホスト名は、IMS Connect 構成メンバー内の ISC ステートメントの RMTICIS パラメーターで定義されます。

IMSPLEX

IMSplex の名前を表示します。これは、IMS Connect 構成メンバー内にある ISC ステートメントの IMSPLEX パラメーターの TMEMBER サブパラメーターで定義されています。

IPADDR

リモート CICS サブシステムの IP アドレスを表示します。

IPMEMBER

IMSplex メンバー名を表示します。これは、IMS Connect 構成メンバー内にある ISC ステートメントの IMSPLEX パラメーターの MEMBER サブパラメーターで定義されています。これは、IMSplex に登録された IMS Connect メンバー名です。

ISC

ISCUSER に関連付けられている ISC リンクの名前を表示します。これは、IMS Connect 構成メンバー内の ISC ステートメントの ID パラメーターによって定義されています。

ISTATUS

ISC 端末の状況を表示します。状況は次のいずれかです。

ACTIVE

端末はアクティブです。

NOTACTIVE

端末はアクティブではありません。

LCLIMS

ローカル IMS の名前を表示します。これは、IMS Connect 構成メンバー内の ISC ステートメントの LCLIMS パラメーターで定義されています。

NODE

ISC ノード名を表示します。この名前は、IMS Connect およびローカル IMS システムに対して定義されています。ノード名は、ISC リンクを定義する ISC ステートメントの NODE パラメーターで IMS Connect に対して定義されます。

PORT

リモート CICS サブシステムがこの ISC リンクで IMS Connect からトランザクションとデータ応答を受信するポートを表示します。このポートは、TCPIP SERVICE リソース定義の PORT キーワードで CICS について定義されます。このポートは、リモート CICS サブシステムへの接続を定義する RMT CICS ステートメントの PORT キーワードで IMS Connect について指定されます。

RECVCLNT

IMS がこの ISC 並列セッション (ISCUSER) で、リモート CICS サブシステムからのトランザクションおよび応答データを受信するソケットを識別する受信クライアント名を表示します。受信クライアント名は、IMS Connect によってランダムに生成され、ISC 並列セッションがアクティブの間のみ保持されます。ISC 並列セッションの受信クライアント名は、文字「ISC」から始まります。

RMT CICS

リモート CICS 接続の名前を表示します。これは、IMS Connect 構成メンバー内の ISC ステートメントの RMT CICS パラメーターで定義されています。

SENDCLNT

IMS がこの ISC 並列セッション (ISCUSER) で、リモート CICS サブシステムへのトランザクションおよび応答データを送信するのに使用するソケットを識別する送信クライアント名を表示します。送信クライアント名は、IMS Connect によってランダムに生成され、ISC 並列セッションがアクティブの間のみ保持されます。ISC 並列セッションの送信クライアント名は、文字「ISC」から始まります。

STATUS

ISCUSER の状況を表示します。状況は次のいずれかです。

ACTIVE

ISCUSER はアクティブです。

返される可能性がある状態についての説明は、211 ページの表 58 内の STATUS キーワードを参照してください。

STATUS

このフィルターは、指定された状況の少なくとも 1 つを持つ ISCUSER リソースを選択して表示します。

STATUS フィルターを指定した場合は、SHOW(STATUS) が指定されていなくても、状況情報が表示されます。

STATUS キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

ACTIVE

ACTIVE の状況を持つ ISC リンクを選択します。

使用上の注意

QUERY IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

このコマンドでは、ISCUSER ごとに 1 つの出力表示行が表示されます。

同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド

QUERY IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンドには、同等の WTOR コマンドも z/OS MODIFY コマンドもありません。

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 58. QUERY IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。214 ページの表 60 を参照してください。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
CICAP	CICSAplid	CICSAPPL	リモート CICS の APPLID。
CICNT	CICSNetid	CICSNETID	リモート CICS のネットワーク ID。
CICPT	CICSPort	CICSPORT	CICSPORT ポート ID。これは、IMS Connect 構成メンバー内の TCPIP ステートメントで定義されています。
HOST	HostName	HOSTNAME	リモート CICS サブシステムのホスト名。リモート CICS サブシステムは、IMS Connect 構成メンバー内の ISC ステートメントの RMTICIS パラメーターで定義されます。

表 58. QUERY IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・			
ラベル	長ラベル	キーワード	意味
IMEM	IpMember	IPMEMBER	IMSplex メンバー名。これは、IMS Connect 構成メンバー内にある ISC ステートメントの IMSPLEX パラメーターの MEMBER サブパラメーターで定義されています。この名前は、IMSplex に登録された IMS Connect メンバー名です。
IMSPLX	IMSplex	IMSPLEX	IMSplex の名前。これは、IMS Connect 構成メンバー内にある ISC ステートメントの IMSPLEX パラメーターの TMEMBER サブパラメーターで定義されています。
IP	IpAddress	IPADDR	リモート CICS の IP アドレス。リモート CICS は、IMS Connect 構成メンバー内の ISC ステートメントの RMTICICS で定義されます。
ISC	ISCName	ISC	ISCUSER に関連付けられている ISC リンクの名前。これは、IMS Connect 構成メンバー内の ISC 構成ステートメントによって定義されています。
ISTT	ISCStatus	ISTATUS	並列セッション (ISCUSER) 出力フィールドに関連付けられている ISC リンクの状況。状況は次のいずれかです。 ACTIVE リンクはアクティブです。 NOTACTIVE リンクはアクティブではありません。
IUSER	ISCUser	N/A	ISC 並列セッションを表す ISCUSER の名前。ISCUSER の名前は常に戻されます。
LIMS	LclIMS	LCLIMS	ローカル IMS の名前。これは、IMS Connect 構成メンバー内の ISC ステートメントの LCLIMS パラメーターで定義されています。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。
NODE	Node	NODE	この接続を使用しているローカル ISC 端末名。これは、IMS Connect 構成メンバー内の ISC ステートメントの NODE パラメーターで指定されています。
PORT	Port	PORT	関連付けられたリモート CICS サブシステムのポート。リモート CICS は、ISC ステートメントの RMTICICS パラメーターで定義されます。
RCICS	RmtCICS	RMTICICS	リモート CICS 接続の名前。これは、IMS Connect 構成メンバー内の ISC ステートメントの RMTICICS パラメーターで定義されています。

表 58. QUERY IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
RCL	RecvClnt	RECVCLNT	IMS Connect が CICSSPORT 上のソケットに割り当てるクライアント名。この CICSSPORT は、対応する IUSER 出力フィールドで識別されている ISC 並列セッションについて、リモート CICS サブシステム (RMTICICS) からトランザクションとデータ応答を受信するために使用されます。
SCL	SendClnt	SENDCLNT	IMS Connect がソケットに割り当てるクライアント名。このソケットは、対応する IUSER 出力フィールドで識別されている ISC 並列セッションについて、リモート CICS サブシステム (RMTICICS) にトランザクションとデータ応答を送信するために使用されます。
STT	Status	STATUS	ISCUSER の状況。状況は次のいずれかです。 ACTIVE ISCUSER はアクティブです。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンドの結果として返される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 59. QUERY IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C000008'	X'00002004'	無効なキーワードまたはキーワード・パラメーターが指定されました。
X'0C000008'	X'00002014'	NAME() パラメーターに無効な文字が指定されました。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C000014'	X'00005008'	コマンド・プロセッサは、BPEGETM を介したストレージの取得に失敗しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 60. QUERY IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、QUERY IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。

例

QUERY IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンドの例 1

以下の例では、CICS システム CICSA1 と IMS システム IMS1 の間にアクティブな通信がある ISC リンク CICS 上に、2 つのアクティブな並列セッションがあります。CICS リンクは、端末ノード名 CICSTRM1 として IMS に定義されています。

TSO SPOC 入力:

```
QUERY IMSCON TYPE(ISCUSER) NAME(IMSUS*) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(Screen 1)

ISCUser	MbrName	CC	SendClnt	RecvClnt	Status	ISCName	ISCStatus
IMSUS01	HWS1	0	ISC11111	ISC33333	ACTIVE	CICS	ACTIVE
IMSUS02	HWS1	0	ISC22222	ISC44444	ACTIVE	CICS	ACTIVE

(Screen 2)

ISCUser	MbrName	Node	LclIMS	IpMember	IMSpIex	RmtCICS
IMSUS01	HWS1	CICSTRM1	IMS1	ICON1	PLEX1	ICONNT1
IMSUS02	HWS1	CICSTRM1	IMS1	ICON1	PLEX1	ICONNT1

(Screen 3)

ISCUser	MbrName	IpAddress	HostName	Port
IMSUS01	HWS1	127.0.0.1	WWW.EXAMPLE.COM	9998
IMSUS02	HWS1	127.0.0.1	WWW.EXAMPLE.COM	9998

(Screen 4)

ISCUser	MbrName	CICSAppIid	CICSPort	CICSNetid
IMSUS01	HWS1	CICSA1	7777	CICSNET
IMSUS02	HWS1	CICSA1	7777	CICSNET

OM API 入力:

```
CMD ( QUERY IMSCON TYPE(ISCUSER) NAME(IMSUS*) SHOW(ALL) )
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.6.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2012.137 23:27:03.321818</statime>
<stotime>2012.137 23:27:03.323791</stotime>
<staseq>C993FF0D9C8DA01C</staseq>
<stoseq>C993FF0D9D08F69C</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10162703</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>QRY IMSCON TYPE(ISCUSER) NAME(IMSUS*) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="IUSER" l1bl="ISCUser" scope="LCL" sort="a" key="2"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="SCL" l1bl="SendClnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RCL" l1bl="RecvClnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="STT" l1bl="Status" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="ISC" l1bl="ISCName" scope="LCL" sort="a" key="3"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="ISTT" l1bl="ISCStatus" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="NODE" l1bl="Node" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LIMS" l1bl="LclIMS" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="IMEM" l1bl="IpMember" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="IMSPLX" l1bl="IMSPlex" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RCICS" l1bl="RmtCics" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="IP" l1bl="IpAddress" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="HOST" l1bl="HostName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="PORT" l1bl="Port" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CICAP" l1bl="CICSAppId" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CICPT" l1bl="CICSPort" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CICNT" l1bl="CICSNetid" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>IUSER(IMSUS01 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) SCL(ISC11111)
RCL(ISC33333) STT(ACTIVE ) ISC(CICS ) ISTT(ACTIVE )
NODE(CICSTRM1) LIMS(IMS1 ) IMEM(ICON1 )
IMSPLX(PLEX1 ) RCICS(ICONNT1 ) IP(127.0.0.1)


```


```

HOST(WWW.EXAMPLE.COM) PORT(9998) CICAP(CICSA1 ) CICPT(7777 )
CICNT(CICSNET) </rsp>
<rsp>IUSER(IMSUS02 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) SCL(ISC22222)
RCL(ISC44444) STT(ACTIVE ) ISC(CICS ) ISTT(ACTIVE )
NODE(CICSTRM1) LIMS(IMS1 ) IMEM(ICON1 )
IMSPLX(PLEX1 ) RCICS(ICONNT1 ) IP(127.0.0.1)
HOST(WWW.EXAMPLE.COM) PORT(9998) CICAP(CICSA1 ) CICPT(7777 )
CICNT(CICSNET) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

関連資料:

 [ISC ステートメント \(システム定義\)](#)

 [RMTICICS ステートメント \(システム定義\)](#)

[1217 ページの『UPDATE IMSCON TYPE\(ISC\) コマンド』](#)

[1224 ページの『UPDATE IMSCON TYPE\(ISCUSER\) コマンド』](#)

[1262 ページの『UPDATE IMSCON TYPE\(RMTCICS\) コマンド』](#)

QUERY IMSCON TYPE(LINK) コマンド

QUERY IMSCON TYPE(LINK) コマンドは、IMS Connect に対して定義されている 1 つ以上の MSC 論理リンクの状況を表示するために使用します。

サブセクション:

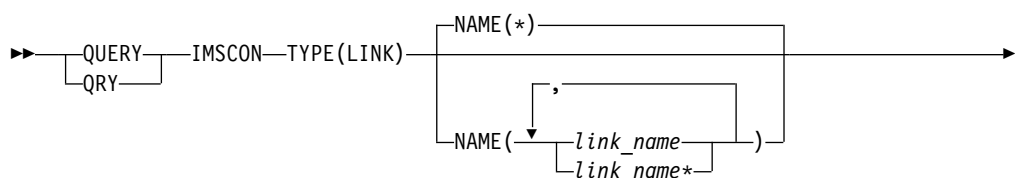
- 『環境』
- 『構文』
- 217 ページの『キーワード』
- 219 ページの『使用上の注意』
- 219 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』
- 219 ページの『出力フィールド』
- 221 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 222 ページの『例』

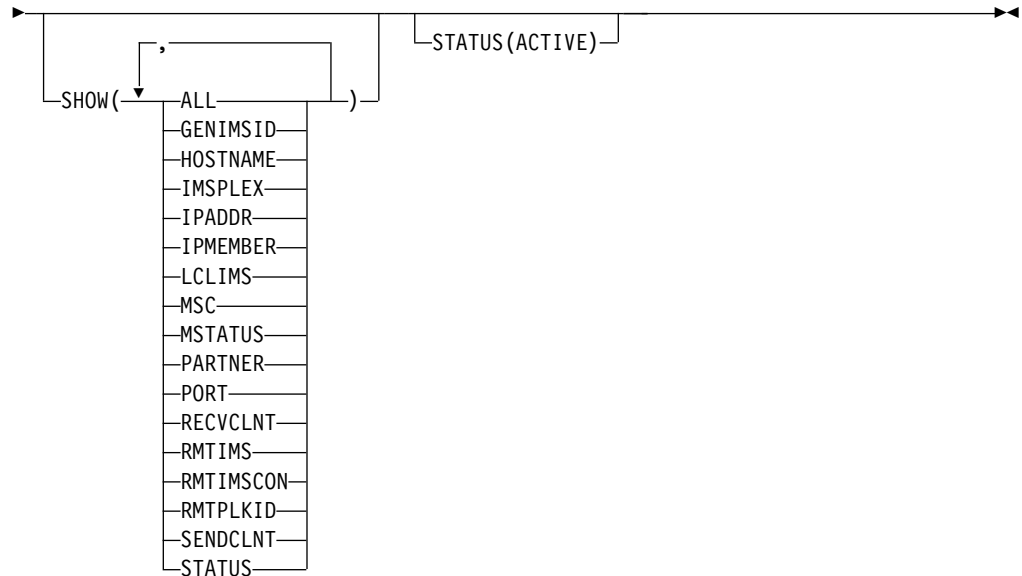
環境

QUERY IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文





キーワード

以下のキーワードは、`QUERY IMSCON TYPE(LINK)` コマンドに有効です。

NAME

Specifies one or more MSC logical links to be displayed. 単一の MSC 論理リンク名、またはコンマで区切った MSC 論理リンク名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

すべての MSC 論理リンク定義を表示するには、`NAME(*)` を指定できます。デフォルト値は `NAME(*)` です。

SHOW

オプションの出力フィールドを表示することを指定します。SHOW が指定されているかどうかに関係なく、常に表示される出力フィールドには、MSC 論理リンク名、コマンドを処理する IMS Connect の名前、および完了コードがあります。

SHOW キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

ALL

すべての出力フィールドを表示します。

GENIMSID

汎用 IMS の名前を表示します。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの GENIMSID パラメーターで定義されています。アクティブの MSC 論理リンクがある場合、このキーワードを指定すると、その MSC 論理リンクが類似性を持つ IMS ID も表示されます。

HOSTNAME

リモート IMS Connect のホスト名を表示します。リモートの IMS Connect は、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの RMTIMSCON パラメーターに定義されています。

IMSPLEX

IMSpIex の名前を表示します。これは、IMS Connect 構成メンバー内で、MSC ステートメントの IMSPLEX パラメーターの TMEMBER サブパラメーターで定義されています。

IPADDR

リモート IMS Connect の IP アドレスを表示します。リモートの IMS Connect は、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの RMTIMSCON パラメーターに定義されています。

IPMEMBER

IMSpIex メンバー名を表示します。これは、IMS Connect 構成メンバー内で、MSC ステートメントの IMSPLEX パラメーターの MEMBER サブパラメーターで定義されています。この名前は、IMSpIex に登録された IMS Connect メンバー名です。

LCLIMS

ローカル IMS の名前を表示します。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの LCLIMS パラメーターで定義されています。

MSC

この論理リンクに関連付けられている MSC 物理リンクの名前を表示します。これは、IMSCoNnect 構成メンバー内の MSC ステートメントで定義されています。

MSTATUS

論理リンクに関連付けられている MSC 物理リンクの状況を表示します。状況は、ACTIVE または NOTACTIVE のいずれかです。

PARTNER

論理リンクに関連付けられているパートナー ID の名前を表示します。

PORT

関連するリモート IMS Connect のポートを表示します。リモートの IMS Connect は、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの RMTIMSCON パラメーターに定義されています。

RECVCLNT

受信クライアント名を表示します。これは、この IMS Connect がこの論理リンクのためにメッセージを受信する、リモート IMS Connect のクライアント ID の名前です。

RMTIMS

リモート IMS の名前を表示します。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの RMTIMS パラメーターで定義されています。

RMTIMSCON

リモート IMS Connect 接続の名前を表示します。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの RMTIMSCON パラメーターで定義されています。

RMTPLKID

リモート MSC 物理リンク ID の名前を表示します。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの RMTPLKID パラメーターで定義されています。

SENDCLNT

送信クライアント名を表示します。これは、IMS Connect がこの論理リンクのためにリモート IMS Connect にメッセージを送信するのに使用する、クライアント ID の名前です。

STATUS

論理リンクの状況を表示します。状況は ACTIVE の可能性があり、これは論理リンクがアクティブであることを示します。

STATUS

以下の状況を持つ論理リンクを表示用を選択します。STATUS フィルターを指定した場合は、SHOW(STATUS) が指定されていなくても、状況情報が表示されます。STATUS キーワードでサポートされるフィルターは以下のとおりです。

ACTIVE

ACTIVE の状況を持つ論理リンクを選択します。

使用上の注意

QUERY IMSCON TYPE(LINK) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド

QUERY IMSCON TYPE(LINK) コマンドと同様の機能を実行する同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドはありません。

出力フィールド**ショート・ラベル**

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、error が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 61. QUERY IMSCON TYPE(LINK) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
AFFIN	Affinity	GENIMSID	MSC 論理リンクが類似性を持つ IMS の名前。
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。222 ページの表 63を参照してください。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
GIMS	GenIMSID	GENIMSID	汎用 IMS の名前。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの GENIMSID パラメーターで定義されています。
HOST	HostName	HOSTNAME	リモート IMS Connect のホスト名。リモートの IMS Connect は、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの RMTIMSCON パラメーターに定義されています。
IMEM	IpMember	IPMEMBER	IMSplex メンバー名。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの IMSPLEX パラメーターの MEMBER サブパラメーターで定義されています。この名前は、IMSplex に登録された IMS Connect メンバー名です。
IP	IpAddress	IPADDR	リモート IMS Connect の IP アドレス。リモートの IMS Connect は、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの RMTIMSCON パラメーターに定義されています。
IMSPLX	IMSplex	IMSPLEX	IMSplex の名前。これは、IMS Connect 構成メンバー内で、MSC ステートメントの IMSPLEX パラメーターの TMEMBER サブパラメーターで定義されています。
LIMS	LclIMS	LCLIMS	ローカル IMS の名前。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの LCLIMS パラメーターで定義されています。
LINK	リンク	N/A	MSC 論理リンクの名前。論理リンクの名前は常に戻されます。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。
MSC	MscName	MSC	MSC 物理リンクの名前。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC 構成ステートメントの LCLPLKID パラメーターで定義されています。

表 61. QUERY IMSCON TYPE(LINK) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
MSTT	MscStatus	MSTATUS	論理リンクに関連付けられている MSC 物理リンクの場合、このフィールドには物理リンクの状況または状態が表示されます。値は、次のいずれかになります。 ACTIVE 物理リンクはアクティブです。 NOTACTIVE 物理リンクはアクティブではありません。
PID	パートナー	PARTNER	論理リンクのパートナー ID の名前。
PORT	Port	PORT	関連するリモート IMS Connect のポート。リモートの IMS Connect は、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの RMTIMSCON パラメーターに定義されています。
RCL	RecvClnt	RECVCLNT	受信クライアント名。これは、この IMS Connect がこの論理リンクのためにメッセージを受信する、リモート IMS Connect のクライアント ID の名前です。
RIC	RmtImsCon	RMTIMSCON	リモート IMS Connect 接続の名前。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの RMTIMSCON パラメーターで定義されています。
RIMS	RmtIMS	RMTIMS	リモート IMS の名前。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの RMTIMS パラメーターで定義されています。
RPLK	RmtPlkID	RMTPLKID	リモート MSC 物理リンク ID の名前。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの RMTPLKID パラメーターで定義されています。
SCL	SendClnt	SENDCLNT	送信クライアント名。これは、IMS Connect がこの論理リンクのためにリモート IMS Connect にメッセージを送信するのに使用する、クライアント ID の名前です。
STT	Status	STATUS	論理リンクの状況。状況は以下のいずれかになります。 ACTIVE 論理リンクはアクティブです。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY IMSCON TYPE(LINK) コマンドの結果として戻される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 62. *QUERY IMSCON TYPE(LINK)* コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY IMSCON TYPE(LINK) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 63. *QUERY IMSCON TYPE(LINK)* コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、QUERY IMSCON TYPE(LINK) コマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。

例

QUERY IMSCON TYPE(LINK) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QUERY IMSCON TYPE(LINK) NAME(LINK12*) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(Screen 1)

```
Link  MbrName Partner  SendClnt RecvClnt Status
LINK12A HWS1 AA MSC11111 MSC33333 ACTIVE
LINK12B HWS1 BB MSC22222 MSC44444 ACTIVE
LINK12C HWS1 CC MSC55555 MSC77777 ACTIVE
```

(Screen 2)

```
Link  MbrName MscName MscStatus RmtPlkId LclIMS LclIMS2 RmtIMS
LINK12A HWS1 MSC12 ACTIVE MSC21 IMS1 IMS3 IMS2
LINK12B HWS1 MSC12 ACTIVE MSC21 IMS1 IMS3 IMS2
LINK12C HWS1 MSC12 ACTIVE MSC21 IMS1 IMS3 IMS2
```

(Screen 3)

Link	MbrName	GenIMSID	Affinity	IpMember	IMSpIex	RmtImSCon
LINK12A	HWS1	IMS	IMS1	ICON1	PLEX1	CONNECT2
LINK12B	HWS1	IMS	IMS1	ICON1	PLEX1	CONNECT2
LINK12C	HWS1	IMS	IMS1	ICON1	PLEX1	CONNECT2

(Screen 4)

Link	MbrName	IpAddress	HostName	Port
LINK12A	HWS1	010.100.200.002	ICON.IBM.COM	5555
LINK12B	HWS1	010.100.200.002	ICON.IBM.COM	5555
LINK12C	HWS1	010.100.200.002	ICON.IBM.COM	5555

OM API 入力:

CMD (' QUERY IMSCON TYPE(LINK) NAME(LINK12*) SHOW(ALL))

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2010.297 23:33:43.374620</statime>
<stotime>2010.297 23:33:43.375723</stotime>
<staseq>C6C7597265B1C3F7</staseq>
<stoseq>C6C7597265F6BFB7</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10163343</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>QRY IMSCON TYPE(LINK) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="LINK" l1bl="Link" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="PID" l1bl="Partner" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="SCL" l1bl="SendCnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="RCL" l1bl="RecvCnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="STT" l1bl="Status" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MSC" l1bl="MscName" scope="LCL" sort="a" key="3"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MSTT" l1bl="MscStatus" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="RPLK" l1bl="RmtPlkID" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="LIMS" l1bl="LclIMS" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="RIMS" l1bl="RmtIMS" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="GIMS" l1bl="GenIMSID" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
```


```

<hdr s1bl="AFFIN" l1bl="Affin" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="IMEM" l1bl="IpMember" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="IMSPLX" l1bl="IMSpIex" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="RIC" l1bl="RmtImsCon" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="IP" l1bl="IpAddress" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="HOST" l1bl="HostName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="PORT" l1bl="Port" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>LINK(LINK12A ) MBR(HWS1          ) CC( 0) PID(AA )
  SCL(MSC11111) RCL(MSC33333) STT(ACTIVE ) MSC(MSC12 ) MSTT(ACTIVE
  ) RPLK(MSC21 ) LIMS(IMS1 ) RIMS(IMS2 ) GIMS(IMS ) AFFIN(IMS1 )
  IMEM(ICON1 ) IMSPLX(PLEX1 ) RIC(CONNECT2)
  IP(010.100.200.002) HOST(ICON.IBM.COM) PORT(5555) </rsp>
<rsp>LINK(LINK12B ) MBR(HWS1          ) CC( 0) PID(BB )
  SCL(MSC22222) RCL(MSC44444) STT(ACTIVE ) MSC(MSC12 ) MSTT(ACTIVE
  ) RPLK(MSC21 ) LIMS(IMS1 ) RIMS(IMS2 ) GIMS(IMS ) AFFIN(IMS1 )
  IMEM(ICON1 ) IMSPLX(PLEX1 ) RIC(CONNECT2)
  IP(010.100.200.002) HOST(ICON.IBM.COM) PORT(5555) </rsp>
<rsp>LINK(LINK12C ) MBR(HWS1          ) CC( 0) PID(CC )
  SCL(MSC55555) RCL(MSC77777) STT(ACTIVE ) MSC(MSC12 ) MSTT(ACTIVE
  ) RPLK(MSC21 ) LIMS(IMS1 ) RIMS(IMS2 ) GIMS(IMS ) AFFIN(IMS1 )
  IMEM(ICON1 ) IMSPLX(PLEX1 ) RIC(CONNECT2)
  IP(010.100.200.002) HOST(ICON.IBM.COM) PORT(5555) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>


```

説明: MSC12 は、有効な MSC 物理リンク定義です。これは現在アクティブであり、3 つの関連の論理リンクを持っています。論理リンクのうちの 2 つは、現在アクティブです。

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 MSC ステートメント (システム定義)

QUERY IMSCON TYPE(MSC) コマンド

QUERY IMSCON TYPE(MSC) コマンドは、IMS Connect に対して定義されている 1 つ以上の MSC 物理リンクの状況を表示するために使用します。

サブセクション:

- 225 ページの『環境』
- 225 ページの『構文』
- 225 ページの『キーワード』
- 228 ページの『使用上の注意』
- 228 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』
- 229 ページの『出力フィールド』

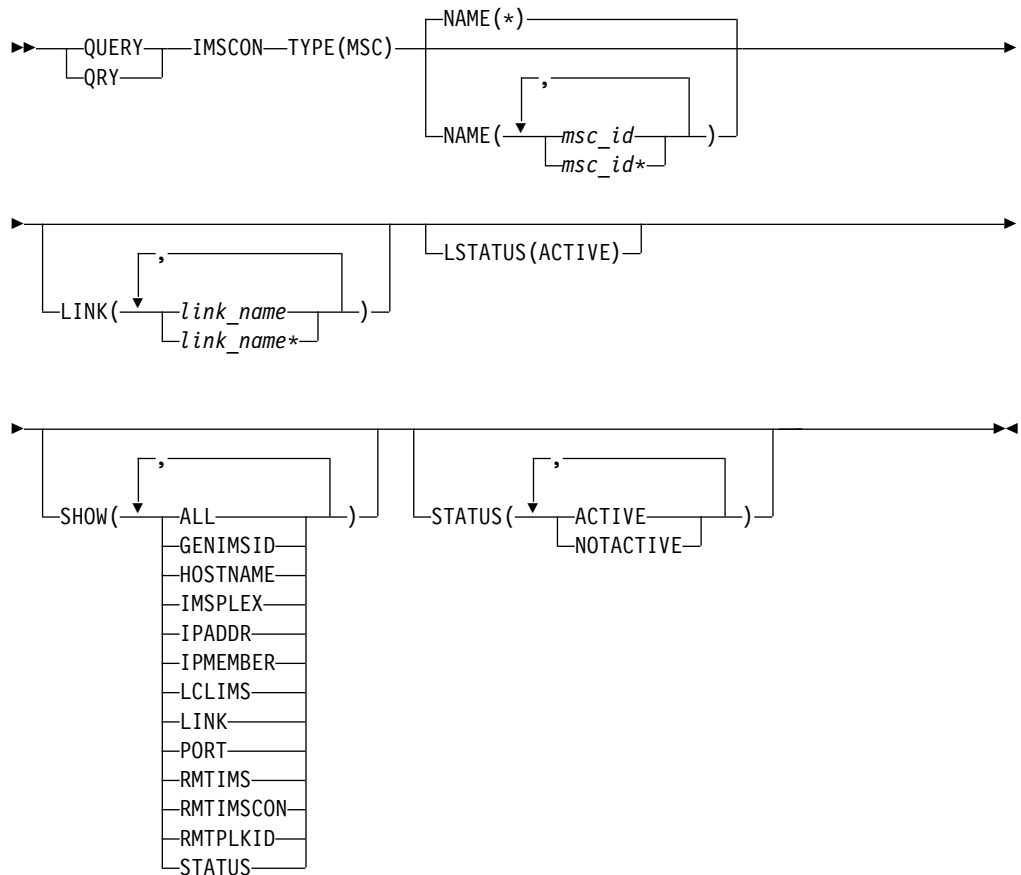
- 231 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 232 ページの『例』

環境

QUERY IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文



キーワード

以下のキーワードは、QUERY IMSCON TYPE(MSC) コマンドに有効です。

LINK

指定された論理リンクの 1 つが定義されている MSC 物理リンク・リソースを表示用に選択します。単一の論理リンク名、またはコンマで区切った論理リンク名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

指定された論理リンクを持つ MSC 物理リンク・リソースのみが表示されます。NAME() パラメーターに一致しているが、指定された論理リンクを持っていない MSC 物理リンク・リソースは表示されません。

LINK フィルターを指定した場合は、SHOW(LINK) が指定されていなくても、論理リンク情報が表示されます。LINK フィルターで指定された名前に一致する論理リンクが表示されます。MSC 物理リンクに関連付けられているが、フィルターに一致しない論理リンクは表示されません。

LSTATUS

以下の状態の論理リンクが少なくとも 1 つある MSC 物理リンク・リソースを表示用に選択します。

ACTIVE

この論理リンクはアクティブです。

NAME() パラメーターに一致しているが、そのような論理リンクを持っていない MSC 物理リンクは表示されません。

LSTATUS フィルターを指定した場合は、SHOW(LINK) が指定されていなくても、論理リンク情報が表示されます。この状態の論理リンクが表示されます。

NAME

表示する 1 つ以上の MSC 物理リンクを指定します。単一の MSC 物理リンク名、またはコンマで区切った MSC 物理リンク名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

すべての MSC 物理リンク定義を表示するには、NAME(*) を指定できます。デフォルト値は NAME(*) です。

SHOW

オプションの出力フィールドを表示することを指定します。SHOW が指定されているかどうかに関係なく、常に表示される出力フィールドには、MSC 物理リンク名、コマンドを処理する IMS Connect の名前、および完了コードがあります。

SHOW キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

ALL

すべての出力フィールドを表示します。

GENIMSID

汎用 IMS の名前を表示します。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの GENIMSID パラメーターで定義されています。アクティブの MSC 論理リンクがある場合、このキーワードを指定すると、その MSC 論理リンクが類似性を持つ IMS ID も表示されます。

HOSTNAME

リモート IMS Connect のホスト名を表示します。リモートの IMS Connect は、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの RMTIMSCON パラメーターに定義されています。

IMSPLEX

IMSplex の名前を表示します。これは、IMS Connect 構成メンバー内で、MSC ステートメントの IMSPLEX パラメーターの TMEMBER サブパラメーターで定義されています。

IPADDR

リモート IMS Connect の IP アドレスを表示します。リモートの IMS Connect は、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの RMTIMSCON パラメーターに定義されています。

IPMEMBER

IMSplex メンバー名を表示します。これは、IMS Connect 構成メンバー内で、MSC ステートメントの IMSPLEX パラメーターの MEMBER サブパラメーターで定義されています。これは、IMSplex に登録された IMS Connect メンバー名です。

LCLIMS

ローカル IMS の名前を表示します。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの LCLIMS パラメーターで定義されています。

LINK

指定された MSC 物理リンクに関連付けられた論理リンクの情報および状況を表示します。MSC 物理リンクが 1 つ以上の関連する論理リンクを持っている場合、コマンド出力に各論理リンクに関する情報が含まれます。論理リンクごとに個別の出力行が表示されます。この出力行は、一般的な MSC 物理リンク情報を表示する出力行に追加して表示されます。論理リンクがない場合は、追加の出力行は表示されません。

論理リンクに関して表示される情報には、以下のものが含まれます。

- 論理リンクの名前。
- パートナー ID の名前。
- 受信クライアント名。これは、この IMS Connect がこの論理リンクのためにメッセージを受信する、リモート IMS Connect のクライアント ID の名前です。
- 送信クライアント名。これは、IMS Connect がこの論理リンクのためにリモート IMS Connect にメッセージを送信するのに使用する、クライアント ID の名前です。
- 論理リンクの状況または状態。これは以下のいずれかです。

ACTIVE

この論理リンク接続はアクティブです。

PORT

関連するリモート IMS Connect のポートを表示します。リモートの IMS Connect は、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの RMTIMSCON パラメーターに定義されています。

RMTIMS

リモート IMS の名前を表示します。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの RMTIMS パラメーターで定義されています。

RMTIMSCON

リモート IMS Connect 接続の名前を表示します。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの RMTIMSCON パラメーターで定義されています。

RMTPLKID

リモート MSC 物理リンク ID の名前を表示します。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの RMTPLKID パラメーターで定義されています。

STATUS

MSC 物理リンクの状況を表示します。返される可能性がある状態についての説明は、229 ページの表 65 内の STATUS キーワードを参照してください。

STATUS

指定された状況の少なくとも 1 つを持つ MSC 物理リンクを表示用に選択します。STATUS フィルターを指定した場合は、SHOW(STATUS) が指定されていなくても、状況情報が表示されます。STATUS キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

ACTIVE

ACTIVE の状況を持つ MSC 物理リンクを選択します。

NOTACTIVE

NOTACTIVE の状況を持つ MSC 物理リンクを選択します。

使用上の注意

QUERY IMSCON TYPE(MSC) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

通常、このコマンドでは、MSC 物理リンク定義ごとに 1 つの出力表示行が表示されます。ただし、SHOW(LINK) キーワードが指定されている場合は、指定された MSC 定義に関連付けられている論理リンクごとに 1 つの追加行が表示されます。

同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、QUERY IMSCON TYPE(MSC) コマンドと同様の機能を実行する、WTOR (Write to Operator with Reply) コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

注:

- IMS Connect WTOR コマンドは、未解決の IMS Connect 応答メッセージに対する応答です。
- IMS Connect z/OS コマンドは、z/OS (MVS) インターフェースを介して、IMS Connect *jobname* を使用して発行されます。

表 64. QUERY IMSCON TYPE(MSC) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

QUERY IMSCON TYPE(MSC) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
QUERY IMSCON TYPE(MSC) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWMSC ALL	QUERY MSC NAME(*)
QUERY IMSCON TYPE(MSC) NAME(<i>msc_id</i>) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWMSC <i>msc_id</i>	QUERY MSC NAME(<i>msc_id</i>)

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 65. QUERY IMSCON TYPE(MSC) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
AFFIN	Affinity	GENIMSID	MSC 論理リンクが類似性を持つ IMS の名前。
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。232 ページの表 67を参照してください。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
GIMS	GenIMSID	GENIMSID	汎用 IMS の名前。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの GENIMSID パラメーターで定義されています。
HOST	HostName	HOSTNAME	リモート IMS Connect のホスト名。リモートの IMS Connect は、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの RMTIMSCON パラメーターに定義されています。
IMEM	IpMember	IPMEMBER	IMSplex メンバー名。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの IMSPLEX パラメーターの MEMBER サブパラメーターで定義されています。この名前は、IMSplex に登録された IMS Connect メンバー名です。

表 65. QUERY IMSCON TYPE(MSC) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
IP	IpAddress	IPADDR	リモート IMS Connect の IP アドレス。リモートの IMS Connect は、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの RMTIMSCON パラメーターに定義されています。
IMSPLX	IMSpIex	IMSPLEX	IMSpIex の名前。これは、IMS Connect 構成メンバー内で、MSC ステートメントの IMSPLEX パラメーターの TMEMBER サブパラメーターで定義されています。
LIMS	LclIMS	LCLIMS	ローカル IMS の名前。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの LCLIMS パラメーターで定義されています。
LIMS2	LclIMS2	LCLIMS	XRF ペアの第 2 のローカル IMS の名前。これは、IMS Connect 構成メンバー内の MSC ステートメントの LCLIMS パラメーターで定義されています。
LINK	リンク	LINK	MSC 物理リンクに関連付けられた論理リンクの名前。
LSTT	LinkStatus	LINK	物理リンクに関連付けられた論理リンクの場合、これは論理リンクの状況または状態であり、以下のいずれかです。 ACTIVE 論理リンクはアクティブです。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。
MSC	MscName	N/A	MSC 物理リンクの名前。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC 構成ステートメントの LCLPLKID パラメーターで定義されています。MSC 物理リンクの名前は常に戻されます。
PID	パートナー	LINK	MSC 物理リンクに関連付けられた論理リンクのパートナー ID の名前。
PORT	Port	PORT	関連するリモート IMS Connect のポート。リモートの IMS Connect は、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの RMTIMSCON パラメーターに定義されています。
RCL	RecvClnt	LINK	物理リンクに関連付けられた論理リンクの場合、このフィールドには受信クライアント名が表示されます。これは、この IMS Connect がこの論理リンクのためにメッセージを受信する、リモート IMS Connect のクライアント ID の名前です。
RIC	RmtImsCon	RMTIMSCON	リモート IMS Connect 接続の名前。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの RMTIMSCON パラメーターで定義されています。

表 65. QUERY IMSCON TYPE(MSC) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
RIMS	RmtIMS	RMTIMS	リモート IMS の名前。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの RMTIMS パラメーターで定義されています。
RPLK	RmtPlkID	RMTPLKID	リモート MSC 物理リンク ID の名前。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの RMTPLKID パラメーターで定義されています。
SCL	SendClnt	LINK	物理リンクに関連付けられた論理リンクの場合、このフィールドには送信クライアント名が表示されます。これは、IMS Connect がこの論理リンクのためにリモート IMS Connect にメッセージを送信するのに使用する、クライアント ID の名前です。
STT	Status	STATUS	MSC 物理リンクの状況。状況は次のいずれかです。 ACTIVE 物理リンクはアクティブです。 NOTACTIVE 物理リンクはアクティブではありません。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY IMSCON TYPE(MSC) コマンドの結果として戻される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 66. QUERY IMSCON TYPE(MSC) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY IMSCON TYPE(MSC) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 67. QUERY IMSCON TYPE(MSC) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、QUERY IMSCON TYPE(MSC) コマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。

例

QUERY IMSCON TYPE(MSC) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QUERY IMSCON TYPE(MSC) NAME(MSC12) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(Screen 1)

```
MscName MbrName CC RmtPlkId Lc1IMS Lc1IMS2 RmtIMS GenIMSID
MSC12 HWS1 0 MSC21 IMS1 IMS3 IMS2 IMS
MSC12 HWS1 0
MSC12 HWS1 0
MSC12 HWS1 0
```

(Screen 2)

```
MscName MbrName Affinity IpMember IMSplex RmtImCon
MSC12 HWS1 IMS1 ICON1 PLEX1 CONNECT2
MSC12 HWS1
MSC12 HWS1
MSC12 HWS1
```

(Screen 3)

```
MscName MbrName IpAddress HostName Port Status
MSC12 HWS1 010.100.200.002 ICON2.IBM.COM 5555 ACTIVE
MSC12 HWS1
MSC12 HWS1
MSC12 HWS1
```

(Screen 4)

```
MscName MbrName Link Partner SendInt RecvCnt LinkStatus
MSC12 HWS1
MSC12 HWS1 LINK12A AA MSC11111 MSC33333 ACTIVE
MSC12 HWS1 LINK12B BB MSC22222 MSC44444 ACTIVE
MSC12 HWS1 LINK12C CC MSC55555 MSC77777 ACTIVE
```

OM API 入力:

```
CMD ( QUERY IMSCON TYPE(MSC) NAME(MSC12) SHOW(ALL) )
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
```

```

<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2010.297 23:48:48.614927</statime>
<stotime>2010.297 23:48:48.616017</stotime>
<staseq>C6C75CD1B3A0FC8A</staseq>
<stoseq>C6C75CD1B3E51F4A</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10164848</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>QRY IMSCON TYPE(MSC) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="MSC" l1bl="MscName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RPLK" l1bl="RmtPlkID" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="LIMS" l1bl="LclIMS" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="RIMS" l1bl="RmtIMS" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="GIMS" l1bl="GenIMSID" scope="GEN" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="AFFIN" l1bl="Affin" scope="GEN" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="IMEM" l1bl="IpMember" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="IMSPLEX" l1bl="IMSpIex" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="RIC" l1bl="RmtImCon" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="IP" l1bl="IpAddress" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="HOST" l1bl="HostName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="PORT" l1bl="Port" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="STT" l1bl="Status" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="LINK" l1bl="Link" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="PID" l1bl="Partner" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="SCL" l1bl="SendClnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="RCL" l1bl="RecvClnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="LSTT" l1bl="LinkStatus" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MSC(MSC12 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) LINK(LINK12A ) PID(AA )
  SCL(MSC11111) RCL(MSC33333) LSTT(ACTIVE ) </rsp>
<rsp>MSC(MSC12 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) LINK(LINK12B ) PID(BB )
  SCL(MSC22222) RCL(MSC44444) LSTT(ACTIVE ) </rsp>
<rsp>MSC(MSC12 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) LINK(LINK12C ) PID(CC )
  SCL(MSC55555) RCL(MSC77777) LSTT(ACTIVE ) </rsp>

```

```

<rsp>MSC(MSC12 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) RPLK(MSC21 )
LIMS(IMS1 ) RIMS(IMS2 ) GIMS(IMS ) AFFIN(IMS1 )
IMEM(ICON1 ) IMSPLX(PLEX1 ) RIC(CONNECT2)
IP(010.100.200.002) HOST(ICON2.IBM.COM) PORT(5555) STT(ACTIVE ) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: MSC12 は、有効な MSC 物理リンク定義です。これは現在アクティブであり、3 つの関連の論理リンクを持っています。論理リンクのうちの 2 つは、現在アクティブです。

関連概念:

➡ CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

➡ MSC ステートメント (システム定義)

QUERY IMSCON TYPE(ODBM) コマンド

QUERY IMSCON TYPE(ODBM) コマンドは、IMS Connect に対して定義された 1 つ以上の ODBM の状況、別名、およびアクティビティを表示するために使用します。

サブセクション:

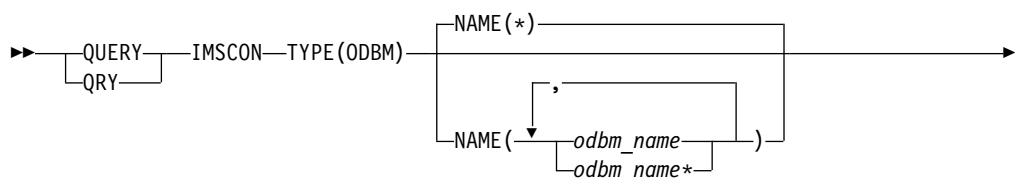
- 『環境』
- 『構文』
- 235 ページの『キーワード』
- 237 ページの『使用上の注意』
- 237 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』
- 237 ページの『出力フィールド』
- 239 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 239 ページの『例』

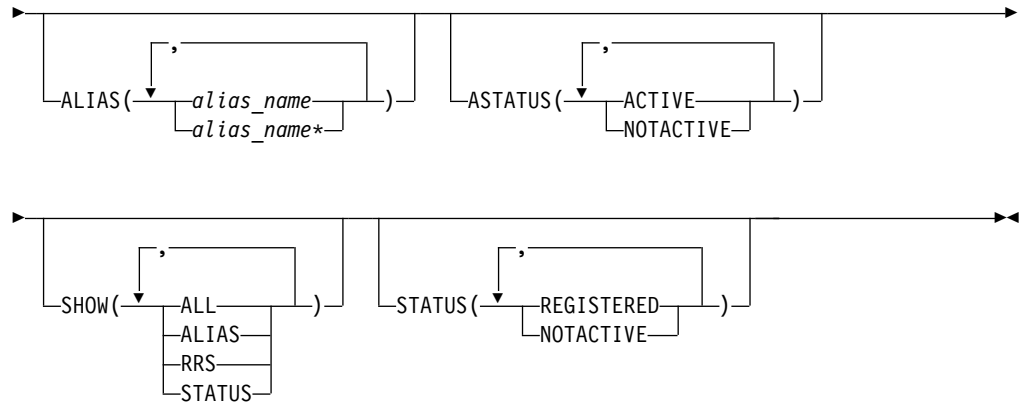
環境

QUERY IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文





キーワード

以下のキーワードは、QUERY IMSCON TYPE(ODBM) コマンドに有効です。

ALIAS

指定された別名の 1 つがポートに定義されている ODBM リソースを表示用に選択します。単一の別名、またはコンマで区切った別名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

指定された別名を持つ ODBM リソースのみが表示されます。NAME() パラメーターに一致しているが、指定された別名を持っていない ODBM は表示されません。

ALIAS フィルターを指定した場合は、SHOW(ALIAS) が指定されていなくても、別名情報が表示されます。ALIAS フィルターで指定された名前に一致する別名が表示されます。ODBM に関連付けられているが、フィルターに一致しない別名は表示されません。

ASTATUS

指定された状態のいずれかである別名を少なくとも 1 つ持っている ODBM リソースを表示用に選択します。単一の別名の状況、またはコンマで区切った別名の状況のリストを指定できます。

ASTATUS キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

ACTIVE

別名はアクティブです。

NOTACTIVE

別名は、IMS Connect 内、ODBM 内、またはその両方でアクティブではありません。

指定された状態のいずれかである別名を持つ ODBM リソースのみが表示されます。NAME() パラメーターに一致しているが、そのような別名を持っていない ODBM は表示されません。

ASTATUS フィルターを指定した場合は、SHOW(ALIAS) が指定されていなくても、別名情報が表示されます。指定された状態のいずれかである別名が表示されます。

NAME

表示する 1 つ以上の ODBM リソースを指定します。単一の ODBM 名、または、コンマで区切った ODBM 名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

すべての ODBM を表示するには、NAME(*) を指定できます。デフォルト値は NAME(*) です。

SHOW

オプションの出力フィールドを表示することを指定します。SHOW が指定されているかどうかに関係なく、常に表示される出力フィールドには、ODBM 名、コマンドを処理する IMS Connect の名前、および完了コードがあります。

SHOW キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

ALL

すべての出力フィールドを表示します。

ALIAS

ODBM のインスタンスに対して定義された IMS データ・ストアの別名を表示します。ODBM が 1 つ以上の別名を持っている場合、コマンド出力にそれぞれの別名に関する情報が含まれます。別名ごとに個別の出力行が表示されます。この出力行は、一般的な ODBM 情報を表示する出力行に追加して表示されます。ODBM リソースに別名がない場合は、追加の出力行は表示されません。

別名に関して表示される情報には、以下のものが含まれます。

- 別名の名前
- 別名の状況

返される可能性がある別名の状況についての説明は、237 ページの表 68 内の ALIAS キーワードを参照してください。

RRS

ODBM が z/OS リソース・リカバリー・サービス (RRS) を使用しているかどうかを表示します。IMS Connect を ODBM に登録すると、ODBM は IMS Connect にその RRS 設定を提供します。

STATUS

ODBM の状況を表示します。返される可能性がある状況についての説明は、237 ページの表 68 内の STATUS キーワードを参照してください。

STATUS

指定された状況の少なくとも 1 つを持つ ODBM を表示用に選択します。STATUS フィルターを指定した場合は、SHOW(STATUS) が指定されていなくても、状況情報が表示されます。

STATUS キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

REGISTERED

REGISTERED の状況を持つ ODBM を選択します。これは、IMS Connect のこのインスタンスが ODBM に登録されていることを意味しています。

NOTACTIVE

NOTACTIVE の状況を持つ ODBM を選択します。これは ODBM がアクティブでないことを意味しています。

使用上の注意

QUERY IMSCON TYPE(ODBM) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

通常、このコマンドでは、ODBM ごとに 1 つの出力表示行が表示されます。ただし、SHOW(ALIAS) キーワードが指定されている場合は、指定された ODBM に関連付けられている別名ごとに 1 つの追加行が表示されます。

同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド

QUERY IMSCON TYPE(ODBM) コマンドと同様の機能を実行する同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドはありません。

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 68. QUERY IMSCON TYPE(ODBM) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
ALIAS	AliasName	ALIAS	ODBM のインスタンスに対して定義された IMS データ・ストアの別名。

表 68. QUERY IMSCON TYPE(ODBM) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
ASTT	AStatus	ALIAS	<p>別名の状況または状態。これは以下のいずれかです。</p> <p>ACTIVE 別名はアクティブです。</p> <p>NOTACTIVE(IMSCON) 別名は、IMS Connect 内で STOPIA コマンドまたは同等のコマンドを使用して非活動化されています。</p> <p>NOTACTIVE(ODBM) 別名は、ODBM 内で、ODBM タイプ 2 UPDATE ODBM STOP(CONNECTION) ALIAS コマンドを使用して非活動化されています。</p> <p>NOTACTIVE(IMSCON,ODBM) 別名は、IMS Connect (STOPIA コマンドまたは同等コマンドを使用して) および ODBM (ODBM タイプ 2 UPDATE ODBM STOP(CONNECTION) ALIAS コマンドを使用して) の両方で非活動化されています。</p>
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたりソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。 239 ページの表 70 を参照してください。
CCTXT	CCText	error	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。
ODBM	ODBMName	N/A	ODBM の名前。ODBM 名は常に戻されます。
RRS	RRS	RRS	<p>ODBM での RRS 指定を示します。IMS Connect を ODBM に登録すると、ODBM は IMS Connect にその RRS 設定を提供します。指定は、以下のいずれかです。</p> <p>Y ODBM は RRS を使用しています。 N ODBM は RRS を使用していません。</p>
STT	Status	STATUS	<p>ODBM の状況。状況は次のいずれかです。</p> <p>REGISTERED IMS Connect のこのインスタンスは ODBM に登録されています。</p> <p>NOTACTIVE ODBM はアクティブではありません。</p>

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY IMSCON TYPE(ODBM) コマンドの結果として戻される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 69. QUERY IMSCON TYPE(ODBM) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY IMSCON TYPE(ODBM) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 70. QUERY IMSCON TYPE(ODBM) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、QUERY IMSCON TYPE(ODBM) コマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。

例

QUERY IMSCON TYPE(ODBM) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QUERY IMSCON TYPE(ODBM) NAME(*) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(Screen 1)

ODBMName	MbrName	CC	Status	RRS	AliasName	AStatus
ODBMA	HWS1	0	REGISTERED	N		
ODBMA	HWS1	0			IMS1	ACTIVE

```

ODBMA   HWS1   0           IMS2           NOTACTIVE(IMSCON)
ODBMB   HWS1   0 REGISTERED   N
ODBMB   HWS1   0           IMS1           ACTIVE
ODBMB   HWS1   0           IMS2           ACTIVE
ODBMC   HWS1   0 NOTACTIVE   N
ODBMD   HWS1   0 REGISTERED   N

```

OM API 入力:

```
CMD ( QUERY IMSCON TYPE(ODBM) NAME(*) SHOW(ALL) )
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2010.298 15:47:30.101469</statime>
<stotime>2010.298 15:47:30.102568</stotime>
<staseq>C6C8331A774DD430</staseq>
<stoseq>C6C8331A77928530</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10084729</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>QRY IMSCON TYPE(ODBM) NAME(*) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="ODBM" l1bl="ODBMName" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="STT" l1bl="Status" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="RRS" l1bl="RRS" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="ALIAS" l1bl="AliasName" scope="LCL" sort="a" key="3"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="ASTT" l1bl="AStatus" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>ODBM(ODBMA ) MBR(HWS1 ) CC( 0) ALIAS(IMS1)
  ASTT(ACTIVE) </rsp>
<rsp>ODBM(ODBMA ) MBR(HWS1 ) CC( 0) ALIAS(IMS2)
  ASTT(NOTACTIVE(IMSCON)) </rsp>
<rsp>ODBM(ODBMA ) MBR(HWS1 ) CC( 0) STT(REGISTERED)
  ) RRS(N) </rsp>
<rsp>ODBM(ODBMB ) MBR(HWS1 ) CC( 0) ALIAS(IMS1)
  ASTT(ACTIVE) </rsp>
<rsp>ODBM(ODBMB ) MBR(HWS1 ) CC( 0) ALIAS(IMS2)
  ASTT(ACTIVE) </rsp>
<rsp>ODBM(ODBMB ) MBR(HWS1 ) CC( 0) STT(REGISTERED)
  ) RRS(N) </rsp>
<rsp>ODBM(ODBMC ) MBR(HWS1 ) CC( 0) STT(NOTACTIVE)
  ) RRS(N) </rsp>

```

```

<rsp>ODBM(ODBMD ) MBR(HWS1 ) CC( 0) STT(REGISTERED
) RRS(N) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: IMS Connect に対して定義されている 4 つの ODBM リソースがあります。ODBMA と ODBMB には、2 つの別名が定義されています。ODBMC と ODBMD には別名はありません。ODBM ごとに、出力の最初の行には、その ODBM リソースに関連した情報および状況が表示され、一方、それに続く出力には、その ODBM に対して定義されたそれぞれの別名に固有の情報および状況が表示されています。

関連概念:

🔗 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンド

QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンドは、IMS Connect に対して定義された 1 つ以上のポートの状況およびアクティビティーを表示するために使用します。指定されたポート上でアクティブのクライアントも表示できます。

サブセクション:

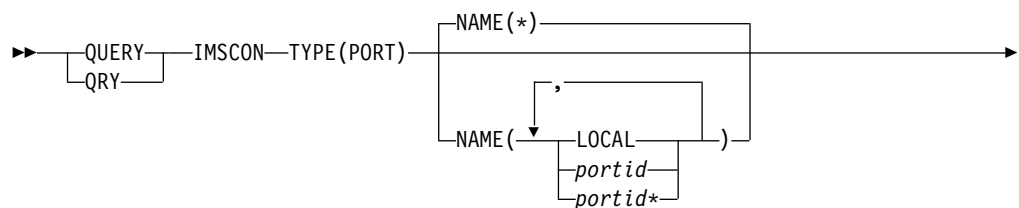
- 『環境』
- 『構文』
- 242 ページの『キーワード』
- 247 ページの『使用上の注意』
- 247 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』
- 248 ページの『出力フィールド』
- 250 ページの『戻りコードおよび理由コード』
- 251 ページの『完了コード』
- 251 ページの『例』

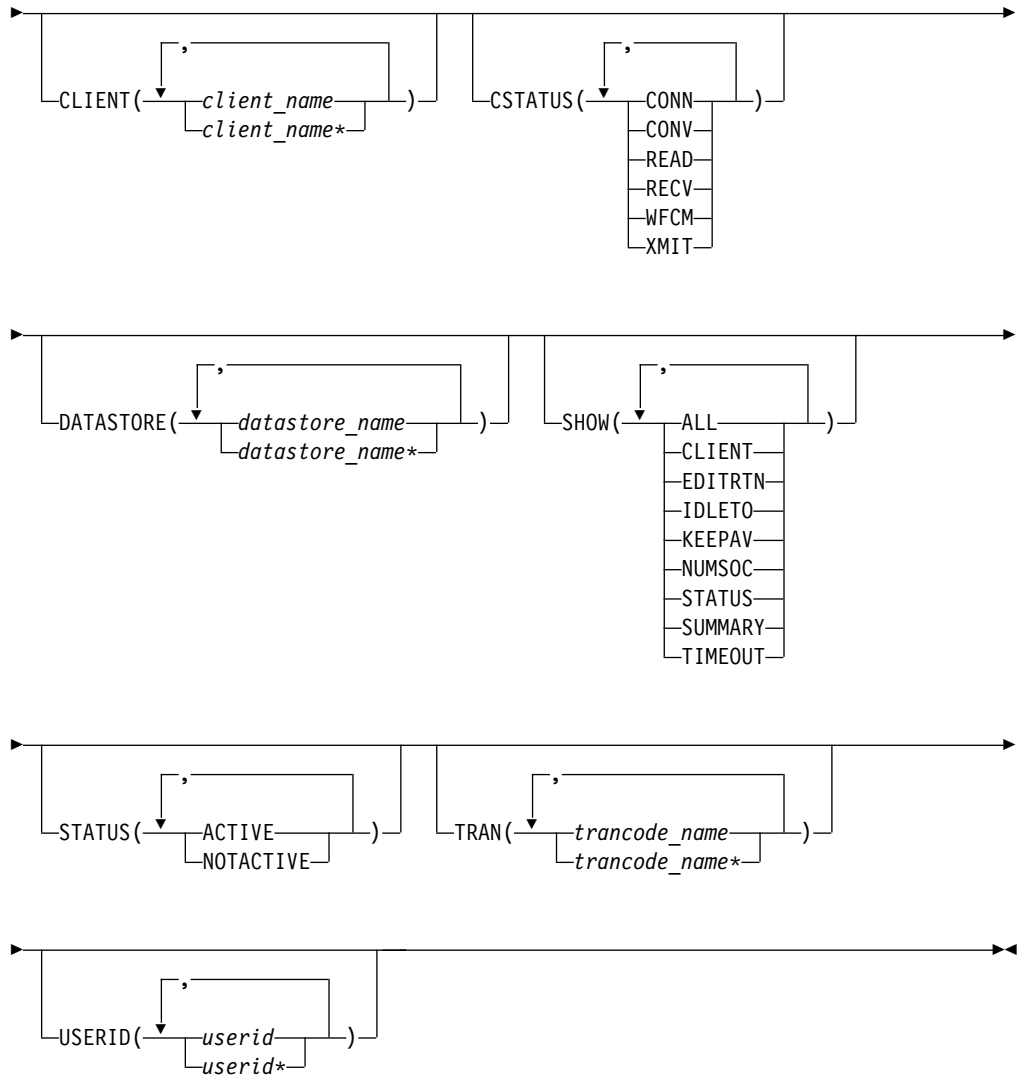
環境

QUERY IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文





キーワード

以下のキーワードは、`QUERY IMSCON TYPE(PORT)` コマンドに有効です。

CLIENT

指定されたクライアントの 1 つがポート上でアクティブであるポートを表示用を選択します。単一のクライアント名、または、コンマで区切ったクライアント名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

指定されたクライアントがアクティブのポートのみが表示されます。`NAME()` パラメーターに一致しているが、指定されたクライアントがアクティブでないポートは表示されません。

`CLIENT` フィルターを指定した場合は、`SHOW(CLIENT)` が指定されていなくても、クライアント情報が表示されます。

CLIENT フィルターで指定された名前に一致するクライアントのみが表示されます。ポート上でアクティブであるが、フィルターに一致しないクライアントは表示されません。

CSTATUS

指定された状態のいずれかであるアクティブ・クライアントが少なくとも 1 つ存在するポートを表示用を選択します。単一のクライアント状況、またはコンマで区切ったクライアント状況のリストを指定できます。

CSTATUS キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

CONN

IMS からの出力を待っています。

CONV

会話型状態にあります。

READ

クライアントから入力メッセージを読み取り中です。

RECV

クライアントからの入力を待機中 (つまり、receive 状態) です。

WFCM

クライアントからの確認 (ACK、NAK、または DEALLOCATE) を待機中です。

XMIT

クライアントにデータを送信中です。

指定された状態のいずれかであるアクティブ・クライアントが存在するポートのみが表示されます。NAME() パラメーターに一致しているが、そのようなアクティブ・クライアントがないポートは表示されません。

CSTATUS フィルターを指定した場合は、SHOW(CLIENT) が指定されていなくても、クライアント情報が表示されます。指定された状態のいずれかであるクライアントのみが表示されます。

DATASTORE

指定されたデータ・ストアに実行依頼されたトランザクションを持つアクティブ・クライアントが少なくとも 1 つあるポートを表示用を選択します。単一のデータ・ストア名、または、コンマで区切ったデータ・ストア名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

指定されたデータ・ストアに実行依頼されたトランザクションを持つアクティブ・クライアントがあるポートのみが表示されます。NAME() パラメーターに一致しているが、そのようなアクティブ・クライアントがないポートは表示されません。

DATASTORE フィルターを指定した場合は、SHOW(CLIENT) が指定されていなくても、クライアント情報が表示されます。指定されたデータ・ストアにトランザクションを実行依頼したクライアントのみが表示されます。

NAME

表示する 1 つ以上のポートを指定します。単一ポート番号、またはコンマで区切ったポート番号のリストを指定できます。ポート番号にはワイルドカードを使用できます。

IMS TM Resource Adapter によって使用されるローカル・ポートを表示するには、NAME(LOCAL) を指定します。

SSL ポートは、ポート番号の末尾に文字「S」を付けて表示されます。SSL ポートを表示するには、ポート番号の末尾に文字「S」を付けて、または付けずに、ポート番号を指定します。

ODBM 用に定義されているポートは、ポート番号の末尾に文字「D」を付けて表示されます。ODBM ポートを表示するには、ポート番号の末尾に文字「D」を付けて、または付けずに、ポート番号を指定します。

CICS サブシステムへの ISC リンク用に定義されているポートは、ポート番号の末尾に文字「C」を付けて表示されます。CICS ポートを表示するには、ポート番号の末尾に文字「C」を付けて、または付けずに、ポート番号を指定します。

すべてのポートを表示するには、NAME(*) を指定できます。デフォルト値は NAME(*) です。

SHOW

オプションの出力フィールドを表示することを指定します。SHOW が指定されているかどうかに関係なく、常に表示される出力フィールドには、ポート番号、コマンドを処理する IMS Connect の名前、および完了コードがあります。

SHOW キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

ALL

すべての出力フィールドを表示します。

CLIENT

ポートに関連付けられているアクティブ・クライアント・ソケット接続を表示します。ポートに 1 つ以上のアクティブ・クライアントがある場合、コマンド出力には各クライアント・ソケット接続に関する情報が含まれます。アクティブ・クライアントごとに個別の出力行が表示されます。この出力行は、一般的なポート情報を表示する出力行に追加して表示されます。ポートにアクティブ・クライアントがない場合は、追加の出力行は表示されません。

クライアントの要約情報 (アクティブ状態および各種の状態にあるクライアントの総数など) を表示するには、CLIENT フィルターに加えて SUMMARY フィルターを指定します。

クライアントに関して表示される情報には、以下のものが含まれます。

- クライアントの名前。

IMS Connect は、クライアント名を使用してクライアント・ソケット接続を識別します。IMS Connect クライアントの名前はクライアントが指定できます。また、クライアントが指定しない場合は、IMS Connect がランダムにその名前を生成します。

- IMS Connect に渡されたユーザー ID。
- 接続が MSC メッセージに使用されている場合、ローカル MSC 物理リンク ID。
- 接続が ISC メッセージに使用されている場合、ISC リンク ID。
- クライアントが実行依頼したトランザクション・コード。
- トランザクションが実行依頼されたデータ・ストア。
- クライアントが指定された状況にあった秒数。
- クライアント・ポート番号。これは、クライアントからの接続を表すために TCP/IP が生成する乱数です。
- クライアントが IMS Connect との接続に使用している IP アドレス。
- ODBM 用の APSB トークン。
- クライアントのスレッドの状況または状態。返される可能性があるクライアント状況についての説明は、248 ページの表 72 内の CLIENT キーワードを参照してください。
- RESUME TPIPE 要求を発行したクライアントによって指定された代替クライアント ID。
- RESUME TPIPE 要求を発行したクライアントの RESUME TPIPE トークン。

EDITRTN

ポート入出力編集出口ルーチンの名前を表示します。これは、IMS Connect 構成ファイル内のポート定義の EDIT= パラメーターで定義されています。

IDLETO

このポート上のオープン・ソケット接続が、非アクティブと見なされて終了されるまでに、アイドルのまま RECV 状態を維持できる時間を表示します。

表示される値は、IMS Connect 構成ファイル内のポート定義の IDLETO= パラメーターの値です。

値は 100 分の 1 秒単位で表示されます。返される値は、-1 から 2 147 483 647 (X'7FFFFFFF') です。値 0 は、このタイムアウト機能が無効であることを意味します。この場合、非アクティブ接続はタイムアウトになりません。値 -1 は、ポートに IDLETO 値が設定されていないため、ポート上の接続がグローバル IDLETO 値を使用することを意味します。

このポート・レベルのアイドル・タイムアウト値は、グローバル・レベルのアイドル・タイムアウト値をオーバーライドします。

KEEPAV

z/OS TCP/IP レイヤーが接続を維持するためにパケットを送信するまでに、接続がアイドル状態のままになる時間の長さを表示します。表示される値は、IMS Connect 構成ファイル内の TCPIP ステートメントまたは ODACCESS ステートメントの KEEPAV= キーワードで指定されています。

NUMSOC

ポート上で使用されているアクティブ・ソケットの数を表示します。この数には、アクティブ・クライアント・ソケットと 1 つの listen ソケットが含まれます。

STATUS

ポートの状況を表示します。返される可能性がある状況についての説明は、248 ページの表 72 内の STATUS キーワードを参照してください。

SUMMARY

ポート上でアクティブのクライアントに関連した要約情報を表示します。特定のクライアントの情報を表示するには、SUMMARY フィルターに加えて CLIENT フィルターを指定します。

表示される情報は以下のとおりです。

- ポート上でアクティブのクライアントの総数
- RECV 状態のクライアントの総数
- READ 状態のクライアントの総数
- CONN 状態のクライアントの総数
- XMIT 状態のクライアントの総数
- 上記のどの状態でもないクライアントの総数

TIMEOUT

クライアントからメッセージを受信しない場合に、クライアント接続を終了するまでに IMS Connect が待機する時間の長さを表示します。

STATUS

指定された状況の少なくとも 1 つを持つポートを表示用を選択します。

STATUS キーワードを指定した場合は、SHOW(STATUS) が指定されていなくても、状況情報が表示されます。

STATUS キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

ACTIVE

アクティブのポートを選択します。

NOTACTIVE

アクティブでないポートを選択します。

TRAN

指定されたトランザクションがデータ・ストアに実行依頼されているアクティブ・クライアントが少なくとも 1 つあるポートを表示用を選択します。単一のトランザクション名、またはコンマで区切ったトランザクション名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

指定されたトランザクションを持つアクティブ・クライアントがあるポートのみが表示されます。NAME() パラメーターに一致しているが、そのようなアクティブ・クライアントがないポートは表示されません。

TRAN フィルターを指定した場合は、SHOW(CLIENT) が指定されていなくても、クライアント情報が表示されます。指定されたトランザクションを実行依頼したクライアントのみが表示されます。

USERID

指定されたユーザー ID の 1 つがポート上でアクティブになっているポートを表示用に選択します。単一の *userid* 名、またはコンマで区切った *userid* 名のリストを指定できます。ユーザー ID にはワイルドカードを使用できます。

指定されたユーザー ID がアクティブのポートのみが表示されます。NAME() パラメーターに一致しているが、指定されたユーザー ID がアクティブでないポートは表示されません。

USERID フィルターを指定した場合は、SHOW(CLIENT) が指定されていなくても、クライアント情報が表示されます。CLIENT フィルターで指定されたユーザー ID を持つクライアントのみが表示されます。ポート上でアクティブであるが、フィルターに一致するユーザー ID を持っていないクライアントは表示されません。

使用上の注意

QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

通常、このコマンドでは、ポートごとに 1 つの出力表示行が表示されます。ただし、SHOW(CLIENT) キーワードが指定されている場合は、指定されたポートに関連付けられているクライアントごとに 1 つの追加行が表示されます。

同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンドと同様の機能を実行する、WTOR (Write to Operator with Reply) コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

注:

- IMS Connect WTOR コマンドは、未解決の IMS Connect 応答メッセージに対する応答です。
- IMS Connect z/OS コマンドは、z/OS (MVS) インターフェースを介して、IMS Connect *jobname* を使用して発行されます。

表 71. QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
QUERY IMSCON TYPE(PORT) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWPORT ALL	QUERY PORT NAME(*) SHOW(ALL)
QUERY IMSCON TYPE(PORT) NAME(<i>portid</i>) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWPORT <i>port_id</i>	QUERY PORT NAME(<i>port_id</i>) SHOW(ALL)
QUERY IMSCON TYPE(PORT) NAME(LOCAL) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWPORT LOCAL	QUERY PORT NAME(LOCAL) SHOW(ALL)

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 72. QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
ALTCID	AltCID	ALTCID	RESUME TPIPE 呼び出しを発行しているクライアントによって指定された代替クライアント ID。
APTK	ApsbToken	CLIENT	ODBM 用の APSB トークン。
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたりソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。251 ページの表 74 を参照してください。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
CLID	ClientID	CLIENT	クライアントの名前。
CPORT	ClntPort	CLIENT	クライアントが IMS Connect にメッセージを送信しているポート。通常、ポートは、クライアント・サイトの TCP/IP スタックによってクライアントにランダムに割り当てられます。
CSTT	CStatus	CLIENT	クライアントのスレッドの状況。状況は次のいずれかです。 CONN IMS からの出力を待っています。 CONV 会話型状態にあります。 READ クライアントから入力メッセージを読み取り中です。 RECV クライアントからの入力を待機中 (つまり、受信状態) です。 WFCM クライアントからの確認 (ACK、NAK、または DEALLOCATE) を待機中です。 XMIT クライアントにデータを送信中です。

表 72. QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
DS	DataStore	CLIENT	クライアントによってトランザクションが実行依頼されたデータ・ストア。
EDTR	EditRtn	EDITRTN	ポート入出力編集出口の名前。これは、IMS Connect 構成ファイル内のポート定義の EDIT= パラメーターで定義されています。
IP	IpAddress	CLIENT	IMS Connect に接続されているクライアントの IP アドレス。
ISC	ISCName	CLIENT	クライアントが使用している ISC リンクを定義する ISC 構成ステートメントの ID。
ITO	IdleTO	IDLETO	RECV 状態でアイドル中のソケット接続のタイムアウト値。
KAV	KeepAv	KEEPAV	z/OS TCP/IP レイヤーが接続を維持するためにパケットを送信するまでに、接続がアイドル状態のままになる時間の長さ。この時間は、IMS Connect 構成ファイル内の TCPIP ステートメントまたは ODACCESS ステートメントの KEEPAV= キーワードで指定されています。
LPLK	LclPlkID	CLIENT	この接続を使用しているローカル MSC 物理リンク ID。この値は、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの LCLPLKID パラメーターで指定されています。このフィールドは、MSC メッセージに対してのみ有効です。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。
NSOC	NumSoc	NUMSOC	各ポートで使用されるソケット数。
PORT	Port	N/A	ポート番号。ポート番号は常に戻されます。 以下のいずれかの文字がポート番号の末尾に追加されている場合、そのポートが特定の目的に専用であることを示します。 C CICS ポートを識別します。 D ODBM ポートを識別します。 S SSL ポートを識別します。 ポート番号の代わりに「LOCAL」と表示される場合、そのポートは IMS TM Resource Adapter が使用するローカル・ポートです。
RTTK	RTToken	RTTOKEN	RESUME TPIPE 呼び出しを発行しているクライアントの RESUME TPIPE トークン。
SEC	第 2 版	CLIENT	クライアントが現在の状態または状況にある秒数。

表 72. QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
STT	Status	STATUS	ポートの状況。状況は次のいずれかです。 ACTIVE ポートはアクティブです。 NOTACTIVE ポートアクティブではありません。
TCL	TotClnts	SUMMARY	ポート上のアクティブのクライアントの総数。
TCON	TotConn	SUMMARY	ポート上の「CONN」の状況を持つクライアントの総数。
TIMO	TimeOut	TIMEOUT	クライアントからメッセージが受信されない場合にクライアント接続を終了するまでに、IMS Connect が待機する時間の長さ。
TOTH	TotOther	SUMMARY	ポート上の「CONN」、「RECV」、または「XMIT」以外の状況を持つクライアントの総数。
TRAN	Trancode	CLIENT	クライアントが実行依頼したトランザクション・コード。
TRCV	TotRecv	SUMMARY	ポート上の「RECV」の状況を持つクライアントの総数。
TREAD	TotRead	SUMMARY	ポート上の「READ」の状況を持つクライアントの総数。
TXMT	TotXmit	SUMMARY	ポート上の「XMIT」の状況を持つクライアントの総数。
UID	UserID	CLIENT	IMS Connect に渡されるクライアントのユーザー ID。

戻りコードおよび理由コード

QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンドの結果として戻される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 73. QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、251 ページの『完了コード』表を参照してください。
X'0C000008'	X'00002004'	無効なキーワードまたはキーワード・パラメーターが指定されました。
X'0C000008'	X'00002014'	NAME() パラメーターに無効な文字が指定されました。

表 73. QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C000014'	X'00005008'	コマンド・プロセッサは、BPEGETM を介したストレージの取得に失敗しました。

完了コード

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 74. QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。

例

QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンドの例 1

以下の例では、ポート 9999 には 4 つのアクティブ・クライアントがあります。出力の最初の行は、ポートに関連する情報および状況を示しています。出力の最後の 4 行は、ポート上でアクティブな 4 つの各クライアントに固有の情報および状況を表示しています。

TSO SPOC 入力:

```
QUERY IMSCON TYPE(PORT) NAME(9999) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(Screen 1)

```
Port MbrName CC KeepAv NumSoc EditRtn TimeOut Status
9999 HWS1 0 0 5 0 ACTIVE
9999 HWS1 0
9999 HWS1 0
9999 HWS1 0
9999 HWS1 0
```

(Screen 2)

```
Port MbrName TotClnts TotRecv TotRead TotConn TotXmit TotOther
```

```

9999 HWS1          4          2          0          2          0          0
9999 HWS1
9999 HWS1
9999 HWS1
9999 HWS1
(Screen 3)
Port MbrName ClientID UserID Lc1PlkID Trancode DataStore CStatus Second
9999 HWS1
9999 HWS1 CLIENT01 USRT003          ITOC04 IMS1 RECV 2468
9999 HWS1 CLIENT12 USRT002          ITOC04 IMS1 RECV 15
9999 HWS1 MSC33333          MSC12          CONN 14
9999 HWS1 MSC44444          MSC12          CONN 9

```

(Screen 4)

```

Port MbrName ClntPort IpAddress          ApsbToken
9999 HWS1
9999 HWS1          2363 0:0:0:0:FFFF:930:6E53
9999 HWS1          2323 0:0:0:0:FFFF:930:6E53
9999 HWS1          1739 0:0:0:0:FFFF:A64:C802
9999 HWS1          2684 0:0:0:0:FFFF:A64:C802

```

OM API 入力:

```
CMD ( QUERY IMSCON TYPE(PORT) NAME(9999) SHOW(ALL) )
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xm1vsn>20 </xm1vsn>
<statime>2010.298 00:19:55.043283</statime>
<stotime>2010.298 00:19:55.044732</stotime>
<staseq>C6C763C5AA9D3667</staseq>
<stoseq>C6C763C5AAF7C5E7</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10171955</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>QUERY IMSCON TYPE(PORT) NAME(9999) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="PORT" l1b1="Port" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="KAV" l1b1="KeepAv" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="7" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="NSOC" l1b1="NumSoc" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="EDTR" l1b1="EditRtn" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="TIMO" l1b1="TimeOut" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="STT" l1b1="Status" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="TCL" l1b1="TotClnts" scope="LCL" sort="d" key="3"

```



```

scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TRCV" l1bl="TotRecv" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TREAD" l1bl="TotRead" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TCON" l1bl="TotConn" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TXMT" l1bl="TotXmit" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TOTH" l1bl="TotOther" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CLID" l1bl="ClientID" scope="LCL" sort="a" key="4"
scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="UID" l1bl="UserID" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LPLK" l1bl="LclPlkID" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TRAN" l1bl="Trancode" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="DS" l1bl="DataStore" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CSTT" l1bl="CStatus" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="SEC" l1bl="Second" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CPORT" l1bl="CIntPort" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="IP" l1bl="IpAddress" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="39" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="APTK" l1bl="ApsbToken" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>PORT(9999 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) CLID(CLIENT12)
UID(USRT002 ) TRAN(ITOC04 ) DS(IMS1 ) CSTT(RECV ) SEC(15)
CPORT(2323) IP(0:0:0:0:0:FFFF:930:6E53) APTK( ) </rsp>
<rsp>PORT(9999 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) CLID(CLIENT01)
UID(USRT003 ) TRAN(ITOC04 ) DS(IMS1 ) CSTT(RECV ) SEC(2468)
CPORT(2363) IP(0:0:0:0:0:FFFF:930:6E53) APTK( ) </rsp>
<rsp>PORT(9999 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) CLID(MSC33333)
LPLK(MSC12 ) CSTT(CONN ) SEC(14) CPORT(1739)
IP(0:0:0:0:0:FFFF:A64:C802) APTK( ) </rsp>
<rsp>PORT(9999 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) CLID(MSC44444)
LPLK(MSC12 ) CSTT(CONN ) SEC(9) CPORT(2694)
IP(0:0:0:0:0:FFFF:A64:C802) APTK( ) </rsp>
<rsp>PORT(9999 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) KAV(0) NSOC(5)
EDTR( ) TIMO(0) STT(ACTIVE) TCL(4) TRCV(2) TREAD(0) TCON(2)
TXMT(0) TOTH(0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンドの例 2

以下の例では、ポート 9999 には 4 つのアクティブ・クライアントがありますが、要約情報のみが要求されているため、1 行のみの出力が表示されています。

TSO SPOC 入力:

```
QUERY IMSCON TYPE(PORT) NAME(9999) SHOW(SUMMARY)
```

TSO SPOC 出力:

Port	MbrName	CC	TotClns	TotRecv	TotRead	TotConn	TotXmit	TotOther
9999	HWS1	0	4	4	0	0	0	0

OM API 入力:

CMD (QUERY IMSCON TYPE(PORT) NAME(9999) SHOW(SUMMARY))

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2010.298 00:30:21.422815</statime>
<stotime>2010.298 00:30:21.424144</stotime>
<staseq>C6C7661B074DF4F8</staseq>
<stoseq>C6C7661B07A10C38</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10173021</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>QUERY IMSCON TYPE(PORT) NAME(9999) SHOW(SUMMARY) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="PORT" l1bl="Port" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="KAV" l1bl="KeepAv" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="7" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="NSOC" l1bl="NumSoc" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="EDTR" l1bl="EditRtn" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TIMO" l1bl="TimeOut" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="STT" l1bl="Status" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TCL" l1bl="TotClnts" scope="LCL" sort="d" key="3"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TRCV" l1bl="TotRecv" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TREAD" l1bl="TotRead" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TCON" l1bl="TotConn" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TXMT" l1bl="TotXmit" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TOTH" l1bl="TotOther" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CLID" l1bl="ClientID" scope="LCL" sort="a" key="4"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="UID" l1bl="UserID" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LPLK" l1bl="LclPlkID" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TRAN" l1bl="Trancode" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="DS" l1bl="DataStore" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CSTT" l1bl="CStatus" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
```

```

<hdr s1bl="SEC" l1bl="Second" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CPORT" l1bl="ClntPort" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="IP" l1bl="IpAddress" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="39" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="APTK" l1bl="ApsbToken" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>PORT(9999 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) TCL(4) TRCV(4)
  TREAD(0) TCON(0) TXMT(0) TOTH(0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンドの例 3

以下の例では、コマンドは、CLIENT1 で始まるクライアント ID を持つアクティブのクライアントがあるポートを要求しています。ポート 9999 には、これに該当するアクティブのクライアントが 1 つ (CLIENT12) あります。その他のクライアントもポート上でアクティブである可能性があります、それらはクライアント ID が CLIENT キーワード・フィルターに一致しないため表示されません。同様に、他のポートも使用中である可能性があります、CLIENT キーワード・フィルターに一致するクライアントがないため、それらのポートについてはポート情報は表示されません。

SHOW キーワードは指定されませんが、CLIENT キーワードが指定されたため、SHOW(CLIENT) が想定されています。

出力の最初の行は、ポートに関連する情報および状況を表示しています。このケースでは、他の SHOW キーワード・パラメーターが指定されなかったため、最初の行にはそのポートが存在することのみが表示されています。出力の残りの行には、CLIENT12 に関する情報および状況が表示されています。

TSO SPOC 入力:

```
QUERY IMSCON TYPE(PORT) CLIENT(CLIENT1*)
```

TSO SPOC 出力:

(Screen 1)

Port	MbrName	CC	ClientID	UserID	Trancode	DataStore	Second	CStatus
9999	HWS1	0						
9999	HWS1	0	CLIENT12	USRT002	FESTX2	IMS1	15	RECV

(Screen 2)

Port	MbrName	ClntPort	IpAddress	ApsbToken
9999	HWS1			
9999	HWS1	2323	0:0:0:0:FFFF:930:6E53	

OM API 入力:

```
CMD ( QUERY IMSCON TYPE(PORT) CLIENT(CLIENT1*) )
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OMIOM </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2010.298 00:37:11.954827</statime>

```

```

<stotime>2010.298 00:37:11.955822</stotime>
<staseq>C6C767A28AD8BD37</staseq>
<stoseq>C6C767A28B16EB37</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10173711</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>QUERY IMSCON TYPE(PORT) CLIENT(CLIENT1*) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="PORT" l1b1="Port" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="KAV" l1b1="KeepAv" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="7" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="NSOC" l1b1="NumSoc" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="EDTR" l1b1="EditRtn" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="TIMO" l1b1="TimeOut" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="STT" l1b1="Status" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="TCL" l1b1="TotClnts" scope="LCL" sort="d" key="3"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="TRCV" l1b1="TotRecv" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="TREAD" l1b1="TotRead" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="TCON" l1b1="TotConn" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="TXMT" l1b1="TotXmit" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="TOTH" l1b1="TotOther" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="CLID" l1b1="ClientID" scope="LCL" sort="a" key="4"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="UID" l1b1="UserID" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="LPLK" l1b1="Lc1PlkID" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="TRAN" l1b1="Trancode" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="DS" l1b1="DataStore" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="CSTT" l1b1="CStatus" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="SEC" l1b1="Second" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="CPORT" l1b1="ClntPort" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="IP" l1b1="IpAddress" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="39" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="APTK" l1b1="ApsbToken" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>

```

```

<rsp>PORT(9999 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) CLID(CLIENT12)
UID(USRT002 ) TRAN(FESTX2 ) DS(IMS1 ) CSTT(RECV ) SEC(15)
CPORT(2323) IP(0:0:0:0:FFFF:930:6E53) APTK( ) </rsp>
<rsp>PORT(9999 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンドの例 4

以下の例では、コマンドは、ユーザー ID が USRT002 であるアクティブなクライアントがあるポートを要求しています。ポート 9999 には、これに該当するアクティブのクライアントが 1 つ (CLIENT12) あります。その他のクライアントもポート上でアクティブである可能性があります、それらはユーザー ID が USERID キーワード・フィルターに一致しないため表示されません。同様に、他のポートも使用中である可能性があります、USERID キーワード・フィルターに一致するクライアントがないため、それらのポートについてはポート情報は表示されません。

出力の最初の行は、ポートに関連する情報および状況を表示しています。このケースでは、他の SHOW キーワード・パラメーターが指定されなかったため、最初の行にはそのポートが存在することのみが表示されています。出力の残りの行には、CLIENT12 に関する情報および状況が表示されています。

SHOW キーワードは指定されませんでした、USERID キーワード・フィルターが指定されたため、SHOW(CLIENT) が想定されています。

TSO SPOC 入力:

```
QUERY IMSCON TYPE(PORT) USERID(USRT002)
```

TSO SPOC 出力:

```

(Screen 1)
Port MbrName CC ClientID UserID Trancode DataStore Second CStatus
9999 HWS1 0
9999 HWS1 0 CLIENT12 USRT002 FESTX2 IMS1 15 RECV
(Screen 2)
Port MbrName ClntPort IpAddress ApsbToken
9999 HWS1
9999 HWS1 2323 0:0:0:0:FFFF:930:6E53

```

OM API 入力:

```
CMD ( QUERY IMSCON TYPE(PORT) USERID(USRT002) )
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2010.298 00:42:47.545738</statime>
<stotime>2010.298 00:42:47.567715</stotime>
<staseq>C6C768E29638ACEA</staseq>
<stoseq>C6C768E29B96379A</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10174247</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>

```

```

<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>QUERY IMSCON TYPE(PORT) USERID(USRT002) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="PORT" l1bl="Port" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="KAV" l1bl="KeepAv" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="7" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="NSOC" l1bl="NumSoc" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="EDTR" l1bl="EditRtn" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TIMO" l1bl="TimeOut" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="STT" l1bl="Status" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TCL" l1bl="TotCInts" scope="LCL" sort="d" key="3"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TRCV" l1bl="TotRecv" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TREAD" l1bl="TotRead" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TCON" l1bl="TotConn" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TXMT" l1bl="TotXmit" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TOTH" l1bl="TotOther" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CLID" l1bl="ClientID" scope="LCL" sort="a" key="4"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="UID" l1bl="UserID" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LPLK" l1bl="Lc1PlkID" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TRAN" l1bl="Trancode" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="DS" l1bl="DataStore" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CSTT" l1bl="CStatus" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="SEC" l1bl="Second" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CPORT" l1bl="CIntPort" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="IP" l1bl="IpAddress" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="39" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="APTK" l1bl="ApsbToken" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>PORT(9999 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) CLID(CLIENT12)
  UID(USRT002 ) TRAN(FESTX2 ) DS(IMS1 ) CSTT(RECV ) SEC(15)
  CPORT(2323) IP(0:0:0:0:0:FFFF:930:6E53) APTK( ) </rsp>
<rsp>PORT(9999 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンドの例 5

以下の例では、コマンドは、ポート 9876 に関する情報を要求しています。TCPIP および ISC ステートメントの CICSPOINT パラメーターによってポートが定義されているため、ポート番号に C が追加されています。

ポート 9876 上では、2 つのクライアント接続がアクティブです。文字 ISC から始まるクライアント ID は、これらのクライアントが ISC 接続を使用していることも示します。両方のクライアントが、ISC 構成ステートメント IMS1CIC4 によって IMS Connect に対して定義された ISC 接続を使用しています。

TSO SPOC 入力:

```
QUERY IMSCON TYPE(PORT) NAME(9876) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

```
(screen 1)
Port      MbrName      CC  KeepAv      NumSoc EditRtn      TimeOut Status
9876C    HWS1          0    0            3          0 ACTIVE
9876C    HWS1          0
9876C    HWS1          0
(screen 2)
Port      MbrName      TotClnts TotRecv TotRead TotConn TotXmit TotOther
9876C    HWS1          2        2        0        0        0        0
9876C    HWS1
9876C    HWS1
(screen 3)
Port      MbrName      ClientID ISCName  CStatus      Second ClntPort
9876C    HWS1          ISCC279A IMS1CIC4 RECV          1384 1057
9876C    HWS1          ISC41218 IMS1CIC4 RECV          1388 1055
(screen 4)
Port      MbrName      ClientID IpAddress
9876C    HWS1          ISCC279A 0:0:0:0:FFFF:91E:72F3
9876C    HWS1          ISC41218 0:0:0:0:FFFF:91E:72F3
```

OM API 入力:

```
CMD ( QUERY IMSCON TYPE(PORT) NAME(9876) SHOW(ALL) )
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.6.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2012.221 18:31:09.431501</statime>
<stotime>2012.221 18:31:09.433764</stotime>
<staseq>C9FD5994E6ACD414</staseq>
<stoseq>C9FD5994E73A4194</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10113109</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>QUERY IMSCON TYPE(PORT) NAME(9876) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="PORT" l1bl="Port" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
```

```

<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="KAV" l1bl="KeepAv" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="7" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="NSOC" l1bl="NumSoc" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="EDTR" l1bl="EditRtn" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TIMO" l1bl="TimeOut" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="STT" l1bl="Status" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TCL" l1bl="TotClnts" scope="LCL" sort="d" key="3"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TRCV" l1bl="TotRecv" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TREAD" l1bl="TotRead" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TCON" l1bl="TotConn" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TXMT" l1bl="TotXmit" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TOTH" l1bl="TotOther" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CLID" l1bl="ClientID" scope="LCL" sort="a" key="4"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="UID" l1bl="UserID" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LPLK" l1bl="Lc1PlkID" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="ISC" l1bl="ISCName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TRAN" l1bl="Trancode" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="DS" l1bl="DataStore" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CSTT" l1bl="CStatus" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="SEC" l1bl="Second" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CPORT" l1bl="CIntPort" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="IP" l1bl="IpAddress" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="39" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="APTK" l1bl="ApsbToken" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>PORT(9876C ) MBR(HWS1 ) CC( 0) CLID(ISCC279A)
  ISC(IMS1C1C4) CSTT(RECV ) SEC(1384) CPORT(1057)
  IP(0:0:0:0:FFFF:91E:72F3) </rsp>
<rsp>PORT(9876C ) MBR(HWS1 ) CC( 0) CLID(ISC41218)
  ISC(IMS1C1C4) CSTT(RECV ) SEC(1388) CPORT(1055)
  IP(0:0:0:0:FFFF:91E:72F3) </rsp>
<rsp>PORT(9876C ) MBR(HWS1 ) CC( 0) KAV(0) NSOC(3) EDTR(
  ) TIMO(0) STT(ACTIVE) TCL(2) TRCV(2) TREAD(0) TCON(0) TXMT(0)
  TOTH(0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンドの例 6

以下の例では、コマンドはポート 9999 に接続されたすべてのクライアントに関する情報を取得します。コマンド出力に RESUME TPIPE トークンが示されているので、クライアント CLIENT01 が RESUME TPIPE を発行したことがわかります。さらに、CLIENT01 は代替クライアント ID CLIENT02 のために出力メッセージを取得しています。

TSO SPOC 入力:

```
QUERY IMSCON TYPE(PORT) NAME(9999) SHOW(CLIENT)
```

TSO SPOC 出力:

```
(screen 1)
Port      MbrName      CC ClientID UserID   Trancode DataStore CStatus
9999     HWS1          0
9999     HWS1          0 CLIENT01 USRT003      IMS1      RECV WFCM
(screen 2)
Port      MbrName      ClientID   Second ClntPort IpAddress
9999     HWS1          CLIENT01   225 57063    0:0:0:0:FFFF:937:86B2
(screen 3)
Port      MbrName      ClientID AltCID   RTToken
9999     HWS1          CLIENT01
9999     HWS1          CLIENT01 CLIENT02 CDDDA95551AFA509
```

OM API 入力:

```
CMD ( QUERY IMSCON TYPE(PORT) NAME(9999) SHOW(CLIENT) )
```

OM API 出力:

```
<?xml version="1.0"?>
<!DOCTYPE imsout SYSTEM "imsout.dtd">
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.7.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2014.280 00:39:07.269359</statime>
<stotime>2014.280 00:39:07.269647</stotime>
<staseq>CDDDAB60A5CEF204</staseq>
<stoseq>CDDDAB60A5E0FC84</stoseq>
<rqsttkn1>USRT002 10173907</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT002 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>QUERY IMSCON TYPE(PORT) NAME(9999) SHOW(CLIENT) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr slbl="PORT" llbl="Port" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr slbl="MBR" llbl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr slbl="CC" llbl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr slbl="CCTXT" llbl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr slbl="KAV" llbl="KeepAv" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="7" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr slbl="NSOC" llbl="NumSoc" scope="LCL" sort="n" key="0">
```

```

scroll="yes" len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="EDTR" l1bl="EditRtn" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TIMO" l1bl="TimeOut" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="STT" l1bl="Status" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TCL" l1bl="TotClnts" scope="LCL" sort="d" key="3"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TRCV" l1bl="TotRecv" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TREAD" l1bl="TotRead" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TCON" l1bl="TotConn" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TXMT" l1bl="TotXmit" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TOTH" l1bl="TotOther" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CLID" l1bl="ClientID" scope="LCL" sort="a" key="4"
scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="UID" l1bl="UserID" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LPLK" l1bl="Lc1PlkID" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="ISC" l1bl="ISCName" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TRAN" l1bl="Trancode" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="DS" l1bl="DataStore" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CSTT" l1bl="CStatus" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="SEC" l1bl="Second" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CPORT" l1bl="ClntPort" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="IP" l1bl="IpAddress" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="39" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="APTK" l1bl="ApsbToken" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="ALTCID" l1bl="AltCID" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RTTK" l1bl="RTToken" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="16" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>PORT(9999 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) CLID(CLIENT01)
UID(USRT003 ) TRAN( ) DS(IMS1 ) CSTT(RECV WFCM) SEC(225)
CPORT(57063) IP(0:0:0:0:FFFF:937:86B2) ALTCID(CLIENT02)
RTTK(CDDDA95551AFA509) </rsp>
<rsp>PORT(9999 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンドの例 7

以下の例は、IDLETO 値がどのように表示されるかを示しています。この例で、コマンドは、5 つの異なるポートに接続されているクライアントに関するすべての情報を要求しています。

アイドル・タイムアウト値は、CICS ポートおよび DRDA ポートには適用されません。そのため、ポート 5555 と 6600 の出力行の表示では、IDLETO 値がブランクになっています。

IDLETO 値 -1 は、ポートにアイドル・タイムアウトが定義されていないことを意味します。ポート 9999 のソケット接続は、グローバル・レベルの IDLETO 値を使用します。

IDLETO 値 1000 は、ポート 7777 のソケット接続のアイドル・タイムアウトが有効になっており、タイムアウト値が 10 秒であることを意味します。

IDLETO 値 0 は、ポート 9998 のソケット接続のアイドル・タイムアウト値が無効であることを意味します。

TSO SPOC 入力:

```
QRY IMSCON TYPE(port) name(5555,6600,7777,9998,9999) show(a11)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

Port	MbrName	CC	KeepAv	NumSoc	EditRtn	TimeOut
5555D	HWS1	0	0	1		12000
6600C	HWS1	0	0	1		0
7777	HWS1	0	0	1		0
9998	HWS1	0	0	1		0
9999	HWS1	0	0	1		0

(screen 2)

Port	MbrName	Status	IdleTO
5555D	HWS1	ACTIVE	
6600C	HWS1	ACTIVE	
7777	HWS1	ACTIVE	1000
9998	HWS1	ACTIVE	0
9999	HWS1	ACTIVE	-1

OM API 入力:

```
QRY IMSCON TYPE(PORT) NAME(5555,6600,7777,9998,9999) SHOW(ALL)
```

OM API 出力:


```
<cmdsphdr>
<hdr s1bl="PORT" l1bl="Port" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="KAV" l1bl="KeepAv" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="7" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="NSOC" l1bl="NumSoc" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="EDTR" l1bl="EditRtn" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TIMO" l1bl="TimeOut" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="STT" l1bl="Status" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TCL" l1bl="TotClnts" scope="LCL" sort="d" key="3"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TRCV" l1bl="TotRecv" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TREAD" l1bl="TotRead" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TCON" l1bl="TotConn" scope="LCL" sort="n" key="0"
```

```


scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TXMT" l1bl="TotXmit" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TOTH" l1bl="TotOther" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CLID" l1bl="ClientID" scope="LCL" sort="a" key="4"
scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="UID" l1bl="UserID" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LPLK" l1bl="Lc1PlkID" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="ISC" l1bl="ISCName" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TRAN" l1bl="Trancode" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="DS" l1bl="DataStore" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CSTT" l1bl="CStatus" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="SEC" l1bl="Second" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="CPORT" l1bl="CIntPort" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="IP" l1bl="IpAddress" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="39" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="APTK" l1bl="ApsbToken" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="ALTCID" l1bl="AltCID" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RTTK" l1bl="RTToken" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="16" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="ITO" l1bl="IdleTO" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>PORT(5555D ) MBR(HWS1 ) CC( 0) KAV(0) NSOC(1) EDTR(
) TIMO(12000) STT(ACTIVE) </rsp>
<rsp>PORT(6600C ) MBR(HWS1 ) CC( 0) KAV(0) NSOC(1) EDTR(
) TIMO(0) STT(ACTIVE) </rsp>
<rsp>PORT(7777 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) ITO(1000) KAV(0)
NSOC(1) EDTR( ) TIMO(0) STT(ACTIVE) </rsp>
<rsp>PORT(9998 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) ITO(0) KAV(0)
NSOC(1) EDTR( ) TIMO(0) STT(ACTIVE) </rsp>
<rsp>PORT(9999 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) ITO(-1) KAV(0)
NSOC(1) EDTR( ) TIMO(0) STT(ACTIVE) </rsp>
</cmdrspdata>

```

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 VIEWPORT コマンド (コマンド)

 IMS Connect QUERY PORT コマンド (コマンド)

QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンド

QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドは、IMS Connect に定義されているリモート CICS サブシステムへの 1 つ以上の ISC リンクの属性および状況を表示するために使用します。

サブセクション:

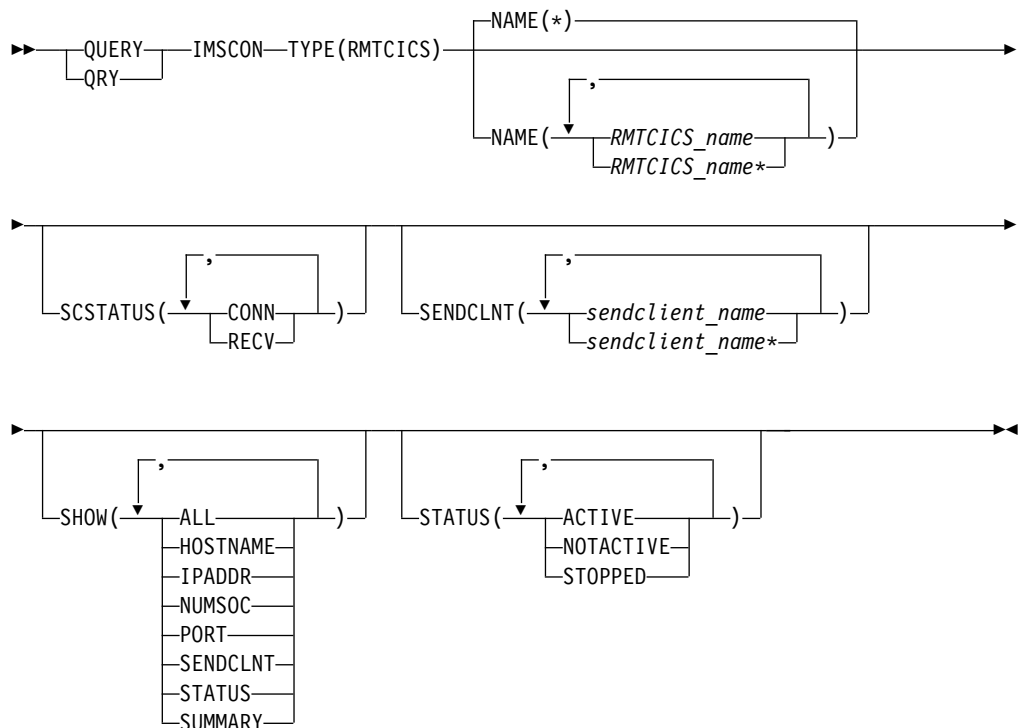
- 『環境』
- 『構文』
- 『使用上の注意』
- 266 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』
- 266 ページの『キーワード』
- 269 ページの『出力フィールド』
- 271 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 272 ページの『例』

環境

QUERY IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文



使用上の注意

QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

通常、このコマンドでは、リモート CICS 定義ごとに 1 つの出力表示行が表示されます。ただし、SHOW(SENDCLNT) キーワードが指定されている場合は、指定されたリモート CICS 定義に関連付けられている送信クライアントごとに 1 つの追加行が表示されます。

同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド

QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドには、同等の WTOR コマンドおよび z/OS MODIFY コマンドはありません。ただし、WTOR VIEWHWS コマンドおよび z/OS MODIFY QUERY MEMBER TYPE(IMSCON) コマンドでも、QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) と同じ属性フィールドおよび状況フィールドがいくつか表示されます。

注:

- IMS Connect WTOR コマンドは、未解決の IMS Connect 応答メッセージに対する応答です。
- IMS Connect z/OS コマンドは、z/OS (MVS) インターフェースを介して、IMS Connect *jobname* を使用して発行されます。

表 75. QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	ありません。	ありません。
QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) NAME(RMTCICS_name) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	ありません。	ありません。

キーワード

以下のキーワードは、QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドに有効です。

NAME

対応するリモート CICS 接続の状況および属性を表示する 1 つ以上の RMTCICS 構成ステートメントからの ID 値を指定します。単一の RMTCICS ID またはコンマで区切った RMTCICS ID のリストを指定することができます。ワイルドカードを使用することができます。

すべての RMTCICS リソースを表示するには、NAME(*) を指定できます。デフォルト値は NAME(*) です。

SCSTATUS

指定された状態のいずれかである送信クライアントを少なくとも 1 つ持っているリモート CICS リソースを選択して表示するためのフィルター。単一の送信クライアント状況、またはコンマで区切った送信クライアント状況のリストを指定できます。

SCSTATUS キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

CONN

この接続は接続状態です。リモート CICS にメッセージを送信できます。

RECV

この接続は受信状態です。リモート CICS からの応答の受信を待機しています。

指定された状態のいずれかである送信クライアントを持つリモート CICS リソースのみが表示されます。NAME() パラメーターに一致しているが、そのような送信クライアントがないリモート CICS リソースは表示されません。

SCSTATUS フィルターを指定した場合は、SHOW(SENDCLNT) が指定されていなくても、送信クライアント情報が表示されます。

SENDCLNT

指定された送信クライアントの 1 つが定義されているリモート CICS リソースを表示用に選択します。単一の送信クライアント名、またはコマンドで区切った送信クライアント名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

指定された送信クライアントを持つリモート CICS リソースのみが表示されます。NAME() パラメーターに一致しているが、指定された送信クライアントを持っていないリモート CICS リソースは表示されません。

SENDCLNT フィルターを指定した場合は、SHOW(SENDCLNT) が指定されていなくても、送信クライアント情報が表示されます。SENDCLNT フィルターで指定された名前に一致するクライアントのみが表示されます。リモート CICS に関連付けられているが、フィルターに一致しない送信クライアントは表示されません。

SHOW

オプションの出力フィールドを表示することを指定します。SHOW が指定されているかどうかに関係なく、常に表示される出力フィールドには、リモート CICS 名、コマンドを処理する IMS Connect の名前、および完了コードがあります。

SHOW キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

ALL

すべての出力フィールドを表示します。

HOSTNAME

リモート CICS サブシステムのホスト名を表示します。リモート CICS のホスト名は、IMS Connect 構成メンバー内の ISC ステートメントの RMTICIS パラメーターで定義されます。

IPADDR

リモート CICS サブシステムの IP アドレスを表示します。

NUMSOC

このリモート CICS 接続に使用されている現在のソケット数を表示します。

PORT

リモート CICS サブシステムがこの ISC リンクで IMS Connect からトランザクションとデータ応答を受信するポートを表示します。このポートは、TCPIP SERVICE リソース定義の PORT キーワードで CICS について定義されます。このポートは、リモート CICS サブシステムへの接続を定義する RMT CICS ステートメントの PORT キーワードで IMS Connect について指定されます。

SENDCLNT

リモート CICS サブシステムへの接続を使用しているアクティブな並列セッション (ISCUSER) の送信ソケットの情報および状況を表示します。リモート CICS との間で 1 つ以上の並列セッションがアクティブである場合は、各並列セッションごとに個別の出力行が表示されます。アクティブな並列セッションがない場合は、追加の出力行は表示されません。

送信ソケットに関して表示される情報には、以下のものが含まれます。

- IMS Connect がランダムに生成して送信ソケットに割り当てた送信クライアント ID。
- 送信ソケット接続の状況または状態。以下のいずれかのタイプです。

CONN

送信ソケット接続は接続状態です。リモート CICS にメッセージを送信できます。

RECV

送信ソケット接続は受信状態です。リモート CICS からの応答の受信を待機しています。

- このソケット接続が指定された状態にある秒数。
- 送信ソケットが属しているローカル・ポート。

STATUS

リモート CICS 接続の状態を表示します。返される状況についての説明は、269 ページの表 76 内の STATUS キーワードを参照してください。

SUMMARY

リモート CICS 接続上のアクティブの送信クライアントに関連した要約情報を表示します。特定の送信クライアントの情報を表示するには、SUMMARY パラメーターに加えて SENDCLNT パラメーターを指定します。

表示される情報は以下のとおりです。

- リモート CICS 接続上のアクティブの送信クライアントの総数
- RECV 状態の送信クライアントの総数
- CONN 状態の送信クライアントの総数
- XMIT 状態の送信クライアントの総数
- 上記のどの状態でもない送信クライアントの総数

STATUS

指定された状況の少なくとも 1 つを持つリモート CICS リソースを表示用に選択します。STATUS フィルターを指定した場合は、SHOW(STATUS) が指定されていなくても、状況情報が表示されます。

STATUS キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

ACTIVE

ACTIVE の状態を持つリモート CICS リソースを選択します。これは、リモート CICS サブシステムへの接続がアクティブであることを意味しています。

NOTACTIVE

NOTACTIVE の状態を持つリモート CICS リソースを選択します。これは、リモート CICS への接続がアクティブではないことを意味しています。

STOPPED

コマンドが IMS Connect とリモート CICS サブシステム (NAME キーワードで識別) の間の通信を停止したリモート CICS リソースを選択します。NAME キーワードで指定された CICS サブシステムに送信されたメッセージはすべて拒否され、要求側にエラー・メッセージが送信されます。

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 76. QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。272 ページの表 78 を参照してください。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
HOST	HostName	HOSTNAME	リモート CICS サブシステムのホスト名。リモート CICS サブシステムは、IMS Connect 構成メンバー内の ISC ステートメントの RMTCICS パラメーターで定義されます。
IP	IpAddress	IPADDR	リモート CICS の IP アドレス。リモート CICS は、IMS Connect 構成メンバー内の ISC ステートメントの RMTCICS で定義されます。

表 76. QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
ISC	ISCName	SENDCLNT	IMS Connect 構成メンバー内の ISC 構成ステートメントの ID。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。
NSOC	NumSoc	NUMSOC	この CICS 接続に使用されている現在のソケット数。
PORT	Port	PORT	関連付けられたリモート CICS サブシステムのポート。リモート CICS は、ISC ステートメントの RMTCICS パラメーターで定義されます。
RCICS	RmtCICS	N/A	リモート CICS 名。CICS 名は常に戻されます。
SCL	SendClnt	SENDCLNT	IMS Connect がソケットに割り当てるクライアント名。このソケットは、対応する IUSER 出力フィールドで識別されている ISC 並列セッションについて、リモート CICS サブシステム (RMTCICS) にトランザクションとデータ応答を送信するために使用されます。
SCSTT	SendStatus	SENDCLNT	送信クライアント接続の状況。状況は、以下のいずれかのタイプです。 CONN この接続は、接続状態です。リモート CICS にメッセージを送信できます。 RECV この接続は、受信状態です。リモート CICS からの応答の受信を待機していません。
SEC	第 2 版	SENDCLNT	この接続が指定された状態にある秒数。
SPORT	SendPort	SENDCLNT	IMS Connect のこのインスタンスがリモート CICS に接続するために使用したポート。

表 76. QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
STT	Status	STATUS	<p>リモート CICS 接続の状況。状況は、以下のいずれかのタイプです。</p> <p>ACTIVE</p> <p>リモート CICS への接続はアクティブです。この状況の接続には、RMTCICS フィールドで識別された CICS に対して少なくとも 1 つのソケット接続があります。</p> <p>NOTACTIVE</p> <p>リモート CICS への接続はアクティブではありません。この状況の接続には、RMTCICS フィールドで識別された CICS に対してソケット接続がありません。</p> <p>STOPPED</p> <p>コマンドが、この IMS Connect と RMTCICS フィールドで識別された CICS の間の通信を停止しました。RMTCICS フィールドに示された CICS に送信されたメッセージはすべて拒否され、送信側にエラー・メッセージが送信されます。</p>
TSCL	TotSCInts	SUMMARY	リモート CICS 接続上のアクティブの送信クライアントの総数。
TCON	TotConn	SUMMARY	リモート CICS 接続上の CONN の状況を持つ送信クライアントの総数。
TOTH	TotOther	SUMMARY	リモート CICS 接続上の CONN、RECV、または XMIT 以外の状況を持つ送信クライアントの総数。
TRCV	TotRecv	SUMMARY	リモート CICS 接続上の RECV の状況を持つ送信クライアントの総数。
TXMT	TotXmit	SUMMARY	リモート CICS 接続上の XMIT の状況を持つ送信クライアントの総数。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドの結果として返される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 77. QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C000004'	X'00001010'	指定された NAME またはフィルター (ある場合) に一致する RMTCICS リソースが見つかりませんでした。
X'0C000008'	X'00002004'	コマンドに無効なキーワードまたはキーワードの組み合わせです。
X'0C000008'	X'00002014'	リソース名に無効な文字が指定されました。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C000014'	X'00005004'	コマンド・プロセッサが出力バッファ用のストレージの取得に失敗しました。
X'0C000014'	X'00005008'	コマンド・プロセッサは、BPEGETM を介したストレージの取得に失敗しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 78. QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		リソースに対して、QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドが正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。

例

以下の例では、出力は、RMTCICS リソース「ICONTT1」の現在の状況を示しています。ICONTT1 の状況は ACTIVE であるため、IMS と CICS の間の ISC 通信に使用することができます。ICONTT1 に関連付けられている 2 つの送信クライアント「ISC11111」および「ISC22222」が示されています。どちらの送信クライアントも、ISC リソース「LU6TCP1」用に作成され、「CONN」状態です。

TSO SPOC 入力:

```
QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) NAME(ICONNT1) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(Screen 1)

RmtCICS	MbrName	CC	IpAddress	HostName
ICONNT1	HWS1	0	127.0.0.1	WWW.EXAMPLE.COM
ICONNT1	HWS1	0		
ICONNT1	HWS1	0		

(Screen 2)

RmtCICS	MbrName	Port	NumSoc	Status
ICONNT1	HWS1	9999	2	ACTIVE
ICONNT1	HWS1			
ICONNT1	HWS1			

(Screen 3)

RmtCICS	MbrName	TotSClnTs	TotRecv	TotConn	TotXmit	TotOther
ICONNT1	HWS1	2	0	2	0	0
ICONNT1	HWS1					
ICONNT1	HWS1					

(Screen 4)

RmtCICS	MbrName	SendClnt	ISCName	Second	SendPort
ICONNT1	HWS1				
ICONNT1	HWS1	ISC11111	LU6TCP1	100	1234
ICONNT1	HWS1	ISC22222	LU6TCP1	89	5678

(Screen 5)

RmtCICS	MbrName	SendStatus
ICONNT1	HWS1	
ICONNT1	HWS1	CONN
ICONNT1	HWS1	CONN

OM API 入力:

```
CMD ( QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) NAME(ICONNT1) SHOW(ALL) )
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.6.0</omvsn>
<xm1vsn>20 </xm1vsn>
<statime>2012.097 22:05:09.441459</statime>
<stotime>2012.097 22:05:09.443581</stotime>
<staseq>C961A224EEBB3C9E</staseq>
<stoseq>C961A224EF3FD01E</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10150509</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) NAME(CICS2) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="RCICS" l1b1="RmtCICS" scope="LCL" sort="a" key="2"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
```

```

<hdr s1bl="IP" l1bl="IpAddress" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="15" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="HOST" l1bl="HostName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="PORT" l1bl="Port" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="NSOC" l1bl="NumSoc" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="STT" l1bl="Status" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TSCL" l1bl="TotSCLnts" scope="LCL" sort="d" key="4"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TRCV" l1bl="TotRecv" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TCON" l1bl="TotConn" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TXMT" l1bl="TotXmit" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TOTH" l1bl="TotOther" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="SCL" l1bl="SendClnt" scope="LCL" sort="a" key="3"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="ISC" l1bl="ISCName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="SEC" l1bl="Second" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="SPORT" l1bl="SendPort" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="SCSTT" l1bl="SendStatus" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>RCICS(ICONTT1 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) SCL(ISC11111)
  ISC(LU6TCP1 ) SEC(100) SPORT(1234) SCSTT(CONN) </rsp>
<rsp>RCICS(ICONTT1 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) SCL(ISC22222)
  ISC(LU6TCP1 ) SEC(89) SPORT(5678) SCSTT(CONN) </rsp>
<rsp>RCICS(ICONTT1 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) IP(127.0.0.1)
  HOST(WWW.EXAMPLE.COM) PORT(9999) NSOC(2) ) STT(ACTIVE ) TSCL(2)
  TRCV(0) TCON(2) TXMT(0) TOTH(0)
</rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

関連資料:

- 1217 ページの『UPDATE IMSCON TYPE(ISC) コマンド』
- 1224 ページの『UPDATE IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンド』
- 1262 ページの『UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンド』

QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンド

QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンドは、IMS Connect に対して定義されている 1 つ以上のリモート IMS Connect の状況を表示するために使用します。

サブセクション:

- 275 ページの『環境』
- 275 ページの『構文』
- 275 ページの『キーワード』
- 279 ページの『使用上の注意』
- 279 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』

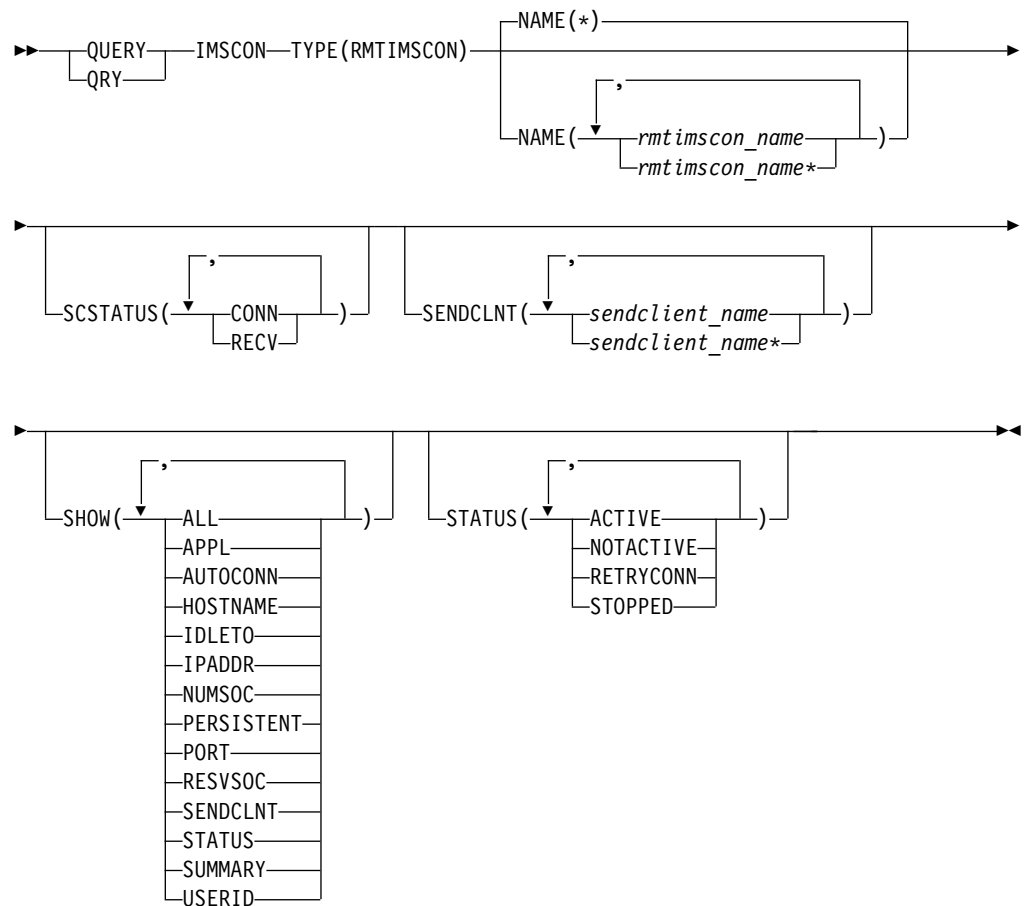
- 280 ページの『出力フィールド』
- 283 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 284 ページの『例』

環境

QUERY IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文



キーワード

以下のキーワードは、QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンドに有効です。

NAME

表示する 1 つ以上のリモート IMS Connect リソースを指定します。単一のリ

リモート IMS Connect 名、またはコンマで区切ったリモート IMS Connect 名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

すべてのリモート IMS Connect リソースを表示するには、NAME(*) を指定できます。デフォルト値は NAME(*) です。

SCSTATUS

指定された状態のいずれかである送信クライアントを少なくとも 1 つ持っているリモート IMS Connect リソースを表示用に選択します。単一の送信クライアント状況、またはコンマで区切った送信クライアント状況のリストを指定できます。

SCSTATUS キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

CONN

この接続は接続状態です。リモート IMS Connect にメッセージを送信できます。

RECV

この接続は受信状態です。リモート IMS Connect からの応答を受信するために待機中です。

指定された状態のいずれかである送信クライアントを持つリモート IMS Connect リソースのみが表示されます。NAME() パラメーターに一致しているが、そのような送信クライアントがないリモート IMS Connect リソースは表示されません。

SCSTATUS フィルターを指定した場合は、SHOW(SENDCLNT) が指定されていなくても、送信クライアント情報が表示されます。指定された状態のいずれかである送信クライアントのみが表示されます。

SENDCLNT

指定された送信クライアントの 1 つが定義されているリモート IMS Connect リソースを表示用に選択します。単一の送信クライアント名、またはコンマで区切った送信クライアント名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

指定された送信クライアントを持つリモート IMS Connect リソースのみが表示されます。NAME() パラメーターに一致しているが、指定された送信クライアントを持っていないリモート IMS Connect リソースは表示されません。

SENDCLNT フィルターを指定した場合は、SHOW(SENDCLNT) が指定されていなくても、送信クライアント情報が表示されます。SENDCLNT フィルターで指定された名前に一致するクライアントのみが表示されます。リモート IMS Connect に関連付けられているが、フィルターに一致しない送信クライアントは表示されません。

SHOW

オプションの出力フィールドを表示することを指定します。SHOW が指定されているかどうかに関係なく、常に表示される出力フィールドには、リモート IMS Connect 名、コマンドを処理する IMS Connect の名前、および完了コードがあります。

SHOW キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

ALL

すべての出力フィールドを表示します。

APPL

RACF パスチケットを生成するために使用される APPL 名を表示します。このパスチケットはリモート IMS Connect に送信され、ユーザー ID の認証に使用されます。

AUTOCONN

IMS Connect のこのインスタンスの開始時に、IMS Connect のこのインスタンスは自動的にリモート IMS Connect に接続されるかどうかを表示します。

RESVSOC

このリモート IMS Connect 接続用に使用できる送信ソケットの数を表示します。この値は、IMS Connect 構成メンバー内で RMTIMSCON ステートメントの RESVSOC パラメーターで定義されています。

HOSTNAME

リモート IMS Connect のホスト名を表示します。

IDLETO

ソケット接続を非アクティブと見なしてクローズするまでに、このソケット接続を保持するアイドル・タイムアウト間隔を表示します。

IPADDR

リモート IMS Connect の IP アドレスを表示します。

NUMSOC

このリモート IMS Connect 接続に使用されている現在のソケット数を表示します。

PERSISTENT

リモート IMS Connect への接続が永続的かどうかを表示します。

PORT

この IMS Connect インスタンスが通信するリモート IMS Connect のポート番号を表示します。

SENDCLNT

このリモート IMS Connect へのアクティブ接続 (送信クライアント) の情報および状況を表示します。IMS Connect のこのインスタンスが、このリモート IMS Connect への 1 つ以上のアクティブ接続を持っている場合、コマンド出力には各接続に関する情報が含まれます。接続ごとに個別の出力行が表示されます。この出力行は、一般的なリモート IMS Connect 情報を表示する出力行に追加して表示されます。アクティブの接続がない場合は、追加の出力行は表示されません。

送信クライアントに関して表示される情報には、以下のものが含まれます。

- IMS Connect のこのインスタンスがリモート IMS Connect に接続するために使用したクライアント ID。
- トランザクション許可のためにリモート IMS に送信される、ローカル IMS によって指定されたユーザー ID。この情報は、OTMA メッセージに対してのみ有効です。

- この接続を使用しているローカル MSC 物理リンク ID。
- リモート IMS Connect 接続の状況または状態。これは以下のいずれかです。

CONN

この接続は接続状態です。リモート IMS Connect にメッセージを送信できます。

RECV

この接続は受信状態です。リモート IMS Connect からの応答を受信するために待機中です。

- この接続が指定された状態にある秒数。
- IMS Connect のこのインスタンスがリモート IMS Connect に接続するために使用したポート。

STATUS

リモート IMS Connect の状態を表示します。返される状況についての説明は、280 ページの表 80 内の STATUS キーワードを参照してください。

SUMMARY

リモート IMS Connect 上のアクティブの送信クライアントに関連した要約情報を表示します。特定の送信クライアントの情報を表示するには、SUMMARY パラメーターに加えて SENDCLNT パラメーターを指定します。

表示される情報は以下のとおりです。

- リモート IMS Connect 上のアクティブの送信クライアントの総数。
- RECV 状態の送信クライアントの総数
- CONN 状態の送信クライアントの総数
- XMIT 状態の送信クライアントの総数
- 上記のどの状態でもない送信クライアントの総数

USERID

RACF PassTicket の生成に使用されるユーザー ID を表示します。これはリモート IMS Connect に送信され、ユーザー ID の認証に使用されます。

STATUS

指定された状況の少なくとも 1 つを持つリモート IMS Connect リソースを表示用に選択します。STATUS フィルターを指定した場合は、SHOW(STATUS) が指定されていなくても、状況情報が表示されます。

STATUS キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

ACTIVE

ACTIVE の状況を持つリモート IMS Connect リソースを選択します。これは、リモート IMS Connect への接続がアクティブであることを意味しています。この状況にある IMS Connect は、RMTIMSCON フィールドで識別されたリモート IMS Connect へのソケット接続を少なくとも 1 つ持っています。

NOTACTIVE

NOTACTIVE の状況を持つリモート IMS Connect リソースを選択しま

す。これは、リモート IMS Connect への接続がアクティブではないことを意味しています。この状況にある IMS Connect は、RMTIMSCON フィールドで識別されたりリモート IMS Connect へのソケット接続を持っていません。

RETRYCONN

RETRYCONN の状況を持つリモート IMS Connect リソースを選択します。これは、IMS Connect がリモート IMS Connect への接続に失敗し、2 分ごとに接続を再試行していることを意味します。

STOPPED

STOPPED の状況を持つリモート IMS Connect リソースを選択します。STOPRMT コマンドが、この IMS Connect と RMTIMSCON フィールドで識別されたりリモート IMS Connect の間の通信を停止しました。RMTIMSCON フィールドに示されている IMS Connect に送信されるメッセージはすべてリジェクトされ、要求側にエラーが返されます。STOPRMT コマンドは、UPD IMSCON TYPE(RMTIMSCON) NAME(...) STOP(COMM) コマンドと同等です。

使用上の注意

QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

通常、このコマンドでは、リモート IMS Connect 定義ごとに 1 つの出力表示行が表示されます。ただし、SHOW(SENDCLNT) キーワードが指定されている場合は、指定されたりリモート IMS Connect 定義に関連付けられている送信クライアントごとに 1 つの追加行が表示されます。

同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンドと同様の機能を実行する、WTOR (Write to Operator with Reply) コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

注:

- IMS Connect WTOR コマンドは、未解決の IMS Connect 応答メッセージに対する応答です。
- IMS Connect z/OS コマンドは、z/OS (MVS) インターフェースを介して、IMS Connect *jobname* を使用して発行されます。

表 79. QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWRMT ALL	QUERY RMTIMSCON NAME(*)

表 79. QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド (続き)

QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) NAME(rmtimscon_name) SHOW(ALL show_parm)	VIEWRMT rmtimscon_name	QUERY RMTIMSCON NAME(rmtimscon_name)

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 80. QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
APPL	Appl	APPL	RACF PassTicket の生成に使用される APPL 名。これはリモート IMS Connect に送信され、ユーザー ID の認証に使用されます。
AUTC	AutoConn	AUTOCONN	IMS Connect のこのインスタンスの開始時に、IMS Connect のこのインスタンスは自動的にリモート IMS Connect に接続するかどうかを示します。この値は以下のいずれかになります。 Y 接続は自動的です。 N 接続は自動的ではありません。
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。284 ページの表 82 を参照してください。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
HOST	HostName	HOSTNAME	リモート IMS Connect のホスト名。
IP	IpAddress	IPADDR	リモート IMS Connect の IP アドレス。
ITO	IdleTO	IDLETO	ソケット接続を非アクティブと見なしてクローズするまでに、このソケット接続を保持するアイドル・タイムアウト間隔。

表 80. QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
LPLK	LclPlkID	SENDCLNT	この接続を使用しているローカル MSC 物理リンク ID。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの LCLPLKID パラメーターで指定されています。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。
NSOC	NumSoc	NUMSOC	このリモート IMS Connect 接続に使用されている現在のソケットの数。
PERS	Persist	PERSISTENT	リモート IMS Connect への接続が永続的かどうかを示します。値は、次のいずれかになります。 Y 接続は永続的です。 N 接続は永続的ではありません。
PORT	Port	PORT	この IMS Connect インスタンスが通信するリモート IMS Connect のポート番号。
RIC	RmtImsCon	N/A	リモート IMS Connect 名。リモート IMS Connect 名は常に戻されます。
RSOC	ResvSoc	RESVSOC	このリモート IMS Connect 接続用に使用できる送信ソケットの数。この値は、IMS Connect 構成内で、RMTIMSCON ステートメントの RESVSOC パラメーターで定義されています。
SCL	SendClnt	SENDCLNT	IMS Connect のこのインスタンスがリモート IMS Connect に接続するために使用したクライアント ID。
SCSTT	SendStatus	SENDCLNT	送信クライアント接続の状況。状況は次のいずれかです。 CONN この接続は接続状態です。リモート IMS Connect にメッセージを送信できます。 RECV この接続は受信状態です。リモート IMS Connect からの応答を受信するために待機中です。
SEC	第 2 版	SENDCLNT	この接続が指定された状態にある秒数。
SPORT	SendPort	SENDCLNT	IMS Connect のこのインスタンスがリモート IMS Connect に接続するために使用したポート。

表 80. QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
STT	Status	STATUS	<p>リモート IMS Connect 接続の状況。状況は次のいずれかです。</p> <p>ACTIVE</p> <p>リモート IMS Connect への接続はアクティブです。この状況にある IMS Connect は、RMTIMSCON フィールドで識別されたリモート IMS Connect へのソケット接続を少なくとも 1 つ持っています。</p> <p>NOTACTIVE</p> <p>リモート IMS Connect への接続はアクティブではありません。この状況にある IMS Connect は、RMTIMSCON フィールドで識別されたリモート IMS Connect へのソケット接続を持っていません。</p> <p>RETRYCONN</p> <p>IMS Connect がリモート IMS Connect への接続に失敗しました。失敗の原因は、ローカル TCP/IP、リモート TCP/IP、またはリモート IMS Connect が使用可能でないことでした。IMS Connect は 2 分待ってから、もう一度接続を再試行します。</p> <p>リモート IMS Connect への接続が確立されると、IMS Connect は OTMA に対して、この特定のリモート IMS Connect RMTIMSCON を使用してリモート IMS メッセージの送信を開始するように通知します。</p> <p>STOPPED</p> <p>STOPRMT コマンドが、この IMS Connect と RMTIMSCON フィールドで識別されたリモート IMS Connect の間の通信を停止しました。RMTIMSCON フィールドに示されている IMS Connect に送信されるメッセージはすべてリジェクトされて、要求側にエラーが返送されます。STOPRMT コマンドは、UPD IMSCON TYPE(RMTIMSCON) NAME(...) STOP(COMM) コマンドと同等です。</p>
SUID	SendUID	SENDCLNT	<p>トランザクション許可のためにリモート IMS に送信される、ローカル IMS によって指定されたユーザー ID。このフィールドは、OTMA メッセージに対してのみ有効です。</p>

表 80. QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
TSCl	TotSClnts	SUMMARY	リモート IMS Connect 上のアクティブの送信クライアントの総数。
TCON	TotConn	SUMMARY	リモート IMS Connect 上の CONN の状況を持つ送信クライアントの総数。
TOTH	TotOther	SUMMARY	リモート IMS Connect 上の CONN、RECV、または XMIT 以外の状況を持つ送信クライアントの総数。
TRCV	TotRecv	SUMMARY	リモート IMS Connect 上の RECV の状況を持つ送信クライアントの総数。
TXMT	TotXmit	SUMMARY	リモート IMS Connect 上の XMIT の状況を持つ送信クライアントの総数。
UID	UserID	USERID	RACF PassTicket の生成に使用されるユーザー ID。これはリモート IMS Connect に送信され、ユーザー ID の認証に使用されます。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンドの結果として戻される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 81. QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C000014'	X'00005008'	コマンド・プロセッサは、BPEGETM を介したストレージの取得に失敗しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 82. QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		リソースに対して、QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンドが正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。

例

QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) NAME(*) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(Screen 1)

```
RmtImScn MbrName CC IpAddress HostName Port AutoConn
CONNECT2 HWS1 0 010.100.200.002 ICON2.IBM.COM 5555 N
CONNECT2 HWS1 0
CONNECT2 HWS1 0
CONNECT3 HWS1 0 010.100.200.003 ICON3.IBM.COM 9999 Y
CONNECT3 HWS1 0
CONNECT3 HWS1 0
CONNECT3 HWS1 0
CONNECT3 HWS1 0
```

(Screen 2)

```
RmtImScn MbrName Persist IdleTO ResvSoc NumSoc Appl UserID Status
CONNECT2 HWS1 Y 6000 10 2 APPL02 USER01 ACTIVE
CONNECT2 HWS1
CONNECT2 HWS1
CONNECT3 HWS1 Y 6000 4 4 APPL03 USER01 ACTIVE
CONNECT3 HWS1
CONNECT3 HWS1
CONNECT3 HWS1
CONNECT3 HWS1
```

(Screen 3)

```
RmtImScn MbrName TotSClnTs TotRecv TotConn TotXmit TotOther
CONNECT2 HWS1 2 0 2 0 0
CONNECT2 HWS1
CONNECT2 HWS1
CONNECT3 HWS1 4 1 3 0 0
CONNECT3 HWS1
CONNECT3 HWS1
CONNECT3 HWS1
CONNECT3 HWS1
```

(Screen 4)

```
RmtImScn MbrName SendClnt SendUID LcPlkID Second SendPort SendStatus
CONNECT2 HWS1
CONNECT2 HWS1 MSC11111 MSC12 100 1234 CONN
CONNECT2 HWS1 MSC22222 MSC12 89 5678 CONN
CONNECT3 HWS1
CONNECT3 HWS1 OTM11111 USER01 100 1111 CONN
```



```
CONNECT3 HWS1 OTM22222 USER01 89 2222 CONN
CONNECT3 HWS1 OTM33333 USER02 81 3333 CONN
CONNECT3 HWS1 OTM44444 USER03 23 4444 REC
```

OM API 入力:

CMD (QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) NAME(*) SHOW(ALL))

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xm1vsn>20 </xm1vsn>
<stime>2010.298 01:13:52.694135</stime>
<stotime>2010.298 01:13:52.695758</stotime>
<staseq>C6C76FD554B77EFA</staseq>
<stoseq>C6C76FD5551CEE7A</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10181352</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) NAME(*) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="RIC" l1bl="RmtImCon" scope="LCL" sort="a" key="2"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="IP" l1bl="IpAddress" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="15" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="HOST" l1bl="HostName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="PORT" l1bl="Port" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="AUTC" l1bl="AutoConn" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="PERS" l1bl="Persist" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="ITO" l1bl="IdleTO" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RSOC" l1bl="ResvSoc" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="NSOC" l1bl="NumSoc" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="APPL" l1bl="App1" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="UID" l1bl="UserID" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="STT" l1bl="Status" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TSCL" l1bl="TotSCInts" scope="LCL" sort="d" key="4"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TRCV" l1bl="TotRecv" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TCON" l1bl="TotConn" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
```


```

<hdr s1bl="TXMT" l1bl="TotXmit" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TOTH" l1bl="TotOther" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="SCL" l1bl="SendClnt" scope="LCL" sort="a" key="3"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="SUID" l1bl="SendUID" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LPLK" l1bl="Lc1PlkID" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="SEC" l1bl="Second" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="SPORT" l1bl="SendPort" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="SCSTT" l1bl="SendStatus" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>RIC(CONNECT2) MBR(HWS1 ) CC( 0) SCL(MSC11111)
LPLK(MSC12 ) SEC(100) SPORT(1234) SCSTT(CONN) </rsp>
<rsp>RIC(CONNECT2) MBR(HWS1 ) CC( 0) SCL(MSC22222)
LPLK(MSC12 ) SEC(89) SPORT(5678) SCSTT(CONN) </rsp>
<rsp>RIC(CONNECT2) MBR(HWS1 ) CC( 0) IP(010.100.200.002)
HOST(ICON2.IBM.COM) PORT(5555) AUTC(N) PERS(Y) ITO(6000)
RSOC(10) NSOC(2) APPL(APPL02 ) UID(USER01 ) STT(ACTIVE ) TSCL(2)
TRCV(0) TCON(2) TXMT(0) TOTH(0) </rsp>
<rsp>RIC(CONNECT3) MBR(HWS1 ) CC( 0) IP(010.100.200.003)
HOST(ICON3.IBM.COM) PORT(9999) AUTC(Y) PERS(Y) ITO(6000)
RSOC(4) NSOC(4) APPL(APPL03 ) UID(USER01 ) STT(ACTIVE ) TSCL(4)
TRCV(1) TCON(3) TXMT(0) TOTH(0) </rsp>
<rsp>RIC(CONNECT3) MBR(HWS1 ) CC( 0) SCL(OTM11111) SUID(USER01 )
SEC(100) SPORT(1111) SCSTT(CONN) </rsp>
<rsp>RIC(CONNECT3) MBR(HWS1 ) CC( 0) SCL(OTM22222) SUID(USER01 )
SEC(89) SPORT(2222) SCSTT(CONN) </rsp>
<rsp>RIC(CONNECT3) MBR(HWS1 ) CC( 0) SCL(OTM33333) SUID(USER02 )
SEC(81) SPORT(3333) SCSTT(CONN) </rsp>
<rsp>RIC(CONNECT3) MBR(HWS1 ) CC( 0) SCL(OTM44444) SUID(USER03 )
SEC(23) SPORT(4444) SCSTT(CONN) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: IMS Connect には、2 つの RMTIMSCON 定義 (CONNECT2 と CONNECT3) があります。各リモート接続はアクティブです。CONNECT2 は MSC 用に使用され、2 つの MSC リンクがアクティブです。CONNECT3 は OTMA 用に使用され、4 つの接続がアクティブです。

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

QUERY IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンド

QUERY IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドは、別の IMS Connect のインスタンスまたは CICS サブシステムとの 1 つ以上のアクティブな送信クライアント・ソケット接続の状況およびアクティビティーを表示するために使用します。

IMS Connect は、異なるポート上の別個の受信ソケットを使用して、別の IMS Connect インスタンスまたは CICS サブシステムからのトランザクションおよび応答データを受信します。QUERY IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドは、受信

クライアント・ソケット接続を表示しません。受信クライアント・ソケット接続に関する情報を表示するには、QUERY IMSCON TYPE(CLIENT) コマンドを使用します。

サブセクション:

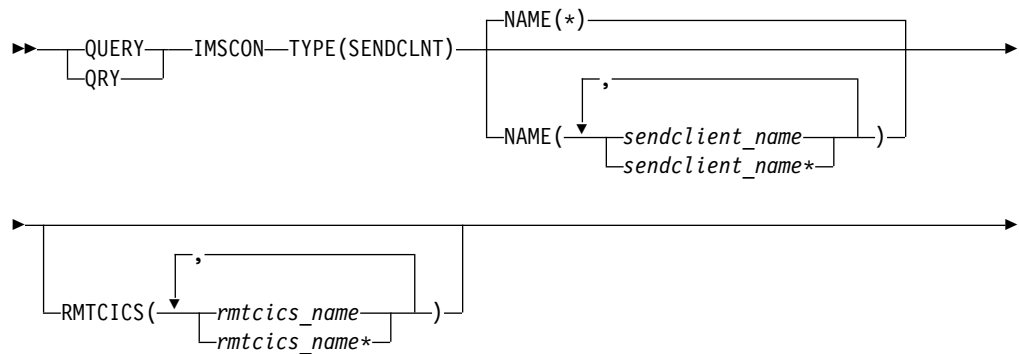
- 『環境』
- 『構文』
- 288 ページの『キーワード』
- 290 ページの『使用上の注意』
- 290 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』
- 290 ページの『出力フィールド』
- 292 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 293 ページの『IMS 間接続の例』

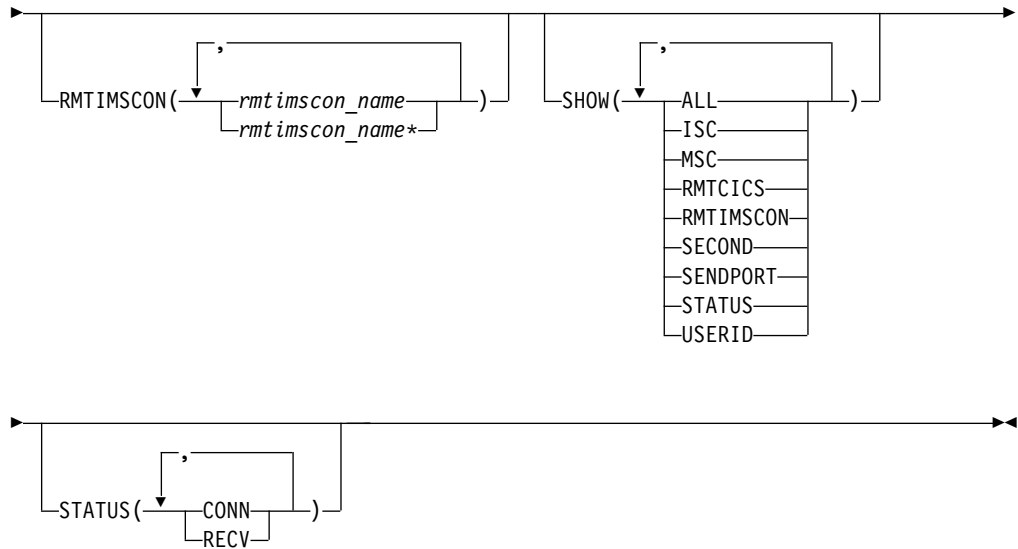
環境

QUERY IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文





キーワード

以下のキーワードは、QUERY IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドに有効です。

NAME

表示する 1 つ以上の送信クライアント・リソースを指定します。単一の送信クライアント名、またはコンマで区切った送信クライアント名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

すべての送信クライアント・リソースを表示するには、NAME(*) を指定できません。デフォルト値は NAME(*) です。

IMS Connect は、別の IMS Connect インスタンスまたは CICS サブシステムとの接続では常にクライアント名を生成します。これらの場合、クライアント名の最初の数文字が IMS 通信タイプを識別します。例えば、次のようになります。

ISC CICS サブシステムとの ISC 通信

MSC IMS システム間の MSC 通信

OTM IMS システム間の OTMA 通信

前述の IMS 通信タイプのいずれかについてアクティブ・ソケット接続を表示するには、文字 ID に続けて、ワイルドカード文字を指定できます。例えば、NAME(MSC*) を指定すると、MSC 通信用のすべての IMS 間送信ソケット接続が返されます。

RMTCICS

指定されたりモート CICS 名に関連付けられている送信クライアント・リソースを選択して表示します。この名前は、IMS Connect 構成メンバー内の RMTCICS ステートメントの ID キーワードで定義されています。

単一のリモート CICS 名、またはコンマで区切ったりモート CICS 名のリストを指定できます。ワイルドカード文字がサポートされています。

指定されたリモート CICS 名に関連付けられている送信クライアント・リソースのみ表示されます。NAME() パラメーターに一致しているが、指定されたリモート CICS 名に関連付けられていない送信クライアントは、表示されません。

RMTCICS フィルターを指定した場合は、SHOW(RMTCICS) が指定されていなくても、リモート CICS リソース情報が表示されます。

RMTIMSCON

指定されたリモート IMS Connect 定義に関連付けられている送信クライアント・リソースを表示用に選択します。単一のリモート IMS Connect 名、またはコンマで区切ったリモート IMS Connect 名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

指定されたリモート IMS Connect リソースに関連付けられている送信クライアント・リソースのみ表示されます。NAME() パラメーターに一致しているが、指定されたリモート IMS Connect 名に関連付けられていない送信クライアントは、表示されません。

RMTIMSCON フィルターを指定した場合は、SHOW(RMTIMSCON) が指定されていなくても、リモート IMS Connect リソース情報が表示されます。

SHOW

オプションの出力フィールドを表示することを指定します。SHOW が指定されているかどうかに関係なく、常に表示される出力フィールドには、送信クライアント名、コマンドを処理する IMS Connect の名前、および完了コードがあります。

SHOW キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

ALL

すべての出力フィールドを表示します。

ISC

この送信クライアントが関連付けられているシステム間連絡 (ISC) リソースの名前を表示します。この値は、IMS Connect 構成メンバーの中の ISC ステートメントの ID パラメーターで指定されています

MSC

この送信クライアントが関連付けられている複数システム結合機能 (MSC) 物理リンクの名前を表示します。この値は、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの LCLPLKID パラメーターで指定されています。

RMTCICS

この送信クライアントが関連付けられているリモート CICS リソースの名前を表示します。

RMTIMSCON

この送信クライアントが関連付けられているリモート IMS Connect リソースの名前を表示します。

SECOND

この接続が指定された状態にある秒数を表示します。

SENDPORT

送信クライアント・ソケット接続のローカル・ポートを表示します。

STATUS

送信クライアント接続の状況を表示します。返される状況についての説明は、291 ページの表 83 内の STATUS キーワードを参照してください。

USERID

トランザクション許可のためにリモート IMS に送信される、ローカル IMS によって指定されたユーザー ID を表示します。このフィールドは、OTMA メッセージに対してのみ有効です。

STATUS

指定された状況の少なくとも 1 つを持つ送信クライアントを表示用に選択します。STATUS フィルターを指定した場合は、SHOW(STATUS) が指定されていなくても、状況情報が表示されます。

STATUS キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

CONN

CONN の状況にある送信クライアント接続を選択します。これは接続が接続状態であることを意味しています。

RECV

RECV の状況にある送信クライアント接続を選択します。これは接続が受信状態であることを意味しています。

使用上の注意

各ポートのポート番号は、そのポートに適用される情報の各行ごとに表示されます。ポートに関する情報の最初の行には、そのポートの状況および統計が表示されます。そのポートに関する後続の各行には、ポート上のアクティブなクライアント・ソケットに関する情報が表示されます。

QUERY IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド

QUERY IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドと同様の機能を実行する同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドはありません。

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用

外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 83. QUERY IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。 292 ページの表 85を参照してください。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
ISC	ISCName	ISC	この送信クライアントが関連付けられているシステム間連絡 (ISC) リソースの名前を表示します。この値は、IMS Connect 構成メンバーの中の ISC ステートメントの ID パラメーターで指定されています
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。
MSC	MscName	MSC	この送信クライアントが関連付けられている複数システム結合機能 (MSC) 物理リンクの名前を表示します。この値は、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの LCLPLKID パラメーターで指定されています。
RCICS	RmtCICS	RMTCICS	送信クライアントに関連付けられているリモート CICS リソースの名前。
RIC	RmtImsCon	RMTIMSCON	送信クライアントに関連付けられているリモート IMS Connect リソースの名前。
SCL	SendClnt	N/A	送信クライアントの名前。これは、IMS Connect のこのインスタンスがリモート IMS Connect に接続するために使用したクライアント ID です。送信クライアント名は常に戻されます。
SEC	第 2 版	SECOND	この接続が指定された状態にある秒数。
STT	Status	STATUS	送信クライアント接続の状況。これは、以下のいずれかです。 CONN この接続は接続状態です。リモート IMS Connect にメッセージを送信できます。 RECV この接続は受信状態です。リモート IMS Connect からの応答を待機中です。
SPORT	SendPort	SENDPORT	IMS Connect のこのインスタンスがリモート IMS Connect に接続するために使用したポート。

表 83. QUERY IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
UID	UserID	USERID	トランザクション許可のためにリモート IMS に送信される、ローカル IMS によって指定されたユーザー ID。このフィールドは、OTMA メッセージに対してのみ有効です。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドの結果として戻される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 84. QUERY IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C000008'	X'00002004'	無効なキーワードまたはキーワード・パラメーターが指定されました。
X'0C000008'	X'00002014'	NAME() パラメーターに無効な文字が指定されました。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C000014'	X'00005008'	コマンド・プロセッサは、BPEGETM を介したストレージの取得に失敗しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 85. QUERY IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、QUERY IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドは正常に完了しました。

表 85. QUERY IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
10	NO RESOURCES FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。

IMS 間接続の例

以下の例では、IMS Connect 内に 2 つの RMTIMSCON 定義 CONNECT2 および CONNECT3 があります。各リモート接続はアクティブです。CONNECT2 は MSC 用に使用され、2 つの MSC リンクがアクティブです。CONNECT3 は OTMA 用に使用され、4 つの接続がアクティブです。

TSO SPOC 入力:

```
QUERY IMSCON TYPE(SENDCLNT) NAME(*) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(Screen 1)

```
SendClnt MbrName CC UserID MscName Second SendPort RmtImScn Status
MSC11111 HWS1 0 MSC12 100 1234 CONNECT2 CONN
MSC22222 HWS1 0 MSC12 89 5678 CONNECT2 CONN
OTM11111 HWS1 0 USER01 100 1111 CONNECT3 CONN
OTM22222 HWS1 0 USER01 89 2222 CONNECT3 CONN
OTM33333 HWS1 0 USER02 81 3333 CONNECT3 CONN
OTM44444 HWS1 0 USER03 23 4444 CONNECT3 CONN
```

OM API 入力:

```
CMD ( QUERY IMSCON TYPE(SENDCLNT) NAME(*) SHOW(ALL) )
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2010.298 01:50:08.581654</statime>
<stotime>2010.298 01:50:08.582765</stotime>
<staseq>C6C777F06B41662C</staseq>
<stoseq>C6C777F06B86D1EC</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10185008</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>QUERY IMSCON TYPE(SENDCLNT) NAME(*) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="SCL" l1b1="SendClnt" scope="LCL" sort="a" key="2"
```

```

scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="UID" l1bl="UserID" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MSC" l1bl="MscName" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="SEC" l1bl="Second" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="SPORT" l1bl="SendPort" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RIC" l1bl="RmtImsCon" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="STT" l1bl="Status" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>SCL(MSC1111) MBR(HWS1 ) CC( 0) MSC(MSC12 )
SEC(100) SPORT(1234) RIC(CONNECT2) STT(CONN) </rsp>
<rsp>SCL(MSC2222) MBR(HWS1 ) CC( 0) MSC(MSC12 )
SEC(89) SPORT(5678) RIC(CONNECT2) STT(CONN) </rsp>
<rsp>SCL(OTM1111) MBR(HWS1 ) CC( 0) UID(USER01 ) SEC(100)
SPORT(1111) RIC(CONNECT3) STT(CONN) </rsp>
<rsp>SCL(OTM2222) MBR(HWS1 ) CC( 0) UID(USER01 ) SEC(89)
SPORT(2222) RIC(CONNECT3) STT(CONN) </rsp>
<rsp>SCL(OTM3333) MBR(HWS1 ) CC( 0) UID(USER02 ) SEC(81)
SPORT(3333) RIC(CONNECT3) STT(CONN) </rsp>
<rsp>SCL(OTM4444) MBR(HWS1 ) CC( 0) UID(USER03 ) SEC(23)
SPORT(4444) RIC(CONNECT3) STT(CONN) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

ISC TCP/IP 接続の例

以下の例では、2 つの送信クライアントは、ISC から始まる名前によって識別されます。両方の送信クライアントがリモート CICS リソース CICS2 および ISC リソース IMS1CIC1 に関連付けられています。

TSO SPOC 入力:

```
QUERY IMSCON TYPE(SENDCLNT) NAME(ISC*) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

SendClnt	MbrName	CC	ISCName	Second	SendPort	RmtCICS	Status
ISCC9890	HWS1	0	IMS1CIC1	41	1396	CICS2	CONN
ISCC66F93	HWS1	0	IMS1CIC1	19	1397	CICS2	CONN

OM API 入力:

```
CMD ( QUERY IMSCON TYPE(SENDCLNT) NAME(ISC*) SHOW(ALL) )
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.6.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2012.102 21:47:26.546443</statime>
<stotime>2012.102 21:47:26.548301</stotime>
<staseq>C967E78294E0BE1B</staseq>


```

```

<stoseq>C967E7829554D91B</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10144726</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>QUERY IMSCON TYPE(SENDCLNT) NAME(ISC*) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="SCL" l1bl="SendClnt" scope="LCL" sort="a" key="2"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="UID" l1bl="UserID" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MSC" l1bl="MscName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="ISC" l1bl="ISCName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="SEC" l1bl="Second" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="10" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="SPORT" l1bl="SendPort" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RIC" l1bl="RmtImCon" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RCICS" l1bl="RmtCICS" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="STT" l1bl="Status" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="9" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>SCL(ISC66F93) MBR(HWS1 ) CC( 0) ISC(IMS1CIC1) SEC(19)
  SPORT(1397) RCICS(CICS2 ) STT(CONN) </rsp>
<rsp>SCL(ISCC9890) MBR(HWS1 ) CC( 0) ISC(IMS1CIC1) SEC(41)
  SPORT(1396) RCICS(CICS2 ) STT(CONN) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

QUERY IMSCON TYPE(UOR) コマンド

QUERY IMSCON TYPE(UOR) コマンドは、IMS Connect 内の 1 つ以上のリカバリー単位 (UOR) ID の状況およびアクティビティを表示するために使用します。

サブセクション:

- 296 ページの『環境』
- 296 ページの『構文』
- 296 ページの『キーワード』
- 298 ページの『使用上の注意』
- 298 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』

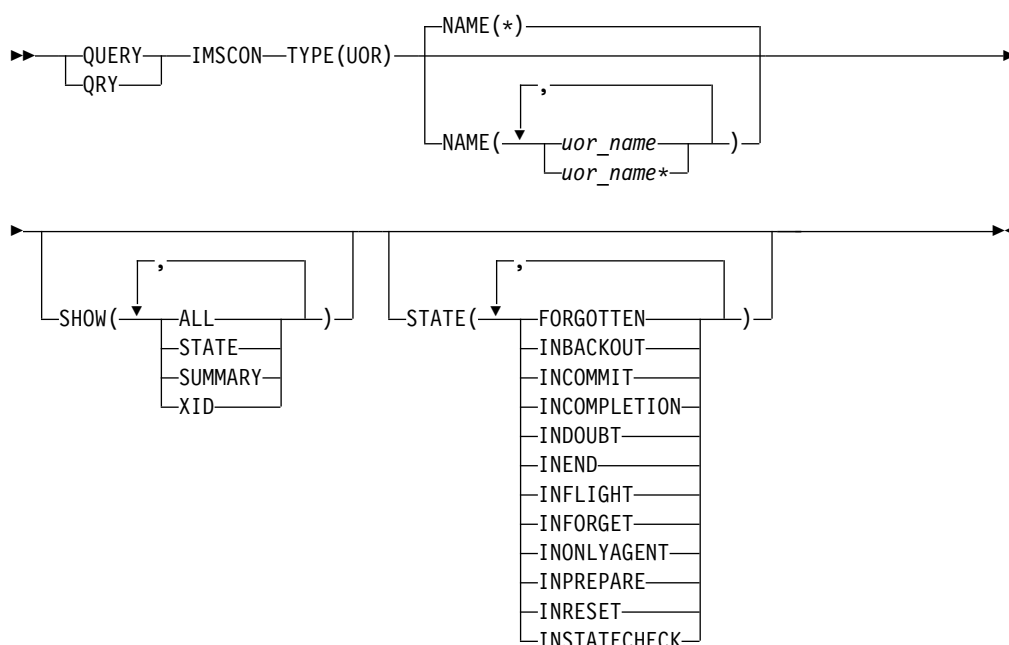
- 299 ページの『出力フィールド』
- 301 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 302 ページの『例』

環境

QUERY IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文



キーワード

以下のキーワードは、QUERY IMSCON TYPE(UOR) コマンドに有効です。

NAME

表示する 1 つ以上の UOR ID を指定します。単一の UOR ID、またはコマンドで区切った UOR ID のリストを指定できます。ID にはワイルドカードを使用することができます。

すべての UOR ID を表示するには、NAME(*) を指定できます。デフォルト値は NAME(*) です。

SHOW

オプションの出力フィールドを表示することを指定します。SHOW が指定されているかどうかに関係なく、常に表示される出力フィールドには、UOR ID、コマンドを処理する IMS Connect の名前、および完了コードがあります。

SHOW キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

ALL

すべての出力フィールドを表示します。

STATE

UOR の状態を表示します。返される状態についての説明は、299 ページの表 87 内の STATE キーワードを参照してください。

SUMMARY

NAME キーワードで指定されたすべての UOR に関連した要約情報を表示します。この情報は、それ独自の出力行に表示されます。特定の UOR は個別の出力行に表示されます。

表示される情報は以下のとおりです。

- すべての状態の UOR の総数。
- IN_DOUBT 状態の UOR の総数。
- IN_BACKOUT 状態の UOR の総数。
- IN_COMMIT 状態の UOR の総数。
- 上記のどの状態でもない UOR の総数

XID

X/Open ID を表示します。これは、X/Open アーキテクチャーで使用される分散トランザクションを識別します。XID は、以下の 4 つの部分で構成されています。

FMID 4 バイトの固定形式 ID

GTRID

4 バイトの固定 GTRID 長

BQUAL

4 バイトの固定 BQUAL 長

XID 128 バイトの XID

STATE

指定された状態の少なくとも 1 つに該当する UOR を表示用を選択します。

STATE キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

FORGOTTEN

FORGOTTEN の状況を持つ UOR を表示用を選択します。

INBACKOUT

IN_BACKOUT の状況を持つ UOR を表示用を選択します。

INCOMMIT

IN_COMMIT の状況を持つ UOR を表示用を選択します。

INCOMPLETION

IN_COMPLETION の状況を持つ UOR を表示用を選択します。

INDOUBT

IN_DOUBT の状況を持つ UOR を表示用を選択します。

INEND

IN_END の状況を持つ UOR を表示用に選択します。

INFLIGHT

IN_FLIGHT の状況を持つ UOR を表示用に選択します。

INFORGET

IN_FORGET の状況を持つ UOR を表示用に選択します。

INONLYAGENT

IN_ONLY_AGENT の状況を持つ UOR を表示用に選択します。

INPREPARE

IN_PREPARE の状況を持つ UOR を表示用に選択します。

INRESET

IN_RESET の状況を持つ UOR を表示用に選択します。

INSTATECHECK

IN_STATE_CHECK の状況を持つ UOR を表示用に選択します。

使用上の注意

QUERY IMSCON TYPE(UOR) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

通常、このコマンドでは、UOR ごとに 1 つの出力表示行が表示されます。ただし、SHOW(SUMMARY) キーワードが指定されている場合は、NAME() キーワードで指定された特定の名前または総称名ごとに 1 つの追加行が表示されます。この行には、さまざまな状態の UOR の合計の要約が表示されます。例えば、NAME(*) が指定された場合、IMS Connect は、合計を表示する「*」の UOR 名を持つ 1 つの出力行と、IMS Connect 内で検出された UOR ごとに 1 つの追加出力行を作成します。

同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、QUERY IMSCON TYPE(UOR) コマンドと同様の機能を実行する、WTOR (Write to Operator with Reply) コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

注:

- IMS Connect WTOR コマンドは、未解決の IMS Connect 応答メッセージに対する応答です。
- IMS Connect z/OS コマンドは、z/OS (MVS) インターフェースを介して、IMS Connect *jobname* を使用して発行されます。

表 86. QUERY IMSCON TYPE(UOR) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

QUERY IMSCON TYPE(UOR) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
QUERY IMSCON TYPE(UOR) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWUOR ALL	QUERY UOR NAME(*) SHOW(ALL)
QUERY IMSCON TYPE(UOR) NAME(<i>uor_id</i>) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWUOR <i>uor_id</i>	QUERY UOR NAME(<i>uor_id</i>) SHOW(ALL)
QUERY IMSCON TYPE(UOR) STATE(<i>state</i>)	ありません。	ありません。

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 87. QUERY IMSCON TYPE(UOR) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
BQUAL	BqualLen	XID	4 バイトの固定 BQUAL 長。これは XID の一部です。
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたりソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。301 ページの表 90を参照してください。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
FMID	Fmid	XID	4 バイトの固定形式 ID。これは XID の一部です。
GTRID	GtridLen	XID	4 バイトの固定 GTRID 長。これは XID の一部です。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。
STATE	状態	STATE	UOR の状態。返される可能性がある状態についての説明は、300 ページの表 88 を参照してください。
TIBO	TotInBackout	SUMMARY	IN_BACKOUT の状況を持つ UOR の総数。

表 87. QUERY IMSCON TYPE(UOR) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
TIC	TotInCommit	SUMMARY	IN_COMMIT の状況を持つ UOR の総数。
TID	TotInDoubt	SUMMARY	IN_DOUBT の状況を持つ UOR の総数。
TOTH	TotOther	SUMMARY	IN_DOUBT、IN_BACKOUT、または IN_COMMIT 以外の状況を持つ UOR の総数。
TUOR	TotalUor	SUMMARY	指定された NAME について表示された UOR の総数。
URID	Urid	N/A	特定のリカバリー単位を識別する 16 バイトの文字ストリング。UOR ID は常に戻されます。
XID	Xid	XID	128 バイトの文字 XID。

表 88. QUERY IMSCON TYPE(UOR) コマンドの UOR の状態

状態	意味
FORGOTTEN	UOR が完了し、z/OS リソース・リカバリー・サービス (RRS) がログ・レコードから削除されました。
IN_BACKOUT	以下のいずれかのアクションが発生しました。 <ul style="list-style-type: none"> • 1 つ以上の PREPARE 出口ルーチンが NO と応答した。 • アプリケーションがバックアウトを出した。 • DSRM または SDSRM が、IN_DOUBT UOR をバックアウトするよう RRS に指示した。 • インストール・システムが、RRS パネルを使用して IN_DOUBT UOR をバックアウトした。 • 2 フェーズ・コミット・プロトコルのフェーズ 2 の前に、システム、アプリケーション、RRS、または Resource Manager が失敗した。
IN_COMMIT	以下のいずれかのアクションが発生しました。 <ul style="list-style-type: none"> • PREPARE 出口ルーチンが YES と応答した。 • DSRM または SDSRM が、IN_DOUBT UOR をコミットするよう RRS に指示した。 • インストール・システムが、RRS パネルを使用して IN_DOUBT UOR をコミットした。
IN_COMPLETION	リソースが更新され、RRS は UOR の処理を完了しました。
IN_DOUBT	RRS は、Resource Manager が、UOR をコミットまたはバックアウトのいずれにより解決するかを指示するのを待っています。
IN_END	リソースは更新されました。
IN_FLIGHT	UOR はリソースにアクセスできる状態にあり、リソースを変更する可能性があります。変更はコミットされていません。
IN_FORGET	分散処理において、UOR は完了しましたが、RRS は、SDSRM が UOR のログ・レコードの処理に必要な時間を示すのを待っています。
IN_ONLY_AGENT	1 つの Resource Manager のみが UOR に対するインタレストを表明しました。
IN_PREPARE	適切な状態にある UOR がコミットを出し、RRS は PREPARE 出口ルーチンを呼び出します。

表 88. QUERY IMSCON TYPE(UOR) コマンドの UOR の状態 (続き)

状態	意味
IN_RESET	UOR は開始中であり、まだどのリソースも変更していません。
IN_STATE_CHECK	UOR はコミットを出しており、Resource Manager の STATE_CHECK 出口ルーチンがリソースが正しい状態にあるかどうかを確認するのを待っています。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY IMSCON TYPE(UOR) コマンドの結果として戻される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 89. QUERY IMSCON TYPE(UOR) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY IMSCON TYPE(UOR) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 90. QUERY IMSCON TYPE(UOR) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、QUERY IMSCON TYPE(UOR) コマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。

例

QUERY IMSCON TYPE(UOR) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QUERY IMSCON TYPE(UOR) SHOW(STATE)
```

TSO SPOC 出力:

```
Urid                      MbrName CC State
C3A3DE827DE55000000000601010000 HWS1      0 IN_FLIGHT
```

OM API 入力:

```
CMD ( QUERY IMSCON TYPE(UOR) SHOW(STATE) )
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2010.298 16:17:22.927883</statime>
<stotime>2010.298 16:17:22.928933</stotime>
<staseq>C6C839C83D10BAAC</staseq>
<stoseq>C6C839C83D5252AC</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10091722</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>QRY IMSCON TYPE(UOR) SHOW(STATE) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="URID" l1bl="Urid" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TUOR" l1bl="TotalUor" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="7" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TID" l1bl="TotInDoubt" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TIBO" l1bl="TotInBackout" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TIC" l1bl="TotInCommit" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TOTH" l1bl="TotOther" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="STATE" l1bl="State" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="14" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="FMID" l1bl="Fmid" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="LEFT" skipb="yes" />
<hdr s1bl="GTRID" l1bl="GtridLen" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="BQUAL" l1bl="BqualLen" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="XID" l1bl="Xid" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes">
```

```

len="256" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>URID(C3A3DE827DE550000000000601010000) MBR(HWS1          ) CC(
0) STATE(IN_FLIGHT          ) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: IMS Connect 内にアクティブの UOR が 1 つあります。
SHOW(SUMMARY) キーワードが指定されなかったため、1 つだけ表示行がありま
す。NAME キーワードが省略されているため、IMS Connect はすべてのデータ・
ストアを表示しています (デフォルトは NAME(*) です)。

QUERY IMSCON TYPE(UOR) コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
QUERY IMSCON TYPE(UOR) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

Urid	MbrName	CC	TotalUor	TotInDoubt
*	HWS1	0	1	0
C3A3DE827DE550000000000601010000	HWS1	0		

(screen 2)

Urid	MbrName	TotInBackout	TotInCommit
*	HWS1	0	0
C3A3DE827DE550000000000601010000	HWS1		

(screen 3)

Urid	MbrName	TotOther	State
*	HWS1	1	
C3A3DE827DE550000000000601010000	HWS1		IN_FLIGHT

(screen 4)

Urid	MbrName	Fmid	GtridLen	BqualLen
*	HWS1			
C3A3DE827DE550000000000601010000	HWS1	57415344	26	25

(screen 5)

Urid	MbrName	Xid
*	HWS1	
C3A3DE827DE550000000000601010000	HWS1	000000180114B9767775F58D0A517C90

(screen 6)

Urid	MbrName	Xid
*	HWS1	
C3A3DE827DE550000000000601010000	HWS1	3AD5C4901BAB55D42C0701B9767775F5

(screen 7)

Urid	MbrName	Xid
*	HWS1	
C3A3DE827DE550000000000601010000	HWS1	8D0A517C903AD5C4901BAB55D42C075B

(screen 8)

Urid	MbrName	Xid
*	HWS1	
C3A3DE827DE550000000000601010000	HWS1	AA8D12000000000000000000000000

(screen 9)

Urid	MbrName	Xid
*	HWS1	
C3A3DE827DE550000000000601010000	HWS1	000000000000000000000000000000

```
(screen 10)
Urid                               MbrName Xid
*                                   HWS1
C3A3DE827DE55000000000601010000 HWS1  00000000000000000000000000000000
```

```
(screen 11)
Urid                               MbrName Xid
*                                   HWS1
C3A3DE827DE55000000000601010000 HWS1  00000000000000000000000000000000
```

```
(screen 12)
Urid                               MbrName Xid
*                                   HWS1
C3A3DE827DE55000000000601010000 HWS1  00000000000000000000000000000000
```

OM API 入力:

CMD (QUERY IMSCON TYPE(UOR) SHOW(ALL))

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2010.300 04:59:35.813592</statime>
<stotime>2010.300 04:59:35.814615</stotime>
<staseq>C6CA2603FA5D84EA</staseq>
<stoseq>C6CA2603FA9D79AA</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10215935</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>QRY IMSCON TYPE(UOR) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="URID" l1b1="Urid" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="TUOR" l1b1="TotalUor" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="7" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="TID" l1b1="TotInDoubt" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="TIBO" l1b1="TotInBackout" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="TIC" l1b1="TotInCommit" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="TOTH" l1b1="TotOther" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="STATE" l1b1="State" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="14" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="FMID" l1b1="Fmid" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="LEFT" skipb="yes" />
<hdr s1b1="GTRID" l1b1="GtridLen" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
```

```

<hdr s1b1="BQUAL" l1b1="BqualLen" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="XID" l1b1="Xid" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="256" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>URID(C3A3DE827DE5500000000000601010000) MBR(HWS1          ) CC(
  0) STATE(IN_FLIGHT          ) FMID(57415344) GTRID(26) BQUAL(25)
XID(000000180114B9767775F58D0A517C903AD5C4901BAB55D42C0701B9767775F58D
0A517C903AD5C4901BAB55D42C075BAA8D1200000000000000000000000000000000
0000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000
0000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000)
</rsp>URID(*          ) MBR(HWS1          ) CC(
  0) TUOR(1) TID(0) TIB0(0) TIC(0) TOTH(1) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: IMS Connect 内にアクティブの UOR が 1 つあります。最初の表示行には、後続のすべての UOR の要約合計情報が入っています。2 番目の表示行は UOR を表し、その UOR の状態と XID 情報が入っています。NAME キーワードが省略されているため、IMS Connect はすべてのデータ・ストアを表示しています (デフォルトは NAME(*) です)。

関連概念:

[🔗 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 \(システム・プログラミング API\)](#)

関連資料:

[🔗 VIEWUOR コマンド \(コマンド\)](#)

[🔗 IMS Connect QUERY UOR コマンド \(コマンド\)](#)

QUERY IMSPLEX コマンド

QUERY IMSPLEX コマンド (タイプ 2 コマンド) は、1 つ以上の IMSplex メンバーに関する情報を表示するために使用します。

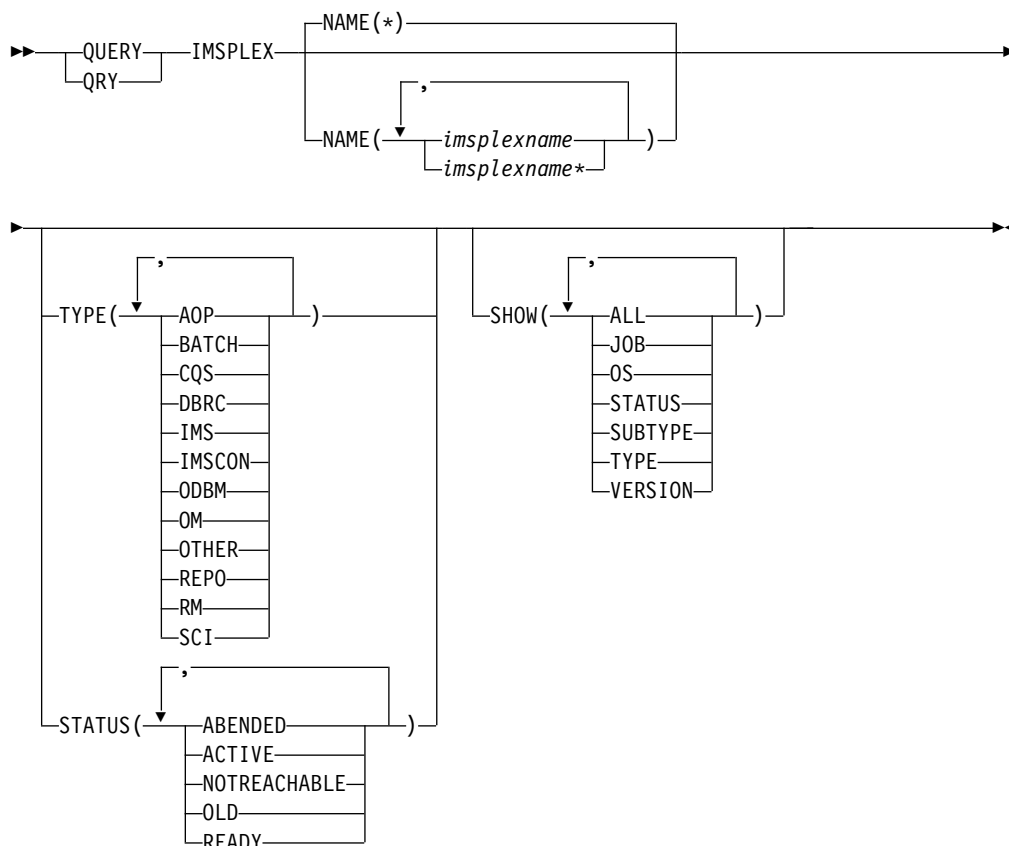
サブセクション:

- 『環境』
- 306 ページの『構文』
- 306 ページの『キーワード』
- 308 ページの『使用上の注意』
- 310 ページの『出力フィールド』
- 311 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 312 ページの『例』

環境

QUERY IMSPLEX コマンドは、IMS 制御領域または従属領域のアドレス・スペースでは実行されません。QUERY IMSPLEX は、OM コマンド処理環境で処理されます。

構文



キーワード

以下のキーワードは、QUERY IMSPLEX コマンドに有効です。

NAME()

メンバー情報が戻される IMSplex の名前を指定します。IMSplex 名には、総称パラメーターを使用できます。これにより、総称パラメーター・マスクに一致する名前の IMSplex のグループを容易に指定できるようになります。例えば、QUERY IMSPLEX NAME(*PLEX*) のように指定することができます。

メンバー情報を表示したい IMSplex の名前には、接頭部として CSL を付ける必要があります。CSL は、DFSCGxxx PROCLIB メンバー内で IMSPLEX= パラメーターに指定した IMSplex 名の前に追加します。例えば、DFSCGxxx メンバー内で IMSPLEX=PLEX1 を指定してあるとすれば、QUERY IMSPLEX NAME(CSLPLEX1) と指定する必要があります。

SHOW()

戻される出力フィールドを指定します。SHOW が指定されていない場合は、IMSplex 名、IMSplex メンバー名、出力行を作成する IMSplex メンバー、および完了コードのみが戻されます。これは、システム管理アプリケーションが、IMSplex 内で現在認識されているすべての IMSplex メンバー名のリストを入手するための方法を提供します。

ALL

すべての出力フィールドを戻します。

JOB

IMSpIex メンバーのジョブ名。

OS IMSpIex メンバーが実行中の OS イメージの名前。

STATUS

IMSpIex メンバーの状況。

SUBTYPE

IMSpIex メンバーのサブタイプ。

TYPE

IMSpIex メンバーのタイプ。

VERSION

IMSpIex メンバーのバージョン。

STATUS()

指定された状況が少なくとも 1 つ存在する IMSpIex メンバーを表示します。

ABENDED

IMSpIex メンバーは異常終了しました。

ACTIVE

IMSpIex メンバーはアクティブです。

NOTREACHABLE

メンバーに対して責任のあるローカル SCI は現在、アクティブではありません。表示される状況は、メンバーの現在の状況です。

注: 状況出力は NOT-REACHABLE (ハイフンあり) です。

OLD

メンバーに対して責任のある SCI は現在、アクティブではありません。表示される状況は、最後に確認されたメンバーの状況です。実際の状況は異なる場合があります。

READY

IMSpIex メンバーは、任意の方式 (TYPE を含む) で経路指定されたメッセージおよび要求を受け取る準備ができています。

TYPE()

指定されたメンバー・タイプを少なくとも 1 つ保有する IMSpIex メンバーを表示します。

AOP

自動化操作プログラム。AOP の一例として、IMSpIex あるいは IMSpIex をモニターしているプログラムとオペレーターが対話するために使用する、SPOC アプリケーションがあります。

BATCH

IMS バッチ・ジョブ。

CQS

共通キュー・サーバーのアドレス・スペース。

DBRC

DBRC アドレス・スペース。

IMS

IMS 領域。

IMSCON

IMS と、IMS により直接サポートされていないプロトコル (例えば TCP/IP) の間のインターフェースとしての役割を果たすアドレス・スペース。

ODBM

Open Database Manager のアドレス・スペース。

OM Operations Manager のアドレス・スペース。

OTHER

その他の非 IMS アドレス・スペースまたはジョブ。

REPO

リポジトリ・サーバー (RS) アドレス・スペース。リポジトリ・サーバーが構造化呼び出しインターフェース (SCI) アドレス・スペースに登録されている場合、リポジトリ・サーバー情報が返されます。

RM Resource Manager のアドレス・スペース。

SCI

構造化呼び出しインターフェースのアドレス・スペース。

使用上の注意

このコマンドは、OM API を介してのみ出すことができます。

QUERY IMSPLEX 状況

以下の表は、可能な IMSplex メンバーの状況を示しています。この表には、指定された状況によってメンバーを選択するように指定するための STATUS キーワード、戻される状況、および状況の意味といった、状況に関する情報が記載されています。

表 91. QUERY IMSPLEX 状況表

STATUS キーワード	Status	意味
ABENDED	ABENDED	IMSplex メンバーは異常終了しました。
ACTIVE	ACTIVE	IMSplex メンバーはアクティブです。
NOTREACHABLE	NOT-REACHABLE	メンバーに対して責任のあるローカル SCI は現在、アクティブではありません。表示される状況は、メンバーの現在の状況です。
OLD	OLD	メンバーに対して責任のある SCI は現在、アクティブではありません。表示される状況は、最後に確認されたメンバーの状況です。実際の状況は異なる場合があります。
READY	READY	IMSplex メンバーは、任意の方式 (TYPE を含む) で経路指定されたメッセージおよび要求を受け取る準備ができています。

QUERY IMSPLEX タイプ

以下の表は、可能な IMSplex メンバーのタイプを示しています。この表には、指定されたタイプによってメンバーを選択するように指定するための TYPE キーワード、戻されるタイプ、およびメンバー・タイプの意味といった、メンバー・タイプに関する情報が記載されています。

表 92. QUERY IMSPLEX メンバー・タイプ

TYPE キーワード	メンバー・タイプ	意味
AOP	aop	自動化操作プログラム。AOP の例としては、オペレーターが IMSplex と対話するために使用する SPOC (単一制御点) があります。また、IMSplex をモニターしているプログラムも、AOP の一例です。
BATCH	バッチ	IMS バッチ・ジョブ。
CQS	cqs	共通キュー・サーバーのアドレス・スペース。CQS は共用キューを管理し、また、リソース構造上のリソースを管理することもできます。
DBRC	dbrc	DBRC アドレス・スペース。
IMS	ims	IMS 領域。
IMSCON	imscon	IMS connect。IMS によって直接サポートされないプロトコルと IMS の間のインターフェースとして役立つアドレス・スペース。
ODBM	odbm	Open Database Manager のアドレス・スペース。ODBM は、IMS データベース・リソースへの分散アクセスを提供します。
OM	om	Operations Manager のアドレス・スペース。Operations Manager は、IMSplex での IMS オペレーションをサポートします。
OTHER	other	その他の非 IMS アドレス・スペースまたはジョブ。
REPO	repo	リポジトリ・サーバー (RS) アドレス・スペース。
RM	rm	Resource Manager のアドレス・スペース。Resource Manager は、IMSplex 内のグローバル・リソースをサポートしています。
SCI	sci	構造化呼び出しインターフェースのアドレス・スペース。

QUERY IMSPLEX サブタイプ

以下の表は、可能な IMSplex メンバーのサブタイプを示しています。この表には、メンバー・タイプ、メンバー・タイプに関連するメンバー・サブタイプ、およびメンバー・サブタイプの意味についての情報が記載されています。IMS 提供のメンバーによって定義および使用されるサブタイプは、以下のものに限られます。

表 93. QUERY IMSPLEX メンバー・サブタイプ

メンバー・タイプ	メンバー・サブタイプ	意味
DBRC	DBRC group_id	IMSplex 環境で同じ RECON を共有する DBRC インスタンス。
IMS	DBDC	IMS DB/DC アドレス・スペース。
IMS	DBCTL	IMS DBCTL アドレス・スペース。DBCTL は、データベース機能をサポートします。
IMS	DCCTL	IMS DCCTL アドレス・スペース。DCCTL は、データ通信機能をサポートします。
IMS	FDBR	IMS 高速データベース・リカバリー。IMS データベース・マネージャーに障害が起きた際にデータベース・リソースをリカバリーする、IMS の制御領域。
RM	SNGLRM	RM はリソース構造を使用せずに定義されているため、IMSplex では 1 つの RM しか許可されません。
RM	MULTRM	RM はリソース構造を使用して定義されているので、IMSplex では複数の RM が許されます。

出力フィールド

以下の表は、QUERY IMSPLEX コマンド出力フィールドを示しています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 94. QUERY IMSPLEX コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
IMSMBR	メンバー	N/A	IMSplex メンバー名。IMSplex メンバー名は常に戻されます。
IMSPLX	IMSplex	N/A	IMSplex 名。IMSplex 名は常に戻されます。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。出力行を作成した OM の OM ID。
CC	CC	N/A	出力行の完了コード。完了コードは常に戻されます。
STT	Status	STATUS	IMSplex メンバーの状況。詳細については、308 ページの表 91を参照してください。

表 94. QUERY IMSPLEX コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
JOB	JobName	JOB	IMSplex メンバーのジョブ名。
OS	OSName	OS	IMSplex メンバーが実行中の OS イメージの名前。
STYP	Subtype	SUBTYPE	IMSplex メンバーのサブタイプ。有効なサブタイプの説明については、310 ページの表 93 を参照してください。
TYP	タイプ	TYPE	IMSplex メンバーのタイプ。
VER	Version	VERSION	IMSplex メンバーのバージョン。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY IMSPLEX コマンドの結果として戻される戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 95. QUERY IMSPLEX コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY IMSPLEX コマンドは正常に完了しました。
X'02000008'	X'00002048'	QUERY IMSPLEX コマンドに、複数のフィルター値が指定されています。指定できるのは、TYPE フィルターまたは STATUS フィルターのいずれか 1 つです。
X'02000008'	X'0000203C'	無効なキーワード・パラメーター値が指定されました。
X'0200000C'	X'00003000'	QUERY IMSPLEX コマンドは、少なくとも 1 つのリソース名に対して正常に実行されます。QUERY IMSPLEX コマンドは、1 つ以上のリソース名に対しては、正常に実行されません。完了コードに、エラーの理由とリソース名が示されています。QUERY IMSPLEX コマンドによって戻される可能性のある完了コードは、QUERY IMSPLEX 完了コード表にリストされています。
X'0200000C'	X'00003004'	戻されるリソースは検出されませんでした。指定されたリソース名が無効の可能性はあるか、あるいは指定したフィルターと一致するリソースがありませんでした。
X'0200000C'	X'00003008'	QUERY IMSPLEX コマンドが複数のクライアントに経路指定されました。コマンドを処理したどのクライアントも、戻りコードおよび理由コードを OM に返しませんでした。少なくとも 1 つのコマンドのクライアントが、コマンドの応答データまたは応答メッセージを返しました。

表 95. QUERY IMSPLEX コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'02000014'	X'00005020'	QUERY IMSPLEX コマンド処理は終了しました。OM は、コマンドの処理中にシステム AWE 用のストレージを取得できませんでした。
X'02000014'	X'0000502C'	QUERY IMSPLEX コマンド処理は終了しました。OM は、コマンド出力ヘッダー用のストレージを取得できませんでした。
X'02000014'	X'00005030'	QUERY IMSPLEX コマンド処理は終了しました。OM は、コマンド出力応答用のストレージを取得できませんでした。
X'02000014'	X'00005040'	SCI エラーが原因で、QUERY IMSPLEX コマンド処理は終了しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

以下の表には、QUERY IMSPLEX コマンドで戻される可能性のある完了コードが記載されています。

表 96. QUERY IMSPLEX コマンドの完了コード

完了コード	意味
0	リソースに対する QUERY IMSPLEX コマンドは正常に完了しました。
4	IMSpIex 名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。IMSpIex 名が誤って入力されたか、またはこの時点では IMSpIex がアクティブになっていない可能性があります。これがワイルドカードを使用した要求である場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。

例

以下に示すのは QUERY IMSPLEX コマンドの例です。

QUERY IMSPLEX コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QRY IMSPLEX NAME(CSLPLEX1) SHOW(JOB,SUBTYPE,STATUS,TYPE)
```

TSO SPOC 出力:

```
Response for: QUERY IMSPLEX NAME(CSLPLEX1) SHOW(JOB,SUBTYPE,STATUS)
IMSpIex MbrName CC Member JobName Type Subtype Status
CSLPLEX1 OM10M 0 IMS2 IMS2 IMS DBDC READY,ACTIVE
CSLPLEX1 OM10M 0 CQS1CQS CQSRE1 CQS ACTIVE
CSLPLEX1 OM10M 0 PRAQJOB4 PRAQJOB4 DBRC 001 READY,ACTIVE
CSLPLEX1 OM10M 0 DBRACSAH DBRACSAH DBRC 001 READY,ACTIVE
CSLPLEX1 OM10M 0 SYS3 IMS1 IMS DBDC READY,ACTIVE
CSLPLEX1 OM10M 0 OM10M OM1 OM READY,ACTIVE
CSLPLEX1 OM10M 0 IMS3 IMS3 IMS DBDC READY,ACTIVE
CSLPLEX1 OM10M 0 PRAQJOB2 PRAQJOB2 DBRC 001 READY,ACTIVE
```

```

CSLPLEX1 OM10M      0 USRT011  USRT011  AOP          ACTIVE
CSLPLEX1 OM10M      0 RM1RM    RM1      RM    MULTRM    READY,ACTIVE
CSLPLEX1 OM10M      0 SCI1SC   SCI1     SCI             READY,ACTIVE
CSLPLEX1 OM10M      0 ODBM10D  ODBM1    ODBM          READY,ACTIVE

```

OM API 入力:

```
CMD(QRY IMSPLEX NAME(CSLPLEX1) SHOW(JOB,SUBTYPE,STATUS,TYPE))
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.1.0</omvsn>
<xm1vsn>1 </xm1vsn>
<statime>2002.163 15:05:18.859217</statime>
<stotime>2002.163 15:05:18.860443</stotime>
<staseq>B7C4A41E663D11C3</staseq>
<stoseq>B7C4A41E6689B9C3</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10080518</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSPLEX </kwd>
<input>QUERY IMSPLEX NAME(CSLPLEX1) SHOW(JOB,SUBTYPE,STATUS,TYPE)</input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="IMSPLX" l1b1="IMSPlex" scope="LCL" sort="A" key="1" scroll="NO" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="4"
dtype="INT" align="right" />
<hdr s1b1="IMSMBR" l1b1="Member" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="NO" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="JOB" l1b1="JobName" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="TYP" l1b1="Type" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="5"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="STYP" l1b1="Subtype" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="STT" l1b1="Status" scope="GBL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="*"
dtype="CHAR" align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>IMSPLX(CSLPLEX1) MBR(OM10M) IMSMBR(IMS2) CC( 0) JOB(IMS2) TYP(IMS)
STYP(DBDC) STT(READY,ACTIVE)</rsp>
<rsp>IMSPLX(CSLPLEX1) MBR(OM10M) IMSMBR(CQS1CQS) CC( 0) JOB(CQSRE1) TYP(CQS)
STYP( ) STT(ACTIVE)</rsp>
<rsp>IMSPLX(CSLPLEX1) MBR(OM10M) IMSMBR(SYS3) CC( 0) JOB(IMS1) TYP(IMS)
STYP(DBDC) STT(READY,ACTIVE)</rsp>
<rsp>IMSPLX(CSLPLEX1) MBR(OM10M) IMSMBR(PRAQJOB4) CC( 0) JOB(PRAQJOB4) TYP(DBRC)
STYP(001) STT(READY,ACTIVE)</rsp>
<rsp>IMSPLX(CSLPLEX1) MBR(OM10M) IMSMBR(DBRACSAH) CC( 0) JOB(DBRACSAH) TYP(DBRC)
STYP(001) STT(READY,ACTIVE)</rsp>
<rsp>IMSPLX(CSLPLEX1) MBR(OM10M) IMSMBR(OM10M) CC( 0) JOB(OM1) TYP(OM)
STYP( ) STT(EADY,ACTIVE)</rsp>
<rsp>IMSPLX(CSLPLEX1) MBR(OM10M) IMSMBR(IMS3) CC( 0) JOB(IMS3) TYP(IMS)
STYP(DBDC) STT(READY,ACTIVE)</rsp>
<rsp>IMSPLX(CSLPLEX1) MBR(OM10M) IMSMBR(PRAQJOB2) CC( 0) JOB(PRAQJOB2) TYP(DBRC)
STYP(001) STT(READY,ACTIVE)</rsp>
<rsp>IMSPLX(CSLPLEX1) MBR(OM10M) IMSMBR(USRT011) CC( 0) JOB(USRT011) TYP(AOP)
STYP( ) STT(ACTIVE)</rsp>
<rsp>IMSPLX(CSLPLEX1) MBR(OM10M) IMSMBR(RM1RM) CC( 0) JOB(RM1) TYP(RM)
STYP(MULTRM) STT(READY,ACTIVE)</rsp>
<rsp>IMSPLX(CSLPLEX1) MBR(OM10M) IMSMBR(SCI1SC) CC( 0) JOB(SCI1) TYP(SCI)

```

```

STYP( ) STT(READY,ACTIVE)</rsp>
<rsp>IMSPLX(CSLPLEX1) MBR(OM10M) IMSMBR(ODBM10D) CC( 0) JOB(ODBM1) TYP(ODBM)
STYP( ) STT(READY,ACTIVE)</rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: QUERY IMSPLEX コマンドは、IMSpIex CSLPLEX1 を構成する IMSpIex メンバーを表示します。この IMSpIex には、3 つの IMS システム (IMS1、IMS2、および IMS3) と、TSO SPOC (USRT011)、CQS (CQSRE1)、RM (RM1)、および OM (OM1) が含まれています。OM1 は、出力を作成したコマンド・マスターです。

QUERY IMSPLEX コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
QRY IMSPLEX NAME(CSLPLEX1) SHOW(JOB,SUBTYPE,STATUS,TYPE)
```

TSO SPOC 出力:

```

Response for: QUERY IMSPLEX NAME(CSLPLEX1) SHOW(JOB,SUBTYPE,STATUS,TYPE)
IMSpIex MbrName CC Member JobName Type Subtype Status
CSLPLEX1 OM10M 0 IMS2 IMS2 IMS DBDC READY,ACTIVE
CSLPLEX1 OM10M 0 CQS1CQS CQSRE1 CQS ACTIVE
CSLPLEX1 OM10M 0 SYS3 IMS1 IMS DBDC READY,ACTIVE
CSLPLEX1 OM10M 0 OM10M OM1 OM READY,ACTIVE
CSLPLEX1 OM10M 0 IMS3 IMS3 IMS DBDC READY,ACTIVE
CSLPLEX1 OM10M 0 USRT011 USRT011 AOP ACTIVE
CSLPLEX1 OM10M 0 RM1RM RM1 RM MULTRM READY,ACTIVE
CSLPLEX1 OM10M 0 SCI1SC SCI1 SCI READY,ACTIVE
CSLPLEX1 OM10M 0 ODBM10D ODBM1 ODBM READY,ACTIVE

```

OM API 入力:

```
CMD (QRY IMSPLEX NAME(CSLPLEX1) SHOW(JOB,SUBTYPE,STATUS,TYPE))
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname><omvsn>1.1.0</omvsn>
<xmlvsn>1</xmlvsn>
<statime>2002.163 15:05:18.859217</statime>
<stotime>2002.163 15:05:18.860443</stotime>
<staseq>B7C4A41E663D11C3</staseq>
<stoseq>B7C4A41E6689B9C3</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10080518</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSPLX </kwd>
<input>QUERY IMSPLEX NAME(CSLPLEX1) SHOW(JOB,SUBTYPE,STATUS,TYPE)</input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="IMSPLX" l1b1="IMSpIex" scope="LCL" sort="A" key="1" scroll="NO" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="4"
dtype="INT" align="right" />
<hdr s1b1="IMSMBR" l1b1="Member" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="NO" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />

```

```

<hdr s1bl="JOB"    l1bl="JobName" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TYP"    l1bl="Type"    scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="5"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="STYP"   l1bl="Subtype"  scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="STT"    l1bl="Status"   scope="GBL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="*"
dtype="CHAR" align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>IMSPLX(CSLPLEX1) MBR(OM10M) IMSMBR(IMS2)    CC(  0) JOB(IMS2)    TYP(IMS)
STYP(DBDC) STT(READY,ACTIVE)</rsp>
<rsp>IMSPLX(CSLPLEX1) MBR(OM10M) IMSMBR(CQS1CQS) CC(  0) JOB(CQSRE1) TYP(CQS)
STYP( ) STT(ACTIVE)</rsp>
<rsp>IMSPLX(CSLPLEX1) MBR(OM10M) IMSMBR(SYS3)    CC(  0) JOB(IMS1)    TYP(IMS)
STYP(DBDC) STT(READY,ACTIVE)</rsp>
<rsp>IMSPLX(CSLPLEX1) MBR(OM10M) IMSMBR(OM10M)   CC(  0) JOB(OM1)    TYP(OM)
STYP( ) STT(READY,ACTIVE)</rsp>
<rsp>IMSPLX(CSLPLEX1) MBR(OM10M) IMSMBR(IMS3)    CC(  0) JOB(IMS3)    TYP(IMS)
STYP(DBDC) STT(READY,ACTIVE)</rsp>
<rsp>IMSPLX(CSLPLEX1) MBR(OM10M) IMSMBR(USRT011) CC(  0) JOB(USRT011) TYP(AOP)
STYP( ) STT(ACTIVE)</rsp>
<rsp>IMSPLX(CSLPLEX1) MBR(OM10M) IMSMBR(RM1RM)   CC(  0) JOB(RM1)    TYP(RM)
STYP(MULTRM) STT(READY,ACTIVE)</rsp>
<rsp>IMSPLX(CSLPLEX1) MBR(OM10M) IMSMBR(SCI1SC)   CC(  0) JOB(SCI1)    TYP(SCI)
STYP( ) STT(READY,ACTIVE)</rsp>
<rsp>IMSPLX(CSLPLEX1) MBR(OM10M) IMSMBR(ODBM10D) CC(  0) JOB(ODBM1)    TYP(ODBM)
STYP( ) STT(READY,ACTIVE)</rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: QUERY IMSPLEX コマンドは、IMSpIex CSLPLEX1 を構成する IMSpIex メンバーを表示します。この IMSpIex には、3 つの IMS システム (IMS1、IMS2、および IMS3) と、TSO SPOC (USRT011)、CQS (CQSRE1)、RM (RM1)、および OM (OM1) が含まれています。OM1 は、出力を作成したコマンド・マスターです。

QUERY IMSPLEX コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
QUERY IMSPLEX TYPE(REPO) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

IMSpIex	MbrName	CC	Member	JobName	Type	Subtype	Version	OSName	Status
CSLPLEX1	OM10M	0	REPO2RP	REPO2	REPO		1.2.0	ECDVL40	ACTIVE
CSLPLEX1	OM10M	0	REPO3RP	REPO3	REPO		1.2.0	EC01221	ACTIVE
CSLPLEX1	OM10M	0	REPO1RP	REPO1	REPO		1.2.0	EC01589	READY,ACTIVE

OM API 入力:

```
CMD(QUERY IMSPLEX TYPE(REPO) SHOW(ALL))
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmIvsn>20 </xmIvsn>
<statime>2011.186 22:29:24.146714</statime>
<stotime>2011.186 22:29:24.147544</stotime>
<staseq>C806A4CD0761AED2</staseq>
<stoseq>C806A4CD07958A92</stoseq>

```


```

<rqsttkn1>USRT005 10152924</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>IMSPLEX </kwd>
<input>QUERY IMSPLEX TYPE(REPO) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="IMSPLEX" l1b1="IMSPlex" scope="LCL" sort="A" key="1"
  scroll="NO" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="N" key="0"
  scroll="YES" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES"
  len="4" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1b1="MSMBR" l1b1="Member" scope="LCL" sort="N" key="0"
  scroll="NO" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="JOB" l1b1="JobName" scope="LCL" sort="N" key="0"
  scroll="YES" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="TYP" l1b1="Type" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES"
  len="5" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="STYP" l1b1="Subtype" scope="LCL" sort="N" key="0"
  scroll="YES" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="VER" l1b1="Version" scope="LCL" sort="N" key="0"
  scroll="YES" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="OS" l1b1="OSName" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="STT" l1b1="Status" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES"
  len="*" dtype="CHAR" align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>IMSPLEX(CSLPLEX1) MBR(OM10M) IMSMBR(REPO2RP) CC( 0) JOB(REPO2)
  TYP(REPO) STYP() VER(1.2.0) OS(ECDVL40) STT(ACTIVE)</rsp>
<rsp>IMSPLEX(CSLPLEX1) MBR(OM10M) IMSMBR(REPO3RP) CC( 0) JOB(REPO3)
  TYP(REPO) STYP() VER(1.2.0) OS(EC01221) STT(ACTIVE)</rsp>
<rsp>IMSPLEX(CSLPLEX1) MBR(OM10M) IMSMBR(REPO1RP) CC( 0) JOB(REPO1)
  TYP(REPO) STYP() VER(1.2.0) OS(EC01589) STT(READY,ACTIVE)</rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>


```

説明: QUERY IMSPLEX TYPE(REPO) SHOW(ALL) コマンドは、SCI に登録されたりポジトリー・サーバー・アドレス・スペースに関する情報を返します。REPO1RP メンバーはマスター・サーバーであり、REPO2RP サーバーは、まだ SCI Ready 要求を発行していないので従属サーバーです。

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

QUERY LE コマンド

QUERY LE コマンドは、前の UPDATE LE コマンドによって定義された 言語環境 (LE) ランタイム・パラメーターのオーバーライドを表示するために使用します。照会では、トランザクション・コード、LTERM、ユーザー ID、またはプログラム名に対してフィルターを使用できます。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 318 ページの『使用上の注意』
- 319 ページの『出力フィールド』
- 319 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 320 ページの『例』

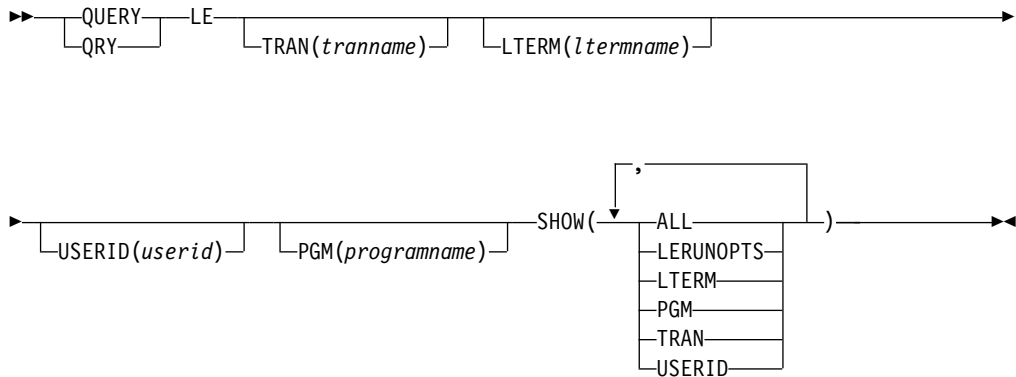
環境

以下の表には、QUERY LE コマンドおよびキーワードを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 97. QUERY LE コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUERY LE	X	X	X
LTERM	X	X	X
PGM	X	X	X
SHOW	X	X	X
TRAN	X	X	X
USERID	X	X	X

構文



キーワード

以下のキーワードは、QUERY LE コマンドに有効です。

パラメーターは、総称パラメーターまたはワイルドカード・パラメーターをサポートしています。総称パラメーターは、1 つのアスタリスクまたは 1 つの % 記号を含んだ、1 から 8 文字の名前です。アスタリスクは 0 個以上の文字で置き換えて、有効なリソース名を作成することができます。% 記号は正確に 1 文字で置き換えて、有効なリソース名を作成することができます。

LTERM()

総称パラメーターまたはワイルドカード・パラメーターとマッチングする、1 つ以上の LTERM の名前 (1 から 8 文字) を指定します。

PGM()

総称パラメーターまたはワイルドカード・パラメーターとマッチングする、1 つ以上のプログラムの名前 (1 から 8 文字) を指定します。

SHOW()

戻される出力フィールドを指定します。少なくとも 1 つの SHOW フィールドがコマンド上に必要です。

ALL

すべての出力フィールドを戻します。これは、SHOW (TRAN, LTERM, USERID, PGM, LERUNOPTS) と指定した場合と同じ効果を持ちます。

LERUNOPTS

トランザクション、LTERM、ユーザー ID、またはプログラム名と関連したすべての LE オーバーライド・パラメーターを戻します。

LTERM

論理端末名フィールドを戻します。

PGM

プログラム名フィールドを戻します。

TRAN

トランザクション名フィールドを戻します。

USERID

ユーザー ID フィールドを戻します。

TRAN()

総称パラメーターまたはワイルドカード・パラメーターとマッチングする、1 つ以上のトランザクションの名前 (1 から 8 文字) を指定します。

TRAN、LTERM、USERID、または PGM リソース・フィルターが指定されていない場合は、すべてのパラメーター・オーバーライドが戻されます。

USERID()

総称パラメーターまたはワイルドカード・パラメーターとマッチングする、1 つ以上のユーザー ID の名前 (1 から 8 文字) を指定します。

TRAN、LTERM、USERID、または PGM リソース・フィルターが指定されていない場合は、すべてのパラメーター・オーバーライドが戻されます。

使用上の注意

パラメーターの任意の組み合わせを使用して、アプリケーション・インスタンスを修飾することができます。基準に合うとわかった項目はすべて戻されます。コマンド応答で戻されるべき出力フィールドをコマンド上に指定します。トランザクション・コード、LTERM 名、ユーザー ID、プログラム名、およびランタイム・パラメーターを含むすべての情報を要求することができます。

このコマンドは、Operations Manager API を介してのみ指定できます。

このコマンドのコマンド構文は XML で定義されており、OM と通信する自動化プログラムで使用できます。

出力フィールド

以下の表には、QUERY LE 出力フィールドが記載されています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 98. QUERY LE コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	出力行の完了コード。完了コードは常に戻されます。
LTRM	Lterm	LTERM	QUERY によって要求される LTERM 名。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー (IMS ID)。メンバー名は常に戻されます。
PGM	Program	PGM	QUERY によって要求されるプログラム名。
PRM	LERunOpts	LERUNOPTS	指定されたりソース・フィルターの LE オーバーライド・パラメーター。
TRAN	Trancode	TRAN	QUERY によって要求されるトランザクション名。
UID	Userid	USERID	QUERY によって要求されるユーザー ID。

戻りコード、理由コード、および完了コード

IMS 戻りコードと理由コードは、QUERY LE コマンドによって OM に戻されません。QUERY LE コマンドの結果として戻される OM 戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 99. QUERY LE コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY LE コマンドは正常に完了しました。
X'00000008'	X'0000200C'	戻すリソースが検出されませんでした。項目が既に削除されたか、あるいはキーワード・フィルターが正しく入力されていません。

表 99. QUERY LE コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000008'	X'00002014'	フィルター名に無効文字が指定されました。
X'00000010'	X'00004040'	パラメーター・オーバーライド・ヘッダーが初期設定されていません。再始動が完了した後、コマンドを再試行してください。
X'00000014'	X'00005000'	IMODULE GETSTOR からのストレージの取得を行うことはできません。
X'00000014'	X'00005010'	ラッチを取得できません。
X'00000014'	X'00005FFF'	内部 IMS エラー - これは発生してはならないエラーです。

以下の表には、完了コードの説明が記載されています。

表 100. QUERY LE コマンドの完了コード

完了コード	意味
0	QUERY LE コマンドは、指定されたリソースに対して正常に完了しました。

例

以下に示すのは QUERY LE コマンドの例です。

QUERY LE コマンドの例 1

次のフィルターが QRY LE コマンドで指定されているものとします。

1. TRAN(PART) SHOW(ALL)。項目 #1、2、3、5、6、8 を戻す。
2. TRAN(PART) LTERM(TERM1) SHOW(ALL)。項目 #3、5、6 を戻す。
3. LTERM(TERM2) USERID(BETTY) SHOW(ALL)。項目 #7 を戻す。
4. TRAN(PART) LTERM(TERM1) USERID(BETTY) SHOW(ALL)。いずれの項目も戻さない。
5. TRAN(PART) LTERM(TERM*) SHOW(ALL)。項目 #3、5、6、8 を戻す。
6. USERID(B*) SHOW(ALL)。項目 #2、5、6、7 を戻す。

QUERY コマンドで戻されることになる、項目のマッチングの規則は以下のとおりです。

- 特定のリソース用のコマンド上で、あるフィルターが指定されている場合は、そのフィルターを項目で定義されたリソース・フィルターとマッチングしなければなりません。QUERY LE コマンドのリソースは、前もって定義されたとおり、ワイルドカードを用いて指定することができます。
- QUERY LE コマンドで指定されていないリソース・フィルターは、項目で定義されている特定リソースのすべてのフィルターについてマッチングします。指定されていないフィルターは、ワイルドカードとして扱われます。例えば、QRY LE コマンドに LTERM フィルターが指定されていない場合、LTERM(*) がコマンド上に指定されたかのように、項目で定義された任意の LTERM リソースでマッチングを行います。

以下の表は、上記の照会コマンドが処理される前の、パラメーター・オーバーライド・テーブル項目の論理表現を示しています。

表 101. パラメーター・オーバーライド・テーブル項目の例 1

項目番号	TRAN	LTERM	USERID	PROGRAM	LERUNOPTS
1	PART			DFSSAM02	aaaa
2	PART		BETTY		bbbb
3	PART	TERM1			cccc
4				DFSSAM02	dddd
5	PART	TERM1	BARBARA		eeee
6	PART	TERM1	BOB		ffff
7		TERM2	BETTY		gggg
8	PART	TERM2			iiii

QUERY LE コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
QRY LE SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

```
SYS3 0 IAPMDI29 CCCC
SYS3 0 IAPMDI26 USRT001 RPTOPTS=((ON),NOOVR),RPTSTG(((OFF),NOOVR)
SYS3 0 IAPMDI27 IMS1 USRT001 IAPMDI27 AAAA
```

OM API 入力:

```
CMD(QRY LE SHOW(ALL))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.1.0</omvsn>
<xm1vsn>1 </xm1vsn>
<statime>2002.163 17:34:01.196902</statime>
<stotime>2002.163 17:34:01.197368</stotime>
<staseq>B7C4C55B67566505</staseq>
<stoseq>B7C4C55B67738365</stoseq>
<rqsttkn1>USRT002 10103401</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>SYS3 </master>
<userid>USRT002 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>LE </kwd>
<input>QRY LE SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdsphdr>
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="A" key="1" scroll="NO" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="4"
dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="TRAN" l1bl="Trancode" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="LTRM" l1bl="Lterm" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="8"
```

```

dtype="CHAR " align="left" />
<hdr slbl="UID" llbl="Userid" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="8"
dtype="CHAR " align="left" />
<hdr slbl="PGM" llbl="Program" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr slbl="PRM" llbl="LERunOpts" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="*"
dtype="CHAR" align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MBR(SYS3 ) CC( 0) TRAN( ) LTRM( ) UID( ) PGM(IAPMDI29)
PRM(CCCC ) </rsp>
<rsp>MBR(SYS3 ) CC( 0) TRAN(IAPMDI26) LTRM( ) UID(USRT001 ) PGM( )
PRM(RPTOPTS=((ON),NOOVR),RPTSTG=((OFF),NOOVR) )</rsp>
<rsp>MBR(SYS3 ) CC( 0) TRAN(IAPMDI27) LTRM(IMS1 ) UID(USRT001 ) PGM(IAPMDI27)
PRM(AAAA ) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: SHOW(ALL) パラメーターが指定されており、したがって 4 つのフィルターすべてとランタイム・オプション・ストリングが各テーブル項目に表示されます。しかも、コマンドにはフィルターが指定されていないので、すべてのテーブル項目が表示されます。この例では、テーブル項目が 3 つあります。最初のエントリーは 1 つのフィルター (プログラム) を指定しており、このエントリーのパラメーター・ストリングは CCCC です。2 番目のエントリーは、trancode と userid の 2 つのフィルターを指定していて、そのパラメーター・ストリングは RPTOPTS=((ON),NOOVR),RPTSTG=((OFF),NOOVR) です。最後のエントリーは 4 つのフィルターをすべて指定しており、パラメーター・ストリングは AAAA となっています。

QUERY LE コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
QRY LE SHOW(LTERM,USERID)
```

TSO SPOC 出力:

MbrName	CC	Lterm	Userid
SYS3	0		
SYS3	0		USRT001
SYS3	0	IMS1	USRT001

OM API 入力:

```
CMD(QRY LE SHOW(LTERM,USERID))
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.1.0</omvsn>
<xmlvsn>1 </xmlvsn>
<statime>2002.163 17:36:27.588393</statime>
<stotime>2002.163 17:36:27.589261</stotime>
<staseq>B7C4C5E703729D6F</staseq>
<stoseq>B7C4C5E703A8D467</stoseq>
<rqsttkn1>USRT002 10103627</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>SYS3 </master>

```

```

<userid>USRT002 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>LE </kwd>
<input>QRY LE SHOW(LTERM,USERID) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="A" key="1" scroll="NO" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="4"
dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LTRM" l1bl="Lterm" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="8"
dtype="CHAR " align="left" />
<hdr s1bl="UID" l1bl="Userid" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="8"
dtype="CHAR " align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MBR(SYS3 ) CC( 0) LTRM( ) UID( ) </rsp>
<rsp>MBR(SYS3 ) CC( 0) LTRM( ) UID(USRT001 ) </rsp>
<rsp>MBR(SYS3 ) CC( 0) LTRM(IMS1 ) UID(USRT001 ) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: このコマンドは SHOW パラメーターを使用して、テーブルの各項目に表示されるデータの量を制限しています。3つのテーブル項目がすべて表示されますが、LTERM フィルターと TRAN フィルターだけは、それぞれのエントリー別に表示されます。最初のエントリーでは、LTERM フィルターも USERID フィルターも定義されていません。したがって、MbrName と CC 以外は空白です。

QUERY LE コマンドの例 4

TSO SPOC 入力:

```
QRY LE USERID(USRT*) SHOW(LTERM,USERID)
```

TSO SPOC 出力:

MbrName	CC	Lterm	Userid
SYS3	0		USRT001
SYS3	0	IMS1	USRT001

OM API 入力:

```
CMD(QRY LE USERID(USRT*) SHOW(LTERM,USERID))
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.1.0</omvsn>
<xmlvsn>1 </xmlvsn>
<stime>2002.163 17:50:24.925819</stime>
<stotime>2002.163 17:50:24.926381</stotime>
<staseq>B7C4C9058F87B484</staseq>
<stoseq>B7C4C9058FAAD324</stoseq>
<rqsttkn1>USRT002 10105024</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>SYS3 </master>
<userid>USRT002 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>LE </kwd>
<input>QRY LE USERID(USRT*) SHOW(LTERM,USERID) </input>

```


```

</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr slbl="MBR" llbl="MbrName" scope="LCL" sort="A" key="1" scroll="NO" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr slbl="CC" llbl="CC" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="4"
dtype="INT" align="right" />
<hdr slbl="LTRM" llbl="Lterm" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr slbl="UID" llbl="Userid" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MBR(SYS3 ) CC( 0) LTRM( ) UID(USRT001 ) </rsp>
<rsp>MBR(SYS3 ) CC( 0) LTRM(IMS1 ) UID(USRT001 ) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>


```

説明: このコマンドは、USERID フィルターと SHOW パラメーターの両方を使用して、出力に表示されるデータの量を制限しています。 USERID(USRT*) パラメーターは、指定されたパターン (USRT*) に適合する USERID フィルターを定義しているテーブル項目のみへ出力を制限します。 SHOW パラメーターは、各テーブル項目についての、戻される情報の量を制限します。この場合は、LTERM と USERID のみが表示されます。

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)
1283 ページの『UPDATE LE コマンド』

QUERY LTERM コマンド

QUERY LTERM コマンドは、論理端末 (LTERM) に関する情報を表示するために使用します。このコマンドは、OM API を介してのみ指定でき、XRF 代替システムでのみ有効です。

サブセクション:

- 325 ページの『環境』
- 325 ページの『構文』
- 326 ページの『キーワード』
- 335 ページの『使用上の注意』
- 336 ページの『同等の IMS タイプ 1 コマンド』
- 336 ページの『出力フィールド』
- 339 ページの『QUERY LTERM 状況』
- 340 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 343 ページの『例』

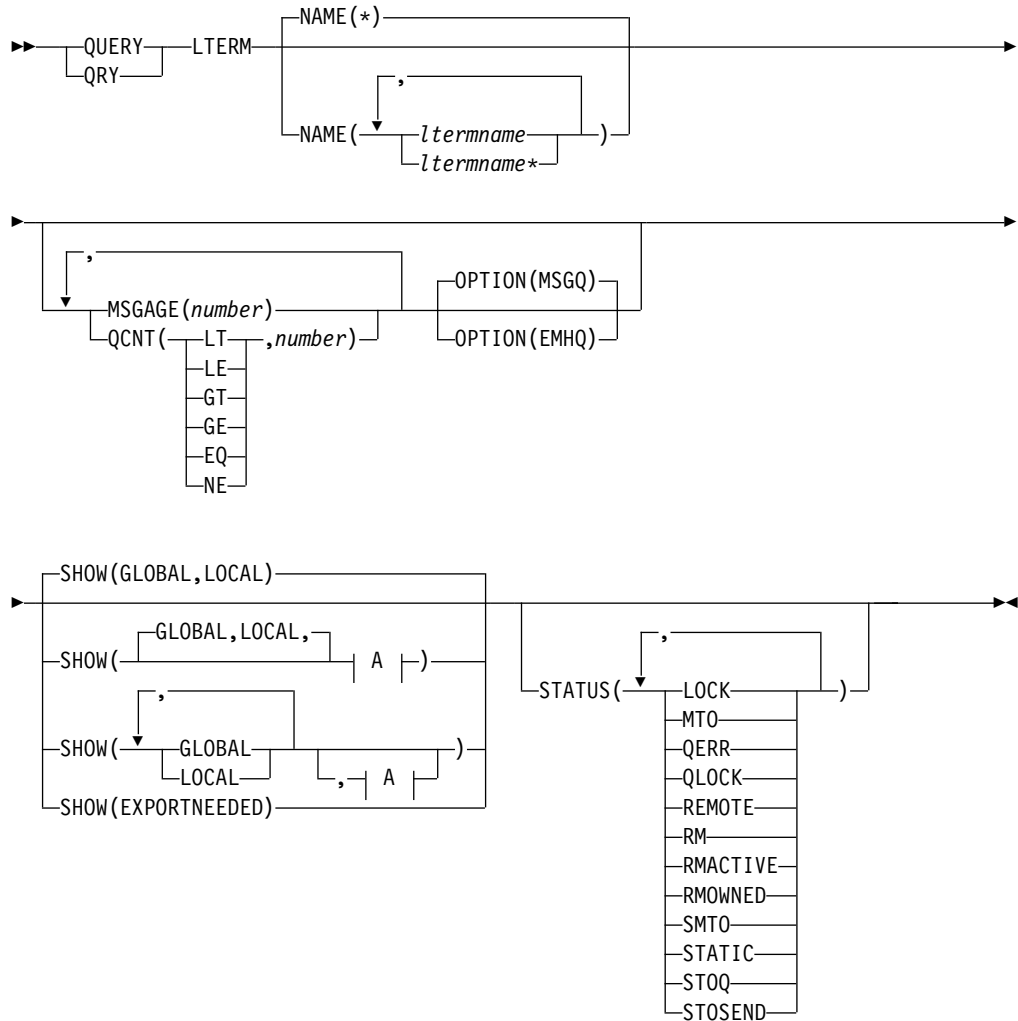
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

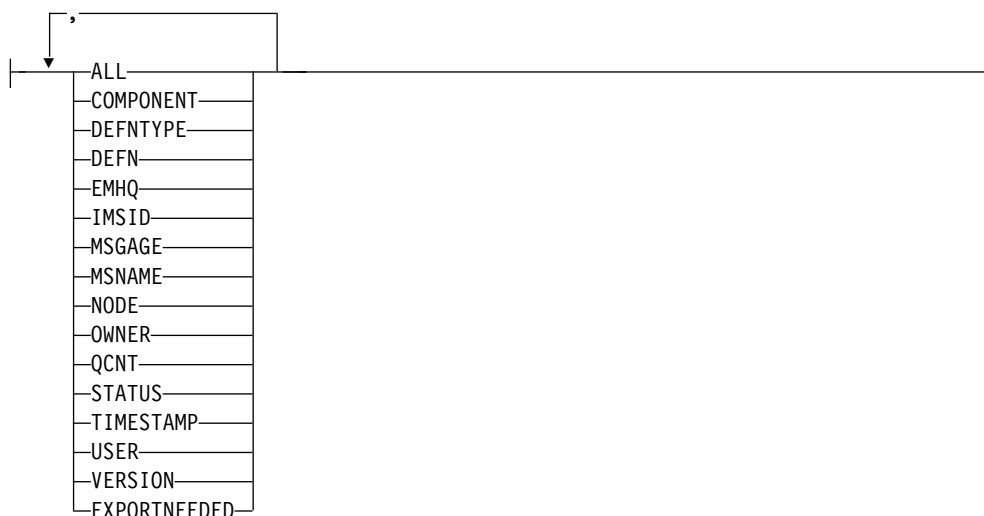
表 102. QUERY LTERM コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUERY LTERM	X		X
NAME	X		X
MSGAGE	X		X
QCNT	X		X
OPTION	X		X
SHOW	X		X
STATUS	X		X

構文



A:



キーワード

以下のキーワードは、QUERY LTERM コマンドに有効です。

MSGAGE ()

メッセージの経過時間が、指定された値を超えているメッセージを 1 つ以上持つ論理端末だけを選択します。これは、共用メッセージ・キュー内のメッセージにのみ適用されます。日数を指定します。有効な値は 0 から 365 です。

表示される情報には、キューに入っているメッセージの合計カウント、メッセージの経過時間が、指定されたメッセージ経過時間以上であるメッセージのカウント、最も古いメッセージのタイム・スタンプ、および最も新しいメッセージのタイム・スタンプが含まれます。

MSGAGE フィルターを指定した場合、返される出力には、SHOW(QCNT) が指定されていなくても LTERM のキュー・カウントが含まれ、SHOW(MSGAGE) が指定されていなくてもメッセージ経過時間情報が含まれます。

MSGAGE() は共用キュー環境にのみ適用され、コマンド・マスターの IMS によってのみ処理されます。これは、SHOW(GLOBAL) が指定された場合にのみ有効です。

OPTION キーワードは、メッセージ・キュー構造 (OPTION(MSGQ)) を読み取るか、または EMH キュー構造 (OPTION(EMHQ)) を読み取るかを IMS に指示します。OPTION(MSGQ) はデフォルトです。OPTION(EMHQ) は、共用 EMH が使用されている場合にのみ有効です。

パフォーマンスへの影響として、メッセージ経過時間情報を入手するために、カップリング・ファシリティ上すべての共用キュー LTERM メッセージを読み取る必要が生じます。

MSGAGE() を QCNT() フィルターまたは STATUS() フィルターと一緒に指定した場合、IMS は指定されたフィルターのいずれかに一致する LTERM を選択します (指定されたフィルターのすべてに一致する必要はありません)。

NAME()

表示する 1 つ以上の論理端末の名前を指定します。有効な名前は 1 から 8 文字で、ワイルドカードが指定できます。すべての論理端末を表示するには、NAME(*) を指定します。デフォルト値は NAME(*) です。

特定の LTERM 名を指定する場合は、いくつかの特別な考慮事項があります。

1 次および 2 次 MTO LTERM 名には、DFSDCxxx PROCLIB メンバー内の PMTOG キーワードおよび SMTOG キーワードによって指定された総称名が関連付けられている場合があります。すべてのシステム上にある 1 次および 2 次 MTO LTERM を表示するには、オペレーターは総称 LTERM 名を指定する必要があります。そのようにした場合、表示される出力には、総称名でなく、各システム上の実 LTERM 名が示されます。

システム・コンソール LTERM には、「WTOR」という総称名があります。共用キューが使用可能でない場合、「WTOR」はシステム・コンソール LTERM の実名でもあります。共用メッセージ・キューが非 XRF システム内で使用可能な場合、実名は IMS システム ID (IMSID) です。共用メッセージ・キューが XRF システム内で使用可能な場合、実名はリカバリー可能サービス・エレメント (RSENAME) です。すべてのシステム上にあるシステム・コンソール LTERM を表示するには、オペレーターは総称 LTERM 名の「WTOR」を指定する必要があります。そのようにした場合、表示される出力には、総称名でなく、各システム上の実 LTERM 名が示されます。

VTAM ノードに関連付けられている論理端末は、ローカルに存在するか、リソース構造内に存在するか、またはその両方に存在場合があります。システム・コンソール、SPOOL、または SYSOUT デバイスに関連付けられている論理端末は、ローカル・システム内にのみ存在します。

OPTION()

コマンドを処理するための追加情報を指定します。このキーワードは、MSGAGE() フィルターまたは QCNT() フィルターと一緒に使用した場合にのみ有効です。

MSGQ

キュー・カウント情報を共用メッセージ・キュー構造から取り出すか、または共用キューが使用可能でない場合にローカル・メッセージ・キューから取り出すことを指定します (QCNT フィルターの場合のみ)。

EMHQ

キュー・カウント情報を急送メッセージ・ハンドラー・キュー構造から取り出すことを指定します。EMHQ は、EMH キューが使用されている場合にのみ有効です。

QCNT()

キュー・カウントが、指定する数値に比べて、より小 (LT)、より小か等しい (LE)、より大 (GT)、より大か等しい (GE)、等しい (EQ)、あるいは等しくない (NE) 論理端末だけを選択します。LT を指定する場合は、数値に 1 を指定することはできず、EQ、GE、LE、または LT を指定する場合は、数値に 0 を指定することはできません。QCNT フィルターを指定した場合は、指定する条件とは関係なく、キュー・カウントが 0 より大きい LTERM だけが返されます。キュー・カウントが 0 の LTERM は返されません。

QCNT フィルターは、共用キュー環境でも非共用キュー環境でも有効です。

共用キュー環境では、表示する LTERM を判別するためにグローバル・キュー・カウント値が使用されます。したがって、QCNT フィルターでは SHOW(LOCAL) は無効です。この環境では、コマンド・マスターだけがコマンドを処理します。それ以外のすべての IMS システムは、コマンドを無視します。OPTION キーワードは、メッセージ・キュー構造 (OPTION(MSGQ)) を読み取るか、または EMH キュー構造 (OPTION(EMHQ)) を読み取るかを IMS に指示します。OPTION(MSGQ) はデフォルトです。OPTION(EMHQ) は、共用 EMH が使用されている場合にのみ有効です。QCNT をワイルドカードの LTERM 名と一緒に指定した場合、カップリング・ファシリティ上すべての共用キュー LTERM メッセージを読み取る必要が生じ、パフォーマンスに影響が出ます。

非共用キュー環境では、表示する LTERM を判別するために、ローカル・キュー・カウント値が使用されます。この環境では、キューはローカルであるため、コマンドはコマンドの経路指定先である各 IMS によって処理されます。各 IMS は、指定されたキュー・カウント・フィルターに一致する、ローカル側で検出されたすべての LTERM を返します。ローカル EMH キュー・カウントは存在しないため、この環境では OPTION(EMHQ) は無効であり、これを指定した場合、コマンドはリジェクトされます。

QCNT フィルターを指定した場合は、SHOW(QCNT) が指定されていなくても、返される出力に LTERM のキュー・カウントが含まれます。

QCNT() を MSGAGE() フィルターまたは STATUS() フィルターと一緒に指定した場合、IMS は指定されたフィルターのいずれかに一致する LTERM を選択します (指定されたフィルターのすべてに一致する必要はありません)。

SHOW()

これは、返される LTERM 出力フィールドを指定します。SHOW が指定されず、しかも MSGAGE、QCNT、STATUS の 3 つのキーワードのどれも指定されなかった場合は、LTERM 名だけが返されます。この方法をシステム管理アプリケーションで利用すれば、IMSplex 内で現在認識されているすべての LTERM 名のリストを入手できます。

表示する情報を IMS が入手する場所 (グローバル・リソースまたはローカル・リソース) を指定するために、2 つのパラメーター GLOBAL と LOCAL が使用されます。デフォルトは GLOBAL と LOCAL の両方です。

残りのパラメーターは表示される情報を指定するために使用されます。

SHOW キーワードでサポートされるパラメーターには、以下のものがあります。パラメーターの指定順は任意です。

ALL

すべての出力フィールドを返します。

COMPONENT

LTERM の入出力コンポーネントを表示します。コンポーネント番号は NAME マクロ、ユーザー記述子、サインオン・ユーザー出口 (DFSSGNX0)、または /ASSIGN LTERM コマンドで定義され、入力または出力に使用される端末のコンポーネントを表します。

DEFNTYPE

リソースの定義に使用された定義タイプを表示します。このパラメーターは、MSC リモート LTERM にのみ適用できます。

DEFN

リソース定義を戻すように指定します。

MSC リモート LTERM の以下の属性を返すことができます。

- MSNAME
- リポジトリの作成および更新のタイム・スタンプ
- IMS ランタイムの作成および更新のタイム・スタンプ

SHOW(DEFN) にその他の SHOW フィルターが指定されない場合、または IMSID フィルターが指定されている場合、すべての定義属性が戻されます。IMS システムのランタイム・リソース定義は、コマンドを受信する各 IMS によって戻されます。IMSRSC リポジトリ内の保管済みリソース定義は、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合、コマンド・マスター IMS によって戻されます。

コマンド・マスター IMS は、リポジトリから取得した汎用保管済みリソース定義ごとに応答行を戻します。それぞれの応答行には、汎用リソース定義の属性が表示されます。SHOW(DEFN) を IMSID フィルターなしで指定し、すべての IMS システムに定義されている属性値が同一の場合、汎用定義の応答行のみが戻されます。保管済みリソース定義が定義されている IMS システムの IMS ID は戻されません。IMS システムの保管済みリソース定義に、汎用保管済みリソース定義と異なる属性値が 1 つ以上含まれている場合は、属性値が異なる IMS ごとに追加の応答行が戻されます。

SHOW(DEFN,LOCAL) が指定されている場合、コマンドを受信した各 IMS により、IMS システムのランタイム・リソース定義が戻されます。

SHOW(DEFN,GLOBAL) が指定されている場合、コマンド・マスター IMS により、リポジトリの保管済みリソース定義が戻されます。

SHOW(DEFN,GLOBAL) は、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合のみ有効です。

SHOW(DEFN) にその他のパラメーターが指定されている場合、要求された定義属性のみが戻されます。例えば SHOW(DEFN,TIMESTAMP) が指定されている場合、タイム・スタンプのみが戻されます。

制約事項:

- SHOW(DEFN) は、DEFNTYPE または STATUS と一緒に指定することはできません。QRY LTERM SHOW(ALL) コマンドで戻される LclStat 列 および LDefnType 列は、SHOW(DEFN) では戻されません。
- SHOW(DEFN) は、フィルター STATUS と一緒に指定することはできません。
- SHOW(DEFN) は、グローバル共用キュー・キーワード、グローバル状況キーワード、およびシスプレックス端末管理キーワードと一緒に指定することはできません (例えば、EMHQ、MSGAGE、OWNER、QCNT、および VERSION)。

- SHOW(DEFN) を指定した場合に戻される Repo 列および IMSid 列は、SHOW(ALL) では戻されません。

リポジトリに保管されたりソース定義を使用してリポジトリ情報を持つ応答行を判別し、ランタイム・リソース定義を使用して IMS ランタイム・リソース情報を持つ応答行を判別します。

SHOW(DEFN,IMSID) を指定すると、IMS の保管済みリソース定義が汎用リソース定義と同一であるかどうかにかかわらず、汎用保管済みリソース定義に対して応答行が返され、リポジトリにリソースが定義されている IMS ごとに追加の応答行が返されます。

EXPORTNEEDED

NAME パラメーターに一致し、作成されたか最後に更新されて以降 IMSRSC リポジトリにエクスポートされたことがない MSC リモート LTERM リソースだけを QUERY コマンドで戻すよう指定します。SHOW(EXPORTNEEDED) は、エクスポートする必要があるリソースのみを表示するため、フィルターのように動作します (QUERY LTERM EXPORTNEEDED(Y) がサポートされる場合と同様の動作)。

NAME キーワードが省略されたか NAME(*) が指定された場合、リポジトリにエクスポートする必要がある MSC リモート LTERM の名前だけが返されます。

NAME キーワードで特定の名前が指定されたか NAME(*) 以外の総称名が指定された場合、コマンドで指定された MSC リモート LTERM 名ごとに 1 行ずつ、応答行が返されます。指定された MSC リモート LTERM をリポジトリにエクスポートする必要がない場合は、ExportNeeded 列に N が返されます。

NAME とともに、ローカル LTERM のみに一致する固有パラメーターまたは汎用パラメーターが指定されている場合、自動エクスポートはローカル LTERM に適用されないため、完了コード 10「NO RESOURCES FOUND」を出してリジェクトされます。

制約事項:

- SHOW(EXPORTNEEDED) は、他のいかなる SHOW パラメーターや他のキーワードとも一緒に指定することはできません。
- SHOW(EXPORTNEEDED) は、IMS で MSC リソースの動的リソース定義 (MSCRSCS=DYN) と IMSRSC リポジトリが使用可能になっている場合にのみ有効です。
- QUERY LTERM SHOW(EXPORTNEEDED) コマンドは、XRF 代替システムでは無効です。

ヒント: IMSRSC リポジトリにエクスポートされていないリソースの場合は、次の IMS コールド・スタートのためにリソースが使用可能になるように、/CHECKPOINT コマンドを発行してリポジトリにリソースを自動的に書き込むことができます。

EMHQ

急送メッセージ・ハンドラー (EMH) キュー内の LTERM メッセージ・キュー・カウントを表示します。

EMHQ は、SHOW キーワードで GLOBAL パラメーターが指定された場合にのみ有効です。GLOBAL が指定されなかった場合、EMHQ パラメーターは無視されます。

EMHQ は、コマンド・マスターによってのみ処理されます。それ以外のすべての IMS システムは、このパラメーターを無視します。

EMHQ は、共用キュー環境で共用 EMH が使用されている場合にのみ有効です。それ以外の場合、このパラメーターは無視されます。

GLOBAL

コマンド・マスターは、他の指定されている SHOW パラメーターに従ってグローバル情報を表示します。これには、共用キュー、リソース構造、およびリポジトリからの情報が含まれます。

GLOBAL パラメーターは、コマンド・マスターによってのみ処理されます。他のすべての IMS システムはこのパラメーターを無視します。

LOCAL が一緒に指定されなかった場合、コマンド・マスター以外のすべての IMS システムは、コマンドを無視します。

GLOBAL は、コマンド・マスターが共用キュー、シスプレックス端末管理、または IMSRSC リポジトリ、またはこれらの組み合わせを使用している場合にのみ適用されます。

コマンド・マスターが共用キュー、シスプレックス端末管理、または IMSRSC リポジトリを使用していない場合、GLOBAL は適用されません。この環境で LOCAL が一緒に指定されている場合、GLOBAL は無視されます。それ以外の場合、コマンド・マスターはコマンドをリジェクトします。

リポジトリが使用可能になっている場合、コマンド・マスターはリポジトリ属性定義の判別を RM に要求します。

SHOW(DEFN,GLOBAL,LOCAL) は SHOW(DEFN) と等価です。

共用キューが使用可能であり、グローバル・キュー・カウントが要求された場合、コマンド・マスターは適切なキュー・カウントを判別するよう CQS に要求します。これには、MSGQ と EMHQ の両方が含まれます。

シスプレックス端末管理が使用可能な場合、コマンド・マスターは適切なグローバル状況を判別するよう RM に要求します。

GLOBAL と LOCAL の両方を指定した場合 (これがデフォルトです)、コマンド・マスターはグローバル情報とローカル情報を別々に作成します。グローバル情報は 1 つの出力行 (または出力行セット) として表示され、ローカル情報は別の出力行 (または出力行セット) として表示されます。

IMSID

指定された名前をリソース・リストに含む IMS システムの IMS ID を戻すように指定します。SHOW(IMSID) は、コマンド・マスター IMS によってのみ処理され、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合にのみ有効です。

IMSID は、DEFN または DEFN と GLOBAL 以外の SHOW キーワードとともに指定することはできません。

SHOW(DEFN,IMSID) が指定されている場合、保管済みリソース定義に加えて、定義済みのリソースが存在する各 IMS に、別個の行が戻されます。

SHOW(IMSID) が DEFN キーワードなしで指定されている場合、リソース名とともに定義済みのリソースが存在する各 IMS に別個の行が戻されます。リソース定義は戻されません。

LOCAL

すべての IMS システムは、コマンド・マスターも含め、他の指定されている SHOW パラメーターに従ってローカル情報を表示します。これには、コマンドを処理する IMS にローカルな情報が含まれます。

LOCAL パラメーターは、コマンド・マスターを含むすべての IMS システムによって処理されます。

LOCAL は、共用キュー、シスプレックス端末管理、または IMSRSC リポジトリーが使用されているかどうかに関係なく、すべての環境に適用されます。

SHOW(DEFN,GLOBAL,LOCAL) は SHOW(DEFN) と等価です。

GLOBAL と LOCAL の両方を指定した場合 (これがデフォルトです)、コマンド・マスターはグローバル情報とローカル情報を別々に作成します。グローバル情報は 1 つの出力行 (または出力行セット) として表示され、ローカル情報は別の出力行 (または出力行セット) として表示されます。

MSGAGE

経過時間が、MSGAGE() フィルターによって指定された値より大きいメッセージのカウンタを表示します。MSGAGE() フィルターが指定されなかった場合、値は 0 であると見なされ、表示されるカウンタは LTERM の合計メッセージ・キュー・カウンタです。LTERM キューに入っている最も古いメッセージと最も新しいメッセージのタイム・スタンプも表示されます。

SHOW(QCNT) および SHOW(EMHQ) は、IMS が共用メッセージ・キューを読み取るか、または EMH キューを読み取るかを決定します。どちらも指定しなかった場合は SHOW(QCNT) が想定されます。

パフォーマンスへの影響として、メッセージ経過時間情報を入手するために、カップリング・ファシリティ上のすべての共用キュー LTERM メッセージを読み取る必要が生じます。

MSGAGE パラメーターは共用キュー環境でのみ有効であり、それ以外のすべての環境では無視されます。このパラメーターは、コマンド・マスターによってのみ処理されます。他のすべての IMS システムはこのパラメーターを無視します。

MSNAME

リモート LTERM に関連付けられている MSC 論理リンク・パス名 (msname) と、リモートおよびローカル・システム ID (SYSID) を表示します。これは、MSC リモート LTERM として定義されている LTERM へのみ適用されます。

NODE

LTERM に関連付けられているノードがあれば、それを表示します。VTAM 端末の場合、これは端末名です。非 VTAM 装置 (システム・コンソール、SPOOL、SYSOUT、および TCO) に関連付けられている LTERM の場合、

IMS は DFSLNxxx のノード名を表示します。ここで、xxx は回線番号と、非 VTAM 装置の回線および PTERM 番号です。

OWNER

リソース構造内の関連するユーザーまたはノード・リソースの所有者を表示します。これは、シスプレックス端末管理が使用可能な場合にのみ適用され、コマンド・マスターによってのみ処理されます。他のすべての IMS システムはこのパラメーターを無視します。

所有者は、関連するユーザーまたはノードを所有している IMS システムの IMSID (または XRF システムの RSENAME) です。IMS システムがユーザーまたはノード・リソースを所有するのは、そのリソースがアクティブである (ユーザーがサインオンしているかノードがログオンしている) 場合、または IMS システムがそのリソースの重要な状況を保守している場合です。

QCNT

LTERM メッセージ・キュー・カウントを表示します。

このコマンドで戻されるローカル・キュー・カウントの値は、このコマンドが実行された IMS システムによって処理されているメッセージを表します。共用キュー環境では、キューの評価のためにローカル・キュー・カウントを使用しないでください。このコマンドで戻されるグローバル・キュー・カウントは、共用キュー構造上の現行のメッセージ・キュー・カウントを表します。

SHOW キーワードで LOCAL パラメーターも指定されている場合、そのコマンドを処理するすべての IMS システムは、コマンド・マスターも含め、ローカル・キュー・カウントを表示します。これは、共用メッセージ・キューが使用可能であるかどうかに関わらず有効です。

SHOW キーワードで GLOBAL パラメーターも指定されていて、共用メッセージ・キューが使用可能な場合、コマンド・マスターは共用メッセージ・キュー (MSGQ) のグローバル・キュー・カウントを表示します。

ローカル・キュー・カウントとグローバル・キュー・カウントは、別々の出力フィールドとして表示されます。

STATUS

LTERM のローカルおよびグローバル状況を返します。返される可能性がある状況のリストと意味については、339 ページの『QUERY LTERM 状況』を参照してください。

TIMESTAMP

戻された作成時間 (TimeCreate)、最終更新時間 (TimeUpdate)、最終アクセス時間 (TimeAccess)、最終インポート時間 (TimeImport) のタイム・スタンプを表示します。このパラメーターは、MSC リモート LTERM にのみ適用できます。時間は現地時間で、YYYY.JJJ HH:MM:SS:TH の形式で戻されます。

YYYY

年

JJJ

ユリウス日 (001 から 365)

HH 時 (01 から 24)

MM 分 (00 から 59)

SS 秒 (00 から 59)

TH 10 分の 1 および 100 分の 1 秒 (00 から 99)

USER

LTERM に関連付けられている動的ユーザーまたは ISC ユーザーがいれば、それを表示します。

VERSION

LTERM リソースの RM バージョン番号を表示します。これは LTERM に割り当てられたバージョン番号で、そのリソースがリソース構造内で作成されるか更新されるとき、MVS によって割り当てられ、RM によって保守されます。VERSION は、シスプレックス端末管理が使用可能な場合にのみ適用されます。VERSION は、シスプレックス端末管理が使用可能でなければ無視されます。

STATUS()

指定された LTERM 状況の少なくとも 1 つを持つ LTERM を表示用に選択します。シスプレックス端末管理 (STM) が使用可能な場合、状況はローカルに存在するかグローバルに存在します。

STATUS フィルターは、シスプレックス端末管理環境と非シスプレックス端末管理環境の両方で有効です。

シスプレックス端末管理環境では、選択された状況はローカルに存在するか、グローバルに存在するか、またはその両方に存在します。シスプレックス端末管理が使用可能でない場合、状況はローカルにのみ存在します。

SHOW(LOCAL) が指定された場合、IMS はローカル・システム内で該当する状況にある LTERM だけを選択します。コマンドは、コマンド・マスターを含むすべての IMS システムによって処理されます。

SHOW(GLOBAL) が指定され、シスプレックス端末管理が使用可能な場合、IMS はリソース構造内で該当する状況にある LTERM だけを選択します。コマンドは、コマンド・マスターによってのみ処理されます。

SHOW(GLOBAL) が指定され、シスプレックス端末管理が使用可能でない場合、コマンドはリジェクトされます。

SHOW(GLOBAL,LOCAL) が指定された場合 (これはデフォルトです)、IMS はローカルで、またはリソース構造内で、該当する状況にある LTERM を選択します (シスプレックス端末管理が使用可能な場合)。コマンドは、すべての IMS システムによって処理されます。コマンド・マスターは、グローバルとローカルの両方の情報を処理します。

状況フィルターを指定した場合に返される出力には、SHOW(STATUS) が指定されていない場合でも、LTERM の状況が含まれます。

STATUS() を MSGAGE() フィルターまたは QCNT() フィルターと一緒に指定した場合、IMS は指定されたフィルターのいずれかに一致する LTERM を選択します (指定されたフィルターのすべてに一致する必要はありません)。

対応する状況のノードを選択するために使用できるフィルターを判別するには、339 ページの『QUERY LTERM 状況』を参照してください。

使用上の注意

QUERY LTERM コマンドは、OM API を介してのみ指定できます。

QUERY LTERM は XRF 代替システム上で発行できますが、SHOW(GLOBAL) はサポートされません。ローカル情報だけを表示できます。

QUERY LTERM コマンドの処理は、IMS シスプレックス端末管理が使用可能であるかどうかによって異なります。

- IMS シスプレックス端末管理が使用不可に設定されている場合、各システムに対して、処理はローカル側で行われます。type-1 コマンドと type-2 コマンドの結果は同様になります。
- IMS シスプレックス端末管理が使用可能に設定されている場合、type-1 コマンドと type-2 コマンドによる処理は、ローカル情報を表示する際に同様になります。ただし、グローバル情報の表示方法については異なります。
- IMS シスプレックス端末管理を使用可能に設定して、type-1 /DISPLAY コマンドを実行すると、コマンド・マスターによって、リソース構造またはローカル・システムのいずれかから情報が表示されますが、両方から情報が表示されることはありません。表示されているリソースがシステムによって所有されていない場合、またはコマンド・マスターによって所有されている場合、コマンド・マスターによってグローバル・リソースが表示されます。しかし、リソースがコマンド・マスター以外のシステムによって所有されている場合、コマンド・マスターによってローカル・リソースのみが表示され、リソースを所有するそのシステムによってグローバル・リソースが表示されます。
- IMS シスプレックス端末管理を使用可能に設定して、type-2 QUERY コマンドを実行すると、リソースが所有されているかどうかに関係なく、グローバル・リソース情報を表示するシステムはコマンド・マスターのみになります。さらに、コマンド・マスターによってローカル・リソース情報も表示されます。コマンドを処理するその他のすべての IMS システムは、ローカル・リソース情報のみを表示します。この手法により、IMSpIex 上のすべての情報をより柔軟性を持って表示することができます。

SHOW キーワードは、コマンドを処理する IMS システムと、表示する情報を決定します。

- SHOW(GLOBAL) が指定された場合、コマンド・マスターはグローバル情報を表示し、これには、共用キューが使用可能である場合はグローバル・キュー・カウントが含まれ、シスプレックス端末管理が使用可能である (DFSDCxxx PROCLIB メンバー内で STM=YES が定義されている) 場合はリソース構造からの状況が含まれる可能性があります。これは、その LTERM が特定の IMS システム上でアクティブであるかどうかに関係なく当てはまります。それ以外のすべての IMS システムは、GLOBAL パラメーターを戻りコード X'00000004' および理由コード X'00001000' で無視します。
- SHOW(LOCAL) が指定された場合、OM がコマンドの経路指定先にする各 IMS システムは (コマンド・マスターも含め)、コマンドを処理し、各システムにローカルな情報を表示します。
- GLOBAL と LOCAL の両方が指定された場合 (これがデフォルトです)、グローバルとローカルの両方の情報が表示されます。OM がコマンドの経路指定先にする

る各 IMS システムは、コマンド・マスターも含め、コマンドを処理し、ローカル情報を表示します。コマンド・マスターは、ローカル情報のほかに、グローバル情報も表示します。

リソース定義に関する情報を表示するには、SHOW(DEFN) を指定します。リソースが定義されている IMS システムと、各 IMS システムの属性またはリソース定義を両方とも表示するには、SHOW(DEFN,IMSID) を指定します。リソースが定義されている IMS システムを表示するには、SHOW(IMSID) を指定します。

同等の IMS タイプ 1 コマンド

以下の表は、各種の QUERY LTERM コマンドと、類似の機能を実行するタイプ 1 IMS コマンドを示しています。

表 103. QUERY LTERM コマンドと同等のタイプ 1 コマンド

QUERY LTERM コマンド	類似の IMS タイプ 1 コマンド
QUERY LTERM SHOW(COMPONENT)	/DISPLAY ASMT LTERM Itermname
QUERY LTERM SHOW(EMHQ)	/DISPLAY LTERM Itermname QCNT EMHQ
QUERY LTERM SHOW(MSNAME)	/DISPLAY LTERM Itermname
QUERY LTERM SHOW(NODE)	/DISPLAY ASMT LTERM Itermname
QUERY LTERM SHOW(QCNT)	/DISPLAY LTERM Itermname /DISPLAY LTERM Itermname QCNT
QUERY LTERM SHOW(STATUS)	/DISPLAY LTERM Itermname /DISPLAY STATUS LTERM
QUERY LTERM SHOW(USER)	/DISPLAY ASMT LTERM Itermname
QUERY LTERM STATUS(MTO,SMTO)	/DISPLAY MASTER /RDISPLAY MASTER
QUERY LTERM MSGAGE(x)	/DISPLAY QCNT LTERM MSGAGE x
QUERY LTERM STATUS(status)	/DISPLAY STATUS LTERM

出力フィールド

以下の表は、QUERY LTERM の出力フィールドを示しています。表の各列は、以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

フォーマット設定済み出力の出力フィールド用列見出しが含まれます。

SHOW パラメーター

フィールドを生成させる SHOW キーワードのパラメーターを識別します。ゼロ以外の完了コードの場合に返される出力フィールドには、*Error* が表示されます。N/A (適用外) は、常に返される出力フィールドの場合に表示されています。

有効範囲

出力フィールドの有効範囲を識別します。GBL は、SHOW(GLOBAL) のグ

ローカル情報を表示するとき、コマンド・マスターだけがフィールドを生成できることを示します。LCL は、SHOW(LOCAL) のローカル情報を表示するすべての IMS がフィールドを生成できることを示します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 104. QUERY LTERM コマンドの出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	SHOW パラメータ	有効範囲	意味
CC	CC	N/A	N/A	完了コード。完了コードは、IMS が、指定されたりソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示します。詳しくは、340 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』を参照してください。完了コードは常に戻されます。
CCTXT	CCText	Error	N/A	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
DFNT	LDefnType	DEFNTYPE	LCL	定義タイプ。次のうちのいずれか 1 つが可能です。 CREATE CREATE LTERM コマンドにより定義されます。 DFSDSCMx IMS PROCLIB データ・セットの DFSDSCMx メンバー内の MSC 記述子によって定義されます。 DFSDSCTx IMS PROCLIB データ・セットの DFSDSCTx メンバー内の MSC 記述子によって定義されます。 DFSINSX0 ユーザー出口 DFSINSX0 によって定義され、共有キュー・グループに含まれるリモート側の IMS システム内で定義される LTERM を表します。 MSCGEN IMS RESLIB の DFSLRxy メンバー内のシステム定義により定義されます。 このフィールドは、MSC リモート LTERM にのみ適用できます。
EAGE	EmhqAged	MSGAGE	GBL	メッセージ経過時間が、MSGAGE() フィルターによって指定されたメッセージ経過時間以上である EMHQ メッセージのカウント。フィルターを指定しなかった場合、このカウントはキューに入れられたメッセージの合計数です。
EMHQ	EMHQCnt	EMHQ	GBL	EMH (急送メッセージ・ハンドラー) キュー内のグローバル LTERM キュー・カウント。EMHQ は、共有 EMH が使用されている場合にだけ表示されます。
ETNEW	EmhqTStmpNew	MSGAGE	GBL	共有キュー上にある、LTERM の最も新しい EMHQ メッセージのタイム・スタンプ。
ETOLD	EmhqTStmpOld	MSGAGE	GBL	共有キュー上にある、LTERM の最も古い EMHQ メッセージのタイム・スタンプ。
EXPN	ExportNeeded	EXPORTNEEDED	LCL	MSC リモート論理端末が IMSRSC リポジトリにエクスポートされたかどうかを示します。値は Y または N のどちらかです。
GBL	Gbl	GLOBAL	GBL	「Y」の場合は、共有キューまたは RM 内でグローバルに検出された状況が出力に反映されます。ブランクの場合は、ローカルで検出された状況が出力に反映されます。
ICMP	InCmp	COMPONENT	GBL	リソース構造内で LTERM の割り当て先になっている入力コンポーネント。
IMSID	IMSid	IMSID	GBL	定義されたリソースを持つ IMSID をリポジトリから返します。

表 104. QUERY LTERM コマンドの出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	SHOW パラメータ	有効範囲	意味
LICMP	LInCmp	COMPONENT	LCL	ローカル・システム内で LTERM の割り当て先になっている入力コンポーネント。
LLINE	LLine	NODE	LCL	システム・コンソール、SPOOL、SYSOUT、または TCO 装置の回線番号を識別します。
LMSN	LMSName	MSNAME	LCL	LTERM が MSC リモート LTERM である場合の、関連する論理リンク・パス名。
LNODE	LNode	NODE	LCL	ローカル・システム上の LTERM に関連付けられている動的ノードまたは静的ノードを識別します。
LOCMP	LOutCmp	COMPONENT	LCL	ローカル・システム内で LTERM の割り当て先になっている出力コンポーネント。
LPTERM	LPTerm	NODE	LCL	システム・コンソール、SPOOL、SYSOUT、または TCO 装置の PTERM 番号を識別します。
LQ	LQCnt	QCNT	LCL	ローカル・キュー・カウント。
LSIDL	LSIDL	MSNAME	LCL	LTERM が MSC リモート LTERM である場合の、関連する論理リンク・パス名のローカル・システム ID。
LSIDR	LSIDR	MSNAME	LCL	LTERM が MSC リモート LTERM である場合の、関連する論理リンク・パス名のリモート・システム ID。
LSIT	LclStat	STATUS	LCL	ローカル論理端末状況。返される可能性がある論理端末状況については、339 ページの『QUERY LTERM 状況』を参照してください。
LTERM	Lterm	N/A	N/A	論理端末名。論理端末名は常に返されます。
LUSER	LUser	USER	LCL	ローカル・システム上の LTERM に関連付けられている動的ユーザーまたは ISC ユーザーを識別します。
LVER	LVersion#	VERSION	LCL	ローカル・システム内で保守されている LTERM リソースのバージョン番号。このフィールドは STM が有効な場合のみ適用されます。
MBR	MbrName	N/A	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。IMS ID は常に戻されます。
NODE	Node	NODE	GBL	リソース構造内で LTERM に関連付けられている動的ノードまたは静的ノードを識別します。
OCMP	OutCmp	COMPONENT	GBL	リソース構造内で LTERM の割り当て先になっている出力コンポーネント。
OWNER	Owner	OWNER	GBL	関連するノードまたはユーザー・リソースを「所有」している IMS システムの IMSID (または XRF システムの RSENAME)。このフィールドはコマンド・マスターだけが返し、シスプレックス端末管理が使用可能な場合にのみ適用されます。
QAGE	QCntAged	MSGAGE	GBL	メッセージ経過時間が、MSGAGE() フィルターによって指定されたメッセージ経過時間以上である MSGQ メッセージのカウント。フィルターを指定しなかった場合、このカウントはキューに入れられたメッセージの合計数です。
QCNT	QCnt	QCNT	GBL	共用キュー上のグローバル・キュー・カウント。グローバル・キュー・カウントは、共用キューが使用されている場合にのみ表示できます。
QTNEW	TStmpNew	MSGAGE	GBL	共用キュー上にある、LTERM の最も新しい MSGQ メッセージのタイム・スタンプ。
QTOLD	TStmpOld	MSGAGE	GBL	共用キュー上にある、LTERM の最も古い MSGQ メッセージのタイム・スタンプ。
REPO	Repo	DEFN	GBL	その行に保管済みリソース定義が表示されているかどうかを示します。 Y リポジトリ定義を示します。 (ブランク) ローカル定義を示します。
RMSN	MSName	DEFN, MSNAME	GBL	LTERM が MSC リモート LTERM である場合の、関連する論理リンク・パス名。出力は、リポジトリから戻されます。

表 104. QUERY LTERM コマンドの出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	SHOW パラメータ	有効範囲	意味
RTMCR	TimeCreate	DEFN	GBL	リポジトリでの作成時刻。これは、リポジトリ内で最初にリソースが作成された時刻です。
RTMUP	TimeUpdate	DEFN	GBL	リポジトリでの更新時刻。これは、リポジトリ内で最後にリソースが更新された時刻です。
STT	Status	STATUS	GBL	リソース構造からのグローバル論理端末状況。返される可能性がある論理端末状況については、『QUERY LTERM 状況』を参照してください。
TMAC	LTimeAccess	TIMESTAMP	LCL	リソースが最後にアクセスされた時刻。これはまだサポートされていません。
TMCR	LTimeCreate	TIMESTAMP	LCL	CREATE LTERM コマンド、MSC リモート LTERM を作成する IMPORT コマンド、または IMS の初期化によってリソースが作成された時刻。作成時刻は、IMS ウォーム・スタート、緊急時再始動、エクスポート、およびインポートにまたがって保持されます。出力は、ローカル IMS から戻されます。このフィールドは、MSC リモート LTERM にのみ適用できます。
TMIM	LTimeImport	TIMESTAMP	LCL	リソースが最後にインポートされた時刻 (該当する場合)。リソースが IMS コールド・スタート時に IMSRSC リポジトリから自動的にインポートされた場合、ローカル・インポート・タイム・スタンプは IMS コールド・スタート時刻に設定されます。インポート時刻は、IMS ウォーム・スタートと緊急時再始動にまたがって保持されます。出力は、ローカル IMS から戻されます。このフィールドは、MSC リモート LTERM にのみ適用できます。
TMUP	LTimeUpdate	TIMESTAMP	LCL	実行時リソース定義の属性が更新された最終時刻。これはまだサポートされていません。
USER	User	USER	GBL	リソース構造内で LTERM に関連付けられている動的ユーザーまたは ISC ユーザーを識別します。
VER	Version#	VERSION	GBL	リソース構造内で保守されている LTERM リソースのバージョン番号。このフィールドは STM が有効な場合のみ適用されます。

QUERY LTERM 状況

以下の表は、表示される可能性がある LTERM の状況を示しています。表の各列は、以下のとおりです。

Status

表示される LTERM 状況。

STATUS パラメーター

指定した状況の LTERM を選択する STATUS() フィルター。

有効範囲

状況の有効範囲。GBL は、状況をグローバルとすることができ (STM が使用可能な場合、それはリソース構造内に存在します)、STT ショート・ラベルとともに返されることを示します。LCL は、状況をローカルとすることができ、LSTT ショート・ラベルとともに返されることを示します。

意味 状況の簡略説明を提供します。

表 105. QUERY LTERM 状況

Status	STATUS パ ラメーター		有効範囲	意味
LOCK	LOCK	LCL		論理端末は、/LOCK LTERM コマンドによってロックされました。
MTO	MTO	LCL		論理端末は、ローカル IMS のマスター端末です。
QERR	QERR	LCL		この論理端末のキューで入出力エラーが発生しました。
QLOCK	QLOCK	LCL		論理端末がロックされているため、セッションで特定の要求が受信されてこの状態がリセットされるまでは、その論理端末について、これ以上出力を送信できないか、追加の出力を作成する可能性がある入力を受信することができません。
REMOTE	REMOTE	LCL		論理端末は、この IMSplex に対してリモート側で定義されており、MSC を介してアクセスできます。
RM	RM	GBL		LTERM は、RM によって管理されるリソース構造内に存在します。
RMACTIVE	RMACTIVE	GBL		関連するユーザーまたはノードは、RM 構造内で示されているように (RM active)、IMSplex 内でアクティブです (サインオンしているかログオンしています)。
RMOWNED	RMOWNED	GBL		関連するユーザーまたはノードは、RM 構造内で示されているように (RM owned)、IMSplex 内で IMS システムによって所有されています。
SMTO	SMTO	LCL		論理端末は、ローカル IMS の 2 次マスター端末です。
STATIC	STATIC	LCL および GBL		論理端末は、システム定義時に定義されました。
STOQ	STOQ	LCL および GBL		その論理端末への入力は停止されています。
STOSEND	STOSEND	LCL および GBL		その論理端末への出力は停止されています。

戻りコード、理由コード、および完了コード

IMS 戻りコードと理由コードは、QUERY LTERM コマンドによって OM に戻されます。QUERY LTERM コマンドの結果として返される可能性のある OM 戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 106. QUERY LTERM コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	コマンドは正常に完了しました。
X'00000004'	X'00001010'	以下のいずれかの理由により、戻すリソースが検出されませんでした。 <ul style="list-style-type: none"> 指定されたリソース名が無効である可能性があります。 指定したフィルターと一致するリソースがありませんでした。 SHOW(EXPORTNEEDED) が指定されていた場合は、IMSRSC リポジトリーにエクスポートする必要があるリソースがありませんでした。
X'00000004'	X'00001000'	IMS システムがコマンド・マスターでないため、その IMS システム上でコマンドが処理されませんでした。リソース情報は戻されません。
X'00000008'	X'00002014'	リソース名に無効文字が指定されました。
X'00000008'	X'00002040'	無効なパラメーター値が指定されました。無効な SHOW 値または STATUS 値が指定された可能性があります。値 0 が、LE、GE、または EQ を伴う QCNT に指定された可能性があります。あるいは、値 1 が、LT を伴う QCNT に指定された可能性があります。
X'0000000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、343 ページの表 107 を参照してください。
X'0000000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、343 ページの表 107 を参照してください。
X'00000010'	X'00004004'	コマンド処理は、CQS がアクティブでなかったために終了しました。
X'00000010'	X'00004005'	コマンド処理は、CQS がキュー構造に接続されなかったために終了しました。
X'00000010'	X'0000400C'	XRF 代替システムではコマンドは無効です。
X'00000010'	X'00004018'	コマンド処理は、リソース構造が使用可能でないために終了しました。
X'00000010'	X'0000401C'	FDBR 領域ではコマンドは無効です。
X'00000010'	X'0000402D'	MSC リソースの動的リソース定義が使用可能でない (DFSDFxxx が MSCRSCS=DYN を指定して定義されていない) ために、コマンドは使用できません。
X'00000010'	X'00004104'	コマンド処理は、RM が使用可能でないために終了しました。
X'00000010'	X'00004108'	コマンド処理は、SCI が使用可能でないために終了しました。
X'00000010'	X'00004500'	IMS はリポジトリーを使用できません。

表 106. QUERY LTERM コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000010'	X'00004501'	RM はリポジトリには使用できません。
X'00000010'	X'00004502'	リポジトリは使用可能ではありません。
X'00000010'	X'00004503'	リポジトリが停止されています。
X'00000010'	X'00004504'	リポジトリ・スペアのリカバリーが処理中です。
X'00000010'	X'00004505'	IMS リソース・リストが存在しないか、IMS リソース・リスト内に該当するリソース・タイプのリソースが存在しません。
X'00000010'	X'00004507'	リポジトリ・アクセスは拒否されます。
X'00000010'	X'00004508'	リポジトリの最大入力長を超過しました。
X'00000010'	X'00004509'	RM データのバージョンは IMS データのバージョンよりも低いバージョンです。
X'00000010'	X'0000450A'	リポジトリ・サーバー (RS) をシャットダウンしています。
X'00000010'	X'0000450B'	RS が使用できません。
X'00000010'	X'0000450C'	RS が使用中です。
X'00000010'	X'0000450D'	RM は、IMSRSC リポジトリに関連した一部の内部フィールドの定義に失敗しました。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できませんでした。
X'00000014'	X'00005008'	DFSPOOL ストレージを取得できませんでした。
X'00000014'	X'00005100'	RM エラーが発生しました。
X'00000014'	X'00005104'	CQS エラーが発生しました。
X'00000014'	X'00005108'	SCI エラーが発生しました。
X'00000014'	X'00005110'	リポジトリ・エラーが発生しました。
X'00000014'	X'0000551C'	破損したリソース・リストが検出されたため、リポジトリ内のデータを表示する要求は拒否されました。リソース・リストが使用できないため、QUERY LTERM コマンドは拒否されました。IBM ソフトウェア・サポートにお問い合わせください。エラーになったコマンドの出力と、コマンドが実行されたローカル RM アドレス・スペースのダンプまたは IMSplex 内のすべての RM アドレス・スペースのダンプを送信してください。また、IMSRSC リポジトリ RID データ・セットと RMD データ・セットのコピーも送信してください。
X'00000014'	X'00005FFF'	コマンド処理は、IMS の内部エラーのために終了しました。

以下の表には、完了コードの説明が記載されています。このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 107. QUERY LTERM コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		リソースに対する QUERY LTERM コマンドは正常に完了しました。
1	COMMAND NOT APPLICABLE TO THIS IMS	QUERY LTERM SHOW (EXPORTNEEDED) がローカル LTERM に対して指定されましたが、これは適用できません。 SHOW(EXPORTNEEDED) はリモート LTERM のみに適用できます。このコマンドは、この LTERM がリモートとして定義されている IMS 上で使用できます。
10	NO RESOURCES FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。これがワイルドカードを使用した要求である場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。
98	CQS REQUEST ERROR	CQS エラーのために、グローバル・キュー・カウントを取得できませんでした。
1A0	Lterm resource is in error	LTERM リソースがリソース構造内で検出されました。関連するリソースが必要でしたが、そのリソースが検出されなかったかエラーを起こしているようです。これは、通常はエラー状態ですが、端末またはコマンドのアクティビティによる一時的な状態の可能性もあります。コマンドを再試行してください。

例

以下に、QUERY LTERM コマンドの例を示します。

QUERY LTERM コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QUERY LTERM NAME(LTERM20B,LTERM24M,LTERM23C,HOG0C,LTERM01) SHOW(DEFN)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

```
Lterm   MbrName   CC Repo MSName   LMSName  LSIDR  LSIDL
HOG0C   IMS1       0 Y    LINK32T1
HOG0C   IMS1       0      LINK32T1  86    117
LTERM01 IMS1       0 Y    MSNV001
```

LTERM01	IMS1	0		MSNV001	56	706
LTERM20B	IMS1	0 Y	LINK32B1			
LTERM20B	IMS1	0		LINK32B1	21	31
LTERM23C	IMS1	0 Y	LINK32C1			
LTERM23C	IMS1	0		LINK32C1	23	33
LTERM24M	IMS1	0 Y	LINK32M1			
LTERM24M	IMS1	0		LINK32M1	24	34

(screen 2)

Lterm	MbrName	Repo	SIDL	TimeCreate	LTimeCreate	TimeUpdate
HOG0C	IMS1	Y		2015.310 14:57:33.98		
HOG0C	IMS1		117		2015.310 14:57:33.98	
LTERM01	IMS1	Y		2015.310 14:58:42.79		
LTERM01	IMS1		706		2015.310 14:58:42.79	
LTERM20B	IMS1	Y		2015.310 14:57:33.98		
LTERM20B	IMS1		31		2015.310 14:57:33.98	
LTERM23C	IMS1	Y		2015.310 14:57:33.98		
LTERM23C	IMS1		33		2015.310 14:57:33.98	
LTERM24M	IMS1	Y		2015.310 14:57:33.98		
LTERM24M	IMS1		34		2015.310 14:57:33.98	

(screen 3)

Lterm	MbrName	Repo	LTimeUpdate	LTimeAccess
HOG0C	IMS1	Y		
HOG0C	IMS1			
LTERM01	IMS1	Y		
LTERM01	IMS1			
LTERM20B	IMS1	Y		
LTERM20B	IMS1			
LTERM23C	IMS1	Y		
LTERM23C	IMS1			
LTERM24M	IMS1	Y		
LTERM24M	IMS1			

OM API 入力:

CMD(QRY LTERM NAME(LTERM20B,LTERM24M,LTERM23C,HOG0C,LTERM01) SHOW(DEFN)

OM API 出力:

```
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="LTERM" l1bl="Lterm" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="REPO" l1bl="Repo" scope="LCL" sort="d" key="2" scroll="no"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="IMSID" l1bl="IMSid" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LNODE" l1bl="LNode" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LLINE" l1bl="LLine" scope="LCL" sort="d" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LPTERM" l1bl="LPterm" scope="LCL" sort="d" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LICMP" l1bl="LInCmp" scope="LCL" sort="d" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LOCMP" l1bl="LOutCmp" scope="LCL" sort="d" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LUSER" l1bl="LUser" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RMSN" l1bl="MSName" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
```

```

<hdr s1bl="LMSN" l1bl="LMSName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LSIDR" l1bl="LSIDR" scope="LCL" sort="d" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LSIDL" l1bl="LSIDL" scope="LCL" sort="d" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RTMCR" l1bl="TimeCreate"scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="TMCR" l1bl="LTimeCreate"scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="TMIM" l1bl="LTimeImport"scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RTMUP" l1bl="TimeUpdate"scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="TMUP" l1bl="LTimeUpdate"scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="TMAC" l1bl="LTimeAccess"scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="EXPN" l1bl="ExportNeeded" scope="LCL" sort="y" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>LTERM(LTERM20B) MBR(IMS1) CC( 0) LQ(0) LMSN(LINK32B1) LSIDR(21)
  LSIDL(31) LVER(0) LSTT(REMOTE) DFNT(MSCGEN ) TMCR(2015.310
  14:57:33.98) </rsp>
<rsp>LTERM(LTERM24M) MBR(IMS1) CC( 0) LQ(0) LMSN(LINK32M1) LSIDR(24)
  LSIDL(34) LVER(0) LSTT(REMOTE) DFNT(MSCGEN ) TMCR(2015.310
  14:57:33.98) </rsp>
<rsp>LTERM(LTERM23C) MBR(IMS1) CC( 0) LQ(0) LMSN(LINK32C1) LSIDR(23)
  LSIDL(33) LVER(0) LSTT(REMOTE) DFNT(MSCGEN ) TMCR(2015.310
  14:57:33.98) </rsp>
<rsp>LTERM(HOG0C ) MBR(IMS1) CC( 0) LQ(0) LMSN(LINK32T1) LSIDR(86)
  LSIDL(117) LVER(0) LSTT(REMOTE) DFNT(MSCGEN ) TMCR(2015.310
  14:57:33.98) </rsp>
<rsp>LTERM(LTERM01 ) MBR(IMS1) CC( 0) LQ(0) LMSN(MSNV001 ) LSIDR(56)
  LSIDL(706) LVER(0) LSTT(REMOTE) DFNT(CREATE ) TMCR(2015.310
  14:58:42.79) </rsp>
<rsp>LTERM(LTERM20B) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(
  RMSN(LINK32B1) RTMCR(2015.310 14:57:33.98) </rsp>
<rsp>LTERM(LTERM24M) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(
  RMSN(LINK32M1) RTMCR(2015.310 14:57:33.98) </rsp>
<rsp>LTERM(LTERM23C) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(
  RMSN(LINK32C1) RTMCR(2015.310 14:57:33.98) </rsp>
<rsp>LTERM(HOG0C ) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(
  RMSN(LINK32T1) RTMCR(2015.310 14:57:33.98) </rsp>
<rsp>LTERM(LTERM01 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(
  RMSN(MSNV001 ) RTMCR(2015.310 14:58:42.79) </rsp>
</cmdrspdata>

```

説明: この QUERY コマンドは、複数のリモート LTERM をただ 1 つの属性 MSNAME とともに表示します。

QUERY LTERM コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
QRY LTERM NAME(LTERM0*)
```

TSO SPOC 出力:

Lterm	MbrName	CC	Gbl
LTERM01	IMS1	0	
LTERM02	IMS1	0	Y
LTERM02	IMS1	0	
LTERM02	IMS2	0	
LTERM03	IMS2	0	

```
LTERM04 IMS1 0 Y
LTERM04 IMS1 0
LTERM04 IMS2 0
LTERM05 IMS1 0 Y
LTERM05 IMS1 0
```

説明: IMSplex には 2 つの IMS システムがあります。IMS1 と IMS2 です。RM は状況を維持しています (STM=YES)。キュー・カウントを要求しないので、共用キューは無関係です。IMS1 はコマンド・マスターであり、グローバル情報およびローカル情報を表示します。IMS2 はローカル情報のみを表示します。

- LTERM01 は IMS1 上にのみ存在します。
- LTERM02 は IMS1 上と IMS2 上、およびリソース構造内に存在します。
- LTERM03 は IMS2 上にのみ存在します。
- LTERM04 は IMS1 上と IMS2 上、およびリソース構造内に存在します。
- LTERM05 は IMS1 上およびリソース構造内に存在します。

QUERY LTERM コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
QRY LTERM NAME(LTERM0*) SHOW(GLOBAL,STATUS,QCNT,OWNER)
```

TSO SPOC 出力:

Lterm	MbrName	CC	Gbl	QCnt	Owner	Status
LTERM02	IMS1	0	Y	0	IMS2	STATIC,RM,RMACTIVE,RMOWNED
LTERM03	IMS1	0	Y	1		
LTERM04	IMS1	0	Y	3	IMS2	STATIC,RM,RMOWNED
LTERM05	IMS1	0	Y	0		STOQ,STOSEND,RM
LTERM06	IMS1	0	Y	2		

説明: IMSplex には 2 つの IMS システムがあります。IMS1 と IMS2 です。RM は状況を維持しています (STM=YES)。共用キューは使用可能です。IMS1 はコマンド・マスターであり、グローバル情報を表示します。IMS2 は、SHOW(GLOBAL) が指定されているため、コマンド (RC=4, RSN=x1000) を無視します。

- LTERM02 はリソース構造内に存在し、現在 IMS2 上でアクティブであり、共用キュー内にメッセージを持っていません。
- LTERM03 はリソース構造内に存在しませんが、共用キュー内に 1 つのメッセージを持っています。
- LTERM04 はリソース構造内に存在し、現在アクティブではありませんが、IMS2 に所有されています。これは IMS2 上に状況が存在することを示しており、共用キュー内に 3 つのメッセージを持っています。
- LTERM05 はリソース構造内に存在し、停止しており、現在アクティブでもなく所有もされておらず、共用キュー内にメッセージを持っていません。
- LTERM06 はリソース構造内に存在しませんが、共用キュー内に 2 つのメッセージを持っています。

QUERY LTERM コマンドの例 4

TSO SPOC 入力:

```
QRY LTERM NAME(LTERM01,LTERM02,LTERM04) SHOW(QCNT,EMHQ)
```

TSO SPOC 出力:

Lterm	MbrName	CC	CCText	Gbl	QCnt	EMHQCnt	LQCnt
LTERM01	IMS1	0		Y	0	0	
LTERM01	IMS1	0					0
LTERM01	IMS2	10	NO RESOURCES FOUND				
LTERM02	IMS1	0		Y	0	1	
LTERM02	IMS1	0					0
LTERM02	IMS2	0					0
LTERM04	IMS1	0		Y	3	0	
LTERM04	IMS1	0					0
LTERM04	IMS2	0					0

説明: IMSplex には 2 つの IMS システムがあります。IMS1 と IMS2 です。RM は状況を維持しています (STM=YES)。共用キューは使用可能です。IMS1 はコマンド・マスターであり、グローバル情報およびローカル情報を表示します。IMS2 はローカル情報のみを表示します。

- LTERM01 は IMS1 上にのみ存在し、共用キュー内にメッセージを持っていません。
- LTERM02 は IMS1 上と IMS2 上に存在し、共用 EMH 内に 1 つのメッセージを持っています。
- LTERM04 は IMS1 上と IMS2 上に存在し、共用キュー内に 3 つのメッセージを持っています。

QUERY LTERM コマンドの例 5

TSO SPOC 入力:

```
QRY LTERM MSGAGE(7) QCNT(GE,3)
```

TSO SPOC 出力:

Lterm	MbrName	CC	Gbl	QCnt	QCntAged	TStmpOld	TStmpNew
LTERM04	IMS1	0	Y	3	0	07128/140758	07128/141005
LTERM06	IMS1	0	Y	2	2	07120/110113	07120/110240

説明: IMSplex には 2 つの IMS システムがあります。IMS1 と IMS2 です。キュー・カウント以外のグローバル状況を要求しないので、RM は無関係です。共用キューは使用可能です。IMS1 はコマンド・マスターであり、グローバル情報を表示します。IMS2 は、コマンド (RC=4, RSN=x1000) を無視します。共用キュー環境内の QCNT() は、コマンド・マスターによってのみ処理されるからです。

- LTERM04 には、キューに入っている 3 つのメッセージがあり、これは QCNT フィルターを満足し、すべてのメッセージの経過時間が 7 日未満です。
- LTERM06 には、キューに入っていて経過時間が 7 日を超える 2 つのメッセージがあり、これは MSGAGE フィルターを満足します。

QUERY LTERM コマンドの例 6

TSO SPOC 入力:

```
QRY LTERM NAME(*) QCNT(GE,2)
```

TSO SPOC 出力:

Lterm	MbrName	CC	Gbl	QCnt
LTERM04	IMS1	0	Y	3
LTERM06	IMS1	0	Y	2

説明: IMSplex には 2 つの IMS システムがあります。IMS1 と IMS2 です。キュー情報だけを要求するので、STM は無関係です。共用キューは使用可能です。

IMS1 はコマンド・マスターであり、グローバル情報を表示します。IMS2 は、コマンド (RC=4, RSN=x1000) を無視します。共用キュー環境内の QCNT() は、コマンド・マスターによってのみ処理されるからです。QCnt 出力は、SHOW(QCNT) が指定されなかった場合でも表示されます。

- LTERM04 は、共用キュー内に 3 つのメッセージを持っています。
- LTERM06 は、共用キュー内に 2 つのメッセージを持っています。

QUERY LTERM コマンドの例 7

TSO SPOC 入力:

```
QRY LTERM NAME(LTERM04,LTERM05,LTERM11) SHOW(LOCAL,ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

Lterm	MbrName	CC	CCText	LQCnt	LNode	LInCmp	LOutCmp
LTERM04	IMS1	0		0	NODE04	1	1
LTERM04	IMS2	0		0	NODE04	1	1
LTERM05	IMS1	0		0		1	1
LTERM05	IMS2	10	NO RESOURCES FOUND				
LTERM11	IMS1	10	NO RESOURCES FOUND				
LTERM11	IMS2	0		0			

(右にスクロールして、画面 2 へ)

Lterm	MbrName	LUser	LMSName	LSIDR	LSIDL	LVersion#	LclStat
LTERM04	IMS1						0 STATIC
LTERM04	IMS2						7 STATIC
LTERM05	IMS1	USER05					2 STOQ,STOSEND
LTERM05	IMS2						
LTERM11	IMS1						
LTERM11	IMS2		LINK2111	21	11		0 STATIC,REMOTE

(右にスクロールして、画面 3 へ)

Lterm	MbrName	LTimeCreate
LTERM04	IMS1	2014.283 15:29:52:12
LTERM04	IMS2	2014.283 11:08:14:31
LTERM05	IMS1	2014.283 15:29:52:12
LTERM05	IMS2	2014.283 11:08:14:31
LTERM11	IMS1	2014.283 15:29:52:12
LTERM11	IMS2	2014.283 11:08:14:31

(右にスクロールして、画面 4 へ)

Lterm	MbrName	LTimeUpdate	LTimeAccess	LDefnType
LTERM04	IMS1			MSCGEN
LTERM04	IMS2			MSCGEN
LTERM05	IMS1			MSCGEN
LTERM05	IMS2			MSCGEN
LTERM11	IMS1			MSCGEN
LTERM11	IMS2			MSCGEN

説明: IMSplex には 2 つの IMS システムがあります。IMS1 と IMS2 です。STM は使用可能です。グローバル・キュー・カウントを要求しないので、共用キューは無関係です。IMS1 はコマンド・マスターですが、LOCAL のみが指定されているため、ローカル情報のみを表示します。IMS2 はローカル情報のみを表示します。

- LTERM04 は IMS1 および IMS2 上に存在します。LTERM は、すべてのシステム上で NODE04 に静的に割り振られています。
- LTERM05 は IMS1 上にのみ存在します。LTERM は動的であり、USER05 に割り振られており、停止しています。ユーザーがサインオンしていないため、ノードは存在しません。

- LTERM11 は IMS2 上にもみ存在します。これは、リモート LTERM として定義されています。関連する論理リンク名は LINK2111 であり、リモートおよびローカル SID は 21 および 11 です。

QUERY LTERM コマンドの例 8

TSO SPOC 入力:

```
QRY LTERM NAME(LTERM04,LTERM05,LTERM11) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

Lterm	MbrName	CC	CCText	Gbl	QCnt	EMHQCnt	Owner	Node
LTERM04	IMS1	0		Y	0	0	IMS2	NODE04
LTERM04	IMS1	0						
LTERM04	IMS2	0						
LTERM05	IMS1	0		Y	0	0		
LTERM05	IMS1	0						
LTERM05	IMS2	10	NO RESOURCES FOUND					
LTERM11	IMS1	10	NO RESOURCES FOUND	Y				
LTERM11	IMS1	10	NO RESOURCES FOUND					
LTERM11	IMS2	0						

(右にスクロールして、画面 2 へ)

Lterm	MbrName	Gbl	InCmp	OutCmp	User	Version#	QcntAged
LTERM04	IMS1	Y	1	1		7	3
LTERM04	IMS1						
LTERM04	IMS2						
LTERM05	IMS1	Y	1	1	USER05	2	0
LTERM05	IMS1						
LTERM05	IMS2						
LTERM11	IMS1	Y					
LTERM11	IMS1						
LTERM11	IMS2						

(右にスクロールして、画面 3 へ)

Lterm	MbrName	Gbl	TStmpOld	TStmpNew	EmhqAged
LTERM04	IMS1	Y	07128/140758	07128/141005	0
LTERM04	IMS1				
LTERM04	IMS2				
LTERM05	IMS1	Y			0
LTERM05	IMS1				
LTERM05	IMS2				
LTERM11	IMS1	Y			
LTERM11	IMS1				
LTERM11	IMS2				

(右にスクロールして、画面 4 へ)

Lterm	MbrName	Gbl	EmhqTStmpOld	EmhqTStmpNew	Status
LTERM04	IMS1	Y			STATIC,RM,RMOWNED
LTERM04	IMS1				
LTERM04	IMS2				
LTERM05	IMS1	Y			STOQ,STOSEND,RM
LTERM05	IMS1				
LTERM05	IMS2				
LTERM11	IMS1	Y			
LTERM11	IMS1				
LTERM11	IMS2				

(右にスクロールして、画面 5 へ)

Lterm	MbrName	Gbl	LQCnt	LNode	LInCmp	LOutCmp	LUser	LMSName
LTERM04	IMS1	Y						
LTERM04	IMS1		0	NODE04	1	1		
LTERM04	IMS2		0	NODE04	1	1		
LTERM05	IMS1	Y						

```

LTERM05 IMS1          0          1          1 USER05
LTERM05 IMS2
LTERM11 IMS1    Y
LTERM11 IMS1
LTERM11 IMS2          0          LINK2111

```

(右にスクロールして、画面 6 へ)

```

Lterm  MbrName Gbl  LSIDR LSIDL LVersion# LclStat
LTERM04 IMS1    Y
LTERM04 IMS1          0 STATIC
LTERM04 IMS2          7 STATIC
LTERM05 IMS1    Y
LTERM05 IMS1          2 STOQ,STOSEND
LTERM05 IMS2
LTERM11 IMS1    Y
LTERM11 IMS1
LTERM11 IMS2          21    11    0 STATIC,REMOTE

```

(右にスクロールして、画面 7 へ)

```

Lterm  MbrName Gbl  LTimeCreate      LTimeUpdate      LTimeAccess
LTERM04 IMS1    Y
LTERM04 IMS1
LTERM04 IMS2
LTERM05 IMS1    Y
LTERM05 IMS1
LTERM05 IMS2
LTERM11 IMS1    Y
LTERM11 IMS1
LTERM11 IMS2          2014.183 16:14:17:12

```

(右にスクロールして、画面 8 へ)

```

Lterm  MbrName Gbl  LDefnType
LTERM04 IMS1    Y
LTERM04 IMS1
LTERM04 IMS2
LTERM05 IMS1    Y
LTERM05 IMS1
LTERM05 IMS2
LTERM11 IMS1    Y
LTERM11 IMS1
LTERM11 IMS2          MSCGEN

```

説明: IMSplex には 2 つの IMS システムがあります。IMS1 と IMS2 です。STM および共用キューは使用可能です。IMS1 はコマンド・マスターであり、グローバル情報およびローカル情報を表示します。IMS2 はローカル情報のみを表示します。

- LTERM04 は IMS1 上と IMS2 上、およびリソース構造内に存在します。グローバル情報は、これが現在アクティブではないけれども IMS2 によって所有されており、したがって、IMS2 上のノードに重要な状況が存在することを示しています。LTERM は、すべてのシステム上で NODE04 に静的に割り振られています。
- LTERM05 は IMS1 上およびリソース構造内に存在します。LTERM05 は動的です。グローバル状況は、これが停止しており、どのシステム上でもアクティブでなく、所有もされていないことを示しています。IMS1 上のローカル状況は、これが停止していることを示しています。LTERM は、IMS1 と RM の両方でユーザー USER05 に割り振られています。ユーザーがサインオンしていないため、ノードは存在しません。LTERM11 は、IMS2 上にはのみ存在するので、グローバル状況はありません。これは、リモート LTERM として定義されています。関連する論理リンク名は LINK2111 であり、リモートおよびローカル SID は 21 および 11 です。

QUERY LTERM コマンドの例 9

TSO SPOC 入力:

```
QRY LTERM NAME(RLTE*) SHOW(TIMESTAMP,MSNAME,DEFNTYPE)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

Lterm	MbrName	CC	LMSName	LSIDR	LSIDL	LTimeCreate
RLTE0001	IMS1	0	LINK12V1	20	10	2015.061 16:10:42.15
RLTE0002	IMS1	0	LINK12V1	20	10	2015.061 16:11:23.77
RLTE0003	IMS1	0	LINK12V1	20	10	2015.061 16:11:23.77

(右にスクロールして、画面 2 へ)

Lterm	MbrName	LTimeUpdate	LTimeAccess	LDefnType
RLTE0001	IMS1			CREATE
RLTE0002	IMS1			CREATE
RLTE0003	IMS1			CREATE

OM API 入力:

```
CMD(QRY LTERM NAME(RLTE*) SHOW(TIMESTAMP,MSNAME,DEFNTYPE))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.7.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2015.062 00:17:28.048737</statime>
<stotime>2015.062 00:17:28.049106</stotime>
<staseq>CE9678B45F46150C</staseq>
<stoseq>CE9678B45F5D2B8C</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10161728</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>LTERM </kwd>
<input>QRY LTERM NAME(RLTE*) SHOW(DEFNTYPE,TIMESTAMP,MSNAME) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="LTERM" l1b1="Lterm" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="LMSN" l1b1="LMSName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="LSIDR" l1b1="LSIDR" scope="LCL" sort="d" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="LSIDL" l1b1="LSIDL" scope="LCL" sort="d" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="TMCR" l1b1="LTimeCreate" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="TMIM" l1b1="LTimeImport" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="TMUP" l1b1="LTimeUpdate" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="TMAC" l1b1="LTimeAccess" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
```

```

<hdr s1b1="DFNT" l1b1="LDefnType"scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>LTERM(RLTE0003) MBR(IMS1) CC( 0) LMSN(LINK12V1) LSIDR(20)
  LSIDL(10) DFNT(CREATE ) TMCR(2015.061 16:11:23.77) </rsp>
<rsp>LTERM(RLTE0002) MBR(IMS1) CC( 0) LMSN(LINK12V1) LSIDR(20)
  LSIDL(10) DFNT(CREATE ) TMCR(2015.061 16:11:23.77) </rsp>
<rsp>LTERM(RLTE0001) MBR(IMS1) CC( 0) LMSN(LINK12V1) LSIDR(20)
  LSIDL(10) DFNT(CREATE ) TMCR(2015.061 16:10:42.15) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

動的に作成された 3 つのリモート LTERM が表示されます。それらは CREATE LTERM コマンドで作成されたため、定義タイプはすべて CREATE です。

関連概念:

[🔗](#) CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

- [🔗](#) /DISPLAY ASMT コマンド (コマンド)
 - [🔗](#) /DISPLAY LTERM コマンド (コマンド)
 - [🔗](#) /DISPLAY MASTER コマンド (コマンド)
 - [🔗](#) /DISPLAY QCNT コマンド (コマンド)
 - [🔗](#) /DISPLAY STATUS コマンド (コマンド)
 - [🔗](#) コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)
- 809 ページの『第 10 章 /RDISPLAY コマンド』

QUERY MEMBER コマンド

QUERY MEMBER コマンドは、IMSpdex の 1 つ以上のメンバーに関する状況情報または属性情報を表示するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 353 ページの『構文』
- 353 ページの『キーワード』
- 354 ページの『使用上の注意』
- 368 ページの『出力フィールド』
- 369 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 370 ページの『例』

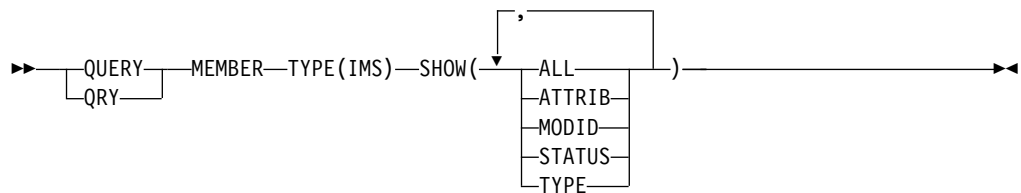
環境

以下の表には、QUERY MEMBER コマンドおよびキーワードを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 108. QUERY MEMBER コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUERY MEMBER	X	X	X
ALL	X	X	X
ATTRIB	X	X	X
SHOW	X	X	X
STATUS	X	X	X
TYPE	X	X	X

構文



キーワード

以下のキーワードは、QUERY MEMBER コマンドに有効です。

SHOW()

戻される出力フィールドを指定します。

ALL

すべての出力フィールドを戻します。

ATTRIB

IMSplex メンバー属性を表示します。これは、静的な定義です。

LOCAL

IMSplex の 1 つ以上のメンバーに関するローカル状況情報を表示します。

GLOBAL

IMSplex の 1 つ以上のメンバーに関するグローバル状況情報を表示します。

MODID

オンライン変更の変更 ID を表示します。変更 ID は、オンライン変更が成功するごとに増分されます。グローバル・オンライン変更時には、IMS のローカル変更 ID により、IMS がオンライン変更コミット・フェーズ 2 に達したかが示されます。この ID は OLCSTAT データ・セットと同期化されます。グローバル・オンライン変更ユーティリティによって変更 ID がゼロに初期設定された場合、変更 ID は、正常に完了しているグローバル・オンライン変更の数を表します。

XRF 代替システム上のローカル変更 ID は、XRF 代替が X'70' ログ・レコードを取得しており、オンライン変更を実行していて、OLCSTAT データ・セットと同期しているかどうかを示します。XRF 代替の変更 ID が、QUERY OLC LIBRARY (OLCSTAT) コマンドによって表示される

OLCSTAT データ・セット変更 ID と一致する場合、XRF 代替は OLCSTAT データ・セットと同期しています。

STATUS

IMSplex メンバーの状況を表示します。IMSplex メンバーの状況は、動的に変更できます。

TYPE

IMSplex メンバーのタイプを表示します。IMS アドレス・スペースの場合は、IMSplex メンバーのタイプは IMS が可能です。

TYPE()

情報が表示される IMSplex メンバーのタイプを指定します。IMS が、使用可能な唯一のタイプです。

使用上の注意

QUERY MEMBER コマンドは、OM API を介してのみ指定することができます。

QUERY MEMBER コマンドは、MSC リソースおよび MODBLKS リソースに対して動的リソース定義が使用可能であるかどうかを表示します。QUERY MEMBER コマンドが、SHOW(ALL) または SHOW(ATTRIB) のいずれかを指定して発行された場合、LclAttr 列に、MODBLKS リソースに対して動的リソース定義が使用可能であれば DYNMODBLKS が、MSC リソースに対して動的リソース定義が使用可能であれば DYNMSC が表示されます。

IMS システムで ACB の IMS 管理が使用可能になっている場合、QUERY MEMBER TYPE(ATTRIB) コマンドは DIRECTORY の属性を表示します。IMS システムで IMS カタログ、および ACB の IMS 管理が使用可能な場合、DIRECTORY の属性が表示されます。

QUERY MEMBER という名前のコマンドは 2 つあります。QUERY MEMBER TYPE(IMS) はタイプ 2 コマンドで、IMS メンバーに関する情報を TSO SPOC または OM API から取得します。QUERY MEMBER TYPE(IMSCON) は z/OS MODIFY コマンドで、IMS Connect メンバーに関する情報を取得します。詳しくは、IMS Connect QUERY MEMBER コマンド (コマンド)を参照してください。

QUERY MEMBER 属性

以下の表は、可能な IMS 属性を示しています。表には、戻される属性、属性の範囲、および属性の意味といった、属性に関する情報が記載されています。グローバル属性は、ATTR ショート・ラベルとともに戻されます。ローカル属性は、LATTR ショート・ラベルとともに戻されます。

表 109. QUERY MEMBER コマンドの属性

属性	有効範囲	意味
DIRECTORY	LCL	この IMS システムの ACB は、IMS によって IMS カタログのディレクトリー・データ・セットで管理されています。DFSDFxxx PROCLIB メンバーの CATALOG セクションで ACBMGMT=CATALOG が指定されています。

表 109. QUERY MEMBER コマンドの属性 (続き)

属性	有効範囲	意味
DYNMODBLKS	LCL	MODBLKS リソースに対して動的リソース定義が使用可能です。
DYNMSC	LCL	複数システム結合 (MSC) リソースに対して動的リソース定義が使用可能です。
GBLOLC	LCL	グローバル・オンライン変更は使用可能です。
NO-STM	LCL	DFSDCxxx PROCLIB メンバーで STM=NO が指定されているか、または IMS がリソース構造を使用していない RM に登録されているため、IMS は端末リソースを共有していません。
RMENVNO	LCL	RM 環境が稼働していません。
SHAREDQ	LCL	共用キューは使用可能です。

QUERY MEMBER 状況

以下の表は、可能なメンバーの状況を示しています。表には、戻される状況、状況の範囲、および状況の意味といった、状況に関する情報が記載されています。グローバル状況は、STT ショート・ラベルとともに戻されます。ローカル状況は、LSTT ショート・ラベルとともに戻されます。LCL の有効範囲は、状況が指定された IMS に対してローカルであり、LSTT ショート・ラベルとともに戻されることを意味します。GBL の有効範囲は、その状況が、すべての IMS システムに対してグローバルであり、STT ショート・ラベルとともに戻されることを意味します。

QUERY MEMBER コマンドからの出力には、IMSplex 内の特定の IMS システム上で OPTION(UPDATEPSB) または OPTION(REFRESHPSB) が進行中であることを反映する、追加の値が含まれることがあります。

表 110. QUERY MEMBER コマンドの状況

Status	有効範囲	意味
AUTODDL	GBL	IMS カタログ・ディレクトリー・データ・セット内のリソースの自動活動化が、COMMIT ステートメントを含む DDL ステートメントのサブミットによって開始されました。IMS カタログからのインポートが正常に完了するか、障害が発生した場合は別の DDL 定義の活動化、または IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) コマンドによって、インポートがバックアウトまたはクリーンアップされるまで、この状況は継続します。
IMPABORT	GBL	IMS カタログ・インポート処理が失敗し、テークオーバー処理によってインポート処理が打ち切られます。 IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) コマンド・マスター IMS、または DDL 定義が活動化された IMS が異常終了しました。ディレクトリーに対して行われている更新は打ち切られます。打ち切り処理が正常に完了するか失敗するまで、この状況は継続します。

表 110. QUERY MEMBER コマンドの状況 (続き)

Status	有効範囲	意味
IMPCMD	GBL	<p>IMS カタログ・ディレクトリー・データ・セットを更新する IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) コマンドが開始されました。</p> <p>IMS カタログからのインポートが正常に完了するか、障害が発生した場合は別の DDL 定義の活動化、または IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) コマンドによって、インポートがバックアウトまたはクリーンアップされるまで、この状況は継続します。</p>
IMPCMT	GBL	<p>コミットの後で IMS カタログ・インポート処理が失敗し、テークオーバー処理によってインポートが完了します。</p> <p>IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) コマンド・マスター IMS、または DDL 定義が活動化された IMS が異常終了しました。IMS カタログ・ディレクトリー・データ・セットに対して行われた更新はコミットされます。</p>
IMPPHC0I	LCL	<p>IMS カタログ・インポートのコミット・フェーズ 0 の処理が進行中です。</p> <p>準備と静止の両フェーズの IMS カタログ・インポート処理が完了し、コミット・フェーズが進行中です。</p>
IMPPHC0F	GBL	<p>IMS カタログ・インポートのコミット・フェーズ 0 が失敗しました。</p> <p>IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) コマンド・マスター IMS、または DDL 定義が活動化された IMS が、コミット・フェーズ 0 の実行中に異常終了しました。テークオーバーの試行に失敗したか、テークオーバーを実行するアクティブ IMS がありませんでした。</p> <p>IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) コマンドを再入力するか、DDL ステートメントを再度サブミットして、IMS カタログからのインポートとクリーンアップ処理を完了します。</p>

表 110. QUERY MEMBER コマンドの状況 (続き)

Status	有効範囲	意味
IMPPHC0T	GBL	<p>コミット・フェーズ 0 の実行中に、IMS カタログ・インポート処理がテークオーバーされました。</p> <p>IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) コマンド・マスター IMS、または DDL 定義が活動化された IMS が、コミット・フェーズ 0 の実行中に異常終了しました。IMS カタログ・インポート処理は、打ち切りのために別の IMS によってテークオーバーされました。</p> <p>この IMS は、この IMS 内のインポート処理をクリーンアップするためのテークオーバー処理に関与しています。メッセージ DFS4833E、DFS4839W、DFS4913E、または DFS5006I がテークオーバー中に発行された場合、テークオーバーは失敗しました。IMPORT コマンドを再入力するか、DDL ステートメントを再度サブミットします。次のインポート処理により、前の RM 処理の情報とディレクトリー・データ・セットがクリーンアップされます。</p>
IMPPHC0UPF	GBL	<p>IMS カタログ・インポートのコミット・フェーズ 0 が失敗しました。</p> <p>IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) OPTION(UPDATEPSB) コマンド・マスターが、コミット・フェーズ 0 の実行中に異常終了しました。テークオーバーの試行に失敗したか、テークオーバーを実行するアクティブ IMS がありませんでした。</p> <p>IMPORT コマンドを再入力して、IMS カタログからのインポートとクリーンアップを完了します。</p>
IMPPHC1I	GBL	<p>IMS カタログ・インポートのコミット・フェーズ 1 の処理が進行中です。</p>
IMPPHC1F	GBL	<p>IMS カタログ・インポートのコミット・フェーズ 1 が失敗しました。</p> <p>IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) コマンド・マスター IMS、または DDL 定義が活動化された IMS が、コミット・フェーズ 1 の実行中に異常終了しました。テークオーバーの試行に失敗したか、テークオーバーを実行するアクティブ IMS がありませんでした。</p> <p>IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) コマンドを再入力するか、DDL 定義の活動化を再度サブミットして、IMS カタログからのインポートとクリーンアップを完了します。</p> <p>IMS ディレクトリーが複数の IMS システムによって共有されていて、IMPORT コマンドまたは DDL ステートメントを処理するアクティブ IMS がない場合は、IMS ディレクトリー・リカバリー・ユーティリティ (DFS3RU00) を実行して IMS ディレクトリーをクリーンアップする必要があります。</p>

表 110. QUERY MEMBER コマンドの状況 (続き)

Status	有効範囲	意味
IMPPHC1T	GBL	<p>IMS カタログ・インポートのコミット・フェーズ 1 がテークオーバーされました。</p> <p>IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) コマンド・マスター IMS、または DDL 定義が活動化された IMS が、コミット・フェーズ 1 の実行中に異常終了しました。IMS カタログ・インポート処理の打ち切りは、別の IMS によってテークオーバーされました。</p> <p>この IMS は、この IMS 内のインポート処理をクリーンアップするためのテークオーバー処理に参与しています。</p> <p>メッセージ DFS4833E、DFS4839W、DFS4913E、または DFS5006I がテークオーバー中に発行された場合、テークオーバーは失敗しました。IMPORT コマンドを再入力するか、DDL ステートメントを再度サブミットします。次回のインポート処理により、前の RM 処理の情報とディレクトリー・データ・セットがクリーンアップされます。</p>
IMPPHC1UPF	GBL	<p>IMS カタログ・インポートのコミット・フェーズ 1 が失敗しました。</p> <p>IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) OPTION(UPDATEPSB) コマンド・マスターが、コミット・フェーズ 1 の実行中に異常終了しました。テークオーバーの試行に失敗したか、テークオーバーを実行するアクティブ IMS がありませんでした。</p> <p>IMPORT コマンドを再入力して、IMS カタログからのインポートとクリーンアップを完了します。</p>
IMPPHC2I	LCL	<p>IMS カタログ・インポートのコミット・フェーズ 2 の処理が進行中です。</p>
IMPPHC2F	GBL	<p>IMS カタログ・インポートのコミット・フェーズ 2 が失敗しました。</p> <p>IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) コマンド・マスター IMS、または DDL 定義が活動化された IMS が、コミット・フェーズ 2 の実行中に異常終了しました。テークオーバーの試行に失敗したか、テークオーバーを実行するアクティブ IMS がありませんでした。</p> <p>IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) コマンドを再入力するか、DDL 定義の活動化を再度サブミットして、IMS カタログからのインポートとクリーンアップを完了します。</p> <p>IMS ディレクトリーが複数の IMS システムによって共用されていて、IMPORT コマンドまたは DDL ステートメントを処理するアクティブ IMS がない場合は、IMS ディレクトリー・リカバリー・ユーティリティー (DFS3RU00) を実行して IMS ディレクトリーをクリーンアップする必要があります。</p>

表 110. QUERY MEMBER コマンドの状況 (続き)

Status	有効範囲	意味
IMPPHC2T	GBL	<p>IMS カタログ・インポートのコミット・フェーズ 2 がテークオーバーされました。</p> <p>IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) コマンド・マスター IMS、または DDL 定義が活動化された IMS が、コミット・フェーズ 2 の実行中に異常終了しました。IMS カタログ・インポート処理の打ち切りは、別の IMS によってテークオーバーされました。</p> <p>この IMS は、この IMS 内のインポート処理をクリーンアップするためのテークオーバー処理に関与しています。</p> <p>メッセージ DFS4833E、DFS4796E、DFS4797E、DFS4839W、DFS4913E、または DFS5006I がテークオーバー中に発行された場合、テークオーバーは失敗しました。IMPORT コマンドを再入力するか、DDL ステートメントを再度サブミットします。次回のインポート処理により、前の RM 処理の情報とディレクトリー・データ・セットがクリーンアップされます。</p>
IMPPHC2UPF	GBL	<p>IMS カタログ・インポートのコミット・フェーズ 2 が失敗しました。</p> <p>IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) OPTION(UPDATEPSB) コマンド・マスターが、コミット・フェーズ 2 の実行中に異常終了しました。テークオーバーの試行に失敗したか、テークオーバーを実行するアクティブ IMS がありませんでした。</p> <p>IMPORT コマンドを再入力して、IMS カタログからのインポートとクリーンアップを完了します。</p>
IMPPHC3I	LCL	<p>IMS カタログ・インポートのコミット・フェーズ 3 の処理が進行中です。</p>

表 110. QUERY MEMBER コマンドの状況 (続き)

Status	有効範囲	意味
IMPPHC3F	GBL	<p>IMS カタログ・インポートのコミット・フェーズ 3 が失敗しました。</p> <p>IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) コマンド・マスター IMS、または DDL 定義が活動化された IMS が、コミット・フェーズ 3 の実行中に異常終了しました。テークオーバーの試行に失敗したか、テークオーバーを実行するアクティブ IMS がありませんでした。</p> <p>IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) コマンドを再入力するか、DDL 定義の活動化を再度サブミットして、IMS カタログからのインポートとクリーンアップを完了します。</p> <p>IMS ディレクトリーが複数の IMS システムによって共有されていて、IMPORT コマンドまたは DDL ステートメントを処理するアクティブ IMS がない場合は、IMS ディレクトリー・リカバリー・ユーティリティー (DFS3RU00) を実行して IMS ディレクトリーをクリーンアップする必要があります。</p>
IMPPHC3T	GBL	<p>IMS カタログ・インポートのコミット・フェーズ 3 がテークオーバーされました。</p> <p>IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) コマンド・マスター IMS、または DDL 定義が活動化された IMS が、コミット・フェーズ 3 の実行中に異常終了しました。IMS カタログ・インポート処理の打ち切りは、別の IMS によってテークオーバーされました。</p> <p>この IMS は、この IMS 内のインポート処理をクリーンアップするためのテークオーバー処理に関与しています。</p> <p>メッセージ DFS4833E、DFS4796E、DFS4797E、DFS4839W、DFS4913E、または DFS5006I がテークオーバー中に発行された場合、テークオーバーは失敗しました。IMPORT コマンドを再入力するか、DDL ステートメントを再度サブミットします。次回のインポート処理により、前の RM 処理の情報とディレクトリー・データ・セットがクリーンアップされます。</p>
IMPPHC3UPF	GBL	<p>IMS カタログ・インポートのコミット・フェーズ 3 が失敗しました。</p> <p>IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) OPTION(UPDATEPSB) コマンド・マスターが、コミット・フェーズ 3 の実行中に異常終了しました。テークオーバーの試行に失敗したか、テークオーバーを実行するアクティブ IMS がありませんでした。</p> <p>IMPORT コマンドを再入力して、IMS カタログからのインポートとクリーンアップを完了します。</p>
IMPPHC4I	LCL	<p>IMS カタログ・インポートのコミット・フェーズ 4 の処理が進行中です。</p>

表 110. QUERY MEMBER コマンドの状況 (続き)

Status	有効範囲	意味
IMPPHC4F	GBL	<p>IMS カタログ・インポートのコミット・フェーズ 4 が失敗しました。</p> <p>IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) コマンド・マスター、または DDL 定義が活動化された IMS が、コミット・フェーズ 4 の実行中に異常終了しました。テークオーバーの試行に失敗したか、テークオーバーを実行するアクティブ IMS がありませんでした。</p> <p>前の IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) コマンドが進行中であった場合は、IMPORT コマンドを再入力して RM 処理の情報とディレクトリー・データ・セットをクリーンアップします。</p> <p>直前に活動化された DDL が CREATE ステートメントの DDL であった場合、活動化は IMS ディレクトリー・データ・セットではなく IMS カタログ・データベースに対してコミットされます。DROP DDL ステートメントと、CREATE DDL 定義およびコミット・ステートメントの両方をサブミットして、RM 処理の情報とディレクトリー・データ・セットをクリーンアップします。</p> <p>直前に活動化された DDL が DROP ステートメントであった場合は、IMPORT コマンドを入力して RM 処理とディレクトリー・データ・セットをクリーンアップします。</p> <p>IMS ディレクトリーが複数の IMS システムによって共有されていて、IMPORT コマンドまたは DDL ステートメントを処理するアクティブ IMS がない場合は、IMS ディレクトリー・リカバリー・ユーティリティ (DFS3RU00) を実行して IMS ディレクトリーをクリーンアップする必要があります。</p>
IMPPHC4T	GBL	<p>IMS カタログ・インポートのコミット・フェーズ 4 がテークオーバーされました。</p> <p>IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) コマンド・マスター IMS、または DDL 定義が活動化された IMS が、コミット・フェーズ 4 の実行中に異常終了しました。IMS カタログ・インポート処理のコミットは、別の IMS によってテークオーバーされました。</p> <p>この IMS は、この IMS 内のインポート処理をクリーンアップするためのテークオーバー処理に関与しています。</p> <p>メッセージ DFS4832E、DFS4834E、DFS4839W、または DFS5006I がテークオーバー中に発行された場合、テークオーバーは失敗しました。IMPORT コマンドを再入力するか、DDL ステートメントを再度サブミットします。次のインポート処理により、前の RM 処理の情報とディレクトリー・データ・セットがクリーンアップされます。</p>

表 110. QUERY MEMBER コマンドの状況 (続き)

Status	有効範囲	意味
IMPPHC4UPF	GBL	<p>IMS カタログ・インポートのコミット・フェーズ 4 が失敗しました。</p> <p>IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) OPTION(UPDATEPSB) コマンド・マスターが、コミット・フェーズ 4 の実行中に異常終了しました。テークオーバーの試行に失敗したか、テークオーバーを実行するアクティブ IMS がありませんでした。</p> <p>IMPORT コマンドを再入力して、RM 処理の情報をクリーンアップします。</p>
IMPPHC5I	LCL	<p>IMS カタログ・インポートのコミット・フェーズ 5 の処理が進行中です。</p>
IMPPHC5F	GBL	<p>IMS カタログ・インポートのコミット・フェーズ 5 が失敗しました。</p> <p>IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) コマンド・マスター、または DDL 定義が活動化された IMS が、コミット・フェーズ 5 の実行中に異常終了しました。テークオーバーの試行に失敗したか、テークオーバーを実行するアクティブ IMS がありませんでした。</p> <p>前の IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) コマンドが進行中であった場合は、IMPORT コマンドを再入力して RM 処理の情報とディレクトリー・データ・セットをクリーンアップします。</p> <p>直前に活動化された DDL が CREATE ステートメントの DDL であった場合、活動化は IMS ディレクトリー・データ・セットではなく IMS カタログ・データベースに対してコミットされます。DROP DDL ステートメントと、CREATE DDL 定義およびコミット・ステートメントの両方をサブミットして、RM 処理の情報とディレクトリー・データ・セットをクリーンアップします。</p> <p>直前に活動化された DDL が DROP ステートメントであった場合は、IMPORT コマンドを入力して RM 処理とディレクトリー・データ・セットをクリーンアップします。</p> <p>IMS ディレクトリーが複数の IMS システムによって共用されていて、IMPORT コマンドまたは DDL ステートメントを処理するアクティブ IMS がない場合は、IMS ディレクトリー・リカバリー・ユーティリティ (DFS3RU00) を実行して IMS ディレクトリーをクリーンアップする必要があります。</p>

表 110. QUERY MEMBER コマンドの状況 (続き)

Status	有効範囲	意味
IMPPHC5T	GBL	<p>IMS カタログ・インポートのコミット・フェーズ 5 がテークオーバーされました。</p> <p>IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) コマンド・マスター IMS、または DDL 定義が活動化された IMS が、コミット・フェーズ 5 の実行中に異常終了しました。IMS カタログ・インポート処理のコミットは、別の IMS によってテークオーバーされました。</p> <p>この IMS は、この IMS 内のインポート処理をクリーンアップするためのテークオーバー処理に関与しています。</p> <p>メッセージ DFS4832E、DFS4834E、DFS4839W、または DFS5006I がテークオーバー中に発行された場合、テークオーバーは失敗しました。IMPORT コマンドを再入力するか、DDL ステートメントを再度サブミットします。次回のインポート処理により、前の RM 処理の情報とディレクトリー・データ・セットがクリーンアップされます。</p> <p>QUERY MEMBER コマンドにより、ローカル状況 IMPHC5I を持つ別の IMS が表示される場合、これはインポート処理が最終クリーンアップ段階にあることを示しています。この非マスター IMS は既にクリーンアップを完了しており、他の IMS システムが進行中です。</p>
IMPPHC5UPF	GBL	<p>IMS カタログ・インポートのコミット・フェーズ 5 が失敗しました。</p> <p>IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) OPTION(UPDATEPSB) コマンド・マスターが、コミット・フェーズ 5 の実行中に異常終了しました。テークオーバーの試行に失敗したか、テークオーバーを実行するアクティブ IMS がありませんでした。</p> <p>IMPORT コマンドを再入力して、RM 処理の情報をクリーンアップします。</p>
IMPPHPI	LCL	<p>IMS カタログ・インポートの準備フェーズの処理が進行中です。</p>

表 110. QUERY MEMBER コマンドの状況 (続き)

Status	有効範囲	意味
IMPPHPT	GBL	<p>IMS カタログ・インポートの準備フェーズがテークオーバーされました。</p> <p>IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) コマンド・マスター IMS、または DDL 定義が活動化された IMS が、準備フェーズの実行中に異常終了しました。IMS カタログ・インポート処理の打ち切りは、別の IMS によってテークオーバーされました。</p> <p>この IMS は、この IMS 内のインポート処理をクリーンアップするためのテークオーバー処理に関与しています。</p> <p>IMPORT コマンドを再入力するか、DDL ステートメントを再度サブミットします。メッセージ CSL2200I「CLIENT client INITIATED PROCESS DFSOLC」が発行された場合は、次のインポート処理によって直前の RM 処理の情報がクリーンアップされます。</p>
LEOPT	LCL	この IMS では、言語環境オプションが使用可能です。
OLCABRTC	LCL	<p>オンライン変更の打ち切りが完了しました。</p> <p>TERMINATE OLC コマンドまたは /MODIFY ABORT コマンドが入力されます。この IMS について、オンライン変更打ち切りフェーズがローカルで完了しました。IMS はオンライン変更状態から取り出されています。</p>
OLCABRTI	LCL	<p>オンライン変更の打ち切りが進行中です。</p> <p>TERMINATE OLC コマンドまたは /MODIFY ABORT コマンドが入力されます。この IMS について、オンライン変更打ち切りフェーズがローカルで進行中です。</p>
OLCCMT1C	LCL または GBL	<p>オンライン変更コミット・フェーズ 1 が完了しました。</p> <p>INITIATE OLC PHASE(COMMIT) コマンドまたは /MODIFY COMMIT コマンドが入力されます。オンライン変更コミット・フェーズ 1 が、この IMS についてローカルで完了したか、IMSplex 内のすべての IMS システムについてグローバルに完了しました。すべての IMS システムがコミット・フェーズ 1 を試行すると、オンライン変更マスターは OLCSTAT データ・セットを更新し、オンライン変更が完了すると見なされます。</p> <p>IMS がこの状態にある間は、システム・コンソール、IMS 端末、または MTO からのタイプ 1 コマンドはキューに入れられます。キューに入れられたコマンドは、オンライン変更がコミットされたかまたは打ち切られた後に処理されます。タイプ 1 コマンドがシステム・コンソールから入力された場合は、この IMS がオンライン変更状態でなくなるまでは、WTOR は表示されません。</p>

表 110. QUERY MEMBER コマンドの状況 (続き)

Status	有効範囲	意味
OLCCMT1I	LCL または GBL	<p>オンライン変更コミット・フェーズ 1 は進行中です。</p> <p>INITIATE OLC PHASE(COMMIT) コマンドまたは /MODIFY COMMIT コマンドが入力されます。オンライン変更コミット・フェーズ 1 が、この IMS についてローカルで進行中か、または IMSplex 内のすべての IMS システムについてグローバルに進行中です。</p>
OLCCMT2C	LCL または GBL	<p>オンライン変更コミット・フェーズ 2 が完了しました。</p> <p>INITIATE OLC PHASE(COMMIT) コマンドまたは /MODIFY COMMIT コマンドが入力されます。オンライン変更コミット・フェーズが、この IMS についてローカルで完了したか、IMSplex 内のすべての IMS システムについてグローバルに完了しました。</p> <p>IMS がこの状態にある間は、システム・コンソール、IMS 端末、または MTO からのタイプ 1 コマンドはキューに入れます。キューに入れられたコマンドは、オンライン変更がコミットされたかまたは打ち切られた後に処理されます。タイプ 1 コマンドがシステム・コンソールから入力された場合は、この IMS がオンライン変更状態でなくなるまでは、WTOR は表示されません。</p>
OLCCMT2F	LCL	<p>オンライン変更コミット・フェーズ 2 は失敗しました。</p> <p>INITIATE OLC PHASE(COMMIT) コマンドまたは /MODIFY COMMIT コマンドが入力されます。この IMS について、オンライン変更コミット・フェーズ 2 がローカルで失敗しました。この IMS は、オンライン変更状態のままになっている可能性があります。この状態では、TERMINATE OLC コマンドまたは /MODIFY ABORT コマンドは働きません。その場合は、IMS を取り消し、IMS のウォーム・スタートを行ってください。この IMS は、コミット・フェーズ 2 を除くオンライン変更に正常に参加していたので、ウォーム・スタートが可能です。</p>
OLCCMT2I	LCL または GBL	<p>オンライン変更コミット・フェーズ 2 は進行中です。</p> <p>INITIATE OLC PHASE(COMMIT) コマンドまたは /MODIFY COMMIT コマンドが入力されます。オンライン変更コミット・フェーズ 2 が、この IMS についてローカルで進行中か、または IMSplex 内のすべての IMS システムについてグローバルに進行中です。</p>

表 110. QUERY MEMBER コマンドの状況 (続き)

Status	有効範囲	意味
OLCCMT3C	GBL	<p>オンライン変更コミット・フェーズ 3 が完了しました。</p> <p>INITIATE OLC PHASE(COMMIT) コマンドが入力されま す。オンライン変更コミット・フェーズ 3 は、マスターを 除く他の IMS システムでグローバルに完了しています。 COMMIT マスターは、まだローカルでコミット・フェーズ 3 を実行する必要があります。オンライン変更はコミットさ れていますが、コミット・フェーズ 3 はまだすべての IMS システム上のオンライン変更情報をクリーンアップする必要 があります。</p>
OLCCMT3F	GBL	<p>オンライン変更コミット・フェーズ 3 は失敗しました。</p> <p>INITIATE OLC PHASE(COMMIT) コマンドが入力されま す。オンライン変更コミット・フェーズ 3 は、他の IMS システムでグローバルに失敗しています。マスターはローカ ルでコミット・フェーズ 3 の実行を試みるのをスキップ し、自身はグローバル・オンライン変更状態のまま、エラー で終了します。他の IMS システムは、コミット・フェーズ 3 を実際に完了している場合も、していない場合もありま す。オンライン変更を完了するには、前の COMMIT コマ ンド・マスターに対して別の COMMIT コマンドを発行し てください。</p>
OLCCMT3I	LCL または GBL	<p>オンライン変更コミット・フェーズ 3 は進行中です。</p> <p>INITIATE OLC PHASE(COMMIT) コマンドが入力されま す。オンライン変更コミット・フェーズ 3 が、この IMS についてローカルで進行中か、または IMSplex 内のすべ ての IMS システムについてグローバルに進行中です。オンラ イン変更はコミットされていますが、コミット・フェーズ 3 はすべての IMS システム上のオンライン変更情報をクリー ンアップする必要があります。</p>
OLCMACB	GBL	ACBLIB のメンバー・オンライン変更が進行中です。
OLCMSTR	GBL	<p>オンライン変更フェーズ・マスター。</p> <p>INITIATE OLC PHASE(PREPARE) コマンド、INITIATE OLC PHASE(COMMIT)、または TERMINATE OLC コマ ンドが入力されます。この IMS は、現在進行中のオンライ ン変更フェーズ (準備、コミット、または終了) のマスター です。オンライン変更の各フェーズごとに、それぞれ異なる IMS がマスターになることができます。</p>
OLCPREPC	LCL または GBL	<p>オンライン変更準備フェーズが完了しました。</p> <p>INITIATE OLC PHASE(PREPARE) コマンドまたは /MODIFY PREPARE コマンドが入力されます。オンライン 変更準備フェーズが、この IMS についてローカルで完了し たか、IMSplex 内のすべての IMS システムについてグロー バルに完了しました。</p>

表 110. QUERY MEMBER コマンドの状況 (続き)

Status	有効範囲	意味
OLCPREPF	LCL	<p>オンライン変更準備フェーズは失敗しました。</p> <p>INITIATE OLC PHASE(PREPARE) コマンドが入力されます。この IMS について、オンライン変更準備フェーズがローカルで失敗しました。オンライン変更用に作成された MWA を削除するため、また RM により開始されたオンライン変更処理を削除するには、TERMINATE OLC が必要です。</p>
OLCPREPI	LCL または GBL	<p>オンライン変更準備フェーズは進行中です。</p> <p>INITIATE OLC PHASE(PREPARE) コマンドまたは /MODIFY PREPARE コマンドが入力されます。オンライン変更準備フェーズが、この IMS についてローカルで進行中か、または IMSplex 内のすべての IMS システムについてグローバルに進行中です。</p>
OLCTERM C	GBL	<p>オンライン変更終了が完了しました。</p> <p>TERMINATE OLC コマンドが入力されました。オンライン変更終了は、IMSplex 内の IMS システムに対して完了しました。</p>
OLCTERM F	LCL	<p>終了失敗:</p> <p>オンライン変更状態にない IMS に対して、TERMINATE OLC コマンドが送られます。MWA は、TERMINATE OLC コマンドを調整するために作成されます。TERMINATE OLC コマンドは、RM、SCI、および CQS エラーが原因で失敗し、MWA は「終了失敗」状態に設定されます。この状態の MWA を削除するには、この後に続けて TERMINATE OLC コマンドを出す必要があります。</p>
OLCTERM I	GBL	<p>オンライン変更終了は進行中です。</p> <p>TERMINATE OLC コマンドが入力されます。オンライン変更終了は、IMSplex 内の IMS システムに対して進行中です。オンライン変更終了により、オンライン変更は打ち切られます。</p> <p>すべての IMS システムがオンライン変更準備状態である場合、TERMINATE OLC は、オンライン変更を打ち切り、すべての IMS システムをオンライン変更状態からはずします。</p> <p>OLCSTAT データ・セットが更新される前にエラーが発生すると、TERMINATE OLC はオンライン変更を打ち切ります。オンライン変更打ち切りフェーズは、打ち切りが必要な IMS システムで実行されます。それによって、すべての IMS システムがオンライン変更状態から解除されます。</p>

表 110. QUERY MEMBER コマンドの状況 (続き)

Status	有効範囲	意味
UPDPSB	LCL	IMSplex 内のシステムのサブセットにある PSB を更新するためのオンライン変更が進行中です。 IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) OPTION(UPDATEPSB) コマンドが入力され、処理されています。
RFSHPSB	LCL	IMSplex 内のシステムのサブセットにある PSB を更新するためのオンライン変更が進行中です。 IMPORT DEFN SOURCE(CATALOG) OPTION(REFRESHPSB) コマンドが入力され、処理されています。
SECCMD	LCL	コマンド /SMC MASTER ON が発行された場合、マスター端末から発行された適格な IMS コマンドとそのコマンド応答が 2 次マスターに送信されます。
SECCMDT	LCL	コマンド /SMC TERMINAL ON が発行された場合、マスター端末以外の端末から発行された適格な IMS コマンドとそのコマンド応答が 2 次マスターに送信されます。
SECMSG	LCL	コマンド /SMC MESSAGE ON が発行された場合、IMS システム・メッセージが 2 次マスターに送信されます。
XRFALT	LCL	XRF 代替システム。

出力フィールド

以下の表は、QUERY MEMBER TYPE(IMS) の出力フィールドを示しています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。ゼロ以外の完了コードの場合に表示される出力フィールドには *error* が表示されます。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。

有効範囲

出力フィールドの有効範囲を識別します。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 111. QUERY MEMBER コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
CC	CC	N/A	N/A	出力行の完了コード。完了コードは常に戻されます。

表 111. QUERY MEMBER コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
MBR	MbrName	N/A	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。出力を作成した IMS の IMS ID。IMS ID は常に戻されます。
LATTR	LclAttr	ATTRIB	LCL	ローカル IMS 属性。詳しくは、354 ページの表 109を参照してください。
MODI	ModId	MODID	LCL	オンライン変更の変更 ID。オンライン変更ごとに 1 ずつ増加します。
LSTT	LclStat	STATUS	LCL	ローカル IMS 状況。詳しくは、355 ページの表 110を参照してください。
STT	Status	STATUS	GBL	グローバル IMS 状況。詳しくは、355 ページの表 110を参照してください。
TYP	タイプ	TYPE	LCL	IMSplex メンバーのタイプ。IMS アドレス・スペースの場合は、IMSplex メンバーのタイプは IMS が可能です。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY MEMBER コマンドの結果として戻される戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 112. QUERY MEMBER コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY MEMBER TYPE(IMS) コマンドは正常に完了しました。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できなかったため、QUERY MEMBER コマンドは失敗しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは、個々のメンバーに対するアクションごとに戻されます。

以下の表には、QUERY MEMBER コマンドで戻される可能性のある完了コードが記載されています。

表 113. QUERY MEMBER の完了コード

完了コード	意味
0	この IMS について、QUERY MEMBER TYPE(IMS) コマンドが正常に完了しました。

例

以下に示すのは QUERY MEMBER コマンドの例です。

QUERY MEMBER TYPE(IMS) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QRY MEMBER TYPE(IMS) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

Member Name	CC Type	Status	LclAttr	LclStat	ModId
SYS3	0 IMS				1

OM API 入力:

```
CMD(QRY MEMBER TYPE(IMS) SHOW(ALL))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.1.0</omvsn>
<xmlvsn>1 </xmlvsn>
<statime>2002.163 16:32:12.998765</statime>
<stotime>2002.163 16:32:12.999775</stotime>
<staseq>B7C4B78AFD86D562</staseq>
<stoseq>B7C4B78AFDC5FA80</stoseq>
<rqsttkn1>USRT002 10093212</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>SYS3 </master>
<userid>USRT002 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>MEMBER </kwd>
<input>QRY MEMBER TYPE(IMS) SHOW(ALL)</input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="4"
dtype="INT" align="right" />
<hdr s1b1="TYP" l1b1="Type" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="5"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="STT" l1b1="Status" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="*"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="LATTR" l1b1="LclAttr" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="*"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="LSTT" l1b1="LclStat" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="*"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="MODI" l1b1="ModId" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="8"
dtype="CHAR" align="right" /></cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MBR(SYS3 ) CC( 0) TYP(IMS) MODI( 1) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>
```

説明: IMSplex 内の IMS メンバー SYS3 がアクティブです。

QUERY MEMBER TYPE(IMS) コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
QRY MEMBER TYPE(IMS) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

Member Name	CC Type	Status	LclAttr	LclStat	ModId
SYS3	0 IMS			LEOPT	1

OM API 入力:

```
CMD(QRY MEMBER TYPE(IMS) SHOW(ALL))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.1.0</omvsn>
<xmlvsn>1 </xmlvsn>
<statime>2002.163 16:42:10.557119</statime>
<stotime>2002.163 16:42:10.557503</stotime>
<staseq>B7C4B9C4DDCBF28D</staseq>
<stoseq>B7C4B9C4DDE3F02D</stoseq>
<rqsttkn1>USRT002 10094210</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>SYS3 </master>
<userid>USRT002 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>MEMBER </kwd>
<input>QRY MEMBER TYPE(IMS) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="MBR" llb1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="CC" llb1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="4"
dtype="INT" align="right" />
<hdr s1b1="TYP" llb1="Type" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="5"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="STT" llb1="Status" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="*"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="LATTR" llb1="LclAttr" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="*"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="LSTT" llb1="LclStat" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="*"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="MODI" llb1="ModId" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="8"
dtype="CHAR" align="right" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MBR(SYS3 ) CC( 0) TYP(IMS) LSTT(LEOPT) MODI( 1) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>
```

説明: IMSplex 内の IMS メンバー SYS3 がアクティブです。ローカル状況は、LE ランタイム・オプションのオーバーライドが使用可能になっていることを表しています。

QUERY MEMBER TYPE(IMS) コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
QRY MEMBER TYPE(IMS) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

```
Response for: QUERY MEMBER TYPE(IMS) SHOW(ALL)
MbrName   CC Type   Status LclAttr      LclStat   ModId
IMS2      0 IMS      SHAREDQ,GBLOLC
IMS3      0 IMS      SHAREDQ,GBLOLC
SYS3      0 IMS      SHAREDQ,GBLOLC
```

OM API 入力:

```
CMD (QRY MEMBER TYPE(IMS) SHOW(ALL))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.1.0</omvsn>
<xmlvsn>1 </xmlvsn>
<statime>2002.163 15:13:05.255654</statime>
<stotime>2002.163 15:13:06.479196</stotime>
<staseq>B7C4A5DB308E6544</staseq>
<stoseq>B7C4A5DC5B45C385</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10081304</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS3 </master>
<userid>USRT011</userid>
<verb>QRY</verb>
<kwd>MEMBER</kwd>
<input>QUERY MEMBER TYPE(IMS) SHOW(ALL)</input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="4"
dtype="INT" align="right" />
<hdr s1b1="TYP" l1b1="Type" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="5"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="STT" l1b1="Status" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="*"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="LATTR" l1b1="LclAttr" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="*"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="LSTT" l1b1="LclStat" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="*"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="MODI" l1b1="ModId" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="8"
dtype="CHAR" align="right" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MBR(IMS3 ) CC( 0) TYP(IMS) LATTR(SHAREDQ,GBLOLC) MODI( 1) </rsp>
<rsp>MBR(IMS2 ) CC( 0) TYP(IMS) LATTR(SHAREDQ,GBLOLC) MODI( 1) </rsp>
<rsp>MBR(SYS3 ) CC( 0) TYP(IMS) LATTR(SHAREDQ,GBLOLC) MODI( 1) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>
```

説明: IMSplex 内で IMS メンバー SYS3、IMS2、および IMS3 がアクティブです。3つのIMSシステムはすべて、共用キューを使用可能にしており、グローバル・オンライン変更も使用可能にしています。

QUERY MEMBER TYPE(IMS) SHOW(STATUS) コマンドの例 4

TSO SPOC 入力:

```
QUERY MEMBER TYPE(IMS) SHOW(STATUS)
```


TSO SPOC 出力:

MbrName	CC	Status	LclStat
IMS1	0		OLCCMT1C,OLCCMT2I
IMS2	0		OLCCMT1C,OLCCMT2I
IMS2	0	OLCMSTR,OLCMACB,OLCCMT1C,OLCCMT2I	
IMS3	0		OLCCMT1C,OLCCMT2I

OM API 入力:

CMD (QUERY MEMBER TYPE(IMS) SHOW(STATUS))

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.3.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2006.275 18:28:38.671513</statime>
<stotime>2006.275 18:28:38.683275</stotime>
<staseq>BF7E87571A0999E4</staseq>
<stoseq>BF7E87571CE8B96E</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10112838</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS2 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>MEMBER </kwd>
<input>QUERY MEMBER TYPE(IMS) SHOW(STATUS) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="STT" l1b1="Status" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="*" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="LSTT" l1b1="LclStat" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MBR(IMS2 ) CC( 0) STT(OLCMACB,OLCPREPC) </rsp>
<rsp>MBR(IMS2 ) CC( 0) LSTT(OLCPREPC,SECAMD,SECMSG) </rsp>
<rsp>MBR(IMS1 ) CC( 0) LSTT(OLCPREPC,SECAMD,SECMSG) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>
```

説明: IMS2 は、ACB メンバー・オンライン変更処理のコマンド・マスターです。すべての IMS システムがオンライン変更コミット・フェーズ 1 を終了しました。メンバー OLC は現在、コミット・フェーズ 2 です。TERM OLC コマンドを使用して、オンライン変更処理を終了することはできません。すべての更新メンバーがアクティブ ACBLIB にコミットされます。

QUERY MEMBER TYPE(IMS) SHOW(ATTRIB) コマンドの例 5

次の例では、IMS システム IMS1 で MSC の動的定義が使用可能であるかどうかを判断するために、QUERY MEMBER TYPE(IMS) SHOW(ATTRIB) コマンドが発行されます。この IMS システムでは、MSC と MODBLKS の両方のリソースに対し

て動的定義が使用可能です。NO_STM の値は、IMS システム内でシスプレックス
端末管理が使用可能でないことを示します。

TSO SPOC 入力:

```
QUERY MEMBER TYPE(IMS) SHOW(ATTRIB)
```

TSO SPOC 出力:

```
MbrName    CC LclAttr  
IMS1       0 NO-STM,DYNMODBLKS,DYNMSC
```


OM API 入力:

```
CMD (QUERY MEMBER TYPE(IMS) SHOW(ATTRIB))
```


OM API 出力:

```
<imsout>  
<ctl>  
<omname>OM10M </omname>  
<omvsn>1.7.0</omvsn>  
<xmlvsn>20 </xmlvsn>  
<statime>2014.132 20:55:40.440662</statime>  
<stotime>2014.132 20:55:40.440903</stotime>  
<staseq>CD24A74424456F95</staseq>  
<stoseq>CD24A74424547C95</stoseq>  
<rqsttkn1>USRT011 10135540</rqsttkn1>  
<rc>00000000</rc>  
<rsn>00000000</rsn>  
</ctl>  
<cmd>  
<master>IMS1 </master>  
<userid>USRT011 </userid>  
<verb>QRY </verb>  
<kwd>MEMBER </kwd>  
<input>QUERY MEMBER TYPE(IMS) SHOW(ATTRIB) </input>  
</cmd>  
<cmdrsphdr>  
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"  
  len="8" dtype="CHAR" align="left" />  
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"  
  len="4" dtype="INT" align="right" />  
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"  
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />  
<hdr s1b1="LATTR" l1b1="LclAttr" scope="LCL" sort="n" key="0"  
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" />  
</cmdrsphdr>  
<cmdrspdata>  
<rsp>MBR(IMS1 ) CC( 0) LATTR(NO-STM,DYNMODBLKS,DYNMSC) </rsp>  
</cmdrspdata>  
</imsout>
```

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

QUERY MSLINK コマンド

QUERY MSLINK コマンドは、指定された論理リンクの定義および状況に関する情報を照会するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 377 ページの『キーワード』
- 384 ページの『使用上の注意』
- 385 ページの『同等の IMS タイプ 1 コマンド』
- 385 ページの『出力フィールド』
- 398 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 例

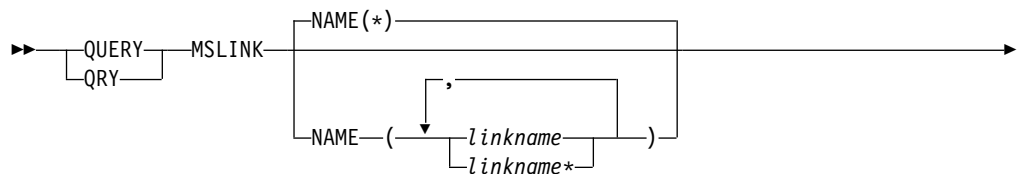
環境

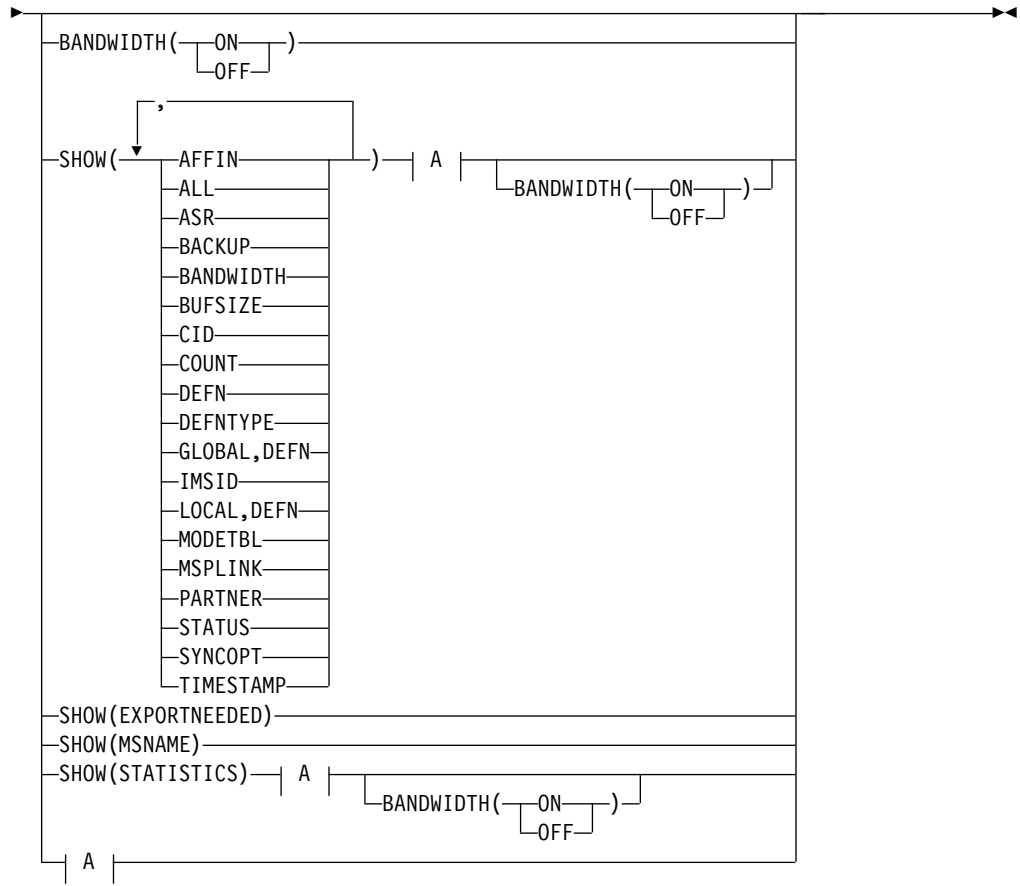
以下の表には、QUERY MSLINK コマンドおよびキーワードを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 114. QUERY MSLINK コマンドおよびキーワードの有効環境

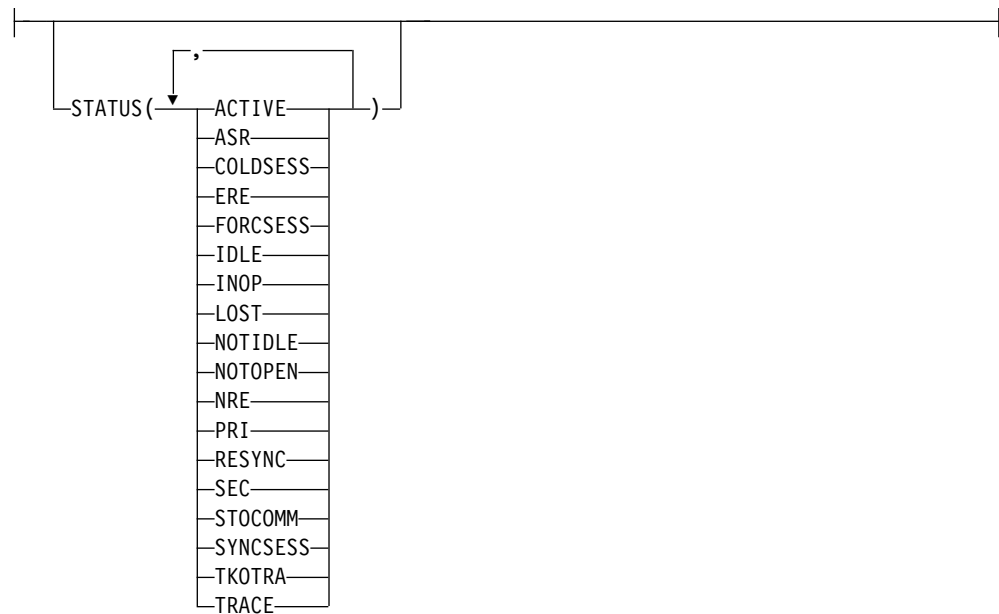
コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUERY MSLINK	X		X
NAME	X		X
BANDWIDTH	X		X
SHOW	X		X
STATUS	X		X

構文





A:



キーワード

以下のキーワードは、QUERY MSLINK コマンドに有効です。

BANDWIDTH()

このフィルターは、帯域幅モードを使用しているか、使用していないかのどちらかの論理リンクを選択します。

BANDWIDTH キーワードを指定した場合、SHOW(BANDWIDTH) を指定しない場合でも、戻される出力に帯域幅モードが含まれます。

ON 帯域幅モードを使用している論理リンクのみを選択します。

オフ

帯域幅モードを使用していない論理リンクのみを選択します。

NAME()

表示される論理リンクの名前 (1 から 8 文字) を指定します。NAME(*) は、システム内のすべてのリンクにコマンドを適用することを示します。名前にはワイルドカード (*) を指定できます。デフォルトは NAME(*) で、これはすべての MSLINK リソースを戻します。システム生成時に割り当てられた論理リンク番号は指定できません。代わりに、論理リンク名を指定する必要があります。論理リンク番号はコマンド出力として戻されます。

SHOW()

戻される MSLINK 出力フィールドを指定します。SHOW() パラメーターを指定しない場合、論理リンク名と関連の論理リンク番号のみが戻されます。

MSLINK 論理リンク名は、リンクの出力を作成した IMS の名前および完了コードとともに、常に戻されます。SHOW パラメーターでサポートされるフィルターは、以下のとおりです。

AFFIN

TCP/IP 汎用リソースまたは VTAM 汎用リソースを使用する IMS システムでは、AFFIN は、指定された論理リンクが類似性を持つ、汎用リソース・グループ内の特定の IMS システムを識別します。TCP/IP 汎用リソースの場合、AFFIN は IMS システムの IMS ID を表示します。VTAM 汎用リソースの場合、AFFIN は IMS システムの APPLID 名を表示します。

ALL

MSNAME を除く、他の SHOW パラメーター内のすべての情報が含まれます。

このフィルターは、ASR 属性と SYNCOPT 属性の値を属性としてではなく状況として表示します。

ASR

セッション障害通知 (SON) 機能の値が返されたときの自動セッション再始動 (ASR) を指定します。

ASR は、リンクの両側で ASR オプションを使用しているときに VTAM 物理リンクに割り当てられている論理リンクにのみ適用されます。

SHOW(DEFN,ASR) を指定すると、ローカルおよびリモートの ASR 値が返されます。SHOW(STATUS) を指定すると、ASR 値は状況として表示されます。

ASR は DEFN とともに指定する必要があり、そうでなければコマンドはリジェクトされます。

BACKUP

XRF 対応 IMS システムの場合、XRF テークオーバー後の TCP/IP リンクおよび VTAM リンクの自動再始動がどのように制御されるかを表示します。

論理リンクの定義で BACKUP を指定すると、関連する物理リンクの定義で指定されている切り替えオプションは、すべてオーバーライドされます。IMSCTRL マクロで HSB=YES が指定されている場合にのみ、使用してください。

BACKUP は、CREATE MSPLINK、CREATE MSLINK、または UPDATE MSPLINK の各コマンドを使用して設定できる MSC 物理リンク属性です。QUERY MSPLINK コマンドと QUERY MSLINK コマンドを使用して、物理リンクの BACKUP 値を表示できます。

重要: BACKUP は物理リンク属性ですが、CREATE MSLINK NAME(*linkname*) SET(MSPLINK(*msplinkname*)) コマンドによって、指定した物理リンクの BACKUP 値を変更することもできます。QUERY MSPLINK コマンドを使用して、更新された BACKUP 値を表示できます。また、QUERY MSLINK コマンドを使用して、物理リンクに割り当てられた MSC 論理リンク (新しく作成された論理リンクを含む) を指定することにより、更新された BACKUP 値を表示することもできます。

表示される可能性がある値は 1 以上 7 以下の整数であり、これは設定されたセッションを再確立するための優先順位です。物理または論理のいずれかのリンクの定義で BACKUP キーワードが省略されたか BACKUP に値が指定されなかった場合、デフォルトは 4 です。NO は、テークオーバー時の物理リンクのセッション・リカバリーが抑止されていることを意味します。

BACKUP は IMS が TCP/IP リンクや VTAM リンクを再始動する順序の優先順位を表示しますが、アクティブ要求は任意の順序で実行される可能性があります。これは、VTAM 内部の競合やペーシング、TCP/IP ネットワーク・トラフィックなどの可変要因によるものです。

BANDWIDTH

リンクが帯域幅モードを使用しているかどうかを表示します。

BUFSIZE

論理リンクの現行の入出力バッファ・サイズを表示します。

CID

論理リンクの VTAM 通信 ID (CID) を表示します。

COUNT

指定された論理リンクに送信されたメッセージの数、および指定された論理リンクから受信したメッセージの数を表示します。

DEFN

リソース定義を戻すように指定します。

戻される MSC 論理リンク属性には、ASR、BACKUP、BANDWIDTH、BUFSIZE、MODETBL、MSPLINK、PARTNER、SYNCOPT、リポジトリー内の作成および更新のタイム・スタンプ、および IMS ランタイムの作成および更新のタイム・スタンプがあります。

SHOW(DEFN) にその他の SHOW フィルターが指定されない場合、または IMSID フィルターが指定されている場合、すべての定義属性が戻されます。IMS システムのランタイム・リソース定義は、コマンドを受信する各 IMS によって戻されます。IMSRSC リポジトリー内の保管済みリソース定義は、コマンド・マスター IMS がリポジトリーを使用できる場合、コマンド・マスター IMS によって戻されます。

コマンド・マスター IMS は、リポジトリーから取得した汎用保管済みリソース定義ごとに応答行を戻します。それぞれの応答行には、汎用リソース定義の属性が表示されます。SHOW(DEFN) を IMSID フィルターなしで指定し、すべての IMS システムに定義されている属性値が同一の場合、汎用定義の応答行のみが戻されます。保管済みリソース定義が定義されている IMS システムの IMS ID は戻されません。IMS システムの保管済みリソース定義に、汎用保管済みリソース定義と異なる属性値が 1 つ以上含まれている場合は、属性値が異なる IMS ごとに追加の応答行が戻されます。

SHOW(DEFN,LOCAL) が指定されている場合、コマンドを受信した各 IMS により、IMS システムのランタイム・リソース定義が戻されます。

SHOW(DEFN,GLOBAL) が指定されている場合、コマンド・マスター IMS により、リポジトリーの保管済みリソース定義が戻されます。

SHOW(DEFN,GLOBAL) は、コマンド・マスター IMS がリポジトリーを使用できる場合のみ有効です。

SHOW(DEFN) にその他のパラメーターが指定されている場合、要求された定義属性のみが戻されます。例えば SHOW(DEFN,TIMESTAMP) が指定されている場合、タイム・スタンプのみが戻されます。

制約事項:

- SHOW(DEFN) は、AFFIN、CID、COUNT、DEFNTYPE、MSNAME、STATISTICS または STATUS と一緒に指定することはできません。QRY MSLINK SHOW(ALL) コマンドに対して戻される LAffin、LCID、LDefnType、LRecdCnt、LSentCnt、LSIDL、LSIDR、および LLclStat は、SHOW(DEFN) では戻されません。
- SHOW(DEFN) は、フィルター BANDWIDTH または STATUS とともに指定することはできません。
- SHOW(DEFN) を指定した場合に戻される Repo 列および IMSid 列は、SHOW(ALL) では戻されません。

リポジトリーに保管されたリソース定義を使用してリポジトリー情報を持つ応答行を判別し、ランタイム・リソース定義を使用して IMS ランタイム・リソース情報を持つ応答行を判別します。

SHOW(DEFN,IMSID) を指定すると、IMS の保管済みリソース定義が汎用リソース定義と同一であるかどうかにかかわらず、汎用保管済みリソース定義に対して応答行が返され、リポジトリーにリソースが定義されている IMS ごとに追加の応答行が返されます。

DEFNTYPE

リソースの定義に使用された定義タイプを表示します。

EXPORTNEEDED

NAME パラメーターに一致し、作成されたか最後に更新されて以降 IMSRSC リポジトリにエクスポートされたことがない MSC 論理リンク・リソースだけを QUERY コマンドで戻すよう指定します。

SHOW(EXPORTNEEDED) は、エクスポートする必要があるリソースのみを表示するため、フィルターのように動作します (QUERY MSLINK EXPORTNEEDED(Y) がサポートされる場合と同様の動作)。

NAME キーワードが省略されたか NAME(*) が指定された場合、リポジトリにエクスポートする必要がある MSC 論理リンクの名前だけが戻されません。

NAME キーワードで特定の名前が指定されたか NAME(*) 以外の総称名が指定された場合、コマンドで指定された MSC 論理リンク名ごとに 1 行ずつ、応答行が戻されます。指定された MSC 論理リンクをリポジトリにエクスポートする必要がない場合は、ExportNeeded 列に N が戻されます。

制約事項:

- SHOW(EXPORTNEEDED) は、他のいかなる SHOW パラメーターや他のキーワードとも一緒に指定することはできません。
- SHOW(EXPORTNEEDED) は、IMS で MSC リソースの動的リソース定義 (MSCRSCS=DYN) と IMSRSC リポジトリが使用可能になっている場合にのみ有効です。
- QUERY MSLINK SHOW(EXPORTNEEDED) コマンドは、XRF 代替システムでは無効です。

ヒント: IMSRSC リポジトリにエクスポートされていないリソースの場合は、次回の IMS コールド・スタートのためにリソースが使用可能になるように、/CHECKPOINT コマンドを発行してリポジトリにリソースを自動的に書き込むことができます。

GLOBAL

ローカル値とグローバル値の両方を持つ出力フィールドの場合、このオプションはグローバル値のみを戻します。GLOBAL は DEFN とともに指定する必要があります。そうでなければコマンドはリジェクトされます。特定の出力フィールドを要求するために別の SHOW キーワードと一緒に使用された場合、このオプションは指定された出力フィールドのグローバル値のみを戻すことを要求します。

SHOW(DEFN,GLOBAL,LOCAL) は SHOW(DEFN) と等価です。

IMSID

指定された名前をリソース・リストに含む IMS システムの IMS ID を戻すように指定します。SHOW(IMSID) は、コマンド・マスター IMS によってのみ処理され、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合にのみ有効です。

IMSID は、DEFN または GLOBAL 以外の SHOW キーワードとともに指定することはできません。

SHOW(DEFN,IMSID) が指定されている場合、保管済みリソース定義に加えて、定義済みのリソースが存在する各 IMS に、別個の行が戻されます。

SHOW(IMSID) が DEFN キーワードなしで指定されている場合、リソース名とともに定義済みのリソースが存在する各 IMS に別個の行が戻されます。リソース定義は戻されません。

LOCAL

ローカル値とグローバル値の両方を持つ出力フィールドの場合、このオプションはローカル値のみを戻します。LOCAL は DEFN とともに指定する必要があり、そうでなければコマンドはリジェクトされます。特定の出力フィールドを要求するために別の SHOW キーワードと一緒に使用された場合、このオプションは指定された出力フィールドのローカル値のみを戻すことを要求します。ローカル出力は、コマンドを処理する各 IMS によって戻されます。

SHOW(DEFN,LOCAL) は、コマンドを処理する IMS システムからローカルの定義属性のみを戻します。

SHOW(DEFN,GLOBAL,LOCAL) は SHOW(DEFN) と等価です。

MODETBL

指定されたリンクに関連付けられたモード・テーブル名を表示します。出力には DEF MODETBL および ACT MODETBL が含まれます。DEF MODETBL は、システム定義によって設定されたか、UPDATE コマンドを発行することにより設定された、デフォルトのモード・テーブル名です。この名前は、UPDATE コマンドまたは、非 IMS セッション開始の場合は、LOGON 出口を使用してオーバーライドできます。ACT MODETBL は、セッションを開始するために使用されるモード・テーブル名です。この名前は、セッションがアクティブの間のみ表示されます。このフィールドは、通常のセッション終了ではブランクです。

MSNAME

指定された論理リンクに割り当てられた MSNAME と、それらのリモート SYSID およびローカル SYSID を表示します。SHOW(MSNAME) が指定されている場合、STATUS() は無効です。MSNAME は、他のすべての SHOW フィルターと相互に排他的です。

MSPLINK

この論理リンクの割り当て先の物理リンクを表示します。

PARTNER

この論理リンクの現在のパートナー ID を表示します。

STATISTICS

論理リンクの統計を表示します。

MSC リンク統計は、タイプ 2 コマンド QUERY MSLINK NAME(linkname) SHOW(STATISTICS) によって表示されます。SHOW(STATISTICS) キーワードは、統計リセット・モード (RESET,CHKPT または NORESET,CHKPT) も表示します。リンク統計は、SHOW(ALL) キーワードでは表示されません。

入出力統計は帯域幅モードでのみ記録されます。

TCP/IP リンクの場合は、追加の入出力統計が記録されます。これには、ローカル側とリモート側の両方の SCI コンポーネント、IMS Connect コンポーネント、および TCP/IP コンポーネントの高、低、および合計の送信入出力時間が含まれます。

重要: CTC リンク、TCP/IP リンク、および VTAM リンクの入出力統計で正確な情報を得るには、ローカルとリモートの IMS インストール済み環境でクロックが同期化されている必要があります。

クロックが同期化されていないと、いずれかの送信入出力パス上で経過入出力時間が負の値として計算される可能性があります。QUERY MSLINK コマンドは、経過入出力時間について負の値は表示しません。

IMS では、クロックが同期化されているかどうかを判別できません。両方のパートナー IMS システムが同じプロセッサ上または同じ Sysplex 内にある場合を除いて、クロックは通常、外部方式 (External Time Reference (ETR) ハードウェア装置など) を使用して同期化されます。

MTM リンクのパートナーは常に同じプロセッサ上にあるため、タイマーは常に同期化されています。同じ SYSPLEX 内にあるパートナー IMS システムも、同期化されたタイマーを持っています。

STATUS

論理リンクの状況を表示します。

SYNCOPT

TCP/IP 物理リンクまたは VTAM 物理リンクに割り当てられている論理リンクのみを対象としており、論理リンクのセッション再同期オプションを指定します。

SYNCSSESS

セッションの再同期化に成功した場合にのみ、セッション開始を完了することを指定します。セッションの再同期化が正常に実行されるのは、セッション中の 2 つの論理装置でメッセージ・シーケンス番号が一致するか、送信側のシーケンス番号が受信側のシーケンス番号より小さくない場合のみです。

FORCSESS

セッションの再同期化が正常に行われたかどうかに関係なく、強制的にセッション開始を完了します。

SHOW(DEFN,SYNCOPT) を指定すると、ローカルおよびリポジトリの同期オプション値が返されます。SHOW(STATUS) を指定すると、同期オプション値は状況として表示されます。

SYNCOPT は DEFN とともに指定する必要があり、そうでなければコマンドはリジェクトされます。

SYNCOPT は、IMSRSC リポジトリ内のグローバル SYNCOPT 定義にのみ適用されます。STATUS(SYNCSSESS) フィルターを使用すると、ローカル SYNCOPT 定義が表示されます。

TIMESTAMP

戻された作成時間 (TimeCreate)、最終更新時間 (TimeUpdate)、最終アクセ

ス時間 (TimeAccess)、最終インポート時間 (TimeImport) のタイム・スタンプを表示します。時間は現地時間で、YYYY.JJJ HH:MM:SS:TH の形式で戻されます。

YYYY

年

JJJ

ユリウス日 (001 から 365)

HH 時 (01 から 24)

MM 分 (00 から 59)

SS 秒 (00 から 59)

TH 10 分の 1 および 100 分の 1 秒 (00 から 99)

STATUS()

指定された状況の少なくとも 1 つをもつ論理リンクを表示します。STATUS キーワードを指定すると、SHOW(STATUS) を指定しない場合でも、戻される出力に論理リンクの状況が含まれます。STATUS キーワードは、SHOW(MSNAME) と共に指定することはできません。

ACTIVE

論理リンクでは、リンク始動処理が完了しており、回線はメッセージ転送のために使用可能であることを示します。

ASR

現行の自動セッション再始動の指定を、セッション障害通知の一部として示します。

COLDSESS

論理リンクでは、始動処理が完了していないことを示します。

ERE

論理リンクでは、始動処理が完了していないことを示します。ただし、前のリンク・シャットダウンが正常に行われなかったか、IMS 緊急時再始動が実行されたかのいずれかであるため、始動された時点で、緊急時再始動の同期化が行われます。

FORCSESS

論理リンクの始動時にメッセージ再同期が試行されることを示します。再同期が失敗しても、リンクは始動されます。

IDLE

論理リンクでは何もアクティビティが進行中でないことを示します。

INOP

操作不能リンクを示します。

LOST

このリンクに対して VTAM LOSTERM EXIT がスケジュールされていることを示します。

NOTIDLE

論理リンクが同期イベントの完了を待っていることを示します。状況は、

NOTIDLE-A、NOTIDLE-B、または NOTIDLE-Cxx です。ここで、xx は、アクセス方式の命令コードの値を表します。

NOTIDLE-A

NOTIDLE-POST の状況を示します。これは、イベントが完了したが、イベントを処理するためにリンクがまだディスパッチされていないことを意味します。

NOTIDLE-B

NOTIDLE-IWAIT の状況を示します。これは、リンクは内部入出力の完了を待っていることを意味します。

NOTIDLE-Cxx

NOTIDLE-TP WAIT の状況を示します。これは、リンクが TP アクセス方式の要求の完了を待っていることを意味します。2 文字の xx には、アクセス方式の命令コードの値が示されます。リンクが VTAM の場合は、ブランクが表示されます。

NOTOPEN

リンクがオープン状況にないことを示します。

NRE

論理リンクの始動処理が完了していないことを示します。前のリンク・シャットダウンまたは IMS 再始動は正常に行われたため、論理リンクの始動時に、正常再始動の同期化が行われます。

PRI

リンクが MSC VTAM セッションの 1 次パートナーであることを示します。

RESYNC

MSC セッションの終了時に IMS リカバリー可能出力メッセージに対する肯定応答を受信しなかったことを示します。

SEC

リンクが MSC VTAM セッションの 1 次パートナーであることを示します。

STOCOMM

リンクが通信を停止したことを示します。

SYNCESS

論理リンクの始動時にメッセージ再同期が試行され、再同期に成功した場合にのみリンクが始動されることを示します。

TKOTRA

XRF 端末切り替え問題の診断に役立てるために、XRF セッションの論理リンクがテークオーバー中のみトレースされることを示します。

TRACE

論理リンクがトレースされることを示します。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。このコマンドは DB/DC および DCCTL システムに適用されます。

このコマンドの構文は XML で定義されており、OM と通信する自動化プログラムで使用できます。

SET(MSPLINK(*msplinkname*)) とともに指定された CREATE MSLINK NAME(*mslinkname*) コマンドは、コマンド内で指定された少なくとも 1 つの論理リンク属性 (ASR、BACKUP、MODETBL、または SYNCOPT) が物理リンク・タイプと競合する場合はリジェクトされます。ただし、論理リンクの作成後、UPDATE MSLINK コマンドまたは /MSASSIGN コマンドを使用して、任意のタイプの物理リンクに再度割り当てることができます。特定の物理リンク・タイプに適用される属性を指定して定義された論理リンクが、これらの属性をサポートしない別の物理リンク・タイプに再度割り当てられた場合、リンクが開始されるとこれらの属性は無視されます。

リソース定義に関する情報を表示するには、SHOW(DEFN) を指定します。リソースが定義されている IMS システムを判別し、また各 IMS システムの属性またはリソース定義を知るには、SHOW(DEFN,IMSID) を指定します。リソースが定義されている IMS システムを判別するには、SHOW(IMSID) を指定します。

QUERY MSLINK に SHOW(DEFN,BACKUP) が指定されていて、ローカル BACKUP 値が NO である一方、リポジトリ値が 1 から 7 の数値である場合、この理由はローカル IMS が XRF 対応ではないからです。QUERY MSLINK に SHOW(DEFN,BACKUP) が指定されていて、ローカル BACKUP 値が 1 から 7 である一方、リポジトリ値が NO の場合、この理由は MSLINK の前回エクスポート時にローカル IMS が XRF 対応ではなく、現在は XRF 対応になったからです。

同等の IMS タイプ 1 コマンド

以下の表は、各種の QUERY MSLINK コマンドと、類似の機能を実行するタイプ 1 IMS コマンドを示しています。

表 115. QUERY MSLINK コマンドと同等のタイプ 1 コマンド

QUERY MSLINK コマンド	類似の IMS タイプ 1 コマンド
QUERY MSLINK NAME(linkname linkname*) SHOW(ALL)	/DIS LINK link# ALL
QUERY MSLINK NAME(linkname linkname*) SHOW(MODETBL)	/DIS LINK link# ALL MODE
QUERY MSLINK NAME(linkname linkname*) SHOW(MSPLINK MSNAME)	/DIS ASSIGNMENT LINK link# ALL
QUERY MSLINK NAME(linkname linkname*) SHOW(AFFIN)	/DIS AFFIN LINK link# ALL /DIS AFFIN NODE nodename

出力フィールド

照会の出力は一連のヘッダーと値を表示します。これには、MSLINK 名と番号、コマンドを処理した IMSID、およびそのコマンドのコマンド条件コード (CC) が含まれます。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。ゼロ以外の完了コードの場合に表示される出力フィールドには *error* が表示されます。

N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

以下は、QUERY MSLINK コマンドにおける統計のヘッダーとその意味を示しています。時間と率を示すカウント・フィールドはすべて秒単位です。例えば、1.3 は、1.3 秒と同じです。.000003 は、3 マイクロ秒と同じです。その他のフィールド (バイト・カウント、メッセージ・カウントなど) は、10 進数です。率は、1 秒当たりの単位数です (例えば、CHKW_RATE は、1 秒当たりの検査書き込み数を意味します)。

表 116. QUERY MSLINK コマンドの出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
AFFIN	LAffin	AFFIN	N/A	TCP/IP 汎用リソースまたは VTAM 汎用リソースを使用する IMS システムでは、このフィールドは、リンクが類似性を持つ、汎用リソース・グループ内の IMS システムを識別します (ある場合)。TCP/IP 汎用リソースの場合、AFFIN は IMS システムの IMS ID を表示します。VTAM 汎用リソースの場合、AFFIN は IMS システムの APPLID 名を表示します。
AMRS	LAvg_Msg_Rec_SZ	STATISTICS	N/A	受信した平均メッセージ・サイズ (タイプ 01/03 メッセージ・レコード)。
AMSS	LAvg_Msg_Send_SZ	STATISTICS	N/A	送信した平均メッセージ・サイズ (タイプ 01/03 メッセージ・レコード)。
AMTB	LActMdtbl	MODETBL	N/A	論理リンクのアクティブ VTAM ログオン・モード・テーブル項目。
APT	LAvg_Proc_Time	STATISTICS	N/A	ディスパッチ当たりの平均リンク処理時間 (TPT を TDN で除算して計算)。
AQGT	LAvg_Qget_Time	STATISTICS	N/A	送信メッセージを処理するための QMGR 呼び出し (GU または DEQ) の平均時間。

表 116. QUERY MSLINK コマンドの出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
AQPT	LAvg_Qput_Time	STATISTICS	N/A	受信メッセージを処理するための平均 QMGR 呼び出し (ISRT または ENQ)。
ASR	LASR	ASR	LCL	現行の自動セッション再始動の指定を、セッション障害通知の一部として示します。出力は、ローカル IMS から戻されます。
BANDW	LBandwidth	BANDW	N/A	帯域幅モードの現在の使用状況。
BKUP	LBackUp	BACKUP	N/A	XRF テークオーバー後の TCP/IP リンクおよび VTAM リンクの自動再始動。
BSR	LSend_MsgByte_Rate	STATISTICS	N/A	MSC リンクから 1 秒あたりに送信されたメッセージ・バイト数。送信される各メッセージの送信時間は、送信するメッセージを取得するための Get Unique (GU) から、応答を受け取ったときにメッセージをデキューするまでの時間です。メッセージを送信している間のリンクのアイドル時間は無視されます。
BUFSZ	LBufSize	BUFSIZE	N/A	論理リンクの入出力バッファ・サイズ。
CID	LCID	CID	N/A	VTAM 通信 ID。
CNTR	LRecdCnt	COUNT	N/A	指定されたリンクから受信したメッセージの数。
CNTS	LSentCnt	COUNT	N/A	指定されたリンクで送信したメッセージの数。
CWION	LChkwIO_CT	STATISTICS	N/A	Get Unique (GU) または Insert (ISRT) 呼び出しがロガー先行書き込みデータ・セット (WADS) に書き込まれる (入出力) 結果となった、ロガー検査書き込みの数。
CWN	LChkw_CT	STATISTICS	N/A	ロガー検査書き込みの数。検査書き込みは、メッセージが確実にログに記録されるようにするためのロガーへの要求です (例えば、メッセージ Get Unique は送信側でログに記録され、Insert は受信側でログに記録されます)。

表 116. QUERY MSLINK コマンドの出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
CWR	LChkw_Rate	STATISTICS	N/A	ロガー検査書き込み率 (CWR を統計の記録時間で除算して計算)。
DFNT	LDefnType	DEFNTYPE	N/A	定義タイプ。次のうちのいずれか 1 つが可能です。 CREATE CREATE LTERM コマンドにより定義されます。 MSCGEN IMS RESLIB の DFSCLL3x メンバー内のシステム定義により定義されます。 UPDATE IMS RESLIB の DFSCLL3x メンバー内のシステム定義により定義されます。ただし、少なくとも 1 つの属性を変更した /CHANGE LINK コマンド、/MSASSIGN LINK コマンド、または UPDATE コマンドによって、オンライン・メモリー内で変更されています。 次回の IMS コールド・スタート時に、定義は DFSCLL3x メンバー内の定義に戻ります。
DMTB	LDefMdtbl	MODETBL	N/A	デフォルト VTAM ログオン・モード・テーブル項目 (システム定義で設定された、または UPDATE コマンドによって変更された)。
EXPN	ExportNeeded	EXPORTNEEDED	LCL	MSC 論理リンクが IMSRSC リポジトリにエクスポートされたかどうかを示します。値は Y または N のどちらかです。
HLISIOT	LHiLocIconSendIOTime	STATISTICS	N/A	ローカル IMS Connect インスタンスが SCI からの 1 つのメッセージを処理し、それを TCP/IP に送信するために要した最長時間間隔。

表 116. QUERY MSLINK コマンドの出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
HLSSIOT	LHiLocSciSendIOTime	STATISTICS	N/A	ローカル SCI インスタンスが、IMS からの 1 つのメッセージを処理し、それをローカル IMS Connect に送信するために要した最長時間間隔。
HMRS	LHi_Msg_Rec_SZ	STATISTICS	N/A	受信した最大メッセージ・サイズ (タイプ 01/03 メッセージ・レコード)。
HMSS	LHi_Msg_Send_SZ	STATISTICS	N/A	送信した最大メッセージ・サイズ (タイプ 01/03 メッセージ・レコード)。
HPT	LHi_Proc_Time	STATISTICS	N/A	リンクが処理のためにディスパッチされた最高 (最長) の時間。
HQGT	LHi_Qget_Time	STATISTICS	N/A	送信メッセージを処理するための最高 (最長) QMGR 呼び出し (GU または DEQ)。
HQPT	LHi_Qput_Time	STATISTICS	N/A	受信メッセージを処理するための最高 (最長) QMGR 呼び出し (ISRT または ENQ)。
HRIOT	LHi_RecIO_Time	STATISTICS	N/A	メッセージを受信するための最高 (最長) 入出力時間。
HRISIoT	LHiRmtIconSendIOTime	STATISTICS	N/A	リモート IMS Connect インスタンスが、TCP/IP からの 1 つのメッセージを処理し、それをリモート SCI に送信するために要した最長時間間隔。
HRSSIOT	LHiRmtSciSendIOTime	STATISTICS	N/A	リモート SCI インスタンスが、リモート IMS Connect インスタンスからの 1 つのメッセージを処理し、それをリモート IMS システムに送信するために要した最長時間間隔。
HSIoT	LHi_SentIO_Time	STATISTICS	N/A	メッセージを送信するための最高 (最長) 入出力時間。
HTCSIOT	LHiTcpiSendIOTime	STATISTICS	N/A	1 つのメッセージを、ローカル IMS Connect インスタンスから TCP/IP ネットワーク上のリモート IMS Connect インスタンスに伝送するために要した最長時間間隔。

表 116. QUERY MSLINK コマンドの出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
IMSID	IMSid	IMSID	GBL	定義されたりソースを持つ IMSID をリポジトリから返します。
LINKN	LMSLink#	キーワードなし、または DEFN、または DEFN,LOCAL	LCL	論理リンク番号
LLSIOT	LLowLocIconSendIOTime	STATISTICS	N/A	ローカル IMS Connect インスタンスが SCI からの 1 つのメッセージを処理し、それを TCP/IP に送信するために要した最短時間間隔。
LLSSIOT	LLowLocSciSendIOTime	STATISTICS	N/A	ローカル SCI インスタンスが、IMS からの 1 つのメッセージを処理し、それをローカル IMS Connect に送信するために要した最短時間間隔。
LMRS	LLow_Msg_Rec_SZ	STATISTICS	N/A	受信した最小メッセージ・サイズ (タイプ 01/03 メッセージ・レコード)。
LMSS	LLow_Msg_Send_SZ	STATISTICS	N/A	送信した最小メッセージ・サイズ (タイプ 01/03 メッセージ・レコード)。
LPT	LLow_Proc_Time	STATISTICS	N/A	リンクが処理のためにディスパッチされた最低 (最短) 時間。
LQGT	LLow_Qget_Time	STATISTICS	N/A	送信メッセージを処理するための最低 (最短) QMGR 呼び出し (GU または DEQ)。
LQPT	LLow_Qput_Time	STATISTICS	N/A	受信メッセージを処理するための最低 (最短) QMGR 呼び出し (ISRT または ENQ)。
LRIOT	LLow_RecIO_Time	STATISTICS	N/A	メッセージを受信するための最低 (最短) 入出力時間。
LRISIOT	LLowRmtIconSendIOTime	STATISTICS	N/A	リモート IMS Connect インスタンスが、TCP/IP からの 1 つのメッセージを処理し、それをリモート SCI に送信するために要した最短時間間隔。

表 116. QUERY MSLINK コマンドの出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
LRSSIOT	LLowRmtSciSendIOTime	STATISTICS	N/A	リモート SCI インスタンスが、リモート IMS Connect インスタンスからの 1 つのメッセージを処理し、それをリモート IMS システムに送信するために要した最短時間間隔。
LSIOT	LLow_SendIO_Time	STATISTICS	N/A	メッセージを送信するための最低 (最短) 入出力時間。
LSTT	LLclStat	STATUS	N/A	論理リンクの現在の状況。返される可能性がある状況値については、STATUS キーワードの説明を参照してください。
LTCSIOT	LLowTcpiSendIOTime	STATISTICS	N/A	1 つのメッセージを、ローカル IMS Connect インスタンスから TCP/IP ネットワーク上のリモート IMS Connect インスタンスに伝送するために要した最短時間間隔。
MSN	LMSName	MSNAME	N/A	論理リンクに関連付けられた MSNAME。
MSP	LMSPLink	MSPLINK	N/A	論理リンクの割り当て先の物理リンク。
MSR	LSend_MsgCT_Rate	STATISTICS	N/A	MSC リンクによって 1 秒当たりに送信されたメッセージ数。送信される各メッセージの送信時間は、送信するメッセージを取得するための Get Unique (GU) から、応答を受け取ったときにメッセージをデキューするまでの時間です。メッセージを送信している間のリンクのアイドル時間は無視されます。
PID	LPID	PARTNER	N/A	リンクのパートナー ID。
RASR	ASR	ASR および DEFN	GBL	現行の自動セッション再始動の指定を、セッション障害通知の一部として示します。出力は、リポジトリーから戻されます。
RBANDW	Bandwidth	BANDWIDTH および DEFN	GBL	帯域幅モードの現在の使用状況。出力は、リポジトリーから戻されます。

表 116. QUERY MSLINK コマンドの出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
RBKUP	BackUp	BACKUP および DEFN	GBL	XRF テークオーバー後の TCP/IP リンクおよび VTAM リンクの自動再始動。出力 は、リポジトリから戻され ます。
RBR	LRecIO_Byte_Rate	STATISTICS	N/A	受信率 (バイト/秒)。これ は、受信した総バイト数 (TBRC) を合計受信時間 (TRT) で除算して計算しま す。
RBUFSZ	BufSize	BUFSIZE および DEFN	GBL	論理リンクの入出力バッファ ー・サイズ。出力は、リポジ トリから戻されます。
RDMTB	DefMdtbl	DEFN および MODETBL	GBL	この端末のセッションが確立 されるときに使用される SNA バインド・パラメータ ーが入っている、VTAM ログ オン・モード・テーブル項目 (ログオン・モード名)。出力 は、リポジトリから戻され ます。
REPO	Repo	DEFN	GBL	行が保管済みリソース定義を 表示しているかどうかを示し ます。 Y リポジトリ定義を 示します。 (ブランク) ローカル定義を示し ます。
RIOR	LRecIO_Req_Rate	STATISTICS	N/A	1 秒当たりの受信入出力要求 数。これは、総受信数 (TRN) を合計受信入出力時間 (TRIOT) で除算して計算しま す。
RMSP	MSPLink	DEFN および MSPLINK	GBL	論理リンクの割り当て先の物 理リンク。出力は、リポジト リから戻されます。
RMT	LRec_Msg_Time	STATISTICS	N/A	受信された最初と最後のメッ セージ間の時間間隔。1 ブロ ックのメッセージのベンチマ ーク・テスト用に使用されま す。
RPID	PID	DEFN および PARTNER	GBL	リンクのパートナー ID。出力 は、リポジトリから戻され ます。

表 116. QUERY MSLINK コマンドの出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
RSYNC	SyncOpt	DEFN および SYNCOPT	GBL	論理リンクのセッション再同期オプションを示します。出力は、リポジトリから戻されます。
RTMCR	TimeCreate	DEFN	GBL	リポジトリでの作成時刻。これは、リポジトリ内で最初にリソースが作成された時刻です。
RTMUP	TimeUpdate	DEFN	GBL	リポジトリでの更新時刻。これは、リポジトリ内で最後にリソースが更新された時刻です。
RSYNC	SyncOpt	DEFN および SYNCOPT	GBL	論理リンクのセッション再同期オプションを示します。出力は、リポジトリから戻されます。
SBR	LSendIO_Byte_Rate	STATISTICS	N/A	送信率 (バイト/秒)。これは、送信した総バイト数 (TBSC) を合計送信時間 (TSIOT) で除算して計算します。
SIDL	LSIDL	MSNAME	N/A	関連の MSNAME のローカル・システム ID。
SIDR	LSIDR	MSNAME	N/A	関連の MSNAME のリモート・システム ID。
SIOR	LSendIO_Req_Rate	STATISTICS	N/A	1 秒当たりの送信入出力要求数。これは、総送信数 (TSN) を合計送信入出力時間 (TSIOT) で除算して計算します。
SMT	LSend_Msg_Time	STATISTICS	N/A	送信した最初と最後のメッセージ間の時間間隔。1 ブロックのメッセージのベンチマーク・テスト用に使用されます。
SOPT	LOption	STATISTICS	N/A	統計リセット・オプション。RESET,CHKPT (統計は、各 IMS チェックポイントでリセットされる) または NORESET,CHKPT (統計は、IMS チェックポイントでリセットされない)。

表 116. QUERY MSLINK コマンドの出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
STIM	LStart_Time	STATISTICS	N/A	<p>統計の開始日と地方時。オプション RESET,CHKPT の場合、これは最終 IMS チェックポイント時刻になります。オプション NORESET,CHKPT の場合、これは最後の UPDATE MSLINK START STATISTICS OPTION (RESET) コマンドが発行された時刻になります。フォーマットは yyyy.ddd hh.mm.ss.tt です。ここで、</p> <p>yyyy 4 桁の年</p> <p>ddd ユリウス日</p> <p>hh 時刻、00 から 23</p> <p>mm 分、00 から 59</p> <p>ss 秒、00 から 59</p> <p>tt 10 分の 1 秒、0 から 9</p> <p>hh 100 分の 1 秒、0 から 9</p>
TBRC	LTot_Byte_Rec_CT	STATISTICS	N/A	<p>受信したデータの総バイト数 (メッセージ・データ、応答データ、および帯域幅モードで使用される内部メッセージ制御ブロックが含まれます)。</p>
TBSC	LTot_Byte_Send_CT	STATISTICS	N/A	<p>送信したデータの総バイト数 (メッセージ・データ、応答データ、および帯域幅モードで使用される内部メッセージ制御ブロックが含まれます)。</p>
TDN	LTot_Dispatch_CT	STATISTICS	N/A	<p>論理リンク ITASK がディスパッチされた回数。通常の送信または受信メッセージ操作には、2 回のディスパッチが必要です。送信のために 1 回と確認応答の処理のために 1 回、あるいは受信のために 1 回と確認応答の送信のために 1 回です。</p>

表 116. QUERY MSLINK コマンドの出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
TLISIOT	LTotLocIconSendIOTime	STATISTICS	N/A	ローカル IMS Connect インスタンスが SCI からのすべてのメッセージを処理し、それらを TCP/IP に送信するために要した合計時間。
TLSSIOT	LTotLocSciSendIOTime	STATISTICS	N/A	ローカル SCI インスタンスが、IMS からのすべてのメッセージを処理し、それらをローカル IMS Connect に送信するために要した合計時間。
TMAC	LTimeAccess	TIMESTAMP	N/A	リソースが最後にアクセスされた時刻。これはまだサポートされていません。
TMBRC	LTot_MsgByte_Rec_CT	STATISTICS	N/A	受信したデータのメッセージ・バイトの合計カウント。これには、メッセージ接頭語およびユーザー・データ・セグメント (例えば、タイプ 01/03 ログ・レコード内のすべてのデータ) が含まれます。
TMBSC	LTot_MsgByte_Send_CT	STATISTICS	N/A	送信したデータのメッセージ・バイトの合計カウント。これには、メッセージ接頭語およびユーザー・データ・セグメント (例えば、タイプ 01/03 ログ・レコード内のすべてのデータ) が含まれます。
TMCR	LTimeCreate	TIMESTAMP	N/A	CREATE MSLINK コマンド、MSC 論理リンクを作成する IMPORT コマンド、または IMS コールド・スタートによってリソースが作成された時刻。作成時刻は、IMS ウォーム・スタートにまたがって保持されます。出力は、ローカル IMS から戻されます。

表 116. QUERY MSLINK コマンドの出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
TMIM	LTimeImport	TIMESTAMP	N/A	リソースが最後にインポートされた時刻 (該当する場合)。リソースが IMS コールド・スタート時に IMSRSC リポジトリーから自動的にインポートされた場合、ローカル・インポート・タイム・スタンプは IMS コールド・スタート時刻に設定されます。インポート時刻は、IMS ウォーム・スタートと緊急時再始動にまたがって保持されます。出力は、ローカル IMS から戻されます。
TMRN	LTot_Msg_Rec_CT	STATISTICS	N/A	受信したメッセージの総数。
TMSN	LTot_Msg_Send_CT	STATISTICS	N/A	送信したメッセージの合計カウント。
TMUP	LTimeUpdate	TIMESTAMP	N/A	UPDATE MSLINK コマンドの結果として実行時リソース定義の属性が更新された最終時刻。更新時刻は、ウォーム・スタートや緊急時再始動を越えて保持されます。出力値は、ローカル IMS から取得されます。
TPT	LTot_Proc_Time	STATISTICS	N/A	処理のために論理リンク ITASK がディスパッチされた合計時間。これには、ITASK がディスパッチされていた間の待ち時間が含まれます。この時間は、秒単位 (マイクロ秒までの分解能) です。
TQGN	LTot_Qget_CT	STATISTICS	N/A	処理用にメッセージをキュー (ローカル・キューまたは共用キュー) から取り出すために出された QMGR 呼び出しの合計カウント。これには、Get Unique (GU) 呼び出しおよびデキュー (DEQ) 呼び出しが含まれます。

表 116. QUERY MSLINK コマンドの出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
TQGT	LTot_Qget_Time	STATISTICS	N/A	処理用にメッセージをキュー (ローカル・キューまたは共有キュー) から取り出すために出された QMGR 呼び出しの合計処理時間。これには、Get Unique (GU) 呼び出しおよびデキュー (DEQ) 呼び出しが含まれます。呼び出しが MSC ITASK によって出されてから、呼び出しが QMGR から戻るまでの時間が計算されます。
TQPN	LTot_Qput_CT	STATISTICS	N/A	処理用にメッセージをキュー (ローカル・キューまたは共有キュー) に入れるために出された QMGR 呼び出しの合計カウント。これには、挿入 (ISRT) およびエンキュー (ENQ) 呼び出しが含まれます。
TQPT	LTot_Qput_Time	STATISTICS	N/A	処理用にメッセージをキュー (ローカル・キューまたは共有キュー) に入れるために出された QMGR 呼び出しの合計処理時間。これには、挿入 (ISRT) およびエンキュー (ENQ) 呼び出しが含まれます。呼び出しが MSC ITASK によって出されてから、呼び出しが QMGR から戻るまでの時間が計算されます。
TRIOT	LTot_ReclO_Time	STATISTICS	N/A	メッセージを受信するための入出力の合計時間。これは、受信を処理するためにアクセス方式が呼び出されてから、メッセージを送信するためにパートナー IMS アクセス方式が呼び出されるまでの時間です。これは、データがメディア (例えば、CTC リンク、メモリー、またはネットワーク) を横断するための、各サイドでのアクセス方式呼び出しの相互間の経過時間です。

表 116. QUERY MSLINK コマンドの出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
TRISIOT	LTotRmtIconSendIOTime	STATISTICS	N/A	リモート IMS Connect インスタンスが、TCP/IP からのすべてのメッセージを処理し、それらをリモート SCI に送信するために要した合計時間。
TRN	LTot_Req_CT	STATISTICS	N/A	アクセス方式から受信した受信入出力要求の合計カウント。
TRSSIOT	LTotRmtSciSendIOTime	STATISTICS	N/A	リモート SCI インスタンスが、リモート IMS Connect インスタンスからのすべてのメッセージを処理し、それらをリモート IMS システムに送信するために要した合計時間。
TSIOT	LTot_SendIO_Time	STATISTICS	N/A	メッセージを送信するための入出力の合計時間。これは、送信を処理するためにアクセス方式が呼び出されてから、メッセージを受信した時点でパートナー IMS ITASK アクセス方式がディスパッチされるまでの時間です。これは、データがメディア (例えば、CTC リンク、メモリー、またはネットワーク) を横断するための、各サイドでのアクセス方式呼び出しの相互間の経過時間です。
TSN	LTot_Send_CT	STATISTICS	N/A	アクセス方式に対して出された送信入出力要求の合計カウント。
TTCSIOT	LTotTcpiSendIOTime	STATISTICS	N/A	すべてのメッセージを、ローカル IMS Connect インスタンスから TCP/IP ネットワーク上のリモート IMS Connect インスタンスに伝送するために要した合計時間。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY MSLINK コマンドの結果として戻される戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 117. QUERY MSLINK コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY MSLINK コマンドは正常に完了しました。
X'00000004'	X'00001010'	以下のいずれかの理由により、戻すリソースが検出されませんでした。 <ul style="list-style-type: none"> 指定されたリソース名が無効である可能性があります。 指定したフィルターと一致するリソースがありませんでした。 SHOW(EXPORTNEEDED) が指定されていた場合は、IMSRSC リポジトリにエクスポートする必要があるリソースがありませんでした。
X'00000008'	X'00002040'	QUERY MSLINK コマンドで、複数のフィルター値が指定されています。
X'0000000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。完了コードについて詳しくは、401 ページの表 118を参照してください。
X'0000000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。完了コードについて詳しくは、401 ページの表 118を参照してください。
X'00000010'	X'0000400C'	XRF 代替システムではコマンドは無効です。
X'00000010'	X'0000401C'	FDDBR 領域ではコマンドは無効です。

表 117. QUERY MSLINK コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000010'	X'0000402D'	MSC リソースの動的リソース定義が使用可能でない、つまり MSCRSCS=DYN が DFSDFxxx メンバー内で定義されていないために、コマンドは正常に実行されませんでした。
X'00000010'	X'00004104'	RM アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'00004108'	SCI アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'00004500'	IMS は IMSRSC リポジトリーを使用できません。
X'00000010'	X'00004501'	RM は IMSRSC リポジトリーには使用できません。
X'00000010'	X'00004502'	IMSRSC リポジトリーは使用可能ではありません。
X'00000010'	X'00004504'	IMSRSC リポジトリー・スペースのリカバリーが進行中です。
X'00000010'	X'00004505'	IMS リソース・リストが存在しないか、IMS リソース・リスト内に該当するリソース・タイプのリソースが存在しません。
X'00000010'	X'00004507'	IMSRSC リポジトリー・アクセスは拒否されます。
X'00000010'	X'00004508'	リポジトリーの最大入力長を超過しました。
X'00000010'	X'00004509'	RM データのバージョンは IMS データのバージョンよりも低いバージョンです。
X'00000010'	X'0000450A'	リポジトリー・サーバー (RS) をシャットダウンしています。
X'00000010'	X'0000450B'	リポジトリー・サーバー (RS) は使用できません。
X'00000010'	X'0000450C'	リポジトリー・サーバー (RS) は使用中です。
X'00000010'	X'0000450D'	RM は、IMSRSC リポジトリーに関連した一部の内部フィールドの定義に失敗しました。

表 117. QUERY MSLINK コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファーを取得できなかったため、QUERY MSLINK コマンド処理は終了しました。
X'00000014'	X'00005100'	RM 要求エラー。
X'00000014'	X'00005104'	CQS エラー。
X'00000014'	X'00005108'	SCI 要求エラー。
X'00000014'	X'00005110'	リポジトリ・エラー。
X'00000014'	X'0000551C'	リソース・リストが使用できないため、QUERY MSLINK コマンドは拒否されました。IBM ソフトウェア・サポートに連絡して、以下の情報を提供してください。 <ul style="list-style-type: none"> エラーの原因となったコマンドからの出力。 コマンドが実行されたローカル RM アドレス・スペースのダンプまたは IMSplex 内のすべての RM アドレス・スペースのダンプ。 IMSRSC リポジトリ RID データ・セットおよび RMD データ・セットのコピー。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 118. QUERY MSLINK コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		QUERY MSLINK コマンドは、リソースに対して正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	MSLINK 名が無効であるか、指定されたワイルドカード・パラメーターがどのリソース名にも一致しません。

QUERY MSLINK コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QUERY MSLINK NAME(LNK12C01, LNK12V01, LNK12M01, LNK12T01) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

MSLink	LMSLink#	MbrName	CC	LMSPLink	LCID	LPID	LRecdCnt	LSentCnt
LNK12C01	2	IMS1	0	PLNK12C		AC	0	0
LNK12M01	3	IMS1	0	PLNK12M		AD	0	0
LNK12T01	22	IMS1	0	PLNK12TA		TA	0	0
LNK12V01	1	IMS1	0	PLNK12V	00000000	AB	0	0

(右にスクロール、画面 2)

MSLink	LMSLink#	MbrName	LDefMdtb1	LBufSize	LBandwidth	LAffin
LNK12C01	2	IMS1		1024	OFF	
LNK12M01	3	IMS1		1024	OFF	
LNK12T01	22	IMS1		65536	ON	
LNK12V01	1	IMS1		1024	OFF	

(右にスクロール、画面 3)

MSLink	LMSLink#	MbrName	LclStat	LBackUp
LNK12C01	2	IMS1	STOCOMM, IDLE, NOTOPEN	
LNK12M01	3	IMS1	STOCOMM, IDLE, COLDSESS	
LNK12T01	22	IMS1	STOCOMM, IDLE, COLDSESS, SYNCSESS	NO
LNK12V01	1	IMS1	STOCOMM, IDLE, COLDSESS, SYNCSESS	NO

(右にスクロール、画面 4)

MSLink	LMSLink#	MbrName	LTimeCreate
LNK12C01	2	IMS1	2014.282 15:59:39.74
LNK12M01	3	IMS1	2014.282 15:59:39.74
LNK12T01	22	IMS1	2014.282 15:59:39.74
LNK12V01	1	IMS1	2014.282 15:59:39.74

(右にスクロール、画面 5)

MSLink	LMSLink#	MbrName	LTimeUpdate	LTimeAccess	LDefnType
LNK12C01	2	IMS1			MSCGEN
LNK12M01	3	IMS1			MSCGEN
LNK12T01	22	IMS1			MSCGEN
LNK12V01	1	IMS1			MSCGEN

OM API 入力:

CMD(QRY MSLINK NAME(LNK12C01, LNK12V01, LNK12M01, LNK12T01) SHOW(ALL))

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.7.0</omvsn>
<xm1vsn>20 </xm1vsn>
<statime>2014.283 16:40:17.403520</statime>
<stotime>2014.283 16:40:17.403851</stotime>
<staseq>CDE247CF8E680574</staseq>
<stoseq>CDE247CF8E7CB0F4</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10094017</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>MSLINK </kwd>
```

```

<input>QUERY MSLINK NAME(LNK12C01,LNK12V01,LNK12M01,LNK12T01) SHOW(ALL)
</input>
</cmd>
<cmdsphdr>
<hdr slbl="MSL" llbl="MSLink" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr slbl="LINKN" llbl="LMSLink#" scope="LCL" sort="a" key="2"
  scroll="no" len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr slbl="MBR" llbl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="4" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr slbl="CC" llbl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr slbl="MSP" llbl="LMSPLink" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr slbl="CID" llbl="LCID" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="INT" align="left" skipb="yes" />
<hdr slbl="PID" llbl="LPID" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr slbl="CNTR" llbl="LRecdCnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr slbl="CNTS" llbl="LSentCnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr slbl="DMTB" llbl="LDefMdtbl" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr slbl="AMTB" llbl="LActMdtbl" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr slbl="BUFSZ" llbl="LBufSize" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr slbl="BANDW" llbl="LBandwidth" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr slbl="AFFIN" llbl="LAffin" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr slbl="LSTT" llbl="LclStat" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr slbl="BKUP" llbl="LBackUp" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="2" dtype="CHAR" align="right" skipb="yes" />
<hdr slbl="TMCR" llbl="LTimeCreate" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr slbl="TMUP" llbl="LTimeUpdate" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr slbl="TMAC" llbl="LTimeAccess" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr slbl="TMIM" llbl="LTimeImport" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr slbl="DFNT" llbl="LDefnType" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
</cmdsphdr>
<cmdspdata>
<rsp>MSL(LNK12C01) LINKN(2) MBR(IMS1) CC( 0) MSP(PLNK12C ) PID(AC)
  CNTR(0) CNTS(0) BUFSZ(1024) BANDW(OFF ) LSTT(STOCOMM,IDLE,NOTOPEN)
  TMCR(2014.282 15:59:39.74) DFNT(MSCGEN) </rsp>
<rsp>MSL(LNK12V01) LINKN(1) MBR(IMS1) CC( 0) MSP(PLNK12V )
  CID(00000000) PID(AB) CNTR(0) CNTS(0) BUFSZ(1024) BANDW(OFF )
  LSTT(STOCOMM,IDLE,COLDSESS,SYNCSESS) BKUP(NO) TMCR(2014.282
  15:59:39.74) DFNT(MSCGEN) </rsp>
<rsp>MSL(LNK12M01) LINKN(3) MBR(IMS1) CC( 0) MSP(PLNK12M ) PID(AD)
  CNTR(0) CNTS(0) BUFSZ(1024) BANDW(OFF ) LSTT(STOCOMM,IDLE,COLDSESS)
  TMCR(2014.282 15:59:39.74) DFNT(MSCGEN) </rsp>
<rsp>MSL(LNK12T01) LINKN(22) MBR(IMS1) CC( 0) MSP(PLNK12TA) PID(TA)
  DMTB(
  ) CNTR(0) CNTS(0) BUFSZ(65536) BANDW(ON )
  LSTT(STOCOMM,IDLE,COLDSESS,SYNCSESS) BKUP(NO) TMCR(2014.282
  15:59:39.74) DFNT(MSCGEN) </rsp>
</cmdspdata>
</imsout>

```

説明: 各リンク・タイプの 1 つの MSC 論理リンクについて、QUERY MSLINK コマンドが発行されています。可能な多数のヘッダーが表示されています。

QUERY MSLINK コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
QUERY MSLINK NAME(LNK12*02) SHOW(MSNAME)
```

TSO SPOC 出力:

MSLink	LMSLink#	MbrName	CC	LMSName	LSIDR	LSIDL
LNK12C02	18	IMS1	0	LINK12C2	92	72
LNK12M02	9	IMS1	0	ELINK126	54	46
LNK12T02	23	IMS1	0	LINK12T2	85	75
LNK12T02	23	IMS1	0	LINK12T3	97	75
LNK12V02	10	IMS1	0	LINK12Y	90	500
LNK12V02	10	IMS1	0	LINK13V	266	2036
LNK12V02	10	IMS1	0	LINK13X	80	300
LNK12V02	10	IMS1	0	LINK12V1	20	10
LNK12V02	10	IMS1	0	LINK13V1	36	16
LNK12V02	10	IMS1	0	LINK12V	256	1012

OM API 入力:

```
CMD(QRY MSLINK NAME(LNK12*02) SHOW(MSNAME))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.7.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2014.283 16:56:50.714836</statime>
<stotime>2014.283 16:56:50.715191</stotime>
<staseq>CDE24B82DA0D46F4</staseq>
<stoseq>CDE24B82DA2370F4</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10095650</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>MSLINK </kwd>
<input>QRY MSLINK NAME(LNK12*02) SHOW(MSNAME) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="MSL" l1bl="MSLink" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="LINKN" l1bl="LMSLink#" scope="LCL" sort="a" key="2"
  scroll="no" len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="4" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="MSN" l1bl="LMSName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="SIDR" l1bl="LSIDR" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="SIDL" l1bl="LSIDL" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
</cmdrsphdr>
```



```

<cmdrspdata>
<rsp>MSL(LNK12002) LINKN(5) MBR(IMS1) CC( 0) MSN(ELINK120) SIDR(26)
SIDL(16) </rsp>
<rsp>MSL(LNK12002) LINKN(5) MBR(IMS1) CC( 0) MSN(ELINK122) SIDR(29)
SIDL(19) </rsp>
<rsp>MSL(LNK12M02) LINKN(9) MBR(IMS1) CC( 0) MSN(ELINK126) SIDR(54)
SIDL(46) </rsp>
<rsp>MSL(LNK12V02) LINKN(10) MBR(IMS1) CC( 0) MSN(LINK12V1) SIDR(20)
SIDL(10) </rsp>
<rsp>MSL(LNK12V02) LINKN(10) MBR(IMS1) CC( 0) MSN(LINK13V1) SIDR(36)
SIDL(16) </rsp>
<rsp>MSL(LNK12V02) LINKN(10) MBR(IMS1) CC( 0) MSN(LINK12V ) SIDR(256)
SIDL(1012) </rsp>
<rsp>MSL(LNK12V02) LINKN(10) MBR(IMS1) CC( 0) MSN(LINK12Y ) SIDR(90)
SIDL(500) </rsp>
<rsp>MSL(LNK12V02) LINKN(10) MBR(IMS1) CC( 0) MSN(LINK13V ) SIDR(266)
SIDL(2036) </rsp>
<rsp>MSL(LNK12V02) LINKN(10) MBR(IMS1) CC( 0) MSN(LINK13X ) SIDR(80)
SIDL(300) </rsp>
<rsp>MSL(LNK12C02) LINKN(18) MBR(IMS1) CC( 0) MSN(LINK12C2) SIDR(92)
SIDL(72) </rsp>
<rsp>MSL(LNK12T02) LINKN(23) MBR(IMS1) CC( 0) MSN(LINK12T2) SIDR(85)
SIDL(75) </rsp>
<rsp>MSL(LNK12T02) LINKN(23) MBR(IMS1) CC( 0) MSN(LINK12T3) SIDR(97)
SIDL(75) </rsp>
<rsp>MSL(LNK12X02) LINKN(26) MBR(IMS1) CC( 0) MSN(LINK12X2) SIDR(88)
SIDL(78) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: ワイルドカード名に一致するすべての MSC 論理リンクを表示するために QUERY MSLINK コマンドがワイルドカード・パラメーターを指定して発行されており、MSC 論理リンク・パス (MSNAME) 名、ローカル SYSID、およびリモート SYSID が表示されています。

QUERY MSLINK コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
QUERY MSLINK NAME(LNK31V02, LNK32M01, LNK32C01, LNK32T01, LNKV001) SHOW(DEFN)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

MSLink	LMSLink#	MbrName	CC	Repo	IMSid	MSPLink	LMSPLink	PID	LPID
LNKV001		IMS1	0	Y		PLNKV001		ZA	
LNKV001	33	IMS1	0		IMS1		PLNKV001		ZA
LNK31V02		IMS1	0	Y		PLNKSON1		SA	
LNK31V02	8	IMS1	0		IMS1		PLNKSON1		SA
LNK32C01		IMS1	0	Y		PLNK23CA		BD	
LNK32C01	12	IMS1	0		IMS1		PLNK23CA		BD
LNK32M01		IMS1	0	Y		PLNK23M		BE	
LNK32M01	3	IMS1	0		IMS1		PLNK23M		BE
LNK32T01		IMS1	0	Y		PLNK32TA		TD	
LNK32T01	20	IMS1	0		IMS1		PLNK32TA		TD

(screen 2)

MSLink	LMSLink#	MbrName	Repo	DefMdtb1	LDefMdtb1	BufSize	LBufSize
LNKV001		IMS1	Y			4096	
LNKV001	33	IMS1					4096
LNK31V02		IMS1	Y	MTMSCVAA		1024	
LNK31V02	8	IMS1			MTMSCVAA		1024
LNK32C01		IMS1	Y			1024	

LNK32C01	12	IMS1							1024
LNK32M01		IMS1	Y					1024	
LNK32M01	3	IMS1							1024
LNK32T01		IMS1	Y					65536	
LNK32T01	20	IMS1							65536

(screen 3)

MSLink	LMSLink#	MbrName	Repo	Bandwidth	LBandwidth	ASR	LASR	BackUp	LBackUp
LNKV001		IMS1	Y	OFF		OFF		NO	
LNKV001	33	IMS1			OFF		OFF		NO
LNK31V02		IMS1	Y	OFF		OFF		NO	
LNK31V02	8	IMS1			OFF		OFF		NO
LNK32C01		IMS1	Y	OFF					
LNK32C01	12	IMS1			OFF				
LNK32M01		IMS1	Y	OFF					
LNK32M01	3	IMS1			OFF				
LNK32T01		IMS1	Y	ON				NO	
LNK32T01	20	IMS1			ON				NO

(screen 4)

MSLink	LMSLink#	MbrName	Repo	SyncOpt	LSyncOpt
LNKV001		IMS1	Y	SYNCSESS	
LNKV001	33	IMS1			SYNCSESS
LNK31V02		IMS1	Y	FORCSESS	
LNK31V02	8	IMS1			FORCSESS
LNK32C01		IMS1	Y		
LNK32C01	12	IMS1			
LNK32M01		IMS1	Y		
LNK32M01	3	IMS1			
LNK32T01		IMS1	Y	SYNCSESS	
LNK32T01	20	IMS1			SYNCSESS

(screen 5)

MSLink	LMSLink#	MbrName	Repo	TimeCreate	LTimeCreate
LNKV001		IMS1	Y	2015.307 11:10:46.05	
LNKV001	33	IMS1			2015.307 11:10:46.05
LNK31V02		IMS1	Y	2015.307 11:09:46.97	
LNK31V02	8	IMS1			2015.307 11:09:46.97
LNK32C01		IMS1	Y	2015.307 11:09:46.97	
LNK32C01	12	IMS1			2015.307 11:09:46.97
LNK32M01		IMS1	Y	2015.307 11:09:46.97	
LNK32M01	3	IMS1			2015.307 11:09:46.97
LNK32T01		IMS1	Y	2015.307 11:09:46.97	
LNK32T01	20	IMS1			2015.307 11:09:46.97

(screen 6)

MSLink	LMSLink#	MbrName	Repo	TimeUpdate	LTimeUpdate
LNKV001		IMS1	Y		
LNKV001	33	IMS1			
LNK31V02		IMS1	Y		
LNK31V02	8	IMS1			
LNK32C01		IMS1	Y		
LNK32C01	12	IMS1			
LNK32M01		IMS1	Y		
LNK32M01	3	IMS1			
LNK32T01		IMS1	Y		
LNK32T01	20	IMS1			

(screen 7)

MSLink	LMSLink#	MbrName	Repo	TimeAccess
LNKV001		IMS1	Y	
LNKV001	33	IMS1		

LNK31V02	IMS1	Y
LNK31V02	8 IMS1	
LNK32C01	IMS1	Y
LNK32C01	12 IMS1	
LNK32M01	IMS1	Y
LNK32M01	3 IMS1	
LNK32T01	IMS1	Y
LNK32T01	20 IMS1	

OM API 入力:

```
CMD(QRY MSLINK NAME(LNK31V02, LNK32M01, LNK32C01, LNK32T01, LNKV001) SHOW(DEFN))
```

OM API 出力:

```
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>MSLINK </kwd>
<input>QRY MSLINK NAME(LNK31V02, LNK32M01, LNK32C01, LNK32T01, LNKV001)
SHOW(DEFN) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="MSL" l1bl="MSLink" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="LINKN" l1bl="MSLink#" scope="LCL" sort="a" key="2"
scroll="no" len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="4" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="REPO" l1bl="Repo" scope="LCL" sort="d" key="2" scroll="no"
len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="IMSID" l1bl="IMSid" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RMSPL" l1bl="MSPLink" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MSP" l1bl="LMSPLink" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RPID" l1bl="PID" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="PID" l1bl="LPID" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RDMTBL" l1bl="DefMdtbl" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="DMTBL" l1bl="LDefMdtbl" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="AMTB" l1bl="LActMdtbl" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RBUFSZ" l1bl="BufSize" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LBUFSZ" l1bl="LBufSize" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RBANDW" l1bl="Bandwidth" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="L BANDW" l1bl="LBandwidth" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RASR" l1bl="ASR" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="3" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LASR" l1bl="LASR" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="3" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RBKUP" l1bl="BackUp" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="2" dtype="CHAR" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LBKUP" l1bl="LBackUp" scope="LCL" sort="n" key="0"
```

```

scroll="yes" len="2" dtype="CHAR" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="RSYNC" l1b1="SyncOpt" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="SYNC" l1b1="LSyncOpt" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="RTMCR" l1b1="TimeCreate" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="TMCR" l1b1="LTimeCreate" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="RTMUP" l1b1="TimeUpdate" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="TMUP" l1b1="LTimeUpdate" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="TMAC" l1b1="LTimeAccess" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="TMIM" l1b1="LTimeImport" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="EXPN" l1b1="ExportNeeded" scope="LCL" sort="y" key="0"
scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MSL(LNK31V02) LINKN(8) MBR(IMS1) CC( 0) MSP(PLNKSON1)
CID(00000000) PID(SA) DMTB(MTMSCVAA) CNTR(0) CNTS(0) ASR(OFF )
BUF SZ(1024) BANDW(OFF ) LSTT(STOCOMM, IDLE, COLDSESS) BKUP(NO)
SYNC(FORCSESS) TMCR(2015.307 11:09:46.97) DFNT(MSCGEN) IMSID(IMS1)
</rsp>
<rsp>MSL(LNK32M01) LINKN(3) MBR(IMS1) CC( 0) MSP(PLNK23M ) PID(BE)
CNTR(0) CNTS(0) BUF SZ(1024) BANDW(OFF ) LSTT(STOCOMM, IDLE, COLDSESS)
TMCR(2015.307 11:09:46.97) DFNT(MSCGEN) IMSID(IMS1) </rsp>
<rsp>MSL(LNK32C01) LINKN(12) MBR(IMS1) CC( 0) MSP(PLNK23CA) PID(BD)
CNTR(0) CNTS(0) BUF SZ(1024) BANDW(OFF ) LSTT(STOCOMM, IDLE, NOTOPEN)
TMCR(2015.307 11:09:46.97) DFNT(MSCGEN) IMSID(IMS1) </rsp>
<rsp>MSL(LNK32T01) LINKN(20) MBR(IMS1) CC( 0) MSP(PLNK32TA) PID(TD)
CNTR(0) CNTS(0) BUF SZ(65536) BANDW(ON ) LSTT(STOCOMM, IDLE, COLDSESS)
BKUP(NO) SYNC(SYNCSESS) TMCR(2015.307 11:09:46.97) DFNT(MSCGEN)
IMSID(IMS1) </rsp>
<rsp>MSL(LNKV001 ) LINKN(33) MBR(IMS1) CC( 0) MSP(PLNKV001)
CID(00000000) PID(ZA) CNTR(0) CNTS(0) ASR(OFF ) BUF SZ(4096) BANDW(OFF
) LSTT(STOCOMM, IDLE, COLDSESS) BKUP(NO) SYNC(SYNCSESS) TMCR(2015.307
11:10:46.05) DFNT(CREATE) IMSID(IMS1) </rsp>
<rsp>MSL(LNK31V02) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID() RASR(OFF)
RBKUP(NO) RBANDW(OFF) RBUF SZ(1024) RDMTB(MTMSCVAA) RMSP(PLNKSON1)
RPID(SA) RSYNC(FORCSESS) RTMCR(2015.307 11:09:46.97) </rsp>
<rsp>MSL(LNK32M01) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID() RASR()
RBANDW(OFF) RBUF SZ(1024) RMSP(PLNK23M ) RPID(BE) RSYNC()
RTMCR(2015.307 11:09:46.97) </rsp>
<rsp>MSL(LNK32C01) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID() RASR()
RBANDW(OFF) RBUF SZ(1024) RMSP(PLNK23CA) RPID(BD) RSYNC()
RTMCR(2015.307 11:09:46.97) </rsp>
<rsp>MSL(LNK32T01) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID() RASR()
RBKUP(NO) RBANDW(ON ) RBUF SZ(65536) RMSP(PLNK32TA) RPID(TD)
RSYNC(SYNCSESS) RTMCR(2015.307 11:09:46.97) </rsp>
<rsp>MSL(LNKV001 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID() RASR(OFF)
RBKUP(NO) RBANDW(OFF) RBUF SZ(4096) RMSP(PLNKV001) RPID(ZA)
RSYNC(SYNCSESS) RTMCR(2015.307 11:10:46.05) </rsp>
</cmdrspdata>

```

説明: この QUERY コマンドは、動的に作成されたものと、モード・テーブルが定義されているものを含む、4 種類の MSC 論理リンクをすべて表示します。これにより、8 つの MSLINK 属性すべてについて、可能なすべてのローカル定義およびリポジトリ定義のヘッダーが表示されます。

QUERY MSLINK コマンドの例 4

TSO SPOC 入力:

```
QUERY MSLINK NAME(LNK12C01, LNK12M01) SHOW(EXPORTNEEDED)
```

TSO SPOC 出力:

MSLink	LMSLink#	MbrName	CC	ExportNeeded
LNK12C01	2	IMS1	0	N
LNK12M01	3	IMS1	0	N

OM API 入力:

```
CMD(QRY MSLINK NAME(LNK12V01, LNK12M01) SHOW(EXPORTNEEDED))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.7.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2015.322 22:08:27.436635</statime>
<stotime>2015.322 22:08:27.436888</stotime>
<staseq>CFDE82A7A765B1CA</staseq>
<stoseq>CFDE82A7A77584CA</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10140827</rqsttkn1>
<rc>02000004</rc>
<rsn>00001014</rsn>
<rsnmsg>CSLN055I</rsnmsg>
<rsntxt>At least one request completed with warning/s.</rsntxt>
</ctl>
<cmderr>
<mbr name="IMS1 ">
<typ>IMS </typ>
<styp>DBDC </styp>
<rc>00000004</rc>
<rsn>00001010</rsn>
<rsntxt>No resources or matches found</rsntxt>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>MSLINK </kwd>
<input>QRY MSLINK NAME(LNK12C01, LNK12M01) SHOW(EXPORTNEEDED) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="MSL" l1b1="MSLink" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="LINKN" l1b1="LMSLink#" scope="LCL" sort="a" key="2"
  scroll="no" len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="4" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="EXPN" l1b1="ExportNeeded" scope="LCL" sort="y" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MSL(LNK12C01) LINKN(2) MBR(IMS1) CC( 0) EXPN(N) </rsp>
<rsp>MSL(LNK12M01) LINKN(3) MBR(IMS1) CC( 0) EXPN(N) </rsp>
</cmdrspdata>
```

説明: この QUERY コマンドは、エクスポートが必要ない 2 つの MSC 論理リンクについて、エクスポートが必要かどうかを表示します。出力結果の 2 つの行には完了コード 0 が示されますが、ゼロ以外の理由コード 1010 と、理由テキスト「No resources or matches found」が返されます。

例 5: TCP/IP リンクの統計の照会

この例では、QUERY MSLINK コマンドが TCP/IP リンク LNK12T01 に対して 2 回発行されています。最初は、SHOW(ALL) を指定してバッファ・サイズを表示するためであり、2 番目は、統計を表示するためです。

この例の場合は、バッチ SPOC ユーティリティー (CSLUSPOC) が使用され、JCL で F=BYCOL を指定して列形式で出力を印刷するように構成されました。

リンクのバッファ・サイズを表示するための TSO SPOC 入力:

```
QUERY MSLINK NAME(LNK12T01) SHOW(ALL)
```

リンクのバッファ・サイズを表示する TSO SPOC 出力。TCP/IP リンクの場合、帯域幅モードが常にオンです。

(screen 1)

MSLink	LMSLink#	MbrName	CC	LMSPLink	LPID	LRecdCnt	LSentCnt	LDefMdtbl
LNK12T01	22	IMS1	0	PLNK12TA	TA	0	0	

(右にスクロール、画面 2)

MSLink	LMSLink#	MbrName	LBufSize	LBandwidth	LAffin
LNK12T01	22	IMS1	65536	ON	

(右にスクロール、画面 3)

MSLink	LMSLink#	MbrName	Lc1Stat	LBackUp
LNK12T01	22	IMS1	STOCOMM, IDLE, COLDSSESS, SYNCSESS	NO

(右にスクロール、画面 4)

MSLink	LMSLink#	MbrName	LTimeCreate
LNK12T01	22	IMS1	2014.282 15:59:39.74

(右にスクロール、画面 5)

MSLink	LMSLink#	MbrName	LTimeUpdate	LTimeAccess	LDefnType
LNK12T01	22	IMS1			MSCGEN

リンクのバッファ・サイズを表示するための OM API 入力:

```
CMD(QRY MSLINK NAME(LNK12T01) SHOW(ALL))
```

リンク・バッファ・サイズを示す OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.7.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2014.283 17:01:21.646214</statime>
<stotime>2014.283 17:01:21.646548</stotime>
<staseq>CDE24C853B68666A</staseq>
<stoseq>CDE24C853B7D416A</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10100121</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
```

```

<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>MSLINK </kwd>
<input>QUERY MSLINK NAME(LNK12T01) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="MSL" l1b1="MSLink" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="LINKN" l1b1="LMSLink#" scope="LCL" sort="a" key="2"
scroll="no" len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="4" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="MSP" l1b1="LMSPLink" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="CID" l1b1="LCID" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="8" dtype="INT" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="PID" l1b1="LPID" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="CNTR" l1b1="LRecdCnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="CNTS" l1b1="LSentCnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="DMTB" l1b1="LDefMdtbl" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="AMTB" l1b1="LActMdtbl" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="BUFSZ" l1b1="LBufSize" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="BANDW" l1b1="LBandwidth" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="AFFIN" l1b1="LAffin" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="LSTT" l1b1="Lc1Stat" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="BKUP" l1b1="LBackUp" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="2" dtype="CHAR" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="TMCR" l1b1="LTimeCreate" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="TMUP" l1b1="LTimeUpdate" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="TMAC" l1b1="LTimeAccess" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="TMIM" l1b1="LTimeImport" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="DFNT" l1b1="LDefnType" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MSL(LNK12T01) LINKN(22) MBR(IMS1) CC( 0) MSP(PLNK12TA) PID(TA)
DMTB( ) CNTR(0) CNTS(0) BUFSZ(65536) BANDW(ON )
LSTT(STOCOMM,IDLE,COLDSESS,SYNCSESS) BKUP(NO) TMCR(2014.282
15:59:39.74) DFNT(MSCGEN) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

リンク統計を表示するための TSO SPOC 入力は、次のとおりです。

```
QUERY MSLINK NAME(LNK12T01) SHOW(STATISTICS)
```

TCP/IP リンクのリンク統計の TSO SPOC 出力:

```

Response for: QUERY MSLINK NAME(LNK12T01) SHOW(STATISTICS)
MSLink  MSLink#  MbrName      CC Option          Start_Time          Tot_Disp_CT Tot_Proc_Time Hi_Proc_Time
-----
LNK12T01  22 IMS1        0 RESET,CHKPT    2010.209 11:52:59.39      16      0.020195      0.004190
MSLink  MSLink#  MbrName      Low_Proc_Time Avg_Proc_Time  Chkw_CT  ChkwIO_CT Chkw_Rate Tot_Send_CT Tot_Msg_Send_CT
-----
LNK12T01  22 IMS1        0.000235      0.001262      5         2 0.000000          5         2
MSLink  MSLink#  MbrName      Tot_MsgByte_Send_CT Tot_Byte_Send_CT Hi_Msg_Send_SZ Low_Msg_Send_SZ Avg_Msg_Send_SZ
-----
LNK12T01  22 IMS1        1,040          2,816          538          502          520
MSLink  MSLink#  MbrName      Send_Msg_Time Send_MsgCT_Rate Send_MsgByte_Rate Tot_Qget_CT Tot_Qget_Time Hi_Qget_Time
-----
LNK12T01  22 IMS1        47.917786     30.472011     15,845.445957      6      0.000129      0.000043
MSLink  MSLink#  MbrName      Low_Qget_Time Avg_Qget_Time Tot_SendIO_Time Hi_SendIO_Time Low_SendIO_Time SendIO_Req_Rate
-----
LNK12T01  22 IMS1        0.000004      0.000021      0.052853      0.016744      0.011833      94.602009
MSLink  MSLink#  MbrName      SendIO_Byte_Rate Tot_Loc_SCI_SendIO_Time Hi_Loc_SCI_SendIO_Time Low_Loc_SCI_SendIO_Time
-----
LNK12T01  22 IMS1        53,279.851664          0.001503          0.000988          0.000103
MSLink  MSLink#  MbrName      Tot_Loc_ICON_SendIO_Time Hi_Loc_ICON_SendIO_Time Low_Loc_ICON_SendIO_Time
-----
LNK12T01  22 IMS1        0.023818          0.008290          0.004861
MSLink  MSLink#  MbrName      Tot_TCPIP_SendIO_Time Hi_TCPIP_SendIO_Time Low_TCPIP_SendIO_Time Tot_Rmt_ICON_SendIO_Time
-----
LNK12T01  22 IMS1        0.003279          0.001210          0.000506          0.019013
MSLink  MSLink#  MbrName      Hi_Rmt_ICON_SendIO_Time Low_Rmt_ICON_SendIO_Time Tot_Rmt_SCI_SendIO_Time
-----
LNK12T01  22 IMS1        0.005403          0.004312          0.005240
MSLink  MSLink#  MbrName      Hi_Rmt_SCI_SendIO_Time Low_Rmt_SCI_SendIO_Time Tot_Rec_CT Tot_Msg_Rec_CT
-----
LNK12T01  22 IMS1        0.005403          0.004312          5         3
MSLink  MSLink#  MbrName      Tot_MsgByte_Rec_CT Tot_Byte_Rec_CT Hi_Msg_Rec_SZ Low_Msg_Rec_SZ Avg_Msg_Rec_SZ
-----
LNK12T01  22 IMS1        1,595          3,419          549          502          531
MSLink  MSLink#  MbrName      Rec_Msg_Time Tot_Qput_CT Tot_Qput_Time Hi_Qput_Time Low_Qput_Time Avg_Qput_Time
-----
LNK12T01  22 IMS1        235.933123      0      0.000000      0.000000      0.000000      0.000000
MSLink  MSLink#  MbrName      Tot_RecIO_Time Hi_RecIO_Time Low_RecIO_Time RecIO_Req_Rate RecIO_Byte_Rate
-----
LNK12T01  22 IMS1        0.053281      0.014511      0.012323      93.842082      64,169.216043

```

例 6: VTAM リンクの統計の照会

説明: この例では、QUERY MSLINK コマンドが 2 回 (VTAM リンクの各端の IMS システムで 1 回ずつ) 発行されています。コマンドは、各サイドが 10 個のリモート・トランザクションを送信し、それが処理されて、応答メッセージが返された (10 個のトランザクション + 10 個の応答 = 各方向に 20 個のメッセージを送信) 後に発行されました。

TSO SPOC 入力:

```
QUERY MSLINK NAME(LNK12V02) SHOW(STATISTICS)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

```

MSLink  LMSLink#  MbrName  CC  LOption          LStart_Time
LNK12V02  10      IMS1     0   NORESET,CHKPT    2006.261 19:03:58.77

```

(右にスクロール、画面 2)

```

MSLink  LMSLink#  MbrName  LTot_Disp_CT  LTot_Proc_Time  LHi_Proc_Time  LLow_Proc_Time  LAvg_Proc_Time
LNK12V02  10      IMS1          98           0.176661         0.059530         0.000003         0.000853

```

(右にスクロール、画面 3)

```

MSLink  LMSLink#  MbrName  LChkw_CT  LChkwIO_CT  LChkw_Rate  LTot_Send_CT  LTot_Msg_Send_CT
LNK12V02  10      IMS1       33         33         0.165016         26         20

```

(右にスクロール、画面 4)

MSLink	LMSLink#	MbrName	LTot_MsgByte_Send_CT	LTot_Byte_Send_CT	LHi_Msg_Send_SZ	LLow_Msg_Send_SZ
LNK12V02	10	IMS1	10,461	22,403	578	502

(右にスクロール、画面 5)

MSLink	LMSLink#	MbrName	LAvg_Msg_Send_SZ	LSend_Msg_Time	LTot_Qget_CT	LTot_Qget_Time	LHi_Qget_Time
LNK12V02	10	IMS1	523	2.408548	51	0.002054	0.001070

(右にスクロール、画面 6)

MSLink	LMSLink#	MbrName	LLow_Qget_Time	LAvg_Qget_Time	LTot_SendIO_Time	LHi_SendIO_Time
LNK12V02	10	IMS1	0.000004	0.000004	0.505401	0.193435

(右にスクロール、画面 7)

MSLink	LMSLink#	MbrName	LLow_SendIO_Time	LSendIO_Req_Rate	LSendIO_Byte_Rate	LTot_Rec_CT
LNK12V02	10	IMS1	0.000708	51.444298	44,327	26

(右にスクロール、画面 8)

MSLink	LMSLink#	MbrName	LTot_Msg_Rec_CT	LTot_MsgByte_Rec_CT	LTot_Byte_Rec_CT	LHi_Msg_Rec_SZ
LNK12V02	10	IMS1	20	10,503	22,445	584

(右にスクロール、画面 9)

MSLink	LMSLink#	MbrName	LLow_Msg_Rec_SZ	LAvg_Msg_Rec_SZ	LRec_Msg_Time	LTot_Qput_CT	LTot_Qput_Time
LNK12V02	10	IMS1	502	525	2.320062	40	0.037326

(右にスクロール、画面 10)

MSLink	LMSLink#	MbrName	LHi_Qput_Time	LLow_Qput_Time	LAvg_Qput_Time	LTot_RecIO_Time	LHi_RecIO_Time
LNK12V02	10	IMS1	0.015957	0.000008	0.000933	0.070947	0.025376

(右にスクロール、画面 11)

MSLink	LMSLink#	MbrName	LLow_RecIO_Time	LRecIO_Req_Rate	LRecIO_Byte_Rate
LNK12V02	10	IMS1	0.000155	366.470750	148,040.09

TSO SPOC 入力:

QUERY MSLINK NAME(LNK21V02) SHOW(STATISTICS)

TSO SPOC 出力:

(右にスクロール、画面 1)

MSLink	LMSLink#	MbrName	CC	LOption	LStart_Time
LNK21V02	13	IMS2	0	NORESET,CHKPT	2006.261 19:03:08.42

(右にスクロール、画面 2)

MSLink	LMSLink#	MbrName	LTot_Disp_CT	LTot_Proc_Time	LHi_Proc_Time	LLow_Proc_Time	LAvg_Proc_Time
LNK21V02	13	IMS2	97	0.150468	0.060122	0.000003	0.000696

(右にスクロール、画面 3)

MSLink	LMSLink#	MbrName	LChkw_CT	LChkwIO_CT	LChkw_Rate	LTot_Send_CT	LTot_Msg_Send_CT
LNK21V02	13	IMS2	33	33	0.544554	26	20

(右にスクロール、画面 4)

MSLink	LMSLink#	MbrName	LTot_MsgByte_Send_CT	LTot_Byte_Send_CT	LHi_Msg_Send_SZ	LLow_Msg_Send_SZ
LNK21V02	13	IMS2	10,503	22,445	584	502

(右にスクロール、画面 5)

MSLink	LMSLink#	MbrName	LAvg_Msg_Send_SZ	LSend_Msg_Time	LTot_Qget_CT	LTot_Qget_Time	LHi_Qget_Time
LNK21V02	13	IMS2	525	2.395508	51	0.003884	0.001169

(右にスクロール、画面 6)

MSLink	LMSLink#	MbrName	LLow_Qget_Time	LAvg_Qget_Time	LTot_SendIO_Time	LHi_SendIO_Time
LNK21V02	13	IMS2	0.000004	0.000076	1.304330	0.217838

(右にスクロール、画面 7)

MSLink	LMSLink#	LBrName	LLow_SendIO_Time	LSendIO_Req_Rate	LSendIO_Byte_Rate	LTot_Rec_CT
LNK21V02	13	IMS2	0.000821	19.933605	17,208	26

(右にスクロール、画面 8)

MSLink	LMSLink#	MbrName	LTot_Msg_Rec_CT	LTot_MsgByte_Rec_CT	LTot_Byte_Rec_CT	LHi_Msg_Rec_SZ
LNK21V02	13	IMS2	20	10,461	22,403	578

(右にスクロール、画面 9)

MSLink	LMSLink#	MbrName	LLow_Msg_Rec_SZ	LAvg_Msg_Rec_SZ	LRec_Msg_Time	LTot_Qput_CT	LTot_Qput_Time
LNK21V02	13	IMS2	502	523	2.344878	40	0.054777


(右にスクロール、画面 10)

MSLink	LMSLink#	MbrName	LHi_Qput_Time	LLow_Qput_Time	LAvg_Qput_Time	LTot_RecIO_Time	LHi_RecIO_Time
LNK21V02	13	IMS2	0.023559	0.000007	0.001369	0.210252	0.036846


(右にスクロール、画面 11)


MSLink	LMSLink#	MbrName	LLow_RecIO_Time	LRecIO_Req_Rate	LRecIO_Byte_Rate
LNK21V02	13	IMS2	0.000155	123.661130	106,553

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

 複数のリソースに類似機能があるコマンドのリスト (オペレーションおよびオートメーション)

QUERY MSNAME コマンド

QUERY MSNAME コマンドは、指定された論理リンク・パスに関する定義および状況情報を照会するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 415 ページの『構文』
- 415 ページの『キーワード』
- 420 ページの『使用上の注意』
- 421 ページの『同等の IMS タイプ 1 コマンド』
- 421 ページの『出力フィールド』
- 424 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 427 ページの『QUERY MSNAME コマンドの例 1』

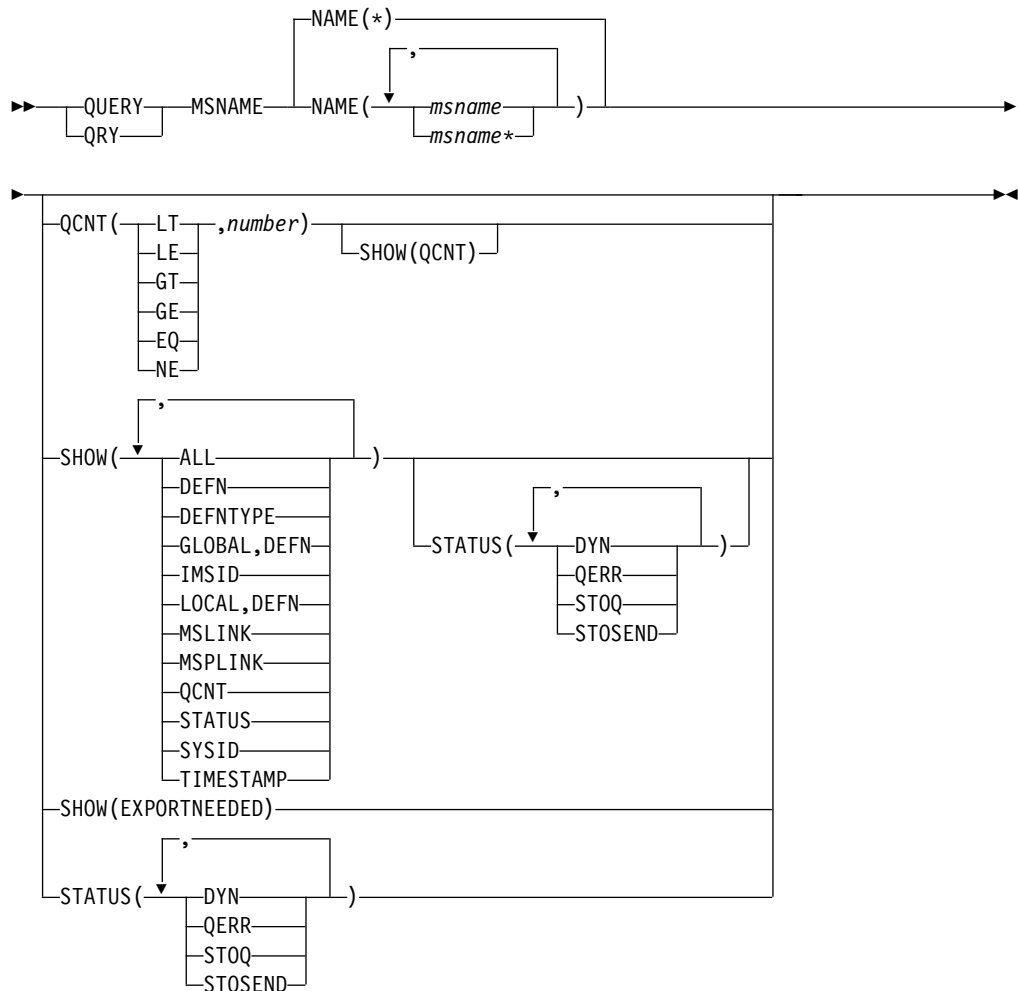
環境

以下の表には、QUERY MSNAME コマンドおよびキーワードを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 119. QUERY MSNAME コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUERY MSNAME	X		X
NAME	X		X
QCNT	X		X
STATUS	X		X
SHOW	X		X

構文



キーワード

NAME()

表示される MSC 論理リンク・パスの名前 (1 から 8 文字) を指定するか、またはシステム内のすべてのリンクにコマンドを適用することを指定します。名前にはワイルドカード (*) を指定できます。デフォルトは NAME(*) で、これはすべての MSNAME リソースを戻します。

QCNT()

キュー・カウントが指定された数と比べて、より小 (LT)、より小か等しい (LE)、より大 (GT)、より大か等しい (GE)、等しい (EQ)、あるいは等しくない (NE) 論理リンク・パスを選択します。LT が指定される時、指定される数は 1 になることはできません。これによって、QCNT 値による追加のフィルター操作が可能になります。

QCNT パラメーターを指定した場合、キュー・カウントが 0 の論理リンク・パスは戻されません。QCNT(LT,n) パラメーターを指定した場合、キュー・カウントが 0 より大きいか、「n」より小さい *msnames* が戻されます。STATUS または QCNT パラメーターを指定しない場合は、MSNAME 名と一致するすべての論理リンク・パスが戻されます。

QCNT フィルターは、共用キュー環境でも非共用キュー環境でも有効です。

共用キュー環境では、QCNT が指定された場合、共用キューはローカル・キューより低速になります。この環境では、キューはグローバルであるため、QRY MSNAME コマンドはマスター IMS によってのみ処理されます。コマンド・マスターは、指定されたキュー・カウント・パラメーターと一致する共用キュー上のすべての論理リンク・パスを戻します。QCNT が、ワイルドカードを使用した論理リンク・パス名とともに指定された場合、カップリング・ファシリティ上のすべての共用キューの論理リンク・パス・メッセージを読み取る必要があります。

非共用キュー環境では、表示する *msnames* を決めるために、ローカル・キュー・カウント値が使用されます。この環境では、キューはローカルであるため、QRY MSNAME QCNT コマンドは、コマンドが経路指定された各 IMS によって処理されます。各 IMS は、ローカルで検出された、指定のキュー・カウント・パラメーターに一致するすべての *msnames* を戻します。

QCNT パラメーターを指定した場合、SHOW(QCNT) オプションが指定されていなくても、戻される出力にキュー・カウントが含まれます。

QCNT フィルターと STATUS フィルターは、相互に排他的です。QCNT フィルターは、SHOW(QCNT) を除いて、SHOW() と相互に排他的です。

SHOW()

戻される MSNAME 出力フィールドを指定します。SHOW() が指定されていない場合、論理リンク・パス名と、関連のリモート・システム ID およびローカル・システム ID のみが戻されます。MSNAME 名は、リンク・パスの出力を作成した IMS の名前および完了コードとともに、常に戻されます。

SHOW(QCNT) のみ、QCNT() パラメーターと一緒に使用できます。他の SHOW フィルターはすべて、QCNT() パラメーターとは相互に排他的です。SHOW キーワードでサポートされるパラメーターには以下のものがあります。

ALL

他の SHOW パラメーター内のすべての情報が含まれます。

DEFN

リソース定義を戻すように指定します。

戻される MSC 論理リンク・パス (MSNAME) 属性には、MSLINK、MSPLINK、SIDL、SIDR、リポジトリ内の作成および更新のタ

タイム・スタンプ、および IMS ランタイムの作成および更新のタイム・スタンプがあります。QRY MSNAME コマンドを使用して表示できるのはローカル MSPLINK のみです。

リンク番号は、リポジトリに保管されないローカルのランタイム値です。

SHOW(DEFN) にその他の SHOW フィルターが指定されない場合、または IMSID フィルターが指定されている場合、すべての定義属性が戻されます。IMS システムのランタイム・リソース定義は、コマンドを受信する各 IMS によって戻されます。IMSRSC リポジトリ内の保管済みリソース定義は、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合、コマンド・マスター IMS によって戻されます。

コマンド・マスター IMS は、リポジトリから取得した汎用保管済みリソース定義ごとに応答行を戻します。それぞれの応答行には、汎用リソース定義の属性が表示されます。SHOW(DEFN) を IMSID フィルターなしで指定し、すべての IMS システムに定義されている属性値が同一の場合、汎用定義の応答行のみが戻されます。保管済みリソース定義が定義されている IMS システムの IMS ID は戻されません。IMS システムの保管済みリソース定義に、汎用保管済みリソース定義と異なる属性値が 1 つ以上含まれている場合は、属性値が異なる IMS ごとに追加の応答行が戻されます。

SHOW(DEFN,LOCAL) が指定されている場合、コマンドを受信した各 IMS により、IMS システムのランタイム・リソース定義が戻されます。

SHOW(DEFN,GLOBAL) が指定されている場合、コマンド・マスター IMS により、リポジトリの保管済みリソース定義が戻されます。

SHOW(DEFN,GLOBAL) は、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合のみ有効です。

SHOW(DEFN) にその他のパラメーターが指定されている場合、要求された定義属性のみが戻されます。例えば SHOW(DEFN,TIMESTAMP) が指定されている場合、タイム・スタンプのみが戻されます。

制約事項:

- SHOW(DEFN) は、DEFNTYPE、QCNT または STATUS と一緒に指定することはできません。QRY MSNAME SHOW(ALL) コマンドで戻される LclStat 列 および LDefnType 列は、SHOW(DEFN) では戻されません。
- SHOW(DEFN) は、フィルター QCNT または STATUS と一緒に指定することはできません。
- SHOW(DEFN) を指定した場合に戻される Repo 列および IMSid 列は、SHOW(ALL) では戻されません。

リポジトリに保管されたリソース定義を使用してリポジトリ情報を持つ応答行を判別し、ランタイム・リソース定義を使用して IMS ランタイム・リソース情報を持つ応答行を判別します。

SHOW(DEFN,IMSID) を指定すると、IMS の保管済みリソース定義が汎用リソース定義と同一であるかどうかにかかわらず、汎用保管済みリソース定義に対して応答行が返され、リポジトリにリソースが定義されている IMS ごとに追加の応答行が返されます。

DEFNTYPE

リソースの定義に使用された定義タイプを表示します。

EXPORTNEEDED

NAME パラメーターに一致し、作成されたか最後に更新されて以降 IMSRSC リポジトリにエクスポートされたことがない MSC 論理リンク・パス・リソースだけを QUERY コマンドで戻すよう指定します。SHOW(EXPORTNEEDED) は、エクスポートする必要があるリソースのみを表示するため、フィルターのように動作します (QUERY MSNAME EXPORTNEEDED(Y) がサポートされる場合と同様の動作)。

NAME キーワードが省略されたか NAME(*) が指定された場合、リポジトリにエクスポートする必要がある MSC 論理リンク・パスの名前だけが戻されます。

NAME キーワードで特定の名前が指定されたか NAME(*) 以外の総称名が指定された場合、コマンドで指定された MSC 論理リンク・パスごとに 1 行ずつ、応答行が戻されます。指定された MSC 論理リンク・パスをリポジトリにエクスポートする必要がない場合は、ExportNeeded 列に N が戻されます。

制約事項:

- SHOW(EXPORTNEEDED) は、他のいかなる SHOW パラメーターや他のキーワードとも一緒に指定することはできません。
- SHOW(EXPORTNEEDED) は、IMS で MSC リソースの動的リソース定義 (MSCRSCS=DYN) と IMSRSC リポジトリが使用可能になっている場合にのみ有効です。
- QUERY MSNAME SHOW(EXPORTNEEDED) コマンドは、XRF 代替システムでは無効です。

ヒント: IMSRSC リポジトリにエクスポートされていないリソースの場合は、次回の IMS コールド・スタートのためにリソースが使用可能になるように、/CHECKPOINT コマンドを発行してリポジトリにリソースを自動的に書き込むことができます。

GLOBAL

ローカル値とグローバル値の両方を持つ出力フィールドの場合、このオプションはグローバル値のみを戻します。GLOBAL は DEFN とともに指定する必要があります、そうでなければコマンドはリジェクトされます。特定の出力フィールドを要求するために別の SHOW キーワードと一緒に使用された場合、このオプションは指定された出力フィールドのグローバル値のみを戻すことを要求します。

SHOW(DEFN,GLOBAL,LOCAL) は SHOW(DEFN) と等価です。

IMSID

指定された名前をリソース・リストに含む IMS システムの IMS ID を戻すように指定します。SHOW(IMSID) は、コマンド・マスター IMS によってのみ処理され、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合にのみ有効です。

IMSID は、DEFN または GLOBAL 以外の SHOW キーワードとともに指定することはできません。

SHOW(DEFN,IMSID) が指定されている場合、保管済みリソース定義に加えて、定義済みのリソースが存在する各 IMS に、別個の行が戻されます。

SHOW(IMSID) が DEFN キーワードなしで指定されている場合、リソース名とともに定義済みのリソースが存在する各 IMS に別個の行が戻されません。リソース定義は戻されません。

LOCAL

ローカル値とグローバル値の両方を持つ出力フィールドの場合、このオプションはローカル値のみを戻します。LOCAL は DEFN とともに指定する必要があり、そうでなければコマンドはリジェクトされます。特定の出力フィールドを要求するために別の SHOW キーワードと一緒に使用された場合、このオプションは指定された出力フィールドのローカル値のみを戻すことを要求します。ローカル出力は、コマンドを処理する各 IMS によって戻されます。

SHOW(DEFN,LOCAL) は、コマンドを処理する IMS システムからローカルの定義属性のみを戻します。

SHOW(DEFN,GLOBAL,LOCAL) は SHOW(DEFN) と等価です。

MSLINK

指定された論理リンク・パスに割り当てられた論理リンクを表示します。

MSPLINK

指定された論理リンク・パスに割り当てられた物理リンクを表示します。

QCNT

キュー・カウント情報を戻すことを指定します。ローカル・キュー・カウントとグローバル・キュー・カウントの両方が戻されます。

このコマンドで戻されるローカル・キュー・カウントの値は、このコマンドが実行された IMS システムによって処理されているメッセージを表します。共用キュー環境では、キューの評価のためにローカル・キュー・カウントを使用しないでください。このコマンドで戻されるグローバル・キュー・カウントは、共用キュー構造上の現行のメッセージ・キュー・カウントを表します。

共用キュー環境では、コマンド・マスターが、指定されたすべての MSNAME について、グローバル・キュー・カウント情報とローカル・キュー・カウント情報の両方を戻します。MSNAME は、コマンド・マスター IMS で定義されている必要はありません。他のすべての IMS システムは、それぞれのローカル・キュー・カウント情報を戻します。

非共用キュー環境では、すべての IMS システムが、それぞれのローカル・キュー・カウント情報を戻します。

STATUS

論理リンク・パスの状況を表示します。

SYSID

この論理リンク・パスのリモート・システム ID とローカル・システム ID を表示します。

TIMESTAMP

戻された作成時間 (TimeCreate)、最終更新時間 (TimeUpdate)、最終アクセス時間 (TimeAccess)、最終インポート時間 (TimeImport) のタイム・スタンプを表示します。時間は現地時間で、YYYY.JJJ HH:MM:SS:TH の形式で戻されます。

YYYY

年

JJJ

ユリウス日 (001 から 365)

HH 時 (01 から 24)

MM 分 (00 から 59)

SS 秒 (00 から 59)

TH 10 分の 1 および 100 分の 1 秒 (00 から 99)

STATUS()

指定された状況の少なくとも 1 つを表示する論理リンク・パスを表示します。STATUS フィルターと QCNT フィルターは、相互に排他的です。STATUS キーワードを指定した場合、SHOW(STATUS) を指定しない場合でも、戻される出力に論理リンク・パスの状況が含まれます。

DYN

共用キュー環境で動的に作成された MSNAME を表示します。

QERR

キュー・エラー状況を持つ MSNAME を表示します。

STOQ

キューイング停止状況を持つ MSNAME を表示します。

STOSEND

送信停止状況を持つ MSNAME を表示します。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。このコマンドは DB/DC および DCCTL システムに適用されます。

このコマンドの構文は XML で定義されており、OM と通信する自動化プログラムで使用できます。

以下のフィルターを使用して、リソース定義に関する情報を表示できます。

- リソース定義に関する情報を表示するには、SHOW(DEFN) を指定します。
- リソースが定義されている IMS システム、および各 IMS システムの属性またはリソースの定義を表示するには、SHOW(DEFN,IMSID) を指定します。
- リソースが定義されている IMS システムを表示するには、SHOW(IMSID) を指定します。

同等の IMS タイプ 1 コマンド

以下の表は、各種の QUERY MSNAME と、類似の機能を実行するタイプ 1 IMS コマンドを示しています。

表 120. QUERY MSNAME コマンドと同等のタイプ 1 コマンド

QUERY MSNAME コマンド	類似の IMS タイプ 1 コマンド
QUERY MSNAME NAME(msname msname*) SHOW(ALL)	/DIS MSNAME msname msname*
QUERY MSNAME NAME(msname msname*) SHOW(QCNT)	/DIS MSNAME msname QCNT
QUERY MSNAME NAME(*) SHOW(ALL)	/DIS MSNAME ALL
QUERY MSNAME NAME(msname *) SHOW(MSPLINK MSLINK)	/DIS ASSIGNMENT MSNAME msname msname* ALL

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。ゼロ以外の完了コードの場合に表示される出力フィールドには *error* が表示されます。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 121. QUERY MSNAME コマンドの出力フィールドの説明

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
CC	CC	N/A	LCL	完了コード。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	LCL	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。

表 121. QUERY MSNAME コマンドの出力フィールドの説明 (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
DFNT	LDefnType	DEFNTYPE	LCL	定義タイプ。次のうちのいずれか 1 つが可能です。 CREATE CREATE MSNAME コマンドにより定義されます。 DFSDfxxx 定義の PROCLIB メンバー。ここで、xxx はこの IMS に対して定義された接尾部です。この MSNAME は IMS によって定義されたもので、DFSDfxxx メンバーの MSC セクション内の SYSID= キーワードによって定義されるそれぞれのローカル SYSID を表します。 MSCGEN IMS RESLIB の DFSCLCxy メンバー内のシステム定義により定義されます。 SHAREDQ 共用キュー・グループに含まれる、リモート側の別の IMS システム内で定義された MSNAME として定義されます。 UPDATE IMS RESLIB の DFSCLCxy メンバー内のシステム定義により定義されます。ただし、少なくとも 1 つの属性を変更した /MSASSIGN MSNAME コマンド、または UPDATE MSNAME コマンドによって、オンライン・メモリー内で変更されています。 次の IMS コールド・スタート時に、定義は DFSCLCxy メンバー内の定義に戻ります。
EXPN	ExportNeeded	EXPORTNEEDED	LCL	MSC 論理リンク・パスが IMSRSC リポジトリにエクスポートされたかどうかを示します。値は Y または N のどちらかです。
IMSID	IMSid	IMSID	GBL	定義されたリソースを持つ IMSID をリポジトリから返します。
LINKN	LMSLink#	MSLINK	LCL	論理リンク・パスに関連付けられた論理リンクのリンク番号。
LQ	LQCnt	QCNT	LCL	ローカル・キュー・カウント。
LSTT	LclStat	STATUS	LCL	論理リンク・パスの現在の状況。
MBR	MbrName	N/A	LCL	出力行を作成した IMSplex メンバー。

表 121. QUERY MSNAME コマンドの出力フィールドの説明 (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
MSL	LMSLink	MSLINK	LCL	論理リンク・パスに関連付けられた論理リンク。
MSN	MSName	N/A	LCL	論理リンクパス名。
MSP	LMSPLink	MSPLINK	LCL	論理リンク・パスに関連付けられた物理リンク。
QCNT	QCnt	QCNT	GBL	グローバル・キュー・カウント。
REPO	Repo	DEFN	GBL	その行に保管済みリソース定義が表示されているかどうかを示します。 Y リポジットリー定義を示します。 (ブランク) ローカル定義を示します。
RMSL	MSLink	DEFN, MSLINK	GBL	指定された論理リンク・パスに割り当てられた論理リンクを表示します。出力は、リポジットリーから戻されます。
RSIDL	SIDL	DEFN, SYSID	GBL	ローカル・システム ID を示します。出力は、リポジットリーから戻されます。
RSIDR	SIDR	DEFN, SYSID	GBL	リモート・システム ID を示します。出力は、リポジットリーから戻されます。
RTMCR	TimeCreate	DEFN	GBL	リポジットリー内で最初にリソースが作成された時刻を示します。
RTMUP	TimeUpdate	DEFN	GBL	リポジットリー内で最後にリソースが更新された時刻を示します。
SIDL	LSIDL	SYSID	LCL	論理リンク・パスのローカル・システム ID。
SIDR	LSIDR	SYSID	LCL	論理リンク・パスのリモート・システム ID。
TMAC	LTimeAccess	TIMESTAMP	LCL	リソースが最後にアクセスされた時刻。これはまだ MSC リソースに対してはサポートされません。
TMCR	LTimeCreate	TIMESTAMP	LCL	CREATE MSNAME コマンド、MSC MSNAME を作成する IMPORT コマンド、または IMS コールド・スタートによってリソースが作成された時刻。作成時刻は、IMS ウォーム・スタート、緊急時再始動、エクスポート、およびインポートにまたがって保持されます。出力は、ローカル IMS から戻されます。

表 121. QUERY MSNAME コマンドの出力フィールドの説明 (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
TMIM	LTimeImport	TIMESTAMP	LCL	リソースが最後にインポートされた時刻 (該当する場合)。リソースが IMS コールド・スタート時に IMSRSC リポジトリから自動的にインポートされた場合、ローカル・インポート・タイム・スタンプは IMS コールド・スタート時刻に設定されます。インポート時刻は、IMS ウォーム・スタートと緊急時再始動にまたがって保持されず。出力は、ローカル IMS から戻されます。
TMUP	LTimeUpdate	TIMESTAMP	LCL	UPDATE MSNAME コマンドまたは /MSASSIGN MSNAME コマンドの結果として実行時リソース定義の属性が更新された最終時刻。更新時刻は、ウォーム・スタートや緊急時再始動を越えて保持されます。出力値は、ローカル IMS から戻されます。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY MSNAME コマンドの結果として戻されることのある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに対して標準的です。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 122. QUERY MSNAME コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY MSNAME コマンドは正常に完了しました。
X'00000004'	X'00001010'	以下のいずれかの理由により、戻すリソースが検出されませんでした。 <ul style="list-style-type: none"> 指定されたリソース名が無効でした。 指定したフィルターと一致するリソースがありませんでした。 SHOW(EXPORTNEEDED) が指定されていた場合は、IMSRSC リポジトリにエクスポートする必要があるリソースがありませんでした。

表 122. QUERY MSNAME コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000008'	X'00002040'	QUERY MSNAME コマンドで、複数のフィルター値が指定されています。
X'0000000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。完了コードについて詳しくは、以下の表を参照してください。
X'0000000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。完了コードについて詳しくは、以下の表を参照してください。
X'00000010'	X'00004004'	CQS アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'00004005'	IMS は CQS からメッセージ・キュー・カウントを取得しようとしたが、CQS がキュー構造に接続されていませんでした。
X'00000010'	X'0000400C'	XRF 代替システムではコマンドは無効です。
X'00000010'	X'0000401C'	FDBR 領域ではコマンドは無効です。
X'00000010'	X'0000402D'	MSC リソースの動的リソース定義が使用可能でない、つまり DFSDFxxx が MSCRSCS=DYN を指定して定義されていないために、コマンド・フレーバーは使用できません。
X'00000010'	X'00004104'	RM アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'00004108'	SCI アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'00004500'	IMS はリポジトリーを使用できません。
X'00000010'	X'00004501'	RM はリポジトリーには使用できません。
X'00000010'	X'00004502'	リポジトリーは使用できません。

表 122. QUERY MSNAME コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000010'	X'00004503'	リポジトリーは停止しています。
X'00000010'	X'00004504'	リポジトリー・スベアのリカバリーが進行中です。
X'00000010'	X'00004505'	IMS リソース・リストが存在しないか、IMS リソース・リスト内に該当するリソース・タイプのリソースが存在しません。
X'00000010'	X'00004507'	リポジトリー・アクセスは拒否されます。
X'00000010'	X'00004508'	リポジトリーの最大入力長を超過しました。
X'00000010'	X'00004509'	RM データのバージョンは IMS データのバージョンよりも低いバージョンです。
X'00000010'	X'0000450A'	リポジトリー・サーバー (RS) をシャットダウンしています。
X'00000010'	X'0000450B'	リポジトリー・サーバー (RS) は使用できません。
X'00000010'	X'0000450C'	リポジトリー・サーバー (RS) は使用中です。
X'00000010'	X'0000450D'	RM は、IMSRSC リポジトリーに関連した一部の内部フィールドの定義に失敗しました。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファーを取得できなかったため、QUERY MSNAME コマンド処理は終了しました。
X'00000014'	X'00005008'	DFSPOOL ストレージを取得できませんでした。
X'00000014'	X'00005100'	RM 要求エラー。
X'00000014'	X'00005104'	IMS は CQS からメッセージ・キュー・カウントを取得しようとしたが、CQS が予期しない戻りコードを戻しました。
X'00000014'	X'00005108'	SCI 要求エラー。
X'00000014'	X'00005110'	リポジトリー・エラー。

表 122. QUERY MSNAME コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000014'	X'0000551C'	破損したリソース・リストが検出されたため、リポジトリー内のデータを表示する要求は拒否されました。リソース・リストが使用できないため、QUERY MSNAME コマンドは拒否されました。IBM ソフトウェア・サポートに連絡してください。エラーになったコマンドの出力を送信し、コマンドが実行されたローカル RM アドレス・スペースのダンプ、または IMSplex 内のすべての RM アドレス・スペースのダンプを送信してください。また、IMSRSC リポジトリーの RID データ・セットと RMD データ・セットのコピーも送信してください。
X'00000014'	X'00005FFF'	IMS は CQS からメッセージ・キュー・カウントを取得しようとしたが、内部 IMS エラーが原因で失敗しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 123. QUERY MSNAME コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		QUERY MSNAME コマンドは、リソースに対して正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	MSNAME 名が無効であるか、指定されたワイルドカード・パラメーターがどのリソース名にも一致しません。
98	CQS REQUEST ERROR	IMS は CQS からメッセージ・キュー・カウントを取得できませんでした。

QUERY MSNAME コマンドの例 1

この例では、指定された論理リンク・パスが、すべての出力フィールドと共に戻られています。

TSO SPOC 入力:

```
QRY MSNAME NAME(MSNV001) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

MSName	MbrName	CC	LMSPLink	LMSLink	LMSLink#	LSIDR	LSIDL	LQCnt
MSNV001	IMS1	0	PLNK12V	LNK12V02	10	55	705	0

(右にスクロール、画面 2)

MSName	MbrName	LclStat	LTimeCreate	LTimeUpdate	LTimeAccess>
MSNV001	IMS1		2015.061 15:55:44.49		

(右にスクロール、画面 3)

LDefnType
CREATE

OM API 入力:

```
CMD(QRY MSNAME NAME(MSNV001) SHOW(ALL))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.7.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2015.062 00:48:04.588000</statime>
<stotime>2015.062 00:48:04.588367</stotime>
<staseq>CE967F8BD51E0A8C</staseq>
<stoseq>CE967F8BD534F90C</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10164804</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>MSNAME </kwd>
<input>QRY MSNAME NAME(MSNV001) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="MSN" l1b1="MSName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="4" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="MSP" l1b1="LMSPLink" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="MSL" l1b1="LMSLink" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="LINKN" l1b1="LMSLink#" scope="LCL" sort="a" key="2"
  scroll="yes" len="4" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="SIDR" l1b1="LSIDR" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="SIDL" l1b1="LSIDL" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="LQ" l1b1="LQCnt" scope="LCL" sort="d" key="3" scroll="yes"
```



```

len="8" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="LSTT" l1b1="LclStat" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="TMCR" l1b1="LTimeCreate" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="TMUP" l1b1="LTimeUpdate" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="TMAC" l1b1="LTimeAccess" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="TMIM" l1b1="LTimeImport" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="DFNT" l1b1="LDefnType" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MSN(MSNV001 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) MSP(PLNK12V ) MSL(LNK12V02)
LINK( 10) SIDR( 55) SIDL( 705) LQ( 0) DFNT(CREATE )
TMCR(2015.061 15:55:44.49) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

QUERY MSNAME コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
QUERY MSNAME NAME(LINK32B1,LINK32M1,LINK32C1,LINK32T1,MSNV001) SHOW(DEFN)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

MSName	MbrName	CC	Repo	IMSid	LMSPLink	MSLink	LMSLink	LMSLink#	SIDR	LSIDR
LINK32B1	IMS1	0	Y			LNK32V01			21	
LINK32B1	IMS1	0		IMS1	PLNK23V		LNK32V01	1		21
LINK32C1	IMS1	0	Y			LNK32C01			23	
LINK32C1	IMS1	0		IMS1	PLNK23CA		LNK32C01	12		23
LINK32M1	IMS1	0	Y			LNK32M01			24	
LINK32M1	IMS1	0		IMS1	PLNK23M		LNK32M01	3		24
LINK32T1	IMS1	0	Y			LNK32T01			86	
LINK32T1	IMS1	0		IMS1	PLNK32TA		LNK32T01	20		86
MSNV001	IMS1	0	Y			LNKV001			56	
MSNV001	IMS1	0		IMS1	PLNKV001		LNKV001	33		56

(screen 2)

MSName	MbrName	Repo	SIDL	LSIDL	TimeCreate	LTimeCreate
LINK32B1	IMS1	Y	31		2015.310 14:57:33.98	
LINK32B1	IMS1			31		2015.310 14:57:33.98
LINK32C1	IMS1	Y	33		2015.310 14:57:33.98	
LINK32C1	IMS1			33		2015.310 14:57:33.98
LINK32M1	IMS1	Y	34		2015.310 14:57:33.98	
LINK32M1	IMS1			34		2015.310 14:57:33.98
LINK32T1	IMS1	Y	117		2015.310 14:57:33.98	
LINK32T1	IMS1			117		2015.310 14:57:33.98
MSNV001	IMS1	Y	706		2015.310 14:58:40.37	
MSNV001	IMS1			706		2015.310 14:58:40.37

(screen 3)

MSName	MbrName	Repo	TimeUpdate	LTimeUpdate	LTimeAccess
LINK32B1	IMS1	Y			
LINK32B1	IMS1				
LINK32C1	IMS1	Y			
LINK32C1	IMS1				
LINK32M1	IMS1	Y			
LINK32M1	IMS1				

```
LINK32T1 IMS1      Y
LINK32T1 IMS1
MSNV001 IMS1      Y
MSNV001 IMS1
```

OM API 入力:

```
CMD(QRY MSNAME NAME(LINK32B1,LINK32M1,LINK32C1,LINK32T1,MSNV001) SHOW(DEFN)
```

OM API 出力:

```
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="MSN" 11bl="MSName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MBR" 11bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="4" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" 11bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" 11bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="REPO" 11bl="Repo" scope="LCL" sort="d" key="2" scroll="no"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="IMSID" 11bl="IMSid" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MSP" 11bl="LMSPLink" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RMSL" 11bl="MSLink" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MSL" 11bl="LMSLink" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LINKN" 11bl="LMSLink#" scope="LCL" sort="a" key="2"
  scroll="yes" len="4" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RSIDR" 11bl="SIDR" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="SIDR" 11bl="LSIDR" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="RSIDL" 11bl="SIDL" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="SIDL" 11bl="LSIDL" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="EXPN" 11bl="ExportNeeded" scope="LCL" sort="y" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RTMCR" 11bl="TimeCreate" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="TMCR" 11bl="LTimeCreate" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="RTMUP" 11bl="TimeUpdate" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="TMUP" 11bl="LTimeUpdate" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="TMAC" 11bl="LTimeAccess" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="TMIM" 11bl="LTimeImport" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MSN(LINK32B1) MBR(IMS1 ) CC( 0) MSP(PLNK23V ) MSL(LNK32V01)
LINKN( 1) SIDR( 21) SIDL( 31) IMSID(IMS1) LQ( 0) DFNT(MSCGEN )
TMCR(2015.310 14:57:33.98) </rsp>
<rsp>MSN(LINK32M1) MBR(IMS1 ) CC( 0) MSP(PLNK23M ) MSL(LNK32M01)
LINKN( 3) SIDR( 24) SIDL( 34) IMSID(IMS1) LQ( 0) DFNT(MSCGEN )
TMCR(2015.310 14:57:33.98) </rsp>
<rsp>MSN(LINK32C1) MBR(IMS1 ) CC( 0) MSP(PLNK23CA) MSL(LNK32C01)
LINKN( 12) SIDR( 23) SIDL( 33) IMSID(IMS1) LQ( 0) DFNT(MSCGEN )
TMCR(2015.310 14:57:33.98) </rsp>
<rsp>MSN(LINK32T1) MBR(IMS1 ) CC( 0) MSP(PLNK32TA) MSL(LNK32T01)
```


```

LINKN( 20) SIDR( 86) SIDL( 117) IMSID(IMS1) LQ( 0) DFNT(MSCGEN )
  TMC(2015.310 14:57:33.98) </rsp>
<rsp>MSN(MSNV001 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) MSP(PLNKV001) MSL(LNKV001 )
  LINKN( 33) SIDR( 56) SIDL( 706) IMSID(IMS1) LQ( 0) DFNT(CREATE )
  TMC(2015.310 14:58:40.37) </rsp>
<rsp>MSN(LINK32B1) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RMSL(LNK32V01) RSIDL(
  31) RSIDR( 21) RTMC(2015.310 14:57:33.98) </rsp>
<rsp>MSN(LINK32M1) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RMSL(LNK32M01) RSIDL(
  34) RSIDR( 24) RTMC(2015.310 14:57:33.98) </rsp>
<rsp>MSN(LINK32C1) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RMSL(LNK32C01) RSIDL(
  33) RSIDR( 23) RTMC(2015.310 14:57:33.98) </rsp>
<rsp>MSN(LINK32T1) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RMSL(LNK32T01) RSIDL(
  117) RSIDR( 86) RTMC(2015.310 14:57:33.98) </rsp>
<rsp>MSN(MSNV001 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RMSL(LNKV001 ) RSIDL(
  706) RSIDR( 56) RTMC(2015.310 14:58:40.37) </rsp>
</cmdrspdata>


```


説明: この QUERY コマンドは、動的に作成されたものを含む 4 種類すべての MSC 論理リンクの MSNAME を表示します。

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

 複数のリソースに類似機能があるコマンドのリスト (オペレーションおよびオートメーション)

QUERY MSPLINK コマンド

QUERY MSPLINK コマンドは、指定された物理リンクに関する定義および状況情報を照会するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 432 ページの『構文』
- 433 ページの『キーワード』
- 439 ページの『使用上の注意』
- 439 ページの『同等の IMS タイプ 1 コマンド』
- 439 ページの『出力フィールド』
- 446 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 例

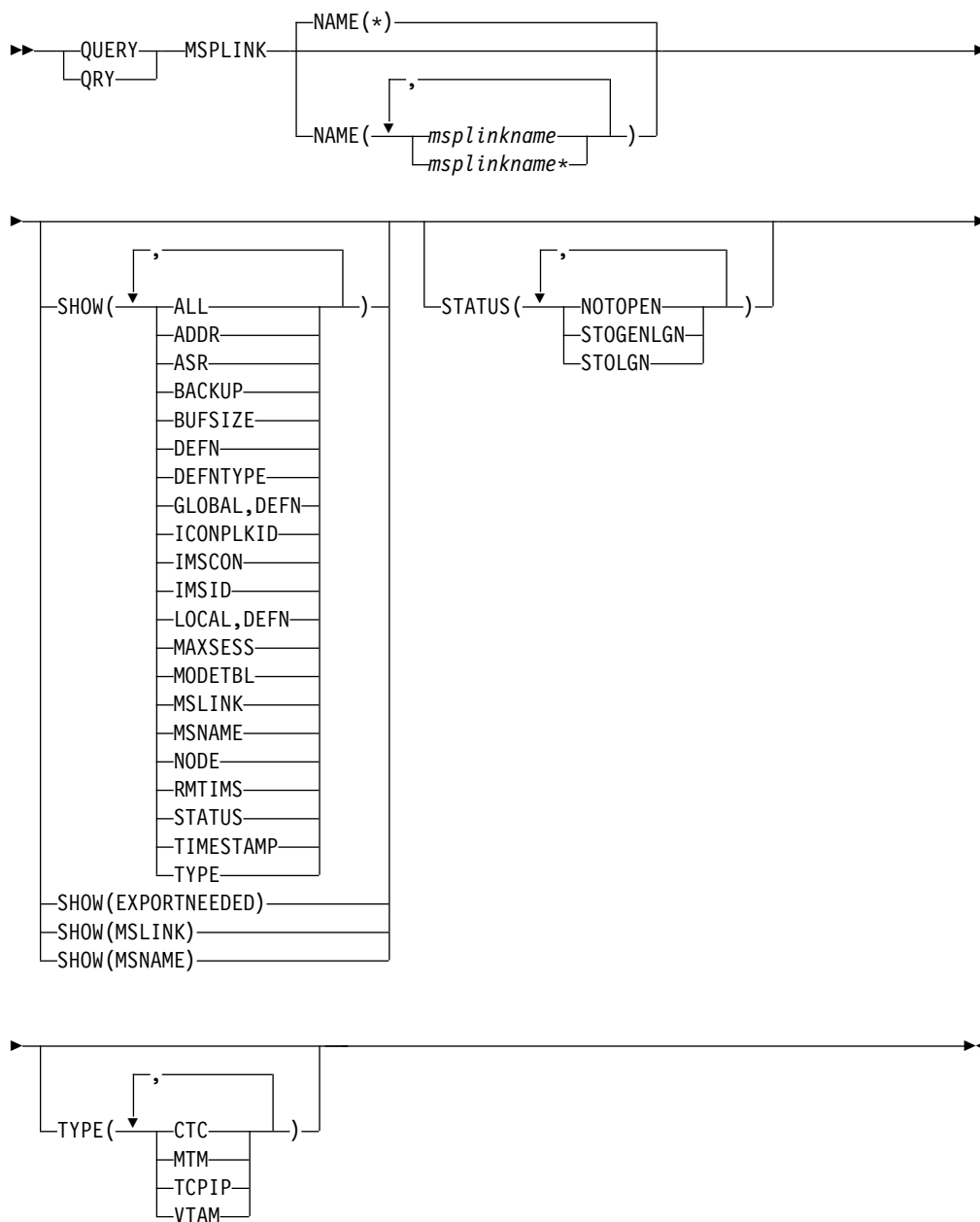
環境

以下の表には、QUERY MSPLINK コマンドおよびキーワードを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 124. QUERY MSPLINK コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUERY MSPLINK	X		X
NAME	X		X
SHOW	X		X
STATUS	X		X
TYPE	X		X

構文



キーワード

以下のキーワードは、QUERY MSPLINK コマンドに有効です。

NAME()

物理リンク情報を戻す物理リンクの名前 (1 から 8 文字) を指定します。名前にはワイルドカード (*) を指定できます。デフォルトは NAME(*) で、これはすべての MSPLINK リソースを戻します。

SHOW()

戻される MSPLINK 出力フィールドを指定します。SHOW() が指定されていない場合、物理名と関連のリンク・タイプのみが戻されます。

常に、MSPLINK 名と、そのリンクに関する出力を作成した IMS の名前、および完了コードが戻されます。SHOW キーワードでサポートされるパラメータには以下のものがあります。

ALL

他の SHOW パラメータ (MSLINK と MSNAME を除く) 内のすべての情報が含まれます。

ADDR

CTC 物理リンクのチャンネル間アダプターのアドレスを表示します。

ASR

VTAM リnkの自動セッション再始動値のみを表示します。

ON VTAM セッション障害通知 (SON) 機能がサポートしている VTAM リnkについて、自動セッション再始動がオンであることを示します。

オフ

自動セッション再始動がデフォルトのオフであることを示します。

ASR は、リンクの両側で ASR オプションを使用している場合にのみ、オンになります。

BACKUP

XRF 対応 IMS システムの場合、XRF テークオーバー後の TCP/IP リnk および VTAM リnkの自動再始動がどのように制御されるかを表示します。

BACKUP は、CREATE MSPLINK、CREATE MSLINK、または UPDATE MSPLINK の各コマンドを使用して設定できる MSC 物理リンク属性です。QUERY MSPLINK コマンドと QUERY MSLINK コマンドを使用して、物理リンクの BACKUP 値を表示できます。

重要: BACKUP は物理リンク属性ですが、CREATE MSLINK NAME(linkname) SET(MSPLINK(msplinkname)) コマンドによって、指定した物理リンクの BACKUP 値を変更することもできます。QUERY MSPLINK コマンドを使用して、更新された BACKUP 値を表示できます。また、QUERY MSLINK コマンドを使用して、物理リンクに割り当てられた MSC 論理リンク (新しく作成された論理リンクを含む) を指定することにより、更新された BACKUP 値を表示することもできます。

表示される可能性がある値は 1 以上 7 以下の整数であり、これは設定されたセッションを再確立するための優先順位です。NO は、テークオーバー時の物理リンクのセッション・リカバリーが抑止されていることを意味します。

BACKUP は IMS が TCP/IP リンクや VTAM リンクを再始動する順序の優先順位を表示しますが、アクティブ要求は任意の順序で実行される可能性があります。これは、VTAM 内部の競合やペーシング、および TCP/IP ネットワーク・トラフィックなどの可変要因によるものです。

BUFSIZE

この物理リンクに割り当てられた各論理リンクの現行の入出力バッファ・サイズを表示します。

DEFN

リソース定義を戻すように指定します。

戻される MSC 物理リンク属性には、ADDR、ASR、BACKUP、BUFSIZE、ICONPLKID、IMSCON、MAXSESS、MODETBL、NODE、RMTIMS、TYPE、リポジットリー内の作成および更新のタイム・スタンプ、および IMS ランタイムの作成および更新のタイム・スタンプがあります。

SHOW(DEFN) にその他の SHOW フィルターが指定されない場合、または IMSID フィルターが指定されている場合、すべての定義属性が戻されます。IMS システムのランタイム・リソース定義は、コマンドを受信する各 IMS によって戻されます。IMSRSC リポジットリー内の保管済みリソース定義は、コマンド・マスター IMS がリポジットリーを使用できる場合、コマンド・マスター IMS によって戻されます。

コマンド・マスター IMS は、リポジットリーから取得した汎用保管済みリソース定義ごとに応答行を戻します。それぞれの応答行には、汎用リソース定義の属性が表示されます。SHOW(DEFN) を IMSID フィルターなしで指定し、すべての IMS システムに定義されている属性値が同一の場合、汎用定義の応答行のみが戻されます。保管済みリソース定義が定義されている IMS システムの IMS ID は戻されません。IMS システムの保管済みリソース定義に、汎用保管済みリソース定義と異なる属性値が 1 つ以上含まれている場合は、属性値が異なる IMS ごとに追加の応答行が戻されます。

SHOW(DEFN,LOCAL) が指定されている場合、コマンドを受信した各 IMS により、IMS システムのランタイム・リソース定義が戻されます。

SHOW(DEFN,GLOBAL) が指定されている場合、コマンド・マスター IMS により、リポジットリーの保管済みリソース定義が戻されます。

SHOW(DEFN,GLOBAL) は、コマンド・マスター IMS がリポジットリーを使用できる場合のみ有効です。

SHOW(DEFN) にその他のパラメーターが指定されている場合、要求された定義属性のみが戻されます。例えば SHOW(DEFN,TIMESTAMP) が指定されている場合、タイム・スタンプのみが戻されます。

制約事項:

- SHOW(DEFN) は、DEFNTYPE または STATUS と一緒に指定することはできません。QRY MSPLINK SHOW(ALL) コマンドで戻される LclStat 列 および LDefnType 列は、SHOW(DEFN) では戻されません。
- SHOW(DEFN) は、フィルター STATUS または TYPE と一緒に指定することはできません。
- SHOW(DEFN) を指定した場合に戻される Repo 列および IMSid 列は、SHOW(ALL) では戻されません。

リポジトリに保管されたリソース定義を使用してリポジトリ情報を持つ応答行を判別し、ランタイム・リソース定義を使用して IMS ランタイム・リソース情報を持つ応答行を判別します。

SHOW(DEFN,IMSID) を指定すると、IMS の保管済みリソース定義が汎用リソース定義と同一であるかどうかにかかわらず、汎用保管済みリソース定義に対して応答行が返され、リポジトリにリソースが定義されている IMS ごとに追加の応答行が返されます。

DEFNTYPE

リソースの定義に使用された定義タイプを表示します。

EXPORTNEEDED

NAME パラメーターに一致し、作成されたか最後に更新されて以降 IMSRSC リポジトリにエクスポートされたことがない MSC 物理リンク・リソースだけを QUERY コマンドで戻すよう指定します。

SHOW(EXPORTNEEDED) は、エクスポートする必要があるリソースのみを表示するため、フィルターのように動作します (QUERY MSPLINK EXPORTNEEDED(Y) がサポートされる場合と同様の動作)。

NAME キーワードが省略されたか NAME(*) が指定された場合、リポジトリにエクスポートする必要がある MSC 物理リンクの名前だけが戻されません。

NAME キーワードで特定の名前が指定されたか NAME(*) 以外の総称名が指定された場合、コマンドで指定された MSC 物理リンク名ごとに 1 行ずつ、応答行が戻されます。指定された MSC 物理リンクをリポジトリにエクスポートする必要がない場合は、ExportNeeded 列に N が戻されます。

制約事項:

- SHOW(EXPORTNEEDED) は、他のいかなる SHOW パラメーターや他のキーワードとも一緒に指定することはできません。
- SHOW(EXPORTNEEDED) は、IMS で MSC リソースの動的リソース定義 (MSCRSCS=DYN) と IMSRSC リポジトリが使用可能になっている場合にのみ有効です。
- QUERY MSPLINK SHOW(EXPORTNEEDED) コマンドは、XRF 代替システムでは無効です。

ヒント: IMSRSC リポジトリにエクスポートされていないリソースの場合は、次の IMS コールド・スタートのためにリソースが使用可能になるように、/CHECKPOINT コマンドを発行してリポジトリにリソースを自動的に書き込むことができます。

GLOBAL

ローカル値とグローバル値の両方を持つ出力フィールドの場合、このオプションはグローバル値のみを戻します。GLOBAL は DEFN とともに指定する必要があります。そうでなければコマンドはリジェクトされます。特定の出力フィールドを要求するために別の SHOW キーワードと一緒に使用された場合、このオプションは指定された出力フィールドのグローバル値のみを戻すことを要求します。

SHOW(DEFN,GLOBAL,LOCAL) は SHOW(DEFN) と等価です。

ICONPLKID

TCP/IP 物理リンクの場合、MSPLINK マクロの LCLPLKID キーワードで定義された、IMS Connect 物理リンク ID を表示します。IMS Connect 物理リンク ID は、IMS Connect MSC 構成ステートメントの LCLPLKID で IMS Connect に対して定義されます。

IMSCON

TCP/IP 物理リンクの場合、物理リンクの TCP/IP 接続を管理するローカル IMS Connect インスタンスの IMSplex 名を表示します。IMS Connect IMSplex 名は、MSPLINK マクロの LCLICON キーワードで指定されます。

IMSID

指定された名前をリソース・リストに含む IMS システムの IMS ID を戻すように指定します。SHOW(IMSID) は、コマンド・マスター IMS によってのみ処理され、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合にのみ有効です。

IMSID は、DEFN または GLOBAL 以外の SHOW キーワードとともに指定することはできません。

SHOW(DEFN,IMSID) が指定されている場合、保管済みリソース定義に加えて、定義済みのリソースが存在する各 IMS に、別個の行が戻されます。

SHOW(IMSID) が DEFN キーワードなしで指定されている場合、リソース名とともに定義済みのリソースが存在する各 IMS に別個の行が戻されません。リソース定義は戻されません。

LOCAL

ローカル値とグローバル値の両方を持つ出力フィールドの場合、このオプションはローカル値のみを戻します。LOCAL は DEFN とともに指定する必要があります。そうでなければコマンドはリジェクトされます。特定の出力フィールドを要求するために別の SHOW キーワードと一緒に使用された場合、このオプションは指定された出力フィールドのローカル値のみを戻すことを要求します。ローカル出力は、コマンドを処理する各 IMS によって戻されます。

SHOW(DEFN,LOCAL) は、コマンドを処理する IMS システムからローカルの定義属性のみを戻します。

SHOW(DEFN,GLOBAL,LOCAL) は SHOW(DEFN) と等価です。

MAXSESS

この物理リンクに許可されている最大セッション数を表示します。

MODETBL

この端末のセッションが確立されるときに使用される SNA バインド・パラメーターが入っている、VTAM ログオン・モード・テーブル項目の名前 (ログオン・モード名) を表示します。

MSLINK

指定された物理リンクに関連付けられた論理リンクを表示します。物理リンクが VTAM の場合、物理リンクに許可される論理セッションの最大数も表示されます。SHOW(MSLINK) が指定されている場合、STATUS() は無効です。SHOW(MSNAME) および SHOW(MSLINK) は、他のすべての SHOW パラメーターと相互に排他的です。

MSNAME

指定された物理リンクに関連付けられた論理リンク・パスを表示します。MSNAME 名と、リモート・システム ID およびローカル・システム ID が表示されます。SHOW(MSNAME) が指定されている場合、STATUS() は無効です。SHOW(MSNAME) および SHOW(MSLINK) は、他のすべての SHOW パラメーターと相互に排他的です。

NODE

VTAM 物理リンクの場合、物理リンクの他方の端にあるリモート・システムの VTAM ノード名 (APPLID) を表示します。

RMTIMS

TCP/IP 物理リンクの場合、リモート IMS システムの IMS ID を表示します。これは、IMS システム内で MSPLINK マクロの NAME キーワードで定義されています。

STATUS

物理リンクの状況を表示します。

TIMESTAMP

以下のタイム・スタンプを現地時間で表示します。

- 作成時刻 (TimeCreate)
- 最終更新日時 (TimeUpdate)
- 最終アクセス日時 (TimeAccess)
- 最終インポート時刻 (TimeImport)

タイム・スタンプは、YYYY.JJJ HH:MM:SS:TH の形式で返されます。

YYYY

年

JJJ

ユリウス日 (001 から 365)

HH 時 (01 から 24)

MM 分 (00 から 59)

SS 秒 (00 から 59)

TH 10 分の 1 および 100 分の 1 秒 (00 から 99)

TYPE

物理リンクのタイプを表示します。

STATUS()

指定された状況の少なくとも 1 つを表示する物理リンクを表示します。STATUS() パラメーターは、SHOW(MSLINK) パラメーターまたは SHOW(MSNAME) パラメーターと共に指定できません。STATUS キーワードを指定した場合、SHOW(STATUS) を指定しない場合でも、戻される出力に物理リンクの状況が含まれます。

NOTOPEN

VTAM ACB はオープンされていません。

STOGENLGN

STOGENLGN のローカル状況を持つすべての TCP/IP タイプの物理リンクを表示します。TCP/IP 汎用リソース・グループ内で使用される物理リンクのみが、STOGENLGN の状況を持つ可能性があります。

STOGENLGN は、この IMS システム内のこの物理リンクが停止されていることを示します。物理リンクが停止されている間、この IMS システム内の物理リンク上のどの論理リンクも開始できず、IMS システムは、パートナー IMS システムからの TCP/IP 汎用リソース・グループに対する論理リンク要求を受け入れることができません。

この IMS システム内の物理リンクの STOGENLGN 状況は、TCP/IP 汎用リソース・グループ内の他の IMS システムが物理リンク上の論理リンクを開始したり受け入れたりするのを妨げることはありません。

この IMS システム上の物理リンクを再始動するには、UPDATE MSPLINK NAME(*linkname*) START(GENLOGON) コマンドを IMS システムに経路指定します。

STOLGN

STOLGN の状況を持つ TCP/IP および VTAM 物理リンクを表示します。TCP/IP 汎用リソース・グループ内で使用されている物理リンクは、STOLGN の状況を持つことはありません。

STOLGN は、この IMS システム内のこの物理リンクが停止されていることを示します。物理リンクが停止されている間、この IMS システム内の物理リンク上のどの論理リンクも開始できず、IMS システムは、パートナー IMS システムからの物理リンクに対する論理リンク要求を受け入れることができません。

TYPE()

指定された物理リンク・タイプの少なくとも 1 つを持つ物理リンクを表示します。TYPE キーワードを指定した場合、SHOW(TYPE) を指定しない場合でも、戻される出力に物理リンクのタイプが含まれます。

CTC

チャンネル間アダプター。

MTM

メモリー間。

TCPIP

TCP/IP。

VTAM

仮想記憶通信アクセス方式。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ指定できます。このコマンドは DB/DC および DCCTL システムに適用されます。

このコマンドの構文は XML で定義されており、OM と通信する自動化プログラムで使用できます。

リソース定義に関する情報を表示するには、SHOW(DEFN) を指定します。リソースが定義されている IMS システムを判別し、また各 IMS システムの属性またはリソース定義を知るには、SHOW(DEFN,IMSID) を指定します。リソースが定義されている IMS システムを判別するには、SHOW(IMSID) を指定します。

同等の IMS タイプ 1 コマンド

以下の表は、各種の QUERY MSPLINK コマンドと、類似の機能を実行するタイプ 1 IMS コマンドを示しています。

表 125. QUERY MSPLINK コマンドと同等のタイプ 1 コマンド

QUERY MSPLINK コマンド	類似の IMS タイプ 1 コマンド
QUERY MSPLINK NAME(msplinkname *) SHOW(ALL)	類似のタイプ 1 IMS コマンドが存在しません。
QUERY MSPLINK NAME(msplinkname *) SHOW(MSLINK MSNAME)	/DIS ASSIGNMENT MSPLINK msplinkname ALL

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力に生成された長ラベルが入ります。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。ゼロ以外の完了コードの場合に表示される出力フィールドには *error* が表示されます。

N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されていません。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 126. QUERY MSPLINK コマンドの出力フィールドの説明

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
ADDR	LCTCaddr	ADDR		通信回線または CTC アダプターのアドレス。
ASR	LASR	ASR		自動セッション再始動値。ON または OFF のどちらかです。

表 126. QUERY MSPLINK コマンドの出力フィールドの説明 (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
BKUP	LBackUp	BACKUP		XRF テークオーバー後の TCP/IP リンクおよび VTAM リンクの自動再始動。
BUFSZ	LBufSize	BUFSIZE		この物理リンクに割り当てられた各論理リンクの入出力バッファのサイズ。
CC	CC	N/A		完了コード。
CCTXT	CCText	<i>error</i>		ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
DFNT	LDefnType	DEFNTYPE		定義タイプ。次のうちのいずれか 1 つが可能です。 CREATE CREATE MSPLINK コマンドにより定義されます。 MSCGEN IMS RESLIB の DFSCLL3x メンバー内のシステム定義により定義されます。 UPDATE IMS RESLIB の DFSCLL3x メンバー内のシステム定義により定義されます。ただし、少なくとも 1 つの属性を変更した UPDATE コマンドによって、オンライン・メモリー内で変更されています。 次回の IMS コールド・スタート時に、定義は DFSCLL3x メンバー内の定義に戻ります。

表 126. QUERY MSPLINK コマンドの出力フィールドの説明 (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
EXPN	ExportNeeded	EXPORTNEEDED	LCL	MSC 物理リンクが IMSRSC リポジトリにエクスポートされているかどうかを示します。値は Y または N のどちらかです。
IMSID	IMSid	IMSID	GBL	定義されたリソースを持つ IMSID をリポジトリから返します。
LIC	LLclImCon	IMSCON		TCP/IP リnkの場合にのみ表示されます。SCI を介して物理リンクが接続する、IMSplex 内のローカル IMS Connect インスタンスを識別します。表示される値は、MSPLINK マクロの LCLICON キーワードで定義されています。LCLICON 値は、IMS Connect MSC 構成ステートメントの MEMBER パラメーターで指定された値と一致しています。
LINKN	LMSLink#	MSLINK		物理リンクに関連付けられた論理リンクのリンク番号。
LPLK	LLclPlkID	ICONPLKID		TCP/IP リnkの場合にのみ表示されます。ローカル IMS Connect インスタンス内の物理リンク・ステートメントの ID を識別します。これは、MSPLINK マクロの LCLPLKID キーワードで定義されています。この LCLPLKID 値は、IMS Connect MSC 構成ステートメントの LCLPLKID キーワードでも指定されています。

表 126. QUERY MSPLINK コマンドの出力フィールドの説明 (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
LSTT	LclStat	STATUS		物理リンクの状況。 物理リンクの状況には、STOLGN、STOGENLGN、および NOTOPEN があります。
MAXS	LMaxSess	MSLINK		許可されるセッションの最大数。
MDTB	LDefMdtbl	MODETBL		VTAM ログオン・モード・テーブルの項目。
MSL	LMSLink	MSLINK		物理リンクに関連付けられた論理リンク。
MSN	LMSName	MSNAME		物理リンクに関連付けられた MSNAME。
MSP	MSPLink	N/A		物理リンク名。
NODE	LNodeName	NODE		物理リンクの他方の端にあるリモート・システムの VTAM ノード名。
RADDR	CTCaddr	ADDR, DEFN	GBL	通信回線または CTC アダプターのアドレス。出力は、リポジトリーから戻されます。
RASR	ASR	ASR, DEFN	GBL	VTAM リンクの自動セッション再始動値のみ。出力は、リポジトリーから戻されます。
RBKUP	BackUp	BACKUP, DEFN	GBL	XRF テークオーバー後の TCP/IP リンクおよび VTAM リンクの自動再始動。出力は、リポジトリーから戻されます。
RBUFSZ	BufSize	BUFSIZE, DEFN	GBL	この物理リンクに割り当てられた各論理リンクの入出力バッファのサイズ。出力は、リポジトリーから戻されます。

表 126. QUERY MSPLINK コマンドの出力フィールドの説明 (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
REPO	Repo	DEFN	GBL	<p>その行に保管済みリソース定義が表示されているかどうかを示します。</p> <p>Y リポジトリ 一定義を示 します。</p> <p>(ブランク) ローカル定 義を示しま す。</p>
RIC	LclImCon	DEFN, IMSCON	GBL	<p>TCP/IP リンクの場合にのみ表示されます。SCI を介して物理リンクが接続する、IMSpIex 内のローカル IMS Connect インスタンスを識別します。表示される値は、MSPLINK マクロの LCLICON キーワード、または CREATE MSPLINK コマンドの MSPLINK キーワードで定義されています。ローカル IMS Connect 値は、IMS Connect MSC 構成ステートメントのメンバー・パラメーターに指定された値と一致しています。出力は、リポジトリから戻されます。</p>
RIMS	LRmtImS	RMTIMS		<p>TCP/IP リンクの場合にのみ表示されます。物理リンクの接続先のリモート IMS システムの IMS ID を識別します。これは、MSPLINK マクロの NAME キーワードで定義されています。</p>
RMAXS	MaxSess	DEFN, MAXSESS	GBL	<p>許可されるセッションの最大数。出力は、リポジトリから戻されます。</p>

表 126. QUERY MSPLINK コマンドの出力フィールドの説明 (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
RMDTB	DefMdtbl	DEFN, MODETBL	GBL	この端末のセッションが確立されるときに使用される SNA バインド・パラメーターが入っている、VTAM ログオン・モード・テーブル項目 (ログオン・モード名)。出力は、リポジトリーから戻されます。
RMSL	MSLink	DEFN, MSLINK	GBL	物理リンクに関連付けられた論理リンク。出力は、リポジトリーから戻されます。
RMSN	MSName	DEFN, MSNAME		物理リンクに関連付けられた MSNAME。出力は、リポジトリーから戻されます。
RNODE	NodeName	DEFN, NODE	GBL	物理リンクの他方の端にあるリモート・システムの VTAM ノード名。出力は、リポジトリーから戻されます。
RPLK	LclPlkID	DEFN, ICONPLKID	GBL	TCP/IP リンクに対してのみ定義されません。ローカル IMS Connect インスタンス内の物理リンク・ステートメントの ID を識別します。これは、MSPLINK マクロの LCLPLKID キーワード、または CREAT MSPLINK コマンドの MSPLINK キーワードで定義されています。この LCLPLKID 値は、IMS Connect MSC 構成ステートメントの LCLPLKID キーワードでも指定されています。出力は、リポジトリーから戻されます。

表 126. QUERY MSPLINK コマンドの出力フィールドの説明 (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
RRIMS	Rmtlms	DEFN, RMTIMS	GBL	TCP/IP リンクの場合にのみ表示されます。物理リンクの接続先のリモート IMS システムの IMS ID を識別します。これは、MSPLINK マクロの NAME キーワード、または CREATE MSPLINK コマンドの MSPLINK キーワードで定義されています。出力は、リポジトリーから戻されません。
RSIDL	SIDL	DEFN, MSNAME	GBL	関連の MSNAME のローカル・システム ID。出力は、リポジトリーから戻されません。
RSIDR	SIDR	DEFN, MSNAME	GBL	関連の MSNAME のリモート・システム ID。出力は、リポジトリーから戻されません。
RTMCR	TimeCreate	DEFN, TIMESTAMP	GBL	リポジトリーでの作成時刻。これは、リポジトリー内で最初にリソースが作成された時刻です。
RTMUP	TimeUpdate	DEFN, TIMESTAMP	GBL	リポジトリーでの更新時刻。これは、リポジトリー内で最後にリソースが更新された時刻です。
RTYPE	タイプ	DEFN, TYPE	GBL	物理リンクのタイプ (CTC、MTM、TCP/IP、または VTAM)。
SIDL	LSIDL	MSNAME		関連の MSNAME のローカル・システム ID。
SIDR	LSIDR	MSNAME		関連の MSNAME のリモート・システム ID。
TMAC	LTimeAccess	TIMESTAMP		リソースが最後にアクセスされた時刻。これはまだサポートされていません。

表 126. QUERY MSPLINK コマンドの出力フィールドの説明 (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
TMCR	LTimeCreate	TIMESTAMP		CREATE MSPLINK コマンド、MSC 物理リンクを作成する IMPORT コマンド、または IMS の初期化によってリソースが作成された時刻。作成時刻は、IMS ウォーム・スタート、緊急時再始動、エクスポート、およびインポートにまたがって保持されます。出力は、ローカル IMS から戻されます。
TMIM	LTimeImport	TIMESTAMP		リソースが最後にインポートされた時刻 (該当する場合)。リソースが IMS コールド・スタート時に IMSRSC リポジトリから自動的にインポートされた場合、ローカル・インポート・タイム・スタンプは IMS コールド・スタート時刻に設定されます。インポート時刻は、IMS ウォーム・スタートと緊急時再始動にまたがって保持されます。出力は、ローカル IMS から戻されません。
TMUP	LTimeUpdate	TIMESTAMP		UPDATE MSPLINK コマンドの結果として実行時リソース定義の属性が更新された最終時刻。更新時刻は、ウォーム・スタートや緊急時再始動を越えて保持されます。出力値は、ローカル IMS から取得されます。
TYPE	LType	TYPE		物理リンクのタイプ (CTC、MTM、TCP/IP、または VTAM)。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY MSPLINK コマンドの結果として戻される戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 127. QUERY MSPLINK コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY MSPLINK コマンドは正常に完了しました。
X'00000004'	X'00001010'	以下のいずれかの理由により、戻すリソースが検出されませんでした。 <ul style="list-style-type: none"> 指定されたリソース名が無効である可能性があります。 指定したフィルターと一致するリソースがありませんでした。 SHOW(EXPORTNEEDED) が指定されていた場合は、IMSRSC リポジトリにエクスポートする必要があるリソースがありませんでした。
X'00000008'	X'00002040'	QUERY MSPLINK コマンドで、複数のフィルター値が指定されています。
X'0000000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。完了コードについて詳しくは、以下の表を参照してください。
X'0000000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。完了コードについて詳しくは、以下の表を参照してください。
X'00000010'	X'00004004'	CQS アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'0000400C'	XRF 代替システムではコマンドは無効です。
X'00000010'	X'0000401C'	FDBR 領域ではコマンドは無効です。

表 127. QUERY MSPLINK コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000010'	X'0000402D'	MSC リソースの動的リソース定義が使用可能でない、つまり IMS PROCLIB データ・セットの DFSDFxxx メンバー内で MSCRSCS=DYN が定義されていないために、コマンド・フレーバーは使用できません。
X'00000010'	X'00004104'	RM アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'00004108'	SCI アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'00004500'	IMS はリポジトリーを使用できません。
X'00000010'	X'00004501'	RM はリポジトリーには使用できません。
X'00000010'	X'00004502'	リポジトリーは使用できません。
X'00000010'	X'00004503'	リポジトリーは停止しています。
X'00000010'	X'00004504'	リポジトリー・スベアのリカバリーが進行中です。
X'00000010'	X'00004505'	IMS リソース・リストが存在しないか、IMS リソース・リスト内に該当するリソース・タイプのリソースが存在しません。
X'00000010'	X'00004507'	リポジトリー・アクセスは拒否されます。
X'00000010'	X'00004508'	リポジトリーの最大入力長を超過しました。
X'00000010'	X'00004509'	RM データのバージョンは IMS データのバージョンよりも低いバージョンです。
X'00000010'	X'0000450A'	リポジトリー・サーバー (RS) をシャットダウンしています。
X'00000010'	X'0000450B'	リポジトリー・サーバー (RS) は使用できません。
X'00000010'	X'0000450C'	リポジトリー・サーバー (RS) は使用中です。
X'00000010'	X'0000450D'	RM は、IMSRSC リポジトリーに関連した一部の内部フィールドの定義に失敗しました。

表 127. QUERY MSPLINK コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファーを取得できなかったため、QUERY MSPLINK コマンド処理は終了しました。
X'00000014'	X'00005100'	RM 要求エラー。
X'00000014'	X'00005104'	CQS エラー。
X'00000014'	X'00005108'	SCI 要求エラー。
X'00000014'	X'00005110'	リポジトリ・エラー。
X'00000014'	X'0000551C'	<p>破損したリソース・リストが検出されたため、リポジトリ内のデータを表示する要求は拒否されました。リソース・リストが使用できないため、QUERY MSPLINK コマンドは拒否されました。IBM ソフトウェア・サポートに連絡して、以下の情報を送付してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> エラーが発生したコマンドからの出力。 コマンドが実行されたローカル RM アドレス・スペースのダンプまたは IMSplex 内のすべての RM アドレス・スペースのダンプ。 IMSRSC リポジトリ RID データ・セットおよび RMD データ・セットのコピー。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 128. QUERY MSPLINK コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		QUERY MSPLINK コマンドは、リソースに対して正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	MSPLINK 名が無効であるか、指定されたワイルドカード・パラメーターがどのリソース名にも一致しません。

QUERY MSPLINK コマンドの例 1

この例では、各リンク・タイプの 4 つの MSC 物理リンクが表示されており、可能なほとんどのヘッダーが示されています。一部のヘッダーは、そのタイプの物理リンクが指定されていない場合は表示されません。例えば、TCP/IP リンクが指定されなかった場合、LLclPlkID や LLclImsCon などの TCP/IP 専用のヘッダーは表示されません。

TSO SPOC 入力:

```
QUERY MSPLINK NAME(PLNKV001,PLNK23C,PLNK21TA,PLNK23M) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

MSPLink	MbrName	CC	LType	LNodeName	LCTCaddr	LRmtIms	LLclImsCon
PLNKV001	IMS2	0	VTAM	L6APPL3			
PLNK21TA	IMS2	0	TCPIP			IMS1	HWS2
PLNK23C	IMS2	0	CTC				
PLNK23M	IMS2	0	MTM				

(右にスクロールして、画面 2 へ)

MSPLink	MbrName	LLclPlkID	LclStat	LASR	LBackUp	LBufSize	LMaxSess
PLNKV001	IMS2		STOLGN	OFF	NO	4096	1
PLNK21TA	IMS2	MSC21			4	65536	2
PLNK23C	IMS2		NOTOPEN			1024	
PLNK23M	IMS2					1024	

(右にスクロールして、画面 3 へ)

MSPLink	MbrName	LTimeCreate
PLNKV001	IMS2	2014.283 08:22:18.06
PLNK21TA	IMS2	2014.282 16:00:47.10
PLNK23C	IMS2	2014.282 16:00:47.10
PLNK23M	IMS2	2014.282 16:00:47.10

(右にスクロールして、画面 4 へ)

MSPLink	MbrName	LTimeUpdate	LTimeAccess	LDefnType
PLNKV001	IMS2			CREATE
PLNK21TA	IMS2			MSCGEN
PLNK23C	IMS2			MSCGEN
PLNK23M	IMS2			MSCGEN

OM API 入力:

```
CMD(QRY MSPLINK NAME(PLNKV001,PLNK21TA,PLNK23C,PLNK23M) SHOW(ALL))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.7.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2014.283 15:29:29.975114</statime>
<stotime>2014.283 15:29:29.996047</stotime>
<staseq>CDE237FCE494A5EC</staseq>
<stoseq>CDE237FCE9B0FE6D</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10082929</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS2 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>QRY </verb>
```

```

<kwd>MSPLINK          </kwd>
<input>QRY MSPLINK NAME(PLNKV001,PLNK23C,PLNK21TA,PLNK23M) SHOW(ALL)
</input>
</cmd>
<cmdsphdr>
<hdr s1bl="MSP" l1bl="MSPLink" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="5" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="TYPE" l1bl="LType" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="NODE" l1bl="LNodeName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="ADDR" l1bl="LCTCaddr" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RIMS" l1bl="LRmtIms" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LIC" l1bl="LLclImsCon" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LPLK" l1bl="LLclPlkID" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="XCFG" l1bl="LXCFgroup" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="XCFM" l1bl="LXCFmem" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LSTT" l1bl="LclStat" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="ASR" l1bl="LASR" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="3" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="BKUP" l1bl="LBackUp" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="2" dtype="CHAR" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="BUFSZ" l1bl="LBufSize" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="MAXS" l1bl="LMaxSess" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MDTB" l1bl="LDefMdtbl" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TMCR" l1bl="LTimeCreate" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="TMUP" l1bl="LTimeUpdate" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="TMAC" l1bl="LTimeAccess" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="TMIM" l1bl="LTimeImport" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="DFNT" l1bl="LDefnType" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
</cmdsphdr>
<cmdspdata>
<rsp>MSP(PLNKV001) MBR(IMS2 ) CC( 0) TYPE(VTAM) NODE(L6APPL3)
  LSTT(STOLGN) MAXS( 1) ASR(OFF) BKUP(NO) BUFSZ( 4096) TMCR(2014.283
  08:22:18.06) DFNT(CREATE) </rsp>
<rsp>MSP(PLNK23C) MBR(IMS2 ) CC( 0) TYPE(CTC) ADDR( )
  LSTT(NOTOPEN) BUFSZ( 1024) TMCR(2014.282 16:00:47.10) DFNT(MSCGEN)
</rsp>
<rsp>MSP(PLNK21TA) MBR(IMS2 ) CC( 0) TYPE(TCPIP) RIMS(IMS1 )
  LIC(HWS2 ) LPLK(MSC21 ) MAXS( 2) BKUP( 4) BUFSZ(65536)
  TMCR(2014.282 16:00:47.10) DFNT(MSCGEN) </rsp>
<rsp>MSP(PLNK23M) MBR(IMS2 ) CC( 0) TYPE(MTM) BUFSZ( 1024)
  TMCR(2014.282 16:00:47.10) DFNT(MSCGEN) </rsp>
</cmdspdata>
</imsout>

```

QUERY MSPLINK コマンドの例 2

この例では、各リンク・タイプの 4 つの MSC 物理リンクが表示されており、MSLink と MSName の出力フィールドが示されています。

TSO SPOC 入力:

```
QUERY MSPLINK NAME(PLNKV001,PLNK23C,PLNK21TA,PLNK23M) SHOW(MSLINK,MSNAME)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

MSPLink	MbrName	CC	LMSLink	LMSLink#	LMaxSess	LMSName	LSIDR	LSIDL
PLNKV001	IMS2	0			1			
PLNK21TA	IMS2	0			2			
PLNK21TA	IMS2	0	LNK21T01	27		LINK21T1	74	84
PLNK21TA	IMS2	0	LNK21T02	28		LINK21T2	75	85
PLNK21TA	IMS2	0	LNK21T02	28		LINK23T2	120	97
PLNK23C	IMS2	0	LNK23C01	5		LINK23C2	33	23
PLNK23M	IMS2	0	LNK23M01	6		LINK23M2	34	24

OM API 入力:

```
CMD(QRY MSPLINK NAME(PLNKV001,PLNK21TA,PLNK23C,PLNK23M) SHOW(MSLINK,MSNAME))
```

OM API 出力:

```
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.7.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2014.283 15:38:25.282367</statime>
<stotime>2014.283 15:38:25.300469</stotime>
<staseq>CDE239FB66D3F7EB</staseq>
<stoseq>CDE239FB6B3F5CED</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10083825</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS2 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>MSPLINK </kwd>
<input>QRY MSPLINK NAME(PLNKV001,PLNK23C,PLNK21TA,PLNK23M)
SHOW(MSLINK,MSNAME) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="MSP" l1bl="MSPLink" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="5" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="MSL" l1bl="LMSLink" scope="LCL" sort="a" key="2"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="LINKN" l1bl="LMSLink#" scope="LCL" sort="a" key="3"
scroll="yes" len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="MAXS" l1bl="LMaxSess" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="4" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MSN" l1bl="LMSName" scope="LCL" sort="a" key="4"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="SIDR" l1bl="LSIDR" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="SIDL" l1bl="LSIDL" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
```



```

</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MSP(PLNKV001) MBR(IMS2 ) CC( 0) MAXS( 1) </rsp>
<rsp>MSP(PLNK23C ) MBR(IMS2 ) CC( 0) MSL(LNK23C01) LINKN( 5)
  MSN(LINK23C2) SIDR( 33) SIDL( 23) </rsp>
<rsp>MSP(PLNK21TA) MBR(IMS2 ) CC( 0) MAXS( 2) </rsp>
<rsp>MSP(PLNK21TA) MBR(IMS2 ) CC( 0) MSL(LNK21T01) LINKN( 27)
  MSN(LINK21T1) SIDR( 74) SIDL( 84) </rsp>
<rsp>MSP(PLNK21TA) MBR(IMS2 ) CC( 0) MSL(LNK21T02) LINKN( 28)
  MSN(LINK21T2) SIDR( 75) SIDL( 85) </rsp>
<rsp>MSP(PLNK21TA) MBR(IMS2 ) CC( 0) MSL(LNK21T02) LINKN( 28)
  MSN(LINK23T2) SIDR( 120) SIDL( 97) </rsp>
<rsp>MSP(PLNK23M ) MBR(IMS2 ) CC( 0) MSL(LNK23M01) LINKN( 6)
  MSN(LINK23M2) SIDR( 34) SIDL( 24) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

QUERY MSPLINK コマンドの例 3

この例では、TYPE=TCPIP で定義されているすべての物理リンクが表示されます。

TSO SPOC 入力:

```
QUERY MSPLINK TYPE(TCPIP) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

MSPLink	MbrName	CC	LType	LRmtImS	LLc1ImSCon	LLc1PlkID	Lc1Stat	LBackUp
PLNK21TA	IMS2	0	TCPIP	IMS1	HWS2	MSC21	STOLGN	4
PLNK23TA	IMS2	0	TCPIP	IMS3	HWS2	MSC23		4

(右にスクロールして、画面 2 へ)

MSPLink	MbrName	LBufSize	LMaxSess	LTimeCreate
PLNK21TA	IMS2	65536	2	2014.282 16:00:47.10
PLNK23TA	IMS2	65536	2	2014.282 16:00:47.10

(右にスクロールして、画面 3 へ)

MSPLink	MbrName	LTimeUpdate	LTimeAccess	LDefnType
PLNK21TA	IMS2			MSCGEN
PLNK23TA	IMS2			

OM API 入力:

```
CMD(QRY MSPLINK TYPE(TCPIP) SHOW(ALL))
```

OM API 出力:

```

<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.7.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2014.283 15:54:36.419187</statime>
<stotime>2014.283 15:54:36.487405</stotime>
<staseq>CDE23D998CC73DF1</staseq>
<stoseq>CDE23D999D6ED2E6</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10085434</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS2 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>MSPLINK </kwd>
<input>QUERY MSPLINK TYPE(TCPIP) SHOW(ALL) </input>

```

```

</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="MSP" l1bl="MSPLink" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="5" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="TYPE" l1bl="LType" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="NODE" l1bl="LNodeName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="ADDR" l1bl="LCTCaddr" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RIMS" l1bl="LRmtIms" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LIC" l1bl="LLc1ImsCon" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LPLK" l1bl="LLc1PlkID" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="XCFG" l1bl="LXCFgroup" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="XCFM" l1bl="LXCFmem" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LSTT" l1bl="Lc1Stat" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="ASR" l1bl="LASR" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="3" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="BKUP" l1bl="LBackUp" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="2" dtype="CHAR" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="BUFSZ" l1bl="LBufSize" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="MAXS" l1bl="LMaxSess" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MDTB" l1bl="LDefMdtbl" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TMCR" l1bl="LTimeCreate" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="TMUP" l1bl="LTimeUpdate" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="TMAC" l1bl="LTimeAccess" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="TMIM" l1bl="LTimeImport" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="DFNT" l1bl="LDefnType" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MSP(PLNK21TA) MBR(IMS2 ) CC( 0) TYPE(TCPIP) RIMS(IMS1 )
  LIC(HWS2 ) LPLK(MSC21 ) LSTT(STOLGN) MAXS( 2) BKUP( 4)
  BUFSZ(65536) TMCR(2014.282 16:00:47.10) DFNT(MSCGEN) </rsp>
<rsp>MSP(PLNK23TA) MBR(IMS2 ) CC( 0) TYPE(TCPIP) RIMS(IMS3 )
  LIC(HWS2 ) LPLK(MSC23 ) MAXS( 2) BKUP( 4) BUFSZ(65536)
  TMCR(2014.282 16:00:47.10) DFNT(MSCGEN) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

QUERY MSPLINK コマンドの例 4

この例では、STOLGN (ログオン停止) 状況にあるすべての MSC 物理リンクについて、すべての属性が表示されています。

TSO SPOC 入力:

```
QUERY MSPLINK STATUS(STOLGN) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

MSPLink	MbrName	CC	LType	LNodeName	LRmtIms	LLc1ImsCon	LLc1PlkID
PLNKV001	IMS2	0	VTAM	L6APPL3			
PLNK21TA	IMS2	0	TCPIP		IMS1	HWS2	MSC21

(scrolled right to screen 2)

MSPLink	MbrName	Lc1Stat	LASR	LBackUp	LBufSize	LMaxSess	LTimeCreate
PLNKV001	IMS2	STOLGN	OFF	NO	4096	1	2014.283 08:22:18.06
PLNK21TA	IMS2	STOLGN		4	65536	2	2014.282 16:00:47.10

(scrolled right to screen 3)

MSPLink	MbrName	LTimeUpdate	LTimeAccess	LDefnType
PLNKV001	IMS2			CREATE
PLNK21TA	IMS2			MSCGEN

OM API 入力:

CMD(QRY MSPLINK STATUS(STOLGN) SHOW(ALL))

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.7.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2014.283 15:50:05.165574</statime>
<stotime>2014.283 15:50:05.189920</stotime>
<staseq>CDE23C96DCC06FF0</staseq>
<stoseq>CDE23C96E2B208F2</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10085004</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS2 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>MSPLINK </kwd>
<input>QRY MSPLINK STATUS(STOLGN) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="MSP" l1b1="MSPLink" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="5" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="TYPE" l1b1="LType" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="NODE" l1b1="LNodeName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="ADDR" l1b1="LCTCaddr" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="RIMS" l1b1="LRmtIms" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="LIC" l1b1="LLc1ImsCon" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="LPLK" l1b1="LLc1PlkID" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="XCFG" l1b1="LXCfgroup" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="XCFM" l1b1="LXCfmem" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="LSTT" l1b1="Lc1Stat" scope="LCL" sort="n" key="0"

```

```

scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="ASR" l1b1="LASR" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="3" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="BKUP" l1b1="LBackUp" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="2" dtype="CHAR" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="BUFSZ" l1b1="LBufSize" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="MAXS" l1b1="LMaxSess" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="4" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="MDTB" l1b1="LDefMdtb1" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="TMCR" l1b1="LTimeCreate" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="TMUP" l1b1="LTimeUpdate" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="TMAC" l1b1="LTimeAccess" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="TMIM" l1b1="LTimeImport" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="DFNT" l1b1="LDefnType" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MSP(PLNKV001) MBR(IMS2 ) CC( 0) TYPE(VTAM ) NODE(L6APPL3 )
LSTT(STOLGN) MAXS( 1) ASR(OFF) BKUP(NO) BUFSZ( 4096) TMCR(2014.283
08:22:18.06) DFNT(CREATE) </rsp>
<rsp>MSP(PLNK21TA) MBR(IMS2 ) CC( 0) TYPE(TCPIP) RIMS(IMS1 )
LIC(HWS2 ) LPLK(MSC21 ) LSTT(STOLGN) MAXS( 2) BKUP( 4)
BUFSZ(65536) TMCR(2014.282 16:00:47.10) DFNT(MSCGEN) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

QUERY MSPLINK コマンドの例 5

TSO SPOC 入力:

```
QUERY MSPLINK SHOW(EXPORTNEEDED)
```

TSO SPOC 出力:

MSPLink	MbrName	CC	ExportNeeded
PLNKM001	IMS1	0	Y
PLNKM002	IMS1	0	Y
PLNKM003	IMS1	0	Y

QUERY MSPLINK コマンドの例 6

TSO SPOC 入力:

```
QUERY MSPLINK NAME(PLNK23M,PLNK23C,PLNK23V,PLNK31TA,PLNKV001) SHOW(DEFN)
```

TSO SPOC 出力:

```
(screen 1)
MSPLink MbrName CC Repo IMSid Type LType NodeName LNodeName
PLNKV001 IMS1 0 Y VTAM L6APPL1
PLNKV001 IMS1 0 IMS1 VTAM L6APPL1
PLNK23C IMS1 0 Y CTC
PLNK23C IMS1 0 IMS1 CTC
PLNK23M IMS1 0 Y MTM
PLNK23M IMS1 0 IMS1 MTM
PLNK23V IMS1 0 Y VTAM L6APPL1
PLNK23V IMS1 0 IMS1 VTAM L6APPL1
PLNK31TA IMS1 0 Y TCPIP
PLNK31TA IMS1 0 IMS1 TCPIP
```

(screen 2)

MSPLink	MbrName	Repo	CTCaddr	LCTCaddr	RmtIm	LRmtIm	Lc1ImCon	LLc1ImCon
PLNKV001	IMS1	Y						
PLNKV001	IMS1							
PLNK23C	IMS1	Y						
PLNK23C	IMS1							
PLNK23M	IMS1	Y						
PLNK23M	IMS1							
PLNK23V	IMS1	Y						
PLNK23V	IMS1							
PLNK31TA	IMS1	Y			IMS1		HWS3	
PLNK31TA	IMS1					IMS1		HWS3

(screen 3)

MSPLink	MbrName	Repo	Lc1P1kID	LLc1P1kID	ASR	LASR	BackUp	LBackUp
PLNKV001	IMS1	Y			OFF		NO	
PLNKV001	IMS1					OFF		NO
PLNK23C	IMS1	Y						
PLNK23C	IMS1							
PLNK23M	IMS1	Y						
PLNK23M	IMS1							
PLNK23V	IMS1	Y			OFF		NO	
PLNK23V	IMS1					OFF		NO
PLNK31TA	IMS1	Y	MSC31				NO	
PLNK31TA	IMS1			MSC31				NO

(screen 4)

MSPLink	MbrName	Repo	BufSize	LBufSize	MaxSess	LMaxSess	DefMdtbl	LDefMdtbl
PLNKV001	IMS1	Y	4096		1		MTMSCVAA	
PLNKV001	IMS1			4096		1		MTMSCVAA
PLNK23C	IMS1	Y	1024					
PLNK23C	IMS1			1024				
PLNK23M	IMS1	Y	1024					
PLNK23M	IMS1			1024				
PLNK23V	IMS1	Y	1024		8			
PLNK23V	IMS1			1024		8		
PLNK31TA	IMS1	Y	65536		2			
PLNK31TA	IMS1			65536		2		

(screen 5)

MSPLink	MbrName	Repo	TimeCreate	LTimeCreate
PLNKV001	IMS1	Y	2015.308 10:43:15.54	
PLNKV001	IMS1			2015.308 10:43:15.54
PLNK23C	IMS1	Y	2015.308 10:42:16.99	
PLNK23C	IMS1			2015.308 10:42:16.99
PLNK23M	IMS1	Y	2015.308 10:42:16.99	
PLNK23M	IMS1			2015.308 10:42:16.99
PLNK23V	IMS1	Y	2015.308 10:42:16.99	
PLNK23V	IMS1			2015.308 10:42:16.99
PLNK31TA	IMS1	Y	2015.308 10:42:16.99	
PLNK31TA	IMS1			2015.308 10:42:16.99

(screen 6)

MSPLink	MbrName	Repo	TimeUpdate	LTimeUpdate	LTimeAccess
PLNKV001	IMS1	Y			
PLNKV001	IMS1				
PLNK23C	IMS1	Y			
PLNK23C	IMS1				
PLNK23M	IMS1	Y			
PLNK23M	IMS1				
PLNK23V	IMS1	Y			
PLNK23V	IMS1				
PLNK31TA	IMS1	Y			
PLNK31TA	IMS1				

OM API 入力:

CMD(QRY MSPLINK NAME(PLNK23M,PLNK23C,PLNK23V,PLNK31TA,PLNKV001) SHOW(DEFN)

OM API 出力:

```
<imsout>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USR011 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>MSPLINK </kwd>
<input>QRY MSPLINK NAME(PLNK23M,PLNK23C,PLNK23V,PLNK31TA,PLNKV001)
SHOW(DEFN) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr sbl="MSP" llbl="MSPLink" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr sbl="MBR" llbl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="5" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr sbl="CC" llbl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr sbl="CCTXT" llbl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr sbl="REPO" llbl="Repo" scope="LCL" sort="d" key="2" scroll="no"
len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr sbl="IMSID" llbl="IMSid" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr sbl="RTYPE" llbl="Type" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr sbl="TYPE" llbl="LType" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr sbl="RNODE" llbl="NodeName" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr sbl="NODE" llbl="LNodeName" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr sbl="RADDR" llbl="CTCaddr" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr sbl="ADDR" llbl="LCTCaddr" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr sbl="RRIMS" llbl="RmtIms" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr sbl="RIMS" llbl="LRmtIms" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr sbl="RIC" llbl="LclImsCon" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr sbl="LIC" llbl="LLclImsCon" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr sbl="RPLK" llbl="LclPlkID" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr sbl="LPLK" llbl="LLclPlkID" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr sbl="XCFG" llbl="LXCFgroup" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr sbl="XCFM" llbl="LXCFmem" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr sbl="RASR" llbl="ASR" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="3" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr sbl="ASR" llbl="LASR" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="3" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr sbl="RBKUP" llbl="BackUp" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="2" dtype="CHAR" align="right" skipb="yes" />
<hdr sbl="BKUP" llbl="LBackUp" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="2" dtype="CHAR" align="right" skipb="yes" />
<hdr sbl="RBUFSZ" llbl="BufSize" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr sbl="LBUFSZ" llbl="LBufSize" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr sbl="RMAXS" llbl="MaxSess" scope="GBL" sort="n" key="0"
```


```

scroll="yes" len="4" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MAXS" l1bl="LMaxSess" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="4" dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RMDTB" l1bl="DefMdtbl" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MDTB" l1bl="LDefMdtbl" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RTMCR" l1bl="TimeCreate" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="TMCR" l1bl="LTimeCreate" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="RTMUP" l1bl="TimeUpdate" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="TMUP" l1bl="LTimeUpdate" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="TMAC" l1bl="LTimeAccess" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="TMIM" l1bl="LTimeImport" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="EXPN" l1bl="ExportNeeded" scope="LCL" sort="y" key="0"
scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MSP(PLNK23M ) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYPE(MTM ) BUFZ( 1024)
TMCR(2015.308 10:42:16.99) DFNT(MSCGEN) IMSID(IMS1) </rsp>
<rsp>MSP(PLNK23C ) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYPE(CTC ) ADDR( )
LSTT(NOTOPEN) BUFZ( 1024) TMCR(2015.308 10:42:16.99) DFNT(MSCGEN)
IMSID(IMS1) </rsp>
<rsp>MSP(PLNK23V ) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYPE(VTAM ) NODE(L6APPL1 )
MAXS( 8) ASR(OFF) BKUP(NO) BUFZ( 1024) TMCR(2015.308 10:42:16.99)
DFNT(MSCGEN) IMSID(IMS1) </rsp>
<rsp>MSP(PLNK31TA) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYPE(TCPIP) RIMS(IMS1 )
LIC(HWS3 ) LPLK(MSC31 ) MAXS( 2) BKUP(NO) BUFZ(65536)
TMCR(2015.308 10:42:16.99) DFNT(MSCGEN) IMSID(IMS1) </rsp>
<rsp>MSP(PLNKV001) MBR(IMS1 ) CC( 0) TYPE(VTAM ) NODE(L6APPL1 )
LSTT(STOLGN) MAXS( 1) ASR(OFF) BKUP(NO) BUFZ( 4096) MDTB(MTMSCVAA)
TMCR(2015.308 10:43:15.54) DFNT(CREATE) IMSID(IMS1) </rsp>
<rsp>MSP(PLNK23M ) MBR(IMS1) CC( 0) REPO(Y) IMSID() RBUFZ( 1024)
RTMCR(2015.308 10:42:16.99) RTYPE(MTM ) </rsp>
<rsp>MSP(PLNK23C ) MBR(IMS1) CC( 0) REPO(Y) IMSID() RADDR( )
RBUFZ( 1024) RTMCR(2015.308 10:42:16.99) RTYPE(CTC ) </rsp>
<rsp>MSP(PLNK23V ) MBR(IMS1) CC( 0) REPO(Y) IMSID() RASR(OFF)
RBKUP(NO) RBUFZ( 1024) RMAXS( 8) RMDTB( ) RNODE(L6APPL1 )
RTMCR(2015.308 10:42:16.99) RTYPE(VTAM ) </rsp>
<rsp>MSP(PLNK31TA) MBR(IMS1) CC( 0) REPO(Y) IMSID() RBKUP(NO)
RBUFZ(65536) RPLK(MSC31 ) RIC(HWS3 ) RMAXS( 2) RRIMS(IMS1 )
RTMCR(2015.308 10:42:16.99) RTYPE(TCPIP) </rsp>
<rsp>MSP(PLNKV001) MBR(IMS1) CC( 0) REPO(Y) IMSID() RASR(OFF)
RBKUP(NO) RBUFZ( 4096) RMAXS( 1) RMDTB(MTMSCVAA) RNODE(L6APPL1 )
RTMCR(2015.308 10:43:15.54) RTYPE(VTAM ) </rsp>
</cmdrspdata>
<imsout>


```


説明: この QUERY コマンドは、4 種類の MSC 物理リンクをすべて表示します。これにより、11 個の MSPLINK 属性すべてについて、可能なすべてのローカル定義とリポジトリ定義のヘッダーが表示されます。

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

 複数のリソースに類似機能があるコマンドのリスト (オペレーションおよびオートメーション)

QUERY NODE コマンド

QUERY NODE コマンドは、IMSplex の ISC TCP/IP または VTAM ノード (端末) および非 VTAM 装置 (SPOOL 装置および SYSOUT 装置) に関する情報を表示するために使用します。

ISC TCP/IP ノードの場合、このコマンドは、TCP/IP サポートを提供する IMS Connect インスタンスも表示します。

このコマンドは、OM API を介してのみ指定でき、XRF 代替システムでのみ有効です。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 462 ページの『キーワード』
- 468 ページの『使用上の注意』
- 469 ページの『同等の IMS タイプ 1 コマンド』
- 470 ページの『出力フィールド』
- 476 ページの『QUERY NODE 状況』
- 479 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 481 ページの『例』

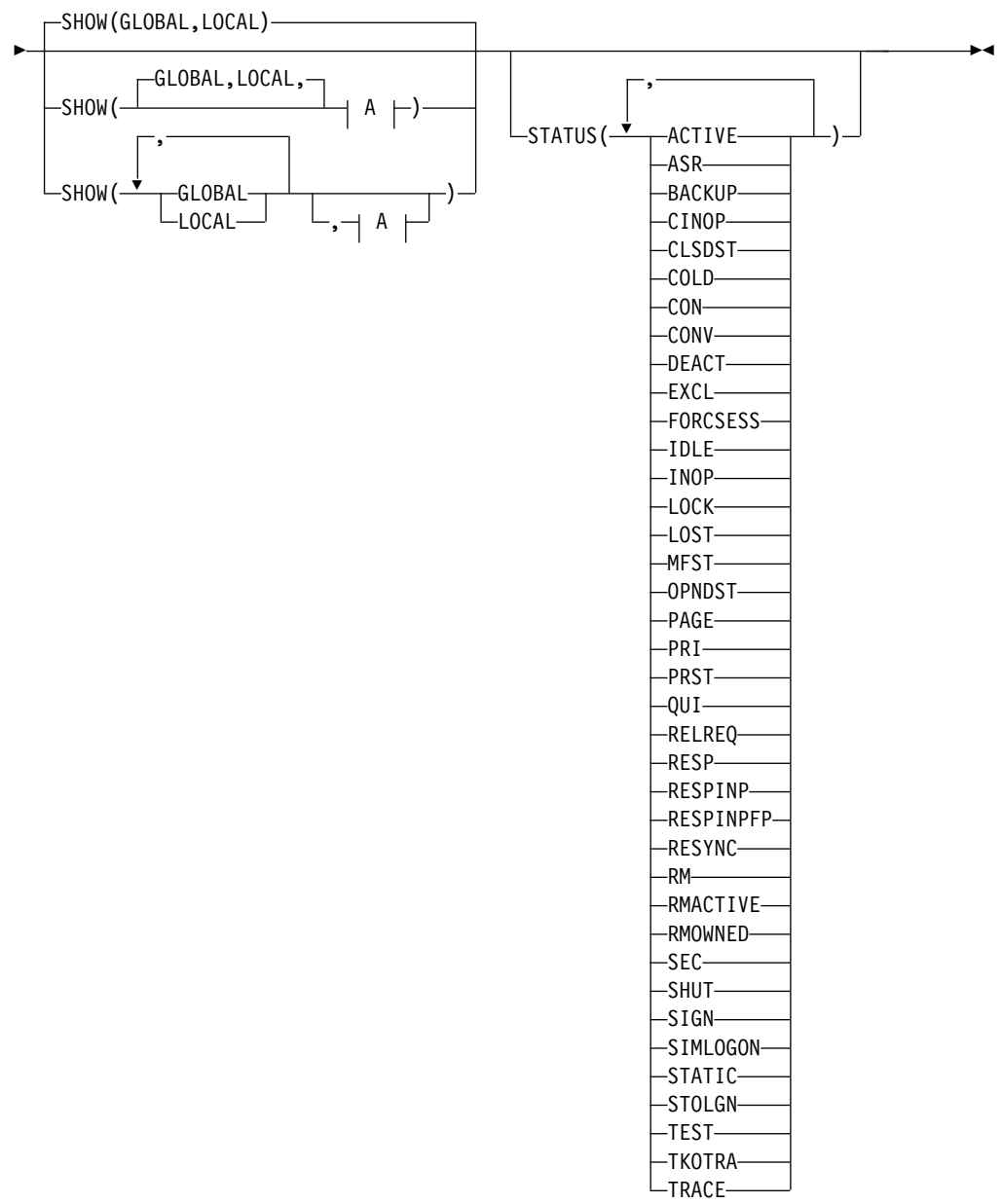
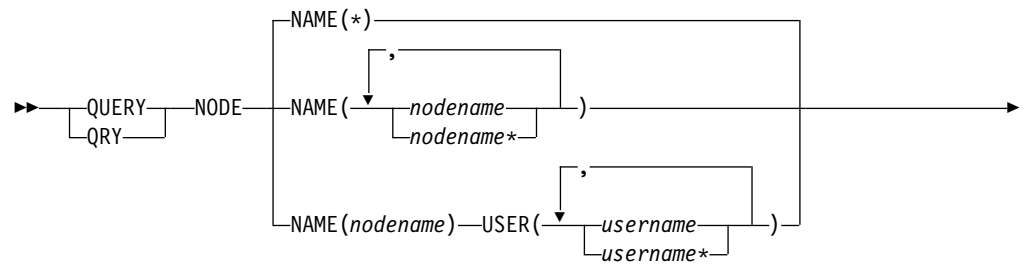
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

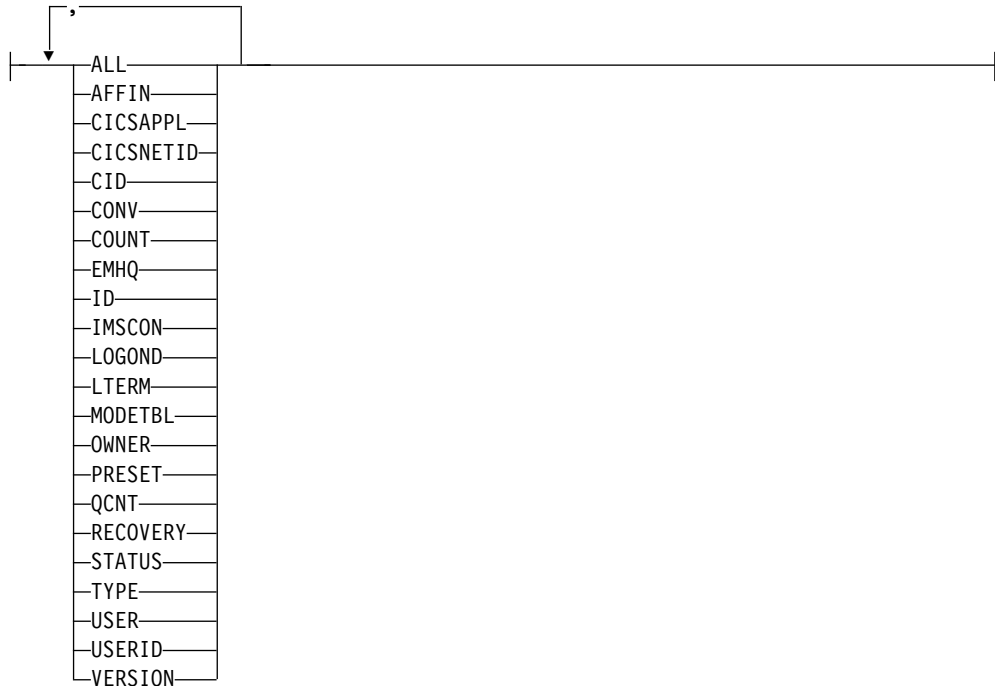
表 129. QUERY NODE コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUERY NODE	X		X
NAME	X		X
USER	X		X
SHOW	X		X
STATUS	X		X

構文



A:



キーワード

以下のキーワードは、QUERY NODE コマンドに有効です。

NAME()

表示する 1 つ以上の VTAM ノード (端末) または非 VTAM 装置の名前を指定します。有効な名前は 1 から 8 文字で、ワイルドカードが指定できます。すべてのノードおよび装置を表示するには、NAME(*) を指定します。デフォルト値は NAME(*) です。

任意の静的または動的 VTAM 端末の名前を指定できます。サポートされている端末タイプは、LU0、LU1、LU2、および LU6.1 (ISC のみ) です。

任意の非 VTAM 装置を指定できます。非 VTAM 装置には、システム定義プロセスのときに LINE および PTERM 番号が割り当てられます。サポートされている装置タイプは、CONSOLE、SYSOUT (DISK、PUNCH、PRINTER、READER、TAPE)、SPOOL、および TCO です。

CONSOLE

これはシステム・コンソールです。IMS は、この装置に LINE 1 PTERM 1 を自動的に割り当てます。

DISK LINEGRP マクロの UNITYPE=DISK によって定義されます。

PUNCH

LINEGRP マクロの UNITYPE=PUNCH によって定義されます。

PRINTER

LINEGRP マクロの UNITYPE=PRINTER によって定義されます。

READER

LINEGRP マクロの UNITYPE=READER によって定義されます。

SPOOL

LINEGRP マクロの UNITYPE=SPOOL によって定義されます。

TAPE LINEGRP マクロの UNITYPE=TAPE によって定義されます。

TCO これは、時間制御オプションとして割り当てられた装置です。この装置には、システム定義プロセスで自動的に最後の LINE 番号が割り当てられます。

非 VTAM 装置を指定するには、DFSLNxxx の名前を指定します。ここで、xxx は装置の LINE 番号です。例えば、システム・コンソール (LINE 1) を表示するには、NAME(DFSLN001) を指定します。

SHOW()

返されるノード出力フィールドを指定します。

ノード名は常に、出力を作成した IMS の名前および完了コードと一緒に返されます。SHOW が指定されなかった場合、STATUS フィルターが指定されていないければ、ノード名だけが返されます。この方法をシステム管理アプリケーションで利用すれば、IMSplex 内で現在認識されているすべてのノード名のリストを入手できます。

表示する情報を IMS が入手する場所 (グローバル・リソースまたはローカル・リソース) を指定するために、2 つのパラメーター GLOBAL と LOCAL が使用されます。デフォルトは GLOBAL と LOCAL の両方です。

残りのパラメーターは表示される情報を指定するために使用されます。

SHOW キーワードでサポートされるパラメーターには以下のものがあり、これらは任意の順序で指定できます。

ALL

LTERM パラメーターおよび CONV パラメーターが指定された場合に表示される出力フィールドを除き、すべての出力フィールドを返します。

LTERM および会話情報を他のすべての出力と一緒に表示するには、SHOW(ALL,LTERM,CONV) を指定します。

AFFIN

ノードが VTAM 汎用リソース類似性を持つ IMS APPLID (該当する場合)。VTAM 汎用リソース類似性は、SHOW キーワードで GLOBAL パラメーターが指定された場合にのみ有効です。GLOBAL が指定されなかった場合、AFFIN パラメーターは無視されます。

CICSAPPL

ISC TCP/IP ノードの場合、リモート CICS サブシステムの APPLID を表示します。

CICSNETID

ISC TCP/IP ノードの場合、リモート CICS の NETWORK ID を表示します。

CID

VTAM 接続 ID。

CONV

ノードに関連した会話 ID、トランザクション、および会話状況。個々の会話は、別個のコマンド応答表示行に返されます。SHOW(ALL) が指定され

た場合、会話状況は含まれません。会話情報を他のすべての出力と一緒に表示するには、SHOW(ALL,CONV) を指定します。

COUNT

指定されたノードへ送信したメッセージの数、および指定されたノードから受信したメッセージの数を表示します。

EMHQ

急送メッセージ・ハンドラー (EMH) キュー内のノード・メッセージ・キュー・カウントを表示します。このキュー・カウントは、指定されたノードに関連付けられている各論理端末のキュー・カウントの合計です。

EMHQ は、SHOW キーワードで GLOBAL パラメーターが指定された場合にのみ有効です。GLOBAL が指定されなかった場合、EMHQ パラメーターは無視されます。

EMHQ は、コマンド・マスターによってのみ処理されます。それ以外のすべての IMS システムは、このパラメーターを無視します。

EMHQ は、共用キュー環境で共用 EMH が使用されている場合にのみ有効です。それ以外の場合、このパラメーターは無視されます。

ノード・リソースがリソース構造内に存在する場合は、グローバル・ノード・リソースに関連付けられている論理端末を使用して、EMH キューからキュー・カウントが取得されます。それ以外の場合は、ローカル・ノード・リソースに関連付けられている論理端末が使用されますが、ノードがコマンド・マスター上にローカルに存在しない場合は、キュー・カウントが 0 になります。

GLOBAL

GLOBAL が指定された場合、コマンド・マスターは、他の指定されている SHOW パラメーターに従ってグローバル情報を表示します。これには、リソース構造からの情報が含まれます。

GLOBAL パラメーターは、コマンド・マスターによってのみ処理されます。他のすべての IMS システムはこのパラメーターを無視します。

LOCAL が一緒に指定されなかった場合、コマンド・マスター以外のすべての IMS システムは、コマンドを無視します。

GLOBAL は、コマンド・マスターが共用キュー、VTAM 汎用リソース、シスプレックス端末管理、またはそれらの任意の組み合わせを使用している場合にのみ適用されます。コマンド・マスターが共用キュー、VTAM 汎用リソース、シスプレックス端末管理のどれも使用していない場合、GLOBAL は適用されません。この環境で LOCAL が一緒に指定されている場合、GLOBAL は無視されます。その他の場合、コマンド・マスターはコマンドをリジェクトします。

共用キューが使用可能であり、グローバル・キュー・カウントが要求された場合、コマンド・マスターは適切なキュー・カウントを判別するよう CQS に要求します。これには、MSGQ と EMHQ の両方が含まれます。

VTAM 汎用リソース (VGR) が使用可能であり、VGR 類似性情報が要求された場合、コマンド・マスターはいずれかの VGR 類似性を判別するよう VTAM に要求します。

シスプレックス端末管理が使用可能な場合、コマンド・マスターは適切なグローバル状況を判別するよう RM に要求します。

GLOBAL と LOCAL の両方を指定した場合 (これがデフォルトです)、コマンド・マスターはグローバル情報とローカル情報を別々に作成します。グローバル情報は 1 つの出力行 (または出力行セット) として表示され、ローカル情報は別の出力行 (または出力行セット) として表示されます。

ID ISC ノードのもう一方のハーフセッション修飾子名を表示します。

IMSCON

ISC TCP/IP ノードの場合、ノードの TCP/IP サポートを提供する IMS Connect インスタンスの IMSplex メンバー名を表示します。

LOCAL

LOCAL が指定された場合、すべての IMS システムは、コマンド・マスターも含め、他の指定されている SHOW パラメーターに従ってローカル情報を表示します。これには、コマンドを処理する IMS にローカルな情報が含まれます。

LOCAL パラメーターは、コマンド・マスターを含むすべての IMS システムによって処理されます。LOCAL は、共用キューまたはシスプレックス端末管理が使用されているかどうかに関係なく、すべての環境に適用されます。

GLOBAL と LOCAL の両方を指定した場合 (これがデフォルトです)、コマンド・マスターはグローバル情報とローカル情報を別々に作成します。グローバル情報は 1 つの出力行 (または出力行セット) として表示され、ローカル情報は別の出力行 (または出力行セット) として表示されます。

LOGOND

ISC TCP/IP ノードの場合、ノードが使用しているセッションの確立に使用された ETO ログオン記述子の名前を表示します。

LTERM

ノードに関連付けられている論理端末 (LTERM) 名があれば、それを表示します。ノードには、0 個以上の論理端末が関連付けられている場合があります。

ノードに関連付けられているそれぞれの論理端末は、別々のコマンド応答行に返されます。

SHOW(ALL) が指定された場合、LTERM 状況は含まれません。論理端末情報を他のすべての出力と一緒に表示するには、SHOW(ALL,LTERM) を指定します。

MODETBL

指定されたノードに関連するモード・テーブル名を表示します。出力には、デフォルトのモード・テーブル名と実際のモード・テーブル名の両方が含まれます。デフォルトのモード・テーブル名は、システム定義によって設定されたデフォルト名です。この名前は、UPDATE NODE コマンドまたは LOGON 出口によって変更できます。実際のモード・テーブル名は、セッションを開始するために使用された実際の名前です。この名前はセッションがアクティブであるときにのみ表示され、それ以外のすべてのときにはブランクです。

OWNER

リソース構造内のノード・リソースの所有者を表示します。これは、シスプレックス端末管理が使用可能な場合にのみ適用され、コマンド・マスターによってのみ処理されます。他のすべての IMS システムはこのパラメーターを無視します。

所有者は、ノードを所有している IMS システムの IMSID (または XRF システムの RSENAME) です。IMS システムがノード・リソースを所有するのは、そのリソースがアクティブである (ノードがログオンしている) 場合、または IMS システムがそのリソースの重要な状況を保守している場合です。

PRESET

ノードの事前設定宛先名を表示します。ノードは、/SET コマンドによって設定された事前設定宛先モードになっています。事前設定宛先名は、トランザクション名か論理端末 (LTERM) 名です。このノードから入力されたすべてのメッセージは、事前設定された宛先のトランザクションまたは LTERM へ送信されます。

QCNT

ノードのメッセージ・キュー・カウントを表示します。このキュー・カウントは、指定されたノードに関連付けられている各論理端末のキュー・カウントの合計です。

このコマンドで戻されるローカル・キュー・カウントの値は、このコマンドが実行された IMS システムによって処理されているメッセージを表します。共用キュー環境では、キューの評価のためにローカル・キュー・カウントを使用しないでください。このコマンドで戻されるグローバル・キュー・カウントは、共用キュー構造上の現行のメッセージ・キュー・カウントを表します。

SHOW キーワードで LOCAL パラメーターも指定されている場合、そのコマンドを処理するすべての IMS システムは、コマンド・マスターも含め、ローカル・キュー・カウントを表示します。これは、共用メッセージ・キューが使用可能であるかどうかに関わらず有効です。

SHOW キーワードで GLOBAL パラメーターも指定されていて、共用メッセージ・キューが使用可能な場合、コマンド・マスターは共用メッセージ・キュー (MSGQ) のグローバル・キュー・カウントを表示します。ノード・リソースがリソース構造内に存在する場合は、グローバル・ノード・リソースに関連付けられている論理端末を使用して、共用キューからキュー・カウントが取得されます。それ以外の場合は、ローカル・ノード・リソースに関連付けられている論理端末が使用されますが、ノードがコマンド・マスター上にローカルに存在しない場合は、キュー・カウントが 0 になります。

ローカル・キュー・カウントとグローバル・キュー・カウントは、別々の出力フィールドとして表示されます。

RECOVERY

ノードの状況リカバリー・モード (SRM) とリカバリー・レベルを表示します。エンド・ユーザー有効状況は、会話、高速機能、全機能応答モード、STSN (設定およびテスト・シーケンス番号) のいずれかの状況です。

SRM は、セッションまたは IMS の終了直後にエンド・ユーザー有効状況 (存在する場合) がリカバリーされる場所を判別します。出力はノードの SRM を、GLOBAL (シスプレックス端末管理がリソース構造内で状況をリカバリーします)、LOCAL (IMS がローカル側で状況をリカバリーし、これは特定の IMS に対する類似性を示します)、NONE (状況は破棄されます) のいずれかとして表示します。

リカバリー・レベルは、どのエンド・ユーザー有効状況 (存在する場合) をリカバリーするかを決定します (SRM が GLOBAL または LOCAL の場合)。出力には、会話状況がリカバリーされたか (RCVYCONV)、高速機能状況がリカバリーされたか (RCVYFP)、全機能応答モードがリカバリーされたか (RCVYRESP)、それとも STSN 状況がリカバリーされたか (RCVYSTSN) が表示されます。

STATUS

ノードのローカルまたはグローバル状況を返します。返される可能性がある状況のリストと意味については、476 ページの『QUERY NODE 状況』を参照してください。

TYPE

VTAM ノード・タイプ。可能なノード・タイプは、AVM、FIN、LUT6、NTO、SLUP、SLU1、SLU2、3277、3286、3790、CONSOLE、RDR/PTR (SYSOUT および SPOOL の場合)、および TCO です。

USER

ノードに関連付けられている動的ユーザーまたは ISC ユーザーを表示します。ISC 並列セッション・ノードの場合、これはハーフセッション修飾子を表すユーザー構造です。静的 ISC の場合、これは SUBPOOL マクロによって定義されます。非 ISC 動的ノードの場合、これはノードへのユーザー ID のサインオン時にノードに割り振られたユーザー構造です。ユーザー名は、使用されたインストール先特定ユーザー出口または記述子に応じて、ユーザー ID と同じである場合と同じでない場合があります。静的な非 ISC ノード (および単一セッション ISC ノード) は、(たとえユーザー ID がサインオンしていても) ユーザーを持ちません。

USERID

ノードにサインオンしているユーザー ID (セキュリティのために、通常は RACF) を表示します。これは、静的または動的なすべての装置タイプに適用され、ユーザー名とは異なります。

VERSION

RM リソースに割り当てられたバージョン番号を表示します。この番号は、それらのリソースがリソース構造内で作成されるか更新されるとき、MVS によって割り当てられ、RM によって保守されます。

静的な単一セッション・ノード (非並列セッション ISC) は、RM 内でノード・リソースと静的ノード・ユーザー・リソースという 2 つのリソースによって表されます。VERSION パラメーターは、それらのリソースのそれぞれのバージョン番号を表示します。静的並列セッション ISC ノードとすべての動的ノードは、RM 内でノード・リソースという 1 つのリソースによって表されます。VERSION パラメーターは、そのノード・リソースのバージョン番号を表示します。

VERSION は、シスプレックス端末管理が使用可能な場合にのみ適用されます。VERSION は、シスプレックス端末管理が使用可能でなければ無視されます。

STATUS()

指定されたノード状況の少なくとも 1 つを持つノードを表示用を選択します。シスプレックス端末管理 (STM) が使用可能な場合、状況はローカルに存在するかグローバルに存在します。

STATUS フィルターは、シスプレックス端末管理環境と非シスプレックス端末管理環境の両方で有効です。シスプレックス端末管理環境では、選択された状況はローカルに存在するか、グローバルに存在するか、またはその両方に存在します。シスプレックス端末管理が使用可能でない場合、状況はローカルにのみ存在します。

SHOW(LOCAL) が指定された場合、IMS はローカル・システム内で該当する状況にあるノードだけを選択します。コマンドは、コマンド・マスターを含むすべての IMS システムによって処理されます。

SHOW(GLOBAL) が指定され、シスプレックス端末管理が使用可能な場合、IMS はリソース構造内で該当する状況にあるノードだけを選択します。コマンドは、コマンド・マスターによってのみ処理されます。

SHOW(GLOBAL) が指定され、シスプレックス端末管理が使用可能でない場合、コマンドはリジェクトされます。

SHOW(GLOBAL,LOCAL) が指定された場合 (デフォルト)、IMS はローカルで、またはリソース構造内で (シスプレックス端末管理が使用可能な場合)、該当する状況にあるノードを選択します。コマンドは、すべての IMS システムによって処理されます。コマンド・マスターは、グローバルとローカルの両方の情報を処理します。

フィルターを指定した場合に返される出力には、SHOW(STATUS) が指定されていない場合でも、ノードの状況が含まれます。

対応する状況のノードを選択するために使用できるフィルターを判別するには、476 ページの『QUERY NODE 状況』を参照してください。

USER()

特定の ISC ノードの場合、ノードに割り振られた 1 つ以上の ISC ユーザー名の名前を指定します。有効な名前は 1 から 8 文字で、ワイルドカードが指定できません。ノードに割り振られたすべてのユーザーを表示するには、USER(*) を指定するか、USER キーワードを省略します。

SHOW(USER) が指定されなかった場合でも、返される出力にはユーザー名が含まれます。

使用上の注意

QUERY NODE は、OM API を介してのみ指定できます。

QUERY NODE は XRF 代替システム上で発行できますが、SHOW(GLOBAL) はサポートされません。ローカル情報だけを表示できます。

QUERY NODE コマンドの処理は、IMS シスプレックス端末管理が使用可能であるかどうかによって異なります。

- IMS シスプレックス端末管理が使用不可に設定されている場合、各システムに対して、処理はローカル側で行われます。 type-1 コマンドと type-2 コマンドの結果は同様になります。
- IMS シスプレックス端末管理が使用可能に設定されている場合、type-1 コマンドと type-2 コマンドによる処理は、ローカル情報を表示する際に同様になります。ただし、グローバル情報の表示方法については異なります。
- IMS シスプレックス端末管理を使用可能に設定して、type-1 /DISPLAY コマンドを実行すると、コマンド・マスターによって、リソース構造またはローカル・システムのいずれかから情報が表示されますが、両方から情報が表示されることはありません。表示されているリソースがシステムによって所有されていない場合、またはコマンド・マスターによって所有されている場合、コマンド・マスターによってグローバル・リソースが表示されます。しかし、リソースがコマンド・マスター以外のシステムによって所有されている場合、コマンド・マスターによってローカル・リソースのみが表示され、リソースを所有するそのシステムによってグローバル・リソースが表示されます。
- IMS シスプレックス端末管理を使用可能に設定して、type-2 QUERY コマンドを実行すると、リソースが所有されているかどうかに関係なく、グローバル・リソース情報を表示するシステムはコマンド・マスターのみになります。さらに、コマンド・マスターによってローカル・リソース情報も表示されます。コマンドを処理するその他のすべての IMS システムは、ローカル・リソース情報のみを表示します。この手法により、IMSplex 上のすべての情報をより柔軟性を持って表示することができます。

SHOW キーワードは、コマンドを処理する IMS システムと、表示する情報を決定します。

- SHOW(GLOBAL) が指定された場合、コマンド・マスターはグローバル情報を表示し、これには、共用キューが使用可能である場合はグローバル・キュー・カウント、VTAM 汎用リソース (VGR) が使用可能である場合は汎用リソース類似性情報、シスプレックス端末管理が使用可能である (DFSDCxxx PROCLIB メンバー内で STM=YES が定義されている) 場合はリソース構造からの状況がそれぞれ含まれます。これは、そのノードが特定の IMS システム上でアクティブであるかどうかに関係なく当てはまります。OM がコマンドの経路指定先にするそれ以外のすべての IMS システムは、GLOBAL パラメーターを戻りコード X'00000004' および理由コード X'00001000' で無視します。
- SHOW(LOCAL) が指定された場合、OM がコマンドの経路指定先にする各 IMS システムは (コマンド・マスターも含め)、コマンドを処理し、各システムにローカルな情報を表示します。
- GLOBAL と LOCAL の両方を指定した場合 (これがデフォルトです)、コマンド・マスターはグローバル情報とローカル情報の両方を表示し、OM がコマンドの経路指定先にする他のすべての IMS システムはローカル情報を表示します。

同等の IMS タイプ 1 コマンド

以下の表は、各種の QUERY NODE コマンドと、類似の機能を実行するタイプ 1 IMS コマンドを示しています。

表 130. QUERY NODE コマンドと同等のタイプ 1 コマンド

QUERY NODE コマンド	類似の IMS タイプ 1 コマンド
QUERY NODE SHOW(AFFIN)	/DISPLAY AFFIN NODE ノード
QUERY NODE SHOW(CID)	/DISPLAY NODE ノード
QUERY NODE SHOW(CONV)	/DISPLAY CONV NODE ノード
QUERY NODE SHOW(COUNT)	/DISPLAY NODE ノード
QUERY NODE SHOW(EMHQ)	/DISPLAY NODE ノード QCNT EMHQ
QUERY NODE SHOW(LTERM)	/DISPLAY ASMT NODE ノード
QUERY NODE SHOW(MODETBL)	/DISPLAY NODE ノード MODE
QUERY NODE SHOW(OWNER)	/DISPLAY NODE ノード RECOVERY
QUERY NODE SHOW(PRESET)	/DISPLAY NODE ノード
QUERY NODE SHOW(QCNT)	/DISPLAY NODE ノード /DISPLAY NODE ノード QCNT
QUERY NODE SHOW(RECOVERY)	/DISPLAY NODE ノード RECOVERY
QUERY NODE SHOW(STATUS)	/DISPLAY NODE ノード
QUERY NODE SHOW(TYPE)	/DISPLAY NODE ノード
QUERY NODE SHOW(USERID)	/DISPLAY NODE ノード
QUERY NODE SHOW(USER)	/DISPLAY NODE ノード /DISPLAY ASMT NODE ノード
QUERY NODE STATUS(CONV)	/DISPLAY CONV
QUERY NODE STATUS(TRACE)	/DISPLAY TRACE NODE
QUERY NODE STATUS(status)	/DISPLAY STATUS NODE

出力フィールド

以下の表は、QUERY NODE の出力フィールドを示しています。表の各列は、以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

フォーマット設定済み出力の出力フィールド用列見出しが含まれます。

SHOW パラメーター

フィールドを生成させる SHOW キーワードのパラメーターを識別します。ゼロ以外の完了コードの場合に返される出力フィールドには、Error が表示されます。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。

有効範囲

出力フィールドの有効範囲を識別します。GBL は、SHOW(GLOBAL) のグローバル情報を表示するとき、コマンド・マスターだけがフィールドを生成できることを示します。LCL は、SHOW(LOCAL) のローカル情報を表示するすべての IMS がフィールドを生成できることを示します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 131. QUERY NODE コマンドの出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	SHOW パラメーター	有効範囲	意味
AFFIN	Affin	AFFIN	GBL	ノードが VTAM 汎用リソース類似性を持つ IMS APPLID (該当する場合)。
AMTB	ActMdtbl	MODETBL	LCL	アクティブ・モード・テーブル。この名前は、セッションがアクティブの間のみ表示されます。
CC	CC	N/A	N/A	完了コード。完了コードは、IMS が、指定されたリソースについてコマンドを処理できたかどうかを示します。詳しくは、479 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』を参照してください。完了コードは常に戻されます。
CCTXT	CCText	Error	N/A	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
CICAP	CICSAppId	CICSAPPL	LCL	リモート CICS サブシステムの APPLID。
CICNT	CICSNetid	CICSNETID	LCL	リモート CICS の NETWORK ID。
CID	CID	CID	LCL	VTAM 接続 ID。
CNTR	RecdCnt	COUNT	LCL	指定されたノードから受信したメッセージの数。
CNTS	SentCnt	COUNT	LCL	指定されたノードへ送信したメッセージの数。
CONVID	ConvID	CONV	GBL	リソース構造内に存在する、ノードに関連付けられた会話の会話 ID。ノードには 0 個、1 個、またはそれ以上の会話が存在します。会話ごとに独自の出力行が生成されます。
CONVSTT	ConvStat	CONV	GBL	リソース構造内に存在する、ノードに関連付けられた会話の状況。ノードには 0 個、1 個、またはそれ以上の会話が存在します。状況は以下のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • CONVHELD - 会話が保留中 • CONVACTV - 会話がアクティブ • CONVSCHD - 会話がスケジュール済み
CONVTRN	ConvTran	CONV	GBL	リソース構造内に存在する、ノードに関連付けられた会話のトランザクション。ノードには 0 個、1 個、またはそれ以上の会話が存在します。
DMTB	DefMdtbl	MODETBL	LCL	デフォルト・モード・テーブル。
EMHQ	EMHQCnt	EMHQ	GBL	EMH (急送メッセージ・ハンドラー) キュー内のグローバル論理端末キュー・カウント。EMHQ は、共用 EMH が使用されている場合にだけ表示されます。
GBL	Gbl	GLOBAL	GBL	「Y」の場合は、RM 内でグローバルに検出された状況が出力に反映されます。ブランクの場合は、ローカルで検出された状況が出力に反映されます。
ID	ID	ID	GBL	ISC 並列セッション端末の場合は、他のシステムのグローバル・ハーフセッション修飾子を表示します。

表 131. QUERY NODE コマンドの出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	SHOW パラメーター	有効範囲	意味
ISCUSER	ISCUser	N/A	N/A	<p>ノードが並列セッション ISC の場合、同じノードの並列セッションを区別するために、ユーザー・サブプール名が返されます。このフィールドは、ISC ノードが表示用に選択されている場合に表示されます。</p> <p>ユーザー名も表示される場合は、ISCUSER と USER の両方のフィールドに同じユーザー名が入ります。</p> <p>LOCAL スコープの場合、まだ割り振られていない並列セッションには N/A と表示されます。</p> <p>GLOBAL スコープの場合、各ノードに 1 回だけ N/A が表示されます。これは、そのノードのグローバルな状況を表しています。</p>
LCONVID	LConvID	CONV	LCL	ローカル・システム内に存在する、ノードに関連付けられた会話の会話 ID。ノードには 0 個、1 個、またはそれ以上の会話が存在します。会話ごとに独自の出力行が生成されます。
LCONVSTT	LConvStat	CONV	LCL	<p>ローカル・システム内に存在する、ノードに関連付けられた会話の状況。ノードには 0 個、1 個、またはそれ以上の会話が存在します。状況は以下のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • CONVHELD: 会話が保留中 • CONVACTV: 会話がアクティブ • CONVSCHD: 会話がスケジュール済み
LCONVTRN	LConvTran	CONV	LCL	ローカル・システム内に存在する、ノードに関連付けられた会話のトランザクション。ノードには 0 個、1 個、またはそれ以上の会話が存在します。
LGND	LclLogonD	LOGOND	LCL	ISC TCP/IP 端末の現在のセッションを確立するために使用された動的ログオン記述子名。
LIC	LclImsCon	IMSCON	LCL	ISC TCP/IP ノードの場合、指定されたノードの TCP/IP サポートを提供するローカル IMS Connect の IMSplex メンバー名。これは、ログオン記述子で LCLICON= キーワードによって定義されています。あるいは、静的に定義された端末の場合は、DFSDCxxx PROCLIB メンバー内の ISCTCPIP キーワードで定義されています。
LID	LID	ID	LCL	<p>ISC VTAM 並列セッション端末の場合、他のシステムのローカル・ハーフセッション修飾子を表示します。</p> <p>ISC TCP/IP 並列セッション端末の場合、ノードに割り振られている動的ユーザーまたは ISC ユーザーを表示します。</p>

表 131. QUERY NODE コマンドの出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	SHOW パラメーター	有効範囲	意味
LINE	回線	N/A	LCL	システム・コンソール、SPOOL、SYSOUT、または TCO 装置の回線番号を識別します。これは、ノードが非 VTAM である場合にのみ表示されません。
LLTERM	LLterm	LTERM	LCL	ローカル論理端末名。ノードに関連付けられている論理端末名。
LPRST	LPreset	PRESET	LCL	ノードが事前設定宛先モードである場合、/SET コマンドで設定された事前設定宛先のトランザクション名または LTERM 名を識別します。この端末から入力されたすべてのメッセージは、事前設定宛先のトランザクション・コードまたは LTERM へ送信されます。
LQ	LQCnt	QCNT	LCL	ローカル・キュー・カウント。
LRCVY	LRcvy	RECOVERY	LCL	ローカル・システム内のエンド・ユーザー有効状況のリカバリー・レベル。これは、どのタイプの状況がリカバリー可能であることを示します。

ここに示される値はいずれも、対応する状況がリカバリー可能であることを意味します。SRM が LOCAL の場合、状況はローカルでリカバリーされます。SRM が GLOBAL の場合、状況はグローバルにリカバリーされます。これらの値は、SRM が NONE であるか、SRM がない場合には適用されません。

返される可能性がある状況値 (複数の場合もあります) は、以下のとおりです。

- CONV: IMS 会話はリカバリー可能です (RCVYCONV=YES)。
- FP: 高速機能状況はリカバリー可能です (RCVYFP=YES)。
- RESP: 全機能応答モード状況はリカバリー可能です (RCVYRESP=YES)。
- STSN: STSN 状況はリカバリー可能です (RCVYSTSN=YES)。

表 131. QUERY NODE コマンドの出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	SHOW パラメーター	有効範囲	意味
LSRM	LSRM	RECOVERY	LCL	ローカル・システム内の状況リカバリー・モード。これは、エンド・ユーザー有効状況が維持される、リカバリー元となる場所を決定します。出力は、以下のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • GBL: 状況は IMS リソース構造内にグローバルに保管されています。 • LCL: 状況はローカルの制御ブロックおよびログ・レコードに保管されています。 • NONE: 状況は IMS リソース構造にもログ・レコードにも保管されていません。 • ブランク: SRM が設定されていないか、ノードがログオンしていないためにエンド・ユーザー有効状況が存在しないか、サインオンしたユーザーが存在しません。
LSTT	LclStat	STATUS	LCL	ローカル・ノード状況。可能なノード状況のリストと説明については、476 ページの『QUERY NODE 状況』を参照してください。
LTERM	Lterm	LTERM	GBL	グローバル論理端末名。ノードに関連付けられている論理端末名。
LTYPE	LType	TYPE	LCL	VTAM ノード・タイプ。可能なノード・タイプは、AVM、FIN、LUT6、NTO、SLUP、SLU1、SLU2、3277、3286、3790、CONSOLE、RDR/PTR (SYSOUT および SPOOL の場合)、および TCO です。
LUID	LUserid	USERID	LCL	ノードにサインオンしているローカル・ユーザー ID を識別します。
LUSER	LUser	USER	LCL	ノードに割り振られているローカル動的ユーザーまたは ISC ユーザーを識別します。
LVER	LVersion#	VERSION	LCL	ローカル・システム内で保守されているノード・リソースのバージョン番号。このフィールドは STM が有効な場合のみ適用されます。
LVERSNU	LVersion#SNU	VERSION	LCL	ローカル・システム内で保守されている静的ノード・ユーザー・リソースのバージョン番号。このフィールドは STM が有効な場合に、静的単一セッション・ノードにのみ適用されます。
MBR	MbrName	N/A	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー (モジュール単位)。出力を作成した IMS の IMS ID。IMS ID は常に戻されます。
NODE	Node	N/A	N/A	ノード名。ノード名は常に返されます。
OWNER	Owner	OWNER	GBL	リソース所有者。ノードがアクティブである IMS の IMS ID または RSENAME。所有している IMS システムが存在せず、RM にリソースの項目が含まれている場合、所有者フィールドはブランクになります。

表 131. QUERY NODE コマンドの出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	SHOW パラメーター	有効範囲	意味
QCNT	QCnt	QCNT	GBL	共用キュー上のグローバル・キュー・カウント。グローバル・キュー・カウントは、共用キューが使用されている場合のみ表示できます。
PTERM	PTerm	N/A	LCL	システム・コンソール、SPOOL、SYSOUT、または TCO 装置の PTERM 番号を識別します。これは、ノードが非 VTAM である場合のみ表示されます。
RCVY	Rcvy	RECOVERY	GBL	リソース構造内のエンド・ユーザー有効状況のリカバリー・レベル。これは、どのタイプの状況がリカバリー可能であるかを示します。 ここに示される値はいずれも、対応する状況がリカバリー可能であることを意味します。SRM が LOCAL の場合、状況はローカルでリカバリーされます。SRM が GLOBAL の場合、状況はグローバルにリカバリーされます。これらの値は、SRM が NONE であるか、SRM がない場合には適用されません。 返される可能性がある状況値 (複数の場合もあります) は、以下のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> • CONV: IMS 会話はリカバリー可能です (RCVYCONV=YES)。 • STSN: STSN 状況はリカバリー可能です (RCVYSTSN=YES)。 • FP: 高速機能状況はリカバリー可能です (RCVYFP=YES)。
SRM	SRM	RECOVERY	GBL	リソース構造内の状況リカバリー・モード。これは、エンド・ユーザー有効状況が維持される、リカバリー元となる場所を決定します。出力は、以下のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • GBL: 状況は IMS リソース構造内にグローバルに保管されています。 • LCL: 状況はローカルの制御ブロックおよびログ・レコードに保管されています。 • NONE: 状況は IMS リソース構造にもログ・レコードにも保管されていません。 • ブランク: SRM が設定されていないか、ノードがログオンしていないためにエンド・ユーザー有効状況が存在しないか、サインオンしたユーザーが存在しません。
STT	Status	STATUS	GBL	グローバル・ノード状況。可能なノード状況のリストと説明については、476 ページの『QUERY NODE 状況』を参照してください。
TYPE	タイプ	TYPE	GBL	VTAM ノード・タイプ。可能なノード・タイプは、AVM、FIN、LUT6、NTO、SLUP、SLU1、SLU2、3277、3286、3790 です。

表 131. QUERY NODE コマンドの出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	SHOW パラメーター	有効範囲	意味
UID	Userid	USERID	GBL	ノードにサインオンしている RACF ユーザー ID を識別します。
USER	User	USER	GBL	ノードにサインオンしているか関連付けられている動的ユーザーまたは ISC ユーザーを識別します。
VER	Version#	VERSION	GBL	リソース構造内で保守されているノード・リソースのバージョン番号。このフィールドは STM が有効な場合のみ適用されます。
VERSNU	Version#SNU	VERSION	GBL	リソース構造内で保守されている静的ノード・ユーザー・リソースのバージョン番号。このフィールドは STM が有効な場合に、静的単一セッション・ノードにのみ適用されます。

QUERY NODE 状況

以下の表は、表示される可能性があるノードの状況を示しています。表の各列は、以下のとおりです。

Status

表示されるノード状況。

STATUS パラメーター

指定された状況のノードを選択する STATUS() フィルター。

有効範囲

状況の有効範囲。GBL は、状況をグローバルとすることができ (STM が使用可能な場合、それはリソース構造内に存在します)、STT ショート・ラベルとともに返されることを示します。LCL は、状況をローカルとすることができ、LSTT ショート・ラベルとともに返されることを示します。

意味 状況の簡略説明を提供します。

表 132. QUERY NODE 状況

Status	STATUS パラメーター	有効範囲	意味
ACTIVE	ACTIVE	LCL	ノードは、アクティブ・システム上で XRF セッション中です。
ASR	ASR	LCL	ノードには、セッション開始オプション ASR があります。
BACKUP	BACKUP	LCL	ノードは、代替システム上で XRF セッション中です。
CLSDST	CLSDST	LCL	セッションは切断されようとしています。
COLD	COLD	GBL および LCL	SLUP または FINANCE 端末の場合、次のセッション開始がコールドであることを示します (メッセージ・シーケンス番号は 0 に初期設定されます)。

表 132. QUERY NODE 状況 (続き)

Status	STATUS パ		意味
	ラメーター	有効範囲	
CON	CON	LCL	ノードは接続されているか、IMS とのセッション中です。
CONVACT	CONV	GBL および LCL	アクティブな会話が存在します。
CONVHELD	CONV	GBL および LCL	1 つ以上の保留された会話が存在します。
C1INOP C2INOP C3INOP C4INOP	CINOP	LCL	ノードまたは端末構成装置が操作不能であることを示します。ここで、C1、C2、C3、および C4 は、システム定義で定義されたコンポーネントを指しています。(操作不能のコンポーネントを作動可能にする方法の詳細については、/COMPT コマンドおよび /RCOMPT コマンドを参照してください。)
DEACT	DEACT	LCL	ノードは永続的に非活動化されています。ノードの再始動には、/STOP DC コマンドと /START DC コマンドが必要です。あるいは、UPDATE NODE STOP(DEACT) でノードをアクティブにすることもできます。システム・コンソール・ログのメッセージ DFS2473 には、この状況が設定された理由についての情報が入っていることがあります。DFS2473 はシステム・コンソール・ログで複数回発生することがあります。
EXCL	EXCL	GBL および LCL	ノードは、/EXCLUSIVE コマンドで設定された排他モードになっています。排他モードでは、影響を受ける端末が受信する出力を制限します。
FORCSESS	FORCSESS	LCL	ノードには、FORCE のセッション開始オプションがあります。
IDLE	IDLE	LCL	ノードに対して、いかなる種類のアクティビティも進行中ではありません。
INOP	INOP	LCL	NODE は操作不能です。
LOCK	LOCK	LCL	ノードには、/LOCK コマンドによって設定されたロックが掛かっています。その VTAM ノードに対しては、メッセージの送受信が停止されています。
LOST	LOST	LCL	このノードに対して VTAM LOSTERM EXIT がスケジュールされましたが、IMS は、それをまだ認識していません。このノードに対する次回の割り込み時に、IMS は LOSTERM 値を調べます。 すべての値は、結果的に即時の CLSDST または IMS からの切断を発生させます。

表 132. QUERY NODE 状況 (続き)

Status	STATUS パ		意味
	ラメーター	有効範囲	
MFST	MFST	GBL および LCL	ノードは、UPDATE NODE START(MFST) コマンドまたは /TEST MFS コマンドによって設定された MFSTEST モードになっています。メッセージ・フォーマット・サービスによってサポートされる端末は、要求されたフォーマット・ブロックが特別なテスト・ライブラリー内であれば、そのテスト・ライブラリーにあるフォーマット・ブロックを使用し、そこになければ、実動ライブラリーからブロックを取得します。
OPNDST	OPNDST	LCL	このノードについて、OPNDST が進行中です。
PAGE	PAGE	LCL	MFS ページ・メッセージを示します。
PRI	PRI	GBL および LCL	このノードは、ISC セッションの 1 次パートナーです。
PRST	PRST	LCL	ノードは、事前設定宛先モードになっています。PRST モードは、/SET コマンドによって設定されます。この端末から入力されたすべてのメッセージは、事前設定された宛先のトランザクション・コードまたは論理端末へ送信されます。
QUI	QUI	LCL	VTAM ノードが、IMS 出力を一時的に中断するために、VTAM の「Quiesce-End-of-Chain」標識を送信しました。
RELREQ	RELREQ	LCL	VTAM RELREQ 出口ルーチンが駆動されましたが、IMS はノードを解放する前に、進行中の操作が完了するのを待っています。
RESP	RESP	GBL および LCL	ノードは応答モードになっており、応答の返信メッセージを出力として使用可能であるか、送信処理中です。
RESPINP	RESPINP	GBL および LCL	ノードは応答モードになっており、応答モード入力がまだ未確定です (例えば、応答の返信メッセージを出力として使用できません)。
RESPINPFP	RESPINPFP	GBL および LCL	ノードは高速機能応答モードになっており、応答モード入力がまだ未確定です (例えば、応答の返信メッセージを出力として使用できません)。
RESYNC	RESYNC	LCL	VTAM ノードとの接続が終了したときに、IMS リカバリー可能出力メッセージの肯定応答が受信されませんでした。このメッセージは、そのノードに対して次回に接続が試みられたとき、再同期の対象になります。
RM	RM	GBL	ノードは、RM によって管理されるリソース構造内に存在します。

表 132. QUERY NODE 状況 (続き)

Status	STATUS パ		意味
	ラメーター	有効範囲	
RMACTIVE	RMACTIVE	GBL	ノードは、RM 構造内で示されているように (RM active)、IMSpIex 内でアクティブです (ログオンしています)。
RMOWNED	RMOWNED	GBL	ノードは、RM 構造内で示されているように (RM owned)、IMSpIex 内で IMS システムによって所有されています。
SEC	SEC	GBL および LCL	このノードは、ISC セッションの 2 次パートナーです。
SHUT	SHUT	LCL	ノードに対する正常処理が完了し、VTAM シャットダウン完了標識が IMS へ返されました。そのノードは、IMS 出力を受け取ることはできますが、この状態では、データを入力することはできません。
SIGN	SIGN	GBL および LCL	ユーザーは、拡張セキュリティーのもとでノードにサインオンしています。
SIMLOGON	SIMLOGON	LCL	IMS へのログオンがシミュレートされました。
STATIC	STATIC	GBL および LCL	ノードは、システム定義時に定義されました。
STOLGN	STOLGN	GBL および LCL	ノードは、UPDATE NODE STOP(LOGON) コマンドによってログオンが停止されました。
TEST	TEST	LCL	ノードは、テスト・モードになっています。
TKOTRA	TKOTRA	LCL	XRF 端末切り替えの問題の診断に役立つために、XRF セッションのノードはテークオーバー中のみトレースされます。
TRACE	TRACE	GBL および LCL	ノードはトレース中です。

戻りコード、理由コード、および完了コード

IMS 戻りコードと理由コードは、QUERY NODE コマンドによって OM に戻されます。QUERY NODE コマンドの結果として返される可能性のある OM 戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 133. QUERY NODE コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	コマンドは正常に完了しました。

表 133. QUERY NODE コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000004'	X'00001000'	IMS システムがコマンド・マスターでないため、その IMS システム上でコマンドが処理されませんでした。リソース情報は戻されません。
X'00000008'	X'00002014'	リソース名に無効文字が指定されました。
X'00000008'	X'00002040'	無効なパラメーター値が指定されました。無効な SHOW 値または STATUS 値が指定された可能性があります。
X'00000008'	X'00002133'	指定された NAME() キーワードは、汎用名か複数の固有名ですが、USER() キーワードも指定されました。USER() が指定された場合、許される NAME パラメーターは 1 つだけです。
X'0000000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、481 ページの表 134 を参照してください。
X'0000000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、481 ページの表 134 を参照してください。
X'00000010'	X'00004004'	コマンド処理は、CQS がアクティブでなかったために終了しました。
X'00000010'	X'00004005'	コマンド処理は、CQS がキュー構造に接続されなかったために終了しました。
X'00000010'	X'0000400C'	XRF 代替システムではコマンドは無効です。
X'00000010'	X'00004018'	コマンド処理は、リソース構造が使用可能でないために終了しました。
X'00000010'	X'0000401C'	FDBR 領域ではコマンドは無効です。
X'00000010'	X'00004028'	グローバル・キュー・カウントが要求されましたが、共用メッセージ・キューが使用可能になっていません。
X'00000010'	X'0000403C'	VTAM 汎用リソース類似性情報が要求されましたが、VGR が使用可能になっていません。
X'00000010'	X'00004104'	コマンド処理は、RM が使用可能でないために終了しました。
X'00000010'	X'00004108'	コマンド処理は、SCI が使用可能でないために終了しました。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できませんでした。
X'00000014'	X'00005008'	DFSPOOL ストレージを取得できませんでした。
X'00000014'	X'00005100'	コマンド処理は、RM エラーのために終了しました。
X'00000014'	X'00005104'	コマンド処理は、CQS エラーのために終了しました。
X'00000014'	X'00005108'	コマンド処理は、SCI エラーのために終了しました。

表 133. QUERY NODE コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000014'	X'00005FFF'	コマンド処理は、IMS の内部エラーのために終了しました。

以下の表には、完了コードの説明が記載されています。このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 134. QUERY NODE コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		リソースに対する QUERY NODE コマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。これがワイルドカードを使用した要求である場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。
98	CQS REQUEST ERROR	CQS エラーのために、グローバル・キュー・カウントを取得できませんでした。
1A1	Node resource is in error	ノード・リソースがリソース構造内で検出され、関連するリソースが必要でしたが、そのリソースが検出されなかったかエラーを起こしているようです。これは、通常ではエラー状態です。しかし、端末またはコマンドのアクティビティによる一時的な状態の可能性もあります。コマンドを再試行してください。

例

以下に、QUERY NODE コマンドの例を示します。

QUERY NODE コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QRY NODE NAME(NODE2*,XYZ) SHOW(LOCAL)
```

TSO SPOC 出力:

```
Node   ISCUser  MbrName CC CCText
NODE21          IMS1    0
NODE22          IMS1    0
NODE22          IMS2    0
```

```

NODE23          IMS2      0
NODE24  USER24A  IMS2      0
NODE24  USER24B  IMS2      0
NODE24  N/A      IMS2      0
XYZ           IMS1     10 NO RESOURCES FOUND
XYZ           IMS2     10 NO RESOURCES FOUND

```

説明: IMSplex には 2 つの IMS システムがあります。IMS1 と IMS2 です。ローカル情報だけを要求するので、STM および共用キューは無関係です。IMS1 はコマンド・マスターですが、グローバル情報は要求されていないため、ローカル情報だけを表示します。IMS2 はローカル情報のみを表示します。

- NODE21 は IMS1 上にのみ存在します。
- NODE22 は IMS1 および IMS2 上に存在します。
- NODE23 は IMS2 上にのみ存在します。
- NODE24 は ISC ノードであり、IMS2 上で 3 つの並列セッションが使用可能で、そのうちの 2 つが割り振られています。
- XYZ は、どのシステムにも存在しません。

QUERY NODE コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
QRY NODE NAME(NODE2*)
```

TSO SPOC 出力:

Node	ISCUser	MbrName	CC	Gbl
NODE21		IMS1	0	Y
NODE21		IMS1	0	
NODE22		IMS1	0	
NODE22		IMS2	0	
NODE23		IMS1	0	Y
NODE23		IMS2	0	
NODE24	USER24A	IMS1	0	Y
NODE24	USER24B	IMS1	0	Y
NODE24	N/A	IMS1	0	Y
NODE24	USER24A	IMS2	0	
NODE24	USER24B	IMS2	0	
NODE24	N/A	IMS2	0	

説明: IMSplex には 2 つの IMS システムがあります。IMS1 と IMS2 です。RM は状況を維持しています (STM=YES)。キュー・カウントを要求しないので、共用キューは無関係です。IMS1 はコマンド・マスターであり、グローバル情報およびローカル情報を表示します。IMS2 はローカル情報のみを表示します。

- NODE21 は IMS1 上およびリソース構造内に存在します。
- NODE22 は IMS1 および IMS2 上にのみ存在します。
- NODE23 は IMS2 上およびリソース構造内に存在します。
- NODE24 は ISC ノードであり、IMS2 上で 3 つの並列セッションが使用可能で、そのうちの 2 つが IMS2 上およびリソース構造内に割り振られています。また、IMS1 は N/A を ISC ユーザーとする NODE24 の出力行も表示します。これは、ノードが持つ可能性があるグローバル状況 (これは特定の並列セッションには結びつけられていません) を表します。

QUERY NODE コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
QRY NODE NAME(NODE2*) STATUS(STATIC) SHOW(LOCAL)
```

TSO SPOC 出力:

Node	ISUser	MbrName	CC	LclStat
NODE21		IMS1	0	IDLE,CONVACT,CON,STATIC
NODE22		IMS1	0	IDLE,STATIC
NODE22		IMS2	0	IDLE,STATIC
NODE24	USER24A	IMS2	0	IDLE,CON,PRI,STATIC
NODE24	USER24B	IMS2	0	IDLE,CON,PRI,STATIC
NODE24	N/A	IMS2	0	IDLE,STATIC

説明: IMSplex には 2 つの IMS システムがあります。IMS1 と IMS2 です。RM は状況を維持しています (STM=YES)。キュー・カウントを要求しないので、共用キューは無関係です。IMS1 はコマンド・マスターですが、SHOW(LOCAL) が指定されているため、ローカル情報のみを表示します。IMS2 はローカル情報のみを表示します。すべての静的ノードが表示され、STATUS フィルターが指定されたため、状況が表示されます。

- NODE21 は IMS1 上に存在し、ログオンしており、アクティブな会話を持っています。
- NODE22 は IMS1 および IMS2 上に存在します。
- NODE24 は ISC ノードであり、IMS2 上で 3 つの並列セッションが使用可能で、そのうちの 2 つが割り振られており、それらは 1 次パートナーです。

QUERY NODE コマンドの例 4

TSO SPOC 入力:

```
QRY NODE NAME(NODE21) SHOW(GLOBAL,CONV,LTERM,STATUS)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

Node	MbrName	CC	Gbl	Lterm	ConvID	ConvTran	ConvStat
NODE21	IMS1	0	Y				
NODE21	IMS1	0	Y	LTERM21A			
NODE21	IMS1	0	Y	LTERM21B			
NODE21	IMS1	0	Y		1	TRAN1A	CONVHELD
NODE21	IMS1	0	Y		2	TRAN1A	CONVHELD
NODE21	IMS1	0	Y		3	TRAN1A	CONVACTV

(右にスクロールして、画面 2 へ)

Node	MbrName	Gbl	Status
NODE21	IMS1	Y	CONVACT,STATIC,RM,RMACTIVE,RMOWNED
NODE21	IMS1	Y	
NODE21	IMS1	Y	
NODE21	IMS1	Y	
NODE21	IMS1	Y	
NODE21	IMS1	Y	

説明: IMSplex には 2 つの IMS システムがあります。IMS1 と IMS2 です。RM は状況を維持しています (STM=YES)。キュー・カウントを要求しないので、共用キューは無関係です。IMS1 はコマンド・マスターであり、グローバル情報のみを表示します。IMS2 は、グローバル情報だけが要求されているため、コマンド (RC=4, RSN=x1000) を無視します。

NODE21 はリソース構造内に存在します。IMS1 はグローバル行を表示し、その行には、このノードが IMSplex 内でアクティブであり、アクティブな会話を持っていることが示されます。ノードには 2 つの論理端末が割り当てられており、それらは別々の出力行に表示されます。ノードには 3 つの会話に関連付けられており、それらは別々の出力行に表示されます。

QUERY NODE コマンドの例 5

TSO SPOC 入力:

```
QRY NODE NAME(NODE23) SHOW(CONV,STATUS,OWNER,RECOVERY)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

Node	MbrName	CC	CCText	Gbl	Owner	SRM	Rcvy
NODE23	IMS1	0		Y	IMS2	LCL	CONV,FP
NODE23	IMS1	10	NO RESOURCES FOUND				
NODE23	IMS2	0					
NODE23	IMS2	0					
NODE23	IMS2	0					

(右にスクロールして、画面 2 へ)

Node	MbrName	Gbl	ConvID	ConvTran	ConvStat	Status
NODE23	IMS1	Y				RM,RMACTIVE,RMOWNED
NODE23	IMS1					
NODE23	IMS2					
NODE23	IMS2					
NODE23	IMS2					

(右にスクロールして、画面 3 へ)

Node	MbrName	Gbl	LSRM	LRcvy	LConvID	LConvTran	LConvStat
NODE23	IMS1	Y					
NODE23	IMS1						
NODE23	IMS2		LCL	CONV,FP			
NODE23	IMS2				1	TRAN1A	CONVHELD
NODE23	IMS2				2	TRAN1B	CONVACTV

(右にスクロールして、画面 4 へ)

Node	MbrName	Gbl	LclStat
NODE23	IMS1	Y	
NODE23	IMS1		
NODE23	IMS2		IDLE,CONVACT,CON
NODE23	IMS2		
NODE23	IMS2		

説明: IMSplex には 2 つの IMS システムがあります。IMS1 と IMS2 です。RM は状況を維持しています (STM=YES)。キュー・カウントを要求しないので、共用キューは無関係です。IMS1 はコマンド・マスターであり、グローバル情報およびローカル情報を表示します。IMS2 はローカル情報を表示します。

NODE23 は IMS2 内およびリソース構造内に存在します。IMS1 はグローバル行を表示し、その行には、このノードがアクティブで、IMS2 上で所有されており、その状況リカバリー・モードが LOCAL (これは、会話情報がグローバルには認識されていないことを意味します) であることが示されます。また、IMS1 は、NODE23 がローカルに存在しないことを示すローカル行も表示します。IMS2 はローカル情報を表示し、その情報には 1 つの状況表示行と、ローカル側でアクティブであるか保留されている会話ごとに 1 つの追加出力行が含まれます。

QUERY NODE コマンドの例 6

TSO SPOC 入力:

```
QRY NODE NAME(NODE23) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

Node	MbrName	CC	CCText	Gbl	QCnt	EMHCnt	Type	Owner	SRM	Rcvy
NODE23	IMS1	0		Y	0	0	SLU2	IMS2	LCL	CONV,FP
NODE23	IMS1	10	NO RESOURCES FOUND							
NODE23	IMS2	0								

(右にスクロールして、画面 2 へ)

Node	MbrName	Gbl	User	Userid	Affin	Version#	Version#SNU	Status
NODE23	IMS1	Y	USER23	UID23	IMS2	5	0	RM,RMACTIVE,RMOWNED
NODE23	IMS1							
NODE23	IMS2							

(右にスクロールして、画面 3 へ)

Node	MbrName	Gbl	LQCnt	LType	CID	RecdCnt	SentCnt	DefMdtb1	ActMdtb1
NODE23	IMS1	Y							
NODE23	IMS1								
NODE23	IMS2		0	SLU2	02000003	9	13	SLU2MOD2	SLU2MOD2

(右にスクロールして、画面 4 へ)

Node	MbrName	Gbl	LSRM	Lrcvy	LUser	LUserid	LVersion#	LVersion#SNU	LclStat
NODE23	IMS1	Y							
NODE23	IMS1								
NODE23	IMS2		LCL	CONV,FP	USER23	UID23	5	0	IDLE,CONVACT,CON

説明: IMSplex には 2 つの IMS システムがあります。IMS1 と IMS2 です。RM は状況を維持しています (STM=YES)。共用キューはアクティブです。IMS1 はコマンド・マスターであり、グローバル情報およびローカル情報を表示します。IMS2 はローカル情報を表示します。

NODE23 は IMS2 内およびリソース構造内に存在します。IMS1 はグローバル行を表示し、その行には、グローバル・キュー・カウントと、リソース構造からのグローバル状況が示されます。グローバル状況は、ノードが IMS2 上でアクティブであり、IMS2 との VGR 類似性を持ち、状況リカバリー・モードが LOCAL (これは、会話情報がグローバルには認識されていないことを意味します) であることを示します。また、IMS1 は、NODE23 がローカルに存在しないことを示すローカル行も表示します。IMS2 は、会話状況がローカル側に存在することを示すローカル情報を表示します。

QUERY NODE コマンドの例 7

TSO SPOC 入力:

QRY NODE NAME(DFSLN001,DFSLN002) SHOW(LOCAL,TYPE)

TSO SPOC 出力:

Node	Line	Pterm	MbrName	CC	LType
DFSLN001	1	1	IMS1	0	CONSOLE
DFSLN001	1	1	IMS2	0	CONSOLE
DFSLN002	2	1	IMS1	0	RDR/PTR
DFSLN002	2	1	IMS2	0	RDR/PTR

説明: IMSplex には 2 つの IMS システムがあります。IMS1 と IMS2 です。ローカル情報だけを要求するので、STM および共用キューは無関係です。IMS1 はコマンド・マスターですが、グローバル情報は要求されていないため、ローカル情報だけを表示します。IMS2 はローカル情報のみを表示します。

DFSLN001 は、各システム上のシステム・コンソール (LINE 1 PTERM 1) を表します。DFSLN002 は、各システム上の SYSOUT または SPOOL 装置 (LINE 2 PTERM 1) を表します。

QUERY NODE コマンドの例 8: ISC TCP/IP 並列セッション

説明: 以下の例では、LType 列に TCP が示されています。これは、ノード CICS が ISC TCP/IP 端末であることを示します。LclLogonD 列には、現在のセッションを確立するのに使用された ETO ログオン記述子が LU6TCP1 であることが示されています。TCP/IP サポートを提供しているローカル IMS Connect インスタンスは、LclImsCon 列で HWS1 として識別されています。CICSAppIid 列には、ISC TCP/IP 端末が接続されているリモート CICS サブシステムの APPLID が CICS1 であることが示されています。CICSNetid 列には、ISC TCP/IP 端末が接続されている CICS サブシステムのネットワーク ID IMSNET が表示されています。

TSO SPOC 入力:

```
QUERY NODE NAME(CICS) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(Screen 1)

Node	ISCUser	MbrName	CC	LQCnt	LType	LclImsCon	CICSAppIid
CICS	IMSUS01	IMS1	0	0	TCP	HWS1	CICS1


(Screen 2)

Node	ISCUser	MbrName	CICSNetid	LclLogonD	RecdCnt	SentCnt	LSRM
CICS	IMSUS01	IMS1	IMSNET	LU6TCP1	0	0	LCL

(Screen 3)

Node	ISCUser	MbrName	LRcvy	LUser	LID	LclStat
CICS	IMSUS01	IMS1	STSN	IMSUS01	IMSUS01	SIGN,IDLE,CON

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

-  /DISPLAY ASMT コマンド (コマンド)
-  /DISPLAY CONV コマンド (コマンド)
-  /DISPLAY NODE コマンド (コマンド)
-  /DISPLAY STATUS コマンド (コマンド)
-  /DISPLAY TRACE コマンド (コマンド)
-  コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

QUERY ODBM コマンド

QUERY ODBM コマンドは、Common Service Layer (CSL) のコンポーネントである Open Database Manager (ODBM) に関する情報を照会するために使用します。

サブセクション:

- 『QUERY ODBM TYPE(ALIAS) コマンド』
- 490 ページの 『QUERY ODBM TYPE(CONFIG) コマンド』
- 494 ページの 『QUERY ODBM TYPE(DATASTORE) コマンド』
- 499 ページの 『QUERY ODBM TYPE(SCIMEMBER) コマンド』
- 502 ページの 『QUERY ODBM TYPE(THREAD) コマンド』
- 510 ページの 『QUERY ODBM TYPE(TRACE) コマンド』

QUERY ODBM TYPE(ALIAS) コマンド

QUERY ODBM TYPE(ALIAS) コマンドは、Open Database Manager (ODBM) 構成に関する情報を照会するために使用します。

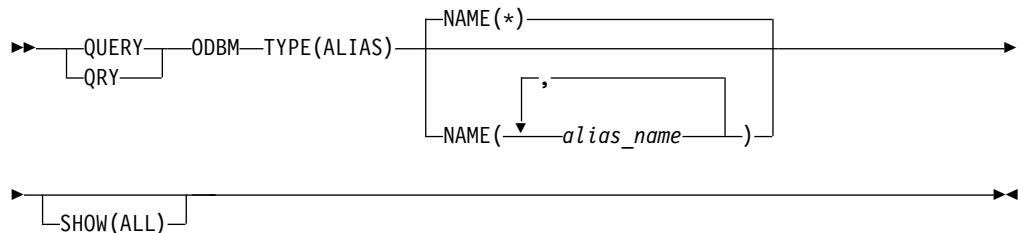
サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 488 ページの 『使用上の注意』
- 488 ページの 『出力フィールド』
- 488 ページの 『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 489 ページの 『例』

環境

QUERY ODBM コマンドは、CSL Open Database Manager (ODBM) に対してのみ適用可能です。このコマンドを発行するには、CSL type-2 コマンド環境が使用可能に設定されており、ODBM インスタンスがアクティブである必要があります。

構文



キーワード

以下のキーワードは、QUERY ODBM TYPE(ALIAS) コマンドに有効です。

NAME()

照会する IMS データ・ストアの別名を指定します。これは、CSLDCxxx 構成メンバー内の ODBM 構成ステートメントの ALIAS サブステートメントで定義されている名前です。alias_name にはワイルドカード (* および %) が指定できます。alias_name は、反復可能なパラメーターです。デフォルトは NAME(*) で、ODBM が認識しているすべての別名に関する情報を戻します。

SHOW()

戻される ODBM TYPE(ALIAS) 出力フィールドを指定します。SHOW キーワードでサポートされるパラメーターには以下のものがあります。

ALL

ODBM データ・ストアの別名とその状況に関するすべての情報を戻します。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

このコマンドの構文は XML で定義されており、OM と通信する自動化プログラムで使用できます。

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。ゼロ以外の完了コードの場合に表示される出力フィールドには *error* が表示されます。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 135. QUERY ODBM TYPE(ALIAS) コマンドの出力フィールドの説明

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
ALCSTT	AliasStatus	N/A	別名接続状況。状況は STARTED または STOPPED のいずれかです。
ALIAS	AliasName	N/A	別名。
CC	CC	N/A	完了コード。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
DSCSTT	DatastoreStatus	N/A	別名に関連付けられたデータ・ストアの接続状況。
DSTR	DatastoreName	N/A	別名のデータ・ストア名。
MBR	MbrName	N/A	コマンドを処理した ODBM メンバーの名前。
THDCT	ThreadCount	N/A	別名に関連付けられたスレッドのカウント。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY ODBM TYPE(ALIAS) コマンドの結果として戻される戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 136. *QUERY ODBM TYPE(ALIAS)* コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY ODBM TYPE(ALIAS) コマンドは正常に完了しました。
X'40000008'	X'00002004'	無効なコマンド・キーワードまたは無効なコマンド・キーワードの組み合わせ。
X'40000008'	X'00002008'	キーワードの数が足りません。
X'40000008'	X'00002014'	リソース名の無効文字。
X'40000008'	X'0000203C'	無効なパラメーターが指定されました。
X'4000000C'	X'00003000'	At least one request was successful.
X'4000000C'	X'00003004'	No requests were successful.
X'40000014'	X'00005034'	OM 応答バッファ要求は失敗しました。
X'40000014'	X'00005038'	CSLDCMD0 GETBUF 要求はコマンド・バッファの取得に失敗しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 137. *QUERY ODBM TYPE(ALIAS)* コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		QUERY ODBM TYPE(ALIAS) コマンドは正常に完了しました。
1	INVALID CHARACTER, RESOURCE NAME	コマンド入力のリソース名に無効文字があります。
2	PARAMETER SPECIFIED TOO LONG	指定された NAME() パラメーターが、有効な別名の長さである 4 文字より長くなっています。
10	NO RESOURCES FOUND	リソースが見つからなかった。

例

QUERY ODBM TYPE(ALIAS) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QRY ODBM TYPE(ALIAS) NAME(*) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

Mbrname	AliasName	CC	AliasStatus	ThreadCount	DatastoreName	DatastoreStatus
ODBM010D	I01A	0	STARTED	5	IMS1	STARTED
ODBM010D	I01B	0	STOPPED	0	IMS1	STARTED

ODBM010D	I02A	0	STARTED	10	IMS2	STARTED
ODBM010D	I02B	0	STARTED	0	IMS2	STARTED
ODBM020D	I03A	0	STOPPED	0	IMS3	STOPPED
ODBM020D	I03B	0	STARTED	0	IMS3	STOPPED

説明: QUERY コマンドは、ODBM が認識するすべての別名に関する別名情報を表示します。

QUERY ODBM TYPE(CONFIG) コマンド

QUERY ODBM TYPE(CONFIG) コマンドは、Open Database Manager (ODBM) 構成に関する情報を照会するために使用します。

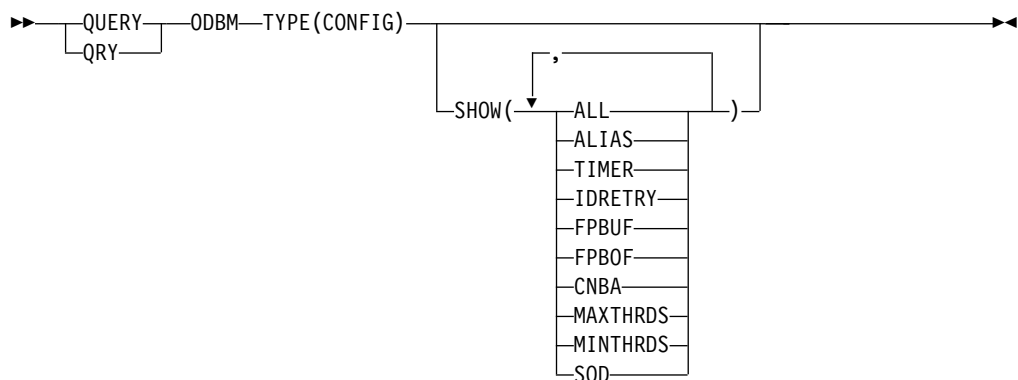
サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 491 ページの『使用上の注意』
- 491 ページの『出力フィールド』
- 492 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 493 ページの『例』

環境

QUERY ODBM コマンドは、CSL Open Database Manager (ODBM) に対してのみ適用可能です。このコマンドを発行するには、CSL type-2 コマンド環境が使用可能に設定されており、ODBM インスタンスがアクティブである必要があります。

構文



キーワード

以下のキーワードは、QUERY ODBM TYPE(CONFIG) コマンドに有効です。

SHOW()

戻される ODBM TYPE(CONFIG) 出力フィールドを指定します。SHOW キーワードでサポートされるパラメーターには以下のものがあります。

ALL

PROCLIB 内の CSLDCxxx 構成メンバーに関するすべての情報を戻します。

ALIAS

IMS データ・ストアにアクセスするために Open Database アプリケーションで使用されるデータ・ストアの別名を戻します。

TIMER

IMS データ・ストアに対する接続を確立するための ODBM による試行と試行の間の時間量を戻します (秒単位)。値は 1 から 99 までの数値です。

IDRETRY

初期試行が失敗した後に、ODBM が IMS データ・ストアに接続 (識別) しようとする回数を戻します。値は 0 から 255 までの数値です。

FPBUF

スレッドごとに割り振られ、固定される高速機能 DEDB バッファの数を戻します。

FPBOF

スレッドごとに割り振られる高速機能 DEDB オーバーフロー・バッファの数を戻します。

CNBA

ODBM の使用に関する高速機能 NBA バッファの総数を戻します。

MAXTHRDS

並行アクティブ・スレッドの最大数を個々の IMS データ・ストアに戻します。

MINTHRDS

並行アクティブ・スレッドの最小数を個々の IMS データ・ストアに戻します。

SOD

ODBM アドレス・スペースによって生成されるスナップ・ダンプの SYSOUT クラスを返します。返される値は、単一の英数字です。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

このコマンドの構文は XML で定義されており、OM と通信する自動化プログラムで使用できます。

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。ゼロ以外の完

了コードの場合に表示される出力フィールドには *error* が表示されます。
N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されてい
ます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 138. QUERY ODBM TYPE(CONFIG) コマンドの出力フィールドの説明

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	完了コード。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
CNBA	CNBA	CNBA	データ・ストア接続の CNBA 値。
CNFG	ConfigName	N/A	CSLDCxxx PROCLIB メンバー名。
DSTR	DatastoreName	N/A	データ・ストア名。
FPBOF	FPBOF	FPBOF	データ・ストア接続の FPBOF 値。
FPBUF	FPBUF	FPBUF	データ・ストア接続の FPBUF 値。
GBL	Global	N/A	Y または N の値が指定されます。 Y が指定されると、情報が CSLDCxxx 構成メンバー内のグローバル・セクションからのものであることを示します。 N が指定されると、情報が CSLDCxxx 構成メンバー内のローカル・セクションからのものであることを示します。
IRTRY	IdRetry	IDRETRY	データ・ストア接続の IDRETRY 値。
MALIAS	Aliases	ALIAS	IMS データ・ストア接続と関連付けられた別名。
MBR	MbrName	N/A	コマンドを処理した ODBM メンバーの名前。
MXTHD	MaxThrds	MAXTHRDS	MAXTHRDS パラメーター値。
MNTHD	MinThrds	MINTHRDS	MINTHRDS パラメーター値。
SOD	SOD	SOD	ODBM スナップ・ダンプの SYSOUT クラス。
TIMER	Timer	TIMER	データ・ストア接続の TIMER パラメーター値。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY ODBM TYPE(CONFIG) コマンドの結果として戻される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 139. QUERY ODBM TYPE(CONFIG) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY ODBM TYPE(CONFIG) コマンドは正常に完了しました。
X'04000008'	X'00002004'	無効なコマンド・キーワードまたは無効なコマンド・キーワードの組み合わせ。
X'04000008'	X'00002008'	キーワードの数が足りません。
X'04000008'	X'00002014'	リソース名の無効文字。
X'04000008'	X'0000203C'	無効なパラメーターが指定されました。
X'0400000C'	X'00003000'	At least one request was successful.
X'0400000C'	X'00003004'	No requests were successful.
X'04000014'	X'00005034'	OM 応答バッファ要求は失敗しました。
X'04000014'	X'00005038'	CSLDCMD0 GETBUF 要求はコマンド・バッファの取得に失敗しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 140. QUERY ODBM TYPE(CONFIG) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		QUERY ODBM TYPE(CONFIG) コマンドは正常に完了しました。
1	INVALID CHARACTER, RESOURCE NAME	コマンド入力のリソース名に無効文字があります。
10	NO RESOURCES	リソースが見つからなかった。

例

QUERY ODBM TYPE(CONFIG) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QRY ODBM TYPE(CONFIG) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

```

MbrName  ConfigName  Global  DatastoreName  CC  FPBUF  FPBOF  CNBA  MaxThrds  MinThrds
ODBM10D  CSLDC001    Y           IMS1             0   10     5   100     1         1
ODBM10D  CSLDC001    N           IMS1             0    0     0    0     10        1
ODBM20D  CSLDC002    Y           IMS1             0   50     5  550     10        5
ODBM20D  CSLDC002    N           IMS1             0    0     0    0     50        10

```

(continued)

```

IdRetry  Timer  Aliases          SOD
          5    30  IMS1,IMSA,IM1A,SYS1  I
          RRSN          E

```

説明: QUERY コマンドは、 CSLDCxxx 構成メンバーのすべての SHOW パラメータ値を表示します。

QUERY ODBM TYPE(CONFIG) コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
QRY ODBM TYPE(CONFIG) SHOW(ALIAS,CNBA)
```

TSO SPOC 出力:

MbrName	ConfigName	Global	DatastoreName	CC	CNBA	Aliases
ODBM010D	CSLDC000	Y		0	0	
ODBM010D	CSLDC000	N	IMS1	0	0	I01A,I01B
ODBM010D	CSLDC000	N	IMS2	0	500	I02A,I02B
ODBM020D	CSLDC000	Y		0	100	
ODBM020D	CSLDC000	N	IMS3	0	200	I03A,I03B

説明: QUERY コマンドは、データ・ストアの別名に関する情報と、ODBM の使用に関する高速機能 NBA バッファの総数を表示します。

QUERY ODBM TYPE(CONFIG) コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
QRY ODBM TYPE(CONFIG)
```

TSO SPOC 出力:

MbrName	ConfigName	Global	DatastoreName	CC
ODBM010D	CSLDC000	Y		0
ODBM010D	CSLDC000	N	IMS1	0
ODBM010D	CSLDC000	N	IMS2	0
ODBM010D	CSLDC000	N	IMS1	0
ODBM010D	CSLDC000	N	IMS1	0
ODBM020D	CSLDC000	Y		0
ODBM020D	CSLDC000	N	IMS3	0

説明: QUERY コマンドは、 Open Database Manager (ODBM) 構成に関する情報を表示します。

QUERY ODBM TYPE(DATASTORE) コマンド

QUERY ODBM TYPE(DATASTORE) コマンドは、IMS データ・ストアとその関連リソースに関する情報を照会するために使用します。

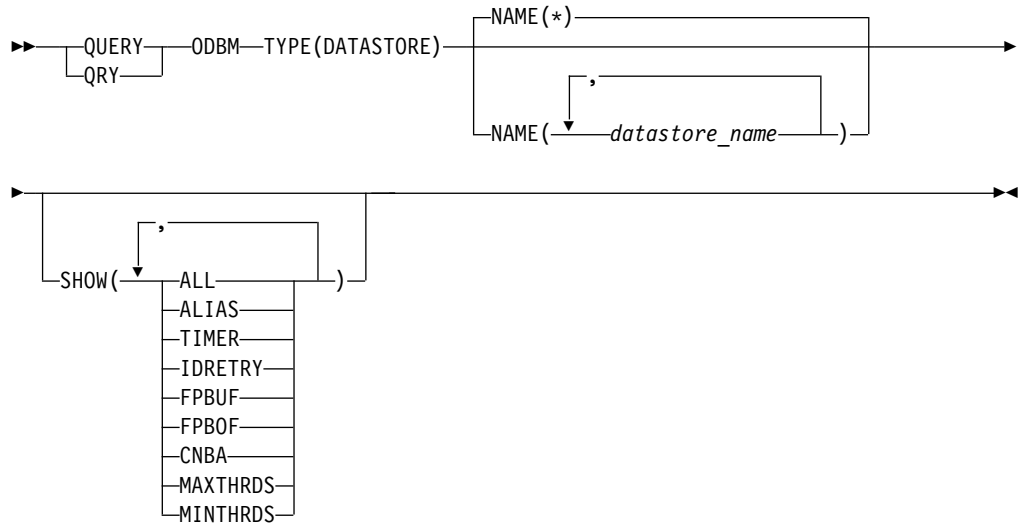
サブセクション:

- 495 ページの『環境』
- 495 ページの『構文』
- 495 ページの『キーワード』
- 496 ページの『使用上の注意』
- 496 ページの『出力フィールド』
- 497 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 498 ページの『例』

環境

QUERY ODBM コマンドは、CSL Open Database Manager (ODBM) に対してのみ適用可能です。このコマンドを発行するには、CSL type-2 コマンド環境が使用可能に設定されており、ODBM インスタンスがアクティブである必要があります。

構文



キーワード

以下のキーワードは、QUERY ODBM TYPE(DATASTORE) コマンドに有効です。

NAME()

表示されるデータ・ストアの名前を指定します。 *datastore_name* にはワイルドカード (* および %) が指定できます。 *datastore_name* は、反復可能なパラメーターです。デフォルトは NAME(*) で、ODBM が認識しているすべてのデータ・ストアに関する情報を戻します。

SHOW()

戻される ODBM TYPE(DATASTORE) 出力フィールドを指定します。1 つ以上のパラメーターを指定することができます。SHOW キーワードでサポートされるパラメーターには以下のものがあります。

ALL

指定された IMS データ・ストアに関するすべての情報を戻します。

ALIAS

IMS データ・ストアの別名を戻します。クライアント・アプリケーション・プログラムは、プログラムが別名でアクセスしている IMS データ・ストアを識別します。

TIMER

IMS データ・ストアに対する接続を確立するための ODBM による試行と試行の間の時間量を戻します (秒単位)。値は 1 から 99 までの数値です。

IDRETRY

初期試行が失敗した後に、ODBM が IMS データ・ストアに接続 (識別) しようとする回数を戻します。値は 0 から 255 までの数値です。

FPBUF

スレッドごとに割り振られ、固定される高速機能 DEDB バッファの数を戻します。

FPBOF

スレッドごとに割り振られる高速機能 DEDB オーバーフロー・バッファの数を戻します。

CNBA

ODBM の使用に関する高速機能 NBA バッファの総数を戻します。

MAXTHRDS

並行アクティブ・スレッドの最大数を個々の IMS データ・ストアに戻します。

MINTHRDS

並行アクティブ・スレッドの最小数を個々の IMS データ・ストアに戻します。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

このコマンドの構文は XML で定義されており、OM と通信する自動化プログラムで使用できます。

出力フィールド**ショート・ラベル**

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。ゼロ以外の完了コードの場合に表示される出力フィールドには *error* が表示されます。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 141. QUERY ODBM TYPE(DATASTORE) コマンドの出力フィールドの説明

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	完了コード。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
CNBA	CNBA	CNBA	データ・ストア接続で使用中の CNBA 値。
DSCSTT	ConnectionStatus	N/A	データ・ストア接続の状況。

表 141. QUERY ODBM TYPE(DATASTORE) コマンドの出力フィールドの説明 (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
DSTR	DatastoreName	N/A	データ・ストア名。
FPBOF	FPBOF	FPBOF	データ・ストア接続の FPBOF 値。
FPBUF	FPBUF	FPBUF	データ・ストア接続の FPBUF 値。
IRTRY	IdRetry	IDRETRY	データ・ストア接続の IDRETRY 値。
MALIAS	Aliases	ALIAS	IMS データ・ストア接続と関連付けられた別名。
MBR	MbrName	N/A	コマンドを処理した ODBM メンバーの名前。
MXTHD	MaxThrds	MAXTHRDS	MAXTHRDS パラメーター値。
MNTHD	MinThrds	MINTHRDS	MINTHRDS パラメーター値。
THDCT	ThreadCount	N/A	データ・ストア接続に関連したスレッドのカウンタ。
TIMER	Timer	TIMER	データ・ストア接続の TIMER パラメーター値。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY ODBM TYPE(DATASTORE) コマンドの結果として戻される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 142. QUERY ODBM TYPE(DATASTORE) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY ODBM TYPE(DATASTORE) コマンドは正常に完了しました。
X'04000008'	X'00002004'	無効なコマンド・キーワードまたは無効なコマンド・キーワードの組み合わせ。
X'04000008'	X'00002008'	キーワードの数が足りません。
X'04000008'	X'00002014'	リソース名の無効文字。
X'04000008'	X'0000203C'	無効なパラメーターが指定されました。
X'0400000C'	X'00003000'	At least one request was successful.
X'0400000C'	X'00003004'	No requests were successful.
X'04000014'	X'00005034'	OM 応答バッファ要求は失敗しました。
X'04000014'	X'00005038'	CSLDCMD0 GETBUF 要求はコマンド・バッファの取得に失敗しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 143. QUERY ODBM TYPE(DATASTORE) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		QUERY ODBM TYPE(DATASTORE) コマンドは正常に完了しました。
1	INVALID CHARACTER, RESOURCE NAME	コマンド入力のリソース名に無効文字があります。
2	PARAMETER SPECIFIED TOO LONG	指定された NAME() パラメーターが、有効なデータ・ストア名の長さである 8 文字より長くなっています。
10	NO RESOURCES FOUND	リソースが見つからなかった。

例

QUERY ODBM TYPE(DATASTORE) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QRY ODBM TYPE(DATASTORE) NAME(IMS*) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

MbrName	DatastoreName	CC	ConnectionStatus	ThreadCount	FPBUF	FPBOF	CNBA
ODBM010D	IMS1	0	STARTED	5	0	0	0
ODBM010D	IMS2	0	STOPPED	0	50	50	500
ODBM020D	IMS3	0	STARTED	10	10	10	200

(continued)

MinThrds	MaxThrds	IDRETRY	TIMER	Aliases
5	10	5	30	I01A,I01B
2	5	5	30	I02A,I02B
5	10	5	30	I03A,I03B

説明: QUERY コマンドは、名前が IMS で始まるデータ・ストアに関するすべての情報を表示します。

QUERY ODBM TYPE(DATASTORE) コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
QRY ODBM TYPE(DATASTORE) NAME(IMS*) SHOW(ALIAS,MAXTHRDS)
```

TSO SPOC 出力:

MbrName	DatastoreName	CC	ConnectionStatus	ThreadCount	MaxThrds	Aliases
ODBM010D	IMS1	0	STARTED	5	10	I01A,I01B
ODBM010D	IMS2	0	STOPPED	0	5	I02A,I02B
ODBM020D	IMS3	0	STARTED	10	10	I03A,I03B

説明: QUERY コマンドは、データ・ストアの別名に関する情報と、並行アクティブ・スレッドの最大数を、個々の IMS データ・ストアに表示します。

QUERY ODBM TYPE(DATASTORE) コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
QRY ODBM TYPE(DATASTORE) NAME(IMS*)
```

TSO SPOC 出力:

MbrName	DatastoreName	CC	ConnectionStatus	ThreadCount	Aliases
ODBM010D	IMS1	0	STARTED	5	I01A,I01B
ODBM010D	IMS2	0	STOPPED	0	I02A,I02B
ODBM020D	IMS3	0	STARTED	10	I03A,I03B

説明: QUERY コマンドは、データ・ストア接続状況、スレッド・カウント、およびデータ・ストアの別名に関する情報を表示します。

QUERY ODBM TYPE(SCIMEMBER) コマンド

QUERY ODBM TYPE(SCIMEMBER) コマンドは、Open Database Manager (ODBM) クライアントに関する情報を照会するために使用します。

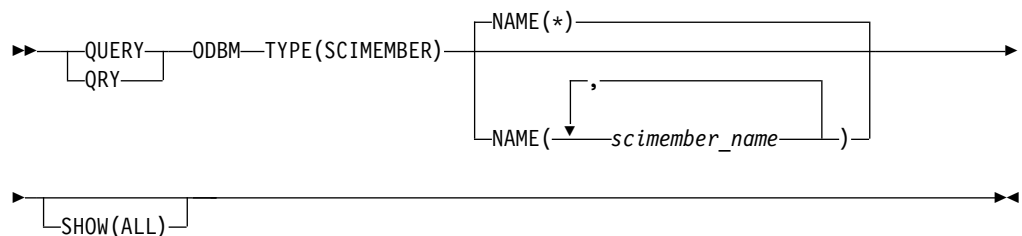
サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 500 ページの『使用上の注意』
- 500 ページの『出力フィールド』
- 501 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 501 ページの『例』

環境

QUERY ODBM コマンドは、CSL Open Database Manager (ODBM) に対してのみ適用可能です。このコマンドを発行するには、CSL type-2 コマンド環境が使用可能に設定されており、ODBM インスタンスがアクティブである必要があります。

構文



キーワード

以下のキーワードは、QUERY ODBM TYPE(SCIMEMBER) コマンドに有効です。

NAME()

表示される ODBM クライアントの名前を指定します。 *scimember_name* にはワイルドカード (* および %) が指定できます。 *scimember_name* は、反復可能

なパラメーターです。デフォルトは NAME(*) で、 ODBM が認識しているすべての SCI メンバー名に関する情報を戻します。

SHOW()

戻される ODBM TYPE(SCIMEMBER) 出力フィールドを指定します。1 つ以上のパラメーターを指定することができます。SHOW キーワードでサポートされるパラメーターには以下のものがあります。

ALL

指定された SCI メンバー名を備えた ODBM クライアントに関するすべての情報を戻します。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

このコマンドの構文は XML で定義されており、OM と通信する自動化プログラムで使用できます。

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。ゼロ以外の完了コードの場合に表示される出力フィールドには *error* が表示されます。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されていません。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 144. QUERY ODBM TYPE(SCIMEMBER) コマンドの出力フィールドの説明

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	完了コード。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
MBR	MbrName	N/A	コマンドを処理した ODBM メンバーの名前。
SCMBR	SCIMbrName	N/A	ODBM に接続しているクライアントの SCI メンバー名。
THDCT	ThreadCount	N/A	SCI メンバーに関連付けられたスレッドのカウント。
TYPE	タイプ	N/A	ODBM に接続しているクライアントの SCI メンバー・タイプ。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY ODBM TYPE(SCIMEMBER) コマンドの結果として戻される戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 145. QUERY ODBM TYPE(SCIMEMBER) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY ODBM TYPE(SCIMEMBER) コマンドは正常に完了しました。
X'04000008'	X'00002004'	無効なコマンド・キーワードまたは無効なコマンド・キーワードの組み合わせ。
X'04000008'	X'00002008'	キーワードの数が足りません。
X'04000008'	X'00002014'	リソース名の無効文字。
X'04000008'	X'0000203C'	無効なパラメーターが指定されました。
X'0400000C'	X'00003000'	At least one request was successful.
X'0400000C'	X'00003004'	No requests were successful.
X'04000014'	X'00005034'	OM 応答バッファ要求は失敗しました。
X'04000014'	X'00005038'	CSLDCMD0 GETBUF 要求はコマンド・バッファの取得に失敗しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 146. QUERY ODBM TYPE(SCIMEMBER) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		QUERY ODBM TYPE(SCIMEMBER) コマンドは正常に完了しました。
1	INVALID CHARACTER, RESOURCE NAME	コマンド入力のリソース名に無効文字があります。
2	PARAMETER SPECIFIED TOO LONG	指定された NAME() パラメーターが、有効な ODBM クライアント名の長さである 8 文字より長くなっています。
10	NO RESOURCES FOUND	リソースが見つからなかった。

例

QUERY ODBM TYPE(SCIMEMBER) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

QRY ODBM TYPE(SCIMEMBER) NAME(HWS*) SHOW(ALL)

TSO SPOC 出力:

MbrName	SCIMbrName	CC	Type	ThreadCount
ODBM010D	HWS1	0	IMSCON	21
ODBM010D	HWS2	0	IMSCON	5

説明: QUERY コマンドは、名前が HWS で始まる SCI メンバーに関する ODBM クライアント情報を表示します。

QUERY ODBM TYPE(THREAD) コマンド

QUERY ODBM TYPE(THREAD) コマンドは、Open Database Manager (ODBM) スレッドとその関連リソースに関する情報を照会するために使用します。

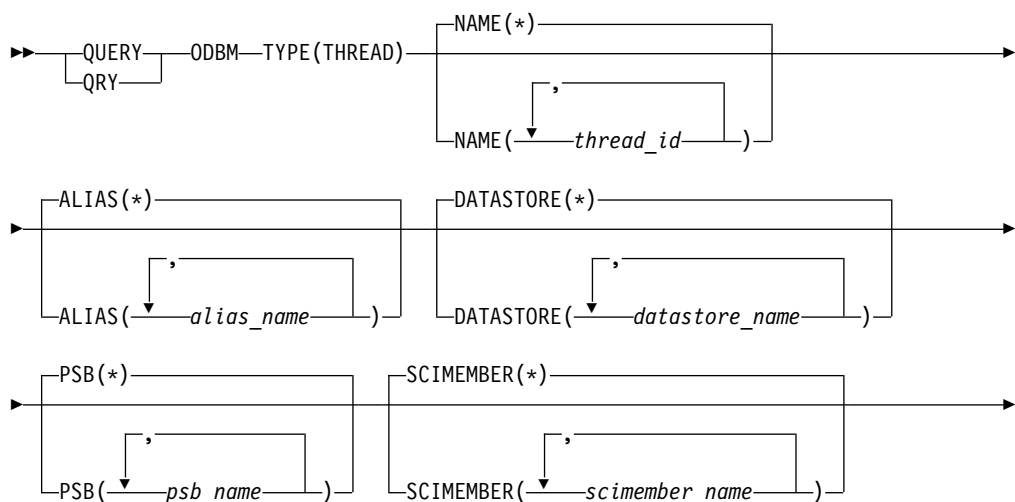
サブセクション:

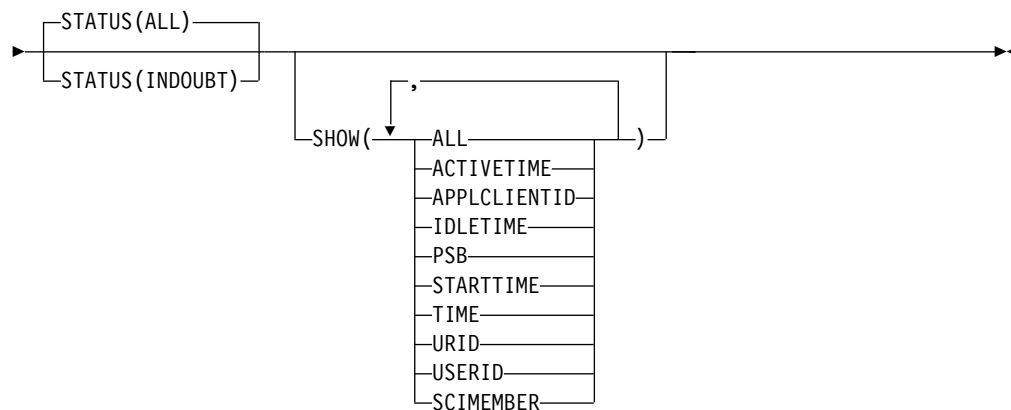
- 『環境』
- 『構文』
- 503 ページの『キーワード』
- 505 ページの『使用上の注意』
- 505 ページの『出力フィールド』
- 506 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 507 ページの『例』

環境

QUERY ODBM コマンドは、CSL Open Database Manager (ODBM) に対してのみ適用可能です。このコマンドを発行するには、CSL type-2 コマンド環境が使用可能に設定されており、ODBM インスタンスがアクティブである必要があります。

構文





キーワード

以下のキーワードは、QUERY ODBM TYPE(THREAD) コマンドに有効です。

ALIAS(*alias_name*)

フィルターとして使用されるデータ・ストアの別名を 1 文字から 4 文字で指定します。 *thread_id* が指定された *alias_name* と関連付けられている場合、スレッド情報が戻されます。

alias_name にはワイルドカード (* および %) が指定できます。 *alias_name* は、反復可能なパラメーターです。デフォルトは ALIAS(*) で、別名との関係に関わらず、指定された *thread_id* のスレッド情報を戻します。

DATASTORE(*datastore_name*)

フィルターとして使用されるデータ・ストアの別名を 1 文字から 8 文字で指定します。指定された *thread_id* が、指定の *datastore_name* に関連している場合、スレッド情報が戻されます。

datastore_name には、ワイルドカードを指定できます。 *datastore_name* は、反復可能なパラメーターです。デフォルトは DATASTORE(*) で、データ・ストアとの関係に関わらず、指定された *thread_id* のスレッド情報を戻します。

NAME(*thread_id*)

表示する ODBM スレッドのスレッド ID を指定します。 *thread_id* にはワイルドカード (* および %) が指定できます。 *thread_id* は、反復可能なパラメーターです。デフォルトは NAME(*) で、ODBM が認識しているすべてのスレッドに関する情報を戻します。スレッド ID の長さはそれぞれ 32 文字以内です。

PSB(*psb_name*)

フィルターとして使用される PSB の名前を 1 文字から 8 文字で指定します。指定された *thread_id* が、指定の *psb_name* に関連している場合、スレッド情報が戻されます。

psb_name にはワイルドカード (* および %) が指定できます。 *psb_name* は、反復可能なパラメーターです。デフォルトは PSB(*) で、PSB との関係に関わらず、指定された *thread_id* のスレッド情報を戻します。

注: PSB 名が QRY ODBM TYPE(THREAD) コマンドに指定されると、SHOW(PSB) が指定されていなくても、コマンドの出力に PSB 名が含まれます。

SCIMEMBER(*scimember_name*)

フィルターとして使用される ODBM に接続したクライアントの名前を 1 文字から 8 文字で指定します。指定された *thread_id* が、指定の *scimember_name* に関連している場合、スレッド情報が戻されます。

scimember_name にはワイルドカード (* および %) が指定できます。

scimember_name は、反復可能なパラメーターです。デフォルトは SCIMEMBER(*) で、ODBM クライアントとの関係に関わらず、*thread_id* のスレッド情報を戻します。

注: SCIMEMBER キーワードが QRY ODBM TYPE(THREAD) コマンドに指定されると、SHOW(SCIMEMBER) が指定されていなくても、コマンドの出力に ODBM クライアント名が含まれます。

STATUS()

スレッドの状況別の QUERY ODBM TYPE(THREAD) コマンドでのフィルター操作が可能になります。以下のパラメーターを指定できます。

ALL

以下の状況のいずれかのスレッドに関する情報を表示します。

STATUS(ALL) がデフォルトです。

- ACTIVE - スレッドがアクティブで、以下の状態のいずれでもありません。
- INPREPARE
- INCOMMIT
- INBACKOUT
- INDOUBT
- INTERM
- INABTERM

INDOUBT

状況が INDOUBT のスレッドのみを表示します。

SHOW()

戻される ODBM TYPE(THREAD) 出力フィールドを指定します。1 つ以上のパラメーターを指定することができます。SHOW キーワードでサポートされるパラメーターには以下のものがあります。

ALL

ODBM スレッドに関するすべての情報を戻します。

ACTIVETIME

ACTIVETIME は、データ・ストアで消費される時間として定義されます。SHOW(ACTIVETIME) を指定すると、データ・ストアが入力された時間から、QUERY コマンドが発行された時間までの経過時間を戻します。この値は累積されません。このコマンドが発行されたときにデータ・ストアで処理が行われていない場合、ゼロ値が ACTIVETIME 列に戻されます。

ACTIVETIME のフォーマットは次のとおりです。

HH:MM:SS.th

ACTIVETIME が 24 時間を超えた場合、ACTIVETIME 列には次が表示されます。

24+ HOURS

APPLCLIENTID

IMS データ・ストア接続要求を発信したアプリケーション・クライアントの ID を戻します。

IDLETIME

IDLETIME は、データ・ストア外の時間として定義されます。SHOW(IDLETIME) を指定すると、データ・ストア処理からの戻りと、QUERY コマンドが発行された時間との間の経過時間を戻します。この値は累積されません。このコマンドが発行されたときにデータ・ストアで処理が行われている場合、ゼロ値が IDLETIME 列に戻されます。

IDLETIME のフォーマットは次のとおりです。

HH:MM:SS.th

IDLETIME が 24 時間を超えた場合、IDLETIME 列には次が表示されます。

24+ HOURS

PSB

スレッドで使用されている PSB の名前を戻します。

SCIMEMBER

スレッドに関連付けられた ODBM クライアントの名前を戻します。

STARTTIME

スレッドが開始された時間を戻します。STARTTIME は UTC で、フォーマットは以下のとおりです。

DDD-YYYY HH:MM:SS.thmiju

TIME

STARTTIME、IDLETIME、および ACTIVETIME の 3 つの時間値を戻します。

URID

スレッドに関連付けられた UR ID を戻します。

USERID

スレッドに関連付けられたユーザー ID を戻します。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

このコマンドの構文は XML で定義されており、OM と通信する自動化プログラムで使用できます。

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。ゼロ以外の完了コードの場合に表示される出力フィールドには *error* が表示されます。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されていません。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 147. QUERY ODBM TYPE(THREAD) コマンドの出力フィールドの説明

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
ACID	ApplClientID	APPLCLIENTID	IMS データ・ストア接続要求を発信したアプリケーション・クライアントの ID。
ATIME	ActiveTime	ACTIVETIME または TIME	スレッドがデータ・ストアで処理されているときの経過時間。
ALIAS	AliasName	N/A	スレッドに関連付けられた別名。
CC	CC	N/A	完了コード。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
DSTR	DatastoreName	N/A	スレッドに関連付けられたデータ・ストア名。
ITIME	IdleTime	IDLETIME または TIME	スレッドがアイドルである (データ・ストアで処理が行われていない) ときの経過時間。
MBR	MbrName	N/A	コマンドを処理した ODBM メンバーの名前。
PSB	PSB	PSB	スレッドでスケジュールされている PSB の名前。
SCMBR	SCIMbrName	SCIMEMBER	スレッドの ODBM に接続しているクライアントの SCI メンバー名。
STIME	StartTime	STARTTIME または TIME	スレッドの開始時刻。
STT	Status	N/A	スレッドの状況。
THID	ThreadID	N/A	スレッド ID。
URID	URID	URID	スレッドのリカバリー ID の単位。
UID	Userid	USERID	スレッドに関連付けられたユーザー名。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY ODBM TYPE(THREAD) コマンドの結果として戻される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 148. QUERY ODBM TYPE(THREAD) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY ODBM TYPE(THREAD) コマンドは正常に完了しました。
X'04000008'	X'00002004'	無効なコマンド・キーワードまたは無効なコマンド・キーワードの組み合わせ。
X'04000008'	X'00002008'	キーワードの数が足りません。
X'04000008'	X'00002014'	リソース名の無効文字。
X'04000008'	X'0000203C'	無効なパラメーターが指定されました。
X'0400000C'	X'00003000'	At least one request was successful.
X'0400000C'	X'00003004'	No requests were successful.
X'04000014'	X'0000501C'	APSB ハッシュ・テーブルの SCAN が失敗しました。
X'04000014'	X'00005034'	OM 応答バッファ要求は失敗しました。
X'04000014'	X'00005038'	CSLDCMD0 GETBUF 要求はコマンド・バッファの取得に失敗しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 149. QUERY ODBM TYPE(THREAD) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		QUERY ODBM TYPE(THREAD) コマンドは正常に完了しました。
1	INVALID CHARACTER, RESOURCE NAME	コマンド入力のリソース名に無効文字があります。
2	PARAMETER SPECIFIED TOO LONG	指定された NAME() パラメーターが、有効なスレッド名の長さである 32 文字より長くなっています。
7	NO MATCHES FOUND FOR FILTER	リソースが見つかりましたが、指定されたフィルターの 1 つ以上が一致しませんでした。
10	NO RESOURCES FOUND	リソースが見つからなかった。

例

QUERY ODBM TYPE(THREAD) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

QRY ODBM TYPE(THREAD) NAME(*) SHOW(ALL)

TSO SPOC 出力:

TSO SPOC 出力:

MbrName	ThreadID	CC	Status	DatastoreName
ODBM010D	00000001233344129802334877222344	0	INBACKOUT	IMS1
ODBM010D	00055001233344129802334877222981	0	INDOUBT	IMS2
ODBM010D	01234444933344129802334877222344	0	INPREPARE	IMS3
ODBM020D	92833457233344129802334877222344	0	INDOUBT	IMS4
ODBM030D	63200001233344129802334877222344	0	INABTERM	IMS5

(continued)

AliasName	SCIMbrName	Userid	PSB	URID
I01A	HWS1	User01	PSB1	0000000000000001
I02B	HWS1	User02	PSB2	0000000000000025
I03A	HWS2	User03	PSB3	0000000000000009
I04A	HWS2	User03	PSB4	0000000000000087
I05B	HWS1	User05	PSB5	0000000000000022

(continued)

StartTime	IdleTime	ActiveTime	App1ClientID
182-2008 15:31:15.123456	00:00:00.01	00:00:00.00	CLIENT1
182-2008 15:31:29.237888	00:00:00.00	00:00:00.90	CLIENT2
182-2008 15:31:45.573900	00:00:00.02	00:00:00.00	CLIENT3
182-2008 15:31:18.000001	00:00:00.02	00:00:00.00	CLIENT3
182-2008 15:31:53.111242	00:00:00.01	00:00:00.00	CLIENT5

説明: QUERY コマンドは、 ODBM が認識するすべてのスレッドに関する ODBM スレッド情報を表示します。

QUERY ODBM TYPE(THREAD) コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

QRY ODBM TYPE(THREAD) NAME(*)

TSO SPOC 出力:

MbrName	ThreadID	CC	Status	DatastoreName
ODBM010D	00000001233344129802334877222344	0	INBACKOUT	IMS1
ODBM010D	00055001233344129802334877222981	0	INDOUBT	IMS2
ODBM010D	01234444933344129802334877222344	0	INPREPARE	IMS3
ODBM020D	92833457233344129802334877222344	0	INDOUBT	IMS4
ODBM030D	63200001233344129802334877222344	0	INABTERM	IMS5

(continued)

AliasName
I01A
I02B
I03A
I04A
I05B

説明: QUERY コマンドは、 ODBM が認識するすべてのスレッドに関する情報を表示します。

QUERY ODBM TYPE(THREAD) コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

QRY ODBM TYPE(THREAD) NAME(*) DATASTORE(IMS1)

TSO SPOC 出力:

MbrName	ThreadID	CC	Status	DatastoreName
ODBM010D	00000001233344129802334877222344	0	INBACKOUT	IMS1

(continued)

AliasName
I01A

説明: QUERY コマンドは、データ・ストア IMS1 に関連付けられたスレッドに関する情報を表示します。

QUERY ODBM TYPE(THREAD) コマンドの例 4

TSO SPOC 入力:

QRY ODBM TYPE(THREAD) NAME(*) SCIMEMBER(HWS2) SHOW(APPLCLIENTID,USERID)

TSO SPOC 出力:

MbrName	ThreadID	CC	Status	DatastoreName
ODBM010D	01234444933344129802334877222344	0	INPREPARE	IMS3
ODBM020D	92833457233344129802334877222344	0	INDOUBT	IMS4

(continued)

AliasName	SCIMbrName	Userid	ApplClientID
I03A	HWS2	User03	CLIENT3
I04A	HWS2	User03	CLIENT3

説明: QUERY コマンドは、アプリケーション・クライアント ID と、SCI メンバ一名 HWS2 に関連付けられたスレッドのユーザー ID を表示します。

QUERY ODBM TYPE(THREAD) コマンドの例 5

TSO SPOC 入力:

QRY ODBM TYPE(THREAD) NAME(*) ALIAS(I02*) SHOW(PSB,SCIMEMBER)

TSO SPOC 出力:

MbrName	ThreadID	CC	Status	DatastoreName
ODBM010D	00055001233344129802334877222981	0	INDOUBT	IMS2

(continued)

AliasName	SCIMbrName	PSB
I02B	HWS1	PSB2

説明: QUERY コマンドは、別名が 『I02[®]』 で始まるスレッドの PSB 名と ODBM クライアント名を表示します。

QUERY ODBM TYPE(THREAD) コマンドの例 6

TSO SPOC 入力:

QRY ODBM TYPE(THREAD) NAME(000*) PSB(P*) SHOW(USERID)

TSO SPOC 出力:

MbrName	ThreadID	CC	DatastoreName	Status
ODBM010D	00000001233344129802334877222344	0	IMS1	INBACKOUT
ODBM010D	00055001233344129802334877222981	0	IMS2	INDOUBT

(continued)

AliasName	Userid	PSB
I01A	User01	PSB1
I02B	User02	PSB2

説明: QUERY コマンドは、名前が 000 で始まり、関連する PSB の名前が 『P』で始まるスレッドのユーザー ID を表示します。

QUERY ODBM TYPE(THREAD) コマンドの例 7

TSO SPOC 入力:

```
QRY ODBM TYPE(THREAD) NAME(*) SHOW(TIME)
```

TSO SPOC 出力:

MbrName	ThreadID	CC	Status	DatastoreName
ODBM010D	00000001233344129802334877222344	0	INBACKOUT	IMS1
ODBM010D	00055001233344129802334877222981	0	INDOUBT	IMS2
ODBM010D	01234444933344129802334877222344	0	INPREPARE	IMS3
ODBM020D	92833457233344129802334877222344	0	INDOUBT	IMS4
ODBM030D	63200001233344129802334877222344	0	INABTERM	IMS5

(continued)

AliasName	StartTime	IdleTime	ActiveTime
I01A	182-2008 15:31:15.123456	00:00:00.01	00:00:00.00
I02B	182-2008 15:31:29.237888	00:00:00.00	00:00:00.90
I03A	182-2008 15:31:45.573900	00:00:00.02	00:00:00.00
I04A	182-2008 15:31:18.000001	00:00:00.02	00:00:00.00
I05B	182-2008 15:31:53.111242	00:00:00.01	00:00:00.00

説明: QUERY コマンドは、ODBM に関連付けられたスレッドの開始時刻値を表示します。

QUERY ODBM TYPE(TRACE) コマンド

QUERY ODBM TYPE(TRACE) コマンドは、Open Database Manager (ODBM) トレースに関する情報を照会するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 511 ページの『構文』
- 511 ページの『キーワード』
- 511 ページの『使用上の注意』
- 511 ページの『出力フィールド』
- 512 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 512 ページの『例』

環境

QUERY ODBM コマンドは、CSL Open Database Manager (ODBM) に対してのみ適用可能です。このコマンドを発行するには、CSL type-2 コマンド環境が使用可

能に設定されており、ODBM インスタンスがアクティブである必要があります。

構文

```
QUERY ODBM TYPE(TRACE) SHOW(ALL)
```

キーワード

以下のキーワードは、QUERY ODBM TYPE(TRACE) コマンドに有効です。

SHOW()

戻される ODBM TYPE(TRACE) 出力フィールドを指定します。SHOW キーワードでサポートされるパラメーターには以下のものがあります。

ALL

ODBM トレースに関するすべての情報を戻します。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

このコマンドの構文は XML で定義されており、OM と通信する自動化プログラムで使用できます。

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。ゼロ以外の完了コードの場合に表示される出力フィールドには *error* が表示されます。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 150. QUERY ODBM TYPE(TRACE) コマンドの出力フィールドの説明

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	完了コード。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
DSTR	DatastoreName	N/A	データ・ストア名。
MBR	MbrName	N/A	コマンドを処理した ODBM メンバーの名前。
TRACE	Trace	N/A	トレース情報。
TRCSTT	TraceStatus	N/A	トレース状況: Active または Inactive。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY ODBM TYPE(TRACE) コマンドの結果として戻される戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 151. QUERY ODBM TYPE(TRACE) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY ODBM TYPE(TRACE) コマンドは正常に完了しました。
X'04000008'	X'00002004'	無効なコマンド・キーワードまたは無効なコマンド・キーワードの組み合わせ。
X'04000008'	X'00002008'	キーワードの数が足りません。
X'04000008'	X'0000203C'	無効なパラメーターが指定されました。
X'0400000C'	X'00003000'	At least one request was successful.
X'0400000C'	X'00003004'	No requests were successful.
X'04000014'	X'00005034'	OM 応答バッファ要求は失敗しました。
X'04000014'	X'00005038'	CSLDCMD0 GETBUF 要求はコマンド・バッファの取得に失敗しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 152. QUERY ODBM TYPE(TRACE) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		QUERY ODBM TYPE(TRACE) コマンドは正常に完了しました。
1	INVALID CHARACTER, RESOURCE NAME	コマンド入力のリソース名に無効文字があります。
10	NO RESOURCES	リソースが見つからなかった。

例

QUERY ODBM TYPE(TRACE) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QRY ODBM TYPE(TRACE) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

```
MbrName      Trace  DatastoreName  CC  TraceStatus
ODBM010D     System  IMS1           0   Active
ODBM020D     System  IMS3           0   Inactive
```

説明: QUERY コマンドは、すべての ODBM トレース・データを表示します。

QUERY OLC コマンド

RM 付き (RMENV=Y) で実行されている IMS の場合は、QUERY OLC コマンドは、グローバル・オンライン変更に参加しているすべての IMS システムが共用している OLCSTAT DS に関する情報を戻します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 514 ページの『使用上の注意』
- 515 ページの『出力フィールド』
- 517 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 519 ページの『例』

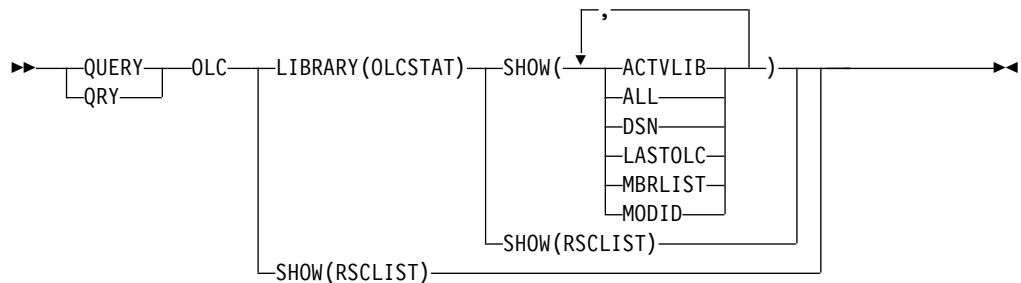
環境

以下の表には、QUERY OLC コマンドおよびキーワードを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 153. QUERY OLC コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUERY OLC	X	X	X
LIBRARY	X	X	X
SHOW	X	X	X

構文



キーワード

以下のキーワードは、QUERY OLC コマンドに有効です。

LIBRARY

オンライン変更ライブラリー。ライブラリーは次のものが可能です。

OLCSTAT

OLCSTAT データ・セットの内容。

SHOW()

戻されるライブラリー情報を指定します。

ALL

RSCLIST 情報を除く、すべての出力フィールドを戻します。

ACTVLIB

現在アクティブである、接尾部付きのオンライン変更ライブラリー名を表示します。これには、ACBLIBA または ACBLIB、FMTLIBA または FMTLIBB、あるいは MODBLKSA または MODBLKSB が含まれます。これらは、IMS オンライン・システムが IMS の初期設定時に使用する必要があるオンライン変更ライブラリーです。

DSN

OLCSTAT データ・セット名。

LASTOLC

正常に実行された、最後のオンライン変更を表示します。最後のオンライン変更時に IMS がダウンし、その再始動タイプが最後に行われたオンライン変更と競合していない場合は、ウォーム・スタートを行うことが許されます。オンライン変更が行われていなければ、最後のオンライン変更のタイプはブランクです。少なくとも 1 回のオンライン変更が行われた場合は、最後のオンライン変更のタイプは以下の 1 つ以上のものになります。

- ACBLIB
- FMTLIB
- MODBLKS

MBRLIST

オンライン変更ライブラリーと同じく現行の IMS システムのリストを表示します。これらは、ウォーム・スタートが許可される IMS システムです。その IMS システムは、最後のオンライン変更に参加したか、あるいは最後のオンライン変更の後にコールド・スタートしました。

MODID

変更 ID。変更 ID - 1 は、実行されたグローバル・オンライン変更の数を表します。

RSCLIST

ステージング ACBLIB からアクティブ ACBLIB にコピーされた ACBLIB メンバーを戻します。SHOW(RSCLIST) は、TYPE(ACBMBR) OLC が進行中の場合にのみ有効です。

使用上の注意

コマンド応答は、すべての IMS システムについて同じです。QUERY OLC は、グローバル・オンライン変更が使用可能な IMS に対しては有効ですが、ローカル・オンライン変更が使用可能な IMS に対しては無効です。

QUERY OLC は、XRF 代替システムまたは FDBR 領域ではサポートされません。このコマンドは OM API を介してのみ指定できます。

QUERY OLC LIBRARY コマンドは、現行のオンライン変更ライブラリーおよび、オンライン変更ライブラリーと同じく現行の IMS システムなど、グローバル・オンライン変更に関する情報を表示します。QUERY OLC LIBRARY(OLCSTAT) は、グローバル・オンライン変更状況データ・セット、OLCSTAT の内容を表示し

ます。SHOW キーワードを指定することにより、オプションとして、現在アクティブなオンライン変更ライブラリー、それらのオンライン変更ライブラリーと同じく現行の IMS システムのリスト、変更 ID、および最後に行われたオンライン変更を表示することができます。

RM サービスなし (RMENV=N) で実行されている IMS の場合は、QUERY OLC コマンドは、IMS システムのローカル OLCSTAT DS に関する情報を戻します。個々の IMS がそれぞれ固有の OLCSTAT DC をもっている必要があるため、コマンド応答は IMS ごとに異なります。RM なしの環境では、QUERY OLC の経路リストで複数の IMS を指定した場合は、コマンド IMS マスターに関する OLCSTAT DS 情報のみが戻されます。RM なしで実行されているそれぞれの IMS について OLCSTAT DS 情報を取得するには、それぞれの IMS ごとに QUERY OLC コマンドを出す必要があります。どの IMS システムが RMENVNO によって定義されているかを判別するには、QUERY MEMBER SHOW(ATTRIB) コマンドを出します。

このコマンドのコマンド構文は XML で定義されており、OM と通信する自動化プログラムで使用できます。

出力フィールド

以下の表には、QUERY OLC 出力フィールドが記載されています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。ゼロ以外の完了コードの場合に表示される出力フィールドには *error* が表示されます。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。

有効範囲

出力フィールドの有効範囲を識別します。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 154. QUERY OLC コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
ACBL	ACBLIB	ACTVLIB	GBL	現行の ACBLIB ライブラリー。A は、現行の ACBLIB ライブラリーが ACBLIBA であることを意味します。B は、現行ライブラリーが ACBLIBB であることを意味します。
ADD	ADD	RSCLIST	LCL	リソースを追加中であることを示します。

表 154. QUERY OLC コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
CC	CC	N/A	N/A	出力行の完了コード。完了コードは、IMS が、指定されたライブラリーに対してコマンドを処理できたかどうかを示します。詳しくは、518 ページの表 156 を参照してください。完了コードは常に戻されます。
CHG	CHNG	RSCLIST	LCL	リソースを変更中であることを示します。
CPY	COPY	RSCLIST	LCL	リソースをコピー中であることを示します。
DBD	DBDName	RSCLIST	LCL	データベース名または DBD 名。
DSN	DSName	DSN	GBL	OLCSTAT データ・セット名。
FMTL	FMTLIB	ACTVLIB	GBL	現行の FMTLIB ライブラリー。A は、現行の FMTLIB ライブラリーが FMTLIBA であることを意味します。B は、現行の FMTLIB ライブラリーが FMTLIBB であることを意味します。
LAST	LastOLC	LASTOLC	GBL	正常に実行された、最後のオンライン変更。最後のオンライン変更時に IMS がダウンし、その再始動タイプが最後に行われたオンライン変更と競合していない場合は、ウォーム・スタートを行うことが許されます。オンライン変更タイプには、以下のうちの 1 つ以上が含まれます。 <ul style="list-style-type: none"> • ACBLIB • FMTLIB • MODBLKS
LIB	ライブラリー	N/A	GBL	ライブラリー名。OLCSTAT など。
MBR	MbrName	N/A	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。出力を作成する IMS の IMS ID。IMS ID は常に戻されます。
MBRL	MbrList	MBRLIST	GBL	オンライン変更ライブラリーと同じく現行の IMSplex メンバーのリスト。これらは、ウォーム・スタートが許可される IMS システムです。その IMS システムは、最後のオンライン変更に参加したか、あるいは最後のオンライン変更の後にコールド・スタートしました。

表 154. QUERY OLC コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
MODB	MODBLKS	ACTVLIB	GBL	現行の MODBLKS ライブラリーおよび MATRIX ライブラリー。A は、現行ライブラリーが MODBLKSA および MATRIXA であることを意味します。B は、現行ライブラリーが MODBLKSB および MATRIXB であることを意味します。
MODI	Modid	MODID	GBL	現行の変更 ID。変更 ID - 1 は、正常に実行されたグローバル・オンライン変更の数です。
PSB	PSBName	RSCLIST	LCL	プログラム名または PSB 名。
RFS	RFSH	RSCLIST	LCL	リソースをリフレッシュ中であることを示します。
RSC	RSCName	RSCLIST	LCL	コマンドで指定されたリソース名。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY OLC コマンドの結果として戻される戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 155. QUERY OLC コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY OLC コマンドは正常に完了しました。
X'00000004'	X'00001000'	この IMS システムはコマンド・マスターではないため、この IMS システムでは QUERY OLC コマンドは処理されませんでした。情報は戻されません。
X'00000010'	X'0000400C'	QUERY OLC コマンドは、XRF 代替に対して無効であるため、失敗しました。
X'00000010'	X'0000401C'	QUERY OLC コマンドは、FDBR 領域に対して無効であるため、失敗しました。

表 155. QUERY OLC コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000010'	X'0000410C'	グローバル・オンライン変更が使用可能になっていないため、QUERY OLC コマンドはリジェクトされます。ローカル・オンライン変更が使用可能です。 /DISPLAY MODIFY コマンドをローカル・オンライン変更にご使用ください。ご使用の IMSplex がグローバル・オンライン変更をサポートするいくつかの IMS とローカル・オンライン変更をサポートするいくつかの IMS システムで構成されている場合は、グローバル・オンライン変更に対して使用可能になっている IMS に QUERY OLC コマンドを経路指定してください。グローバル・オンライン変更が使用可能にされている IMS を選択するには、QUERY MEMBER TYPE(IMS) SHOW(ATTRIB) コマンドを出します。
X'00000010'	X'00004114'	OLCSTAT データ・セットへのアクセスのエラーが原因で、QUERY OLC LIBRARY(OLCSTAT) コマンドは失敗しました。 DFS2843 メッセージが、非送信請求出力として OM 出力出口に送信されます。
X'00000010'	X'00004118'	OLCSTAT データ・セットの割り振りのエラーが原因で、QUERY OLC LIBRARY(OLCSTAT) コマンドは失敗しました。 DFS2848 メッセージが、非送信請求出力として OM 出力出口に送信されます。
X'00000010'	X'0000411C'	OLCSTAT データ・セット内容に発生したエラーが原因で、QUERY OLC LIBRARY(OLCSTAT) コマンドは失敗しました。1 つ以上の値が無効です。 DFS2844 メッセージが、非送信請求出力として OM 出力出口に送信されます。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できなかったため、QUERY OLC コマンド処理は失敗しました。
X'00000014'	X'00005FFF'	内部 IMS エラーが原因で、QUERY OLC コマンドは失敗しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは、個々のライブラリーに対するアクションごとに戻されます。

以下の表には、QUERY OLC コマンドで戻される可能性のある完了コードが記載されています。

表 156. QUERY OLC コマンドの完了コード

完了コード	意味
0	ライブラリーに対する QUERY OLC コマンドは正常に完了しました。

例

以下に示すのは QUERY OLC コマンドの例です。

QUERY OLC コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QRY OLC LIBRARY(OLCSTAT) SHOW(ACTVLIB,MODID,MBRLIST)
```

TSO SPOC 出力:

```
Response for: QUERY OLC LIBRARY(OLCSTAT) SHOW(ACTVLIB,MODID,MBRLIST)
MbrName   CC Library  ACBLIB  FMTLIB  MODBLKS  Modid MbrList
MS3       0 OLCSTAT   B       A       B        1 IMS3,IMS2,SYS3
```

OM API 入力:

```
CMD (QRY OLC LIBRARY(OLCSTAT) SHOW(ACTVLIB,MODID,MBRLIST))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.1.0</omvsn>
<xmlvsn>1 </xmlvsn>
<statime>2002.163 15:22:43.468642</statime>
<stotime>2002.16315:22:45.400709</stotime>
<staseq>B7C4A8029DD62884</staseq>
<stoseq>B7C4A80475885248</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10082243</rqsttkn1>
<rc>0200000C</rc>
<rsn>00003000</rsn>
</ctl>
<cmderr>
<mbr name="IMS2 ">
<typ>IMS </typ>
<styp>DBDC</styp>
<rc>00000004</rc>
<rsn>00001000</rsn>
<rsntext>IMS not master, cmd ignored</rsntext>
</mbr>
<mbr name="SYS3 ">
<typ>IMS </typ>
<styp>DBDC </styp>
<rc>00000004</rc>
<rsn>00001000</rsn>
<rsntext>IMS not master, cmd ignored</rsntext>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>IMS3 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>OLC </kwd>
<input>QUERY OLC LIBRARY(OLCSTAT) SHOW(ACTVLIB,MODID,MBRLIST)</input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="Mbr" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="4"
dtype="INT" align="right" />
<hdr s1b1="LIB" l1b1="Library" scope="GBL" sort="a" key="1" scroll="no" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="ACBL" l1b1="ACBLIB" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="8"
```

```

dtype="CHAR" align="right" />
<hdr slbl="FMTL" llbl="FMTLIB" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="8"
dtype="CHAR" align="right" />
<hdr slbl="MODB" llbl="MODBLKS" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="8"
dtype="CHAR" align="right" />
<hdr slbl="MODI" llbl="Modid" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="8"
dtype="CHAR" align="right" />
<hdr slbl="MBRL" llbl="MbrList" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="*"
dtype="CHAR" align="left"/>
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MBR(IMS3 ) CC( 0) LIB(OLCSTAT ) ACBL(B) FMTL(A) MODB(B) MODI( 1)
MBRL(IMS3,IMS2,SYS3) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: QUERY OLC LIBRARY(OLCSTAT) は、グローバル・オンライン変更状況が含まれている、OLCSTAT データ・セットの内容を表示します。このコマンドは、アクティブなオンライン変更ライブラリー、変更 ID、および、オンライン変更ライブラリーに対して現行の状態にある (したがってウォーム・リストに入っている) IMS メンバーのリストを表示します。出力は、ACBLIBB データ・セット、FMTLIBB データ・セット、および MODBLKSB データ・セットがアクティブで、変更 ID は 2 であることを示しています。SYS3 は、出力を作成したコマンド・マスターでした。

QUERY OLC コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
QRY OLC LIBRARY(OLCSTAT) SHOW(DSN)
```

TSO SPOC 出力:

```

MbrName    CC Library  DSName
IMS3       0 OLCSTAT  IMSTESTL.IMS02.OLCSTAT

```

OM API 入力:

```
CMD (OLC LIBRARY(OLCSTAT) SHOW(DSN))
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.1.0</omvsn>
<xm1vsn>1 </xm1vsn>
<statime>2002.163 15:28:36.353742</statime>
<stotime>2002.16315:28:36.426823</stotime>
<staseq>B7C4A953276CE286</staseq>
<stoseq>B7C4A95339447348</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10082836</rqsttkn1>
<rc>02000000</rc><rsn>00003000</rsn>
</ctl>
<cmderr>
<mbr name="IMS2 ">
<typ>IMS </typ>
<styp>DBDC </styp>
<rc>00000004</rc>
<rsn>00001000</rsn>
<rsntext>IMS not master; cmd ignored</rsntext>
</mbr>
<mbr name="SYS3 ">
<typ>IMS </typ>

```

```

<styp>DBDC </styp>
<rc>00000004</rc>
<rsn>00001000</rsn>
<rsntext>IMS not master; cmd ignored</rsntext>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>IMS3 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>OLC </kwd>
<input>QUERY OLC LIBRARY(OLCSTAT) SHOW(DSN)</input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr slbl="MBR" llbl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr slbl="CC" llbl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="4"
dtype="INT" align="right" />
<hdr slbl="LIB" llbl="Library" scope="GBL" sort="a" key="1" scroll="no" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr slbl="DSN" llbl="DSName" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MBR(IMS3 ) CC( 0) LIB(OLCSTAT ) DSN(IMSTESTL.IMS02.OLCSTAT) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: この QUERY OLC コマンドは、OLCSTAT データ・セット名を表示します。IMS3 は、出力を作成したコマンド・マスターでした。

QUERY OLC コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
QUERY OLC SHOW(RSCLIST)
```

TSO SPOC 出力:

MbrName	CC	DBDName	PSBName	ADD
IMS1	0	OLCDB105		Y
IMS2	0	OLCDB105		Y
IMS1	0	OLCDB111		Y
IMS2	0	OLCDB111		Y
IMS1	0	OLCDI111		Y
IMS2	0	OLCDI111		Y
IMS1	0	OLCDX111		Y
IMS2	0	OLCDX111		Y
IMS1	0		OLCPB105	Y
IMS2	0		OLCPB105	Y
IMS1	0		OLCPB111	Y
IMS2	0		OLCPB111	Y

OM API 入力:

```
CMD (QUERY OLC SHOW(RSCLIST))
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.3.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2006.268 18:28:28.326510</statime>
<stotime>2006.268 18:28:28.341969</stotime>

```


```

<stoseq>BF75BA3F0266E263</stoseq>
<stoseq>BF75BA3F062D136E</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10112828</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS2 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>OLC </kwd>
<input>QUERY OLC SHOW(RSCLIST) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="4" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="RSC" l1b1="RSCName" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="DBD" l1b1="DBDName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="PSB" l1b1="PSBName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="ADD" l1b1="ADD" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="CHG" l1b1="CHNG" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="CPY" l1b1="COPY" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="RFS" l1b1="RFSH" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MBR(IMS2 ) CC( 0) DBD(OLCDB105) ADD(Y) </rsp>
<rsp>MBR(IMS2 ) CC( 0) DBD(OLCDX111) ADD(Y) </rsp>
<rsp>MBR(IMS2 ) CC( 0) DBD(OLCDB111) ADD(Y) </rsp>
<rsp>MBR(IMS2 ) CC( 0) DBD(OLCDI111) ADD(Y) </rsp>
<rsp>MBR(IMS2 ) CC( 0) PSB(OLCPB105) ADD(Y) </rsp>
<rsp>MBR(IMS2 ) CC( 0) PSB(OLCPB111) ADD(Y) </rsp>
<rsp>MBR(IMS1 ) CC( 0) DBD(OLCDB105) ADD(Y) </rsp>
<rsp>MBR(IMS1 ) CC( 0) DBD(OLCDX111) ADD(Y) </rsp>
<rsp>MBR(IMS1 ) CC( 0) DBD(OLCDB111) ADD(Y) </rsp>
<rsp>MBR(IMS1 ) CC( 0) DBD(OLCDI111) ADD(Y) </rsp>
<rsp>MBR(IMS1 ) CC( 0) PSB(OLCPB105) ADD(Y) </rsp>
<rsp>MBR(IMS1 ) CC( 0) PSB(OLCPB111) ADD(Y) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>


```

説明: この例は、INIT OLC PHASE(PREPARE) TYPE(ACBMBR) コマンドが出された後の QRY OLC SHOW(RSCLIST) コマンドからの出力を示しています。

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

QUERY OLREORG コマンド

QUERY OLREORG コマンドは、HALDB 区画のオンライン再編成または変更に関する情報を照会するために使用します。

QUERY OLREORG コマンドによって返される情報には、状況、率、および移動されたバイト数が含まれます。

データベースの再編成とは、パフォーマンスを改善するために、データベースの構造を変更すること、あるいはデータベース内のデータの編成方法を変更することを意味します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 524 ページの『キーワード』
- 526 ページの『使用上の注意』
- 527 ページの『出力フィールド』
- 527 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 528 ページの『例』

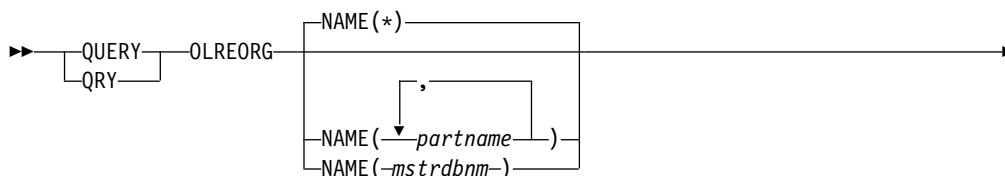
環境

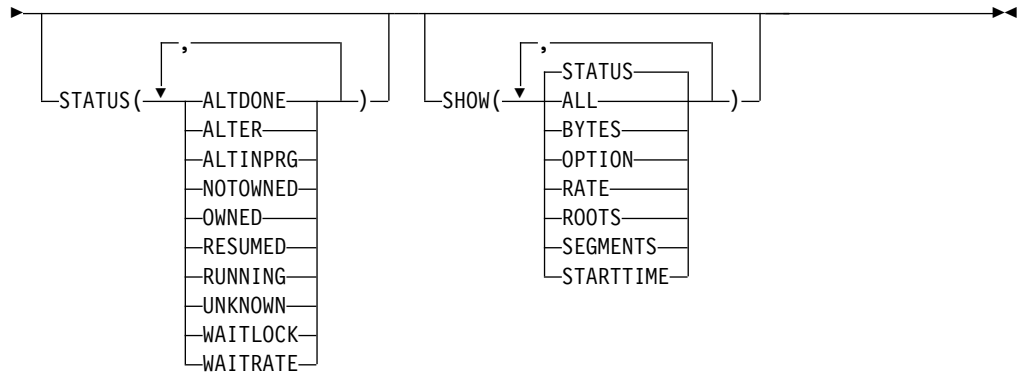
以下の表には、QUERY OLREORG コマンドおよびキーワードを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 157. QUERY OLREORG コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUERY OLREORG	X	X	
NAME	X	X	
STATUS	X	X	
SHOW	X	X	

構文





キーワード

以下のキーワードは、QUERY OLREORG コマンドに有効です。

NAME()

再編成または変更されている PHDAM 区画または PHIDAM 区画の名前。

NAME() はオプションです。定義されているすべての HALDB 区画を表す NAME(*) 以外には、ワイルドカード文字 (*) をパラメーターに使用することはできません。デフォルト値は NAME(*) です。

SHOW()

戻される出力フィールドを指定します。デフォルトは、SHOW(STATUS) です。

ALL

以下の出力フィールドのすべてを、それぞれの応答行で戻します。

BYTES

出力データ・セットに移動されたバイトの総数を戻します。

OPTION

現在のオプションを戻します。これは以下のいずれかです。

- DEL - OLR の終了時に出力データ・セットが削除されます
- NODEL - OLR の終了時に出力データ・セットは削除されません
- NOREL - 再編成の完了前に IMS が終了した場合、OLR の所有権は解放されません
- REL - 再編成の完了前に IMS が終了した場合、OLR の所有権が解放されます

RATE

HALDB OLR の稼働率 (1 から 100) を戻します。

ROOTS

出力データ・セットに移動されたルートの総数を戻します。

SEGMENTS

出力データ・セットに移動されたセグメントの総数を戻します。

STARTTIME

OLR が開始された地方時を戻します。

STATUS

オンライン再編成状況を表示します。

STATUS()

指定された状況の少なくとも 1 つを持つオンライン再編成を表示します。

STATUS キーワードが指定されていない場合、RUNNING、OWNED、NOTOWNED、WAITRATE、または WAITLOCK の状況を持つオンライン再編成が表示されます。

ALTDONE

変更処理が完了したすべての区画を表示します。

ALTER

オンラインで変更している HALDB データベース内のすべての区画の変更処理の状況を表示します。返される状況には以下のものがあります。

ALTINPRG

その区画の変更処理は完了していません。

ALTDONE

指定された区画の変更処理は完了しています。

HALDB データベースの変更処理は、すべての区画の状況が ALTDONE を表示するまでは完了しません。すべての区画の状況が ALTDONE になった後、オンライン変更 (OLC) を実行して ACB ライブラリーを「ステージング」から「アクティブ」に切り替えることで、変更したデータベースを新規アプリケーション・プログラムで使用できるようにすることができます。

ALTINQUE

表示される区画は変更を待機しています。

ALTINPRG

現在変更中のすべての区画を表示します。

NOTOWNED

出力が、TERMINATE OLREORG コマンドにより一時的に停止されており、したがってどの IMS によっても所有されていない HALDB OLR についてのものであることを指定します。

TERMINATE OLREORG コマンドを使用して終了済みの OLR について調べるには、コマンド要求で ROUTE(*) を指定した QUERY OLREORG STATUS(NOTOWNED) コマンドと、/RMLIST DBRC='DB DBD(partname)' コマンドを使用します。PLEX 上のすべてのシステムの状況が表示された場合は、OLR は既に終了しています。

OWNED

出力が、いずれかの IMS により所有されている HALDB OLR についてのものであることを指定します。このコマンドが処理される IMS で実行されている OLR については、STATUS として RUNNING が表示されます。その他の IMS サブシステムで実行されている OLR については、STATUS として OWNED が表示されます。

RESUMED

OLR は、TERM OLREORG コマンドやユーザー異常終了など、何らかの理由で停止されていた後、再開されています。

RUNNING

出力が、指定された partname (1 つ以上) について、各 IMS が所有している HALDB OLR に関するものであることを指定します。このキーワードを使用することにより、特定の partname についてどの IMS がオンライン再編成を実行しているかを判別することができます。

UNKNOWN

出力が、それぞれの IMS 上で、HALDB OLR の状況を判別できない partname についてのものであることを指定します。このように状況を判別できない理由としては、例えば、HALDB マスターまたは区画が /DBR DB コマンドによりオフラインにされていること、IRLM 障害のため、指定された partname に対して IMS が許可されていないこと、あるいは、区画がまだアクセスされていないことなどがあります。

WAITLOCK

OLR はロック待機中です。

WAITRATE

OLR は、意図的な遅延のために待機中です。この意図的な遅延は、RATE パラメーターに対して 100 より小さい値が指定されたために発生しました。

使用上の注意

QUERY OLREORG コマンドは OM API からのみ出すことができます。このコマンドが経路指定された各 IMS からの応答は、OM により統合されます。NAME パラメーターに名前を指定した場合は、指定したそれぞれの part name について応答行が戻されます。デフォルト・パラメーター NAME(*) の場合は、それぞれの IMS でオンライン再編成が進行中である HALDB 区画についてのみ、応答行が戻されます。

コマンドが XRF 代替システムに経路指定されたときに、非ゼロの戻りコードと理由コードが戻されます。

このコマンド出力は XML で定義されており、OM と通信する自動化プログラムで使用できます。

QRY OLREORG コマンドは、TERM OLREORG コマンドやユーザー異常終了など、何らかの理由で停止されていた OLR の OLR 統計を入手するために発行できます。終了した OLR に関連するデータは、以下のいずれの条件下でも維持され、提供されます。

- TERMINATE OLR コマンドが発行される。
- OLR 異常終了が発生する (例えば、DFS2971W メッセージが出される)
- IMS が正常シャットダウンされる。

注: 区画または HALDB マスターが /DBR コマンドによってオフラインにされている場合、あるいは OLR を再開するために IMS が再始動されており、IMS が再始動する前に OLR 所有権が要求された場合、OLR が再開されるまでは QUERY OLREORG コマンドを使用して状況入手することはできません。ただし、LIST.DB コマンドまたは LIST.RECON コマンドを使用して状況を取得することは可能です。

出力フィールド

以下の表には、QUERY OLREORG 出力フィールドが記載されています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード表示

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 158. QUERY OLREORG の出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード表示	意味
BYTES	Bytes-Moved	BYTES, ALL	移動されたバイトの総数。
CC	CC	N/A	完了コード。
LSTT	LclStat	N/A	HALDB OLR の状況。
MBR	MbrName	N/A	コマンドを出した IMS。
OPT	Option	OPTION, ALL	INITIATE OLREORG コマンドまたは UPDATE OLREORG コマンドで指定された所有権解放オプション。
PART	Partition	N/A	区画名。
RATE	Rate	RATE, ALL	HALDB OLR の実行速度。値は 1% から 100% までです。
RESM	Resumed	N/A	HALDB OLR が再開されている場合、RESUMED 状況。
ROOTS	Roots-Moved	ROOTS, ALL	移動されたルートの総数。
SEGS	Segs-Moved	SEGMENTS, ALL	移動されたセグメントの総数。
STRTT	StartTime	STARTTIME, ALL	RECON データ・セットに記録されている OLR の開始時刻。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY OLREORG コマンドの結果として戻されることのある OM の戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 159. QUERY OLREORG コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY OLREORG コマンドは正常に完了しました。
X'00000004'	X'00001010'	フィルターに一致するものはありません。
X'00000008'	X'00002004'	無効なコマンド・キーワード。
X'0000000C'	X'00003000'	At least one request was successful.
X'0000000C'	X'00003004'	成功した要求はありません。
X'00000010'	X'00004030'	LSO=Y の場合はコマンドは無効です。
X'00000010'	X'0000400C'	コマンドは XRF 代替システムで出されました。
X'00000010'	X'00004200'	IMS のシャットダウンが進行中のため、QUERY OLREORG コマンドは処理されません。
X'00000014'	X'00005000'	GETMAIN エラーが発生しました。

以下の表には、完了コードの説明が記載されています。QUERY OLREORG コマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。HALDB 区画に対する各アクションごとに、1 つずつ完了コードが戻されます。

表 160. QUERY OLREORG コマンドの完了コード

完了コード	意味
0	区画に対する QUERY OLREORG コマンドは正常に完了しました。
10	リソース名が無効です。
14	リソースが区画名ではありません。
1C	リソースは区分副次索引です。
24	進行中の HALDB OLR はありません。
28	ロードされている DMB はありません。
CB	区画は指定された状況ではありません。

例

この例では、QUERY OLREORG コマンドは IMSA に経路指定されています。このコマンドは、IMSA において進行中のすべての OLR に関する情報を取得するために出されます。戻される出力には以下の情報が含まれています。

- 区画名
- IMSID
- 進行中の OLR の状況
- OLR の速度
- 移動されたバイト数

TSO SPOC 入力:

```
QRY OLREORG NAME(*) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

Partition	MbrName	CC	LclStat	Rate	Bytes-Moved	Segs-Moved...
POHIDKA	IMS1	0	RUNNING	100	15678	97...
PDHDOJA	IMS1	0	RUNNING	100	4630	29...

...	Roots-Moved	Option	Resumed	StartTime
...	11	NODEL, NOREL	Y	2007.296 10:20:21.61
...	5	DEL, REL		2007.296 10:20:21.84

OM API 入力:

CMD (QRY OLREORG NAME(*) SHOW(ALL))

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.2.0</omvsn>
<xmlvsn>1 </xmlvsn>
<statime>2007.296 17:43:42.714976</statime>
<stotime>2007.296 17:43:42.715488</stotime>
<staseq>C163CD37F5860D82</staseq>
<stoseq>C163CD37F5A60342</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10104342</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>OLREORG </kwd>
<input>QRY OLREORG NAME(*) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="PART" l1b1="Partition" scope="lcl" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="7" dtype="char" align="left" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="lcl" sort="n" key="0"
  scroll="no"
  len="8" dtype="char" align="left" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="lcl" sort="n" key="0"
  scroll="yes"
  len="4" dtype="int" align="right" />
<hdr s1b1="LSTT" l1b1="LclStat" scope="lcl" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="char" align="left" />
<hdr s1b1="RATE" l1b1="Rate" scope="lcl" sort="n" key="0"
  scroll="yes"
  len="3" dtype="int" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="BYTES" l1b1="Bytes-Moved" scope="lcl" sort="n"
  key="0"
  scroll="yes" len="12" dtype="int" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="SEGS" l1b1="Segs-Moved" scope="lcl" sort="n0" key="0"
  scroll="yes" len="10" dtype="int" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="ROOTS" l1b1="Roots-Moved" scope="lcl" sort="n"
  key="0"
  scroll="yes" len="10" dtype="int" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1b1="OPT" l1b1="Option" scope="lcl" sort="n" key="0"
  scroll="yes"
  len="8" dtype="char" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="RESM" l1b1="Resumed" scope="lcl" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="char" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="STRTT" l1b1="StartTime" scope="lcl" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="char" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp> PART(POHIDKA ) MBR(IMS1 ) CC( 0) LSTT(RUNNING )
RATE(100)


```

```


BYTES(      15678) SEGS(      97) ROOTS(      11)
OPT(NODEL   )
RESM(Y) STRTT(2007.296 10:20:21.61) </rsp>
<rsp> PART(PVHDJ5A ) MBR(IMS1   ) CC(   0) LSTT(RUNNING )
RATE(100)
BYTES(      4630) SEGS(      29) ROOTS(       5)
OPT(DEL,REL )
STRTT(2007.296 10:20:21.84) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

QUERY OTMADESC コマンド

QUERY OTMADESC コマンドは、既存の IMS Open Transaction Manager Access (OTMA) 宛先記述子に関する情報を照会するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 532 ページの『キーワード』
- 537 ページの『使用上の注意』
- 538 ページの『出力フィールド』
- 539 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 例

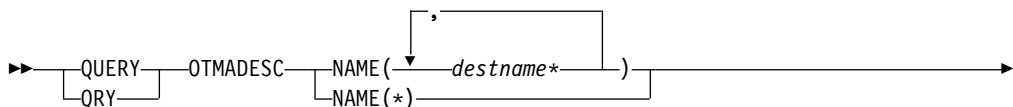
環境

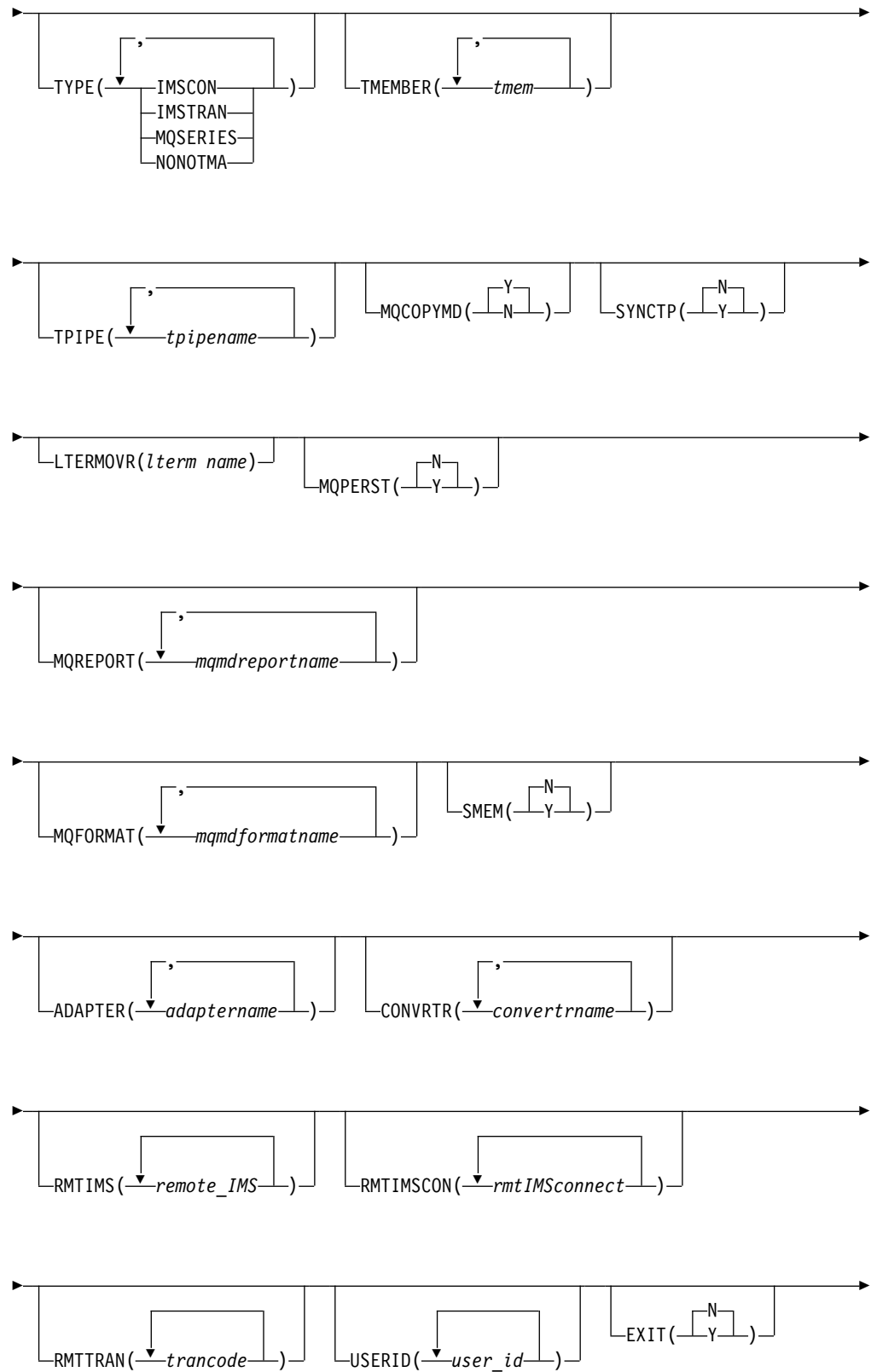
以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用できる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

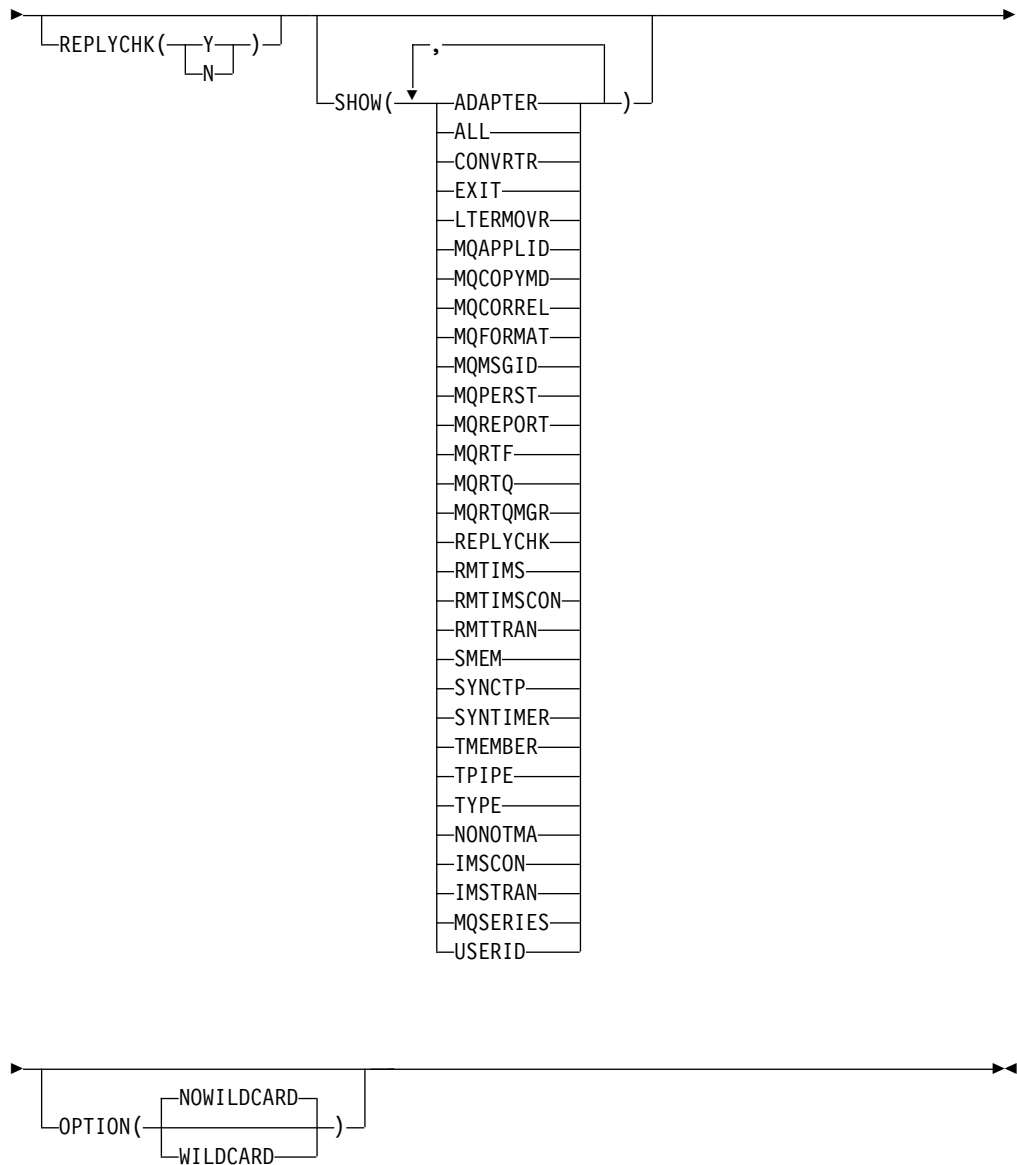
表 161. QUERY OTMADESC コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUERY OTMADESC	X		X

構文







キーワード

以下のキーワードは、QUERY OTMADESC コマンドに有効です。

ADAPTER(*adaptername*)

IMS Connect アダプターを識別する 1 文字から 8 文字の名前。このキーワードは、TYPE(IMSCON) のオプション・パラメーターです。アダプター名を指定した場合、そのアダプター名を指定している記述子からの情報のみが表示されます。このキーワードは、TYPE(NONOTMA) が指定された場合、無視されません。

CONVRTR(*convertname*)

ADAPTER キーワードで指定されたアダプターに関連付けられた 1 文字から 8 文字のコンバーター名。コンバーター名を指定した場合、そのコンバーター名を指定している記述子からの情報のみが表示されます。

EXIT(Y | N)

該当する出口ルーチンが記述子ルーティング情報をオーバーライドすることを許可するかどうかに基づいて記述子をフィルターに掛けるオプション・パラメーター。

LTERMOVR(*ltermname*)

論理端末オーバーライド名に基づいて記述子をフィルターに掛けるオプション・パラメーター。

MQAPPLID(*mqmdapplidentitydata*)

MQAPPLID パラメーターの 1 つ以上の指定値により記述子をフィルターに掛けます。MQAPPLID は、MQMD_APPLIDENTITYDATA フィールドの内容を指定します。このフィールドは、IBM MQ メッセージの MQMD データ構造内の 1 文字から 32 文字のユーザー・データ・フィールドです。

MQCOPYMD(Y | N)

MQMD データを入力メッセージから出力メッセージにコピーすることを指定するかどうかに基づいて、記述子をフィルターに掛けます。

MQCORREL(*mqmdcorrel*)

MQCORREL パラメーターの 1 つ以上の指定値により記述子をフィルターに掛けます。MQCORREL は、IBM MQ メッセージの MQMD データ構造の MQMD_CORRELID フィールドの内容を指定します。

MQFORMAT(*mqmdformatname*)

MQFORMAT パラメーターの 1 つ以上の指定値により記述子をフィルターに掛けます。MQFORMAT は、IBM MQ メッセージの MQMD データ構造の MQMD_FORMAT フィールドの内容を指定します。IMS では以下の値がサポートされています。

- MQIMSVS
- MQIMS
- NONE

MQMSGID(*mqmdmsgid*)

MQMSGID パラメーターの 1 つ以上の指定値により記述子をフィルターに掛けます。MQMSGID は、IBM MQ メッセージの MQMD データ構造の MQMD_MSGID フィールドの内容を指定します。

MQPERST(N | Y)

メッセージ持続性を使用するかどうかに基づいて TYPE=MQSERIES 記述子をフィルターに掛けます。

MQREPORT(*mqmdreportname*)

MQREPORT パラメーターの 1 つ以上の指定値により記述子をフィルターに掛けます。MQREPORT は、IBM MQ メッセージの MQMD データ構造の MQMD_REPORT フィールドの内容を指定します。以下の値がサポートされています。

パラメーター値
同等の MQMD 構造値

NEWMSGID
MQRO_NEW_MSG_ID

PASSMSGI

MQRO_PASS_MSG_ID

COPYMTOC

MQRO_COPY_MSG_ID_TO_CORREL_ID

PASSCORR

MQRO_PASS_CORREL_ID

PASSMSCO

MQRO_PASS_MSG_ID および MQRO_PASS_CORREL_ID

NONE

MQRO_NONE

MQRTF (*mqmdreplytoformatname*)

MQRTF パラメーターの 1 つ以上の指定値により記述子をフィルターに掛けます。MQRTF は、IBM MQ メッセージの MQMD データ構造の MQMD_REPLYTOFORMAT フィールドの内容を指定します。

MQRTQ (*mqmdreplytoqname*)

MQRTQ パラメーターの 1 つ以上の指定値により記述子をフィルターに掛けます。MQRTQ は、IBM MQ メッセージの MQMD データ構造の MQMD_REPLYTOQ フィールドの内容を指定します。

MQRTQ (*mqmdreplytoqmgrname*)

MQRTQMGR パラメーターの 1 つ以上の指定値により記述子をフィルターに掛けます。MQRTQMGR は、IBM MQ メッセージの MQMD データ構造の MQMD_REPLYTOQMGR フィールドの内容を指定します。

NAME (*destname)**

表示する OTMA 宛先記述子を識別する 1 文字から 8 文字の宛先名。このキーワードは必須です。OPTION(WILDCARD) も指定されている場合は、アスタリスクをワイルドカード文字として使用できます。

OPTION(NOWILDCARD | WILDCARD)

NAME キーワード内のアスタリスクがワイルドカード文字として扱われるかどうかを決定します。NOWILDCARD を指定した場合、アスタリスクは通常の文字として処理され、DFSYDTx PROCLIB メンバーで記述子にコーディングされている宛先名に、一致するアスタリスク文字が含まれている場合にのみ、記述子が表示されます。WILDCARD を指定した場合、NAME キーワード内のアスタリスクはワイルドカード文字として扱われ、アスタリスクによってマスクされていない文字に一致する宛先名を持つ記述子が表示されます。

REPLYCHK(Y | N)

OTMA DFS2082 メッセージ・サポートが使用可能であるかどうかに基づいて記述子をフィルターに掛けるオプション・パラメーター。

RMTIMS (*imsname*)

OTMA ALTPCB 出力の宛先であるリモート IMS システムの名前。リモート IMS 名を指定した場合、そのリモート IMS 名を指定している記述子からの情報のみが表示されます。RMTIMS パラメーターはオプションであり、1 文字から 8 文字の名前が許容されます。

RMTIMSCON (*imsconnectname*)

OTMA ALTPCB 出力の宛先であるリモート IMS システムの TCP/IP 通信を

管理するリモート IMS Connect インスタンスへの接続の名前。リモートIMS Connect 接続名を指定した場合、そのリモート IMS Connect 接続名を指定している記述子からの情報のみが表示されます。RMTIMSCON パラメーターはオプションであり、1 文字から 8 文字の接続名が許容されます。

RMTTRAN(*trancode*)

宛先リモート IMS システム内の OTMA メッセージを処理するためにスケジュールされているトランザクション・コードを表示するオプション・パラメーター。リモート・トランザクション・コードを指定した場合、そのリモート・トランザクション・コードを指定している記述子からの情報のみが表示されます。RMTTRAN 値は、1 文字から 8 文字のトランザクション名です。

SHOW()

出力フィールドに表示する情報を指定します。

ADAPTER

IMS Connect アダプターが識別する名前を表示します。

ALL

使用可能なすべての情報を表示します。

CONVRTR

アダプターで使用されるコンバーター名を表示します。

EXIT

TYPE=IMSTRAN を持つ記述子の場合、このフィールドは、DFSCMUX0 出口ルーチンが遅延応答メッセージの記述子ルーティング情報をオーバーライドできるかどうかを表示します。

その他のタイプの記述子の場合、このフィールドは、DFSYPRX0 および DFSYDRU0 出口ルーチンが ALT IOPCB メッセージ通信宛先に関する記述子ルーティング情報をオーバーライドできるかどうかを表示します。

LTERMOVR

宛先記述子で指定された lterm 名を表示します。

MQAPPLID

この記述子を使用して経路指定されるメッセージの MQMD_APPLIDENTITYDATA フィールドに挿入される IBM MQ ユーザー・アプリケーション・データを表示します。

MQCOPYMD

IBM MQ データ構造 (MQMD) の元の入力値が出力メッセージにコピーされるかどうかを表示します。

MQFORMAT

この記述子を使用して IBM MQ に経路指定されるメッセージの MQMD_FORMAT フィールドの値を表示します。

MQPERST

この記述子を使用して IBM MQ に経路指定されるメッセージが同期 TPIPE 上で持続的であるかどうかを表示します。

MQREPORT

この記述子を使用して IBM MQ に経路指定されるメッセージの MQMD_REPORT フィールドの値を表示します。

MQRTF

この記述子を使用して IBM MQ に経路指定されるメッセージの MQMD_REPLYTOFORMAT フィールドの値を表示します。

MQRTQ

この記述子を使用して IBM MQ に経路指定されるメッセージの MQMD_REPLYTOQ フィールドの値を表示します。

MQRTQMGR

この記述子を使用して IBM MQ に経路指定されるメッセージの MQMD_REPLYTOQMGR フィールドの値を表示します。

REPLYCHK

記述子では DFS2082 メッセージ・サポートが使用可能かどうかを表示します。

RMTIMS

宛先リモート IMS システムの名前を表示します。

RMTIMSCON

リモート IMS システムの TCP/IP 接続を管理している宛先リモート IMS Connect システムの名前を表示します。

RMTRAN

宛先リモート IMS システムでスケジュールされるトランザクション・コード。

SMEM

スーパーメンバーの標識を表示します。

SYNCTP

この記述子を使用して IBM MQ に経路指定されるメッセージが同期 TPIPE を必要とするかどうかを表示します。

SYNTIMER

同期コールアウト処理のタイムアウト値を表示します。

TMEMBER

SMEM の指定により、TMEMBER またはスーパーメンバーの名前を表示します。

TPIPE

TMEMBER の下の TPIPE 名を表示します。

TYPE

記述子のタイプを表示します。

NONOTMA

NONOTMA 記述子に関連するフィールドのみを表示します。

IMSCON

IMSCON 記述子に関連するフィールドのみを表示します。

IMSTRAN

IMSTRAN 記述子に関連するフィールドのみを表示します。

MQSERIES

MQSERIES 記述子に関連するフィールドのみを表示します。

USERID

宛先リモート IMS システムでトランザクション許可に使用されるユーザー ID を表示します。

SMEM(Y | N)

TMEMBER 名がスーパーメンバーであるかどうか指定するオプション・パラメーター。SMEM を指定した場合、SMEM に対して一致する Y 値または N 値を指定している記述子からの情報のみが表示されます。SMEM および TYPE(NONOTMA) は、同時には指定できません。

SYNCTP(N | Y)

同期 TPIPE が必要であるかどうかに基づいて TYPE=MQSERIES 記述子をフィルターに掛けます。

TMEMBER(tmemb)

1 文字から 16 文字の TMEMBER 名によってフィルターに掛けるために使用されるオプション・パラメーター。TMEMBER 名を指定した場合、その TMEMBER 名を指定している記述子からの情報のみが表示されます。TMEMBER および TYPE(NONOTMA) は、同時には指定できません。

TPIPE(tpipename)

1 文字から 8 文字の TPIPE 名によってフィルターに掛けるために使用されるオプション・パラメーター。TPIPE 名を指定した場合、その TPIPE 名を指定している記述子からの情報のみが表示されます。TPIPE および TYPE(NONOTMA) は、同時には指定できません。

TYPE(IMSCON | IMSTRAN | MQSERIES | NONOTMA)

オプション・キーワード。IMSCON、IMSTRAN、MQSERIES、または NONOTMA を指定できます。キーワードが指定されていない場合は、すべての出力タイプが表示されます。表示をフィルターに掛けるには、IMSCON、IMSTRAN、MQSERIES、または NONOTMA を指定します。TMEMBER、TPIPE、SMEM、ADAPTER、または CONVRTR などの他のキーワードを組み込むには、SHOW キーワードを使用します。TYPE(NONOTMA) が指定された場合、残りの表示パラメーターは、SHOW キーワードが指定されていてもブランクで表示されます。

USERID(userid)

宛先リモート IMS システムでトランザクション許可に使用されるユーザー ID を表示するオプション・パラメーター。ユーザー ID を指定した場合、そのユーザー ID を指定している記述子からの情報のみが表示されます。USERID 値は、1 文字から 8 文字の RACF ユーザー ID です。

使用上の注意

QUERY OTMADESC コマンドは、NAME() キーワードで識別された宛先ルーティング記述子に指定された値を表示するために使用します。QUERY OTMADESC コマンドで返された結果は、TPIPE() などの 2 次キーワードによってフィルターに掛けることができます。例えば、QUERY OTMADESC NAME(abc*) TPIPE(xyz) OPTION(WILDCARD) を指定した場合、abc で始まる宛先名と xyz の TPIPE 名を持つ記述子についての情報のみが返されます。

コマンドで検出された OTMA 宛先記述子からの情報を表示するかを制御するには、SHOW() キーワードを使用します。例えば、SHOW(TMEMBER) をコマンドに含めると、TMEMBER 値が返されます。

QUERY OTMADESC コマンドは、アスタリスクをワイルドカード文字として処理しません。ただし、コマンドの発行時に OPTION(WILDCARD) を指定すれば、NAME() キーワード内でアスタリスクをワイルドカード文字として使用できます。

このコマンドが発行されても、ログ・レコードは書き込まれません。

QUERY OTMADESC コマンドは、拡張回復機能 (XRF) 代替環境で発行できます。取り出された情報は、タイミング上の問題が原因で、アクティブ・システムと異なる可能性があります。例えば、UPDATE OTMADESC コマンドがアクティブ・システムで発行され、ログ・レコードが書き込まれ、そして QUERY OTMADESC コマンドがアクティブ・システムと代替システムの両方で発行されるシナリオを採用します。代替システムが旧情報を反映しているのに対して、アクティブ・システムに関する情報は、現行情報を反映しています。これは、代替システムで読み取られ、更新されているログ・レコードによって発生します。

有効な QUERY OTMADESC コマンドを発行することができます。このコマンドは、いずれかのフィルター・キーワードによって結果セット全体が除外された場合は結果を返しません。例えば、ADAPTER キーワードと MQFORMAT キーワードの両方を使用して記述子を照会した場合、これらのキーワードは有効な記述子で一緒に使用されることは絶対にないため、結果を返すことはありません。照会で結果が返されない場合、相互に排他的なフィルター・キーワードが指定されていないことを確認してください。

出力フィールド

以下の表には、QUERY OTMADESC 出力フィールドが記載されています。表の各列は、以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

フォーマット設定済み出力の出力フィールド用列見出しが含まれます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、error が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 162. QUERY OTMADESC コマンドの出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
ADAP	Adapter	ADAPTER	アダプター名。
CC	CC	N/A	出力行の完了コード。完了コードは、IMS が、指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示します。完了コードは常に戻されます。

表 162. QUERY OTMADESC コマンドの出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CCTXT	CCText	N/A	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
CVRTR	Converter	CONVRTR	コンバーター名。
DEST	DestName	NAME	宛先名。
IMSRPY	IMSReply	IMSREPLY	DFS2082 メッセージを同期プログラム間通信要求に対する応答として受信できるかを示すインディケーター。
MBR	MbrName	N/A	メンバー名。
RMTIMS	RmtIMS	RMTIMS	リモート IMS システムの名前。
RMTIMSCON	RmtIMSCon	RMTIMSCON	リモート IMS Connect インスタンスへの接続。
RMTTRAN	RmtTran	RMTTRAN	リモート IMS システムに送信されるトランザクション。
SMEM	SMem	SMEM	宛先がスーパーメンバーであるかどうかを示す標識。
SYNTO	Syntimer	SYNTIMER	同期コールアウト処理のタイムアウト値。
TMEM	TMember	TMEMBER	OTMA TMEMBER 名。
TPIPE	TPipe	TPIPE	TPIPE 名。
TYPE	タイプ	TYPE	出力タイプ。
UID	Userid	USERID	ユーザー ID。

戻りコード、理由コード、および完了コード

IMS 戻りコードと理由コードは、QUERY OTMADESC コマンドによって OM に戻されます。QUERY OTMADESC コマンドの結果として返される可能性のある OM 戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 163. QUERY OTMADESC コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、540 ページの表 164 を参照してください。
X'02000008'	X'00002000'	コマンドに無効な verb が含まれているか、verb に登録されているクライアントがありません。
X'02000008'	X'00002004'	コマンドに無効な 1 次キーワードが含まれているか、キーワードに登録されているクライアントがありません。
X'02000008'	X'00002028'	コマンドは無効なキーワードを含んでいます。
X'02000008'	X'0000202C'	コマンドは不明な定位置パラメーターを含んでいます。

表 163. QUERY OTMADESC コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'02000008'	X'00002034'	コマンドは不完全なキーワード・パラメーターを含んでいます。
X'02000008'	X'00002038'	コマンドには必須パラメーターが欠落しています。
X'02000008'	X'0000203C'	コマンドは無効なキーワード・パラメーター値を含んでいます。

以下の表には、完了コードの説明が記載されています。このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 164. QUERY OTMADESC コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0	コマンドは正常に完了しました	リソースに対する QUERY OTMADESC コマンドは正常に完了しました。
165	No Desc found meet any criteria	指定されたフィルターに基づいた記述子が検出されませんでした。
166	No entries found	宛先ルーティング記述子テーブルに項目が見つからなかったため、QUERY OTMADESC コマンドが失敗しました。

QUERY OTMADESC コマンドの例 1

以下に示すのは QUERY OTMADESC コマンドの例です。

QUERY OTMADESC コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QUERY OTMADESC NAME(OTMACL*) SHOW(TYPE,TMEMBER,SMEM)
```

TSO SPOC 出力:

```
DestName MbrName CC Type TMember SMem
OTMACL* IMSA 0 IMSCON HWS2 N
```

説明: NAME() キーワードで指定された名前の中にアスタリスクが指定されていますが、OPTION キーワードのデフォルト値は NOWILDCARD であり、OPTION(WILDCARD) が指定されていないため、QUERY コマンドは OTMACL* のみを表示し、OTMACL99 は表示しません。このコマンドは、宛先ルーティング記述子のテーブルにおいて、OTMACL* を独立した項目として処理します。

QUERY OTMADESC コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
QUERY OTMADESC NAME(OTMACL*) SHOW(ALL) OPTION(WILDCARD)
```

TSO SPOC 出力:

DestName	MbrName	CC	Type	TMember	TPipe	SMem
OTMACL99	IMSA	0	IMSCON	HWS1	HWS1TP01	N
OTMACL*	IMSA	0	IMSCON	HWS2		N

説明: QUERY コマンドは、OPTION(WILDCARD) キーワードが指定されているため、OTMACL99 と OTMACL* の両方を表示します。このコマンドは、OTMACL99 を含む名前のグループに対するマスクとして OTMACL* を処理し、宛先ルーティング記述子のテーブルにおいては、独立項目 OTMACL* として処理します。

QUERY OTMADESC コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
QUERY OTMADESC NAME(OTMD*) TYPE(IMSCON) SHOW(TMEMBER,SMEM,SYNTIMER) OPTION(WILDCARD)
```

TSO SPOC 出力:

DestName	MbrName	CC	Type	TMember	SMem	Syntimer
OTMD*	IMS1	0	IMSCON	HWS1	N	1000
OTMDSC01	IMS1	0	IMSCON	HWS1	N	3500
OTMDSC02	IMS1	0	IMSCON	HWS1	N	999999
OTMDSC03	IMS1	0	IMSCON	HWS1	N	1000
OTMDSC04	IMS1	0	IMSCON	SM01	Y	4000
OTMDSC08	IMS1	0	IMSCON	HWS1	N	

説明: 最後の記述子である OTMDSC08 は、この記述子が通常同期コールアウトには使用されないため、Syntimer 値を示しません。Syntimer は、同期コールアウト処理専用です。

QUERY OTMADESC コマンドの例 4: RMTIMSCON

次の例は、ALTPCB 出力をリモート IMS Connect 接続 ICON2B に経路指定するために使用されるすべての OTMA 宛先記述子を示しています。

TSO SPOC 入力:

```
QRY OTMADESC NAME(*) RMTIMSCON(ICON2B) SHOW(ALL) OPTION(WILDCARD)
```

TSO SPOC 出力、最初の画面:

```
PLEX1                      IMS Single Point of Control
Command ==>

----- Plex . . PLEX1 Route . . IMS1      Wait . . 5:00
Response for: QRY OTMADESC NAME(*) RMTIMSCON(ICON2B) SHOW(ALL)... More: >
DestName MbrName  CC Type      TMember      TPipe  SMem Adapter  Convert
DESC0001 IMS1      0 IMSCON     HWS1         TPIPE01 N
DESC0002 IMS1      0 IMSCON     HWS1         TPIPE02 Y
DESC0003 IMS1      0 IMSCON     HWS1         TPIPE03 N
DESC0004 IMS1      0 IMSCON     HWS1         TPIPE03 N
SM01000B IMS1      0 IMSCON     SM01         TPSM01 Y
T01R2BI2 IMS1      0 IMSCON     HWS1         TPIPE01 N
T02R2BI2 IMS1      0 IMSCON     HWS1         TPIPE02 N
```

TSO SPOC 出力、右にスクロールした 2 番目の画面:

```
PLEX1                      IMS Single Point of Control
Command ==>

----- Plex . . PLEX1 Route . . IMS1      Wait . . 5:00
Response for: QRY OTMADESC NAME(*) RMTIMSCON(ICON2B) SHOW(ALL)... More: <
DestName MbrName  Converter Syntimer RmtIMSCon RmtIMS  RmtTran Userid
```

DESC0001	IMS1	ICON2B	IMS2		
DESC0002	IMS1	ICON2B	IMS2		
DESC0003	IMS1	ICON2B	IMS2	APOL12	
DESC0004	IMS1	ICON2B	IMS2	APOL12	BILL
SM01000B	IMS1	ICON2B	IMS2		
T01R2B12	IMS1	ICON2B	IMS2		
T02R2B12	IMS1	ICON2B	IMS2		

説明: IMS1 に対して QUERY OTMADESC コマンドが発行されています。
NAME(*) および OPTION(WILDCARD) が指定されているため、コマンド処理ではすべての OTMA 宛先記述子を検索します。しかし、RMTIMSCON(ICON2B) も指定されているため、RMTIMSCON=ICON2B を含む記述子のみが表示されています。SHOW(ALL) が指定されているため、パラメーターが記述子内に指定されていない場合でも、すべての出力フィールドが表示されます。RmtIMS、RmtTran、および Userid 出力フィールドは、IMS 間 TCP/IP 接続にも関連しています。

QUERY OTMADESC コマンドの例 5: RMTTRAN

次の例は、処理のためにリモート IMS システムに経路指定される ALTPCB メッセージにトランザクション・コード APOL12 を設定するすべての OTMA 宛先記述子を表示しています。

TSO SPOC 入力:

```
QRY OTMADESC NAME(*) RMTTRAN(APOL12) SHOW(ALL) OPTION(WILDCARD)
```

TSO SPOC 出力、最初の画面:

```
PLEX1                      IMS Single Point of Control
Command ==>>>

----- Plex . . PLEX1 Route . . IMS1      Wait . . 5:00
Response for: QRY OTMADESC NAME(*) RMTTRAN(APOL12) SHOW(ALL) 0... More: >
DestName MbrName  CC Type  TMember      TPipe  SMem Adapter  Converte
DESC0003 IMS1      0 IMSCON  HWS1          TPIPE03 N
DESC0004 IMS1      0 IMSCON  HWS1          TPIPE03 N
```

TSO SPOC 出力、右にスクロールした 2 番目の画面:

```
PLEX1                      IMS Single Point of Control
Command ==>>>

----- Plex . . PLEX1 Route . . IMS1      Wait . . 5:00
Response for: QRY OTMADESC NAME(*) RMTTRAN(APOL12) SHOW(ALL) 0... More: <
DestName MbrName  Converter Syntimer RmtIMSCon RmtIMS  RmtTran  Userid
DESC0003 IMS1      ICON2B   IMS2      APOL12
DESC0004 IMS1      ICON2B   IMS2      APOL12  BILL
```

説明: IMS1 に対して QUERY OTMADESC コマンドが発行されています。
NAME(*) および OPTION(WILDCARD) が指定されているため、コマンド処理ではすべての OTMA 宛先記述子を検索します。しかし、RMTTRAN(APOL12) も指定されているため、RMTTRAN=APOL12 を含む記述子のみが表示されています。SHOW(ALL) が指定されているため、パラメーターが記述子内に指定されていない場合でも、すべての出力フィールドが表示されます。RmtIMSCon、RmtIMS、および Userid 出力フィールドは、リモート IMS システム上の ALTPCB メッセージの処理にも関連しています。

QUERY OTMADESC コマンドの例 6: リモート IMS システムへの接続の TPIPE

次の例は、ALTPCB メッセージを処理のためにリモート IMS システムに経路指定するのに使用される同一の TPIPE (TPSM01) を指定するすべての OTMA 宛先記述子を表示しています。

TSO SPOC 入力:

```
QRY OTMADESC NAME(*) TPIPE(TPSM01) SHOW(ALL) OPTION(WILDCARD)
```

TSO SPOC 出力、最初の画面:

```
PLEX1                               IMS Single Point of Control
Command ==>

----- Plex . . PLEX1 Route . . IMS1      Wait . . 5:00
Response for: QRY OTMADESC NAME(*) TPIPE(TPSM01) SHOW(ALL) OPT... More: >
DestName MbrName  CC Type      TMember      TPIPE      SMem Adapter  Converte
SM01000A IMS1      0 IMSCON     SM01          TPSM01     Y
SM01000B IMS1      0 IMSCON     SM01          TPSM01     Y
SM01000C IMS1      0 IMSCON     SM01          TPSM01     Y
SM01000D IMS1      0 IMSCON     SM01          TPSM01     Y
SM01000E IMS1      0 IMSCON     SM01          TPSM01     Y
SM01000F IMS1      0 IMSCON     SM01          TPSM01     Y
SM01000G IMS1      0 IMSCON     SM01          TPSM01     Y
SM01000H IMS1      0 IMSCON     SM01          TPSM01     Y
```


TSO SPOC 出力、右にスクロールした 2 番目の画面:

```
PLEX1                               IMS Single Point of Control
Command ==>

----- Plex . . PLEX1 Route . . IMS1      Wait . . 5:00
Response for: QRY OTMADESC NAME(*) TPIPE(TPSM01) SHOW(ALL) OPT... More: <
DestName MbrName  Converter Syntimer  RmtIMSCon RmtIMS  RmtTran  Userid
SM01000A IMS1          ICON2A    IMS2
SM01000B IMS1          ICON2B    IMS2
SM01000C IMS1          ICON2C    IMS2
SM01000D IMS1          ICON2D    IMS2
SM01000E IMS1          ICON2E    IMS2
SM01000F IMS1          ICON2F    IMS2
SM01000G IMS1          ICON2G    IMS2
SM01000H IMS1          ICON2H    IMS2
```

説明: IMS1 に対して QUERY OTMADESC コマンドが発行されています。NAME(*) および OPTION(WILDCARD) が指定されているため、コマンド処理ではすべての OTMA 宛先記述子を検索します。しかし、TPIPE(TPSM01) も指定されているため、TPIPE=TPSM01 を含む記述子のみが表示されています。SHOW(ALL) が指定されているため、パラメーターが記述子内に指定されていない場合でも、すべての出力フィールドが表示されます。TPIPE TPSM01 へのキューに入れられたメッセージが IMS Connect のローカル・インスタンスによって取り出され、処理のために、RmtIMSCon 下に識別されている接続を介して、RmtIMS 下に識別されているリモート IMS システムに送信されます。

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

QUERY OTMATI コマンド

QUERY OTMATI コマンドは、IMS OTMA メッセージ・ワークロードに関する情報を表示するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 545 ページの『キーワード』
- 548 ページの『使用上の注意』
- 548 ページの『出力フィールド』
- 550 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 551 ページの『例』

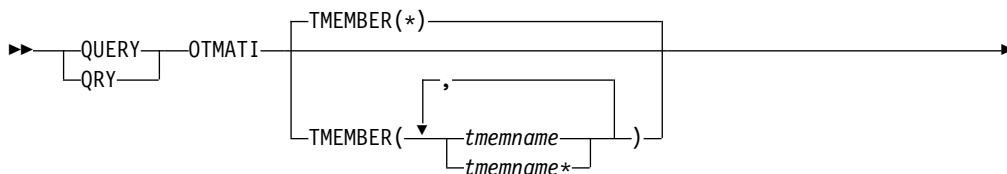
環境

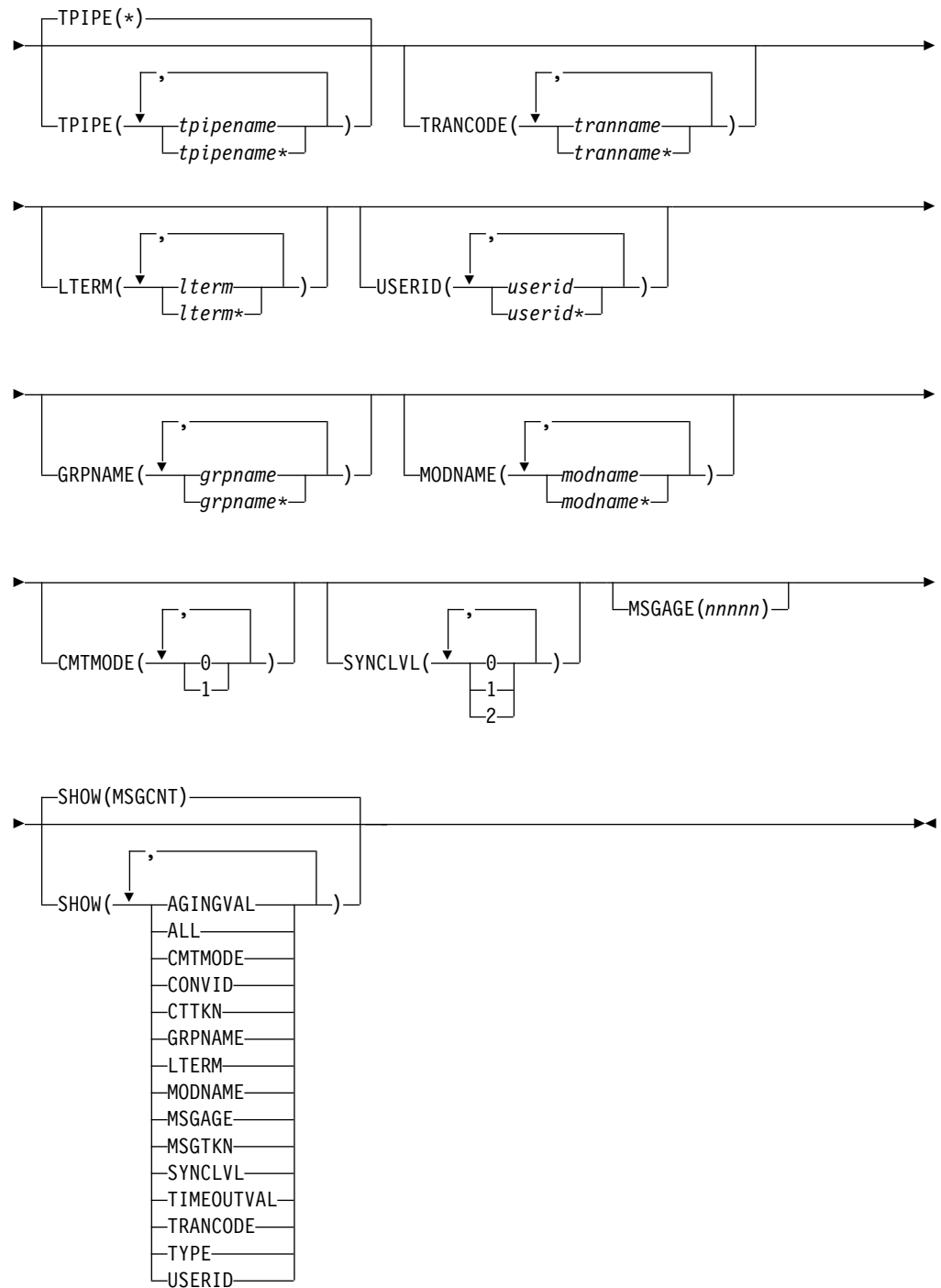
以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 165. QUERY OTMATI コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUERY OTMATI	X		X
CMTMODE	X		X
GRPNAME	X		X
LTERM	X		X
MODNAME	X		X
MSGAGE	X		X
SHOW	X		X
SYNCLVL	X		X
TMEMBER	X		X
TPIPE	X		X
TRANCODE	X		X
USERID	X		X

構文





キーワード

以下のキーワードは、QUERY OTMATI コマンドに有効です。

CMTMODE

表示されるワークロードのコミット・モードを指定します。0 を指定すると、コミット後送信 (CM0) モードであるすべてのワークロードが表示されます。このモードは、永続ソケットとトランザクション・ソケットの両方でサポートされ、同期レベル CONFIRM のみをサポートします。1 を指定すると、送信後コミット (CM1) モードであるすべてのワークロードが表示されます。このモード

は、永続ソケットとトランザクション・ソケットの両方でサポートされ、同期レベル NONE、CONFIRM、SYNCH をサポートします。

GRPNAME

メッセージのセキュリティー接頭部に含まれる RACF グループ ID を 1 文字から 8 文字で指定します。8 文字を超えるグループ名は、いずれもエラーとしてフラグが立てられます。

LTERM

OTMA メッセージ状態接頭部に含まれるオーバーライド LTERM 名を 1 文字から 8 文字で指定します。8 文字を超える LTERM 名は、いずれもエラーとしてフラグが立てられます。

MODNAME

OTMA メッセージ状態接頭部に含まれるメッセージ出力記述子名を 1 文字から 8 文字で指定します。この記述子は、スケジュールされるトランザクションまたはプログラムに関連付けられています。

MSGAGE

メッセージ (YTIB) がアクティブになってからのクロック時間の最小量を指定します。MSGAGE 値の範囲は 1 から 86400 です。この値は、24 時間の期間内の秒数を示します。この範囲外の値はいずれもエラーです。

TMEMBER

1 文字から 16 文字の OTMA ターゲット・メンバー名を指定します。メンバーは、IMS Connect などの OTMA のクライアントです。

TPIPE

OTMA トランザクションのパイプ名を 1 文字から 8 文字で指定します。

TRANCODE

スケジュールされるプログラムに関連付けられたトランザクション・コードを 1 文字から 8 文字で指定します。

SYNCLVL

同期レベルを指定します。同期レベルが NONE の場合、0 を指定します。これはクライアントからの確認応答を必要としません。同期レベルが CONFIRM の場合、1 を指定します。これはクライアントで出力メッセージの確認の配信を必要とします。同期レベルが SYNCH の場合、2 を指定します。これは z/OS リソース・リカバリー・サービス (RRS) を介して管理される同期点処理で、複数の参加者が関係する 2 フェーズ・コミット処理のためです。

USERID

メッセージのセキュリティー接頭部に含まれる RACF ユーザー ID を 1 文字から 8 文字で指定します。

SHOW

戻される出力フィールドを指定します。SHOW キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあります。

AGINGVAL

エージング値 (キャッシュに入れられているユーザー ID アクセサー環境エレメント (ACEE) をリフレッシュする必要がある頻度) を表示します。エ

ージング値は、メッセージ・エージング値かクライアント・エージング値のいずれかで、メッセージ制御接頭部またはメッセージ状態接頭部からのものです。

ALL

OTMA メッセージ・ワークロードに関するすべての情報を表示します。

CMTMODE

コミット・モードを表示します。0 は「コミット後送信」モードを示し、1 は「送信後コミット」モードを示します。

CONVID

メッセージに関連付けられている会話 ID があれば、それを表示します。

会話 ID とメッセージ経過時間を使用して、クライアントへ戻すことができなかったメッセージを識別できます。メッセージのメッセージ経過時間が異常に長い場合は、クライアント接続が終了していて、会話を続行できない可能性があります。会話を終了するには、会話 ID をメモして、それを /EXIT CONV コマンドで指定します。

CTTKN

トランザクションが、RRS を介して管理される同期点処理において複数の参加者が関係する 2 フェーズ・コミット状態である場合のコンテキスト・トークンを表示します。

GRPNAME

RACF グループ ID を表示します。

LTERM

オーバーライド LTERM 名を表示します。

MODNAME

オーバーライド MODNAME 名を表示します。

MSGAGE

メッセージ (TIB) がアクティブになってからの最小経過期間を秒単位で表示します。

MSGCNT

要求されるさまざまなパラメーター値に応じて、メッセージに関連付けられたアクティブな TIB の総数を表示します。

MSGTKN

関連子トークンを表示します。

TIMEOUTVAL

ACK が指定されていない CM1 のタイムアウト値を表示します。

TRANCODE

メッセージに関連付けられたトランザクション・コードを表示します。

TYPE

SMB トランザクション、CPIC トランザクション、IMS コマンド、メッセージ通信、リカバリー可能メッセージ、会話型トランザクション、または応答などのメッセージ・タイプを表示します。

SMB SMB トランザクション

CPC CPIC トランザクション

CMD IMS コマンド
APC メッセージ通信
RCV リカバリー可能トランザクション
CON 会話型トランザクション
EMH 高速機能トランザクション
RSP トランザクション応答

USERID

メッセージのセキュリティー・データ接頭部に含まれるユーザー ID を表示します。

SYNCLVL

同期レベル NONE、CONFIRM、または SYNCH を表示します。

使用上の注意

QUERY OTMATI コマンドは、アクティブ・システムと代替 XRF システムの両方で発行することができます。

QUERY OTMATI コマンドは、TSO SPOC および IBM Management Console for IMS and Db2[®] for z/OS (Management Console) のユーザー・インターフェースを含む OM API を介して指定することができます。このコマンドの出力は、TSO SPOC や Management Console にも表示されます。

QUERY OTMATI コマンドが SHOW キーワードの指定なしで発行された場合、ワークロードは、TMEMBER 名、TPIPE 名、アクティブ・メッセージの総数とともに、シスプレックス内の個々の IMS インスタンスに表示されます。SHOW 以外のキーワードが指定されると、これらのキーワードは、トータル・ワークロードのサブセットとして、キュー内のメッセージの総数を表示するためのフィルターとして使用されます。SHOW キーワードが指定されると、アクティブ・メッセージの総数は表示されず、代わりに個々のアクティブ・メッセージが、他の指定キーワードでフィルター処理されて同時に表示されます。ログ・レコードには書き込まれません。

出力フィールド

以下の表は、QUERY OTMATI の出力フィールドを示しています。表の各列は、以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

フォーマット設定済み出力の出力フィールド用列見出しが含まれます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 166. QUERY OTMATI コマンドの出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
AGINGVAL	AgingVal	AGINGVAL	RACF ACEE エージング値。値は以下のいずれかです。 <ul style="list-style-type: none"> 0 から 99999 までの数値 (秒数) 「>99999」(デフォルト) ブランク。これは、TIB がバックエンド・システムで処理されたことを示します。
CC	CC	N/A	出力行の完了コード。完了コードは、IMS が、指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示します。詳しくは、550 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』を参照してください。完了コードは常に戻されます。
CCTXT	CCText	N/A	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されません。
CONVID	ConvID	CONVID	メッセージが属する会話の 4 桁の ID。
CMTMODE	CmtMode	CMTMODE	コミット・モード。値は、次のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> 0 コミット・モード 0 1 コミット・モード 1 1* トランザクション・インスタンス・ブロック (TIB) はバックエンド・システムで処理され、常にコミット・モード 1 トランザクションです。
CTTKN	CtTkn	CTTKN	コンテキスト・トークン。
GRPNAME	GrpName	GRPNAME	RACF グループ名。
LTERM	Lterm	LTERM	オーバーライド LTERM 名。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。IMS ID は常に戻されます。
MODNAME	MODname	MODNAME	オーバーライド MODNAME。
MSGAGE	MsgAge	MSGAGE	システム内のメッセージの経過時間。値は、0 から 86400 までの数値です。86400 秒 (つまり、1 日) を超えてシステム内にある TIB の場合、「>86400」が表示されます。
MSGCNT	MsgCnt	MSGCNT	同じフィルター基準を使用する項目数。値は、0 から 99999 までの数値、または「>99999」(TIB の数が 5 桁を超えることを示す) です。
MSGTKN	MsgTkn	MSGTKN	クライアント・トークン。
MSGTYP	MsgType	TYPE	メッセージ・タイプ。

表 166. QUERY OTMATI コマンドの出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
SYNCLVL	SyncLvl	SYNCLVL	同期レベル。
TMEM	TMember	TMEM	TMEMBER 名。
TMOVAL	TimeoutVal	TIMEOUTVAL	ACK がない CM1 のタイムアウト値。値は、0 から 255 までの数値、またはブランク (TIB がバックエンド・システムで処理されたことを示す) です。
TPIPE	TPipe	TPIPE	Tpipe 名。
TRAN	Trancode	TRAN	トランザクション名。
UID	Userid	USERID	ユーザー ID。

戻りコード、理由コード、および完了コード

IMS 戻りコードと理由コードは、QUERY OTMATI コマンドによって OM に戻されます。QUERY OTMATI コマンドの結果として戻される可能性のある OM 戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 167. QUERY OTMATI コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、551 ページの表 168 を参照してください。
X'02000008'	X'00002000'	コマンドに無効な verb が含まれているか、verb に登録されているクライアントがありません。
X'02000008'	X'00002004'	コマンドに無効な 1 次キーワードが含まれているか、キーワードに登録されているクライアントがありません。
X'02000008'	X'00002028'	コマンドは無効なキーワードを含んでいます。
X'02000008'	X'0000202C'	コマンドは不明な定位置パラメーターを含んでいます。
X'02000008'	X'00002034'	コマンドは不完全なキーワード・パラメーターを含んでいます。
X'02000008'	X'00002038'	コマンドには必須パラメーターが欠落しています。
X'02000008'	X'0000203C'	コマンドは無効なキーワード・パラメーター値を含んでいます。

以下の表には、完了コードの説明が記載されています。このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 168. QUERY OTMATI コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0	コマンドは正常に完了しました	QUERY OTMATI コマンドは、リソースに対して正常に完了しました。
4	Command completed unsuccessfully	QUERY OTMATI コマンドが失敗しました。
166	コマンドは正常に完了しました	照会された TMEMBER には、現在はトランザクション・インスタンス・ブロック (YTIB) がありません。

例

以下に示すのは QUERY OTMATI コマンドの例です。

例: QUERY OTMATI

TSO SPOC 入力:

QUERY OTMATI

TSO SPOC 出力:

TMember	TPipe	MbrName	CC	MsgCnt
MQ	APPLA	IMSA	0	102
MQ	APPLB	IMSB	0	201
IMSB	WAS	APPLC	0	301

説明: パラメーターを指定しない QUERY OTMATI コマンドにより、現在実行中、応答を待機中、あるいはその両方のトランザクション・インスタンス・ブロック数 (YTIB) で表された、アクティブの OTMA 送信後コミット・メッセージ数が表示されています。TI は、OTMA のトランザクション・インスタンスを表します。

例: QUERY OTMATI MSGAGE(8)

TSO SPOC 入力:

QRY OTMATI MSGAGE(8)

TSO SPOC 出力:

TMember	TPipe	MbrName	CC	MsgCnt	MsgAge
HWS1	TPIPE1	IMSA	0	2	8
HWS2	TPIPE2	IMSA	0	3	9

説明: QUERY OTMATI コマンドが MSGAGE キーワードを指定して発行されると、表示は、経過期間が 8 秒あるいはそれより長いメッセージが含まれる例 #1 の表示のサブセットとなります。MsgAge 列には、そのサブセットのメッセージで見つかった最小経過期間が表示されます。例えば、出力では、TPIPE(TPIPE1) の 2 つのメッセージのサブセットには、経過時間が 8 秒またはそれより長いメッセージが含まれていることを示します。TPIPE (TPIPE2) の 3 つのメッセージには、経過時間が 8 秒またはそれより長いメッセージも含まれます。そのメッセージで検出される最も短い経過時間は 9 秒です。表示は TRANCODE や USERID などのキーワードを使用してさらにフィルターに掛けることができます。

例: *QUERY OTMATI MSGAGE(8) SHOW(MODNAME)*

TSO SPOC 入力:

```
QUERY OTMATI MSGAGE(8) SHOW(MODNAME)
```

TSO SPOC 出力:

TMember	TPipe	MbrName	CC	MsgAge	Userid
HWS1	TPIPE1	IMSA	0	10	SVL01
HWS1	TPIPE1	IMSA	0	8	SVL08
HWS2	TPIPE2	IMSA	0	9	IMS02
HWS2	TPIPE2	IMSA	0	16	IMS07
HWS2	TPIPE2	IMSA	0	11	IMS08

説明: QUERY OTMATI コマンドが MSGAGE キーワードと MODNAME を指定した SHOW キーワードを使用して発行されると、表示は例 #2 の表示を拡張しますが MsgCnt 列は含まれません。例 #2 のメッセージをグループ化せずに、個々のメッセージは別々に表示されます。

例: *QUERY OTMATI TMEMBER(*) TPIPE(*) SHOW(ALL)*

次の例では、OTMA に接続した各 OTMA クライアントのすべての T パイプの処理メッセージに関連付けられているすべての属性と値を表示するために、*TMEMBER(*) TPIPE(*) SHOW(ALL)* が指定されています。この事例では HWS1 が唯一の OTMA クライアントであり、このクライアントは OTMA 内に T パイプ 9999 という唯一の T パイプを持っています。2 つの異なるトランザクション CDEBTRN4 および APOL11 について、3 つのメッセージが T パイプ 9999 のキューに入っています。トランザクション CEDBTRN4 は会話型トランザクションであり、CEDBTRN4 の 2 つのインスタンスに関するメッセージは、それらの会話 ID (ConvID) である 0002 および 0001 によって差別化されています。

TSO SPOC 入力:

```
QUERY OTMATI TMEMBER(*) TPIPE(*) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

TMember	TPipe	MbrName	CC	MsgAge	Trancode	CmtMode	SyncLvl	MsgType
HWS1	9999	IMS1	0	25	CDEBTRN4	1	0	SMB,CON
HWS1	9999	IMS1	0	82	APOL11	1	1	SMB,RSP
HWS1	9999	IMS1	0	58	CDEBTRN4	1	1	SMB,CON

GrpName	Userid	Lterm	MODname	MsgTkn	TimeoutVal	AgingVal
SYS1	USRT003			0000000000000000	120	>99999
SYS1	USRT003			0000000000000000	120	>99999
SYS1	USRT003			0000000000000000	120	>99999

CtTkn	ConvID
0000000000000000	0002
0000000000000000	
0000000000000000	0001

例: *QUERY OTMATI TMEMBER(*) TPIPE(*) SHOW(CONVID)*

次の例では、OTMA に接続した各 tmember (OTMA クライアント) のすべての T パイプに対するメッセージに関連付けられている会話 ID があれば、それを表示するために、*TMEMBER(*) TPIPE(*) SHOW(CONVID)* が指定されています。この事例では HWS1 が唯一の OTMA クライアントであり、このクライアントは OTMA 内に T パイプ 9999 という唯一の T パイプを持っています。3 つのメッセージが

T パイプ 9999 のキューに入っています。会話 ID 0002 および 0001 で示されているとおり、最初と最後のメッセージのみが会話トランザクションに属しています。


TSO SPOC 入力:

```
QUERY OTMATI TMEMBER(*) TPIPE(*) SHOW(CONVID)
```


TSO SPOC 出力:

TMember	TPipe	MbrName	CC ConvID
HWS1	9999	IMS1	0 0002
HWS1	9999	IMS1	0
HWS1	9999	IMS1	0 0001

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

QUERY PGM コマンド

QUERY PGM コマンドは、プログラム・リソースに関する情報を照会するために使用します。

プログラム・リソースは、DB/TM 環境の制御下で実行されるアプリケーション・プログラム、ならびに DBCTL を介してデータベースにアクセスするアプリケーション・プログラムのアプリケーション・プログラム要件を定義します。

サブセクション:

- 『環境』
- 554 ページの『構文』
- 554 ページの『キーワード』
- 560 ページの『使用上の注意』
- 560 ページの『同等の IMS タイプ 1 コマンド』
- 561 ページの『出力フィールド』
- 572 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 574 ページの『例』

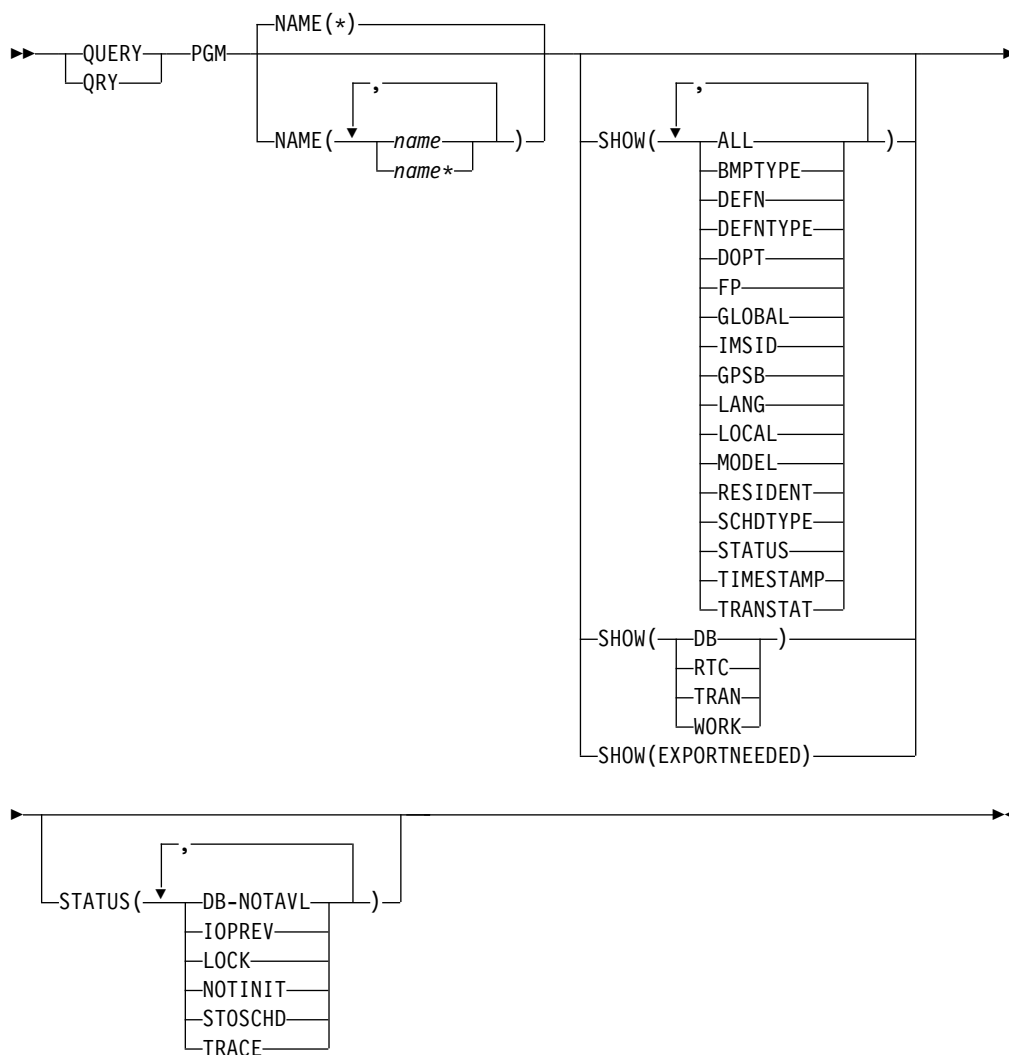
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 169. QUERY PGM コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUERY PGM	X	X	X
NAME	X	X	X
SHOW	X	X	X
STATUS	X	X	X

構文



キーワード

以下のキーワードは、`QUERY PGM` コマンドに有効です。

NAME

プログラムの名前 (1 から 8 文字) を指定します。名前にはワイルドカードを指定することができます。名前は反復可能なパラメーターです。デフォルトは `NAME(*)` で、これはすべてのプログラム・リソースを戻します。

SHOW

戻されるプログラム出力フィールドを指定します。プログラム名は、出力を作成した IMS の名前、領域タイプ、および完了コードとともに、常に戻されます。`SHOW` キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあります。

ALL

プログラム自体に関するすべての情報を戻します。プログラムに関連したリソースについての情報を戻すために、他の SHOW キーワードを指定することもできます。

制約事項: SHOW(EXPORTNEEDED) を指定した場合に戻される ExportNeeded 列は、SHOW(ALL) では戻されません。

BMPTYPE

BMP タイプのオプション。プログラムが BMP タイプ領域で実行されるかどうかを指定します。BMP タイプ領域は、BMP 領域または JBP 領域です。

DB2 ストアード・プロシージャ、WebSphere® Application Server の下で実行されるプログラム、および ODBA インターフェースの他のユーザーのそれぞれによってスケジュールされる PSB は、BMPTYPE Y または N で定義できます。

DB このプログラムに関連する PSB によって参照されるデータベース。PSB 意図リストが常駐していない場合、ACBLIB を検索してデータベース情報を取得します。

QRY PGM SHOW(DB) コマンドでは、動的 (DOPT) PSB がインテントを持つデータベース名は表示されません。

注: このフィルターは他の SHOW フィルターと共に指定することはできません。SHOW(DB) を単独で指定する必要があります。

DEFN

リソース定義を戻すように指定します。

戻されるプログラム属性には、

BMPTYPE、DOPT、FP、GPSB、LANG、RESIDENT

SCHDTYPE、TRANSTAT、リポジトリ内の作成および更新のタイム・スタンプ、および IMS ランタイムの作成、更新、インポート、およびアクセスのタイム・スタンプがあります。

SHOW(DEFN) でその他の SHOW フィルターが指定されない場合、または IMSID フィルターが指定されている場合、リポジトリでグローバルに定義された定義属性および IMS システム内でローカルに定義された定義属性を含む、すべての定義属性が戻されます。IMS システムのランタイム・リソース定義は、コマンドを受信する各 IMS によって戻されます。

IMSRSC リポジトリ内の保管済みリソース定義は、コマンド・マスター IMS がそのリポジトリを使用できる場合、コマンド・マスター IMS によって戻されます。

コマンド・マスター IMS は、リポジトリから取得した汎用保管済みリソース定義ごとに応答行を戻します。それぞれの応答行には、汎用リソース定義の属性が表示されます。SHOW(DEFN) を IMSID フィルターなしで指定し、すべての IMS システムに定義されている属性値が同一の場合、汎用定義の応答行のみが戻されます。保管済みリソース定義が定義されている IMS システムの IMS ID は戻されません。IMS システムの保管済みリソース定義に、汎用保管済みリソース定義と異なる属性値が 1 つ以上含まれている場合は、属性値が異なる IMS ごとに追加の応答行が戻されます。

SHOW(DEFN,LOCAL) が指定されている場合、コマンドを受信した各 IMS により、IMS システムのランタイム・リソース定義が戻されます。

SHOW(DEFN,GLOBAL) が指定されている場合、コマンド・マスター IMS により、リポジトリの保管済みリソース定義が戻されます。

SHOW(DEFN,GLOBAL) は、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合のみ有効です。

SHOW(DEFN) にその他のパラメーターが指定されている場合、要求された定義属性のみが戻されます。例えば SHOW(DEFN,TIMESTAMP) が指定されている場合、タイム・スタンプのみが戻されます。

制約事項:

- SHOW(DEFN) は、DEFNTYPE、MODEL、STATUS、WORK、DB、RTC、または TRAN と一緒に指定することはできません。
- QRY PGM SHOW(ALL) コマンドで戻される LclStat 列、LModelName 列、LModelType 列、および LDefnType 列は、SHOW(DEFN) では戻されません。
- SHOW(DEFN) を指定した場合に戻される Repo 列および IMSid 列は、SHOW(ALL) では戻されません。
- リポジトリからプログラム情報を照会する場合、SHOW(DEFN) フィルターを STATUS フィルターと一緒に使用することはサポートされません。STATUS のランタイム・フィルターは、SHOW(DEFN)、SHOW(DEFN,GLOBAL)、SHOW(DEFN,LOCAL)、SHOW(DEFN,IMSID)、SHOW(DEFN,IMSID,GLOBAL)、または SHOW(DEFN,IMSID,LOCAL) との併用は無効です。

SHOW(DEFN,IMSID) を指定すると、IMS の保管済みリソース定義が汎用リソース定義と同一であるかどうかにかかわらず、汎用保管済みリソース定義に対して応答行が返され、リポジトリにリソースが定義されている IMS ごとに追加の応答行が戻されます。

DEFNTYPE

記述子またはリソースの定義に使用された定義タイプ。

DOPT

動的オプション。

EXPORTNEEDED

NAME パラメーターに一致し、作成されたか最後に更新されて以降 IMSRSC リポジトリにエクスポートされたことがないプログラム・リソースだけを QUERY コマンドで戻すよう指定します。

NAME キーワードが省略されたか NAME(*) が指定された場合、リポジトリにエクスポートする必要があるプログラムの名前だけが戻されます。

NAME キーワードで特定の名前が指定されたか NAME(*) 以外の総称名が指定された場合、コマンドで指定されたプログラム名ごとに 1 行ずつ、応答行が戻されます。指定されたプログラムをリポジトリにエクスポートする必要がない場合は、ExportNeeded 列に N が戻されます。

SHOW(EXPORTNEEDED) は、他のいかなる SHOW パラメーターや他のキーワードとも一緒に指定することはできず、IMS で IMSRSC リポジトリーが使用可能になっている場合にのみ有効です。

QUERY PGM SHOW(EXPORTNEEDED) コマンドは、XRF 代替システムでは無効です。

ヒント: IMSRSC リポジトリーにエクスポートされたことがないリソースおよび記述子の場合、EXPORT DEFN TARGET(REPO) OPTION (CHANGESONLY) コマンドを発行して、リソース定義および記述子定義をリポジトリーに書き込み、次の IMS のコールド・スタートで使用できるようにすることができます。

FP 高速機能オプション。

GLOBAL

リポジトリーの保管済みリソース定義を戻すように指定します。SHOW(GLOBAL,DEFN) が指定される場合、コマンド・マスター IMS により、リポジトリーのグローバル・リソース定義が戻されます。SHOW(GLOBAL,DEFN) は、コマンド・マスター IMS がリポジトリーを使用できる場合のみ有効です。

GPSB

生成 PSB オプション。

IMSID

指定された名前をリソース・リストに含む IMS システムの IMS ID を戻すように指定します。SHOW(IMSID) は、コマンド・マスター IMS によってのみ処理され、コマンド・マスター IMS がリポジトリーを使用できる場合にのみ有効です。

SHOW(IMSID) が DEFN フィルターとともに指定されている場合、保管済みリソース定義に加えて、定義済みのリソースが存在する各 IMS に、別個の行が戻されます。

SHOW(IMSID) が DEFN フィルターなしで指定されている場合、リソース名とともに定義済みのリソースが存在する各 IMS に別個の行が戻されません。リソース定義は戻されません。

SHOW(IMSID) は、DEFN および GLOBAL 以外の SHOW フィルターとともに指定することはできません。SHOW(IMSID,GLOBAL) が指定されている場合、GLOBAL は無視されます。つまり、SHOW(IMSID,GLOBAL) は SHOW(IMSID) として扱われます。SHOW(DEFN,IMSID,LOCAL) は SHOW(DEFN,LOCAL) として扱われます。

LANG

アプリケーション・プログラムの言語インターフェース。言語インターフェースは、GPSB(Y) として定義されているプログラム、および DOPT(Y) LANG(JAVA) として定義されているプログラムの場合にのみ表示されません。

LOCAL

IMS システムのランタイム・リソース定義を戻すように指定します。

SHOW(DEFN,LOCAL) は、コマンドを処理する IMS システムからローカルの定義属性のみを戻します。

MODEL

このリソースを作成するために使用されたモデル名とモデル・タイプ。記述子またはリソースが、1 つ以上の定義済み属性を使用して作成され、モデルが指定されていない場合、モデル名とモデル・タイプはデフォルト記述子です。IMS 定義のリソースおよび記述子、ならびに DFSINSX0 出口によって作成されたキュー専用トランザクションの場合、モデル名とモデル・タイプは空白です。LIKE キーワードなしで指定された CREATE コマンドは、デフォルト記述子をモデルとして使用して記述子またはリソースを作成します。デフォルト記述子は、IMS 記述子 DFSDSPG1 またはユーザー定義のいずれかです。LIKE キーワードが指定された CREATE コマンドは、モデルを使用して記述子またはリソースを作成します。記述子またはリソースは、すべてモデルと同じ属性を使用して作成されます。属性は、モデル属性をオーバーライドする CREATE コマンドにより明示的に設定されます。モデル・タイプは、記述子 (DESC) またはリソース (RSC) のいずれかです。モデル名およびモデル・タイプは参照用のみです。属性が CREATE または UPDATE コマンドの値によってオーバーライドされた場合、あるいはモデルが後で更新された場合、記述子またはリソースの属性はモデルと一致しないことがあります。モデル名とモデル・タイプを使用すると、同じモデルを使って作成されたリソースを識別できます。リソースのモデル名およびモデル・タイプはエクスポートおよびインポートされます。IMPORT コマンドは、リソースを作成する際にモデル名とモデル・タイプを使用しません。

RESIDENT

常駐オプション。これは、PSB がローカル・ストレージ内でアクセスされるかどうかを示します。常駐オプションのローカル・ランタイム値が表示されます。ランタイム値と異なる場合には、常駐オプション定義も表示されません。

RESIDENT(Y) オプションは、次の IMS の再始動時に有効になります。ただし、プログラム仕様ブロック (PSB) の ACB が ACBLIB または IMS カタログにないなどのエラーが検出された場合、あるいはこの IMS で実行中の緊急時再始動の開始点であるチェックポイントの後でプログラムが RESIDENT(Y) として作成または更新された場合を除きます。

RTC

このプログラムに関連する宛先コード記述子。

注: このフィルターは他の SHOW フィルターと共に指定することはできません。SHOW(RTC) を単独で指定する必要があります。

SCHDTYPE

スケジューリング・タイプ。これは、このアプリケーション・プログラムを同時に複数のメッセージ領域またはバッチ・メッセージ領域にスケジュールできるかどうかを指定します。

STATUS

プログラム状況。戻される可能性があるプログラム状況についての説明は、「出力フィールド」表の下の STATUS キーワードを参照してください。

TIMESTAMP

作成時間 (TIMECREATE)、最終更新時間 (TIMEUPDATE)、最終アクセス時間 (TIMEACCESS)、および最終インポート時間 (TIMEIMPORT) のタイム・スタンプが戻されます。時刻は現地時間で、YYYY.JJJ HH:MM:SS.TH の形式で戻されます。ここで、

- YYYY は年です。
- JJJ はユリウス日 (001 から 365) です。
- HH は時 (01 から 24) です。
- MM は分 (00 から 59) です。
- SS は秒 (00 から 59) です。
- TH は 10 分の 1 秒および 100 分の 1 秒 (00 から 99) です。

TRAN

このプログラムに関連するトランザクション。

注: このフィルターは他の SHOW フィルターと共に指定することはできません。 SHOW(TRAN) を単独で指定する必要があります。

TRANSTAT

トランザクション・レベル統計オプション。

WORK

NAME パラメーターで指定されたプログラムおよびそれに関連したリソースに対して進行中の作業。DELETE、IMPORT、または UPDATE コマンドの前に QRY PGM SHOW(WORK) を発行することで、指定されたプログラムおよびそれに関連したリソースに対して進行中の作業があるかどうかを確認できます。進行中の作業があると、後続の DELETE、IMPORT、または UPDATE コマンドが失敗する原因になることがあります。QRY PGM SHOW(WORK) コマンドは、指定されたプログラムに対する作業の状況を戻します。指定されたリソースに対して進行中の作業がない場合、作業状況はブランクとして応答行が戻されます。

注:

1. SHOW(WORK) で NAME(*) を指定すると、コマンドの処理時にパフォーマンスに影響を与えることがあります。
2. このフィルターは他の SHOW フィルターと共に指定することはできません。 SHOW(WORK) を単独で指定する必要があります。
3. QRY PGM SHOW(WORK) コマンドは、XRF 代替では無効です。

STATUS()

指定されたプログラム状況の少なくとも 1 つを持つプログラムを表示用に選択します。これを選択すると、プログラム状況による追加のフィルタリングが可能になります。 SHOW(STATUS) が指定されなかった場合でも、プログラム状況は出力として戻されます。

DB-NOTAVL

このプログラムによって使用されるデータベースは、定義されていないか、許可されていないかのいずれかのため、利用不可です。

IOPREV

BMP、IFP、または JBP プログラムは、入出力防止が完了していないため、スケジューリングを完了することができません。データ・セットに対するこれ以降の入出力要求は使用禁止されます。

LOCK

ロックされているプログラムに関する情報を戻すように STATUS() フィルターを設定します。

NOTINIT

初期化されていないために使用できないプログラムに関する情報を戻すように STATUS() フィルターを設定します。

STOSCHD

プログラムのスケジューリングが停止されているプログラムに関する情報を戻すように STATUS() フィルターを設定します。

TRACE

トレース中のプログラムに関する情報を戻すように STATUS() フィルターを設定します。

使用上の注意

プログラム・リソースとトランザクションの組み合わせにより、アプリケーション・プログラムのスケジューリング要件およびリソース要件を定義します。プログラム・リソースは、メッセージ処理領域、高速機能メッセージ・ドリブン・プログラム領域、バッチ処理領域、バッチ・メッセージ処理領域、または CCTL スレッドで稼働するアプリケーション・プログラムについて記述します。

このコマンドは、Operations Manager API を介してのみ出すことができます。このコマンドは DB/DC、DBCTL および DCCTL システムに適用されます。

このコマンドは、XRF 代替システムで使用できます。

QUERY PGM コマンドの出力には、PSB のサイズが表示されます。このサイズを使用して、オンライン IMS システム内で使用されている PSB プールに対する PSB の影響を判断できます。これは、ACB 保守ユーティリティの出力を使用して PSB プール・サイズ要件を計算する代わりになります。

リソース定義に関する情報を表示するには、SHOW(DEFN) を指定します。リソースが定義されている IMS システムを判別し、また各 IMS システムの属性またはリソース定義を知るには、SHOW(DEFN,IMSID) を指定します。リソースが定義されている IMS システムを判別するには、SHOW(IMSID) を指定します。

同等の IMS タイプ 1 コマンド

以下の表は、各種の QUERY PGM コマンドと、類似の機能を実行するタイプ 1 IMS コマンドを示しています。

表 170. QUERY PGM コマンドと同等のタイプ 1 コマンド

QUERY PGM コマンド	類似の IMS タイプ 1 コマンド
QUERY PGM SHOW(ALL)	/DISPLAY PROGRAM, /DISPLAY STATUS PROGRAM

表 170. QUERY PGM コマンドと同等のタイプ 1 コマンド (続き)

QUERY PGM コマンド	類似の IMS タイプ 1 コマンド
QUERY PGM SHOW(DB)	/DISPLAY PSB
QUERY PGM SHOW(RTC)	/DISPLAY PSB
QUERY PGM SHOW(TRAN)	/DISPLAY PROGRAM
QUERY PGM SHOW(WORK)	/DISPLAY MODIFY ALL

出力フィールド

以下の表には、QUERY PGM 出力フィールドが記載されています。表の各列は、以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

有効範囲

出力フィールドの有効範囲を識別します。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 171. QUERY PGM コマンド出力フィールド

ショー ト・ラベ ル	長ラベル	キーワード	有効範 囲	意味
BMPT	LBmpType	BMPTYPE, DEFN	LCL	<p>BMP タイプ。出力は、ローカル IMS から戻されま す。</p> <p>N プログラムは BMP タイプ領域で実行されません。 プログラムは、IMS TM MPP 領域、JMP 領域、 または IFP 領域で実行するか、あるいは ODBA インターフェースまたは DRA インターフェースを 使用できます。この指定は、IMS TM MPP 領域、 JMP 領域、および IFP 領域で実行されるプログラ ム、あるいは DBCTL を使用する CICS プログラ ムおよび DRA インターフェースの他のユーザーに よってスケジュールされる PSB に対して使用しま す。これはデフォルトです。</p> <p>Y プログラムは BMP タイプ領域で実行されます。 IMS BMP 領域または JBP 領域で実行される可能 性があります。関連のトランザクションには、ゼロ の通常優先順位値および限界優先順位値が割り当て られます。</p>
CC	CC	N/A	LCL	完了コード。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	LCL	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コー ド・テキスト。
DB	DBName	DB	LCL	プログラムによって参照されるデータベース。

表 171. QUERY PGM コマンド出力フィールド (続き)

ショー ト・ラベ ル	長ラベル	キーワード	有効範 囲	意味
DFNT	LDefnType	DEFNTYPE	LCL	定義タイプ。次のうちのいずれか 1 つが可能です。 CREATE CREATE コマンドにより定義されます。 DDLCRE DDL CREATE PROGRAMVIEW コマンドにより 定義されます。 DFSINSX0 ユーザー出口 DFSINSX0 により定義されます。エ クスポート・オプションが設定された場合にのみ、 プログラムをエクスポートすることができます。 IMPORT IMPORT コマンドにより定義されます。 IMS IMS により定義されます。DBF#FPU0 は、IMS に よって作成された高速機能ユーティリティー用のプ ログラムです。 MODBLKS MODBLKS データ・セット内のシステム定義によ り定義されます。MODBLKS 定義のプログラムの 属性を変更するために UPDATE PGM コマンドが 発行された場合、定義タイプは MODBLKS から UPDATE に変更されます。 PGMCREAT プログラム作成ユーザー出口により定義されます。 エクスポート・オプションが設定された場合に、プ ログラムをエクスポートすることができます。 UPDATE MODBLKS データ・セット内のシステム定義によ り定義されますが、UPDATE コマンドによって変 更されて動的リソースに入れられます。

表 171. QUERY PGM コマンド出力フィールド (続き)

ショー ト・ラベ ル	長ラベル	キーワード	有効範 囲	意味
DOPT	LDOPT	DOPT, DEFN	LCL	<p>動的オプションであるか (Y) ないか (N)。出力は、ローカル IMS から戻されます。</p> <p>N このアプリケーション・プログラムに関連する PSB は、動的に位置指定されません。PSB の制御ブロックは ACBLIB または IMS カタログ内に存在する必要があり、そうでないとプログラムが NOTINIT-xx-reason 状況に設定され、スケジュールを設定できません。</p> <p>Y このプログラムに関連する PSB は、動的に位置指定されます。この PSB に関連するプログラムがスケジュールされるたびに、PSB の最新のコピーがロードされます。プログラムが終了すると、この PSB は PSB プールから削除されます。</p> <p>PSB がトランザクションの処理に必要なまで、ACBLIB 内、または (ACB の IMS 管理が使用可能な場合) IMS カタログ内に PSB の ACB が存在している必要はありません。PSB の新しいバージョンは、ACBLIB または IMS カタログにいつでも定義および追加できます。PSB の次回スケジュール時に、IMS は ACB の新しいバージョンをロードします。</p> <p>PSB が参照する DBD の制御ブロックが ACBLIB または IMS カタログに存在しない場合は、DOPT PSB をスケジュールに入れることはできません。</p>
EXPN	ExportNeeded	EXPORTNEEDED	LCL	<p>プログラムが IMSRSC リポジトリにエクスポートされたかどうかを示します。値は Y または N のどちらかです。</p>
FP	LFP	FP, DEFN	LCL	<p>高速機能専用プログラムであるか (E) ないか (N)。出力は、ローカル IMS から戻されます。</p> <p>E プログラムは、高速機能専用アプリケーション・プログラムです。</p> <p>N プログラムは、高速機能アプリケーション・プログラムではありません。</p>

表 171. QUERY PGM コマンド出力フィールド (続き)

ショー ト・ラベ ル	長ラベル	キーワード	有効範 囲	意味
GPSB	LGPSB	GPSB, DEFN	LCL	<p>IMS によって生成される生成 PSB であるか (Y) ないか (N)。出力は、ローカル IMS から戻されます。</p> <p>N プログラムに関連する PSB は IMS によって生成されません。PSB の制御ブロックは ACBLIB または (ACB の IMS 管理が使用可能な場合) IMS カタログ内に存在する必要がある、そうでないとプログラムが NOTINIT-xx-reason 状況に設定され、スケジュールを設定できません。</p> <p>Y プログラムに関連付けられた PSB とアプリケーション制御ブロック (ACB) は、IMS によって生成されます。すべての環境のスケジューリング・プロセスでは、入出力 PCB と変更可能な代替 PCB を含んでいる PSB が生成されます。</p> <p>PSB と ACB を生成したり、PSB を定義する DDL をサブミットしたりする必要はありません。PSB の ACB は、ACBLIB または (ACB の IMS 管理が使用可能な場合) IMS カタログからロードされません。このため、ACBLIB または IMS カタログから ACB を取得するための入出力は不要です。</p> <p>生成された PSB には、IOPCBbbb という名前の入出力 PCB と、TPPCB1bb という名前の変更可能な代替 PCB が含まれています。変更可能な代替 PCB により、アプリケーションは CHNG 呼び出しを用いて出力の宛先を変更し、出力を入力宛先以外の宛先に送ることができます。</p>
IMSID	IMSid	IMSID	GBL	<p>定義されたリソースを持つ IMSID をリポジトリから返します。</p>
LANG	LPgmLang	LANG, DEFN	LCL	<p>言語インターフェース。出力は、ローカル IMS から戻されます。</p> <p>ASM/CBL Assembler または COBOL</p> <p>JAVA Java™ (Java 従属領域でのみ実行できます)</p> <p>PASCAL PASCAL</p> <p>PLI PL/I</p>

表 171. QUERY PGM コマンド出力フィールド (続き)

ショー ト・ラベ ル	長ラベル	キーワード	有効範 囲	意味
LRSDNT	LRsdnt	ALL, RESIDENT	LCL	<p>常駐オプションのローカル・ランタイム値。プログラム PSB がローカル・ストレージに常駐するかどうかを示します。</p> <p>N 指定されたプログラム・リソースに関連付けられた PSB は、ストレージに常駐にされません。プログラムは常駐として定義されているが IMS の再始動時にエラーが発生した場合は、N が設定されます。PSB はスケジュールされた時間にロードされます。</p> <p>Y 指定されたプログラム・リソースに関連付けられた PSB は、次回の IMS の再始動時にストレージに常駐にされます。次回の IMS の再始動時に、IMS は PSB をロードし、それを初期化します。常駐プログラムはローカル・ストレージからアクセスされるため、ACB を取得するための入出力が不要になります。</p>

表 171. QUERY PGM コマンド出力フィールド (続き)

ショー ト・ラベ ル	長ラベル	キーワード	有効範 囲	意味
LSTT	LcLStat	STATUS	LCL	ローカル・アプリケーション・プログラム状況。
DB-NOTAVL				
このプログラムによって使用されるデータベースは、定義されていないか、許可されていないかのいずれかのため、利用不可です。				
IOPREV				
入出力防止が完了していないため、GSAM を含んでいる BMP プログラムはスケジューリングを完了できません。データ・セットに対するこれ以降の入出力要求は使用禁止されます。				
LOCK プログラムはロックされています。				
NOTINIT-xx-reason				
初期化されていないために使用できないプログラム。NOTINIT は、NOTINIT-xx-reason 形式で表示されます。				
xx は、この理由コードが設定された 1 つのモジュール内の固有の位置を示すコードで、これは診断のために IBM で使用されます。推奨アクションが IBM に連絡することである場合、xx 値は、このリソースが不良としてマークされた正確な場所を IBM が特定するのに役立ちます。DFSPDIR MACRO は、プログラム不良理由コード (フィールド PDIRBADR) に設定される可能性がある各理由コードを定義し、それを設定するモジュールを識別します。				
NOTINIT-00 は、理由が不明であることを示します。アクション: 1。reason は、最大 13 文字の短縮テキスト形式で、理由コード xx を説明します。				
STOSCHD				
プログラムのスケジューリングが停止されています。				
TRACE				
プログラムはトレース中です。				
MBR	MbrName	N/A	LCL	出力行を作成する IMSplex メンバー。
MDLN	LModelName	MODEL	LCL	モデル名。このリソースを作成するためのモデルとして使用されたリソースの名前。DFSDSPG1 は、プログラム用の IMS 記述子名です。
MDLT	LModelType	MODEL	LCL	モデル・タイプ、RSC または DESC。RSC は、別のリソースをモデルとして使用してリソースが作成されたことを意味します。DESC は、記述子をモデルとして使用してリソースが作成されたことを意味します。
PGM	PgmName	PGM	LCL	データベースを参照するプログラム名。

表 171. QUERY PGM コマンド出力フィールド (続き)

ショー ト・ラベ ル	長ラベル	キーワード	有効範 囲	意味
RBMPPT	BmpType	BMPTYPE, DEFN	GBL	BMP タイプ。出力は、リポジトリから戻されます。
RDOPT	DOPT	DOPT, DEFN	GBL	動的オプションであるか (Y) ないか (N)。出力は、リポジトリから戻されます。
REPO	Repo	DEFN	GBL	その行に保管済みリソース定義が表示されているかどうかを示します。 Y リポジトリ定義を示します。 (ブランク) ローカル定義を示します。
RFP	FP	FP, DEFN	GBL	高速機能専用プログラムであるか (E) ないか (N)。出力は、リポジトリから戻されます。
RGNT	LRgnType	N/A	LCL	プログラムを実行できる領域タイプ。一部のプログラムは、追加の領域タイプでも実行できます。例えば、プログラム・タイプ MSG で定義されたプログラムは、特定の条件下では BMP 内で実行できます。 出力は、ローカル IMS から戻されます。 BMP は、バッチ・メッセージ処理領域を示します。 FPU は、高速機能ユーティリティ領域を示します。 IFP は、高速機能メッセージ処理領域を示します。 JBP は、Java バッチ・メッセージ処理領域を示します。 JMP は、Java メッセージ処理領域を示します。 MPP は、MPP 処理領域を示します。
RGPSB	GPSB	GPSB, DEFN	GBL	IMS によって生成される生成 PSB であるか (Y) ないか (N)。出力は、リポジトリから戻されます。
RLANG	PgmLang	LANG, DEFN	GBL	言語インターフェース。出力は、リポジトリから戻されます。
RRSDNT	Rsdnt	DEFN, RESIDENT	GBL	リポジトリからの常駐値。
RRGNT	RgnType	N/A	GBL	プログラムを実行できる領域タイプ。出力は、リポジトリから戻されます。
RSCHD	SchdType	SCHDTYPE, DEFN	GBL	スケジュール・タイプ。出力は、リポジトリから戻されます。
RSDNT	LDRsdnt	ALL, RESIDENT	LCL	次の IMS 再始動時に有効になる、ローカル据え置き常駐値。プログラムが常駐として定義されていたが、PSB の ACB が存在しないために IMS の再始動時に常駐できなかった場合、値 Y が表示されます。このプログラムは、次の IMS の再始動時に ACBLIB または IMS カタログ内に PSB の ACB がある場合のみ、常駐になることができます。
RTC	Rtcode	RTC	LCL	プログラムに関連する宛先コード。

表 171. QUERY PGM コマンド出力フィールド (続き)

ショー ト・ラベ ル	長ラベル	キーワード	有効範 囲	意味
RTLS	TranStat	TRANSTAT, DEFN	GBL	トランザクション・レベル統計がログに記録されるか (Y) されないか (N)。出力は、リポジトリから戻されます。
RTMCR	TimeCreate	DEFN	GBL	リポジトリでの作成時刻。これは、リポジトリ内で最初にリソースが作成された時刻です。
RTMUP	TimeUpdate	DEFN	GBL	リポジトリでの更新時刻。これは、リポジトリ内で最後にリソースが更新された時刻です。
SCHD	LSchdType	SCHDTYPE, DEFN	LCL	スケジュール・タイプ。出力は、ローカル IMS から戻されます。
<p>PARALLEL アプリケーション・プログラムは、同時に複数のメッセージ領域またはバッチ・メッセージ領域にスケジュールできます。</p> <p>SERIAL アプリケーション・プログラムは、一度に 1 つの領域にのみスケジュールできます。</p>				
TLS	LTranStat	TRANSTAT, DEFN	LCL	トランザクション・レベル統計がログに記録されるか (Y) されないか (N)。出力は、ローカル IMS から戻されます。 N トランザクション・レベル統計のロギングはアクティブではありません。 Y トランザクション・レベル統計のロギングがアクティブです。
TMAC	LTimeAccess	TIMESTAMP	LCL	リソースが最後にアクセスされた時刻。最終アクセス時間は、ウォーム・スタート、緊急時再始動、EXPORT および IMPORT にまたがって保持されます。最終アクセス時間の更新はログに記録されません。再始動後は、最終アクセス時間は再始動チェックポイント・ログ・レコードに記録された時間を反映します。 出力は、ローカル IMS から戻されます。 プログラム・リソースの場合、以下のアクションは最終アクセス時間を更新します。 <ul style="list-style-type: none"> プログラムがスケジュールされています。 CREATE コマンドまたは DFSINSX0 出口が、モデルとしてリソースを参照する。
TMCR	LTimeCreate	TIMESTAMP	LCL	CREATE PGM コマンド、プログラムを作成する IMPORT コマンド、または IMS の初期化によってリソースが作成された時刻。作成時刻は、ウォーム・スタート、緊急時再始動、EXPORT および IMPORT にまたがって保持されます。出力は、ローカル IMS から戻されます。

表 171. QUERY PGM コマンド出力フィールド (続き)

ショー ト・ラベ ル	長ラベル	キーワード	有効範 囲	意味
TMIM	LTimeImport	TIMESTAMP	LCL	リソースが最後にインポートされた時刻 (該当する場 合)。インポート時刻は、ウォーム・スタートと緊急時再 始動にまたがって保持されます。出力は、ローカル IMS から戻されます。
TMUP	LTimeUpdate	TIMESTAMP	LCL	UPDATE PGM コマンドまたは IMPORT コマンドの 結果として実行時リソース定義の属性が更新された最終 時刻。更新時刻は、ウォーム・スタートや緊急時再始動 を越えて保持されます。出力値は、ローカル IMS から 取得されます。
TRAN	Tran	TRAN	LCL	プログラムに関連するトランザクション。
WRK	Work	WORK	LCL	プログラムまたはそれに関連したリソースの 1 つで作 業が進行中です。進行中の作業は、以下のいずれかだ す。 ANOTHER CMD IN PROGRESS プログラムを削除ま たは更新するための別のコマンド (DELETE や UPDATE など) が既に進行中であるか、または削除さ れるプログラムを参照しているトランザクションを削除 または更新するためのコマンドが進行中です。 SCHEDULED プログラムはスケジュールされていま す。

表 172. NOTINIT-xx-reason 状況の理由情報

理由	意味
ACBLIBREAD	ACBLIB 読み取り中の入出力エラー。
ALIAS	別名エラー。
BLDL	ACBLIB ディレクトリーの作成を試行中の BLDL の各種のエラー。
DBFINTP0	モジュール DBFINTP0 がゼロ以外の戻りコードを戻します。
DBNOTINIT	プログラムが、初期化されていない NOTINIT 状況のデータベース を参照しています。アクション: 2。
DMBINCOMPTBL	DMB の非互換性。
DMBNUM	この DMB 番号のデータベース用の DDIR 制御ブロックが存在しま せん。アクション: 1。
DMBPOOL	DMB のプール不足。
EOD	DMB の前に EOD マーカーが検出されました。
FPDB	データベースは、非高速機能 (FP=N) システムに定義されている高 速機能 MSDB または DEDB です。データベースは使用できませ ん。
FPMISMATCH	高速機能データベース DDIR 制御ブロックは、非高速機能 PCB と 一致しません。
FPRESTART	再始動時に高速機能エラーが発生しました。アクション: 1。

表 172. NOTINIT-xx-reason 状況の理由情報 (続き)

理由	意味
INTLISTDB	意図リストに不明のデータベースが含まれています。アクション: 5。
INTLISTLEN	意図リストの読み取りの長が無効です。
INTLISTLENO	意図リストの読み取りの長さがゼロです。
INTLISTREAD	意図リストの読み取りエラー。
KSDSESDS	KSDS/ESDS が欠落しています。
NAMEMISMATCH	PSB/PDIR 名が一致しません。
NOACB	ACBLIB 内でブロックが 1 つも見つかりません。
NOAMP	DMB がアクセス方式接頭部ブロック (AMP) を指していません。
NOAMPOFLWDCB	アクセス方式接頭部ブロック (AMP) はオーバーフロー DCB が欠落しています。
NODB	このプログラムが参照しているデータベースは、定義されていません。データベース DDIR 制御ブロックが存在しません。アクション: 5。 定義されていないデータベースの名前については、メッセージ DFS563I を参照してください。
NODMB	データベースの用の ACBLIB 内に DMB が存在しません。アクション: 2、5、またはその両方。
NOPSB	プログラム用の ACBLIB に PSB が存在しません。アクション: 3。
NOTDMB	DMB ではありません。
NOTPSB	PSB ではありません。PSB の代わりに、プログラムと同じ名前の DMB が ACBLIB に定義されています。このリソースがデータベースであるべきである場合は、CREATE DB コマンドを使用して、データベースを作成してください。このリソースがプログラムであるべきである場合は、DBDGEN、PSBGEN、ACBGEN、および ACBLIB のオンライン変更を実行して、このリソースを、DMB ではなく、PSB として定義してください。アクション: 4。
PROCOPTL	PCB がオンラインに対して PROCOPT=L を指定しています。
PSBLEN	PSB の長さの誤り。
PSBLEVEL	ACBGEN を使用してこの PSB を生成したときの IMS リリース・レベルが、この IMS の IMS リリース・レベルと一致していません。必要に応じて PSBGEN、PSBGEN、ACBGEN、および ACBLIB のオンライン変更を実行して、正しい IMS リリース・レベルでこの PSB を生成してください。アクション: 4。
PSBLOGICAL	PSB は論理関係データベースが欠落しています。アクション: 4。
PSBPOOL	PSB プール不足。
REPOCHGLIST	プログラム名がこの IMS の IMSRSC リポジトリ内の変更リストに存在しており、その変更リストが処理中であるか、エラーによって処理が失敗しました。プログラムが正常にインポートされて実行時プログラム定義とリポジトリ内の保管済み定義が同期化されない限り、このプログラムをモデルとして使用、スケジュール、更新、エクスポート、あるいは参照することはできません。アクション: 6。
SIZEMISMATCH	サイズの不一致。

表 172. NOTINIT-xx-reason 状況の理由情報 (続き)

理由	意味
WRONGPSB	誤った PSB。

注: プログラムを初期化するには、以下のアクションを取ることができます。

1. IBM に連絡する。
2. ACBLIB のオンライン変更を実行して、DMB を ACBLIB に追加する。
3. ACBLIB のオンライン変更を実行して、PSB を ACBLIB に追加する。
4. ACBLIB のオンライン変更を実行して、PSB、DMB、あるいはその両方を修正する。
5. MODBLKS のオンライン変更を実行するか、CREATE DB コマンドを発行して、データベースを作成し、次に UPDATE PGM START(SCHD) コマンドを発行して、NOTINIT 状況をリセットする。
6. IMS 変更リスト処理が失敗してメッセージ DFS4411E が発行された場合は、問題を修正して以下のいずれかのアクションを実行します。
 - IMS をシャットダウンし、再始動して変更リストの処理を再試行します。
 - IMPORT DEFN SOURCE(REPO) NAME(*pgmname*) TYPE(PGM) コマンドを発行し、プログラムをインポートします。ここで、*pgmname* はプログラム名です。

戻りコード、理由コード、および完了コード

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 173. QUERY PGM コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'00000004'	X'00001010'	戻されるリソースは検出されませんでした。指定されたリソース名が無効であるか、以下のことが考えられます。 <ul style="list-style-type: none"> • 指定したフィルターと一致するリソースがありませんでした。 • 指定された SHOW(WORK) で表示される作業を持つリソースがありませんでした。 • SHOW(EXPORTNEEDED) が指定されていた場合は、IMSRSC リポジトリにエクスポートする必要があるリソースがありませんでした。
X'00000008'	X'00002004'	無効なコマンド・キーワードまたは無効なコマンド・キーワードの組み合わせ。
X'00000008'	X'00002040'	フィルターまたはフィルターの組み合わせが無効です。無効なフィルターは、SHOW キーワードまたは STATUS キーワードで無効なパラメーターが指定された可能性があります。無効なフィルターの組み合わせは、複数のフィルターが指定されたか (SHOW、STATUS)、あるいは DB、RTC、TRAN、または WORK を含む複数の SHOW フィルターが指定された可能性があります。

表 173. QUERY PGM コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'0000000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'0000000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'00000010'	X'00004004'	CQS アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'00004016'	このコマンドは DCCTL 環境では無効であるために失敗しました。
X'00000010'	X'00004018'	リソース構造がないか、リソース構造が使用できません。
X'00000010'	X'00004024'	高速機能が定義されていません。SHOW(RTC) は許可されません。
X'00000010'	X'00004100'	リソース構造が満杯です。
X'00000010'	X'00004104'	RM アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'00004108'	SCI アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'00004300'	MODBLKS のオンライン変更が有効なため、コマンドが許可されません (DFSDFxxx または DFSCGxxx が MODBLKS=OLC で定義されているか、または MODBLKS が定義されていません)。
X'00000010'	X'00004500'	IMS はリポジトリーを使用できません。
X'00000010'	X'00004501'	RM はリポジトリーには使用できません。
X'00000010'	X'00004502'	リポジトリーは使用できません。
X'00000010'	X'00004503'	リポジトリーは停止しています。
X'00000010'	X'00004504'	リポジトリー・スベアのリカバリーが進行中です。
X'00000010'	X'00004505'	IMS リソース・リストが存在しないか、IMS リソース・リスト内に該当するリソース・タイプのリソースが存在しません。
X'00000010'	X'00004507'	リポジトリー・アクセスは拒否されます。
X'00000010'	X'00004508'	リポジトリーの最大入力長を超過しました。
X'00000010'	X'00004509'	RM データのバージョンは IMS データのバージョンよりも低いバージョンです。
X'00000010'	X'0000450A'	リポジトリー・サーバーをシャットダウンしています。
X'00000010'	X'0000450B'	リポジトリー・サーバーは使用できません。
X'00000010'	X'0000450C'	リポジトリー・サーバーは使用中です。
X'00000010'	X'0000450D'	RM は、IMSRSC リポジトリーに関連した一部の内部フィールドの定義に失敗しました。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できませんでした。
X'00000014'	X'0000501C'	IMODULE GETMAIN エラー。

表 173. QUERY PGM コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000014'	X'00005100'	RM 要求エラー。
X'00000014'	X'00005104'	CQS エラー。
X'00000014'	X'00005108'	SCI 要求エラー。
X'00000014'	X'00005110'	リポジトリリー・エラー。
X'00000014'	X'0000551C'	破損したリソース・リストが検出されたため、リポジトリリー内のデータを表示する要求は拒否されました。リソース・リストが使用できないため、QUERY PGM コマンドは拒否されました。IBM ソフトウェア・サポートに連絡してください。エラーになったコマンドの出力と、コマンドが実行されたローカル RM アドレス・スペースのダンプまたは IMSplex 内のすべての RM アドレス・スペースのダンプを送信してください。また、IMSRSC リポジトリリー RID データ・セットと RMD データ・セットのコピーも送信してください。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。以下の表には、完了コードの説明が記載されています。

表 174. QUERY PGM コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		プログラムに対するコマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	プログラム名が無効であるか、指定されたワイルドカード・パラメーターがどのリソース名にも一致しません。
28	NO DMB LOADED	プログラムに関連付けられている DMB が ACBLIB 内に存在しません。

例

以下に示すのは QUERY PGM コマンドの例です。

QUERY PGM コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QUERY PGM NAME(PGM0000%,APOL1,BMP255,DBF*0,DFSIVP67,AUTPSB7,JAVPSB1,
JAVTESTJ,DCSQL7A,DCSQL6C,JVMJBP1) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

PgmName	MbrName	CC	LRgnType	LBMPType	LFP	LDOPT	LGPSB	LRsdnt	LTranStat	LPgmLang
APOL1	IMS1	0	MPP	N	N	N	N	N	N	
AUTPSB7	IMS1	0	JBP	Y	N	N	N	N	N	
BMP255	IMS1	0	BMP	Y	N	N	N	N	N	
DBF#FPU0	IMS1	0	FPU	N	E	Y	N	N	N	

DCSQL6C	IMS1	0 MPP	N	N	N	Y	N	N	PLI
DCSQL7A	IMS1	0 MPP	N	N	N	Y	N	N	ASM/CBL
DFSIVP67	IMS1	0 JBP	Y	N	N	N	N	N	
JAVPSB1	IMS1	0 IFP	N	E	N	N	Y	N	
JAVTESTJ	IMS1	0 JMP	N	N	N	N	N	N	
JVMJBP1	IMS1	0 JBP	Y	N	N	Y	N	N	JAVA
PGM00001	IMS1	0 BMP	Y	N	N	N	N	N	
PGM00002	IMS1	0 IFP	N	E	Y	N	N	N	
PGM00003	IMS1	0 MPP	N	N	N	Y	N	N	PASCAL
PGM00004	IMS1	0 BMP	Y	N	Y	N	N	N	

(右にスクロールして、画面 2 へ)

PgmName	MbrName	LRgnType	LSchdType	LclStat	LModelName	LModelType
APOL1	IMS1	MPP	SERIAL			
AUTPSB7	IMS1	JBP	SERIAL			
BMP255	IMS1	BMP	PARALLEL			
DBF#FPU0	IMS1	FPU	PARALLEL			
DCSQL6C	IMS1	MPP	SERIAL			
DCSQL7A	IMS1	MPP	SERIAL			
DFSIVP67	IMS1	JBP	SERIAL			
JAVPSB1	IMS1	IFP	SERIAL			
JAVTESTJ	IMS1	JMP	PARALLEL			
JVMJBP1	IMS1	JBP	SERIAL			
PGM00001	IMS1	BMP	PARALLEL	NOTINIT-26-NOPSB	DFS DSPG1	DESC
PGM00002	IMS1	IFP	SERIAL		FPEDESC	DESC
PGM00003	IMS1	MPP	PARALLEL		DFS DSPG1	DESC
PGM00004	IMS1	BMP	SERIAL		BMP011	RSC

(右にスクロールして、画面 3 へ)

PgmName	MbrName	LRgnType	LTimeCreate	LTimeUpdate	LTimeAccess
APOL1	IMS1	MPP	2011.181 15:22:52.55		
AUTPSB7	IMS1	JBP	2011.181 15:22:52.55		
BMP255	IMS1	BMP	2011.181 15:22:52.55		
DBF#FPU0	IMS1	FPU	2011.181 15:22:52.55		
DCSQL6C	IMS1	MPP	2011.181 15:22:52.55		
DCSQL7A	IMS1	MPP	2011.181 15:22:52.55		
DFSIVP67	IMS1	JBP	2011.181 15:22:52.55		
JAVPSB1	IMS1	IFP	2011.181 15:22:52.55		
JAVTESTJ	IMS1	JMP	2011.181 15:22:52.55		
JVMJBP1	IMS1	JBP	2011.181 15:22:52.55		
PGM00001	IMS1	BMP	2011.181 16:53:07.34		
PGM00002	IMS1	IFP	2011.181 16:53:08.12		
PGM00003	IMS1	MPP	2011.181 16:53:08.86		
PGM00004	IMS1	BMP	2011.181 16:53:09.46		

(右にスクロールして、画面 4 へ)

PgmName	MbrName	LRgnType	LTimeAccess	LTimeImport	LDefnType
APOL1	IMS1	MPP			MODBLKS
AUTPSB7	IMS1	JBP			MODBLKS
BMP255	IMS1	BMP			MODBLKS
DBF#FPU0	IMS1	FPU			IMS
DCSQL6C	IMS1	MPP			MODBLKS
DCSQL7A	IMS1	MPP			MODBLKS
DFSIVP67	IMS1	JBP			MODBLKS
JAVPSB1	IMS1	IFP			MODBLKS
JAVTESTJ	IMS1	JMP			MODBLKS
JVMJBP1	IMS1	JBP			MODBLKS
PGM00001	IMS1	BMP			CREATE
PGM00002	IMS1	IFP			CREATE
PGM00003	IMS1	MPP			CREATE
PGM00004	IMS1	BMP			CREATE

OM API 入力:

```
CMD(QUERY PGM NAME(PGM0000%,APOL1,BMP255,DBF*0,DFSIVP67,AUTPSB7,JAVPSB1,
JAVTESTJ,DCSQL7A,DCSQL6C,JVMJBP1) SHOW(ALL))
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.182 00:57:35.598184</statime>
<stotime>2011.182 00:57:35.599380</stotime>
<staseq>C8007C9945E68682</staseq>
<stoseq>C8007C9946314F42</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10175735</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>PGM </kwd>
<input>QUERY PGM
NAME(PGM0000%,APOL1,BMP255,DBF*0,DFSIVP67,AUTPSB7,JAVPSB1,JAVTESTJ,
DCSQL7A,DCSQL6C,JVMJBP1) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="PGM" l1bl="PgmName" sort="a" key="1" scroll="no" len="8"
dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" sort="a" key="4" scroll="no" len="8"
dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" sort="n" key="0" scroll="yes" len="4"
dtype="INT" align="right" skipb="no" scope="LCL" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" sort="n" key="0" scroll="yes" len="*"
dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" scope="LCL" />
<hdr s1bl="RGNT" l1bl="LRgnType" sort="n" key="0" scroll="no" len="7"
dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="BMPT" l1bl="LBMPType" sort="n" key="0" scroll="yes" len="7"
dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="FP" l1bl="LFP" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="DOPT" l1bl="LDOPT" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="GPSB" l1bl="LGPSB" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="RSDNT" l1bl="LDRsdnt" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" scope="LCL" />
<hdr s1bl="LRSdnt" l1bl="LRSdnt" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="TLS" l1bl="LTranStat" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="LANG" l1bl="LPgmLang" sort="n" key="0" scroll="yes" len="8"
dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="SCHD" l1bl="LSchdType" sort="n" key="0" scroll="yes" len="8"
dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="LSTT" l1bl="LclStat" sort="n" key="0" scroll="yes" len="*"
dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="MDLN" l1bl="LModelName" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="8" dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="MDLT" l1bl="LModelType" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="TMCR" l1bl="LTimeCreate" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="20" dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="TMUP" l1bl="LTimeUpdate" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="20" dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="TMAC" l1bl="LTimeAccess" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="20" dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="TMIM" l1bl="LTimeImport" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="20" dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="DFNT" l1bl="LDefnType" sort="n" key="0" scroll="yes" len="8"
dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />

```

```

</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>PGM(PGM00001) MBR(IMS1 ) CC( 0) RGNT(BMP) BMPT(Y) FP(N)
DOPT(N) GPSB(N) LRSNT(N) TLS(N) SCHD(PARALLEL) LSTT(NOTINIT-26-NOPSB)
MDLT(DESC) MDLN(DFS DSPG1) TMC(2011.181 16:53:07.34) DFNT(CREATE)
</rsp>
<rsp>PGM(PGM00002) MBR(IMS1 ) CC( 0) RGNT(IFP) BMPT(N) FP(E)
DOPT(Y) GPSB(N) LRSNT(N) TLS(N) SCHD(SERIAL) MDLT(DESC) MDLN(FPEDESC
) TMC(2011.181 16:53:08.12) DFNT(CREATE) </rsp>
<rsp>PGM(PGM00003) MBR(IMS1 ) CC( 0) RGNT(MPP) BMPT(N) FP(N)
DOPT(N) GPSB(Y) LRSNT(N) TLS(N) LANG(PASCAL) SCHD(PARALLEL)
MDLT(DESC) MDLN(DFS DSPG1) TMC(2011.181 16:53:08.86) DFNT(CREATE)
</rsp>
<rsp>PGM(PGM00004) MBR(IMS1 ) CC( 0) RGNT(BMP) BMPT(Y) FP(N)
DOPT(Y) GPSB(N) LRSNT(N) TLS(N) SCHD(SERIAL) MDLT(RSC) MDLN(BMP011 )
TMC(2011.181 16:53:09.46) DFNT(CREATE) </rsp>
<rsp>PGM(APOL1 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) RGNT(MPP) BMPT(N) FP(N)
DOPT(N) GPSB(N) LRSNT(N) TLS(N) SCHD(SERIAL) TMC(2011.181
15:22:52.55) DFNT(MODBLKS) </rsp>
<rsp>PGM(BMP255 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) RGNT(BMP) BMPT(Y) FP(N)
DOPT(N) GPSB(N) LRSNT(N) TLS(N) SCHD(PARALLEL) TMC(2011.181
15:22:52.55) DFNT(MODBLKS) </rsp>
<rsp>PGM(DBF#FPU0) MBR(IMS1 ) CC( 0) RGNT(FPU) BMPT(N) FP(E)
DOPT(Y) GPSB(N) LRSNT(N) TLS(N) SCHD(PARALLEL) TMC(2011.181
15:22:52.55) DFNT(IMS) </rsp>
<rsp>PGM(DFSIVP67) MBR(IMS1 ) CC( 0) RGNT(JBP) BMPT(Y) FP(N)
DOPT(N) GPSB(N) LRSNT(N) TLS(N) SCHD(SERIAL) TMC(2011.181
15:22:52.55) DFNT(MODBLKS) </rsp>
<rsp>PGM(AUTPSB7 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) RGNT(JBP) BMPT(Y) FP(N)
DOPT(N) GPSB(N) LRSNT(N) TLS(N) SCHD(SERIAL) TMC(2011.181
15:22:52.55) DFNT(MODBLKS) </rsp>
<rsp>PGM(JAVPSB1 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) RGNT(IFP) BMPT(N) FP(E)
DOPT(N) GPSB(N) LRSNT(Y) TLS(N) SCHD(SERIAL) TMC(2011.181
15:22:52.55) DFNT(MODBLKS) </rsp>
<rsp>PGM(JAVTESTJ) MBR(IMS1 ) CC( 0) RGNT(JMP) BMPT(N) FP(N)
DOPT(N) GPSB(N) LRSNT(N) TLS(N) SCHD(PARALLEL) TMC(2011.181
15:22:52.55) DFNT(MODBLKS) </rsp>
<rsp>PGM(DCSQL7A ) MBR(IMS1 ) CC( 0) RGNT(MPP) BMPT(N) FP(N)
DOPT(N) GPSB(Y) LRSNT(N) TLS(N) LANG(ASM/CBL) SCHD(SERIAL)
TMC(2011.181 15:22:52.55) DFNT(MODBLKS) </rsp>
<rsp>PGM(DCSQL6C ) MBR(IMS1 ) CC( 0) RGNT(MPP) BMPT(N) FP(N)
DOPT(N) GPSB(Y) LRSNT(N) TLS(N) LANG(PLI) SCHD(SERIAL) TMC(2011.181
15:22:52.55) DFNT(MODBLKS) </rsp>
<rsp>PGM(JVMJBP1 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) RGNT(JBP) BMPT(Y) FP(N)
DOPT(N) GPSB(Y) LRSNT(N) TLS(N) LANG(JAVA) SCHD(SERIAL) TMC(2011.181
15:22:52.55) DFNT(MODBLKS) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: さまざまなタイプのプログラムが表示されています。可能な出力フィールドをすべて表示するために、SHOW(ALL) が指定されています。プログラム出力フィールドのすべては 1 つの画面に収まらないため、ユーザーは右にスクロールして、追加の出力フィールドを見る必要があります。プログラム名、その出力行を作成したメンバー名、およびプログラムを実行できる領域タイプが、各画面に表示されています。PGM0000 で始まるプログラム名は、CREATE PGM コマンドを使用して動的に作成されました。DBF#FPU0 は、高速機能ユーティリティです。JAVTESTJ は、Java メッセージ処理プログラムです。PGM00001 は、ACBLIB 内に PSB がないため、ローカル状況 NOTINIT-26-NOPSB を表示しており、スケジュールできません。PGM00003 は、生成された PSB GPSB(Y) なので、ACBLIB 内に PSB は必要ありません。PGM00002 と PGM00004 は、動的オプション DOPT(Y) プログラムであるため、IMS は ACBLIB 内にこれらの PSB がないことを検出せず、これらが初めてスケジュールされるまで、その状況を NOTINIT としてマークします。少

数の GPSB が、異なる言語定義で表示されています。言語属性は、Java プログラムとして定義された GPSB および DOPT PSB に適用されます。

QUERY PGM コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
QUERY PGM NAME(APOL1) SHOW(DEFN,DOPT,GPSB,FP)
```

TSO SPOC 出力:

PgmName	MbrName	CC	Repo	IMSid	LRgnType	FP	LFP	DOPT	LDOPT	GPSB	LGPSB
APOL1	IMS1	0	Y			N		N		N	
APOL1	IMS1	0		IMS1	MPP		N		N		N
APOL1	IMS2	0		IMS2	MPP		N		N		N
APOL1	IMS3	0		IMS3	MPP		N		N		N

OM API 入力:

```
CMD(QUERY PGM NAME(APOL1) SHOW(DEFN,DOPT,GPSB,FP))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.180 22:01:10.263785</statime>
<stotime>2011.180 22:01:10.344614</stotime>
<staseq>C7FF134CD9BE9F55</staseq>
<stoseq>C7FF134CED7A691C</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10150110</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>PGM </kwd>
<input>QUERY PGM NAME(APOL1) SHOW(DEFN,DOPT,GPSB,FP) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="PGM" l1bl="PgmName" sort="a" key="1" scroll="no" len="8"
dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" sort="a" key="4" scroll="no" len="8"
dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" sort="n" key="0" scroll="yes" len="4"
dtype="INT" align="right" skipb="no" scope="LCL" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" sort="n" key="0" scroll="yes" len="*"
dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" scope="LCL" />
<hdr s1bl="REPO" l1bl="Repo" sort="d" key="2" scroll="no" len="1"
dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" scope="LCL" />
<hdr s1bl="IMSID" l1bl="IMSid" sort="n" key="0" scroll="yes" len="4"
dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" scope="LCL" />
<hdr s1bl="RGNT" l1bl="LRgnType" sort="n" key="0" scroll="no" len="7"
dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="RFP" l1bl="FP" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
dtype="CHAR" align="left" scope="GBL" />
<hdr s1bl="FP" l1bl="LFP" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="RDOPT" l1bl="DOPT" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
dtype="CHAR" align="left" scope="GBL" />
<hdr s1bl="DOPT" l1bl="LDOPT" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
```

```

<hdr slbl="RGPSB" llbl="GPSB" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
  dtype="CHAR" align="left" scope="GBL" />
<hdr slbl="GPSB" llbl="LGPSB" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
  dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>PGM(APOL1 ) MBR(IMS3 ) CC( 0) RGNT(MPP) IMSID(IMS3 )
  FP(N) DOPT(N) GPSB(N) </rsp>
<rsp>PGM(APOL1 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) RGNT(MPP) IMSID(IMS1 )
  FP(N) DOPT(N) GPSB(N) </rsp>
<rsp>PGM(APOL1 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RFP(N) RDOPT(N)
  RGPSB(N) </rsp>
<rsp>PGM(APOL1 ) MBR(IMS2 ) CC( 0) RGNT(MPP) IMSID(IMS2 )
  FP(N) DOPT(N) GPSB(N) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: 指定されたりソースの保管済みリソース定義およびランタイム・リソース定義が戻されます。指定された SHOW フィルターに従って、FP 定義、DOPT 定義、および GPSB 定義のみが返されます。

QUERY PGM コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
QUERY PGM NAME(APOL*) SHOW(DEFN)
```

TSO SPOC 出力:

PgmName	MbrName	CC	Repo	IMSid	LRgnType	BMPTType	LBMPType	FP	LFP	DOPT	LDOPT
APOL1	IMS1	0	Y			N		N		N	
APOL1	IMS1	0		IMS1	MPP		N		N		N
APOL1	IMS2	0		IMS2	MPP		N		N		N
APOL1	IMS3	0		IMS3	MPP		N		N		N

(右にスクロール、画面 2)

PgmName	MbrName	Repo	LRgnType	GPSB	LGPSB	Rsdnt	LRsdnt	TranStat	LTranStat
APOL1	IMS1	Y		N		N		N	
APOL1	IMS1		MPP		N		N		N
APOL1	IMS2		MPP		N		N		N
APOL1	IMS3		MPP		N		N		N

(右にスクロール、画面 3)

PgmName	MbrName	Repo	LRgnType	PgmLang	LPgmLang	SchdType	LSchdType	TimeCreate>
APOL1	IMS1	Y				SERIAL		2011.180 12:37
APOL1	IMS1		MPP				SERIAL	
APOL1	IMS2		MPP				SERIAL	
APOL1	IMS3		MPP				SERIAL	

(右にスクロール、画面 4)

PgmName	MbrName	Repo	LRgnType	Create	LTimeCreate	TimeUpdate
APOL1	IMS1	Y		:31.44		
APOL1	IMS1		MPP		2011.180 12:37:35.41	
APOL1	IMS2		MPP		2011.180 12:37:35.53	
APOL1	IMS3		MPP		2011.180 12:37:31.44	

(右にスクロール、画面 5)

PgmName	MbrName	Repo	LRgnType	LTimeUpdate	LTimeAccess	LTimeImport
APOL1	IMS1	Y				
APOL1	IMS1		MPP			
APOL1	IMS2		MPP			
APOL1	IMS3		MPP			

OM API 入力:

```
CMD(QUERY PGM NAME(APOL*1) SHOW(DEFN))
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.180 22:03:33.533960</statime>
<stotime>2011.180 22:03:33.666998</stotime>
<staseq>C7FF13D57BD080D2</staseq>
<stoseq>C7FF13D59C4B6B9A</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10150333</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>PGM </kwd>
<input>QUERY PGM NAME(APOL*) SHOW(DEFN) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="PGM" l1bl="PgmName" sort="a" key="1" scroll="no" len="8"
  dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" sort="a" key="4" scroll="no" len="8"
  dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" sort="n" key="0" scroll="yes" len="4"
  dtype="INT" align="right" skipb="no" scope="LCL" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" sort="n" key="0" scroll="yes" len="*"
  dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" scope="LCL" />
<hdr s1bl="REPO" l1bl="Repo" sort="d" key="2" scroll="no" len="1"
  dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" scope="LCL" />
<hdr s1bl="IMSID" l1bl="IMSid" sort="n" key="0" scroll="yes" len="4"
  dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" scope="LCL" />
<hdr s1bl="RGNT" l1bl="LRgnType" sort="n" key="0" scroll="no" len="7"
  dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="RBMPT" l1bl="BMPTType" sort="n" key="0" scroll="yes" len="7"
  dtype="CHAR" align="left" scope="GBL" />
<hdr s1bl="BMPT" l1bl="LBMPTType" sort="n" key="0" scroll="yes" len="7"
  dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="RFP" l1bl="FP" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
  dtype="CHAR" align="left" scope="GBL" />
<hdr s1bl="FP" l1bl="LFP" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
  dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="RDOPT" l1bl="DOPT" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
  dtype="CHAR" align="left" scope="GBL" />
<hdr s1bl="DOPT" l1bl="LDOPT" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
  dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="RGPSB" l1bl="GPSB" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
  dtype="CHAR" align="left" scope="GBL" />
<hdr s1bl="GPSB" l1bl="LGPSB" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
  dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="RRSDNT" l1bl="Rsdnt" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
  dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" scope="GBL" />
<hdr s1bl="RSDNT" l1bl="LDRsdnt" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" scope="LCL" />
<hdr s1bl="LRSDNT" l1bl="LRsdnt" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
  dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="RTLS" l1bl="TranStat" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
  dtype="CHAR" align="left" scope="GBL" />
<hdr s1bl="TLS" l1bl="LTranStat" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
  dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="RLANG" l1bl="PgmLang" sort="n" key="0" scroll="yes" len="8"
  dtype="CHAR" align="left" scope="GBL" />
<hdr s1bl="LANG" l1bl="LPgmLang" sort="n" key="0" scroll="yes" len="8"
  dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="RSCHD" l1bl="SchdType" sort="n" key="0" scroll="yes" len="8"
  dtype="CHAR" align="left" scope="GBL" />

```



```

<hdr s1b1="SCHD" l1b1="LSchdType" sort="n" key="0" scroll="yes" len="8"
  dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1b1="RTMCR" l1b1="TimeCreate" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="20" dtype="CHAR" align="left" scope="GBL" />
<hdr s1b1="TMCR" l1b1="LTimeCreate" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="20" dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1b1="RTMUP" l1b1="TimeUpdate" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="20" dtype="CHAR" align="left" scope="GBL" />
<hdr s1b1="TMUP" l1b1="LTimeUpdate" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="20" dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1b1="TMAC" l1b1="LTimeAccess" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="20" dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1b1="TMIM" l1b1="LTimeImport" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="20" dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>PGM(APOL1 ) MBR(IMS3 ) CC( 0) RGNT(MPP) IMSID(IMS3 )
  BMPT(N) FP(N) DOPT(N) GPSB(N) LRSNT(N) TLS(N) SCHD(SERIAL)
  TMCR(2011.180 12:37:31.44) </rsp>
<rsp>PGM(APOL1 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) RGNT(MPP) IMSID(IMS1 )
  BMPT(N) FP(N) DOPT(N) GPSB(N) LRSNT(N) TLS(N) SCHD(SERIAL)
  TMCR(2011.180 12:37:35.41) </rsp>
<rsp>PGM(APOL1 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RBMPT(N) RFP(N)
  RDOPT(N) RGPSB(N) RRSNT(N) RTLS(N) RSCHD(SERIAL ) RTMCR(2011.180
  12:37:31.44) </rsp>
<rsp>PGM(APOL1 ) MBR(IMS2 ) CC( 0) RGNT(MPP) IMSID(IMS2 )
  BMPT(N) FP(N) DOPT(N) GPSB(N) LRSNT(N) TLS(N) SCHD(SERIAL)
  TMCR(2011.180 12:37:35.53) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: ワイルドカード名に一致するリソースごとに 1 行が返されています。定義されたリソースを持つ各 IMS からのリソース定義と、グローバル・リポジトリ定義が返されています。リポジトリ情報は、コマンド・マスター IMS によって返されています。リポジトリ内には、ワイルドカード名に一致する各リソース名ごとの IMS 固有のセクションはありません。

QUERY PGM コマンドの例 4

TSO SPOC 入力:

```
QUERY PGM SHOW(EXPORTNEEDED)
```

TSO SPOC 出力:

PgmName	MbrName	CC	LRgnType	ExportNeeded
PGM00001	IMS1	0	MPP	Y
PGM00002	IMS1	0	MPP	Y

OM API 入力:

```
CMD(QUERY PGM SHOW(EXPORTNEEDED))
```

説明: 2 つのプログラム PGM00001 および PGM00002 を IMSRSC リポジトリにエクスポートする必要があります。

QUERY PGM コマンドの例 5

TSO SPOC 入力:

```
QUERY PGM NAME(BMP255) SHOW(DEFNTYPE)
```

TSO SPOC 出力:

PgmName	MbrName	CC	DEFNTYPE
BMP255	IMS1	0	PGMCREAT

関連概念:

[🔗](#) CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

[🔗](#) /DISPLAY MODIFY コマンド (コマンド)

[🔗](#) /DISPLAY PGM コマンド (コマンド)

[🔗](#) /DISPLAY PSB コマンド (コマンド)

[🔗](#) /DISPLAY STATUS コマンド (コマンド)

[🔗](#) コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

QUERY PGMDESC コマンド

QUERY PGMDESC コマンドは、プログラム記述子に関する情報を照会するために使用します。記述子は、記述子またはリソースの作成に使用できるモデルです。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 583 ページの『キーワード』
- 587 ページの『使用上の注意』
- 588 ページの『出力フィールド』
- 594 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 596 ページの『例』

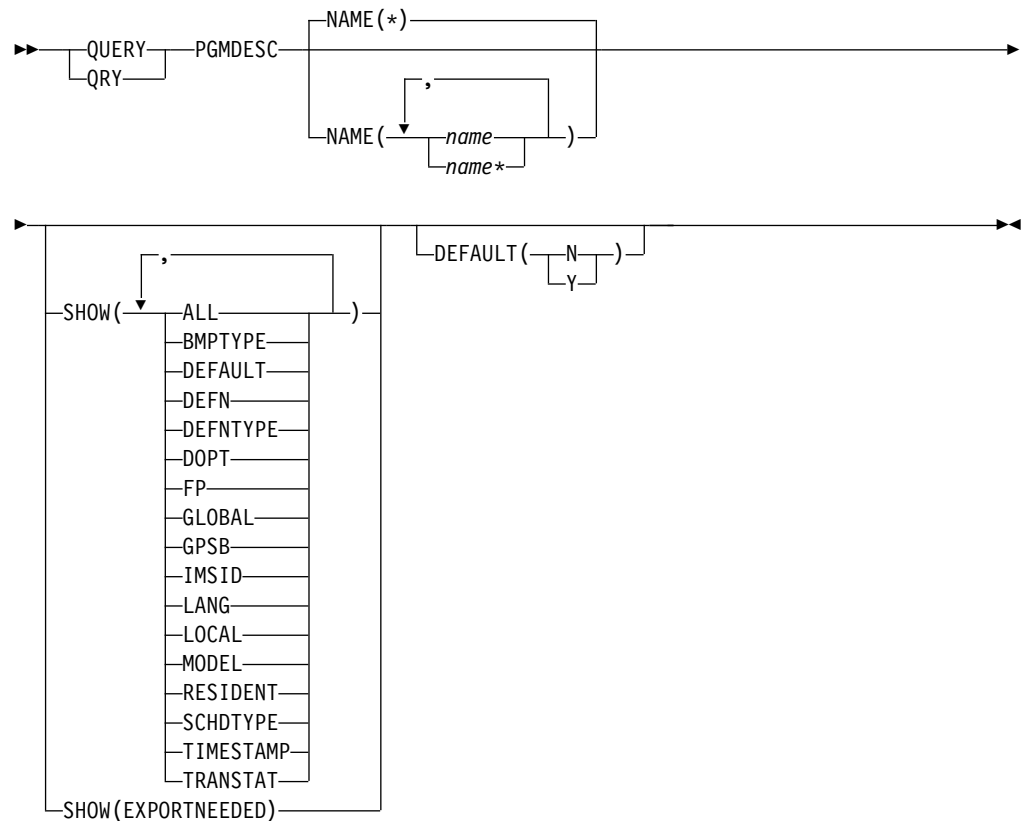
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 175. QUERY PGMDESC コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUERY PGMDESC	X	X	X
NAME	X	X	X
SHOW	X	X	X
STATUS	X	X	X
DEFAULT	X	X	X

構文



キーワード

以下のキーワードは、QUERY PGMDESC コマンドに有効です。

NAME

プログラム記述子の名前 (1 から 8 文字) を指定します。名前にはワイルドカードを指定することができます。名前は反復可能なパラメーターです。デフォルトは NAME(*) で、これはすべてのプログラム記述子に戻します。

DEFAULT ()

どの記述子 (複数可) を表示するかを指定します。

N デフォルト以外のすべてのプログラム記述子を表示します。

Y デフォルトのプログラム記述子を表示します。

SHOW

戻されるプログラム記述子出力フィールドを指定します。プログラム記述子名は、出力を作成した IMS の名前、領域タイプ、および完了コードとともに、常に戻されます。SHOW キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあります。

ALL

プログラム記述子自体に関するすべての情報を戻します。

制約事項: SHOW(EXPORTNEEDED) を指定した場合に戻される ExportNeeded 列は、SHOW(ALL) では戻されません。

BMPTYPE

BMP タイプのオプション。プログラムが BMP タイプ領域で実行されるかどうかを指定します。BMP タイプ領域は、BMP 領域または JBP 領域です。

DB2 ストアード・プロシージャ、WebSphere Application Server の下で実行されるプログラム、および ODBA インターフェースの他のユーザーによってスケジュールされる PSB は、BMPTYPE Y または N で定義できます。

DEFAULT

デフォルト記述子オプション。

DEFN

リソース定義を戻すように指定します。

戻されるプログラム記述子属性には、BMPTYPE、DOPT、FP、GPSB、LANG、RESIDENT、SCHDTYPE、TRANSTAT、DEFAULT、リポジトリ内の作成および更新のタイム・スタンプ、および IMS ランタイムの作成、更新、インポート、およびアクセスのタイム・スタンプがあります。

SHOW(DEFN) でその他の SHOW フィルターが指定されない場合、または IMSID フィルターが指定されている場合、リポジトリでグローバルに定義された定義属性および IMS システム内でローカルに定義された定義属性を含む、すべての定義属性が戻されます。IMS システムのランタイム・リソース定義は、コマンドを受信する各 IMS によって戻されます。

IMSRSC リポジトリ内の保管済みリソース定義は、コマンド・マスター IMS がそのリポジトリを使用できる場合、コマンド・マスター IMS によって戻されます。

コマンド・マスター IMS は、リポジトリから取得した汎用保管済みリソース定義ごとに応答行を戻します。それぞれの応答行には、汎用リソース定義の属性が表示されます。SHOW(DEFN) を IMSID フィルターなしで指定し、すべての IMS システムに定義されている属性値が同一の場合、汎用定義の応答行のみが戻されます。保管済みリソース定義が定義されている IMS システムの IMS ID は戻されません。IMS システムの保管済みリソース定義に、汎用保管済みリソース定義と異なる属性値が 1 つ以上含まれている場合は、属性値が異なる IMS ごとに追加の応答行が戻されます。

SHOW(DEFN,LOCAL) が指定されている場合、コマンドを受信した各 IMS により、IMS システムのランタイム・リソース定義が戻されます。

SHOW(DEFN,GLOBAL) が指定されている場合、コマンド・マスター IMS により、リポジトリの保管済みリソース定義が戻されます。

SHOW(DEFN,GLOBAL) は、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合のみ有効です。

SHOW(DEFN) にその他のパラメーターが指定されている場合、要求された定義属性のみが戻されます。例えば SHOW(DEFN,TIMESTAMP) が指定されている場合、タイム・スタンプのみが戻されます。

制約事項:

- SHOW(DEFN) は、DEFNTYPE および MODEL と一緒に指定することはできません。

- QRY PGMDDESC SHOW(ALL) コマンドで戻される LModelName 列、LModelType 列、および LDefnType 列は、SHOW(DEFN) では戻されません。
- SHOW(DEFN) を指定した場合に戻される Repo 列および IMSid 列は、SHOW(ALL) では戻されません。

リポジトリからのプログラム記述子情報を照会する場合、リポジトリに保管されたリソース定義を使用してリポジトリ情報を持つ応答行を判別し、ランタイム・リソース定義を使用して IMS ランタイム・リソース情報を持つ応答行を判別します。指定されたフィルターと一致する保管済みリソース定義またはランタイム・リソース定義のそれぞれに、応答行が戻されます。SHOW(DEFN,GLOBAL) が指定されている場合、指定されたフィルターと一致する保管済みリソース定義のみが戻されます。

SHOW(DEFN,LOCAL) が指定されている場合、指定されたフィルターと一致するランタイム・リソース定義のみが戻されます。

SHOW(DEFN,IMSID) を指定すると、IMS の保管済みリソース定義が汎用リソース定義と同一であるかどうかにかかわらず、汎用保管済みリソース定義に対して応答行が返され、リポジトリにリソースが定義されている IMS ごとに追加の応答行が返されます。

DEFNTYPE

定義タイプ。これは、記述子が定義された方法です。

DOPT

動的オプション。

EXPORTNEEDED

NAME パラメーターに一致し、作成されたか最後に更新されて以降
IMSRSC リポジトリにエクスポートされたことがないプログラム記述子リソースだけを QUERY コマンドで戻すよう指定します。

NAME キーワードが省略されたか NAME(*) が指定された場合、リポジトリにエクスポートする必要があるプログラム記述子の名前だけが戻されます。

NAME キーワードで特定の名前が指定されたか NAME(*) 以外の総称名が指定された場合、コマンドで指定されたプログラム記述子名ごとに 1 行ずつ、応答行が戻されます。指定されたプログラム記述子をリポジトリにエクスポートする必要がない場合は、ExportNeeded 列に N が戻されます。

SHOW(EXPORTNEEDED) は、他のいかなる SHOW パラメーターや他のキーワードとも一緒に指定することはできず、IMS で IMSRSC リポジトリが使用可能になっている場合にのみ有効です。

QUERY PGMDDESC SHOW(EXPORTNEEDED) コマンドは、XRF 代替システムでは無効です。

ヒント: IMSRSC リポジトリにエクスポートされたことがないリソースおよび記述子の場合、EXPORT DEFN TARGET(REPO) OPTION (CHANGESONLY) コマンドを発行して、リソース定義および記述子定義をリポジトリに書き込み、次回の IMS のコールド・スタートで使用できるようにすることができます。

FP 高速機能オプション。

GLOBAL

リポジトリーの保管済みリソース定義を戻すように指定します。
SHOW(GLOBAL,DEFN) が指定される場合、コマンド・マスター IMS に
より、リポジトリーのグローバル・リソース定義が戻されます。
SHOW(GLOBAL,DEFN) は、コマンド・マスター IMS がリポジトリーを
使用できる場合のみ有効です。

GPSB

生成 PSB オプション。

IMSID

指定された名前をリソース・リストに含む IMS システムの IMS ID を戻
すように指定します。SHOW(IMSID) は、コマンド・マスター IMS によっ
てのみ処理され、コマンド・マスター IMS がリポジトリーを使用できる場
合にのみ有効です。

SHOW(IMSID) が DEFN フィルターとともに指定されている場合、保管済
みリソース定義に加えて、定義済みのリソースが存在する各 IMS に、別個
の行が戻されます。

SHOW(IMSID) が DEFN フィルターなしで指定されている場合、リソース
名とともに定義済みのリソースが存在する各 IMS に別個の行が戻されま
す。リソース定義は戻されません。

SHOW(IMSID) は、DEFN および GLOBAL 以外の SHOW フィルターと
ともに指定することはできません。SHOW(IMSID,GLOBAL) が指定されて
いる場合、GLOBAL は無視されます。つまり、SHOW(IMSID,GLOBAL)
は SHOW(IMSID) として扱われます。SHOW(DEFN,IMSID,LOCAL) は
SHOW(DEFN,LOCAL) として扱われます。

LANG

GPSB 用のアプリケーション・プログラムの言語インターフェース。

LOCAL

IMS システムのランタイム・リソース定義を戻すように指定します。

SHOW(DEFN,LOCAL) は、コマンドを処理する IMS システムからローカ
ルの定義属性のみを戻します。

MODEL

この記述子を作成するために使用されたモデル名とモデル・タイプ。記述子
が、1 つ以上の定義済み属性を使用して作成され、モデルが指定されていな
い場合、モデル名とモデル・タイプはデフォルト記述子です。IMS 定義の
記述子の場合、モデル名とモデル・タイプはブランクです。LIKE キーワ
ードなしで指定された CREATE コマンドは、デフォルト記述子をモデルとし
て使用して記述子を作成します。デフォルト記述子は、IMS 記述子
DFSDSPG1 またはユーザー定義のいずれかです。LIKE キーワードが指定
された CREATE コマンドは、モデルを使用して記述子を作成します。記述
子は、すべてモデルと同じ属性を使用して作成されます。属性は、モデル属
性をオーバーライドする CREATE コマンドにより明示的に設定されます。
モデル・タイプは、記述子 (DESC) またはリソース (RSC) のいずれかだ
す。モデル名およびモデル・タイプは参照用のみです。属性が CREATE ま
たは UPDATE コマンドの値によってオーバーライドされた場合、あるいは
モデルが後で更新された場合、記述子の属性はモデルと一致しないことがあ

ります。モデル名とモデル・タイプを使用すると、同じモデルを使って作成された記述子を識別できます。記述子のモデル名とモデル・タイプは、エクスポートおよびインポートされます。IMPORT コマンドは、記述子を作成する際にモデル名とモデル・タイプを使用しません。

RESIDENT

常駐オプション。

SCHDTYPE

スケジューリング・タイプ。これは、このアプリケーション・プログラムを同時に複数のメッセージ領域またはバッチ・メッセージ領域にスケジュールできるかどうかを指定します。

TIMESTAMP

作成時間 (TIMECREATE)、最終更新時間 (TIMEUPDATE)、最終アクセス時間 (TIMEACCESS)、および最終インポート時間 (TIMEIMPORT) のタイム・スタンプが戻されます。時刻は現地時間で、YYYY.JJJ HH:MM:SS.TH の形式で戻されます。ここで、

- YYYY は年です。
- JJJ はユリウス日 (001 から 365) です。
- HH は時 (01 から 24) です。
- MM は分 (00 から 59) です。
- SS は秒 (00 から 59) です。
- TH は 10 分の 1 秒および 100 分の 1 秒 (00 から 99) です。

TRANSTAT

トランザクション・レベル統計オプション。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager API を介してのみ出すことができます。このコマンドは DB/DC、DBCTL および DCCTL システムに適用されます。

このコマンドは、XRF 代替システムで使用できます。

MODBLKS のオンライン変更が使用可能な場合 (DFSDFxxx または DFSCGxxx が MODBLKS=OLC で定義されているか、MODBLKS が定義されていない場合)、QUERY PGMDESC コマンドは無効です。

プログラム記述子で定義された属性の多くは、プログラム記述子を使用して作成されたプログラムの場合にのみ、意味を持つようになります。プログラム記述子は、スケジュールされません。プログラム記述子を使用して作成されたプログラムのみがスケジュールされます。

リソース定義に関する情報を表示するには、SHOW(DEFN) を指定します。リソースが定義されている IMS システムを判別し、また各 IMS システムの属性またはリソース定義を知るには、SHOW(DEFN,IMSID) を指定します。リソースが定義されている IMS システムを判別するには、SHOW(IMSID) を指定します。

出力フィールド

以下の表には、QUERY PGMDESC 出力フィールドが記載されています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

有効範囲

出力フィールドの有効範囲を識別します。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 176. QUERY PGMDESC コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
BMP	LBMPType	BMPTYPE, DEFN	LCL	<p>BMP タイプ。この値は、IMS から取得されます。</p> <p>N プログラムは BMP タイプ領域で実行されません。プログラムは、IMS TM MPP 領域、JMP 領域、または IFP 領域で実行するか、あるいは ODBA インターフェースまたは DRA インターフェースを使用できます。この指定は、IMS TM MPP 領域、JMP 領域、および IFP 領域で実行されるプログラム、あるいは DBCTL を使用する CICS プログラムおよび DRA インターフェースの他のユーザーによってスケジュールされる PSB に対して使用します。これはデフォルトです。</p> <p>Y プログラムは BMP タイプ領域で実行されます。IMS BMP 領域または JBP 領域で実行される可能性があります。関連のトランザクションには、ゼロの通常優先順位値および限界優先順位値が割り当てられます。</p>
CC	CC	N/A	LCL	完了コード。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	LCL	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
DESC	DESCName	PGMDESC	LCL	プログラム記述子名。

表 176. QUERY PGMDESC コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
DFLT	LDflt	DEFAULT	LCL	<p>デフォルト記述子であるか (Y) ないか (N)。</p> <p>N 記述子はデフォルトではありません。</p> <p>Y 記述子はデフォルトです。LIKE キーワードなしで記述子またはリソースが作成される時、CREATE コマンドで指定されない属性は、デフォルト記述子に定義されている値を取ります。リソース・タイプのデフォルトとして、記述子 1 つだけが定義できます。IMS は、DFSDSPG1 と呼ばれるプログラム記述子を定義しています。ここでは、すべての属性がデフォルト値で定義されています。ユーザー定義記述子をデフォルトに定義すると、現在のデフォルト記述子がオーバーライドされます。</p>
DFNT	LDefnType	DEFNTYPE	LCL	<p>定義タイプ。次のうちのいずれか 1 つが可能です。</p> <p>CREATE CREATE コマンドにより定義されます。 UPDATE コマンドで記述子が更新されても、DEFNTYPE は変更されません。</p> <p>IMPORT IMPORT コマンドにより定義されます。 UPDATE コマンドで記述子が更新されても、DEFNTYPE は変更されません。</p> <p>IMS IMS により定義されます。DFSDSPG1 は、デフォルトのプログラム値を含む IMS 定義のプログラム記述子です。</p>

表 176. QUERY PGMDESC コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
DOPT	LDOPT	DOPT, DEFN	LCL	<p>動的オプションであるか (Y) ないか (N)。この値は、IMS から取得されます。</p> <p>N このアプリケーション・プログラムに関連する PSB は、動的に位置指定されません。</p> <p>Y このプログラムに関連する PSB は、動的に位置指定されます。この PSB に関連するプログラムがスケジュールされるたびに、PSB の最新のコピーがロードされます。プログラムが終了すると、この PSB は PSB プールから削除されます。</p> <p>PSB がトランザクションの処理に必要なまで、ACBLIB 内、または (ACB の IMS 管理が使用可能な場合) IMS カタログ内に PSB の ACB が存在している必要はありません。PSB の新しいバージョンは、ACBLIB または IMS カタログにいつでも定義および追加できます。PSB の次回スケジュール時に、IMS は ACB の新しいバージョンをロードします。</p> <p>PSB が参照する DBD の制御ブロックが ACBLIB または IMS カタログに存在しない場合は、DOPT PSB をスケジュールに入れることはできません。</p>
EXPN	ExportNeeded	EXPORTNEEDED	LCL	<p>プログラム記述子が IMSRSC リポジトリにエクスポートされたかどうかを示します。値は Y または N のどちらかです。</p>
FP	LFP	FP, DEFN	LCL	<p>高速機能専用プログラムであるか (E) ないか (N)。この値は、IMS から取得されます。</p> <p>E プログラムは、高速機能専用アプリケーション・プログラムです。</p> <p>N プログラムは、高速機能アプリケーション・プログラムではありません。</p>

表 176. QUERY PGMDDESC コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
GPSB	LGPSB	GPSB, DEFN	LCL	<p>IMS によって生成される生成 PSB であるか (Y) ないか (N)。この値は、IMS から取得されます。</p> <p>N プログラムに関連する PSB は IMS によって生成されません。</p> <p>Y プログラムに関連付けられた PSB とアプリケーション制御ブロック (ACB) は、IMS によって生成されます。すべての環境のスケジューリング・プロセスでは、入出力 PCB と変更可能な代替 PCB を含んでいる PSB が生成されます。</p> <p>PSB と ACB を生成したり、PSB を定義する DDL をサブミットしたりする必要はありません。PSB の ACB は、ACBLIB または (ACB の IMS 管理が使用可能な場合) IMS カタログからロードされません。このため、ACBLIB または IMS カタログから ACB を取得するための入出力は不要です。</p> <p>生成された PSB には、IOPCBbbb という名前の入出力 PCB と、TPPCB1bb という名前の変更可能な代替 PCB が含まれています。変更可能な代替 PCB により、アプリケーションは CHNG 呼び出しを用いて出力の宛先を変更し、出力を入力宛先以外の宛先に送ることができます。</p>
IMSID	IMSid	IMSID	GBL	リボジトリーからの定義済みリソースを持つ IMSID。
LANG	LPgmLang	LANG, DEFN	LCL	<p>言語インターフェース。この値は、IMS から取得されます。</p> <p>ASM/CBL Assembler または COBOL</p> <p>JAVA Java (Java 従属領域でのみ実行できます)。</p> <p>PASCAL PASCAL</p> <p>PLI PL/I</p>
MBR	MbrName	N/A	LCL	出力行を作成した IMSplex メンバー。
MDLN	LModelName	MODEL	LCL	モデル名。このリソースを作成するためのモデルとして使用された記述子の名前。DFSDSPG1 は、プログラム用の IMS 記述子名です。

表 176. QUERY PGMDDESC コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
MDLT	LModelType	MODEL	LCL	モデル・タイプ、RSC または DESC。RSC は、別のリソースをモデルとして使用して記述子が作成されたことを意味します。DESC は、記述子をモデルとして使用してリソースが作成されたことを意味します。
RBMP	BmpType	BMPTYPE, DEFN	GBL	BMP タイプ。この値はリポジトリから取得されます。
RDOPT	DOPT	DOPT, DEFN	GBL	動的オプションであるか (Y) ないか (N)。この値はリポジトリから取得されます。
RDFLT	Dflt	DEFN	GBL	デフォルト記述子であるか (Y) ないか (N)。この値はリポジトリから取得されます。
REPO	Repo	DEFN	GBL	出力行にリポジトリからの保管済みリソース定義が入っているかどうかを示します。 Y リポジトリ定義を示します。 (ブランク) ローカル定義を示します。
RFP	FP	FP, DEFN	GBL	高速機能専用プログラムであるか (E) ないか (N)。この値はリポジトリから取得されます。
RGNT	LRgnType	N/A	LCL	プログラムを実行できる領域タイプ。この値は、IMS から取得されます。一部のプログラムは、追加の領域タイプでも実行できます。例えば、プログラム・タイプ MSG で定義されたプログラムは、特定の条件下では BMP 内で実行できます。 BMP は、バッチ・メッセージ処理領域を示します。 FPU は、高速機能ユーティリティ領域を示します。IFP は、高速機能メッセージ処理領域を示します。 JBP は、Java バッチ・メッセージ処理領域を示します。 JMP は、Java メッセージ処理領域を示します。 MPP は、MPP 処理領域を示します。
RGPSB	GPSB	GPSB, DEFN	GBL	IMS によって生成される生成 PSB であるか (Y) ないか (N)。この値はリポジトリから取得されます。
RLANG	PgmLang	LANG, DEFN	GBL	言語インターフェース。この値はリポジトリから取得されます。
RRGNT	RgnType	N/A	GBL	プログラムを実行できる領域タイプ。この値はリポジトリから取得されます。
RSCHD	SchdType	SCHDTYPE, DEFN	GBL	スケジュール・タイプ。この値はリポジトリから取得されます。

表 176. QUERY PGMDESC コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
RSDNT	LDRsdnt	RESIDENT	LCL	<p>常駐オプション値。記述子から作成されたプログラムの場合、PSB を次回の IMS の再始動時にローカル・ストレージに常駐させるかどうかを示します。</p> <p>N 指定されたプログラム記述子リソースから作成されたプログラムの PSB は、ストレージに常駐にされません。PSB はスケジュールされた時間にロードされます。</p> <p>Y 指定されたプログラム記述子リソースから作成されたプログラムの PSB は、次回の IMS の再始動時にストレージに常駐にされます。次回の IMS の再始動時に、IMS は PSB をロードし、それを初期化します。常駐プログラムはローカル・ストレージからアクセスされるため、ACB を取得するための入出力が不要になります。</p>
RTLS	TranStat	TRANSTAT, DEFN	GBL	<p>トランザクション・レベル統計がログに記録されるか (Y) されないか (N)。この値はリポジトリから取得されます。</p>
RTMCR	TimeCreate	DEFN	GBL	<p>リポジトリでの作成時刻。これは、リポジトリ内で最初にリソースが作成された時刻です。</p>
RTMUP	TimeUpdate	DEFN	GBL	<p>リポジトリでの更新時刻。これは、リポジトリ内で最後にリソースが更新された時刻です。</p>
SCHD	LSchdType	SCHDTYPE, DEFN	LCL	<p>スケジュール・タイプ。この値は、IMS ブロックから取得されます。</p> <p>PARALLEL アプリケーション・プログラムは、同時に複数のメッセージ領域またはバッチ・メッセージ領域にスケジュールできます。</p> <p>SERIAL アプリケーション・プログラムは、一度に 1 つの領域にのみスケジュールできます。</p>
TLS	LTranStat	TRANSTAT, DEFN	LCL	<p>トランザクション・レベル統計がログに記録されるか (Y) されないか (N)。この値は、IMS ブロックから取得されます。</p> <p>N トランザクション・レベル統計のロギングはアクティブではありません。</p> <p>Y トランザクション・レベル統計のロギングがアクティブです。</p>

表 176. QUERY PGMDESC コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
TMAC	LTimeAccess	TIMESTAMP	LCL	記述子が最後にアクセスされた時刻。この値は、ローカル IMS から取得されます。最終アクセス時間は、ウォーム・スタート、緊急時再始動、EXPORT および IMPORT にまたがって保持されます。最終アクセス時間の更新はログに記録されません。再始動後は、最終アクセス時間は再始動チェックポイント・ログ・レコードに記録された時間を反映します。 プログラム記述子の場合、CREATE コマンドまたは DFSINSX0 出口がその記述子をモデルとして参照すると、最終アクセス時間が更新されます。
TMCR	LTimeCreate	TIMESTAMP	LCL	記述子が作成された時刻。この値は、ローカル IMS から取得されます。これは、CREATE PGMDESC コマンド、記述子を作成する IMPORT コマンド、または IMS の初期設定の結果です。作成時刻は、ウォーム・スタート、緊急時再始動、EXPORT および IMPORT にまたがって保持されます。
TMIM	LTimeImport	TIMESTAMP	LCL	記述子が最後にインポートされた時刻 (該当する場合)。インポート時刻は、ウォーム・スタートと緊急時再始動にまたがって保持されます。この値は、ローカル IMS から取得されます。
TMUP	LTimeUpdate	TIMESTAMP	LCL	UPDATE PGMDESC コマンドまたは IMPORT コマンドの結果として実行時リソース定義の属性が更新された最終時刻。更新時刻は、ウォーム・スタートや緊急時再始動を越えて保持されます。出力値は、ローカル IMS から取得されます。

戻りコード、理由コード、および完了コード

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 177. QUERY PGMDESC コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各記述子の行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、完了コード表を参照してください。

表 177. QUERY PGMDDESC コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000004'	X'00001010'	戻されるリソースは検出されませんでした。指定されたリソース名が無効であるか、以下のことが考えられます。 <ul style="list-style-type: none"> 指定したフィルターと一致するリソースがありませんでした。 SHOW(EXPORTNEEDED) が指定されていた場合は、IMSRSC リポジトリにエクスポートする必要があるリソースがありませんでした。
X'00000008'	X'00002004'	無効なコマンド・キーワードまたは無効なコマンド・キーワードの組み合わせ。
X'00000008'	X'00002040'	フィルターまたはフィルターの組み合わせが無効です。無効なフィルターは、DEFAULT キーワードで指定された無効なパラメーターである可能性があります。
X'0000000C'	X'00003000'	一部の記述子ではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各記述子の行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'0000000C'	X'00003004'	コマンドはどの記述子でも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各記述子の行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'00000010'	X'00004004'	CQS アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'00004018'	リソース構造が存在しないか、リソース構造が使用できません。
X'00000010'	X'00004100'	リソース構造が満杯です。
X'00000010'	X'00004104'	RM アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'00004108'	SCI アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'00004300'	MODBLKS のオンライン変更が有効なため、コマンドが許可されません (DFSDFxxx または DFSCGxxx が MODBLKS=OLC で定義されているか、または MODBLKS が定義されていません)。
X'00000010'	X'00004500'	IMS はリポジトリを使用できません。
X'00000010'	X'00004501'	RM はリポジトリには使用できません。
X'00000010'	X'00004502'	リポジトリは使用できません。
X'00000010'	X'00004503'	リポジトリは停止しています。
X'00000010'	X'00004504'	リポジトリ・スペアのリカバリーが進行中です。
X'00000010'	X'00004505'	IMS リソース・リストが存在しないか、IMS リソース・リスト内に該当するリソース・タイプのリソースが存在しません。
X'00000010'	X'00004507'	リポジトリ・アクセスは拒否されます。
X'00000010'	X'00004508'	リポジトリの最大入力長を超過しました。
X'00000010'	X'00004509'	RM データのバージョンは IMS データのバージョンよりも低いバージョンです。

表 177. QUERY PGMDESC コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000010'	X'0000450A'	リポジトリー・サーバーをシャットダウンしていません。
X'00000010'	X'0000450B'	リポジトリー・サーバーは使用できません。
X'00000010'	X'0000450C'	リポジトリー・サーバーは使用中です。
X'00000010'	X'0000450D'	RM は、IMSRSC リポジトリーに関連した一部の内部フィールドの定義に失敗しました。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファーを取得できませんでした。
X'00000014'	X'0000501C'	IMODULE GETMAIN エラー。
X'00000014'	X'00005100'	RM 要求エラー。
X'00000014'	X'00005104'	CQS エラー。
X'00000014'	X'00005108'	SCI 要求エラー。
X'00000014'	X'00005110'	リポジトリー・エラー。
X'00000014'	X'0000551C'	破損したリソース・リストが検出されたため、リポジトリー内のデータを表示する要求は拒否されました。リソース・リストが使用できないため、QUERY PGMDESC コマンドは拒否されました。IBM ソフトウェア・サポートに連絡してください。エラーになったコマンドの出力と、コマンドが実行されたローカル RM アドレス・スペースのダンプまたは IMSplex 内のすべての RM アドレス・スペースのダンプを送信してください。また、IMSRSC リポジトリー RID データ・セットと RMD データ・セットのコピーも送信してください。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。以下の表には、完了コードの説明が記載されています。

表 178. QUERY PGMDESC コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		プログラム記述子に対するコマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	プログラム記述子名が無効であるか、指定されたワイルドカード・パラメーターがどのプログラム記述子名にも一致しません。

例

以下に示すのは QUERY PGMDESC コマンドの例です。

QUERY PGMDESC コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

QRY PGMDESC SHOW(ALL)

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

DescName	MbrName	CC	LRgnType	LBMPType	LFP	LDOPT	LGPSB	LDRsdnt	LTranStat
DFS DSPG1	IMS1	0	MPP	N	N	N	N	N	N
DOPTDESC	IMS1	0	BMP	Y	N	Y	N	N	N
FPEDESC	IMS1	0	IFP	N	E	Y	N	N	N
GPSBDESC	IMS1	0	BMP	Y	N	N	Y	N	N
JAVADESC	IMS1	0	JMP	N	N	Y	N	N	N

(右にスクロール、画面 2)

DescName	MbrName	LRgnType	LPgmLang	LSchdType	LModelName	LModelType	LDeflt
DFS DSPG1	IMS1	MPP		PARALLEL			Y
DOPTDESC	IMS1	BMP		SERIAL	DFS DSPG1	DESC	N
FPEDESC	IMS1	IFP		SERIAL	DFS DSPG1	DESC	N
GPSBDESC	IMS1	BMP	ASM/CBL	SERIAL	DFS DSPG1	DESC	N
JAVADESC	IMS1	JMP	JAVA	SERIAL	DFS DSPG1	DESC	N

(右にスクロール、画面 3)

DescName	MbrName	LRgnType	LTimeCreate	LTimeUpdate
DFS DSPG1	IMS1	MPP	2011.181 15:22:52.55	
DOPTDESC	IMS1	BMP	2011.181 16:53:04.61	
FPEDESC	IMS1	IFP	2011.181 16:53:05.23	
GPSBDESC	IMS1	BMP	2011.181 16:53:06.09	
JAVADESC	IMS1	JMP	2011.181 16:53:06.75	

(右にスクロール、画面 4)

DescName	MbrName	LRgnType	LTimeAccess	LTimeImport	LDefnType
DFS DSPG1	IMS1	MPP	2011.181 16:53:08.86		IMS
DOPTDESC	IMS1	BMP			CREATE
FPEDESC	IMS1	IFP	2011.181 16:53:08.12		CREATE
GPSBDESC	IMS1	BMP			CREATE
JAVADESC	IMS1	JMP			CREATE

OM API 入力:

CMD(QUERY PGMDESC SHOW(ALL))

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OMIOM </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.182 00:32:39.456322</statime>
<stotime>2011.182 00:32:39.457450</stotime>
<staseq>C800770670E4215E</staseq>
<stoseq>C8007706712AA69E</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10173239</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>PGMDESC </kwd>
<input>QRY PGMDESC SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr slbl="DESC" llbl="DescName" sort="a" key="1" scroll="no" len="8"
  dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr slbl="MBR" llbl="MbrName" sort="a" key="4" scroll="no" len="8"
  dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr slbl="CC" llbl="CC" sort="n" key="0" scroll="yes" len="4"
  dtype="INT" align="right" skipb="no" scope="LCL" />
<hdr slbl="CCTXT" llbl="CCText" sort="n" key="0" scroll="yes" len="*"
  dtype="TEXT" align="left" scope="LCL" />
```

```

    dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" scope="LCL" />
<hdr s1bl="RGNT" l1bl="LRgnType" sort="n" key="0" scroll="no" len="7"
dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="BMPT" l1bl="LBMPType" sort="n" key="0" scroll="yes" len="7"
    dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="FP" l1bl="LFP" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
    dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="DOPT" l1bl="LDOPT" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
    dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="GPSB" l1bl="LGPSB" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
    dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="RSDNT" l1bl="LDRsdnt" sort="n" key="0" scroll="yes"
    len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" scope="LCL" />
<hdr s1bl="TLS" l1bl="LTranStat" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
    dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="LANG" l1bl="LPgmLang" sort="n" key="0" scroll="yes" len="8"
    dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="SCHD" l1bl="LSchdType" sort="n" key="0" scroll="yes" len="8"
    dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="MDLN" l1bl="LModelName" sort="n" key="0" scroll="yes"
    len="8" dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="MDLT" l1bl="LModelType" sort="n" key="0" scroll="yes"
    len="4" dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="DFLT" l1bl="LDflt" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
    dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="TMCR" l1bl="LTimeCreate" sort="n" key="0" scroll="yes"
    len="20" dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="TMUP" l1bl="LTimeUpdate" sort="n" key="0" scroll="yes"
    len="20" dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="TMAC" l1bl="LTimeAccess" sort="n" key="0" scroll="yes"
    len="20" dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="TMIM" l1bl="LTimeImport" sort="n" key="0" scroll="yes"
    len="20" dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="DFNT" l1bl="LDefnType" sort="n" key="0" scroll="yes" len="8"
    dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DESC(DOPTDESC) MBR(IMS1 ) CC( 0) RGNT(BMP) BMPT(Y) FP(N)
    DOPT(Y) GPSB(N) RSDNT(N) TLS(N) SCHD(SERIAL) MDLT(DESC)
    MDLN(DFSDSPG1) DFLT(N) TMCR(2011.181 16:53:04.61) DFNT(CREATE) </rsp>
<rsp>DESC(DFSDSPG1) MBR(IMS1 ) CC( 0) RGNT(MPP) BMPT(N) FP(N)
    DOPT(N) GPSB(N) RSDNT(N) TLS(N) SCHD(PARALLEL) DFLT(Y) TMCR(2011.181
    15:22:52.55) TMAC(2011.181 16:53:08.86) DFNT(IMS) </rsp>
<rsp>DESC(JAVADESC) MBR(IMS1 ) CC( 0) RGNT(JMP) BMPT(N) FP(N)
    DOPT(Y) GPSB(N) RSDNT(N) TLS(N) LANG(JAVA) SCHD(SERIAL) MDLT(DESC)
    MDLN(DFSDSPG1) DFLT(N) TMCR(2011.181 16:53:06.75) DFNT(CREATE) </rsp>
<rsp>DESC(FPEDESC) MBR(IMS1 ) CC( 0) RGNT(IFP) BMPT(N) FP(E)
    DOPT(Y) GPSB(N) RSDNT(N) TLS(N) SCHD(SERIAL) MDLT(DESC)
    MDLN(DFSDSPG1) DFLT(N) TMCR(2011.181 16:53:05.23) TMAC(2011.181
    16:53:08.12) DFNT(CREATE) </rsp>
<rsp>DESC(GPSBDESC) MBR(IMS1 ) CC( 0) RGNT(BMP) BMPT(Y) FP(N)
    DOPT(N) GPSB(Y) RSDNT(N) TLS(N) LANG(ASM/CBL) SCHD(SERIAL)
    MDLT(DESC) MDLN(DFSDSPG1) DFLT(N) TMCR(2011.181 16:53:06.09)
    DFNT(CREATE) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: すべてのプログラム記述子が、すべての出力フィールドと共に戻されています。プログラム記述子の出力フィールドのすべては 1 つの画面に収まらないため、ユーザーは右にスクロールして、追加の出力フィールドを見る必要があります。プログラム記述子名、その出力行を作成したメンバー名、およびプログラムを実行できる領域タイプが、各画面に表示されています。ブランクのフィールドは、指定されたプログラム記述子には適用されません。

QUERY PGMDESC コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
QUERY PGMDESC NAME(*) SHOW(DEFN,DOPT,GPSB,FP)
```

TSO SPOC 出力:

DescName	MbrName	CC	Repo	IMSid	LRgnType	FP	LFP	DOPT	LDOPT	GPSB	LGPSB
DFS DSPG1	IMS1	0		IMS1	MPP		N		N		N
DFS DSPG1	IMS2	0		IMS2	MPP		N		N		N
DFS DSPG1	IMS3	0		IMS3	MPP		N		N		N
DOPTDESC	IMS1	0	Y				N	Y		N	
DOPTDESC	IMS1	0		IMS1	BMP		N		Y		N
DOPTDESC	IMS2	0		IMS2	BMP		N		Y		N
DOPTDESC	IMS3	0		IMS3	BMP		N		Y		N
FPEDESC	IMS1	0	Y				E	Y		N	
FPEDESC	IMS1	0		IMS1	IFP		E		Y		N
FPEDESC	IMS2	0		IMS2	IFP		E		Y		N
FPEDESC	IMS3	0		IMS3	IFP		E		Y		N
GPSBDESC	IMS1	0	Y				N		N	Y	
GPSBDESC	IMS1	0		IMS1	BMP		N		N		Y
GPSBDESC	IMS2	0		IMS2	BMP		N		N		Y
GPSBDESC	IMS3	0		IMS3	BMP		N		N		Y

OM API 入力:

```
CMD(QUERY PGMDESC NAME(*) SHOW(DEFN,DOPT,GPSB,FP))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.182 00:43:45.113457</statime>
<stotime>2011.182 00:43:45.201311</stotime>
<staseq>C800798142D7121A</staseq>
<stoseq>C80079815849F99C</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10174345</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>PGMDESC </kwd>
<input>QUERY PGMDESC NAME(*) SHOW(DEFN,DOPT,GPSB,FP) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="DESC" l1bl="DescName" sort="a" key="1" scroll="no" len="8"
  dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" sort="a" key="4" scroll="no" len="8"
  dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" sort="n" key="0" scroll="yes" len="4"
  dtype="INT" align="right" skipb="no" scope="LCL" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" sort="n" key="0" scroll="yes" len="*"
  dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" scope="LCL" />
<hdr s1bl="REPO" l1bl="Repo" sort="d" key="2" scroll="no" len="1"
  dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" scope="LCL" />
<hdr s1bl="IMSID" l1bl="IMSid" sort="n" key="0" scroll="yes" len="4"
  dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" scope="LCL" />
<hdr s1bl="RGNT" l1bl="LRgnType" sort="n" key="0" scroll="no" len="7"
  dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="RFP" l1bl="FP" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1">
```

```

    dtype="CHAR" align="left" scope="GBL" />
<hdr s1bl="FP" l1bl="LFP" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
  dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="RDOPT" l1bl="DOPT" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
  dtype="CHAR" align="left" scope="GBL" />
<hdr s1bl="DOPT" l1bl="LDOPT" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
  dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1bl="RGPSB" l1bl="GPSB" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
  dtype="CHAR" align="left" scope="GBL" />
<hdr s1bl="GPSB" l1bl="LGPSB" sort="n" key="0" scroll="yes" len="1"
  dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DESC(DOPTDESC) MBR(IMS1 ) CC( 0) RGNT(BMP) IMSID(IMS1 )
  FP(N) DOPT(Y) GPSB(N) </rsp>
<rsp>DESC(DFSDSPG1) MBR(IMS1 ) CC( 0) RGNT(MPP) IMSID(IMS1 )
  FP(N) DOPT(N) GPSB(N) </rsp>
<rsp>DESC(JAVADESC) MBR(IMS1 ) CC( 0) RGNT(JMP) IMSID(IMS1 )
  FP(N) DOPT(Y) GPSB(N) </rsp>
<rsp>DESC(FPEDESC ) MBR(IMS1 ) CC( 0) RGNT(IFP) IMSID(IMS1 )
  FP(E) DOPT(Y) GPSB(N) </rsp>
<rsp>DESC(GPSBDESC) MBR(IMS1 ) CC( 0) RGNT(BMP) IMSID(IMS1 )
  FP(N) DOPT(N) GPSB(Y) </rsp>
<rsp>DESC(DOPTDESC) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RFP(N) RDOPT(Y)
  RGPSB(N) </rsp>
<rsp>DESC(FPEDESC ) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RFP(E) RDOPT(Y)
  RGPSB(N) </rsp>
<rsp>DESC(GPSBDESC) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RFP(N) RDOPT(N)
  RGPSB(Y) </rsp>
<rsp>DESC(JAVADESC) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RFP(N) RDOPT(Y)
  RGPSB(N) </rsp>
<rsp>DESC(DOPTDESC) MBR(IMS3 ) CC( 0) RGNT(BMP) IMSID(IMS3 )
  FP(N) DOPT(Y) GPSB(N) </rsp>
<rsp>DESC(DFSDSPG1) MBR(IMS3 ) CC( 0) RGNT(MPP) IMSID(IMS3 )
  FP(N) DOPT(N) GPSB(N) </rsp>
<rsp>DESC(JAVADESC) MBR(IMS3 ) CC( 0) RGNT(JMP) IMSID(IMS3 )
  FP(N) DOPT(Y) GPSB(N) </rsp>
<rsp>DESC(FPEDESC ) MBR(IMS3 ) CC( 0) RGNT(IFP) IMSID(IMS3 )
  FP(E) DOPT(Y) GPSB(N) </rsp>
<rsp>DESC(GPSBDESC) MBR(IMS3 ) CC( 0) RGNT(BMP) IMSID(IMS3 )
  FP(N) DOPT(N) GPSB(Y) </rsp>
<rsp>DESC(DOPTDESC) MBR(IMS2 ) CC( 0) RGNT(BMP) IMSID(IMS2 )
  FP(N) DOPT(Y) GPSB(N) </rsp>
<rsp>DESC(DFSDSPG1) MBR(IMS2 ) CC( 0) RGNT(MPP) IMSID(IMS2 )
  FP(N) DOPT(N) GPSB(N) </rsp>
<rsp>DESC(JAVADESC) MBR(IMS2 ) CC( 0) RGNT(JMP) IMSID(IMS2 )
  FP(N) DOPT(Y) GPSB(N) </rsp>
<rsp>DESC(FPEDESC ) MBR(IMS2 ) CC( 0) RGNT(IFP) IMSID(IMS2 )
  FP(E) DOPT(Y) GPSB(N) </rsp>
<rsp>DESC(GPSBDESC) MBR(IMS2 ) CC( 0) RGNT(BMP) IMSID(IMS2 )
  FP(N) DOPT(N) GPSB(Y) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: 指定されたリソースの保管済みリソース定義およびランタイム・リソース定義が戻されます。SHOW オプションが指定されているため、FP 定義、DOPT 定義、および GPSB 定義のみが返されています。ローカル IMS ランタイム定義が返されているため、デフォルト記述子を識別する「Dflt (デフォルト)」列が返されています。DFSDSPG1 はデフォルト記述子であり、それぞれの IMS システムにのみ存在します。IMS 生成のシステム記述子定義は、リポジトリにはありません。

QUERY PGMDESC コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
QUERY PGMDDESC NAME(PGMD0001,PGMD0002) SHOW(EXPORTNEEDED)
```

TSO SPOC 出力:


DescName	MbrName	CC	LRgnType	ExportNeeded
PGMD0001	IMS1	0	MPP	N
PGMD0002	IMS1	0	MPP	Y

OM API 入力:


```
CMD(QUERY PGMDDESC SHOW(EXPORTNEEDED))
```

説明: プログラム記述子 PGMD0001 が IMSRSC リポジトリにエクスポートされましたが、プログラム記述子 PGMD0002 は IMSRSC リポジトリにエクスポートされませんでした。

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

QUERY POOL コマンド

| QUERY POOL コマンドは、高速機能 64 ビット・バッファ・マネージャーによ
| って管理されているバッファの現在の使用状況、IMS 64 ビット・ストレージ・
| マネージャーによって管理されているストレージ・プール、64 ビット・キャッシ
| ュ・プール、および全機能データベース (OSAM または VSAM) バッファ・プー
| ルに関する情報を表示するために使用します。

DFSDFxxx メンバーでバッファ・プール定義を変更し、UPDATE POOL
TYPE(DBAS) コマンドを実行したときに、緊急時再始動が発生した場合は、
QUERY POOL TYPE(DBAS) コマンドを発行すると、更新が正常に行われたかどう
かを判別することができます。

サブセクション:

- 『環境』
- 602 ページの『構文』
- 603 ページの『キーワード』
- 604 ページの『使用上の注意』
- 605 ページの『出力フィールド』
- 613 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 614 ページの『例』

環境

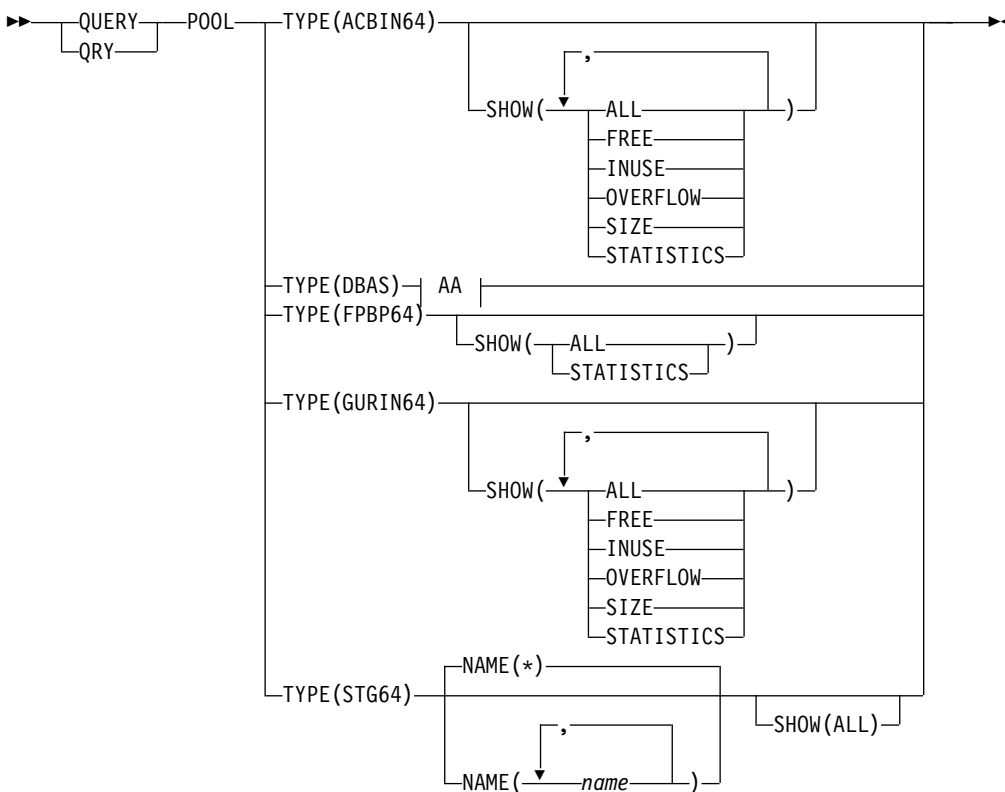
以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境
(DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 179. QUERY POOL コマンドおよびキーワードの有効環境

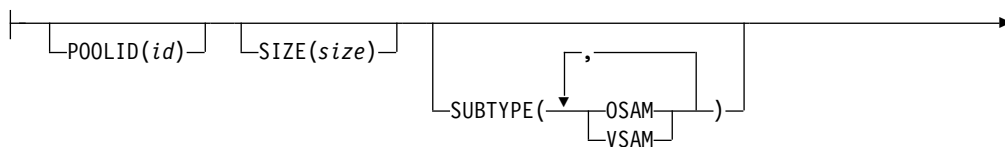
コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUERY POOL	X	X	X
TYPE	X	X	X
SHOW	X	X	X
NAME	X	X	X
POOLID	X	X	
SIZE	X	X	
SUBTYPE	X	X	

制約事項: 動的データベース・バッファ・プール機能は、DBCTL ウォーム・スタンバイ環境ではサポートされません。

構文



AA:





キーワード

以下のキーワードは、QUERY POOL コマンドに有効です。

TYPE()

情報を表示したいプールのタイプを指定する必須キーワード。プール・タイプは相互に排他的です。複数のタイプを指定した場合、コマンドは構文エラーでリジェクトされます。

FPBP64

高速機能 64 ビット・バッファ・プールに関する情報を戻します。

STG64

IMS 64 ビット・ストレージ・マネージャーによって管理されている 1 つ以上のプールに関する情報を戻します。

ACBIN64

64 ビットのキャッシュ・プールに関する情報を戻します。64 ビットの ACB ストレージ・プールは ACBIN64 です。

GURIN64

64 ビットのキャッシュ・プールに関する情報を戻します。GUR 呼び出しに対する応答として作成される XML 文書用の 64 ビット・キャッシュは GURIN64 です。

DBAS

全機能データベース (OSAM または VSAM) バッファ・プールに関する情報を戻します。

NAME()

表示する情報の対象である IMS 64 ビット・ストレージ・プールの名前を、1 から 16 文字で指定します。名前にはワイルドカード文字を含めることができます。名前は反復可能なパラメーターです。デフォルトは NAME(*) で、これは、IMS 64 ビット・ストレージ・マネージャーによって管理されているすべての定義済みストレージ・プールに関する情報を戻します。

POOLID()

特定の OSAM サブプールまたは VSAM 共用リソース・プールに割り当てられたユーザー定義 ID を指定します。この ID は、QUERY コマンド出力に表示するサブプールをフィルターに掛ける、1 文字から 4 文字の英数字フィールドです。このキーワードはオプションです。

SIZE()

フィルターに掛けるサブプール内のバッファのサイズを指定します。サイズ値は、QUERY コマンド出力に表示するサブプールのフィルターの役目を果たします。サイズ値は、512 バイトから 32768 バイトです。コマンドは、サイズ値を 512、1024、2048、およびそれ以降は 2048 バイトの倍数に切り上げます。1024 以上のコード指定は、1KB、2KB、4KB、およびそれ以降の値は、最大の 32KB まで、2KB の倍数に切り上げることができます。

SUBTYPE()

コマンドの発行者に返されるサブプール・タイプを指定します。このキーワードでは、以下のサブプール・タイプを指定できます。

OSAM

OSAM サブプール情報を表示することを指定します。

VSAM

VSAM サブプール情報を表示することを指定します。

OSAM,VSAM

OSAM サブプール情報および VSAM サブプール情報を表示することを指定します。

SHOW()

プール出力フィールドを戻すことを指定します。デフォルトはありません。

ALL

指定されたプール・タイプのすべての情報を戻します。

FREE

バッファ用にも制御データ用にも予約されていないプールのパーセンテージを戻します。SHOW(FREE) キーワードは、TYPE(ACBIN64) キーワードを指定した場合にのみ有効です。

INUSE

使用中のプールのパーセンテージを戻します。SHOW(INUSE) キーワードは、TYPE(ACBIN64) キーワードを指定した場合にのみ有効です。

OVERFLOW

プール内で使用中のオーバーフロー・バッファの総数を戻します。オーバーフロー・バッファは、標準の 64 ビット・キャッシュ・バッファに保管するには大きすぎるメンバーを保管するために使用されます。SHOW(OVERFLOW) キーワードは、TYPE(ACBIN64) キーワードを指定した場合にのみ有効です。

SIZE

ユーザーによって指定された 64 ビット・ストレージ・プールのサイズを戻します。SHOW(SIZE) キーワードは、TYPE(ACBIN64) キーワードを指定した場合にのみ有効です。

MEMBER

全機能データベース・バッファ・プール定義の入手元の IMS PROCLIB データ・セットのサブプールをリストし、アクティブ・メンバーを表示します。

STATISTICS

指定されたプール・タイプの特定期間の統計情報を戻します。

TYPE(DBAS) が指定されている場合、このオプションは、/DIS POOL DBAS タイプ 1 コマンドが発行されたときに表示される情報と同等です。

使用上の注意

QUERY POOL コマンドは、OM API を介してのみ指定することができます。

出力フィールド

以下の表は、QUERY POOL の出力フィールドを示しています。表の各列は、以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

フォーマット設定済み出力の出力フィールド用列見出しが含まれます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 180. QUERY POOL コマンド出力フィールド：

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
ACTBUF	ACTBUF	TYPE(ACBIN64) TYPE(GURIN64)	64 ビット・ストレージ・プール内のアクティブ・バッファ (つまり、バイナリー・フォーマットの有効な ACBLIB データ、または XML フォーマットのカatalog DBD または PSB レコード全体を含んでいるバッファ) の総数。
ADDS	Isrt	TYPE(ACBIN64) TYPE(GURIN64)	TYPE(ACBIN64) の場合は、IMS が 64 ビット・ストレージ・プールに ACB メンバーを挿入した回数。TYPE(GURIN64) の場合は、IMS が 64 ビット・ストレージ・プールにカatalog・レコードを挿入した回数。このカウントは、IMS の始動で初期化されます。
ALTREQ	AltReq BfAlt	TYPE(DBAS) SHOW(STATISTICS)	OSAM サブプールの場合は、このサブプールに対するバッファ変更呼び出しの数です。この数には、NEW BLOCK 呼び出しと BYTALT 呼び出しの数が含まれます。VSAM サブプールの場合は、変更された論理レコードの数です。
B64BT	64b_Buf	TYPE(FPBP64) SHOW(ALL)	個々のサブプールとエクステントのバッファに使用される 64 ビット・ストレージ。
B64BTOT	64b_Tot	TYPE(FPBP64)	個々のサブプールおよびエクステントに使用される 64 ビット・ストレージの総量と、64 ビット・ストレージ全体の合計。
BFSRCH	BfSrCh VRds	TYPE(DBAS) SHOW(STATISTICS)	OSAM サブプールの場合は、このサブプールに対するすべての LOCATE タイプの呼び出しによって検索されたバッファの数です。VSAM サブプールの場合は、VSAM 制御インターバルの読み取りの数です。
BFSTLW	BfStlW VWts	TYPE(DBAS) SHOW(STATISTICS)	OSAM サブプールの場合は、このサブプールに対してバッファ・スチール・ルーチンによって開始された単一ブロック書き込みの数です。VSAM サブプールの場合は、VSAM 制御インターバルの書き込みの数です。

表 180. QUERY POOL コマンド出力フィールド (続き):

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
BUFSIZE	Buf_Size	TYPE(FPBP64) SHOW(STATISTICS)	表示されるバッファースize。
BUFAVL	Buf_Avl	TYPE(FPBP64)	このサブプールまたはエクステントから使用できるバッファースizeの数、あるいはバッファースize・プール全体またはシステム全体の合計。システムの合計は DBF_TOTB 行にあります。
BUFS	BufSize	TYPE(DBAS)	バッファースize。
BUFUSE	Buf_Use	TYPE(FPBP64)	1 つのプロセス (IMS、従属領域、または外部スレッド (ODBM など)) によって、このサブプールまたはエクステントから使用されるバッファースizeの数、あるいはバッファースize・プール全体またはシステム全体の合計。システムの合計は DBF_TOTB 行にあります。
BUFA	Buf_A	TYPE(FPBP64) SHOW(ALL)	サブプールの基本セクションまたはエクステント内の使用可能なバッファースizeの数。この列には、サブプール全体の使用可能なバッファースizeの総数は含まれません。
BUFQ	Buf_Q	TYPE(FPBP64) SHOW(ALL)	サブプールの基本セクションまたはエクステント内の静止バッファースizeの数。この列には、サブプール全体の静止バッファースizeの総数は含まれません。
BUFT	Buf_T	TYPE(FPBP64) SHOW(ALL)	サブプールの基本セクションまたはエクステント内のバッファースizeの総数。この列には、サブプール全体のバッファースizeの総数は含まれません。
BUFU	Buf_U	TYPE(FPBP64) SHOW(ALL)	サブプールの基本セクションまたはエクステント内の使用済みバッファースizeの数。この列には、サブプール全体の使用済みバッファースizeの総数は含まれません。
CACHEOPT	CacheOption	TYPE(DBAS)	<p>DFSVMxx メンバー、または DFSDFxxx メンバーの OSAM セクションの IOBF ステートメントで指定されるサブプール・キャッシュ・オプション。このフィールドは、SHOW(ALL) オプションまたは SHOW(STATISTICS) オプションが使用されている場合に、OSAM バッファースizeに対して表示されます。</p> <p>サブプール・キャッシュ・オプションの値は、以下のいずれかです。</p> <p>ALL すべてのデータをキャッシュに入れます。</p> <p>CHG 変更されたデータだけをキャッシュに入れます。</p> <p>NO データ・キャッシングなし。</p>
CC	CC	N/A	完了コード。完了コードは、IMS が、指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示します。完了コードは常に戻されます。

表 180. QUERY POOL コマンド出力フィールド (続き):

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
DATECR	TimeCreate	TYPE(FPBP64) SHOW(ALL)	このサブプールまたはエクステントが作成された日付。
DELETES	Del	TYPE(ACBIN64) TYPE(GURIN64)	TYPE(ACBIN64) の場合は、IMS が 64 ビット・ストレージ・プールから ACB メンバーを削除した回数。TYPE(GURIN64) の場合は、IMS が 64 ビット・ストレージ・プールからカタログ・レコードを削除した回数。このカウントは、IMS の始動で初期化されます。
ECSA	ECSA_Buf	TYPE(FPBP64) SHOW(ALL)	個々のサブプールとエクステントに対するバッファに使用される ECSA。
ECSAT	ECSA_Tot	TYPE(FPBP64)	個々のサブプールおよびエクステントに使用される ECSA の総量と、ECSA 全体の合計。
ECSAB	ECSA_B	TYPE(FPBP64) SHOW(ALL)	各サブプールの基本セクションまたはエクステントによってバッファ用に使用された ECSA の量。この列には、サブプール全体の ECSA の総量は含まれません。
ECSAO	ECSA_O	TYPE(FPBP64) SHOW(ALL)	各サブプールの基本セクションまたはエクステントによって制御ブロック用に使用された ECSA の量。この列には、サブプール全体の ECSA の総量は含まれません。
EPVTT	EPVT_T	TYPE(FPBP64) SHOW(ALL)	サブプールの基本セクションまたはエクステントによって使用された EPVT の量。この列には、サブプール全体の EPVT の総量は含まれません。
EPVTTOT	EPVT_Tot	TYPE(FPBP64)	各プール、サブプール、およびエクステントによって使用された EPVT の総量。EPVT は、制御ブロックにのみ使用されます。ただし、FDBR は例外で、これは高速機能データベース・バッファおよび制御ブロックに EPVT を使用できます。
ERRORS	NumErrors	TYPE(DBAS) SHOW(STATISTICS)	OSAM の場合は、このサブプールの入出力エラーの総数、あるいは、このサブプールでの書き込みエラーが原因でプール内にロックされたバッファの数です。VSAM の場合は、現在サブプール内にある永続書き込みエラーの数、またはこの実行でのエラーの最大回数です。
EXTPER	%Ext	TYPE(FPBP64) SHOW(ALL)	エクステントが実行される前に使用される基本セクションの割合。この値は、バッファの使用量に基づいた時間に切り替わることがあります。

表 180. QUERY POOL コマンド出力フィールド (続き):

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
FINDS	Gets	TYPE(ACBIN64) TYPE(GURIN64)	TYPE(ACBIN64) の場合は、IMS が 64 ビット・ストレージ・プールからメンバーを取得しようとした回数。TYPE(GURIN64) の場合は、IMS が 64 ビット・ストレージ・プールからカタログ・レコードを取得しようとした回数。このカウントは、IMS の始動で初期化されます。
FIXOPT	FixOpt	TYPE(DBAS) SHOW(STATISTICS)	バッファおよびプールの固定オプション。OSAM の場合、Y/N は、DATA BUFFER PREFIX /DATA BUFFERS が固定であるかどうかを示します。VSAM の場合、Y/N は、INDEX BUFFERS / DATA BUFFER PREFIX / DATA BUFFERS が固定であるかどうかを示します。
FREE	Free	TYPE(ACBIN64) TYPE(GURIN64)	バッファ用にも制御データ用にも予約されていないプールのパーセンテージ。
FNDIPL	FndIpl SyncPt	TYPE(DBAS) SHOW(STATISTICS)	OSAM サブプールの場合、OSAM プールに既にデータがあるときのこのサブプールに対する LOCATE タイプの呼び出しの数です。VSAM サブプールの場合、システム・チェックポイント (同期点) 要求の数です。
HITS	Hits	TYPE(ACBIN64) TYPE(GURIN64)	64 ビット・プールからの GET 要求が成功した回数。この数値はパーセンテージとして表示されます。
HWM	HWM	TYPE(FPBP64) SHOW(STATISTICS)	使用されたバッファの最高水準点。
ID	PoolId	N/A	OSAM サブプール ID または VSAM 共用プール ID。
INUSE	Used	TYPE(ACBIN64) TYPE(GURIN64)	使用されているプールの割合。
LCTREQ	LctReq RRba	TYPE(DBAS) SHOW(STATISTICS)	OSAM サブプールの場合、このサブプールに対する LOCATE タイプの呼び出しの数です。VSAM サブプールの場合、RBA による検索要求の数です。
LGBFNM	Lmbr	TYPE(ACBIN64) TYPE(GURIN64)	64 ビット・ストレージ・プール内の最大メンバーの名前。
LGBFTP	Ltype	TYPE(ACBIN64) TYPE(GURIN64)	64 ビット・ストレージ・プール内の最大メンバーのリソース・タイプ。
LGBFSZ	Lsize	TYPE(ACBIN64) TYPE(GURIN64)	指定された最大メンバーのサイズ (キロバイト (KB) 単位)。
MBR	MbrName	N/A	データベース情報が表示された IMS の IMS ID。IMS ID は常に戻されます。

表 180. QUERY POOL コマンド出力フィールド (続き):

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
MBRS	Mbrs	TYPE(ACBIN64) TYPE(GURIN64)	64 ビット・ストレージ・プール内メンバーの総数。
MISSES	Miss		64 ビット・プールからの GET 要求が失敗した回数。この数値はパーセンテージとして表示されます。
NBUF	NBuf	TYPE(DBAS)	バッファースの数。
NEWBLK	NewBlk RKey	TYPE(DBAS) SHOW(STATISTICS)	OSAM サブプールの場合は、プール内に作成されたブロックの数です。VSAM サブプールの場合は、KEY による検索要求の数です。
OVERFLOW	オーバーフロー	TYPE(ACBIN64) TYPE(GURIN64)	プール内の使用中のオーバーフロー・バッファースの総数。オーバーフロー・バッファースは、標準の 64 ビット・キャッシュ・バッファースに保管するには大きすぎるメンバーを保管するために使用されます。
PMBR	ProcMbr	SHOW(MEMBER)	IMS PROCLIB データ・セットのメンバーの名前。
POOL	サブプール	TYPE(FPBP64) SHOW(ALL)	IMS 生成のサブプール名。ここで、xxxx は数値です。 DBFCxxxx DEDB データに使用する共通サブプール。バッファースは 64 ビットアドレス可能ストレージにあります。このサブプール名は、TYPE(FPBP64) の場合にのみ有効です。 DBFXxxxx IMS 内部バッファースなどの他のすべてのバッファース要求に使用されるシステム・サブプール。バッファースは ECSA にあります。このサブプール名は、TYPE(FPBP64) の場合にのみ有効です。
		TYPE(ACBIN64) TYPE(GURIN64)	サブプール・タイプ。 ACBIN64 64 ビット ACB ストレージ・プール。 GURIN64 GUR 呼び出しへの応答として作成される XML 文書用の 64 ビット・キャッシュ。
		TYPE(DBAS)	サブプール・タイプ。 OSAM OSAM サブプール。 VSAM-D VSAM データ・サブプール。 VSAM-I VSAM 索引サブプール。

表 180. QUERY POOL コマンド出力フィールド (続き):

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
PURGRQ	PurgRq NRec	TYPE(DBAS) SHOW(STATISTICS)	OSAM サブプールの場合は、このサブプールに対する PURGE 呼び出しの数です。VSAM サブプールの場合は、作成された新規 VSAM 論理レコードの数です。
PURGWR	PurgWr HSR-S	TYPE(DBAS) SHOW(STATISTICS)	OSAM サブプールの場合は、ページによって書き込まれたバッファースの数です。VSAM サブプールの場合は、ハイパースペース・バッファースからの成功した VSAM 読み取りの数です。
QUIBUF	Qui_Buf	TYPE(FPBP64) SHOW(ALL)	サブプールのために静止されているバッファースの総数、あるいはシステム内の静止されたバッファースの総数。システムの合計は DBF_TOTB 行にあります。
RDREQ	RdReq Found	TYPE(DBAS) SHOW(STATISTICS)	OSAM サブプールの場合は、このサブプールに対する READ 入出力要求の数です。VSAM サブプールの場合は、VSAM がルックアサイドを使用してサブプール内で検出した制御インターバルの数です。
SECT	Section	TYPE(DBAS) SHOW(MEMBER)	処理された DFSDFxxx メンバーまたは DFSVSMxx メンバーのセクション。
SIZE	Size	TYPE(FPBP64) SHOW(ALL)	ユーザーが指定する 64 ビット・バッファース・プールまたは 64 ビット・ストレージ・プールのサイズ。
SMBFNM	Smbr	TYPE(ACBIN64) TYPE(GURIN64)	64 ビット・ストレージ・プール内の最小メンバーの名前。
SMBFTP	Stype		64 ビット・ストレージ・プール内の最小メンバーのリソース・タイプ。
SMBFSZ	Ssize		指定された最小メンバーのサイズ (キロバイト (K) 単位)。
SPT	SPT	TYPE(FPBP64) SHOW(STATISTICS)	このフィールドは、SHOW(STATISTICS) の場合にのみ返されます。SHOW(ALL) の場合は、TYPE フィールドを参照してください。プール・タイプは、以下のいずれかです。 C 共通 (64 ビット) バッファース。 S システム (ESCA) バッファース

表 180. QUERY POOL コマンド出力フィールド (続き):

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
STATUS	Status	TYPE(FPBP64) SHOW(ALL)	<p>サブプールまたはエクステントの状況。サブプールまたはエクステントが使用中の場合、このフィールドはブランクです。すべてのサブプールおよびエクステントが使用中の場合、この列は表示されません。表示される状況の説明は、以下のとおりです。</p> <p>Comp このサブプールは圧縮中です。この状況は、サブプールの 1 つ以上のエクステントが不要になり、サービスが廃止されることを示しています。</p> <p>Dlet このサブプールまたはエクステントは削除中です。関連するバッファはバッファの合計にカウントされませんが、関連するストレージはストレージの合計にカウントされます。</p> <p>Qsc このサブプール・エクステントは、サブプールの圧縮または削除の一部として静止中です。</p> <p>QscW このサブプールまたはエクステントは、静止操作を完了する前に返されるバッファを待機中です。</p>
STG	StgType	TYPE(STG64) SHOW(ALL)	<p>ストレージ・プールに割り振られているストレージのタイプは、Common または Private です。</p>
TOTBUF	Tot_Buf	TYPE(FPBP64)	<p>このサブプール内のバッファの総数 (基本セクションおよびエクステントを含む)、またはシステム全体のバッファの総数。システムの合計は DBF_TOTB 行にあります。</p>
TOTBUF	TOTBUF	TYPE(ACBIN64) TYPE(GURIN64)	<p>64 ビット・ストレージ・プール内のバッファの総数 (現在 ACB メンバー・データもカタログ・メンバー・データも含んでいないバッファを含む)。</p>
TYPE	タイプ	TYPE(FPBP64) SHOW(ALL)	<p>このフィールドは、SHOW(ALL) の場合にのみ返されます。SHOW(STATISTICS) の場合は、SPT フィールドを参照してください。</p> <p>プール・タイプは、以下のいずれかです。</p> <p>G この行にはバッファ・プール全体の総数が含まれます。</p> <p>Tot サブプールとエクステントの合計値。SUBPOOL 列にはサブプールの名前が入ります。</p> <p>Base これはサブプールの基本セクションです。エクステント値は含まれません。</p> <p>Ext これはサブプールのエクステントです。サブプールの基本セクションは含まれません。</p>

表 180. QUERY POOL コマンド出力フィールド (続き):

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
TYPEID	T_id	TYPE(FPBP64) SHOW(ALL)	この行に記述されるサブプールのタイプとその状況の両方を示す、結合された数値 ID。 10 サブプールの合計値。 15 使用中のサブプールの基本セクション。 20 使用中のサブプール・エクステント。 25 静止中のサブプール・エクステント。 30 返されるバッファを待機中のサブプール・エクステント。 35 削除中のサブプール・エクステント。 50 削除中のサブプールの基本セクション。 55 削除中のサブプールの基本セクション。 60 削除中であり、返されるバッファを待機中のサブプールの基本セクション。 65 削除中のサブプールの一部である、静止中のサブプール・エクステント。 70 削除中のサブプールの一部であり、返される 1 つ以上のバッファを現在待機中のサブプール・エクステント。 75 削除中のサブプール・エクステント。このエクステントは、削除中のサブプールの一部です。
USE	%Use	TYPE(FPBP64)	サブプールまたはエクステントのプロセスで現在使用されているバッファの割合。
WBSYID	WBsyId HSW-S	TYPE(DBAS) SHOW(STATISTICS)	OSAM サブプールの場合は、使用中の ID のために待機していたこのサブプールに対する LOCATE タイプの呼び出しの数です。VSAM サブプールの場合は、ハイパースペース・バッファへの成功した VSAM 書き込みの数です。
WBSYRD	WBsyRd HS-R-F	TYPE(DBAS) SHOW(STATISTICS)	OSAM サブプールの場合は、使用中のバッファ読み取りのために待機していたこのサブプールに対する LOCATE タイプの呼び出しの数です。VSAM サブプールの場合は、ハイパースペース・バッファからの失敗した VSAM 読み取りの数です。これは、ハイパースペースからの VSAM READ 要求が、結果的に DASD 入出力となった回数を示します。
WBSYWR	WBsyWr HSNBf	TYPE(DBAS) SHOW(STATISTICS)	OSAM サブプールの場合は、使用中の書き込みのために待機していたこのサブプールに対する LOCATE タイプの呼び出しの数です。VSAM サブプールの場合は、このサブプールに対して定義されたハイパースペース・バッファの数です。
WNOBFR	WNoBfr	TYPE(DBAS) SHOW(STATISTICS)	スチールに使用可能なバッファがなかったため待機していたこのサブプールに対するバッファ・スチール要求の数。このフィールドは OSAM サブプールにのみ適用されます。

表 180. QUERY POOL コマンド出力フィールド (続き):

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
WRLSEO	WRLseO	TYPE(DBAS)	OSAM サブプールの場合は、所有権が解放されるのを待機していたこのサブプールに対するバッファ・スチール要求またはバッファ・ページ要求の数です。VSAM サブプールの場合は、ハイパースペース・バッファへの失敗した VSAM 書き込みの数です。これは、ハイパースペースへの VSAM WRITE 要求が、結果的に DASD 入出力となった回数を示します。
	HS-W-F	SHOW(STATISTICS)	

戻りコード、理由コード、および完了コード

IMS 戻りコードと理由コードは、QUERY POOL コマンドによって OM に戻されます。QUERY POOL コマンドの結果として返される可能性のある OM 戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 181. QUERY POOL コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、614 ページの表 182 を参照してください。
X'00000004'	X00001010	コマンドは、指定されたフィルターに一致するリソースが存在しないことを検出しました。
X'00000008'	X'00002004'	無効なコマンド・キーワードまたは無効なコマンド・キーワードの組み合わせ。
X'0000000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'0000000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'00000010'	X'00004016'	このコマンドは DCCTL 環境では無効であるために失敗しました。
X'00000010'	X'00004024'	この IMS システムに対して高速機能が使用可能でないため、表示するデータがありません。
X'00000010'	X'00004404'	高速機能 64 ビット・バッファ・マネージャーが使用可能でないため、表示するデータがありません。
X'00000014'	X'00005000'	IMODULE GETSTOR エラー。

表 181. QUERY POOL コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できませんでした。
X'00000014'	X'00005010'	ラッチを取得できません。
X'00000014'	X'00005FFF'	内部エラーが発生したため、QUERY POOL コマンドを処理できませんでした。

以下の表には、完了コードの説明が記載されています。このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 182. QUERY POOL コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0	X'00000000'	QUERY POOL コマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	指定されたプールが存在しないか、指定されたワイルドカード名が既存のどのプール名にも一致しません。

この QUERY POOL コマンドの一部として、完了コードは出されません。予想される出力では、使用可能なプールまたはサブプールの情報が表示されます。

例

以下に示すのは QUERY POOL コマンドの例です。

QUERY POOL コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

QUERY POOL TYPE(FPBP64) SHOW(ALL)

TSO SPOC 出力:

```

Response for: QUERY POOL TYPE(FPBP64) SHOW(ALL)                More:  +>
Subpool MbrName  CC  Size Type Status T_id Tot_Buf Buf_T Buf_Use Buf_U Buf_Av1 Buf_A %Use %Ext Qui_Buf Buf_Q
DBF_MAXB SYS3
DBF_TOTB SYS3
DBFC0001 SYS3      0 512 Tot      10      744      7      737      136
DBFC0001 SYS3      0 512 Base     15      608      0      608      0
DBFC0001 SYS3      0 512 Ext      20      32      0      32      0 300      0
DBFC0001 SYS3      0 512 Ext      20      96      0      96      0      0
DBFC0001 SYS3      0 512 Ext      20      96      0      96      0      0
DBFC0001 SYS3      0 512 Ext      20      96      0      96      0      0
DBFC0001 SYS3      0 512 Ext      20      64      0      64      0      0
DBFC0001 SYS3      0 512 Ext      20      64      0      64      0      0
DBFC0001 SYS3      0 512 Ext      20      64      0      64      0      0
DBFC0001 SYS3      0 512 Ext      20      32      0      32      0      0
DBFC0001 SYS3      0 512 Ext      20      32      0      32      0      0
DBFC0001 SYS3      0 512 Ext      20      32      0      32      0      0
DBFC0003 SYS3      0 2048 Tot     10      16      0      16      0      0
DBFC0003 SYS3      0 2048 Base    15      16      0      16      0 100      0
DBFC0005 SYS3      0 4096 Tot     10      64      0      64      0      0
DBFC0005 SYS3      0 4096 Base    15      16      0      16      0 100      0
DBFC0005 SYS3      0 4096 Ext     20      16      0      16      0      0
DBFC0005 SYS3      0 4096 Ext     20      16      0      16      0      0
DBFC0005 SYS3      0 4096 Ext     20      16      0      16      0      0
DBFC0005 SYS3      0 4096 Ext     20      16      0      16      0      0
DBFC0006 SYS3      0 1024 Tot     10      16      0      16      0      0
DBFC0006 SYS3      0 1024 Base    15      16      0      16      0 100      0

```

DBFS0001	SYS3		512	Tot	10			0		0										32
DBFS0001	SYS3	0		Base	Qsc	55		0		0		0	N/A	50						32
DBFS0003	SYS3		2048	Tot	10		8	0		0	8									0
DBFS0003	SYS3	0		Base	15		8	8		0	0	8	8	0	100					0
DBFS0004	SYS3		4096	Tot	10		8	0		0	8									0
DBFS0004	SYS3	0		Base	15		8	8		0	0	8	8	0	100					0
DBFS0005	SYS3		1024	Tot	10		8	0		0	8									0
DBFS0005	SYS3	0		Base	15		8	8		0	0	8	8	0	100					0
DBFS0006	SYS3		512	Tot	10		16	7		7	9									0
DBFS0006	SYS3	0		Base	15		16	16		7	7	9	9	43	100					0

(右にスクロールして、画面 2 へ)

Subpool	Size	Type	EPVT_Tot	EPVT_T	ECSA_Tot	ECSA_Buf	ECSA_B	ECSA_Oth	ECSA_O	64b_Tot	64b_Buf	TimeCreate
DBF_MAXB											2048M	
DBF_TOTB		G	4K		510K	108K		397K		804K		
DBFC0001	512	Tot	2K					266K		304K		
DBFC0001		Base		1K					18K		16K	2010.148 15:05:04.95
DBFC0001		Ext		156					42K		48K	2010.148 15:25:02.58
DBFC0001		Ext		156					42K		48K	2010.148 15:25:02.51
DBFC0001		Ext		156					42K		48K	2010.148 15:25:02.41
DBFC0001		Ext		156					28K		32K	2010.148 15:25:02.36
DBFC0001		Ext		156					28K		32K	2010.148 15:24:55.49
DBFC0001		Ext		156					28K		32K	2010.148 15:17:10.70
DBFC0001		Ext		156					14K		16K	2010.148 15:17:10.29
DBFC0001		Ext		156					14K		16K	2010.148 15:17:09.72
DBFC0001		Ext		156					14K		16K	2010.148 15:17:09.16
DBFC0003	2048	Tot	156					7K		32K		
DBFC0003		Base		156					7K		32K	2010.148 15:05:04.95
DBFC0005	4096	Tot	936					28K		256K		
DBFC0005		Base		468					8K		64K	2010.148 15:09:05.45
DBFC0005		Ext		156					7K		64K	2010.148 15:24:43.27
DBFC0005		Ext		156					7K		64K	2010.148 15:24:43.24
DBFC0005		Ext		156					7K		64K	2010.148 15:24:43.29
DBFC0006	1024	Tot	0					7K		16K		
DBFC0006		Base		0					7K		16K	2010.148 15:09:05.46
DBFS0001	512	Tot	156		30K		14K					
DBFS0001		Base		156	30K		14K					2010.148 15:05:04.95
DBFS0003	2048	Tot	156		20K		3K					
DBFS0003		Base		156	19K		4K					2010.148 15:05:04.95
DBFS0004	4096	Tot	156		36K		3K					
DBFS0004		Base		156	35K		4K					2010.148 15:09:05.46
DBFS0005	1024	Tot	0		12K		3K					
DBFS0005		Base		0	11K		4K					2010.148 15:09:05.46
DBFS0006	512	Tot	0		15K		7K					
DBFS0006		Base		0	15K		7K					2010.148 15:09:05.46

OM API 入力:

CMD (QUERY POOL TYPE(FBPB64) SHOW(ALL))

OM API 出力:

```

<cmdsphdr>
<hdr s1bl="POOL" l1bl="Subpool" scope="LCL" sort="a" key="2"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="right" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="no"
  len="4" dtype="CHAR" align="right" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1bl="SIZE" l1bl="Size" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="no"
  len="6" dtype="CHAR" align="right" />
<hdr s1bl="TYPE" l1bl="Type" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="no"
  len="1" dtype="CHAR" align="center" />
<hdr s1bl="TOTBUF" l1bl="Tot_Buf" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="CHAR" align="right" />
<hdr s1bl="USE" l1bl="Buf_Use" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="CHAR" align="right" />
<hdr s1bl="ABUF" l1bl="Buf_Av1" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="CHAR" align="right" />
<hdr s1bl="PUSE" l1bl="%Use" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="3" dtype="CHAR" align="right" />

```

```

<hdr s1bl="EXTPER" l1bl="%Ext" scope="LCL" sort="n" key="yes"
  scroll="yes" len="3" dtype="CHAR" align="right" />
<hdr s1bl="ECSAT" l1bl="ECSA_Tot" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="CHAR" align="right" />
<hdr s1bl="ECSA" l1bl="ECSA_Buf" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="CHAR" align="right" />
<hdr s1bl="ECSA0" l1bl="ECSA_Oth" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="CHAR" align="right" />
<hdr s1bl="B64BT" l1bl="64b_Tot" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="n" len="5" dtype="CHAR" align="right" />
<hdr s1bl="B64B" l1bl="64b_Buf" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="n"
  len="5" dtype="CHAR" align="right" />
<hdr s1bl="TMCR" l1bl="TimeCreate" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>POOL(DBF_MAXB) MBR(SYS3 ) B64BT( 100M)</rsp>
<rsp>POOL(DBF_TOTB) MBR(SYS3 ) TYPE(G) TOTBUF( 219) USE(
  0) ABUF( 219) ECSAT(62680) ECSA( 92K) ECSA0( 4K) B64B( 280K)
  B64BT( 280K)</rsp>
<rsp>POOL(DBFS0004) MBR(SYS3 ) SIZE( 4096) TYPE(A)
  TOTBUF( 8) USE( ) ABUF( 8) ECSAT( 32K)</rsp>
<rsp>POOL(DBFS0004) MBR(SYS3 ) CC( 0) TYPE(B) TOTBUF( 8) USE(
  0) ABUF( 8) PUSE( 0) EXTPER(100) ECSA( 32K) ECSA0( 3K)
  TMCR(2010.088 14:26:14.83)</rsp>
<rsp>POOL(DBFC0004) MBR(SYS3 ) SIZE( 4096) TYPE(A)
  TOTBUF( 47) USE( ) ABUF( 47) ECSAT( 0) B64BT( 188K)</rsp>
<rsp>POOL(DBFC0004) MBR(SYS3 ) CC( 0) TYPE(B) TOTBUF( 47) USE(
  0) ABUF( 47) PUSE( 0) EXTPER( 34) B64B( 188K) ECSA0( 20K)
  TMCR(2010.088 14:26:14.83)</rsp>
<rsp>POOL(DBFS0003) MBR(SYS3 ) SIZE( 2048) TYPE(A)
  TOTBUF( 8) USE( ) ABUF( 8) ECSAT( 16K)</rsp>
<rsp>POOL(DBFS0003) MBR(SYS3 ) CC( 0) TYPE(B) TOTBUF( 8) USE(
  0) ABUF( 8) PUSE( 0) EXTPER(100) ECSA( 16K) ECSA0( 3K)
  TMCR(2010.088 14:26:14.83)</rsp>
<rsp>POOL(DBFC0003) MBR(SYS3 ) SIZE( 2048) TYPE(A)
  TOTBUF( 16) USE( ) ABUF( 16) ECSAT( 0) B64BT( 32K)</rsp>
<rsp>POOL(DBFC0003) MBR(SYS3 ) CC( 0) TYPE(B) TOTBUF( 16) USE(
  0) ABUF( 16) PUSE( 0) EXTPER(100) B64B( 32K) ECSA0( 7K)
  TMCR(2010.088 14:26:14.83)</rsp>
<rsp>POOL(DBFS0002) MBR(SYS3 ) SIZE( 1024) TYPE(A)
  TOTBUF( 28) USE( ) ABUF( 28) ECSAT( 28K)</rsp>
<rsp>POOL(DBFS0002) MBR(SYS3 ) CC( 0) TYPE(B) TOTBUF( 28) USE(
  0) ABUF( 28) PUSE( 0) EXTPER( 28) ECSA( 28K) ECSA0( 12K)
  TMCR(2010.088 14:26:14.83)</rsp>
<rsp>POOL(DBFC0002) MBR(SYS3 ) SIZE( 1024) TYPE(A)
  TOTBUF( 40) USE( ) ABUF( 40) ECSAT( 0) B64BT( 40K)</rsp>
<rsp>POOL(DBFC0002) MBR(SYS3 ) CC( 0) TYPE(B) TOTBUF( 40) USE(
  0) ABUF( 40) PUSE( 0) EXTPER( 40) B64B( 40K) ECSA0( 17K)
  TMCR(2010.088 14:26:14.83)</rsp>
<rsp>POOL(DBFS0001) MBR(SYS3 ) SIZE( 512) TYPE(A)
  TOTBUF( 32) USE( ) ABUF( 32) ECSAT( 16K)</rsp>
<rsp>POOL(DBFS0001) MBR(SYS3 ) CC( 0) TYPE(B) TOTBUF( 32) USE(
  0) ABUF( 32) PUSE( 0) EXTPER( 50) ECSA( 16K) ECSA0( 14K)
  TMCR(2010.088 14:26:14.83)</rsp>
<rsp>POOL(DBFC0001) MBR(SYS3 ) SIZE( 512) TYPE(A)
  TOTBUF( 40) USE( ) ABUF( 40) ECSAT( 0) B64BT( 20K)</rsp>
<rsp>POOL(DBFC0001) MBR(SYS3 ) CC( 0) TYPE(B) TOTBUF( 40) USE(
  0) ABUF( 40) PUSE( 0) EXTPER( 80) B64B( 20K) ECSA0( 17K)
  TMCR(2010.088 14:26:14.83)</rsp>
</cmdrspdata>

```

説明: この例では、高速機能 64 ビット DEDB バッファ・プールに関する情報が表示されます。個々のサブプールは別々の出力行に表示されます。

QUERY POOL コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

QRY POOL TYPE(ACBIN64)

TSO SPOC 出力:

PoolName	Type	MbrName	CC
ACBIN64	Cache64	IMS1	0

OM API 入力:

CMD (QRY POOL TYPE(ACBIN64))

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2010.090 17:04:30.525184</statime>
<stotime>2010.090 17:04:30.525588</stotime>
<staseq>C5C2C060F8700392</staseq>
<stoseq>C5C2C060F8894DD2</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10100430</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>SYS3 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>POOL </kwd>
<input>QRY POOL TYPE(ACBIN64) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="POOLNM" l1b1="PoolName" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="TYPE" l1b1="Type" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBRNAME" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="right" skipb="no" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>POOLNM(ACBIN64 ) TYPE(Cache64 ) MBRNAME(SYS3 ) CC( 0)
</rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>
```

説明: この例では、64 ビットのキャッシュ・プールに関する情報が表示されます。

QUERY POOL コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

QRY POOL TYPE(ACBIN64) SHOW(ALL)

TSO SPOC 出力:

PoolName	Type	CC	Size	Mbrs	Used	Free	Overflow	Gets	Hit	Miss
ACBIN64	Cache64	0	2	3700	25	75	5	10000	9603	397

Isrt	Del	Lmbr	Ltype	Lsize	Smbr	Stype	Ssize
300	20	PAYROLL	PSB	2000	DEBIT	INT	100

OM API 入力:

CMD (QRY POOL TYPE(ACBIN64) SHOW(ALL))

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2010.090 18:17:16.097203</statime>
<stotime>2010.090 18:17:16.097784</stotime>
<staseq>C5C2D0A44DEB3E15</staseq>
<stoseq>C5C2D0A44E0F8CD5</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10111716</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>SYS3 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>POOL </kwd>
<input>QRY POOL TYPE(ACBIN64) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdsphdr>
<hdr s1b1="POOLNM" l1b1="PoolName" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="TYPE" l1b1="Type" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBRNAME" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="POOLSZ" l1b1="Size" scope="LCL" sort="a" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="Mbrs" scope="LCL" sort="a" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="INUSE" l1b1="Used" scope="LCL" sort="a" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="FREE" l1b1="Free" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="OVERFLOW" l1b1="Overflow" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="FINDS" l1b1="Gets" scope="LCL" sort="a" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="HITS" l1b1="Hit" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="MISSES" l1b1="Miss" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="ADDS" l1b1="Isrt" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="DELETES" l1b1="Del" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="LGBFNM" l1b1="Lmbr" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="LGBFTP" l1b1="Ltype" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="LGBFSZ" l1b1="Lsize" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="SMBFNM" l1b1="Smbr" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="SMBFTP" l1b1="Stype" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="SMBFSZ" l1b1="Ssize" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="right" skipb="no" />
```

```

</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>POOLNM(ACBIN64 ) TYPE(Cache64 ) MBRNAME(SYS3 ) CC( 0)
  POOLSZ( 5120) MBRs( 20) INUSE( 0) FREE( 100)
  OVERFLOW( 0) FINDS( 0) HITS( 0) MISSES( 0)
  ADDS( 14) DELETES( 0) LGBFNM(BMP255 ) LGBFTP(JCB )
  LGBFSZ( 45056) SMBFNM(DX41SK01) SMBFTP(DMB ) SMBFSZ( 512)
</rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: この例では、64 ビットのキャッシュ・プールに関する詳細情報が表示されます。

QUERY POOL コマンドの例 4

TSO SPOC 入力:

```
QUERY POOL TYPE(FPBP64) SHOW(STATISTICS)
```

TSO SPOC 出力:

```

Response for: QUERY POOL TYPE(FPBP64) SHOW(STATISTICS)
More: >
Buf_Size MbrName  CC SPT Tot_Buf Buf_Use Buf_Av1 %Use  HWM EPVT_Tot ECSA_Tot 64b_Tot
Total    SYS3      0 0 224 0 224 0 0 157 269K 344K
  512    SYS3      0 0 32 0 32 0 0 157 15K 16K
 1024    SYS3      0 0 40 0 40 0 0 156 18K 40K
 2048    SYS3      0 0 16 0 16 0 0 157 8K 32K
 4096    SYS3      0 0 32 0 32 0 0 157 15K 128K
 8192    SYS3      0 0 16 0 16 0 0 157 8K 128K
  512    SYS3      0 0 32 0 32 0 0 157 31K 0
 1024    SYS3      0 0 32 0 32 0 0 157 47K 0
 2048    SYS3      0 0 8 0 8 0 0 156 20K 0
 4096    SYS3      0 0 8 0 8 0 0 156 36K 0
 8192    SYS3      0 0 8 0 8 0 0 156 68K 0

```

OM API 入力:

```
CMD (QUERY POOL TYPE(FPBP64) SHOW(STATISTICS))
```

OM API 出力:

```

<hdr s1b1="BSIZE" l1b1="Buf_Size" sort="a" key="3" scroll="no" len="5"
  dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" sort="a" key="1" scroll="no" len="8"
  dtype="CHAR" align="right" scope="LCL" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" sort="n" key="0" scroll="no" len="4"
  dtype="CHAR" align="right" skipb="no" scope="LCL" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" sort="n" key="0" scroll="yes" len="*"
  dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" scope="LCL" />
<hdr s1b1="SPT" l1b1="SPT" sort="a" key="2" scroll="no" len="1"
  dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1b1="TOTBUF" l1b1="Tot_Buf" sort="n" key="0" scroll="yes" len="5"
  dtype="CHAR" align="right" scope="LCL" />
<hdr s1b1="USE" l1b1="Buf_Use" sort="n" key="0" scroll="yes" len="5"
  dtype="CHAR" align="right" scope="LCL" />
<hdr s1b1="ABUF" l1b1="Buf_Av1" sort="n" key="0" scroll="yes" len="5"
  dtype="CHAR" align="right" scope="LCL" />
<hdr s1b1="PUSE" l1b1="%Use" sort="n" key="0" scroll="yes" len="3"
  dtype="CHAR" align="right" scope="LCL" />
<hdr s1b1="HWM" l1b1="HWM" sort="n" key="0" scroll="yes" len="5"
  dtype="CHAR" align="left" scope="LCL" />
<hdr s1b1="EPVTTOT" l1b1="EPVT_Tot" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="5" dtype="CHAR" align="right" scope="LCL" />
<hdr s1b1="ECSAT" l1b1="ECSA_Tot" sort="n" key="0" scroll="yes" len="5"
  dtype="CHAR" align="right" scope="LCL" />

```

```

<hdr s1b1="B64BTOT" l1b1="64b_Tot" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="5" dtype="CHAR" align="right" scope="LCL" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>
      MBR(SYS3      )          BSIZE(Total) TOTBUF( 224)
USE(    0) HWM(    ) ABUF( 224) PUSE(  0) ECSAT( 269K) EPVTTOT(
2K) B64BTOT( 344K)</rsp>
<rsp>
      MBR(SYS3      ) CC(  0) SPT(S) BSIZE( 512)
TOTBUF(  32) USE(  0) ABUF(  32) PUSE(  0) HWM(  0) ECSAT(
31K) EPVTTOT( 157) B64BTOT(  0)</rsp>
<rsp>
      MBR(SYS3      ) CC(  0) SPT(S) BSIZE( 1024)
TOTBUF(  32) USE(  0) ABUF(  32) PUSE(  0) HWM(  0) ECSAT(
47K) EPVTTOT( 157) B64BTOT(  0)</rsp>
<rsp>
      MBR(SYS3      ) CC(  0) SPT(S) BSIZE( 2048)
TOTBUF(   8) USE(  0) ABUF(   8) PUSE(  0) HWM(  0) ECSAT(
20K) EPVTTOT( 156) B64BTOT(  0)</rsp>
<rsp>
      MBR(SYS3      ) CC(  0) SPT(S) BSIZE( 4096)
TOTBUF(   8) USE(  0) ABUF(   8) PUSE(  0) HWM(  0) ECSAT(
36K) EPVTTOT( 156) B64BTOT(  0)</rsp>
<rsp>
      MBR(SYS3      ) CC(  0) SPT(S) BSIZE( 8192)
TOTBUF(   8) USE(  0) ABUF(   8) PUSE(  0) HWM(  0) ECSAT(
68K) EPVTTOT( 156) B64BTOT(  0)</rsp>
<rsp>
      MBR(SYS3      ) CC(  0) SPT(C) BSIZE( 512)
TOTBUF(  32) USE(  0) ABUF(  32) PUSE(  0) HWM(  0) ECSAT(
15K) EPVTTOT( 157) B64BTOT( 16K)</rsp>
<rsp>
      MBR(SYS3      ) CC(  0) SPT(C) BSIZE( 1024)
TOTBUF(  40) USE(  0) ABUF(  40) PUSE(  0) HWM(  0) ECSAT(
18K) EPVTTOT( 156) B64BTOT( 40K)</rsp>
<rsp>
      MBR(SYS3      ) CC(  0) SPT(C) BSIZE( 2048)
TOTBUF(  16) USE(  0) ABUF(  16) PUSE(  0) HWM(  0) ECSAT(
8K) EPVTTOT( 157) B64BTOT( 32K)</rsp>
<rsp>
      MBR(SYS3      ) CC(  0) SPT(C) BSIZE( 4096)
TOTBUF(  32) USE(  0) ABUF(  32) PUSE(  0) HWM(  0) ECSAT(
15K) EPVTTOT( 157) B64BTOT( 128K)</rsp>
<rsp>
      MBR(SYS3      ) CC(  0) SPT(C) BSIZE( 8192)
TOTBUF(  16) USE(  0) ABUF(  16) PUSE(  0) HWM(  0) ECSAT(
8K) EPVTTOT( 157) B64BTOT( 128K)</rsp>
</cmdrspdata>

```

QUERY POOL コマンドの例 5

TSO SPOC 入力:

```
QUERY POOL TYPE(DBAS) SUBTYPE(OSAM) SHOW(STATISTICS)
```

TSO SPOC 出力:

Subpool	MbrName	CC	BufSize	PoolId	NBuf	FixOpt	LctReq/RRba	NewBlk/RKey
OSAM	IMS1	0	512		100	N/N	0	0
OSAM	IMS1	0	1024	OSM1	1000	N/N	0	0
OSAM	IMS1	0	2048	OSM2	7832	Y/N	0	0
OSAM	IMS1	0	4096	OSM3	32767	N/Y	0	0
OSAM	IMS1	0	6144	ABC1	8000	N/N	0	0
OSAM	IMS1	0	8192	ABC2	8000	N/N	0	0
OSAM	IMS1	0	10240	ABC3	8000	N/N	0	0
OSAM	IMS1	0	12288	ABC4	8000	N/N	0	0
OSAM	IMS1	0	14336	ABC5	8000	N/N	0	0
OSAM	IMS1	0	16384	ABC6	8000	N/N	0	0
OSAM	IMS1	0	32768	OSM9	4	N/N	0	0
OSAM	IMS1	0	32768	OSM4	10	N/N	0	0

(右にスクロールして、画面 2 へ)

AltReq/BfAlt	PurgRq/NRec	FndIp1/SyncPt	BfSrchr/VRds	RdReq/Found	BfSt1W/VWts
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0

0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0

(右にスクロールして、画面 3 へ)

PurgWr/HSR-S	WBSyId/HSW-S	WBSyWr/HSNBuf	WBSyRd/HS-R-F	WRlse0/HS-W-F	WNoBfr
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0

(右にスクロールして、画面 4 へ)

NumErrors	CacheOption
0/	0 NO
0/	0 NO
0/	0 NO
0/	0 NO
0/	0 NO
0/	0 NO
0/	0 NO
0/	0 NO
0/	0 NO
0/	0 NO
0/	0 CHG
0/	0 ALL

説明: この例では、OSAM サブプールに関する統計情報のための QUERY POOL コマンドの呼び出しが正常に実行されています。

QUERY POOL コマンドの例 6

TSO SPOC 入力:

QUERY POOL TYPE(DBAS) SUBTYPE(VSAM) SHOW(STATISTICS)

TSO SPOC 出力:

Subpool	MbrName	CC	BufSize	PoolId	NBuf	FixOpt	LctReq/RRba	NewBlk/RKey
VSAM-D	IMS1	0	512	VSM1	10	N/N/N	0	0
VSAM-D	IMS1	0	1024	VSM1	1000	N/N/N	0	0
VSAM-I	IMS1	0	1024	VSM1	1000	N/N/N	0	0
VSAM-D	IMS1	0	4096	VSM1	5000	N/N/N	0	0
VSAM-I	IMS1	0	8192	XYZ1	5000	N/N/N	0	0
VSAM-D	IMS1	0	12288	XYZ3	5000	N/N/N	0	0
VSAM-I	IMS1	0	12288	XYZ3	5000	N/N/N	0	0
VSAM-D	IMS1	0	32768	VSM1	32767	N/N/N	0	0

(右にスクロールして、画面 2 へ)

AltReq/BfAlt	PurgRq/NRec	FndIp1/SyncPt	BfSrch/VRds	RdReq/Found	BfSt1W/VWts
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0

(右にスクロールして、画面 3 へ)

PurgWr/HSR-S	WBsyId/HSW-S	WBsyWr/HSNBuf	WBsyRd/HS-R-F	WR1se0/HS-W-F	WNoBfr
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0

(右にスクロールして、画面 4 へ)

NumErrors
0/ 0
0/ 0
0/ 0
0/ 0
0/ 0
0/ 0
0/ 0
0/ 0
0/ 0

説明: この例では、VSAM サブプールに関する統計情報のための QUERY POOL コマンドの呼び出しが正常に実行されています。

QUERY POOL コマンドの例 7

TSO SPOC 入力:

QUERY POOL TYPE(DBAS) SUBTYPE(OSAM,VSAM) SHOW(STATISTICS) SIZE(1024)

TSO SPOC 出力:

Subpool	MbrName	CC	BufSize	PoolId	NBuf	FixOpt	LctReq/RRba	NewBlk/RKey
OSAM	IMS1	0	1024	OSM1	1000	N/N	0	0
VSAM-D	IMS1	0	1024	VSM2	1000	N/N/N	0	0
VSAM-I	IMS1	0	1024	VSM2	1000	N/N/N	0	0
OSAM	IMS1	0	32768	OSM4	10	N/N	0	0

(右にスクロールして、画面 2 へ)

AltReq/BfAlt	PurgRq/NRec	FndIp1/SyncPt	BfSrch/VRds	RdReq/Found	BfSt1W/VWts
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0

(右にスクロールして、画面 3 へ)

PurgWr/HSR-S	WBsyId/HSW-S	WBsyWr/HSNBuf	WBsyRd/HS-R-F	WR1se0/HS-W-F	WNoBfr
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0

```

          0          0          0          0          0          0
          0          0          0          0          0          0
(右にスクロールして、画面 4 へ)
NumErrors CacheOption
-----

```

```

0/      0          NO
0/      0
0/      0
0/      0          ALL

```

説明: この例では、1KB のバッファ・サイズでフィルターに掛けられた、OSAM サブプールおよび VSAM サブプールに関する統計情報のための QUERY POOL コマンドの呼び出しが正常に実行されています。

QUERY POOL コマンドの例 8

TSO SPOC 入力:

```
QUERY POOL TYPE(DBAS) SUBTYPE(OSAM,VSAM) SHOW(STATISTICS) POOLID(OSM2)
```

TSO SPOC 出力:

Subpool	MbrName	CC	BufSize	PoolId	NBuf	FixOpt	LctReq/RRba	NewBlk/RKey
OSAM	IMS1	0	2048	OSM2	7832	Y/N		0
OSAM	IMS1	0	32768	OSM4	10	Y/N		0

(右にスクロールして、画面 2 へ)

AltReq/BfAlt	PurgRq/NRec	FndIp1/SyncPt	BfSrch/VRds	RdReq/Found	BfSt1W/VWts
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0

(右にスクロールして、画面 3 へ)

PurgWr/HSR-S	WBsyId/HSW-S	WBsyWr/HSNBuf	WBsyRd/HS-R-F	WR1se0/HS-W-F	WNoBfr
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0

(右にスクロールして、画面 4 へ)

```

          0          0          0          0          0          0
          0          0          0          0          0          0
(右にスクロールして、画面 4 へ)
NumErrors CacheOption
-----

```

```

0/      0          NO
0/      0          ALL

```

説明: この例では、OSM2 のプール ID でフィルターに掛けられた、OSAM サブプールおよび VSAM サブプールに関する統計情報のための QUERY POOL コマンドの呼び出しが正常に実行されています。

QUERY POOL コマンドの例 9

TSO SPOC 入力:

```
QUERY POOL TYPE(DBAS) SUBTYPE(OSAM,VSAM) SHOW(MEMBER)
```

TSO SPOC 出力:

Subpool	MbrName	CC	BufSize	PoolId	NBuf	ProcMbr	Section
OSAM	IMS1	0	512		100	DFSDFXYZ	OSAM003
OSAM	IMS1	0	1024	OSM1	2000	DFSDFXYZ	OSAM003
OSAM	IMS1	0	2048	OSM2	7832	DFSDFXYZ	OSAM003
OSAM	IMS1	0	4096	OSM3	32787	DFSDFXYZ	OSAM003
OSAM	IMS1	0	6144	ABC1	8000	DFSVSM00	

```

OSAM   IMS1   0   8192 ABC2     8000 DFSVSM00
OSAM   IMS1   0  10240 ABC3     8000 DFSVSM00
OSAM   IMS1   0  12288 ABC4     8000 DFSVSM00
OSAM   IMS1   0  14336 ABC5     8000 DFSVSM00
OSAM   IMS1   0  16384 ABC6     8000 DFSVSM00
OSAM   IMS1   0 32768 OSM9         4 DFSDFXYZ OSAM003
VSAM-D IMS1   0   512 VSM1         10 DFSDFXYZ VSAM001
VSAM-D IMS1   0  1024 VSM2        1000 DFSDFXYZ VSAM001
VSAM-I IMS1   0  1024 VSM2        1000 DFSDFXYZ VSAM001
VSAM-D IMS1   0  4096 VSM4         5000 DFSDFXYZ VSAM001
VSAM-I IMS1   0   8192 XYZ1         5000 DFSVSM00
VSAM-D IMS1   0  12288 XYZ3         5000 DFSVSM00
VSAM-I IMS1   0  12288 XYZ3         5000 DFSVSM00
VSAM-D IMS1   0 32768 VSM9       32767 DFSDFXYZ VSAM001

```

説明: この例では、OSAM サブプールおよび VSAM サブプールに関するメンバー情報のための QUERY POOL コマンドの呼び出しが正常に実行されています。

QUERY POOL コマンドの例 10

TSO SPOC 入力:

```
QUERY POOL TYPE(DBAS) SUBTYPE(OSAM,VSAM) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

Subpool	MbrName	CC	BufSize	PoolId	NBuf	ProcMbr	Section
OSAM	IMS1	0	512		100	DFSDFXYZ	OSAM003
OSAM	IMS1	0	1024	OSM1	2000	DFSDFXYZ	OSAM003
OSAM	IMS1	0	2048	OSM2	7832	DFSDFXYZ	OSAM003
OSAM	IMS1	0	4096	OSM3	32787	DFSDFXYZ	OSAM003
VSAM-D	IMS1	0	512	VSM1	10	DFSDFXYZ	VSAM001
VSAM-D	IMS1	0	1024	VSM2	1000	DFSDFXYZ	VSAM001
VSAM-I	IMS1	0	1024	VSM2	1000	DFSDFXYZ	VSAM001
OSAM	IMS1	0	32768	OSM4	10	DFSDFXYZ	OSAM003

(右にスクロールして、画面 2 へ)

FixOpt	LctReq/RRba	NewBlk/RKey	AltReq/BfAlt	PurgRq/NRec	FndIp1/SyncPt	BfSrch/VRds
N/N	0	0	0	0	0	0
N/N	0	0	0	0	0	0
N/N	0	0	0	0	0	0
N/N	0	0	0	0	0	0
N/N/N	0	0	0	0	0	0
N/N/N	0	0	0	0	0	0
N/N/N	0	0	0	0	0	0
N/N	0	0	0	0	0	0

(右にスクロールして、画面 3 へ)

RdReq/Found	BfSt1W/VWts	PurgWr/HSR-S	WBSyId/HSW-S	WBSyWr/HSNBuf	WBSyRd/HS-R-F
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0

(右にスクロールして、画面 4 へ)

WR1se0/HS-W-F	WNoBfr	NumErrors	CacheOption
0	0	0/0	NO
0	0	0/0	NO

0	0	0/	0	NO
0	0	0/	0	NO
0	NA	0/	0	
0	NA	0/	0	
0	NA	0/	0	
0	0	0/	0	ALL

説明: この例では、TYPE(DBAS) および SHOW(ALL) が指定されているときに、OSAM および VSAM の両方のプール情報のための QUERY POOL コマンドの呼び出しが正常に実行されています。

QUERY POOL コマンドの例 11

TSO SPOC 入力:

QUERY POOL TYPE(STG64) NAME(*) SHOW(ALL)

TSO SPOC 出力:

PoolName	MbrName	CC	StgType	Owner	TotPoolSz	BufAreaSz
CTLCSA	SYS3	0	Common	CTL	2048M	1456M
CTLCSA2	SYS3	0	Common	CTL	10240K	680K
CTLPRIV	SYS3	0	Private	CTL	4096K	2864K

(右にスクロールして、画面 2 へ)

%Alloc	#SecSegs	Tot0SegSz	#0Segs
0	0	0	0
76	0	9216K	9
55	3	0	0




OM API 入力:

CMD(QUERY POOL TYPE(STG64) NAME(*) SHOW(ALL))


OM API 出力:

説明: この例では、3 つのプールのすべてが制御領域によって所有されています。CTLCSA および CTLCSA2 は 64 ビット共通ストレージ内に存在し、CTLPRIV は 64 ビット専用ストレージ内に存在します。3 つの 2 次セグメントがプール CTLPRIV 用に割り振られており、9 つのサイズ超過セグメントがプール CTLCSA2 用に割り振られています。



関連概念:

-  CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)
-  OSAM および VSAM データベース・バッファの調整 (データベース管理)
-  VSAM バッファのモニター (データベース管理)

関連タスク:

-  OSAM バッファ (データベース管理)

関連資料:

-  /DISPLAY POOL コマンド (コマンド)
-  コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

QUERY RM コマンド

QUERY RM コマンドは、Resource Manager (RM) アドレス・スペースに関する状況情報および属性情報を表示するために使用します。このコマンドは、RM によって管理される IMSRSC リポジトリに関する情報を返します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 627 ページの『使用上の注意』
- 627 ページの『出力フィールド』
- 628 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 629 ページの『例』

環境

QUERY RM コマンドは、Common Service Layer (CSL) Resource Manager (RM) アドレス・スペースで処理されます。

構文

```
QUERY RM TYPE (REPO) SHOW ( ALL )
```

構文の図解: QUERY RM TYPE (REPO) SHOW (ALL)

- QUERY: 構文の最初の単語
- RM: QUERY と TYPE (REPO) の間に位置する単語
- TYPE (REPO): RM の後に位置する単語
- SHOW: TYPE (REPO) の後に位置する単語
- ALL: SHOW の括弧内に位置する単語
- ATTRIB: SHOW の括弧内に位置する単語
- STATUS: SHOW の括弧内に位置する単語

キーワード

以下のキーワードは、QUERY RM コマンドに有効です。

TYPE

処理されるデータまたは情報のタイプを指定します。

REPO

RM に対して定義されているすべての IMSRSC リポジトリに関する情報を返すことを指定します。

SHOW

QUERY コマンドで返される情報を指定します。

ALL

すべての状況情報および属性情報を返すことを指定します。

ATTRIB

RM 内のリポジトリ属性を返すことを指定します。返される属性は、RM 内の AUDITACCESS 設定です。

STATUS

RM 内の状況情報を返すことを指定します。返される可能性がある状況値については、627 ページの『出力フィールド』を参照してください。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ指定できます。

QUERY RM コマンドは、OM に対して ROUTE=ALL として定義されます。このコマンドは、コマンドを受け取る各 RM によって処理されます。

このコマンドのコマンド構文は XML で定義されており、OM と通信する自動化プログラムで使用可能です。

出力フィールド

以下の表には、QUERY RM 出力フィールドが記載されています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 183. QUERY RM コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
AUDACC	AuditAccess	ATTRIB, ALL	RM 内の AUDITACCESS 属性。
CC	CC	N/A	出力行の完了コード。完了コードは常に戻されます。
CCTXT	CCText	N/A	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
MBR	MbrName	N/A	コマンドを処理する RM の名前。
REPOGRP	RepositoryGroup	N/A	リポジトリ・サーバーに関連した z/OS システム間カップリング・ファシリティ (XCF) グループ。
REPONM	RepositoryName	N/A	RM の接続先リポジトリの名前。
REPOTYP	RepositoryType	N/A	RM の接続先リポジトリのタイプ。

表 183. QUERY RM コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
STT	Status	STATUS, ALL	Status. 返される可能性がある有効な状況値は、以下のとおりです。
			CONNECTED RM は IMSRSC リポジトリに接続されており、リポジトリを使用できることを示します。
			CONNECT-INCOMPLETE RM はリポジトリに正常に接続されましたが、リソース構造内のリポジトリ・グローバル項目を正しく更新できなかったか、あるいは IMSRSC リポジトリ内の AFMT または IMBT の初期化を完了できなかったことを示します。AFMT または IMBT の初期化エラーの場合には、エラー・メッセージ CSL2518E が発行されます。さらに、IMSplex 内の他の RM システムに対して、リポジトリに接続するディレクティブが通知されていない可能性があります。 接続処理を完了するには、オペレーターが UPDATE RM TYPE(REPO) SET(REPO(Y)) コマンドを発行し、コマンドを CONNECT-INCOMPLETE 状況の RM に経路指定する必要があります。
			DISCONNECT-INCOMPLETE RM はリポジトリから正常に切断されましたが、リソース構造内のリポジトリ・グローバル項目を正しく更新するのに失敗しました。さらに、IMSplex 内の他の RM システムに対して、リポジトリから切断するよう通知されていない可能性があります。 オペレーターは UPDATE RM TYPE(REPO) SET(REPO(N)) コマンドを発行して、切断処理を完了する必要があります。
			NOTAVAIL リポジトリが使用不可であることを示します。リポジトリ・サーバーが RM に対してリポジトリが使用可能であることを示すと、RM はリポジトリに再接続します。
			RS-NOTAVAIL 使用可能なマスター・リポジトリ・サーバーがないことを示します。この状況が表示されるのは、RM はリポジトリ・サーバーに正常に登録されているが、マスター・リポジトリ・サーバーがダウンしており、引き継ぎに使用可能な従属リポジトリ・サーバーがない場合のみです。リポジトリ・サーバーが使用可能になるまでは、リポジトリは使用できません。
			SPARERECOV リポジトリ・スペアのリカバリー処理が進行中であることを示します。この処理中は、リポジトリは使用できません。
			SPARERCVERR リポジトリ・スペアのリカバリー処理がエラーになり、リポジトリが使用できないことを示します。スペアのリカバリー処理中にリポジトリ・サーバーによって出された FRP メッセージを参照して、エラーを修正します。エラーが修正された後、リポジトリを使用できるようにするには、リポジトリを始動する必要があります。
			UPDATE-AUDACC-INCOMPLETE RM はリポジトリ内の監査アクセス設定を正常に更新しましたが、リソース構造内のリポジトリ・グローバル項目を正しく更新するのに失敗しました。さらに、IMSplex 内の他の RM システムに対して、リポジトリ・グローバル項目からの監査アクセス値を更新するよう通知されていない可能性があります。 オペレーターは、UPDATE RM TYPE(REPO) SET(REPO(AUDITACCESS)) コマンドを使用して、監査アクセス設定の更新を完了する必要があります。

戻りコード、理由コード、および完了コード

IMS 戻りコードと理由コードは、QUERY RM コマンドによって OM に戻されます。QUERY RM コマンドの結果として返される可能性のある OM 戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 184. QUERY RM コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY RM コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'03000008'	X'0000203C'	無効なキーワード・パラメーター値。
X'0300000C'	X'00003000'	At least one request was successful.
X'0300000C'	X'00003004'	No requests were successful.
X'03000010'	X'00004504'	RM がリポジトリに登録されていません。
X'03000014'	X'00005030'	コマンド出力応答割り振りが失敗しました。

以下の表には、完了コードの説明が記載されています。

表 185. QUERY RM コマンドの完了コード

完了コード	意味
0	QUERY RM コマンドは正常に完了しました。

例

以下に示すのは QUERY RM コマンドの例です。

QUERY RM コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QUERY RM TYPE(REPO) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(Screen 1)

```
RepositoryType MbrName      CC Status  AuditAccess
IMSRSC         RM1RM        0 CONNECTED DEFAULT
IMSRSC         RM2RM        0 CONNECTED DEFAULT
IMSRSC         RM3RM        0 CONNECTED DEFAULT
```

(右にスクロールして、画面 2 へ)

```
RepositoryType MbrName      RepositoryName
IMSRSC         RM1RM        IMSRSC_REPOSITORY
IMSRSC         RM2RM        IMSRSC_REPOSITORY
IMSRSC         RM3RM        IMSRSC_REPOSITORY
```

(右にスクロールして、画面 3 へ)

```
RepositoryType MbrName      RepositoryGroup
IMSRSC         RM1RM        FRPGRUP1
IMSRSC         RM2RM        FRPGRUP1
IMSRSC         RM3RM        FRPGRUP1
```

OM API 入力:

```
CMD(QUERY RM TYPE(REPO) SHOW(ALL))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
```

```

<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.186 22:43:56.527517</statime>
<stotime>2011.186 22:43:56.540575</stotime>
<staseq>C806A80CFEF9D40C</staseq>
<stoseq>C806A80D0229FDC8</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10154356</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>RM3RM </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>RM </kwd>
<input>QUERY RM TYPE(REPO) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="REPOTYP" l1bl="RepositoryType" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="STT" l1bl="Status" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="AUDACC" l1bl="AuditAccess" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="REPONM" l1bl="RepositoryName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="44" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="REPOGRP" l1bl="RepositoryGroup" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>REPOTYP(IMSRSC ) MBR(RM3RM) CC( 0) REPONM(IMSRSC_REPOSITORY
) REPOGRP(FRPGRUP1) STT(CONNECTED)
AUDACC(DEFAULT ) </rsp>
<rsp>REPOTYP(IMSRSC ) MBR(RM2RM) CC( 0) REPONM(IMSRSC_REPOSITORY
) REPOGRP(FRPGRUP1) STT(CONNECTED)
AUDACC(DEFAULT ) </rsp>
<rsp>REPOTYP(IMSRSC ) MBR(RM1RM) CC( 0) REPONM(IMSRSC_REPOSITORY
) REPOGRP(FRPGRUP1) STT(CONNECTED)
AUDACC(DEFAULT ) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: RM で使用可能なすべてのリポジトリについて、リポジトリ名、属性、および状況情報が、QUERY RM TYPE(REPO) SHOW(ALL) コマンドで返されます。この例では、IMSplex 内のすべての RM でリポジトリが使用可能になっています。

QUERY RM コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
QUERY RM TYPE(REPO) SHOW(ATTRIB)
```

TSO SPOC 出力:

(Screen 1)

RepositoryType	MbrName	CC	AuditAccess	RepositoryName>
IMSRSC	RM1RM	0	UPDATE	IMSRSC_REPOSITORY
IMSRSC	RM2RM	0	UPDATE	IMSRSC_REPOSITORY

```
IMSRSC      RM3RM      0 UPDATE      IMSRSC_REPOSITORY
```

(右にスクロールして、画面 2 へ)

```
RepositoryType MbrName  ryName RepositoryGroup
IMSRSC      RM1RM      FRPGRUP1
IMSRSC      RM2RM      FRPGRUP1
IMSRSC      RM3RM      FRPGRUP1
```

OM API 入力:

```
CMD(QUERY RM TYPE(REPO) SHOW(ATTRIB))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<stime>2011.187 17:07:32.104787</stime>
<stotime>2011.187 17:07:32.118744</stotime>
<staseq>C8079EB917653708</staseq>
<stoseq>C8079EB91ACD82D7</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10100732</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>RM3RM </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>RM </kwd>
<input>QRY RM TYPE(REPO) SHOW(ATTRIB) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="REPOTYP" l1b1="RepositoryType" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="AUDACC" l1b1="AuditAccess" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="REPONM" l1b1="RepositoryName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="44" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="REPOGRP" l1b1="RepositoryGroup" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>REPOTYP(IMSRSC ) MBR(RM3RM) CC( 0) REPONM(IMSRSC_REPOSITORY
  ) REPOGRP(FRPGRUP1) AUDACC(UPDATE ) </rsp>
<rsp>REPOTYP(IMSRSC ) MBR(RM2RM) CC( 0) REPONM(IMSRSC_REPOSITORY
  ) REPOGRP(FRPGRUP1) AUDACC(UPDATE ) </rsp>
<rsp>REPOTYP(IMSRSC ) MBR(RM1RM) CC( 0) REPONM(IMSRSC_REPOSITORY
  ) REPOGRP(FRPGRUP1) AUDACC(UPDATE ) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>
```

説明: QUERY RM SHOW(ATTRIB) 情報は、RM 内の属性情報を返します。このコマンドは、監査アクセス値が UPDATE に変更された後で発行されました。

QUERY RM コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

QUERY RM TYPE(REPO) SHOW(ALL)

TSO SPOC 出力:

Log for . . : QRY RM TYPE(REPO) SHOW(ALL)

IMSpIex : PLEX1
Routing :
Start time. . . . : 2011.187 10:28:53.20
Stop time : 2011.187 10:28:53.22
Return code . . . : 0200000C
Reason code . . . : 00003004
Reason text . . . : No requests were successful.
Command master. . : RM3RM

Member Name	Return Code	Reason Code	Reason text
RM3RM	03000010	00004504	Repository is not defined to RM
RM2RM	03000010	00004504	Repository is not defined to RM
RM1RM	03000010	00004504	Repository is not defined to RM

OM API 入力:

CMD(QUERY RM TYPE(REPO) SHOW(ALL))

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.187 17:28:53.214617</statime>
<stotime>2011.187 17:28:53.225942</stotime>
<staseq>C807A37EDA599405</staseq>
<stoseq>C807A37EDD1D651E</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10102853</rqsttkn1>
<rc>0200000C</rc>
<rsn>00003004</rsn>
<rsnmsg>CSLN024I</rsnmsg>
<rsntxt>No requests were successful.</rsntxt>
</ctl>
<cmderr>
<mbr name="RM3RM ">
<typ>RM </typ>
<styp>MULTRM </styp>
<rc>03000010</rc>
<rsn>00004504</rsn>
<rsntxt>Repository is not defined to RM</rsntxt>
</mbr>
<mbr name="RM2RM ">
<typ>RM </typ>
<styp>MULTRM </styp>
<rc>03000010</rc>
<rsn>00004504</rsn>
<rsntxt>Repository is not defined to RM</rsntxt>
</mbr>
<mbr name="RM1RM ">
<typ>RM </typ>
<styp>MULTRM </styp>
<rc>03000010</rc>
<rsn>00004504</rsn>
<rsntxt>Repository is not defined to RM</rsntxt>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
```


```


<master>RM3RM </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>RM </kwd>
<input>QRY RM TYPE(REPO) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
</imsout>

```


説明: この例は、RM がリポジトリを使用できないときの QUERY RM SHOW(ALL) コマンド出力を示しています。

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

 IMSRSC リポジトリの CSL RM 管理 (システム管理)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

QUERY RTC コマンド

QUERY RTC コマンドは、高速機能宛先コードを照会するために使用します。高速機能入力編集/経路指定出口ルーチン (DBFHAGU0) で宛先コードを使用することにより、トランザクションを同じロード・バランシング・グループ内の別のアプリケーション・プログラムに経路指定することができます。

サブセクション:

- 『環境』
- 634 ページの『構文』
- 634 ページの『キーワード』
- 639 ページの『使用上の注意』
- 639 ページの『出力フィールド』
- 643 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 645 ページの『例』

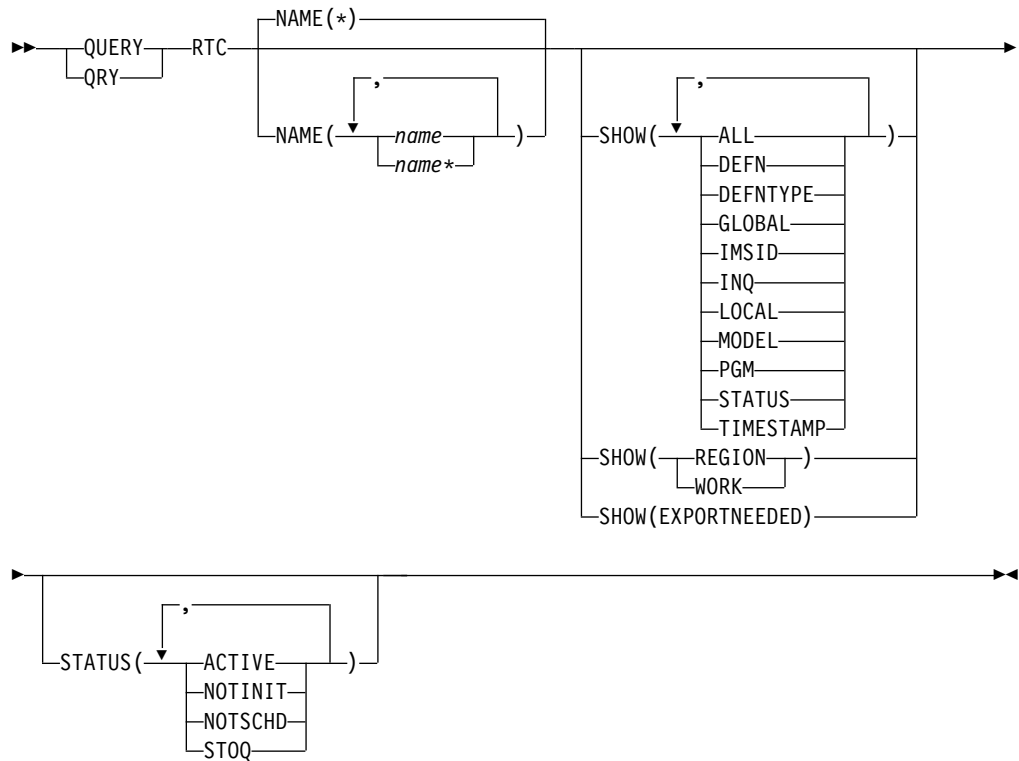
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 186. QUERY RTC コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUERY RTC	X		X
NAME	X		X
SHOW	X		X
STATUS	X		X

構文



キーワード

以下のキーワードは、QUERY RTC コマンドに有効です。

NAME

宛先コードの名前 (1 から 8 文字) を指定します。名前にはワイルドカードを指定することができます。名前は反復可能なパラメーターです。デフォルトは NAME(*) で、これはすべての宛先コード・リソースを戻します。

SHOW

戻される宛先コード出力フィールドを指定します。宛先コードは、出力を作成した IMS の名前および完了コードとともに、常に戻されます。SHOW キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあります。

ALL

宛先コード自体に関するすべての情報を戻します。宛先コードに関連したリソースに関する情報を戻すために、他の SHOW キーワードを指定できます。

制約事項: SHOW(EXPORTNEEDED) を指定した場合に戻される ExportNeeded 列は、SHOW(ALL) では戻されません。

DEFN

リソース定義を戻すように指定します。

戻される宛先コード属性には、INQ、PGM、リポジトリ内の作成および更新のタイム・スタンプ、および IMS ランタイムの作成、更新、インポート、およびアクセスのタイム・スタンプがあります。

SHOW(DEFN) にその他の SHOW フィルターが指定されない場合、または IMSID フィルターが指定されている場合、すべての定義属性が戻されます。IMS システムのランタイム・リソース定義は、コマンドを受信する各 IMS によって戻されます。IMSRSC リポジトリ内の保管済みリソース定義は、コマンド・マスター IMS がそのリポジトリを使用できる場合、コマンド・マスター IMS によって戻されます。

コマンド・マスター IMS は、リポジトリから取得した汎用保管済みリソース定義ごとに応答行を戻します。それぞれの応答行には、汎用リソース定義の属性が表示されます。SHOW(DEFN) を IMSID フィルターなしで指定し、すべての IMS システムに定義されている属性値が同一の場合、汎用定義の応答行のみが戻されます。保管済みリソース定義が定義されている IMS システムの IMS ID は戻されません。IMS システムの保管済みリソース定義に、汎用保管済みリソース定義と異なる属性値が 1 つ以上含まれている場合は、属性値が異なる IMS ごとに追加の応答行が戻されます。

SHOW(DEFN,LOCAL) が指定されている場合、コマンドを受信した各 IMS により、IMS システムのランタイム・リソース定義が戻されます。

SHOW(DEFN,GLOBAL) が指定されている場合、コマンド・マスター IMS により、リポジトリの保管済みリソース定義が戻されます。

SHOW(DEFN,GLOBAL) は、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合のみ有効です。コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できない場合は、SHOW(DEFN,GLOBAL) の結果、エラー戻りコードおよび理由コードが出されます。

SHOW(DEFN) にその他のパラメーターが指定されている場合、要求された定義属性のみが戻されます。例えば SHOW(DEFN,TIMESTAMP) が指定されている場合、タイム・スタンプのみが戻されます。

制約事項:

- SHOW(DEFN) は、DEFNTYPE、MODEL、STATUS、REGION、または WORK と一緒に指定することはできません。
- QRY RTC SHOW(ALL) コマンドで戻される LclStat 列、LModelName 列、LModelType 列、および LDefnType 列は、SHOW(DEFN) では戻されません。
- SHOW(DEFN) を指定した場合に戻される Repo 列および IMSid 列は、SHOW(ALL) では戻されません。
- リポジトリから宛先コード情報を照会する場合、SHOW(DEFN) フィルターを STATUS フィルターと一緒に使用することはサポートされません。STATUS のランタイム・フィルターは、SHOW(DEFN)、SHOW(DEFN,GLOBAL)、SHOW(DEFN,LOCAL)、SHOW(DEFN,IMSID)、SHOW(DEFN,IMSID,GLOBAL)、または SHOW(DEFN,IMSID,LOCAL) との併用は無効です。

SHOW(DEFN,IMSID) を指定すると、IMS の保管済みリソース定義が汎用リソース定義と同一であるかどうかにかかわらず、汎用保管済みリソース定

義に対して応答行が返され、リポジトリにリソースが定義されている IMS ごとに追加の応答行が返されます。

SHOW(DEFN) または SHOW(DEFN,IMSID) のリポジトリ情報は、コマンド・マスター IMS によってのみ処理され、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合にのみ有効です。

DEFNTYPE

リソースの定義に使用された定義タイプ。

EXPORTNEEDED

NAME パラメーターに一致し、作成されたか最後に更新されて以降 IMSRSC リポジトリにエクスポートされたことがない宛先コード・リソースだけを QUERY コマンドで戻すよう指定します。

NAME キーワードが省略されたか NAME(*) が指定された場合、リポジトリにエクスポートする必要がある宛先コードの名前だけが戻されます。

NAME キーワードで特定の名前が指定されたか NAME(*) 以外の総称名が指定された場合、コマンドで指定された宛先コード名ごとに 1 行ずつ、応答行が戻されます。指定された宛先コードをリポジトリにエクスポートする必要がない場合は、ExportNeeded 列に N が戻されます。

SHOW(EXPORTNEEDED) は、他のいかなる SHOW パラメーターや他のキーワードとも一緒に指定することはできず、IMS で IMSRSC リポジトリが使用可能になっている場合にのみ有効です。

QUERY RTC SHOW(EXPORTNEEDED) コマンドは、XRF 代替システムでは無効です。

ヒント: IMSRSC リポジトリにエクスポートされたことがないリソースおよび記述子の場合、EXPORT DEFN TARGET(REPO) OPTION (CHANGESONLY) コマンドを発行して、リソース定義および記述子定義をリポジトリに書き込み、次の IMS のコールド・スタートで使用できるようにすることができます。

GLOBAL

リポジトリの保管済みリソース定義を戻すように指定します。

SHOW(GLOBAL,DEFN) が指定される場合、コマンド・マスター IMS により、リポジトリのグローバル・リソース定義が戻されます。

SHOW(GLOBAL,DEFN) は、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合のみ有効です。

IMSID

指定された名前をリソース・リストに含む IMS システムの IMS ID を戻すように指定します。SHOW(IMSID) は、コマンド・マスター IMS によってのみ処理され、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合にのみ有効です。

SHOW(IMSID) が DEFN フィルターとともに指定されている場合、保管済みリソース定義に加えて、定義済みのリソースが存在する各 IMS に、別個の行が戻されます。

SHOW(IMSID) が DEFN フィルターなしで指定されている場合、リソース名とともに定義済みのリソースが存在する各 IMS に別個の行が戻されません。リソース定義は戻されません。

SHOW(IMSID) は、DEFN および GLOBAL 以外の SHOW フィルターとともに指定することはできません。SHOW(IMSID,GLOBAL) が指定されている場合、GLOBAL は無視されます。つまり、SHOW(IMSID,GLOBAL) は SHOW(IMSID) として扱われます。SHOW(DEFN,IMSID,LOCAL) は SHOW(DEFN,LOCAL) として扱われます。

INQ

この宛先コードに関連するトランザクション・メッセージの照会オプション。

LOCAL

IMS システムのランタイム・リソース定義を戻すように指定します。

SHOW(DEFN,LOCAL) は、コマンドを処理する IMS システムからローカルの定義属性のみを戻します。

MODEL

このリソースを作成するために使用されたモデル名とモデル・タイプ。リソースが、すべて定義済み属性を使用して作成され、モデルが指定されていない場合、モデル名とモデル・タイプはブランクです。LIKE キーワードなしで指定された CREATE コマンドは、デフォルト記述子をモデルとして使用してリソースを作成します。デフォルト記述子は、IMS 記述子 DBFDSRT1 またはユーザー定義のいずれかです。LIKE キーワードが指定された CREATE コマンドは、モデルを使用してリソースを作成します。リソースは、すべてモデルと同じ属性を使用して作成されます。属性は、モデル属性をオーバーライドする CREATE コマンドにより明示的に設定されます。モデル・タイプは、記述子 (DESC) またはリソース (RSC) のいずれかです。モデル名およびモデル・タイプは参照用のみです。属性が CREATE または UPDATE コマンドの値によってオーバーライドされた場合、あるいはモデルが後で更新された場合、リソースの属性はモデルと一致しないことがあります。モデル名とモデル・タイプを使用すると、同じモデルを使って作成されたリソースを識別できます。リソースのモデル名およびモデル・タイプはエクスポートおよびインポートされます。IMPORT コマンドは、リソースを作成する際にモデル名とモデル・タイプを使用しません。

PGM

この宛先コードに関連するプログラム。

REGION

宛先コードがアクティブの領域。

注: このフィルターは他の SHOW フィルターと共に指定することはできません。SHOW(REGION) を単独で指定する必要があります。

STATUS

ローカル宛先コード状況。戻される可能性がある宛先コード状況についての説明は、639 ページの『出力フィールド』の『QUERY RTC コマンドの出力フィールド』内の STATUS キーワードを参照してください。

TIMESTAMP

作成時間 (TIMECREATE)、最終更新時間 (TIMEUPDATE)、最終アクセス時間 (TIMEACCESS)、および最終インポート時間 (TIMEIMPORT) のタイム・スタンプが戻されます。時刻は現地時間で、YYYY.JJJ HH:MM:SS.TH の形式で戻されます。ここで、

- YYYY は年です。
- JJJ はユリウス日 (001 から 365) です。
- HH は時 (01 から 24) です。
- MM は分 (00 から 59) です。
- SS は秒 (00 から 59) です。
- TH は 10 分の 1 秒および 100 分の 1 秒 (00 から 99) です。

WORK

NAME パラメーターで指定された宛先コードおよびそれに関連したリソースに対して進行中の作業。DELETE、IMPORT、または UPDATE コマンドの前に QRY RTC SHOW(WORK) コマンドを発行することで、指定された宛先コードおよびそれに関連したリソースに対して進行中の作業があるかどうかを確認できます。進行中の作業があると、後続の DELETE、IMPORT、または UPDATE コマンドが失敗する原因になることがあります。QRY RTC SHOW(WORK) コマンドは、リソース名、リソース・タイプ、および NAME パラメーターで指定された宛先コードに対して進行中の作業または関連のリソースに対して進行中の作業の作業状況に戻します。指定されたリソースに対して進行中の作業がない場合、作業状況はブランクとして応答行が戻されます。

SHOW(WORK) で NAME(*) を指定すると、長時間かかることがあります。

注:

1. このフィルターは他の SHOW フィルターと共に指定することはできません。SHOW(WORK) を単独で指定する必要があります。
2. QRY RTC SHOW(WORK) コマンドは、XRF 代替では無効です。

STATUS()

NAME パラメーターに一致し、指定された宛先コード状況値の少なくとも 1 つを持つ宛先コードを表示用に選択します。

ACTIVE

アクティブな宛先コードに関する情報を戻すように STATUS() フィルターを設定します。

NOTINIT

初期化されていないため使用できない宛先コードに関する情報を戻すように STATUS() フィルターを設定します。

NOTSCHD

スケジュールされていない宛先コードに関する情報を戻すように STATUS() フィルターを設定します。

STOQ

停止されている宛先コードに関する情報を戻すように STATUS() フィルターを設定します。この宛先コードに関連付けられているトランザクションは処理されません。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager API を介してのみ出すことができます。高速機能がシステムにインストールされていなければなりません。このコマンドは DB/DC および DCCTL システムに適用されます。

このコマンドは、XRF 代替システムで使用できます。

リソース定義に関する情報を表示するには、SHOW(DEFN) を指定します。リソースが定義されている IMS システムを判別し、また各 IMS システムの属性またはリソース定義を知るには、SHOW(DEFN,IMSID) を指定します。リソースが定義されている IMS システムを判別するには、SHOW(IMSID) を指定します。

出力フィールド

以下の表は、QUERY RTC の出力フィールドを示しています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

有効範囲

出力フィールドの有効範囲を識別します。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 187. QUERY RTC コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
CC	CC	N/A	LCL	完了コード。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	LCL	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。

表 187. QUERY RTC コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
DFNT	LDefnType	DEFNTYPE	LCL	<p>定義タイプ。次のうちのいずれか 1 つが可能です。</p> <p>CREATE CREATE コマンドにより定義されます。</p> <p>IMPORT IMPORT コマンドにより定義されます。</p> <p>IMS IMS により定義されます。RTCDUMMY は、宛先コードが何も定義されていない場合に、システム定義プロセスによって作成される IMS 定義の宛先コードです。</p> <p>MODBLKS MODBLKS データ・セット内のシステム定義により定義されます。</p> <p>UPDATE MODBLKS データ・セット内のシステム定義により定義されますが、UPDATE コマンドによって変更されて動的リソースに入れられます。</p>
EXPN	ExportNeeded	EXPORTNEEDED	LCL	<p>宛先コードが IMSRSC リポジトリにエクスポートされたかどうかを示します。値は Y または N のどちらかです。</p>
IMSID	IMSid	IMSID	GBL	<p>リポジトリから定義済みリソースを持つ IMSID を返します。</p>
INQ	LInq	INQ, DEFN	LCL	<p>宛先コードに関連する照会トランザクションであるか (Y) ないか (N)。値は、ローカル IMS から取得されます。</p> <p>N 照会オプションは使用不可です。</p> <p>Y 照会オプションが使用可能です。この宛先コードに関連するトランザクション・メッセージは、データベースを変更しません。プログラムは、データベースへの挿入、削除、または置換の呼び出しを出すのを禁止されます。</p>

表 187. QUERY RTC コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
LSTT	LcLStat	STATUS	LCL	ローカル宛先コード状況。 ACTIVE 宛先コードはアクティブです。 NOTINIT-xx-reason 宛先コードは初期化されていないため、使用できません。NOTINIT 状況が NOTINIT-xx-reason 形式で表示され、エラーが検出された場所と、宛先コードが初期化されなかった理由が示されます。xx は理由コードで、この理由コードが設定された 1 つのモジュール内の固有の位置を示します。 DBFRCTE MACRO は、宛先コード不良理由コード (フィールド RCTEBADR) に設定される可能性がある各理由コードを定義し、それを設定するモジュールを識別します。 NOTINIT-00 は、理由が不明であることを示します。IBM ソフトウェア・サポートに連絡してください (アクション: 1)。 reason は、最大 13 文字の短縮テキスト形式で、理由コード xx を説明します。可能な reason 値とその説明については、643 ページの表 188を参照してください。 NOTSCHED 宛先コードは、スケジュールされていないか、停止されています。 STOQ 宛先コードは、入力メッセージのキューイングのために停止されています。
MBR	MbrName	N/A	LCL	出力行を作成した IMSplex メンバー。
MDLN	LModelName	MODEL	LCL	モデル名。このリソースを作成するためのモデルとして使用されたリソースの名前。DBFDSRT1 は、宛先コード用の IMS 記述子名です。
MDLT	LModelType	MODEL	LCL	モデル・タイプ、RSC または DESC。RSC は、別のリソースをモデルとして使用してリソースが作成されたことを意味します。DESC は、記述子をモデルとして使用してリソースが作成されたことを意味します。
PGM	PgmName	PGM	LCL	プログラム名。
REG	Region	REGION	LCL	宛先コードがアクティブの領域。

表 187. QUERY RTC コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
REPO	Repo	DEFN	GBL	出力行に保管済みリソース定義が含まれているかどうかを示します。 Y リポジトリ定義を示します。 (ブランク) ローカル定義を示します。
RINQ	Inq	INQ, DEFN	GBL	宛先コードに関連する照会トランザクションであるか (Y) ないか (N)。値はリポジトリから取得されます。
RPGM	PgmName	DEFN	GBL	プログラム名。値はリポジトリから取得されます。
RTC	Rtcode	RTC	LCL	宛先コード名。
RTMCR	TimeCreate	DEFN	GBL	リポジトリでの作成時刻。これは、リポジトリ内で最初にリソースが作成された時刻です。
RTMUP	TimeUpdate	DEFN	GBL	リポジトリでの更新時刻。これは、リポジトリ内で最後にリソースが更新された時刻です。
TMAC	LTimeAccess	TIMESTAMP	LCL	リソースが最後にアクセスされた時刻。最終アクセス時間は、ウォーム・スタート、緊急時再始動、EXPORT および IMPORT にまたがって保持されます。最終アクセス時間の更新はログに記録されません。再始動後は、最終アクセス時間は再始動チェックポイント・ログ・レコードに記録された時間を反映します。値は、ローカル IMS から戻されます。 宛先コード・リソースの場合、以下のアクションは最終アクセス時間を更新します。 <ul style="list-style-type: none"> 指定された宛先コードを使用して、メッセージがバランシング・グループへのキューに入れられた場合。 CREATE コマンドが、モデルとしてリソースを参照する。
TMCR	LTimeCreate	TIMESTAMP	LCL	宛先コードが作成された時刻。これは、CREATE RTC コマンド、宛先コードを作成する IMPORT コマンド、または IMS の初期設定の結果です。作成時刻は、ウォーム・スタート、緊急時再始動、EXPORT および IMPORT にまたがって保持されます。値は、ローカル IMS から戻されます。
TMIM	LTimeImport	TIMESTAMP	LCL	リソースが最後にインポートされた時刻 (該当する場合)。インポート時刻は、ウォーム・スタートと緊急時再始動にまたがって保持されます。値は、ローカル IMS から戻されます。

表 187. QUERY RTC コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
TMUP	LTimeUpdate	TIMESTAMP	LCL	UPDATE RTC コマンドまたは IMPORT コマンドの結果として実行時リソース定義の属性が更新された最終時刻。更新時刻は、ウォーム・スタートや緊急時再始動を越えて保持されます。出力値は、ローカル IMS から取得されます。
WRK	Work	WORK	LCL	宛先コードまたはそれに関連したリソースの 1 つで作業が進行中です。進行中の作業は、以下のいずれかです。 ACTIVE 宛先コードはアクティブです。 ANOTHER CMD IN PROGRESS 宛先コードを削除または更新するための別のコマンド (DELETE や UPDATE など) が既に進行中です。

表 188. NOTINIT-xx-reason 状況の理由情報

理由	意味
NOPGM	この宛先コードが参照しているプログラムが定義されていません。プログラム PDIR 制御ブロックが存在しません。アクション: 2。
REPOCHGLIST	宛先コード名がこの IMS の IMSRSC リポジトリ内の変更リストに存在しており、その変更リストが処理中であるか、エラーによって処理が失敗しました。宛先コードが正常にインポートされて実行時宛先コード定義とリポジトリ内の保管済み定義が同期化されない限り、この宛先コードをモデルとして使用、スケジュール、更新、エクスポート、あるいは参照することはできません。アクション: 3。

注: 宛先コードを初期設定するには、以下のアクションを取ることができます。

1. IBM ソフトウェア・サポートに連絡する。
2. CREATE PGM コマンドを発行して、プログラムを作成する。UPDATE RTC START(Q) コマンドを発行して、宛先コードの初期設定を完了する。
3. IMS 変更リスト処理が失敗してメッセージ DFS4411E が発行された場合は、問題を修正して以下のいずれかのアクションを実行します。
 - IMS をシャットダウンし、再始動して変更リストの処理を再試行します。
 - IMPORT DEFN SOURCE(REPO) NAME(rtcname) TYPE(RTC) コマンドを発行し、宛先コードをインポートします。ここで、rtcname は宛先コード名です。

戻りコード、理由コード、および完了コード

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 189. QUERY RTC コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'00000004'	X'00001010'	戻されるリソースは検出されませんでした。指定されたリソース名が無効であるか、以下のことが考えられます。 <ul style="list-style-type: none"> 指定したフィルターと一致するリソースがありませんでした。 指定された SHOW(WORK) で表示される作業を持つリソースがありませんでした。 SHOW(EXPORTNEEDED) が指定されていた場合は、IMSRSC リポジトリーにエクスポートする必要があるリソースがありませんでした。
X'00000008'	X'00002004'	無効なコマンド・キーワードまたは無効なコマンド・キーワードの組み合わせ。
X'0000000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'0000000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'00000010'	X'00004004'	CQS アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'00004018'	リソース構造がないか、リソース構造が使用できません。
X'00000010'	X'00004024'	高速機能が定義されていません。
X'00000010'	X'00004100'	リソース構造が満杯です。
X'00000010'	X'00004104'	RM アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'00004108'	SCI アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'00004300'	MODBLKS のオンライン変更が有効なため、コマンドが許可されません (DFSDFxxx または DFSCGxxx が MODBLKS OLC で定義されているか、または MODBLKS が定義されていません)。
X'00000010'	X'00004500'	IMS はリポジトリーを使用できません。
X'00000010'	X'00004501'	RM はリポジトリーには使用できません。
X'00000010'	X'00004502'	リポジトリーは使用できません。
X'00000010'	X'00004503'	リポジトリーは停止しています。
X'00000010'	X'00004504'	リポジトリー・スベアのリカバリーが進行中です。
X'00000010'	X'00004505'	IMS リソース・リストが存在しないか、IMS リソース・リスト内に該当するリソース・タイプのリソースが存在しません。
X'00000010'	X'00004507'	リポジトリー・アクセスは拒否されます。
X'00000010'	X'00004508'	リポジトリーの最大入力長を超過しました。

表 189. QUERY RTC コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000010'	X'00004509'	RM データのバージョンは IMS データのバージョンよりも低いバージョンです。
X'00000010'	X'0000450A'	リポジトリ・サーバーをシャットダウンしています。
X'00000010'	X'0000450B'	リポジトリ・サーバーは使用できません。
X'00000010'	X'0000450C'	リポジトリ・サーバーは使用中です。
X'00000010'	X'0000450D'	RM は、IMSRSC リポジトリに関連した一部の内部フィールドの定義に失敗しました。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できませんでした。
X'00000014'	X'0000501C'	IMODULE GETMAIN エラー。
X'00000014'	X'00005100'	RM 要求エラー。
X'00000014'	X'00005104'	CQS エラー。
X'00000014'	X'00005108'	SCI 要求エラー。
X'00000014'	X'00005110'	リポジトリ・エラー。
X'00000014'	X'0000551C'	破損したリソース・リストが検出されたため、リポジトリ内のデータを表示する要求は拒否されました。リソース・リストが使用できないため、QUERY RTC コマンドは拒否されました。IBM ソフトウェア・サポートに連絡してください。エラーになったコマンドの出力と、コマンドが実行されたローカル RM アドレス・スペースのダンプまたは IMSplex 内のすべての RM アドレス・スペースのダンプを送信してください。また、IMSRSC リポジトリ RID データ・セットと RMD データ・セットのコピーも送信してください。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。以下の表には、完了コードの説明が記載されています。

表 190. QUERY RTC コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		宛先コードに対するコマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	宛先コード名が無効であるか、指定されたワイルドカード・パラメーターがどのリソース名にも一致しません。

例

以下に示すのは QUERY RTC コマンドの例です。

QUERY RTC コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QUERY RTC NAME(%%%,TXCDJN11,TXBANKI2,RTC0*) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

Rtcode	MbrName	CC	LPgmName	LInq	Lc1Stat	LModelName	LModelType
GFP1	IMS1	0	DCGPSBFP	N	NOTSCHED		
GFP2	IMS1	0	DCGPSBF2	N	NOTSCHED		
RTC00001	IMS1	0	DCGPSBF2	N	NOTSCHED	GFP2	RSC
TXBANKI2	IMS1	0	BANKIFP	N	NOTSCHED		
TXCDJN11	IMS1	0	DDLTJN11	Y	NOTSCHED		

(右にスクロール、画面 2)

Rtcode	MbrName	CC	LTimeCreate	LTimeUpdate
GFP1	IMS1	0	2011.180 12:37:38.07	
GFP2	IMS1	0	2011.180 12:37:38.07	
RTC00001	IMS1	0	2011.180 12:40:05.33	
TXBANKI2	IMS1	0	2011.180 12:37:38.07	
TXCDJN11	IMS1	0	2011.180 12:37:38.07	

(右にスクロール、画面 3)

Rtcode	MbrName	CC	LTimeAccess	LTimeImport	LDefnType
GFP1	IMS1	0			MODBLKS
GFP2	IMS1	0	2011.180 13:18:54.79		MODBLKS
RTC00001	IMS1	0			CREATE
TXBANKI2	IMS1	0			MODBLKS
TXCDJN11	IMS1	0			MODBLKS

OM API 入力:

```
CMD(QUERY RTC NAME(%%%,TXCDJN11,TXBANKI2,RTC0*) SHOW(ALL))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.180 21:00:03.888063</statime>
<stotime>2011.180 21:00:03.888992</stotime>
<staseq>C7FF05A4527BF4CA</staseq>
<stoseq>C7FF05A452B602CA</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10140003</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>RTC </kwd>
<input>QUERY RTC NAME(%%%,TXCDJN11,TXBANKI2,RTC0*) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="RTC" l1b1="Rtcode" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="4" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="no"
len="4" dtype="CHAR" align="right" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1b1="PGM" l1b1="LPgmName" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="INQ" l1b1="LInq" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="1" dtype="INT" align="left" />
```

```

<hdr s1bl="LSTT" llbl="LclStat" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="MDLN" llbl="LModelName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="MDLT" llbl="LModelType" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMCR" llbl="LTimeCreate" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMUP" llbl="LTimeUpdate" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMAC" llbl="LTimeAccess" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMIM" llbl="LTimeImport" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="DFNT" llbl="LDefnType" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>RTC(GFP1 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) PGM(DCGPSBFP) INQ(N)
  LSTT(NOTSCHD) TMCR(2011.180 12:37:38.07) TMUP( )
  TMAC( ) TMIM( ) DFNT(MODBLKS )
</rsp>
<rsp>RTC(GFP2 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) PGM(DCGPSBF2) INQ(N)
  LSTT(NOTSCHD) TMCR(2011.180 12:37:38.07) TMUP( )
  TMAC(2011.180 13:18:54.79) TMIM( ) DFNT(MODBLKS )
</rsp>
<rsp>RTC(TXCDJN11) MBR(IMS1 ) CC( 0) PGM(DDLTJN11) INQ(Y)
  LSTT(NOTSCHD) TMCR(2011.180 12:37:38.07) TMUP( )
  TMAC( ) TMIM( ) DFNT(MODBLKS )
</rsp>
<rsp>RTC(TXBANKI2) MBR(IMS1 ) CC( 0) PGM(BANKIFP ) INQ(N)
  LSTT(NOTSCHD) TMCR(2011.180 12:37:38.07) TMUP( )
  TMAC( ) TMIM( ) DFNT(MODBLKS )
</rsp>
<rsp>RTC(RTC00001) MBR(IMS1 ) CC( 0) PGM(DCGPSBF2) INQ(N)
  LSTT(NOTSCHD) MDLN(GFP2 ) MDLT(RSC) TMCR(2011.180 12:40:05.33)
  TMUP( ) TMAC( ) TMIM( )
  ) DFNT(CREATE )</rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: QUERY RTC コマンドが SHOW(ALL) で指定されているため、指定された宛先コードのすべての出力フィールドが戻されています。宛先コード出力フィールドのすべては 1 つの画面に収まらないため、ユーザーは右にスクロールして、追加の出力フィールドを見る必要があります。宛先コード名、その出力行を作成したメンバー名、および完了コードが、各画面に表示されています。宛先コードのワイルドカード・パラメーター %%%% により、4 文字の名前を持つすべての宛先コードが表示されます。ステージ 1 MODBLKS に生成された宛先コードは、IMS のワールド・スタート時に作成され、定義タイプ MODBLKS で定義されています。宛先コード RTC00001 と RTC00002 は、CREATE RTC コマンドを使用して動的に作成されたもので、定義タイプ CREATE を表示しています。RTC00001 は、宛先コード GFP2 をモデルとして作成され、RTC00002 は、デフォルト記述子 DBFDSRT1 を使用して作成されました。宛先コード GFP2 は、最終アクセス時間のタイム・スタンプを表示しており、この時刻から CREATE RTC コマンドによって参照され、宛先コード GFP2 をモデルとして使って宛先コード RTC00001 が作成されました。宛先コード RTC00002 は、最終更新時間を表示しています。そのプログラムは、作成された以降に UPDATE RTC コマンドによって変更されたからです。

QUERY RTC コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
QUERY RTC NAME(RTC00001) SHOW(DEFN,PGM,INQ)
```

TSO SPOC 出力:

Rtcode	MbrName	CC	Repo	IMSid	PgmName	LPgmName	Inq	LIInq
RTC00001	IMS1	0	Y		DCGPSBF2		N	
RTC00001	IMS1	0		IMS1		DCGPSBF2		N
RTC00001	IMS2	0		IMS2		DCGPSBF2		N
RTC00001	IMS3	0		IMS3		DCGPSBF2		N

OM API 入力:

```
CMD(QUERY RTC NAME(RTC00001) SHOW(DEFN,PGM,INQ))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.180 20:50:14.242034</statime>
<stotime>2011.180 20:50:14.300210</stotime>
<staseq>C7FF0371FDEF225C</staseq>
<stoseq>C7FF03720C232D8C</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10135014</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>RTC </kwd>
<input>QUERY RTC NAME(RTC00001) SHOW(DEFN,PGM,INQ) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="RTC" l1b1="Rtcode" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="4" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="no"
  len="4" dtype="CHAR" align="right" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1b1="REPO" l1b1="Repo" scope="LCL" sort="d" key="2" scroll="no"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="IMSID" l1b1="IMSid" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="RPGM" l1b1="PgmName" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="PGM" l1b1="LPgmName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="RINQ" l1b1="Inq" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="INT" align="left" />
<hdr s1b1="INQ" l1b1="LIInq" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="INT" align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>RTC(RTC00001) MBR(IMS3 ) CC( 0) PGM(DCGPSBF2) INQ(N)
  IMSID(IMS3)</rsp>
<rsp>RTC(RTC00001) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RINQ(N)
  RPGM(DCGPSBF2) </rsp>
<rsp>RTC(RTC00001) MBR(IMS1 ) CC( 0) PGM(DCGPSBF2) INQ(N)
  IMSID(IMS1)</rsp>
```

```
<rsp>RTC(RTC00001) MBR(IMS2 ) CC( 0) PGM(DCGPSBF2) INQ(N)
  IMSID(IMS2)</rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>
```

説明: 指定されたリソースの保管済みリソース定義およびランタイム・リソース定義が戻されます。SHOW(PGM,INQ) オプションが指定されているため、プログラム名と INQ 情報のみが返されています。

QUERY RTC コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
QUERY RTC NAME(E*) SHOW(DEFN)
```

TSO SPOC 出力:

(画面 1)

Rtcode	MbrName	CC	Repo	IMSid	PgmName	LPgmName	Inq	LInq	TimeCreate>
EMHTX2	IMS1	0	Y		EMHPSB2		N		2011.180 12:37:33.37
EMHTX2	IMS1	0		IMS1		EMHPSB2		N	
EMHTX2	IMS2	0		IMS2		EMHPSB2		N	
EMHTX22	IMS1	0	Y		EMHPSB2		N		2011.180 12:37:33.37
EMHTX22	IMS1	0		IMS1		EMHPSB2		N	
EMHTX22	IMS2	0		IMS2		EMHPSB2		N	
EMHTX3	IMS1	0	Y		EMHPSB2		N		2011.180 12:37:33.37
EMHTX3	IMS1	0		IMS1		EMHPSB2		N	
EMHTX3	IMS2	0		IMS2		EMHPSB2		N	
EMHTX32	IMS1	0	Y		EMHPSB2		N		2011.180 12:37:33.37
EMHTX32	IMS1	0		IMS1		EMHPSB2		N	
EMHTX32	IMS2	0		IMS2		EMHPSB2		N	

(右にスクロールして、画面 2 へ)

Rtcode	MbrName	CC	Repo	LTimeCreate	TimeUpdate	LTimeUpdate
EMHTX2	IMS1	0	Y			
EMHTX2	IMS1	0		2011.180 12:37:38.07		
EMHTX2	IMS2	0		2011.180 12:37:38.08		
EMHTX22	IMS1	0	Y			
EMHTX22	IMS1	0		2011.180 12:37:38.07		
EMHTX22	IMS2	0		2011.180 12:37:38.08		
EMHTX3	IMS1	0	Y			
EMHTX3	IMS1	0		2011.180 12:37:38.07		
EMHTX3	IMS2	0		2011.180 12:37:38.08		
EMHTX32	IMS1	0	Y			
EMHTX32	IMS1	0		2011.180 12:37:38.07		
EMHTX32	IMS2	0		2011.180 12:37:38.08		

(右にスクロールして、画面 3 へ)

Rtcode	MbrName	CC	Repo	LTimeAccess	LTimeImport
EMHTX2	IMS1	0	Y		
EMHTX2	IMS1	0			
EMHTX2	IMS2	0			
EMHTX22	IMS1	0	Y		
EMHTX22	IMS1	0			
EMHTX22	IMS2	0			
EMHTX3	IMS1	0	Y		
EMHTX3	IMS1	0			
EMHTX3	IMS2	0			
EMHTX32	IMS1	0	Y		
EMHTX32	IMS1	0			
EMHTX32	IMS2	0			

OM API 入力:

```
CMD(QUERY RTC NAME(E*) SHOW(DEFN))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xm1vsn>20 </xm1vsn>
```

```

<stotime>2011.180 21:11:32.267556</stotime>
<stotime>2011.180 21:11:32.351185</stotime>
<staseq>C7FF0834CFE246DE</staseq>
<stoseq>C7FF0834E44D1F9A</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10141132</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>RTC </kwd>
<input>QUERY RTC NAME(E*) SHOW(DEFN) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="RTC" l1bl="Rtcode" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="4" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="no"
len="4" dtype="CHAR" align="right" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1bl="REPO" l1bl="Repo" scope="LCL" sort="d" key="2" scroll="no"
len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="IMSID" l1bl="IMSid" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RPGM" l1bl="PgmName" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="PGM" l1bl="LPgmName" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RINQ" l1bl="Inq" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="1" dtype="INT" align="left" />
<hdr s1bl="INQ" l1bl="LIInq" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="1" dtype="INT" align="left" />
<hdr s1bl="RTMCR" l1bl="TimeCreate" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMCR" l1bl="LTimeCreate" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RTMUP" l1bl="TimeUpdate" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMUP" l1bl="LTimeUpdate" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMAC" l1bl="LTimeAccess" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMIM" l1bl="LTimeImport" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>RTC(EMHTX2 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) PGM(EMHPSB2 ) INQ(N)
IMSID(IMS1) TMCR(2011.180 12:37:38.07) TMUP( )
TMAC( ) TMIM( )</rsp>
<rsp>RTC(EMHTX22 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) PGM(EMHPSB2 ) INQ(N)
IMSID(IMS1) TMCR(2011.180 12:37:38.07) TMUP( )
TMAC( ) TMIM( )</rsp>
<rsp>RTC(EMHTX3 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) PGM(EMHPSB2 ) INQ(N)
IMSID(IMS1) TMCR(2011.180 12:37:38.07) TMUP( )
TMAC( ) TMIM( )</rsp>
<rsp>RTC(EMHTX32 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) PGM(EMHPSB2 ) INQ(N)
IMSID(IMS1) TMCR(2011.180 12:37:38.07) TMUP( )
TMAC( ) TMIM( )</rsp>
<rsp>RTC(EMHTX2 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RINQ(N) RPGM(EMHPSB2
) RTMCR(2011.180 12:37:33.37) </rsp>
<rsp>RTC(EMHTX22 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RINQ(N) RPGM(EMHPSB2
) RTMCR(2011.180 12:37:33.37) </rsp>
<rsp>RTC(EMHTX3 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RINQ(N) RPGM(EMHPSB2

```

```

) RTMCR(2011.180 12:37:33.37) </rsp>
<rsp>RTC(EMHTX32 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RINQ(N) RPGM(EMHPSB2
) RTMCR(2011.180 12:37:33.37) </rsp>
<rsp>RTC(EMHTX2 ) MBR(IMS2 ) CC( 0) PGM(EMHPSB2 ) INQ(N)
IMSID(IMS2) TMCR(2011.180 12:37:38.08) TMUP(
)
TMAC( ) TMIM( )</rsp>
<rsp>RTC(EMHTX22 ) MBR(IMS2 ) CC( 0) PGM(EMHPSB2 ) INQ(N)
IMSID(IMS2) TMCR(2011.180 12:37:38.08) TMUP(
)
TMAC( ) TMIM( )</rsp>
<rsp>RTC(EMHTX3 ) MBR(IMS2 ) CC( 0) PGM(EMHPSB2 ) INQ(N)
IMSID(IMS2) TMCR(2011.180 12:37:38.08) TMUP(
)
TMAC( ) TMIM( )</rsp>
<rsp>RTC(EMHTX32 ) MBR(IMS2 ) CC( 0) PGM(EMHPSB2 ) INQ(N)
IMSID(IMS2) TMCR(2011.180 12:37:38.08) TMUP(
)
TMAC( ) TMIM( )</rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: ワイルドカード名に一致するリソースごとに 1 行が返されています。定義されたリソースを持つ各 IMS からのリソース定義と、グローバル・リポジトリ定義が返されています。リポジトリ情報は、コマンド・マスター IMS によって返されています。リポジトリ内には、ワイルドカード名に一致するリソース名ごとの IMS 固有のセクションはありません。

QUERY RTC コマンドの例 4

TSO SPOC 入力:

```
QUERY RTC NAME(RTC00001) SHOW(EXPORTNEEDED)
```

TSO SPOC 出力:

```
Rtcode MbrName CC ExportNeeded
RTC00001 IMS1 0 N
```

OM API 入力:

```
CMD(QUERY RTC SHOW(EXPORTNEEDED))
```

関連概念:

[🔗](#) CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

[🔗](#) /DISPLAY MODIFY コマンド (コマンド)

[🔗](#) /DISPLAY RTCODE コマンド (コマンド)

[🔗](#) /DISPLAY STATUS コマンド (コマンド)

[🔗](#) コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

QUERY RTCDESC コマンド

QUERY RTCDESC コマンドは、高速機能の宛先記述子を照会するために使用します。記述子は、記述子を作成するために使用できるモデルです。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 653 ページの『キーワード』
- 656 ページの『使用上の注意』
- 657 ページの『出力フィールド』
- 660 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 662 ページの『例』

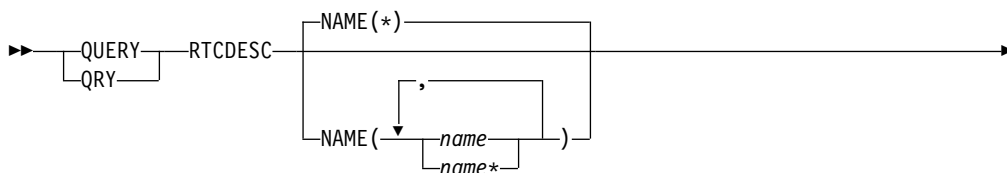
環境

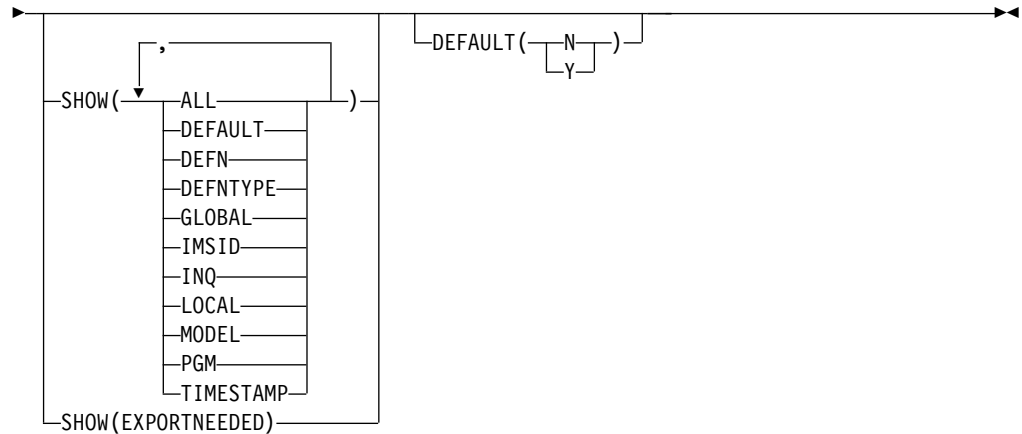
以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/BC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 191. QUERY RTCDESC コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUERY RTCDESC	X		X
NAME	X		X
SHOW	X		X
DEFAULT	X		X

構文





キーワード

以下のキーワードは、QUERY RTCDESC コマンドに有効です。

NAME

宛先コード記述子の名前 (1 から 8 文字) を指定します。名前にはワイルドカードを指定することができます。名前は反復可能なパラメーターです。デフォルトは NAME(*) で、これはすべての宛先コード記述子リソースを戻します。

DEFAULT

指定されたデフォルト値をもつ宛先コード記述子を表示用に選択します。DEFAULT(Y) は、唯一のデフォルト記述子を表示します。DEFAULT(N) は、デフォルト以外のすべての記述子を表示します。

SHOW

戻される宛先コード記述子出力フィールドを指定します。宛先コード記述子名は、出力を作成した IMS の名前および完了コードとともに、常に戻されます。SHOW キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあります。

ALL

宛先コード記述子自体に関するすべての情報を戻します。宛先コード記述子に関連したリソースについての情報を戻すために、他の SHOW キーワードを指定することもできます。

制約事項: SHOW(EXPORTNEEDED) を指定した場合に戻される ExportNeeded 列は、SHOW(ALL) では戻されません。

DEFAULT

デフォルト記述子オプション。

DEFN

リソース定義を戻すように指定します。

戻される宛先コード記述子属性には、INQ、PGM、DEFAULT、リポジトリ内の作成および更新のタイム・スタンプ、および IMS ランタイムの作成、更新、インポート、およびアクセスのタイム・スタンプがあります。

SHOW(DEFN) でその他の SHOW フィルターが指定されない場合、または IMSID フィルターが指定されている場合、リポジトリでグローバルに定義された定義属性および IMS システム内でローカルに定義された定義属

性を含む、すべての定義属性が戻されます。IMS システムのランタイム・リソース定義は、コマンドを受信する各 IMS によって戻されます。リポジトリ内の保管済みリソース定義は、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合、コマンド・マスター IMS によって戻されます。

コマンド・マスター IMS は、リポジトリから取得した汎用保管済みリソース定義ごとに応答行を戻します。それぞれの応答行には、汎用リソース定義の属性が表示されます。SHOW(DEFN) を IMSID フィルターなしで指定し、すべての IMS システムに定義されている属性値が同一の場合、汎用定義の応答行のみが戻されます。保管済みリソース定義が定義されている IMS システムの IMS ID は戻されません。IMS システムの保管済みリソース定義に、汎用保管済みリソース定義と異なる属性値が 1 つ以上含まれている場合は、属性値が異なる IMS ごとに追加の応答行が戻されます。

SHOW(DEFN,LOCAL) が指定されている場合、コマンドを受信した各 IMS により、IMS システムのランタイム・リソース定義が戻されます。

SHOW(DEFN,GLOBAL) が指定されている場合、コマンド・マスター IMS により、リポジトリの保管済みリソース定義が戻されます。

SHOW(DEFN,GLOBAL) は、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合のみ有効です。

SHOW(DEFN) にその他のパラメーターが指定されている場合、要求された定義属性のみが戻されます。例えば SHOW(DEFN,TIMESTAMP) が指定されている場合、タイム・スタンプのみが戻されます。

制約事項:

- SHOW(DEFN) は、DEFNTYPE および MODEL と一緒に指定することはできません。
- QRY RTCDESC SHOW(ALL) コマンドで戻される LModelName 列、LModelType 列、および LDefnType 列は、SHOW(DEFN) では戻されません。
- SHOW(DEFN) を指定した場合に戻される Repo 列および IMSid 列は、SHOW(ALL) では戻されません。

リポジトリからの宛先コード記述子情報を照会する際に、リポジトリに保管されたリソース定義を使用してリポジトリ情報を持つ応答行を判別し、ランタイム・リソース定義を使用して IMS ランタイム・リソース情報を持つ応答行を判別します。指定されたフィルターと一致する保管済みリソース定義またはランタイム・リソース定義のそれぞれに、応答行が戻されます。SHOW(DEFN,GLOBAL) が指定されている場合、指定されたフィルターと一致する保管済みリソース定義のみが戻されます。

SHOW(DEFN,LOCAL) が指定されている場合、指定されたフィルターと一致するランタイム・リソース定義のみが戻されます。

SHOW(DEFN,IMSID) を指定すると、IMS の保管済みリソース定義が汎用リソース定義と同一であるかどうかにかかわらず、汎用保管済みリソース定義に対して応答行が返され、リポジトリにリソースが定義されている IMS ごとに追加の応答行が返されます。

DEFNTYPE

記述子の定義に使用された定義タイプ。

EXPORTNEEDED

NAME パラメーターに一致し、作成されたか最後に更新されて以降 IMSRSC リポジトリにエクスポートされたことがない宛先コード記述子リソースだけを QUERY コマンドで戻すよう指定します。

NAME キーワードが省略されたか NAME(*) が指定された場合、リポジトリにエクスポートする必要がある宛先コード記述子の名前だけが戻されません。

NAME キーワードで特定の名前が指定されたか NAME(*) 以外の総称名が指定された場合、コマンドで指定された宛先コード記述子名ごとに 1 行ずつ、応答行が戻されます。指定された宛先コード記述子をリポジトリにエクスポートする必要がない場合は、ExportNeeded 列に N が戻されます。

SHOW(EXPORTNEEDED) は、他のいかなる SHOW パラメーターや他のキーワードとも一緒に指定することはできず、IMS で IMSRSC リポジトリが使用可能になっている場合にのみ有効です。

QUERY RTCDESC SHOW(EXPORTNEEDED) コマンドは、XRF 代替システムでは無効です。

ヒント: IMSRSC リポジトリにエクスポートされたことがないリソースおよび記述子の場合、EXPORT DEFN TARGET(REPO) OPTION (CHANGESONLY) コマンドを発行して、リソース定義および記述子定義をリポジトリに書き込み、次の IMS のコールド・スタートで使用できるようにすることができます。

GLOBAL

リポジトリの保管済みリソース定義を戻すように指定します。

SHOW(GLOBAL,DEFN) が指定される場合、コマンド・マスター IMS により、リポジトリのグローバル・リソース定義が戻されます。

SHOW(GLOBAL,DEFN) は、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合のみ有効です。

IMSID

指定された名前をリソース・リストに含む IMS システムの IMS ID を戻すように指定します。SHOW(IMSID) は、コマンド・マスター IMS によってのみ処理され、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合にのみ有効です。

SHOW(IMSID) が DEFN フィルターとともに指定されている場合、保管済みリソース定義に加えて、定義済みのリソースが存在する各 IMS に、別個の行が戻されます。

SHOW(IMSID) が DEFN フィルターなしで指定されている場合、リソース名とともに定義済みのリソースが存在する各 IMS に別個の行が戻されません。リソース定義は戻されません。

SHOW(IMSID) は、DEFN および GLOBAL 以外の SHOW フィルターとともに指定することはできません。SHOW(IMSID,GLOBAL) が指定されている場合、GLOBAL は無視されます。つまり、SHOW(IMSID,GLOBAL) は SHOW(IMSID) として扱われます。SHOW(DEFN,IMSID,LOCAL) は SHOW(DEFN,LOCAL) として扱われます。

INQ

この宛先コード記述子に関連付けられているトランザクション・メッセージの照会オプション。

LOCAL

IMS システムのランタイム・リソース定義を戻すように指定します。

SHOW(DEFN,LOCAL) は、コマンドを処理する IMS システムからローカルの定義属性のみを戻します。

MODEL

この記述子を作成するために使用されたモデル名とモデル・タイプ。記述子が、すべて定義済み属性を使用して作成され、モデルが指定されていない場合、モデル名とモデル・タイプはブランクです。LIKE キーワードなしで指定された CREATE コマンドは、デフォルト記述子をモデルとして使用して記述子を作成します。デフォルト記述子は、IMS 記述子 DBFDSRT1 またはユーザー定義のいずれかです。LIKE キーワードが指定された CREATE コマンドは、モデルを使用して記述子を作成します。記述子は、すべてモデルと同じ属性を使用して作成されます。属性は、モデル属性をオーバーライドする CREATE コマンドにより明示的に設定されます。モデル・タイプは、記述子 (DESC) またはリソース (RSC) のいずれかです。モデル名およびモデル・タイプは参照用のみです。属性が CREATE または UPDATE コマンドの値によってオーバーライドされた場合、あるいはモデルが後で更新された場合、記述子の属性はモデルと一致しないことがあります。モデル名とモデル・タイプを使用すると、同じモデルを使って作成されたリソースを識別できます。リソースのモデル名およびモデル・タイプはエクスポートおよびインポートされます。IMPORT コマンドは、リソースを作成する際にモデル名とモデル・タイプを使用しません。

PGM

この宛先コードに関連付けられているプログラム。

TIMESTAMP

作成時間 (TIMECREATE)、最終更新時間 (TIMEUPDATE)、最終アクセス時間 (TIMEACCESS)、および最終インポート時間 (TIMEIMPORT) のタイム・スタンプが戻されます。時刻は現地時間で、YYYY.JJJ HH:MM:SS.TH の形式で戻されます。ここで、

- YYYY は年です。
- JJJ はユリウス日 (001 から 365) です。
- HH は時 (01 から 24) です。
- MM は分 (00 から 59) です。
- SS は秒 (00 から 59) です。
- TH は 10 分の 1 秒および 100 分の 1 秒 (00 から 99) です。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager API を介してのみ出すことができます。高速機能がシステムにインストールされていなければなりません。このコマンドは DB/DC および DCCTL システムに適用されます。

このコマンドは、XRF 代替システムで使用できます。

MODBLKS のオンライン変更が使用可能な場合 (DFSDFxxx または DFSCGxxx が MODBLKS=OLC で定義されているか、MODBLKS が定義されていない場合)、QUERY RTCDESC コマンドは無効です。

リソース定義に関する情報を表示するには、SHOW(DEFN) を指定します。リソースが定義されている IMS システムを判別し、また各 IMS システムの属性またはリソース定義を知るには、SHOW(DEFN,IMSID) を指定します。リソースが定義されている IMS システムを判別するには、SHOW(IMSID) を指定します。

出力フィールド

以下の表は、QUERY RTCDESC の出力フィールドを示しています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

有効範囲

出力フィールドの有効範囲を識別します。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 192. QUERY RTCDESC コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
CC	CC	N/A	LCL	完了コード。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	LCL	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
DESC	DescName	RTCDESC	LCL	宛先コード記述子名。
DFNT	LDefnType	DEFNTYPE	LCL	定義タイプ。次のうちのいずれか 1 つが可能です。

CREATE

CREATE コマンドにより定義されます。

IMPORT

IMPORT コマンドにより定義されます。

IMS

IMS により定義されます。DBFDSRT1 は、デフォルトの宛先コード値を含んでいる IMS 定義の宛先コード記述子です。

表 192. QUERY RTCDESC コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
DFLT	LDflt	DEFAULT	LCL	<p>デフォルト記述子であるか (Y) ないか (N)。</p> <p>N 記述子はデフォルトではありません。</p> <p>Y 記述子はデフォルトです。LIKE キーワードなしで記述子が作成されるとき、CREATE コマンドで指定されない属性は、デフォルト記述子に定義されている値を取ります。リソース・タイプのデフォルトとして、記述子 1 つだけが定義できます。IMS は、DBFDSRT1 と呼ばれるデフォルト宛先コード記述子を定義しています。ここでは、すべての属性がデフォルト値で定義されています。ユーザー定義記述子をデフォルトに定義すると、現在のデフォルト記述子がオーバーライドされます。</p>
EXPN	ExportNeeded	EXPORTNEEDED	LCL	<p>宛先コード記述子が IMSRSC リポジトリにエクスポートされたかどうかを示します。値は Y または N のどちらかです。</p>
IMSID	IMSid	IMSID	GBL	<p>定義されたリソースを持つ IMSID を返します。出力値はリポジトリから取得されます。</p>
INQ	LInq	INQ, DEFN	LCL	<p>宛先コードに関連する照会トランザクションであるか (Y) ないか (N)。出力値は、ローカル IMS から取得されます。</p> <p>N 照会オプションは使用不可です。</p> <p>Y 照会オプションが使用可能です。この宛先コードに関連するトランザクション・メッセージは、データベースを変更しません。プログラムは、データベースへの挿入、削除、または置換の呼び出しを出すのを禁止されます。</p>
MBR	MbrName	N/A	LCL	<p>出力行を作成した IMSplex メンバー。</p>
MDLN	LModelName	MODEL	LCL	<p>モデル名。このリソースを作成するためのモデルとして使用された記述子の名前。DBFDSRT1 は、宛先コード用の IMS 記述子名です。</p>
MDLT	LModelType	MODEL	LCL	<p>モデル・タイプ、RSC または DESC。RSC は、別のリソースをモデルとして使用してリソースが作成されたことを意味します。DESC は、記述子をモデルとして使用してリソースが作成されたことを意味します。</p>
PGM	PgmName	PGM	LCL	<p>プログラム名。</p>
RDFLT	Dflt	DEFN	GBL	<p>デフォルト記述子であるか (Y) ないか (N)。値はリポジトリから取得されます。</p>

表 192. QUERY RTCDESC コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
REPO	Repo	DEFN	GBL	出力行に保管済みリソース定義が含まれているかどうかを示します。 Y リポジトリ定義を示します。 (ブランク) ローカル定義を示します。
RINQ	Inq	INQ, DEFN	GBL	宛先コードに関連する照会トランザクションであるか (Y) ないか (N)。出力値はリポジトリから取得されます。
RPGM	PgmName	DEFN	GBL	プログラム名。値はリポジトリから取得されます。
RTMCR	TimeCreate	DEFN	GBL	リポジトリでの作成時刻。これは、リポジトリ内で最初にリソースが作成された時刻です。
RTMUP	TimeUpdate	DEFN	GBL	リポジトリでの更新時刻。これは、リポジトリ内で最後にリソースが更新された時刻です。
TMAC	LTimeAccess	TIMESTAMP	LCL	宛先コード記述子が最後にアクセスされた時刻。最終アクセス時間は、ウォーム・スタート、緊急時再始動、EXPORT および IMPORT にまたがって保持されます。最終アクセス時間の更新はログに記録されません。再始動後は、最終アクセス時間は再始動チェックポイント・ログ・レコードに記録された時間を反映します。 出力値は、ローカル IMS から取得されます。 宛先コード記述子の場合、CREATE コマンドがその記述子をモデルとして参照すると、最終アクセス時間が更新されます。
TMCR	LTimeCreate	TIMESTAMP	LCL	宛先コード記述子が作成された時刻。出力値は、ローカル IMS から取得されます。この値は、CREATE RTCDESC コマンド、宛先コードを作成する IMPORT コマンド、または IMS の初期設定の結果です。作成時刻は、ウォーム・スタート、緊急時再始動、EXPORT および IMPORT にまたがって保持されます。
TMIM	LTimeImport	TIMESTAMP	LCL	宛先コード記述子が最後にインポートされた時刻 (該当する場合)。インポート時刻は、ウォーム・スタートと緊急時再始動にまたがって保持されます。出力値は、ローカル IMS から取得されます。
TMUP	LTimeUpdate	TIMESTAMP	LCL	UPDATE RTCDESC コマンドまたは IMPORT コマンドの結果として実行時リソース定義の属性が更新された最終時刻。更新時刻は、ウォーム・スタートや緊急時再始動を越えて保持されます。出力値は、ローカル IMS から取得されます。

戻りコード、理由コード、および完了コード

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 193. QUERY RTCDESC コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'00000004'	X'00001010'	戻されるリソースは検出されませんでした。指定されたリソース名が無効であるか、以下のことが考えられます。 <ul style="list-style-type: none"> 指定したフィルターと一致するリソースがありませんでした。 指定された SHOW(WORK) で表示される作業を持つリソースがありませんでした。 SHOW(EXPORTNEEDED) が指定されていた場合は、IMSRSC リポジトリにエクスポートする必要があるリソースがありませんでした。
X'00000008'	X'00002004'	無効なコマンド・キーワードまたは無効なコマンド・キーワードの組み合わせ。
X'0000000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'0000000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'00000010'	X'00004004'	CQS アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'00004018'	リソース構造が存在しないか、リソース構造が使用できません。
X'00000010'	X'00004024'	高速機能が定義されていません。
X'00000010'	X'00004100'	リソース構造が満杯です。
X'00000010'	X'00004104'	RM アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'00004108'	SCI アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'00004300'	MODBLKS のオンライン変更が有効なため、コマンドが許可されません (DFSDFxxx または DFSCGxxx が MODBLKS OLC で定義されているか、または MODBLKS が定義されていません)。
X'00000010'	X'00004500'	IMS はリポジトリを使用できません。
X'00000010'	X'00004501'	RM はリポジトリには使用できません。
X'00000010'	X'00004502'	リポジトリは使用できません。
X'00000010'	X'00004503'	リポジトリは停止しています。
X'00000010'	X'00004504'	リポジトリ・スペアのリカバリーが進行中です。

表 193. QUERY RTCDESC コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000010'	X'00004505'	IMS リソース・リストが存在しないか、IMS リソース・リスト内に該当するリソース・タイプのリソースが存在しません。
X'00000010'	X'00004507'	リポジトリ・アクセスは拒否されます。
X'00000010'	X'00004508'	リポジトリの最大入力長を超過しました。
X'00000010'	X'00004509'	RM データのバージョンは IMS データのバージョンよりも低いバージョンです。
X'00000010'	X'0000450A'	リポジトリ・サーバーをシャットダウンしています。
X'00000010'	X'0000450B'	リポジトリ・サーバーは使用できません。
X'00000010'	X'0000450C'	リポジトリ・サーバーは使用中です。
X'00000010'	X'0000450D'	RM は、IMSRSC リポジトリに関連した一部の内部フィールドの定義に失敗しました。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できませんでした。
X'00000014'	X'0000501C'	IMODULE GETMAIN エラー。
X'00000014'	X'00005100'	RM 要求エラー。
X'00000014'	X'00005104'	CQS エラー。
X'00000014'	X'00005108'	SCI 要求エラー。
X'00000014'	X'00005110'	リポジトリ・エラー。
X'00000014'	X'0000551C'	破損したリソース・リストが検出されたため、リポジトリ内のデータを表示する要求は拒否されました。リソース・リストが使用できないため、QUERY RTCDESC コマンドは拒否されました。IBM ソフトウェア・サポートに連絡してください。エラーになったコマンドの出力と、コマンドが実行されたローカル RM アドレス・スペースのダンプまたは IMSplex 内のすべての RM アドレス・スペースのダンプを送信してください。また、IMSRSC リポジトリ RID データ・セットと RMD データ・セットのコピーも送信してください。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。以下の表には、完了コードの説明が記載されています。

表 194. QUERY RTCDESC コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		宛先コードまたは宛先コード記述子に対するコマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	宛先コード名または宛先コード記述子名が無効であるか、指定されたワイルドカード・パラメーターがどのリソース名にも一致しません。

例

以下は QUERY RTCDESC コマンドの例です。

QUERY RTCDESC コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QRY RTCDESC SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

DescName	MbrName	CC	LPgmName	LInq	LModelName	LModelType	LDflt
DBFDSRT1	IMS1	0		N			Y

(右にスクロール、画面 2)

DescName	MbrName	CC	LTimeCreate	LTimeUpdate
DBFDSRT1	IMS1	0	2011.180 12:37:38.07	

(右にスクロール、画面 3)

DescName	MbrName	CC	LTimeAccess	LTimeImport	LDefnType
DBFDSRT1	IMS1	0	2011.180 13:18:55.75		IMS

OM API 入力:

```
CMD(QUERY RTCDESC SHOW(ALL))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.180 21:20:16.670548</statime>
<stotime>2011.180 21:20:16.671350</stotime>
<staseq>C7FF0A28EBF54657</staseq>
<stoseq>C7FF0A28EC276557</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10142016</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>RTCDESC </kwd>
<input>QRY RTCDESC SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="DESC" l1b1="DescName" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="4" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="no"
  len="4" dtype="CHAR" align="right" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1b1="PGM" l1b1="LPgmName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="INQ" l1b1="LInq" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="INT" align="left" />
<hdr s1b1="MDLN" l1b1="LModelName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="MDLT" l1b1="LModelType" scope="LCL" sort="n" key="0"
```

```

scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="DFLT" l1bl="LDflt" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="1" dtype="INT" align="left" />
<hdr s1bl="TMCR" l1bl="LTimeCreate" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMUP" l1bl="LTimeUpdate" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMAC" l1bl="LTimeAccess" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMIM" l1bl="LTimeImport" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="DFNT" l1bl="LDefnType" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DESC(DBFDSRT1) MBR(IMS1 ) CC( 0) PGM( ) INQ(N)
DFLT(Y) TMCR(2011.180 12:37:38.07) TMUP( )
TMAC(2011.180 13:18:55.75) TMIM( ) DFNT(IMS )
</rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: すべての宛先コード記述子が、すべての出力フィールドと共に戻されています。宛先コード記述子の出力フィールドのすべては 1 つの画面に収まらないため、ユーザーは右にスクロールして、追加の出力フィールドを見る必要があります。宛先コード記述子名、その出力行を作成したメンバー名、および完了コードが、各画面に表示されています。IMS 定義の記述子 DBFDSRT1 には、IMS デフォルト宛先コード値が入っています。

QUERY RTCDESC コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
QUERY RTCDESC NAME(*) SHOW(DEFN,PGM,INQ))
```

TSO SPOC 出力:

DescName	MbrName	CC	CCText	Repo	IMSid
*	IMS1	1D3	REPOSITORY MEMBER NOT FOUND	Y	
DBFDSRT1	IMS1	0			IMS1
DBFDSRT1	IMS2	0			IMS2
DBFDSRT1	IMS3	0			IMS3

(右にスクロール、画面 2)

DescName	MbrName	CC	Repo	IMSid	PgmName	LPgmName	Inq	LIInq
*	IMS1	1D3	Y					
DBFDSRT1	IMS1	0		IMS1			N	
DBFDSRT1	IMS2	0		IMS2			N	
DBFDSRT1	IMS3	0		IMS3			N	

OM API 入力:

```
CMD(QRY RTCDESC NAME(*) SHOW(DEFN,PGM,INQ))
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.180 21:29:29.633544</statime>
<stotime>2011.180 21:29:29.744831</stotime>
<staseq>C7FF0C3844B08F1C</staseq>

```

```

<stoseq>C7FF0C385FDBFD40</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10142929</rqsttkn1>
<rc>0200000C</rc>
<rsn>00003000</rsn>
<rsnmsg>CSLN023I</rsnmsg>
<rsntxt>At least one request was successful.</rsntxt>
</ctl>
<cmderr>
<mbr name="IMS1  ">
<typ>IMS </typ>
<styp>DBDC </styp>
<rc>0000000C</rc>
<rsn>00003000</rsn>
<rsntxt>At least one request successful</rsntxt>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>RTCDESC </kwd>
<input>QRY RTCDESC NAME(*) SHOW(DEFN,PGM,INQ) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="DESC" l1bl="DescName" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="4" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="no"
  len="4" dtype="CHAR" align="right" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1bl="REPO" l1bl="Repo" scope="LCL" sort="d" key="2" scroll="no"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="IMSID" l1bl="IMSid" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RPGM" l1bl="PgmName" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="PGM" l1bl="LPgmName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RINQ" l1bl="Inq" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="INT" align="left" />
<hdr s1bl="INQ" l1bl="LInq" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="INT" align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DESC(DBFDSRT1) MBR(IMS3 ) CC( 0) PGM( ) INQ(N)
  IMSID(IMS3)</rsp>
<rsp>DESC(*) MBR(IMS1 ) CC( 1D3) CCTXT(REPOSITORY MEMBER NOT
  FOUND) REPO(Y) </rsp>
<rsp>DESC(DBFDSRT1) MBR(IMS1 ) CC( 0) PGM( ) INQ(N)
  IMSID(IMS1)</rsp>
<rsp>DESC(DBFDSRT1) MBR(IMS2 ) CC( 0) PGM( ) INQ(N)
  IMSID(IMS2)</rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: 指定されたリソースの保管済みリソース定義およびランタイム・リソース定義が戻されます。リポジトリー内には宛先コード記述子用の保管済みリソース定義はないため、リポジトリー情報にはエラー完了コードが返されています。

QUERY RTCDESC コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
QUERY RTCDESC NAME(RTCD*,NOTFN*) SHOW(EXPORTNEEDED)
```

TSO SPOC 出力:

DescName	MbrName	CC	CCText	ExportNeeded
NOTFN*	IMS1	10	NO RESOURCES FOUND	
RTCD0001	IMS1	0		N
RTCD0002	IMS1	0		Y

OM API 入力:

CMD(QUERY RTCDESC SHOW(EXPORTNEEDED))

関連概念:

🔗 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

🔗 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

QUERY STRUCTURE コマンド

QUERY STRUCTURE コマンドは、IMSplex のメンバーによって使用された IMS カップリング・ファシリティ構造に関する情報を表示するために使用します。

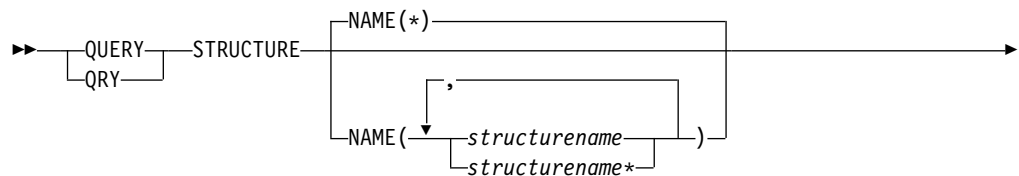
サブセクション:

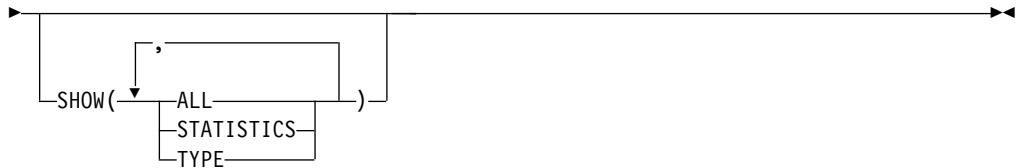
- 『環境』
- 『構文』
- 666 ページの『キーワード』
- 666 ページの『使用上の注意』
- 666 ページの『出力フィールド』
- 667 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 669 ページの『例』

環境

QUERY STRUCTURE コマンドは、IMS 制御領域または従属領域のアドレス・スペースでは実行されないため、このコマンド自体の環境標識はありません。QUERY STRUCTURE は、RM コマンド処理環境で処理されます。

構文





キーワード

以下のキーワードは、QUERY STRUCTURE コマンドに有効です。

NAME()

情報が戻される構造の名前を指定します。構造名には、総称パラメーターを使用できます。これにより、総称パラメーター・マスクに一致する名前を持つ構造グループを簡単に指定できるようになります。

SHOW()

戻される出力フィールドを指定します。SHOW が指定されていない場合は、構造名、出力行を作成する IMSplex メンバー、および完了コードのみが戻されます。これは、システム管理アプリケーションが、すべての構造名のリストを入手するための方法を提供します。また、RM によって管理されるリソース構造を判別する決定するために使用することもできます。SHOW キーワードでサポートされるパラメーターは、以下のとおりです。

ALL

すべての出力フィールドを戻します。

STATISTICS

NAME() パラメーターでの指定と一致する構造の統計情報を表示します。

TYPE

指定された構造のタイプを戻します。例えば、リソース構造を示す RSRC があります。

使用上の注意

このコマンドは、リソース構造に関する情報を戻すため、Resource Manager (RM) によってのみサポートされています。

このコマンドのコマンド構文は Extensible Markup Language (XML) で定義され、Operations Manager (OM) と通信する自動化プログラムに対して使用可能です。

出力フィールド

以下の表は、QUERY STRUCTURE の出力フィールドに関する情報を示しています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 195. QUERY STRUCTURE コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
STRNM	StructureName	N/A	リソース構造名。構造名は常に戻されます。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。出力行を作成した RM の RM ID。
CC	CC	N/A	出力行の完了コード。完了コードは常に戻されます。
CCTXT	CCText	N/A	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
TYP	タイプ	TYPE	構造タイプ。RSRC は RM リソース構造を示します。
LEA	LeAlloc	STATISTICS	構造内に割り振られるリスト項目数。
LEI	LeInuse	STATISTICS	構造内で使用中のリスト項目数。
ELMA	ElmAlloc	STATISTICS	構造内に割り振られるデータ・エレメント数。
ELMI	ElmInuse	STATISTICS	構造内で使用中のデータ・エレメント数。
RATIO	LE/EL	STATISTICS	項目対エレメントの比率。リスト項目/データ・エレメントの形式で表されます。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY STRUCTURE コマンドの結果として戻される戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表には、QUERY STRUCTURE コマンドから OM に戻される可能性のある戻りコードと理由コードが記載されています。

表 196. QUERY STRUCTURE コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY STRUCTURE コマンドは正常に完了しました。
X'00000010'	X'00000534'	CQSQUERY バッファ割り振りの失敗のため、コマンドは完了しませんでした。

表 196. QUERY STRUCTURE コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'0300000C'	X'00003000'	QUERY STRUCTURE コマンドは、少なくとも 1 つのリソース名に対して正常に実行されます。QUERY STRUCTURE コマンドは、1 つ以上のリソース名に対しては、正常に実行されません。完了コードに、エラーの理由とリソース名が示されています。QUERY STRUCTURE コマンドによって戻される可能性のある完了コードは、QUERY STRUCTURE 完了コード表にリストされています。
X'0300000C'	X'00003004'	成功した要求はありません。指定されたリソース名が無効の可能性があるか、あるいは指定したフィルターと一致するリソースがありませんでした。
X'03000014'	X'0000502C'	QUERY STRUCTURE コマンド処理は終了しました。RM は、コマンド出力ヘッダー用のストレージを取得できませんでした。
X'03000014'	X'00005030'	QUERY STRUCTURE コマンド処理は終了しました。RM は、コマンド出力応答用のストレージを取得できませんでした。
X'03000014'	X'00005200'	予期しない共通キュー・サーバー (CQS) エラーのため、QUERY STRUCTURE コマンド処理が終了しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

以下の表には、QUERY STRUCTURE コマンドで戻される可能性のある完了コードが記載されています。

表 197. QUERY STRUCTURE コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		リソースに対する QUERY STRUCTURE コマンドは正常に完了しました。
4	NO RESOURCES FOUND	構造名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。構造名が誤って入力されているか、あるいは現時点では構造が定義されていないか、割り振られていない可能性があります。これがワイルドカードを使用した要求である場合、該当する名前がありませんでした。コマンドで指定する構造名名の正しいスペルを確認してください。
30	INVALID CHARACTER, RESOURCE NAME	間違った文字またはサポートされない文字が構造名に含まれています。
38	CQS UNEXPECTED ERROR	コマンドは CQS エラーのために失敗しました。

例

以下は QUERY STRUCTURE コマンドの例です。

QUERY STRUCTURE コマンドの例 1

このコマンドは、IMSpIex 内のすべてのリソース構造とその統計を表示します。リソース構造 IMSR SRC01 のみが定義されています。リソース構造に割り振られたリスト項目の数は 3577 で、構造上で使用中のリスト項目の数は 676 です。割り振られたデータ・エレメントの数は 3574 で、使用中のデータ・エレメントの数は 24 です。リソース構造上のリスト項目とデータ・エレメントの比率は、1 対 1 です。リソース構造上で使用中のリスト項目またはデータ・エレメントはそれほど多くないので、リソース構造は満杯に近い状態ではありません。

TSO SPOC 入力:

```
QRY STRUCTURE SHOW(STATISTICS)
```

TSO SPOC 出力:

StructureName	MbrName	CC	LeAlloc	LeInuse	ElmAlloc	ElmInuse	LE/EL
IMSR SRC01	RM1RM	0	3577	676	3574	24	0001/0001

OM API 入力:

```
CMD (QRY STRUCTURE SHOW(STATISTICS))
```

OM API 出力:


```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.1.0</omvsn>
<xmlvsn>1</xmlvsn>
<statime>2002.16314:31:34.901057</statime>
<stotime>2002.16314:31:34.941134</stotime>
<staseq>B7C49C9433D410C1</staseq>
<stoseq>B7C49C943D9CEC44</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10073134</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>RM1RM </master>
<userid>USRT011</userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>STRUCTURE</kwd>
<input>QUERY STRUCTURE SHOW(ALL)</input>
</cmd>
<cmdsphdr>
<hdr slbl="STRNM" llbl="StructureName" scope="LCL" sort="A" key="1" scroll="NO"
len="16" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr slbl="MBR" llbl="MbrName" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="NO" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr slbl="CC" llbl="CC" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="4"
dtype="INT" align="right" />
<hdr slbl="TYP" llbl="Type" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr slbl="LEA" llbl="LeAlloc" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="4"
dtype="INT" align="right" />
<hdr slbl="LEI" llbl="LeInuse" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="4"
dtype="INT" align="right" />
<hdr slbl="ELMA" llbl="ElmAlloc" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="4"
```

```


dtype="INT" align="right" />
<hdr slbl="ELMI" llbl="ElmInuse" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="4"
dtype="INT" align="right" />
<hdr slbl="RATIO" llbl="LE/EL" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="9"
dtype="CHAR" align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>STRNM(IMSRSRC01) MBR(RM1RM) CC( 0) TYP(RSRC) LEA(3577) LEI( 676) ELMA(3574)
ELMI( 24) RATIO(0001/0001)</rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

QUERY TRACE コマンド

QUERY TRACE コマンドは、タイプ 2 トレースに関する情報を表示するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 671 ページの『キーワード』
- 672 ページの『使用上の注意』
- 672 ページの『出力フィールド』
- 673 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 674 ページの『QUERY TRACE コマンドの例』

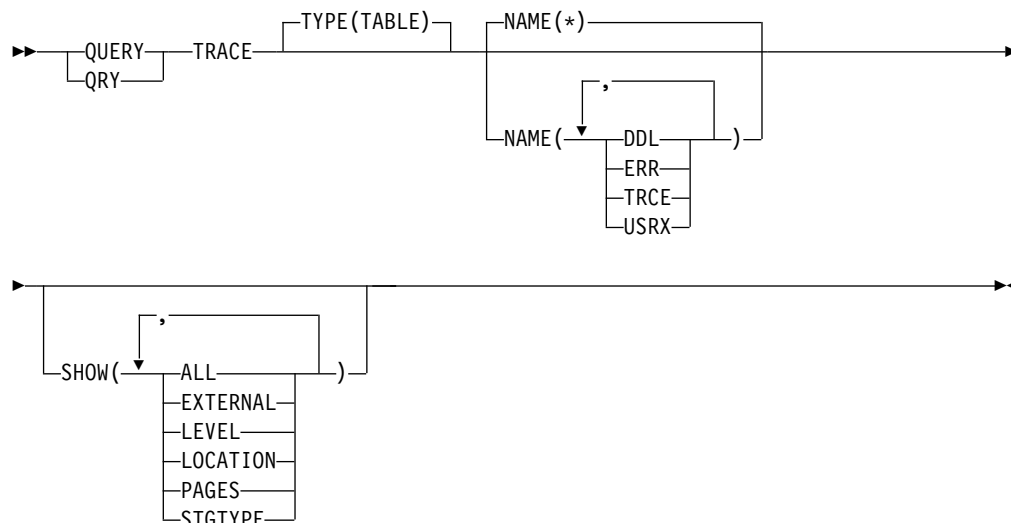
環境

以下の表には、QUERY TRACE コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/BC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 198. QUERY TRACE コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUERY TRACE	X	X	X
NAME	X	X	X
SHOW	X	X	X
TYPE	X	X	X

構文



キーワード

以下のキーワードは、`QUERY TRACE` コマンドに有効です。

Type()

トレース・タイプを指定します。

TABLE

タイプ 2 トレースを指定します。これはデフォルト値です。

NAME()

1 から 4 文字のタイプ 2 トレース名を指定します。名前にはワイルドカードを指定することができます。名前は反復可能なパラメーターです。

NAME キーワードには以下の値が有効です。

* すべてのトレースが返されます。これはデフォルト値です。

DDL データ定義言語 (DDL) トレース。

ERR エラー・トレース。

TRCE トレース・サービス・トレース。

USRX ユーザー出口サービス・トレース。

SHOW()

返されるトレース出力フィールドを指定します。トレース名とトレース・タイプは、常に、出力を作成した IMS システムの名前と完了コードとともに返されます。`SHOW` を指定しないと、トレース名、トレース・タイプ、出力を作成した IMS の名前、および完了コードのみが返されます。`SHOW` キーワードで以下のパラメーターを指定できます。パラメーターは、任意の順序で指定できます。

ALL

指定したトレースのすべての情報が返されます。

EXTERNAL

指定したトレースの外部トレースの状態が返されます。Y は、トレースの外部トレースがアクティブであることを示します。N は、外部トレースがアクティブでないことを示します。

LEVEL

指定したトレースのトレース・ボリューム・レベルが返されます。

LOCATION

トレース・データのロケーションが返されます。31 は、トレース・データが 31 ビット・ストレージにあることを示します。64 は、トレース・データが 64 ビット・ストレージにあることを示します。

PAGES

トレース用に割り振られている 4K ページの数が返されます。各ページには、ヘッダーと、トレース項目用のスペースがあります。

STGTYPE

トレースのストレージ・タイプ (Common または Private) が返されます。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager API を介してのみ出すことができます。このコマンドは DB/DC、DBCTL および DCCTL システムに適用されます。

このコマンドのコマンド出力は Extensible Markup Language (XML) で定義され、Operations Manager (OM) と通信する自動化プログラムに対して使用可能です。

このコマンドは、IMSplex のデフォルト経路指定として、IMSplex 内のすべての IMS システムに経路指定されます。

出力フィールド

以下の表は、QUERY TRACE の出力フィールドに関する情報を示しています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力に生成された長ラベルが入ります。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。

有効範囲

出力フィールドの有効範囲を識別します。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 199. QUERY TRACE コマンドの出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
CC	CC	N/A	N/A	出力行の完了コード。完了コードは常に戻されます。
CCTXT	CCText	error	N/A	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
EXT	External	EXTERNAL	LCL	トレースが外部トレース・データ・セットに書き込まれるかどうかを示します。
LEVEL	Level	LEVEL	LCL	トレースの現行ボリューム・レベル。
LOC	Location	LOCATION	LCL	トレースのロケーション。
MBR	MbrName	N/A	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。メンバー名は常に戻されます。
NAME	TraceName	NAME	LCL	トレース名。
PAGES	Pages	PAGES	LCL	トレース用に割り振られているページの数。
STG	StgType	STGTYPE	LCL	トレースのストレージ・タイプ。
TYPE	TraceType	TYPE	LCL	トレースのタイプ。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY TRACE コマンドの結果として戻される戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、QUERY TRACE コマンドから OM に戻される可能性がある戻りコードと理由コードを示しています。

表 200. QUERY TRACE コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY TRACE コマンドは正常に完了しました。
X'0000000C'	X'00003000'	QUERY TRACE コマンドは、少なくとも 1 つのトレースについては正常に実行されました。1 つ以上のトレースについて、コマンドが失敗しました。完了コードに、エラーの理由が示されています。QUERY TRACE コマンドにより戻される可能性がある完了コードのリストは、QUERY TRACE 完了コード表に示されています。
X'0000000C'	X'00003004'	指定されたすべてのトレースについて、QUERY TRACE コマンドが失敗しました。完了コードに、エラーの理由が示されています。QUERY TRACE コマンドにより戻される可能性がある完了コードのリストは、QUERY TRACE 完了コード表に示されています。

表 200. QUERY TRACE コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファーを取得できなかったため、QUERY TRACE コマンド処理は終了しました。
X'00000014'	X'00005FFF'	内部エラーが原因で、QUERY TRACE コマンド処理は終了しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

以下の表には、QUERY TRACE コマンドで戻される可能性のある完了コードが記載されています。

表 201. QUERY TRACE コマンドの完了コード

完了コード	意味
0	QUERY TRACE コマンドは、トレースに対して正常に完了しました。
10	リソースが見つかりません。この場合、リソースはトレース名です。指定されたトレースはどれも、コマンドを処理した IMS に認識されません。トレース名の入力に誤りがある可能性があります。正しいスペルのトレース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。

QUERY TRACE コマンドの例

TSO SPOC 入力:

```
QRY TRACE TYPE(TABLE) NAME(DDL,USRX) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

```
Response for: QRY TRACE TYPE(TABLE) NAME(DDL,USRX) SHOW(ALL)
TraceName MbrName CC TraceType Level Pages Location StgType External
DDL IMS1 0 Table None 10 31 Common N
DDL IMS2 0 Table None 8 31 Common N
USRX IMS1 0 Table High 6 31 Common N
USRX IMS2 0 Table None 6 31 Common N
```

OM API 入力:

```
CMD(QRY TRACE TYPE(TABLE) NAME(DDL,USRX) SHOW(ALL))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.7.0</omvsn>
<statime>2017.094 22:36:58.340816</statime>
<stotime>2017.094 22:36:58.354479</stotime>
<staseq>D256F32A269D0222</staseq>
<stoseq>D256F32A29F2F522</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10153658</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
```

```

<cmd>
<master>IMS2 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>TRACE </kwd>
<input>QRY TRACE TYPE(TABLE) NAME(DDL,USRX) SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="NAME" l1bl="TraceName" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="TYPE" l1bl="TraceType" scope="LCL" sort="n" key="0"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LEVEL" l1bl="Level" scope="LCL" key="0" len="6"
  dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="PAGES" l1bl="Pages" scope="LCL" key="0" len="5"
  dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="LOC" l1bl="Location" scope="LCL" key="0" len="2"
  dtype="INT" align="right" skipb="yes" />
<hdr s1bl="STG" l1bl="StgType" scope="LCL" key="0" len="7"
  dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="EXT" l1bl="External" scope="LCL" key="0" len="1"
  dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>NAME(USRX) MBR(IMS2) CC( 0) TYPE(Table ) LEVEL(None ) PAGES(
  6) LOC( 31) STG(Common ) EXT(N) </rsp>
<rsp>NAME(DDL ) MBR(IMS2) CC( 0) TYPE(Table ) LEVEL(None ) PAGES(
  8) LOC( 31) STG(Common ) EXT(N) </rsp>
<rsp>NAME(USRX) MBR(IMS1) CC( 0) TYPE(Table ) LEVEL(High )
  PAGES( 6) LOC( 31) STG(Common ) EXT(N) </rsp>
<rsp>NAME(DDL ) MBR(IMS1) CC( 0) TYPE(Table ) LEVEL(None ) PAGES(
  10) LOC( 31) STG(Common ) EXT(N) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: QUERY TRACE コマンドが IMS1 と IMS2 に経路指定されました。IMS1 と IMS2 は両方ともコマンドを処理して、DDL テーブル・トレースと USRX テーブル・トレースに関する情報を返しました。

QUERY TRAN コマンド

QUERY TRAN コマンドは、IMSplex 全体にわたるトランザクションについての情報 (例えば、クラス、状況、キュー・カウントなど) を表示するために使用します。このコマンドは、OM API を介してのみ指定でき、XRF 代替システムでのみ有効です。

サブセクション:

- 676 ページの『環境』
- 676 ページの『構文』
- 678 ページの『キーワード』
- 691 ページの『使用上の注意』
- 692 ページの『同等の IMS タイプ 1 コマンド』
- 692 ページの『出力フィールド』

- 705 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 708 ページの『例』

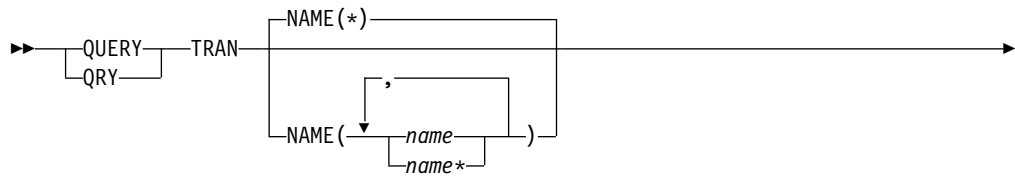
環境

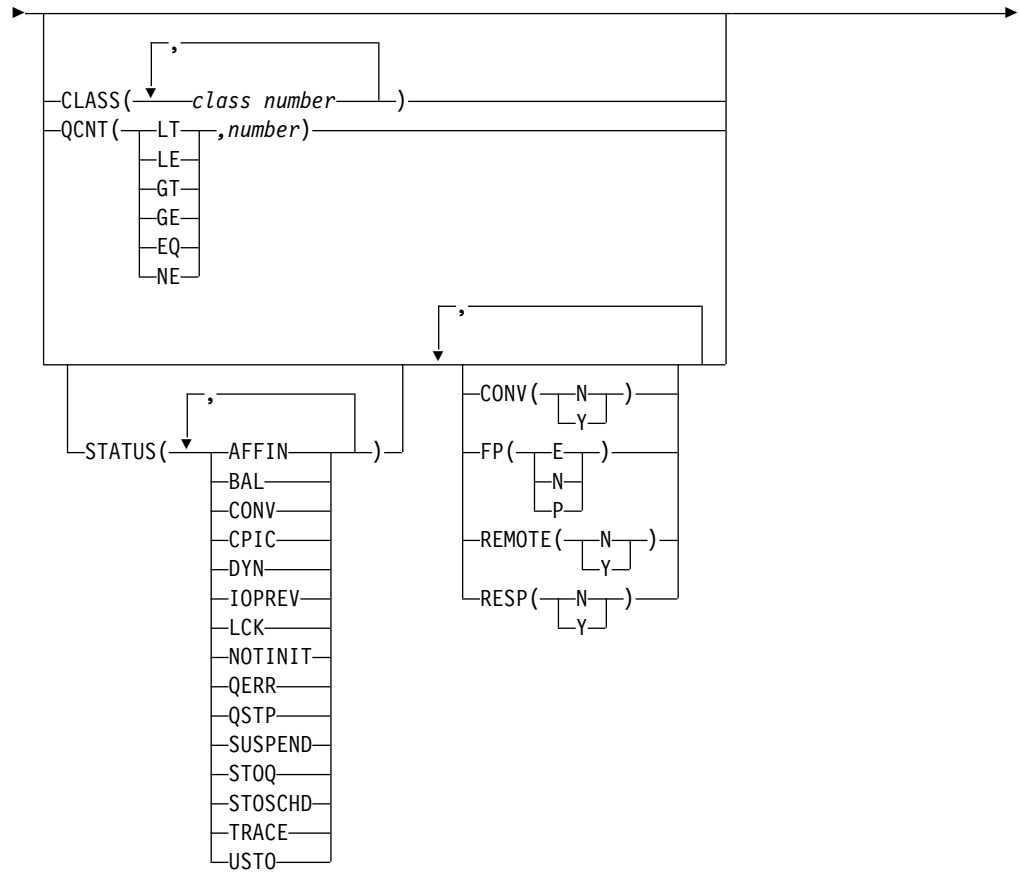
以下の表には、QUERY TRAN コマンドおよびキーワードを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

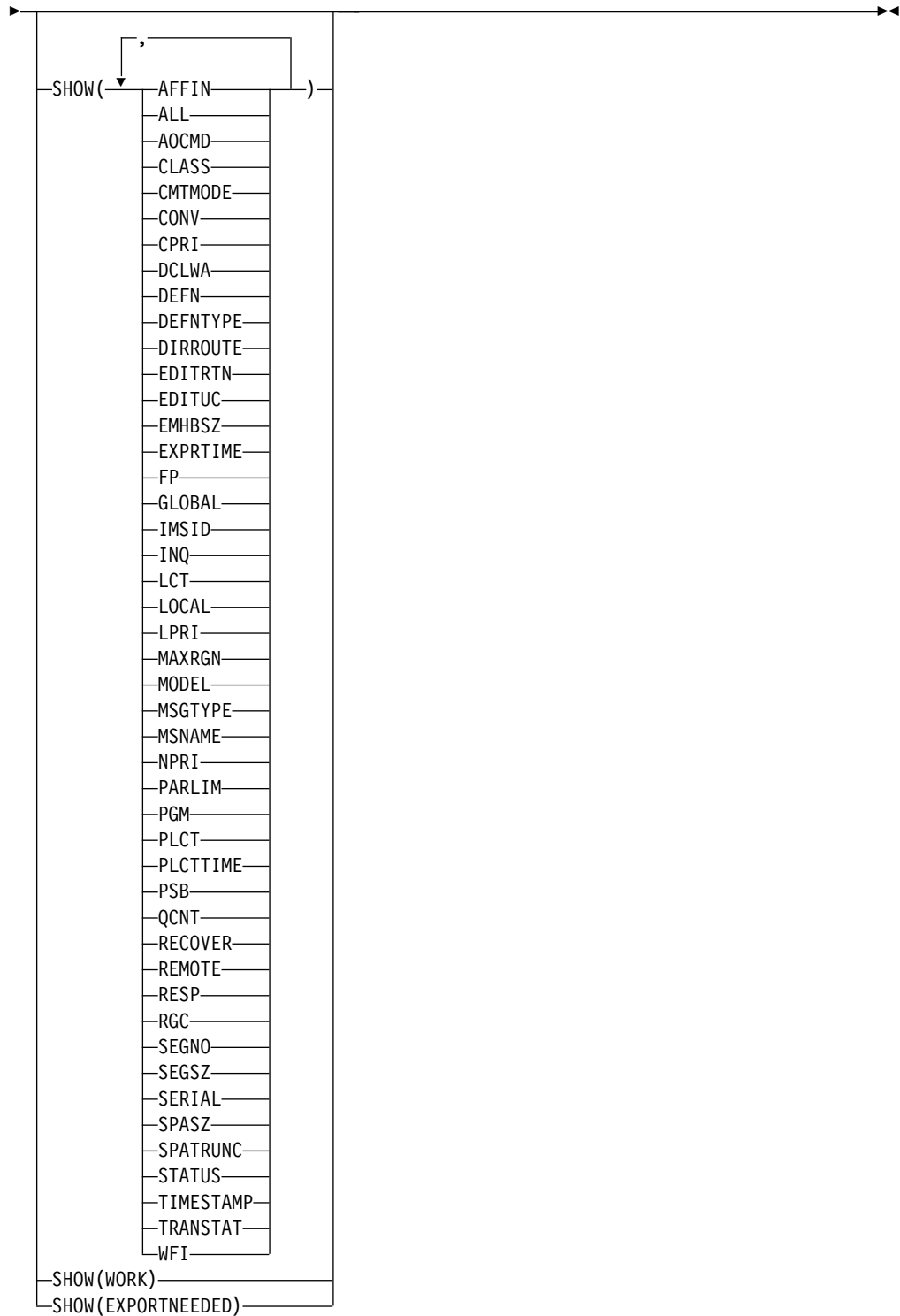
表 202. QUERY TRAN コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUERY TRAN	X		X
CLASS	X		X
CONV	X		X
FP	X		X
NAME	X		X
QCNT	X		X
REMOTE	X		X
RESP	X		X
SHOW	X		X
STATUS	X		X

構文







キーワード

以下のキーワードは、QUERY TRAN コマンドに有効です。

CLASS()

指定されたクラスの中の少なくとも 1 つを保有するトランザクションを表示

します。このキーワードによって、CLASS 値による追加のフィルター操作が可能になります。フィルター (STATUS、CLASS、QCNT など) が指定されていない場合は、そのトランザクション名に一致するすべてのトランザクションが戻されます。

CLASS フィルターが指定される場合に戻される出力には、SHOW(CLASS) オプションが指定されない場合でもトランザクション名が表示されるようにされたトランザクションのクラス値が含まれます。

CONV()

指定された会話属性を持つトランザクションを表示用に選択します。

FP()

指定された高速機能オプションを持つトランザクションを表示用に選択します。複数の FP オプションが指定されている場合、指定された高速機能オプションの少なくとも 1 つを持つトランザクションを表示用に選択します。

NAME()

トランザクションの名前 (1 から 8 文字) を指定します。名前にはワイルドカードを指定することができます。名前は反復可能なパラメーターです。デフォルトは NAME(*) で、これはすべてのトランザクションを戻します。フィルター (STATUS、CLASS、QCNT など) が指定されていない場合は、そのトランザクション名に一致するすべてのトランザクションが戻されます。

QCNT()

キュー・カウントが指定された数と比べて、より小 (LT)、より小か等しい (LE)、より大 (GT)、より大か等しい (GE)、等しい (EQ)、あるいは等しくない (NE) トランザクションを選択します。LT が指定される時、指定される数は 1 になることはできません。このキーワードによって、QCNT 値による追加のフィルター操作が可能になります。

QCNT フィルターが指定されている時は、キュー・カウントが 0 のトランザクションは戻されません。フィルター QCNT(LT,*n*) が指定されている場合、キュー・カウントが 0 より大きく *n* より小さいトランザクションが戻されます。フィルター (STATUS、CLASS、QCNT など) が指定されていない場合は、そのトランザクション名に一致するすべてのトランザクションが戻されます。

QCNT フィルターは、共用キュー環境でも非共用キュー環境でも有効です。

共用キュー環境では、QCNT が指定される場合、パフォーマンスへの影響は、共用キューの読み取りが行われるということです。この環境では、キューがグローバルであるため、QUERY TRAN QCNT コマンドはマスター IMS によってのみ処理されます。コマンド・マスターは、指定されたキュー・カウント・フィルターと一致する共用キュー上の全トランザクションを戻します。QCNT が、ワイルドカードを使用したトランザクション名とともに指定された場合、パフォーマンスへの影響は、カップリング・ファシリティ上すべての共用キューのトランザクション・メッセージを読み取る必要があるということです。

非共用キュー環境では、表示するトランザクションを決めるために、ローカル・キュー・カウント値が使用されます。この環境では、キューがローカルであるため、QUERY TRAN QCNT コマンドは、コマンドが経路指定されるそれぞれの IMS により処理されます。それぞれの IMS が、ローカルで検出されたトランザクションのうち、指定されたキュー・カウント・フィルターと一致する全トランザクションを戻します。

QCNT フィルターが指定される際に戻される出力には、SHOW(QCNT) オプションが指定されない場合でも、トランザクション名を表示させるトランザクションのキュー・カウントが含まれます。

REMOTE()

指定されたリモート・オプションを持つトランザクションを表示用に選択します。

RESP()

指定された応答モード・オプションを持つトランザクションを表示用に選択します。

SHOW()

戻されるトランザクション出力フィールドを指定します。トランザクション名は、出力を作成した IMS の名前および完了コードとともに、常に戻されます。SHOW が指定されない場合、QCNT、CLASS、または STATUS フィルターが指定されていない場合は、トランザクション名のみが戻されます。このキーワードは、システム管理アプリケーションが、IMSplex 内で現在認識されているトランザクション名と一致するトランザクションのリストを入手するための方法を提供します。

重要: QCNT() フィルターが指定されているときにサポートされる唯一の SHOW オプションは、AFFIN オプションです。他の SHOW オプションは、パフォーマンス上の理由により、QCNT() フィルターではサポートされません。

AFFIN

トランザクションには IMS とのローカル類似性があります。

AFFIN オプションが状況フィルターとして使用される場合、IMS には、類似性状況のあるすべてのトランザクションが表示されます。

SHOW(ALL) キーワードまたは SHOW(STATUS) キーワードが指定され、トランザクションに類似性状況がある場合、LclStat 列に AFFIN が表示されます。

SHOW(AFFIN) キーワードが QCNT フィルターと併用された場合、メッセージが共用キューに AFFIN 値とともに表示されます。

SHOW(AFFIN) キーワードが指定されているときに表示される類似性は、QCNT フィルターを使用する場合のみ有効であり、QUERY TRAN コマンドの別形式では無視されます。

AFFIN オプションは、共用キュー環境でのみ有効であり、非共用キュー環境では無視されます。

ALL

トランザクション自体に関するすべての情報を戻します。トランザクションに関連したリソースについての情報を戻すために、他の SHOW キーワードを指定することもできます。

グローバル値は、IMSplex のためにグローバル情報が保持される状況フィールドおよび属性についてのみ戻されます。

制約事項: SHOW(EXPORTNEEDED) を指定した場合に戻される ExportNeeded 列は、SHOW(ALL) では戻されません。

AOCMD

AOI オプションを戻すことを指定します。これは、トランザクションがタイプ 1 AOI CMD呼び出しまたはタイプ 2 AOI ICMD 呼び出しを発行できるかどうかを示します。

CLASS

特定の IMS において、どのメッセージ領域がローカルでトランザクションを処理できるかを決定するスケジューリング・クラス。

CMTMODE

データベースの更新および非急送出力メッセージがコミットされる時期を指定します。このオペランドは緊急時再始動に影響を与えます。

CONV

会話オプション。

CPRI

現行の優先順位。トランザクション・キュー・カウントが限界カウントより小さいときは、現行の優先順位は通常優先順位です。トランザクション・キュー・カウントが限界カウントに等しいか、それを超えると、現行の優先順位は限界優先順位に引き上げられます。

DCLWA

ログ先書きオプション。

DEFN

リソース定義を戻すように指定します。

戻されるトランザクション属性には、AOCMD、CLASS、CMTMODE、CONV、DCLWA、DIRROUTE、EDITUC、EDITRTN、EMHBSZ、EXPRTIME、FP、INQ、LCT、LPRI、MAXRGN、MSGTYPE、NPRI、PLCT、PLCTTIME、PARLIM、PGM、RECOVER、REMOTE、RESP、SERIAL、SIDR、SIDL、SEGNO、SEGSZ、SPASZ、SPATRUNC、TRANSTAT、WFI、リポジトリーの作成および更新のタイム・スタンプ、IMS ランタイムの作成、更新、インポート、アクセスのタイム・スタンプ、および IMS ランタイム MSNAME があります。

SHOW(DEFN) にその他の SHOW フィルターが指定されない場合、または IMSID フィルターが指定されている場合、すべての定義属性が戻されます。IMS システムのランタイム・リソース定義は、コマンドを受信する各 IMS によって戻されます。IMSRSC リポジトリー内の保管済みリソース定義は、コマンド・マスター IMS がそのリポジトリーを使用できる場合、コマンド・マスター IMS によって戻されます。

コマンド・マスター IMS は、リポジトリーから取得した汎用保管済みリソース定義ごとに応答行を戻します。それぞれの応答行には、汎用リソース定義の属性が表示されます。SHOW(DEFN) を IMSID フィルターなしで指定し、すべての IMS システムに定義されている属性値が同一の場合、汎用定義の応答行のみが戻されます。保管済みリソース定義が定義されている IMS システムの IMS ID は戻されません。IMS システムの保管済みリソース定義に、汎用保管済みリソース定義と異なる属性値が 1 つ以上含まれている場合は、属性値が異なる IMS ごとに追加の応答行が戻されます。

SHOW(DEFN,LOCAL) が指定されている場合、コマンドを受信した各 IMS により、IMS システムのランタイム・リソース定義が戻されます。

SHOW(DEFN,GLOBAL) が指定されている場合、コマンド・マスター IMS により、リポジトリの保管済みリソース定義が戻されます。

SHOW(DEFN,GLOBAL) は、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合のみ有効です。

SHOW(DEFN) にその他のパラメーターが指定されている場合、要求された定義属性のみが戻されます。例えば SHOW(DEFN,TIMESTAMP) が指定されている場合、タイム・スタンプのみが戻されます。

制約事項:

- SHOW(DEFN) は、DEFNTYPE、MODEL、QCNT、STATUS、または WORK と一緒に指定することはできません。
- QRY TRAN SHOW(ALL) コマンドで戻される LclStat 列、LModelName 列、LModelType 列、および LDefnType 列は、SHOW(DEFN) では戻されません。
- SHOW(DEFN) を指定した場合に戻される Repo 列および IMSid 列は、SHOW(ALL) では戻されません。
- リポジトリからトランザクション情報を照会する場合、SHOW(DEFN) フィルターを QCNT フィルターまたは STATUS フィルターと一緒に使用することはサポートされません。QCNT および STATUS のランタイム・フィルターは、SHOW(DEFN)、SHOW(DEFN,GLOBAL)、SHOW(DEFN,LOCAL)、SHOW(DEFN,IMSID)、SHOW(DEFN,IMSID,GLOBAL)、または SHOW(DEFN,IMSID,LOCAL) との併用は無効です。

リポジトリに保管されたリソース定義を使用してリポジトリ情報を持つ応答行を判別し、ランタイム・リソース定義を使用して IMS ランタイム・リソース情報を持つ応答行を判別します。指定されたフィルターと一致する保管済みリソース定義またはランタイム・リソース定義のそれぞれに、応答行が戻されます。SHOW(DEFN,GLOBAL) が指定されている場合、指定されたフィルターと一致する保管済みリソース定義のみが戻されます。

SHOW(DEFN,LOCAL) が指定されている場合、指定されたフィルターと一致するランタイム・リソース定義のみが戻されます。

SHOW(DEFN,IMSID) を指定すると、IMS の保管済みリソース定義が汎用リソース定義と同一であるかどうかにかかわらず、汎用保管済みリソース定義に対して応答行が返され、リポジトリにリソースが定義されている IMS ごとに追加の応答行が返されます。

DEFNTYPE

定義タイプ。これは、リソースが定義された方法を説明します。

DIRROUTE

MSC 直接経路指定オプション。

EDITRTN

プログラムがメッセージを受信する前にメッセージを編集する入力編集ルーチン。

EDITUC

入力データの大文字変換オプション。

EMHBSZ

高速機能トランザクションを実行するために必要な EMH バッファ・サイズ。

EXPORTNEEDED

NAME パラメーターに一致し、作成されたか最後に更新されて以降 IMSRSC リポジトリにエクスポートされたことがないトランザクション・リソースだけを QUERY コマンドで戻すよう指定します。

NAME キーワードが省略されたか NAME(*) が指定された場合、リポジトリにエクスポートする必要があるトランザクションの名前だけが戻されます。

NAME キーワードで特定の名前が指定されたか NAME(*) 以外の総称名が指定された場合、コマンドで指定されたトランザクション名ごとに 1 行ずつ、応答行が戻されます。指定されたトランザクションをリポジトリにエクスポートする必要がない場合は、ExportNeeded 列に N が戻されます。

制約事項:

- SHOW(EXPORTNEEDED) は、他のいかなる SHOW パラメーターや他のキーワードとも一緒に指定することはできません。
- SHOW(EXPORTNEEDED) は、IMS で IMSRSC リポジトリが使用可能になっている場合にのみ有効です。
- QUERY TRAN SHOW(EXPORTNEEDED) コマンドは、XRF 代替システムでは無効です。

ヒント: IMSRSC リポジトリにエクスポートされたことがないリソースおよび記述子の場合、EXPORT DEFN TARGET(REPO) OPTION (CHANGESONLY) コマンドを発行して、リソース定義および記述子定義をリポジトリに書き込み、次の IMS のコールド・スタートで使用できるようにすることができます。

EXPRTIME

トランザクション有効期限を秒単位で示します。

FP 高速機能オプション。

GLOBAL

ローカル値とグローバル値の両方を持つ出力フィールドの場合、このオプションはグローバル値のみを戻します。特定の出力フィールドを要求するために別の SHOW キーワードと一緒に使用された場合、このオプションは指定された出力フィールドのグローバル値のみを戻すことを要求します。IMS は、データを維持しているソースからグローバル情報を取り出します。例えば、RM は一部のグローバル情報を維持し、CQS は他のグローバル情報を維持しています。グローバル出力は、コマンド・マスターによってのみ戻されます。QUERY TRAN コマンドは、トランザクション用のグローバル状況が維持されていれば、RM リソース構造からグローバル情報を戻すことができます。

ユーザーが IMSplex がグローバル・トランザクション状況を RM に維持するように指定した場合、QUERY TRAN コマンドはグローバル情報を戻します。この指定は、IMS の初期化時に、DFSDFxxx または DFSCGxxx PROCLIB メンバーのいずれかに PLEXPARM(GSTSTRAN(Y)) を指定することで行えます。UPD IMS SET(PLEXPARM(GSTSTRAN(Y))) コマンドを使用して、それを動的に変更することもできます。グローバル・データベース状況を維持するように指定していない場合には、GLOBAL キーワードは処理され、グローバル状況は更新されません。

SHOW(GLOBAL) が指定され、SHOW(DEFN) が指定されていない場合、リポジトリ情報は戻されません。GSTSTRAN=Y が有効な場合、SHOW(GLOBAL) はリソース構造からグローバル状況情報を戻します。また、IMS 共用キューからグローバル・キュー・カウントも戻します。SHOW(GLOBAL,DEFN) が指定される場合、コマンド・マスター IMS により、リポジトリのグローバル・リソース定義が戻されます。SHOW(GLOBAL,DEFN) は、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合のみ有効です。

IMSID

指定された名前をリソース・リストに含む IMS システムの IMS ID を戻すように指定します。SHOW(IMSID) は、コマンド・マスター IMS によってのみ処理され、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合にのみ有効です。

SHOW(IMSID) が DEFN フィルターとともに指定されている場合、保管済みリソース定義に加えて、定義済みのリソースが存在する各 IMS に、別個の行が戻されます。

SHOW(IMSID) が DEFN フィルターなしで指定されている場合、リソース名とともに定義済みのリソースが存在する各 IMS に別個の行が戻されません。リソース定義は戻されません。

SHOW(IMSID) は、DEFN および GLOBAL 以外の SHOW フィルターとともに指定することはできません。SHOW(IMSID,GLOBAL) が指定されている場合、GLOBAL は無視されます。つまり、SHOW(IMSID,GLOBAL) は SHOW(IMSID) として扱われます。SHOW(DEFN,IMSID,LOCAL) は SHOW(DEFN,LOCAL) として扱われます。

INQ

照会オプション。

LCT

限界カウント。キューに入れられて処理を待っている入力トランザクションの数と比較する際に、通常優先順位値または限界優先順位値がこのトランザクションに割り当てられるかどうかを決める数値を指定します。限界カウント値は、1 から 65 535 の範囲です。

BMP によって処理されるトランザクションの場合、限界カウント値は無視されます。

共用キュー環境では、限界カウント値は無視されます。

LOCAL

ローカル値とグローバル値の両方を持つ出力フィールドの場合、このオプション

ョンはローカル値のみを戻します。特定の出力フィールドを要求するために別の SHOW キーワードと一緒に使用された場合、このオプションは指定された出力フィールドのローカル値のみを戻すことを要求します。ローカル出力は、コマンドを処理する各 IMS によって戻されます。

SHOW(DEFN,LOCAL) は、コマンドを処理する IMS システムからローカルの定義属性のみを戻します。

LPRI

限界優先順位。キューに入れられて処理を待っている入力トランザクションの数が、限界カウント値に等しいかより大きくなった場合に、このトランザクションが引き上げられるスケジューリング優先順位。スケジューリング優先順位は、スケジューリングするトランザクションの選択に使用される属性です。同じクラスで定義されている場合、優先順位の高いトランザクションが優先順位の低いものよりも先にスケジュールされます。

BMP によって処理されるトランザクションの場合、限界優先順位値は無視されます。

MAXRGN

最大領域カウント。これは、トランザクションを処理するために同時にスケジュールできるメッセージ処理プログラム (MPP) 領域の数を制限します。MPP 領域の数が制限されていない場合、1 つのトランザクションがすべての使用可能な領域を独占する可能性があります。MAXRGN(0) は、制限がないことを意味します。

MODEL

このリソースを作成するために使用されたモデル名とモデル・タイプ。IMS 定義のリソースおよび記述子、ならびに DFSINSX0 出口によって作成されたキュー専用トランザクションの場合、モデル名とモデル・タイプはブランクです。LIKE キーワードなしで指定された CREATE コマンドは、デフォルト記述子をモデルとして使用してリソースを作成します。デフォルト記述子は、IMS 記述子 DFSDSTR1 またはユーザー定義のいずれかです。LIKE キーワードが指定された CREATE コマンドは、モデルを使用してリソースを作成します。リソースは、すべてモデルと同じ属性を使用して作成されます。属性は、モデル属性をオーバーライドする CREATE コマンドにより明示的に設定されます。モデル・タイプは、記述子 (DESC) またはリソース (RSC) のいずれかです。モデル名およびモデル・タイプは参照用のみです。属性が CREATE または UPDATE コマンドの値によってオーバーライドされた場合、あるいはモデルが後で更新された場合、リソースの属性はモデルと一致しないことがあります。モデル名とモデル・タイプを使用すると、同じモデルを使って作成されたリソースを識別できます。リソースのモデル名およびモデル・タイプはエクスポートおよびインポートされます。IMPORT コマンドは、リソースを作成する際にモデル名とモデル・タイプを使用しません。モデル名はブランクです。

MSGTYPE

メッセージ・セグメント・タイプ (単一セグメントまたは複数セグメント)。これは、着信メッセージが完了と見なされ、後続の処理のためにアプリケーション・プログラムに経路指定できるようになる時点を指定します。

複数 IMS システム構成で MSC 直接経路指定が使用される場合、IMS は、メッセージとそのメッセージを処理する宛先トランザクションの両方が、ともに単一セグメントまたは複数セグメントのどちらかであることを確認しません。

MSNAME

論理リンク・パス名、リモート・システム ID、およびローカル・システム ID が戻されます。

複数 IMS システム構成 (MSC) 内の論理リンク・パス名。論理リンク・パスは、任意の 2 つの IMS システム間のパスです。IMS システムは、論理リンク・パスに関連付けられたリモート・システム ID とローカル・システム ID によって識別されます。リモート・システム ID は、このパスを使用しているメッセージが処理されるシステムを識別します。ローカル・システム ID は、このシステムを識別します。

リモート・システム ID (SIDR) は、アプリケーション・プログラムが実行される IMS システムを示します。値 0 は、このシステムでは MSC が使用不可であることを示します。ローカル・システム ID およびリモート・システム ID はローカル・トランザクションでは同じです。

ローカル・システム ID (SIDL) は、応答の返送先の発信元システムを示します。値 0 は、このシステムでは MSC が使用不可であることを示します。ローカル・システム ID およびリモート・システム ID はローカル・トランザクションでは同じです。

NPRI

通常スケジューリング優先順位。スケジューリング優先順位は、スケジューリングするトランザクションの選択に使用される属性です。同じクラスで定義されている場合、優先順位の高いトランザクションが優先順位の低いものよりも先にスケジュールされます。通常優先順位は、エンキューされて処理を待っている入力トランザクションの数が限界カウン트의値を下回る場合に、スケジューリング優先順位としてトランザクションに割り当てられます。

BMP によって処理されるトランザクションの場合、通常優先順位値は無視されます。

PARLIM

並列処理限界カウンタ。この値は、このトランザクションに関して現在スケジュールされているそれぞれのアクティブ・メッセージ領域によって、現在キューに入れることができるがまだ処理されていないメッセージの最大数です。この値は、関連のプログラムのスケジューリング・タイプが並列として定義されている場合に使用されるしきい値です。現行のトランザクション・エンキュー・カウンタが、このトランザクションに現在スケジュールされている領域数を PARLIM 値に掛けた値を超えるたびに、追加の領域がスケジュールされます。

PARLIM(0) は、入力メッセージごとに新しい領域がスケジュールされることを示します。PARLIM(65535) は、並列処理は使用不可であり、IMS は一度に 1 つの領域にのみトランザクションをスケジュールすることを許可します。

PGM

このトランザクションに関連付けられたプログラムの名前。この名前は、ACBLIB 内の PSB 名と一致します。SHOW(PSB) は、SHOW(PGM) 別名です。

PLCT

処理限界カウント。この値は、アプリケーション・プログラムを再ロードせずに、IMS が処理のためにアプリケーション・プログラムに送信するメッセージの最大数です。

PLCT(0) は、1 回のプログラム・ロードで最大 1 つのメッセージがアプリケーション・プログラムに送信されることを意味します。

PLCT(65535) は、1 回のプログラム・ロードで処理されるメッセージの数に制限がないことを意味します。

PLCTTIME

処理限界カウント時間。この値は、単一のトランザクション (または、メッセージ) を処理するために許容される時間の長さ (100 分の 1 秒単位) です。この数値は、メッセージ処理領域内の 1 つのメッセージに許容される最大 CPU 時間を指定します。

システム定義 TRANSACT マクロで定義される高速機能利用可能トランザクションの場合、表示される値は、トランザクション当たりの CPU 時間 (CPU-time-per-transaction) の数値 (PROCLIM キーワードで指定) に 100 を掛けた値です。

PLCTTIME(6553500) は、アプリケーション・プログラムには制限時間がないことを意味します。

PSB

このトランザクションに関連付けられたプログラムの名前。この名前は、ACBLIB 内の PSB 名と一致します。SHOW(PSB) は、SHOW(PGM) 別名です。

QCNT

トランザクションのメッセージ・キュー・カウント。

非共用キュー環境では、ローカル・トランザクションのメッセージ・キュー・カウントが戻されます。このカウントは、コマンドが発行された IMS システム上のメッセージの数を表します。

共用キュー環境では、ローカル・トランザクションのメッセージ・キュー・カウントとグローバル・トランザクションのメッセージ・キュー・カウントの両方が戻されます。

- この環境で返されるローカル・キュー・カウントの値は、コマンドが発行された IMS システムによって処理されているメッセージを表します。ローカル・キュー・カウントはキューを評価する目的に使用しないでください。
- グローバル・トランザクションのメッセージ・キュー・カウントは、共用キュー構造上の現行メッセージ・キューのカウントを表します。このカウントは、コマンドが発行された IMS システムが処理できるメッセージの数を表します。このカウントには、任意の IMS システムで処理できるメッセージ (類似性を持たないメッセージ) と、コマンドが発行された

IMS システムで処理できるメッセージ (コマンドを発行した IMS システムへの類似性を持つメッセージ) が含まれます。

RECOVER

リカバリー・オプション。

REMOTE

リモート・オプション。

RESP

応答オプション。

RGC

ローカル IMS 上で、トランザクションが現在スケジュールされている領域の数。

SEGNO

セグメント数。この値は、アプリケーション・プログラムからの Get Unique (GU) 呼び出し当たりの、メッセージ・キューに入れることができるアプリケーション・プログラム出力セグメントの最大数です。

SEGNO(0) は、実行時にオンライン・システムによってセグメント数は検査されないことを意味します。

SEGSZ

セグメント・サイズ。この値は、1 つの出力セグメントに許されるバイトの最大数です。

SEGSZ(0) は、実行時にオンライン・システムによってセグメント・サイズは検査されないことを意味します。

SERIAL

シリアル・オプション。

SPASZ

会話型トランザクションのスクラッチパッド域サイズ。

SPATRUNC

SPA データ切り捨てオプションは、より小さい SPA で定義されたトランザクションへのプログラム間通信の後、SPA データを切り捨てるか、保存するかを示します。

会話の最初の開始時、およびプログラム間通信時に、SPATRUNC オプションが検査され、指定に応じて設定またはリセットされます。オプションが設定されると、それは会話の存続期間の間、またはそのオプションをリセットする必要があることを指定したトランザクションへのプログラム間通信が発生するまで、設定されたままです。

プログラム間通信が発生した場合、新しいトランザクションの切り捨てデータ・オプションが最初に検査され、その仕様が会話に対して設定されて、出力メッセージに挿入される SPA に使用されます。新しいトランザクションでこのオプションが指定されていない場合、会話に対して現在有効なオプションが使用されます。

STATUS

ローカル・トランザクションの状況。戻される可能性があるトランザクショ

ン状況についての説明は、692 ページの『出力フィールド』のものと『QUERY TRAN コマンドの出力フィールド』表内の STATUS キーワードを参照してください。

TIMESTAMP

作成時間 (TIMECREATE)、最終更新時間 (TIMEUPDATE)、最終アクセス時間 (TIMEACCESS)、および最終インポート時間 (TIMEIMPORT) のタイム・スタンプが戻されます。時刻は現地時間で、YYYY.JJJ HH:MM:SS.TH の形式で戻されます。ここで、

- YYYY は年です。
- JJJ はユリウス日 (001 から 365) です。
- HH は時 (01 から 24) です。
- MM は分 (00 から 59) です。
- SS は秒 (00 から 59) です。
- TH は 10 分の 1 秒および 100 分の 1 秒 (00 から 99) です。

TRANSTAT

トランザクション・レベル統計オプション。

WFI

入力待ちオプション。

WORK

NAME パラメーターで指定されたトランザクションおよびそれに関連したリソースに対して進行中の作業。DELETE、IMPORT、または UPDATE コマンドの前に QUERY TRAN SHOW(WORK) コマンドを発行することで、指定されたトランザクションおよびそれに関連したリソースに対して進行中の作業があるかどうかを確認できます。進行中の作業があると、後続の DELETE、IMPORT、または UPDATE コマンドが失敗する原因になることがあります。指定されたリソースに対して進行中の作業がない場合、作業状況はブランクとして応答行が戻されます。

注:

1. SHOW(WORK) で NAME(*) を指定すると、コマンドの処理時にパフォーマンスに影響を与えることがあります。
2. このフィルターは他の SHOW フィルターと共に指定することはできません。SHOW(WORK) を単独で指定する必要があります。
3. QRY TRAN SHOW(WORK) コマンドは、XRF 代替では無効です。

STATUS()

指定されたトランザクション状況のうち少なくとも 1 つを保有する、トランザクションの表示を選択します。このキーワードによって、トランザクション状況による追加のフィルター操作が可能になります。STATUS、CLASS、または QCNT フィルターが指定されていない場合は、そのトランザクション名に一致する全トランザクションが戻されます。

STATUS フィルターが指定されている時に戻される出力には、SHOW(STATUS) オプションが指定されていなくてもトランザクション名を表示させるトランザクションの状況が含まれます。

RM がグローバル状況を維持している場合でも、フィルター処理はローカル状況に基づいて行われます。

AFFIN

トランザクションは IMS とのローカル類似性に登録されます。

BAL

トランザクションは、ロード・バランシング適格です (例えば、並列処理の限界が指定してある)。

CPIC

この CPI-C トランザクションはこの IMS システムで動的に作成されたものであり、したがってこの IMS システムでのみ処理できます。

DYN

トランザクションは共用キュー環境で作成されたものであり、この IMS に対しては定義されていないため、この IMS サブシステムではスケジュールできません。

IOPREV

入出力防止が完了していないため、GSAM が入っている BMP プログラムがスケジューリングを完了できないことを示します。データ・セットに対するこれ以降の入出力要求は使用禁止されます。

LCK

トランザクションは、/LOCK TRAN コマンドによってロックされています。

NOTINIT

トランザクションは初期化されていないため、使用できません。

QERR

この MSC リモート・トランザクションに対し、このキューで入出力エラーが発生しました。

QSTP

トランザクションがオンライン変更の影響を受けたため、トランザクション・キューイングはオンライン変更により停止されます。オンライン変更により、トランザクションが変更または削除されるか、あるいは、トランザクションが参照するプログラム、PSB、データベース、または DMB が変更または削除される可能性があります。オンライン変更がコミットされるか、または打ち切られるまで、トランザクション・キューイングは停止します。

SUSPEND

トランザクションは、中断キュー上にメッセージをもっています。

STOQ

トランザクションはキューイングのために停止されており、グローバルにキューに入れることはできなくなりました。この状況は、前の UPDATE TRAN コマンド、/PURGE TRAN コマンド、または /STO TRAN コマンドが原因である場合があります。

STOSCHD

トランザクションはスケジューリングのために停止されており、グローバルにスケジュールすることはできなくなりました。この状況は、前の

UPDATE TRAN コマンド、/PSTOP TRAN コマンド、または /STO TRAN コマンド、あるいはアプリケーションの異常終了が原因である場合があります。

TRACE

トランザクションはトレース中です。

USTO

トランザクションのスケジューリングは、使用不能のデータが原因で停止しました。

使用上の注意

表示されるトランザクション情報は、QUERY TRAN コマンドを出している IMS が RM サービスを使用して実行されているかどうかによって異なります。QUERY TRAN コマンドが、RM なしで実行されている IMS コマンド・マスターにより出された場合は、その IMS にとってローカルな全トランザクション情報が戻されます。QUERY TRAN コマンドが、RM 付きで実行されている IMS コマンド・マスターにより出された場合は、その IMS コマンド・マスターは、CQS または RM のいずれか指定された方からグローバル情報を検索します。

RM サービスを使用する IMS システムと使用しない IMS システムが混在する環境では、どの IMS システムもコマンド・マスターになることができるため、その環境内のすべての IMS システムに対してグローバル情報を求める QUERY TRAN コマンドを経路指定した場合は、状況に応じてコマンドの結果が異なります。IMS コマンド・マスターの RM 環境は、表示されるトランザクション情報のタイプに影響します。一部の IMS システムが RM を使用している場合は、特定の route IMS システムに対して QUERY TRAN を経路指定したい場合があります。以下に、なぜ異なるコマンド結果を受け取ることがあるかについて、2 つの例を示します。

1. IMSplex に非クローン・システムが含まれており、トランザクションは、RMENV=N が指定されている IMS によってのみ定義されているとします。IMS コマンド・マスターは RM サービスを使用して実行されていますが、トランザクションは RM に対して定義されていないため、グローバル情報は取得できません。この結果、以下の 2 つの応答行が戻されます。
 - IMS コマンド・マスターは、トランザクション名を無効なものとして戻します。
 - RMENV=N が指定されている IMS は、ローカル情報を戻します。
2. IMSplex には非クローン・システムが含まれています。グローバル・キュー・カウントが要求され、IMS コマンド・マスターで RM が実行されていないとすれば、コマンド・マスターでローカルに定義されていないトランザクションについては、グローバル・キュー・カウントは戻されません。他のすべての IMS システムは、それぞれのローカル情報のみを戻します。

共用キュー環境では、QUERY TRAN NAME(*trannname*) QCNT(GT,0) コマンドは、トランザクション *trannname* の共用キュー構造上にあるメッセージの合計カウントを戻します。このカウントには、任意の IMS で処理できるメッセージ (類似性のないメッセージ) に加えて、IMS への類似性を持つメッセージも含まれます。QUERY TRAN NAME(*trannname*) QCNT(GT,0) SHOW(AFFIN) コマンドは、任意の IMS で処理できるメッセージ (類似性のないメッセージ) を持つトランザクション名を 1 行で戻します。別の 1 行で、IMS への類似性を持つメッセージをキュー

に入れたトランザクションを戻します。この行には、キューに入っている類似性を持つメッセージの数と、それらが類似性を持つ IMS の IMSID が示されます。QUERY TRAN NAME(*tranname*) QCNT(GT,0) コマンドまたは QUERY TRAN NAME(*tranname*) QCNT(GT,0) SHOW(AFFIN) コマンドは、コマンド・マスター IMS が IMSplex 環境にあるすべての IMS サブシステムを入手できるため、コマンド・マスター IMS によってのみ処理されます。

リソース定義に関する情報を表示するには、SHOW(DEFN) を指定します。リソースが定義されている IMS システムを判別し、また各 IMS システムの属性またはリソース定義を知るには、SHOW(DEFN,IMSID) を指定します。リソースが定義されている IMS システムを判別するには、SHOW(IMSID) を指定します。

同等の IMS タイプ 1 コマンド

以下の表は、各種の QUERY TRAN コマンドと、類似の情報を表示するタイプ 1 IMS コマンドを示しています。

表 203. QUERY TRAN コマンドと同等のタイプ 1 コマンド

QUERY TRAN コマンド	類似の IMS タイプ 1 コマンド
QUERY TRAN NAME(<i>tranname</i>) SHOW(ALL)	/DISPLAY TRAN <i>tranname</i>
QUERY TRAN SHOW(ALL)	/DISPLAY TRAN ALL
QUERY TRAN NAME(<i>tranname</i>) SHOW(QCNT)	/DISPLAY TRAN <i>tranname</i> QCNT
QUERY TRAN NAME(<i>tranname</i>) STATUS(IOPREV,LCK,QERR,SUSPEND,STOQ, STOSCHD,USTO) SHOW(STATUS)	/DISPLAY STATUS TRANSACTION

出力フィールド

以下の表は、QUERY TRAN コマンド出力フィールドを示しています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。ゼロ以外の完了コードの場合に表示される出力フィールドには *error* が表示されます。

有効範囲

出力フィールドの有効範囲を識別します。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 204. QUERY TRAN コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
AFIN	Affinity	AFFIN	GBL	共用キュー上のトランザクション・メッセージの類似性またはこの IMS に対するトランザクションの類似性登録。共用キュー上のトランザクション・メッセージの場合(すなわち QCNT オプション)、AFFIN は IMS ID またはメッセージが処理できる IMS システムのリカバリー可能サービス・エレメント (RSE) 名を表示します。トランザクション登録の場合、AFFIN は IMS ID またはローカルの類似性を備えた CQS に登録されたトランザクションに追加される RSE 名を表示します。
AOCMD	LAOCMD	AOCMD	LCL	トランザクションは AOI CMD 呼び出しをサポートするか (CMD、TRAN、または Y) しないか (N)。出力値は、ローカル IMS から取得されます。 N トランザクションによる AOI タイプ 1 CMD 呼び出しの発行が許可されないことを示します。トランザクションには AOI タイプ 2 ICMD 呼び出しの発行が許可されます。 CMD トランザクションによるタイプ 1 AOI CMD 呼び出しおよびタイプ 2 AOI ICMD 呼び出しの発行が許可されることを示します。AOI1 実行パラメーターが C、R、または A として定義されている場合、許可検査は、どのトランザクションが特定のコマンドを発行できるかに基づいて行われます。この場合、コマンド (または、コマンドの最初の 3 文字) が RACF または同等製品に対してユーザーとして定義されていることが必要です。タイプ 1 AOI トランザクションは TIMS クラスのもとにプロファイルとして定義され、トランザクションごとに、それが発行できるコマンドが指定されていなければなりません。AOCMD(CMD) の定義は、AOCMD(TRAN) の定義に比べて、作成する必要があるユーザー ID の数が少なく済みす。ただし、AOCMD(CMD) の定義では、より多数のリソース・プロファイルを作成または変更する必要があります。 TRAN トランザクションによるタイプ 1 AOI CMD 呼び出しおよびタイプ 2 AOI ICMD 呼び出しの発行が許可されることを示します。AOI1 実行パラメーターが C、R、または A として定義されている場合、トランザクション・コードが許可に使用されます。最初の許可検査の結果として、アクセス機能環境エレメント (ACEE) が作成されます。この環境は、将来の許可検査で使用するために保持されます。タイプ 1 AOI トランザクションは、RACF または同等製品に対してユーザーとして定義されていることが必要です。これにより、タイプ 1 AOI トランザクションからの発行が許可されるコマンドごとに、トランザクションが RACF PERMIT ステートメントで指定されるようになります。AOI トランザクションを RACF に対してユーザーとして指定する際に、RACF に既に定義されているユーザーの名前と競合することがあります。この競合が起きた場合は、トランザクション名または既存のユーザー名のどちらかを変更する必要があります。 Y トランザクションによるタイプ 1 AOI CMD 呼び出しおよびタイプ 2 AOI ICMD 呼び出しの発行が許可されることを示します。AOI1 実行パラメーターが C、R、または A として定義されている場合、ユーザー ID またはプログラム名が許可に使用されます。一部の環境では、Get Unique 呼び出しがまだ行われていない場合、プログラム名が許可に使用されます。
CC	CC	N/A	N/A	完了コード。完了コードは、IMS が、指定されたりソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示します。完了コードは常に戻されます。詳しくは、「707 ページの表 208」を参照してください。
CCTXT	CCText	error	LCL	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。

表 204. QUERY TRAN コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
CMTM	LCmtMode	CMTMODE	LCL	<p>トランザクションのコミット・モード。単一メッセージ (SNGL) または複数メッセージ (MULT) 後にコミット。出力値は、ローカル IMS から取得されます。</p> <p>MULT データベースの更新および非急送出力メッセージは、アプリケーション・プログラムが正常に終了した時点、処理限界カウントに達した時点、あるいは、疑似 WFI 従属領域の場合は、キューにそれ以上メッセージがなくなった時点でのみ、コミットされます。例えば、プログラムの単一のスケジュールで 5 つのトランザクションが処理される場合、5 番目のトランザクションが完了し、プログラムが終了した時点でのみ、5 つすべてがコミットされます。トランザクションのコミットが完了するまでは、更新されたデータベース・レコードのロックは解放されず、非急送出力メッセージは出力用のキューに入れられません。メッセージをコミットする前にアプリケーションが異常終了した場合、緊急時再始動は、そのコミット・スコープ内で処理されたすべてのメッセージを再キューイングし、それらを再処理のために使用できるようにします。</p> <p>SNGL データベースの更新および非急送出力メッセージは、アプリケーション・プログラムがそれぞれのトランザクションの処理を完了した時点でコミットされます。IMS は、アプリケーション・プログラムが次のメッセージを要求した (入出力 PCB に GU を発行した) 時点、またはアプリケーション・プログラムが終了した時点のいずれかで、コミット処理を呼び出します。メッセージをコミットする前にアプリケーションが異常終了した場合、緊急時再始動は、異常終了の前に処理中であったメッセージを再キューイングし、それを再処理のために使用できるようにします。</p>
CONV	LConv	CONV	LCL	<p>会話オプション。トランザクションは会話型であるか (Y) ないか (N)。出力値は、ローカル IMS から取得されます。</p> <p>N トランザクションは会話型ではありません。</p> <p>Y トランザクションは会話型です。トランザクション・メッセージは、会話型プログラム宛に送られます。会話型プログラムは、複数のステップで構成されるトランザクションを処理します。会話型プログラムは、端末からメッセージを受け取り、端末に回答しますが、トランザクションからのデータをスクラッチパッド域 (SPA) に保管します。端末の担当者が追加データを入力するとき、プログラムは前回のメッセージから保管したデータを SPA 内に持っているため、端末の担当者がそのデータを再度入力しなくても要求の処理を続行することができます。</p> <p>制約事項: 会話型トランザクションに対するフィルター操作の方式が、IMS V9 と IMS V10 の間で変更されています。IMS 第 9 版では、コマンドは QUERY TRAN STATUS(CONV) です。IMS 第 10 版以降では、コマンドは QUERY TRAN CONV(Y) です。IMS V10 以降と、IMS V8 または IMS V9 のどちらかのシステムが含まれた IMSplex 内で IMS が実行されていて、すべてのシステム上でコマンドを処理する必要がある場合、コマンドは QUERY TRAN STATUS(CONV) CONV(Y) として発行する必要があります。IMS 第 10 版システム以降は CONV(Y) フィルターを処理し、一方、IMS 第 8 版および IMS 第 9 版のシステムは STATUS(CONV) フィルターを処理します。IMS V10 システム以降に対して発行されたコマンドに STATUS(CONV) があり CONV(Y) がない場合、コマンドはリジェクトされます。</p>
CONVID	LConvID	WORK	LCL	<p>進行中の会話を持つトランザクションの会話 ID。</p>
DCLW	LDCLWA	DCLWA	LCL	<p>リカバリー可能な、非応答モードの入力メッセージおよびトランザクションの出力メッセージに対して、ログ先書きを実行するか (Y) しないか (N)。出力値は、ローカル IMS から取得されます。</p> <p>N IMS はログ先書きを実行しません。</p> <p>Y IMS は、リカバリー可能な、非応答入力メッセージおよびトランザクションの出力メッセージに対して、ログ先書きを実行します。トランザクションに定義されていない場合、デフォルトは IMSCTRL マクロ内の DCLWA パラメーターになります。これにより、IMS が入力を受信を確認する前に IMS 障害が起きても、非応答入力トランザクションがリカバリー可能になることが確実になります。</p> <p>データベース変更をリカバリー可能にした後で、IMS が関連の出力応答メッセージを送信します。</p> <p>これにより、関連の入力確認応答または出力応答が端末に送信される前に、ログ・バッファ内の情報が IMS ログに書き込まれることが確実になります。</p>

表 204. QUERY TRAN コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
DFNT	LDefnType	DEFNTYPE	LCL	<p>定義タイプ。次のうちのいずれか 1 つが可能です。</p> <p>CPIC この IMS システムで動的に作成された CPI-C トランザクション。</p> <p>CREATE CREATE コマンドにより定義されます。</p> <p>DFSINSX0 ユーザー出口 DFSINSX0 により定義されます。エクスポート・オプションが設定された場合にのみ、リソースをエクスポートすることができます。これは、記述子には適用されません。</p> <p>IMPORT IMPORT コマンドにより定義されます。</p> <p>IMS IMS により定義されます。</p> <p>MODBLKS MODBLKS データ・セット内のシステム定義により定義されます。</p> <p>UPDATE MODBLKS データ・セット内のシステム定義により定義されますが、UPDATE コマンドによって変更されて動的リソースに入れられます。これは、記述子には適用されません。</p>
DRRT	LDirRoute	DIRROUTE	LCL	<p>MSC 直接経路指定をサポートするか (Y) しないか (N)。出力値は、ローカル IMS から取得されます。</p> <p>N トランザクションを処理しているアプリケーション・プログラムには、トランザクションを発信したシステムが通知されません。発信元の LTERM の名前が、入出力 PCB に入れられます。</p> <p>Y 複数 IMS システム構成で MSC 直接経路指定が使用されている場合、トランザクションを処理しているアプリケーション・プログラムに、トランザクションを発信したシステムが通知されます。発信元システムに戻る論理パスに対応した MSNAME が、入出力 PCB に入れられます。</p>
EDTR	LEditRtn	EDITRTN	LCL	入力編集ルーチン名。
EDTT	LEditUC	EDITUC	LCL	<p>入力データが大文字に変換するか (Y) しないか (N)。出力値は、ローカル IMS から取得されます。</p> <p>N 入力データは大文字に変換されません。端末から入力されたとおりに、大文字および小文字で構成することができます。</p> <p>Y 入力データは、処理プログラムに提供される前に大文字に変換されます。FP(E) の場合、トランザクションは編集/経路指定出口ルーチンに提供される前に大文字に変換されます。</p> <p>VTAM 端末に対して EDITUC(Y) を指定すると、組み込み装置制御文字が伝送されなくなります。</p>
EMHBS	LEMHBSz	EMHBSZ	LCL	EMH バッファ・サイズ。出力値は、ローカル IMS から取得されます。
EXPN	ExportNeeded	EXPORTNEEDED	LCL	トランザクションが IMSRSC リポジトリーにエクスポートされたかどうかを示します。値は Y または N のどちらかです。
EXPT	LExprTm	EXPTIME	LCL	トランザクション有効期限。出力値は、ローカル IMS から取得されます。

表 204. QUERY TRAN コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
FP	LFP	FP	LCL	<p>高速機能利用可能な候補 (P)、高速機能専用 (E)、または FP オプションは使用不可 (N)。出力値は、ローカル IMS から取得されます。</p> <p>E 高速機能専用トランザクション。このトランザクションのメッセージは、常に高速機能アプリケーション・プログラムに経路指定されます。</p> <p>N 高速機能オプションは使用不可です。FP(N) が指定されている場合、高速機能のリソースまたはコマンドを使用しようとすると、予測不能な結果を招きます。</p> <p>P 高速機能利用可能トランザクション。このトランザクションのメッセージは、高速機能アプリケーション・プログラムに経路指定される可能性があります。 制約事項: 高速機能トランザクションに対するフィルター操作の方式が、IMS 第 9 版と IMS 第 10 版の間で変更されています。第 9 版では、コマンドは QUERY TRAN STATUS(FPE)、QUERY TRAN STATUS(FPP) または QUERY TRAN STATUS(FPE,FPP) です。IMS V10 以降では、コマンドは QUERY TRAN FP(E)、QUERY TRAN FP(P)、または QUERY TRAN FP(E,P) です。IMS V10 以降と、IMS V8 または IMS V9 のどちらかのシステムが含まれた IMSplex 内で IMS が実行されていて、すべてのシステム上でコマンドを処理する必要がある場合、コマンドは QUERY TRAN STATUS(FPE) FP(E)、QUERY TRAN STATUS(FPP) FP(P)、または QUERY TRAN STATUS(FPE,FPP) FP(E,P) として発行する必要があります。IMS 第 10 版システム以降は FP() フィルターを処理し、一方、IMS 第 8 版および IMS 第 9 版のシステムは STATUS() フィルターを処理します。IMS V10 システム以降に対して発行されたコマンドに STATUS(FPE)、STATUS(FPP)、または STATUS(FPE,FPP) があり、FP() がない場合、コマンドはリジェクトされます。</p>
IMSID	IMSid	IMSID	GBL	<p>定義されたリソースを持つ IMSID を返します。出力値はリポジトリから取得されます。</p>
INQ	LInq	INQ	LCL	<p>照会トランザクションであるか (Y) ないか (N)。出力値は、ローカル IMS から取得されます。</p> <p>N 照会オプションは使用不可です。</p> <p>Y 照会オプションは使用可能です。これは、入力された場合、いかなるデータベースも変更しない照会トランザクションです。プログラムは、INQ(Y) として定義されたトランザクションの処理がスケジュールされた場合、データベースに対して ISRT、DLET、または REPL 呼び出しを出すのを禁止されます。</p> <p>IMS トランザクションが INQ(Y) で定義されている場合、アプリケーション・プログラムは SQL INSERT、DELETE、または UPDATE を実行できません。</p>
LCLS	LCIs	CLASS	LCL	<p>特定の IMS において、どのメッセージ領域がローカルでトランザクションを処理できるかを決定するスケジューリング・クラス。</p>
LCP	LCPRI	CPRI	LCL	<p>ローカルの現在のスケジューリング優先順位。現在のスケジューリング優先順位は、どのトランザクションがスケジューリングのために選択されるかを計算するために使用されます。</p>
LLCT	LLCT	LCT	LCL	<p>ローカル IMS での限界カウント。限界カウントは、キューに入れられて処理を待っている入力トランザクションの数と比較した時に、通常優先順位または限界優先順位の値のどちらがこのトランザクションに割り当てられるかを決定する数値です。</p>
LLP	LLPRI	LPRI	LCL	<p>ローカルの限界スケジューリング優先順位。限界スケジューリング優先順位は、エンキューされて処理を待っている入力トランザクションの数が、限界カウントの値と等しいかより大きい場合に、このトランザクションが引き上げられる優先順位です。</p>
LMRG	LMaxRgn	MAXRGN	LCL	<p>ローカルの最大領域数。最大領域カウントは、並列スケジューリングに適切なトランザクションの処理を同時にスケジュールできるメッセージ処理プログラム (MPP) 領域の最大数です。</p>
LNP	LNPRI	NPRI	LCL	<p>ローカルの通常のスケジューリング優先順位。通常スケジューリング優先順位は、エンキューされて処理を待っている入力トランザクションの数が限界カウントの値を下回る場合に、このトランザクションに割り当てられる優先順位です。</p>
LPLCT	LPLCT	PLCT	LCL	<p>ローカルの処理限界カウント。処理限界カウントは、プログラムが単一スケジューリングで処理できるトランザクション・メッセージの数です。</p>
LPLM	LParLim	PARLIM	LCL	<p>ローカルの並列処理限界カウント。並列限界カウントは、現在キューに入れることはできるが、このトランザクションに現在スケジュールされているそれぞれのアクティブなメッセージ領域によって、まだ処理されないメッセージの最大数です。トランザクション・キュー・カウントが、このトランザクションに現在スケジュールされている領域の数を PARLIM の値に掛けた数を超過した場合には、別のメッセージ領域がスケジュールされます。</p>
LQ	LQCnt	QCNT	LCL	<p>ローカル・トランザクションのメッセージ・キュー・カウント。</p>

表 204. QUERY TRAN コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
LSNO	LSegNo	SEGNO	LCL	各 GU 呼び出しのメッセージ・キューで許可されているローカル・アプリケーション・プログラムの出力セグメントの限界。
LSSZ	LSegSz	SEGSZ	LCL	各 GU 呼び出しのメッセージ・キューで許可されているローカル・アプリケーション・プログラムの出力セグメント・サイズの限界。
LSST	LclStat	STATUS	LCL	ローカル・トランザクションの状況。 BAL トランザクションは、ロード・バランシング適格です (例えば、並列処理の限界が指定してある)。 CPIC この CPI-C トランザクションはこの IMS システムで動的に作成されたものであり、したがってこの IMS システムでのみ処理できます。 DYN トランザクションは共用キュー環境で作成されたものであり、この IMS に対しては定義されていないため、この IMS サブシステムではスケジュールできません。 IOPREV 入出力防止が完了していないため、GSAM が入っている BMP プログラムがスケジューリングを完了できないことを示します。データ・セットに対するこれ以降の入出力要求は使用禁止されます。 LOCK トランザクションは、/LOCK TRAN コマンドまたは UPD TRAN SET(LOCK(ON)) コマンドによってロックされています。 NOTINIT-xx-reason トランザクションは初期化されていないため、使用できません。 NOTINIT 状況は、NOTINIT-xx-reason 形式で表示されます。ここで、xx は理由コードで、この理由コードが設定された 1 つのモジュール内の固有の位置を示します。 NOTINIT-00 は、理由が不明であることを示します。アクション: 1。 IAPS MACRO は、トランザクション不良理由コード (フィールド SMBBADR) に設定される可能性がある各理由コードを定義し、それを設定するモジュールを識別します。reason は、最大 13 文字の短縮テキスト形式で、理由コード xx を説明します。 可能な reason 値とその説明については、703 ページの表 205を参照してください。 QERR この MSC リモート・トランザクションに対し、このキューで入出力エラーが発生しました。 QSTP トランザクションがオンライン変更の影響を受けたため、トランザクション・キューイングはオンライン変更により停止されます。オンライン変更により、トランザクションが変更または削除されるか、あるいは、トランザクションが参照するプログラム、PSB、データベース、または DMB が変更または削除される可能性があります。オンライン変更がコミットされるか、または打ち切られるまで、トランザクション・キューイングは停止します。 SUSPEND トランザクションは、中断キュー上にメッセージをもっています。 (続く)
LSST (続き)	LclStat	STATUS	LCL	STOQ トランザクションのキューイングは停止されており、メッセージをキューに入れることはできません。この状況は、前の UPDATE TRAN コマンド、/PURGE TRAN コマンド、または /STO TRAN コマンドが原因である場合があります。 STOSCHD トランザクションはスケジューリングのために停止されており、スケジュールすることはできなくなりました。この状況は、前の UPDATE TRAN コマンド、/PSTOP TRAN コマンド、または /STO TRAN コマンド、あるいはアプリケーションの異常終了が原因である場合があります。 TRA トランザクションはトレース中です。 USTO トランザクションのスケジューリングは、使用不能のデータが原因で停止しました。
LU	LUName	WORK	LCL	会話を開始した APPC LU 名。

表 204. QUERY TRAN コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
MDLN	LModelName	MODEL	LCL	モデル名。このリソースを作成するためのモデルとして使用されたリソースの名前。DFSDSTR1 は、トランザクション用の IMS 記述子名です。
MDLT	LModelType	MODEL	LCL	モデル・タイプ、RSC または DESC。RSC は、別のリソースをモデルとして使用してリソースが作成されたことを意味します。DESC は、記述子をモデルとして使用してリソースが作成されたことを意味します。
MBR	MbrName	N/A	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。出力を作成した IMS の IMS ID。IMS ID は常に戻されます。
MSGT	LMsgType	MSGTYPE	LCL	単一セグメント (SNGLSEG) または複数セグメント (MULTSEG) のメッセージ・タイプ。出力値は、ローカル IMS から取得されます。 MULTSEG 着信メッセージは、複数のセグメントの長さに行を指定します。これは、メッセージ終結標識を受け取るまで、つまり MFS によって完全なメッセージが作成されるまでは、アプリケーション・プログラムへのスケジューリングに適格ではありません。 SNGLSEG 着信メッセージは、1 セグメントの長さであることを指定します。これは、端末オペレーターがセグメント終結を示した時点で、スケジューリングに適格になります。
MSN	LMSName	MSNAME	LCL	論理リンクパス名。出力値は、ローカル IMS から取得されます。
NODE	NodeName	WORK	LCL	会話を開始したノード名。
PLCTT	LPLCTTime	PLCTTIME	LCL	処理限界カウンタ時間。
PSB	LPSBName	PSB	LCL	トランザクションに関連する PSB 名。出力値は、ローカル IMS から取得されます。
Q	Qcnt	QCNT, GLOBAL	GBL	共用キューのグローバル・トランザクションのメッセージ・キュー・カウンタ。Q は、共用キューが使用される場合にのみ表示されます。
RAOCMD	LAOCMD	DEFN, AOCMD	GBL	トランザクションは AOI CMD 呼び出しをサポートするか (CMD、TRAN、または Y) しないか (N)。出力値はリポジトリから取得されます。
RCLS	Cls	DEFN, CLASS	GBL	リポジトリ内のクラス値。
RCMTM	CmtMode	DEFN, CMTMODE	GBL	トランザクションのコミット・モード。単一メッセージ (SNGL) または複数メッセージ (MULT) 後にコミット。出力値はリポジトリから取得されます。
RCONV	Conv	DEFN, CONV	GBL	リポジトリ内で会話が進行中の場合、会話 ID。
RCV	LRecover	RECOVER	LCL	IMS 緊急時再始動または正常再始動の際にリカバリーするか (Y) しないか (N)。出力値は、ローカル IMS から取得されます。 N リカバリー・オプションは使用不可です。トランザクションはリカバリーされません。 Y リカバリー・オプションは使用可能です。IMS 緊急時再始動または正常再始動の際に、トランザクションはリカバリーされます。
RDCLW	DCLWA	DEFN, DCLWA	GBL	リカバリー可能な、非応答モードの入力メッセージおよびトランザクションの出力メッセージに対して、ログ先書きを実行するか (Y) しないか (N)。出力値はリポジトリから取得されます。
RDRRT	DirRoute	DEFN, DIRROUTE	GBL	MSC 直接経路指定をサポートするか (Y) しないか (N)。出力値はリポジトリから取得されます。
REDTR	Editrtn	DEFN, EDITRTN	GBL	リポジトリから取得した編集ルーチン値。
REDTT	EditUC	DEFN, EDITUC	GBL	入力データを大文字に変換するか (Y) しないか (N)。出力値はリポジトリから取得されます。返される値については、この表の「LEditUC」を参照してください。
REMHBS	EMHBSz	DEFN, EMHBSZ	GBL	EMH バッファ・サイズ。出力値はリポジトリから取得されます。
REPO	Repo	DEFN	GBL	出力行に保管済みリソース定義が含まれているかどうかを示します。 Y リポジトリ定義を示します。 (ブランク) ローカル定義を示します。
REXPRT	ExprTm	DEFN, EXPRTIME	GBL	トランザクション有効期限。出力値はリポジトリから取得されます。
RFP	FP	DEFN, FP	GBL	高速機能利用可能な候補 (P)、高速機能専用 (E)、または FP オプションは使用不可 (N)。出力値はリポジトリから取得されます。返される値については、この表の「LFP」の説明を参照してください。
RGC	LRegCnt	RGC	LCL	ローカル IMS 上で、トランザクションが現在スケジューリングされている領域の数。出力値は、ローカル IMS から取得されます。
RINQ	Inq	DEFN, INQ	GBL	照会トランザクションであるか (Y) ないか (N)。出力値はリポジトリから取得されます。返される値については、この表の「LInq」の説明を参照してください。
RLCT	Lct	DEFN, LCT	GBL	リポジトリ内の限界カウンタ値。限界カウンタは、キューに入れられて処理を待っている入力トランザクションの数と比較した時に、通常優先順位または限界優先順位の値のどちらがこのトランザクションに割り当てられるかを決定する数値です。

表 204. QUERY TRAN コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
RLP	LPRI	DEFN, LPRI	GBL	リポジトリ内のローカル限界スケジューリング優先順位値。限界スケジューリング優先順位は、エンキューされて処理を待っている入力トランザクションの数が、限界カウンターの値と等しいかより大きい場合に、このトランザクションが引き上げられる優先順位です。
RMRG	RMaxRgn	DEFN, MAXRGN	GBL	リポジトリから取得した最大領域カウント。最大領域カウントは、並列スケジューリングに適切なトランザクションの処理を同時にスケジュールできるメッセージ処理プログラム (MPP) 領域の最大数です。
RMSGT	MsgType	DEFN, MSGTYPE	GBL	単一セグメント (SNGLSEG) または複数セグメント (MULTSEG) のメッセージ・タイプ。出力値はリポジトリから取得されます。返される値については、この表の「LMsgType」の説明を参照してください。
RMT	LRemote	REMOTE	LCL	リモート・トランザクションであるか (Y) ないか (N)。出力値は、ローカル IMS から取得されます。 N ローカル・トランザクション。トランザクションはローカル・システムで実行されます。 Y リモート・トランザクション。トランザクションはリモート・システムで実行されます。 制約事項: リモート・トランザクションに対するフィルター操作の方式が、IMS 第 9 版と IMS 第 10 版の間で変更されました。第 9 版では、コマンドは QUERY TRAN STATUS(RMT) です。IMS 第 10 版以降では、コマンドは QUERY TRAN REMOTE(Y) です。IMS 第 10 版以降と、IMS 第 8 版または IMS 第 9 版のどちらかのシステムが含まれた IMSplex 内で IMS が実行されていて、すべてのシステム上でコマンドを処理する必要がある場合、コマンドは QUERY TRAN STATUS(RMT) REMOTE(Y) として発行する必要があります。IMS 第 10 版システム以降は REMOTE(Y) フィルターを処理し、一方、IMS 第 8 版および IMS 第 9 版のシステムは STATUS(RMT) フィルターを処理します。IMS 第 10 版システム以降に対して発行されたコマンドに STATUS(RMT) があり REMOTE(Y) がない場合、コマンドはリジェクトされます。
RNP	NPRI	DEFN, NPRI	GBL	リポジトリから取得した通常スケジューリング優先順位値。通常スケジューリング優先順位は、エンキューされて処理を待っている入力トランザクションの数が限界カウンターの値を下回る場合に、このトランザクションに割り当てられる優先順位です。
RPLCT	PLCT	DEFN, PLCT	GBL	リポジトリから取得した処理限界カウント。処理限界カウントは、プログラムが単一スケジューリングで処理できるトランザクション・メッセージの数です。
RPLCTT	PLCTTime	DEFN, PLCTTIME	GBL	リポジトリ内の処理限界カウント時間値。
RPLM	ParLim	DEFN, PARLIM	GBL	リポジトリから取得した並列処理限界カウント。並列限界カウントは、現在キューに入れることはできるが、このトランザクションに現在スケジュールされているそれぞれのアクティブなメッセージ領域によって、まだ処理されないメッセージの最大数です。トランザクション・キュー・カウントが、このトランザクションに現在スケジュールされている領域の数を PARLIM の値に掛けた数を超過した場合には、別のメッセージ領域がスケジュールされます。
RPSB	PsbName	DEFN, PGM	GBL	トランザクションに関連する PSB 名。出力値はリポジトリから取得されます。
RRCV	Recover	DEFN, RECOVER	GBL	IMS 緊急時再始動または正常再始動の際にリカバリーするか (Y) しないか (N)。出力値はリポジトリから取得されます。返される値については、この表の「LRecover」の説明を参照してください。
RRMT	リモート	DEFN, REMOTE	GBL	リモート・トランザクションであるか (Y) ないか (N)。出力値はリポジトリから取得されます。返される値については、この表の「LRemote」の説明を参照してください。
RRSP	Resp	DEFN, RESP	GBL	応答モード・トランザクションであるか (Y) ないか (N)。出力値はリポジトリから取得されます。返される値については、この表の「LResp」の説明を参照してください。
RSER	Serial	DEFN, SERIAL	GBL	トランザクションは逐次処理されるか (Y) されないか (N)。出力値はリポジトリから取得されます。返される値については、この表の「LSerial」の説明を参照してください。
RSIDL	SIDL	DEFN, MSNAME	GBL	ローカル・システム ID。出力値はリポジトリから取得されます。
RSIDR	SIDR	DEFN, MSNAME	GBL	リモート・システム ID。出力値はリポジトリから取得されます。
RSNO	SegNo	DEFN, SEGNO	GBL	各 GU 呼び出しに対して、メッセージ・キューで許容されるアプリケーション・プログラムの出力セグメントの制限。値はリポジトリから取得されます。

表 204. QUERY TRAN コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
RSP	LResp	RESP	LCL	<p>応答モード・トランザクションであるか (Y) ないか (N)。出力値は、ローカル IMS から取得されます。</p> <p>N 応答モード・オプションは使用不可です。デフォルトの OPTIONS=TRANRESP を指定しているか、デフォルトを受け入れる端末の場合、このトランザクションが入力された後、入力が停止してはなりません。</p> <p>Y 応答モード・オプションは使用可能です。デフォルトの OPTIONS=TRANRESP を指定しているか、デフォルトを受け入れる端末の場合、このトランザクションが入力された後、このトランザクションが応答メッセージを端末に戻すまでは、追加メッセージは許可されません。応答モードは、個々の端末の定義によって、強制または無効にすることができます。応答モードで稼働しないすべての端末では、オンライン処理時に RESP(Y) は無視されます。</p> <p>制約事項: リモート・トランザクションに対するフィルター操作の方式が、IMS 第 9 版と IMS 第 10 版の間で変更されました。第 9 版では、コマンドは QUERY TRAN STATUS(RESP) です。IMS 第 10 版以降では、コマンドは QUERY TRAN RESP(Y) です。IMS 第 10 版以降と、IMS 第 8 版または IMS 第 9 版のどちらかのシステムが含まれた IMSplex 内で IMS が実行されていて、すべてのシステム上でコマンドを処理する必要がある場合、コマンドは QUERY TRAN STATUS(RESP) RESP(Y) として発行する必要があります。IMS 第 10 版システム以降は RESP(Y) フィルターを処理し、一方、IMS 第 8 版および IMS 第 9 版のシステムは STATUS(RESP) フィルターを処理します。IMS 第 10 版システム以降に対して発行されたコマンドに STATUS(RESP) があり RESP(Y) がない場合、コマンドはリジェクトされます。</p>
RSPASZ	LSpaSz	DEFN, SPASZ	GBL	<p>会話型トランザクション・スクラッチパッド域サイズ。出力値はリポジトリーから取得されます。</p>
RSPATR	SpaTrunc	DEFN, SPATRUNC	GBL	<p>より小さい SPA で定義されたトランザクションへのプログラム間通信の後、会話型トランザクション SPA データを切り捨てるか (R) 保存するか (S)。会話型トランザクションに対して定義された SPATRUNC 値は、リポジトリーに保管されます。SHOW(DEFN) を指定した QUERY TRAN コマンドは、リポジトリー値から R、S、または null の SPATRUNC 値を返します。</p> <p>S S は、以下のいずれかの条件の会話型トランザクションの場合に、QRY TRAN コマンドで表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> CREATE TRAN コマンドまたは CREATE TRANDESC コマンドで、トランザクションが SPATRUNC=S で定義されている場合 TRANSACT マクロで SPA=STRUNC が指定されている場合 DFSDCxxx メンバー内で、システム全体の切り捨てデータ・オプションが TRUNC=Y として設定されている場合 <p>R R は、以下のいずれかの条件の会話型トランザクションの場合に、QRY TRAN コマンドで表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> CREATE TRAN コマンドまたは CREATE TRANDESC コマンドで、トランザクションが SPATRUNC=R で定義されている場合 TRANSACT マクロで SPA=RTRUNC が指定されている場合 DFSDCxxx メンバー内で、システム全体の切り捨てデータ・オプションが TRUNC=N として設定されていない場合 <p>null null 値は、トランザクションには SPATRUNC 値が定義されておらず、値は DFSDCxxx メンバーの TRUNC= オプションで定義されたシステム全体の切り捨てデータ・オプションでオーバーライドされることを示します。</p>
RSSSZ	SegSz	DEFN, SEG SZ	GBL	<p>各 GU 呼び出しに対して、メッセージ・キューで許容されるアプリケーション・プログラムの出力セグメント・サイズの限界。値はリポジトリーから取得されます。</p>
RTLS	TranStat	DEFN, TRANSTAT	GBL	<p>トランザクション・レベル統計がログに記録されるか (Y) されないか (N)。出力値はリポジトリーから取得されます。返される値については、この表の「LTranStat」の説明を参照してください。</p>
RTMCR	TimeCreate	DEFN, TIME STAMP	GBL	<p>リポジトリーでの作成時刻。これは、リポジトリー内で最初にリソースが作成された時刻です。</p>
RTMUP	TimeUpdate	DEFN, TIME STAMP	GBL	<p>リポジトリーでの更新時刻。これは、リポジトリー内で最後にリソースが更新された時刻です。</p>

表 204. QUERY TRAN コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
RWFI	WFI	DEFN, WFI	GBL	入力待ちトランザクションであるか (Y) ないか (N)。出力値はリボジトリーから取得されます。返される値については、この表の「LWFI」の説明を参照してください。
SER	LSerial	SERIAL	LCL	トランザクションは逐次処理されるか (Y) されないか (N)。出力値は、ローカル IMS から取得されます。 N シリアル・オプションは使用不可です。トランザクションのメッセージは、逐次処理されません。メッセージは並列で処理できます。U3303 疑似アベンドの後、メッセージは中断キューに入れられます。障害が繰り返し発生してトランザクションが USTOP で停止されるまで、スケジューリングが続行されます。 Y シリアル・オプションが使用可能です。トランザクションのメッセージは、逐次処理されます。U3303 疑似アベンドでは、メッセージは中断キューに入れられるのではなく、トランザクション・メッセージ・キューの前に置かれ、トランザクションは USTOP で停止します。/START コマンドでトランザクションまたはクラスが開始されると、トランザクションの USTOP は除去されます。
SIDL	LSIDL	MSNAME	LCL	ローカル・システム ID。出力値は、ローカル IMS から取得されます。
SIDR	LSIDR	MSNAME	LCL	リモート・システム ID。出力値は、ローカル IMS から取得されます。
SPASZ	LSpaSz	SPASZ	LCL	会話型トランザクション・スクラッチパッド域サイズ。出力値は、ローカル IMS から取得されます。
SPATR	LSPATrunc	SPATRUNC	LCL	より小さい SPA で定義されたトランザクションへのプログラム間通信の後、会話型トランザクション SPA データを切り捨てるか (R) 保存するか (S)。出力値は、ローカル IMS から取得されます。 S より小さい SPA で定義されたトランザクションへのプログラム間通信が行われる場合でも、IMS は SPA 内のデータをすべて保存します。より小さい SPA を持つトランザクションには、切り捨てられたデータは見えませんが、より大きい SPA を持つトランザクションに切り替えられたときに、切り捨てられたデータは使用されます。 R 切り捨てられたデータは保存されません。
STT	Status	GLOBAL, STATUS	GBL	グローバル・トランザクション状況。以下のいずれかです。 STAQ トランザクションのキューイングに関するグローバル状況は「開始済み」です。 STASCHD トランザクションのスケジューリングに関するグローバル状況は「開始済み」です。 STOQ トランザクションのキューイングに関するグローバル状況は「停止」です。 STOSCHD トランザクションのスケジューリングに関するグローバル状況は「停止」です。
TLS	LTranStat	TRANSTAT	LCL	トランザクション・レベル統計がログに記録されるか (Y) されないか (N)。出力値は、ローカル IMS から取得されます。 N トランザクション・レベル統計のロギングはアクティブではありません。 Y トランザクション・レベル統計のロギングがアクティブです。

表 204. QUERY TRAN コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
TMAC	LTimeAccess	TIMESTAMP	LCL	<p>リソースが最後にアクセスされた時刻。出力値は、ローカル IMS から取得されます。最終アクセス時間は、ウォーム・スタート、緊急時再始動、EXPORT および IMPORT にまたがって保持されます。最終アクセス時間の更新はログに記録されません。再始動後は、最終アクセス時間は再始動チェックポイント・ログ・レコードに記録された時間を反映します。</p> <p>高速機能専用トランザクションのトランザクション・タイム・スタンプは更新されません。関連の宛先コード・タイム・スタンプのみが更新されます。</p> <p>トランザクション記述子の場合、以下のアクションは最終アクセス時間を更新します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 何らかのソース (プログラム、コマンド、その他) からメッセージがトランザクションのキューに入れられる。 • アプリケーション・プログラムによってメッセージがデキューされる (MSGU)。メッセージをデキューするために DEQ コマンドが発行された場合には、そのアクションはアクセス時間を更新しません。 • CREATE コマンドまたは DFSINSX0 出口が、モデルとしてリソースを参照する。
TMCR	LTimeCreate	TIMESTAMP	LCL	<p>リソースが作成された時刻。出力値は、ローカル IMS から取得されます。これは、CREATE TRAN コマンド、トランザクションを作成する IMPORT コマンド、または IMS の初期設定の結果です。作成時刻は、ウォーム・スタート、緊急時再始動、EXPORT および IMPORT にまたがって保持されます。</p>
TMEM	TMember	WORK	LCL	<p>会話を開始した OTMA tmember。</p>
TMIM	LTimeImport	TIMESTAMP	LCL	<p>リソースが最後にインポートされた時刻。インポート時刻は、ウォーム・スタートと緊急時再始動にまたがって保持されます。出力値は、ローカル IMS から取得されます。</p>
TMUP	LTimeUpdate	TIMESTAMP	LCL	<p>UPDATE TRAN コマンド (タイプ 1 コマンド) または IMPORT コマンドの結果として実行時リソース定義の属性が更新された最終時刻。更新時刻は、ウォーム・スタートや緊急時再始動を越えて保持されます。出力値は、ローカル IMS から取得されます。</p>
TPIP	TPipe	WORK	LCL	<p>会話を開始した OTMA T パイプ。</p>
TRAN	Trancode	TRAN	LCL	<p>トランザクション名。トランザクションは、アプリケーション・プログラムに向けられるメッセージの処理特性を定義します。</p>
USER	UserName	WORK	LCL	<p>会話を開始したユーザー。</p>
WFI	LWFI	WFI	LCL	<p>入力待ちトランザクションであるか (Y) ないか (N)。出力値は、ローカル IMS から取得されます。</p> <p>N 入力待ちオプションは使用不可です。</p> <p>Y 入力待ちオプションは使用可能です。WFI トランザクションを処理するメッセージ処理またはバッチ処理アプリケーション・プログラムは、通常どおりにスケジュールされ、呼び出されます。処理するトランザクションが WFI として定義されている場合、プログラムは、使用可能な入力メッセージを処理した後も主ストレージに残ることが許可されます。以下の場合、QC 状況コード (これ以上メッセージがない) が戻されます。すなわち、処理限界カウントに達した場合、スケジュールされたトランザクション、データベース、プログラム、またはクラスの状況を変更するためにコマンドが入力された場合、トランザクションで使用されるデータベースに関するコマンドが入力された場合、あるいは IMS がチェックポイント・シャットダウンで終了した場合です。</p>

表 204. QUERY TRAN コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
WRK	Work	WORK	LCL	トランザクションまたはそれに関連したリソースの 1 つで作業が進行中です。進行中の作業は、以下のいずれかです。 ANOTHER CMD IN PROGRESS トランザクションを削除または更新するための別のコマンド (DELETE、IMPORT、UPDATE) が既に進行中です。 IN CONVERSATION トランザクションは会話中です。会話を一意的に識別する追加情報 (例えば、会話 ID、ユーザー名または ltermname (RM に保管された会話の場合)、ノード、lterm、ユーザー、luname、tmember、または tpipe) は、固有の XML タグを使用して別個の情報として戻されます。 IN USE トランザクションは使用中です。キューイングが進行中です (端末入力またはプログラム間通信のいずれか) QUEUEING 非共用キュー環境で、トランザクションはキューに入れられたメッセージを持っています。 SCHEDULED トランザクションがスケジュールされているか、またはトランザクションで参照されるアプリケーション・プログラムがスケジュールされています。 SUSPENDED トランザクションは中断キュー上にあります。

表 205. NOTINIT-xx-reason 状況の理由情報

理由	意味
EDTRTN	トランザクションによって参照される入力編集ルーチンをロードできませんでした。
NOMSN	トランザクションによって参照される MSNAME が存在しません。
NOPGM	このトランザクションが参照するプログラムが定義されていません。プログラム PDIR 制御ブロックが存在しません。アクション: 2。
NORTC	このトランザクションが参照する高速機能宛先コードが定義されていません。高速機能宛先コード RCTE 制御ブロックが存在しません。アクション: 3。
NOTBL	トランザクション入力編集ルーチンの管理に使用されるテーブルを割り振ることができませんでした。
REPOCHGLIST	トランザクション名がこの IMS の IMSRSC リポジトリ内の変更リストに存在しており、その変更リストが処理中であるか、エラーによって処理が失敗しました。トランザクションが正常にインポートされて実行時トランザクション定義とリポジトリ内の保管済み定義が同期化されない限り、このトランザクションをモデルとして使用、スケジュール、更新、エクスポート、あるいは参照することはできません。アクション: 4。

表 205. NOTINIT-xx-reason 状況の理由情報 (続き)

理由	意味
注: トランザクションを初期化するには、以下のアクションを取ることができます。	
1.	IBM に連絡する。
2.	CREATE PGM コマンドを発行して、プログラムを作成する。UPDATE TRAN START(Q,SCHD) コマンドを発行して、トランザクションの初期化を完了する。
3.	CREATE RTC コマンドを発行して、宛先コードを作成する。UPDATE TRAN START(Q,SCHD) コマンドを発行して、トランザクションの初期化を完了する。
4.	IMS 変更リスト処理が失敗してメッセージ DFS4411E が発行された場合は、問題を修正して以下のいずれかのアクションを実行します。 <ul style="list-style-type: none"> • IMS をシャットダウンし、再始動して変更リストの処理を再試行します。 • IMPORT DEFN SOURCE(REPO) NAME(<i>trancode</i>) TYPE(TRAN) コマンドを発行し、トランザクションをインポートします。ここで、<i>trancode</i> はトランザクション名です。

QUERY TRAN の SHOW キーワードが出力のタイプを決定する方法

以下の表は、SHOW キーワードによって、QUERY TRAN コマンドで戻される出力のタイプを決める方法について、いくつかの例を示しています。

表 206. QUERY TRAN の SHOW キーワードが出力のタイプを決定する方法

使用される SHOW キーワードの形式	戻される出力のタイプ
SHOW(LOCAL)	IMS システムにローカルの出力フィールドのみ。SHOW(ALL,LOCAL) は、これと同じ出力を提供します。
SHOW(GLOBAL)	グローバルに維持されている出力フィールドのみ (RM または CQS によって維持されているデータなど)。SHOW(ALL,GLOBAL) は、これと同じ出力を提供します。
SHOW(ALL)	ローカル・データとグローバル・データの両方を持つフィールドのすべての出力フィールド。両方の値が出力に戻されます。
SHOW(QCNT,GLOBAL)	グローバル QCNT 値のみ。
SHOW(QCNT,LOCAL)	ローカル QCNT 値のみ。
SHOW(QCNT)	LOCAL または GLOBAL 修飾子がないため、ローカルとグローバルの両方の QCNT 値。
SHOW(ALL,GLOBAL)	グローバルに維持されている出力フィールドのみ (RM または CQS によって維持されているデータなど)。SHOW(GLOBAL) は、これと同じ出力を提供します。
SHOW(ALL,LOCAL)	IMS システムにローカルの出力フィールドのみ。SHOW(LOCAL) は、これと同じ出力を提供します。

SHOW キーワード内に特定の出力フィールドをリストする場合、それらをローカルまたはグローバルのどちらかとして指定できます。ただし、一部はグローバルで一部はローカルのものを SHOW キーワードのリストに結合することはできません。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY TRAN コマンドの結果として戻される戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、QUERY TRAN コマンドから OM に戻される可能性がある戻りコードと理由コードを示しています。

表 207. QUERY TRAN コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY TRAN コマンドは正常に完了しました。
X'00000004'	X'00000010'	戻されるリソースは検出されませんでした。指定されたリソース名が無効であるか、以下のことが考えられます。 <ul style="list-style-type: none"> 指定したフィルターと一致するリソースがありませんでした。 指定された SHOW(WORK) で表示される作業を持つリソースがありませんでした。 SHOW(EXPORTNEEDED) が指定されていた場合に、作成または更新されたが IMSRSC リポジトリにエクスポートされていなかったリソースがありませんでした。
X'00000004'	X'00001000'	この IMS システムはコマンド・マスターではないため、この IMS システムでは QUERY TRAN コマンドは処理されませんでした。リソース情報は戻されません。
X'00000004'	X'00001004'	いくつかのリソースについて、QUERY TRAN コマンドが処理されました。リソースのリストの一部が戻されます。戻されるリソースのカウントが、QUERY TRAN コマンドによって戻すことのできるリソースの最大数を上回ったために、コマンドは終了しました。 QUERY TRAN コマンドによって戻すことのできるリソースの最大数は 5000 です。汎用マスクまたは他のフィルターを使用して、戻されるリソースの数が 5000 未満になるようにして、コマンドを再発行してください。
X'00000004'	X'00001010'	戻されるリソースは検出されませんでした。指定されたリソース名が無効であるか、以下のことが考えられます。 <ul style="list-style-type: none"> 指定したフィルターと一致するリソースがありませんでした。 指定された SHOW(WORK) で表示される作業を持つリソースがありませんでした。 SHOW(EXPORTNEEDED) が指定されていた場合は、IMSRSC リポジトリにエクスポートする必要があるリソースがありませんでした。
X'00000008'	X'00002004'	無効なコマンド・キーワードまたは無効なコマンド・キーワードの組み合わせ。

表 207. QUERY TRAN コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000008'	X'00002040'	QUERY TRAN コマンドに複数のフィルター値が指定されたか、あるいは QCNT フィルターに無効なフィルター値が指定されています。CLASS フィルター、STATUS フィルター、または QCNT フィルターのうちの 1 つだけを指定できます。値 0 が、LE、GE、または EQ を伴う QCNT に指定された可能性があります。あるいは、値 1 が、LT を伴う QCNT に指定された可能性があります。
X'00000008'	X'0000204C'	指定された CLASS 値は無効です。正しい CLASS 値がコマンド上に指定されていることを確認してください。
X'00000008'	X'00002137'	モデルとして参照されたトランザクションは、状況が DYN のキュー専用トランザクションであり、これはモデルとして使用することはできません。
X'0000000C'	X'00003000'	一部のリソースでは QUERY TRAN コマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。完了コードに、エラーの理由とリソース名が示されています。
X'0000000C'	X'00003004'	QUERY TRAN コマンドは、指定されたどのリソース名に対しても正常に実行されませんでした。完了コードに、エラーの理由とリソース名が示されています。
X'00000010'	X'00004004'	CQS アドレス・スペースがないため、QUERY TRAN コマンド処理は終了しました。
X'00000010'	X'00004018'	リソース構造が存在しないか、リソース構造が使用できないため、QUERY TRAN コマンド処理は終了しました。
X'00000010'	X'00004100'	リソース構造が満杯であるため、QUERY TRAN コマンド処理は終了しました。
X'00000010'	X'00004104'	RM アドレス・スペースがないため、QUERY TRAN コマンド処理は終了しました。
X'00000010'	X'00004108'	SCI アドレス・スペースがないため、QUERY TRAN コマンド処理は終了しました。
X'00000010'	X'00004300'	MODBLKS のオンライン変更が有効なため、コマンドが許可されません (DFSDFxxx または DFSCGxxx が MODBLKS OLC で定義されているか、または MODBLKS が定義されていません)。
X'00000010'	X'00004500'	IMS はリポジトリを使用できません。
X'00000010'	X'00004501'	RM はリポジトリには使用できません。
X'00000010'	X'00004502'	リポジトリは使用できません。
X'00000010'	X'00004503'	リポジトリは停止しています。
X'00000010'	X'00004504'	リポジトリ・スペアのリカバリーが進行中です。
X'00000010'	X'00004505'	IMS リソース・リストが存在しないか、IMS リソース・リスト内に該当するリソース・タイプのリソースが存在しません。
X'00000010'	X'00004507'	リポジトリへのアクセスが拒否されました。

表 207. QUERY TRAN コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000010'	X'00004508'	リポジトリーの最大入力長を超過しました。
X'00000010'	X'00004509'	RM データのバージョンは IMS データのバージョンよりも低いバージョンです。
X'00000010'	X'0000450A'	リポジトリー・サーバー (RS) をシャットダウンしています。
X'00000010'	X'0000450B'	RS が使用できません。
X'00000010'	X'0000450C'	RS が使用中です。
X'00000010'	X'0000450D'	RM は、IMSRSC リポジトリーに関連した一部の内部フィールドの定義に失敗しました。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できなかったため、QUERY TRAN コマンド処理は終了しました。
X'00000014'	X'00005008'	DFSPOOL ストレージを取得できなかったため、QUERY TRAN コマンド処理は終了しました。
X'00000014'	X'0000501C'	IMODULE GETMAIN エラー。
X'00000014'	X'00005100'	RM エラーのため、QUERY TRAN コマンド処理は終了しました。
X'00000014'	X'00005104'	CQS エラー。
X'00000014'	X'00005108'	SCI 要求エラーのため、QUERY TRAN コマンド処理は終了しました。
X'00000014'	X'00005110'	リポジトリー・エラー。
X'00000014'	X'0000551C'	破損したリソース・リストが検出されたため、リポジトリー内のデータを表示する要求は拒否されました。リソース・リストが使用できないため、QUERY TRAN コマンドは拒否されました。IBM ソフトウェア・サポートに連絡してください。エラーになったコマンドの出力と、コマンドが実行されたローカル RM アドレス・スペースのダンプまたは IMSplex 内のすべての RM アドレス・スペースのダンプを送信してください。また、IMSRSC リポジトリー RID データ・セットと RMD データ・セットのコピーも送信してください。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

以下の表には、QUERY TRAN コマンドで戻される可能性のある完了コードが記載されています。

表 208. QUERY TRAN コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		トランザクションに対するコマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	トランザクション名が無効であるか、指定されたワイルドカード・パラメーターがどのリソース名にも一致しません。

表 208. QUERY TRAN コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
50	CQS IS UNAVAILABLE	QUERY TRAN コマンドは、CQS が使用不能のため、リソースに対して正常に完了できませんでした。CQS が使用可能なことを確認してから、コマンドを再発行してください。
51	NO RESOURCE STRUCTURE	QUERY TRAN コマンドは、リソース構造が存在しないが、あるいは使用可能でないため、リソースに対して正常に完了できませんでした。
52	RESOURCE STRUCTURE FULL	QUERY TRAN コマンドは、リソース構造が満杯のため、リソースに対して正常に完了できませんでした。
90	INTERNAL ERROR	IMS 内部エラーが発生したため、このリソースについて QUERY TRAN コマンドを完了できませんでした。
94	RM REQUEST ERROR	QUERY TRAN コマンドは、RM エラーのため、リソースに対して正常に完了できませんでした。
98	CQS REQUEST ERROR	QUERY TRAN コマンドは、CQS エラーのため、リソースに対して正常に完了できませんでした。

例

以下に示すのは QUERY TRAN コマンドの例です。

QUERY TRAN コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QRY TRAN NAME(PART,TRAN000%,CDEBTRN4,CONV13V0,TXBANKI4,FPACP) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

Trancode	MbrName	CC	LPSBname	LC1s	LQCnt	LLCT	LPLCT	LPLCTTime	LCPRI	LNPRI
CDEBTRN4	IMS1	0	CDEBS	1	0	65535	65535	6553500	1	1
CONV13V0	IMS1	0	CPGM1V0	1	0	65535	65535	6553500	1	1
FPACP	IMS1	0	TACP1	1	0	65535	65535	6553500	1	1
PART	IMS1	0	DFSSAM02	4	0	2	65535	6553500	7	7
TRAN0001	IMS1	0	DFSSAM02	4	0	2	65535	6553500	7	7
TRAN0002	IMS1	0	DFSSAM04	1	0	65535	65535	6553500	1	1
TXBANKI4	IMS1	0	BANKIFP	1	0	0	65535	6553500	1	1

(右にスクロール、画面 2)

Trancode	MbrName	LLPRI	LSegSz	LSegNo	LParLim	LRegCnt	LMaxRgn	LEditRtn	LFP	LEMHB
CDEBTRN4	IMS1	1	0	0	65535	0	0		N	
CONV13V0	IMS1	1	0	0	65535	0	0		N	
FPACP	IMS1	1	0	0	65535	0	0		P	
PART	IMS1	10	0	0	65535	0	0		N	
TRAN0001	IMS1	10	0	0	65535	0	0		N	
TRAN0002	IMS1	1	0	0	65535	0	0		N	
TXBANKI4	IMS1	1	0	0	65535	0	0		E	

(右にスクロール、画面 3)

Trancode	MbrName	LEMHSz	LCmtMode	LMsgType	LSPATrunc	LSPASz	LSIDR	LSIDL	LDCLWA
----------	---------	--------	----------	----------	-----------	--------	-------	-------	--------

CDEBTRN4	IMS1	0	SNGL	MULTSEG	S	1000	10	10	Y
CONV13V0	IMS1	0	SNGL	MULTSEG	S	1000	16	36	Y
FPACP	IMS1	0	SNGL	SNGLSEG		0	10	10	Y
PART	IMS1	0	MULT	MULTSEG		0	10	10	Y
TRAN0001	IMS1	0	MULT	MULTSEG		0	10	10	Y
TRAN0002	IMS1	0	SNGL	MULTSEG		0	10	10	Y
TXBANKI4	IMS1	0	SNGL	SNGLSEG		0	10	10	Y

(右にスクロール、画面 4)

Trancode	MbrName	LDirRoute	LEditUC	LIrq	LRecover	LResp	LRemote	LSerial	LWFI
CDEBTRN4	IMS1	N	Y	N	Y	N	N	N	N
CONV13V0	IMS1	N	Y	N	Y	N	Y	N	N
FPACP	IMS1	N	Y	N	Y	Y	N	N	N
PART	IMS1	N	Y	Y	Y	N	N	N	N
TRAN0001	IMS1	N	Y	Y	Y	N	N	N	N
TRAN0002	IMS1	N	Y	N	Y	N	N	N	N
TXBANKI4	IMS1	N	Y	N	Y	Y	N	N	N

(右にスクロール、画面 5)

Trancode	MbrName	LAOCMD	LConv	LTranStat	LclStat	LModelName	LModelType	LMSName
CDEBTRN4	IMS1	N	Y	N				
CONV13V0	IMS1	N	Y	N				LINK31V1
FPACP	IMS1	N	N	N				
PART	IMS1	N	N	N	STOQ,STOSCHD			
TRAN0001	IMS1	N	N	N		PART	RSC	
TRAN0002	IMS1	N	N	N		DFSDSTR1	DESC	
TXBANKI4	IMS1	N	N	N				

(右にスクロール、画面 6)

Trancode	MbrName	LMSName	LTimeCreate	LTimeUpdate
CDEBTRN4	IMS1		2011.182 11:39:21.86	2011.182 13:18:45.91
CONV13V0	IMS1	LINK31V1	2011.182 11:39:21.86	2011.182 13:18:45.91
FPACP	IMS1		2011.182 11:39:21.86	2011.182 13:19:01.81
PART	IMS1		2011.182 11:39:21.86	2011.182 13:19:09.30
TRAN0001	IMS1		2011.182 13:03:18.32	2011.182 13:19:21.67
TRAN0002	IMS1		2011.182 13:06:26.21	2011.182 13:19:27.69
TXBANKI4	IMS1		2011.182 11:39:21.87	2011.182 13:23:15.27

(右にスクロール、画面 7)

Trancode	MbrName	LTimeAccess	LTimeImport	LDefnType	LExprTm
CDEBTRN4	IMS1			MODBLKS	0
CONV13V0	IMS1			MODBLKS	0
FPACP	IMS1			UPDATE	200
PART	IMS1	2011.182 13:22:50.75		UPDATE	100
TRAN0001	IMS1			CREATE	450
TRAN0002	IMS1			CREATE	550
TXBANKI4	IMS1			UPDATE	300

OM API 入力:

```
CMD(QRY TRAN NAME(PART,TRAN000%,CDEBTRN4,CONV13V0,TXBANKI4,FPACP) SHOW(ALL))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.182 20:27:15.389095</statime>
<stotime>2011.182 20:27:15.404799</stotime>
<staseq>C8018209EFEA735A</staseq>
<stoseq>C8018209F3BFFB55</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10132715</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
```

```

<kw>TRAN </kw>
<input>QRY TRAN NAME(PART,TRAN000%,CDEBTRN4,CONV13V0,TXBANKI4,FPAC)
  SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdsphdr>
<hdr s1bl="TRAN" l1bl="Trancode" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="5" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1bl="PSB" l1bl="LPSBname" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="LCLS" l1bl="LCLs" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="3" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LQ" l1bl="LQCnt" scope="LCL" sort="d" key="4" scroll="yes"
  len="8" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LLCT" l1bl="LLCT" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LPLCT" l1bl="LPLCT" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="PLCTT" l1bl="LPLCTTime" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="7" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LCP" l1bl="LCPRI" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="2" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LNP" l1bl="LNPRI" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="2" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LLP" l1bl="LLPRI" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="2" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LSSZ" l1bl="LSegSz" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LSNO" l1bl="LSegNo" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LPLM" l1bl="LParLim" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="RGC" l1bl="LRegCnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LMRG" l1bl="LMaxRgn" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="EDTR" l1bl="LEditRtn" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="FP" l1bl="LFP" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="EMHBS" l1bl="LEMHBSz" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="CMTM" l1bl="LCmtMode" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="MSGT" l1bl="LMsgType" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="7" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="SPATR" l1bl="LSPATrunc" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="right" />
<hdr s1bl="SPASZ" l1bl="LSPASz" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="SIDR" l1bl="LSIDR" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="SIDL" l1bl="LSIDL" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="DCLW" l1bl="LDCLWA" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="DRRT" l1bl="LDirRoute" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="EDTT" l1bl="LEditUC" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="INQ" l1bl="LInq" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />

```

```

<hdr s1bl="RCV" l1bl="LRecover" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RSP" l1bl="LResp" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RMT" l1bl="LRemote" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="SER" l1bl="LSerial" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="WFI" l1bl="LWFI" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="AOCMD" l1bl="LAOCMD" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="CONV" l1bl="LConv" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TLS" l1bl="LTranStat" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="LSTT" l1bl="LclStat" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="MDLN" l1bl="LModelName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="MDLT" l1bl="LModelType" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="MSN" l1bl="LMSName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMCR" l1bl="LTimeCreate" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMUP" l1bl="LTimeUpdate" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMAC" l1bl="LTimeAccess" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="TMIM" l1bl="LTimeImport" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="DFNT" l1bl="LDefnType" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="EXPRT" l1bl="LExprTm" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>TRAN(PART ) MBR(IMS1 ) CC( 0) PSB(DFSSAM02) LCLS( 4) LQ(
  0) LLCT( 2) LPLCT(65535) LCP( 7) LNP( 7) LLP(10) LSSZ( 0)
  LSNO( 0) LPLM(65535) RGC( 0) LMRG( 0) LSTT(STOQ,STOSCHD)
  AOCMD(N) CMTM(MULT) CONV(N) DCLW(Y) DFNT(UPDATE) DRRT(N) EDTT(Y)
  EMHBS( 0) EXPRT( 100) FP(N) INQ(Y) MSGT(MULTSEG) PLCTT(6553500)
  RCV(Y) RMT(N) RSP(N) SER(N) SIDL( 10) SIDR( 10) SPASZ( 0)
  TMAC(2011.182 13:22:50.75) TMUP(2011.182 13:19:09.30) TMCR(2011.182
  11:39:21.86) TLS(N) WFI(N) </rsp>
<rsp>TRAN(TRAN0002) MBR(IMS1 ) CC( 0) PSB(DFSSAM04) LCLS( 1) LQ(
  0) LLCT(65535) LPLCT(65535) LCP( 1) LNP( 1) LLP( 1) LSSZ( 0)
  LSNO( 0) LPLM(65535) RGC( 0) LMRG( 0) AOCMD(N) CMTM(SNGL)
  CONV(N) DCLW(Y) DFNT(CREATE) DRRT(N) EDTT(Y) EMHBS( 0) EXPRT( 550)
  FP(N) INQ(N) MDLT(DESC) MDLN(DFSDSTR1) MSGT(MULTSEG) PLCTT(6553500)
  RCV(Y) RMT(N) RSP(N) SER(N) SIDL( 10) SIDR( 10) SPASZ( 0)
  TMUP(2011.182 13:19:27.69) TMCR(2011.182 13:06:26.21) TLS(N) WFI(N)
</rsp>
<rsp>TRAN(TRAN0001) MBR(IMS1 ) CC( 0) PSB(DFSSAM02) LCLS( 4) LQ(
  0) LLCT( 2) LPLCT(65535) LCP( 7) LNP( 7) LLP(10) LSSZ( 0)
  LSNO( 0) LPLM(65535) RGC( 0) LMRG( 0) AOCMD(N) CMTM(MULT)
  CONV(N) DCLW(Y) DFNT(CREATE) DRRT(N) EDTT(Y) EMHBS( 0) EXPRT( 450)
  FP(N) INQ(Y) MDLT(RSC) MDLN(PART ) MSGT(MULTSEG) PLCTT(6553500)
  RCV(Y) RMT(N) RSP(N) SER(N) SIDL( 10) SIDR( 10) SPASZ( 0)
  TMUP(2011.182 13:19:21.67) TMCR(2011.182 13:03:18.32) TLS(N) WFI(N)
</rsp>
<rsp>TRAN(CDEBTRN4) MBR(IMS1 ) CC( 0) PSB(CDEBS ) LCLS( 1) LQ(
  0) LLCT(65535) LPLCT(65535) LCP( 1) LNP( 1) LLP( 1) LSSZ( 0)
  LSNO( 0) LPLM(65535) RGC( 0) LMRG( 0) AOCMD(N) CMTM(SNGL)
  CONV(Y) DCLW(Y) DFNT(UPDATE) DRRT(N) EDTT(Y) EMHBS( 0) EXPRT( 0)
  FP(N) INQ(N) MSGT(MULTSEG) PLCTT(6553500) RCV(Y) RMT(N) RSP(N) SER(N)

```

```

SIDL( 10) SIDR( 10) SPASZ( 1000) SPATR(S) TMUP(2011.182 13:18:45.91)
TMCR(2011.182 11:39:21.86) TLS(N) WFI(N) </rsp>
<rsp>TRAN(CONV13V0) MBR(IMS1 ) CC( 0) PSB(CPGM1V0 ) LCLS( 1) LQ(
0) LLCT(65535) LPLCT(65535) LCP( 1) LNP( 1) LLP( 1) LSSZ( 0)
LSNO( 0) LPLM(65535) RGC( 0) LMRG( 0) AOCMD(N) CMTM(SNGL)
CONV(Y) DCLW(Y) DFNT(UPDATE) DRRT(N) EDTT(Y) EMHBS( 0) EXPRT( 0)
FP(N) INQ(N) MSGT(MULTSEG) PLCTT(6553500) RCV(Y) RMT(Y) RSP(N) SER(N)
SIDL( 36) SIDR( 16) MSN(LINK31V1) SPASZ( 1000) SPATR(S)
TMUP(2011.182 13:18:45.91) TMCR(2011.182 11:39:21.86) TLS(N) WFI(N)
</rsp>
<rsp>TRAN(TXBANKI4) MBR(IMS1 ) CC( 0) PSB(BANKIFP ) LCLS( 1) LQ(
0) LLCT( 0) LPLCT(65535) LCP( 1) LNP( 1) LLP( 1) LSSZ( 0)
LSNO( 0) LPLM(65535) RGC( 0) LMRG( 0) AOCMD(N) CMTM(SNGL)
CONV(N) DCLW(Y) DFNT(UPDATE) DRRT(N) EDTT(Y) EMHBS( 0) EXPRT( 300)
FP(E) INQ(N) MSGT(SNGLSEG) PLCTT(6553500) RCV(Y) RMT(N) RSP(Y) SER(N)
SIDL( 10) SIDR( 10) SPASZ( 0) TMUP(2011.182 13:23:15.27)
TMCR(2011.182 11:39:21.87) TLS(N) WFI(N) </rsp>
<rsp>TRAN(FPACP ) MBR(IMS1 ) CC( 0) PSB(TACP1 ) LCLS( 1) LQ(
0) LLCT(65535) LPLCT(65535) LCP( 1) LNP( 1) LLP( 1) LSSZ( 0)
LSNO( 0) LPLM(65535) RGC( 0) LMRG( 0) AOCMD(N) CMTM(SNGL)
CONV(N) DCLW(Y) DFNT(UPDATE) DRRT(N) EDTT(Y) EMHBS( 0) EXPRT( 200)
FP(P) INQ(N) MSGT(SNGLSEG) PLCTT(6553500) RCV(Y) RMT(N) RSP(Y) SER(N)
SIDL( 10) SIDR( 10) SPASZ( 0) TMUP(2011.182 13:19:01.81)
TMCR(2011.182 11:39:21.86) TLS(N) WFI(N) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: 指定されたトランザクションのすべての出力フィールドを表示するために、**QUERY TRAN** コマンドが **SHOW(ALL)** で指定されています。トランザクション出力フィールドのすべては 1 つの画面に収まらないため、ユーザーは右にスクロールして、追加の出力フィールドを見る必要があります。トランザクション名およびその出力行を作成したメンバー名が、各画面に表示されています。トランザクション **PART** は、スケジューリングおよびキューイングのために停止された状況です。トランザクション **CDEBTRN4** と **CONV13V0** は、会話型です。トランザクション **FPACP** は、高速機能利用可能です。トランザクション **CONV13V0** は、リモートです。トランザクション **TRAN0001** と **TRAN0002** は動的であり、それらを作成するために使用された **LModelName** と **LModelType** が表示されています。これらは **CREATE** の定義タイプを持っています。

QUERY TRAN コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
QUERY TRAN STATUS(AFFIN)
```

TSO SPOC 出力:

Trancode	MbrName	CC	LclStat
APOL12	IMS1	0	AFFIN

説明: この例では、類似性状況を持つトランザクションを照会するフィルターとしての **AFFIN** オプションの使用法を示しています。

QUERY TRAN コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
QUERY TRAN NAME(APOL11 APOL12) SHOW(STATUS)
```

TSO SPOC 出力:

Trancode	MbrName	CC	LclStat
APOL11	IMS1		0
APOL12	IMS1		0 AFFIN

説明: この例では、トランザクション APOL11 および APOL12 のトランザクション状況を照会します。出力にはトランザクション APOL12 が類似性状況を持っていることが示されます。

QUERY TRAN コマンドの例 4

TSO SPOC 入力:

```
QUERY TRAN QCNT(GT,0) SHOW(AFFIN)
```

TSO SPOC 出力:

Trancode	MbrName	CC	QCnt	Affinity
APOL12	IMS1	0	1	
APOL12	IMS1	0	1	IMS1

説明: この例では、共用キュー上のトランザクション・メッセージを照会し、類似性状況を持つメッセージを表示します。

QUERY TRAN コマンドの例 5

TSO SPOC 入力:

```
QRY TRAN NAME(PART) SHOW(DEFN,CLASS)
```

TSO SPOC 出力:

Trancode	MbrName	CC	Repo	IMSid	Cls	LCls
PART	IMS1	0	Y		1	
PART	IMS1	0	Y	IMS3	5	
PART	IMS1	0		IMS1		1
PART	IMS2	0		IMS2		99
PART	IMS3	0		IMS3		5

OM API 入力:

```
CMD(QRY TRAN NAME(PART) SHOW(DEFN,CLASS))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.182 21:12:56.087584</statime>
<stotime>2011.182 21:12:56.099946</stotime>
<staseq>C8018C3FABC2038C</staseq>
<stoseq>C8018C3FAEC6A010</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10141256</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>TRAN </kwd>
<input>QRY TRAN NAME(PART) SHOW(DEFN,CLASS) </input>
</cmd>
```

```

<cmdsphdr>
<hdr s1b1="TRAN" l1b1="Trancode" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="5" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1b1="REPO" l1b1="Repo" scope="LCL" sort="d" key="2" scroll="no"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="IMSID" l1b1="IMSid" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="RCLS" l1b1="Cls" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="3" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1b1="LCLS" l1b1="Lcls" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="3" dtype="INT" align="right" />
</cmdsphdr>
<cmdspdata>
<rsp>TRAN(PART ) MBR(IMS1 ) CC( 0) LCLS( 1) IMSID(IMS1 )
</rsp>
<rsp>TRAN(PART ) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RCLS( 1) </rsp>
<rsp>TRAN(PART ) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS3 )
  RCLS( 5) </rsp>
<rsp>TRAN(PART ) MBR(IMS3 ) CC( 0) LCLS( 5) IMSID(IMS3 )
</rsp>
<rsp>TRAN(PART ) MBR(IMS2 ) CC( 0) LCLS( 99) IMSID(IMS2 )
</rsp>
</cmdspdata>
</imsout>

```

説明: 指定されたリソースの保管済みリソース定義およびランタイム・リソース定義が戻されます。PART は、リポジトリ内に汎用定義があり、さらに IMS3 に固有のセクションもリポジトリ内にあります。

QUERY TRAN コマンドの例 6

TSO SPOC 入力:

QRY TRAN NAME(PART*) SHOW(DEFN)

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

Trancode	MbrName	CC	Repo	IMSid	PSBname	LPSBname	Cls	Lcls	LCT	LLCT	PLC
PART	IMS1	0	Y		DFSSAM02		4		2		6553
PART	IMS1	0		IMS1		DFSSAM02		4		2	
PART	IMS2	0		IMS2		DFSSAM02		4		2	
PARTROOT	IMS1	0	Y		TPARTAPP		1		2		6553
PARTROOT	IMS1	0		IMS1		TPARTAPP		1		2	
PARTROOT	IMS2	0		IMS2		TPARTAPP		1		2	

(右にスクロール、画面 2)

Trancode	MbrName	Repo	CT	LPLCT	PLCTTime	LPLCTTime	LCPRI	NPRI	LNPRI	LPRI	LLPRI
PART	IMS1	Y	35		6553500			7		10	
PART	IMS1			65535		6553500		7		7	10
PART	IMS2			65535		6553500		7		7	10
PARTROOT	IMS1	Y	35		6553500			7		10	
PARTROOT	IMS1			65535		6553500		7		7	10
PARTROOT	IMS2			65535		6553500		7		7	10

(右にスクロール、画面 3)

Trancode	MbrName	Repo	SegSz	LSegSz	SegNo	LSegNo	ParLim	LParLim	LRegCnt	MaxRgn
PART	IMS1	Y	0		0		65535			0
PART	IMS1				0			65535		0
PART	IMS2				0			65535		0

PARTROOT	IMS1	Y	0	0	0	65535		0
PARTROOT	IMS1			0	0		65535	0
PARTROOT	IMS2			0	0		65535	0

(右にスクロール、画面 4)

Trancode	MbrName	Repo	LMaxRgn	EditRtn	LEditRtn	FP	LFP	EMHBSz	LEMHBSz	CmtMode
PART	IMS1	Y				N		0		MULT
PART	IMS1		0			N			0	
PART	IMS2		0			N			0	
PARTROOT	IMS1	Y				N		0		SNGL
PARTROOT	IMS1		0			N			0	
PARTROOT	IMS2		0			N			0	

(右にスクロール、画面 5)

Trancode	MbrName	Repo	LCmtMode	MsgType	LMsgType	SPATrunc	LSPATrunc	SPASz	LSPASz
PART	IMS1	Y		MULTSEG				0	
PART	IMS1		MULT		MULTSEG				0
PART	IMS2		MULT		MULTSEG				0
PARTROOT	IMS1	Y		MULTSEG				0	
PARTROOT	IMS1		SNGL		MULTSEG				0
PARTROOT	IMS2		SNGL		MULTSEG				0

(右にスクロール、画面 6)

Trancode	MbrName	Repo	SIDR	LSIDR	SIDL	LSIDL	DCLWA	LDCLWA	DirRoute	LDirRoute
PART	IMS1	Y	0		0		Y		N	
PART	IMS1						Y		N	
PART	IMS2						Y		N	
PARTROOT	IMS1	Y	0		0	Y		N		
PARTROOT	IMS1						Y		N	
PARTROOT	IMS2						Y		N	

(右にスクロール、画面 7)

Trancode	MbrName	Repo	EditUC	LEditUC	Inq	LInq	Recover	LRecover	Resp	LResp	Remote
PART	IMS1	Y	Y		Y		Y		N		N
PART	IMS1			Y		Y		Y		N	
PART	IMS2			Y		Y		Y		N	
PARTROOT	IMS1	Y	Y		N		Y		N		N
PARTROOT	IMS1			Y		N		Y		N	
PARTROOT	IMS2			Y		N		Y		N	

(右にスクロール、画面 8)

Trancode	MbrName	Repo	LRemote	Serial	LSerial	WFI	LWFI	AOCMD	LAOCMD	Conv	LConv
PART	IMS1	Y		N		N		N		N	
PART	IMS1		N		N		N		N		N
PART	IMS2		N		N		N		N		N
PARTROOT	IMS1	Y		N		N		N		N	
PARTROOT	IMS1		N		N		N		N		N
PARTROOT	IMS2		N		N		N		N		N

(右にスクロール、画面 9)

Trancode	MbrName	Repo	TranStat	LTranStat	LMSName	TimeCreate	LTimeCreate
PART	IMS1	Y	N			2011.189 19:03:17.76	
PART	IMS1			N			2011.189 19:03:17.76
PART	IMS2			N			2011.189 19:01:55.17
PARTROOT	IMS1	Y	N			2011.189 19:03:17.76	
PARTROOT	IMS1			N			2011.189 19:03:17.76
PARTROOT	IMS2			N			2011.189 19:01:55.17

(右にスクロール、画面 10)

Trancode	MbrName	Repo	TimeUpdate	LTimeUpdate
PART	IMS1	Y		
PART	IMS1			2011.189 19:04:25.07
PART	IMS2			2011.189 19:11:47.65
PARTROOT	IMS1	Y		
PARTROOT	IMS1			
PARTROOT	IMS2			

(右にスクロール、画面 11)

Trancode	MbrName	Repo	LTimeAccess	LTimeImport	ExprTm	LExprTm
PART	IMS1	Y			100	
PART	IMS1		2011.189 19:04:19.92			100
PART	IMS2		2011.189 19:04:19.92			100
PARTROOT	IMS1	Y			0	
PARTROOT	IMS1					0
PARTROOT	IMS2					0

OM API 入力:

CMD(QRY TRAN NAME(PART*) SHOW(DEFN))

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<stime>2011.190 02:15:21.735325</stime>
<stotime>2011.190 02:15:21.827190</stotime>
<staseq>C80A9CE6EF89DD85</staseq>
<stoseq>C80A9CE705F76C0C</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10191521</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>TRAN </kwd>
<input>QRY TRAN NAME(PART*) SHOW(DEFN) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="TRAN" l1bl="Trancode" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="5" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1bl="REPO" l1bl="Repo" scope="LCL" sort="d" key="2" scroll="no"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="IMSID" l1bl="IMSid" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="RPSB" l1bl="PSBname" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="PSB" l1bl="LPSBname" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="STT" l1bl="Status" scope="GBL" sort="d" key="3" scroll="yes"
  len="*" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RCLS" l1bl="Cls" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="3" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LCLS" l1bl="LCls" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="3" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="RLCT" l1bl="LCT" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LLCT" l1bl="LLCT" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="RPLCT" l1bl="PLCT" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LPLCT" l1bl="LPLCT" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="RPLCTT" l1bl="PLCTTime" scope="GBL" sort="n" key="0"

```



```

scroll="yes" len="7" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="PLCTT" l1bl="LPLCTTime" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="7" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LCP" l1bl="LCPRI" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="2" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="RNP" l1bl="NPRI" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="2" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LNP" l1bl="LNPRI" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="2" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="RLP" l1bl="LPRI" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="2" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LLP" l1bl="LLPRI" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="2" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="RSSZ" l1bl="SegSz" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LSSZ" l1bl="LSegSz" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="RSNO" l1bl="SegNo" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LSNO" l1bl="LSegNo" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="RPLM" l1bl="ParLim" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LPLM" l1bl="LParLim" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="RGC" l1bl="LRegCnt" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="RMRG" l1bl="MaxRgn" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LMRG" l1bl="LMaxRgn" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="REDTR" l1bl="EditRtn" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="EDTR" l1bl="LEditRtn" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RFP" l1bl="FP" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="FP" l1bl="LFP" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="REMHBS" l1bl="EMHBSz" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="EMHBS" l1bl="LEMHBSz" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="RCMTM" l1bl="CmtMode" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="CMTM" l1bl="LCmtMode" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RMSGT" l1bl="MsgType" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="7" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="MSGT" l1bl="LMsgType" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="7" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RSPATR" l1bl="SPATrunc" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="right" />
<hdr s1bl="SPATR" l1bl="LSPATrunc" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="right" />
<hdr s1bl="RSPASZ" l1bl="SPASz" scope="GBL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="SPASZ" l1bl="LSPASz" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="RSIDR" l1bl="SIDR" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="SIDR" l1bl="LSIDR" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="RSIDL" l1bl="SIDL" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="SIDL" l1bl="LSIDL" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" />

```

```

<hdr s1bl="RDCLW" l1bl="DCLWA" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="DCLW" l1bl="LDCLWA" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RDRRT" l1bl="DirRoute" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="DRRT" l1bl="LDirRoute" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="REDTT" l1bl="EditUC" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="EDTT" l1bl="LEditUC" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RINQ" l1bl="Inq" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="INQ" l1bl="LInq" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RRCV" l1bl="Recover" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RCV" l1bl="LRecover" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RRSP" l1bl="Resp" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RSP" l1bl="LResp" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RRMT" l1bl="Remote" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RMT" l1bl="LRemote" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RSER" l1bl="Serial" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="SER" l1bl="LSerial" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RWF1" l1bl="WFI" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="WFI" l1bl="LWFI" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RAOCMD" l1bl="AOCMD" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="AOCMD" l1bl="LAOCMD" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RCONV" l1bl="Conv" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="CONV" l1bl="LConv" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RTLS" l1bl="TranStat" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TLS" l1bl="LTranStat" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="MSN" l1bl="LMSName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RTMCR" l1bl="TimeCreate" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMCR" l1bl="LTimeCreate" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RTMUP" l1bl="TimeUpdate" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMUP" l1bl="LTimeUpdate" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMAC" l1bl="LTimeAccess" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="TMIM" l1bl="LTimeImport" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="REXPRT" l1bl="ExprTm" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="EXPRT" l1bl="LEXPRT" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
</cmdrsphdr>

```

```

<cmdrspdata>
<rsp>TRAN(PARTROOT) MBR(IMS1 ) CC( 0) PSB(TPARTAPP) LCLS( 1)
LLCT( 2) LPLCT(65535) LCP( 7) LNP( 7) LLP(10) LSSZ( 0) LSNO(
0) LPLM(65535) RGC( 0) LMRG( 0) AOCMD(N) CMTM(SNGL) CONV(N)
DCLW(Y) DRRT(N) EDTT(Y) EMHBS( 0) EXPRT( 0) FP(N) IMSID(IMS1
) INQ(N) MSGT(MULTSEG) PLCTT(6553500) RCV(Y) RMT(N) RSP(N) SER(N)
SIDL( 10) SIDR( 10) SPASZ( 0) TMCR(2011.189 19:03:17.76) TLS(N)
WFI(N) </rsp>
<rsp>TRAN(PART ) MBR(IMS1 ) CC( 0) PSB(DFSSAM02) LCLS( 4)
LLCT( 2) LPLCT(65535) LCP( 7) LNP( 7) LLP(10) LSSZ( 0) LSNO(
0) LPLM(65535) RGC( 0) LMRG( 0) AOCMD(N) CMTM(MULT) CONV(N)
DCLW(Y) DRRT(N) EDTT(Y) EMHBS( 0) EXPRT( 100) FP(N) IMSID(IMS1
) INQ(Y) MSGT(MULTSEG) PLCTT(6553500) RCV(Y) RMT(N) RSP(N) SER(N)
SIDL( 10) SIDR( 10) SPASZ( 0) TMAC(2011.189 19:04:19.92)
TMUP(2011.189 19:04:25.07) TMCR(2011.189 19:03:17.76) TLS(N) WFI(N)
</rsp>
<rsp>TRAN(PART ) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RAOCMD(N ) RCLS(
4) RCONV(N) RCMTM(MULT) RDCLW(Y) RDRRT(N) REDTT(Y) REMHBS( 0)
REXPRT( 100) RFP(N) RINQ(Y) RLCT( 2) RLP(10) RMRG( 0)
RMSGT(MULTSEG) RNP( 7) RPLM(65535) RPLCT(65535) RPLCTT(6553500)
RPSB(DFSSAM02) RRCV(Y) RRMT(N) RRSP(N) RSNO( 0) RSSZ( 0) RSER(N)
RSIDL( 0) RSIDR( 0) RSPASZ( 0) RTMCR(2011.189 19:03:17.76)
RTLS(N) RWFI(N) </rsp>
<rsp>TRAN(PARTROOT) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RAOCMD(N ) RCLS(
1) RCONV(N) RCMTM(SNGL) RDCLW(Y) RDRRT(N) REDTT(Y) REMHBS( 0)
REXPRT( 0) RFP(N) RINQ(N) RLCT( 2) RLP(10) RMRG( 0)
RMSGT(MULTSEG) RNP( 7) RPLM(65535) RPLCT(65535) RPLCTT(6553500)
RPSB(TPARTAPP) RRCV(Y) RRMT(N) RRSP(N) RSNO( 0) RSSZ( 0) RSER(N)
RSIDL( 0) RSIDR( 0) RSPASZ( 0) RTMCR(2011.189 19:03:17.76)
RTLS(N) RWFI(N) </rsp>
<rsp>TRAN(PART ) MBR(IMS2 ) CC( 0) PSB(DFSSAM02) LCLS( 99)
LLCT( 2) LPLCT(65535) LCP( 7) LNP( 7) LLP(10) LSSZ( 0) LSNO(
0) LPLM(65535) RGC( 0) LMRG( 0) AOCMD(N) CMTM(MULT) CONV(N)
DCLW(Y) DRRT(N) EDTT(Y) EMHBS( 0) EXPRT( 100) FP(N) IMSID(IMS2
) INQ(Y) MSGT(MULTSEG) PLCTT(6553500) RCV(Y) RMT(N) RSP(N) SER(N)
SIDL( 10) SIDR( 10) SPASZ( 0) TMAC(2011.189 19:04:19.92)
TMUP(2011.189 19:11:47.65) TMCR(2011.189 19:01:55.17) TLS(N) WFI(N)
</rsp>
<rsp>TRAN(PARTROOT) MBR(IMS2 ) CC( 0) PSB(TPARTAPP) LCLS( 1)
LLCT( 2) LPLCT(65535) LCP( 7) LNP( 7) LLP(10) LSSZ( 0) LSNO(
0) LPLM(65535) RGC( 0) LMRG( 0) AOCMD(N) CMTM(SNGL) CONV(N)
DCLW(Y) DRRT(N) EDTT(Y) EMHBS( 0) EXPRT( 0) FP(N) IMSID(IMS2
) INQ(N) MSGT(MULTSEG) PLCTT(6553500) RCV(Y) RMT(N) RSP(N) SER(N)
SIDL( 10) SIDR( 10) SPASZ( 0) TMCR(2011.189 19:01:55.17) TLS(N)
WFI(N) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: ワイルドカード名に一致するリソースごとに 1 行が返されています。定義されたリソースを持つ各 IMS からのリソース定義と、グローバル・リポジトリ定義が返されています。リポジトリ情報は、コマンド・マスター IMS によって返されています。リポジトリ内には、ワイルドカード名に一致する各リソース名ごとの IMS 固有のセクションはありません。

QUERY TRAN コマンドの例 7

TSO SPOC 入力:

```
QUERY TRAN NAME(*) SHOW(EXPORTNEEDED)
```


TSO SPOC 出力:

```
Trancode MbrName      CC ExportNeeded
TRN00002 IMS1         0 Y
```

OM API 入力:

CMD(QUERY TRAN SHOW(EXPORTNEEDED))

関連概念:


 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 /DISPLAY MODIFY コマンド (コマンド)

 /DISPLAY STATUS コマンド (コマンド)

 /DISPLAY TRAN コマンド (コマンド)

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

QUERY TRANDESC コマンド

QUERY TRANDESC コマンドは、トランザクション記述子に関する情報を照会するために使用します。

記述子は、記述子またはリソースの作成に使用できるモデルです。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 721 ページの『キーワード』
- 729 ページの『使用上の注意』
- 730 ページの『出力フィールド』
- 738 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 740 ページの『例』

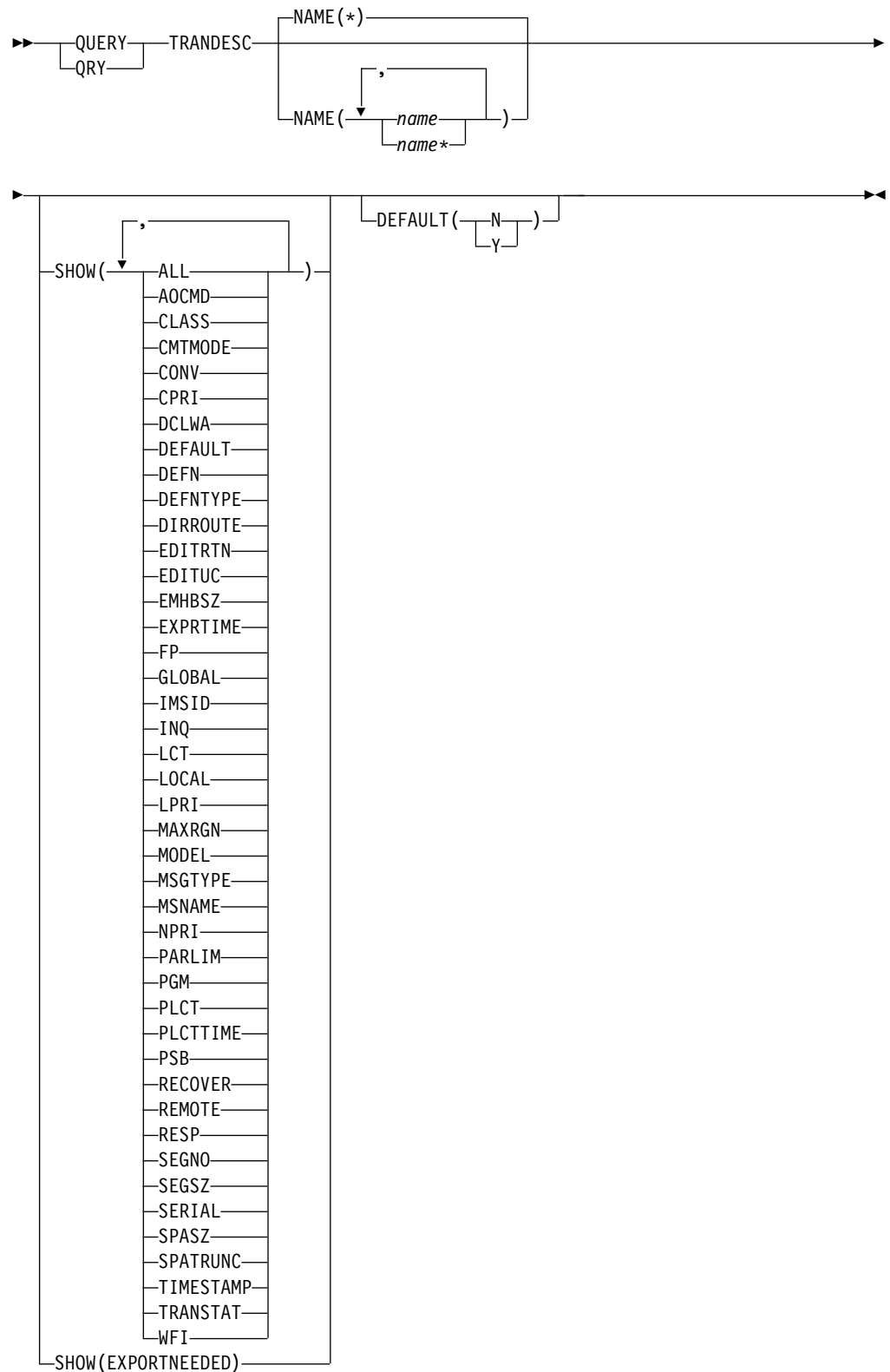
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 209. QUERY TRANDESC コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUERY TRANDESC	X		X
NAME	X		X
SHOW	X		X
DEFAULT	X		X

構文



キーワード

The following keywords are valid for the `QUERY TRANDESC` command:

DEFAULT

指定されたデフォルト値を持つトランザクション記述子を表示用を選択します。DEFAULT(Y) は、デフォルト記述子のみを表示します。DEFAULT(N) は、デフォルト以外のすべての記述子を表示します。

NAME

トランザクション記述子の名前 (1 から 8 文字) を指定します。名前にはワイルドカードを指定することができます。名前は反復可能なパラメーターです。デフォルトは NAME(*) で、これはすべてのトランザクション記述子に戻します。

SHOW

戻されるトランザクション記述子出力フィールドを指定します。トランザクション記述子名は、出力を作成した IMS の名前および完了コードとともに、常に戻されます。SHOW キーワードでサポートされるフィルターには以下のものがあります。

ALL

トランザクション記述子自体に関するすべての情報を戻します。

制約事項: SHOW(EXPORTNEEDED) を指定した場合に戻される ExportNeeded 列は、SHOW(ALL) では戻されません。

AOCMD

AOI オプションを戻すことを指定します。これは、トランザクションがタイプ 1 AOI CMD呼び出しまたはタイプ 2 AOI ICMD 呼び出しを発行できるかどうかを示します。AOCMD が CMD、TRAN、または Y として定義され、AOI1 実行パラメーターが AOI1=N として定義されている場合、許可検査は行われず、トランザクションには CMD 呼び出しおよび ICMD 呼び出しの発行が許可されます。

CLASS

スケジューリングするトランザクションを選択するために使用されるスケジューリング・クラス。そのクラス用に使用可能なメッセージ処理領域があれば、トランザクションをスケジューリングできます。

CMTMODE

データベースの更新および非急送出力メッセージがコミットされる時期を指定します。このオペランドは緊急時再始動に影響を与えます。

CONV

会話オプションは、トランザクションが会話型であるかどうかを示します。

CPRI

現行の優先順位。トランザクション・キュー・カウントが限界カウントより小さいときは、現行の優先順位は通常優先順位です。トランザクション・キュー・カウントが限界カウントに等しいか、それを超えると、現行の優先順位は限界優先順位に引き上げられます。トランザクション記述子の現行の優先順位は常に 0 です。現行の優先順位は実行時のスケジューリング値で、スケジューリングされることのないトランザクション記述子には適用されないためです。

DCLWA

ログ先書きオプション。

DEFAULT

デフォルト記述子オプション。

N 記述子はデフォルトではありません。

Y 記述子はデフォルトです。LIKE キーワードなしで記述子またはリソースが作成されるとき、CREATE コマンドで指定されない属性は、デフォルト記述子に定義されている値を取ります。リソース・タイプのデフォルトとして、記述子 1 つだけが定義できます。IMS は、DFSDSTR1 と呼ばれるデフォルト・トランザクション記述子を定義しています。ここでは、すべての属性がデフォルト値で定義されています。ユーザー定義記述子をデフォルトに定義すると、現在のデフォルト記述子がオーバーライドされます。

DEFN

リソース定義を戻すように指定します。

戻されるトランザクション記述子属性には、AOCMD、CLASS、CMTMODE、CONV、DCLWA、DEFAULT、DIRROUTE、EDITUC、EDITRTN、EMHBSZ、EXPRTIME、FP、INQ、LCT、LPRI、MAXRGN、MSGTYPE、NPRI、PLCT、PLCTTIME、PARLIM、PGM、RECOVER、REMOTE、RESP、SERIAL、SIDR、SIDL、SEGNO、SEGSZ、SPASZ、SPATRUNC、TRANSTAT、WFI、リポジトリの作成および更新のタイム・スタンプ、IMS ランタイムの作成、更新、インポート、アクセスのタイム・スタンプ、および IMS ランタイム MSNAME があります。

SHOW(DEFN) でその他の SHOW フィルターが指定されない場合、または IMSID フィルターが指定されている場合、リポジトリでグローバルに定義された定義属性および IMS システム内でローカルに定義された定義属性を含む、すべての定義属性が戻されます。IMS システムのランタイム・リソース定義は、コマンドを受信する各 IMS によって戻されます。IMSRSC リポジトリ内の保管済みリソース定義は、コマンド・マスター IMS がそのリポジトリを使用できる場合、コマンド・マスター IMS によって戻されます。

コマンド・マスター IMS は、リポジトリから取得した汎用保管済みリソース定義ごとに応答行を戻します。それぞれの応答行には、汎用リソース定義の属性が表示されます。SHOW(DEFN) を IMSID フィルターなしで指定し、すべての IMS システムに定義されている属性値が同一の場合、汎用定義の応答行のみが戻されます。保管済みリソース定義が定義されている IMS システムの IMS ID は戻されません。IMS システムの保管済みリソース定義に、汎用保管済みリソース定義と異なる属性値が 1 つ以上含まれている場合は、属性値が異なる IMS ごとに追加の応答行が戻されます。

SHOW(DEFN,LOCAL) が指定されている場合、コマンドを受信した各 IMS により、IMS システムのランタイム・リソース定義が戻されます。

SHOW(DEFN,GLOBAL) が指定されている場合、コマンド・マスター IMS により、リポジトリの保管済みリソース定義が戻されます。

SHOW(DEFN,GLOBAL) は、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合のみ有効です。

SHOW(DEFN) にその他のパラメーターが指定されている場合、要求された定義属性のみが戻されます。例えば SHOW(DEFN,TIMESTAMP) が指定されている場合、タイム・スタンプのみが戻されます。

制約事項:

- SHOW(DEFN) は、DEFNTYPE および MODEL と一緒に指定することはできません。
- QRY TRANDESC SHOW(ALL) コマンドで戻される LModelName 列、LModelType 列、および LDefnType 列は、SHOW(DEFN) では戻されません。
- SHOW(DEFN) を指定した場合に戻される Repo 列および IMSid 列は、SHOW(ALL) では戻されません。

SHOW(DEFN,IMSID) を指定すると、IMS の保管済みリソース定義が汎用リソース定義と同一であるかどうかにかかわらず、汎用保管済みリソース定義に対して応答行が返され、リポジトリにリソースが定義されている IMS ごとに追加の応答行が返されます。

リポジトリからのトランザクション記述子情報を照会する場合、リポジトリに保管されたリソース定義を使用してリポジトリ情報を持つ応答行を判別し、ランタイム・リソース定義を使用して IMS ランタイム・リソース情報を持つ応答行を判別します。指定されたフィルターと一致する保管済みリソース定義またはランタイム・リソース定義のそれぞれに、応答行が戻されます。SHOW(DEFN,GLOBAL) が指定されている場合、指定されたフィルターと一致する保管済みリソース定義のみが戻されます。

SHOW(DEFN,LOCAL) が指定されている場合、指定されたフィルターと一致するランタイム・リソース定義のみが戻されます。

DEFNTYPE

定義タイプ。これは、記述子またはリソースが定義された方法です。

DIRROUTE

MSC 直接経路指定オプション。

EDITRTN

プログラムがメッセージを受信する前にメッセージを編集する入力編集ルーチン。

EDITUC

入力データの大文字変換。

EMHBSZ

高速機能トランザクションを実行するために必要な EMH バッファ・サイズ。

EXPORTNEEDED

NAME パラメーターに一致し、作成されたか最後に更新されて以降 IMSRSC リポジトリにエクスポートされたことがないトランザクション記述子リソースだけを QUERY コマンドで戻すよう指定します。

NAME キーワードが省略されたか NAME(*) が指定された場合、リポジトリにエクスポートする必要があるトランザクション記述子の名前だけが戻されます。

NAME キーワードで特定の名前が指定されたか NAME(*) 以外の総称名が指定された場合、コマンドで指定されたトランザクション記述子名ごとに 1 行ずつ、応答行が戻されます。指定されたトランザクション記述子をリポジトリにエクスポートする必要がない場合は、ExportNeeded 列に N が戻されます。

SHOW(EXPORTNEEDED) は、他のいかなる SHOW パラメーターや他のキーワードとも一緒に指定することはできず、IMS で IMSRSC リポジトリが使用可能になっている場合にのみ有効です。

QUERY TRANDESC SHOW(EXPORTNEEDED) コマンドは、XRF 代替システムでは無効です。

ヒント: IMSRSC リポジトリにエクスポートされたことがないリソースおよび記述子の場合、EXPORT DEFN TARGET(REPO) OPTION (CHANGESONLY) コマンドを発行して、リソース定義および記述子定義をリポジトリに書き込み、次の IMS のコールド・スタートで使用できるようにすることができます。

EXPRTIME

トランザクション有効期限を秒単位で示します。

FP 高速機能オプション。

GLOBAL

リポジトリの保管済みリソース定義を戻すように指定します。

SHOW(GLOBAL,DEFN) が指定される場合、コマンド・マスター IMS により、リポジトリのグローバル・リソース定義が戻されます。

SHOW(GLOBAL,DEFN) は、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合のみ有効です。

IMSID

指定された名前をリソース・リストに含む IMS システムの IMS ID を戻すように指定します。SHOW(IMSID) は、コマンド・マスター IMS によってのみ処理され、コマンド・マスター IMS がリポジトリを使用できる場合にのみ有効です。

SHOW(IMSID) が DEFN フィルターとともに指定されている場合、保管済みリソース定義に加えて、定義済みのリソースが存在する各 IMS に、別個の行が戻されます。

SHOW(IMSID) が DEFN フィルターなしで指定されている場合、リソース名とともに定義済みのリソースが存在する各 IMS に別個の行が戻されません。リソース定義は戻されません。

SHOW(IMSID) は、DEFN および GLOBAL 以外の SHOW フィルターとともに指定することはできません。SHOW(IMSID,GLOBAL) が指定されている場合、GLOBAL は無視されます。つまり、SHOW(IMSID,GLOBAL) は SHOW(IMSID) として扱われます。SHOW(DEFN,IMSID,LOCAL) は SHOW(DEFN,LOCAL) として扱われます。

INQ

照会オプション。

LCT

限界カウント。キューに入れられて処理を待っている入力トランザクションの数と比較する際に、通常優先順位値または限界優先順位値がこのトランザクションに割り当てられるかどうかを決める数値を指定します。限界カウント値は、1 から 65 535 の範囲です。

BMP によって処理されるトランザクションの場合、限界カウント値は無視されます。

共用キュー環境では、限界カウント値は無視されます。

LOCAL

IMS システムのランタイム・リソース定義を戻すように指定します。

SHOW(DEFN,LOCAL) は、コマンドを処理する IMS システムからローカルの定義属性のみを戻します。

LPRI

限界優先順位。キューに入れられて処理を待っている入力トランザクションの数が、限界カウント値に等しいかより大きくなった場合に、このトランザクションが引き上げられるスケジューリング優先順位。スケジューリング優先順位は、スケジューリングするトランザクションの選択に使用される属性です。同じクラスで定義されている場合、優先順位の高いトランザクションが優先順位の低いものよりも先にスケジュールされます。

BMP によって処理されるトランザクションの場合、限界優先順位値は無視されます。

MAXRGN

最大領域カウント。これは、トランザクションを処理するために同時にスケジュールできるメッセージ処理プログラム (MPP) 領域の数を制限します。MPP 領域の数が制限されていない場合、1 つのトランザクションがすべての使用可能な領域を独占する可能性があります。MAXRGN(0) は、制限がないことを意味します。

MODEL

このリソースまたは記述子を作成するために使用されたモデル名とモデル・タイプ。記述子またはリソースが、1 つ以上の定義済み属性を使用して作成され、モデルが指定されていない場合、モデル名とモデル・タイプはデフォルト記述子です。IMS 定義のトランザクション記述子 DFSDSTR1 の場合、モデル名とモデル・タイプはブランクです。LIKE キーワードなしで指定された CREATE コマンドは、デフォルト記述子をモデルとして使用して記述子またはリソースを作成します。デフォルト記述子は、IMS 記述子 DFSDSTR1 またはユーザー定義のいずれかです。LIKE キーワードが指定された CREATE コマンドは、モデルを使用して記述子またはリソースを作成します。記述子またはリソースは、すべてモデルと同じ属性を使用して作成されます。属性は、モデル属性をオーバーライドする CREATE コマンドにより明示的に設定されます。モデル・タイプは、記述子 (DESC) またはリソース (RSC) のいずれかです。モデル名およびモデル・タイプは参照用のみです。属性が CREATE または UPDATE コマンドの値によってオーバーライドされた場合、あるいはモデルが後で更新された場合、記述子またはリソースの属性はモデルと一致しないことがあります。モデル名とモデル・タイプを使用すると、同じモデルを使って作成されたりリソースを識別できま

す。リソースのモデル名およびモデル・タイプはエクスポートおよびインポートされます。IMPORT コマンドは、リソースを作成する際にモデル名とモデル・タイプを使用しません。

MSGTYPE

メッセージ・セグメント・タイプ (単一セグメントまたは複数セグメント)。これは、着信メッセージが完了と見なされ、後続の処理のためにアプリケーション・プログラムに経路指定できるようになる時点を指定します。

複数 IMS システム構成で MSC 直接経路指定が使用される場合、IMS は、メッセージとそのメッセージを処理する宛先トランザクションの両方が、ともに単一セグメントまたは複数セグメントのどちらかであることを確認しません。

MSNAME

論理リンク・パス名、リモート・システム ID、およびローカル・システム ID が戻されます。

複数 IMS システム構成 (MSC) 内の論理リンク・パス名。論理リンク・パスは、任意の 2 つの IMS システム間のパスです。IMS システムは、論理リンク・パスに関連付けられたリモート・システム ID とローカル・システム ID によって識別されます。リモート・システム ID は、このパスを使用しているメッセージが処理されるシステムを識別します。ローカル・システム ID は、このシステムを識別します。

リモート・システム ID (SIDR) は、アプリケーション・プログラムが実行される IMS システムを示します。値 0 は、このシステムでは MSC が使用不可であることを示します。ローカル・システム ID およびリモート・システム ID はローカル・トランザクションでは同じです。

ローカル・システム ID (SIDL) は、応答の返送先の発信元システムを示します。値 0 は、このシステムでは MSC が使用不可であることを示します。ローカル・システム ID およびリモート・システム ID はローカル・トランザクションでは同じです。

NPRI

通常スケジューリング優先順位。スケジューリング優先順位は、スケジューリングするトランザクションの選択に使用される属性です。同じクラスで定義されている場合、優先順位の高いトランザクションが優先順位の低いものよりも先にスケジュールされます。通常優先順位は、エンキューされて処理を待っている入力トランザクションの数が限界カウン트의値を下回る場合に、スケジューリング優先順位としてトランザクションに割り当てられません。

BMP によって処理されるトランザクションの場合、通常優先順位値は無視されます。

PARLIM

並列処理限界カウンツ。これは、このトランザクションに関して現在スケジュールされているそれぞれのアクティブ・メッセージ領域によって、現在キューに入れることができるがまだ処理されていないメッセージの最大数です。これは、関連のプログラムのスケジューリング・タイプが並列として定

義されている場合に使用されるしきい値です。現行のトランザクション・エンキュー・カウントが、このトランザクションに現在スケジュールされている領域数を PARLIM 値に掛けた値を超えるたびに、追加の領域がスケジュールされます。

PARLIM(0) は、入力メッセージごとに新しい領域がスケジュールされることを示します。PARLIM(65535) は、並列処理は使用不可であり、IMS は一度に 1 つの領域にのみトランザクションをスケジュールすることを許可します。

PGM

このトランザクションに関連付けられたプログラムの名前。この名前は、ACBLIB 内の PSB 名と一致します。

PLCT

処理限界カウント。これは、アプリケーション・プログラムを再ロードせずに、IMS が処理のためにアプリケーション・プログラムに送信するメッセージの最大数です。

- PLCT(0) は、1 回のプログラム・ロードで最大 1 つのメッセージがアプリケーション・プログラムに送信されることを意味します。
- PLCT(65535) は、1 回のプログラム・ロードで処理されるメッセージの数に制限がないことを意味します。

PLCTTIME

処理限界カウント時間。これは、単一のトランザクション (または、メッセージ) を処理するために許容される時間の長さ (100 分の 1 秒単位) です。この数値は、メッセージ処理領域で各メッセージの処理に許容される最大 CPU 時間を指定します。

PLCTTIME(6553500) は、アプリケーション・プログラムには制限時間がないことを意味します。

PSB

このトランザクションに関連付けられたプログラムの名前。この名前は、ACBLIB 内の PSB 名と一致します。

RECOVER

リカバリー・オプション。

REMOTE

リモート・オプション。

RESP

応答モード・オプション。

SEGNO

セグメント数。これは、アプリケーション・プログラムからの Get Unique (GU) 呼び出し当たりの、メッセージ・キューに入れることができるアプリケーション・プログラム出力セグメントの最大数です。

SEGNO(0) は、実行時にオンライン・システムによってセグメント数は検査されないことを意味します。

SEGSZ

セグメント・サイズ。これは、1 つの出力セグメントに許されるバイトの最大数です。

SEGSZ(0) は、実行時にオンライン・システムによってセグメント・サイズは検査されないことを意味します。

SERIAL

シリアル・オプション。

SPASZ

会話型トランザクションのスクラッチパッド域サイズ。

SPATRUNC

SPA データ切り捨てオプションは、より小さい SPA で定義されたトランザクションへのプログラム間通信の後、SPA データを切り捨てるか、保存するかを示します。

会話の最初の開始時、およびプログラム間通信が発生した時に、SPATRUNC オプションが検査され、指定に応じて設定またはリセットされます。オプションが設定されると、それは会話の存続期間の間、またはそのオプションをリセットする必要があることを指定したトランザクションへのプログラム間通信が発生するまで、設定されたままです。

プログラム間通信が発生した場合、新しいトランザクションの切り捨てデータ・オプションが最初に検査され、その仕様が会話に対して設定されて、出力メッセージに挿入される SPA に使用されます。新しいトランザクションでこのオプションが指定されていない場合、会話に対して現在有効なオプションが使用されます。

TIMESTAMP

作成時間 (TIMECREATE)、最終更新時間 (TIMEUPDATE)、最終アクセス時間 (TIMEACCESS)、および最終インポート時間 (TIMEIMPORT) のタイム・スタンプが戻されます。時刻は現地時間で、YYYY.JJJ HH:MM:SS.TH の形式で戻されます。ここで、

- YYYY は年です。
- JJJ はユリウス日 (001 から 365) です。
- HH は時 (01 から 24) です。
- MM は分 (00 から 59) です。
- SS は秒 (00 から 59) です。
- TH は 10 分の 1 秒および 100 分の 1 秒 (00 から 99) です。

TRANSTAT

トランザクション・レベル統計オプション。

WFI

入力待ちオプション。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager API を介してのみ出すことができます。このコマンドは DB/DC および DCCTL システムに適用されます。

このコマンドは、XRF 代替システムで使用できます。

MODBLKS のオンライン変更が使用可能な場合 (DFSDFxxx または DFSCGxxx が MODBLKS=OLC で定義されているか、MODBLKS が定義されていない場合)、QUERY TRANDESC コマンドは無効です。

リソース定義に関する情報を表示するには、SHOW(DEFN) を指定します。リソースが定義されている IMS システムを判別し、また各 IMS システムの属性またはリソース定義を知るには、SHOW(DEFN,IMSID) を指定します。リソースが定義されている IMS システムを判別するには、SHOW(IMSID) を指定します。

出力フィールド

以下の表には、QUERY TRANDESC 出力フィールドが記載されています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

有効範囲

出力フィールドの有効範囲を識別します。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 210. QUERY TRANDESC コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
AOCMD	LAOCMD	AOCMD	LCL	トランザクションがタイプ 1 AOI CMD 呼び出しまたはタイプ 2 AOI ICMD 呼び出しを発行できるかどうかを示します。出力値は、ローカル IMS から取得されます。
				<p>CMD トランザクションによるタイプ 1 AOI CMD 呼び出しおよびタイプ 2 AOI ICMD 呼び出しの発行が許可されることを示します。AOI1 実行パラメーターが C、R、または A として定義されている場合、許可検査は、どのトランザクションが特定のコマンドを発行できるかに基づいて行われます。この場合、コマンド (または、コマンドの最初の 3 文字) が RACF または同等製品に対してユーザーとして定義されていることが必要です。タイプ 1 AOI トランザクションは TIMS クラスのもとにプロファイルとして定義され、トランザクションごとに、それが発行できるコマンドが指定されていなければなりません。</p> <p>N トランザクションによるタイプ 1 AOI CMD 呼び出しの発行が許可されないことを示します。トランザクションにはタイプ 2 AOI ICMD 呼び出しの発行が許可されます。</p> <p>TRAN トランザクションによるタイプ 1 AOI CMD 呼び出しおよびタイプ 2 AOI ICMD 呼び出しの発行が許可されることを示します。AOI1 実行パラメーターが C、R、または A として定義されている場合、トランザクション・コードが許可に使用されます。最初の許可検査の結果として、アクセス機能環境エレメント (ACEE) が作成されます。この環境は、将来の許可検査で使用するために保持されます。タイプ 1 AOI トランザクションは、RACF または同等製品に対してユーザーとして定義されていることが必要です。これにより、タイプ 1 AOI トランザクションからの発行が許可されるコマンドごとに、トランザクションが RACF PERMIT ステートメントで指定されるようになります。AOI トランザクションを RACF に対してユーザーとして指定する際に、RACF に既に定義されているユーザーの名前と競合することがあります。この競合が起きた場合は、トランザクション名または既存のユーザー名のどちらかを変更する必要があります。</p> <p>Y トランザクションによるタイプ 1 AOI CMD 呼び出しおよびタイプ 2 AOI ICMD 呼び出しの発行が許可されることを示します。AOI1 実行パラメーターが C、R、または A として定義されている場合、ユーザー ID またはプログラム名が許可に使用されます。一部の環境では、Get Unique 呼び出しがまだ行われていない場合、プログラム名が許可に使用されます。</p>
CCTXT	CCText	error	LCL	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。

表 210. QUERY TRANDESC コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
CMTM	LCmtMode	CMTMODE	LCL	<p>トランザクションのコミット・モード。単一メッセージ (SINGL) または複数メッセージ (MULT) 後にコミット。出力値は、ローカル IMS から取得されます。</p> <p>MULT データベースの更新および非急送出力メッセージは、アプリケーション・プログラムが正常に終了した時点、処理限界カウントに達した時点、あるいは、疑似 WFI 従属領域の場合は、キューにそれ以上メッセージがなくなった時点でのみ、コミットされます。例えば、プログラムの単一のスケジュールで 5 つのトランザクションが処理される場合、5 番目のトランザクションが完了し、プログラムが終了した時点でのみ、5 つすべてがコミットされます。トランザクションのコミットが完了するまでは、更新されたデータベース・レコードのロックは解放されず、非急送出力メッセージは出力用のキューに入れられません。メッセージをコミットする前にアプリケーションが異常終了した場合、緊急時再始動は、そのコミット・スコープ内で処理されたすべてのメッセージを再キューイングし、それらを再処理のために使用できるようにします。</p> <p>SINGL データベースの更新および非急送出力メッセージは、アプリケーション・プログラムがそれぞれのトランザクションの処理を完了した時点でコミットされます。IMS は、アプリケーション・プログラムが次のメッセージを要求した (入出力 PCB に GU を発行した) 時点、またはアプリケーション・プログラムが終了した時点のいずれかで、コミット処理を呼び出します。メッセージをコミットする前にアプリケーションが異常終了した場合、緊急時再始動は、異常終了の前に処理中であったメッセージを再キューイングし、それを再処理のために使用できるようにします。</p>
CONV	LConv	CONV	LCL	<p>会話オプション。トランザクションは会話型であるか (Y) ないか (N)。出力値は、ローカル IMS から取得されます。</p> <p>N トランザクションは会話型ではありません。</p> <p>Y トランザクションは会話型です。トランザクション・メッセージは、会話型プログラム宛に送られます。会話型プログラムは、複数のステップで構成されるトランザクションを処理します。会話型プログラムは、端末からメッセージを受け取り、端末に回答しますが、トランザクションからのデータをスクラッチパッド域 (SPA) に保管します。端末の担当者が追加データを入力するとき、プログラムは前回のメッセージから保管したデータを SPA 内に持っているため、端末の担当者がそのデータを再度入力しなくても要求の処理を続行することができます。</p>
DCLW	LDCLWA	DCLWA	LCL	<p>リカバリー可能な、非応答モードの入力メッセージおよびトランザクションの出力メッセージに対して、ログ先書きを実行するか (Y) しないか (N)。出力値は、ローカル IMS から取得されます。</p> <p>N IMS はログ先書きを実行しません。</p> <p>Y IMS は、リカバリー可能な、非応答入力メッセージおよびトランザクションの出力メッセージに対して、ログ先書きを実行します。トランザクションに定義されていない場合、デフォルトは IMSCTRL マクロ内の DCLWA パラメーターになります。これにより、IMS の障害後、IMS が入力を受信を確認する前に、非応答入力トランザクションがリカバリー可能になることが確実にになります。</p> <p>IMS が関連の出力応答メッセージを送信する前に、データベースの変更がリカバリー可能になります。</p> <p>これにより、関連の入力確認応答または出力応答が端末に送信される前に、ログ・バッファ内情報が IMS ログに書き込まれることが確実にになります。</p>
DESC	DescName	TRANDESC	LCL	トランザクション記述子名。
DFNT	LDefnType	DEFNTYPE	LCL	定義タイプ (CREATE、IMPORT、UPDATE)。
DFLT	LDflt	TRANDESC	LCL	デフォルト記述子であるか (Y) ないか (N)。

表 210. QUERY TRANDESC コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
DRRT	LDirRoute	DIRROUTE	LCL	<p>MSC 直接経路指定をサポートするか (Y) しないか (N)。出力値は、ローカル IMS から取得されます。</p> <p>N トランザクションを処理しているアプリケーション・プログラムには、トランザクションを発信したシステムが通知されません。発信元の LTERM の名前が、入出力 PCB に入れます。</p> <p>Y 複数 IMS システム構成で MSC 直接経路指定が使用されている場合、トランザクションを処理しているアプリケーション・プログラムに、トランザクションを発信したシステムが通知されます。発信元システムに戻る論理パスに対応した MSNAME が、入出力 PCB に入れます。</p>
EDTR	LEditRtn	EDITRTN	LCL	入力編集ルーチン名。
EDTT	LEditUC	EDITUC	LCL	<p>入力データを大文字に変換するか (Y) しないか (N)。出力値は、ローカル IMS から取得されます。</p> <p>N 入力データは大文字に変換されません。端末から入力されたとおりに、大文字および小文字で構成することができます。</p> <p>Y 入力データは、処理プログラムに提供される前に大文字に変換されます。FP(Y) の場合、トランザクションは編集/経路指定出口ルーチンに提供される前に大文字に変換されます。</p> <p>VTAM 端末に対して EDITUC(Y) を指定すると、組み込み装置制御文字が伝送されなくなります。</p>
EMHBS	LEMHBSz	EMHBSZ	LCL	EMH バッファ・サイズ。出力値は、ローカル IMS から取得されます。
EXPN	ExportNeeded	EXPORTNEEDED	LCL	トランザクション記述子が IMSRSC リポジトリにエクスポートされたかどうかを示します。値は Y または N のどちらかです。
EXPRT	LExprTm	EXPRTIME	LCL	トランザクション有効期限。出力値は、ローカル IMS から取得されます。
FP	LFP	FP	LCL	<p>高速機能利用可能な候補 (P)、高速機能専用 (E)、または FP オプションは使用不可 (N)。 出力値は、ローカル IMS から取得されます。</p> <p>E 高速機能専用トランザクション。このトランザクションのメッセージは、常に高速機能アプリケーション・プログラムに経路指定されます。</p> <p>N 高速機能オプションは使用不可です。FP(N) が指定されている場合、高速機能のリソースまたはコマンドを使用しようとすると、予測不能な結果を招きます。</p> <p>P 高速機能利用可能トランザクション。このトランザクションのメッセージは、高速機能アプリケーション・プログラムに経路指定される可能性があります。</p>
IMSID	IMSid	IMSID	GBL	定義されたリソースを持つ IMSID。出力値はリポジトリから取得されます。
INQ	LInq	INQ	LCL	<p>照会トランザクションであるか (Y) ないか (N)。出力値は、ローカル IMS から取得されます。</p> <p>N 照会オプションは使用不可です。</p> <p>Y 照会オプションは使用可能です。これは、入力された場合、いかなるデータベースも変更しない照会トランザクションです。プログラムは、INQ(Y) として定義されたトランザクションの処理がスケジュールされた場合、データベースに対して ISRT、DLET、または REPL 呼び出しを出すのを禁止されます。</p> <p>IMS トランザクションが INQ(Y) で定義されている場合、アプリケーション・プログラムは SQL INSERT、DELETE、または UPDATE を実行できません。</p>
LCLS	LCls	CLASS	LCL	特定の IMS において、どのメッセージ領域がローカルでトランザクションを処理できるかを決定するスケジューリング・クラス。
LCP	LCPRI	CPRI	LCL	ローカルの現在のスケジューリング優先順位。現在のスケジューリング優先順位は、どのトランザクションがスケジューリングのために選択されるかを計算するために使用されます。
LLCT	LLCT	LCT	LCL	ローカル IMS での限界カウント。限界カウントは、キューに入れられて処理を待っている入力トランザクションの数と比較した時に、通常優先順位または限界優先順位の値のどちらがこのトランザクションに割り当てられるかを決定する数値です。

表 210. QUERY TRANDESC コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
LLP	LLPRI	LPRI	LCL	ローカルの限界スケジューリング優先順位。限界スケジューリング優先順位は、エンキューされて処理を待っている入力トランザクションの数が、限界カウンターの値と等しいかより大きい場合に、このトランザクションが引き上げられる優先順位です。
LMRG	LMaxRgn	MAXRGN	LCL	ローカルの最大領域数。最大領域カウンタは、並列スケジューリングに適切なトランザクションの処理を同時にスケジュールできるメッセージ処理プログラム (MPP) 領域の最大数です。
LNP	LNPRI	NPRI	LCL	ローカルの通常のスケジューリング優先順位。通常スケジューリング優先順位は、エンキューされて処理を待っている入力トランザクションの数が限界カウンターの値を下回る場合に、このトランザクションに割り当てられる優先順位です。
LPLCT	LPLCT	PLCT	LCL	ローカルの処理限界カウンタ。処理限界カウンタは、プログラムが単一スケジューリングで処理できるトランザクション・メッセージの数です。
LPLM	LParLim	PARLIM	LCL	ローカルの並列処理限界カウンタ。並列限界カウンタは、現在キューに入れることはできるが、このトランザクションに現在スケジュールされているそれぞれのアクティブなメッセージ領域によって、まだ処理されないメッセージの最大数です。トランザクション・キュー・カウンタが、このトランザクションに現在スケジュールされている領域の数を PARLIM の値に掛けた数を超過した場合には、別のメッセージ領域がスケジュールされます。
LSNO	LSegNo	SEGNO	LCL	各 GU 呼び出しのメッセージ・キューで許可されているローカル・アプリケーション・プログラムの出力セグメントの限界。
LSSZ	LSegSz	SEGSZ	LCL	各 GU 呼び出しのメッセージ・キューで許可されているローカル・アプリケーション・プログラムの出力セグメント・サイズの限界。
MDLN	LModelName	MODEL	LCL	モデル名。この記述子を作成するためのモデルとして使用されたリソースまたは記述子の名前。DFSDSTR1 は、トランザクション用の IMS 記述子名です。出力値は、ローカル IMS から取得されます。
MDLT	LModelType	MODEL	LCL	モデル・タイプ、RSC または DESC。RSC は、別のリソースをモデルとして使用して記述子が作成されたことを意味します。DESC は、ある記述子をモデルとして使用して記述子が作成されたことを意味します。
MSGT	LMsgType	MSGTYPE	LCL	単一セグメント (SNGLSEG) または複数セグメント (MULTSEG) のメッセージ・タイプ。出力値は、ローカル IMS から取得されます。
				MULTSEG 着信メッセージは、複数のセグメントの長さにできることを指定します。これは、メッセージ終結標識を受け取るまで、つまり MFS によって完全なメッセージが作成されるまでは、アプリケーション・プログラムへのスケジューリングに適格ではありません。
				SNGLSEG 着信メッセージは、1 セグメントの長さであることを指定します。これは、端末オペレーターがセグメント終結を示した時点で、スケジューリングに適格になります。
MSN	LMSName	MSNAME	LCL	論理リンクパス名。
PLCTT	LPLCTTime	PLCTTIME	LCL	処理限界カウンタ時間。
PSB	LPSBName	PGM または PSB	LCL	トランザクションに関連するプログラム名。出力値は、ローカル IMS から取得されます。
RAOCMD	LAOCMD	DEFN, AOCMD	GBL	トランザクションがタイプ 1 AOI CMD 呼び出しまたはタイプ 2 AOI ICMD 呼び出しを発行できるかどうかを示します。出力値はリポジトリーから取得されます。返される値については、この表の「LAOCMD」の説明を参照してください。
RCLS	Cls	DEFN, CLASS	GBL	リポジトリー内のクラス値。
RCMTM	CmtMode	DEFN, CMTMODE	GBL	トランザクションのコミット・モード。単一メッセージ (SNGL) または複数メッセージ (MULT) 後にコミット。出力値はリポジトリーから取得されます。
RCONV	Conv	DEFN, CONV	GBL	会話オプション。トランザクションは会話型であるか (Y) ないか (N)。出力値はリポジトリーから取得されます。返される値については、この表の「LConv」の説明を参照してください。
RCV	LRecover	RECOVER	LCL	IMS 緊急時再始動または正常再始動の際にリカバリーするか (Y) しないか (N)。出力値は、ローカル IMS から取得されます。 N リカバリー・オプションは使用不可です。トランザクションはリカバリーされません。 Y リカバリー・オプションは使用可能です。IMS 緊急時再始動または正常再始動の際に、トランザクションはリカバリーされます。

表 210. QUERY TRANDESC コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
RDCLW	DCLWA	DEFN, DCLWA	GBL	リカバリー可能な、非応答モードの入力メッセージおよびトランザクションの出力メッセージに対して、ログ先書きを実行するか (Y) しないか (N)。出力値はリポジトリから取得されます。返される値については、この表の「LDCLWA」の説明を参照してください。
RDFLT	Dflt	DEFN	GBL	デフォルト記述子であるか (Y) ないか (N)。値はリポジトリから取得されます。
RDRRT	DirRoute	DEFN, DIRROUTE	GBL	MSC 直接経路指定をサポートするか (Y) しないか (N)。出力値はリポジトリから取得されます。
REDTR	EditRtn	DEFN, EDITRTN	GBL	入力編集ルーチン名。値はリポジトリから取得されます。
REDTT	EditUC	DEFN, EDITUC	GBL	入力データを大文字に変換するか (Y) しないか (N)。出力値はリポジトリから取得されます。返される値については、この表の「LEditUC」の説明を参照してください。
REMHBS	EMHBSz	DEFN, EMHBSZ	GBL	EMH バッファ・サイズ。出力値はリポジトリから取得されます。
REPO	Repo	DEFN	GBL	出力行に保管済みリソース定義が含まれているかどうかを示します。 Y リポジトリ定義を示します。 (ブランク) ローカル定義を示します。
REXPRT	ExprTm	DEFN, EXPRTIME	GBL	トランザクション有効期限。出力値はリポジトリから取得されます。
RFP	FP	DEFN, FP	GBL	高速機能利用可能な候補 (P)、高速機能専用 (E)、または FP オプションは使用不可 (N)。出力値はリポジトリから取得されます。返される値については、この表の「LFP」の説明を参照してください。
RGC	LRegCnt	RGC	LCL	領域カウント。出力値は、ローカル IMS から取得されます。
RINQ	Inq	DEFN, INQ	GBL	照会トランザクションであるか (Y) ないか (N)。出力値はリポジトリから取得されます。返される値については、この表の「LInq」の説明を参照してください。
RLCT	Lct	DEFN, LCT	GBL	リポジトリから取得した限界カウント値。
RLP	LPRI	DEFN, LPRI	GBL	リポジトリ内のローカル限界スケジューリング優先順位値。限界スケジューリング優先順位は、エンキューされて処理を待っている入力トランザクションの数が、限界カウントの値と等しいかより大きい場合に、このトランザクションが引き上げられる優先順位です。
RMRG	RMaxRgn	DEFN, MAXRGN	GBL	リポジトリから取得した最大領域カウント。最大領域カウントは、並列スケジューリングに適切なトランザクションの処理を同時にスケジュールできるメッセージ処理プログラム (MPP) 領域の最大数です。
RMSGT	MsgType	DEFN, MSGTYPE	GBL	単一セグメント (SNGLSEG) または複数セグメント (MULTSEG) のメッセージ・タイプ。出力値はリポジトリから取得されます。返される値については、この表の「LMsgType」の説明を参照してください。
RMT	LRemote	REMOTE	LCL	リモート・トランザクションであるか (Y) ないか (N)。出力値は、ローカル IMS から取得されます。 N ローカル・トランザクション。トランザクションはローカル・システムで実行されます。 Y リモート・トランザクション。トランザクションはリモート・システムで実行されます。
RPLCT	PLCT	DEFN, PLCT	GBL	リポジトリ内の処理限界カウント値。処理限界カウントは、プログラムが単一スケジューリングで処理できるトランザクション・メッセージの数です。
RPLCTT	PLCTTime	DEFN, PLCTTIME	GBL	リポジトリ内の処理限界カウント時間値。
RPLM	Parlim	DEFN, PARLIM	GBL	リポジトリ内の並列処理限界カウント値。並列限界カウントは、現在キューに入れることはできるが、このトランザクションに現在スケジュールされているそれぞれのアクティブなメッセージ領域によって、まだ処理されないメッセージの最大数です。トランザクション・キュー・カウントが、このトランザクションに現在スケジュールされている領域の数を PARLIM の値に掛けた数を超過した場合には、別のメッセージ領域がスケジュールされます。
RPSB	PsbName	DEFN, PGM	GBL	トランザクションに関連するプログラム名。出力値はリポジトリから取得されます。返される値については、この表の「LPsbName」の説明を参照してください。
RRCV	Recover	DEFN, RECOVER	GBL	IMS 緊急時再始動または正常再始動の際にリカバリーするか (Y) しないか (N)。出力値はリポジトリから取得されます。返される値については、この表の「LRecover」の説明を参照してください。
RRMT	リモート	DEFN, REMOTE	GBL	リモート・トランザクションであるか (Y) ないか (N)。出力値はリポジトリから取得されます。返される値については、この表の「LRemote」の説明を参照してください。
RRSP	Resp	DEFN, RESP	GBL	応答モード・トランザクションであるか (Y) ないか (N)。出力値はリポジトリから取得されます。返される値については、この表の「LResp」の説明を参照してください。

表 210. QUERY TRANDESC コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
RSET	Serial	DEFN, SERIAL	GBL	トランザクションは逐次処理されるか (Y) されないか (N)。出力値はリポジトリーから取得されます。返される値については、この表の「LSerial」の説明を参照してください。
RSIDL	SIDL	DEFN, MSNAME	GBL	ローカル・システム ID。出力値はリポジトリーから取得されます。
RSIDR	SIDR	DEFN, MSNAME	GBL	リモート・システム ID。出力値はリポジトリーから取得されます。
RSNO	SegNo	DEFN, SEGNO	GBL	各 GU 呼び出しに対して、メッセージ・キューで許容されるアプリケーション・プログラムの出力セグメントの制限。値はリポジトリーから取得されます。
RSP	LResp	RESP	LCL	<p>応答モード・トランザクションであるか (Y) ないか (N)。出力値は、ローカル IMS から取得されます。</p> <p>N 応答モード・オプションは使用不可です。デフォルトの OPTIONS=TRANRESP を指定しているか、デフォルトを受け入れる端末の場合、このトランザクションが入力された後、入力が停止してはなりません。</p> <p>Y 応答モード・オプションは使用可能です。デフォルトの OPTIONS=TRANRESP を指定しているか、デフォルトを受け入れる端末の場合、このトランザクションが入力された後、このトランザクションが応答メッセージを端末に戻すまでは、追加メッセージは許可されません。応答モードは、個々の端末の定義によって、強制または無効にすることができます。応答モードで稼働しないすべての端末では、オンライン処理時に RESP(Y) は無視されます。</p>
RSPASZ	SpaSz	DEFN, SPASZ	GBL	会話型トランザクション・スクラッチパッド域サイズ。出力値はリポジトリーから取得されます。
RSPATR	SpaTrunc	DEFN, SPATRUNC	GBL	<p>より小さい SPA で定義されたトランザクションへのプログラム間通信の後、会話型トランザクション SPA データを切り捨てるか (R) 保存するか (S)。会話型トランザクションに対して定義された SPATRUNC 値は、リポジトリーに保管されます。SHOW(DEFN) を指定した QUERY TRANDESC コマンドは、リポジトリー値から R、S、または null の SPATRUNC 値を返します。</p> <p>S S は、以下のいずれかの条件の会話型トランザクションの場合に、QUERY TRANDESC コマンドで表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> CREATE TRAN コマンドまたは CREATE TRANDESC コマンドで、トランザクションが SPATRUNC=S で定義されている場合 TRANSACT マクロで SPA=STRUNC が指定されている場合 DFSDCxxx メンバー内で、システム全体の切り捨てデータ・オプションが TRUNC=Y として設定されている場合 <p>R R は、以下のいずれかの条件の会話型トランザクションの場合に、QUERY TRANDESC コマンドで表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> CREATE TRAN コマンドまたは CREATE TRANDESC コマンドで、トランザクションが SPATRUNC=R で定義されている場合 TRANSACT マクロで SPA=RTRUNC が指定されている場合 DFSDCxxx メンバー内で、システム全体の切り捨てデータ・オプションが TRUNC=N として設定されていない場合 <p>null null 値は、トランザクションには SPATRUNC 値が定義されておらず、値は DFSDCxxx メンバーの TRUNC= オプションで定義されたシステム全体の切り捨てデータ・オプションでオーバーライドされることを示します。</p>
RSSSZ	SegSz	DEFN, SEGSZ	GBL	各 GU 呼び出しに対して、メッセージ・キューで許容されるアプリケーション・プログラムの出力セグメント・サイズの限界。出力値はリポジトリーから取得されます。
RTLS	TranStat	DEFN, TRANSTAT	GBL	トランザクション・レベル統計がログに記録されるか (Y) されないか (N)。出力値はリポジトリーから取得されます。返される値については、この表の「LTranStat」の説明を参照してください。
RTMCR	TimeCreate	DEFN, TIMESTAMP	GBL	リポジトリーでの作成時刻。これは、リポジトリー内で最初にリソースが作成された時刻です。

表 210. QUERY TRANDESC コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
RTMUP	TimeUpdate	DEFN, TIMESTAMP	GBL	リポジトリでの更新時刻。これは、リポジトリ内で最後にリソースが更新された時刻です。
RWFI	WFI	DEFN, WFI	GBL	入力待ちトランザクションであるか (Y) ないか (N)。出力値はリポジトリから取得されます。返される値については、この表の「LWFI」の説明を参照してください。
SER	LSerial	SERIAL	LCL	トランザクションは逐次処理されるか (Y) されないか (N)。出力値は、ローカル IMS から取得されます。 N シリアル・オプションは使用不可です。トランザクションのメッセージは、逐次処理されません。メッセージは並列で処理できます。U3303 疑似アバンドの後、メッセージは中断キューに入れられません。障害が繰り返し発生してトランザクションが USTOP で停止されるまで、スケジューリングが継続されます。 Y シリアル・オプションが使用可能です。トランザクションのメッセージは、逐次処理されます。U3303 疑似アバンドでは、メッセージは中断キューに入れられるのではなく、トランザクション・メッセージ・キューの前に置かれ、トランザクションは USTOP で停止します。/START コマンドでトランザクションまたはクラスが開始されると、トランザクションの USTOP は除去されます。
SIDL	LSIDL	MSNAME	LCL	ローカル・システム ID。出力値は、ローカル IMS から取得されます。
SIDR	LSIDR	MSNAME	LCL	リモート・システム ID。出力値は、ローカル IMS から取得されます。
SPASZ	LSPASz	SPASZ	LCL	会話型トランザクション・スクラッチパッド域サイズ。出力値は、ローカル IMS から取得されます。
SPATR	LSPATrunc	SPATRUNC	LCL	より小さい SPA で定義されたトランザクションへのプログラム間通信の後、会話型トランザクション SPA データを切り捨てるか (R) 保存するか (S)。出力値は、ローカル IMS から取得されます。 S より小さい SPA で定義されたトランザクションへのプログラム間通信が行われる場合でも、IMS は SPA 内のデータをすべて保存します。より小さい SPA を持つトランザクションには、切り捨てられたデータは見えませんが、より大きい SPA を持つトランザクションに切り替えられたときに、切り捨てられたデータは使用されます。 R 切り捨てられたデータは保存されません。
TLS	LTranStat	TRANSTAT	LCL	トランザクション・レベル統計がログに記録されるか (Y) されないか (N)。出力値は、ローカル IMS から取得されます。 N トランザクション・レベル統計のロギングはアクティブではありません。 Y トランザクション・レベル統計のロギングがアクティブです。
TMAC	LTimeAccess	TIMESTAMP	LCL	記述子が最後にアクセスされた時刻。出力値は、ローカル IMS から取得されます。最終アクセス時間は、ウォーム・スタート、緊急時再始動、EXPORT および IMPORT にまたがって保持されます。最終アクセス時間の更新はログに記録されません。再始動後は、最終アクセス時間は再始動チェックポイント・ログ・レコードに記録された時間を反映します。 トランザクション記述子の場合、以下のアクションは最終アクセス時間を更新します。 <ul style="list-style-type: none"> • CREATE コマンドまたは DFSINSX0 出口が、記述子をモデルとして参照する。
TMCR	LTimeCreate	TIMESTAMP	LCL	記述子が作成された時刻。これは、CREATE TRANDESC コマンド、トランザクション記述子を作成する IMPORT コマンド、または IMS の初期設定の結果です。作成時刻は、ウォーム・スタート、緊急時再始動、EXPORT および IMPORT にまたがって保持されます。出力値は、ローカル IMS から取得されます。
TMIM	LTimeImport	TIMESTAMP	LCL	記述子が最後にインポートされた時刻。インポート時刻は、ウォーム・スタートと緊急時再始動にまたがって保持されます。出力値は、ローカル IMS から取得されます。
TMUP	LTimeUpdate	TIMESTAMP	LCL	UPDATE TRANDESC コマンドまたは IMPORT コマンドの結果として実行時リソース定義の属性が更新された最終時刻。更新時刻は、ウォーム・スタートや緊急時再始動を越えて保持されます。出力値は、ローカル IMS から取得されます。

表 210. QUERY TRANDESC コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
WFI	LWFI	WFI	LCL	<p>入力待ちトランザクションであるか (Y) ないか (N)。出力値は、ローカル IMS から取得されます。</p> <p>N 入力待ちオプションは使用不可です。</p> <p>Y 入力待ちオプションは使用可能です。WFI トランザクションを処理するメッセージ処理またはバッチ処理アプリケーション・プログラムは、通常どおりにスケジュールされ、呼び出されます。処理するトランザクションが WFI として定義されている場合、プログラムは、使用可能な入力メッセージを処理した後も主ストレージに残ることが許可されます。以下の場合、QC 状況コード (これ以上メッセージがない) が戻されます。すなわち、処理限界カウントに達した場合、スケジュールされたトランザクション、データベース、プログラム、またはクラスの状態を変更するためにコマンドが入力された場合、トランザクションで 사용되는データベースに関するコマンドが入力された場合、あるいは IMS がチェックポイント・シャットダウンで終了した場合です。</p>

戻りコード、理由コード、および完了コード

表 211. QUERY TRANDESC コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	コマンドは正常に完了しました。
X'00000004'	X'00001010'	<p>戻される記述子は検出されませんでした。指定された記述子名が無効であるか、以下のことが考えられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> 指定したフィルターと一致する記述子がありませんでした。 SHOW(EXPORTNEEDED) が指定されていた場合は、IMSRSC リポジトリにエクスポートする必要があるリソースがありませんでした。
X'00000008'	X'00002004'	無効なコマンド・キーワードまたは無効なコマンド・キーワードの組み合わせ。
X'0000000C'	X'00003004'	No requests were successful.
X'00000010'	X'00004004'	CQS アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'00004018'	リソース構造がないか、リソース構造が使用できません。
X'00000010'	X'00004100'	リソース構造が満杯です。
X'00000010'	X'00004104'	RM アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'00004108'	SCI アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'00004300'	MODBLKS のオンライン変更が有効なため、コマンドが許可されません (DFSDFxxx または DFSCGxxx が MODBLKS=OLC で定義されているか、または MODBLKS が定義されていません)。
X'00000010'	X'00004500'	IMS はリポジトリを使用できません。
X'00000010'	X'00004501'	RM はリポジトリを使用できません。
X'00000010'	X'00004502'	リポジトリは使用できません。
X'00000010'	X'00004503'	リポジトリは停止しています。
X'00000010'	X'00004504'	リポジトリ・スベアのリカバリーが進行中です。

表 211. QUERY TRANDESC コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000010'	X'00004505'	IMS リソース・リストが存在しないか、IMS リソース・リスト内に該当するリソース・タイプのリソースが存在しません。
X'00000010'	X'00004507'	リポジトリへのアクセスが拒否されました。
X'00000010'	X'00004508'	リポジトリの最大入力長を超過しました。
X'00000010'	X'00004509'	RM データのバージョンは IMS データのバージョンよりも低いバージョンです。
X'00000010'	X'0000450A'	リポジトリ・サーバー (RS) をシャットダウンしています。
X'00000010'	X'0000450B'	RS が使用できません。
X'00000010'	X'0000450C'	RS が使用中です。
X'00000010'	X'0000450D'	RM は、IMSRSC リポジトリに関連した一部の内部フィールドの定義に失敗しました。
X'00000014'	X'0000501C'	IMODULE GETMAIN エラー。
X'00000014'	X'00005100'	RM 要求エラー。
X'00000014'	X'00005104'	CQS エラー。
X'00000014'	X'00005108'	SCI 要求エラー。
X'00000014'	X'00005110'	リポジトリ・エラー。
X'00000014'	X'0000551C'	破損したリソース・リストが検出されたため、リポジトリ内のデータを表示する要求は拒否されました。リソース・リストが使用できないため、QUERY TRANDESC コマンドは拒否されました。IBM ソフトウェア・サポートに連絡してください。エラーになったコマンドの出力と、コマンドが実行されたローカル RM アドレス・スペースのダンプまたは IMSplex 内のすべての RM アドレス・スペースのダンプを送信してください。また、IMSRSC リポジトリ RID データ・セットと RMD データ・セットのコピーも送信してください。

表 212. QUERY TRANDESC コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		トランザクション記述子に対するコマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	トランザクション記述子名が無効であるか、指定されたワイルドカード・パラメーターがどの記述子名にも一致しません。
90	INTERNAL ERROR	

例

以下に示すのは QUERY TRANDESC コマンドの例です。

QUERY TRANDESC コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

QRY TRANDESC SHOW(ALL)

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

DescName	MbrName	CC	LPSBname	LC1s	LLCT	LPLCT	LPLCTTime	LCPRI	LNPRI	LLPRI
CONVDESC	IMS1	0	DFSSAM04	1	65535	65535	6553500	0	1	1
DFSDSTR1	IMS1	0		1	65535	65535	6553500	1	1	1
FPEDESC	IMS1	0	EMHPSB2	1	0	65535	6553500	0	1	1
FPPDESC	IMS1	0	DFSSAM04	1	65535	65535	6553500	0	1	1
MSCDESC	IMS1	0	CPGM1B1	1	65535	65535	6553500	0	1	1

(右にスクロール、画面 2)

DescName	MbrName	LSegSz	LSegNo	LParLim	LMaxRgn	LEditRtn	LFP	LEMHSz	LCmtMode
CONVDESC	IMS1	0	0	65535	0		N	0	SNGL
DFSDSTR1	IMS1	0	0	65535	0		N	0	SNGL
FPEDESC	IMS1	0	0	65535	0		E	200	SNGL
FPPDESC	IMS1	0	0	65535	0		P	256	SNGL
MSCDESC	IMS1	0	0	65535	0		N	0	SNGL

(右にスクロール、画面 3)

DescName	MbrName	LMsgType	LSPATrunc	LSPASz	LSIDR	LSIDL	LDCLWA	LDirRoute	LEditUC
CONVDESC	IMS1	MULTSEG	R	128	10	10	Y	N	Y
DFSDSTR1	IMS1	MULTSEG		0	10	10	Y	N	Y
FPEDESC	IMS1	SNGLSEG		0	10	10	Y	N	Y
FPPDESC	IMS1	SNGLSEG		0	10	10	Y	N	Y
MSCDESC	IMS1	MULTSEG		0	12	32	Y	N	Y

(右にスクロール、画面 4)

DescName	MbrName	LInq	LRecover	LResp	LRemote	LSerial	LWFI	LAOCMD	LConv	LTranStat
CONVDESC	IMS1	N	Y	N	N	N	N	N	Y	N
DFSDSTR1	IMS1	N	Y	N	N	N	N	N	N	N
FPEDESC	IMS1	N	Y	Y	N	N	N	N	N	N
FPPDESC	IMS1	N	Y	Y	N	N	N	N	N	N
MSCDESC	IMS1	N	Y	N	Y	N	N	N	N	N

(右にスクロール、画面 5)

DescName	MbrName	LDflt	LModelName	LModelType	LMSName	LTimeCreate	LTimeUpdate
CONVDESC	IMS1	N	CDEBTRNA	RSC		2011.181 18:15:27.52	
DFSDSTR1	IMS1	Y				2011.181 15:22:55.07	
FPEDESC	IMS1	N	DFSDSTR1	DESC		2011.181 18:21:51.51	
FPPDESC	IMS1	N	DFSDSTR1	DESC		2011.181 18:25:10.73	
MSCDESC	IMS1	N	DFSDSTR1	DESC	LINK31B4	2011.181 18:27:31.62	

(右にスクロール、画面 6)

DescName	MbrName	LTimeAccess	LTimeImport
CONVDESC	IMS1		
DFSDSTR1	IMS1	2011.181 18:27:31.62	
FPEDESC	IMS1		
FPPDESC	IMS1		
MSCDESC	IMS1		

(右にスクロール、画面 7)

DescName	MbrName	LDefnType	LExprTm
CONVDESC	IMS1	CREATE	0
DFSDSTR1	IMS1	IMS	0
FPEDESC	IMS1	CREATE	0
FPPDESC	IMS1	CREATE	0
MSCDESC	IMS1	CREATE	0

OM API 入力:

CMD(QUERY TRANDESC SHOW(ALL))

OM API 出力:


```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.182 01:49:24.663483</statime>
<stotime>2011.182 01:49:24.664394</stotime>
<staseq>C800882E4F0BB385</staseq>
<stoseq>C800882E4F44A945</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10184924</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>TRANDESC </kwd>
<input>QRY TRANDESC SHOW(ALL) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="DESC" l1bl="DescName" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="5" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1bl="PSB" l1bl="LPSBname" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="LCLS" l1bl="LC1s" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="3" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LLCT" l1bl="LLCT" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LPLCT" l1bl="LPLCT" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="PLCTT" l1bl="LPLCTTime" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="7" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LCP" l1bl="LCPRI" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="2" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LNP" l1bl="LNPRI" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="2" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LLP" l1bl="LLPRI" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="2" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LSSZ" l1bl="LSegSz" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LSNO" l1bl="LSegNo" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LPLM" l1bl="LParLim" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="LMRG" l1bl="LMaxRgn" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="EDTR" l1bl="LEditRtn" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="FP" l1bl="LFP" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="EMHBS" l1bl="LEMHBSz" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="CMTM" l1bl="LCmtMode" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="MSGT" l1bl="LMsgType" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="7" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="SPATR" l1bl="LSPATrunc" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="right" />
<hdr s1bl="SPASZ" l1bl="LSPASz" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />

```

```

<hdr s1bl="SIDR" l1bl="LSIDR" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="SIDL" l1bl="LSIDL" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="DCLW" l1bl="LDCLWA" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="DRRT" l1bl="LDirRoute" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="EDTT" l1bl="LEditUC" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="INQ" l1bl="LInq" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RCV" l1bl="LRecover" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RSP" l1bl="LResp" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="RMT" l1bl="LRemote" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="SER" l1bl="LSerial" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="WFI" l1bl="LWFI" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="AOCMD" l1bl="LAOCMD" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="CONV" l1bl="LConv" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TLS" l1bl="LTranStat" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="DFLT" l1bl="LDFlt" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="MDLN" l1bl="LModelName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="MDLT" l1bl="LModelType" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="MSN" l1bl="LMSName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMCR" l1bl="LTimeCreate" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMUP" l1bl="LTimeUpdate" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="TMAC" l1bl="LTimeAccess" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="TMIM" l1bl="LTimeImport" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="20" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="DFNT" l1bl="LDefnType" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="EXPRT" l1bl="LExprTm" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="5" dtype="INT" align="right" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DESC(DFSDSTR1) MBR(IMS1 ) CC( 0) PSB( ) LCLS( 1)
  LLCT(65535) LPLCT(65535) LCP( 1) LNP( 1) LLP( 1) LSSZ( 0) LSNO(
  0) LPLM(65535) LMRG( 0) AOCMD(N) CMTM(SNGL) CONV(N) DCLW(Y)
  DFNT(IMS) DFLT(Y) DRRT(N) EDTT(Y) EMHBS( 0) EXPRT( 0) FP(N)
  INQ(N) MSGT(MULTSEG) PLCTT(6553500) RCV(Y) RMT(N) RSP(N) SER(N) SIDL(
  10) SIDR( 10) SPASZ( 0) TMAC(2011.181 18:27:31.62) TMCR(2011.181
  15:22:55.07) TLS(N) WFI(N) </rsp>
<rsp>DESC(FPPDESC) MBR(IMS1 ) CC( 0) PSB(DFSSAM04) LCLS( 1)
  LLCT(65535) LPLCT(65535) LCP( 0) LNP( 1) LLP( 1) LSSZ( 0) LSNO(
  0) LPLM(65535) LMRG( 0) AOCMD(N) CMTM(SNGL) CONV(N) DCLW(Y)
  DFNT(CREATE) DFLT(N) DRRT(N) EDTT(Y) EMHBS( 256) EXPRT( 0) FP(P)
  INQ(N) MDLT(DESC) MDLN(DFSDSTR1) MSGT(SNGLSEG) PLCTT(6553500) RCV(Y)
  RMT(N) RSP(Y) SER(N) SIDL( 10) SIDR( 10) SPASZ( 0) TMCR(2011.181
  18:25:10.73) TLS(N) WFI(N) </rsp>
<rsp>DESC(CONVDESC) MBR(IMS1 ) CC( 0) PSB(DFSSAM04) LCLS( 1)
  LLCT(65535) LPLCT(65535) LCP( 0) LNP( 1) LLP( 1) LSSZ( 0) LSNO(
  0) LPLM(65535) LMRG( 0) AOCMD(N) CMTM(SNGL) CONV(Y) DCLW(Y)

```

```

DFNT(CREATE) DFLT(N) DRRT(N) EDTT(Y) EMHBS( 0) EXPRT( 0) FP(N)
INQ(N) MDLT(RSC) MDLN(CDEBTRNA) MSGT(MULTSEG) PLCTT(6553500) RCV(Y)
RMT(N) RSP(N) SER(N) SIDL( 10) SIDR( 10) SPASZ( 128) SPATR(R)
TMCR(2011.181 18:15:27.52) TLS(N) WFI(N) </rsp>
<rsp>DESC(MSCDESC ) MBR(IMS1 ) CC( 0) PSB(CPGM1B1 ) LCLS( 1)
LLCT(65535) LPLCT(65535) LCP( 0) LNP( 1) LLP( 1) LSSZ( 0) LSNO(
0) LPLM(65535) LMRG( 0) AOCMD(N) CMTM(SNGL) CONV(N) DCLW(Y)
DFNT(CREATE) DFLT(N) DRRT(N) EDTT(Y) EMHBS( 0) EXPRT( 0) FP(N)
INQ(N) MDLT(DESC) MDLN(DFSDSTR1) MSGT(MULTSEG) PLCTT(6553500) RCV(Y)
RMT(Y) RSP(N) SER(N) SIDL( 32) SIDR( 12) MSN(LINK31B4) SPASZ( 0)
TMCR(2011.181 18:27:31.62) TLS(N) WFI(N) </rsp>
<rsp>DESC(FPEDESC ) MBR(IMS1 ) CC( 0) PSB(EMHPSB2 ) LCLS( 1)
LLCT( 0) LPLCT(65535) LCP( 0) LNP( 1) LLP( 1) LSSZ( 0) LSNO(
0) LPLM(65535) LMRG( 0) AOCMD(N) CMTM(SNGL) CONV(N) DCLW(Y)
DFNT(CREATE) DFLT(N) DRRT(N) EDTT(Y) EMHBS( 200) EXPRT( 0) FP(E)
INQ(N) MDLT(DESC) MDLN(DFSDSTR1) MSGT(SNGLSEG) PLCTT(6553500) RCV(Y)
RMT(N) RSP(Y) SER(N) SIDL( 10) SIDR( 10) SPASZ( 0) TMCR(2011.181
18:21:51.51) TLS(N) WFI(N) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: すべてのトランザクション記述子が、すべての出力フィールドと共に戻されています。トランザクション記述子の出力フィールドのすべては 1 つの画面に収まらないため、ユーザーは右にスクロールして、追加の出力フィールドを見る必要があります。トランザクション記述子名およびその出力行を作成したメンバー名が、各画面に表示されています。ブランクのフィールドは、指定されたトランザクション記述子には適用されません。IMS は、トランザクション用の IMS デフォルト値を組み込むために、IMS のコールド・スタート時に、記述子 DFSDSTR1 を定義しています。その他にいくつかの記述子が CREATE TRANDESC コマンドを使用して動的に作成されました。これには、会話トランザクション用の CONVDESC、FP 専用トランザクション用の FPEDESC、FP 利用可能トランザクション用の FPPDESC、およびリモート MSC トランザクション用の MSCDESC が含まれています。DFSDSTR1 は最終アクセス時間 TimeAccess を表示し、これは、それをデフォルト・モデルとして参照した最後の CREATE TRAN または CREATE TRANDESC コマンドによって更新された時刻です。

QUERY TRANDESC コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
QRY TRANDESC NAME(*) SHOW(DEFN,CLASS,FP)
```

TSO SPOC 出力:

DescName	MbrName	CC	Repo	IMSid	Cls	LCls	FP	LFP
CONVDESC	IMS1	0	Y		1		N	
CONVDESC	IMS1	0		IMS1		1	N	
CONVDESC	IMS2	0		IMS2		1	N	
CONVDESC	IMS3	0		IMS3		1	N	
DFSDSTR1	IMS1	0		IMS1		1	N	
DFSDSTR1	IMS2	0		IMS2		1	N	
DFSDSTR1	IMS3	0		IMS3		1	N	
FPEDESC	IMS1	0	Y		1		E	
FPEDESC	IMS1	0		IMS1		1	E	
FPEDESC	IMS2	0		IMS2		1	E	
FPEDESC	IMS3	0		IMS3		1	E	
FPPDESC	IMS1	0	Y		1		P	
FPPDESC	IMS1	0		IMS1		1	P	
FPPDESC	IMS2	0		IMS2		1	P	
FPPDESC	IMS3	0		IMS3		1	P	
MSCDESC	IMS1	0	Y		1		N	

MSCDESC	IMS1	0	Y	IMS1	1	N
MSCDESC	IMS1	0	Y	IMS2	1	N
MSCDESC	IMS1	0	Y	IMS3	1	N
MSCDESC	IMS1	0	Y	IMS4	1	N
MSCDESC	IMS1	0		IMS1	1	N
MSCDESC	IMS2	0		IMS2	1	N
MSCDESC	IMS3	0		IMS3	1	N

OM API 入力:

```
CMD(QRY TRANDESC NAME(*) SHOW(DEFN,CLASS,FP))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.190 02:08:43.039351</statime>
<stotime>2011.190 02:08:43.120611</stotime>
<staseq>C80A9B6AB5A77887</staseq>
<stoseq>C80A9B6AC97E3A9A</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10190843</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>TRANDESC </kwd>
<input>QRY TRANDESC NAME(*) SHOW(DEFN,CLASS,FP) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="DESC" l1b1="DescName" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="5" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1b1="REPO" l1b1="Repo" scope="LCL" sort="d" key="2" scroll="no"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="IMSID" l1b1="IMSid" scope="GBL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="RCLS" l1b1="Cls" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="3" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1b1="LCLS" l1b1="LCls" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="3" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1b1="RFP" l1b1="FP" scope="GBL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="FP" l1b1="LFP" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DESC(DFSDSTR1) MBR(IMS1 ) CC( 0) LCLS( 1) FP(N) IMSID(IMS1
) </rsp>
<rsp>DESC(FPDESC) MBR(IMS1 ) CC( 0) LCLS( 1) FP(P) IMSID(IMS1
) </rsp>
<rsp>DESC(MSCDESC) MBR(IMS1 ) CC( 0) LCLS( 1) FP(N) IMSID(IMS1
) </rsp>
<rsp>DESC(FPEDESC) MBR(IMS1 ) CC( 0) LCLS( 1) FP(E) IMSID(IMS1
) </rsp>
<rsp>DESC(FPEDESC) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RCLS( 1) RFP(E)
</rsp>
```

```

<rsp>DESC(FPPDESC ) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RCLS( 1) RFP(P)
</rsp>
<rsp>DESC(MSCDESC ) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) RCLS( 1) RFP(N)
</rsp>
<rsp>DESC(MSCDESC ) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS1 )
RCLS( 1) RFP(N) </rsp>
<rsp>DESC(MSCDESC ) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS2 )
RCLS( 1) RFP(N) </rsp>
<rsp>DESC(MSCDESC ) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS3 )
RCLS( 1) RFP(N) </rsp>
<rsp>DESC(MSCDESC ) MBR(IMS1 ) CC( 0) REPO(Y) IMSID(IMS4 )
RCLS( 1) RFP(N) </rsp>
<rsp>DESC(DFSDSTR1) MBR(IMS3 ) CC( 0) LCLS( 1) FP(N) IMSID(IMS3
) </rsp>
<rsp>DESC(FPPDESC ) MBR(IMS3 ) CC( 0) LCLS( 1) FP(P) IMSID(IMS3
) </rsp>
<rsp>DESC(MSCDESC ) MBR(IMS3 ) CC( 0) LCLS( 1) FP(N) IMSID(IMS3
) </rsp>
<rsp>DESC(FPEDESC ) MBR(IMS3 ) CC( 0) LCLS( 1) FP(E) IMSID(IMS3
) </rsp>
<rsp>DESC(DFSDSTR1) MBR(IMS2 ) CC( 0) LCLS( 1) FP(N) IMSID(IMS2
) </rsp>
<rsp>DESC(FPPDESC ) MBR(IMS2 ) CC( 0) LCLS( 1) FP(P) IMSID(IMS2
) </rsp>
<rsp>DESC(MSCDESC ) MBR(IMS2 ) CC( 0) LCLS( 1) FP(N) IMSID(IMS2
) </rsp>
<rsp>DESC(FPEDESC ) MBR(IMS2 ) CC( 0) LCLS( 1) FP(E) IMSID(IMS2
) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: 指定されたリソースの保管済みリソース定義およびランタイム・リソース定義が戻されます。デフォルトの記述子を識別するためにローカル IMS ランタイム定義が返されるため、「Dflt (デフォルト)」列が返されています。DFSDSTR1 はデフォルト記述子であり、それぞれの IMS システムにのみ存在します。デフォルト記述子定義は、リポジトリにはありません。TRANDESC 記述子は、リポジトリにのみ存在します。

QUERY TRANDESC コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
QUERY TRANDESC NAME(TRND*,NOTFN*) SHOW(EXPORTNEEDED)
```


TSO SPOC 出力:

DescName	MbrName	CC	CCText	ExportNeeded
NOTFN*	IMS1	10	NO RESOURCES FOUND	
TRND0001	IMS1	0		N
TRND0002	IMS1	0		Y


OM API 入力:

```
CMD(QUERY TRANDESC SHOW(EXPORTNEEDED))
```

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

QUERY USER コマンド

QUERY USER コマンドは、IMSplex 全体にわたる VTAM ユーザーに関する情報を表示するために使用します。ユーザーは動的 (ETO) ユーザーか、静的または動的 (ETO) ISC サブプール・ユーザーのいずれかです。このコンテキストでは、ユーザー・セキュリティまたは端末セキュリティに使用されるユーザー ID は、ユーザーではなくユーザー ID とみなされます。このコマンドは、OM API を介してのみ指定でき、XRF 代替システムでのみ有効です。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 747 ページの『キーワード』
- 752 ページの『使用上の注意』
- 753 ページの『類似の IMS タイプ 1 コマンド』
- 753 ページの『出力フィールド』
- 758 ページの『QUERY USER 状況』
- 760 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 762 ページの『例』

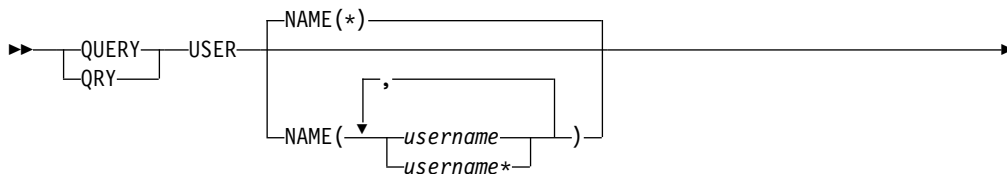
環境

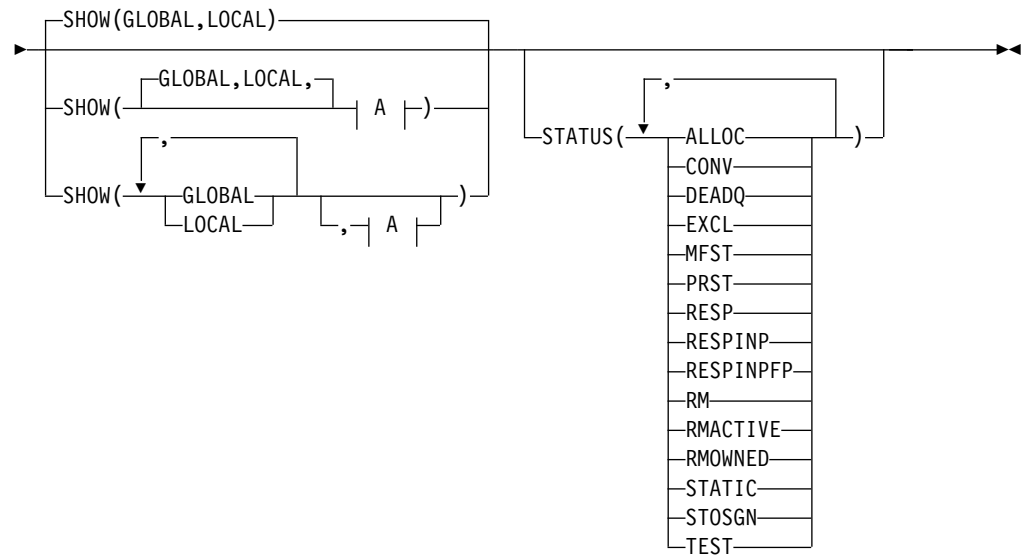
以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 213. QUERY USER コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUERY USER	X		X
NAME	X		X
SHOW	X		X
STATUS	X		X

構文





A:



キーワード

以下のキーワードは、QUERY USER コマンドに有効です。

NAME()

表示される 1 つ以上のユーザー (動的ユーザーまたは ISC サブプール・ユーザー) を指定します。有効な名前は 1 から 8 文字で、ワイルドカードが指定できます。すべてのユーザーを表示するには、NAME(*) を指定します。デフォルト値は NAME(*) です。

SHOW()

戻されるユーザー出力フィールドを指定します。ユーザー名は、出力を作成した IMS の名前および完了コードとともに、常に戻されます。SHOW が指定されない場合、STATUS フィルターが指定されていないならば、ユーザー名のみが戻されます。これは、システム管理アプリケーションが、IMSplex 内で現在認識されているすべてのユーザー名のリストを入手するための方法を提供します。

表示する情報を IMS が入手する場所 (グローバル・リソースまたはローカル・リソース) を指定するために、2 つのパラメーター GLOBAL と LOCAL が使用されます。デフォルトは GLOBAL と LOCAL の両方です。残りのパラメーターは表示される情報を指定するために使用されます。

SHOW キーワードでサポートされるパラメーターには、以下のものがあります。パラメーターの指定順は任意です。

ALL

LTERM パラメーターおよび CONV パラメーターが指定された場合に表示される出力フィールドを除き、すべての出力フィールドを返します。他のすべての出力とともに LTERM および会話情報を表示するには、SHOW(ALL,LTERM,CONV) を指定します。

AUTOLOGON

指定されたユーザーの現行の自動ログオン情報を表示します。この情報には、セッションを確立するために使用するノードの名前、VTAM モード・テーブルの名前、ノードを作成するために使用されるノード記述子の名前、および (ISC の場合) 他のシステムのハーフセッション修飾子の ID が含まれます。

CONV

ユーザーに関連付けられている会話 ID、トランザクション、および会話状況。個々の会話は、別個のコマンド応答表示行に戻されます。SHOW(ALL) が指定された場合、会話状況は含まれません。会話情報を他のすべての出力と一緒に表示するには、SHOW(ALL,CONV) を指定します。

EMHQ

急送メッセージ・ハンドラー (EMH) キュー内のユーザー・メッセージ・キュー・カウントを表示します。キュー・カウントは、指定されたユーザーと関連付けられている LTERM ごとのキュー・カウントの合計です。

EMHQ は、SHOW キーワードで GLOBAL パラメーターが指定された場合にのみ有効です。GLOBAL が指定されなかった場合、EMHQ パラメーターは無視されます。

EMHQ は、コマンド・マスターによってのみ処理されます。それ以外のすべての IMS システムは、このパラメーターを無視します。

EMHQ は、共用キュー環境で共用 EMH が使用されている場合にのみ有効です。その他の場合は、このパラメーターは無視されます。

ユーザー・リソースがリソース構造に存在する場合、グローバル・ユーザー・リソースに関連付けられている LTERM は、EMH キューからキュー・カウントを入手するために使用されます。その他の場合、ローカル・ユーザー・リソースに関連付けられている LTERM が使用されます。ただし、ユーザーがコマンド・マスターにローカルに存在していない場合は、キュー・カウントは 0 になります。

GLOBAL

GLOBAL が指定されると、コマンド・マスターは、他の SHOW パラメーターの指定状況に応じてグローバル情報を表示します。これには、共用キューとリソース構造からの情報が含まれます。

GLOBAL パラメーターは、コマンド・マスターによってのみ処理されます。他のすべての IMS システムはこのパラメーターを無視します。LOCAL が一緒に指定されなかった場合、コマンド・マスター以外のすべての IMS システムは、コマンドを無視します。

GLOBAL は、コマンド・マスターが共用キューかシスプレックス端末管理 (またはその両方) を使用している場合にのみ適用されます。コマンド・マスターが共用キューまたはシスプレックス端末管理を使用していない場合、GLOBAL は適用されません。この環境で LOCAL も指定されている場合、GLOBAL は無視されます。その他の場合、コマンド・マスターはコマンドをリジェクトします。

共用キューが使用可能であり、グローバル・キュー・カウントが要求された場合、コマンド・マスターは適切なキュー・カウントを判別するよう CQS に要求します。これには MSGQ および EMHQ の両方が含まれます。

シスプレックス端末管理が使用可能な場合、コマンド・マスターは適切なグローバル状況を判別するよう RM に要求します。

GLOBAL と LOCAL の両方を指定した場合 (これがデフォルトです)、コマンド・マスターはグローバル情報とローカル情報を別々に作成します。グローバル情報は 1 つの出力行 (または出力行セット) として表示され、ローカル情報は別の出力行 (または出力行セット) として表示されます。

ID ISC ノードのもう一方のハーフセッション修飾子名を表示します。

LOCAL

LOCAL が指定された場合、すべての IMS システムは、コマンド・マスターも含め、他の指定されている SHOW パラメーターに従ってローカル情報を表示します。これには、コマンドを処理する IMS にローカルな情報が含まれます。

LOCAL パラメーターは、コマンド・マスターを含むすべての IMS システムによって処理されます。

LOCAL は、共用キューまたはシスプレックス端末管理が使用されているかどうかに関わらず、どの環境にも適用されます。

GLOBAL と LOCAL の両方を指定した場合 (これがデフォルトです)、コマンド・マスターはグローバル情報とローカル情報を別々に作成します。グローバル情報は 1 つの出力行 (または出力行セット) として表示され、ローカル情報は別の出力行 (または出力行セット) として表示されます。

LTERM

ユーザーに関連付けられている論理端末 (LTERM) 名があれば、それを表示します。ユーザーには、0 個以上の論理端末が関連付けられている場合があります。ユーザーに関連付けられているそれぞれの LTERM は、別々のコマンド応答行に返されます。

SHOW(ALL) が指定された場合、LTERM 状況は含まれません。論理端末情報を他のすべての出力と一緒に表示するには、SHOW(ALL,LTERM) を指定します。

NODE

ユーザーが関連付けられている動的ノードまたは ISC ノードを表示します。

OWNER

リソース構造内のユーザー・リソースの所有者を表示します。これは、シスプレックス端末管理が使用可能で、コマンド・マスターのみで処理されている場合にのみ適用されます。他のすべての IMS システムはこのパラメーターを無視します。

所有者は、ユーザーを所有している IMS システムの IMSID (または XRF システムの RSENAME) です。IMS システムがユーザー・リソースを所有するのは、そのリソースがアクティブである (ユーザーがログオンしている) 場合、または IMS システムがそのリソースの重要な状況を保守している場合です。

PRESET

ユーザーの事前設定宛先名を表示します。ユーザーは、/SET コマンドの後に事前設定宛先モードになっています。事前設定宛先名は、トランザクション名または論理端末 (LTERM) 名です。このユーザーから入力されるすべてのメッセージは、事前設定宛先のトランザクションまたは LTERM に送信されます。

QCNT

ユーザーのメッセージ・キュー・カウントを表示します。キュー・カウントは、指定されたユーザーと関連付けられている LTERM ごとのキュー・カウントの合計です。

このコマンドで戻されるローカル・キュー・カウントの値は、このコマンドが実行された IMS システムによって処理されているメッセージを表します。共用キュー環境では、キューの評価のためにローカル・キュー・カウントを使用しないでください。このコマンドで戻されるグローバル・キュー・カウントは、共用キュー構造上の現行のメッセージ・キュー・カウントを表します。

LOCAL パラメーターも SHOW キーワードで指定されている場合、コマンド・マスターを含む、コマンドを処理するすべての IMS システムは、ローカル・キュー・カウントを表示します。これは、共用メッセージ・キューが使用可能であるかどうかに関係なく有効です。

GLOBAL パラメーターも SHOW キーワードで指定されていて、共用メッセージ・キューが使用可能である場合、コマンド・マスターには共用メッセージ・キュー (MSGQ) でのグローバル・キュー・カウントが表示されます。ユーザー・リソースがリソース構造に存在する場合、グローバル・ユーザー・リソースに関連付けられている関連付けられている LTERM は、共用キューからキュー・カウントを入手するために使用されます。その他の場合、ローカル・ユーザー・リソースに関連付けられている LTERM が使用されます。ただし、ユーザーがコマンド・マスターにローカルに存在していない場合は、キュー・カウントは 0 になります。

ローカル・キュー・カウントとグローバル・キュー・カウントは、別々の出力フィールドとして表示されます。

RECOVERY

ユーザーの状況リカバリー・モード (SRM) とリカバリー・レベルを表示します。エンド・ユーザー有効状況は、会話、高速機能、全機能応答モード、STSN (設定およびテスト・シーケンス番号) のいずれかの状況です。

SRM は、ユーザー・サインオフ、セッション、IMS の終了直後にエンド・ユーザー有効状況 (存在する場合) がリカバリーされる場所を判別します。出力はユーザーの SRM を、GLOBAL (シスプレックス端末管理がリソース構造内で状況をリカバリーします)、LOCAL (IMS がローカル側で状況をリカバリーし、これは特定の IMS に対する類似性を示します)、NONE (状況は破棄されます) のいずれかとして表示します。

リカバリー・レベルは、どのエンド・ユーザー有効状況 (存在する場合) をリカバリーするかを決定します (SRM が GLOBAL または LOCAL の場合)。出力には、会話状況がリカバリーされたか (RCVYCONV)、高速機能状況がリカバリーされたか (RCVYFP)、全機能応答モードがリカバリーされたか (RCVYRESP)、それとも STSN 状況がリカバリーされたか (RCVYSTSN) が表示されます。

STATUS

ユーザーのローカル状況またはグローバル状況に戻します。戻される可能性のある状況のリストと意味については、758 ページの『QUERY USER 状況』を参照してください。

USERID

ユーザーをノードにサインオンするために使用された RACF ユーザー ID。

VERSION

ユーザー・リソースの RM バージョン番号を表示します。これは、ユーザーに割り当てられたバージョン番号です。割り当ては MVS によって行われ、リソースがリソース構造で作成または更新される場合、RM によって保守されます。VERSION は、シスプレックス端末管理が使用可能な場合にのみ適用されます。VERSION は、シスプレックス端末管理が使用可能でなければ無視されます。

STATUS()

指定されたユーザー状況の少なくとも 1 つを持つユーザーを表示用に選択します。状況は、シスプレックス端末管理 (STM) が使用可能な場合、ローカルまたはグローバルに存在します。

STATUS フィルターは、シスプレックス端末管理環境と非シスプレックス端末管理環境の両方で有効です。シスプレックス端末管理環境では、選択された状況はローカルに存在するか、グローバルに存在するか、またはその両方に存在します。シスプレックス端末管理が使用可能でない場合、状況はローカルにのみ存在します。

SHOW(LOCAL) が指定されると、IMS はローカル・システム内で該当する状況にあるユーザーのみを選択します。コマンドは、コマンド・マスターを含むすべての IMS システムによって処理されます。

SHOW(GLOBAL) が指定され、シスプレックス端末管理が使用可能な場合、IMS はリソース構造内で該当する状況にあるユーザーのみを選択します。コマンドは、コマンド・マスターによってのみ処理されます。SHOW(GLOBAL) が指定され、シスプレックス端末管理が使用可能でない場合、コマンドはリジェクトされます。

SHOW(GLOBAL,LOCAL) が指定されると (これがデフォルトです)、IMS は、ローカルで、またはリソース構造内で、該当する状況にあるユーザーを選択

します (シスプレックス端末管理が使用可能な場合)。コマンドは、すべての IMS システムによって処理されます。コマンド・マスターは、グローバル情報とローカル情報の両方を処理します。

STATUS フィルターを指定した場合に戻される出力には、SHOW(STATUS) が指定されていなくても、ユーザーの状況が含まれます。

対応する状況のユーザーを選択するために使用できるフィルターを判別するには、758 ページの『QUERY USER 状況』を参照してください。

使用上の注意

QUERY USER コマンドは、OM API を介してのみ指定することができます。

QUERY USER コマンドは、XRF 代替システムで発行されますが、SHOW(GLOBAL) はサポートされません。ローカル情報のみが表示できます。

QUERY USER コマンドの処理は、IMS シスプレックス端末管理が使用可能であるかどうかにより異なります。

- IMS シスプレックス端末管理が使用不可に設定されている場合、各システムに対して、処理はローカル側で行われます。type-1 コマンドと type-2 コマンドの結果は同様になります。
- IMS シスプレックス端末管理が使用可能に設定されている場合、type-1 コマンドと type-2 コマンドによる処理は、ローカル情報を表示する際に同様になります。ただし、グローバル情報の表示方法については異なります。
- IMS シスプレックス端末管理を使用可能に設定して、type-1 /DISPLAY コマンドを実行すると、コマンド・マスターによって、リソース構造またはローカル・システムのいずれかから情報が表示されますが、両方から情報が表示されることはありません。表示されているリソースがシステムによって所有されていない場合、またはコマンド・マスターによって所有されている場合、コマンド・マスターによってグローバル・リソースが表示されます。しかし、リソースがコマンド・マスター以外のシステムによって所有されている場合、コマンド・マスターによってローカル・リソースのみが表示され、リソースを所有するそのシステムによってグローバル・リソースが表示されます。
- IMS シスプレックス端末管理を使用可能に設定して、type-2 QUERY コマンドを実行すると、リソースが所有されているかどうかに関係なく、グローバル・リソース情報を表示するシステムはコマンド・マスターのみになります。さらに、コマンド・マスターによってローカル・リソース情報も表示されます。コマンドを処理するその他のすべての IMS システムは、ローカル・リソース情報のみを表示します。この手法により、IMSplex 上のすべての情報をより柔軟性を持って表示することができます。

SHOW キーワードにより、コマンドを処理する IMS システムと、表示される情報が決定されます。

- SHOW(GLOBAL) が指定されると、コマンド・マスターはグローバル情報を表示します。これには、共用キューが使用可能な場合はグローバル・キュー・カウントが含まれ、シスプレックス端末管理が使用可能である (DFSDCxxx PROCLIB メンバーで STM=YES と定義されている) 場合はリソース構造からの状況が含まれます。これは、ユーザーが特定の IMS システムでアクティブであるかどうか

に関わらず当てはまります。OM がコマンドの経路指定先にするそれ以外のすべての IMS システムは、GLOBAL パラメーターを戻りコード X'00000004' および理由コード X'00001000' で無視します。

- SHOW(LOCAL) が指定された場合、OM がコマンドの経路指定先にする各 IMS システムは (コマンド・マスターも含め)、コマンドを処理し、各システムにローカルな情報を表示します。
- GLOBAL と LOCAL の両方を指定した場合 (これがデフォルトです)、コマンド・マスターはグローバル情報とローカル情報の両方を表示し、OM がコマンドの経路指定先にする他のすべての IMS システムはローカル情報を表示します。

類似の IMS タイプ 1 コマンド

以下の表は、各種の QUERY USER コマンドと、類似の機能を実行するタイプ 1 IMS コマンドを示しています。

表 214. QUERY USER コマンドと同等のタイプ 1 コマンド

QUERY USER コマンド	類似の IMS タイプ 1 コマンド
QUERY USER SHOW(AUTOLOGON)	/DISPLAY USER ユーザー AUTOLOGON
QUERY USER SHOW(CONV)	/DISPLAY CONV USER ユーザー
QUERY USER SHOW(EMHQ)	/DISPLAY USER ユーザー QCNT EMHQ
QUERY USER SHOW(ID)	/DISPLAY ASMT USER ユーザー
QUERY USER SHOW(LTERM)	/DISPLAY ASMT USER ユーザー
QUERY USER SHOW(NODE)	/DISPLAY ASMT USER ユーザー /DISPLAY USER ユーザー
QUERY USER SHOW(OWNER)	/DISPLAY USER ユーザー RECOVERY
QUERY USER SHOW(PRESET)	/DISPLAY USER ユーザー
QUERY USER SHOW(QCNT)	/DISPLAY USER ユーザー /DISPLAY USER ユーザー QCNT
QUERY USER SHOW(RECOVERY)	/DISPLAY USER ユーザー RECOVERY
QUERY USER SHOW(STATUS)	/DISPLAY USER ユーザー
QUERY USER SHOW(USERID)	/DISPLAY ASMT USER ユーザー /DISPLAY USER ユーザー
QUERY USER STATUS(CONV)	/DISPLAY CONV
QUERY USER STATUS(status)	/DISPLAY STATUS USER

出力フィールド

以下の表は、QUERY USER の出力フィールドを示しています。表の各列は、以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

フォーマット設定済み出力の出力フィールド用列見出しが含まれます。

SHOW パラメーター

フィールドを生成させる SHOW キーワードのパラメーターを識別します。

ゼロ以外の完了コードの場合に返される出力フィールドには、*Error* が表示されます。N/A (適用外) は、常に返される出力フィールドの場合に表示されています。

有効範囲

出力フィールドの有効範囲を識別します。GBL は、SHOW(GLOBAL) のグローバル情報を表示するとき、コマンド・マスターだけがフィールドを生成できることを示します。LCL は、SHOW(LOCAL) のローカル情報を表示するすべての IMS がフィールドを生成できることを示します。N/A (適用外) は、常に返される出力フィールドの場合に表示されています。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 215. QUERY USER コマンドの出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	SHOW パラメーター	有効範囲	意味
AUTID	AutLID	AUTOLOGON	GBL	リソース構造に自動ログオンする場合に使用する他のシステムのハーフセッション修飾子の ID。これは、ユーザーが並列セッション ISC ノードと関連している場合のみ適用されます。
AUTLD	AutLDsc	AUTOLOGON	GBL	リソース構造に自動ログオンする場合に使用するログオン記述子。
AUTMD	AutLMdt	AUTOLOGON	GBL	リソース構造に自動ログオンする場合に使用する VTAM モード・テーブル名。
AUTND	AutLNode	AUTOLOGON	GBL	リソース構造に自動ログオンする場合に使用するノード名。
CC	CC	N/A	N/A	出力行の完了コード。完了コードは、IMS が、指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示します。詳しくは、760 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』を参照してください。完了コードは常に戻されます。
CCTXT	CCText	<i>Error</i>	N/A	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
CONVID	ConvID	CONV	GBL	ユーザーに関連付けられた会話がリソース構造に存在する場合、その会話 ID。会話は、1 ユーザーあたりゼロ、1 個、またはそれ以上あることが考えられます。会話ごとに独自の出力行が生成されます。
CONVSTT	ConvStat	CONV	GBL	ユーザーに関連付けられた会話がリソース構造に存在する場合、その会話の状況。会話は、1 ユーザーあたりゼロ、1 個、またはそれ以上あることが考えられます。状況は以下のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • CONVHELD: 会話が保留中 • CONVACTV: 会話がアクティブ • CONVSCHD: 会話がスケジュール済み

表 215. QUERY USER コマンドの出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	SHOW パラメーター	有効範囲	意味
CONVTRN	ConvTran	CONV	GBL	ユーザーに関連付けられた会話がリソース構造に存在する場合、そのトランザクション。会話は、1 ユーザーあたりゼロ、1 個、またはそれ以上あることが考えられます。
EMHQ	EMHQCnt	EMHQ	GBL	EMH (急送メッセージ・ハンドラー) キュー内のグローバル LTERM キュー・カウント。EMHQ は、共用 EMH が使用されている場合にだけ表示されます。
GBL	Gbl	GLOBAL	GBL	「Y」の場合は、RM 内でグローバルに検出された状況が出力に反映されます。ブランクの場合は、ローカルで検出された状況が出力に反映されます。
ID	ID	ID	GBL	ISC 並列セッション端末の場合は、他のシステムのグローバル・ハーフセッション修飾子を表示します。
LAUTID	LAutLID	AUTOLOGON	LCL	ローカル・システムに自動ログオンする場合に使用する他のシステムのハーフセッション修飾子の ID。これは、ユーザーが並列セッション ISC ノードと関連している場合にのみ適用されます。
LAUTLD	LAutLDsc	AUTOLOGON	LCL	ローカル・システムに自動ログオンする場合に使用するログオン記述子。
LAUTMD	LAutLMdt	AUTOLOGON	LCL	ローカル・システムに自動ログオンする場合に使用する VTAM モード・テーブル名。
LAUTND	LAutLNode	AUTOLOGON	LCL	ローカル・システムに自動ログオンする場合に使用するノード名。
LCONVID	LConvID	CONV	LCL	ローカル・システムに関連付けられた会話がリソース構造に存在する場合、その会話 ID。会話は、1 ユーザーあたりゼロ、1 個、またはそれ以上あることが考えられます。会話ごとに独自の出力行が生成されます。
LCONVSTT	LConvStat	CONV	LCL	ユーザーに関連付けられた会話がローカル・システムに存在する場合、その会話の状況。会話は、1 ユーザーあたりゼロ、1 個、またはそれ以上あることが考えられます。状況は以下のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • CONVHELD: 会話が保留中 • CONVACTV: 会話がアクティブ • CONVSCHD: 会話がスケジュール済み
LCONVTRN	LConvTran	CONV	LCL	ローカル・システムに関連付けられた会話がリソース構造に存在する場合、そのトランザクション。会話は、1 ユーザーあたりゼロ、1 個、またはそれ以上あることが考えられます。
LID	LID	ID	LCL	ISC 並列セッション端末の場合、他のシステムのローカル・ハーフセッション修飾子を表示します。

表 215. QUERY USER コマンドの出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	SHOW パラメーター	有効範囲	意味
LLTERM	LLterm	LTERM	LCL	ローカル論理端末名。ユーザーに関連付けられた論理端末の名前です。
LNODE	LNode	NODE	LCL	ローカル・システム上のユーザーに関連付けられている動的ノードまたは静的ノードを識別します。
LPRST	LPreset	PRESET	LCL	ユーザーが /SET コマンドで設定される事前設定宛先モードになっている場合の事前設定宛先のトランザクション名または LTERM 名を識別します。この端末から入力されたすべてのメッセージは、事前設定された宛先のトランザクション・コードまたは LTERM へ送信されます。
LQ	LQCnt	QCNT	LCL	ローカル・キュー・カウント。
LRCVY	LRCvy	RECOVERY	LCL	ローカル・システム内のエンド・ユーザー有効状況のリカバリー・レベル。これは、どのタイプの状況がリカバリー可能であることを示します。 ここに示される値はいずれも、対応する状況がリカバリー可能であることを意味します。SRM が LOCAL の場合、状況はローカルでリカバリーされます。SRM が GLOBAL の場合、状況はグローバルにリカバリーされます。これらの値は、SRM が NONE であるか、SRM がない場合には適用されません。 戻される可能性のある状況値 (複数戻される可能性もあります) は以下のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> • CONV: IMS 会話はリカバリー可能です (RCVYCONV=YES)。 • FP: 高速機能状況はリカバリー可能です (RCVYFP=YES)。 • RESP: 全機能応答モード状況はリカバリー可能です (RCVYRESP=YES)。 • STSN: STSN 状況はリカバリー可能です (RCVYSTSN=YES)。
LSRM	LSRM	RECOVERY	LCL	ローカル・システム内の状況リカバリー・モード。これは、エンド・ユーザー有効状況が維持される、リカバリー元となる場所を決定します。出力は、以下のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • GBL: 状況は IMS リソース構造内にグローバルに保管されています。 • LCL: 状況はローカルの制御ブロックおよびログ・レコードに保管されています。 • NONE: 状況は IMS リソース構造にもログ・レコードにも保管されていません。 • ブランク: SRM がまだ確立されていないか、ユーザーがサインオンしていないため、エンド・ユーザー有効状況がありません。

表 215. QUERY USER コマンドの出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	SHOW パラメーター	有効範囲	意味
LSTT	LclStat	STATUS	LCL	ローカル・ユーザーの状況。可能なユーザー状況のリストと説明については、758 ページの『QUERY USER 状況』を参照してください。
LTERM	Lterm	LTERM	GBL	グローバル論理端末名。ユーザーに関連付けられた論理端末の名前です。
LUID	LUserid	USERID	LCL	ユーザーにサインオンしているローカル・ユーザー ID を識別します。
LVER	LVersion#	VERSION	LCL	ローカル・システム内で保守されているユーザー・リソースのバージョン番号。このフィールドは STM が有効な場合のみ適用されます。
MBR	MbrName	N/A	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー (モジュール単位)。出力を作成した IMS の IMS ID。IMS ID は常に戻されます。
NODE	Node	NODE	GBL	リソース構造内でユーザーに関連付けられている動的ノードまたは静的ノードを識別します。
OWNER	Owner	OWNER	GBL	リソース所有者。ユーザーがアクティブな場所での IMS ID または IMS の RSENAME。所有している IMS システムが存在せず、RM にリソースの項目が含まれている場合、所有者フィールドはブランクになります。
QCNT	QCnt	QCNT	GBL	共用キュー上のグローバル・キュー・カウント。グローバル・キュー・カウントは、共用キューが使用されている場合のみ表示できます。
RCVY	Rcvy	RECOVERY	GBL	リソース構造内のエンド・ユーザー有効状況のリカバリー・レベル。これは、どのタイプの状況がリカバリー可能であるかを示します。 ここに示される値はいずれも、対応する状況がリカバリー可能であることを意味します。SRM が LOCAL の場合、状況はローカルでリカバリーされます。SRM が GLOBAL の場合、状況はグローバルにリカバリーされます。これらの値は、SRM が NONE であるか、SRM がない場合には適用されません。 返される可能性がある状況値 (複数の場合もあります) は、以下のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> • CONV: IMS 会話はリカバリー可能です (RCVYCONV=YES)。 • FP: 高速機能状況はリカバリー可能です (RCVYFP=YES)。 • STSN: STSN 状況はリカバリー可能です (RCVYSTSN=YES)。

表 215. QUERY USER コマンドの出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	SHOW パラメーター	有効範囲	意味
SRM	SRM	RECOVERY	GBL	リソース構造内の状況リカバリー・モード。これは、エンド・ユーザー有効状況が維持される、リカバリー元となる場所を決定します。出力は、以下のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • GBL: 状況は IMS リソース構造内にグローバルに保管されています。 • LCL: 状況はローカルの制御ブロックおよびログ・レコードに保管されています。 • NONE: 状況は IMS リソース構造にもログ・レコードにも保管されていません。 • ブランク: SRM がまだ確立されていないか、ユーザーがサインオンしていないため、エンド・ユーザー有効状況がありません。
STT	Status	STATUS	GBL	グローバル・ユーザーの状況。可能なノード状況のリストと説明については、『QUERY USER 状況』を参照してください。
UID	Userid	USERID	GBL	ユーザーにサインオンしている RACF ユーザー ID を示します。
USER	User	N/A	N/A	ユーザー名。ユーザー名は常に戻されます。
VER	Version#	VERSION	GBL	リソース構造内で保守されているユーザー・リソースのバージョン番号。このフィールドは STM が有効な場合のみ適用されます。

QUERY USER 状況

以下の表は、表示される可能性があるユーザー状況を示しています。表の各列は、以下のとおりです。

Status

表示されるユーザー状況。

STATUS パラメーター

指定した状況のユーザーを選択する STATUS() フィルター。

有効範囲

状況の有効範囲。GBL は、状況をグローバルとすることができ (STM が使用可能な場合、それはリソース構造内に存在します)、STT ショート・ラベルとともに返されることを示します。LCL は、状況をローカルとすることができ、LSTT ショート・ラベルとともに返されることを示します。

意味 状況の簡略説明を提供します。

表 216. QUERY USER 状況

Status	STATUS パラメーター	有効範囲	意味
ALLOC	ALLOC	GBL および LCL	ユーザーまたは ISC サブプールはノードに割り振られます。

表 216. QUERY USER 状況 (続き)

Status	STATUS パ		意味
	ラメーター	有効範囲	
CONVACT	CONV	GBL および LCL	アクティブな会話が存在します。
CONVHELD	CONV	GBL および LCL	すべての会話を保留します。
DEADQ	DEADQ	LCL	ユーザーに送達不能キューがあるか、またはそのユーザーの最後のアクセス時間が DLQT JCL パラメーターで設定した限界の外にあります。 DEADQ 状況は、ユーザーのサインオンによって、あるいは /DEQUEUE コマンドまたは /ASSIGN コマンドの入力によって除去できます。
EXCL	EXCL	GBL および LCL	ユーザーは /EXCLUSIVE コマンドで設定される排他モードになっています。排他モードでは、影響を受ける端末が受信する出力を制限します。
MFST	MFST	GBL および LCL	ユーザーは UPDATE USER START(MFST) コマンドまたは /TEST MFS コマンドで設定される MFSTEST モードになっています。メッセージ・フォーマット・サービスでサポートされる端末は、要求されたフォーマット・ブロックが特別なテスト・ライブラリー内であれば、そのテスト・ライブラリーにあるフォーマット・ブロックを使用し、そこになれば、実動ライブラリーからブロックを取得します。
PRST	PRST	LCL	ユーザーは事前設定宛先モードになっています。PRST モードは /SET コマンドで設定されます。この端末から入力されたすべてのメッセージは、事前設定された宛先のトランザクション・コードまたは論理端末へ送信されます。
RESP	RESP	LCL	ユーザーが応答モードになっていて、応答メッセージが出力に使用できる状態か、または送信処理中です。
RESPINP	RESPINP	GBL および LCL	ユーザーが応答モードになっていて、応答モード入力がまだ未確定 (例えば、応答メッセージが出力として使用不能である) です。
RESPINPFP	RESPINPFP	GBL および LCL	ユーザーが高速機能応答モードになっていて、応答モード入力がまだ未確定 (例えば、応答メッセージが出力用に使用不能である) です。
RM	RM	GBL	ユーザーは、RM によって管理されるリソース構造内に存在します。

表 216. QUERY USER 状況 (続き)

Status	STATUS パ ラメーター		有効範囲	意味
RMACTIVE	RMACTIVE	GBL		ユーザーは、RM 構造で示されているように (RM active)、IMSpIex 内でアクティブです (サインオンしています)。
RMOWNED	RMOWNED	GBL		ユーザーは、RM 構造で示されているように (RM owned)、IMSpIex 内で IMS システムによって所有されています。
STATIC	STATIC	GBL および LCL		ユーザーはシステム定義時に定義されました。
STOSGN	STOSGN	GBL および LCL		ユーザーは UPDATE USER コマンドまたは /STOP USER コマンドを使用してサインオンを停止しました。
TEST	TEST	LCL		ユーザーは /TEST コマンドで設定されるテスト・モードになっています。テスト・モードまたはエコー・モードでは、端末からの入力はずべて端末に送り返されます。

戻りコード、理由コード、および完了コード

IMS 戻りコードと理由コードは、QUERY USER コマンドによって OM に戻されます。QUERY USER コマンドの結果として返される可能性のある OM 戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、QUERY USER コマンドの戻りコードと理由コード、およびそれぞれの簡略説明を示しています。

表 217. QUERY USER コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	コマンドは正常に完了しました。
X'00000004'	X'00001000'	IMS システムがコマンド・マスターでないため、その IMS システム上でコマンドが処理されませんでした。リソース情報は戻されません。
X'00000008'	X'00002014'	リソース名に無効文字が指定されました。
X'00000008'	X'00002040'	無効なパラメーター値が指定されました。無効な SHOW 値または STATUS 値が指定された可能性があります。
X'0000000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、761 ページの表 218 を参照してください。
X'0000000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、761 ページの表 218 を参照してください。

表 217. QUERY USER コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000010'	X'00004004'	コマンド処理は、CQS がアクティブでなかったために終了しました。
X'00000010'	X'00004005'	コマンド処理は、CQS がキュー構造に接続されなかったために終了しました。
X'00000010'	X'0000400C'	XRF 代替システムではコマンドは無効です。
X'00000010'	X'00004018'	コマンド処理は、リソース構造が使用可能でないために終了しました。
X'00000010'	X'0000401C'	FDBR 領域ではコマンドは無効です。
X'00000010'	X'00004104'	コマンド処理は、RM が使用可能でないために終了しました。
X'00000010'	X'00004108'	コマンド処理は、SCI が使用可能でないために終了しました。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できませんでした。
X'00000014'	X'00005008'	DFSPOOL ストレージを取得できませんでした。
X'00000014'	X'00005100'	コマンド処理は、RM エラーのために終了しました。
X'00000014'	X'00005104'	コマンド処理は、CQS エラーのために終了しました。
X'00000014'	X'00005108'	コマンド処理は、SCI エラーのために終了しました。
X'00000014'	X'00005FFF'	コマンド処理は、IMS の内部エラーのために終了しました。

以下の表には、完了コードの説明が記載されています。このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 218. QUERY USER コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		リソースに対する QUERY USER コマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。これがワイルドカードを使用した要求である場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。
98	CQS REQUEST ERROR	CQS エラーのために、グローバル・キュー・カウントを取得できませんでした。

表 218. QUERY USER コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
1A2	User Resource is in error	ユーザー・リソースがリソース構造で検出され、関連するリソースが必要でしたが、そのリソースが検出されなかったかエラーを起こしているようです。これは、通常ではエラー状態です。しかし、端末またはコマンドのアクティビティーによる一時的な状態の可能性もあります。コマンドを再試行してください。

例

以下に示すのは QUERY USER コマンドの例です。

QUERY USER コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QRY USER NAME(USER2*,XYZ) SHOW(LOCAL)
```

TSO SPOC 出力:

```
User      MbrName CC CCText
USER23    IMS1    0
USER23    IMS2    0
USER24A   IMS2    0
USER24B   IMS2    0
USER24C   IMS2    0
XYZ       IMS1    10 NO RESOURCES FOUND
XYZ       IMS2    10 NO RESOURCES FOUND
```

説明: IMSplex には 2 つの IMS システムがあります。IMS1 と IMS2 です。ローカル情報だけを要求するので、STM および共用キューは無関係です。IMS1 はコマンド・マスターですが、グローバル情報は要求されていないため、ローカル情報だけを表示します。IMS2 はローカル情報のみを表示します。

- USER23 は IMS1 および IMS2 上に存在します。
- USER24A は IMS2 上に存在します。
- USER24B は IMS2 上に存在します。
- USER24C は IMS2 上に存在します。
- XYZ は、どのシステムにも存在しません。

QUERY USER コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
QRY USER NAME(USER2*)
```

TSO SPOC 出力:

```
User      MbrName CC Gbl
USER23    IMS1    0 Y
USER23    IMS1    0
USER23    IMS2    0
USER24A   IMS1    0 Y
USER24A   IMS2    0
USER24B   IMS1    0 Y
```

```

USER24B  IMS2    0
USER24C  IMS2    0
USER25   IMS1    0 Y
USER26   IMS1    0 Y

```

説明: IMSplex には 2 つの IMS システムがあります。IMS1 と IMS2 です。RM は状況を維持しています (STM=YES)。キュー・カウントを要求しないので、共用キューは無関係です。IMS1 はコマンド・マスターであり、グローバル情報およびローカル情報を表示します。IMS2 はローカル情報のみを表示します。

- USER23 は IMS1 上と IMS2 上、およびリソース構造内に存在します。
- USER24A は IMS2 上およびリソース構造内に存在します。
- USER24B は IMS2 上およびリソース構造内に存在します。
- USER24C は IMS2 上にのみ存在します。
- USER25 はリソース構造内にのみ存在します。
- USER26 はリソース構造内にのみ存在します。

QUERY USER コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
QRY USER NAME(USER2*) STATUS(STATIC) SHOW(LOCAL)
```

TSO SPOC 出力:

User	MbrName	CC	CCText	LclStat
USER24A	IMS2	0		ALLOC,STATIC
USER24B	IMS2	0		ALLOC,STATIC
USER24C	IMS2	0		STATIC
USER2*	IMS1	10	NO RESOURCES FOUND	

説明: IMSplex には 2 つの IMS システムがあります。IMS1 と IMS2 です。グローバル情報は要求されていないため、RM および共用キューは無関係です。IMS1 はコマンド・マスターですが、SHOW(LOCAL) が指定されているため、ローカル情報だけを表示します。IMS2 はローカル情報のみを表示します。静的ユーザーがすべて表示され、さらに STATUS フィルターが指定されていたために状況も表示されます。IMS1 では、指定された名前と一致する静的ユーザーが検出されませんでした。

- USER24A は IMS2 上に存在し、ノードに割り振られます。
- USER24B は IMS2 上に存在し、ノードに割り振られます。
- USER24C は IMS2 上に存在しますが割り振られません。

QUERY USER コマンドの例 4

TSO SPOC 入力:

```
QRY USER NAME(USER25) SHOW(GLOBAL,CONV,LTERM,STATUS)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

User	MbrName	CC	Gbl	Lterm	ConvID	ConvTran	ConvStat
USER25	IMS1	0	Y				
USER25	IMS1	0	Y	LTERM25A			
USER25	IMS1	0	Y	LTERM25B			
USER25	IMS1	0	Y		1	TRAN1A	CONVHELD
USER25	IMS1	0	Y		2	TRAN1A	CONVHELD
USER25	IMS1	0	Y		3	TRAN1A	CONVACTV

(右にスクロールして、画面 2 へ)

User	MbrName	Gbl	Status
USER25	IMS1	Y	CONVACT, RM
USER25	IMS1	Y	
USER25	IMS1	Y	
USER25	IMS1	Y	
USER25	IMS1	Y	
USER25	IMS1	Y	

説明: IMSplex には 2 つの IMS システムがあります。IMS1 と IMS2 です。RM は状況を維持しています (STM=YES)。キュー・カウントを要求しないので、共用キューは無関係です。IMS1 はコマンド・マスターであり、グローバル情報のみを表示します。IMS2 は、グローバル情報のみが要求されているため、コマンド (RC=4, RSN=x1000) を無視します。

USER25 はリソース構造内に存在します。IMS1 は、ユーザーが IMSplex 内でアクティブでなく (サインオンしていない)、会話がアクティブなことを示すグローバル行を表示します。ユーザーには 2 つの LTERM が割り当てられ、これらは別々の出力行に表示されます。ユーザーに関連付けられた会話が 3 つあり、これらは別々の出力行に表示されます。

QUERY USER コマンドの例 5

TSO SPOC 入力:

```
QRY USER NAME(USER23) SHOW(CONV,STATUS,OWNER,RECOVERY)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

User	MbrName	CC	Gbl	Owner	SRM	Rcvy
USER23	IMS1	0	Y	IMS2	LCL	CONV,FP
USER23	IMS1	0				
USER23	IMS2	0				
USER23	IMS2	0				
USER23	IMS2	0				

(右にスクロールして、画面 2 へ)

User	MbrName	Gbl	ConvID	ConvTran	ConvStat	Status
USER23	IMS1	Y				ALLOC, RM, RMACTIVE, RMOWNED
USER23	IMS1					
USER23	IMS2					
USER23	IMS2					
USER23	IMS2					

(右にスクロールして、画面 3 へ)

User	MbrName	Gbl	LSRM	LRcvy	LConvID	LConvTran	LConvStat	LclStat
USER23	IMS1	Y						
USER23	IMS1		LCL	CONV,FP				
USER23	IMS2		LCL	CONV,FP				ALLOC, CONVACT
USER23	IMS2				1	TRAN1A	CONVHELD	
USER23	IMS2				2	TRAN1B	CONVACTV	

説明: IMSplex には 2 つの IMS システムがあります。IMS1 と IMS2 です。RM は状況を維持しています (STM=YES)。キュー・カウントを要求しないので、共用キューは無関係です。IMS1 はコマンド・マスターであり、グローバル情報およびローカル情報を表示します。IMS2 はローカル情報を表示します。

USER23 は IMS1 上と IMS2 上、およびリソース構造内に存在します。IMS1 は、ユーザーがアクティブで IMS2 に所有されていることを示すグローバル行を表示し

ます。その状況リカバリー・モードは LOCAL で、これは会話情報がグローバルに認識されていないことを意味します。IMS1 は、USER23 がローカルに存在しているが、ローカル状況がないことを示すローカル行も表示します。IMS2 はアクティブ・ユーザーのローカル情報を表示します。この情報には、アクティブな会話が存在することを示す状況表示行が 1 行と、アクティブまたはローカルで保留中の会話ごとに追加の出力行が含まれます。

QUERY USER コマンドの例 6

TSO SPOC 入力:

```
QRY USER NAME(USER23) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

User	MbrName	CC	Gbl	QCnt	EMHCnt	Owner	SRM	Rcvy	Userid	Node	Version#
USER23	IMS1	0	Y	0	0	IMS2	LCL	CONV,FP	UID23	NODE23	38
USER23	IMS1	0									
USER23	IMS2	0									

(右にスクロールして、画面 2 へ)

User	MbrName	Gbl	AutLNode	AutLMdt	AutLDsc	AutLID	Status
USER23	IMS1	Y	NODE23	SLU2MOD2	NODE23		ALLOC, RM, RMACTIVE, RMOWNED
USER23	IMS1						
USER23	IMS2						

(右にスクロールして、画面 3 へ)

User	MbrName	Gbl	LQCnt	LSRM	LRcvy	LUserid	LNode	LVersion#	LPreset
USER23	IMS1	Y							
USER23	IMS1		0	LCL	CONV,FP			0	
USER23	IMS2		0	LCL	CONV,FP	UID23	NODE23	38	


(右にスクロールして、画面 4 へ)

User	MbrName	Gbl	LAutLNode	LAutLMdt	LAutLDsc	LAutLID	LclStat
USER23	IMS1	Y					
USER23	IMS1						
USER23	IMS2		NODE23	SLU2MOD2	NODE23		ALLOC, CONVACT

説明: IMSplex には 2 つの IMS システムがあります。IMS1 と IMS2 です。RM は状況を維持しています (STM=YES)。共用キューはアクティブです。IMS1 はコマンド・マスターであり、グローバル情報およびローカル情報を表示します。IMS2 はローカル情報を表示します。

USER23 は IMS1、IMS2、およびリソース構造内に存在します。IMS1 はリソース構造からのグローバル・キュー・カウントとグローバル状況を示すグローバル行を表示します。グローバル状況は、ユーザーが IMS2 上でアクティブで、その状況リカバリー・モードは LOCAL であることを示します。これは会話情報がグローバルに認識されていないことを意味します。IMS1 は、USER23 がローカルに存在しているが、ローカル状況がないことを示すローカル行も表示します。IMS2 はアクティブ・ユーザーのローカル情報を表示します。この情報は、会話状況がローカルに存在することを示します。

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連タスク:

➡ DLQT パラメーターを使用した DEADQ 状況時間の設定 (コミュニケーションおよびコネクション)

関連資料:

- ➡ /DISPLAY ASMT コマンド (コマンド)
- ➡ /DISPLAY CONV コマンド (コマンド)
- ➡ /DISPLAY STATUS コマンド (コマンド)
- ➡ /DISPLAY USER コマンド (コマンド)
- ➡ コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

QUERY USEREXIT コマンド

タイプ 2 QUERY USEREXIT コマンドは、IMS PROCLIB データ・セットの DFSDFxxx メンバーの USER_EXITS セクションで定義されているユーザー出口に関する情報を表示するために使用します。DFSDFxxx メンバーの USER_EXITS セクションに指定されていないユーザー出口に関する情報は、QUERY USEREXIT コマンドの出力には表示されません。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 767 ページの『キーワード』
- 769 ページの『使用上の注意』
- 769 ページの『出力フィールド』
- 770 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 771 ページの『例』

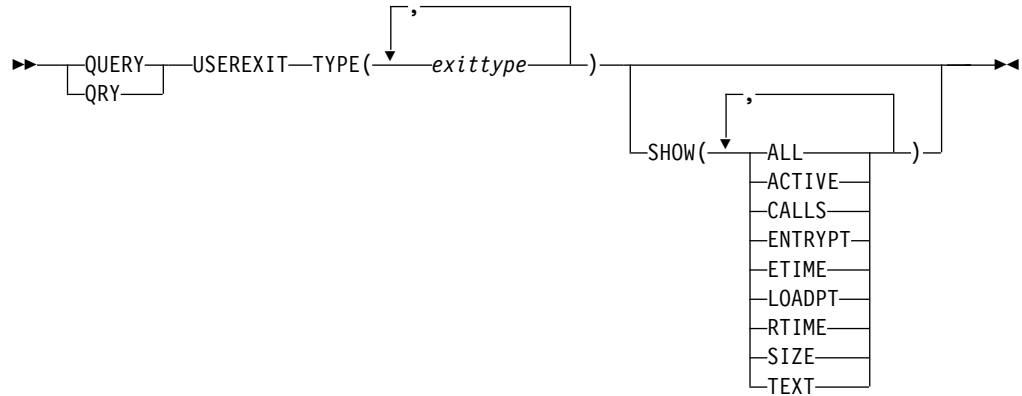
環境

以下の表には、QUERY USEREXIT コマンドおよびキーワードを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 219. QUERY USEREXIT コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUERY USEREXIT	X	X	X
SHOW	X	X	X
TYPE	X	X	X

構文



キーワード

以下のキーワードは、QUERY USEREXIT コマンドに有効です。

TYPE()

情報を表示する 1 つ以上のユーザー出口タイプを指定します。単一のユーザー出口タイプまたはコンマで区切ったユーザー出口タイプのリストを指定することができます。SHOW キーワードが指定されていない場合は、指定されたタイプの出口ルーチンの名前のみが返されます。有効なユーザー出口タイプは、以下のとおりです。

AOIE

タイプ 2 自動化操作プログラム・ユーザー出口

BSEX

セキュリティー環境構築ユーザー出口

ICQSEVNT

IMS CQS イベント・ユーザー出口

ICQSSTEV

IMS CQS 構造イベント・ユーザー出口

IMSMON

IMS モニター・ユーザー出口

INITTERM

初期化/終了ユーザー出口

LOGEDIT

ログ編集ユーザー出口

LOGWRT

ロガー・ユーザー出口

NDMX

廃棄不能メッセージ・ユーザー出口

OTMAIOED

OTMA 入出力編集ユーザー出口

OTMAYPRX

OTMA 宛先解決ユーザー出口

OTMARTUX

OTMA RESUME TPIPE セキュリティー・ユーザー出口

PGMCREAT

PGMCREAT ユーザー出口

PPUE

パートナー製品ユーザー出口

RASE

リソース・アクセス・セキュリティー・ユーザー出口

RESTART

再始動ユーザー出口

SHOW()

コマンド応答の出力フィールドに返される、ユーザー出口ルーチンに関する情報を指定します。出口タイプ・フィールドとモジュール名フィールドは、そのユーザー出口タイプの出力を作成した IMS の名前および完了コードと共に、常に返されます。指定できる有効なフィールドは、以下のとおりです。

ALL

すべての可能な出力フィールドが返されます。

ACTIVE

ユーザー出口ルーチンの現在のアクティブ・インスタンスの数。これは、まだ進行中であり IMS に戻っていないユーザー出口への呼び出し回数を表す、特定時点の数です。

CALLS

ユーザー出口ルーチンの最後のリフレッシュ以降の、ユーザー出口への呼び出し回数。パフォーマンス上の理由から、IMS がこの数を収集するとき、シリアライゼーションは取得されません。複数インスタンスを並列で実行できる出口タイプの場合、この数は概算値です。このフィールドに示される可能性がある最大値は、4,294,967,295 ($2^{32}-1$) です。呼び出しカウントがこの値を超えた場合は、フィールドはロールオーバーし、再びゼロから開始されます。

ENTRYPT

ユーザー出口ルーチンのエントリー・ポイントのアドレス。

ETIME

出口モジュールが最後にリフレッシュされた以降に、その出口モジュールで費やされた合計 (累積) 経過時間 (ミリ秒)。パフォーマンス上の理由から、IMS がこの数を収集するとき、シリアライゼーションは取得されません。複数インスタンスを並列で実行できる出口タイプの場合、この数は概算値です。このフィールドに表示できる最大値は 2,147,483,647 ($2^{31}-1$) です。経過時間がこの値を超えた場合、2147483647 が表示されます。

LOADPT

ユーザー出口ルーチンがロードされたアドレス。

RTIME

ユーザー出口ルーチンが最後にリフレッシュされた (リフレッシュが行われていない場合は、最初にロードされた) ローカルの日時。出力フィールドのフォーマットは次のとおりです。

yyyy-mm-dd hh:mm:ss.th

SIZE

ユーザー出口ロード・ルーチンのサイズ (バイト数)。この値は 16 進数で表示されます。

TEXT

出口モジュールのエントリ・ポイントから +04 のオフセットから始まる 32 バイト。EBCDIC に変換され、ピリオド (.) で置き換えられた印刷不能文字を含みます。これはモジュール識別情報に共通のロケーションです。ご使用のユーザー出口ルーチンで、モジュール内のこのポイントに印刷可能な識別データが含まれている場合は、TEXT オプションを使用するとその情報を表示できます。

使用上の注意

QRY USEREXIT コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

出力には、QUERY USEREXIT コマンドで指定された各ユーザー出口タイプ内のユーザー出口モジュールごとに 1 つの項目が含まれます。このコマンドの出力は XML で定義されており、OM と通信する自動化プログラムで使用できます。

QRY USEREXIT コマンドは、IMSpIex のデフォルト・ルーチンとして、IMSpIex 内のすべての IMS システムに経路指定されます。

出力フィールド

以下の表には、QUERY USEREXIT 出力フィールドが記載されています。表の各列は、以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。

有効範囲

出力フィールドの有効範囲を識別します。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 220. QUERY USEREXIT コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
ACTIVE	アクティブ	ACTIVE	LCL	この出口モジュールのアクティブ・インスタンスの数。
CALLS	Calls	CALLS	LCL	最後のリフレッシュ以降のこのユーザー出口モジュールへの呼び出し回数。

表 220. QUERY USEREXIT コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
CC	CC	N/A	N/A	出力行の完了コード。完了コードは常に戻されます。
CCTXT	CCText	N/A	N/A	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
ENTRYPT	EntryPt	ENTRYPT	LCL	このユーザー出口モジュールのエントリー・ポイント。
ETIME	ElapseTime	ETIME	LCL	最後のリフレッシュ以降にこのユーザー出口モジュールで費やされた合計時間。
LOADPT	LoadPt	LOADPT	LCL	このユーザー出口モジュールのロード・ポイント。
MBR	MbrName	N/A	N/A	出力行を作成した IMSPLEX メンバー。メンバー名は常に戻されます。
NAME	ModName	N/A	LCL	ユーザー出口モジュール名。ユーザー出口モジュール名は、常に戻されます。
RTIME	RefreshTime	RTIME	LCL	このユーザー出口モジュールが最後にリフレッシュされた時刻。
SIZE	ModSize	SIZE	LCL	このユーザー出口モジュールのサイズ (16 進数)。
TEXT	ModuleText	TEXT	LCL	EBCDIC に変換された、このユーザー出口モジュールからの 32 バイト。
TYPE	ExitType	TYPE	LCL	QUERY コマンドで要求されたユーザー出口タイプ。ユーザー出口タイプは常に戻されます。

戻りコード、理由コード、および完了コード

QUERY USEREXIT コマンドの結果として戻される戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表には、QUERY USEREXIT コマンドの戻りコード、理由コード、および完了コードが記載されています。また、この表にはコードの簡略説明も含まれています。

表 221. QUERY USEREXIT コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUERY USEREXIT コマンドは正常に完了しました。
X'00000004'	X'00001010'	QUERY USEREXIT コマンドは、TYPE パラメーターに一致するユーザー出口ルーチンが検出されなかったため、処理されませんでした。

表 221. QUERY USEREXIT コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'0000000C'	X'00003000'	QUERY USEREXIT コマンドは、少なくとも 1 つのユーザー出口タイプについては正常に実行されました。1 つ以上のユーザー出口タイプについて、QUERY USEREXIT コマンドは正常に実行されていません。完了コードに、エラーの理由とユーザー出口タイプが示されています。QUERY USEREXIT コマンドにより戻される可能性がある完了コードは、表 222 にリストされています。
X'0000000C'	X'00003004'	QUERY USEREXIT コマンドは指定したどのユーザー出口タイプについても正常に実行されませんでした。完了コードに、エラーの理由とユーザー出口タイプが示されています。QUERY USEREXIT コマンドにより戻される可能性がある完了コードは、表 222 にリストされています。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファーを取得できなかったため、QUERY USEREXIT コマンド処理は終了しました。
X'00000014'	X'00005FFF'	内部エラーが原因で、QUERY USEREXIT コマンド処理は終了しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

以下の表には、QUERY USEREXIT コマンドで戻される可能性のある完了コードが記載されています。

表 222. QUERY USEREXIT コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		QUERY USEREXIT コマンドは、ユーザー出口ルーチンに対して正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	指定されたユーザー出口タイプはどれも、コマンドを処理した IMS に認識されません。ユーザー出口タイプの入力に誤りがある可能性があります。コマンドでユーザー出口タイプのスペルが正しく入力されていることを確認してください。

例

以下に示すのは QUERY USEREXIT コマンドの例です。

QUERY USEREXIT コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QRY USEREXIT TYPE(INITTERM) SHOW(CALLS,RTIME)
```

TSO SPOC 出力:

```
Response for: QRY USEREXIT TYPE(INITTERM) SHOW(CALLS,RTIME)
ExitType ModName MbrName CC Calls RefreshTime
INITTERM DFSITRX2 SYS3 0 1 2013-04-22 10:20:41.12
INITTERM DFSITRX0 SYS3 0 1 2013-04-22 10:20:41.12
INITTERM DFSITRX1 SYS3 0 1 2013-04-22 10:20:41.12
```

OM API 入力:

```
CMD(QRY USEREXIT TYPE(INITTERM) SHOW(CALLS,RTIME))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.4.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2013.112 17:23:12.064868</statime>
<stotime>2013.112 17:23:12.065191</stotime>
<staseq>CB4069B7E1D642A1</staseq>
<stoseq>CB4069B7E1EA75A1</stoseq>
<rqsttkn1>USRT003 10102312</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>SYS3 </master>
<userid>USRT003 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>USEREXIT </kwd>
<input>QRY USEREXIT TYPE(INITTERM) SHOW(CALLS,RTIME) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="TYPE" l1b1="ExitType" scope="LCL" key="YES" len="8"
  dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="NAME" l1b1="ModName" scope="LCL" key="YES" len="8"
  dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" key="NO" len="4"
  dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" key="NO" len="4" dtype="INT"
  align="right" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="CALLS" l1b1="Calls" scope="LCL" key="YES" len="10"
  dtype="INT" align="right" />
<hdr s1b1="RTIME" l1b1="RefreshTime" scope="LCL" key="no" len="22"
  dtype="CHAR" align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>TYPE(INITTERM) NAME(DFSITRX2) MBR(SYS3) CC( 0) CALLS(
  1) RTIME(2013-04-22 10:20:41.12) </rsp>
<rsp>TYPE(INITTERM) NAME(DFSITRX0) MBR(SYS3) CC( 0) CALLS(
  1) RTIME(2013-04-22 10:20:41.12) </rsp>
<rsp>TYPE(INITTERM) NAME(DFSITRX1) MBR(SYS3) CC( 0) CALLS(
  1) RTIME(2013-04-22 10:20:41.12) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>
```

QUERY USEREXIT コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
QRY USEREXIT TYPE(AOIE) SHOW(CALLS,RTIME)
```

TSO SPOC 出力:


```
Response for: QRY USEREXIT TYPE(INITTERM) SHOW(CALLS,RTIME)
ExitType ModName MbrName CC Calls RefreshTime
AOIE DFSAOE00 SYS3 0 1 2013-04-22 10:20:41.12
AOIE USREXIT2 SYS3 0 1 2013-04-22 10:20:41.12
```

OM API 入力:

```
CMD(QRY USEREXIT TYPE(AOIE) SHOW(CALLS,RTIME))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.4.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2013.112 17:23:12.064868</statime>
<stotime>2013.112 17:23:12.065191</stotime>
<staseq>CB4069B7E1D642A1</staseq>
<stoseq>CB4069B7E1EA75A1</stoseq>
<rqsttkn1>USRT003 10102312</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>SYS3 </master>
<userid>USRT003 </userid>
<verb>QRY </verb>
<kwd>USEREXIT </kwd>
<input>QRY USEREXIT TYPE(INITTERM) SHOW(CALLS,RTIME) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="TYPE" l1b1="ExitType" scope="LCL" key="YES" len="8"
  dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="NAME" l1b1="ModName" scope="LCL" key="YES" len="8"
  dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" key="NO" len="4"
  dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" key="NO" len="4" dtype="INT"
  align="right" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="CALLS" l1b1="Calls" scope="LCL" key="YES" len="10"
  dtype="INT" align="right" />
<hdr s1b1="RTIME" l1b1="RefreshTime" scope="LCL" key="no" len="22"
  dtype="CHAR" align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>TYPE(AOIE) NAME(DFSAOE00) MBR(SYS3) CC( 0) CALLS(
  1) RTIME(2013-04-22 10:20:41.12) </rsp>
<rsp>TYPE(AOIE) NAME(USREXIT2) MBR(SYS3) CC( 0) CALLS(
  1) RTIME(2013-04-22 10:20:41.12) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>
```

説明: 初期設定/終了出口に関する情報が表示されています。情報には、ユーザー出口がロードされた以降のユーザー出口への呼び出しの回数、およびユーザー出口ルーチンがロードされた日時が含まれています。

QUERY USEREXIT コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
QRY USEREXIT TYPE(PGMCREAT) SHOW(CALLS,RTIME)
```

TSO SPOC 出力:

ExitType	ModName	MbrName	CC	Calls	RefreshTime
PGMCREAT	DFSDFPX0	IMS1	0	1	2013-04-22 10:20:41.12

関連概念:

[🔗](#) CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

[🔗](#) コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

QUERY USERID コマンド

QUERY USERID コマンドは、IMSplex 全体にわたるユーザー ID に関する情報を表示するために使用します。このコンテキストでは、ユーザー ID はユーザー・セキュリティまたは端末セキュリティに使用されます。ユーザー ID はユーザーと同じではなく、動的 (ETO) ユーザーか、静的または動的 (ETO) ISC サブプール・ユーザーのいずれかです。このコマンドは、OM API を介してのみ指定することができます。これは XRF 代替システムではコマンドは無効です。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 775 ページの『キーワード』
- 777 ページの『使用上の注意』
- 778 ページの『類似の IMS タイプ 1 コマンド』
- 778 ページの『出力フィールド』
- 780 ページの『QUERY USERID 状況』
- 780 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 782 ページの『例』

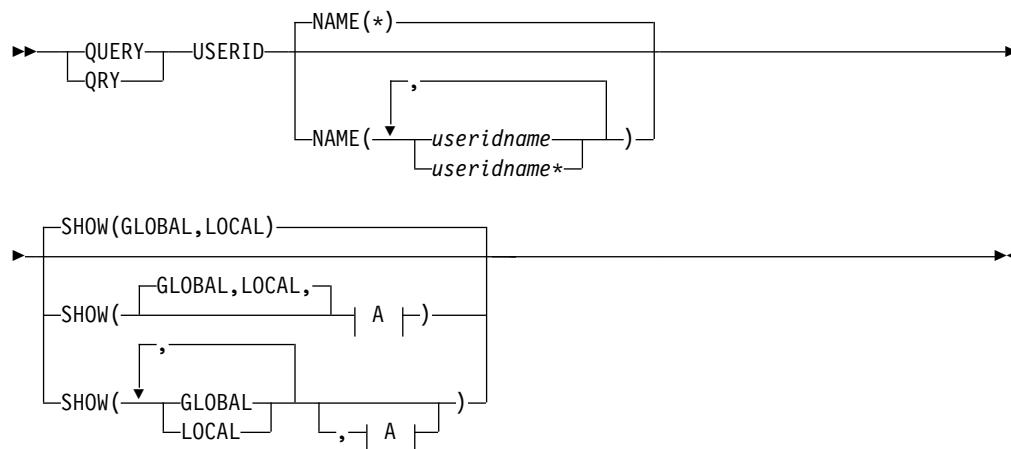
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 223. QUERY USERID コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUERY USERID	X		X
NAME	X		X
SHOW	X		X

構文



A:



キーワード

以下のキーワードは、`QUERY USERID` コマンドに有効です。

NAME()

表示する 1 つ以上のユーザー ID の名前を指定します。有効な名前は 1 から 8 文字で、ワイルドカードが指定できます。すべてのユーザー ID を表示するには、`NAME(*)` を指定します。デフォルト値は `NAME(*)` です。

SHOW()

戻されるユーザー ID 出力フィールドを指定します。ユーザー ID は、出力を作成した IMS の名前および完了コードとともに、常に戻されます。SHOW が指定されなかった場合、ユーザー名のみが戻されます。この方法をシステム管理アプリケーションで利用すれば、IMSplex 内で現在認識されているすべてのユーザー ID のリストを入手できます。

表示する情報を IMS が入手する場所 (グローバル・リソースまたはローカル・リソース) を指定するために、2 つのパラメーター `GLOBAL` と `LOCAL` が使用されます。デフォルトは `GLOBAL` と `LOCAL` の両方です。

残りのパラメーターは表示される情報を指定するために使用されます。

SHOW キーワードでサポートされるパラメーターには、以下のものがあります。パラメーターの指定順は任意です。

ALL

すべての出力フィールドを戻します。

GLOBAL

GLOBAL が指定されると、コマンド・マスターは、他の SHOW パラメーターの指定状況に応じてグローバル情報を表示します。これには、リソース構造からの情報が含まれます。

GLOBAL パラメーターは、コマンド・マスターによってのみ処理されます。他のすべての IMS システムはこのパラメーターを無視します。LOCAL が一緒に指定されなかった場合、コマンド・マスター以外のすべての IMS システムは、コマンドを無視します。

GLOBAL は、コマンド・マスターがシスプレックス端末管理を使用している場合にのみ適用されます。

コマンド・マスターがシスプレックス端末管理を使用していない場合、GLOBAL は適用されません。この環境で LOCAL も指定されている場合、GLOBAL は無視されます。その他の場合、コマンド・マスターはコマンドをリジェクトします。

シスプレックス端末管理が使用可能な場合、コマンド・マスターは適切なグローバル状況を判別するよう RM に要求します。

GLOBAL と LOCAL の両方を指定した場合 (これがデフォルトです)、コマンド・マスターはグローバル情報とローカル情報を別々に作成します。グローバル情報は 1 つの出力行として表示され、ローカル情報は別の出力行として表示されます。

LOCAL

すべての IMS システムは、コマンド・マスターも含め、他の指定されている SHOW パラメーターに従ってローカル情報を表示することを指定します。これには、コマンドを処理する IMS にローカルな情報が含まれます。

LOCAL パラメーターは、コマンド・マスターを含むすべての IMS システムによって処理されます。

LOCAL は、シスプレックス端末管理が使用されているかどうかに関係なく、どの環境にも適用されます。

GLOBAL と LOCAL の両方を指定した場合 (これがデフォルトです)、コマンド・マスターはグローバル情報とローカル情報を別々に作成します。グローバル情報は 1 つの出力行として表示され、ローカル情報は別の出力行として表示されます。

NODE

ユーザー ID がサインオンしているノードを表示します。これは静的ノードまたは動的ノードのいずれかとなります。

OWNER

リソース構造内のユーザー ID リソースの所有者を表示します。これは、シスプレックス端末管理が使用可能で、コマンド・マスターのみで処理されている場合にのみ適用されます。他のすべての IMS システムはこのパラメーターを無視します。

所有者は、ユーザー ID を所有している IMS システムの IMSID (または XRF システムの RSENAME) です。IMS システムがユーザー ID リソースを所有するのは、そのリソースがアクティブである (ユーザー ID がサインオンしている) 場合です。

STATUS

ユーザー ID のローカル状況またはグローバル状況を戻します。戻される可能性のある状況のリストと意味については、780 ページの『QUERY USERID 状況』を参照してください。

USER

ユーザー ID に関連付けられている動的ユーザーまたは ISC ユーザーを表示します。

VERSION

ユーザー ID リソースの RM バージョン番号を表示します。これはユーザー ID に割り当てられたバージョン番号で、そのリソースがリソース構造内で作成されるか更新される時、MVS によって割り当てられ、RM によって保守されます。VERSION は、シスプレックス端末管理が使用可能な場合にのみ適用されます。VERSION は、シスプレックス端末管理が使用可能でなければ無視されます。グローバル・バージョン番号のみが表示されます。IMS は、ローカル・システム内のバージョン番号は保守しません。

使用上の注意

QUERY USERID コマンドは、OM API を介してのみ指定することができます。

QUERY USERID コマンドは、XRF 代替システムではサポートされません。

QUERY USERID コマンドの処理は、IMS シスプレックス端末管理が使用可能であるかどうかによって異なります。

- IMS シスプレックス端末管理が使用不可に設定されている場合、各システムに対して、処理はローカル側で行われます。type-1 コマンドと type-2 コマンドの結果は同様になります。
- IMS シスプレックス端末管理が使用可能に設定されている場合、type-1 コマンドと type-2 コマンドによる処理は、ローカル情報を表示する際に同様になります。ただし、グローバル情報の表示方法については異なります。
- IMS シスプレックス端末管理を使用可能に設定して、type-1 /DISPLAY コマンドを実行すると、コマンド・マスターによって、リソース構造またはローカル・システムのいずれかから情報が表示されますが、両方から情報が表示されることはありません。表示されているリソースがシステムによって所有されていない場合、またはコマンド・マスターによって所有されている場合、コマンド・マスターによってグローバル・リソースが表示されます。しかし、リソースがコマンド・マスター以外のシステムによって所有されている場合、コマンド・マスターによってローカル・リソースのみが表示され、リソースを所有するそのシステムによってグローバル・リソースが表示されます。
- IMS シスプレックス端末管理を使用可能に設定して、type-2 QUERY コマンドを実行すると、リソースが所有されているかどうかに関係なく、グローバル・リソース情報を表示するシステムはコマンド・マスターのみになります。さらに、コマンド・マスターによってローカル・リソース情報も表示されます。コマンドを処理するその他のすべての IMS システムは、ローカル・リソース情報のみを表示します。この手法により、IMSpIex 上のすべての情報をより柔軟性を持って表示することができます。

SHOW キーワードにより、コマンドを処理する IMS システムと、表示される情報が決定されます。

- SHOW(GLOBAL) が指定された場合、コマンド・マスターはグローバル情報を表示し、これには、シスプレックス端末管理が使用可能である (DFSDCxxx PROCLIB メンバー内で STM=YES が定義されている) 場合はリソース構造からの状況が含まれます。これは、ユーザー ID が特定の IMS システムでアクティブであるかどうかに関わらず当てはまります。OM がコマンドの経路指定先にする他のすべての IMS システムは、GLOBAL パラメーターを戻りコード X'00000004' および理由コード X'00001000' で無視します。ただし、複数のサインオンが許可されている (同じユーザー ID で複数の端末に同時にサインオンできる) 場合、ユーザー ID リソースはリソース構造で保守されません。IMSplex を結合する最初の IMS は、IMS 始動パラメーターで SGN=G、M、または Z を指定することにより、複数のサインオンが IMSplex で許可されているかどうかを判別します。
- SHOW(LOCAL) が指定された場合、OM がコマンドの経路指定先にする各 IMS システムは (コマンド・マスターも含め)、コマンドを処理し、各システムにローカルな情報を表示します。
- GLOBAL と LOCAL の両方を指定した場合 (これがデフォルトです)、コマンド・マスターはグローバル情報とローカル情報を表示し、OM がコマンドの経路指定先にする他のすべての IMS システムはローカル情報を表示します。

類似の IMS タイプ 1 コマンド

以下の表は、各種の QUERY USERID コマンドと、類似の機能を実行するタイプ 1 IMS コマンドを示しています。

表 224. QUERY USERID コマンドと同等のタイプ 1 コマンド

QUERY USERID コマンド	類似の IMS タイプ 1 コマンド
QUERY USERID SHOW(NODE)	/DISPLAY ASMT USER ユーザー /DISPLAY USER ユーザー
QUERY USERID SHOW(STATUS)	/DISPLAY USER ユーザー
QUERY USERID SHOW(USER)	/DISPLAY ASMT USER ユーザー /DISPLAY USER ユーザー

出力フィールド

以下の表は、QUERY USERID の出力フィールドを示しています。表の各列は、以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

フォーマット設定済み出力の出力フィールド用列見出しが含まれます。

SHOW パラメーター

フィールドを生成させる SHOW キーワードのパラメーターを識別します。ゼロ以外の完了コードの場合に返される出力フィールドには、Error が表示されます。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。

有効範囲

出力フィールドの有効範囲を識別します。GBL は、SHOW(GLOBAL) のグローバル情報を表示するとき、コマンド・マスターだけがフィールドを生成できることを示します。LCL は、SHOW(LOCAL) のローカル情報を表示するすべての IMS がフィールドを生成できることを示します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 225. QUERY USERID コマンドの出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	SHOW パラメーター	有効範囲	意味
CC	CC	N/A	N/A	出力行の完了コード。完了コードは、IMS が、指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示します。詳しくは、780 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』を参照してください。完了コードは常に戻されます。
CCTXT	CCText	Error	N/A	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
GBL	Gbl	GLOBAL	GBL	「Y」の場合は、RM 内でグローバルに検出された状況が出力に反映されます。ブランクの場合は、ローカルで検出された状況が出力に反映されます。
LNODE	LNode	NODE	LCL	ローカル・システム上のユーザー ID に関連付けられている動的ノードまたは静的ノードを識別します。
LSTT	LclStat	STATUS	LCL	ローカル・ユーザー ID の状況。戻される可能性のあるユーザー ID 状況に関する情報については、780 ページの『QUERY USERID 状況』を参照します。
LUSER	LUser	USER	LCL	ローカル・システム上の LTERM に関連付けられている動的ユーザーまたは ISC ユーザーを識別します。
MBR	MbrName	N/A	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。出力を作成した IMS の IMS ID。IMS ID は常に戻されます。
NODE	Node	NODE	GBL	リソース構造内でユーザー ID に関連付けられている動的ノードまたは静的ノードを識別します。
OWNER	Owner	OWNER	GBL	リソース所有者。ユーザー ID がアクティブな場所での IMS ID または IMS の RSENAME。所有している IMS システムが存在せず、RM にリソースの項目が含まれている場合、所有者フィールドはブランクになります。
STT	Status	STATUS	GBL	リソース構造からのグローバルユーザー ID 状況。戻される可能性のあるユーザー ID 状況に関する情報については、780 ページの『QUERY USERID 状況』を参照します。

表 225. QUERY USERID コマンドの出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	SHOW パラメーター	有効範囲	意味
UID	UserID	N/A	N/A	ユーザー ID 名。ユーザー ID は常に戻されます。
USER	User	USER	GBL	リソース構造内でユーザー ID に関連付けられている動的ユーザーまたは ISC ユーザーを識別します。
VER	Version#	VERSION	GBL	リソース構造内で保守されているユーザー ID リソースのバージョン番号。このフィールドは STM が有効な場合のみ適用されます。

QUERY USERID 状況

以下の表は、表示される可能性があるユーザー ID の状況を示しています。表の各列は、以下のとおりです。

Status

表示されるユーザー ID 状況。

有効範囲

状況の有効範囲。GBL は、状況をグローバルとすることができ (STM が使用可能な場合、それはリソース構造内に存在します)、STT ショート・ラベルとともに返されることを示します。LCL は、状況をローカルとすることができ、LSTT ショート・ラベルとともに返されることを示します。

意味 状況の簡略説明を提供します。

表 226. QUERY USERID 状況

Status	有効範囲	意味
RM	GBL	ユーザー ID は、RM によって管理されるリソース構造内に存在します。
RMACTIVE	GBL	ユーザー ID は、RM 構造で示されているように (RM active)、IMSplex 内でアクティブです (サインオンしています)。
RMOWNED	GBL	ユーザー ID は、RM 構造で示されているように (RM owned)、IMSplex 内で IMS システムによって所有されています。

戻りコード、理由コード、および完了コード

IMS 戻りコードと理由コードは、QUERY USERID コマンドによって OM に戻されます。QUERY USERID コマンドの結果として返される可能性のある OM 戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、QUERY USERID コマンドの戻りコードと理由コード、およびそれぞれの簡略説明を示しています。

表 227. QUERY USERID コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	コマンドは正常に完了しました。
X'00000004'	X'00001000'	IMS システムがコマンド・マスターでないため、その IMS システム上でコマンドが処理されませんでした。リソース情報は戻されません。
X'00000008'	X'00002014'	リソース名に無効文字が指定されました。
X'00000008'	X'00002040'	無効なパラメーター値が指定されました。無効な SHOW 値が指定された可能性があります。
X'0000000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、表 228 を参照してください。
X'0000000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、表 228 を参照してください。
X'00000010'	X'00004004'	コマンド処理は、CQS がアクティブでなかったために終了しました。
X'00000010'	X'0000400C'	XRF 代替システムではコマンドは無効です。
X'00000010'	X'00004018'	コマンド処理は、リソース構造が使用可能でないために終了しました。
X'00000010'	X'0000401C'	FDBR 領域ではコマンドは無効です。
X'00000010'	X'00004104'	コマンド処理は、RM が使用可能でないために終了しました。
X'00000010'	X'00004108'	コマンド処理は、SCI が使用可能でないために終了しました。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できませんでした。
X'00000014'	X'00005008'	DFSPOOL ストレージを取得できませんでした。
X'00000014'	X'00005100'	コマンド処理は、RM エラーのために終了しました。
X'00000014'	X'00005104'	コマンド処理は、CQS エラーのために終了しました。
X'00000014'	X'00005108'	コマンド処理は、SCI エラーのために終了しました。
X'00000014'	X'00005FFF'	コマンド処理は、IMS の内部エラーのために終了しました。

以下の表には、完了コードの説明が記載されています。このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 228. QUERY USERID コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		リソースに対する QUERY USERID コマンドは正常に完了しました。

表 228. QUERY USERID コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
10	NO RESOURCES FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。これがワイルドカードを使用した要求である場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。
1A3	Userid resource is in error	ユーザー ID リソースがリソース構造で検出され、関連するリソースが必要でしたが、そのリソースが検出されなかったかエラーを起こしているようです。これは、通常はエラー状態です。ただし、端末またはコマンドのアクティビティによる一時的な状態の可能性もあります。コマンドを再試行してください。

例

以下に示すのは QUERY USERID コマンドの例です。

QUERY USERID コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
QRY USERID NAME(USERID*,XYZ) SHOW(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

(screen 1)

UserID	MbrName	CC	CCText	Gbl	Owner	Node	User	Version#
USERID01	IMS1	0		Y	IMS1	NODE01	USER01	1
USERID01	IMS1	0						
USERID02	IMS1	0		Y	IMS2	NODE02	USER02	1
USERID02	IMS2	0						
USERID03	IMS1	0		Y	IMS1	NODE03		1
USERID03	IMS1	0						
XYZ	IMS1	10	NO RESOURCES FOUND	Y				
XYZ	IMS1	10	NO RESOURCES FOUND					
XYZ	IMS2	10	NO RESOURCES FOUND					

(右にスクロールして、画面 2 へ)

UserID	MbrName	Gbl	Status	LNode	LUser
USERID01	IMS1	Y	RM,RMACTIVE,RMOWNED		
USERID01	IMS1			NODE01	USER01
USERID02	IMS1	Y	RM,RMACTIVE,RMOWNED		
USERID02	IMS2			NODE02	USER02
USERID03	IMS1	Y	RM,RMACTIVE,RMOWNED		
USERID03	IMS1			NODE03	
XYZ	IMS1	Y			
XYZ	IMS1				
XYZ	IMS2				

説明: IMSplex には 2 つの IMS システムがあります。IMS1 と IMS2 です。RM は状況を維持しています (STM=YES)。ユーザー ID にシングル・サインオンが実行

されます。IMS1 はコマンド・マスターであり、グローバル情報およびローカル情報を表示します。IMS2 はローカル情報のみを表示します。

- USERID01 は動的ノードまたは ISC ノード NODE01、IMS1 上の USER01 にサインオンされます。
- USERID02 は動的ノードまたは ISC ノード NODE02、IMS2 上の USER02 にサインオンされます。
- USERID03 は IMS1 上の静的ノード NODE03 にサインオンされます。
- XYZ は存在しません。

QUERY USERID コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
QRY USERID NAME(USERID*) SHOW(ALL)
```


TSO SPOC 出力:

UserID	MbrName	CC	LNode	LUser
USERID11	IMS1	0	NODE11	USER11
USERID12	IMS1	0	NODE12A	USER12A
USERID12	IMS1	0	NODE12B	USER12B
USERID12	IMS2	0	NODE12C	USER12C
USERID12	IMS2	0	NODE12D	
USERID13	IMS2	0	NODE13	

説明: IMSplex には 2 つの IMS システムがあります。IMS1 と IMS2 です。RM は状況を維持しています (STM=YES)。ユーザー ID の複数サインオンが可能のため、ユーザー ID リソースは RM で維持されません。IMS1 はユーザー ID が RM で維持されないため、ローカル情報のみを表示します。IMS2 はローカル情報のみを表示します。

- USERID11 は動的ノードまたは ISC ノード NODE11、IMS1 上の USER11 にサインオンされます。
- USERID12 は、複数の端末 (IMS1 上の動的ノードまたは ISC ノードの NODE12A および NODE12B、IMS2 上の動的ノードまたは ISC ノード NODE12C、および IMS2 上の静的ノード NODE12D) に同時にサインオンされます。
- USERID13 は、静的ノード NODE13 にサインオンされます。


関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 /DISPLAY ASMT コマンド (コマンド)

 /DISPLAY USER コマンド (コマンド)

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

第 6 章 QUEUE コマンド

IMS QUEUE コマンドは、LTERM およびトランザクションのキューまたはデキュー処理を行うために使用します。

これらのコマンドは、バッチ SPOC ユーティリティを使用する IMSplex に対して発行できます。

サブセクション:

- 『QUEUE LTERM コマンド』
- 791 ページの 『QUEUE TRAN コマンド』

QUEUE LTERM コマンド

QUEUE LTERM コマンドは、指定された LTERM にメッセージをエンキューするために、または LTERM に現在エンキューされているメッセージをデキューして廃棄するために使用します。

IMS がローカル・キュー・マネージャー・データ・セットを使用している場合、このコマンドを受信するすべての IMS システムがコマンドを処理します。

サブセクション:

- 『環境』
- 786 ページの 『構文』
- 786 ページの 『キーワード』
- 787 ページの 『使用上の注意』
- 788 ページの 『出力フィールド』
- 788 ページの 『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 790 ページの 『例』

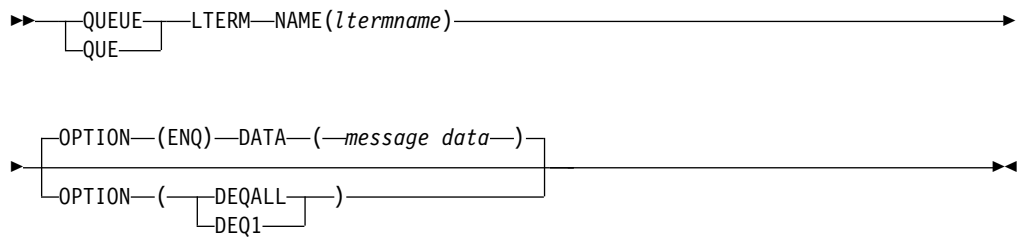
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 229. QUEUE LTERM コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUEUE LTERM	X		X
NAME	X		X
DATA	X		X
OPTION	X		X

構文



キーワード

以下のキーワードは、QUEUE LTERM コマンドに有効です。

NAME(lterm)

LTERM の名前 (1 から 8 文字) を指定します。

DATA(message data)

LTERM にエンキューするメッセージ・データを指定します。データは可変長です。このパラメーターは、オプション OPTION(ENQ) に対してのみ有効です。COMM マクロが OPTION=NOBLANK で定義されている場合、DATA はオプション・パラメーターです。COMM マクロが OPTION=BLKREQD (デフォルト) で定義されている場合、少なくとも 1 文字 (たとえば、空白でも) をメッセージ・データ域に指定する必要があります。

指定するメッセージ・データは、大/小文字混合にすることができます。LTERM が EDIT=ULC として定義されている場合、データは大文字に変換されずに、コマンドの指定通りにエンキューされます。LTERM が EDIT=UC として定義されている場合、メッセージをエンキューする前に、データが大文字に変換されます。データをエンキューする前に EDIT ルーチンは呼び出されません。

データは単一セグメント・メッセージとしてエンキューされます。エンキューできるデータの最大長は 32 763 です。

OPTION()

オプション・パラメーターを指定します。

DEQALL

LTERM に現在エンキューされているすべてのメッセージをデキューして廃棄することを示します。デキュー機能は /DEQUEUE LTERM コマンドに類似しています。メッセージをデキューする前に、ノードおよびユーザーを停止する必要があります。DEQALL オプションを使用するには、LTERM が IMS システム上でローカルに定義されており、ノード (LTERM が静的ノードに関連する場合) またはユーザー (LTERM が動的ノードに関連する場合) が停止している必要があります。

DEQ1

LTERM のキュー上の最初の (最も古い) メッセージをデキューして廃棄することを示します。デキュー機能は /DEQUEUE LTERM コマンドに類似しています。メッセージをデキューする前に、ノードおよびユーザーを停止する必要があります。DEQ1 オプションを使用するには、LTERM が IMS

システム上でローカルに定義されており、ノード (LTERM が静的ノードに関連する場合) またはユーザー (LTERM が動的ノードに関連する場合) が停止している必要があります。

ENQ

指定された LTERM にメッセージをエンキューすることを示します。エンキュー機能は /BROADCAST コマンドに類似しています。LTERM が停止している場合、それにメッセージをエンキューすることはできません。

QUEUE LTERM OPTION(ENQ) コマンドは、リモート LTERM に対してはサポートされません。

使用上の注意

IMS が共用メッセージ・キュー (STM=YES を指定、または指定しない) を使用しているときに、ENQ オプションを使用した場合、コマンド・マスター IMS システムのみがコマンドを処理します。メッセージは、共用キューにエンキューされます。LTERM は、コマンドを処理する IMS システム内に定義されている必要はありません。LTERM が存在しない場合、コマンド・マスター IMS は、ETO がアクティブであれば、LTERM と関連のユーザー構造を作成しようと試みます。LTERM が停止している場合、それにメッセージをエンキューすることはできません。ENQ オプションを使用し、指定された LTERM 名がリモート LTERM である場合、メッセージはリモート LTERM に関連付けられた MSNAME を使用して共用キューに入れられます。リモート LTERM に関連付けられた MSNAME が停止している場合、コマンドは処理されません。

IMS が共用メッセージ・キューと STM=NO を使用しているときに、DEQALL または DEQ1 オプションを使用した場合、コマンド・マスターのみがコマンドを処理します。IMS が共用メッセージ・キューと STM=YES を使用している場合は、コマンド・マスター IMS (ユーザーまたはノードが非所有の場合) または所有システム (ユーザーまたはノードが所有されている場合) によって、コマンドが処理されます。メッセージは共用キューからデキューされます。ノード (LTERM が静的ノードに関連する場合) またはユーザー (LTERM が動的ノードに関連する場合) は停止している必要があります。LTERM は、コマンドを処理している IMS システム内に定義されている必要はありません。LTERM が存在しない場合、コマンドを処理している IMS は、ETO がアクティブであれば、まず LTERM と関連のユーザー構造の作成を試み、その後でコマンドを処理します。

エンキューできるデータの最大長は 32 763 バイトです。データは単一セグメントとして LTERM にエンキューされます。

QUEUE LTERM コマンドは、ゼロ以外の完了コードとともに、完了コード・テキストを含めます。テキストの最大長は 32 バイトで、戻された完了コードの意味を記述します。

注: 共用メッセージ・キューから 1 つまたはすべてのメッセージをデキューする前に、キューを共用しているすべての IMS システムのユーザー (ETO 端末の場合) またはノード (静的端末の場合) を停止してください。LTERM は会話モードであってはなりません。

出力フィールド

QUEUE LTERM からの出力は、<cmdrsphdr> と <cmdrspdata> の XML タグ内にカプセル化されて戻されます。ショート・ラベルが XML 出力内に生成されます。リストされている SHOW キーワードは、そのフィールドを生成させたコマンドのキーワードです。「n/a」の値は、その出力フィールドは常に戻されることを示します。以下の表は、QUEUE LTERM コマンド出力フィールドを示しています。

表 230. QUEUE LTERM コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	キーワード表示	意味
CC	n/a	出力行の完了コード。完了コードは常に戻されます。
CCTXT	LCL	完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
MBR	n/a	出力行を作成した IMSplex メンバー。メンバー名は常に戻されます。
LTERM	n/a	LTERM リソースの名前。LTERM 名は常に戻されます。
LQCNT	DEQ1, DEQALL	ローカル・キューからデキューされたメッセージの数。
QNCT	DEQ1, DEQALL	共用メッセージ・キューからデキューされたメッセージの数。

戻りコード、理由コード、および完了コード

OM API を介して発行されるコマンド (QUEUE LTERM を含む) は、CSLORR 要求に定義されている、標準セットの OM 戻りコードと理由コードを生成します。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 231. QUEUE LTERM の戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	QUEUE LTERM コマンドは正常に完了しました。
X'00000004'	X'00001000'	この IMS システムはコマンド・マスターではないため、この IMS システムでは QUEUE LTERM コマンドは処理されません。
X'00000008'	X'00002004'	DATA と OPTION(DEQ1 DEQALL) の無効なキーワードの組み合わせが指定されているため、QUEUE LTERM コマンドは処理されません。
X'00000008'	X'00002008'	指定されたキーワードの数が不十分であるため、QUEUE LTERM コマンドは処理されません。

表 231. *QUEUE LTERM* の戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'0000000C'	X'00003004'	指定されたリソース名に対して <i>QUEUE LTERM</i> コマンドが正常に実行されません。完了コードに、エラーの理由とリソース名が示されています。コマンドで戻される可能性がある完了コードは、 <i>QUEUE LTERM</i> 完了コード表にリストされています。
X'00000010'	X'0000400C'	<i>QUEUE LTERM</i> コマンドは、XRF 代替では無効です。
X'00000010'	X'0000401C'	<i>QUEUE LTERM</i> コマンドは、FDBR 領域では無効です。
X'00000010'	X'00004034'	メッセージ・キューが利用不可であるため、 <i>QUEUE LTERM</i> コマンドは処理されません。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD0 GETBUF ストレージを取得できなかったため、 <i>QUEUE LTERM</i> コマンドは処理されません。
X'00000014'	X'00005008'	DFSPOOL HIOP ストレージを取得できなかったため、 <i>QUEUE LTERM</i> コマンドは処理されません。

以下の表は、*QUEUE LTERM* コマンドで戻される可能性がある完了コードを示しています。

表 232. *QUEUE LTERM* の完了コード

完了コード	意味
0	指定されたリソースに対する <i>QUEUE LTERM</i> コマンドは正常に完了しました。
10	リソース名が見つからなかったため、 <i>QUEUE LTERM</i> コマンドは処理されません。
12	<i>LTERM</i> がアクティブであるため、 <i>QUEUE LTERM</i> OPTION(DEQ1 DEQALL) コマンドは処理されません。
1A	<i>LTERM</i> が会話中であるため、 <i>QUEUE LTERM</i> OPTION(DEQ1 DEQALL) コマンドは処理されません。
5F	<i>LTERM</i> 名に無効文字があるため、 <i>QUEUE LTERM</i> コマンドは処理されません。
8A	サポートされないワイルドカード名が使用されたため、 <i>QUEUE LTERM</i> コマンドは処理されません。
8B	DFSQMGR 要求エラーが発生しました。 <i>QUEUE LTERM</i> コマンドは処理されません。
8C	<i>LTERM</i> が停止しているため、 <i>QUEUE LTERM</i> OPTION(ENQ) コマンドは処理されません。
8D	<i>LTERM</i> が停止していないため、 <i>QUEUE LTERM</i> OPTION(DEQ1 DEQALL) コマンドは処理されません。
93	指定された <i>LTERM</i> 名は予約名であるため、 <i>QUEUE LTERM</i> コマンドはリジェクトされます。

表 232. *QUEUE LTERM* の完了コード (続き)

完了コード	意味
9F	<i>QUEUE LTERM OPTION(ENQ)</i> コマンドは、リモート <i>LTERM</i> に対してはサポートされません。

例

以下に示すのは *QUEUE LTERM* コマンドの例です。

QUEUE LTERM コマンドの例 1

TSO 入力:

```
QUE LTERM NAME(LTERM1) OPTION(ENQ) DATA(MESSAGE1)
```

TSO 出力:

Lterm	MbrName	CC
LTERM1	SYS3	0

説明: *QUEUE LTERM* コマンドは正常に完了し、コマンド・マスター IMS によって処理されました。

QUEUE LTERM コマンドの例 2

TSO 入力:

```
QUEUE LTERM NAME(IMSUS01) OPTION(DEQALL)
```

TSO 出力:

Lterm	MbrName	CC	Qcnt
IMSUS01	IMS2	0	4

説明: *LTERM* キュー上のすべてのメッセージをデキューします。*QUEUE LTERM* コマンドは正常に完了し、コマンド・マスター IMS によって処理されました。

QUEUE LTERM コマンドの例 3

TSO 入力:


```
QUEUE LTERM NAME(IMSUS01) OPTION(DEQALL)
```

TSO 出力:

Lterm	MbrName	CC	LQcnt
IMSUS01	IMS2	0	3
IMSUS01	IMS3	0	0

説明: *LTERM* キュー上のすべてのメッセージをデキューします。*QUEUE LTERM* コマンドは正常に完了し、コマンドを受信したすべての IMS システムによって処理されています。

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

QUEUE TRAN コマンド

QUEUE TRAN コマンドは、指定されたトランザクションにメッセージをエンキューするために、またはトランザクションに現在エンキューされているメッセージをデキューして廃棄するために使用します。

QUEUE TRAN コマンドは、OM に対して ROUTE=ALL として定義されます。このコマンドが発行されると、OM は、そのコマンド用に登録済みのすべての IMS システムにコマンドを経路指定します。環境に応じて、コマンド・マスター IMS のみがコマンドを処理するか、すべての IMS がコマンドを処理するかのいずれかになります。コマンド・マスターのみがコマンドを処理する場合、コマンドを受信する他のすべての IMS システムは、それらが IMS コマンド・マスターではないことを示す戻りコードと理由コードを戻します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 793 ページの『使用上の注意』
- 794 ページの『出力フィールド』
- 794 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 796 ページの『例』

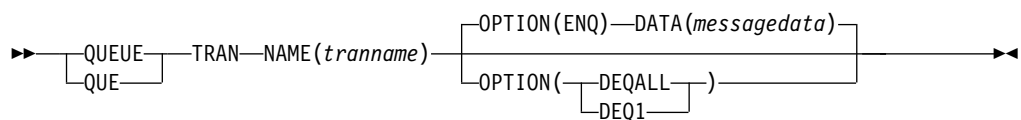
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 233. QUEUE TRAN コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
QUEUE TRAN	X		X
NAME	X		X
DATA	X		X
OPTION	X		X

構文



キーワード

以下のキーワードは、QUEUE TRAN コマンドに有効です。

NAME(*tranname*)

トランザクションの名前 (1 から 8 文字) を指定します。

DATA(*messagedata*)

トランザクションにエンキューするメッセージ・データを指定します。データは可変長です。このパラメータは OPTION(ENQ) に対してのみ有効です。

COMM マクロが OPTION=NOBLANK で定義されている場合、DATA はオプション・パラメータです。COMM マクロが OPTION=BLKREQD (デフォルト) で定義されている場合、少なくとも 1 文字 (たとえば、空白でも) をメッセージ・データ域に指定する必要があります。

データは大/小文字混合で指定できます。トランザクションが EDIT=ULC として定義されている場合、大文字変換は行われずに、データはコマンドの指定通りにエンキューされます。トランザクションが EDIT=UC として定義されている場合、メッセージをエンキューする前に、データが大文字に変換されます。データをエンキューする前に EDIT ルーチンは呼び出されません。

データは単一セグメント・メッセージとしてエンキューされます。エンキューできるデータの最大長は 32 763 です。

OPTION()

オプション・パラメータを指定します。

ENQ

これはデフォルトです。指定されたトランザクションにメッセージをエンキューすることを示します。ローカル・キュー環境と共用キュー環境の両方とも、ENQ 機能はコマンド・マスター IMS によってのみ処理されます。トランザクションによって生成された出力は、コマンドを発信した OM に非送信請求出力メッセージとして送信されます。出力メッセージに関連する MFS フォーマット設定は戻されません。

ENQ に指定されるトランザクションは、全機能応答モードまたは高速機能トランザクションであってはなりません。開始済みトランザクションは会話型であっても構いませんが、OM との会話中モードにあってはなりません。

DEQALL

トランザクションに現在エンキューされているすべてのメッセージをデキューして廃棄することを示します。メッセージをデキューする前に、トランザクションを停止する必要があります。

DEQALL は、ローカル・キュー環境と共用キュー環境の両方で有効です。IMS がローカル・キュー環境にある場合、コマンドを受信するすべての IMS システムが QUEUE TRAN OPTION(DEQALL) コマンドを処理します。IMS が共用キュー環境にある場合、コマンド・マスター IMS のみが QUEUE TRAN OPTION(DEQALL) コマンドを処理します。

QUEUE TRAN OPTION(DEQALL) コマンドは、APPC または OTMA クライアントからトランザクションのキューに入れられたトランザクション・メッセージをデキューすることができます。このコマンドは、トランザクション・メッセージのみをデキューします。IMS システムで作成された APPC または OTMA トランザクション・インスタンス・ブロック (TIB) は削除されず、ストレージは、次の IMS 再始動まで割り振られたままになる場合があります。APPC の場合、タイムアウト値が指定されていない

と、TIB が解放されず、APPC 会話 (クライアント) がハングします。APPC に APPCIOT=(x,Y) のタイムアウト値を指定すると、このタイムアウト限度に到達後、APPC 会話が割り振り解除され、TIB が解放されます。

DEQ1

トランザクションのキュー上の最初の (最も古い) メッセージをデキューして廃棄することを示します。メッセージをデキューする前に、トランザクションが停止されていることが必要です。

QUEUE TRAN OPTION(DEQ1) コマンドは、APPC または OTMA クライアントからトランザクションのキューに入れられたトランザクション・メッセージをデキューすることができます。このコマンドは、トランザクション・メッセージのみをデキューします。IMS システムで作成された APPC または OTMA トランザクション・インスタンス・ブロック (TIB) は削除されず、ストレージは、次の IMS 再始動まで割り振られたままになる場合があります。APPC の場合、タイムアウト値が指定されていないと、TIB が解放されず、APPC 会話 (クライアント) がハングします。APPC に APPCIOT=(x,Y) のタイムアウト値を指定すると、このタイムアウト限度に到達後、APPC 会話が割り振り解除され、TIB が解放されます。

使用上の注意

トランザクションが IMS システムでローカルに定義されている場合、このコマンドは処理されます。トランザクションが IMS システムで定義されていない場合、宛先作成出口ルーチン DFSINSX0 が呼び出されます。出口ルーチンがトランザクションの作成に成功した場合、コマンドは処理されます。出口がトランザクションを作成しない場合、トランザクションが見つからないことを示すエラー完了コードを伴った応答行が戻されます。

このコマンドの効果は、コマンドを処理している IMS が RM のリソース構造を使用するかどうかによって異なります。リソース構造を使用しない場合、トランザクションがグローバル状況 STOQ を持っていないければ、トランザクションがローカルで停止されていても、メッセージをエンキューすることができます。ただし、1 つまたはすべてのメッセージをデキューするには、トランザクションはスケジューリングのためにグローバルまたはローカルで停止されている (STOSCHD) 必要があります。IMS がリソース構造を使用しない場合、トランザクションがキューイングのために停止されている (STOQ) と、メッセージをエンキューすることはできません。1 つまたはすべてのメッセージをデキューするには、トランザクションはスケジューリングのために停止されている (STOSCHD) 必要があります。

QUEUE TRAN OPTION(ENQ) コマンドは、会話型、応答モード、高速機能、またはリモート・トランザクションに対してはサポートされません。この形式のコマンドは、トランザクション名およびコマンドを発行したユーザー ID に基づくセキュリティ検査を実行します。OPTION(ENQ) の場合、コマンドから OM に渡される情報を使用して、ワークロード管理 (WLM) CLASSIFY 呼び出しが実行されます。渡される情報には、LUNAME=DFSOMAPI およびユーザー ID が含まれます。また、OPTION(ENQ) では、指定されたトランザクション名がリモート・トランザクションである場合、リモート・トランザクション名を使用してメッセージが共有キュー (トランザクション作動可能キュー) に入れられます。リモート・トランザクシ

ンに関連付けられた MSNAME が停止している場合、コマンドは処理されません。QUEUE TRAN コマンドの場合、TM および MSC メッセージ経路指定および制御ユーザー出口ルーチン DFSMSCE0 は呼び出されません。

エンキューできるデータの最大長は 32 763 バイトです。データは単一セグメントとしてトランザクションにエンキューされます。

トランザクションが IMS V10 またはそれ以上のシステムによって処理される場合、入力宛先に対して生成された出力は、コマンドを発信した OM に非送信請求出力メッセージとして送信されます。トランザクション名とトランザクションを処理した IMS ID が、次の形式で出力に組み込まれます。

8 バイトのトランザクション名 + 8 バイトの IMSID + 出力メッセージ

トランザクションが IMS V9 またはそれ以前によって処理される場合、入力宛先に対して生成された出力は、キューに入れられません。アプリケーション・プログラムは、状況コード AD を受け取ります。

出力フィールド

QUEUE TRAN コマンドからの出力は、<cmdrsphdr> と <cmdrspdata> の XML タグ内にカプセル化されて戻されます。ショート・ラベルが XML 出力内に生成されます。リストされるキーワードは、そのフィールドを生成させたコマンドのキーワードです。「n/a」の値は、その出力フィールドは常に戻されることを示します。*error* の値は、その出力フィールドはエラーがある場合に (例えば、ゼロ以外の完了コード) 戻されることを示します。

表 234. QUEUE TRAN の出力

ショート・ラベル	キーワード表示	意味
CC	n/a	出力行の完了コード。完了コードは常に戻されません。
CCTXT	n/a	完了コードを説明する完了コード・テキスト。メンバー名は常に戻されます。
MBR	<i>error</i>	出力行を作成した IMSplex メンバー。
TRAN	n/a	トランザクション・リソースの名前。
LQCNT	OPTION(DEQ1 DEQALL)	ローカル・キューからデキューされたメッセージの数。
QNCT	OPTION(DEQ1 DEQALL)	共用メッセージ・キューからデキューされたメッセージの数。

戻りコード、理由コード、および完了コード

OM API を介して発行されるコマンド (QUEUE TRAN を含む) は、CSLORR に定義されている、標準セットの OM 戻りコードと理由コードを生成します。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 235. *QUEUE TRAN* の戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	<i>QUEUE TRAN</i> コマンドは正常に完了しました。
X'00000004'	X'00001000'	この <i>IMS</i> システムはコマンド・マスターではないため、 <i>QUEUE TRAN</i> コマンドはこの <i>IMS</i> システムで処理されません。
X'00000008'	X'00002004'	<i>DATA</i> と <i>OPTION(DEQ1 DEQALL)</i> の無効なキーワードの組み合わせが指定されているため、 <i>QUEUE TRAN</i> コマンドは処理されません。
X'00000008'	X'00002008'	指定されたキーワードの数が不十分であるため、 <i>QUEUE TRAN</i> コマンドは処理されません。
X'0000000C'	X'00003004'	指定されたリソース名に対して、 <i>QUEUE TRAN</i> コマンドは正常に実行されません。完了コードに、エラーの理由とリソース名が示されています。コマンドで戻される可能性がある完了コードは、 <i>QUEUE TRAN</i> 完了コード表にリストされています。
X'00000010'	X'0000400C'	<i>QUEUE TRAN</i> コマンドは、 <i>XRF</i> 代替では無効です。
X'00000010'	X'0000401C'	<i>QUEUE TRAN</i> コマンドは、 <i>FDBR</i> 領域では無効です。
X'00000010'	X'00004034'	メッセージ・キューが利用不可であるため、 <i>QUEUE TRAN</i> コマンドは処理されません。
X'00000014'	X'00005004'	<i>DFSOCMD0 GETBUF</i> ストレージを取得できなかったため、 <i>QUEUE TRAN</i> コマンドは処理されません。
X'00000014'	X'00005008'	<i>DFSPOOL HIOP</i> ストレージを取得できなかったため、 <i>QUEUE TRAN</i> コマンドは処理されません。
X'00000014'	X'00005FFF'	内部エラーが原因で、 <i>QUEUE TRAN</i> コマンドを処理できませんでした。

以下の表は、*QUEUE TRAN* コマンドで戻される可能性のある完了コードを示しています。

表 236. *QUEUE TRAN* の完了コード

完了コード	意味
0	指定されたリソースに対する <i>QUEUE TRAN</i> コマンドは正常に完了しました。
10	リソースが見つかりませんでした。
17	このトランザクションに対して別のコマンドが進行中です。
1A	トランザクションにはアクティブの会話があります。/EXIT コマンドを使用して、会話を終了し、メッセージをデキューします。
51	リソース構造がありません。
52	リソース構造が満杯です。

表 236. *QUEUE TRAN* の完了コード (続き)

完了コード	意味
5F	指定されたトランザクション名には無効文字があるため、 <i>QUEUE TRAN</i> コマンドはリジェクトされました。
8A	サポートされないワイルドカード名が使用されたため、 <i>QUEUE TRAN</i> コマンドは処理されません。
8B	<i>DFSQMGR</i> 要求エラーが発生したため、 <i>QUEUE TRAN</i> コマンドは処理されません。
8C	トランザクションが停止されているため、 <i>QUEUE TRAN OPTION(ENQ)</i> コマンドは処理されません。
8D	トランザクションが停止されていないため、 <i>QUEUE TRAN OPTION(DEQ1 DEQALL)</i> コマンドは処理されません。
94	RM 要求エラー
96	RACF セキュリティ障害が発生したため、 <i>QUEUE TRAN OPTION(ENQ)</i> は処理されません。
98	CQS 要求エラー
99	トランザクションが初期化されていません。
9A	<i>QUEUE TRAN OPTION(ENQ)</i> は、会話モードに対してはサポートされません。
9B	<i>QUEUE TRAN OPTION(ENQ)</i> は、高速機能トランザクションに対してはサポートされません。
9C	<i>QUEUE TRAN OPTION(ENQ)</i> は、応答モードのトランザクションに対してはサポートされません。
9D	リモート・トランザクションに関連した <i>MSNAME</i> が停止されています。
9F	<i>QUEUE TRAN OPTION(ENQ)</i> は、リモート・トランザクションに対してはサポートされません。

例

以下に示すのは *QUEUE TRAN* コマンドの例です。

QUEUE TRAN コマンドの例 1

TSO 入力:

```
QUEUE TRAN NAME(PART) OPTION(DEQALL)
```

TSO 出力:

```
Trancode MbrName CC LQcnt
-----
PART     IMS1     0  5
PART     IMS2     0  2
```

説明: コマンドは、コマンドを受信したすべての IMS システムによって処理されました。IMS1 は 5 つのメッセージをローカル・キューからデキューし、IMS2 は 2 つのメッセージをローカル・キューからデキューしました。

QUEUE TRAN コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
QUEUE TRAN NAME(PART) DATA(message1)
```

TSO SPOC 出力:

Trancode	MbrName	CC
PART	IMS2	0

説明: QUEUE TRAN コマンドは正常に完了し、コマンド・マスターによって処理されました。

QUEUE TRAN コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
QUEUE TRAN NAME(PART) OPTION(DEQALL)
```

TSO SPOC 出力:

Trancode	MbrName	CC	Qcnt
PART	IMS3	0	2

説明: この例は、共用キュー環境での QUEUE TRAN OPTION(DEQALL) を示しています。コマンド・マスター IMS によって 2 つのメッセージがデキューされています。

QUEUE TRAN コマンドの例 4

TSO SPOC 入力:


```
QUEUE TRAN NAME(PART) OPTION(DEQALL)
```

TSO SPOC 出力:


Trancode	MbrName	CC	LQcnt
PART	IMS2	0	2
PART	IMS3	0	0
PART	SYS3	0	1

説明: この例は、ローカル・キュー環境での QUEUE TRAN OPTION(DEQALL) を示しています。各 IMS がコマンドを処理しています。

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

第 7 章 /QUIESCE コマンド

/QUIESCE コマンドはシャットダウンを開始し、指定された ISC ノードについてユーザーの割り振りを解除します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 800 ページの『使用上の注意』
- 800 ページの『例』

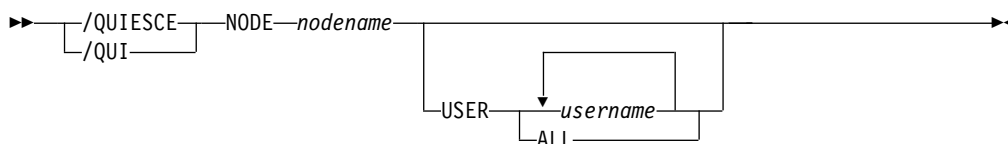
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 237. /QUIESCE コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/QUIESCE	X		X
NODE	X		X
USER	X		X

構文



キーワード

以下のキーワードは、/QUIESCE コマンドに有効です。

NODE

シャットダウンし、割り振り解除するユーザーの VTAM ノードを指定します。

USER

USER キーワードを省略する場合、ISC ノードのすべてのハーフセッションが影響を受けます。ハーフセッションを接続しなければなりません。

NODE および **USER** パラメーターを一緒に使用する場合の制約事項:

- 次のような場合にのみ、NODE USER キーワードの対を使用したコマンドは有効です。
 - USER が NODE にサインオンされています。

- ISC 環境で、USER を NODE に割り振られています。
- ノードおよびユーザーは既に存在しています。
- /QUIESCE NODE USER コマンドは、ISC ノードに対してのみ有効です。

使用上の注意

このコマンドは、バッチ SPOC ユーティリティを使用する IMSplex に対して発行できます。

/QUIESCE NODE コマンドは、ISC ノードにのみ有効です。

/QUIESCE は、事前設定モード、テスト・モード、ロック・ノード、lock lterm、pstop lterm、および purge lterm をリセットします。これらの状況は重要ではなく、ログオンまたは再始動の後まで保持されないからです。/QUIESCE は、ノードのリカバリ設定に応じて他のアクションも行います。

RCVYCONV=NO

/QUIESCE は、すべての IMS 会話 (アクティブおよび保留中の両方) を終了させます。キューに入っているかまたは現在処理中の会話型メッセージは、出力応答メッセージを非同期に送信させます。

RCVYFP=NO

/QUIESCE により、高速機能状況およびメッセージが破棄されます。

RCVYRESP=NO

/QUIESCE は、全機能応答モードをリセットします。

グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持されない場合、/QUIESCE はユーザーの割り振りを解除し、状況をローカルにリセットします。グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持される場合、/QUIESCE はユーザーの割り振りを解除し、状況をグローバルにリセットします。ユーザーに重要な状況がない場合、/QUIESCE は Resource Manager 内でユーザーを削除します。ノードに重要な状況がなく、ノードのその他のハーフセッションもない場合、/QUIESCE は Resource Manager 内でノードを削除します。

ROUTE を指定する場合は、ROUTE(*) を使用して指定しなければなりません。該当ノードがアクティブになっている IMS に対して経路指定されなかった場合は、このコマンドは失敗します。

例

入力 ET:

```
/QUIESCE NODE CAL USER LAX
```

応答 ET:

```
/DFS058I QUIESCE COMMAND COMPLETED
```

説明: ユーザー LAX を使用しているノード CAL のハーフセッションをシャットダウンします。

関連資料:

1217 ページの『UPDATE IMSCON TYPE(ISC) コマンド』

1224 ページの『UPDATE IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンド』

第 8 章 /RCLSDST コマンド

/RCLSDST (リモート宛先クローズ) コマンドは、このコマンドが入力された VTAM 端末から IMS を切断します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『使用上の注意』
- 804 ページの『例』

環境

以下の表には、コマンドを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 238. /RCLSDST コマンドの有効環境

コマンド	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/RCLSDST	X		X

構文



使用上の注意

ユーザーがアクティブな会話型モードにある場合は、/RCLSDST を実行する前に、/EXIT または /HOLD を入力する必要があります。サインオンされたユーザーがこのコマンドを出す場合、そのユーザーはサインオフされます。

このコマンドは事前設定モードはリセットしません。

/RCLSDST は、事前設定モード、テスト・モード、ロック・ノード、lock lterm、pstop lterm、および purge lterm をリセットします。これらの状況は重要ではなく、したがって、ログオンまたは再始動の後まで保持されないからです。/RCLSDST は、ノードのリカバリー設定に応じて他のアクションも行います。

RCVYSTSN=NO

/RCLSDST は、セッション状況を「コールド」に設定することによって、FINANCE ノードおよび SLUP ノードに対する /CHANGE NODE COLDSESS コマンドと同様の働きをします。/RCLSDST は、指定されたノードについてシャットダウンを開始し、ユーザーの割り振りを解除することにより、ISC (LU6.1) ノードに対する /QUIESCE NODE コマンドと同様の働きをします。このアクションにより、セッション状況は「コールド」に変わります。/RCLSDST コマンドによってこれらのアクションが実行されると、このノ

ードに対する次のセッション開始要求は、セッションのコールド・スタートの再試行を行えるようになります。 ETO ノードの場合、重要な状況が存在しないと、制御ブロック構造が削除される場合があります。

RCVYCONV=NO

/RCLSDST は、保留中の IMS 会話を終了させます。キューに入っているかまたは現在処理中の会話型メッセージは、出力応答メッセージを非同期に送信させます。

RCVYFP=NO

/RCLSDST により、高速機能状況およびメッセージが破棄されます。

RCVYRESP=NO

/RCLSDST は、全機能応答モードをリセットします。

グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持されない場合、/RCLSDST はノードをログオフし、状況をローカルにリセットします。グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持される場合、/RCLSDST はノードをログオフし、状況をグローバルにリセットします。ノードに状況がない場合、/RCLSDST は Resource Manager 内でノードを削除します。

例

入力 ET:

```
/RCLSDST
```

応答 ET:

```
DFS058I RCLSDST COMMAND COMPLETED
```

説明: 入力端末は IMS からログオフされます。

第 9 章 /RCOMPT コマンド

/RCOMPT コマンドは、特定の VTAM 端末コンポーネントを作動可能または作動不能状態に設定します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 806 ページの『使用上の注意』
- 806 ページの『例』

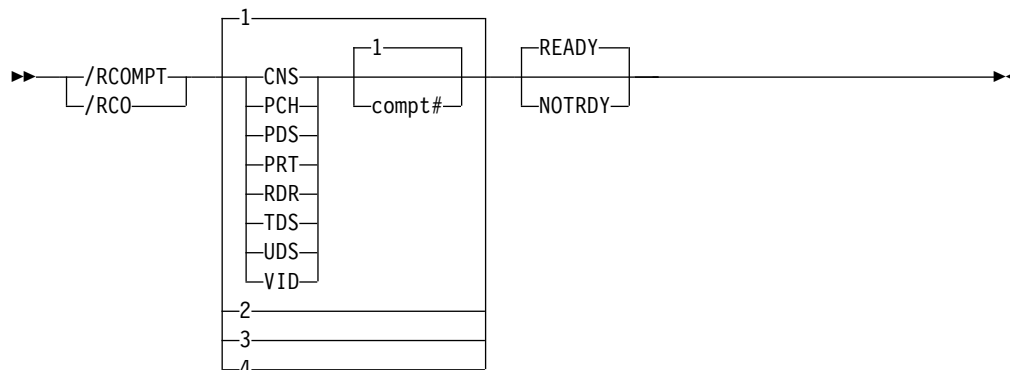
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 239. /RCOMPT コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/RCOMPT	X		X
CNS	X		X
NOTRDY	X		X
PCH	X		X
PDS	X		X
PRT	X		X
RDR	X		X
READY	X		X
TDS	X		X
UDS	X		X
VID	X		X

構文



使用上の注意

特定コンポーネント用のキューに入っている出力メッセージは、そのコンポーネントが作動可能になっていない限り送られません。端末タイプによっては、他のコンポーネントについての出力操作を続けることができます。

注: デフォルトは、READY と 1 です。

/RCOMPT コマンドで設定した作動可能状態または作動不能状態は、次のコマンドで変更することができます。

- 別の /RCOMPT コマンド
- /COMPT、/START、または /RSTART のいずれかのコマンド
- 端末コンポーネントでの入出力エラー

コマンド・フォーマットは、次のうちのいずれか 1 つです。

- キーワードを使用する。

複数のコンポーネント (IMS システム定義時の TERMINAL マクロか、またはログオン記述子で定義されているもの) の中から、指定されたキーワードに対応する定義済みのコンポーネントを対象とする検索を行います。一致が見つかる、そのコンポーネント・タイプは、コマンドで行った指定によって、作動可能または作動不能にされます。

- そのキーワードの後に 1 以外の数字が使われる場合。

そのコンポーネント・タイプの対応するオカレンスは、コマンドの指定によって、作動可能または作動不能にされます。

- キーワードの代わりに、1 から 4 までの数字が使われる場合。

影響を受けるコンポーネントは、コンポーネント・タイプとは関係なく、システム定義時にその位置に定義されたコンポーネント、またはログオン記述子に定義されたコンポーネントです。

ISC を使用する場合、パラメーター 1、2、3 および 4 だけが有効です。

例

入力 ET:

```
/RCOMPT VID 2 READY
```

応答 ET:

```
DFS058I RCOMPT COMMAND COMPLETED
```

説明: IMS に対して 2 番目の表示コンポーネントが操作可能であるものとして宣言されています。

入力 ET:


```
/RCOMPT 4 READY
```

応答 ET:

```
DFS058I RCOMPT COMMAND COMPLETED
```

説明: IMS に対して、定義済みの 4 番目のコンポーネントが作動可能であるものとして宣言されています。

関連資料:

 [/ASSIGN コマンド \(コマンド\)](#)

第 10 章 /RDISPLAY コマンド

/RDISPLAY コマンドは、マスター端末として割り当てられた端末を参照し、論理端末名と回線番号および物理端末番号、あるいは論理端末名と VTAM ノード名のいずれかを表示します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 『使用上の注意』
- 810 ページの『同等の IMS タイプ 2 コマンド』
- 810 ページの『例』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 240. /RDISPLAY コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/RDISPLAY	X		X
MASTER	X		X

構文

▶▶ `/RDISPLAY` `MASTER` ▶▶
 └──┬──┘
 `/RDI`

キーワード

以下のキーワードは、/RDISPLAY コマンドに有効です。

MASTER

マスター端末として指定された端末の ID を指定します。

使用上の注意

IMS のシステム定義時に、3270 マスター端末機能が生成されている場合、2 次マスター端末の論理端末名、回線および物理端末番号も表示されます。

このコマンドは、バッチ SPOC ユーティリティーを使用する IMSplex に対して発行できます。

同等の IMS タイプ 2 コマンド

以下の表は、各種の /RDISPLAY コマンドと、類似の機能を実行する IMS タイプ 2 コマンドを示しています。

表 241. /RDISPLAY コマンドと同等のタイプ 2 コマンド

タスク	/RDISPLAY コマンド	類似の IMS タイプ 2 コマンド
1 次および 2 次マスター端末を表示する。	/RDISPLAY MASTER	QUERY LTERM STATUS (MTO,SMTO)

例

以下に示すのは /RDISPLAY コマンドの例です。

/RDISPLAY コマンドの例 1

入力 ET:

```
/RDISPLAY MASTER
```

応答 ET:

```
LTERM CNTRL  
PTERM 3-1  
*91010/123704*
```

説明: CNTRL は、マスター端末の論理端末であり、LINE 3 PTERM 1 に割り当てられています。

/RDISPLAY コマンドの例 2

入力 ET:

```
/RDISPLAY MASTER
```

応答 ET:

```
LTERM CTRL1  
PTERM 4-2  
LTERM CTRL2  
PTERM 4-4  
*91010/12370*
```

説明: CTRL1 は基本マスター端末の論理端末であり、LINE 4 PTERM 2 に割り当てられています。CTRL2 は 2 次マスター端末の論理端末であり、LINE 4 PTERM 4 に割り当てられています。

関連資料:

324 ページの『QUERY LTERM コマンド』

第 11 章 /RECOVER コマンド

/RECOVER コマンドは、データベース・データ・セットおよびエリアのリカバリー・リストで使用されます。

IMSplex では、/RECOVER コマンドは、Database Recovery Facility の操作を開始します。OM は、/RECOVER コマンドを 1 つの IMS に送信します。

これらのコマンドは、バッチ SPOC ユーティリティーを使用する IMSplex に対して発行できます。

/RECOVER コマンドは以下のとおりです。

- 『/RECOVER ADD コマンド』
- 817 ページの『/RECOVER REMOVE コマンド』
- 822 ページの『/RECOVER START コマンド』
- 827 ページの『/RECOVER STOP コマンド』
- 830 ページの『/RECOVER TERMINATE コマンド』

/RECOVER ADD コマンド

/RECOVER ADD コマンドは、Database Recovery Facility を使用してリカバリーするデータベース・データ・セットおよびエリアのリスト (リカバリー・リスト) に、データベース・データ・セットおよびエリアを追加するために使用します。

データベース・データ・セットおよびエリアは、データベース・データ・セット、エリア、データベース、またはグループとして指定できます。

サブセクション:

- 『環境』
- 812 ページの『構文』
- 812 ページの『キーワード』
- 815 ページの『使用上の注意』
- 816 ページの『例』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

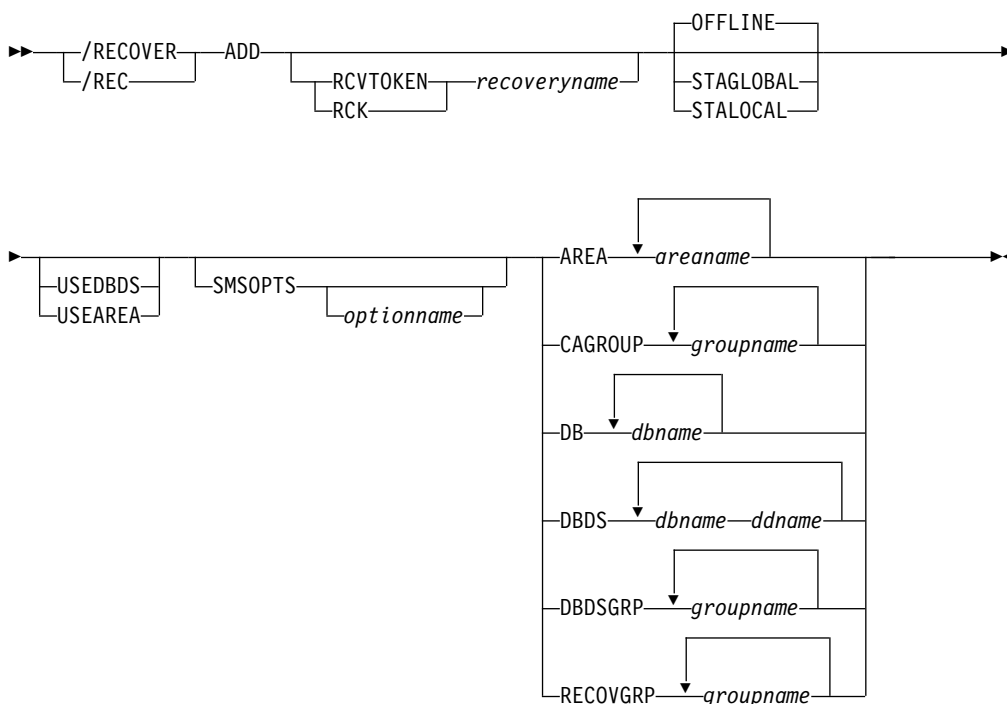
表 242. /RECOVER ADD コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/RECOVER	X	X	
ADD	X	X	
AREA	X	X	

表 242. /RECOVER ADD コマンドおよびキーワードの有効環境 (続き)

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
CAGROUP	X	X	
DB	X	X	
DBDS	X	X	
DBDSGRP	X	X	
OFFLINE	X	X	
RCVTOKEN	X	X	
RECOVGRP	X	X	
SMSOPTS	X	X	
STAGLOBAL	X	X	
STALOCAL	X	X	
USEAREA	X	X	
USEDDBS	X	X	

構文



キーワード

以下のキーワードは、/RECOVER ADD コマンドに有効です。

OFFLINE

このオプションを使用すると、データベースは、リカバリーの完了時に IMS システムからオフラインにされたままになります。このオプションを使用することにより、データベース管理者は、リカバリーが正常に完了し、データ・セットが

使用可能な状態になっていることを検証することができます。 /RECOVER START コマンドでこのオプションが指定されていない場合には、これがデフォルトです。

リカバリーを行っている IMS システムは、データベースに対する排他的許可をもってリカバリーを行うことができます。OFFLINE オプションを使用すると、IMS システムは、START コマンドを出さなくても、リカバリーの完了時にデータベースの許可を取り消すことができます。これにより、データベースは処理に使用可能になります。リカバリーで PITR オプションが使用されていた場合は、RECON 内のデータベース・データ・セットは IMAGE COPY NEEDED です。

STAGLOBAL

このオプションは、シスプレックス・データ共用環境で全機能データベース、あるいはデータベースと高速機能エリアが使用されている場合に、使用します。リカバリーの影響を受けるすべての全機能データベースについてのリカバリーを実行した IMS システムでは、GLOBAL オプション付きの /START DB コマンドが出されます。リカバリーの対象となるすべての高速機能エリアについてのリカバリーを実行した IMS システムでは、GLOBAL オプション付きの /START AREA コマンドが出されます。このオプションを使用すると、リカバリー・リスト内のすべての DBDS がリカバリーされた時点で、即時にデータベースを IMS トランザクションのために使用できるようになります。データベースを使用する許可は IMS に戻されます。

STALOCAL

このオプションは、データベースが使用されている操作可能な IMS システムで DRF が実行されている場合に、使用します。リカバリーの影響を受けるすべての全機能データベースについてのリカバリーを実行した IMS システムでは、/START DB コマンドが出されます。リカバリーの対象となるすべての高速機能エリアについてのリカバリーを実行した IMS システムでは、/START AREA コマンドが出されます。/START DB コマンドでは、高速機能データベースは開始されません。このオプションは、1 つだけ指定するだけでよく、リカバリー・リストに追加されるすべての DBDS およびエリアに適用されます。

USEDBDS | USEAREA

これらのオプションは、高速機能エリア、全機能、および HALDB DBDS 用を使用するためのものです。これを指定すれば、DRF は、ログ更新を適用する前に、イメージ・コピーを復元する必要がなくなります。このオプションは、リカバリーの前にイメージ・コピーを復元する場合に使用できます。

注: 標準外イメージ・コピーは、リカバリーの前に復元する必要があります。

このパラメーターは、DRF が、ログ更新を適用する前に DBDS のイメージ・コピーを復元するかどうかを決定します。

RCVTOKEN | RCK

/RECOVER ADD コマンドの対象となるリカバリー・リストに関連した固有 ID を指定します。RCVTOKEN はオプションです。指定しない場合は、IMS はリカバリー名を生成します。ただし、このコマンドが既存のリストに項目を追加することを意図している場合は、意図したリカバリー・リスト・トークンである *recoveryname* とともに RCVTOKEN を指定する必要があります。コマンド

に RCVTOKEN を指定する場合、それはデータベース・データ・セット、エリア、またはグループの名前を識別するどのキーワードより前に指定する必要があります。

recoveryname

/RECOVER ADD コマンドの対象となるリカバリー・リストに関連した固有のリカバリー・トークンを指定します。このトークンは、長さが 8 文字まで可能です。

SMSOPTS

DFSMSDss オプションが、リカバリー・リストに追加される項目と関連付けられるように指定します。DFSMSDss オプションは、Image Copy 2 ユーティリティにより作成されたイメージ・コピーを復元する場合のみ使用されます。

optionname

固有の SMS オプションを指定します。

DELCAT

DFSMSDss のオプション・キーワード DELETECATALOGENTRY を使用してデータ・セットを復元することを指定します。

重要: このオプションを使用するときは、細心の注意が必要です。DELCAT は、SMSOPTS が提供されている場合に必要です。このオプションを使用することにより、ボリューム全体が失われているが、カタログ項目は残っているという状況からのリカバリーを行うことができます。このオプションを指定すると、SMS は、リカバリーの一環として復元しようとしているデータベース・データ・セットおよびエリアについての古いカタログ項目を削除します。このオプションを使用する前に、RESTORE コマンドの DELETECATALOGENTRY オプションに記載されている注意をお読みください。

AREA

1 つ以上の高速機能エリアをリカバリー・リストに追加することを指定します。

areaname

固有の高速機能エリア名を指定します。

CAGROUP

RECON データ・セット内で定義されている 1 つ以上の変更累積グループのデータベース・データ・セットおよびエリアが、リカバリー・リストに追加されるように指定します。

groupname

指定された CA グループに属するデータベース・データ・セットおよびエリアが、リカバリー・リストに追加されるように指定します。

DB 1 つ以上のデータベースのすべてのエリアまたは全機能データベース・データ・セットを、リカバリー・リストに追加することを指定します。

dbname

リカバリー・リストに追加するデータベースおよび関連のデータベース・データ・セットまたはエリアを指定します。

DBDS

1 つ以上の全機能データベース・データ・セットをリカバリー・リストに追加することを指定します。

dbname ddname

全機能データベース・データ・セットをリカバリー・リストに追加することを指定します。全機能データベース・データ・セットは、/RECOVER ADD DBDS コマンドで、順序付けられた対として指定されます。対の最初のメンバーはデータベース名です。2 番目のメンバーは DD 名です。複数の全機能データベース・データ・セットを指定する場合は、それぞれのデータベース・データ・セットについて完全な順序付きの対を指定する必要があります。すべてのパラメーターは、少なくとも 1 つのブランク・スペースで区切る必要があります。

DBDSGRP

RECON データ・セットで定義されている 1 つ以上の DBDS グループが、そのデータベース・データ・セットとエリアをリカバリー・リストに追加するように指定します。

groupname

指定された DBDS グループに属するデータベース・データ・セットおよびエリアがリカバリー・リストに追加されるように指定します。

RECOVGRP

リストされたグループがリカバリー・グループであることを指定します。リカバリー・グループとは、ユーザーが関連があるものとして IMS に対して定義している全機能データベースまたは DEDB エリア (あるいはその両方) のグループです。コマンドで指定された、全機能データベースを構成するすべての DBDS、およびリカバリー・グループを構成するすべての DEDB エリアがリカバリー・リストに追加されます。

groupname

そのデータベース・データ・セットとエリアがリカバリー・リストに追加されるグループの固有な名前を指定します。

使用上の注意

/RECOVER ADD コマンドが正常終了すると、指定されたデータベース・データ・セットとエリアがリカバリー・リストに追加されます。データベース・データ・セットとエリアをリカバリー・リストに追加するには、1 つ以上のデータベース・データ・セット、データベース、変更累積グループ (CAGROUP)、データベース・データ・セット・グループ (DBDSGRP)、またはリカバリー・グループ (RECOVGRP) を指定します。データベースまたはグループが指定された場合、そのデータベースまたはグループを構成しているすべてのデータベース・データ・セットとエリアがリカバリー・リストに追加されます。指定されたデータベースが区分 HALDB のマスター・データベースである場合は、HALDB を形成するすべての区画からのすべてのデータベース・データ・セットがリカバリー・リストに追加されます。すべてのグループ (データベースを含む) が DBRC で定義されます。

データベース・データ・セットおよびエリアは、IMS リカバリー・サービスによりリカバリーするためには、DBRC に登録されていなければなりません。DBRC が、

データベース・データ・セット名、エリア名、またはグループ名を認識していない場合は、リカバリー・リストには追加されず、メッセージが出されます。

/RECOVER ADD コマンドで (個別に、あるいはグループの一部として) 指定されたデータベース・データ・セットまたはエリアが既にリカバリー・リスト上にある場合は、重複の処理は無視され、メッセージが出されます。重複していないその他のデータベース・データ・セットとエリアは、通常どおり処理されます。

このコマンドは、IMS DBCTL および IMS DB/DC 環境で出すことができます。

例

/RECOVER ADD コマンドで COMMAND IN PROGRESS メッセージが出されますが、以下の例では示されていません。

/RECOVER ADD コマンドの例 1

この例では、全機能データベース・データ・セットについて /RECOVER ADD STALOCAL コマンドが出されます。データベース・データ・セットのリカバリーが正常に完了すると、リカバリーを実行した IMS でデータベースが開始されます。

```
/REC ADD STALOCAL DBDS DBNAME1 DDNAME1 DBNAME2 DDNAME2
DFS4299I FRD6011I THE FOLLOWING ENTRIES ARE ADDED TO THE RECOVERY LIST:
DFS4299I FRD6003I DBNAME1 DDNAME1
DFS4299I FRD6003I DBNAME2 DDNAME2
```

/RECOVER ADD コマンドの例 2

この例では、全機能データベース・データ・セットについて /RECOVER ADD コマンドが出されます。データベース・データ・セットの 1 つは RECON に登録されていないため、リジェクトされます。

```
/RECOVER ADD DBDS DBNAME1 DDNAME1 DBNAME1 DDNAME2
DFS4299I FRD6011I THE FOLLOWING ENTRIES ARE ADDED TO THE RECOVERY LIST:
DFS4299I FRD6003I DBNAME1 DDNAME1
DFS4299I FRD6010W UNABLE TO ADD TO RECOVERY LIST, NOT FOUND IN RECON, DBNAME2 DDNAME2
```

/RECOVER ADD コマンドの例 3

この例では、全機能データベース・データ・セットについて /RECOVER ADD コマンドが出されます。データベース・データ・セットが属するデータベースは、依然として 2 つの IMS システムに許可されています。

```
/RECOVER ADD DBDS DBNAME1 DDNAME1
DFS4299I FRD6011I THE FOLLOWING ENTRIES ARE ADDED TO THE RECOVERY LIST:
DFS4299I FRD6003I DBNAME1 DDNAME1
DFS4299I FRD6003I DBNAME1 DDNAME1 AUTHORIZED BY IMS1
DFS4299I FRD6003I DBNAME1 DDNAME1 AUTHORIZED BY IMS2
```

/RECOVER ADD コマンドの例 4

/RECOVER ADD DB コマンドを用いて、データベースを全体として指定することができます。この例では、全機能データベースおよび高速機能データベースは、それぞれ、データベース・データ・セットとエリアをリカバリー・リストに追加します。

```
/REC ADD DB FFDB1 FPDB2
DFS4299I FRD6011I THE FOLLOWING ENTRIES ARE ADDED TO THE RECOVERY LIST:
DFS4299I FRD6003I FFDB1 DDNAME1
DFS4299I FRD6003I FFDB1 DDNAME2
DFS4299I FRD6003I DBAREA3 DDAREA3
DFS4299I FRD6003I DBAREA4 DDAREA4
```

/RECOVER ADD コマンドの例 5

複数の DATAGROUP が指定された場合、グループ名は少なくとも 1 つのブランク・スペースで区切る必要があります。この例では、2 つのデータベース・グループについて、/RECOVER ADD コマンドが出されます。

```
/REC ADD DATAGROUP GRPNAME1 GRPNAME2
DFS4299I FRD6011I THE FOLLOWING ENTRIES ARE ADDED TO THE RECOVERY LIST:
DFS4299I FRD6003I DBNAME3 DDNAME3
DFS4299I FRD6003I DBNAME4 DDAREA4
DFS4299I FRD6003I DBNAME5 DDNAME5
DFS4299I FRD6003I DBNAME6 DDAREA6
DFS4299I FRD6003I DBNAME7 DDNAME7
DFS4299I FRD6003I DBNAME8 DDAREA8
```

/RECOVER ADD コマンドの例 6

1 つ以上の RECOVGRP が指定された場合、グループ名は少なくとも 1 つのブランク・スペースで区切る必要があります。この例では、2 つのリカバリー・グループについて、/RECOVER ADD コマンドが出されます。

```
/REC ADD RECOVGRP GRPNAME1 GRPNAME2
DFS4299I FRD6011I THE FOLLOWING ENTRIES ARE ADDED TO THE RECOVERY LIST:
DFS4299I FRD6003I DBNAMEA DDNAMEA
DFS4299I FRD6003I DBNAMEB DDAREAB
DFS4299I FRD6003I DBNAMEC DDNAMEC
DFS4299I FRD6003I DBNAMED DDAREAD
DFS4299I FRD6003I DBNAMEE DDNAMEE
DFS4299I FRD6003I DBNAMEF DDAREAF
```

/RECOVER REMOVE コマンド

/RECOVER REMOVE コマンドは、リカバリー・リストから一部または全部のデータベース・データ・セットおよびエリアを除去するために使用します。

このコマンドは、/RECOVER START コマンドを出す前に限り、出すことができません。

サブセクション:

- 『環境』
- 818 ページの『構文』
- 818 ページの『キーワード』
- 820 ページの『使用上の注意』
- 820 ページの『例』

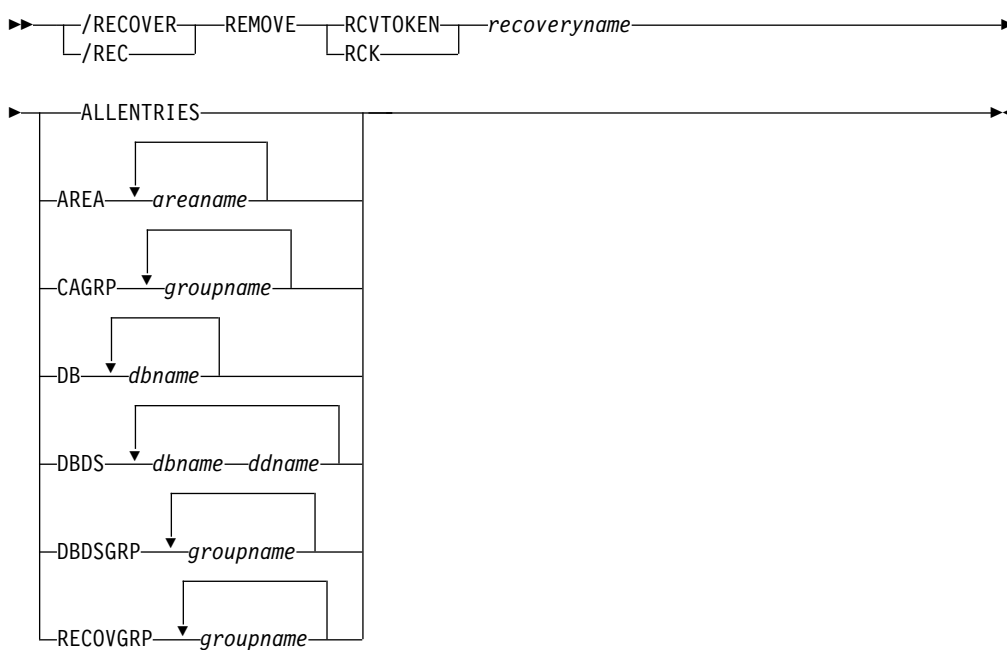
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 243. /RECOVER REMOVE コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/RECOVER	X	X	
ALLETRIES	X	X	
AREA	X	X	
CAGROUP	X	X	
DB	X	X	
DBDS	X	X	
DBDSGRP	X	X	
RCVTOKEN	X	X	
RECOVGRP	X	X	
REMOVE	X	X	

構文



キーワード

以下のキーワードは、/RECOVER REMOVE コマンドに有効です。

RCVTOKEN | RCK

/RECOVER REMOVE コマンドの対象となるリカバリー・リストに関連した固有 ID を指定します。RCVTOKEN キーワードは、データベース・データ・セット、エリア、またはグループの名前を識別するどのキーワードより前に指定する必要があります。

recoveryname

/RECOVER REMOVE コマンドの対象となるリカバリー・リストに関連した固有のリカバリー・トークンを指定します。このトークンは、長さが 8 文字まで可能です。

ALLENTRIES

リカバリー・リストを除去すべきであることを指定します。

AREA

1 つ以上の高速機能エリアをリカバリー・リストから除去することを指定します。

areaname

固有の高速機能エリア名を指定します。

CAGROUP

RECON データ・セットで定義されている 1 つ以上の変更累積グループのデータベース・データ・セットおよびエリアが、リカバリー・リストから除去されるように指定します。

groupname

特定の CA グループに属するデータベース・データ・セットおよびエリアが、リカバリー・リストから除去されるように指定します。

DATAGROUP

1 つ以上のデータベース・グループ (RECON データ・セットで定義されている) のデータベース・データ・セットおよびエリアをリカバリー・リストから除去することを指定します。

groupname

リカバリー・リストから除去する、固有のグループ名のデータベース・データ・セットとエリアを指定します。

DB 1 つ以上のデータベースを構成している全機能データベース・データ・セットまたは高速機能エリアをリカバリー・リストから除去するように指定します。

dbname

リカバリー・リストに追加するデータベース・データ・セットまたはエリアを指定します。

DBDS

1 つ以上の全機能データベース・データ・セットがリカバリー・リストから除去されることを指定します。

dbname

リカバリー・リストから除去するデータベース・データ・セットまたはエリアを指定します。

ddname

データベース・データ・セットの DD 名を指定します。DBDS を /RECOVER REMOVE コマンドで指定する場合は、*dbname* および *ddname* も一緒に指定する必要があります。

DBDSGRP

RECON データ・セットで定義されている 1 つ以上の DBDS グループのデータベース・データ・セットおよびエリアを、リカバリー・リストから除去するように指定します。

groupname

リカバリー・リストから除去する、グループのデータベース・データ・セットおよびエリアを指定します。

RECOVGRP

このグループがリカバリー・グループであることを指定します。全機能データベースを構成するすべての DBDS、およびすべての DEDB エリアがリカバリー・リストから除去されます。

groupname

リカバリー・リストから除去する、データベースのデータベース・データ・セットおよびエリアを指定します。

使用上の注意

リカバリーが開始した後で項目を除去するには、/RECOVER STOP コマンドを使用します。

- /RECOVER REMOVE が /RECOVER START コマンドの前に出された場合、/RECOVER REMOVE コマンドで個別に、あるいはデータベースまたはグループの一部として指定されたデータベース・データ・セットおよびエリアが、リカバリー・リストから除去されます。後続の /RECOVER START コマンドは、リカバリー・リストに残っているメンバーに対してリカバリーを開始します。
- /RECOVER REMOVE ALLENTRIES コマンドが /RECOVER START コマンドの前に出された場合、リストのすべてのエレメントは除去され、リカバリー・リストは除去されます。
- /RECOVER REMOVE コマンドが /RECOVER START コマンドの後に出された場合は、/RECOVER REMOVE コマンドはリジェクトされます。

/RECOVER REMOVE が 1 つ以上のデータベースまたはグループに対して出された場合、指定されたデータベースまたはグループの一部であるデータベース・データ・セットとエリアは、すべてリカバリー・リストから除去されます。

/RECOVER REMOVE コマンドの結果、リカバリー・リストからすべてのデータ・セット項目またはエリア項目が除去される場合は、リカバリー・リストが除去されます。

このコマンドは、IMS DBCTL および IMS DB/DC 環境で実行します。

例

/RECOVER コマンドで COMMAND IN PROGRESS メッセージが出されますが、以下の例では示されていません。

/RECOVER REMOVE コマンドの例 1

/RECOVER ADD コマンドの場合と同様に、全機能データベース・データ・セットと高速機能エリアが、/RECOVER REMOVE DBDS コマンドで指定されています。DBDS オプションを使用する場合は、それぞれの全機能データベース・データ・セットを順序の決まっている対として指定する必要があります。各エレメントは、少なくとも 1 つのブランク・スペースで区切る必要があります。対の最初のエレメントはデータベース名です。2 番目のエレメントは DD 名です。この例では、単一の全機能データベース・データ・セットに対して /RECOVER REMOVE コマンドが出されています。


```
/RECOVER REMOVE RCVTOKEN DFS00001 DBDS DBNAME1 DDNAME1
```

```
DFS4299I FRD6016I THE FOLLOWING ENTRIES WERE REMOVED FROM THE RECOVERY LIST:  
DFS4299I FRD6003I DBNAME1 DDNAME1
```

複数の全機能データベース・データ・セットを /RECOVER REMOVE DBDS コマンドで指定する場合は、それぞれの dbname/ddname の順序が決まっている対は少なくとも 1 つのブランク・スペースで区切る必要があります。

```
/RECOVER REMOVE RCVTOKEN DFS00001 DBDS DBNAME1 DDNAME1 DBNAME3 DDNAME3
```

```
DFS4299I FRD6016I THE FOLLOWING ENTRIES WERE REMOVED FROM THE RECOVERY LIST:  
DFS4299I FRD6003I DBNAME1 DDNAME1  
DFS4299I FRD6003I DBNAME3 DDNAME3
```

/RECOVER REMOVE コマンドの例 2

この例では、リカバリー・リストに追加されなかった単一の高速機能エリアについて、/RECOVER REMOVE コマンドが出されます。

```
/REC REMOVE RCVTOKEN DFS00001 AREA DDAREA1
```

```
DFS4299I FRD6018W UNABLE TO REMOVE AREA DDAREA1: NOT IN RECOVERY LIST
```

/RECOVER REMOVE コマンドの例 3

この例では、全機能データベースと高速機能データベースについて、/RECOVER REMOVE コマンドが出されます。2 つのデータベースを構成しているすべての全機能データベース・データ・セットと高速機能エリアは、リカバリー・リストから除去されます。

```
/REC REMOVE RCVTOKEN DFS00001 DB FFDB1 FFDB2
```

```
DFS4299I FRD6016I THE FOLLOWING ENTRIES WERE REMOVED FROM THE RECOVERY LIST:  
DFS4299I FRD6003I FFDB1 DDNAME1  
DFS4299I FRD6003I FFDB1 DDNAME2  
DFS4299I FRD6003I DBAREA3 DDAREA3  
DFS4299I FRD6003I DBAREA4 DDAREA4
```

/RECOVER REMOVE コマンドの例 4

この例では、リカバリー・リスト全体についてのリカバリーを停止するために、/RECOVER REMOVE コマンドが出されます。

```
/REC REMOVE RCVTOKEN DFS00001 ALLENT
```

```
DFS4299I FRD6016I THE FOLLOWING ENTRIES WERE REMOVED FROM THE RECOVERY LIST:  
DFS4299I FRD6003I DBNAME1 DDNAME1  
DFS4299I FRD6003I DBNAME2 DDNAME2  
DFS4299I FRD6003I DBAREA1 DDAREA1  
DFS4299I FRD6003I DBNAME3 DDNAME3  
DFS4299I FRD6003I DBAREA4 DDAREA4  
DFS4299I FRD6003I DBNAME5 DDNAME5  
DFS4299I FRD6003I DBAREA6 DDAREA6  
DFS4299I FRD6003I DBAREA7 DDAREA7  
DFS4299I FRD6003I DBAREA8 DDAREA8  
DFS4299I FRD6017I RECOVERY LIST IS NOW EMPTY
```

関連資料:

822 ページの『/RECOVER START コマンド』

/RECOVER START コマンド

/RECOVER START コマンドは、リカバリー・リストのすべてのメンバーについてリカバリー処理を開始するために使用します。

リカバリー処理では、以下の作業を実行します。

- リカバリー・リスト内のデータベース・データ・セットおよびエリアに、イメージ・コピーが復元されます。
- リカバリー・リスト内のデータベース・データ・セットおよびエリアに、変更累積データが適用されます。
- データベース・データ・セットおよびエリアが、ログ・データ・セットからデータ変更を適用することにより最新の (あるいはリカバリー時点までの) 状態にされます。
- ユーザー・オプションとして、VTS にキャッシングされているログ・データ・セットが DASD にステージングされます。

サブセクション:

- 『環境』
- 823 ページの『構文』
- 823 ページの『キーワード』
- 824 ページの『使用上の注意』
- 825 ページの『例』

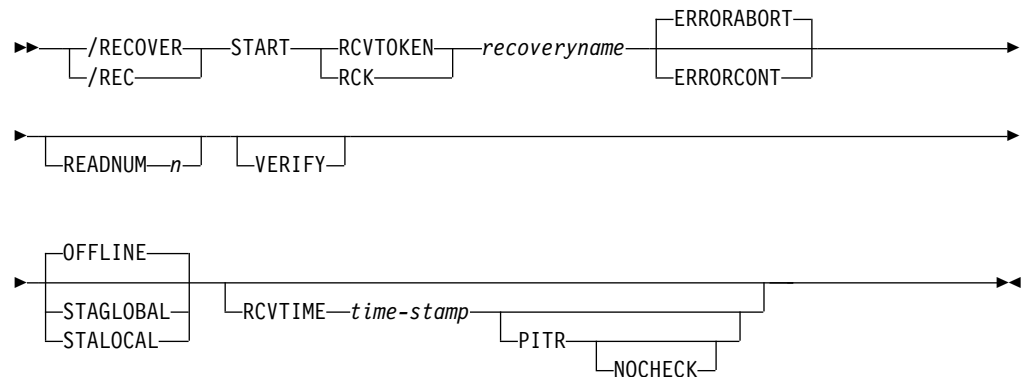
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 244. /RECOVER START コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/RECOVER	X	X	
ERRORABORT	X	X	
ERRORCONT	X	X	
NOCHECK	X	X	
OFFLINE	X	X	
PITR	X	X	
RCVTIME	X	X	
RCVTOKEN	X	X	
READNUM	X	X	
REMOVE	X	X	
STAGLOBAL	X	X	
STALOCAL	X	X	
START	X	X	
VERIFY	X	X	

構文



キーワード

以下のキーワードは、/RECOVER START コマンドに有効です。

RCVTOKEN | RCK

処理されるリカバリー・リストのトークンを指定します。コマンドに RCVTOKEN を指定する場合、それはデータベース・データ・セット、エリア、またはグループの名前を識別するどのキーワードより前に指定する必要があります。

recoveryname

リカバリー・リストに関連した固有のリカバリー・トークンを処理することを指定します。このトークンは、長さが 8 文字まで可能です。

ERRORABORT

いずれのデータベース・データ・セットでもリカバリーを完了できない場合は、リカバリー・リストの全項目についてリカバリーを停止させることを指定します。ERRORABORT がデフォルトです。

ERRORCONT

リカバリーがいずれかのデータベース・データ・セットに対する処理を完了できる場合、そのリカバリーが継続するように指定します。

READNUM *n*

リカバリーの際に、並列に使用される入力装置の数を指定します。イメージ・コピーは、*n* で指定された入力装置の数を使用して復元されます。イメージ・コピーを復元する場合は、*n* で指定された入力装置の数を使用して、ログ・データ・セットが読み取られます。

VERIFY

報告書の実行を指定して、関連のリカバリー・リストについてリカバリーを処理するために必要なログ・データ・セット、変更累積データ・セット、およびイメージ・コピー・データ・セットのリストを取得します。このオプションを使用することにより、ユーザーは、リカバリー処理の呼び出しの前にセットアップ手順を行うことができます。

OFFLINE

このオプションを使用すると、リカバリーの完了後にすべてのデータベースがオ

フラインのままになります。リカバリーが完了すると、DRF はデータベースの許可を取り消します。これにより、データベースは通常の DBRC 処理が可能な状態になります。

STAGLOBAL

このオプションは、シスプレックス・データ共用環境か、または同じ中央演算処理複合システム (CPC) 上のデータを共用する 2 つの IMS システムで使用します。DL/I データベースについては、GLOBAL オプションを伴う /START DB コマンド、そして高速機能エリアについては、GLOBAL オプションを伴う /START AREA コマンドが、それぞれ内部的に出されます。/RECOVER START コマンドで指定された OFFLINE、STALOCAL、または STAGLOBAL オプションが使用されるのは、これらのオプションが指定されていない、追加されたデータベース・データ・セットおよびエリアの場合のみです。

STALOCAL

このオプションは、DRF リカバリーを実行した IMS システムでデータベースを開始するために使用します。LOCAL オプションを伴う /START DB コマンドが、内部的に出されます。

RCVTIME

時刻指定リカバリーまたはタイム・スタンプ・リカバリーが実行されるタイム・スタンプを指定します。

time-stamp

タイム・スタンプは、IMS で認識できるフォーマットでなければなりません。このコマンドでは、シンボル値を使用してタイム・スタンプの UTC オフセット部分を指定することはできないという点に注意してください。

さらに、タイム・スタンプは単一引用符 (') で囲む必要があります。例えば、次のようになります。

```
/RECOVER START RCVTOKEN R1 RCVTIME '022671213156'
```

PITR

指定されたデータベース・データ・セットに対するアクティブなデータベース割り振りがあるかどうかとは無関係に、RCVTIME パラメーターで指定されている時刻までのタイム・スタンプ・リカバリー (TSR) を実行することを指定します。

NOCHECK

開始されるリカバリー・リストの中にデータベースを構成するデータベース・データ・セットの一部が入っていると、以下の状態のいずれかが生じた場合、Database Recovery Facility がタイム・スタンプ・リカバリーまたは現時点より前の任意の指定時刻までのタイム・スタンプ・リカバリー (PITR) を停止しないことが、NOCHECK によって指定されます。

- リカバリー・グループの全メンバーが同一リカバリー・リストにない。
- リカバリー・グループの全メンバーが同一指定時刻までリカバリーしない。

使用上の注意

1 つの IMS の中では、/RECOVER START は一度に 1 つだけ実行することが許されます。同時に複数の IMS システムと共に DRF を実行する場合は、ログ・コンテンション状態が生じることのないように注意してください。ログ・コンテンシ

ョン状態を回避するには、同じログ・データ・セットを読み取るリカバリー・インスタンスを、同時に複数の IMS システムで実行しないようにします。

リカバリーが正常に完了した後で、メンバーが定義されているすべての IMS システム上で、あるいは、リカバリーが実行された IMS システム上で、リカバリー・リストのいずれかまたはすべてのメンバーの自動 /START を行うことを選択できます。

ERRORABORT が有効になっている場合は、リカバリー・リスト内のすべての DBDS がリカバリーの許可を与えられるまでは、リカバリー・リストは開始されません。ただし、/RECOVER START コマンドで ERRORCONT パラメーターが指定されている場合には、これはあてはまりません。その場合は、リカバリーは続行されます。

整合オンライン変更により、前にリカバリー・リストに追加されているデータベース・データ・セットまたはエリアがシステムから除去される場合は、そのリカバリー・リストに対する /RECOVER START コマンドが入力された後で、メッセージ DFS4266I が理由コード NOT FOUND と共に出力されます。

例

/RECOVER コマンドで COMMAND IN PROGRESS メッセージが出されますが、以下の例では示されていません。

/RECOVER START コマンドの例 1

この例では、/RECOVER START が、前の例からのデータベース・データ・セットとエリアについてリカバリーを開始します。リカバリーは、完了するまで、あるいはデータベース・データ・セットまたはエリアの 1 つが操作可能になるまで続きます。

```
/REC START RCVTOKEN RCVTKN1 ERRORCONT
DFS4299I FRD6021I RECOVERY STARTED FOR:
DFS4299I FRD6003I DBNAME1 DDNAME1
DFS4299I FRD6003I DBNAME2 DDNAME2
DFS4299I FRD6003I DBAREA1 DDAREA1
DFS4299I FRD6003I DBNAME3 DDNAME3
DFS4299I FRD6003I DBAREA4 DDAREA4
DFS4299I FRD6003I DBAREA5 DDAREA5
DFS4299I FRD6003I DBAREA6 DDAREA6
DFS4299I FRD6003I DBNAME7 DDNAME7
DFS4299I FRD6003I DBAREA8 DDAREA8
```

/RECOVER START コマンドの例 2

この例では、/RECOVER START RCVTOKEN は、リカバリー・トークン RCVTKN2 が所有するデータベース・データ・セットとエリアについてのリカバリーを開始します。

```
/REC START RCVTOKEN RCVTKN2
DFS4299I FRD6021I RECOVERY STARTED FOR:
DFS4299I FRD6003I DBNAME1 DDNAME1
DFS4299I FRD6003I DBNAME2 DDNAME2
DFS4299I FRD6003I DBAREA1 DDAREA1
DFS4299I FRD6003I DBNAME3 DDNAME3
DFS4299I FRD6003I DBAREA4 DDAREA4
```

```
DFS4299I FRD6003I DBAREA5 DDAREA5
DFS4299I FRD6003I DBAREA6 DDAREA6
DFS4299I FRD6003I DBNAME7 DDNAME7
DFS4299I FRD6003I DBAREA8 DDAREA8
```

/RECOVER START コマンドの例 3

この例では、/RECOVER START RCVTOKEN OFFLINE READNUM 6 が、前の例からのデータベース・データ・セットとエリアについてリカバリーを開始します。リカバリー・リストのいずれかのメンバーで何らかのエラーが検出された場合には、リカバリーは続行されません。リカバリーの完了後、データベース・データ・セットとエリアはオフラインのまま残っています。

```
/RECOVER START RCVTOKEN RCVTKN2 OFFLINE READNUM 6
DFS4299I FRD6021I RECOVERY STARTED FOR:
DFS4299I FRD6003I DBNAME1 DDNAME1
DFS4299I FRD6003I DBNAME2 DDNAME2
DFS4299I FRD6003I DBAREA1 DDAREA1
DFS4299I FRD6003I DBNAME3 DDNAME3
DFS4299I FRD6003I DBAREA4 DDAREA4
DFS4299I FRD6003I DBAREA5 DDAREA5
DFS4299I FRD6003I DBAREA6 DDAREA6
DFS4299I FRD6003I DBNAME7 DDNAME7
DFS4299I FRD6003I DBAREA8 DDAREA8
```

/RECOVER START コマンドの例 4

この例では、/RECOVER START RCVTOKEN ERRORCONT RCVTIME *time-stamp* が出されます。TSR は、完了するまで、あるいはリカバリーが行われているデータベース・データ・セットまたはエリアの 1 つでエラーが検出されるまで続きます。リカバリーの完了後、正常にリカバリーされたそれぞれのデータベース・データ・セットとエリアをリストするメッセージが出されます。

```
/REC START RCVTOKEN RCVTKN2 ERRORABORT RCVTIME '020011015257' NOCHECK
DFS4299I FRD6021I RECOVERY STARTED FOR RCVTKN2, ERRORABORT, TSR
DFS4299I FRD6003I DBNAME1 DDNAME1
DFS4299I FRD6003I DBNAME2 DDNAME2
DFS4299I FRD6003I DBAREA1 DDAREA1
DFS4299I FRD6003I DBNAME3 DDNAME3
DFS4299I FRD6003I DBAREA4 DDAREA4
DFS4299I FRD6003I DBAREA5 DDAREA5
DFS4299I FRD6003I DBAREA6 DDAREA6
DFS4299I FRD6003I DBNAME7 DDNAME7
DFS4299I FRD6003I DBAREA8 DDAREA8
...
DFS4299I FRD4031I DATASET RESTORE COMPLETE: DBNAME1 DDNAME1
DFS4299I FRD4031I DATASET RESTORE COMPLETE: DBNAME2 DDNAME2
DFS4299I FRD4031I DATASET RESTORE COMPLETE: DBAREA1 DDAREA1
DFS4299I FRD4031I DATASET RESTORE COMPLETE: DBNAME3 DDNAME3
DFS4299I FRD4031I DATASET RESTORE COMPLETE: DBAREA4 DDAREA4
DFS4299I FRD4031I DATASET RESTORE COMPLETE: DBAREA5 DDAREA5
DFS4299I FRD4031I DATASET RESTORE COMPLETE: DBAREA6 DDAREA6
DFS4299I FRD4031I DATASET RESTORE COMPLETE: DBNAME7 DDNAME7
DFS4299I FRD4031I DATASET RESTORE COMPLETE: DBAREA8 DDAREA8
DFS4277I RECOVERY COMPLETE FOR: RCVTKN2
```

/RECOVER START コマンドの例 5

この例では、/RECOVER START RCVTOKEN RCVTIME *time-stamp* PITR が出されます。時刻指定リカバリーは、完了するまで、あるいはデータベース・データ・セットの 1 つでエラーが検出されるまで続きます。リカバリー・リストには存在し

ないが、時刻指定リカバリーを使用してリカバリーを行う必要があると思われるデータベース・データ・セットとエリアをリストするメッセージが出されます。

```
/REC START RCVTKEN RCVTKN2 RCVTIME '020011015257' PITR
DFS4299I FRD6021I RECOVERY STARTED FOR RCVTKN2, ERRORCONT, PITR
DFS4299I FRD6003I DBNAME1 DDNAME1
DFS4299I FRD6003I DBNAME2 DDNAME2
DFS4299I FRD6003I DBAREA1 DDAREA1
DFS4299I FRD6003I DBNAME3 DDNAME3
DFS4299I FRD6003I DBAREA4 DDAREA4
DFS4299I FRD6003I DBAREA5 DDAREA5
DFS4299I FRD6003I DBAREA6 DDAREA6
DFS4299I FRD6003I DBNAME7 DDNAME7
DFS4299I FRD6003I DBAREA8 DDAREA8
...
DFS4299I FRD6024A GROUP MEMBER DBNAME9 DDNAME9 NOT IN RECOVERY LIST: MEMBER OF A GROUP
DFS4299I FRD6024A GROUP MEMBER DBNAMEA DDNAMEA NOT IN RECOVERY LIST: MEMBER OF A GROUP
DFS4299I FRD6024A GROUP MEMBER DBAREA8 DDAREA8 NOT IN RECOVERY LIST: MEMBER OF A GROUP
DFS4299I FRD6024A GROUP MEMBER DBNAMEC DDNAMEC NOT IN RECOVERY LIST: MEMBER OF A GROUP
...
DFS4299I FRD4031I DATASET RESTORE COMPLETE: DBNAME1 DDNAME1
DFS4299I FRD4031I DATASET RESTORE COMPLETE: DBNAME2 DDNAME2
DFS4299I FRD4031I DATASET RESTORE COMPLETE: DBAREA1 DDAREA1
DFS4299I FRD4031I DATASET RESTORE COMPLETE: DBNAME3 DDNAME3
DFS4299I FRD4031I DATASET RESTORE COMPLETE: DBAREA4 DDAREA4
DFS4299I FRD4031I DATASET RESTORE COMPLETE: DBAREA5 DDAREA5
DFS4299I FRD4031I DATASET RESTORE COMPLETE: DBAREA6 DDAREA6
DFS4299I FRD4031I DATASET RESTORE COMPLETE: DBNAME7 DDNAME7
DFS4299I FRD4031I DATASET RESTORE COMPLETE: DBAREA8 DDAREA8
DFS4277I RECOVERY COMPLETE FOR: RCVTKN2
```

関連資料:

817 ページの『/RECOVER REMOVE コマンド』

『/RECOVER STOP コマンド』

 DFSURDB0 ユーティリティーの例 (データベース・ユーティリティー)

/RECOVER STOP コマンド

/RECOVER STOP コマンドは、リカバリー・リストのすべてのデータベース・データ・セットおよびエリアのリカバリーを停止するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 828 ページの『構文』
- 828 ページの『キーワード』
- 829 ページの『使用上の注意』
- 829 ページの『例』

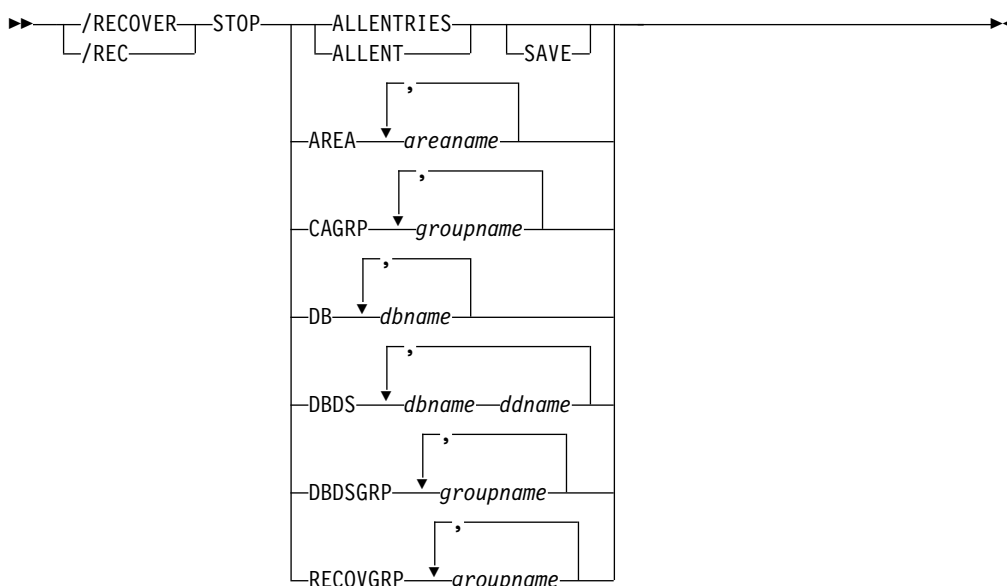
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 245. /RECOVER STOP コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/RECOVER	X	X	
STOP	X	X	

構文



キーワード

以下のキーワードは、/RECOVER STOP コマンドに有効です。

ALLETRIES

リカバリー・リストのすべてのデータベース・データ・セットとエリア (全項目) についてリカバリーが打ち切られることを指定します。

SAVE

リカバリーが停止されたときにリカバリー・リストが削除されないように指定します。このパラメーターは、リカバリーが /RECOVER START コマンドで開始された後、ALLETRIES パラメーターでのみ許可されます。

AREA

指定された高速機能エリアについてのリカバリー処理を停止させることを指定します。

areaname

固有の高速機能エリア名を指定します。

CAGROUP

RECON データ・セットで定義されている、指定された変更累積グループを構成しているデータベース・データ・セットとエリアについて、リカバリー処理を停止させることを指定します。

groupname

データベース・データ・セットとエリアがリカバリー処理を停止させられるグループの固有な名前を指定します。

DB 指定されたデータベースを形成する全機能データベース・データ・セットまたは高速機能エリアのリカバリー処理を停止することを指定します。

dbname

データベース・データ・セットまたはエリアがリカバリー・リストに追加されるデータベースを指定します。

DBDS

指定された全機能データベース・データ・セットについてリカバリー処理を停止させることを指定します。

dbname

データベース・データ・セットまたはエリアがリカバリー・リストに追加されるデータベースを指定します。

ddname

データ・セット名およびデータ・セット特性に関連した 8 文字の ID。DBDS を /RECOVER REMOVE コマンドで指定する場合は、*dbname* と *ddname* は一緒に指定する必要があります。

DBDSGRP

RECON データ・セットで定義されている、指定された DBDS グループを構成しているデータベース・データ・セットとエリアについて、リカバリー処理を停止させることを指定します。

groupname

データベース・データ・セットとエリアがリカバリー処理を停止させられるグループの固有な名前を指定します。

RECOVGRP

このグループがリカバリー・グループであることを指定します。リカバリー・グループとは、関連していると見なされる全機能データベースまたは DEDB エリアのグループのことです。全機能データベースを構成するすべての DBDS、およびすべての DEDB エリアがリカバリー・リストから除去されます。

groupname

データベース・データ・セットとエリアがリカバリー処理を停止させられるグループの固有な名前を指定します。

使用上の注意

このコマンドは、/RECOVER START を出した対象のリカバリー・リストについてのみ出すことができます。/RECOVER STOP は、/RECOVER START コマンドより前に出された場合には、リジェクトされます。/RECOVER START コマンドの後でこのコマンドを出すと、リカバリー・リスト内のすべてのデータベース・データ・セットのリカバリーが停止されます。/RECOVER STOP コマンドが正常に処理した後、後続の /RECOVER STOP コマンドはリジェクトされます。

/RECOVER STOP ALLENT が出されると、影響を受けるリカバリー・リストについてのすべてのリカバリー処理は停止し、既存のリカバリー・リストは削除されます。

例

/RECOVER コマンドで COMMAND IN PROGRESS メッセージが出されますが、以下の例では示されていません。

/RECOVER STOP コマンドの例 1

この例では、リカバリー・リスト全体についてのリカバリーを停止するために、*/RECOVER STOP* コマンドが出されます。

```
/REC STOP ALLENT
DFS4299I FRD6032I THE FOLLOWING ENTRIES WILL HAVE RECOVERY STOPPED:
DFS4299I FRD6003I DBNAME1 DDNAME1
DFS4299I FRD6003I DBNAME2 DDNAME2
DFS4299I FRD6003I DBAREA1 DDAREA1
DFS4299I FRD6003I DBNAME3 DDNAME3
DFS4299I FRD6003I DBAREA4 DDAREA4
DFS4299I FRD6003I DBNAME5 DDNAME5
DFS4299I FRD6003I DBAREA6 DDAREA6
DFS4299I FRD6003I DBAREA7 DDAREA7
DFS4299I FRD6003I DBAREA8 DDAREA8
DFS4299I FRD6033I ALL ENTRIES IN RECOVERY LIST, ARE BEING STOPPED
```

/RECOVER STOP コマンドの例 2

この例では、*/RECOVER STOP ALLENT SAVE* が */RECOVER START* コマンドの後で出されます。

```
/REC STOP ALLENT SAVE
DFS4299I FRD6032I THE FOLLOWING ENTRIES WILL HAVE RECOVERY STOPPED:
DFS4299I FRD6003I DBNAME1 DDNAME1
```

/RECOVER STOP コマンドの例 3

この例では、*/RECOVER STOP ALLENT* コマンドが進行中のリカバリーなしで出されます。

```
/REC STOP ALLENT
DFS4299I FRD6031E UNABLE TO STOP ALLENT: RECOVERY NOT IN PROGRESS
```

関連資料:

- 822 ページの『*/RECOVER START* コマンド』
- 『*/RECOVER TERMINATE* コマンド』

/RECOVER TERMINATE コマンド

RECOVER TERMINATE コマンドは、*BEING BUILT* 状況にあるすべてのリストを削除し、*DRS* アドレス・スペースを終了するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 831 ページの『構文』
- 831 ページの『使用上の注意』
- 831 ページの『例』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (*DB/DC*、*DBCTL*、および *DCCTL*) がリストされています。

表 246. /RECOVER TERMINATE コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/RECOVER	X	X	
TERMINATE	X	X	

構文

```

▶▶ /RECOVER TERMINATE
   /REC

```

使用上の注意

リカバリーが進行中である場合は、リカバリーは、/RECOVER TERMINATE コマンドを無視して処理を続行します。リカバリーが完了した時点で、もう 1 つの /RECOVER TERMINATE コマンドを出す必要があります。このコマンドは自動的には効果をもちません。リカバリーの実行中に強制的に DRF を停止したい場合は、最初に /RECOVER STOP ALLENT コマンドを出す必要があります。これでリカバリーが停止されるので、/RECOVER TERMINATE コマンドを入力して DRF アドレス・スペースを終了することができます。

例

この例では、/RECOVER TERMINATE コマンドが進行中のリカバリーなしで出されます。

```

/RECOVER TERMINATE
DFS4299I FRD4202I DATABASE RECOVERY DATA MANAGER TERMINATION COMPLETE

```

関連資料:

827 ページの『/RECOVER STOP コマンド』

第 12 章 REFRESH USEREXIT コマンド

タイプ 2 REFRESH USEREXIT コマンドは、DFSDFxxx メンバーの USER_EXITS セクションで定義されているユーザー出口モジュールをリフレッシュするために使用します。このコマンドを処理するとき、IMS は DFSDFxxx メンバーを再読み取りして USER_EXITS セクションを処理します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 835 ページの『使用上の注意』
- 836 ページの『出力フィールド』
- 837 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 838 ページの『例』

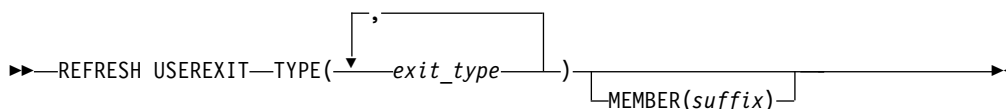
環境

以下の表には、REFRESH コマンドおよびキーワードを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 247. REFRESH USEREXIT コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
REFRESH USEREXIT	X	X	X
TYPE	X	X	X
MEMBER	X	X	X

構文



キーワード

以下のキーワードは、REFRESH USEREXIT コマンドに有効です。

TYPE(*exit_type*)

リフレッシュするユーザー出口タイプを指定します。単一のユーザー出口タイプまたはコンマで区切ったユーザー出口タイプのリストを指定することができます。有効なユーザー出口タイプは次のとおりです。

AOIE

タイプ 2 自動化操作プログラム・ユーザー出口

BSEX

セキュリティー環境構築ユーザー出口

ICQSEVNT

IMS CQS イベント・ユーザー出口

ICQSSTEV

IMS CQS 構造イベント・ユーザー出口

IMSMON

IMS モニター・ユーザー出口

INITTERM

初期化/終了ユーザー出口

LOGEDIT

ログ編集ユーザー出口

LOGWRT

ロガー・ユーザー出口

NDMX

廃棄不能メッセージ・ユーザー出口

OTMAIOED

OTMA 入出力編集ユーザー出口

OTMAYPRX

OTMA 宛先解決ユーザー出口

OTMARTUX

OTMA RESUME TPIPE セキュリティー・ユーザー出口

PGMCREAT

PGMCREAT ユーザー出口

PPUE

パートナー製品ユーザー出口

RASE

リソース・アクセス・セキュリティー・ユーザー出口

RESTART

再始動ユーザー出口

出口タイプが複数回指定された場合、1 回のみリフレッシュされ、エラー・メッセージは表示されません。

MEMBER(suffix)

DFSDFxxx メンバー名の接尾部を表す 1 文字から 3 文字の英数字の値を指定します。要求されたユーザー出口タイプの EXITDEF ステートメントについて、示された DFSDFxxx メンバーが読み取られて解析されます。このキーワードを指定しない場合、システムの初期設定で指定された DFSDFxxx メンバーがデフォルトで使用されます。システム初期設定時に指定された DFSDFxxx メンバーは、システム・コンソールまたはログのメッセージ DFS1929I から判別できます。MEMBER キーワードで無効な xxx 値が指定されている場合、または DFSDFxxx メンバーが見つからない場合、コマンドは失敗します。

このキーワードでオプションです。通常は、システム初期設定時に指定された DFSDfxxx メンバーが唯一の使用可能なメンバーでなければなりません。このキーワードの目的は、テストのために代替 DFSDfxxx メンバー (システム・デフォルトとは異なる) をコマンドで指示できるようにすることです。テスト以外では、IMS は MEMBER キーワードが省略されることを想定しています。

注: これらの変更は、再始動後には保管されていません。IMS 初期設定時に指定されたメンバーではない DFSDfxxx メンバーからのユーザー出口をリフレッシュし、初期設定 DFSDfxxx メンバーを更新しない場合、IMS の再始動時にユーザー出口の変更は失われます。

MEMBER パラメーターを値 (MEMBER()) なしで指定した場合、MEMBER が指定されなかったものとして取り扱われます。初期設定で指定された DFSDfxxx メンバーが使用されます。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

このコマンドの出力は XML で定義されており、OM と通信する自動化プログラムで使用できます。

REFRESH USEREXIT コマンドを入力すると、IMS は以下のステップを実行します。

1. DFSDfxxx メンバーを読み取り、DFSDfxxx メンバーの USER_EXITS セクションを処理します。
2. このコマンドで指定された出口タイプの USER_EXITS セクションで指定されたユーザー出口モジュールをロードします。
3. 新しいユーザー出口モジュールのポインターを使用して、IMS の内部制御ブロックを更新します。これ以降のユーザー出口モジュールの呼び出しでは、この新しいモジュールが呼び出されるようになります。
4. 古い出口モジュールでの処理が完了すると、このモジュールは削除されます。

IMS は、古いモジュールを削除する前に、新しいユーザー出口モジュールをロードします。この処理中にエラーが発生した場合 (モジュールがロードできなかった場合など)、IMS は特定ユーザー出口タイプのコマンドを失敗させ、ユーザー出口タイプの現行モジュールを有効のままにします。コマンドが正常に完了するためには、指定したユーザー出口タイプのすべてのモジュールが正常にロードされていることが必要です。

IMSpIex に複数の IMS システムが存在する場合、コマンドのデフォルトのルーティングを使用して、そのすべての IMS システムでユーザー出口モジュールをリフレッシュできます。この場合、REFRESH USEREXIT コマンドは IMSpIex 内のすべての IMS システムに送信され、ユーザー出口モジュールはそれぞれの IMS システムでリフレッシュされます。リフレッシュが 1 つ以上の IMS システムで失敗した場合、その原因となった問題を解決してコマンドを再入力する必要があります。

REFRESH USEREXIT コマンドを使用して、以下のように IMS にユーザー出口タイプを追加したり、ユーザー出口タイプを削除したり、既存のユーザー出口を動的リフレッシュ可能に移行したりすることができます。

- ユーザー出口タイプを追加するには、追加するユーザー出口タイプの DFSDfxxx メンバーの USER_EXITS セクションに EXITDEF ステートメントを挿入してから、その出口タイプを対象にして REFRESH USEREXIT コマンドを入力します。ユーザー出口に初期化機能がある場合、そのユーザー出口が初期化機能によって呼び出された後、IMS が使用できるようになります。
- ユーザー出口タイプを削除するには、削除するユーザー出口タイプの DFSDfxxx メンバーの USER_EXITS セクションから EXITDEF ステートメントを除去してから、その出口タイプを対象にして REFRESH USEREXIT コマンドを入力します。
- 既存のユーザー出口を移行するには、DFSDfxxx メンバーの USER_EXITS セクション内の EXITDEF パラメーターに出口ルーチンを指定してから、その出口タイプを対象にして REFRESH USEREXIT コマンドを入力します。

リフレッシュは出口タイプのレベルで実行されるので、特定の出口タイプの出口ルーチンが変更されると、その出口タイプのすべての出口ルーチンがリフレッシュされます。

特定のメッセージには、メッセージが参照するコマンドの短縮形が含まれます。REFRESH USEREXIT コマンドには短縮形がないため、メッセージ内ではコマンドの最初の 4 文字 (REFR) が指定されます。これらの 4 文字は、コマンド・セキュリティーの定義にも使用されます。

出力フィールド

以下の表には、REFRESH USEREXIT 出力フィールドが記載されています。表の各列は、以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。

有効範囲

出力フィールドの有効範囲を識別します。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 248. REFRESH コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
CC	CC	N/A	N/A	出力行の完了コード。完了コードは常に戻されます。
CCTXT	CCText	N/A	N/A	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
MBR	MbrName	N/A	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。メンバー名は常に戻されます。

表 248. REFRESH コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
TYPE	ExitType	TYPE	LCL	REFRESH USEREXIT コマンドで要求されたユーザー出口タイプ。ユーザー出口タイプは常に戻されます。
NAME	ModName	N/A	LCL	この REFRESH USEREXIT コマンドでロードされた出口ルーチン名。

戻りコード、理由コード、および完了コード

REFRESH USEREXIT コマンドの結果として戻される戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。コードとその意味のリストは、CSL0MCMDC: コマンド要求 (システム・プログラミング API)を参照してください。

以下の表には、REFRESH USEREXIT コマンドの戻りコード、理由コード、および完了コードが記載されています。また、この表にはコードの簡略説明も含まれています。

表 249. REFRESH USEREXIT コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	REFRESH USEREXIT コマンドは正常に完了しました。
X'00000004'	X'00001024'	REFRESH USEREXIT コマンドが正常に完了し、メッセージが発行されました。
X'00000008'	X'00002014'	MEMBER パラメーターで指定された DFSDFxxx 接尾部に無効文字が含まれています。
X'0000000C'	X'00003000'	REFRESH USEREXIT コマンドは、少なくとも 1 つのユーザー出口タイプについては正常に実行されました。1 つ以上のユーザー出口タイプについて、REFRESH コマンドは正常に実行されていません。完了コードに、エラーの理由とユーザー出口タイプが示されています。REFRESH コマンドにより戻される可能性がある完了コードは、838 ページの表 250 にリストされています。
X'0000000C'	X'00003004'	REFRESH USEREXIT コマンドは指定したどのユーザー出口タイプについても正常に実行されませんでした。完了コードに、エラーの理由とユーザー出口タイプが示されています。REFRESH コマンドにより戻される可能性がある完了コードは、838 ページの表 250 にリストされています。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できなかったため、REFRESH USEREXIT コマンド処理は終了しました。

表 249. REFRESH USEREXIT コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000014'	X'00005FFF'	内部エラーが原因で、REFRESH USEREXIT コマンド処理は終了しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

以下の表には、REFRESH USEREXIT コマンドで戻される可能性のある完了コードが記載されています。

表 250. REFRESH USEREXIT コマンドの完了コード

完了コード	意味
0	REFRESH USEREXIT コマンドは、ユーザー出口タイプに対して正常に完了しました。
92	REFRESH USEREXIT コマンドの処理中にエラーが検出されました。エラーに関する追加情報については、コマンド出力と共に返されるメッセージを確認してください。
148	指定されたユーザー出口タイプは正常に削除され、メッセージが発行されました。
14E	指定されたユーザー出口タイプは削除され、以後は呼び出されなくなります。
14F	指定されたユーザー出口タイプは、DFSDFxxx メンバー内にそのユーザー出口タイプ用の EXITDEF がなかったため、または DFSVSMxx メンバー内にログ・レコード・タイプが存在しなかったため (メッセージ DFS4586E)、追加できませんでした。

例

以下に示すのは REFRESH USEREXIT コマンドの例です。

REFRESH コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
REFRESH USEREXIT TYPE(ICQSEVNT)
```

TSO SPOC 出力:

```
ExitType ModName MbrName CC
ICQSEVNT DFSCQEX0 SYS3 0
ICQSEVNT DFSCQEX1 SYS3 0
ICQSEVNT DFSCQEX2 SYS3 0
```

OM API 入力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xm1vsn>20 </xm1vsn>
<statime>2012.061 20:33:01.174845</statime>
<stotime>2012.061 20:33:01.330060</stotime>
```

```

<staseq>C9344A682C43D7AA</staseq>
<stoseq>C9344A685228CD2C</stoseq>
<rqsttkn1>USRT002 10123301</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>SYS3 </master>
<userid>USRT002 </userid>
<verb>REFR</verb>
<kwd>USEREXIT </kwd>
<input>REFRESH USEREXIT TYPE(ICQSEVNT) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="TYPE" l1b1="ExitType" scope="LCL" key="YES" len="8"
  dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="NAME" l1b1="ModName" scope="LCL" key="YES" len="8"
  dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" key="NO" len="4"
  dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" key="NO" len="4" dtype="INT"
  align="right" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>TYPE(ICQSEVNT) NAME(DFSCQEX1) MBR(SYS3) CC( 0) </rsp>
<rsp>TYPE(ICQSEVNT) NAME(DFSCQEX2) MBR(SYS3) CC( 0) </rsp>
<rsp>TYPE(ICQSEVNT) NAME(DFSCQEX0) MBR(SYS3) CC( 0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: ICQSEVNT 出口タイプがリフレッシュされました。

REFRESH コマンドの例 2


TSO SPOC 入力:

```
REFRESH USEREXIT TYPE(PGMCREAT)
```


TSO SPOC 出力:

```
ExitType ModName MbrName CC
PGMCREAT DFSDFPX0 IMS1 0
```

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

 DFSDFxxx メンバーの USER_EXITS セクション (システム定義)

第 13 章 /RELEASE コマンド

/RELEASE コマンドは、/HOLD コマンドを使って以前に保管されていた会話を再開します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 『使用上の注意』
- 842 ページの『例』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 251. /RELEASE コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/RELEASE	X		X
CONVERSATION	X		X

構文

→ /RELEASE CONVERSATION conv# →
 └─ /REL ─┘

キーワード

以下のキーワードは、/RELEASE コマンドに有効です。

CONVERSATION

再開する会話の 4 桁の ID 番号 (先行ゼロ) を指定します。CONVERSATION conv# は、4 桁の ID conv# ですが、この会話を以前に保持した時に提供された番号です。

使用上の注意

/HOLD が入力される前に、端末へ最後に送られたメッセージが、その端末へ再送されます。

/RELEASE は、LU 6.2 装置からは無効です。LU 6.2 通信は、それ自身で開始したものであっても、あるいは別の通信プロトコルで開始した会話であっても、解放することはできません。

グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持される場合、/RELEASE は Resource Manager 内でグローバルに会話を更新します。グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持されない場合、/RELEASE はローカルに会話を更新します。

例

入力 ET:

```
/RELEASE CONVERSATION 0001
```

応答 ET:

IMS は、最後のメッセージを再送する以外は、このコマンドにも応答しません。

説明: 会話 0001 は、リリースされているため、端末オペレーターはこれを再開できません。

第 14 章 /RESET コマンド

/RESET コマンドは /SET コマンドで設定された事前設定モードを除去します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『例』

環境

以下の表には、コマンドを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 252. /RESET コマンドの有効環境

コマンド	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/RESET	X		X

構文

▶▶ `/RESET` /RES ▶▶

例

入力 ET:

```
/RESET
```

応答 ET:

```
DFS058I  RESET COMMAND COMPLETED
```

説明: 事前設定モードがもはや有効でなくなります。

第 15 章 /RMxxxxxx コマンド

/RMxxxxxx コマンドは、IMS データベース・リカバリー管理 (DBRC) の機能呼び出す複数セグメント・コマンドです。各 /RMxxxxxx コマンドは、対応するバッチ DBRC コマンドのオンライン・バージョンです。

以下の表は、オンラインでサポートされる DBRC コマンドをリストしており、それぞれのコマンドのユーティリティ機能について説明しています。

表 253. オンラインでサポートされる DBRC コマンドの機能

コマンド	ユーティリティ機能
/RMCHANGE	RECON データ・セット内の情報を変更または修正します。
/RMDELETE	RECON データ・セット内の情報を削除します。
/RMGENJCL	以下のための JCL を生成します。 <ul style="list-style-type: none">• IMS 変更累積ユーティリティ• IMS ログ保存ユーティリティ• IMS ログ・リカバリー・ユーティリティ• IMS データベース・イメージ・コピー・ユーティリティ• データベース・イメージ・コピー 2• IMS オンライン・データベース・イメージ・コピー・ユーティリティ• データベース・リカバリー・ユーティリティ• ユーザー定義の出力
/RMINIT	DBRC RECON データ・セット内でレコードを作成します。
/RMLIST	RECON データ・セットに入っている情報をリストします。
/RMNOTIFY	DBRC に追加情報を通知します。この情報は、RECON データ・セットに記録されます。

これらのコマンドを使うと、IMS マスター端末オペレーター、または許可された端末オペレーターは、特定の DBRC ユーティリティ機能をオンラインで実行することができます。/RMLIST 以外の /RMxxxxxx コマンドの場合、出力は 4 KB バッファに入れることができる容量に制限されます。OM API 以外 (例えば、IMS 端末またはマスター端末) から発行される /RMLIST コマンドの場合、出力は 32 KB に制限されます。OM API から発行される /RMLIST コマンドによって生成され、返される出力には制限はありません。

サブセクション:

- 846 ページの『環境』
- 846 ページの『構文』
- 846 ページの『キーワード』
- 848 ページの『使用上の注意』
- 848 ページの『例』

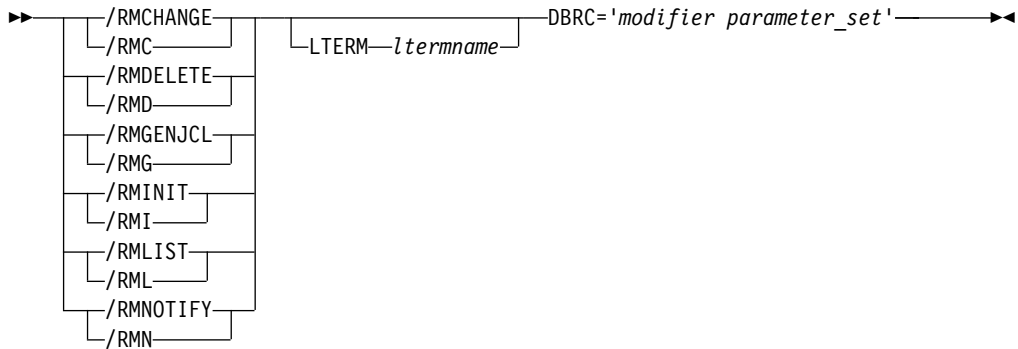
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 254. /RMxxxxxx コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/RMxxxxxx	X	X	X
LTERM	X		X

構文



キーワード

以下のキーワードは、/RMxxxxxx コマンドに有効です。

LTERM *ltermname*

出力用に指定する論理端末を指定します。 LTERM キーワードを省略すると、出力の宛先は入力端末になります。

推奨事項: DBRC コマンドの中には、大量の出力を生成するものがあるため、特に、/RMGENJCL および /RMLIST コマンドの場合は、出力はプリンターに指定してください。

DBRC='modifier parameter_set'

指定された機能の DBRC 修飾子および DBRC に渡されるパラメーターを指定します。DBRC= は、すべての /RMxxxxxx コマンドの必須パラメーターです。

modifier

指定する機能の DBRC 修飾子。以下の表には、DBRC 修飾子、および DBRC 修飾子を出すことのできる /RMxxxxxx コマンドがリストされています。

表 255. /RMxxxxxx コマンドに関する DBRC の修飾子

修飾子	/RMxxxxxx コマンド					
	CHANGE	DELETE	GENJCL	INIT	LIST	NOTIFY
ADS	X	X		X		
ALLOC		X				X

表 255. /RMxxxxxx コマンドに関する DBRC の修飾子 (続き)

修飾子	/RMxxxxxx コマンド					
	CHANGE	DELETE	GENJCL	INIT	LIST	NOTIFY
ARCHIVE			X			
BKOUT	X	X			X	X
CA	X	X	X	X		X
CAGRP	X	X		X	X	
CLOSE			X			
DB	X	X		X	X	
DBDS	X	X		X	X	
DBDSGRP	X	X		X	X	
HISTORY					X	
IC	X	X	X	X		X
LOG		X			X	
OIC			X			
PART				X		
PRILOG	X					X
RECON	X				X	
RECOV		X	X			X
REORG		X				X
SECLOG	X					X
SG	X	X		X		
SUBSYS	X	X			X	X
UIC	X	X				X
USER			X			

parameter_set

DBRC に渡される必須パラメーターおよびオプション・パラメーターを表しています。指定できる値についての説明は、対応するコマンドを参照してください。例えば、/RMLIST LTERM(*ltermname*) DBRC='DBDS *parameter_set*' を指定する場合、LIST.DBDS コマンドの説明を参照して、*parameter_set* の代わりに使用できるパラメーターを確認してください。

表 256. /RMxxxxxx コマンドおよび対応する DBRC コマンド

コマンド	対応する DBRC コマンド
/RMCHANGE	/RMCHANGE コマンドで使用できるパラメーターについては、「CHANGE コマンド (コマンド)」を参照してください。
/RMDELETE	/RMDELETE コマンドで使用できるパラメーターについては、「DELETE コマンド (コマンド)」を参照してください。
/RMGENJCL	/RMGENJCL コマンドで使用できるパラメーターについては、「GENJCL コマンド (コマンド)」を参照してください。
/RMINIT	/RMINIT コマンドで使用できるパラメーターについては、「INIT コマンド (コマンド)」を参照してください。

表 256. /RMxxxxx コマンドおよび対応する DBRC コマンド (続き)

コマンド	対応する DBRC コマンド
/RMLIST	/RMLIST コマンドで使用できるパラメーターについては、「LIST コマンド (コマンド)」を参照してください。
/RMNOTIFY	/RMNOTIFY コマンドで使用できるパラメーターについては、「NOTIFY コマンド (コマンド)」を参照してください。

使用上の注意

すべての /RMxxxxxx フォーマットには、メッセージ終結を表わす EOM の標識が必要です。最後のセグメントの前にセグメントがある場合、すべてのセグメントに EOS 標識を組み込む必要があります。/RMxxxxxx コマンドにコメントを入れる場合、アスタリスクで囲まなければなりません。

DBRC がオンライン・コマンドを処理している時に、両方の RECON データ・セットの逸失以外の障害が起きた場合、DBRC は、IMS オンライン領域の残りの実行時間の間、そのコマンドを使用不能にします。最初の障害の原因を判別および訂正した後、パラメーター・セットに RESET パラメーターを指定してそのオンライン・コマンドを再実行依頼すると、このコマンドが再び使用可能になります。DBRC が使用不能にするのは、コマンドの修飾子レベルではなく、verb レベルです。つまり、DBRC INIT.DB コマンドが失敗した場合、DBRC は、すべての INIT コマンドを使用不能にします。コマンドが失敗すると、DBRC は発信元端末にエラー・メッセージを送ります。失敗したコマンドは、依然として他の IMS オンライン領域から出すことができます。

注: 自動アーカイブには、GENJCL.ARCHIVE コマンドが必要であるため、DBRC が GENJCL コマンドを使用不能にすることはありません。

これらのコマンドは、バッチ SPOC ユーティリティーを使用する IMSplex に対して発行できます。

IMS を再始動する前に、DBRC は、エラーは訂正されているものと想定するので、複数の IMS 再始動にわたってコマンドの失敗を記憶していません。

例

以下に示すのは /RMxxxxxx コマンドの例です。

/RMCHANGE コマンドの例

入力 ET (コメント付き):

```
/RMCHANGE DBRC='DB DBD(DIVNTZ04) SHARELVL(3)'. *COMMENT*.
```

応答 ET:

```
CHANGE.DB DBD(DIVNTZ04) SHARELVL(3)
DSP0203I  COMMAND COMPLETED WITH CONDITION CODE 00
DSP0220I  COMMAND COMPLETION TIME
DSP0211I  COMMAND PROCESSING COMPLETE
DSP0211I  HIGHEST CONDITION CODE = 00
DSP0058I  RMC COMMAND COMPLETED
```

入力 ET:

```
/RMCHANGE DBRC='DBDS DBD(DIVNTZ04) DDN(DBHVSAM1) ICON'.
```

応答 ET:

```
CHANGE.DBDS DBD(DIVNTZ04) DDN(DIVNTZ04) ICON
DSP0203I  COMMAND COMPLETED WITH CONDITION CODE 00
DSP0220I  COMMAND COMPLETION TIME
DSP0211I  COMMAND PROCESSING COMPLETE
DSP0211I  HIGHEST CONDITION CODE = 00
DSP0058I  RMC COMMAND COMPLETED
```

入力 ET:

```
/RMC DBRC='DBDS DBD(DEDBJN21) AREA(DB21AR7) VSO PREOPEN'.
```

応答 ET:

```
DFS000I  CHANGE.DBDS DBD(DEDBJN21) AREA(DB21AR7) VSO PREOPEN
DFS000I  DSP0203I  COMMAND COMPLETED WITH CONDITION CODE 00
```

/RMDELETE コマンドの例

入力 ET (コメント付き):

```
/RMDELETE DBRC='DB DBD(DIVNTZ04)'. *COMMENT*.
```

応答 ET:

```
DELETE.DB DBD(DIVNTZ04)
DSP0203I  COMMAND COMPLETED WITH CONDITION CODE 00
DSP0220I  COMMAND COMPLETION TIME
DSP0211I  COMMAND PROCESSING COMPLETE
DSP0211I  HIGHEST CONDITION CODE = 00
DSP0058I  RMD COMMAND COMPLETED
```

/RMGENJCL コマンドの例

入力 ET (コメント付き):

```
/RMGENJCL LTERM SMITH DBRC='IC DBD(HDAMVSAM) DDN(DD1) LIST'.
```

応答 ET:

```
DSP058I  RMG COMMAND COMPLETED
```

応答 LTERM SMITH:

```
GENJCL.IC DBD(HDAMVSAM) DDN(DD1)
//IC135607  JOB
//IC      EXEC PGM=DFSRR00,PARM='ULU,DFSUDMP0',REGION=800K
//*
//*      THIS JCL ORIGINATES FROM THE USER'S 'JCLPDS' LIBRARY.
//*      %KEYWORDS ARE REPLACED BY THE GENJCL FUNCTION OF
//*      THE IMS DATABASE RECOVERY CONTROL FEATURE.
//*
//*      JCL FOR IMAGE COPY.
//*
//SYSPRINT DD SYSOUT=A
//RECON1  DD DSN=POCON01,DISP=SHR
//RECON2  DD DSN=POCON02,DISP=SHR
//IMS     DD DSN=IMS.DBDLIB,DISP=SHR
//DD1     DD DSN=HDAMVASM,DCB=BUFNO=10,DISP=OLD
//DATAOUT1 DD DSN=IMS.HDAMVSAM.DD1.IC.ICDD1,UNIT=3400,
//          VOL=(PRIVATE,,1,SER=(*****)),
//          LABEL=(1,SL),
```

```
//          DISP=(NEW,KEEP),DCB=BUFNO=10
//DFSVSAMP DD *
1024,2
4096,4
//SYSIN    DD *
D1 HDAMVSAM DD1      DATAOUT1
DSP0203I  COMMAND COMPLETED WITH CONDITION CODE 00
DSP0220I  COMMAND COMPLETION TIME
DSP0211I  COMMAND PROCESSING COMPLETE
DSP0211I  HIGHEST CONDITION CODE = 00
DSP0058I  RMG COMMAND COMPLETED
```

/RMINIT コマンドの例

入力 ET (コメント付き):

```
/RMINIT DBRC='DB DBD(DIVNTZ04) SHARELVL(3)'. *COMMENT*.
```

応答 ET:

```
INIT.DB DBD(DIVNTZ04) SHARELVL(3)
DSP0203I  COMMAND COMPLETED WITH CONDITION CODE 00
DSP0220I  COMMAND COMPLETION TIME
DSP0211I  COMMAND PROCESSING COMPLETE
DSP0211I  HIGHEST CONDITION CODE = 00
DSP0058I  RMI COMMAND COMPLETED
```

/RMLIST コマンドの例

入力 ET (コメント付き):

```
/RMLIST DBRC='DB DBD(DIVNTZ04)'. *LAST COMMENT*.
```

全機能データベースの応答 ET:

```
IMS VERSION 15 RELEASE 1 DATA BASE RECOVERY CONTROL          PAGE 0001
LIST.DB DBD(DIVNTZ04)
14.336 13:19:01.337255          LISTING OF RECON          PAGE 0002
-----
DB
DBD=DIVNTZ04          DMB#=4          TYPE=IMS
SHARE LEVEL=0          GSGNAME=**NULL**          USID=0000000001
AUTHORIZED USID=0000000000 RECEIVE USID=0000000000 HARD USID=0000000000
RECEIVE NEEDED USID=0000000000
DBRCVGRP=**NULL**
FLAGS:          COUNTERS:
BACKOUT NEEDED          =OFF          RECOVERY NEEDED COUNT          =0
READ ONLY          =OFF          IMAGE COPY NEEDED COUNT          =0
PROHIBIT AUTHORIZATION=OFF          AUTHORIZED SUBSYSTEMS          =0
RECOVERABLE          =YES          HELD AUTHORIZATION STATE=0
          EEQE COUNT          =0
TRACKING SUSPENDED          =NO          RECEIVE REQUIRED COUNT          =0
OFR REQUIRED          =NO
REORG INTENT          =NO
QUIESCE IN PROGRESS          =NO
QUIESCE HELD          =NO
-----
DSP0180I  NUMBER OF RECORDS LISTED IS          1
DSP0203I  COMMAND COMPLETED WITH CONDITION CODE 00
DSP0220I  COMMAND COMPLETION TIME 14.336 13:19:01.891672
          IMS VERSION 15 RELEASE 1 DATA BASE RECOVERY CONTROL          PAGE 0003
DSP0211I  COMMAND PROCESSING COMPLETE
DSP0211I  HIGHEST CONDITION CODE = 00
```

高速機能データベースの応答 ET:

IMS VERSION 15 RELEASE 1 DATA BASE RECOVERY CONTROL PAGE 0001
 LIST.DB DBD(DEDBJN22)
 14.336 12:10:07.154448 LISTING OF RECON PAGE 0002

 DB
 DBD=DEDBJN22 DMB#=4 TYPE=FP
 SHARE LEVEL=3 RANDOMIZER=**NULL**
 FLAGS: COUNTERS:
 RECOVERY NEEDED COUNT =0
 IMAGE COPY NEEDED COUNT =0
 PROHIBIT AUTHORIZATION=OFF AUTHORIZED AREAS =0
 RECOVERABLE =YES EEQE COUNT =0
 FULLSEG DEFAULT =NO

 DSP0180I NUMBER OF RECORDS LISTED IS 1
 DSP0203I COMMAND COMPLETED WITH CONDITION CODE 00
 DSP0220I COMMAND COMPLETION TIME 14.336 12:10:07.484796
 IMS VERSION 15 RELEASE 1 DATA BASE RECOVERY CONTROL PAGE 0003
 DSP0211I COMMAND PROCESSING COMPLETE
 DSP0211I HIGHEST CONDITION CODE = 00

入力 ET:

/RMLIST DBRC='DB DBD(DIVNTZ02) DBDS'

全機能データベースの応答 ET:

IMS VERSION 15 RELEASE 1 DATA BASE RECOVERY CONTROL PAGE 0001
 LIST.DB DBD(DIVNTZ02) DBDS
 14.336 13:58:07.077014 LISTING OF RECON PAGE 0002

 DB
 DBD=DIVNTZ02 IRLMID=**NULL** DMB#=1 TYPE=IMS
 SHARE LEVEL=3 GSGNAME=**NULL** USID=0000000002
 AUTHORIZED USID=0000000002 RECEIVE USID=0000000002 HARD USID=0000000002
 RECEIVE NEEDED USID=0000000000
 DBRCVGRP=**NULL**
 FLAGS: COUNTERS:
 BACKOUT NEEDED =OFF RECOVERY NEEDED COUNT =0
 READ ONLY =OFF IMAGE COPY NEEDED COUNT =0
 PROHIBIT AUTHORIZATION=OFF AUTHORIZED SUBSYSTEMS =0
 RECOVERABLE =YES HELD AUTHORIZATION STATE=0
 EEQE COUNT =0
 TRACKING SUSPENDED =NO RECEIVE REQUIRED COUNT =0
 OFR REQUIRED =NO
 REORG INTENT =NO
 QUIESCE IN PROGRESS =NO
 QUIESCE HELD =NO

 14.336 13:58:07.077014 LISTING OF RECON PAGE 0003

 DBDS
 DSN=IMSTESTL.DIVNTZ02.FJXXS01K TYPE=IMS
 DBD=DIVNTZ02 DDN=DBHVSAM1 DSID=001 DBORG=HISAM DSORG=VSAM
 CAGRP=**NULL** GENMAX=2 IC AVAIL=0 IC USED=1 DSSN=00000001
 NOREUSE RECOVPD=0
 DEFLTJCL=**NULL** ICJCL=ICJCL OICJCL=OICJCL RECOVJCL=RECOVJCL
 RECVJCL=ICRCVJCL
 FLAGS: COUNTERS:
 IC NEEDED =OFF
 RECOV NEEDED =OFF
 RECEIVE NEEDED =OFF EEQE COUNT =0

 IMAGE
 RUN = 14.336 13:57:56.381657 * RECORD COUNT =1
 STOP = 00.000 00:00:00.000000 SMSOFFLC USID=0000000002

IC1
DSN=IMSTESTL.DBFC1.DIVNTZ02.DBHVSAM1

14.336 13:58:07.077014 LISTING OF RECON PAGE 0004

DBDS
DSN=IMSTESTL.DIVNTZ02.FJXSO1E TYPE=IMS
DBD=DIVNTZ02 DDN=DBHVSAM2 DSID=002 DBORG=HISAM DSORG=VSAM
CAGRP=**NULL** GENMAX=2 IC AVAIL=0 IC USED=1 DSSN=00000000
NOREUSE RECOVPD=0
DEFLTJCL=**NULL** ICJCL=ICJCL OICJCL=OICJCL RECOVJCL=RECOVJCL
RECVJCL=ICRCVJCL
FLAGS: COUNTERS:
IC NEEDED =OFF
RECOV NEEDED =OFF
RECEIVE NEEDED =OFF EEQE COUNT =0

IMAGE
RUN = 14.336 13:57:56.381657 * RECORD COUNT =1
STOP = 00.000 00:00:00.000000 SMSOFFLC USID=0000000002

IC1
DSN=IMSTESTL.DB1.FC1.DIVNTZ02.DBHVSAM2

DSP0180I NUMBER OF RECORDS LISTED IS 5
DSP0203I COMMAND COMPLETED WITH CONDITION CODE 00
DSP0220I COMMAND COMPLETION TIME 14.336 13:58:07.329858
IMS VERSION 15 RELEASE 1 DATA BASE RECOVERY CONTROL PAGE 0005

LIST.DB DBD(DIVNTZ02)
14.336 13:58:07.077014 LISTING OF RECON PAGE 0006

DB
DBD=DIVNTZ02 IRLMID=**NULL** DMB#=1 TYPE=IMS
SHARE LEVEL=3 GSGNAME=**NULL** USID=0000000002
AUTHORIZED USID=0000000002 RECEIVE USID=0000000002 HARD USID=0000000002
RECEIVE NEEDED USID=0000000000
DBRCVGRP=**NULL**
FLAGS: COUNTERS:
BACKOUT NEEDED =OFF RECOVERY NEEDED COUNT =0
READ ONLY =OFF IMAGE COPY NEEDED COUNT =0
PROHIBIT AUTHORIZATION=OFF AUTHORIZED SUBSYSTEMS =0
RECOVERABLE =YES HELD AUTHORIZATION STATE=0
EEQE COUNT =0
TRACKING SUSPENDED =NO RECEIVE REQUIRED COUNT =0
OFR REQUIRED =NO
REORG INTENT =NO
QUIESCE IN PROGRESS =NO
QUIESCE HELD =NO

DSP0180I NUMBER OF RECORDS LISTED IS 1
DSP0203I COMMAND COMPLETED WITH CONDITION CODE 00
DSP0220I COMMAND COMPLETION TIME 14.336 13:58:07.333337

高速機能データベースの応答 ET:

IMS VERSION 15 RELEASE 1 DATA BASE RECOVERY CONTROL PAGE 0001
LIST.DB DBD(DEDBJN22) DBDS
14.336 13:58:07.077014 LISTING OF RECON PAGE 0002

DB
DBD=DEDBJN22 DMB#=4 TYPE=FP
SHARE LEVEL=3 RANDOMIZER=**NULL**
FLAGS: COUNTERS:


```

RECOV NEEDED      =OFF      REGISTERED ADS #      =1
                        EEQE COUNT      =0
RECEIVE NEEDED    =OFF      SHADOW ADS AVAIL #    =0
OFR REQUIRED        =NO       REGISTERED SHADOW ADS # =0
TRACKING SUSPENDED =NO
HSSP CIC IN PROGRESS =NO
QUIESCE IN PROGRESS =NO
QUIESCE HELD      =NO
ALTER IN PROGRESS =NO

```

ADS LIST:

```

-ADS DDN--ADS DSN-      CREATE
DB22AR1  IMSTESTL.DB22AR1  -STAT- -RUNNING-
                        AVAIL   NO

```

ALLOC

```

ALLOC  =14.336 13:56:04.561039      * ALLOC LRID =0000000000000000
DSSN=0000000001 USID=0000000002 START = 14.336 13:55:34.300003
DEALLOC =14.336 13:57:37.105130      DEALLOC LRID =0000000000000000

```

REORG

```

RUN      = 14.336 13:54:39.633913      * USID = 0000000001
REORG#   = 00000
14.336 13:58:07.077014      LISTING OF RECON      PAGE 0005

```

DBDS

```

DBD=DEDBJN22 AREA=DB22AR2      TYPE=FP
SHARE LEVEL=3      DSID=00003 DBORG=DEDB DSORG=VSAM
GSGNAME=**NULL**      USID=0000000001
AUTHORIZED USID=0000000000 RECEIVE USID=0000000000 HARD USID=0000000000
RECEIVE NEEDED USID=0000000000
CAGRP=**NULL** GENMAX=2      IC AVAIL=0      IC USED=0      DSSN=00000000
NOREUSE      RECOVPD=0      NOVSO NOPREOPEN NOPRELOAD NOFULLSG
CFSTR1=**NULL**      CFSTR2=**NULL**      NOLKASID NOMAS
DEFLTJCL=**NULL** ICJCL=ICJCL RECVJCL=ICRCVJCL RECOVJCL=RECOVJCL
DBRCVGRP=**NULL**

```

FLAGS:

```

PROHIBIT AUTHORIZATION=OFF
IC NEEDED      =OFF
IC RECOMMENDED =ON
RECOV NEEDED    =OFF
RECEIVE NEEDED =OFF
OFR REQUIRED     =NO
TRACKING SUSPENDED =NO
HSSP CIC IN PROGRESS =NO
QUIESCE IN PROGRESS =NO
QUIESCE HELD    =NO
ALTER IN PROGRESS =NO

```

COUNTERS:

```

AUTHORIZED SUBSYSTEMS =0
HELD AUTHORIZATION STATE=0
ADS AVAIL #           =1
REGISTERED ADS #      =1
EEQE COUNT            =0
SHADOW ADS AVAIL #    =0
REGISTERED SHADOW ADS # =0

```

ADS LIST:

```

-ADS DDN--ADS DSN-      CREATE
DB22AR2  IMSTESTL.DB22AR2  -STAT- -RUNNING-
                        AVAIL   NO

```

REORG

```

RUN      = 14.336 13:54:39.782464      * USID = 0000000001
REORG#   = 00000

```

入力 ET (コメント付き):

```

/RML DBRC='DBDS DBD(DEDBJN21) AREA(DB21AR0)'. *VSO AREA*.

```

応答 ET:

LIST.DBDS DBD(DEDBJN21) AREA(DB21AR0)

```
-----
DBDS
DBD=DEDBJN21 AREA=DB21AR0 TYPE=FP
SHARE LEVEL=1 DSID=00001 DBORG=DEDB DSORG=VSAM
GSGNAME=**NULL** USID=0000000002
AUTHORIZED USID=0000000002 RECEIVE USID=0000000002 HARD USID=0000000002
RECEIVE NEEDED USID=0000000000
CAGRP=**NULL** GENMAX=2 IC AVAIL=0 IC USED=0 DSSN=00000001
NOREUSE RECOVPD=0 NOVSO NOPREOPEN NOPRELOAD NOFULLSG
CFSTR1=**NULL** CFSTR2=**NULL** NOLKASID NOMAS
DEFLTJCL=**NULL** ICJCL=ICJCL RECVJCL=ICRCVJCL RECOVJCL=RECOVJCL
DBRCVGRP=**NULL**
FLAGS:
PROHIBIT AUTHORIZATION=OFF
IC NEEDED =OFF
IC RECOMMENDED =ON
RECOV NEEDED =OFF
RECEIVE NEEDED =OFF
OFR REQUIRED =NO
TRACKING SUSPENDED =NO
HSSP CIC IN PROGRESS =NO
QUIESCE IN PROGRESS =NO
QUIESCE HELD =NO
ALTER IN PROGRESS =NO
COUNTERS:
AUTHORIZED SUBSYSTEMS =1
HELD AUTHORIZATION STATE=7
ADS AVAIL # =1
REGISTERED ADS # =1
EEQE COUNT =0
SHADOW ADS AVAIL # =0
REGISTERED SHADOW ADS # =0
```

ADS LIST:

```

-ADS DDN--ADS DSN- CREATE
DB21AR0 DB21AR0 -STAT- -RUNNING-
AVAIL NO
```

ASSOCIATED SUBSYSTEM INFORMATION:

```

-SSID- -ACCESS INTENT- ENCODED -STATE- -SS ROLE-
SYS3 EXCLUSIVE 7 ACTIVE
```

ALLOC

```
ALLOC =14.335 14:10:21.444644 * ALLOC LRID =0000000000000000
DSSN=0000000001 USID=0000000002 START = 14.335 14:03:14.819522
```

REORG

```
RUN = 14.335 13:59:41.090369 * USID = 0000000001
DSP0180I NUMBER OF RECORDS LISTED IS 3
DSP0203I COMMAND COMPLETED WITH CONDITION CODE 00
DSP0220I COMMAND COMPLETION TIME 14.335 14:15:56.641143
DSP0211I COMMAND PROCESSING COMPLETE
DSP0211I HIGHEST CONDITION CODE = 00
```

入力 ET (コメント付き):

```
/RML DBRC='DBDS DBD(DEDBJN21) AREA(DB21AR6)'. *DEDB AREA*.
```

応答 ET:

LIST.DBDS DBD(DEDBJN21) AREA(DB21AR6)

```
-----
DBDS
DBD=DEDBJN21 AREA=DB21AR6 TYPE=FP
SHARE LEVEL=1 DSID=00006 DBORG=DEDB DSORG=VSAM
GSGNAME=**NULL** USID=0000000002
AUTHORIZED USID=0000000002 RECEIVE USID=0000000002 HARD USID=0000000002
```

```
RECEIVE NEEDED USID=0000000000
CAGRP=**NULL** GENMAX=2 IC AVAIL=0 IC USED=0 DSSN=00000001
NOREUSE RECOVPD=0 NOVSO NOPREOPEN NOPRELOAD NOFULLSG
CFSTR1=**NULL** CFSTR2=**NULL** NOLKASID NOMAS
DEFLTJCL=**NULL** ICJCL=ICJCL RECVJCL=ICRCVJCL RECOVJCL=RECOVJCL
DBRCVGRP=**NULL**
```

```
FLAGS: COUNTERS:
PROHIBIT AUTHORIZATION=OFF AUTHORIZED SUBSYSTEMS =0
HELD AUTHORIZATION STATE=0
IC NEEDED =OFF ADS AVAIL # =0
RECOV NEEDED =ON REGISTERED ADS # =1
EEQE COUNT =0
OFR REQUIRED =NO
TRACKING SUSPENDED =NO
```

ADS LIST:

```
-ADS DDN--ADS DSN- CREATE
DB21AR6 DB21AR6 -STAT- -RUNNING-
UNAVAIL NO
```

ASSOCIATED SUBSYSTEM INFORMATION:

```
ALLOC
ALLOC =14.335 14:10:22.530986 * ALLOC LRID =0000000000000000
DSSN=0000000001 USID=0000000002 START = 14.335 14:03:14.819522
```

```
REORG
RUN = 14.335 13:59:42.372727 * USID = 0000000001
REORG# = 00000
DSP0180I NUMBER OF RECORDS LISTED IS 4
DSP0203I COMMAND COMPLETED WITH CONDITION CODE 00
DSP0220I COMMAND COMPLETION TIME 14.335 14:15:56.641143
DSP0211I COMMAND PROCESSING COMPLETE
DSP0211I HIGHEST CONDITION CODE = 00
```

/RMNOTIFY コマンドの例







入力 ET (コメント付き):

```
/RMNOTIFY DBRC='SUBSYS SSID(IMSB) IRLMID(IRLM1) NORMAL'.
```

応答 ET:

```
NOTIFY.SUBSYS SSID(IMSB) IRLMID(IRLM1) NORMAL
DSP0203I COMMAND COMPLETED WITH CONDITION CODE 00
DSP0220I COMMAND COMPLETION TIME
DSP0211I COMMAND PROCESSING COMPLETE.
DSP0211I HIGHEST CONDITION CODE = 00
DSP0058I RMN COMMAND COMPLETED
```

関連資料:

-  CHANGE コマンド (コマンド)
-  DELETE コマンド (コマンド)
-  GENJCL コマンド (コマンド)
-  INIT コマンド (コマンド)
-  LIST コマンド (コマンド)
-  NOTIFY コマンド (コマンド)

第 16 章 /RSTART コマンド

/RSTART コマンドは、会話または特殊な操作モードのような関連する条件のすべてをリセットしたくない場合に、回線、回線と物理端末、論理リンク、ノード、ユーザーを開始させます。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 858 ページの『キーワード』
- 860 ページの『使用上の注意』
- 860 ページの『同等の IMS タイプ 2 コマンド』
- 860 ページの『例』

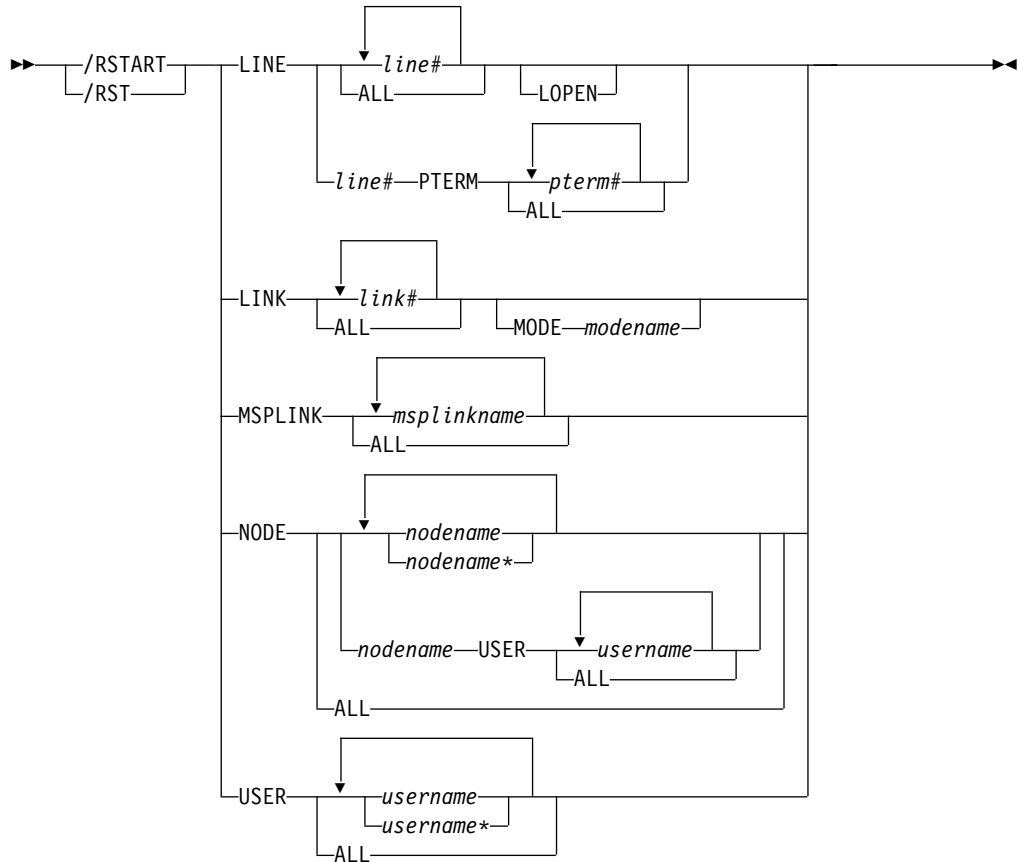
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 257. /RSTART コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/RSTART	X		X
CONTINUOUS	X		X
LINE	X		X
LINK	X		X
LOPEN	X		X
MODE	X		X
MSPLINK	X		X
NODE	X		X
PTERM	X		X
USER	X		X

構文



キーワード

以下のキーワードは、/RSTART コマンドに有効です。

LINE

停止されたときと同じ操作モードで、回線上のすべての端末と共に開始する回線、あるいは回線と物理端末を指定します。/RSTART LINE コマンドは、すべての入力、出力、およびキューイングを回線上で開始し、その回線が応答モードであれば、回線をこのモードから取り出せるようにします。/RSTART LINE PTERM コマンドは、回線応答モードをリセットすることはありませんが、非 VTAM 接続 3270 端末応答モードとループ検査モードはリセットします。

LOPEN

LOPEN は、停止およびアイドル状態のリモート 非 VTAM 回線を使用可能にします。任意の /RSTART LINE PTERM コマンドの前に、/RSTART LINE LOPEN コマンドを入力して、停止してアイドルである回線を、それが使用可能になる前にリセットされるのを回避します。回線が停止していない場合、あるいは処理が停止していて、回線がアイドル状態の場合、あるいは使用可能化を適用できない場合、LOPEN キーワードは無視され、処理が継続します。

/RSTART LINE と /RSTART NODE は、指定した物理端末またはノードについて、高速機能がアクティブな場合には、端末応答モードをリセットすることはできません。/RSTART コマンドを使う前に、高速機能出力を破棄するために /DEQUEUE コマンドを入力しなければなりません。

LINK

開始する論理リンクを指定します。論理リンクは、個々に開始することも、一度に全部を開始することもできます。

TCP/IP リンクおよび VTAM リンクの場合、2 つのパートナー・システムのいずれか一方で /RSTART LINK コマンドを発行して、通信を開始することができます。CTC リンクまたは MTM リンクの場合は、両方のパートナー IMS システムで /RSTART LINK コマンドが入力されるまで通信は開始されません。/RSTART LINK コマンドは、リンクが停止されてアイドル状況にあり、割り当てられた物理リンクがオープンされていない限り (/DISPLAY コマンドで表示されます) リジェクトされます。

MODE

MODE キーワードを使って、IMS VTAM MSC セッションを活動化する時に使うモード・テーブル項目を指定することができます。MODE キーワードの使用は、非 VTAM リンクでは無効です。MODE キーワードをもつ /RSTART LINK コマンドで非 VTAM リンクが特定して参照されると、それらのリンクにはエラーのマークが付けられます。

MSPLINK

MSC TCP/IP リンクまたは VTAM リンクの PSTOPPED 状況をリセットして、ログオンを可能にします。TCP/IP リンクが TCP/IP 汎用リソースで使われている場合、このキーワードは PSTOPGEN 状況もリセットします。

NODE

入力、出力、およびキューイングを開始する VTAM ノードを指定します。/RSTART NODE nodename USER username コマンドは、nodename 用に username に割り振られた ISC ハーフセッションを再始動します。USER キーワードは、NODE キーワードを用いた場合にのみ有効であり、指定されたハーフセッションを再始動します。USER キーワードを省略すると、指定されたノードのすべてのハーフセッションに影響を与えます。

NODE および **USER** パラメーターを一緒に使用する場合の制約事項:

- 次のような場合にのみ、NODE USER キーワードの対を使用したコマンドは有効です。
 - USER が NODE にサインオンされています。
 - ISC 環境で、USER を NODE に割り振られています。
 - ノードおよびユーザーは既に存在しています。
- /RSTART NODE USER コマンドは、ISC、LUP、および 3600 ノードに対してのみ有効です。

USER キーワードが指定されていない場合、NODE パラメーターは総称になります。総称パラメーターは、既存のノードを指定します。状況データを保存するために一時的にノードを作成し、この状況条件がリセットされている場合、次の単純チェックポイントでこのノードは削除されます。

グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持されない場合、/RSTART NODE コマンドを使用すると、ノードはローカル状況をリセットせずにローカル IMS にログオンできるようになります。グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持される場合、/RSTART NODE コマンドを用いると、ノードは Resource Manager に保持されているグローバル・ノード

状況をリセットすることなく、IMSplex 内の任意の IMS にログオンできるようになります。重要な状況がなくなると、ノードは Resource Manager によって削除されます。

USER

入力、出力、およびキューイングを開始する USER を指定します。このコマンドは、会話モード、排他モード、テスト・モードなどの条件をリセットせずに USER を開始します。/RSTART USER コマンドは、動的ユーザーにのみ適用されます。

総称パラメーターが既存のユーザーを指定する場合、USER パラメーターは、総称になれます。

ユーザー構造が一時的であり、今リセットされた状況を保存するために単独で作成された場合、一時的ユーザーは次の単純チェックポイントで削除されます。

グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持されない場合、/RSTART USER コマンドを用いると、ユーザーはローカル IMS にサインオンできるようになります。グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持される場合、/RSTART USER コマンドを使用すると、ユーザーは IMSplex 内の任意の IMS にサインオンできるようになります。ユーザーは、Resource Manager 内に重要な状況がなくなると削除されます。

使用上の注意

/RSTART コマンドは、端末オペレーターが入力したすべてのパラメーターの妥当性を検査します。相互に独立したパラメーターにエラーが検出された場合、無効なパラメーターだけにエラーのフラグを立て、/RSTART コマンドは残りのパラメーターを処理します。

/RSTART コマンドは、/START、/STOP、/PSTOP、/PURGE、/MONITOR、/COMPT、または /RCOMPT のいずれかのコマンドで以前に確立された状態をリセットするために使用することができます。

このコマンドは、バッチ SPOC ユーティリティーを使用する IMSplex に対して発行できます。

同等の IMS タイプ 2 コマンド

以下の表は、各種の /RSTART コマンドと、類似の機能を実行する IMS タイプ 2 コマンドを示しています。

表 258. /RSTART コマンドと同等のタイプ 2 コマンド

タスク	/RSTART コマンド	類似の IMS タイプ 2 コマンド
MSC TCP/IP リンクまたは VTAM リンクをリセットして、ログオンを可能にします。	/RSTART MSPLINK <i>msplinkname</i> ALL	UPDATE MSPLINK NAME(<i>msplinkname</i> *) START(LOGON)

例

以下に示すのは /RSTART コマンドの例です。

/RSTART コマンドの例 1

入力 ET:

```
/RSTART LINE 4,5,6,7,8,9,10,11
```

応答 ET:

```
DFS058I RSTART COMMAND COMPLETED
```

応答 RT:

```
DFS059I TERMINAL RSTARTED
```

説明: 回線 4、5、6、7、8、9、10、および 11 が開始されます。

/RSTART コマンドの例 2

入力 ET:

```
/RSTART LINE 4 5 6 700
```

応答 ET:

```
DFS058I RSTART COMMAND COMPLETED EXCEPT LINE 700
```

/RSTART コマンドの例 3

入力 ET:

```
/RSTART LINE 4 PTERM 1, 2
```

応答 ET:

```
DFS058I RSTART COMMAND COMPLETED
```

応答 RT:

```
DFS059I TERMINAL RSTARTED
```

説明: LINE 4 PTERM 1 と 2 が開始されます。

/RSTART コマンドの例 4

入力 ET:

```
/RSTART LINK ALL
```

応答 ET:

```
DFS058I RSTART COMMAND COMPLETED
```

説明: すべての論理リンクが開始されます。CTC リンクおよび MTM リンクの場合、リモート・システムのパートナーが ***/RSTART LINK*** コマンドを使用して開始されるまで、リンクを介した通信は開始されません。

応答 ET:

```
DFS2168I CONNECTION ESTABLISHED ON LINK 2
```

説明: 2 つの IMS システム間の通信接続が確立されます。パートナー・リンクは、***/RSTART LINK*** コマンドで開始されます。それぞれの接続が設定されるごとに、メッセージ DFS2168 が戻されます。

/RSTART コマンドの例 5

入力 ET:

```
/RSTART LINK 2
```

応答 ET:

```
DFS058I RSTART COMMAND COMPLETED
```

説明: 論理リンク 2 が開始されます。

応答 ET:

```
DFS2168I CONNECTION ESTABLISHED ON LINK 2
```

説明: 2 つの IMS システムが接続されます。

/RSTART コマンドと ***TCP/IP*** リンクの例 6

入力 ET:

```
/RSTART LINK 23
```

応答 ET:

```
DFS2168I 17:37:39 CONNECTION ESTABLISHED ON LINK 0023
```

パートナー・システムでの応答 ET:

```
DFS2160I 17:37:39 LINK 028 STARTED BY PARTNER TB NODE IMS1  
DFS2168I 17:37:39 CONNECTION ESTABLISHED ON LINK 0028
```

説明: パートナー・システムの応答 ET において、IMS1 は */RSTART* コマンドが発行されたパートナー・システムの IMS ID です。

/RSTART コマンドと ***VTAM*** リンクの例 7

入力 ET:

```
/RSTART LINK 10
```

応答 ET:

```
DFS058I 17:34:36 RSTART COMMAND COMPLETED  
DFS2168I 17:34:36 CONNECTION ESTABLISHED ON LINK 0010
```

パートナー・システムでの応答 ET:

```
DFS2160I 17:34:36 LINK 013 STARTED BY PARTNER AK NODE L6APPL3  
DFS2168I 17:34:36 CONNECTION ESTABLISHED ON LINK 0013
```

説明: パートナー・システムの応答 ET において、L6APPL3 は */RSTART* コマンドが発行されたパートナー・システムの APPLID です。

/RSTART コマンドの例 8

入力 ET:

```
/RSTART NODE EAST
```

応答 ET:

```
DFS058I RSTART COMMAND COMPLETED
```

説明: EAST という名のノードが開始されます。

第 17 章 /SECURE コマンド

/SECURE コマンドは、RACF セキュリティー・レベルを制御するために使用されます。このコマンドは、IMS 環境の管理制御用として使用されるほか、IMS のシャットダウンを必要とせずに RACF アクティビティーを抑制するための緊急時オペレーター制御コマンドとしても使用されます。

このコマンドは、バッチ SPOC ユーティリティーを使用する IMSplex に対して発行できます。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 866 ページの『キーワード』
- 868 ページの『例』

環境

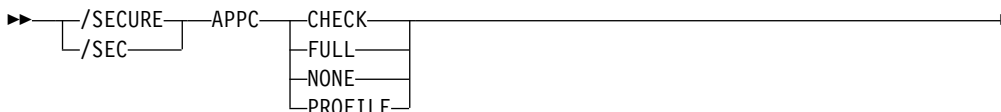
以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

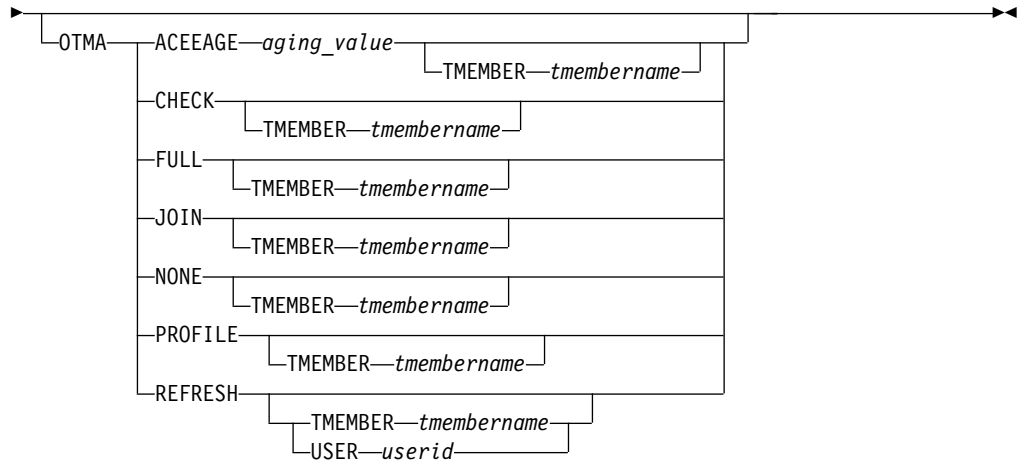
表 259. /SECURE コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/SECURE	X		X
APPC	X		X
OTMA	X		X

注: 非 OTMA 環境で SECURE OTMA コマンドを使用して、DFSYICAL メンバーのセキュリティ設定を指定することができます。DFSYICAL メンバーは、OTMA が使用可能でない場合でも、同期プログラム間通信に対する DL/I ICAL 呼び出しを処理するために使用される内部メンバーです。SECURE OTMA コマンドが発行されたときに DFSYICAL メンバーが存在しない場合、DFSYICAL メンバーは自動的に作成されて、指定されたセキュリティ構成が適用されます。

構文





キーワード

以下のキーワードは、/SECURE コマンドに有効です。

ACEEAGE *aging_value* **TEMBER** *tmembername*

OTMA アクセサー環境エレメント (ACEE) のエージング値を指定します。ここで、*aging_value* は 0 から 86,400[®] 秒までの 1 桁から 5 桁の整数です。86,400 秒は 1 日です。

1 から 300 までの値を指定した場合、**OTMA** は 300 秒の値を使用します。これは、**OTMA** が ACEE リフレッシュを使用可能にするために少なくとも 300 秒かかるためです。86,400 より大きい 5 桁の整数を指定した場合、値は自動的に 86,400 にリセットされます。6 桁以上の整数を指定した場合、値はリジェクトされ、エラー・メッセージが発行されます。

ACEEAGE パラメーターに 0 を指定した場合に、**TEMBER** パラメーターを使用して **OTMA** クライアントを指定しないと、**OTMA** セキュリティーが FULL または CHECK に設定されている場合でも、ACEE キャッシングは **OTMA** によって使用不可になります。つまり、新しい ACEE は **OTMA** によってキャッシュに入れられず、既にキャッシュに入っている ACEE は期限切れになり、後続の ACEE リフレッシュでオンライン・メモリーから除去されます。

ACEEAGE パラメーターに 0 を指定した場合に、**TEMBER** パラメーターを使用して **OTMA** クライアントを指定すると、**OTMA** によって、指定された **OTMA** クライアントについて ACEE キャッシングが使用不可になります。つまり、**OTMA** クライアントの新しい ACEE は **OTMA** によってキャッシュに入れられず、クライアントについて既にキャッシュに入っている ACEE は期限切れになり、後続の ACEE リフレッシュでオンライン・メモリーから除去されます。

ACEEAGE パラメーターに 1 から 86,400 までの値を指定した場合に、**TEMBER** パラメーターを使用して **OTMA** クライアントを指定しないと、エージング値はすべての **OTMA** クライアントにグローバルに適用され、**OTMA** クライアントによって渡されるその他のエージング値をすべてオーバーライドします。

ACEEAGE パラメーターに 1 から 86,400 までの値を指定した場合に、**TEMBER** パラメーターを使用して **OTMA** クライアントを指定すると、エージング値は指定された **OTMA** クライアントに適用されます。クライアント・ビッド時に **OTMA** クライアントによってエージング値が渡される場合、その値は **ACEEAGE**

パラメーターを使用して指定した値によってオーバーライドされます。以前に /SECURE OTMA **ACEEAGE** 0 コマンドを発行した場合、/SECURE OTMA **ACEEAGE** *aging_value* **TMEMBER** *tmembername* コマンドはリジェクトされます。以前に /SECURE OTMA**ACEEAGE** 0 コマンドが出された場合に /SECURE OTMA **ACEEAGE** *aging_value* **TMEMBER** *tmembername* コマンドが有効になるようにするには、まず、/SECURE OTMA **ACEEAGE** コマンドを再発行し、1 から 86,400 までの値を指定した後、/SECURE OTMA **ACEEAGE** *aging_value* **TMEMBER** *tmembername* コマンドを再発行します。

APPC

CHECK、FULL、NONE、あるいは PROFILE パラメーターを指定して使われる場合。APPC は、LU 6.2 装置からの入力についての RACF セキュリティー・レベルを制御します。現在有効であるセキュリティ・レベルを表示するために /DISPLAY APPC コマンドを使用することができます。IMS の始動時点でのセキュリティ・デフォルトは FULL です。

CHECK

既存の RACF 呼び出しが行われます。IMS コマンドは、RACF リソース・クラス CIMS を使用して検査されます。IMS トランザクションは、TIMS を使用して検査されます。IMS 割り振り PSB (APSB) について、z/OS システム許可機能セキュリティが使用不可にされます。

FULL

CHECK パラメーターの場合と同じ処理が行われますが、さらに、追加の RACF 呼び出しを使用して従属領域用のセキュリティ環境を作成し、すべての CPI コミュニケーション主導アプリケーション・プログラムについて、IMS APSB 用の z/OS System Authorization Facility セキュリティーが使用可能になります。

NONE

IMS 内では、セキュリティ検査のための RACF の呼び出しは行いません。APPC/MVS での RACF セキュリティー検査は影響を受けません。IMS APSB 用の z/OS システム許可機能セキュリティは使用不可にされます。

PROFILE

それぞれのトランザクションごとの TP プロファイルの値が使用されるようにします。トランザクションについて TP プロファイルが定義されていない場合、または TP プロファイルに RACF セキュリティー・レベルが指定されていない場合、デフォルト・セキュリティは CHECK です。

OTMA

これは、IMS Open Transaction Manager Access (OTMA) クライアントからの入力についての RACF セキュリティー・レベルを制御するために、CHECK、FULL、JOIN、NONE、または PROFILE パラメーターと一緒に使用します。現在有効であるセキュリティ・レベルを表示するために /DISPLAY OTMA コマンドを使用することができます。IMS コールド・スタートの後で、IMS 始動パラメーター OTMASE= が使用されていない場合、セキュリティ・レベルは FULL です。

CHECK TMEMBER *tmembername*

指定された OTMA クライアントからの入力に対して、既存の RACF 呼び出しが行われます。

FULL TMEMBER *tmembername*

指定された OTMA クライアントからの入力に対して、CHECK パラメーターと同じ処理が行われますが、さらに追加の RACF 呼び出しを使用して、従属領域用のセキュリティー環境が作成されます。

JOIN TMEMBER *tmembername*

OTMA クライアントからの OTMA クライアント・ビッド要求に対してのみ、既存の RACF 呼び出しが行われるようにします。個々のメッセージに対して、トランザクションやコマンドのセキュリティー検査は行われません。

NONE TMEMBER *tmembername*

指定された OTMA クライアントからの入力に対して、IMS 内では RACF セキュリティー検査を行わないことを指定します。

PROFILE TMEMBER *tmembername*

指定された OTMA クライアントからの入力のセキュリティー検査には、各トランザクションの OTMA メッセージ接頭語の「セキュリティー・データ」セクションの値を使用することを指定します。

REFRESH

OTMA は、RACF 入出力の量を削減するために、ユーザー ID の ACEE をキャッシュに入れます。その結果、RACF データベースが更新された後で、キャッシュに入れられた ACEE のリフレッシュが必要になります。TMEMBER オプションを指定せずに /SEC OTMA REFRESH コマンドを出すと、すべての OTMA クライアントのすべてのユーザー ID について ACEE のリフレッシュが行われます。ただし、実際の ACEE のリフレッシュが行われるのは、各ユーザー ID で次の OTMA メッセージを受け取った時点です。このように設計されているのは、すべての RACF ACEE リフレッシュが一度に発生するのを阻止するためです。

USER が指定されている場合、OTMA は、すべての TMEMBER について、指定されたユーザー・プロファイルを含む ACEE のみをリフレッシュします。

USER *userid*

すべての OTMA TMEMBER の指定されたユーザー ID のみをリフレッシュするためのオプション。userid は、リフレッシュされる RACF ユーザー・プロファイルの名前 (1 から 8 文字) です。

例

以下に示すのは /SECURE コマンドの例です。

/SECURE コマンドの例 1

入力 ET:

/DIS APPC

応答 ET:


```

IMSLU      #APPC-CONV SECURITY STATUS  DESIRED
IMSLUNME   0 PROFILE  ENABLED  ENABLED
*91242/163820*

```

説明: /DISPLAY APPC を入力して、どのセキュリティー検査オプションが有効か調べます。

入力 ET:

```
/SECURE APPC FULL
```

応答 ET:

```
DFS058I SECURE COMMAND COMPLETED
```

/SECURE コマンドの例 2

入力 ET:

```
/DIS OTMA
```

応答 ET:

GROUP/MEMBER	XCF-STATUS DRUEXIT	USER-STATUS T/O ACEEAGE	SECURITY	TIB	INPT	SMEM
XCFGRP1						
-IMS1	ACTIVE	SERVER	FULL			8000
-IMS1	N/A	0				
-HWS1	ACTIVE	ACCEPT TRAFFIC	FULL	0		5000
-HWS1	HWSYDRU0	239 3600				
-HWS2	ACTIVE	ACCEPT TRAFFIC	CHECK	0		5000
-HWS2	HWSYDRU0	239 7200				
-HWS3	ACTIVE	ACCEPT TRAFFIC	NONE	0		5000
-HWS3	HWSYDRU0	239 0				
09121/172200	IMS1					

説明: /DISPLAY OTMA を入力して、各 OTMA tmember のセキュリティー設定を表示します。


入力 ET:

```
/SECURE OTMA FULL
```

応答 ET:

```
DFS058I SECURE COMMAND COMPLETED
```

関連資料:

 IMS プロシージャのパラメーターの説明 (システム定義)

第 18 章 /SET コマンド

/SET は、その端末に入力されたすべてのメッセージ宛先を別の端末または特定のトランザクション・コードに確立します。

その端末が会話中の場合、/SET コマンドは、その次のメッセージのみ、その宛先を、指定されたトランザクションに設定します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 872 ページの『使用上の注意』
- 873 ページの『例』

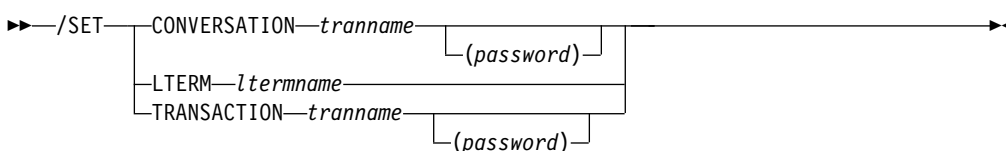
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 260. /SET コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/SET	X		X
CONVERSATION	X		X
LTERM	X		X
TRANSACTION	X		X

構文



キーワード

以下のキーワードは、/SET コマンドに有効です。

CONVERSATION

次の入力メッセージを選択したトランザクションに送ります。使用される端末は入力メッセージ待ちの会話中である必要があります。例えば、既に応答メッセージを受信している必要があります。

IMSpIex では、グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持される場合、/SET コマンドは次の入力メッセージのトランザクションをグローバル

に、およびローカルに設定します。グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持されない場合は、/SET コマンドはトランザクションをローカルにのみ設定します。

LTERM

この端末に入力するすべてのメッセージ宛先になる論理端末を指定します。

/SET LTERM で確立されたモードは、事前設定モードと呼ばれます。事前設定モードが 3270 から確立され、ユーザー定義のフォーマットが使われない場合、入力メッセージはクリアされた画面から入力されなければなりません。事前設定モードは、次のコマンドでリセットすることができます。

```
/CLSDST NODE
/SIGN
/STOP LINE PTERM
/STOP NODE command
/STOP USER command
/RESET
/STOP NODE
/STOP LINE
/STOP USER
```

いったん宛先が事前設定されると、端末オペレーターは、宛先 (論理端末名) をメッセージの最初の部分として入力することはできません。

複数システム構成では、リモート論理端末の名前を指定することができます。事前設定された宛先を削除 (/RESET) または変更 (/SET) する場合、そのコマンドは他のいずれかの有効なコンポーネントから入力しなければなりません。

TRANSACTION

この端末に入力するすべてのメッセージ宛先であるトランザクション・コードを指定します。/SET TRANSACTION で確立されたモードは、事前設定モードと呼ばれます。事前設定モードが 3270 から確立され、ユーザー定義のフォーマットが使われない場合、入力メッセージは、消去画面から入力されなければなりません。事前設定モードは、次のコマンドでリセットすることができます。

```
/CLSDST NODE
/SIGN
/START LINE PTERM
/RESET
/STOP NODE
/STOP LINE
/STOP USER
```

いったん宛先が事前設定されると、端末オペレーターは、宛先 (トランザクション・コード) をメッセージの最初の部分として入力することはできません。複数システム構成では、リモート・トランザクションの名前を指定することができます。この端末は、会話状態になることはできません。

使用上の注意

/DISPLAY LINE PTERM、/DISPLAY NODE、または /DISPLAY USER の状況フィールドは、物理端末、ノード、またはユーザーが事前設定宛先モード (PRST) にあるかどうかを示し、また、宛先トランザクション・コードまたは論理端末名を表示します。

トランザクション名は、CONVERSATION および TRANSACTION キーワードについて、SAF でのパスワード保護によって定義することができます。該当リソース

が SAF に定義されていないか、または定義されていてユーザーに許可されている場合は、コマンドが処理されます。リソースが SAF に対して定義されているが、その使用が許可されていない場合は、コマンドはリジェクトされ、DFS2469W メッセージが出されます。

パスワード・ブラケット内で指定されるピリオドは、区切り文字として扱われません。

例

以下に示すのは /SET コマンドの例です。

/SET コマンドの例 1

入力 ET:

```
/SET CONVERSATION CONVTRAN(password)
```

応答 ET:

```
DFS058I SET COMMAND COMPLETED
```

説明: この端末から入力されたメッセージは、会話 CONVTRAN に送られます。

/SET コマンドの例 2

入力 ET:

```
/SET LTERM CNTRL
```

応答 ET:

```
DFS058I SET COMMAND COMPLETED
```

説明: この端末から入力されたすべてのメッセージは、LTERM CNTRL へ送られます。

/SET コマンドの例 3

入力 ET:

```
/SET TRANSACTION IMS(password)
```

応答 ET:

```
DFS058I SET COMMAND COMPLETED
```

説明: この端末から入力されたすべてのメッセージは、トランザクション IMS に送られます。

第 19 章 /SIGN コマンド

/SIGN コマンドは、IMS に接続されている端末でサインオンまたはサインオフを行うために使用されます。

このコマンドにより、IMS は、端末をどのユーザーが使用しているのかを識別し、そのユーザーがトランザクションまたはコマンドを入力することを許可されているかどうかを判別することができます。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 876 ページの『キーワード』
- 880 ページの『使用上の注意』
- 881 ページの『例』

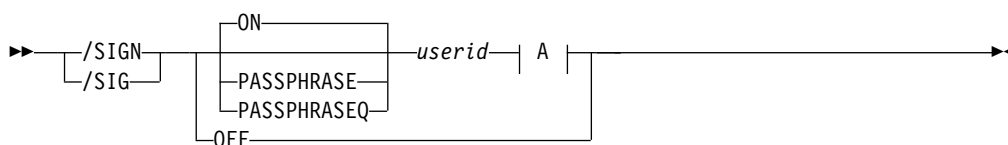
環境

以下の表には、コマンドを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

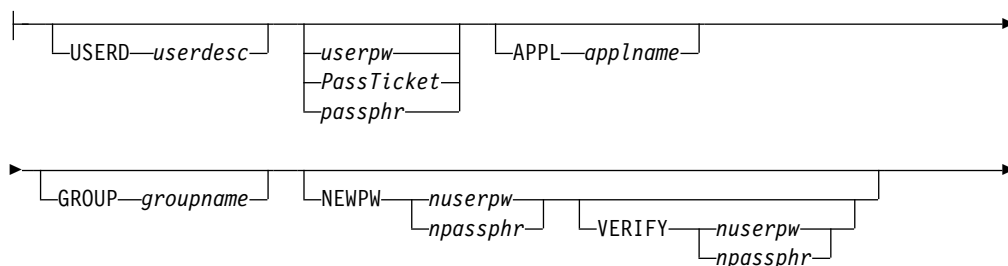
表 261. /SIGN コマンドの有効環境

コマンド	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/SIGN	X		X

構文



A:



キーワード

以下のキーワードは、/SIGN コマンドに有効です。

ON サインオンを必要とする物理端末またはユーザー ID には、/SIGN ON を出さなければなりません。このコマンドを出さないと、入力されたトランザクションはリジェクトされます。

トランザクション許可を要求する場合、サインオンを必要とする端末からの、/SIGN または /RCLSDST 以外のコマンドはリジェクトされます。システム始動時に RCF=S または RCF=A が指定されている場合は、サインオンが必要な静的端末にも、RACF または同等の製品による拡張コマンド許可が与えられます。

サインオンを必要としない端末では、トランザクションは、許可検査のために RACF またはそれと同等のセキュリティー製品、またはユーザー出口に渡されます。サインオンを必要としない端末から /SIGN ON が入力された場合、その端末にはサインオンが必要であるものとして処理されます。つまり、その端末は、/SIGN OFF か別の /SIGN ON コマンドが入力されるまで、そのユーザー ID でサインオンした状況になります。

IMS 再始動または端末切断の後には、リモート端末オペレーターは、/SIGN ON コマンドを使用して再度サインオンを行う必要があります。端末は、次の方法で切断することができます。

- 交換回線の切断
- VTAM CLSDST
- 回線のシャットダウン
- /IDLE コマンド
- 自動ログオフ

サインオン状況は、/START LINE、/START LINE PTERM、および /START NODE のコマンドおよび自動サインオフによってもリセットされます。

ある物理端末向けのキューに入っている応答は、その物理端末がサインオフされた場合でも送信されるため、リモート端末オペレーターは、静的物理端末で機密の応答を待たなければなりません。リモート端末オペレーターが不在にする必要がある場合、出力が受信されないようにするために /LOCK コマンドを使用することができます。動的ユーザーに送る機密の出力は、ユーザーがサインオフを行う時に、物理端末ではなく、そのユーザーのキューに入れられます。この状況が存在する場合に、既存のユーザーの正常なサインオンによって、ユーザーの DEADQ 状況はオフになります。

ユーザー出口ルーチン DFSCSGN0 の場合、ユーザー ID とユーザー・データのパラメーター値はインストール先で定義されます。

PASSPHRASE

/SIGN PASSPHRASE コマンドは、サインオンするときにパスワードの代わりに RACF パスワード・フレーズを使用する点を除けば、/SIGN ON コマンドと同じです。RACF パスワード・フレーズは最大 100 バイトとすることができます。

きます。IMS はパスワード・フレーズとして 100 バイトを使用し、先行空白と末尾空白があれば、パスワード・フレーズを RACF に渡す前に削除します。

RACF パスワード・フレーズは、パスワード、NEWPW、および VERIFY に使用されます。RACF ではパスワードとパスワード・フレーズを混用できません。例えば、/SIGN コマンドに PASSPHRASE が指定されている場合、NEWPW や VERIFY などの他のすべてのキーワードにパスワード・フレーズを指定する必要があります。

PASSPHRASE の後には空白が必要です。100 文字のパスワード・フレーズと次のキーワードの間には空白を入れる必要があります。100 文字の中にピリオドがあっても、/SIGN コマンドは終了しません。パスワード・フレーズの後には追加のキーワードがなければ、パスワード・フレーズに末尾空白は必要ありません。パスワード・フレーズの後には追加のキーワードがある場合、パスワード・フレーズに合計 100 文字の末尾空白を含める必要があります。パスワード・フレーズが 9 バイトに満たない場合、IMS はそのパスワード・フレーズをパスワードとして RACF に渡します。PASSPHRASE キーワードは MFS パネルで使用される可能性が高く、MFS パネルではパスワード・フレーズに末尾空白が埋め込まれます。

RACF パスワード・フレーズは常に大/小文字混合です。パスワード・フレーズのために大/小文字混合パスワードを有効に設定する必要はありません。IMS システムのデフォルトの MFS パネルでは、パスワード・フレーズはサポートされません。

PASSPHRASEQ

/SIGN PASSPHRASEQ コマンドは、サインオンするときにパスワードの代わりに RACF パスワード・フレーズを使用する点を除けば /SIGN ON コマンドと同じです。パスワード・フレーズの先頭と末尾にはそれぞれ単一引用符 (') を付ける必要があります。単一引用符をパスワード・フレーズの中を含める場合は、2 つの単一引用符 (') を指定する必要があります。以下に例を示します。

```
'This is "my" passphrase.'
```

IMS は、パスワード・フレーズの前と末尾にある単一引用符を削除し、さらに、連続する 2 つの単一引用符がある場合は、その 1 つを削除します。

PASSPHRASEQ では、先頭の単一引用符の前に少なくとも 1 つの空白を入れる必要があります。パスワード・フレーズは最大 100 文字とすることができます。パスワード・フレーズが 9 文字に満たない場合、IMS はそのパスワード・フレーズをパスワードとして RACF に渡します。RACF ではパスワードとパスワード・フレーズを混用できません。例えば、/SIGN コマンドに PASSPHRASEQ が指定されている場合、NEWPW や VERIFY などの他のすべてのキーワードにパスワード・フレーズを指定する必要があります。

RACF パスワード・フレーズは常に大/小文字混合です。パスワード・フレーズのために大/小文字混合パスワードを有効に設定する必要はありません。IMS システムのデフォルトの MFS パネルでは、パスワード・フレーズはサポートされません。

オフ

/SIGN OFF コマンドは、サインオンを必要とした端末でセッションを終わらせ

るために使用されます。会話型モードにある静的端末は、最初に /EXIT または /HOLD コマンドを出さないと、サインオフさせることはできません。

端末をサインオフする別の方法として、/SIGN ON コマンドを再入力する方法があります。この方法では、/SIGN OFF コマンドを入れる必要なしに、その端末から新規のサインオンを開始します。

/SIGN OFF コマンドは、事前設定モード、テスト・モード、lock LTERM、pstop LTERM、および purge LTERM などの重要でない状況をリセットします。

ETO ユーザー用の /SIGN OFF は、次のようなユーザーのリカバリー設定に応じて、他のアクションも行います。

RCVYCONV=NO

/SIGN OFF を指定すると、ETO ユーザー用のすべての IMS 会話 (アクティブおよび保留中の両方) が終了します。キューに入っているかまたは現在処理中の会話型メッセージは、出力応答メッセージを非同期に送信させます。

RCVYFP=NO

/SIGN OFF により、高速機能状況および ETO ユーザーへのメッセージは破棄されます。

RCVYRESP=NO

/SIGN OFF は、全機能応答モードをリセットします。

グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持されている場合、/SIGN OFF はユーザー ID を Resource Manager から削除し (シングル・ユーザー・サインオンが実行された場合)、状況をグローバルにリセットします。ユーザーが状況をもっていない場合は、/SIGN OFF はユーザーおよび関連する LTERM を Resource Manager から削除します。

ON、PASSPHRASE、または PASSPHRASEQ キーワードと一緒に以下のキーワードおよびパラメーターを指定することができます。

APPL

IMS が SAF 呼び出しを実行してユーザーを検証するときに、IMS がアプリケーション名としてこのキーワードの後の文字ストリングを使用することを IMS に通知します。IMS が使用するデフォルト・アプリケーション名は IMSID です。IMSID は、IMS PROCLIB メンバー DFSDCxxx の中で SAPPLID= パラメーターを使用してオーバーライドできます。サインオンでパスワードの代わりにパスチケットを指定している場合は、パスチケットを作成したときに使ったアプリケーション名を APPL パラメーターに使用する必要があります。パスチケットの作成者は、任意の値を指定して IMS サブシステムを識別することができます。

RACF が使用されている場合は、パスチケットの作成者により RACF に対して定義されている、IMS 用の RACF PTKTDATA プロファイルの名前を、APPL= に指定する必要があります。PTKTDATA プロファイルの名前が IMSID と同じ場合は、APPL キーワードは不要です。

GROUP

ユーザー ID に関連付けられている 8 文字以下のグループ名を示すオプション・キーワードです。

NEWPW

userpw に指定されている現行のユーザー・パスワードまたはパスワード・フレーズを置き換える新規ユーザー・パスワードまたは新規パスワード・フレーズを示すオプションのキーワードです。パスワードは、DFSPBxxx IMS.PROCLIB メンバー内の PSWDC キーワードの指定に応じて、大/小文字混合または大文字を使用できます。RACF パスワード・フレーズは常に大/小文字混合です。

nuserpw

ユーザー ID に関連付けられている 8 文字以下の新規パスワードです。

npassphr

ユーザー ID に関連付けられている 9 文字から 100 文字までのパスワード・フレーズです。PASSPHRASE が指定されている場合、パスワード・フレーズは最大 100 文字とする必要があります。PASSPHRASEQ が指定されている場合、パスワード・フレーズを単一引用符で囲む必要があります。パスワード・フレーズに 1 つ以上の単一引用符が含まれている場合、それぞれの単一引用符は 2 つの単一引用符として指定する必要があります。

USERD

ユーザー記述子名です。このユーザー記述子名はサインオンで使用します。

userdesc パラメーターは、ユーザー ID、ノード名、または DFSUSER でなければなりません。

userdata

これは、RACF またはそれと同等のセキュリティー製品、またはユーザー出口ルーチン DFSCSGN0 により IMS に対して定義されているユーザー識別情報です。RACF の場合は、この情報は以下の項目により構成されます。

```
userpw GROUP groupname NEWPW nuserpw
```

userid

8 桁またはそれ以下の文字から成るユーザー ID です。

userpw | PassTicket | passphr

以下のいずれかのフォーマットでユーザー ID を指定します。

userpw

ユーザー ID に関連付けられている 8 文字以下のパスワードです。パスワードは、DFSPBxxx IMS.PROCLIB メンバー内の PSWDC キーワードの指定に応じて、大/小文字混合または大文字を使用できます。RACF 内で特殊文字のサポートが使用可能になっている場合、IMS は特殊文字を含む RACF パスワードをサポートします。

PassTicket

要求側の製品または機能が生成する一回限りのパスワード。パスチケットは、RACF パスワードの代替機能です。パスチケットを使用すれば、RACF パスワードを平文でネットワークを介して送信する必要がなくなります。

passphr

ユーザー ID に関連付けられている 9 文字から 100 文字までのパスワード・フレーズです。PASSPHRASE が指定されている場合、パスワード・フレーズは最大 100 文字とする必要があります。PASSPHRASEQ が指定されている場合、パスワード・フレーズを単一引用符で囲む必要があります。

す。パスワード・フレーズに 1 つ以上の単一引用符が含まれている場合、それぞれの単一引用符は 2 つの単一引用符として指定する必要があります。

VERIFY

これは、入力された新規パスワードを検査することを IMS に要求するオプション・キーワードです。IMS は、RACF または IMS サインオン出口ルーチンに渡す前に、新規パスワードを検証します。このキーワードは、DFS3656 パネルでパスワード再入力の代替としても使用することができます。

制約事項: このキーワードは、IMS DFS3656A メッセージに応答する場合、および DFS3656 パネルにパスワードを再入力する代わりに使用する場合にのみ使用することができます。

nuserpw

ユーザー ID に関連付けられている 8 文字以下の新規パスワードです。

npassphr

ユーザー ID に関連付けられている 9 文字から 100 文字までのパスワード・フレーズです。PASSPHRASE が指定されている場合、パスワード・フレーズは最大 100 文字とする必要があります。PASSPHRASEQ が指定されている場合、パスワード・フレーズを単一引用符で囲む必要があります。パスワード・フレーズに 1 つ以上の単一引用符が含まれている場合、それぞれの単一引用符は 2 つの単一引用符として指定する必要があります。

使用上の注意

SGN=G、SGN=Z または SGN=M が指定されている時に、構造名がユーザー ID と異なる場合、ユーザーは、STATIC と ETO の両端末に複数回サインオンすることができます。

静的端末、またはノード名と同じ SPQBname を持つ動的端末の場合、すべての会話が保留にされているか、アクティブな会話のトランザクションの使用をユーザーが許可されていない限り、ユーザーのサインオンは許可されません。

静的端末にアクティブな会話があり、ユーザーがそのトランザクションの使用が許可されていない場合、ユーザーはサインオンの前に /HOLD コマンドを発行して、すべての会話を保留状態にすることができます。これにより、ユーザーはサインオンが許可されるようになります。

ノード名と同じ SPQBname を持つ動的端末にアクティブな会話がある場合、アクティブな会話のトランザクションの使用が許可されているユーザーのみ、サインオンが許可されます。/HOLD コマンドは、動的端末のサインオンの前には使用できません。

USERID と同じ SPQBname を持つ動的端末にアクティブな会話がある場合、会話はサインオフ時にそのユーザーに関連付けられます。その同じユーザーは、会話型トランザクションの使用が引き続き許可されていれば、任意の動的端末にサインオンして、会話を続行することができます。動的端末にサインオンする新規ユーザーは、前のサインオンからの会話を続行するか、許可された会話型トランザクションを入力して新規の会話を開始しない限り、会話には入りません。

/DISPLAY NODE と /DISPLAY LINE PTERM の状況フィールドは、端末が SIGN という語を使ってサインオンされているかどうかを示します。

パスワード・フレーズはユーザー識別のために使用できます。

ピリオドは、通常は IMS コマンドの最後に区切り文字として使用されます。RACF 内で特殊文字のサポートが使用可能になっている場合、ピリオドは RACF パスワードに有効な文字になります。このため、/SIGN コマンドの最後にパスワードを指定する場合は、コマンドの終わりの区切り文字として使用するピリオドの前にスペースを挿入する必要があります。コマンドの終わりの区切り文字として使用するピリオドの前にスペースを追加しない場合に、RACF 内で特殊文字のサポートが使用可能になっていると、ピリオドはパスワードの一部として扱われ、区切り文字としては扱われません。

例

以下に示すのは /SIGN コマンドの例です。

/SIGN コマンドの例 1

入力 ET:

```
DFS3649A /SIGN COMMAND REQUIRED FOR IMS
```

```
DATE: 11/03/92    TIME: 14:39:33
```

```
NODE NAME: DT327001
```

```
USERID: IMSUS01
```

```
PASSWORD: IMSPW01
```

```
USER DESCRIPTOR:
```

```
GROUP NAME:
```

```
NEW PASSWORD:
```

```
OUTPUT SECURITY AVAILABLE
```

応答 ET:

```
DFS3650I SESSION STATUS FOR IMS
```

```
DATE: 11/03/92    TIME: 14:41:48
```

```
NODE NAME:        DT327001
```

```
USERID:           IMSUS01
```

```
PRESET DESTINATION:
```

```
CURRENT SESSION STATUS:
```

```
OUTPUT SECURITY AVAILABLE
```

説明: IMSUS01 というユーザー ID と IMSPW01 というパスワードをもつユーザーが、動的端末に正常にサインオンを行いました。サインオンは、パネル (DFS3649A) を使って行われます。

/SIGN コマンドの例 2

入力 ET:

```
/SIGN IMSUS02 IMSPW02
```

応答 ET:

```
DFS3650I SESSION STATUS FOR IMS

DATE: 11/03/92    TIME: 14:41:48
NODE NAME:        DT327001
USERID:           IMSUS02
PRESET DESTINATION:

CURRENT SESSION STATUS:

    OUTPUT SECURITY AVAILABLE
```

説明: IMSUS02 というユーザー ID と IMSPW02 というパスワードをもつユーザーが、動的端末に正常にサインオンを行いました。サインオンは、/SIGN コマンドを使って行われます。

/SIGN コマンドの例 3

入力 ET:

```
/SIGN IMSUS03 IMSPW03
```

応答 ET:

```
DFS3650I SESSION STATUS FOR IMS

DATE: 11/03/92    TIME: 14:45:53
NODE NAME:        L3270A
USERID:           IMSUS03
PRESET DESTINATION:

CURRENT SESSION STATUS:

    NO OUTPUT SECURITY AVAILABLE
```

説明: IMSUS03 というユーザー ID と IMSPW03 というパスワードをもつユーザーが、静的端末に正常にサインオンを行いました。

/SIGN コマンドの例 4

入力 ET:

```
/SIGN PASSPHRASEQ IMSUS03 'this is my 'password'' now'
```

応答 ET:

```
DFS3650I SESSION STATUS FOR IMS

DATE: 06/07/13    TIME: 15:26:42
NODE NAME:        L3270A
USERID:           IMSUS03
PRESET DESTINATION:

CURRENT SESSION STATUS:

    NO OUTPUT SECURITY AVAILABLE
```

説明: IMSUS03 というユーザー ID と this is my 'password' now というパスワード・フレーズを持つユーザーが、静的端末に正常にサインオンを行いました。

/SIGN コマンドの例 5

入力 ET:

```
/SIGN PASSPHRASE IMSUS03 this is my 'password' now.
```

応答 ET:

```
DFS3650I SESSION STATUS FOR IMS
```


```
DATE: 06/07/13      TIME: 15:36:42  
NODE NAME:          L3270A  
USERID:             IMSUS03  
PRESET DESTINATION:
```

```
CURRENT SESSION STATUS:
```


```
NO OUTPUT SECURITY AVAILABLE
```

説明: IMSUS03 というユーザー ID と this is my 'password'now. というパスワード・フレーズを持つユーザーが、静的端末に正常にサインオンを行いました。パスワード・フレーズにピリオドが含まれていること、および末尾空白が追加されていないことに注意してください。


関連概念:

 [z/OS: RACF 保護サインオン・パスチケット](#)

関連タスク:

 [z/OS: 保護サインオン機能の使用](#)

関連資料:

 [z/OS: RACF パスワード認証オプション](#)

第 20 章 /SMCOPY コマンド

/SMCOPY コマンドは、ある種類の出力を 2 次マスター端末上に印刷するように制御するために、マスター端末オペレーターによって使用されます。

このコマンドは、バッチ SPOC ユーティリティーを使用する IMSplex に対して発行できます。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 886 ページの『使用上の注意』
- 886 ページの『例』

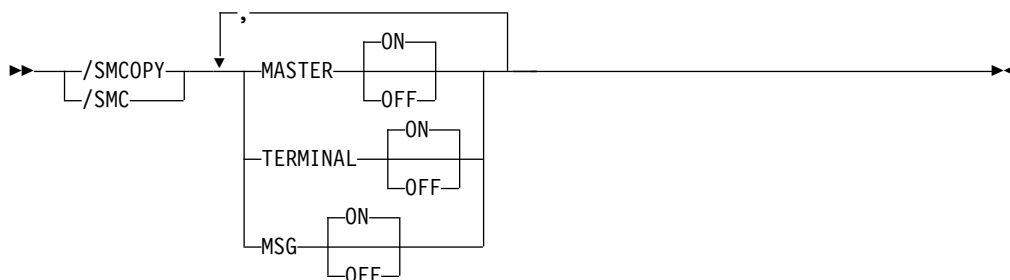
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 262. /SMCOPY コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/SMCOPY	X		X
MASTER	X		X
MSG	X		X
TERMINAL	X		X

構文



キーワード

以下のキーワードは、/SMCOPY コマンドに有効です。

MASTER

マスター端末から出される場合、上記の IMS コマンドおよびコマンドの応答のサブセットの印刷を ON または OFF します。

TERMINAL

マスター端末以外の端末から出される場合、上記の IMS コマンドおよびコマンドの応答のサブセットの印刷を ON または OFF します。

Operations Manager からの入力、2 次マスターには反映されません。これは、MCS/E-MCS 端末からの入力にも当てはまります。

MSG

ON すべてのシステム・メッセージが 2 次マスターのログに記録されます。これはデフォルトです。

メッセージを 2 次マスターのログに記録する前に、インストール・システムのタイプ 2 出口ルーチンが、メッセージのためにそれを呼び出す必要があることを示していた場合には、出口ルーチンが最初に呼び出されます。出口ルーチンは、そのメッセージを 2 次マスターのログに記録するかどうかを判別します。

オフ

IMS は、システム・メッセージを 2 次マスターに送信しません。

使用上の注意

システム定義は、コマンドとその応答を 2 次マスターで印刷するかどうか、および、印刷するコマンドの起点 (マスター端末、リモート端末またはその両方) を確立します。 /SMCOPY は、システム定義で確立した印刷をオンラインで制御します。

例

端末から入力された場合、システム定義は、2 次マスター端末で出力されるようにコマンドおよびコマンドの応答の上記サブセットのコピーを確立します (COMM マクロ上でオペランド COPYLOG=ALL が指定されています)。

入力 ET:


```
/SMCOPY TERMINAL OFF
```

応答 ET:

```
DFS058I SMCOPY COMMAND COMPLETED
```

説明: 2 次マスター端末は、リモート端末から出された IMS コマンドおよびコマンドの応答のコピーを受け取りません。ただし、依然としてマスター端末から出されたコマンドと応答を受け取ります。

関連資料:

 2 次マスター端末でログに記録される IMS タイプ 1 コマンド (コマンド)

第 21 章 /SSR コマンド

/SSR コマンドは、IMS オペレーターがコマンド入力の一部として外部サブシステム・コマンドを入力するための複数セグメント・コマンドです。(外部システムは、CCTL サブシステムではありません。)

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『使用上の注意』
- 『例』

環境

以下の表には、コマンドを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 263. /SSR コマンドの有効環境

コマンド	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/SSR	X	X	X

構文

▶▶—/SSR—*text*—▶▶

使用上の注意

IMS が実行する機能は経路指定のみです。コマンドは外部サブシステムで処理され、(CCTL ではない外部システムからの) 応答は、入力端末に経路指定して戻されます。

すべての /SSR フォーマットは、メッセージ終結を示す EOM の指示を必要とします。最後のセグメントより前にあるすべてのセグメントについて、EOS 指示を含める必要があります。

text は、英数字の外部サブシステム・コマンドです。

例

入力 ET:

```
/SSR ;START DATABASE (DSN8D22P)
```

応答 ET:

```
DFS058I  SSR COMMAND COMPLETED
```

```
DSN9022I ; DSNTDDIS 'START DATABASE' NORMAL COMPLETION
```

説明: START DATABASE コマンドは、処理のために DB2 サブシステムに正常に経路指定されました。

第 22 章 /START コマンド

/START コマンドは、IMS リソースを、参照と使用のために使用可能にします。

また、/START は、端末オペレーターが入力したすべてのパラメーターの妥当性を検査も行います。相互に独立したパラメーターにエラーが検出された場合、無効なパラメーターだけがエラーがあるものとして示され、/START コマンドは残りのパラメーターを処理します。例えば、次のようになります。

```
/START LINE 4 6 200  
DFS058 START COMMAND COMPLETED EXCEPT LINE 200
```

この場合、パラメーター値の 200 は、有効な回線番号ではないことを示しています。

リソースが使用可能になると、この IMS の初期設定に使用されるシステム・パラメーターは、メッセージ DFS1929I に表示されます。また、システム・パラメーターは、ジョブ・ログにも書き込まれます。

これらのコマンドは、バッチ SPOC ユーティリティーを使用する IMSplex に対して発行できます。

/START コマンドは以下のとおりです。

- 『/START APPC コマンド』
- 891 ページの『/START AREA コマンド』
- 895 ページの『/START AUTOARCH コマンド』
- 896 ページの『/START CLASS コマンド』
- 897 ページの『/START DATAGRP コマンド』
- 900 ページの『/START DB コマンド』
- 910 ページの『/START DC コマンド』
- 911 ページの『/START DESC コマンド』
- 911 ページの『/START LINE コマンド』
- 913 ページの『/START LTERM コマンド』
- 915 ページの『/START LUNAME コマンド』
- 916 ページの『/START MADSIOT コマンド』
- 917 ページの『/START MSNAME コマンド』
- 918 ページの『/START NODE コマンド』
- 920 ページの『/START OLDS コマンド』
- 921 ページの『/START OTMA コマンド』
- 922 ページの『/START PGM コマンド』
- 924 ページの『/START REGION コマンド』
- 926 ページの『/START RTC コマンド』
- 928 ページの『/START SB コマンド』
- 929 ページの『/START SLDSREAD コマンド』
- 929 ページの『/START SUBSYS コマンド』
- 931 ページの『/START SURV コマンド』
- 932 ページの『/START THREAD コマンド』
- 933 ページの『/START TMEM コマンド』
- 936 ページの『/START TRAN コマンド』
- 939 ページの『/START USER コマンド』
- 941 ページの『/START VGR コマンド』
- 942 ページの『/START WADS コマンド』

/START APPC コマンド

/START APPC コマンドは、IMS に対して、APPC/z/OS への接続を活動化し、APPC/z/OS からのトランザクション・スケジュール要求の受け入れを開始するように指示するために使用します。

このコマンドは、/PURGE APPC コマンドまたは /STOP APPC (CANCEL) コマンドの効力を反転させます。

/START APPC コマンドは、望みの状況を ENABLED に設定します。現在の状況は、STARTING に初期設定されています。APPC/z/OS が開始要求に応答する場合、その状況は ENABLED または FAILED のどちらかに変わります。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』

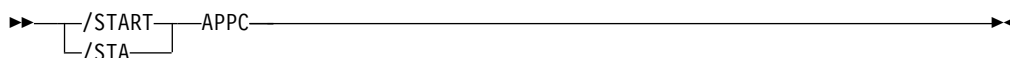
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 264. /START APPC コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X
APPC	X		X

構文



/START AREA コマンド

/START AREA コマンドは、割り振られる DEDB の特定のエリアを指定するために使用します。z/OS の場合、/START AREA コマンドを使用して DEDB エリアを再割り振りすることができます。

サブセクション:

- 『環境』
- 892 ページの『構文』
- 892 ページの『キーワード』
- 893 ページの『使用上の注意』
- 894 ページの『同等の IMS タイプ 2 コマンド』
- 894 ページの『例』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

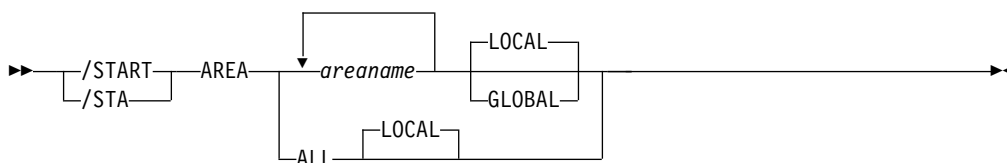
表 265. /START AREA コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X
AREA	X		X
GLOBAL	X	X	

表 265. /START AREA コマンドおよびキーワードの有効環境 (続き)

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
LOCAL	X		

構文



キーワード

以下のキーワードは、/START AREA コマンドに有効です。

GLOBAL

GLOBAL キーワードは、IRLM のアクティブ時に適用されます。GLOBAL は、エリアを共用するすべてのサブシステムにコマンドが適用されることを指定します。GLOBAL キーワードと ALL パラメーターを同時に使うことはできません。ALL と GLOBAL を同時に指定すると、/START コマンドはリジェクトされます。GLOBAL キーワードを使う時は、IRLM がアクティブでなければなりません。IRLM がアクティブでない場合、コマンドはリジェクトされます。

エリアが RECON データ・セットに登録されている場合、/STA AREA GLOBAL コマンドは、許可禁止フラグをオフ (PROHIBIT AUTH = OFF) にリセットします。

GLOBAL コマンドは、コマンドを開始した IMS システムによって処理されます。このシステムはコマンドをローカルで処理した後、IRLM NOTIFY を要求して、共用 IMS システムにコマンドを経路指定して処理するようにします。

グローバル DB または AREA 状況が維持されている場合、RM 内に維持されているグローバル状況も更新されます。グローバル状況は STOA に設定されます。

コマンドが OM API から入力されると、グローバル状況はコマンド・マスター IMS によって更新されます。コマンドが OM API から入力されない場合は、GLOBAL コマンドを開始した IMS が RM 内のグローバル状況を更新します。

ユーザーは、グローバル・エリア状況を RM 内に維持する必要があるかどうかを指定する必要があります。この指定は、IMS の初期設定時に、DFSDFx_{xx} または DFSCG_{xxx} PROCLIB メンバーのいずれかに PLEXPARM(GSTSAREA(Y)) を指定することで行えます。UPDATE IMS SET(PLEXPARM(GSTSAREA(Y))) コマンドを使用して、それを動的に変更することもできます。グローバル・データベース状況を維持するように指定しない場合、GLOBAL キーワードは以前のリリースと同様に処理され、グローバル状況は更新されません。

RM 内のグローバル状況が正常に更新されると、メッセージ DFS0988I (RSRCTYPE=AREA の場合) が出されます。グローバル状況が正常に更新され

ないと、メッセージ DFS3308I が出され、RM 失敗を示し、コマンド応答行は生成されません。RM エラーがあれば、OCMD トレース表へトレースされます。ユーザーは、QRY AREA STATUS(GLOBAL) コマンドを発行することにより、RM 内のリソースのグローバル状況を入手できます。

データベース用の X'594C' ログ・レコードが更新され、グローバル状況とグローバル・コマンドのタイム・スタンプの両方が組み込まれます。

OM API からのコマンドで GLOBAL キーワードを入力した場合は、そのコマンドはコマンド・マスター IMS によってのみ処理されます。コマンド・マスター IMS は、RECON を GLOBAL 状況により更新するために DBRC 呼び出しを行います。さらに、IRLM NOTIFY に、共用している IMS システムでコマンドを経路指定して処理するように要求し、そしてそのコマンドをローカルで処理します。他のすべての非マスター IMS システムは、GLOBAL キーワードを伴う /START を無視します。

NOTIFIED システムで作成されたメッセージはシステム・コンソール上にものみ表示され、もともとコマンドを入力した OM API に経路指定して戻されることはありません。

複数の IMS システムが経路リストで明示して指定されている場合、マスター IMS システムは前述のようにコマンドを処理します。ただし、OM がコマンドを経路指定する非マスター IMS システムは、以下の表に示されている戻りコードと理由コードを戻してコマンドをリジェクトします。

表 266. OM API から出された GLOBAL キーワードの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000004'	X'00001000'	コマンドには GLOBAL キーワードが含まれ、IMSPLEX 内の複数の IMS システムに経路指定されました。OM がこのコマンドを非マスター IMS システムに経路指定すると、非マスター IMS システムはこのコマンドをリジェクトします。マスター IMS システムはこのコマンドを処理し、IRLM NOTIFY を使用して、非マスター IMS システム上でコマンドを経路指定および処理します。GLOBAL キーワードの項にある検討を参照してください。

LOCAL

コマンドが、そのコマンドを入力した IMS サブシステムに対してのみ適用されるように指定します。このコマンドは、エリアを共用する他のサブシステムには影響を与えません。

LOCAL がデフォルトです。

使用上の注意

PREOPEN オプションで定義された仮想記憶オプション (VSO) エリアの場合、/START AREA はそのエリアを事前オープンさせます。VSO エリアが PRELOAD オプションで定義されている場合、/START AREA を使うとそのエリアはオープンされ、z/OS データ・スペースにロードされます。

制約事項: このコマンドは、そこで入力した IMS サブシステムに対してのみ適用されます。すなわち、エリアを共有しているシブプレックス内の他の IMS サブシステムでは、このコマンドはエリアを事前オープンしたり、プリロードすることはありません。

/START AREA コマンドは、コマンドが出された時の仮想記憶域にある VSO エリアでは無効です。

/START AREA コマンド出力は、このコマンドが OM API から入力されると変わります。この場合、DFS058I メッセージは OM に戻されません。GLOBAL を指定するコマンドの場合、コマンド・マスターのみが OM に非同期メッセージを戻します。LOCAL キーワードを使用してコマンドが処理される場合には、すべての IMS システムが OM に非同期メッセージを戻すことができます。OM に戻されるコマンド応答には、必要に応じて、以下のメッセージのうちの 1 つ以上が含まれます。

高速機能メッセージ: DFS0011I、DFS140I、DFS0488I、DFS0666I、DFS1407I、DFS2980E、DFS2981E、DFS3320I、DFS3325I、DFS3342I、DFS3720I、DFS3824I

/START AREA ALL を使うと、メッセージ DFS0488 が、正常に開始されないすべてのエリアに対して出されます。ただし、正常に開始したすべてのエリアではメッセージ DFS0488 は表示されません。コマンド処理の終了を示す最終メッセージ DFS0488 が表示されます。

データベースが静止している間は、このコマンドを正常に処理することはできません。

同等の IMS タイプ 2 コマンド

以下の表は、各種の /START AREA コマンドと、類似の機能を実行する IMS タイプ 2 コマンドを示しています。

表 267. /START AREA コマンドと同等のタイプ 2 コマンド

タスク	/START AREA コマンド	類似の IMS タイプ 2 コマンド
エリアを開始します。	/START AREA <i>areaname</i>	UPDATE AREA NAME(<i>areaname</i>) START(ACCESS)

例

以下は /START AREA コマンドの例です。

入力 ET:

```
/START AREA DB1AREA0 DB1AREA1
```

応答 ET:

```
DFS058I  START COMMAND IN PROGRESS
DFS0488I  START COMMAND COMPLETED.  AREA=DB1AREA0
DFS0488I  START COMMAND COMPLETED.  AREA=DB1AREA1
```

説明: DEDB エリア DB1AREA0 と DB1AREA1 が開始されます。

関連概念:

➡ データベース、DEDB エリア、およびトランザクションに対するグローバル情報の保守 (システム管理)

関連資料:

➡ UPDATE AREA コマンド (コマンド)

/START AUTOARCH コマンド

/START AUTOARCH コマンドは、システム初期設定で選択した自動アーカイブ・オプションを変更する値を設定するため、または前の /STOP AUTOARCH コマンドの後で自動アーカイブを開始する値を設定するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 896 ページの『例』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 268. /START AUTOARCH コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X
AUTOARCH	X	X	X

構文

```
➡ [ /START ] [ /STA ] AUTOARCH [ #olds ] ➡
```

キーワード

以下のキーワードは、/START AUTOARCH コマンドに有効です。

#olds

/DBRC GENJCL ARCHIVE コマンドが生成される前に埋められる OLDS の数を指定します。これはオプションであり、デフォルトはシステム初期設定で指定した値か、または 1 のいずれかです。 *nn* 個の OLDS がいっぱいになる前に /DBR NOFEOV または /DBD NOFEOV が発行されると、現在いっぱいになっている OLDS の数がアーカイブされます。

例

以下は /START AUTOARCH コマンドの例です。

入力 ET:

```
/START AUTOARCH 4
```

応答 ET:

```
DFS058I START COMMAND COMPLETED
```

説明: 自動アーカイブは、4 つの OLDS データ・セットがいっぱいになってから開始されます。

/START CLASS コマンド

/START CLASS コマンドは、トランザクション・クラスを指定して、アプリケーション・プログラムのスケジューリングを開始できるようにするために使用します。

スケジューリングを進める前に、メッセージ領域にはそれぞれにクラスが割り当てられていなければなりません。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『例』

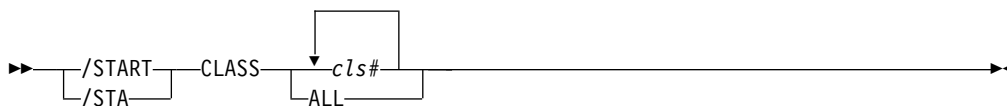
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 269. /START CLASS コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X
CLASS	X		X

構文



例

以下は /START CLASS コマンドの例です。

入力 ET:

```
/START CLASS ALL
```

応答 ET:

DFS058I START COMMAND COMPLETED

説明: トランザクションのすべてのクラスをメッセージ処理領域でのスケジューリングに使用できるようにします。

/START DATAGRP コマンド

/START DATAGRP コマンドは、割り振られる DL/I データベースのグループおよび高速機能 DEDB のグループを指定するために使用します。

データ・グループは、データベースおよびエリアの論理グループです。データ・グループを使用することによって、データベースに関する単純化されたコマンド処理を行うことができます。パラメーター GRPNAME と DBGRP を指定して INIT.DBDSGRP コマンドを使用することによって、RECON データ・セット内にデータ・グループを定義します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 898 ページの『キーワード』
- 899 ページの『使用上の注意』
- 900 ページの『同等の IMS タイプ 2 コマンド』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 270. /START DATAGRP コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X
ACCESS	X	X	
DATAGRP	X	X	
LOCAL	X	X	

構文

▶▶ /START DATAGRP *datagroupname* LOCAL A B ▶▶
/STA

A:

ACCESS= RO
RD
UP
EX

B:



キーワード

以下のキーワードは、/START DATAGRP コマンドに有効です。

ACCESS

データベースのアクセス・インテントをオーバーライドします。元のデータベース・アクセスは、IMS システム定義中に指定されます。

DEDB のアクセス・インテントの変更が許されるのは、DEDB 内の任意のエリアにアクセスする PSB がスケジュールされていない場合だけです。DEDB のアクセス・インテントを変更できるようにするには、まず入力待ち (WFI) トランザクションがスケジュールされている PSB と領域を停止する必要がある場合があります。

/START DB ACCESS= コマンドを使ってデータベースへのアクセス・インテントを変更すると、データベースの VSO エリアは仮想記憶域から除去されます。DEDB のアクセス・インテントは、そのエリアが IMS サブシステムに許可されている間に変更できないので、IMS は、オープンされているエリアをクローズしてからコマンドを処理します。コマンド処理の結果 VSO エリアがクローズされた場合、そのエリアはデータ・スペースからも除去されます。

そのエリアで VSO オプション (VSO および PREOPEN) と PRELOAD オプションを再度活動化するために、/START AREA コマンドを使用しなければなりません。/START AREA コマンドではなく、アクセス要求の結果としてエリアがオープンされる場合、そのエリアは非 VSO エリアとしてオープンされます。

PREOPEN オプションを指定した非 VSO エリアは /START DB ACCESS= コマンドの結果としてクローズされます。これらのエリアは、エリアへの次のアクセス要求の発生時に、あるいは /START AREA コマンドにより再オープンされます。

GLOBAL と ACCESS キーワードを同時に使用することはできません。両方のキーワードを指定すると /START コマンドはリジェクトされます。

ACCESS パラメーター値の意味は、次のとおりです。

RO 指定されたデータベースは、この IMS サブシステムでは読み取り専用処理に使用できることを指定します。

このサブシステムでデータベースを使用できるのは、PCB 処理オプション GO (PROCOPT=GO) をもつプログラムだけです。GO 処理オプションを使ってデータにアクセスするプログラムは、コミットされていないデータを見ることがあります。これは、共用する IMS サブシステムがデータベースを更新中の場合があるためで、このデータベースは入力専用オープンされます。

RD 指定されたデータベースは、この IMS サブシステムでは読み取り専用処理に使用できることを指定します。

更新意図をもつプログラムは、スケジュールすることはできませんが、データベースを更新することはできません。ACCESS=RD は、データが保全性付きの読み取りで読み取られ (ロッキングが行われ)、GO という処理オプションをもつプログラムだけでなく、すべてのプログラムがデータにアクセスできるという点で、ACCESS=RO と異なります。データベースは読み取り専用処理用にオープンされます。

UP 指定されたデータベースは、この IMS サブシステムでは読み取り処理のほかに更新のためにも使用できることを指定します。

EX 指定されたデータベースを、この IMS サブシステムで排他的に使用することを指定します。

この排他的アクセスは、データベースが DBRC に登録してあるときのみ保証されます。

NODBALLOC | DBALLOC

データ・グループ内のデータベースを割り振るかどうかを示します。NODBALLOC がデフォルトです。

NODBALLOC

データ・グループ内のデータベースが割り振られないことを示します。データベースは、スケジュールされる時に割り振られます。このコマンドは、データベースを共用する他のサブシステムには影響を与えません。

DBALLOC

データ・グループ内のデータベースが割り振られることを示します。

LOCAL

/START コマンドを、コマンドが入力された IMS サブシステムにのみ適用することを指定します。

使用上の注意

/START DATAGRP の処理が完了すると、処理の終了を示す DFS0488 メッセージが出されます。また、DFS0488 メッセージは、正常に開始されなかったすべてのデータベースまたはエリアについても出されます。

データ・グループに全機能データベースと高速機能データベースの両方が含まれている場合は、高速機能エリアが正常に開始されなかったことを示すメッセージが出される前に、/START DATAGRP コマンドが正常終了したことを示す DFS0488 メッセージが出されることがあります。この状況は、高速機能データベースの非同期処理によるものです。

PREOPEN オプションで定義された仮想記憶オプション (VSO) エリアの場合、/START AREA はそのエリアを事前オープンさせます。VSO エリアがPRELOAD オプションで定義されている場合、/START AREA を使うとそのエリアはオープンされ、z/OS データ・スペースにロードされます。

データ・グループは、パラメーター GRPNAME と、DBGRP または DBDSGRP を指定した INIT.DBDSGRP コマンドを使用して、RECON データ・セット内に定義されます。/START コマンドの DATAGRP キーワードでは、DBDS グループ名またはデータベース・グループ名のいずれかを指定できます。

/START DATAGRP コマンドで DBDS グループ名と共に ACCESS キーワードが指定されている場合、ACCESS キーワードは DBDS グループ内の高速機能 DEDB エリアに関連する高速機能 DEDB データベースには適用されません。高速機能 DEDB データベースに対して ACCESS キーワードを使用する意図であるならば、DATAGRP パラメーターは、エリア名を含まないデータベース・グループ名でなければなりません。

推奨: このコマンドでは、データベース・グループだけでなく、DBDS グループを使用することもできますが、DBDS グループをデータベース・グループに変換するためのオーバーヘッドを除去するために、可能な限り、データベース・グループを使用してください。

同等の IMS タイプ 2 コマンド

以下の表は、各種の /START DATAGRP コマンドと、類似の機能を実行する IMS タイプ 2 コマンドを示しています。

表 271. /START DATAGRP コマンドと同等のタイプ 2 コマンド

タスク	/START DATAGRP コマンド	類似の IMS タイプ 2 コマンド
データ・グループを開始する。	/START DATAGRP <i>datagrpname</i>	UPDATE DATAGRP NAME(<i>datagrpname</i>) START(ACCESS)

関連資料:

1095 ページの『UPDATE DATAGRP コマンド』

/START DB コマンド

/START DB コマンドは、DBD 名を指定するために使用します。/START DB コマンドは、データベースの読み取りまたは更新を行うトランザクションからのアクセスを可能にします。

/START DB は、DEDB 以外のすべてのデータベースを割り振り、または再割り振りするために使用することができます。DEDB エリアを割り振りまたは割り振り解除するには、/START AREA コマンドを入力する必要があります。

サブセクション:

- 『環境』
- 901 ページの『構文』
- 901 ページの『キーワード』
- 905 ページの『使用上の注意』
- 908 ページの『同等の IMS タイプ 2 コマンド』
- 908 ページの『例』

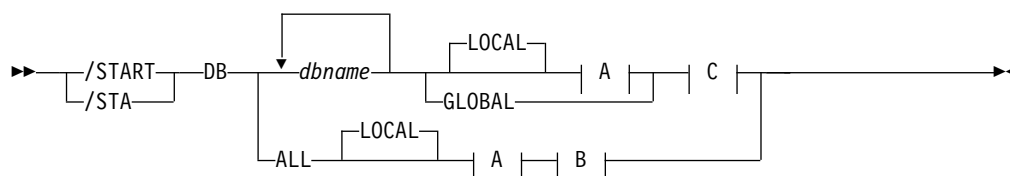
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 272. /START DB コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X
ACCESS	X	X	
DB	X	X	
DBALLOC	X	X	
GLOBAL	X	X	
LOCAL	X	X	
NOBACKOUT	X	X	
NODBALLOC	X	X	
NOOPEN	X	X	
OPEN	X	X	

構文



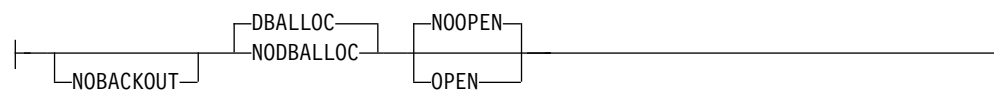
A:



B:



C:



キーワード

以下のキーワードは、/START DB コマンドに有効です。

ACCESS

指定されたデータベースに対して意図するアクセスのタイプを示します。このキーワードは、システム定義で指定されたデータベース・アクセスをオーバーライ

ドします。DEDB の ACCESS パラメーターの変更は、DEDB 中の AREA のすべてをサブシステムが許可していない場合にのみ行うことができます。

/START DB ACCESS= コマンドを使ってデータベースへのアクセス・インテントを変更すると、データベースの VSO エリアは仮想記憶域から除去されます。DEDB のアクセス・インテントは、そのエリアが IMS サブシステムに許可されている間は変更できないため、IMS は、オープンされているエリアをクローズしてからコマンドを処理します。コマンド処理の結果 VSO エリアがクローズされた場合、そのエリアはデータ・スペースからも除去されます。

そのエリアで VSO オプション (VSO および PREOPEN) と PRELOAD オプションを再度活動化するために、/START AREA コマンドを使用しなければなりません。/START AREA コマンドではなく、アクセス要求の結果としてエリアがオープンされる場合、そのエリアは非 VSO エリアとしてオープンされます。

PREOPEN オプションを指定した非 VSO エリアは /START DB ACCESS= コマンドの結果としてクローズされます。これらのエリアは、エリアへの次のアクセス要求の発生時に、あるいは /START AREA コマンドにより再オープンされます。

GLOBAL と ACCESS キーワードを同時に使用することはできません。両方のキーワードを指定すると /START コマンドはリジェクトされます。

ACCESS パラメーターを指定した /START DB コマンドの発行は、MSBD に対しては無効です。

ACCESS パラメーター値の意味は、次のとおりです。

- RO** 指定されたデータベースは、この IMS サブシステムでは読み取り専用処理に使用できることを指定します。このサブシステムでデータベースを使用できるのは、GO (PROCOPT=GO) という PCB 処理オプションをもつプログラムだけです。GO 処理オプションを使ってデータにアクセスするプログラムは、コミットされていないデータを見ることがあります。これは、共用する IMS サブシステムがデータベースを更新中の場合があるため、このデータベースは入力専用オープンされます。
- RD** 指定されたデータベースは、この IMS サブシステムでは読み取り専用処理に使用できることを指定します。更新意図をもつプログラムは、スケジュールすることはできますが、データベースを更新することはできません。RD の ACCESS は、データが保全性付きの読み取りで読み取られ (ロックが行われ)、GO という処理オプションをもつプログラムだけでなく、すべてのプログラムがデータにアクセスできるという点で、RO の ACCESS と異なります。データベースは読み取り専用処理用にオープンされます。
- UP** 指定されたデータベースは、この IMS サブシステムで更新処理と読み取り処理に使用できることを指定します。
- EX** 指定されたデータベースを、この IMS サブシステムで排他的に使用することを指定します。この排他的アクセスは、データベースが DBRC に登録してあるときのみ保証されます。

DBALLOC

指定されたデータベースが割り振られることを示します。 /START DB ALL コマンドの場合を除いて、デフォルトは DBALLOC です。

NODBALLOC

指定されたデータベースが割り振られないことを示します。データベースは、スケジュールされる時に割り振られます。NODBALLOC は、/START DB ALL コマンドのデフォルトです。

GLOBAL

データベースを共用するすべてのサブシステムにコマンドが適用されることを指定します。GLOBAL は、IRLM がアクティブであることを要求します。IRLM がアクティブでない場合、コマンドはリジェクトされます。

データベースが RECON データ・セットに登録されている場合、/START DB GLOBAL コマンドは、許可禁止フラグをオフ (PROHIBIT AUTH = OFF) にリセットします。

/START DB GLOBAL コマンドは、コマンドを開始した IMS システムによって処理されます。このシステムはコマンドをローカルで処理した後、IRLM NOTIFY を要求して、共用 IMS システムにコマンドを経路指定して処理するようにします。

グローバル DB 状況が維持されている場合、RM 内に維持されているグローバル状況も更新されます。グローバル状況は STA に設定されます。

コマンドが OM API から入力されると、グローバル状況はコマンド・マスター IMS によって更新されます。コマンドが OM API から入力されない場合は、GLOBAL コマンドを開始した IMS が RM 内のグローバル状況を更新します。

ユーザーは、グローバル・データベース状況を RM 内に維持する必要があるかどうかを指定する必要があります。この指定は、IMS の初期設定時に、DFSDFxxx または DFSCGxxx PROCLIB メンバーに PLEXPARM(GSTSDB(Y)) を指定することで行えます。UPD IMS SET(PLEXPARM(GSTSDB(Y)) コマンドを使用して、それを動的に変更することもできます。グローバル・データベース状況を維持するように指定しない場合、GLOBAL キーワードは以前のリリースと同様に処理され、グローバル状況は更新されません。

RM 内のグローバル状況が正常に更新されると、メッセージ DFS0988I (RSRCTYPE=DB の場合) が出されます。グローバル状況が正常に更新されないと、メッセージ DFS3308I が出され、RM 失敗を示し、コマンド応答行は生成されません。RM エラーがあれば、OCMD トレース表へトレースされます。ユーザーは、QRY DB STATUS(GLOBAL) コマンドを発行することにより、RM 内のリソースのグローバル状況を手でできます。

データベース用の X'4C' ログ・レコードが更新され、グローバル状況とグローバル・コマンドのタイム・スタンプの両方が組み込まれます。これには、エリアの DEDB 名が含まれます。GLOBAL キーワードと ALL パラメーターを同時に使うことはできません。ALL と GLOBAL を同時に指定すると、/START コマンドはリジェクトされます。

コマンドの GLOBAL キーワードが OM API から入力される場合、そのコマンドは IMSplex の 1 つの IMS システムにのみ経路指定される必要があります。

す。OM からコマンドを受け取った IMS は、DBRC 呼び出しを行って、GLOBAL 状況の RECON を更新します。さらに、IRLM NOTIFY に、共用している IMS システムでコマンドを経路指定して処理するように要求し、そしてそのコマンドをローカルで処理します。

NOTIFIED システムで作成されたメッセージはシステム・コンソール上にものみ表示され、もともとコマンドを入力した OM API に経路指定して戻されることはありません。

複数の IMS システムが経路リストで明示して指定されている場合、マスター IMS システムは前述のようにコマンドを処理します。ただし、OM がコマンドを経路指定する非マスター IMS システムは、以下の表に示されている戻りコードと理由コードを戻してコマンドをリジェクトします。

表 273. OM API から出された GLOBAL キーワードの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000004'	X'00001000'	コマンドには GLOBAL キーワードが含まれ、IMSplex 内の複数の IMS システムに経路指定されました。OM がこのコマンドを非マスター IMS システムに経路指定すると、非マスター IMS システムはこのコマンドをリジェクトします。マスター IMS システムはこのコマンドを処理し、IRLM NOTIFY を使用して、非マスター IMS システム上でコマンドを経路指定および処理します。GLOBAL キーワードの項にある検討を参照してください。

LOCAL

コマンドが、そのコマンドを入力した IMS サブシステムに対してのみ適用されるように指定します。このコマンドは、データベースを共用する他のサブシステムには影響を与えません。

LOCAL がデフォルトです。

NOBACKOUT

DBRC に登録されていないデータベースのバックアウト再始動を抑制します。以前に動的バックアウト障害または緊急時再始動バックアウト障害があった場合、/START コマンドは、再びバックアウトを試みます。ただし、バックアウトに必要なログ・データがアーカイブされている場合、バッチ・バックアウト・ユーティリティを実行することによって、バックアウトを行う必要があります。

データベースが DBRC に登録され、共用制御を使っている場合、バッチ・バックアウトが正常に実行されていると、そのことが DBRC に通知され、失敗したバックアウトは、/START コマンドを出されたときに再試行されません。

データベースが DBRC に登録され、リカバリー管理を使っている場合、バッチ・バックアウトが正常に実行されても DBRC には通知されません。

NOBACKOUT キーワードを指定して、IMS に対して、障害を起こしたバックアウトを再試行する必要がないことを通知する必要があります。

NOBACKOUT は、ALL パラメーターを使用すると無効です。

OPEN | NOOPEN

指定されたデータベースが、/START DB 処理の一部としてオープンされるべ

きか、されるべきでないかを指示します。データベースが EEQE をもっているか、またはデータベースが以前に許可されているがまだ割り振られていない場合以外は、NOOPEN がデフォルトです。データベースが EEQE をもっているか、または以前に許可されているがまだ割り振られていない場合は、データベースは NOOPEN キーワードが指定されるまで開かれています。オペレーターは、このコマンドを出した結果に注意する必要があります。メッセージ DFS0488I の戻りコードをチェックしてください。

/START DB OPTION(OPEN) を指定すると、ランダムマイザー・ルーチンまたは選択区画ルーチンがロードされることがあります。

制約事項: OPEN パラメーターは、以下の場合はサポートされません。

- HALDB マスター上。このコマンドを使用すると、その結果としてメッセージ DFS0488I RC=57が出されますが、このコマンドで HALDB マスター・データベースを 1 つだけ指定した場合は、その HALDB マスター・データベースのオンライン区画構造は、必要に応じて再作成されます。コマンドに複数のデータベース名がリストされている場合には、再作成は試行されません。
- XRF 代替で
- キーワード ALL、GLOBAL、または NODBALLOC を使用する場合

使用上の注意

DEDB の場合、/START DB コマンドを使用すると、DBD ソースで指定されたすべてのアンロード済みランダムマイザーの再ロードも行われます。

UPD DB START(ACCESS) AREA(*) コマンドを使用して、DEDB のエリアを割り振ることができます。

DEDB 用に CREATE DB コマンドを発行する場合は、RESIDENT(Y) を指定する必要があります。DEDB は常に「常駐」です。CREATE DB コマンドの常駐のデフォルトは、非常駐です。

DEDB が作成された後、それを使用する前に、DEDB を開始する必要があります。これは、オンライン変更 (OLC) 処理を使用して DEDB を追加したり、DEDB を変更したりした場合と同様の方法で行います。DEDB を追加するか DEDB を変更する OLC 処理の後には、その DEDB とエリアを開始する必要があります。/START DB コマンドまたは UPD DB コマンドは、データベースを開始して、ランダムマイザーをロードします。/START AREA コマンドまたは UPD AREA コマンドは、個々のエリアを開始します。

指定された名前が区画用のものである場合は、データ・セットの割り振りのために取るべきアクションは異なります。マスター・データベースの状況によって、またマスター・データベースの DMB が既にロードされているかどうかによって、アクションは異なります。ある区画に対して /DBRECOVERY コマンドが呼び出されていた場合、その区画の割り振りは、DBALLOC キーワードを指定したとしても、/START コマンドでは行えません。この区画の割り振りを /START コマンドで行えるのは、OPEN キーワードを使用した場合、またはデータベースが EEQE を持っている場合です。区画を /START コマンドでは割り振ることができない場合、OPEN キーワードが使用されていない場合、およびデータベースが EEQE を

持っていない場合には、その区画は最初の参照時に割り振られます。これは、区分 PHDAM および PHIDAM データベース・タイプに適用されます。

/DBRECOVERY コマンドが出されている PHDAM または PHIDAM 区画は、/START DB DBALLOC コマンドを使用して割り振ることはできません。ただし、区画データベースが EEQE をもっているか、/START DB コマンドで OPEN キーワードが使用されているか、または、データベースが以前に許可されていてまだ割り振られていない場合は、区画を割り振ることができます。OPEN キーワードを使用していない場合は、PSINDEX 区画は割り振られ、PHDAM および PHIDAM 区画は、許可されるまでは割り振られません。

その処理プログラムが正常に開始したデータベースへアクセスする、全トランザクションに対して /START DB コマンドが出された場合、USTOPPED 属性はリセットされ、そのトランザクション用の中断キュー上のメッセージは、通常のキューに転送されます。

1 つ以上の指定されたデータベースがバックアウトまたはリカバリーを必要とし、そのデータベースが DBRC に登録されている場合、バックアウトまたはリカバリーが必要なデータベースはコマンドから除去され、残りのデータベースでは処理が続けられます。DBRC にデータベースが登録されていない場合、NOBACKOUT キーワードを指定して、IMS に、失敗したバックアウトを再実行する必要がないことを通知します。

HIDAM データベースを開始させる場合は、索引名とデータ域 DBD 名の両方を指定する必要があります。このデータベースでバックアウトの失敗が発生した場合は、/START コマンドによってバックアウトが再度、試行されます。

/START DB コマンドが発行されたときに DL/I データベースがバッチ・メッセージ処理 (BMP) 領域によって使用されている場合、DFS0565I メッセージがマスター端末に返され、メッセージで示されたデータベースに対するこのコマンドは無視され、コマンドで指定されたその他のデータベースに対しては処理が続行されます。マスター端末オペレーターは、BMP プログラムが終了するまで待ってから、/START DB コマンドを再発行し、DFS0565I メッセージで示されたデータベースを始動する必要があります。ただし、BMP 領域のスケジュールまたは処理中にデータベースの割り振りが失敗した場合は、そのデータベースに対する /START DB コマンドは BMP 領域がアクティブの状態のまま処理され、DFS0565I メッセージは発行されません。

/START DB ALL コマンドは、メッセージ DFS0488I を出させます。可能な場合、システム定義プロセスで定義されたすべてのデータベースが開始されます。

/START DB コマンド出力は、このコマンドが OM API から入力されると変わります。この場合、DFS058I メッセージは OM に戻されません。OM に戻されるコマンド応答には、データベース・タイプおよびコマンドの完了に適した、以下のメッセージのいずれか 1 つ以上が入ります。

- フル・ファンクション・データベース・メッセージ: DFS030I、DFS132、DFS160、DFS216、DFS0402I、DFS0488I、DFS0740I、DFS1407、DFS2026、DFS3317I、DFS3318I、DFS3320I、DFS3325I、DFS3465I、DFS3466I
- 高速機能データベース・メッセージ: DFS140I、DFS666、DFS3062

このコマンドを入力する場合、データベース名は既存の非 HALDB、HALDB マスター、または HALDB 区画のいずれかにすることができます。HALDB 区画に対するコマンドは、/START DB コマンドおよび UPDATE DB START(ACCESS) コマンドを除き、非 HALDB に対するコマンドとまったく同じ働きをします。HALDB 区画は、「それが前に許可されたが割り振られていない、OPEN キーワードが指定されている、または区画が EEQE をもっている」ということがない限り、コマンドの実行中に割り振られません。区画は最初の参照時に割り振られます。

HALDB データベースの場合、IMS は、区画の状況とマスター・データベースの状況を別々に追跡します。例えば、区画が停止されていて、マスター・データベースは開始されていることがあります。また、区画が開始されていて、マスター・データベースは停止されていることもあります。区画のオープン、許可、またはスケジューリングの前に、IMS は必ず区画とマスター・データベースの状況を検査します。区画とマスター・データベースのいずれかがアクションを妨げる状況になっている場合、IMS はそのアクションを実行しません。

各区画には、それ自体とマスター・データベースのアクセス制限が設定されます。例えば、マスター・データベースに読み取り (READ) のアクセス・インテントが設定されていて、いずれかの区画に更新 (UPD) のアクセス・インテントが設定されている場合、区画を更新することはできません。また、マスター・データベースに更新 (UPD) のアクセス・インテントが設定されていて、いずれかの区画に読み取り (READ) のアクセス・インテントが設定されている場合も、区画を更新できません。停止またはロックなど、アクセス制限に影響を与える他の状況にも同様の考慮事項が適用されます。

例外: HALDB マスター・データベースに更新アクセス権 (UPD) が設定されている場合、区画に、マスターのアクセス権を超える排他的 (EXCL) のアクセス・インテントを設定することができます。

区画名を指定して発行されるコマンドは、区画の状況にのみ影響を与えます。マスター・データベースに対して発行されるコマンドは、マスター・データベースの状況にのみ影響を与えます。そのため、マスター・データベースを開始しても、その区画の状況は更新されません。区画が停止されている場合は、停止されたままになります。HALDB 区画は、明示的に停止される場合は、明示的に再び開始される必要があります。キーワード ALL が指定されたタイプ 1 コマンド、NAME(*) が指定されたタイプ 2 コマンド、および HALDB マスターに対するコマンドは、それぞれの HALDB 区画の STOPPED (QUERY DB では STOACC、STOSCHD、または STOUPDS として表示) および LOCKED 標識を変更しません。

コマンドのターゲットが HALDB マスターである場合、処理はすべての HALDB 区画を対象に行われます。例えば、IMS コマンドが HALDB マスターでの UPDATE DB STOP(ACCESS) である場合は、すべての HALDB 区画がクローズされ、割り振り解除され、無許可にされます。ただし、停止状況はマスター・データベースでのみ設定されます。QUERY DB コマンドが発行される場合、HALDB マスターのみが STOACC の状況を表示します (各 HALDB 区画は、それ自体が停止された場合を除き、STOACC を表示しません)。UPDATE DB STOP(ACCESS) コマンドが HALDB マスターに対して出された場合は、/DISPLAY DB コマンドの表示出力は HALDB マスターを示しますが (STOPPED のように)、区画の状況は表示しません。

制約事項:

- HALDB オンライン再編成 (OLR) が、IMS システム上の HALDB 区画に対して実行中の間は、同じ IMS システム上のその区画に対して、/START DB コマンドを処理することはできません。
- OLR がその区画のいずれかを再編成している間は、/START DB ACCESS=UP コマンドを HALDB マスターに対して発行することはできません。
- データベースが静止している間は、このコマンドを正常に処理することはできません。

NOTINIT-48-REPOCHGLIST 理由コードで「不良」のマークが付けられたデータベースには、/START DB コマンドは許可されません。これは、そのデータベースの IMS 変更リスト処理が完了していないか、変更リスト処理が失敗したためです。

同等の IMS タイプ 2 コマンド

以下の表は、各種の /START DB コマンドと、類似の機能を実行する IMS タイプ 2 コマンドを示しています。

表 274. /START DB コマンドと同等のタイプ 2 コマンド

タスク	/START DB コマンド	類似の IMS タイプ 2 コマンド
データベースを開始し、そのデータベースのアクセス・インテントを変更する。	/START DB ACCESS	UPDATE DB START(ACCESS) SET(ACCTYPE())
データベースを開始する。	/START DB <i>dbname</i>	UPDATE DB NAME(<i>dbname</i>) START(ACCESS)

例

以下に示すのは /START DB コマンドの例です。

例 1

TSO SPOC 入力:

```
STA DB BANKATMS BANKTERM BANKLDGR BE3ORDER
```

TSO SPOC 出力:

```
SYS3 DFS0488I STA COMMAND COMPLETED. DBN= BANKATMS RC=04
SYS3 DFS0488I STA COMMAND COMPLETED. DBN= BANKTERM RC=04
SYS3 DFS0488I STA COMMAND COMPLETED. DBN= BANKLDGR RC=04
SYS3 DFS0488I STA COMMAND COMPLETED. DBN= BE3ORDER RC=08
IMS3 DFS0488I STA COMMAND COMPLETED. DBN= BANKATMS RC=04
IMS3 DFS0488I STA COMMAND COMPLETED. DBN= BANKTERM RC=04
IMS3 DFS0488I STA COMMAND COMPLETED. DBN= BANKLDGR RC=04
IMS3 DFS0488I STA COMMAND COMPLETED. DBN= BE3ORDER RC=08
```

OM API 入力:

```
CMD (STA DB BANKATMS BANKTERM BANKLDGR BE3ORDER )
```

OM API 出力:

```
<?xml version="1.0"?>
<!DOCTYPE imsout SYSTEM "imsout.dtd">
<imsout>
```



```

<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.1.0</omvsn>
<xmlvsn>1 </xmlvsn>
<statime>2002.197 21:59:29.210362</statime>
<stotime>2002.197 21:59:30.213238</stotime>
<staseq>B7EFC01B367FAE02</staseq>
<stoseq>B7EFC01C2B576D8F</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10145929</rqsttkn1>
<rc>0200000C</rc>
<rsn>00003008</rsn>
</ctl>
<cmderr>
<mbr name="SYS3 ">
<typ>IMS </typ>
<styp>DBDC </styp>
<rc>00000014</rc>
<rsn>00005050</rsn>
<rsntext>Command processing error</rsntext>
</mbr>
<mbr name="IMS3 ">
<typ>IMS </typ>
<styp>DBDC </styp>
<rc>00000014</rc>
<rsn>00005050</rsn>
<rsntext>Command processing error</rsntext>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>SYS3 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>STA </verb>
<kwd>DB </kwd>
<input>/STA DB BANKATMS BANKTERM BANKLDGR BE3ORDER </input>
</cmd>
<msgdata>
<mbr name="SYS3 ">
<msg>DFS0488I STA COMMAND COMPLETED. DBN= BANKATMS RC=04</msg>
<msg>DFS0488I STA COMMAND COMPLETED. DBN= BANKTERM RC=04</msg>
<msg>DFS0488I STA COMMAND COMPLETED. DBN= BANKLDGR RC=04</msg>
<msg>DFS0488I STA COMMAND COMPLETED. DBN= BE3ORDER RC=08</msg>
</mbr>
<mbr name="IMS3 ">
<msg>DFS0488I STA COMMAND COMPLETED. DBN= BANKATMS RC=04</msg>
<msg>DFS0488I STA COMMAND COMPLETED. DBN= BANKTERM RC=04</msg>
<msg>DFS0488I STA COMMAND COMPLETED. DBN= BANKLDGR RC=04</msg>
<msg>DFS0488I STA COMMAND COMPLETED. DBN= BE3ORDER RC=08</msg>
</mbr>
</msgdata>
</imsout>

```

説明: START DB コマンドが、OM から 2 つのアクティブな IMS システム (SYS3 および IMS3) に経路指定されます。この両方の IMS システムからの応答は、OM に戻されます。データベース BANKATMS、BANKTERM、BANKLDGR、および BE3ORDER は、両方の IMS システムで開始されます。

例 2

入力 ET:

```
/START DB TREEFARM
```

応答 ET:

DFS058I (time stamp) START COMMAND IN PROGRESS
DFS0488I START COMMAND COMPLETED. DBN=TREEFARM RC=0.

説明: データベース TREEFARM が開始されます。

関連概念:

➡ データベース、DEDB エリア、およびトランザクションに対するグローバル情報の保守 (システム管理)

関連資料:

1114 ページの『UPDATE DB コマンド』

関連情報:

➡ DFS2406I (メッセージおよびコード)

➡ DFS2838I (メッセージおよびコード)

/START DC コマンド

/START DC コマンドは、VTAM ACB がまだ開かれていない場合はそれをオープンし (XRF 用に MNPS が使用されている場合、MNPS ACB と APPLID ACB の両方がオープンします)、IMS へのログオンを有効にし、オプションのトランザクション・マネージャー機能 (IMS 汎用リソース・サポートおよび RNR に対する IMS 持続セッション・サポートなど) を使用可能にするために使用します。

- IMS 汎用リソース・サポート: 定義済みの VTAM 汎用リソース・グループが IMS または DCC PROCLIB メンバー内の GRSNAME と結合されます。
- RNR に対する IMS 持続セッション・サポート: DFSDCxxx PROCLIB メンバーで RNR オプションが指定されている場合、重大な障害のため中断されたセッション・アクティビティが、必要に応じて再開または終了されます。

MNPS を使用している XRF 代替システムで /START DC コマンドが出された場合は、このコマンドは APPLID ACB のみをオープンします。MNPS ACB は、XRF テークオーバー処理まではオープンされません。

サブセクション:

- 『環境』
- 911 ページの『構文』

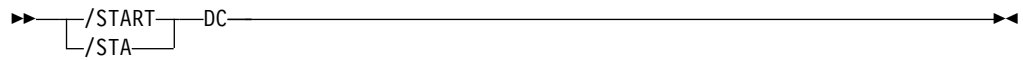
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 275. /START DC コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X
DC	X		X

構文



/START DESC コマンド

/START DESC コマンドは、DFS62xxx PROCLIB メンバーから IMS へ LU62 記述子を定義するために使用します。

完全な PROCLIB メンバー名を指定する必要があります。PROCLIB メンバーは、DFS62 で始める必要があります。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』

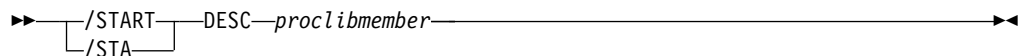
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 276. /START DESC コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X
DESC	X		X

構文



/START LINE コマンド

/START LINE コマンドは、アイドルで、停止状態または処理停止状態にある通信回線を使用可能にするために使用します。また、このコマンドは、回線上でアクティブな会話を終了させます。

サブセクション:

- 『環境』
- 912 ページの『構文』
- 912 ページの『使用上の注意』
- 913 ページの『例』

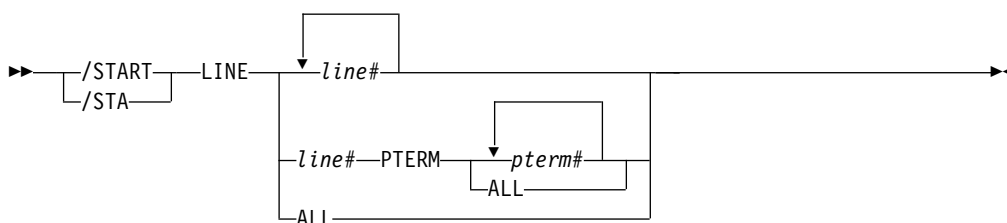
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 277. /START LINE コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X
LINE	X		X
PTERM	X		X

構文



使用上の注意

すべての端末は、ループ検査モード、MFSTEST モード、または排他モードから取り出され、サインオン状況の端末はリセットされます。PTERM キーワードをもっていない /START LINE コマンドは、回線を再び使用可能にします (結果として非 VBTAM LOPEN マクロになる)。

回線を再び使用可能にする必要がある場合には、/START LINE PTERM コマンドより前に /START LINE を入力しておかなければなりません。

/START LINE PTERM コマンドは、1 つ以上の物理端末を使用可能にします。物理端末は、応答モード、テスト・モード、ループ検査モード、MFSTEST モード、事前設定宛先モード、または排他モードから取り出され、サインオン状況の端末はリセットされます。IMS が /START LINE PTERM の処理中に、停止中でアイドル状態の回線を見つけた場合、IMS はその回線を再始動させます。操作不能なコンポーネントには、すべて操作可能としてマークが付けられます。

関連する端末または指定された端末の状況を変更せずに、LINE、LINE PTERM、または NODE の入出力操作を活動化するためには、/START の代わりに /RSTART を使用します。

相互に独立したパラメーターにエラーが検出された場合、無効なパラメーターだけがエラーであるとして示され、その他のパラメーターについては、処理が続けられます。/START LINE では、次に挙げる場合にこのことが行われます。

- 指定された回線が開始済みか、またはアイドル状態になっていない場合。
- 回線上のいずれかの端末に、取り消しできない会話がある場合 (アプリケーション・プログラムがスケジュールされているため)。
- 指定された回線が、IMS 内部処理のために開始できなかった場合。
- DD ステートメントが IMS 実行 JCL から欠落している場合。

事前設定モード、テスト・モード、および応答モードは、/START LINE または再始動コマンドの実行後は重要ではなくなり、保持されないため、/START LINE は

これらの状況をリセットしなくなります。

例

以下に示すのは /START LINE コマンドの例です。

/START LINE コマンドの例 1

入力 ET:

```
/START LINE 4 PTERM 1, 2
```

応答 ET:

```
DFS058I START COMMAND COMPLETED
```

応答 RT:

```
DFS059I TERMINAL STARTED
```

説明: 回線 4 の物理端末 1 と 2 が開始されます。

/START LINE コマンドの例 2

入力 ET:

```
/START LINE 4,5,6,7,8,9,10,11
```

応答 ET:

```
DFS058I START COMMAND COMPLETED
```

応答 RT:

```
DFS059I TERMINAL STARTED
```

説明: 回線 4、5、6、7、8、9、10、および 11 が開始されます。

/START LINE コマンドの例 3

入力 ET:

```
/START LINE 4 5 6 700
```

応答 ET:

```
DFS058I START COMMAND COMPLETED EXCEPT LINE 5 700
```

応答 RT:

```
DFS059I TERMINAL STARTED
```

説明: 回線 4 と 6 が開始されます。 /DISPLAY LINE コマンドを使うと、回線 5 が正常に開始されなかった理由がわかります。(700 は無効な回線番号です。)

/START LTERM コマンド

/START LTERM コマンドは、開始する論理端末、および QLOCK 状態をリセットする論理端末を指定するために使用します。(QLOCK は、LTERM がロックされているため、セッションで特定の要求が受信されてこの状態がリセットされるまでは、これ以上出力を送信できず、また、同じ LTERM に対する追加の出力を作成

する可能性のある入力を受信することはできないことを示します。) /START LTERM は、リモート論理端末ではリジェクトされます。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『使用上の注意』

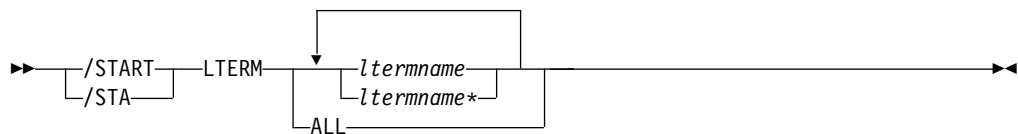
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 278. /START LTERM コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X
LTERM	X		X

構文



使用上の注意

LTERM キーワードは、既存 LTERM にのみ有効です。

LTERM パラメーターは、総称パラメーターが既存の LTERM を指定する場合に総称になれます。

グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持される場合、/START LTERM コマンドを使用すると、IMSplex 内のどこからでも LTERM に向けてメッセージをキューに入れることができます。また、変更は、Resource Manager およびローカル IMS システムの両方で反映されます。

例

以下は /START LTERM コマンドの例です。

入力 ET:

```
/START LTERM APPLE, TREE, FRUIT
```

応答 ET:

```
DFS058I START COMMAND COMPLETED
```

応答 RT:

```
DFS059I TERMINAL STARTED
```

説明: 論理端末 APPLE、TREE および FRUIT が開始されます。

/START LUNAME コマンド

START LUNAME コマンドは、開始される LU 名を指定するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 916 ページの『使用上の注意』

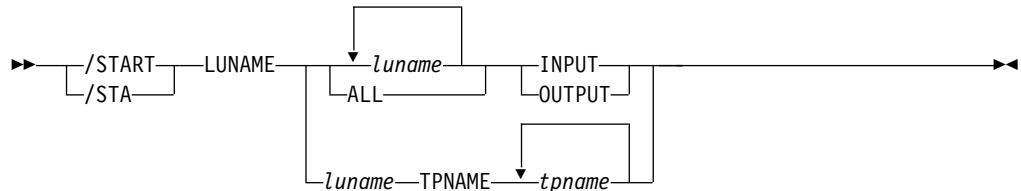
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 279. START LUNAME コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X
INPUT	X		X
LUNAME	X		X
OUTPUT	X		X

構文



キーワード

以下のキーワードは、/START LUNAME コマンドに有効です。

INPUT

INPUT キーワードを指定すると、入力および同期アウトバウンド・アクティビティに関する luname が開始されます。キーワード INPUT を使ってパラメーター ALL を指定すると、これ以後、LU 6.2 インバウンドと同期出力アクティビティも開始済みとなります。

OUTPUT

OUTPUT キーワードを指定すると、非同期アウトバウンド・アクティビティに関する luname が開始されます。キーワード OUTPUT を使ってパラメーター ALL を指定すると、これ以後、LU 6.2 アウトバウンド非同期アクティビティが開始済みとなります。

使用上の注意


INPUT も OUTPUT も指定しないことは、INPUT と OUTPUT の両方を指定することと同じです。入力用、および同期アウトバウンド・アクティビティー用および非同期アウトバウンド・アクティビティー用に LU 名が開始されます。この場合、パラメーター ALL を指定すると、すべての将来の LU 6.2 インバウンド・アクティビティー、アウトバウンド同期アクティビティー、アウトバウンド非同期アクティビティーが開始されます。

ネットワーク修飾 LU 名は、LUNAME キーワードではオプションです。LU 名がネットワーク修飾でなく、TP 名が指定されていない場合は、指定した LU 名と一致するすべてのネットワーク修飾 LU 名も開始されます。

/START LUNAME TPNAME は、luname の特定の tpname を開始します。OUTPUT キーワードは、このコマンドのデフォルトです。

指定されたリソースが存在しない場合、1 つの構造がその状況を保持するために作成されます。

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

/START MADSIOT コマンド

/START MADSIOT コマンドは、MADS I/O タイミング機能を指定するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 917 ページの『使用上の注意』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 280. /START MADSIOT コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X
MADSIOT	X	X	

構文



使用上の注意

/START MADSIOT コマンドは、リンクの障害、構造障害、または再作成の失敗により、長時間使用中の処理機能が使用不可になった場合にのみ有効です。/START MADSIOT コマンドが正常終了すると、次の 2 つのメッセージのいずれか 1 つがオペレーター・コンソールに戻されます。

- DFS1728E START MADSIOT COMMAND FAILED RSN=rrrr
- DFS1727I MADSIOT TIMING FUNCTION RESUMED SUCCESSFULLY

このコマンドの目的は、MADS I/O タイミング機能を使用可能化することです。MADS I/O タイミング・リスト構造が DFSVSMxx に定義されていなければ、コマンドはリジェクトされます。MADS I/O タイミング機能が既に使用可能になっている場合は、コマンドは無視されます。MADS I/O タイミング機能が使用可能になっておらず、すべての共用パートナーがカップリング・ファシリティ上の MADS I/O タイミング・リスト構造に正常に接続している場合は、コマンドは正常に完了します。共用パートナーが MADS I/O タイミング・リスト構造に接続するのに失敗した場合には、コマンドは失敗します。

/STA MADSIOT コマンド出力は、このコマンドが OM API から入力されると変わります。この場合、DFS058I メッセージは OM に戻されません。OM に戻されるコマンド応答には、必要に応じて、以下のメッセージのうちの 1 つ以上が含まれます。

高速機能メッセージ: DFS0023I、 DFS0007I、 DFS1270I、 DFS1727I、 DFS1552A、 DFS1728E

/START MSNAME コマンド

/START MSNAME コマンドは、開始される論理リンク・パスを指定するために使用します。MSNAME キーワードは、総称になれます。

サブセクション:

- 『環境』
- 918 ページの『構文』
- 918 ページの『例』

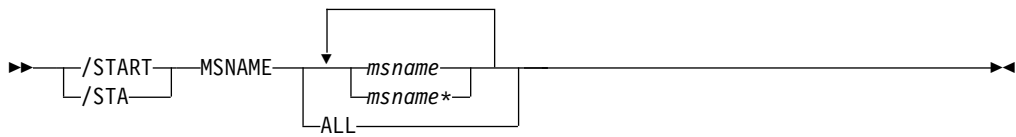
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 281. /START MSNAME コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X
MSNAME	X		X

構文



例

以下は /START MSNAME コマンドの例です。

入力 ET:

```
/START MSNAME CHICAGO
```

応答 ET:

```
DFS058I START COMMAND COMPLETED
```

説明: 名前 CHICAGO に関連する論理リンク・パスが開始されます。

関連資料:

1302 ページの『UPDATE MSNAME コマンド』

/START NODE コマンド

/START NODE コマンドは、IMS が実際に端末でセッションを開始することなく、VTAM 接続端末からのログオンを受け入れる、またはログオンを開始できるようにするために使用します。停止ノードが /START NODE コマンドを使用して開始される場合、/OPNDST NODE コマンドを使用することによって、端末が IMS にログオンするか IMS が端末でセッションを開始できます。

/START NODE コマンドは、ノードが切断され、アイドル状態で、停止している場合にのみ機能します。このコマンドは STOPPED 状況をリセットする他、MFSTEST モード、排他モード、DEACT 状況、および会話の強制終了によって会話型モードを、リセットします。

サブセクション:

- 『環境』
- 919 ページの『構文』
- 919 ページの『使用上の注意』
- 920 ページの『例』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

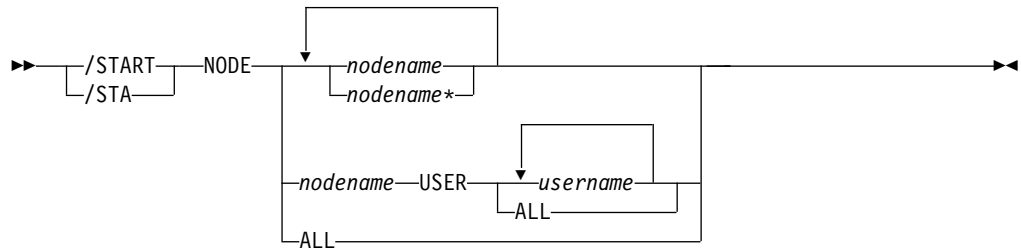
表 282. /START NODE コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X

表 282. /START NODE コマンドおよびキーワードの有効環境 (続き)

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
NODE	X		X
USER	X		X

構文



使用上の注意

/START NODE コマンドは、既存のノード (システムに存在する任意の一時ノードを含む) についてのみ有効です。

高速機能メッセージの場合、/DEQUEUE コマンドを発行する必要はありません。/STOP NODE または /STOP USER コマンドのいずれかにより、高速機能メッセージの宛先 NODE または USER の応答モードがリセットされた場合、それに付随する /START NODE または /START USER コマンドが発行された時点で、高速機能メッセージは廃棄されます。この場合、IMS は X'67D0' サブタイプ 11 トレース・ログ・レコードを書き込みます。

/START NODE nodename USER username コマンドは、ISC セッションに対してのみ適用されます。このコマンドは、NODE nodename の USER username に割り振られるハーフセッションを開始するために使用されます。USER キーワードは、NODE キーワードを指定して使う場合には、指定されたハーフセッションに影響を与えます。USER キーワードを省略した場合は、指定されたノードのすべてのハーフセッションに影響を与えられます。

NODE および USER パラメーターを一緒に使用する場合の制約事項:

- 次のような場合にのみ、NODE USER キーワードの対を使用したコマンドは有効です。
 - USER が NODE にサインオンされています。
 - ISC 環境で、USER を NODE に割り振られています。
 - ノードおよびユーザーは既に存在しています。
- /START NODE USER コマンドは、ISC、LUP、および 3600 ノードに対してのみ有効です。

USER キーワードが存在していない場合、NODE パラメーターは総称になれます。総称パラメーターは、既存のノードを指定します。

テスト・モードおよび事前設定モードは重要ではなくなり、ログオンまたは再始動後に持ち越されなくなるため、/START NODE コマンドはこれらの状況をリセットしなくなります。MFSTEST モード (ノード・レベルで) および排他モードは、依然としてリセットされます。

グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持される場合、/START NODE コマンドを使用すると、ノードは IMSplex 内の任意の IMS にログオンでき、MFSTEST モードまたは排他モードをリセットできるようになります。ノードは、重要な状況がなくなると、Resource Manager から削除されます。

/START NODE コマンドが出されたときに、会話型モードにあるノードがメッセージ DFS058I START COMMAND COMPLETED EXCEPT を受け取った場合は、会話は他の処理が使用中 (INUSE) である可能性があります。これは一時的な状態であり、/START NODE コマンドを再発行することができます。

例

以下は /START NODE コマンドの例です。

入力 ET:

```
/START NODE HARRY
```

応答 ET:

```
DFS058I START COMMAND COMPLETED
```

説明: ノード HARRY に関連する物理端末が開始されます。

/START OLDS コマンド

/START OLDS コマンドは、以前に停止された OLDS を開始するか、IMS が新規の OLDS ログ・データ・セットを追加するかのいずれかを示します。

新規の OLDS を追加する場合、olds# は DFSMDA マクロ指定で定義される OLDS ID です。複式モードの場合、基本 OLDS と 2 次 OLDS の両方が開始されます。olds# は 00 から 99 でなければなりません。

/START OLDS を使う時は、JCL で割り振られる場合でも、OLDS は、DFSMDA マクロで定義しなければなりません。

サブセクション:

- 『環境』
- 921 ページの『構文』
- 921 ページの『例』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 283. /START OLDS コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X
OLDS	X	X	X

構文

```

▶▶ /START OLDS olds#
  └─ /STA
  
```

例

以下は /START OLDS コマンドの例です。

入力 ET:

```
/START OLDS 09
```

応答 ET:

```
DFS058I START COMMAND IN PROGRESS
```

説明: OLDS データ・セット DFSOLP09 (DFSOLS09) がロギングのために開始されます。

/START OTMA コマンド

/START OTMA コマンドは、IMS を IMS Open Transaction Manager Access (OTMA) の z/OS システム間カップリング・ファシリティ (XCF) グループに結合するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 922 ページの『構文』
- 922 ページの『使用上の注意』
- 922 ページの『例』

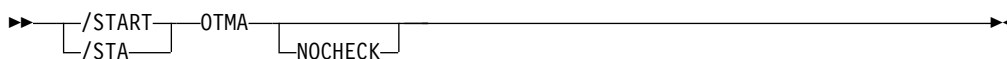
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 284. /START OTMA コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X
OTMA	X		X

構文



使用上の注意

/START OTMA コマンドの処理は次のとおりです。

1. IMS は、XCF グループを結合します。
2. 正常な「クライアント・ビッド」に続いて、IMS は ACK メッセージを OTMA クライアントに送信します。
3. IMS は、すべての「コミット後送信」(コミット・モード 0) 出力メッセージの OTMA クライアントへの送信を開始します。

NOCHECK オプションは、OTMA の緊急時再始動の際にコマンドがリカバリーされないことを指定します。

例

以下は /START OTMA コマンドの例です。

入力 ET:

```
/STA OTMA
```

応答 ET:

```
DFS2360I 14:02:53 XCF GROUP JOINED SUCCESSFULLY. SYS3  
DFS058I 14:02:53 START COMMAND COMPLETED SYS3  
DFS996I *IMS READY* SYS3
```

/START PGM コマンド

/START PGM コマンドは、開始されるアプリケーション・プログラムを指定するために使用します。

このコマンドは、入出力防止が完了していないと、プログラムによるスケジューリングを阻止する標識もクリアします。障害が起きたアクティブ・システムで入出力防止が行われていない場合、DASD に常駐する GSAM データベースの保全性が影響を受けることがあります。

/START PGM は、CPI Communications ドリブン・トランザクション・プログラムを開始しません。

サブセクション:

- 923 ページの『環境』
- 923 ページの『構文』
- 923 ページの『使用上の注意』
- 923 ページの『同等の IMS タイプ 2 コマンド』
- 923 ページの『例』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 285. /START PGM コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X
PGM	X	X	X

構文



使用上の注意

NOTINIT-57-REPOCHGLIST 理由コードで「不良」のマークが付けられたプログラムには、/START PGM コマンドは許可されません。これは、そのプログラムの IMS 変更リスト処理が完了していないか、変更リスト処理が失敗したためです。

同等の IMS タイプ 2 コマンド

以下の表は、各種の /START PGM コマンドと、類似の機能を実行する IMS タイプ 2 コマンドを示しています。

表 286. /START PGM コマンドと同等のタイプ 2 コマンド

タスク	/START PGM コマンド	類似の IMS タイプ 2 コマンド
プログラムのスケジューリングを開始する。	/START PGM <i>pgmname</i>	UPDATE PGM NAME(<i>pgmname</i>) START(SCHD)

例

以下に示すのは /START PGM コマンドの例です。

/START PGM コマンドの例 1

入力 ET:

```
/START PROGRAM ALL
```

応答 ET:

```
DFS058I START COMMAND COMPLETED
```

説明: すべてのアプリケーション・プログラムが開始されます。

/START PGM コマンドの例 2

入力 ET:

/START PROGRAM APPLETRE

応答 ET:

DFS058I START COMMAND COMPLETED

説明: アプリケーション・プログラムの APPLETRE が開始されます。

関連資料:

1355 ページの『UPDATE PGM コマンド』

/START REGION コマンド

/START REGION コマンドは、z/OS に渡される 1 組のメッセージ処理領域 JCL を指定するために使用します。メンバー名を指定しないと、デフォルトのメンバー名が使用されます。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『使用上の注意』
- 925 ページの『例』

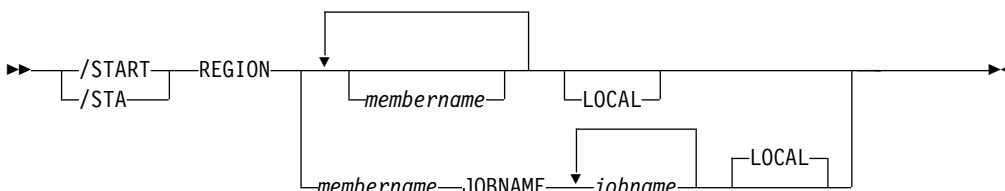
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 287. /START REGION コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X
LOCAL	X	X	
REGION	X	X	X

構文



使用上の注意

同一タイプの IMS 従属領域 (MPP、BMP、または IFP) では、そのタイプの領域の始動 JCL を含む PROCLIB メンバーを共用することができます。IMS で、従属領域の IMS ID がそのコマンドを処理する IMS の IMS ID と一致するように設定 (またはオーバーライド) できるようにするには、/START REGION の JOBNAME または LOCAL キーワードを使用します。

制約事項: 開始する領域の JCL には、IMSID= 実行パラメーターが含まれている必要があります。

従属領域のデフォルトまたは指定された JCL メンバーの JOB ステートメントに指定されたジョブ名をオーバーライドするためには、JOBNAME キーワードを使用します。

LOCAL キーワードを指定した場合は、IMS は、デフォルトの、または指定されたメンバーの JCL 内のシンボリック IMSID パラメーターをオーバーライドします。LOCAL は、JOBNAME キーワードを指定した場合のデフォルトです。

LOCAL または JOBNAME キーワードが /START REGION コマンドで指定されている場合、PROCLIB メンバーは従属領域を開始させるプロシーチャーを実行するジョブである必要があります。その場合のプロシーチャーは、インストリーム・プロシーチャーであってはなりません。例えば、/START REGION コマンドが、次のいずれかのフォーマットで入力されたとします。

```
/START REGION member_name LOCAL
/START REGION member_name JOBNAME job_name
/START REGION member_name JOBNAME job_name LOCAL
```

上記の例で、*member_name* は、従属領域を開始するプロシーチャーを実行するジョブであり、次のフォーマットです。

```
//job_name JOB ... (parameters)...
//      EXEC proc_name,
//      IMSID=xxxx
```

オペレーターは、IMS システム定義または EXEC パラメーターで指定した数より多くの従属領域を 999 個まで開始できます。システム定義値より多い (ただし 999 個以下) 領域の開始要求は、リソースが使用可能でない場合には、リジェクトされることがあります。

/START REGION コマンドは、XRF 代替サブシステムにはミラーリングされません。代替サブシステムにこのコマンドの影響を与えるようにしたい場合は、代替サブシステムでこのコマンドを入力します。

/START REGION コマンドを使用すると、IMS カタログ更新タスクを停止することができます。IMS カタログ更新タスクは、IMS カタログに変更を加え、それらの変更をオンライン IMS システムで活動化するために使用します。IMS カタログ更新タスクに対して /START REGION コマンドを発行すると、IMS カタログに対する結果は、更新が進行中であると予測不能になります。IMS カタログ更新タスクは IMS データベースの適用範囲を超える複数の操作を実行し、RECON を更新したり、データ・セットを作成したり、プログラムやデータベースを作成したりします。/START REGION コマンドは、そのタスクで異常終了ロジックが実行されないようにします。終結処理を行うのはユーザーの責任です。

例

以下に示すのは /START REGION コマンドの例です。

/START REGION コマンドの例 1

入力 ET:

/START REGION

応答 ET:

DFS058I START COMMAND IN PROGRESS

応答 ET:

DFS551I IFP|MESSAGE|BATCH REGION XXXXXXXX STARTED. ID=yy TIME=zzzz
CLASSES=xxx,xxx,xxx,xxx

説明: 1 つのメッセージ領域またはバッチ領域 (ID=yy) が TIME=zzzz で開始されます。この応答の中で示されたクラスに関連するトランザクションは、ここでスケジュール可能です。

/START REGION コマンドの例 2

入力 ET:

/START REGION IMSWT000

応答 ET:

DFS058I START COMMAND IN PROGRESS

説明: プロシージャ IMSWT000 に対応するスプール回線に関連するデータ・セット用のスプール SYSOUT ユーティリティを開始するために、メンバー IMSWT000 として保管されている JCL が使用されます。

/START REGION コマンドの例 3

入力 ET:

/START REGION MEMABC

応答 ET:

DFS058I START COMMAND IN PROGRESS

応答 ET:

DFS551I IFP|MESSAGE|BATCH REGION XXXXXX STARTED. ID=yy TIME=zzzz
CLASSES=xxx,xxx,xxx,xxx

説明: MEMABC 内の EXEC ステートメント・パラメーターで指定されたクラスをもつメッセージ処理領域またはバッチ・メッセージ処理領域を開始するために、メンバー XXXXXX として保管されている JCL が使用されます。

関連資料:

 プロシージャの PRDR=name パラメーター (システム定義)

/START RTC コマンド

/START RTC コマンドは、活動化する高速機能宛先コードを指定し、その宛先コードに関連するトランザクションを処理できるようにするために使用します。

サブセクション:

- 927 ページの『環境』

- 『構文』
- 『使用上の注意』
- 『同等の IMS タイプ 2 コマンド』
- 『例』

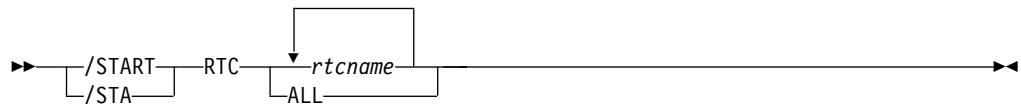
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 288. /START RTC コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X
RTC	X		X

構文



使用上の注意

NOTINIT-07-REPOCHGLIST 理由コードで「不良」のマークが付けられた宛先コードには、/START RTC コマンドは許可されません。これは、その宛先コードの IMS 変更リスト処理が完了していないか、変更リスト処理が失敗したためです。

同等の IMS タイプ 2 コマンド

以下の表は、各種の /START RTC コマンドと、類似の機能を実行する IMS タイプ 2 コマンドを示しています。

表 289. /START RTC コマンドと同等のタイプ 2 コマンド

タスク	/START RTC コマンド	類似の IMS タイプ 2 コマンド
高速機能宛先コードへのキューイングを開始する。	/START RTC <i>rtcname</i>	UPDATE RTC NAME(<i>rtcname</i>) START(Q)

例

以下は /START RTC コマンドの例です。

入力 ET:

```
/START RTCODE ALL
```

応答 ET:

```
DFS058I START COMMAND COMPLETED
```

説明: すべての高速機能宛先コードが活動化されます。この宛先コードに関連するトランザクションの処理をここで行うことができます。

関連資料:

1410 ページの『UPDATE RTC コマンド』

/START SB コマンド

/START SB コマンドは、順次バッファリングを動的に許可するために使用します。このコマンドは、これが出される前にスケジュールされた順次バッファリング・アプリケーションには影響を与えません。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『例』

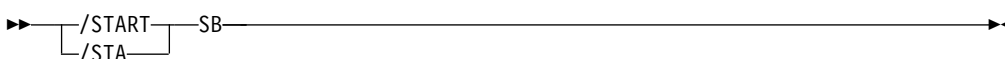
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 290. /START SB コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X
SB	X	X	

構文



例

以下は /START SB コマンドの例です。

入力 ET:

```
/START SB
```

応答 ET:

```
DFS058I START COMMAND COMPLETED
```

入力 ET:

```
/DISPLAY POOL DBAS
```

応答 ET:

```
SEQUENTIAL BUFFERING: STATUS = NOT-STOPPED  
MAX      N.A.  FREE  N.A.  CURR  160K  HIGH  320K  
DATABASE BUFFER POOL: SIZE  67584  
REQ1      0  REQ2      0  READ      0  BISAM      0  WRITES      0
```

```

KEYC      0 LCYL      0 PURG      0 OWNRR      0 ERRORS 00/00
DATABASE BUFFER POOL: BSIZE 12288
RRBA      0 RKEY      0 BFALT      0 NREC      0 SYN PTS      0
NMBUFS 29 VRDS      0 FOUND      0 VWTS      0 ERRORS 00/00
DATABASE BUFFER POOL: BSIZE 356352
RRBA      0 RKEY      0 BFALT      0 NREC      0 SYN PTS      0
NMBUFS 29 VRDS      0 FOUND      0 VWTS      0 ERRORS 00/00
*86253/104547*

```

説明: 順次バッファリングが開始されます。

/START SLDSREAD コマンド

/START SLDSREAD コマンドは、IMS がシステム・ログ・データ・セット (SLDS) と OLDS の両方から、または OLDS からのみ、レコードの検索が可能であるかどうかを示します。デフォルトは、SLDSREAD が使用可能であることです。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 291. /START SLDSREAD コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X
SLDSREAD	X	X	X

構文

```

▶▶ [ /START ] SLDSREAD ▶▶
   [ /STA ]

```

/START SUBSYS コマンド

/START SUBSYS コマンドは、IMS が接続する外部サブシステムを指定するために使用します。

サブセクション:

- 930 ページの『環境』
- 930 ページの『構文』
- 930 ページの『キーワード』
- 930 ページの『使用上の注意』

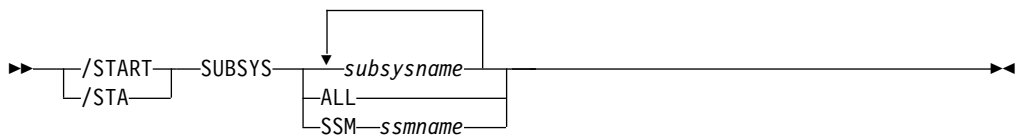
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 292. /START SUBSYS コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X
SSM	X	X	X
SUBSYS	X	X	X

構文



キーワード

以下のキーワードは、/START SUBSYS コマンドに有効です。

SSM

IMS 開始時にオプションが要求されない場合でも、外部サブシステム接続処理を発生させることができますようにします。

SSM キーワードの構文と使用法は、IMS 始動 JCL 上で指定された SSM=EXEC パラメーターと同じです。SSM キーワードは、1 から 4 の文字 ID です。IMS は、SSM ID を IMSID に連結して SSM PROCLIB メンバー名を作成します。SSM PROCLIB メンバーは、次に外部サブシステム処理で使用されます。

次のいずれかの条件が適用される場合、SSM キーワードは無効です。

- 始動 JCL の EXEC パラメーターで SSM= キーワードを指定する場合。
- /START SUBSYS SSM コマンドが以前に出されている場合。

使用上の注意

このコマンドは、既存のサブシステム定義を動的に再構成するためにも使用することができます。インストール・システムで、あるサブシステムを定義しているサブシステム PROCLIB メンバーを用いて、IMS を開始することができます。これにより、PROCLIB メンバーを変更または追加できます。オペレーターは、次に既存のサブシステム接続または変更したサブシステム接続のみを /STOP します。

/START SUBSYS コマンドを出すことにより、IMS は新規の定義または変更した定義を選び出し、それらのサブシステムに接続を試みます。

/START SUBSYS ALL コマンドは、IMS を外部サブシステムのすべてと接続します。また、SSM キーワードは、/START SUBSYS コマンドでも使用できます。

サブシステム接続が異常終了すると、IMS は接続を停止状態にします。この場合、接続を再設定するためには /START コマンドを使用しなければなりません。

例

以下は /START SUBSYS コマンドの例です。

入力 ET:

```
/START SUBSYS ABC
```

応答 ET:

```
DFS058I START COMMAND COMPLETED
```

説明: IMS は、要求したサブシステムへの接続を確立しました。この時点で、外部サブシステム (CCTL ではない) 接続メッセージを受け取る可能性があります。それ以外の場合は、/DISPLAY コマンドを使用することができます。

/START SURV コマンド

/START SURV コマンドは、XRF 環境で IMS 監視機能の操作を開始するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『使用上の注意』

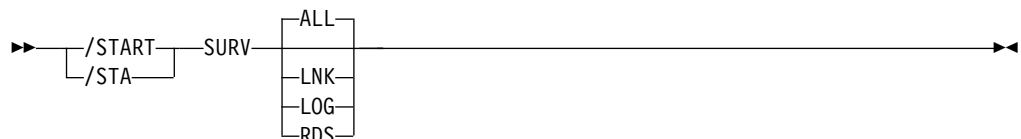
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 293. /START SURV コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X
SURV	X		X

構文



使用上の注意

ある機能に対してこの監視機能が作動すると、アクティブ・システムで可能性のある障害が検出されます。監視機能からの情報に基づいて、代替システムはテークオ

ーバーを要求するか、または可能性のある障害についてオペレーターに通知します。次に、開始する監視機能を示します。

ALL 指定する LNK、RDS、および LOG と同じ。

LNK ISC リンク。

LOG システム・ログ

RDS 再始動データ・セット。

監視機能は、一般には、/START SURVEILLANCE 制御ステートメントを使って、IMS システム定義時に開始されます。ALL がデフォルトです。

/START THREAD コマンド

/START THREAD コマンドは、z/OS に渡される 1 組のメッセージ処理領域 JCL を指定するために使用します。メンバー名を指定しないと、デフォルトのメンバー名が使用されます。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『使用上の注意』

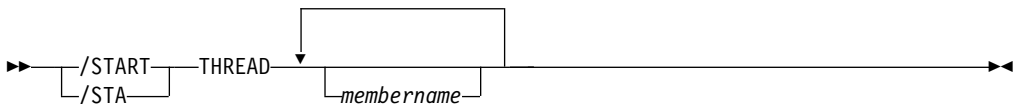
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 294. /START THREAD コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X
THREAD	X	X	

構文



使用上の注意

/START THREAD コマンドは、DEDB ユーティリティ領域に対してのみ使用されます。BMP 領域は JCL によって開始されます。CCTL スレッドは、接続時に自動的に開始されます。初めは、MINTHREAD 値まで、その後 (要求に応じて) MAXTHREAD 値まで。

/START TMEM コマンド

/START TMEM コマンドは、IMS が OTMA クライアントに Open Transaction Manager Access (OTMA) コマンドを送信し、指定されたトランザクション・メンバー名の入力を再開するように要求するために使用します。次に、IMS は OTMA クライアントへの出力の送信を再開します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 936 ページの『例』

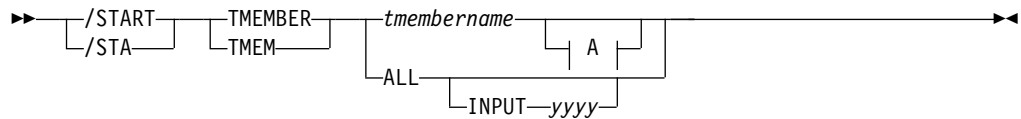
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 295. /START TMEM コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X
TMEM	X		X
TPIPE	X		X

構文



A:



キーワード

以下のキーワードは、/START TMEM コマンドに有効です。

INPUT

OTMA メンバーからの並行入力メッセージの最大数を指定します。OTMA は、そのメンバーからの入力メッセージの増加をモニターします。入力メッセージが限度の 80% に達すると、そのことを示す DFS1988W 警告メッセージがシステム・コンソールに送信され、その後は 5% ごとにメッセージが発行されます。最大数に達すると、DFS1989E エラー・メッセージがコン

ソールに送信されます。これ以降は、このメンバーからの OTMA 入力メッセージはすべてリジェクトされるようになり、リジェクトされるたびに OTMA センス・コード X'30' が発行されます。

入力メッセージ数 (トランザクション・インスタンス・ブロック (YTIB) 数) が最大数に達すると、/DISPLAY コマンドは「ユーザー状況」列に FLOOD 状況を表示します。FLOOD 状況は、入力メッセージが処理されて最大値の 50% 以下まで減るか、またはより大きな最大値を指定した /START TMEMBER INPUT コマンドが発行されると解消されます。

入力値は 1 から 5 桁の 10 進整数です。有効な値は 200 から 65000、または 0 です。値が 1 から 200 の場合は、200 として扱われます。65000 より大きな値を指定すると、値 65000 が使用されます。値 0 を指定すると、OTMA はメッセージあふれ検出を非活動化します。

このキーワードを ALL キーワードと一緒に指定した場合、以下のようになります。

- 値は、1 桁から 5 桁の 10 進整数 0 から 99999 が可能です。値が 1 から 99999 の場合、その値は、同時に処理を待つことができる、すべての OTMA メンバーからの入力メッセージの最大数を示します。システム内で未処理または待機中の OTMA メッセージあるいは TIB が多くなりすぎることを防ぐために、この値をグローバルあふれしきい値として使用し、IMS をストレージ関連の異常終了から保護します。ゼロ以外の値を指定すると、システムの OTMA のグローバルあふれ制御がアクティブ化されます。値 0 を指定した場合、OTMA はグローバルのあふれモニターとあふれ制御を非アクティブ化します。1 から 200 までの値を指定すると、値は 200 として扱われます。
- ゼロ以外のグローバルあふれ限度が指定された場合、グローバルあふれ制御がアクティブ化されます。グローバルあふれ限度に達すると、OTMA はすべてのメンバーからのすべての新規入力トランザクション (内部 OTMA メンバー DFSYICAL からの同期プログラム間通信要求を含む) を拒否します。コンソールおよび MTO に DFS3429E エラー・メッセージが送信されます。X'3C'に設定されたコマンド・タイプを持つプロトコル・メッセージが、"unavailable for work"状況のすべての OTMA メンバーに送信されます。OTMA メンバーがこの新規状況を受け取ると、それらのメンバーは、この機能低下状態が発生したときに修正アクションを実行することを選択できます。1 つの例として、IMS システム間でのすべての新規トランザクション要求の再ルーティングがあります。この機能低下したシステムで /DISPLAY OTMA コマンドを使用すると、OTMA サーバー・メンバーのユーザー状況に "SERVER-FLOOD"も表示されます。
- グローバルあふれ限度が 80% に達すると、すべての OTMA メンバー・クライアントに対して警告状況を反映した OTMA プロトコル・メッセージが送信されるほか、DFS3428W 警告メッセージが IMS MTO およびシステム・コンソールに発行されます。その後、グローバル・メッセージ制限に達するまで、5% ごとにこのメッセージが発行されます。このグローバルあふれ状況は、システム内の入力メッセージが処理され、システム内のトランザクション・インスタンス・ブロック (TIB) の総数がグローバル制限の 50% 以下まで減少すると、解除されます。良好

な状況を反映した OTMA プロトコル・メッセージがすべての OTMA メンバーに対して発行されるほか、DFS0793I が IMS MTO およびシステム・コンソールに発行されます。

- このコマンドが発行されず、OTMA クライアント記述子にグローバル制限がない場合、システム内ではデフォルトのグローバルあふれ処理が行われ、デフォルトのグローバルあふれ限度は、システムを保護するために 10000 に設定されます。OTMA グローバルあふれ処理のデフォルトのアクション・ポイントでは、以下が発行されます。
 - あふれ限度の 80% から、以降 5% ごとに警告メッセージ DFS3428W が発行されます。
 - 100% に達すると警告メッセージ DFS4388W が発行されます。
 - あふれが解放され、50% まで低下すると、警告解除メッセージ DFS0793I が発行されます。

また、警告状況あるいは良好な状況を反映した OTMA プロトコル・メッセージがすべての OTMA メンバーに送信されます。

TPIPE

/START コマンドと一緒に TPIPE を使用すると、IMS が OTMA クライアントに対して OTMA コマンドを送信して、指定したトランザクション・パイプへの入力を再開するように要求します。次に、IMS は OTMA クライアントへの出力の送信を再開します。指定されたメンバーがスーパーメンバーである場合は、そのスーパーメンバーのトランザクション・パイプの出力が再開されますが、OTMA コマンドは送信されません。指定されたメンバーが、保留キュー出力をスーパーメンバーによって管理されている通常メンバーである場合は、IMS は指定されたメンバーのトランザクション・パイプの出力を再開し、さらにそのスーパーメンバーのトランザクション・パイプの出力も再開します。OTMA コマンドがその通常メンバーの OTMA クライアントに送られます。出力は、コマンドを処理する IMS でのみ再開されます。通常メンバーのトランザクション・パイプとスーパーメンバーのトランザクション・パイプの両方で出力を再開できなかった場合は、どちらのトランザクション・パイプでも出力は再開されません。その出力を再開できなかった通常メンバーの名前が含まれている DFS058I COMMAND COMPLETED EXCEPT メッセージが発行されます。

制約事項: トランザクション・パイプが再同期保留状況である場合、IMS はそのトランザクション・パイプを開始しません。

TIMEOUT

コミット後送信 (CM0) および送信後コミット (CM1) の出力メッセージに対する確認応答のタイムアウト間隔を設定します。

OTMA は、synclevel=confirm または synclevel=syncpt を使用した送信後コミット出力メッセージを送信した後、OTMA クライアント (IMS Connect など) からの確認 (ACK または NAK) メッセージを予期します。指定されたタイムアウト値の時間内に IMS が確認メッセージを受信しない場合、OTMA はタイムアウト・アクションを取って、トランザクションを打ち切ります。これにより、IMS 従属領域が長時間 WAITSYNPT または WAIT/RRS 状況になるのを防止できます。

TIMEOUT キーワードは、IMS 間 TCP/IP 接続を経由してリモート IMS システムに送信されるトランザクション・メッセージの確認応答にも適用されます。タイムアウト間隔の有効期限が切れると、未確認メッセージはデフォルト・タイムアウト・キュー DFS\$\$TOQ に転送されます。

タイムアウト間隔は、0 から 255 秒までの範囲で、デフォルト値は 120 秒です。0 が指定されている場合、タイムアウト機能は使用不可です。

例

以下は、/START TMEM コマンドの例です。

/START TMEM コマンドの例 1

入力 ET:

```
/STA TMEMBER CLIENT1 TPIPE TPIPESY
```

応答 ET:

```
DFS058I 15:39:40 START COMMAND COMPLETED   SYS3  
DFS996I *IMS READY*   SYS3
```

/START TMEM コマンドの例 2

入力 ET:

```
/START TMEMBER HWS1 INPUT 2000
```

応答 ET:

```
DFS058I START COMMAND COMPLETED
```

説明: OTMA メンバー HWS1 の並行入力メッセージの最大数が 2000 に設定されています。指定された数に基づいて、IMS OTMA は入力メッセージの増加をモニターし、メッセージあふれ条件が発生しないようにします。

/START TRAN コマンド

/START TRAN コマンドは、開始されるトランザクションを指定するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 937 ページの『構文』
- 937 ページの『使用上の注意』
- 938 ページの『同等の IMS タイプ 2 コマンド』
- 938 ページの『例』

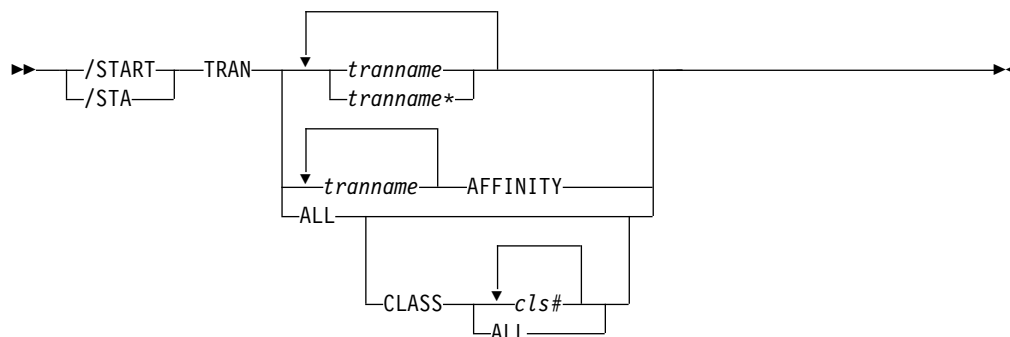
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 296. /START TRAN コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X
AFFINITY	X		X
CLASS	X		X
TRAN	X		X

構文



使用上の注意

/START TRAN ALL CLASScls# コマンドは、指定されたクラスに関連する全トランザクションを開始させます。

中断キュー上にメッセージをもつトランザクションが開始された場合、トランザクションに関連する中断キューは、自動的に通常のキューに転送されます。

TRAN キーワードは、総称パラメーターが既存のトランザクションを指定する場合に、総称になれます。

/START TRAN tranname AFFINITY コマンドは、共用キュー環境内でローカル類似性トランザクション・キューを開始するために使用できます。共用キュー環境でローカル類似性トランザクション・キューを開始すると、この IMS システムの IMSID または RSENAME (XRF) の類似性名がトランザクション名に付加されたトランザクション・メッセージが処理可能な共用キュー上にあるときに、IMS システムは通知を受け取ります。この類似性の登録は、通常のトランザクション登録 (トランザクション名に空白が付加された登録) のほかに行われます。

類似性をもってトランザクションが開始されると、類似性の登録状況は除去することはできず、QUERY TRAN コマンドでは常に類似性状況が示されます。したがって、その後に /STOP TRAN tranname コマンドを発行すると、通常の登録および類似性の登録の両方が停止します。続いて /START TRAN tranname コマンドを発行すると (AFFINITY キーワードの有無に関係なく)、常に通常の登録および類似性の登録の両方が実行されます。

類似性状況は、IMS のコールド・スタートにより失われます。DFSMSCE0 ユーザー・メッセージ・ルーティング出口を使用して、共用キュー環境内で入力トランザ

クシオン・メッセージ用のローカル類似性を設定したときに、IMS 制御領域が停止され、その後でコールド・スタートされた場合には、/START TRAN AFFINITY コマンドまたは UPDATE TRAN NAME(*trannname*) START(SCHD) OPTION(AFFIN) コマンドを発行する必要があります。これらのコマンドは、メッセージが処理されるように、類似性状況をもつトランザクションを登録します。

コールド・スタート処理の終わりに、共用キュー通知が行われる場合は、トランザクションの通知はローカル IMSID への類似性なしに行われます。ローカル類似性は出口により設定されるもので、トランザクション定義の一部ではないので、コールド・スタートの後までは維持されません。したがって、ローカル類似性をもつメッセージはスケジュール不能です。/START TRAN *trannname* AFFINITY コマンドは、ローカル IMSID への類似性をもつトランザクションに関する通知を出します。

/START TRAN *trannname* AFFINITY コマンドでは、パラメーターでの総称トランザクション名 ALL の使用はサポートされません。

共用キュー環境では、/START TRAN コマンドの結果として、IMS はそのトランザクションに対するインタレストを登録することになります。これは、そのトランザクションはその IMS でスケジュールできることを示します。/START TRAN ALL コマンドは、既に CQS に登録されているトランザクションは登録しません。

NOTINIT-15-REPOCHGLIST 理由コードで「不良」のマークが付けられたトランザクションには、/START TRAN コマンドは許可されません。これは、そのトランザクションの IMS 変更リスト処理が完了していないか、変更リスト処理が失敗したためです。

同等の IMS タイプ 2 コマンド

以下の表は、各種の /START TRAN コマンドと、類似の機能を実行する IMS タイプ 2 コマンドを示しています。

表 297. /START TRAN コマンドと同等のタイプ 2 コマンド

タスク	/START TRAN コマンド	類似の IMS タイプ 2 コマンド
トランザクションを開始する。	/START TRAN	UPDATE TRAN NAME(<i>trannname</i>) START(Q,SCHD,SUSPEND)

例

以下に示すのは /START TRAN コマンドの例です。

/START TRAN コマンドの例 1

入力 ET:

```
/START TRAN ALL CLASS 6
```

応答 ET:

```
DFS058I START COMMAND COMPLETED
```

説明: クラス 6 に関連する全トランザクションが開始されます。

/START TRAN コマンドの例 2

入力 ET:

```
/START TRAN PIT, SEED
```

応答 ET:

```
DFS058I START COMMAND COMPLETED
```

説明: トランザクション PIT と SEED が開始されます。

/START TRAN コマンドの例 3

入力 ET:

```
/START TRAN APOL12 AFFINITY
```

応答 ET:

```
DFS058I START COMMAND COMPLETED
```

説明: 類似性をもってトランザクション APOL12 が開始されます。

関連資料:

1429 ページの『UPDATE TRAN コマンド』

***/START USER* コマンド**

NODE キーワードなしに、USER は、開始する ISC ユーザーまたは動的ユーザーを指定します。USER パラメーターは、総称パラメーターが既存のユーザーを指定する場合に、総称になれます。

サブセクション:

- 『環境』
- 940 ページの『構文』
- 940 ページの『使用上の注意』

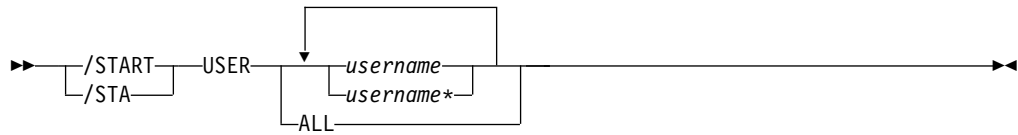
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 298. */START USER* コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
<i>/START</i>	X	X	X
USER	X		X

構文



使用上の注意

/START USER コマンドは、停止され、サインオフされたユーザーに対してのみ適用します。 /START USER コマンドは、また、ユーザーを開始する前に、すべてのアクティブな会話の終了も行います。

/START USER コマンドは、ユーザーを MFSTEST モードまたは排他モードから取り出します。 USER 構造が一時的なもので、その構造を作成する状況条件がリセットされる場合、一時的なユーザーは次の単純チェックポイントで削除されます。

ISC ユーザーの場合、ユーザーは開始され、割り振りに使用可能にされます。

動的ユーザーの場合は、このユーザーが開始され、サインオンができるようにされます。動的ユーザーが高速機能入力または出力応答モードのいずれかにあり、高速機能入力または出力応答モードが、順に発行された /STOP USER コマンドと /START USER コマンドによってリセットされた場合、IMS は X'67D0' サブタイプ 11 トレース・ログ・レコードを書き込みます。

/START USER はユーザーを、テスト・モードおよび事前設定モードからは取り出しません。 MFSTEST モードは、ノードおよびユーザーと関連づけることができます。 MFSTEST モード (ユーザー・レベル) および排他モードは、依然としてリセットされます。他の状況は、もはや重要ではないため、サインオンまたは再始動後には持ち越されません。

グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持されない場合、/START USER コマンドを使用すると、ユーザーはローカル IMS にサインオンできるようになります。グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持されている場合は、/START USER コマンドを使用すると、ユーザーは IMSplex 内の任意の IMS にサインオンできるようになります。

/START USER コマンドが出されたときに、会話型モードにあるユーザーがメッセージ DFS058I START COMMAND COMPLETED EXCEPT を受け取った場合は、会話は他の処理が使用中 (INUSE) である可能性があります。これは一時的な状態であり、/START USER コマンドを再発行することができます。

例

以下の式は、/START USER コマンドの例です。

入力 ET:

```
/DISPLAY USER IMSUS01 IMSUS02
```

応答 ET:


```

USER      ENQCT DEQCT  QCT
IMSUS01   0     0     0 STOPPED
IMSUS02   0     0     0 STOPPED
*91091/111727*

```

入力 ET:

```
R 38,/START USER IMSUS01
```

応答 ET:

```
DFS058I 11:19:05 START COMMAND COMPLETED
```

入力 ET:

```
/DISPLAY USER IMSUS01 IMSUS02
```

応答 ET:

```

USER      ENQCT DEQCT  QCT
IMSUS01   0     0     0
IMSUS02   0     0     0 STOPPED
*91091/113038*

```

入力 ET:

```
/START USER APPLE*
```

応答 ET:

```
DFS3633 11:19:35 GENERIC PARAMETER RESOURCES NOT FOUND, NO ACTION TAKEN
```

/START VGR コマンド

/START VGR コマンドは、IMS サブシステムを VTAM 汎用リソース・グループに結合させます。このコマンドは、VTAM ACB がクローズしている (通常は、/STOP DC コマンドが出された結果) 場合は、リジェクトされます。

サブセクション:

- 『環境』
- 942 ページの『構文』
- 942 ページの『キーワード』

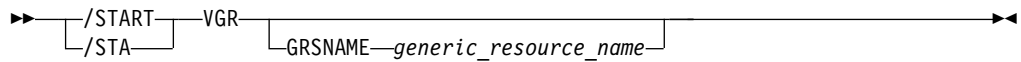
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 299. /START VGR コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X
GRSNAME	X	X	X
VGR	X		X

構文



キーワード

以下のキーワードは、/START VGR コマンドに有効です。

IMS サブシステムが汎用リソース名をもっていない場合は、GRSNAME キーワードを使用して、それを指定できるようにします。IMS サブシステムの EXEC ステートメントに GRSNAME= キーワードが指定されている場合、そのサブシステムは既に汎用リソース名をもっています。

GRSNAME= が EXEC ステートメントで指定された場合、または既に前の /START VGRS コマンドで指定されていた場合、GRSNAME は無視されます。GRSNAME= が EXEC ステートメントまたは前の /START VGRS コマンドで指定されていない場合には、GRSNAME を指定した /START コマンドを実行する前に、すべての VTAM セッションを終了する必要があります。

/START WADS コマンド

/START WADS コマンドは、以前に停止された WADS を開始するか、または IMS が新規の WADS を使用可能な WADS のプールに追加するかのいずれかを示します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 943 ページの『キーワード』
- 943 ページの『使用上の注意』

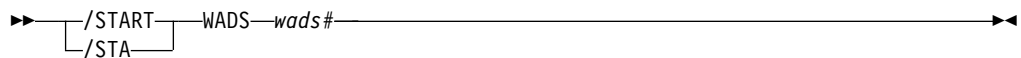
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 300. /START WADS コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/START	X	X	X
WADS	X	X	X

構文



キーワード

以下のキーワードは、/START WADS コマンドに有効です。

wads#

新規の WADS を追加する場合、*wads#* は DFSMDA マクロ指定で定義される WADS ID です。*wads#* は 0 から 9 でなければなりません。

使用上の注意

/START WADS コマンドを使用する場合、JCL で割り振られる場合でも、WADS は DFSMDA マクロで定義する必要があります。

第 23 章 /STOP コマンド

/STOP コマンドは、特定の通信回線、端末、ユーザー、または論理パスへの出力メッセージの送信、受信、またはキューイングを停止します。

また、これらのコマンドを使用して、特定のトランザクション・コードを含んでいるメッセージのスケジューリングまたはキューイング、特定のプログラムの実行、または指定のデータベースの使用を停止することもできます。

VTAM ノードの場合、現在接続されている端末を切断します。それ以後のログオンは、そのノードが /START または /RSTART のいずれかのコマンドの対象になるまで、すべてリジェクトされます。

/STOP は、端末オペレーターが入力したすべてのパラメーターの妥当性を検査します。相互に独立したパラメーターにエラーが検出された場合、無効なパラメーターのみがエラーとして示され、残りのパラメーターは、/STOP コマンドが処理します。

/STOP コマンドは、/START、/RSTART、/PSTOP、/PURGE、または /MONITOR コマンドで以前に確立された条件をリセットするために使用できます。

これらのコマンドは、バッチ SPOC ユーティリティーを使用する IMSplex に対して発行できます。

- 『/STOP ADS コマンド』
- 947 ページの『/STOP APPC コマンド』
- 948 ページの『/STOP AREA コマンド』
- 952 ページの『/STOP AUTOARCH コマンド』
- 953 ページの『/STOP BACKUP コマンド』
- 953 ページの『/STOP CLASS コマンド』
- 955 ページの『/STOP DATAGRP コマンド』
- 956 ページの『/STOP DB コマンド』
- 961 ページの『/STOP DC コマンド』
- 962 ページの『/STOP DESC コマンド』
- 962 ページの『/STOP LINE コマンド』
- 964 ページの『/STOP LTERM コマンド』
- 965 ページの『/STOP LUNAME コマンド』
- 967 ページの『/STOP MADSIOT コマンド』
- 968 ページの『/STOP MSNAME コマンド』
- 969 ページの『/STOP NODE command』
- 971 ページの『/STOP OLDS コマンド』
- 972 ページの『/STOP OTMA コマンド』
- 973 ページの『/STOP PGM コマンド』
- 974 ページの『/STOP REGION コマンド』
- 983 ページの『/STOP RTC コマンド』
- 984 ページの『/STOP SB コマンド』
- 985 ページの『/STOP SLDSREAD コマンド』
- 985 ページの『/STOP SUBSYS コマンド』
- 987 ページの『/STOP SURV コマンド』
- 988 ページの『/STOP THREAD コマンド』
- 991 ページの『/STOP TMEM コマンド』
- 993 ページの『/STOP TRAN コマンド』
- 995 ページの『/STOP USER command』
- 997 ページの『/STOP VGR コマンド』
- 998 ページの『/STOP WADS コマンド』

/STOP ADS コマンド

/STOP ADS コマンドは、クローズして割り振り解除されるエリア・データ・セットを指定します。

AREA のデータ・セットが 1 つでもオープンしている場合は、AREA は停止されません。 /STOP ADS は、指定された ADS が AREA で使用できる最後のデータ・セットである場合にはリジェクトされます。

サブセクション:

- 947 ページの『環境』
- 947 ページの『構文』
- 947 ページの『使用上の注意』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 301. /STOP ADS コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
ADS	X	X	

構文

▶▶ /STOP ADS *ddname* ▶▶
└── /STO ─┘

使用上の注意

/STOP ADS コマンドには LOCAL/GLOBAL のオプションはありませんが、DEDB エリアがブロック・レベルで共用される場合には、応答は GLOBAL を指定した場合と同じになります。

/STOP ADS コマンド出力は、このコマンドが OM API を介して入力されると変わります。この場合、DFS058I メッセージは OM に戻されません。OM に戻されるコマンド応答には、必要に応じて、以下のメッセージのうちの 1 つ以上が含まれます。

高速機能メッセージ: DFS140I、DFS0488I、DFS0666I、DFS1407I、DFS3720I、DFS3721I、DFS3771I

/STOP APPC コマンド

/STOP APPC コマンドは、LU 6.2 装置からのトランザクションのスケジューリングを停止するように IMS に指示します。/STOP APPC コマンドは、一時的停止状態で使用することができます。これは、リモート LU 6.2 装置に TP_Not_Available_No_Retry のセンス・コードを受信させます。これは、以後 IMS へのアクセスをさらに試みることにつながる可能性があります。

サブセクション:

- 『環境』
- 948 ページの『構文』
- 948 ページの『キーワード』
- 948 ページの『使用上の注意』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 302. /STOP APPC コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
APPC	X		X
CANCEL	X	X	X

構文



キーワード

以下のキーワードは、/STOP APPC コマンドに有効です。

CANCEL

長い時間停止することが予期される場合、例えば、その日の処理を終了する場合などは、APPC/MVS にシャットダウン要求を開始させます。すべてのリモート LU 6.2 装置は、TP_Not_Available_No_Retry のセンス・コードを受信します。リモート LU 6.2 装置は、このアプリケーションをアクセスする試みを停止します。

/STOP APPC CANCEL は、APPC/MVS からの応答に従って、要求する状況を CANCEL に設定します。望みの状況が DISABLED である場合に、/STOP APPC CANCEL が入力されると、IMS はそのコマンドをリジェクトします。

注: 停止された APPC/MVS システムへの着信 ATTACH についての、LU 6.2 リモート装置に戻されるセンス・コードは、APPC/MVS システムによって決定され、リリース間で異なることがあります。一般に、リモート LU 6.2 アプリケーションは、リジェクトされた後、IMS とのセッションの再設定が試みられるまで、一定時間待つ必要があります。

使用上の注意

/STOP APPC コマンドは、望みの状況を STOPPED に設定します。現在の状況は、APPC/MVS からの応答に応じて STOPPED または FAILED に設定されます。

/STOP AREA コマンド

/STOP AREA コマンドは、このエリアに関連するデータ・セットをクローズすることを指定します。

サブセクション:

- 949 ページの『環境』
- 949 ページの『構文』
- 949 ページの『キーワード』
- 951 ページの『使用上の注意』

- 951 ページの『同等の IMS タイプ 2 コマンド』
- 952 ページの『例』

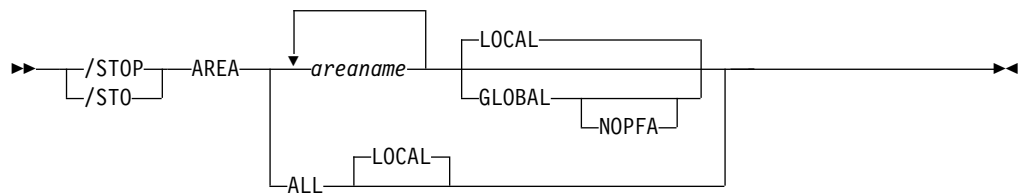
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 303. /STOP AREA コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
AREA	X	X	
GLOBAL	X	X	
LOCAL	X	X	
NOPFA	X	X	

構文



キーワード

以下のキーワードは、/STOP AREA コマンドに有効です。

GLOBAL

IRLM がアクティブな場合に、データベースまたはエリアを共用するすべてのサブシステムにコマンドを適用することを指定します。

GLOBAL キーワードと ALL パラメーターを同時に使うことはできません。両方のキーワードを指定すると、コマンドはリジェクトされます。GLOBAL キーワードを使う時は、IRLM がアクティブでなければなりません。IRLM がアクティブでない場合、コマンドはリジェクトされます。データベースまたはエリアが停止したことが DBRC に通知され、DBRC は RECON データ・セットを更新して、停止状態を示します。

GLOBAL コマンドは、コマンドを開始した IMS システムによって処理されます。このシステムはコマンドをローカルで処理した後、IRLM NOTIFY を要求して、共用 IMS システムにコマンドを経路指定して処理するようにします。

グローバル DB または AREA 状況が維持されている場合、RM 内に維持されているグローバル状況も更新されます。グローバル状況は STOPPED に設定されます。

コマンドが OM API から入力されると、グローバル状況はコマンド・マスター IMS によって更新されます。コマンドが OM API から入力されない場合は、GLOBAL コマンドを開始した IMS が RM 内のグローバル状況を更新しません。

ユーザーは、グローバル・エリア状況を RM 内に維持する必要があるかどうかを指定する必要があります。この指定は、IMS の初期設定時に、DFSDFXxx または DFSCGxxx PROCLIB メンバーのいずれかに PLEXPARM(GSTSAREA(Y)) を指定することで行えます。UPDATE IMS SET(PLEXPARM(GSTSAREA(Y))) コマンドを使用して、それを動的に変更することもできます。グローバル・エリア状況を維持するように指定しない場合、GLOBAL キーワードは以前のリリースと同様に処理され、グローバル状況は更新されません。

RM 内のグローバル状況が正常に更新されると、メッセージ DFS0988I (RSRCTYPE=AREA の場合) が出されます。グローバル状況が正常に更新されないと、メッセージ DFS3308I が出され、RM 失敗を示し、コマンド応答行は生成されません。RM エラーがあれば、OCMD トレース表へトレースされます。ユーザーは、QRY DB STATUS(GLOBAL) コマンドを発行することにより、RM 内のリソースのグローバル状況を入手できます。

DEDB エリア用の X'594C' ログ・レコードに、グローバル状況とグローバル・コマンドのタイム・スタンプの両方が含まれています。

コマンドの GLOBAL キーワードが OM API から入力される場合、そのコマンドは IMSplex の 1 つの IMS システムにのみ経路指定される必要があります。OM からコマンドを受け取った IMS は、DBRC 呼び出しを行って、GLOBAL 状況の RECON を更新します。さらに、IRLM NOTIFY に、共用している IMS システムでコマンドを経路指定して処理するように要求し、そしてそのコマンドをローカルで処理します。

NOTIFIED システムで作成されたメッセージはシステム・コンソール上のみ表示され、もともとコマンドを入力した OM API に経路指定して戻されることはありません。

複数の IMS システムが経路リストで明示して指定されている場合、マスター IMS システムは前述のようにコマンドを処理します。ただし、OM がコマンドを経路指定する非マスター IMS システムは、以下の表に示されている戻りコードと理由コードを戻してコマンドをリジェクトします。

表 304. OM API から出された GLOBAL キーワードの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000004'	X'00001000'	コマンドには GLOBAL キーワードが含まれ、IMSPLEX 内の複数の IMS システムに経路指定されました。OM がこのコマンドを非マスター IMS システムに経路指定すると、非マスター IMS システムはこのコマンドをリジェクトします。マスター IMS システムはこのコマンドを処理し、IRLM NOTIFY を使用して、非マスター IMS システム上でコマンドを経路指定および処理します。GLOBAL キーワードの項にある検討を参照してください。

LOCAL

コマンドが、そのコマンドを入力したサブシステムに対してのみ適用されるよ

うに指定します。このコマンドは、データベースまたはエリアを共用する他のいずれのサブシステムにも影響を与えることはありません。LOCAL がデフォルトです。

NOPFA

データベースまたはエリアが状況を変更したことを DBRC には通知しないように指定します。このキーワードは、データベースがオフラインになった後で、例えば、オフライン・ユーティリティーに対してデータベースを使用する許可が必要になった場合に使用することができます。このキーワードを使用することによって、それ以降、データベースまたはエリアの許可が DBRC によって阻止されることはありません。NOPFA を指定できるのは、GLOBAL キーワードと一緒に使用する場合のみです。

推奨: データベースまたはエリアを再始動する前に、NOPFA キーワードを指定せずにこのコマンドを出して、そのデータベースまたはエリアの状況の変更を DBRC に通知してください。

使用上の注意

エリアが停止しているか、またはクローズしているかを判別するために、/DISPLAY AREA コマンドを使用します。エリアが停止している場合には、/START AREA コマンドを使って、エリアを使用可能にする必要があります。z/OS では、すべてのデータ・セットが割り振り解除されます。システムが、HSSP 処理の間に /STOP AREA コマンドを処理する場合、このエリアは現在のコミット処理が完了した後で解放されます。/STOP の時点で有効なイメージ・コピー・オプションは、継続されるシステム操作に影響を与えます。停止中で、z/OS データ・スペースにあるすべての仮想記憶オプション (VSO) DEDB エリアは、データ・スペースから除去され、更新は DASD に書き込まれます。

/STOP AREA コマンド出力は、このコマンドが OM API を介して入力されると変わります。この場合、DFS058I メッセージは OM に戻されません。GLOBAL を指定するコマンドの場合、コマンド・マスターのみが OM に非同期メッセージを戻します。LOCAL キーワードを使用してコマンドが処理される場合には、すべての IMS システムが OM に非同期メッセージを戻すことができます。OM に戻されるコマンド応答には、必要に応じて、以下のメッセージのうちの 1 つ以上が含まれます。

高速機能メッセージ: DFS140I、DFS170I、DFS0488I、DFS0666I、DFS1407I、DFS3062I、DFS3342I、DFS3720I、DFS3824I

データベースが静止している間は、このコマンドを正常に処理することはできません。

同等の IMS タイプ 2 コマンド

以下の表は、各種の /STOP AREA コマンドと、類似の機能を実行する IMS タイプ 2 コマンドを示しています。

例

以下は /STOP AUTOARCH コマンドの例です。

入力 ET:

```
/STOP AUTOARCH
```

応答 ET:

```
DFS058I STOP COMMAND COMPLETED
```

説明: 自動アーカイブが停止されます。

/STOP BACKUP コマンド

/STOP BACKUP コマンドは、XRF 環境の代替システムを終了します。このコマンドを代替システムに入力しなければなりません。ABDUMP キーワードを指定すると、代替システムのダンプが行われます。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 307. /STOP BACKUP コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
ABDUMP	X	X	X
BACKUP	X		X

構文

→ /STOP BACKUP →
 └── /STO ─┘ └── ABDUMP ─┘

/STOP CLASS コマンド

/STOP CLASS コマンドは、指定されたクラスのアプリケーション・プログラムがそれ以上スケジューリングされないようにします。

サブセクション:

- 954 ページの『環境』
- 954 ページの『構文』
- 954 ページの『使用上の注意』
- 954 ページの『例』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 308. /STOP CLASS コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
CLASS	X		X

構文



使用上の注意

特定のクラスに割り当てられたトランザクションを現在処理しているすべての領域は、限界カウントに達するか (MPP)、入力キューに入るメッセージがなくなるまで、実行を続けることができます (BMP と MPP)。

この領域は、次のメッセージを待つ (「入力待ち」モードになる) ことは許されません。代わりに、QC 状況コード (これ以上のメッセージがない) がアプリケーション (MPP) に戻されます。

コマンドを入力した時に、既に領域がスケジュールされ、次のメッセージを待っている (「入力待ち」モード) 場合、領域に通知して QC 状況コードはアプリケーション (MPP) に戻されます。

入力待ちトランザクション (WFI) に対してスケジュールされたバッチ・メッセージ処理領域 (BMP) は /PSTOP REGION、/DBD、/DBR、または /STA のそれぞれのコマンドだけに対応する QC 状況コード (これ以上のメッセージなし) を戻します。

例

以下の式は、/STOP CLASS コマンドの例です。

入力 ET:

```
/STOP CLASS 3
```

応答 ET:

```
DFS058I STOP COMMAND COMPLETED
```

説明: クラス 3 のトランザクションに対するアプリケーション・プログラムのスケジュールリングをこれ以降行いません。クラス 3 のトランザクションを現在処理中のメッセージ処理プログラムは、処理限界カウントに達するか、または入力キューに入れるメッセージがなくなるまで実行することが許されます。

/STOP DATAGRP コマンド

/STOP DATAGRP コマンドは、停止する DL/I データベース、高速機能 DEDB、および高速機能エリアのグループを指定します。

データ・グループは、データベースおよびエリアの論理グループです。データ・グループを利用することによって、データベースとエリアに関して単純なコマンド処理が可能になります。パラメーター GRPNAME と DBGRP を指定して INIT.DBDSGRP コマンドを使用することによって、RECON データ・セット内にデータ・グループを定義します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『使用上の注意』
- 『同等の IMS タイプ 2 コマンド』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 309. /STOP DATAGRP コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
DATAGRP	X	X	
LOCAL	X	X	

構文

```
▶▶ /STOP DATAGRP datagroupname LOCAL ▶▶  
  └──┬──┘ └──┬──┘  
  /STO     LOCAL
```

使用上の注意

/STOP DATAGRP 処理の間、z/OS データ・スペースの中のすべての仮想記憶オプション (VSO) DEDB は、そのデータ・スペースから除去されます。更新は DASD に書き込まれます。

推奨事項: このコマンドでは、DB グループだけでなく、DBDS グループを使用することもできますが、DBDS グループを DB グループに変換するためのオーバーヘッドを除去するために、可能な限り、DB グループを使用してください。

同等の IMS タイプ 2 コマンド

以下の表は、各種の /STOP DATAGRP コマンドと、類似の機能を実行する IMS タイプ 2 コマンドを示しています。

表 310. /STOP DATAGRP コマンドと同等のタイプ 2 コマンド

タスク	/STOP DATAGRP コマンド	類似の IMS タイプ 2 コマンド
データ・グループを停止する。	/STOP DATAGRP <i>datagrpname</i>	UPDATE DATAGRP NAME(<i>datagrpname</i>) STOP(SCHD)

関連資料:

1095 ページの『UPDATE DATAGRP コマンド』

/STOP DB コマンド

/STOP DB コマンドは、現在スケジュール済みのプログラムには影響を与えず、データベースもクローズせずに、これ以降スケジュールされるプログラムがデータベースにアクセスするのを阻止します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『使用上の注意』
- 959 ページの『同等の IMS タイプ 2 コマンド』
- 959 ページの『例』

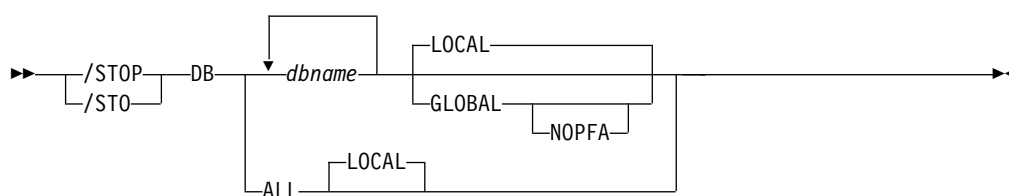
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 311. /STOP DB コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
DB	X	X	
GLOBAL	X	X	
LOCAL	X	X	
NOPFA	X	X	

構文



使用上の注意

データベースが DEDB または MSDB の場合、データベースを使用するプログラムはスケジュールされません。その他のデータベースの場合、プログラムは依然とし

てスケジュールされますが、データベースに対して呼び出しを行うと、3303 疑似異常終了コードが出されるか、あるいは、INIT 呼び出しを出すと BA 状況コードが出されます。

/STOP DB コマンドは、ランダマイザー・ルーチンをメモリーから削除します。

領域がスケジュールされた後でデータベースが停止した場合、領域は次のメッセージを待つ（「入力待ち」モードになる）ことが許されません。その領域で使うことができるメッセージで処理すべきものがなくなると、QC 状況コード（これ以上のメッセージはない）がアプリケーション（MPP）に戻されます。コマンドを入力した時に、既に領域がスケジュールされ、次のメッセージを待っている（wait-for-input モード）場合、領域に通知して QC 状況コードはアプリケーション（MPP）に戻されます。

入力待ちトランザクション（WFI）に対してスケジュールされたバッチ・メッセージ処理領域（BMP）は /PSTOP REGION、/DBD、/DBR、または /STA のそれぞれのコマンドだけに対応する QC 状況コード（これ以上のメッセージなし）を戻します。

IFP 領域では、領域が再び始動するまで /STOP コマンドは作動しません。ACCESS パラメーターを指定した /STOP DB コマンドの発行は、MSBD に対しては無効です。

GLOBAL コマンドは、コマンドを開始した IMS システムによって処理されます。このシステムはコマンドをローカルで処理した後、IRLM NOTIFY を要求して、共用 IMS システムにコマンドを経路指定して処理するようにします。

グローバル DB 状況が維持されている場合、RM 内に維持されているグローバル状況も更新されます。グローバル状況は STOSCHD に設定されます。

コマンドが OM API から入力されると、グローバル状況はコマンド・マスター IMS によって更新されます。コマンドが OM API から入力されない場合は、GLOBAL コマンドを開始した IMS が RM 内のグローバル状況を更新します。

RM 内のグローバル状況が正常に更新されると、メッセージ DFS0988I (RSRCTYPE=DB の場合) が出されます。グローバル状況が正常に更新されないと、メッセージ DFS3308I が出され、RM 失敗を示し、コマンド応答行は生成されません。RM エラーがあれば、OCMD トレース表へトレースされます。ユーザーは、QRY DB STATUS(GLOBAL) コマンドを発行することにより、RM 内のリソースのグローバル状況を入手できます。

データベース用の X'4C' ログ・レコードが更新され、グローバル状況とグローバル・コマンドのタイム・スタンプの両方が組み込まれます。

DBCTL の場合、CCTL が PSB をスケジュールするときに、DBCTL スレッドの SCHED 要求は、スレッドを LONG または SHORT として定義します。現在データベースが LONG スレッドに対してスケジュールされている場合は、このコマンドはリジェクトされます。それ以外の場合、スレッドはデータベースに処理が行われる前に完了することができます。これにより、コミット・ポイントまたはトランザクションの終了が起ります。

/STOP DB コマンド出力は、このコマンドが OM API から入力されると変わります。この場合、DFS058I メッセージは OM に戻されません。OM に戻されるコマンド応答には、データベース・タイプおよびコマンドの完了に適した、以下のメッセージのいずれか 1 つ以上が入ります。

- 全機能データベース・メッセージ: DFS132、DFS160、DFS216、DFS0488I、DFS1407、DFS2026、DFS3318I、DFS3466I
- 高速機能データベース・メッセージ: 固有のメッセージは戻されません。

LOCAL、および NOPFA の説明については、AREA キーワードを参照してください。

このコマンドを入力する場合、データベース名は既存の非 HALDB、HALDB マスター、または HALDB 区画のいずれかにすることができます。HALDB 区画に対するコマンドは、/START DB コマンドおよび UPDATE DB START(ACCESS) コマンドを除き、非 HALDB に対するコマンドとまったく同じ働きをします。HALDB 区画は、「それが前に許可されたが割り振られていない、OPEN キーワードが指定されている、または区画が EEQE をもっている」ということがない限り、コマンドの実行中に割り振られません。区画は最初の参照時に割り振られます。

HALDB データベースの場合、IMS は、区画の状況とマスター・データベースの状況を別々に追跡します。例えば、区画が停止されていて、マスター・データベースは開始されていることがあります。また、区画が開始されていて、マスター・データベースは停止されていることもあります。区画のオープン、許可、またはスケジューリングの前に、IMS は必ず区画とマスター・データベースの状況を検査します。区画とマスター・データベースのいずれかがアクションを妨げる状況になっている場合、IMS はそのアクションを実行しません。

各区画には、それ自体とマスター・データベースのアクセス制限が設定されます。例えば、マスター・データベースに読み取り (READ) のアクセス・インテントが設定されていて、いずれかの区画に更新 (UPD) のアクセス・インテントが設定されている場合、区画を更新することはできません。また、マスター・データベースに更新 (UPD) のアクセス・インテントが設定されていて、いずれかの区画に読み取り (READ) のアクセス・インテントが設定されている場合も、区画を更新できません。停止またはロックなど、アクセス制限に影響を与える他の状況にも同様の考慮事項が適用されます。

例外: HALDB マスター・データベースに更新アクセス権 (UPD) が設定されている場合、区画に、マスターのアクセス権を超える排他的 (EXCL) のアクセス・インテントを設定することができます。

区画名を指定して発行されるコマンドは、区画の状況にのみ影響を与えます。マスター・データベースに対して発行されるコマンドは、マスター・データベースの状況にのみ影響を与えます。そのため、マスター・データベースを開始しても、その区画の状況は更新されません。区画が停止されている場合は、停止されたままになります。HALDB 区画は、明示的に停止される場合は、明示的に再び開始される必要があります。キーワード ALL が指定されたタイプ 1 コマンド、NAME(*) が指定されたタイプ 2 コマンド、および HALDB マスターに対するコマンドは、それぞれの HALDB 区画の STOPPED (QUERY DB では STOACC、STOSCHD、または STOUPDS として表示) および LOCKED 標識を変更しません。

コマンドのターゲットが HALDB マスターである場合、処理はすべての HALDB 区画を対象に行われます。例えば、IMS コマンドが HALDB マスターでの UPDATE DB STOP(ACCESS) である場合は、すべての HALDB 区画がクローズされ、割り振り解除され、無許可にされます。ただし、停止状況はマスター・データベースでのみ設定されます。QUERY DB コマンドが発行される場合、HALDB マスターのみが STOACC の状況を表示します (各 HALDB 区画は、それ自体が停止された場合を除き、STOACC を表示しません)。UPDATE DB STOP(ACCESS) コマンドが HALDB マスターに対して出された場合は、/DISPLAY DB コマンドの表示出力は HALDB マスターを示しますが (STOPPED のように)、区画の状況は表示しません。

制約事項:

- HALDB オンライン再編成 (OLR) が、IMS システム上の HALDB 区画に対して実行中の間は、同じ IMS システム上のその区画に対して、/STOP DB コマンドを処理することはできません。
- データベースが静止している間は、このコマンドを正常に処理することはできません。

NOTINIT-48-REPOCHGLIST 理由コードで「不良」のマークが付けられたデータベースには、/STOP DB コマンドは許可されません。これは、そのデータベースの IMS 変更リスト処理が完了していないか、変更リスト処理が失敗したためです。

同等の IMS タイプ 2 コマンド

以下の表は、各種の /STOP DB コマンドと、類似の機能を実行する IMS タイプ 2 コマンドを示しています。

表 312. /STOP DB コマンドと同等のタイプ 2 コマンド

タスク	/STOP DB コマンド	類似の IMS タイプ 2 コマンド
データベースを停止する。	/STOP DB <i>dbname</i>	UPDATE DB NAME(<i>dbname</i>) STOP(SCHD)

例

以下に示すのは /STOP DB コマンドの例です。

/STOP DB コマンドの例 1

入力 ET:

```
/STOP DATABASE TREEFARM
```

応答 ET:

```
DFS058I STOP COMMAND IN PROGRESS
DFS0488I STOP COMMAND COMPLETED. DBN=TREEFARM RC=0
```

説明: データベースの TREEFARM が停止されます。

/STOP DB コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

STO DB BANKATMS BANKTERM BANKLDGR BE3ORDER

TSO SPOC 出力:

```
SYS3 DFS0488I STO COMMAND COMPLETED. DBN= BANKATMS RC= 0
SYS3 DFS0488I STO COMMAND COMPLETED. DBN= BANKTERM RC= 0
SYS3 DFS0488I STO COMMAND COMPLETED. DBN= BANKLDGR RC= 0
SYS3 DFS0488I STO COMMAND COMPLETED. DBN= BE3ORDER RC= 0
IMS3 DFS0488I STO COMMAND COMPLETED. DBN= BANKATMS RC= 0
IMS3 DFS0488I STO COMMAND COMPLETED. DBN= BANKTERM RC= 0
IMS3 DFS0488I STO COMMAND COMPLETED. DBN= BANKLDGR RC= 0
IMS3 DFS0488I STO COMMAND COMPLETED. DBN= BE3ORDER RC= 0
```

OM API 入力:

CMD (STO DB BANKATMS BANKTERM BANKLDGR BE3ORDER)

OM API 出力:

```
<?xml version="1.0"?>
<!DOCTYPE imsout SYSTEM "imsout.dtd">
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.1.0</omvsn>
<xmlvsn>1 </xmlvsn>
<statime>2002.197 22:05:21.270547</statime>
<stotime>2002.197 22:05:21.307712</stotime>
<staseq>B7EFC16AF6B13F26</staseq>
<stoseq>B7EFC16AFFC40D8C</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10150521</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>SYS3 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>STO </verb>
<kwd>DB </kwd>
<input>STO DB BANKATMS BANKTERM BANKLDGR BE3ORDER </input>
</cmd>
<msgdata>
<mbr name="SYS3 ">
<msg>DFS0488I STO COMMAND COMPLETED. DBN= BANKATMS RC= 0</msg>
<msg>DFS0488I STO COMMAND COMPLETED. DBN= BANKTERM RC= 0</msg>
<msg>DFS0488I STO COMMAND COMPLETED. DBN= BANKLDGR RC= 0</msg>
<msg>DFS0488I STO COMMAND COMPLETED. DBN= BE3ORDER RC= 0</msg>
</mbr>
<mbr name="IMS3 ">
<msg>DFS0488I STO COMMAND COMPLETED. DBN= BANKATMS RC= 0</msg>
<msg>DFS0488I STO COMMAND COMPLETED. DBN= BANKTERM RC= 0</msg>
<msg>DFS0488I STO COMMAND COMPLETED. DBN= BANKLDGR RC= 0</msg>
<msg>DFS0488I STO COMMAND COMPLETED. DBN= BE3ORDER RC= 0</msg>
</mbr>
</msgdata>
</imsout>
```

説明: STOP コマンドが、OM から 2 つのアクティブな IMS システム (SYS3 および IMS3) に経路指定されます。この両方の IMS システムからの応答は、OM に戻されます。データベース BANKATMS、BANKTERM、BANKLDGR、および BE3ORDER は、両方の IMS システムで停止されます。

関連概念:

➡ データベース、DEDB エリア、およびトランザクションに対するグローバル情報の保守 (システム管理)

関連資料:

1114 ページの『UPDATE DB コマンド』

関連情報:

➡ DFS2838I (メッセージおよびコード)

/STOP DC コマンド

/STOP DC コマンドは、ユーザーが VTAM にログオンすることを禁止して、ACB がクローズされることを知らせる DFS2111I メッセージを IMS が出す前に、すべての VTAM ノード・セッションが終了するようにします。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『使用上の注意』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 313. /STOP DC コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
DC	X		X

構文

➡ `/STOP DC` ————— ➡
 └──/STO──┘

使用上の注意

XRF 用に MNPS が使用されている場合は、2 つの ACB があります。MNPS と共に XRF を使用している場合は、APPLID ACB と MNPS ACB の両方がクローズされます。XRF を使用していないか、MNPS なしで XRF を使用している場合は、ACB は 1 つ、つまり、クローズされる VTAM ACB のみです。APPLID ACB は VTAM ACB と同じです。

/STOP DC コマンドは、/CLSDST NODE または /STOP NODE のそれぞれのコマンドの前後のいずれかで使用できます。唯一異なる点は /STOP DC が入力されない場合は、依然としてログオンを行えることです。ただし、VTAM ACB (APPLID および MNPS) がオープンしていないか、または VTAM ノードがアクティブなままになっている場合は、このコマンドは処理を開始したり、完了したりすることはできません。ノードがアクティブな場合、/CLSDST NODE または

/STOP NODE のいずれかのコマンドを出して、そのノードをクローズしなければなりません。場合によっては、/IDLE NODE コマンドを出して、接続されたままになっている任意のノードに対して OS VTAM VARY コマンドを出すことができます。

/STOP DESC コマンド

/STOP DESC コマンドは、DFS62DTx PROCLIB メンバーから IMS へ LU62 記述子を定義します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』

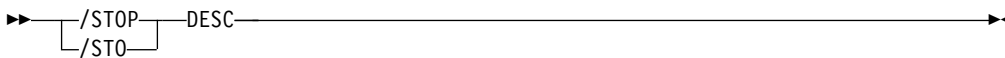
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 314. /STOP DESC コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
DESC	X		X

構文



/STOP LINE コマンド

/STOP LINE コマンドは、回線に対するメッセージ・キューイングを停止し、回線を介するメッセージの送受信を停止します。ただし、その回線が停止およびアイドル状態になっていなければ、回線は停止されたものとは見なされません。
/DISPLAY LINE を使って回線の状況を検査します。

サブセクション:

- 『環境』
- 963 ページの『構文』
- 963 ページの『使用上の注意』
- 963 ページの『例』

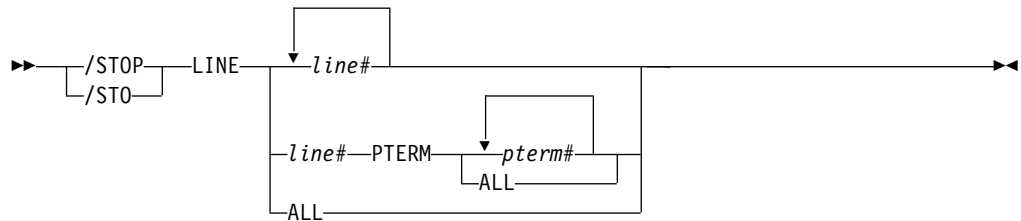
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 315. /STOP LINE コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
LINE	X		X
PTERM	X		X

構文



使用上の注意

/STOP LINE PTERM コマンドは、このコマンドが出された後は、指定された回線に割り当てられた端末のうち、指定されたどの端末からの入力メッセージも IMS に受け取られないようにします。

/STOP LINE コマンドは、事前設定モード、テスト・モード、応答モード、lock PTERM、lock LTERM、pstop LTERM および purge LTERM の状況は重要ではないため、/START LINE または再始動の後までは保持されないので、これらの状況をリセットします。

例

以下に示すのは /STOP LINE コマンドの例です。

例 1

入力 ET:

```
/STOP LINE 4,5,6,7,8,9,10,11
```

応答 ET:

```
DFS058I STOP COMMAND COMPLETED
```

応答 RT:

```
DFS059I TERMINAL STOPPED
```

説明: 回線 4、5、6、7、8、9、10、11 とこれらに関連する物理端末が停止されます。

例 2

入力 ET:

```
/STOP LINE 4 8 900
```

応答 ET:

DFS058I STOP COMMAND COMPLETED EXCEPT LINE 900

応答 RT:

DFS059I TERMINAL STOPPED

説明: 回線 4 と 8 およびこれに関連する物理端末が停止されます。900 は無効な回線番号です。

例 3

入力 ET:

/STOP LINE 4 PTERM 1, 2

応答 ET:

DFS058I STOP COMMAND COMPLETED

応答 RT:

DFS059I TERMINAL STOPPED

説明: 回線 4 の物理端末 1 と 2 が停止されます。

/STOP LTERM コマンド

/STOP LTERM コマンドは、停止される LTERM を指定します。QLOCKED 状態にある論理端末に対して出された /STOP LTERM コマンドは、QLOCK 状態をリセットせず、LTERM を STOPPED あるいは QLOCKED 状態にします。

サブセクション:

- 『環境』
- 965 ページの『構文』
- 965 ページの『使用上の注意』
- 965 ページの『例』

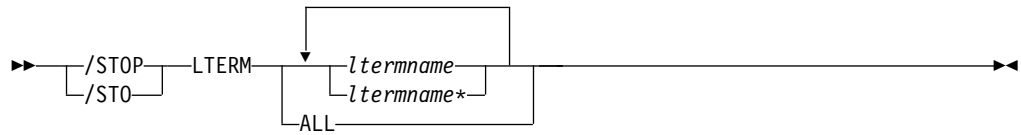
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 316. /STOP LTERM コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
LTERM	X		X

構文



使用上の注意

IMS が内部で QLOCK の状態をリセットすると、LTERM は STOPPED 状態のままです。(QLOCK は、LTERM がロックされているため、セッションで特定の要求が受信されてこの状態がリセットされるまでは、これ以上出力を送信できず、また、同じ LTERM に対する追加の出力を作成する可能性のある入力を受信することはできないことを示します。)

/STOP LTERM コマンドは、リモート論理端末ではリジェクトされます。

LTERM パラメーターは、総称パラメーターが既存の LTERM を指定する場合に総称になれます。

コマンドで特定の LTERM 名が指定された場合、IMS は、それが存在せず、ETO が使用可能であれば、LTERM を作成します。

グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持されている場合、/STOP LTERM コマンドは、IMSplex 内の任意の場所にある LTERM に向けたメッセージのキューイングを停止させます。また、変更は、Resource Manager およびローカル IMS システムの両方で反映されます。

例

以下の式は、/STOP LTERM コマンドの例です。

入力 ET:

```
/STOP LTERM APPLE, TREE, FRUIT
```

応答 ET:

```
DFS058I STOP COMMAND COMPLETED
```

応答 RT:

```
DFS059I TERMINAL STOPPED
```

説明: 論理端末 APPLE、TREE、と FRUIT が停止されます。

/STOP LUNAME コマンド

/STOP LUNAME コマンドは、停止される特定の LU 名を指定します。

サブセクション:

- 966 ページの『環境』
- 966 ページの『構文』

- 『使用上の注意』

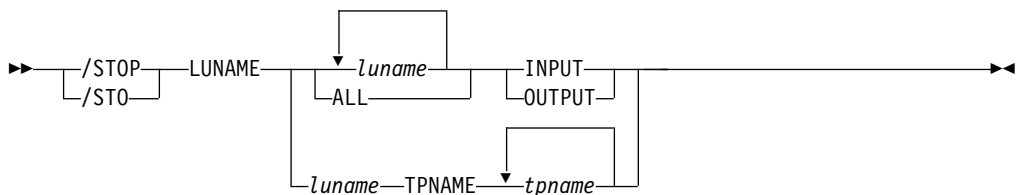
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 317. /STOP LUNAME コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
INPUT	X		X
LUNAME	X		X
OUTPUT	X		X

構文



使用上の注意

INPUT キーワードを LUNAME キーワードと共に指定すると、LU 名のすべての入力および同期アウトバウンド・アクティビティーが停止されます。INPUT を使ってパラメーター ALL を指定すると、これ以後、LU 6.2 入力と同期アウトバウンド・アクティビティーも停止されます。

OUTPUT キーワードを LUNAME キーワードと共に指定すると、LU 名のすべての非同期アウトバウンド・アクティビティーが停止されます。OUTPUT を使ってパラメーター ALL を指定すると、これ以後、LU 6.2 非同期アウトバウンド・アクティビティーも停止されます。


INPUT も OUTPUT も指定しないことは、INPUT と OUTPUT の両方を指定することと同じです。LU 名は、いずれの入力についても停止され、さらに同期および非同期の両方のアウトバウンド・アクティビティーについても停止されます。このときに、パラメーター ALL を指定すると、将来の LU 6.2 インバウンド・アクティビティー、同期アウトバウンド・アクティビティー、非同期アウトバウンド・アクティビティーはすべて停止されます。

ネットワーク修飾 LU 名は、LUNAME キーワードではオプションです。LU 名がネットワーク修飾でなく、TP 名が指定されていない場合、指定した LU 名と一致するすべてのネットワーク修飾 LU 名も停止されます。

/STOP LUNAME TPNAME コマンドは、指定した LU 名の特定の TP 名を停止します。OUTPUT キーワードは、このコマンドのデフォルトです。

指定されたリソースが存在しない場合、1 つの構造がその状況を保持するために作成されます。

関連資料:

 [コマンド・キーワードとその同義語 \(コマンド\)](#)

/STOP MADSIOT コマンド

/STOP MADSIOT コマンドは、MADS I/O タイミングが使用可能な環境で、ユーザーが MADS I/O タイミング機能を使用不可にすることを可能にします。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『使用上の注意』

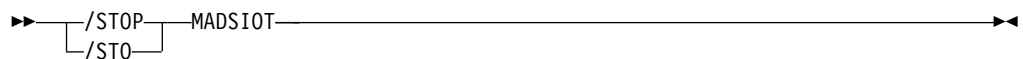
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 318. /STOP MADSIOT コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
MADSIOT	X	X	

構文



使用上の注意

/STOP MADSIOT が正常に完了すると、オペレーターのコンソールに以下のメッセージが戻されます。

```
DFS12761 MADS I/O TIMING FUNCTION STOPPED SUCCESSFULLY
```

/START MADSIOT は、MADS I/O タイミング機能を再開することを可能にします。

MADS I/O タイミング・リスト構造が DFSVSM_{xx} に定義されていなければ、コマンドはリジェクトされます。MADS I/O タイミング機能が既に使用不可にされている場合は、コマンドは無視されます。MADS I/O タイミング機能が使用可能になっており、すべての共用パートナーがカップリング・ファシリティ上での MADS I/O タイミング・リスト構造から正常に切断されている場合は、コマンドは正常に完了します。共用パートナーが MADS I/O タイミング・リスト構造との切断に失敗すると、コマンドも失敗します。

/STOP MADSIOT コマンド出力は、このコマンドが OM API を介して入力されると変わります。この場合、DFS058I メッセージは OM に戻されません。OM に戻されるコマンド応答には、必要に応じて、以下のメッセージのうちの 1 つ以上が含まれます。

高速機能メッセージ: DFS0023I、DFS0008I、 DFS1271I、 DFS1276I、 DFS1275E、DFS1219E

/STOP MSNAME コマンド

/STOP MSNAME コマンドは、会話を継続中の端末を除き、端末からのすべてのメッセージ (基本要求) の送信を停止します。この中には、MSNAME の SYSID をもつリモート・トランザクション向けと、この MSNAME に関連するリモート論理端末向けのすべてのメッセージが含まれます。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『例』

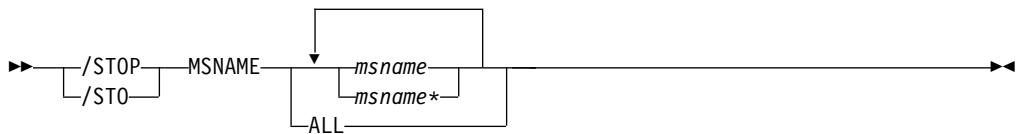
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 319. /STOP MSNAME コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
MSNAME	X		X

構文



例

以下の式は、/STOP MSNAME コマンドの例です。

入力 ET:

/STOP MSNAME BOSTON

応答 ET:

DFS058I STOP COMMAND COMPLETED

説明: 名前 BOSTON に関連する論理リンク・パスが停止されます。

関連資料:

1302 ページの『UPDATE MSNAME コマンド』

/STOP NODE command

/STOP NODE コマンドは、停止してログオフされる VTAM ノードを指定します。USER キーワードが指定されず、既存のノードに適用される場合、NODE パラメーターは総称になれます。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『使用上の注意』
- 971 ページの『例』

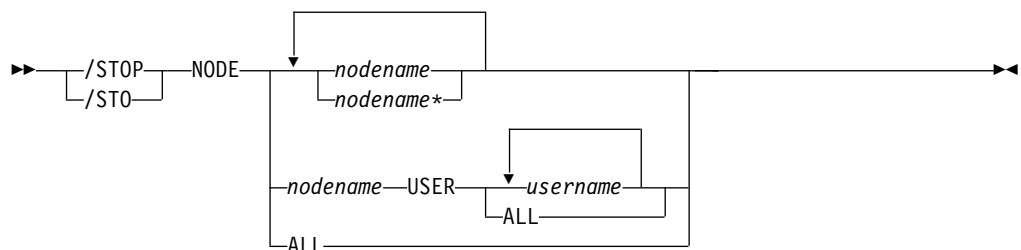
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 320. /STOP NODE コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
NODE	X		X
USER	X		X

構文



使用上の注意

/STOP NODE コマンドは、これ以後、/START NODE コマンドが出されるまでログオンを阻止します。

USER キーワードの指定されていない /STOP NODE は、まだ存在していないノードをサポートします。動的ノードがログオンするのを阻止するノードを作成し停止します。USER キーワードの指定されていない /STOP NODE は、指定されたノードのハーフセッションすべてに影響を与えます。

/STOP NODE USER は、ISC、非 ISC、およびユーザーに有効です。ただし、ユーザーは、依然としてノードに割り振られるか、またはサインオンされている必要

があります。ISC ノードに対する /STOP NODE USER は、NODE nodename の USER username 内に定義されている、指定されたハーフセッションを停止します。

NODE および **USER** パラメーターを一緒に使用する場合の制約事項:

- 次のような場合にのみ、NODE USER キーワードの対を使用したコマンドは有効です。
 - USER が NODE にサインオンされています。
 - ISC 環境で、USER を NODE に割り振られています。
 - ノードおよびユーザーは既に存在しています。
- /STOP NODE USER コマンドは、ISC および非 ISC のノードおよびユーザーに対して有効です。

/STOP NODE は、事前設定モード、テスト・モード、ロック・ノード、lock lterm、pstop lterm、および purge lterm をリセットします。これらの状況は重要ではなく、したがってログオンまたは再始動の後までは保持されないからです。高速機能入力応答モードの場合、モードがリセットされる前に、/START NODE コマンドも発行する必要があります。/STOP NODE コマンドは、ノードのリカバリ一設定に応じて他のアクションも行います。

RCVYSTSN=NO

/STOP NODE は、セッション状況を「コールド」に設定することによって、FINANCE ノードおよび SLUP ノードに対する /CHANGE NODE COLDSESS コマンドと同様の働きをします。/STOP NODE はまた、シャットダウンを開始し、指定されたノードに対してユーザーの割り振り解除をすることによって、ISC (LU6.1) ノードに対する /QUIESCE NODE コマンドのような働きをします。このアクションにより、セッション状況は「コールド」に変わります。/STOP NODE コマンドがこれらのアクションを取ることで、このノードに対する次のセッション開始要求で、セッションのコールド・スタート (/START NODE コマンドの入力後) が再試行できるようになります。

RCVYCONV=NO

/STOP NODE により、IMS 会話 (アクティブおよび保留中) はいずれも終了します。キューに入っている、あるいは処理中の会話型メッセージは、出力応答メッセージを非同期に送信します。

RCVYFP=NO

/STOP NODE により、高速機能状況およびメッセージが破棄されます。

RCVYRESP=NO

/STOP NODE は、全機能応答モードをリセットします。

グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持される場合、/STOP NODE コマンドはノードにグローバル停止状況を設定し、ノードが IMSplex のどこにもログオンしないようにします。グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持されない場合、ETO 環境にノードが存在しなければ、/STOP NODE はノードを作成し、ローカル・ノードに停止状況を設定します。非 ETO 環境にノードが存在しない場合は、/STOP NODE コマンドはリジェクトされます。

例

以下の式は、/STOP NODE コマンドの例です。

入力 ET:

```
/STOP NODE HARRY
```

応答 ET:

```
DFS058I STOP COMMAND COMPLETED
```

説明: ノード HARRY に関連する物理端末が切断されて (/CLSDST)、それ以後のログオンが阻止されます。

/STOP OLDS コマンド

/STOP OLDS コマンドは、IMS が OLDS ログ・データ・セットの使用を停止することを示します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 972 ページの『使用上の注意』
- 972 ページの『例』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 321. /STOP OLDS コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
OLDS	X	X	X

構文

```
▶▶ [ /STOP ] OLDS—olds# ▶▶  
    [ /STO ]
```

キーワード

以下のキーワードは、/STOP OLDS コマンドに有効です。

olds#

JCL または DFSMDA マクロで定義され、現在開始されている OLDS を識別します。olds# は 00 から 99 でなければなりません。

使用上の注意

停止した OLDS は、動的バックアウトのためにアクセスできなくなった時に、動的に割り振り解除されます。

二重モードの場合、基本 OLDS と 2 次 OLDS の両方が停止されます。使用可能な OLDS データ・セットが 2 つしかない場合、あるいは指定した OLDS を現在出力のために使っている場合は、 /STOP OLDS コマンドはリジェクトされます。

例

以下の式は、 /STOP OLDS コマンドの例です。

入力 ET:

```
/STOP OLDS 09
```

応答 ET:

```
DFS058I STOP COMMAND IN PROGRESS
DFS2500I DATASET DFSOLP09 SUCCESSFULLY DEALLOCATED
DFS3257I OLDS DEALLOCATED ON DFSOLP09
```

説明: 対象の OLDS、DFSOLP09 (DFSOLS09) が停止されます。

/STOP OTMA コマンド

/STOP OTMA コマンドは、IMS を IMS Open Transaction Manager Access (OTMA) の z/OS システム間カップリング・ファシリティ (XCF) グループから離します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 973 ページの『使用上の注意』
- 973 ページの『例』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 322. /STOP OTMA コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
OTMA	X		X

構文

▶▶ — /STOP — OTMA —————▶▶
 └── /STO ─┘

使用上の注意

/STOP OTMA コマンド処理は次のとおりです。

1. IMS は XCF グループを離れます。
2. ACK メッセージを待つ IMS OTMA 出力の場合、IMS はメッセージを打ち切ります。「コミット後送信」のトランザクションでは、出力はトランザクション・パイプにエンキューされたままになります。「送信後コミット」のトランザクションでは、IMS はトランザクションを打ち切ります。

/STOP OTMA コマンドが発行されると、すべてのトランザクション・パイプのすべての ICAL メッセージがクリアまたはリジェクトされます。ただし、/STOP OTMA コマンドは、同期プログラム間通信のための DFSYICAL tmember の処理を停止しません。同期プログラム間通信要求のための待ち状態をクリアするには、/PSTOP コマンドまたは /STOP REGIN ABDUMP コマンドを使用します。

例

以下の式は、/STOP OTMA コマンドの例です。

入力 ET:

```
/STO OTMA
```

応答 ET:

```
DFS2361I 14:02:05 XCF GROUP CLOSED SUCCESSFULLY. SYS3  
DFS058I 14:02:06 STOP COMMAND COMPLETED SYS3  
DFS996I *IMS READY* SYS3
```

/STOP PGM コマンド

/STOP PGM コマンドは、停止されるアプリケーション・プログラムを指定します。

サブセクション:

- 『環境』
- 974 ページの『構文』
- 974 ページの『使用上の注意』
- 974 ページの『同等の IMS タイプ 2 コマンド』
- 974 ページの『例』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 323. /STOP PGM コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
PGM	X	X	X

構文



使用上の注意

/STOP PGM コマンドは、CPI Communications ドリブン・トランザクション・プログラムは停止しません。

NOTINIT-57-REPOCHGLIST 理由コードで「不良」のマークが付けられたプログラムには、/STOP PGM コマンドは許可されません。これは、そのプログラムの IMS 変更リスト処理が完了していないか、変更リスト処理が失敗したためです。

同等の IMS タイプ 2 コマンド

以下の表は、各種の /STOP PGM コマンドと、類似の機能を実行する IMS タイプ 2 コマンドを示しています。

表 324. /STOP PGM コマンドと同等のタイプ 2 コマンド

タスク	/STOP PGM コマンド	類似の IMS タイプ 2 コマンド
プログラムのスケジューリングを停止する。	/STOP PGM <i>pgmname</i>	UPDATE PGM NAME(<i>pgmname</i>) STOP(SCHD)

例

以下の式は、/STOP PGM コマンドの例です。

入力 ET:

```
/STOP PROGRAM APPLETRE
```

応答 ET:

```
DFS058I STOP COMMAND COMPLETED
```

説明: アプリケーション・プログラムの APPLETRE が停止されます。

関連資料:

1355 ページの『UPDATE PGM コマンド』

/STOP REGION コマンド

/STOP REGION コマンドは、IMS 領域、アプリケーション・プログラム、あるいはこの両方を停止するために使用します。/STOP REGION は XRF 代替システムにミラーリングされません。代替システムにこのコマンドの影響を与えたい場合、代替システムでこのコマンドを入力しなければなりません。

サブセクション:

- 975 ページの『環境』
- 975 ページの『構文』

- 『キーワード』
- 977 ページの『例』

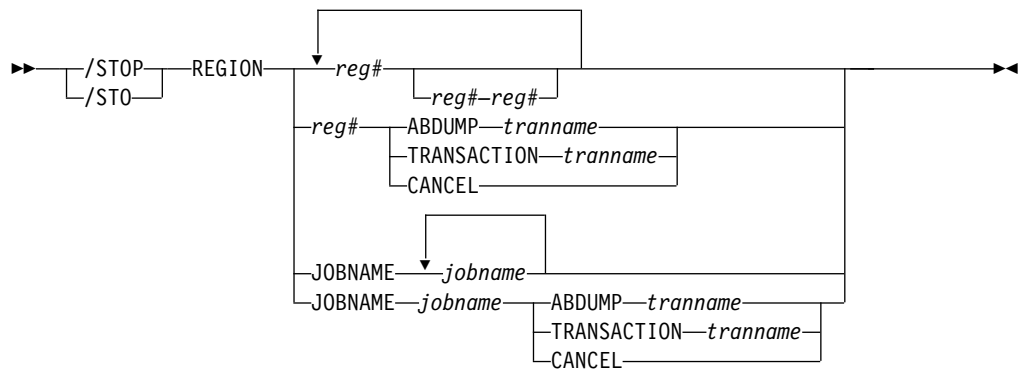
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 325. /STOP REGION コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
ABDUMP	X	X	X
CANCEL	X	X	X
JOBNAME	X	X	X
REGION	X	X	X
TRANSACTION	X		X

構文



キーワード

以下のキーワードは、/STOP REGION コマンドに有効です。

REGION reg#

現在のトランザクション処理の終了時に、1 つ以上のメッセージ処理領域を終了させるために使用されます。領域の ID は `reg#` です。

また、/STOP REGION `reg#` は、高速機能領域を終了するためにも使用することができます。/STOP REGION `reg#` は、バッチ領域の終了には使用できません。

高速機能ユーティリティ領域は、ユーティリティの次のシステム・チェックポイントで終了します。

REGION reg#-reg#

現在のトランザクション処理の終了時に、メッセージ処理領域を終了させるために使用されます。

REGION reg# ABDUMP tranname

アプリケーション・プログラムの異常終了を引き起こします。

領域 ID は *reg#* であり、トランザクション・コードは *tranname* です。

tranname で示されるトランザクションが REGION *reg#* で現在実行中の場合、アプリケーション・プログラムの異常終了を知らせるエラー・メッセージがマスター端末で受け取られます。領域はアクティブのままですが、トランザクションは停止されます。トランザクションが領域 *reg#* に現在スケジュールされていない場合は、このコマンドは無視されます。

/STOP REGION *reg#* ABDUMP は、ループ状態か、または待ち状態にあると見える領域に対してのみ使用してください。このコマンドが領域で実行中のアプリケーションを異常終了させない場合には、/STOP REGION *reg#* CANCEL コマンドを使用することができます。これによって、並列 DL/I を使用している場合は、制御領域が異常終了 113 で終了する場合があります。その他の警告については、/STOP REGION *reg#* CANCEL を参照してください。

メッセージ処理領域がアクティブと見えていても、その領域がシステム内でアクティブでなくなっている (一般的にファントム領域と呼ばれる) ために /CHECKPOINT コマンドが IMS をシャットダウンできない場合、/STOP REGION *reg#* ABDUMP コマンドを使用してこの状況を訂正できます。この場合、/STOP REGION *reg#* ABDUMP コマンドはその領域がもはやアクティブではないことを検出して、存在しない領域の内部 IMS 項目を消去し、シャットダウン処理が正常に進行できるようにします。

メッセージ処理領域で壊滅的な障害が発生して異常終了した場合に、/DISPLAY ACTIVE REGION がその領域がまだ IMS に定義されていることを示している場合、/STOP REGION *reg#* ABDUMP コマンドを使用してその状況を訂正できます。この場合、/STOP REGION *reg#* ABDUMP コマンドはその領域がもはやアクティブでないことを検出し、存在しない領域の内部 IMS 項目を消去します。

tranname 変数は、バッチ、IFP、高速機能ユーティリティー領域では無効です。

REGION reg# TRANSACTION tranname

指定した領域内での入力待ち (WFI) モードにあるメッセージ処理プログラムの処理を停止させます。

領域 ID は *reg#* であり、トランザクション・コードは *tranname* です。

tranname で示されるトランザクションが現在領域 *reg#* で実行中の場合、アプリケーション・プログラム (MPP) に QC 状況コード (これ以上メッセージがない) が戻されたことを示す IMS メッセージ DFS0569I をマスター端末で受け取ります。アプリケーションが入っている領域はアクティブであり、トランザクションは停止されていません。WFI モードにあるバッチ・メッセージ処理プログラムは、/PSTOP コマンドを使って停止しなければなりません。

入力待ちトランザクション (WFI) に対してスケジュールされたバッチ・メッセージ処理領域 (BMP) は /PSTOP REGION、/DBD、/DBR、または /STA のそれぞれのコマンドだけに対応する QC 状況コード (これ以上のメッセージなし) を戻します。

REGION reg# CANCEL

/STOP REGION ABDUMP コマンドで領域を停止することができない場合に使用されます。また、このコマンドの前に /STOP REGION ABDUMP コマンドがなければなりません。

領域の ID は reg# です。

並列 DL/I が使用されている場合に /STOP REGION CANCEL コマンドを使用すると、IMS 制御領域がユーザー異常終了 113 により終了することがあります。z/OS CANCEL コマンドはリジェクトされます。

REGION JOBNAME

ジョブ名で停止される領域を示します。このジョブ名は 1 から 8 文字の英数字か国別文字 (\$、#、@) でなければなりません。ジョブ名の先頭文字は英字または国別文字のいずれかでなければなりません。

例

以下に示すのは /STOP REGION コマンドの例です。

/STOP REGION コマンドの例 1

入力 ET:

```
/DISPLAY A
```

応答 ET:

```
REGID JOBNAME  TYPE  TRAN/STEP PROGRAM  STATUS          CLASS
      2 MPP      TP    TXCDRN24  DDLTRN24          1, 2
      1 BMP      BMP   BMP      BMP255
      3 IFPN     FPM   NO MSG.  DDLTJN26
      DBR1CT13  DBRC
VTAM ACB CLOSED
LINE ACTIVE-IN - 1 ACTIV-OUT - 0
NODE ACTIVE-IN - 0 ACTIV-OUT - 0
LINK ACTIVE-IN - 0 ACTIV-OUT - 0
*89041/142004*
```

説明: 高速機能メッセージ・ドリブン領域 3 には、現在処理するメッセージはありません。

入力 ET:

```
/STOP REG 3
```

応答 ET:

```
DFS058I STOP COMMAND IN PROGRESS
```

入力 ET:

```
/DISPLAY A
```

応答 ET:

```
REGID JOBNAME  TYPE  TRAN/STEP PROGRAM  STATUS          CLASS
      2 MPP      TP    TXCDRN24  DDLTRN24          1, 2
      1 BMP      BMP   BMP      BMP255
      FPRGN     FP    NONE
      DBR1CT13  DBRC
VTAM ACB CLOSED
```

```

LINE ACTIVE-IN - 1 ACTIV-OUT - 0
NODE ACTIVE-IN - 0 ACTIV-OUT - 0
LINK ACTIVE-IN - 0 ACTIV-OUT - 0
*89041/142102*

```

説明: 高速機能領域 3 が停止されました。領域 3 がメッセージの処理中であった場合、IMS はトランザクションが完了してから領域を終了させます。

/STOP REGION コマンドの例 2

入力 ET:

/DISPLAY A

応答 ET:

```

REGID JOBNAME  TYPE  TRAN/STEP PROGRAM  STATUS          CLASS
      2 MPP      TP    TXCDRN24  DDLTRN24
      1 BMP      BMP   BMP       BMP255
      FPRGN     FP    NONE
      DBR1CT13 DBRC
VTAM ACB CLOSED
LINE ACTIVE-IN - 1 ACTIV-OUT - 0
NODE ACTIVE-IN - 0 ACTIV-OUT - 0
LINK ACTIVE-IN - 0 ACTIV-OUT - 0
*89041/142102*

```

入力 ET:

/STOP REG 1

応答 ET:

```

DFS058I STOP COMMAND IN PROGRESS
DFS0557I STOP REGION ID NOT VALID- REGION 0001 IS BMP.

```

説明: /STOP REGION (キーワードなし) は、バッチ領域には無効です。

/STOP REGION コマンドの例 3

入力 ET:

/DISPLAY A

応答 ET:

```

REGID JOBNAME  TYPE  TRAN/STEP PROGRAM  STATUS          CLASS
      2 MPP      TP    TXCDRN24  DDLTRN24
      1 BMP      BMP   BMP       BMP255
      3 FPU      FPU   IFP       DBF#FPU0
      DBR1CT13 DBRC
VTAM ACB CLOSED
LINE ACTIVE-IN - 1 ACTIV-OUT - 0
NODE ACTIVE-IN - 0 ACTIV-OUT - 0
LINK ACTIVE-IN - 0 ACTIV-OUT - 0
*89041/142453*

```

入力 ET:

/STOP REG 3

応答 ET:

```

DFS058I STOP COMMAND IN PROGRESS

```

入力 ET:

/DISPLAY A

応答 ET:

```
REGID JOBNAME  TYPE  TRAN/STEP PROGRAM  STATUS          CLASS
      2 MPP      TP    TXCDRN24  DDLTRN24          1,  2
      1 BMP      BMP    BMP      BMP255
          FPRGN   FP    NONE
          DBR1CT13 DBRC
VTAM ACB CLOSED
LINE ACTIVE-IN - 1 ACTIV-OUT - 0
NODE ACTIVE-IN - 0 ACTIV-OUT - 0
LINK ACTIVE-IN - 0 ACTIV-OUT - 0
*89041/142758*
```

説明: 高速機能ユーティリティー領域 3 が停止されました。高速機能ユーティリティー DBF#FPU0 は、次のシステム・チェックポイントで終了されました。

/STOP REGION コマンドの例 4

入力 ET:

/DISPLAY A

応答 ET:

```
REGID JOBNAME  TYPE  TRAN/STEP PROGRAM  STATUS          CLASS
      2 MPP      TP    TXCDRN24  DDLTRN24          1,  2
      1 BMP      BMP    BMP      BMP255
          FPRGN   FP    NONE   SYS3
VTAM ACB CLOSED
LINE ACTIVE-IN - 1 ACTIV-OUT - 0
NODE ACTIVE-IN - 0 ACTIV-OUT - 0
LINK ACTIVE-IN - 0 ACTIV-OUT - 0
*89041/142758*
```

説明: 領域 2 のトランザクション TXCDRN24 は、ループに入っているか、または待ち状態にあります。

入力 ET:

/STOP REG 2 ABDUMP TXCDRN24

応答 ET:

```
DFS058I STOP COMMAND IN PROGRESS
DFS555I TRAN TXCDRN24 ABEND S000,U0474 SYS ID 220 MSG IN PROGRESS
```

説明: アプリケーション・プログラムは、U0474 ABEND で終了されました。この異常終了は、ユーザー要求 (/STOP REGION ABDUMP) に応えて終了したことを示します。

入力 ET:

/DISPLAY A

応答 ET:

```
REGID JOBNAME  TYPE  TRAN/STEP PROGRAM  STATUS          CLASS
      2 MPP      TP    WAITING
      1 BMP      BMP    BMP      BMP255
          FPRGN   FP    NONE
```

```

      DBR1CT13 DBRC
VTAM ACB CLOSED
LINE ACTIVE-IN - 1 ACTIV-OUT - 0
NODE ACTIVE-IN - 0 ACTIV-OUT - 0
LINK ACTIVE-IN - 0 ACTIV-OUT - 0
*89041/143420*

```

説明: アプリケーションが終了されましたが、領域はアクティブなままです。

入力 ET:

```
/DISPLAY PROG DDLTRN24
```

応答 ET:

```

PROGRAM  TRAN      TYPE
DDLTRN24 TXCDRN24  TP
*90340/143749*

```

説明: プログラムは停止されていません。

入力 ET:

```
/DISPLAY TRANSACTION TXCDRN24
```

応答 ET:

```

      TRAN  CLS ENQCT  QCT  LCT  PLCT CP NP LP SEGSZ SEGNO PARLM RC
TXCDRN24  2    1    0 65535 65535  1  1  1    0    0    0  0
PSBNAME: DDLTRN24
STATUS: STOP
*90340/143802*

```

説明: トランザクションは停止されました。

/STOP REGION コマンドの例 5

入力 ET:

```
/DISPLAY A
```

応答 ET:

```

REGID JOBNAME  TYPE  TRAN/STEP PROGRAM  STATUS  CLASS
      2 MPP      TP   WAITING                1,  2
      1 BMP      BMP   BMP      BMP255
      3 FPU      FPU   IFP      DBP#FPU0
      DBR1CT13 DBRC
VTAM ACB CLOSED
LINE ACTIVE-IN - 1 ACTIV-OUT - 0
NODE ACTIVE-IN - 0 ACTIV-OUT - 0
LINK ACTIVE-IN - 0 ACTIV-OUT - 0
*89041/144248*

```

入力 ET:

```
/STOP REG 3 ABDUMP
```

応答 ET:

```
DFS058I STOP COMMAND IN PROGRESS
```

説明: /STOP REGION ABDUMP コマンドで高速機能ユーティリティを終了させる時は、トランザクション・コードは入力しません。

/STOP REGION コマンドの例 6

入力 ET:

/DISPLAY A

応答 ET:

```
REGID JOBNAME  TYPE  TRAN/STEP PROGRAM  STATUS          CLASS
      2 MPP      TP    TXCDRN24  DDLTRN24 WAIT-INPUT      1, 2
      1 BMP      BMP   BMP       BMP255
      FPRGN     FP    NONE
      DBR1CT13 DBRC
VTAM ACB CLOSED
LINE ACTIVE-IN - 1 ACTIV-OUT - 0
NODE ACTIVE-IN - 0 ACTIV-OUT - 0
LINE ACTIVE-IN - 0 ACTIV-OUT - 0
*89041/150141*
```

説明: メッセージ処理プログラム DDLTRN24 は入力メッセージを待っています。

入力 ET:

/STOP REGION 2 TRANSACTION TXCDRN24

応答 ET:

```
DFS058I STOP COMMAND IN PROGRESS
DFS0569I PSTOP OR STOP COMPLETE FOR REGION0002 TRAN TXCDRN24.
```

説明: WFI アプリケーション・プログラム DDLTRN24 に QC 状況コードが戻されました。

入力 ET:

/DISPLAY A

応答 ET:

```
REGID JOBNAME  TYPE  TRAN/STEP PROGRAM  STATUS          CLASS
      2 MPP      TP    WAITING
      1 BMP      BMP   BMP       BMP255
      FPRGN     FP    NONE
      DBR1CT13 DBRC
VTAM ACB CLOSED
LINE ACTIVE-IN - 1 ACTIV-OUT - 0
NODE ACTIVE-IN - 0 ACTIV-OUT - 0
LINK ACTIVE-IN - 0 ACTIV-OUT - 0
*89041/150206*
```

説明: WFI アプリケーションが終了されましたが、領域はアクティブなままです。

入力 ET:

/DISPLAY TRANSACTION TXCDRN24

応答 ET:

```
TRAN  CLS ENQCT  QCT  LCT  PLCT CP NP LP SEGSZ SEGNO PARLM RC
TXCDRN24  2  4  0 65535 65535 1 1 1 0 0 0 0
PSBNAME: DDLTRN24
*90340/150219*
```

説明: トランザクションは停止されていません。

/STOP REGION コマンドの例 7

入力 ET:

```
/DISPLAY A
```

応答 ET:

```
REGID JOBNAME  TYPE  TRAN/STEP PROGRAM  STATUS          CLASS
      2 MPP      TP    TXCDRN24  DDLTRN24 WAIT-INPUT      1, 2
      1 BMP      BMP    BMP      BMP255
      FPRGN     FP    NONE
      DBR1CT13  DBRC
VTAM ACB CLOSED
LINE ACTIVE-IN - 1 ACTIV-OUT - 0
NODE ACTIVE-IN - 0 ACTIV-OUT - 0
LINK ACTIVE-IN - 0 ACTIV-OUT - 0
*89041/150813*
```

入力 ET:

```
/STOP REGION 2 TRANSACTION TRAN255
```

応答 ET:

```
DFS058I STOP COMMAND IN PROGRESS
DFS0558I TRAN TRAN255 NOT SCHEDULED
```

説明: TRAN255 は IMS システムの有効なトランザクションですが、現在、領域 2 にはスケジュールされていません。TRAN255 が IMS に有効なトランザクションでなかった場合は、メッセージ DFS230I (TRAN SPECIFIED WITH ABDUMP OR TRAN KEYWORD IS NOT VALID) だけが出されたはずです。

/STOP REGION コマンドの例 8

入力 ET:

```
D A,L
```

応答 ET:

```
JOBS    M/S    TS USERS    SYSAS    INITS    ACTIVE/MAX VTAM    OAS
00001   00010   00001      00019    00020    00001/00020    00000
LLA     LLA     LLA     NSW S  VLF     VLF     VLF     NSW S
JES2    JES2    IEFPROC  NSW S  RMF     RMF     IEFPROC  NSW S
IMSVTAM IMSVTAM IEFPROC  NSW S  TSO     TSO     STEP1    NSW S
CQS     CQS     IEFPROC  NSW S  IMSECTA9 IMSECTA9 IEFPROC  NSW S
DLIECTA9 DLIECTA9 DLISAS   NSW S  DBRECTA9 DBRECTA9 DBRC     NSW S
MPP610C MPP     MPP     NSW J
USRT001 OWT
```

説明: MPP610C は IMS メッセージ処理領域です。

入力 ET:

```
/STOP REGION JOBNAME MPP610C
```

応答 ET:

```
DFS058I STOP COMMAND IN PROGRESS
DFS552I MESSAGE REGION MPP610C STOPPED ID=00001 TIME=1616 SYSX

SMF000I MPP610C MPP DFSRRC00 0000
$HASP395 MPP610C ENDED
```

関連資料:

988 ページの『/STOP THREAD コマンド』

/STOP RTC コマンド

/STOP RTC コマンドは、この宛先コードに関連するトランザクションを処理しないように指定するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『使用上の注意』
- 『同等の IMS タイプ 2 コマンド』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 326. /STOP RTC コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
RTC	X		X

構文



使用上の注意

NOTINIT-07-REPOCHGLIST 理由コードで「不良」のマークが付けられた宛先コードには、/STOP RTC コマンドは許可されません。これは、その宛先コードの IMS 変更リスト処理が完了していないか、変更リスト処理が失敗したためです。

同等の IMS タイプ 2 コマンド

以下の表は、各種の /STOP RTC コマンドと、類似の機能を実行する IMS タイプ 2 コマンドを示しています。

表 327. /STOP RTC コマンドと同等のタイプ 2 コマンド

タスク	/STOP RTC コマンド	類似の IMS タイプ 2 コマンド
高速機能宛先コードへのキューイングを停止する。	/STOP RTC <i>rtcname</i>	UPDATE RTC NAME(<i>rtcname</i>) STOP(Q)

関連資料:

1410 ページの『UPDATE RTC コマンド』

/STOP SB コマンド

/STOP SB コマンドは、順次バッファリングの使用をこれ以降許可しないために使
用します。/STOP SB は、このコマンドを出す前にスケジュールされた順次バッフ
ァリング・アプリケーションには影響を与えません。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『例』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境
(DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 328. /STOP SB コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
SB	X	X	

構文

▶▶ `/STOP SB` ◀◀
 └──┬──┘
 /STO

例

以下の式は、/STOP SB コマンドの例です。

入力 ET:

```
/STOP SB
```

応答 ET:

```
DFS058 STOP COMMAND COMPLETED
```

入力 ET:

```
/DISPLAY POOL DBAS
```

応答 ET:

```
SEQUENTIAL BUFFERING: STATUS = STOPPED  
MAX      N.A.  FREE  N.A.  CURR   0K  HIGH  320K  
DATABASE BUFFER POOL: SIZE  67584  
REQ1     0 REQ2   0 READ   0 BISAM   0 WRITES   0  
KEYC     0 LCYL   0 PURG   0 OWNRR   0 ERRORS 00/00  
DATABASE BUFFER POOL: BSIZE 12288  
RRBA     0 RKEY   0 BFALT   0 NREC   0 SYN PTS   0  
NMBUFS  29 VRDS   0 FOUND   0 VWTS   0 ERRORS 00/00  
DATABASE BUFFER POOL: BSIZE 356352  
RRBA     0 RKEY   0 BFALT   0 NREC   0 SYN PTS   0  
NMBUFS  29 VRDS   0 FOUND   0 VWTS   0 ERRORS 00/00  
*90253/104547*
```

/STOP SLDSREAD コマンド

/STOP SLDSREAD コマンドは、IMS がシステム・ログ・データ・セット (SLDS) と OLDS の両方から、または OLDS からのみ、レコードの検索が可能であるかどうかを示します。デフォルトは、SLDSREAD が使用可能であることです。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『使用上の注意』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 329. /STOP SLDSREAD コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
SLDSREAD	X	X	X

構文

▶▶ `/STOP SLDSREAD` ◀◀
 └──┬──┘
 └──┘
 /STO

使用上の注意

SLDSREAD プロセスがアクティブの場合、/STOP SLDSREAD コマンドを発行すると、U4095 症状ダンプが取られ、SLDSREAD 処理が停止されます。この異常終了は致命的ではなく、IMS は引き続き正常に機能します。アクティブであったバックアウト・プロセスは、バッチ・バックアウト・ユーティリティーを使用して手動でバックアウトする必要があります。

SLDSREAD プロセスがアクティブでない場合、/STOP SLDSREAD コマンドを発行すると、バックアウト処理のために SLDS が必要な場合に、SLDSREAD プロセスが開始されるのを防止します。バッチ・バックアウト・ユーティリティーを使用して、障害が起きたアプリケーション・プログラムをバックアウトします。

/STOP SUBSYS コマンド

/STOP SUBSYS コマンドは、接続を終了する外部サブシステムの名前を指定するために使用します。

サブセクション:

- 986 ページの『環境』
- 986 ページの『構文』
- 986 ページの『使用上の注意』

- 『例』

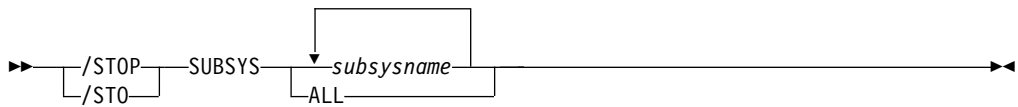
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 330. /STOP SUBSYS コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
SUBSYS	X	X	X

構文



使用上の注意

/STOP SUBSYS コマンドを使うと、現在外部リソースにアクセスしているアプリケーション・プログラムが通常どおりに終了できます。そのようなアプリケーションが終了すると、サブシステム接続も終了します。接続が実際に終了する前に、アプリケーションはすべてのメッセージ処理を完了しなければなりません。外部サブシステム呼び出しの次の発生では、接続が使用不能であることを示すゼロ以外の戻りコードを受け取ります。次に、接続を再確立するために /START コマンドが必要になります。

/STOP SUBSYS コマンドは、既存のサブシステム定義を動的に再構成するためにも使用することができます。オペレーターは、/STOP SUBSYS コマンドを出し、PROCLIB メンバーに変更を加えるか、または追加を行ってから /START SUBSYS コマンドを出します。IMS は、PROCLIB メンバーに定義したサブシステムとの接続を試みます。

/STOP SUBSYS コマンドが処理された後で、システム障害が起きた場合は、停止状況が設定されたままになります。

例

以下に示すのは /STOP SUBSYS コマンドの例です。

例 1

入力 ET:

```
/STOP SUBSYS ALL
```

応答 ET:

```
DFS058I STOP COMMAND IN PROGRESS
```

説明: IMS は、接続の終了を開始しました。すべての従属領域が接続を終了すると、IMS は終了を完了します。この時、接続の終了を知らせる外部サブシステム・メッセージが送られる可能性があります。

例 2

入力 ET:

```
/STOP SUBSYS XXX1 XXX3
```

応答 ET:

```
DFS058I STOP COMMAND IN PROGRESS
```

説明: IMS は、接続の終了を開始しました。すべての従属領域が接続を終了すると、IMS は終了を完了します。この時、接続の終了を知らせる外部サブシステム・メッセージが送られる可能性があります。

/STOP SURV コマンド

/STOP SURV コマンドは、XRF 環境で IMS 監視機能の操作を停止するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』

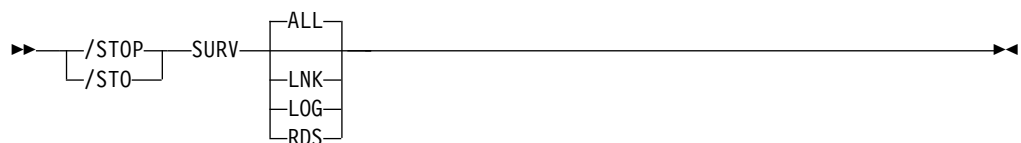
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 331. /STOP SURV コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
SURV	X		X

構文



キーワード

以下のキーワードは、/STOP SURV コマンドに有効です。

ALL

指定する LNK、LOG、および RDS と同じ。これはデフォルトです。

LNK

ISC リンク。

LOG

システム・ログ

RDS

再始動データ・セット。

/STOP THREAD コマンド

/STOP THREAD コマンドは、非アクティブの CCTL スレッドを停止するために使用します。DEDB ユーティリティ領域は、次のシステム・チェックポイントで終了します。

サブセクション:

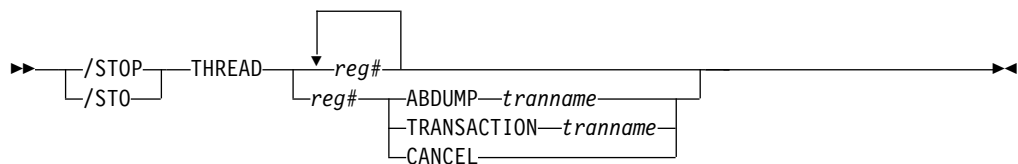
- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 989 ページの『使用上の注意』
- 989 ページの『例』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 332. /STOP THREAD コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
ABDUMP	X	X	X
CANCEL	X	X	X
THREAD	X		X
TRANSACTION	X		X

構文**キーワード**

/STOP THREAD コマンドに対して有効なキーワードについては、/STOP REGION コマンドのものと同一キーワードについての説明を参照してください。

使用上の注意

/STOP THREAD コマンドは、次のものには無効です。

- アクティブ CCTL スレッド
- BMP

THREAD ABDUMP コマンドは、BMP と DEDB ユーティリティーを異常終了させます。CCTL スレッドでこのコマンドを使うと、U0474 異常終了が起こります。

例

以下に示すのは /STOP THREAD コマンドの例です。

例 1

入力 ET:

```
/DISPLAY A REGION
```

応答 ET:

REGID	JOBNAME	TYPE	TRAN/STEP	PROGRAM	STATUS	CLASS
	BATCHREG	BMP	NONE			
	FPRGN	FP	NONE			
2	CICS1A	DBT	IEFPROC	BMP255	ACTIVE	
3	CICS1A	DBT	IEFPROC	PLVAPZ12	ACTIVE	
1	CICS1A	DBT	IEPROC		AVAILABLE	
	DBRCHTA1	DBRC				
	DLICHTA1	DLS				

00082/142907

入力 ET:

```
/STOP THREAD 2
```

応答 ET:

```
DFS058I STOP COMMAND IN PROGRESS  
DFS0556I COMMAND REJECTED; DBCTL THREAD IS ACTIVE
```

例 2

入力 ET:

```
/DISPLAY A REGION
```

応答 ET:

REGID	JOBNAME	TYPE	TRAN/STEP	PROGRAM	STATUS	CLASS
	BATCHREG	BMP	NONE			
	FPRGN	FP	NONE			
2	CICS1A	DBT	IEFPROC	BMP255	ACTIVE	
3	CICS1A	DBT	IEFPROC	PLVAPZ12	ACTIVE	
1	CICS1A	DBT	IEFPROC		AVAILABLE	
	DBRCHTA1	DBRC				
	DLICHTA1	DLS				

00082/143027

入力 ET:

```
/STOP THREAD 1
```

応答 ET:

DFS058I STOP COMMAND IN PROGRESS

入力 ET:

/DISPLAY A REGION

応答 ET:

REGID	JOBNAME	TYPE	TRAN/STEP	PROGRAM	STATUS	CLASS
	BATCHREG	BMP	NONE			
	FPRGN	FP	NONE			
2	CICS1A	DBT	IEFPROC	BMP255	ACTIVE	
3	CICS1A	DBT	IEFPROC	PLVAPZ12	ACTIVE	
	DBRCHTA1	DBRC				
	DLICHTA1	DLS				

00082/143055

例 3

入力 ET:

/DISPLAY A REGION

応答 ET:

REGID	JOBNAME	TYPE	TRAN/STEP	PROGRAM	STATUS	CLASS
	BATCHREG	BMP	NONE			
	FPRGN	FP	NONE			
2	CICS1A	DBT	IEFPROC	BMP255	ACTIVE	
3	CICS1A	DBT	IEFPROC	PLVAPZ12	ACTIVE	
	DBRCHTA1	DBRC				
	DLICHTA1	DLS				

00082/144731

入力 ET:

/STOP THREAD 2 ABDUMP

応答 ET:

DFS058I STOP COMMAND IN PROGRESS

応答 ET:

DFS554A CICS1A 00002 IEFPROC BMP255 (3) 000,0474 20
/082 14:49:11 RTKN= CICS1 B3C81CB789F4BE83

入力 ET:

/DISPLAY A REGION

応答 ET:

REGID	JOBNAME	TYPE	TRAN/STEP	PROGRAM	STATUS	CLASS
	BATCHREG	BMP	NONE			
	FPRGN	FP	NONE			
3	CICS1A	DBT	IEFPROC	PLVAPZ12	ACTIVE	
	DBRCHTA1	DBRC				
	DLICHTA1	DLS				

00082/145038

関連資料:

974 ページの『/STOP REGION コマンド』

/STOP TMEM コマンド

/STOP TMEM コマンドは、IMS が OTMA クライアントに Open Transaction Manager Access (OTMA) コマンドを送信し、指定されたトランザクション・パイプ名の入力を中断するように要求するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 992 ページの『使用上の注意』
- 992 ページの『例』

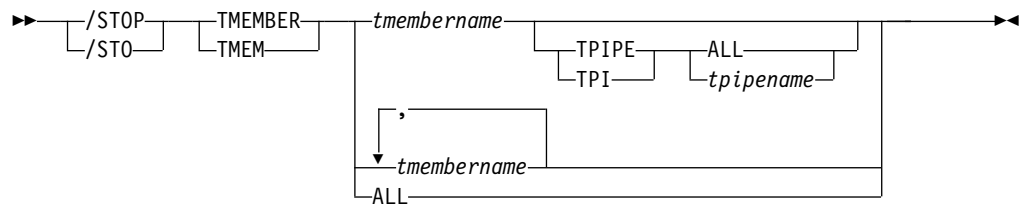
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 333. /STOP TMEM コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
TMEM	X		X
TPIPE	X		X

構文



キーワード

以下のキーワードは、/STOP TMEM コマンドに有効です。

TPIPE

/STOP コマンドと一緒に TPIPE を使用すると、IMS が OTMA クライアントに対して OTMA コマンドを送信して、指定したトランザクション・パイプへの入力を中断するように要求します。その後、IMS は OTMA クライアントへの出力の送信を停止します。指定されたメンバーがスーパーメンバーである場合は、そのスーパーメンバーのトランザクション・パイプの出力が中断されますが、OTMA コマンドは送信されません。指定されたメンバーが、保留キュー出力をスーパーメンバーによって管理されている通常メンバーである場合は、IMS は指定されたメンバーのトランザクション・パイプからの出力を中断し、さらにそのスーパーメンバーのトランザクション・パイプからの出力も中断します。OTMA コマンドがその通常メンバーの OTMA クライアントに送られます。出

力は、コマンドを処理する IMS でのみ中断されます。通常メンバーのトランザクション・パイプとスーパーメンバーのトランザクション・パイプの両方で出力を中断できない場合は、どちらのトランザクション・パイプでも出力は中断されません。その出力を中断できなかった通常メンバーの名前が含まれている DFS058I COMMAND COMPLETED EXCEPT メッセージが出されます。

IMS は、/STOP TMEMBER TPIPE コマンドの処理中に、停止状況の一時トランザクション・パイプを作成します (まだ存在しない場合)。IMS は、トランザクション・パイプに対する最初のメッセージを送信または受信する時に、そのトランザクション・パイプの同期状況を設定します。

/STOP TMEMBER TPIPE コマンドの処理中に、OTMA はその T パイプを使用しているメッセージの待ち状況 (WAIT_A、WAIT_H、WAIT_R、および WAIT-SYNCPOINT) を検査します。待ち状況が検出された場合は、OTMA は内部 NAK メッセージを生成してその待ち状況をクリアします。送信後コミット (CM1) 応答用 NAK メッセージの場合は、当該トランザクションの U0119 疑似異常終了を引き起こします。しかし、コミット後送信 (CM0) 応答用 NAK メッセージの場合は、応答が T パイプ・キューに戻されます。T パイプ・キュー内のメッセージは、後であらためて検索することができます。

/STOP TMEMBER xxx TPIPE ALL コマンドの発行後に新しく作成された T パイプは、入力も出力も停止されません。

/STOP TMEMBER xxx TPIPE xxx コマンドは、tmember が存在しない場合、一時 T パイプを作成しません (DFS058I STOP COMMAND COMPLETED EXCEPT TPIPE xxx が出されます)。

使用上の注意

任意の数の個別 tmember またはすべての tmember を停止できます。次に、IMS は OTMA クライアントへの出力の送信を停止し、出力がクライアントへ送信されるのを阻止します。

/STOP TMEM TPIPE コマンドが発行されると、そのトランザクション・パイプのすべてのメッセージの待ち状態がクリアされます。

/STOP TMEM コマンドを DFSYICAL OTMA メンバーに対して発行すると、同期プログラム切り替え処理を停止することができます。DFSYICAL tmember が停止された後は、同期プログラム切り替えを開始するために行われる後続の DL/ICAL 呼び出しはすべてリジェクトされます。要求側アプリケーションは、AIB 戻りコード X'00000100' とともに理由コード X'00000110' および拡張理由コード X'00000005' を受け取ります。

例

以下の式は、/STOP TMEM コマンドの例です。

入力 ET:

```
/STO TMEMBER CLIENT1 TPIPE TPIPESY
```

応答 ET:

```
DFS058I 15:38:03 STOP COMMAND COMPLETED   SYS3  
DFS996I *IMS READY*   SYS3
```

/STOP TRAN コマンド

/STOP TRAN コマンドは、トランザクションまたはトランザクションのクラス向けのメッセージのキューイングとスケジューリングを停止するために、あるいはクラス別にトランザクションのスケジューリングを停止するために使用します。ただし、出力はアプリケーション・プログラムから出たものであれば、依然としてキューに入れられます。

/STOP TRAN コマンドは、トランザクションのスケジューリングを停止します。ただし、そのトランザクションの処理は、限界カウントに達するまで続行されません。限界カウントが大きい場合は、処理インターバルが長くなります。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『使用上の注意』
- 994 ページの『同等の IMS タイプ 2 コマンド』
- 994 ページの『例』

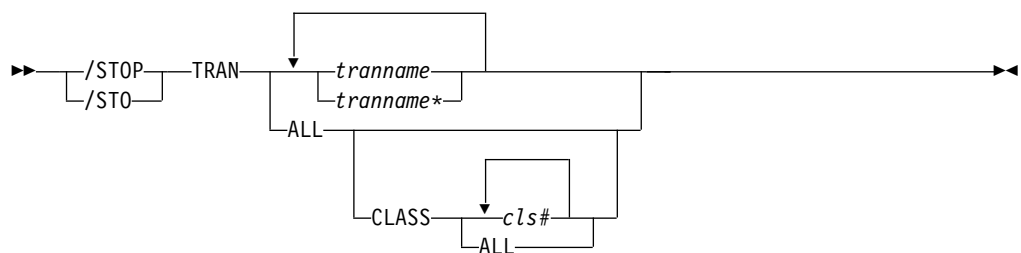
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 334. /STOP TRAN コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
CLASS	X		X
TRAN	X		X

構文



使用上の注意

コマンドが入力された時点で、領域が既にスケジュールされ、次のメッセージを待っている (入力待ちモード) 場合、QC 状況コード (これ以上のメッセージなし) をアプリケーション (MPP) に戻します。その領域で処理すべきメッセージがなくなった場合、領域は次のメッセージを待つことが許されません。代わりに、アプリケーション (MPP) に QC 状況が戻されます。

入力待ちトランザクション (WFI) に対してスケジュールされたバッチ・メッセージ処理領域 (BMP) は /PSTOP REGION、/DBD、/DBR、または /STA のそれぞれのコマンドだけに対応する QC 状況コード (これ以上のメッセージなし) を戻します。

共用キュー環境で、その IMS サブシステム上で定義されていないトランザクションに対して /STOP TRAN コマンドを発行した場合、その宛先が有効なトランザクションであることを出力作成ユーザー出口ルーチンが示していれば、IMS は SMB を作成します。この SMB は「動的」というマークが付けられます。

/STOP TRAN コマンドで作成された動的 SMB を使用できるのは、トランザクションに対するメッセージをキューに入れる場合と、メッセージを共用キューに入れる場合だけです。トランザクションをスケジュールしたり、割り当てたりすることはできません。IMS は、トランザクションのチェックポイントの処理は行いますが、それらの状況が有効でない場合は、それ以降の IMS 再始動まで保管することはありません。

共用キュー環境では、/STOP TRAN コマンドの結果として、IMS はそのトランザクションに対するインタレストを登録解除することになります。これは、そのトランザクションはその IMS ではスケジュールできないことを示します。

NOTINIT-15-REPOCHGLIST 理由コードで「不良」のマークが付けられたトランザクションには、/STOP TRAN コマンドは許可されません。これは、そのトランザクションの IMS 変更リスト処理が完了していないか、変更リスト処理が失敗したためです。

同等の IMS タイプ 2 コマンド

以下の表は、各種の /STOP TRAN コマンドと、類似の機能を実行する IMS タイプ 2 コマンドを示しています。

表 335. /STOP TRAN コマンドと同等のタイプ 2 コマンド

タスク	/STOP TRAN コマンド	類似の IMS タイプ 2 コマンド
あるトランザクション宛のメッセージのキューイングとスケジューリングを停止する。	/STOP TRAN <i>trannname</i>	UPDATE TRAN NAME(<i>trannname</i>) STOP(Q,SCHD)

例

以下に示すのは /STOP TRAN コマンドの例です。

/STOP TRAN コマンドの例 1

入力 ET:

```
/STOP TRANSACTION ALL CLASS 6
```

応答 ET:

```
DFS058I STOP COMMAND COMPLETED
```

説明: クラス 6 に関連する全トランザクションは、停止のマークが付けられ、クラス 6 のトランザクションはすべてスケジュールできなくなります。クラス 6 のト

ランザクションを現在処理中のすべてのメッセージ処理領域は、処理限界カウントに達するか、または入力キューにメッセージがなくなるまで実行することが許されます。

/STOP TRAN コマンドの例 2

入力 ET:

```
/STOP TRANSACTION PIT, SEED
```

応答 ET:

```
DFS058I STOP COMMAND COMPLETED
```

説明: トランザクション・コードの PIT と SEED が停止されます。

関連資料:

1429 ページの『UPDATE TRAN コマンド』

/STOP USER command

/STOP USER コマンドは、ISC ユーザーの停止、またはサインオンしたユーザーの停止とサインオフを要求します。USER パラメーターは総称になることができ、既存のユーザーにのみ適用されます。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 996 ページの『使用上の注意』
- 996 ページの『例』

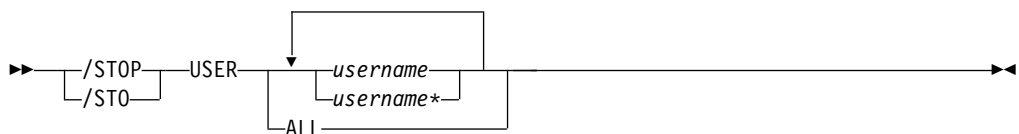
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 336. /STOP USER コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
USER	X		X

構文



使用上の注意

ISC ユーザーの場合、/STOP USER コマンドは、/START USER コマンドが出されるまでは割り振りに使用できないようにすべき ISC ユーザーを指定します。

サインオンされたユーザーの場合は、/STOP USER コマンドでは、/START USER コマンドが発行されるまでの間これ以上のサインオンを阻止するユーザー構造を指定します。

/STOP USER は、まだ存在していないユーザーをサポートします。動的ユーザーがサインオンするのを阻止するユーザーを作成し停止します。

関連ノードがアクティブでない場合、あるいは関連ノードがセッション中でない場合、/STOP USER によってユーザーがサインオフされることはありません。

ETO ユーザー・セッション用の /STOP USER コマンドは、事前設定モード、テスト・モード、lock LTERM、pstop LTERM、および purge LTERM といった、重要ではない状況をリセットします。高速機能入力応答モードの場合、モードがリセットされる前に、/START USER コマンドも発行する必要があります。

ETO ユーザー用の /STOP USER はまた、ユーザーのリカバリー設定に応じて、他のアクションも行います。

RCVYCONV=NO

/STOP USER により、ETO ユーザー用の IMS 会話 (アクティブおよび保留中) はいずれも終了します。キューに入っている、あるいは処理中の会話型メッセージは、出力応答メッセージを非同期に送信します。

RCVYFP=NO

/STOP USER により、高速機能状況および ETO ユーザーへのメッセージが破棄されます。

RCVYRESP=NO

/STOP USER は、全機能応答モードをリセットします。

グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持される場合、/STOP USER コマンドはユーザーにグローバル停止サインオン状況を設定し、ユーザーが IMSplex のどこでもサインオンしないようにします。グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持されない場合、ETO 環境にユーザーが存在しなければ、/STOP USER はユーザーを作成し、ローカル・ユーザーに停止状況を設定します。非 ETO 環境にユーザーが存在しない場合は、/STOP USER コマンドはリジェクトされます。

例

以下の式は、/STOP USER コマンドの例です。

入力 ET:

```
/DISPLAY USER IMS*
```

応答 ET:


```

USER      ENQCT DEQCT   QCT   SYS3
IMSUS06      0     0     0 ALLOC(DTSLU602)
IMSUS04      0     0     0 ALLOC(DTSLU603)
IMSUS03      0     0     0 ALLOC(DTSLU601)
IMSUS02      0     0     0 ALLOC(DTSLU202)
IMSUS01      0     0     0 ALLOC(DTSLU201)
IMSUS09     N/A   N/A   N/A ALLOC(ENDS02 ) STATIC
IMSUS08     N/A   N/A   N/A ALLOC(ENDS01 ) STATIC
IMSUS11     N/A   N/A   N/A ALLOC(ENDS03 ) STATIC
IMSUS10     N/A   N/A   N/A ALLOC(OMSSLU2A) STATIC
*91091/111454*

```

入力 ET:

```
/STOP USER IMSUS01 IMSUS02
```

応答 ET:

```
DFS058I 11:16:24 STOP COMMAND COMPLETED
```

入力 ET:

```
/STOP USER HELLO%
```

応答 ET:

```
DFS3633 11:18:25 GENERIC PARAMETER RESOURCES NOT FOUND, NO ACTION TAKEN
```

入力 ET:

```
/DISPLAY USER IMSUS01 IMSUS02
```

応答 ET:

```

USER      ENQCT DEQCT   QCT
IMSUS01      0     0     0 STOPPED
IMSUS02      0     0     0 STOPPED
*91091/111727*

```

/STOP VGR コマンド

/STOP VGR コマンドは、IMS サブシステムを汎用リソース・グループからドロップアウトさせるために使用します。このコマンドは、VTAM ACB がクローズしている (通常は、/STOP DC コマンドが出された結果) 場合は、リジェクトされません。

サブセクション:

- 『環境』
- 998 ページの『構文』
- 998 ページの『使用上の注意』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

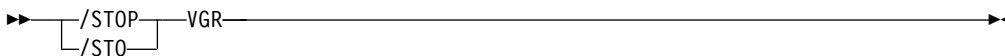
表 337. /STOP VGR コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X

表 337. /STOP VGR コマンドおよびキーワードの有効環境 (続き)

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
VGR	X		X

構文



使用上の注意

このコマンドは、VTAM が汎用リソース名を使用して、新規セッションを IMS サブシステムに経路指定しないようにしますが、既存のセッションはこの影響を受けず、類似性はそのままです (通常の処理によって終了するまで)。

/STOP WADS コマンド

/STOP WADS コマンドは、使用可能な WADS のプールから WADS を除去することを示すために使用します。IMS は、アクティブな WADS (WADS モードが単式の場合) またはアクティブな WADS の対 (WADS モードが複式の場合) は停止しません。wads# は 0 から 9 でなければなりません。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』

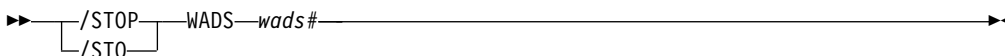
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 338. /STOP WADS コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/STOP	X	X	X
WADS	X	X	X

構文



第 24 章 /SWITCH コマンド

/SWITCH コマンドは、アクティブ・データ・セットを切り替えるため、あるいはアクティブ・システムと代替システムの間で変更するために使用します。上記の構文図のフォーマットに示すように、キーワードの特定の組み合わせが、アクティブ・システムまたは代替システムでのみ有効です。

このコマンドは、バッチ SPOC ユーティリティーを使用する IMSplex に対して発行できます。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 1000 ページの『キーワード』
- 1001 ページの『例』

環境

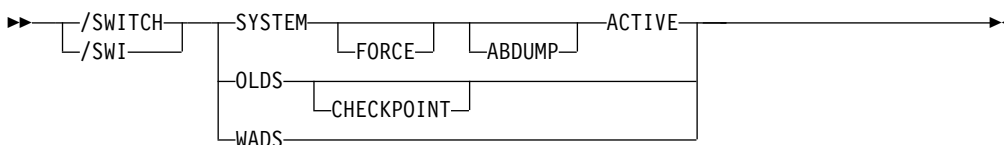
以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 339. /SWITCH コマンドおよびキーワードの有効環境

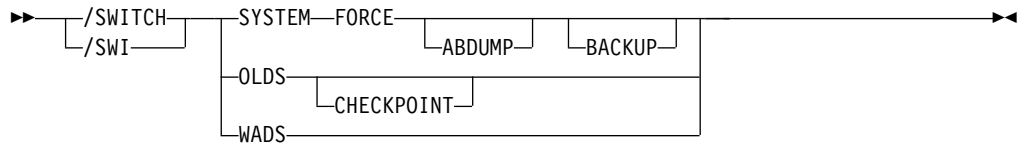
コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/SWITCH	X	X	X
ABDUMP	X		X
ACTIVE	X		X
BACKUP	X		X
CHECKPOINT	X	X	X
FORCE	X		X
OLDS	X	X	X
SYSTEM	X		X
WADS	X	X	X

構文

アクティブ *XRF* サブシステム用の /SWITCH



代替 *XRF* サブシステムの /SWITCH



キーワード

以下のキーワードは、/SWITCH コマンドに有効です。

SYSTEM

XRF 環境の現在のアクティブ・システムから、代替システムによるテークオーバーを要求します。

FORCE キーワードのない /SWITCH SYSTEM を使うと、アクティブ・システムは、代替システムがアクティブになる前に、安全に静止しようと試みます。現在進行中のシステム・アクティビティーは完了することが許されます。新規のアクティビティーは、キューに入れられます。これによって、監視機能がアクティブ・システムで使用不可にされますが、代替システムでは使用不可にされません。したがって、アクティブなシステムが最終的に静止しない場合でも、結局は監視機能 (使用可能の場合) がテークオーバーを引き起こさせます。

オプションの FORCE キーワードを指定しない場合、このコマンドはアクティブ・システムに入力する時のみ作動します。

FORCE

アクティブ・システムを即時に終了させ、強制的に代替システムをアクティブにします。

ABDUMP

アクティブ・システムかまたは代替システムのいずれかから入力された場合、アクティブ・システムの診断ダンプがとられます。(代替システムがアクティブ・システムと同じプロセッサ上にある場合。)

ACTIVE、BACKUP

コマンドを入力するシステムを示します。コマンドをアクティブ・システムに入力する時は、キーワード ACTIVE が必要です。コマンドを代替システムに入力する時は、キーワード BACKUP はオプションです。ACTIVE キーワードのない /SWITCH SYSTEM FORCE は、代替システムでのみ入力できます。これは、間違っただけで代替システムであるものと見なされて、新規に作成したアクティブ・システムが不注意のため異常終了することを防止します。

OLDS、CHECKPOINT

アクティブなログ・データ・セットの切り替えに使用します。このログ切り替え機能は、/DBDUMP と /DBRECOVERY で提供されるものと同じです。アクティブ・ログ・データ・セットが次の OLDS に切り替えられた後、単純チェックポイントを取るために CHECKPOINT キーワードを指定することができます。/SWITCH OLDS CHECKPOINT コマンドは、すべて IMS 環境で作動します。

WADS

アクティブな先行書き込みログ・データ・セットの切り替えに使用します。

WADS に対して重複ロギングを使用している場合は、このコマンドを出すと、IMS は、次に使用可能な WADS の対を使用します。

使用可能な未使用の WADS がない場合、あるいは重複ロギングについては使用可能な未使用の WADS の対がない場合、このコマンドはリジェクトされます。

例

以下に示すのは /SWITCH コマンドの例です。

/SWITCH コマンドの例 1

入力 ET:

```
/SWITCH OLDS
```

応答 ET:

```
DFS3257I ONLINE LOG NOW SWITCHED  
DFS058I 17:10:51 SWITCH COMMAND COMPLETED
```

入力 ET:

```
/SWITCH OLDS CHECKPOINT
```

応答 ET:

```
DFS3257I ONLINE LOG NOW SWITCHED - FROM DFSOLP01 TO DFSOLP02  
DFS058I 17:12:53 SWITCH COMMAND COMPLETED  
  
DFS2719I MSDB CHECKPOINT WRITTEN TO MSDBCP2  
DFS994I *CHKPT 91057/171254**SIMPLE*  
DFS3499I ACTIVE DDNAMES: MODBLKSA IMSACBA FORMATA MODSTAT ID: 1  
DFS3804I LATEST RESTART CHKPT: 91057/132000, LATEST BUILDQ CHKPT:  
91057/132414
```

/SWITCH コマンドの例 2

入力 ET (アクティブ・システム IMSA のマスター端末):

```
/SWITCH SYSTEM FORCE
```

応答 ET:

/SWITCH SYSTEM FORCE コマンドの場合、応答メッセージは戻されません。アクティブ・システムのマスター端末へのこれ以降の入力は禁止されます。

応答 RT (アクティブ・システム IMSA の z/OS コンソール):

アクティブ・システムの z/OS コンソールには、IMSA について進行中のユーザー 0604 異常終了が表示されます。 /SWITCH コマンドに ABDUMP キーワードが組み込まれていると、0604 異常終了を伴って、アクティブ・システム診断ダンプがとられます。

応答 RT (代替システム IMSB のマスター端末):

以下の図は、代替システムのテークオーバーの開始に関連する一部のメッセージを示した画面です。

```

02/05/15 15:28:27 RSENAME: DFSRSENM BACKUP TAKEOVER IN PROGRESS IMSB
DFS3890I 15:27:18 TAKEOVER REQUESTED
DFS970I 15:28:05 UNEXPECTED STATUS ,NODE APPLA ,USER N/A ,SEND ,RC
=14,FDB2=13,NSECIT =29,SENSE=00000000,REASON=00
DFS3257I ONLINE LOG CLOSED ON DFSOLP00
DFS3891I 15:28:18 TAKEOVER IN PROGRESS

DFS2591I NO MSDB HEADERS FOUND, IMAGE COPY LOAD IGNORED
DFS3839I 14:26:46 XRF INITIAL DB PRE-OPEN COMPLETE.
DFS3838I 14:28:41 XRF INITIAL DC PRE-OPEN COMPLETE.

```

PASSWORD:

図 1. テークオーバー開始時の代替システム

中間の画面は示してありません。中間の画面には、次のようなテークオーバー機能が示されます。

- 従属領域の処理の使用可能化
- IRLM のテークオーバー
- バックアウト処理
- 中断キューのドレーン
- セッションの切り替え

以下の図は、テークオーバーの完了を示す画面です。

```

02/05/15 15:30:59 RSENAME: DFSRSENM ACTIVE AWAITING I/O PREVENTION IMSB
DFS994I *CHKPT 85135/152931**SIMPLE**
DFS3499I ACTIVE DDNAMES: MODBLKSA IMSACBA FORMATA MODSTAT ID: 11
DFS3804I LAST CHKPT ID VALID FOR RESTART: 85135/152931-BUILDQ: 85135/142629

DFS994I TAKEOVER COMPLETED.
DFS3859I 15:29:19 PRIORITY 4 SESSIONS SWITCHED.
DFS3860I 15:29:19 ALL TERMINAL SESSIONS SWITCHED.


```

PASSWORD:

図 2. テークオーバー後に新規に作成されたアクティブ・システム

テークオーバーは完了し、代替システムがアクティブ・システムになっています。XRF 環境状況表示行は、新規に作成したアクティブ・システムが、入出力許容モードで実行している (入出力防止を待っている) ことを示しています。

関連概念:

 XRF プロセスのテークオーバー・フェーズ (システム管理)

第 25 章 TERMINATE コマンド

TERMINATE コマンドは、グローバル・オンライン変更を終了するために、または進行中の 1 つ以上の HALDB OLR を停止するために使用します。

- 『TERMINATE OLC コマンド』
- 1017 ページの『TERMINATE OLREORG コマンド』

TERMINATE OLC コマンド

RM サービス付き (RMENV=Y) で稼働している IMS コマンド・マスターが TERMINATE OLC (オンライン変更停止) コマンドを出した場合、このコマンドは、グローバル・オンライン変更を終了し、IMSplex 内のすべての IMS システムとの調整を行います。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『使用上の注意』
- 1007 ページの『TERMINATE OLC エラー処理』
- 1008 ページの『出力フィールド』
- 1009 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1015 ページの『例』

環境

以下の表には、TERMINATE OLC コマンドを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 340. TERMINATE OLC コマンドの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
TERMINATE OLC	x	x	x

構文

→ TERMINATE OLC →
 └───┬───┘
 TERM

使用上の注意

IMS が RM サービスなし (RMENV=N) で稼働している場合は、TERMINATE OLC コマンドは、その IMS についてのみオンライン変更を終了します。IMS システムが RM なしで稼働している場合は、各 IMS は、それぞれ、共用できない固有の OLCSTAT データ・セットをもっていなければなりません。OLCSTAT データ・セットに、オンライン変更を処理しているものとは異なる IMS の名前が含ま

れている場合は、その環境ではその OLCSTAT データ・セットは無効なので、TERMINATE OLC はリジェクトされます。どの IMS メンバー名が無効かを判別するには、QUERY OLC コマンドを出して、OLCSTAT データ・セットの内容を表示します。OLC ユーティリティ DFUOLC0 を使用して、データ・セットを訂正することができます。

RM サービスを使用せずにグローバル・オンライン変更に参加するそれぞれの IMS システムは、別々に TERMINATE OLC コマンドを出す必要があります。非 RM 環境では、TERMINATE OLC コマンドの経路リストに複数の IMS が指定されているか、デフォルトの Route All が指定されている場合、オンライン変更は IMS コマンド・マスターに対してのみ実行されます。どの IMS システムが RMENVNO によって定義されているかを判別するには、QUERY MEMBER SHOW(ATTRIB) コマンドを出します。

このコマンドは、OM API を介してのみ指定することができます。OM は TERMINATE OLC コマンドを IMSplex 内の IMS に送信します。

このコマンドは、バッチ SPOC ユーティリティを使用する IMSplex に対して発行できます。

TERMINATE OLC コマンドは、INITIATE OLC PHASE(PREPARE) コマンドによって開始される IMSplex 全体のグローバル・オンライン変更が INITIATE OLC PHASE(COMMIT) コマンドで正常にコミットされる前に、このオンライン変更を打ち切るために使用されます。

TERMINATE OLC コマンドを使用すると、OLCSTAT データ・セットの更新前に発生する INITIATE OLC PHASE(COMMIT) 障害の後に、オンライン変更を打ち切ることができます。コミット処理により OLCSTAT データ・セットが更新されると、オンライン変更は正常に完了したと見なされ、打ち切ることはできません。

グローバル・オンライン変更を打ち切る TERMINATE OLC コマンドは、グローバル・オンライン変更に参加している IMSplex 内のすべての IMS システムに適用されるという点を除いては、/MODIFY ABORT コマンドに類似しています。

TERMINATE OLC コマンドを使用して、進行中の INIT OLC TYPE(ACBMBR) コマンドを終了させることができます。更新されたメンバーがコミットされていない場合、TERM OLC コマンドは、アクティブな ACBLIB 内の新規バージョンの更新メンバーを削除します。TYPE(ACBLIB) に対する TERM OLC コマンドは、メンバー OLC が終了したことを示す X'7010' ログ・レコードを記録します。

ローカル・オンライン変更が使用可能な場合は、TERMINATE OLC コマンドはサポートされません。コマンドが送られた IMS がグローバル・オンライン変更をサポートしない場合、TERMINATE OLC コマンドはリジェクトされます。これが起こり、かつグローバル・オンライン変更をサポートする IMS が存在する場合、グローバル・オンライン変更をサポートする特定 IMS に対してコマンドを送る必要があります。

TERMINATE OLC コマンドは、XRF 代替および FDBR システム上では無効です。

OM コマンドのデフォルト・タイムアウト 300 秒 (5 分) は、オンライン変更フェーズが完了するには十分な時間ではない場合があります。インストール済み環境で

の必要性に基づいて、コマンドでタイムアウト値を指定することが必要な場合があります。タイムアウト値を変更するには、CSLOMCMD コマンド要求の TIMEOUT パラメーターを使用するか、あるいは TSO SPOC から TERMINATE OLC コマンドを発行するときに待機 (タイムアウト) 値を指定します。

このコマンドのコマンド構文は XML で定義され、OM と通信する自動化プログラムに対して使用可能です。

TERMINATE OLC エラー処理

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

TERMINATE OLC コマンドは、IMS システムをさまざまなオンライン変更状態のままにするというエラーを引き起こす可能性があります。エラーを訂正してください。 IMSplex 内のすべての IMS システムのオンライン変更状態を表示するには、QUERY MEMBER TYPE(IMS) SHOW(STATUS) コマンドを出します。 QUERY MEMBER TYPE(IMS) の出力を評価して、すべきことの決定に役立ててください。

- どの IMS システムもオンライン変更状態ではない

TERMINATE OLC コマンドは成功したか、あるいは適用されませんでした。これ以上は、アクションを行う必要はありません。

- 一部の IMS システムが準備完了状態にある

オンライン変更はコミットされません。 TERMINATE OLC を失敗させた問題を訂正してから、TERMINATE OLC コマンドを再試行してください。

オンライン変更状態にある IMS システムは、ユーザーがオンライン変更を打ち切るまで、オンライン変更状態のままです。

- すべての IMS システムが準備完了状態にある

オンライン変更はコミットされません。 TERMINATE OLC を失敗させた問題を訂正してから、TERMINATE OLC コマンドを再試行してください。

オンライン変更状態にある IMS システムは、ユーザーがオンライン変更を打ち切るまで、オンライン変更状態のままです。

- 一部の IMS システムが準備完了状態およびコミット・フェーズ 1 完了状態にある

マスターが OLCSTAT データ・セットを更新する前にコミット・フェーズが失敗したため、オンライン変更はコミットされません。 TERMINATE OLC を失敗させた問題を訂正し、TERMINATE OLC コマンドを再試行してください。

オンライン変更状態にある IMS システムは、ユーザーがオンライン変更を打ち切るまで、オンライン変更状態のままです。

- すべての IMS システムがコミット・フェーズ 1 完了状態にある

マスターが OLCSTAT データ・セットを更新する前にコミット・フェーズが失敗した場合、オンライン変更はコミットされません。 TERMINATE OLC を失敗させた問題を訂正し、TERMINATE OLC コマンドを再試行してください。

マスターが OLCSTAT データ・セットを更新した後にコミット・フェーズが失敗した場合、オンライン変更はコミットされます。TERMINATE OLC コマンドは許可されません。コミット・コマンドを失敗させた問題を訂正し、INITIATE OLC PHASE(COMMIT) を再試行する必要があります。

オンライン変更状態にある IMS システムは、ユーザーがオンライン変更を打ち切るかコミットするまで、オンライン変更状態のままです。

変更 ID によって OLCSTAT データ・セットが更新されたかどうかは、ユーザーが判別できます。QUERY OLC LIBRARY(OLCSTAT) SHOW(MODID) コマンドを出してください。戻された変更 ID が、INITIATE OLC PHASE(COMMIT) コマンドの前に出された INITIATE OLC PHASE(PREPARE) コマンドによって戻された変更 ID、または QUERY OLC LIBRARY(OLCSTAT) SHOW(MODID) コマンドによって戻された変更 ID と異なるかどうかをチェックしてください。

- 一部の IMS システムがコミット・フェーズ 1 完了状態にあり、一部の IMS システムがコミット・フェーズ 2 完了状態にある

オンライン変更はコミットされます。TERMINATE OLC コマンドは許可されません。コミット・コマンドを失敗させた問題を訂正し、INITIATE OLC PHASE(COMMIT) を再試行する必要があります。

オンライン変更状態の IMS は、INITIATE OLC PHASE(COMMIT) コマンドでオンライン変更を終了するまで、オンライン変更状態のままです。

- すべての IMS システムがコミット・フェーズ 2 完了状態にある

オンライン変更はコミットされます。TERMINATE OLC コマンドは許可されません。コミット・コマンドを失敗させた問題を訂正し、INITIATE OLC PHASE(COMMIT) を再試行する必要があります。

オンライン変更状態の IMS は、INITIATE OLC PHASE(COMMIT) コマンドでオンライン変更を終了するまで、オンライン変更状態のままです。

- 一部の IMS システムはコミット・フェーズ 2 完了状態にあり、一部の IMS システムはオンライン変更状態にはない

オンライン変更はコミットされます。TERMINATE OLC コマンドは許可されません。コミット・コマンドを失敗させた問題を訂正し、INITIATE OLC PHASE(COMMIT) を再試行する必要があります。

オンライン変更状態の IMS は、INITIATE OLC PHASE(COMMIT) コマンドでオンライン変更を終了するまで、オンライン変更状態のままです。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは、オンライン変更フェーズに参加している IMS に対して戻されます。

出力フィールド

以下の表は、TERMINATE OLC コマンド出力フィールドを示しています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 341. TERMINATE コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	キーワード	意味
MBR	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。打ち切りフェーズのマスターだった IMS の IMS ID。IMS ID は常に戻されます。
IMSMBR	N/A	グローバル・オンライン変更フェーズを実行した IMS メンバー。IMS メンバー名は常に戻されます。
CC	N/A	オンライン変更フェーズを実行した IMS メンバーからの完了コード。完了コードは常に戻されます。
CCTXT	error	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
ERRT	N/A	オンライン変更フェーズを実行した IMS メンバーが戻したゼロ以外の完了コードに関連したエラー・テキスト。完了コードがゼロ以外の場合は、エラー・テキストが戻されることがあります。

戻りコード、理由コード、および完了コード

このコマンドの結果として戻される OM の戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるコマンドすべてに対して標準的です。コードとその意味のリストについては、OM CSLOMCMND の戻りコードと理由コードのセクションを参照してください。

IMS 戻りコードと理由コード は、TERMINATE OLC コマンドによって OM に戻されます。

一部の理由コードには、IMS システムと完了コードの全リストが付随しています。理由コードの意味は、リストが戻されるかどうかを示します。エラーが検出される前に出力が作成された場合は、IMS システムと完了コードのリストの一部が TERMINATE OLC エラー理由コードとともに戻されることがあります。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 342. TERMINATE OLC コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	<p>TERMINATE OLC コマンドは正常に完了しました。TERMINATE OLC コマンドは、OLCSTAT データ・セットにリストされているすべての IMS システムに適用されます。 IMSplex 内のすべての IMS システムは、オンライン変更状態ではなくなりました。</p> <p>出力行は、OLCSTAT データ・セットにリストされたそれぞれの IMS ごとに作成されます。それぞれの出力行には、IMS メンバー名と完了コード 0 が含まれます。</p>
X'00000004'	X'0000100C'	<p>TERMINATE OLC コマンドは正常に完了しましたが、容認できる理由により、1 つ以上の IMS システムに適用されません。 TERMINATE OLC コマンドは、OLCSTAT データ・セットにリストされているすべての IMS システムに適用されます。</p> <p>出力行は、OLCSTAT データ・セットにリストされたそれぞれの IMS ごとに作成されます。それぞれの出力行には、IMS メンバー名と完了コードが含まれます。ゼロ以外の完了コードは、エラー・テキストを伴う場合があります。 1 つ以上の IMS システムに、IMS 状態が異常終了である、IMS 状態がシャットダウンである、またはこの IMS は既に正しいオンライン変更状態であるなど、オンライン変更終了がこの IMS に適用されなかったことを示す完了コードが含まれています。 TERMINATE OLC 完了コード・テーブルには、TERMINATE OLC コマンドによって戻される可能性のある完了コードとエラー・テキストのリストが含まれています。</p>
X'0000000C'	X'00003000'	<p>TERMINATE OLC コマンドは、少なくとも 1 つの IMS に対して正常に実行されましたが、すべての IMS システムには正常に実行されませんでした。 TERMINATE OLC コマンドは、OLCSTAT データ・セットにリストされているすべての IMS システムに適用されます。</p> <p>出力行は、OLCSTAT データ・セットにリストされたそれぞれの IMS ごとに作成されます。それぞれの出力行には、IMS メンバー名と完了コードが含まれます。ゼロ以外の完了コードは、エラー・テキストを伴う場合があります。1 つ以上の IMS システムがエラー完了コードを戻しました。 TERMINATE OLC 完了コード・テーブルには、TERMINATE OLC コマンドによって戻される可能性のある完了コードとエラー・テキストのリストが含まれています。</p> <p>1 つ以上の IMS システムに対して TERMINATE OLC コマンドが失敗した場合は、問題を修正し、再度 TERMINATE OLC コマンドを出してください。</p> <p>詳しくは、1007 ページの『TERMINATE OLC エラー処理』を参照してください。</p>

表 342. TERMINATE OLC コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'0000000C'	X'00003004'	<p>TERMINATE OLC コマンドがすべての IMS システムに対して失敗しました。 TERMINATE OLC コマンドは、OLCSTAT データ・セットにリストされているすべての IMS システムに適用されます。</p> <p>出力行は、OLCSTAT データ・セットにリストされたそれぞれの IMS ごとに作成されます。それぞれの出力行には、IMS メンバー名と完了コードが含まれます。ゼロ以外の完了コードは、エラー・テキストを伴う場合があります。すべての IMS システムがエラー完了コードを戻しました。 TERMINATE OLC 完了コード・テーブルには、TERMINATE OLC コマンドによって戻される可能性のある完了コードとエラー・テキストのリストが含まれています。</p> <p>1 つ以上の IMS システムに対して TERMINATE OLC コマンドが失敗した場合は、問題を修正し、再度 TERMINATE OLC コマンドを出してください。</p> <p>詳しくは、1007 ページの『TERMINATE OLC エラー処理』を参照してください。</p>
X'00000010'	X'00004004'	<p>CQS がないため、TERMINATE OLC コマンドは失敗しました。 RM はリソース構造の処理リソースへのアクセスを試みましたが、CQS が使用不能であるため失敗しました。オンライン変更フェーズは、1 つ以上の IMS システムで成功していることがあります。</p> <p>詳しくは、1007 ページの『TERMINATE OLC エラー処理』を参照してください。</p>
X'00000010'	X'0000400C'	<p>TERMINATE OLC コマンドは、XRF 代替に対して無効であるため、失敗しました。</p>
X'00000010'	X'00004018'	<p>RM リソース構造が使用可能でないため、TERMINATE OLC コマンドは失敗しました。 IMSplex 内の 1 つ以上の IMS が、まだオンライン変更状態である可能性があります。</p> <p>詳しくは、1007 ページの『TERMINATE OLC エラー処理』を参照してください。</p>
X'00000010'	X'0000401C'	<p>TERMINATE OLC コマンドは、FDBR 領域に対して無効であるため、失敗しました。</p>
X'00000010'	X'00004100'	<p>リソース構造がいっぱいであるため、TERMINATE OLC コマンドはリジェクトされます。 RM はリソース構造で処理リソースを作成しようとして失敗しました。 1 つ以上の IMS が、まだオンライン変更状態である可能性があります。</p> <p>詳しくは、1007 ページの『TERMINATE OLC エラー処理』を参照してください。</p>
X'00000010'	X'00004104'	<p>RM が使用不可のため、TERMINATE OLC コマンドは失敗しました。オンライン変更フェーズは、1 つ以上の IMS システムで成功していることがあります。CQS またはリソース構造が使用不能であるため、RM アドレス・スペースがないか、あるいは RM はアクティブであっても SCI に登録されていません。</p> <p>詳しくは、1007 ページの『TERMINATE OLC エラー処理』を参照してください。</p>

表 342. TERMINATE OLC コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000010'	X'00004108'	<p>SCI が使用不可のため、TERMINATE OLC コマンドは失敗しました。1 つ以上の IMS が、まだオンライン変更状態である可能性があります。</p> <p>詳しくは、1007 ページの『TERMINATE OLC エラー処理』を参照してください。</p>
X'00000010'	X'0000410C'	<p>グローバル・オンライン変更が使用可能でないため、TERMINATE OLC コマンドはリジェクトされます。ローカル・オンライン変更が使用可能です。 /MODIFY コマンドをローカル・オンライン変更で使用してください。ご使用の IMSplex がグローバル・オンライン変更をサポートするいくつかの IMS とローカル・オンライン変更をサポートするいくつかの IMS システムで構成されている場合は、グローバル・オンライン変更に対して使用可能になっている IMS に TERMINATE OLC コマンドを経路指定してください。</p>
X'00000010'	X'00004110'	<p>TERMINATE OLC コマンドは、オンライン変更状態のコマンド・マスターに適用しないため、リジェクトされます。</p> <p>TERMINATE OLC は、コマンド・マスターがオンライン変更状態でない場合はリジェクトされます。</p> <p>TERMINATE OLC は、コマンド・マスターが既にオンライン変更をコミットしている場合はリジェクトされます。</p> <p>詳しくは、1007 ページの『TERMINATE OLC エラー処理』を参照してください。</p>
X'00000010'	X'0000412C'	<p>OLCSTAT データ・セットに、オンライン変更を処理している IMS 以外の IMS の名前が含まれています。 DFSUOLC0 を使用してこのデータ・セットを訂正してください。</p>
X'00000010'	X'00004114'	<p>OLCSTAT データ・セットへのアクセスのエラーが原因で、TERMINATE OLC コマンドは失敗しました。 IMSplex 内の 1 つ以上の IMS が、まだオンライン変更状態である可能性があります。</p> <p>DFS2843 メッセージが、非送信請求出力として OM 出力出口に送信されます。</p> <p>詳しくは、1007 ページの『TERMINATE OLC エラー処理』を参照してください。</p>
X'00000010'	X'00004118'	<p>OLCSTAT データ・セットの割り振りのエラーが原因で、TERMINATE OLC コマンドは失敗しました。 IMSplex 内の 1 つ以上の IMS が、まだオンライン変更状態である可能性があります。</p> <p>DFS2848 メッセージが、非送信請求出力として OM 出力出口に送信されます。</p> <p>詳しくは、1007 ページの『TERMINATE OLC エラー処理』を参照してください。</p>

表 342. TERMINATE OLC コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000010'	X'0000411C'	OLCSTAT データ・セット内容に発生したエラーが原因で、TERMINATE OLC コマンドは失敗しました。1 つ以上の値が無効です。 DFS2844 メッセージが、非送信請求出力として OM 出力出口に送信されます。
X'00000010'	X'00004120'	この IMS では、INITIATE OLC、TERMINATE OLC、または /DISPLAY MODIFY などにより既にオンライン変更フェーズが進行中なので、TERMINATE OLC コマンドはリジェクトされます。
X'00000014'	X'00005000'	IMODULE GETSTOR ストレージ要求が失敗したため、TERMINATE OLC コマンドはリジェクトされます。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できなかったため、TERMINATE OLC コマンドは失敗しました。IMSplex 内の 1 つ以上の IMS が、まだオンライン変更状態である可能性があります。 詳しくは、1007 ページの『TERMINATE OLC エラー処理』を参照してください。
X'00000014'	X'00005100'	RM エラーが原因で、TERMINATE OLC コマンドは失敗しました。IMSplex 内の 1 つ以上の IMS が、まだオンライン変更状態である可能性があります。 詳しくは、1007 ページの『TERMINATE OLC エラー処理』を参照してください。
X'00000014'	X'00005104'	CQS エラーが原因で、TERMINATE OLC コマンドは失敗しました。IMSplex 内の 1 つ以上の IMS が、まだオンライン変更状態である可能性があります。 詳しくは、1007 ページの『TERMINATE OLC エラー処理』を参照してください。
X'00000014'	X'00005108'	SCI エラーが原因で、TERMINATE OLC コマンドは失敗しました。IMSplex 内の 1 つ以上の IMS が、まだオンライン変更状態である可能性があります。 詳しくは、1007 ページの『TERMINATE OLC エラー処理』を参照してください。
X'00000014'	X'00005FFF'	内部 IMS エラーが原因で、TERMINATE OLC コマンドは失敗しました。IMSplex 内の 1 つ以上の IMS が、まだオンライン変更状態である可能性があります。 詳しくは、1007 ページの『TERMINATE OLC エラー処理』を参照してください。

以下の表には、TERMINATE OLC コマンドで戻される可能性のある完了コード、その完了コードの意味、およびそのコードに関連するエラー・テキストが記載されています。

表 343. TERMINATE OLC コマンドの完了コード

完了コード	意味	エラー・テキスト (大文字)
0	オンライン変更コミット・フェーズまたはオンライン変更打ち切りフェーズが正常に完了しました。	
1	オンライン変更タイプが、この IMS には適用されません。例えば、ACBLIB オンライン変更は DCCTL IMS には適用されません。この IMS は何も行いません。	
2	オンライン変更フェーズは、以下のいずれか 1 つの理由から、この IMS によって試行されませんでした。 <ul style="list-style-type: none"> オンライン変更フェーズ・マスターはエラーに遭遇し、この IMS に対して、オンライン変更フェーズを実行するよう指示しませんでした。 	
3	この IMS のオンライン変更は、既に完了しているか強制終了されています。この IMS は、グローバル・オンライン変更の終了を調整しますが、ローカルではこの IMS は何も行う必要はありません。TERMINATE OLC コマンドは正常に完了し、グローバル・オンライン変更に関する情報があつた場合は、それがクリーンアップされました。この情報の例としては、RM がグローバル・オンライン変更を管理するために保持している情報があります。	
58	IMS が RM に登録されていません。OLCSTAT データ・セットに、RM に登録されていない IMS が含まれています。その IMS については終了は失敗します。	
60	IMODULE GETMAIN ストレージ・エラー。	
61	BCB ストレージ・エラー。	
62	HIOP ストレージ・エラー。	
63	WKAP ストレージ・エラー。	
80	データ・セット・エラー。	機能 (8 文字)、DD 名 (8 文字)、戻りコード (8 バイト)、およびエラー詳細 (8 文字)。 <p>機能は次のいずれかが可能です。</p> <ul style="list-style-type: none"> OPEN <p>データ・セット・オープン・エラー。</p> READ <p>データ・セット読み取りエラー。</p> <p>DD 名は OLCSTAT が可能です。</p> <p>戻りコードは、データ・セット・サービス戻りコードです。</p> <p>理由コードは、データ・セット・サービス理由コードです。</p>
90	内部エラー。	内部エラー (8 文字)、未使用 (8 文字)、戻りコードまたは機能コード (8 バイト)、およびエラー詳細 (8 文字) を検出したモジュール名。
91	この IMS がオンライン変更コミット・フェーズ 2 または打ち切りフェーズに応答する前に、オンライン変更コミット・フェーズ 2 または打ち切りフェーズがタイムアウトになりました。この IMS では、コミット・フェーズ 2 または打ち切りが既に完了している可能性があります。QUERY MEMBER TYPE(IMS) を出して、この IMS のオンライン変更状態を判別してください。	

表 343. TERMINATE OLC コマンドの完了コード (続き)

完了コード	意味	エラー・テキスト (大文字)
B2	IMS 状態エラー。	<p>IMS 状態エラー (32 文字)。IMS 状態は、次のいずれかが可能です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ABENDED <p>この IMS は、最後に成功したオンライン変更以降、異常終了しました。この IMS でのオンライン変更は終了しません。</p> <ul style="list-style-type: none"> • NOT-REACHABLE <p>この IMS は NOT-REACHABLE であるため、オンライン変更フェーズはリジェクトされます。この IMS がアクティブになっている OS イメージ上の SCI はダウンしています。SCI を再始動して、INITIATE OLC コマンドまたは TERMINATE OLC コマンドを再度出してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • OLC ALREADY COMMITTED <p>オンライン変更が既にコミットされているため、オンライン変更終了はリジェクトされます。すべての IMS システムがコミット・フェーズ 1 を完了し、OLCSTAT データセットは更新されました。</p> <ul style="list-style-type: none"> • OLC NOT IN PROGRESS <p>IMS はオンライン変更状態にありません。オンライン変更を終了する要求は、この IMS には適用されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> • OLC PHASE IN PROGRESS <p>この IMS は既に進行中のオンライン変更フェーズをもっているため、オンライン変更フェーズはリジェクトされません。</p> <ul style="list-style-type: none"> • RESTART NOT COMPLETE <p>この IMS は、オンライン変更が開始される前に初期設定されましたが、再始動は完了していません。オンライン準備フェーズまたはオンライン打ち切りフェーズは、この IMS がこの状態である限り、リジェクトされます。この IMS を取り消した後、オンライン変更準備フェーズを再試行する前に、オンライン変更を打ち切ってください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • SHUTDOWN <p>この IMS は、最後に成功したオンライン変更以降、正常にシャットダウンします。この IMS でのオンライン変更は終了します。</p>

例

TSO SPOC 入力:

```
TERMINATE OLC
```

TSO SPOC 出力:

```
MbrName Member CC
IMS3     IMS2     0
IMS3     IMS3     0
IMS3     SYS3     0
```

OM API 入力:

```
CMD (TERMINATE OLC)
```

OM API 出力:


```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.1.0</omvsn>
<xmlvsn>1 </xmlvsn>
<statime>2002.163 15:49:27.197919</statime>
<stotime>2002.16315:49:27.712209</stotime>
<staseq>B7C4ADFC0D4DF841</staseq>
<stoseq>B7C4ADFC8ADD1F45</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10084927</rqsttkn1>
<rc>0200000C</rc>
<rsn>00003000</rsn>
</ctl>
<cmderr>
<mbr name="IMS2 ">
<typ>IMS </typ>
<styp>DBDC </styp>
<rc>02000004</rc>
<rsn>00001008</rsn>
</mbr>
<mbr name="SYS3 ">
<typ>IMS </typ>
<styp>DBDC </styp>
<rc>02000004</rc>
<rsn>00001008</rsn>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>IMS3 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>TERM</verb>
<kwd>OLC </kwd>
<input>TERMINATE OLC</input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="IMSMBR" l1b1="Member" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="4"
dtype="INT" align="right" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MBR(IMS3 ) IMSMBR(SYS3 ) CC( 0) </rsp>
<rsp>MBR(IMS3 ) IMSMBR(IMS2 ) CC( 0) </rsp>
<rsp>MBR(IMS3 ) IMSMBR(IMS3 ) CC( 0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>


```

説明: グローバル・オンライン変更は、INITIATE OLC PHASE(PREPARE) コマンドが成功した後、IMSpIex について打ち切られました。グローバル・オンライン変更は正常に終了しました。

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

TERMINATE OLREORG コマンド

TERMINATE OLREORG コマンドは、進行中の 1 つ以上の HALDB オンライン再編成 (OLR) を停止するために使用します。

OPTION キーワードが指定されていない場合、このコマンドは、再編成単位の境界で OLR 処理を停止します。

このコマンドは、タイプ 1 とタイプ 2 の両方のコマンド・フォーマットをサポートしています。タイプ 1 コマンド・フォーマットは /TERMINATE OLREORG です。タイプ 1 コマンド応答は、事前編集メッセージ DFS0725I として戻されます。タイプ 2 コマンド・フォーマットは /TERMINATE OLREORG です。タイプ 2 コマンド応答は XML として戻され、自動化プログラム用に使用することができます。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 1018 ページの『キーワード』
- 1018 ページの『使用上の注意』
- 1019 ページの『出力フィールド』
- 1020 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1020 ページの『例』

環境

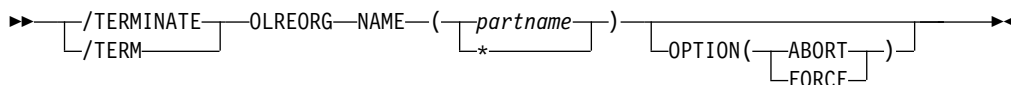
以下の表には、TERMINATE OLREORG コマンドを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 344. TERMINATE OLREORG コマンド、キーワード、およびパラメーターの有効環境

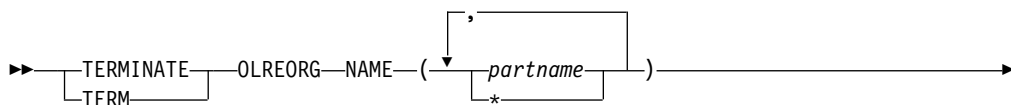
コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
TERMINATE OLREORG	X	X	
NAME	X	X	
OPTION	X	X	

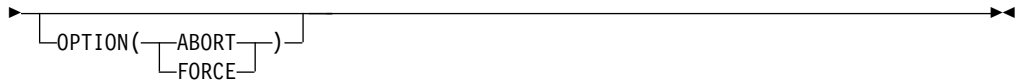
構文

タイプ 1 コマンド構文



タイプ 2 コマンド構文





キーワード

以下のキーワードは、TERMINATE OLREORG コマンドに有効です。

NAME()

OLR を停止する HALDB 区画の名前 (1 つ以上) を指定します。PHDAM または PHIDAM HALDB 区画名のみを指定できます。定義されているすべての HALDB 区画を表す NAME(*) 以外には、ワイルドカード文字 (*) をパラメーターに使用することはできません。

このコマンドのタイプ 2 バージョンの場合は、1 つ以上の HALDB 区画名を指定することができます。

このコマンドのタイプ 1 バージョンの場合は、区画名は 1 つしか指定できません。

OPTION()

FORCE または ABORT オプションを指定できるようにします。

ABORT

現在の再編成単位が完了するまで待たずに、即時に HALDB OLR が停止され、場合によっては異常終了 U0474 の完了コードが戻されます。終了時のオンライン再編成の状態によっては、バックアウトが必要な場合があります。

FORCE

次のレコード境界が検出されたときに、指定された *part name* について HALDB OLR を停止することを指定します。その時点までに移動されたすべてのデータが DASD に対してコミットされ、バックアウトは必要ありません。

重要: HALDB OLR が完了前に停止した場合は、OPTION(NODEL) は保持されないのので、停止したオンライン再編成を再開するために出す INITIATE OLREORG コマンドか、または UPDATE OLREORG コマンドで、再度指定する必要があります。

使用上の注意

/TERMINATE OLREORG または TERMINATE OLREORG が OM API から出された場合は、タイプ 2 コマンドとして扱われます。したがって、TERM OLREORG をタイプ 2 コマンドとして OM API から出す場合は、有効なコマンド verb 形式は TERM または TERMINATE のみです。同様に、/TERMINATE OLREORG を端末から出した場合は、それはタイプ 1 コマンドとして扱われます。したがって、/TERMINATE OLREORG は、例えば /TER OLREORG のように、最初の 3 つのコマンド文字を使用して出すことができます。

データベースの構造を変更するために、ALTER オプションを指定してオンライン再編成を開始した場合、IMS は、データベース内のすべての区画を再編成します。こ

のケースでは、データベース内のすべての区画のオンライン再編成を停止する必要がある場合は、例えば `TERMINATE OLREORG NAME(*)` のように `NAME` キーワードでアスタリスクを指定します。HALDB マスター・データベースの名前を指定することはできません。タイプ 1 またはタイプ 2 の形式の `TERMINATE OLREORG` コマンドを使用して、変更処理を停止することができます。ただし、変更されたデータベースを共用する場合、そのデータベースを共用するすべての IMS システムに送信できるのはタイプ 2 コマンドのみです。

このコマンドは、バッチ SPOC ユーティリティーを使用する IMSplex に対して発行できます。

`TERMINATE OLREORG` コマンドを使用すると、指定した HALDB 区画について HALDB OLR が停止されます。HALDB OLR が停止されると、それはもうアクティブではなく、それを所有する IMS はありません。INITIATE OLREORG コマンドによりオンライン再編成が再開されて完了するか、またはユーザーがオフライン再編成を実行するまでは、区画はカーソル・アクティブ状況のままになります。

/TERMINATE OLREORG のコマンド応答

`/TERMINATE OLREORG` コマンドをタイプ 1 コマンドとして出した場合は、コマンド応答はメッセージ・フォーマットで戻されます。

コマンドが正常に完了すると、システム・コンソールとマスター端末に、メッセージ DFS0725I が完了コード 0 と共に戻されます。コマンドの結果がエラーとなった場合は、ゼロ以外の完了コードまたはエラー・メッセージが、マスター端末とシステム・コンソールに戻されます。

```
DFS0725I INITIATE|UPDATE|TERMINATE OLREORG COMMAND FOR DB dbnamexx COMPLETE.
CC= nn
  where: dbnamexx is the HALDB partition name entered on the command
         nn       is the completion code
```

出力フィールド

このセクションでは、`TERMINATE OLREORG` コマンドに対する OM API からの応答について説明します。以下の表には、`TERMINATE OLREORG` 出力フィールドが記載されています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。このフィールドは `/TERMINATE` コマンドには適用されません。

キーワード表示

フィールドを生成させるコマンド・キーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 345. `TERMINATE OLREORG` コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	キーワード表示	意味
PART	N/A	区画名。
MBR	N/A	コマンド応答行を作成した IMS。
CC	N/A	完了コード。

戻りコード、理由コード、および完了コード

TERMINATE OLREORG コマンドの結果として戻される OM の戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 346. TERMINATE OLREORG コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	TERMINATE OLREORG コマンドは正常に完了しました。
X'00000004'	X'00001010'	フィルターに一致するものはありません。
X'0000000C'	X'00003000'	At least one request was successful.
X'0000000C'	X'00003004'	成功した要求はありません。
X'00000010'	X'0000400C'	コマンドは XRF 代替システムで出されました。
X'00000014'	X'00005000'	GETMAIN エラーが発生しました。

以下の表には、完了コードの説明が記載されています。TERMINATE OLREORG コマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。HALDB 区画に対する各アクションごとに、1 つずつ完了コードが戻されます。

表 347. TERMINATE OLREORG コマンドの完了コード

完了コード	意味
0	区画に対する TERMINATE OLREORG コマンドが正常に完了しました。
10	リソース名が無効です。
14	リソースが区画名ではありません。
1C	リソースは区分副次索引です。
24	進行中の HALDB OLR はありません。

例

以下に示すのは TERMINATE OLREORG コマンドの例です。

/TERMINATE OLREORG コマンドの例 1

入力 ET:

```
/TERM OLREORG NAME(PDHDOKA)
```

応答 ET:

```
DFS0725I TERMINATE OLREORG COMMAND FOR DB PDHDOKA COMPLETE. CC= 24
```

説明: 進行中の OLR を停止するために、区画 PDHDOKA に対して TERM OLREORG コマンドが出されます。その区画については OLR が進行中でないため、このコマンドは失敗します。

TERMINATE OLREORG コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
TERM OLREORG NAME(PDHOKA,PDHOKC)
```

TSO SPOC 出力:

Partition	MbrName	CC
PDHDOKA	IMSA	0
PDHDOKA	IMS1	24
PDHDOKC	IMSA	24
PDHDOKC	IMS1	24

OM API 入力:

```
CMD ( TERM OLREORG NAME(PDHOKA,PDHOKC))
```


OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OMIOM </omname>
<omvsn>1.2.0</omvsn>
<xmlvsn>1 </xmlvsn>
<statime>2003.168 21:31:13.035976</statime>
<stotime>2003.168 21:31:13.038227</stotime>
<staseq>B9962C747D6C8868</staseq>
<stoseq>B9962C747DF93586</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10143113</rqsttkn1>
<rc>0200000C</rc>
<rsn>00003008</rsn>
</ctl>
<cmderr>
<mbr name="IMSA ">
<typ>IMS </typ>
<styp>DBCTL </styp>
<rc>0000000C</rc>
<rsn>00003000</rsn>
<rsntext>At least one request successful</rsntext>
</mbr>
<mbr name="IMS1 ">
<typ>IMS </typ>
<styp>DBDC </styp>
<rc>0000000C</rc>
<rsn>00003004</rsn>
<rsntext>At least one request successful</rsntext>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>IMSA </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>TERM</verb>
<kwd>OLREORG </kwd>
<input>TERM OLREORG NAME(PDHOKA,PDHOKC) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="PART" l1b1="Partition" scope="LCL" sort="A" key="1"
  scroll="NO" len="9" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="NO"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES"
  len="4" dtype="INT" align="right" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp> PART(PDHOKA ) MBR(IMSA ) CC( 0) </rsp>
<rsp> PART(PDHOKC ) MBR(IMSA ) CC( 24) </rsp>
```


```
<rsp> PART(PDHDOKA ) MBR(IMS1 ) CC( 24) </rsp>  
<rsp> PART(PDHDOKC ) MBR(IMS1 ) CC( 24) </rsp>  
</cmdrspdata>  
</imsout>
```

説明: 区画 PDHDOKA および PDHDOKC について、OLR を停止するための TERM OLREORG コマンドが出されます。このコマンドは IMSA および IMS1 に経路指定されます。IMSA の区画 PDHDOKA では OLR が進行中なので、この区画についてはこのコマンドは正常に実行されます。IMSA の PDHDOKC では OLR が進行中ではないため、PDHDOKC についてはこのコマンドは失敗します。IMS1 では、PDHDOKA と PDHDOKC のどちらについても OLR は進行中ではないため、IMS1 のこの 2 つの区画に対してはこのコマンドは失敗します。

関連概念:

 [CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 \(システム・プログラミング API\)](#)

関連資料:

 [コマンド・キーワードとその同義語 \(コマンド\)](#)

第 26 章 /TEST コマンド

/TEST コマンドは、端末またはユーザーをテスト・モードまたは MFSTEST モードにするために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 1024 ページの『使用上の注意』
- 1025 ページの『例』

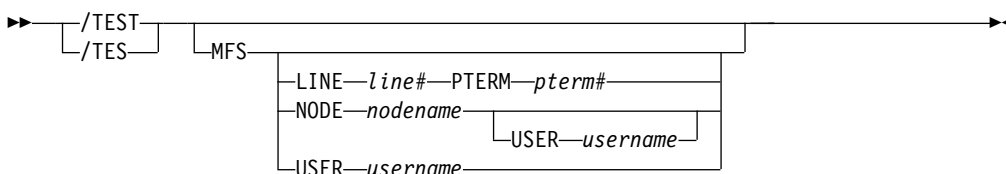
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 348. /TEST コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/TEST	X		X
LINE	X		X
NODE	X		X
PTERM	X		X
USER	X		X

構文



キーワード

以下のキーワードは、/TEST コマンドに有効です。

MFS

端末またはユーザーに MFS テスト・モードを指定します。MFS パラメータは、メッセージ・フォーマット・サービス (MFS) でサポートされる端末にのみ有効です。/TEST MFS USER コマンドが動的ユーザーのために出された時、ユーザーが端末にサインオンを行うまでは MFSTEST モードが有効かどうかを判別することはできません。いったんユーザーが端末にサインオンすると、端末が MFSTEST モードをサポートするかどうかを判別するための検査がおこ

なわれます。端末が MFSTEST モードをサポートしない場合、このモードは端末に伝搬されず、別の /TEST MFS USER コマンドが出されない限り、USER からこのモードは除去されます。

LINE、PTERM

MFSTEST モードにする非 VTAM 回線および pterm を指定します。

NODE

MFSTEST モードにする VTAM ノードを指定します。

このコマンドの /TEST MFS NODE という形式は、静的に定義されたノードに対してのみ有効です。

NODE および **USER** パラメーターを一緒に使用する場合の制約事項:

- 次のような場合にのみ、NODE USER キーワードの対を使用したコマンドは有効です。
 - USER が NODE にサインオンされています。
 - ISC 環境で、USER を NODE に割り振られています。
 - ノードおよびユーザーは既に存在しています。
- /TEST MFS NODE USER コマンドは、ISC、LUP、および 3600 ノードに対してのみ有効です。ISC では、/TEST MFS NODE *nodename* USER *username* 形式のコマンドは ISC ノードでサポートされ、USER *username* に割り振られたハーフセッションに適用されます。

USER

NODE キーワードを使わないで指定した場合、USER は MFSTEST モードにするために動的ユーザーを指定します。MFSTEST モード状況は、あるサインオンから別のサインオンまで保持されます。例えば、ユーザーが /TEST MFS コマンドを出し、サインオフを行った後で別の端末に再度サインオンすると、MFSTEST モードはまだ有効になっています。ユーザーが存在しない場合、それは作成され、MFSTEST モードが設定されます。

使用上の注意

このコマンドは、バッチ SPOC ユーティリティーを使用する IMSplex に対して発行できます。

テスト・モードまたはエコー・モードでは、端末からの入力は送り返されます。入力エラーおよび出力エラーの検査は行われないため、IMS エラー通知プロシージャはバイパスされます。エコー・モードは、/END、/STOP LINE、/STOP LINE PTERM、/STOP NODE のいずれかのコマンドを使ってリセットされるまで続きます。/DISPLAY コマンドは、テスト・モードまたは MFSTEST モードで端末あるいはユーザーを識別します。キーワードを提供しない場合、端末の入力コマンドは、テスト・モードまたは MFSTEST モードにされます。

テスト・モードはコマンド有効状況ではないため、テスト・モードを設定するコマンドは、リカバリー可能ではなく、またサインオン後まで保持されることもありません。それらのコマンドは、リモートからオペレーターによってではなく、エンド・ユーザーまたは端末によってのみ設定することができます。リモートからテスト・モードを設定する、/TEST LINE、/TEST NODE、および /TEST USER コマンドは、サポートされなくなります。

MFSTEST モードでは、メッセージ・フォーマット・サービスでサポートされる端末は、要求されたフォーマット・ブロックが特別なテスト・ライブラリー内にあれば、そのテスト・ライブラリーからフォーマット・ブロックを使用します。それ以外の他の場合、ブロックはプロダクション・ライブラリーから取得されます。

MFSTEST モードは /END コマンドでリセットされるまで続きます。MFSTEST モードを終了させるようなエラー条件が起こることがあります。このエラー条件が起こった場合、端末オペレーターはエラー・メッセージを受け取ります。

MFSTEST モードはコマンド有効状況であり、リカバリー可能で、複数のログオンおよびサインオンにわたって記憶されます。例えば、/TEST MFS NODE コマンドがノードで入力され、そのノードがログオフして別の端末に再びログオンすると、MFSTEST モードはまだ有効になっています。動的ユーザーが /TEST MFS USER コマンドを出し、サインオフを行った後で別の端末に再度サインオンをすると、MFSTEST モードはまだ有効になっています。

MFSTEST モードは動的ユーザーだけでなく動的ノードとも関連するため、/TEST MFS NODE は、静的ノードの他に動的ノードにも適用されます。/TEST MFS NODE および /TEST MFS NODE USER は、ノード・レベルで MFSTEST モードを設定します。/TEST MFS USER は、ユーザー・レベルで MFSTEST を設定します。キーワードなしの /TEST MFS は、静的端末に対してはノード・レベルで(静的端末はユーザー・レベルはもっていない)、また動的端末に対してはユーザー・レベルで、MFSTEST を設定します。

/TEST NODE USER コマンドは、静的および動的 ISC セッションの場合はサポートされます。ISC の場合、/TEST MFS NODE USER が必要です。/TEST MFS NODE (USER なし) は、ISC には使用することができず、それをすべてのハーフセッションに適用することはできません。

グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持される場合、MFSTEST モードはグローバルに設定されます。グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持されず、リソースは存在せず、ETO は使用可能な場合、リソース(ノードまたはユーザー)が作成され、MFSTEST モードが設定されます。コマンド状況を保持するために一時的なノードが動的に作成され、その一時的なノードが MFSTEST 状況をもっている場合は、そのノードにログオンが発生すると、MFSTEST 状況はログオン・ノードに対して設定されます。ログオンしているノードが ISC 並列セッションである場合は、ログオンされた最初のハーフセッションにのみ MFSTEST が設定されます。後続の ISC ハーフセッションは、MFSTEST モードにはなりません。

例

以下に示すのは /TEST コマンドの例です。

/TEST コマンドの例 1

入力 ET:

```
/TEST
```

応答 ET:

```
DFS058I TEST COMMAND COMPLETED
```

入力 ET:

NOW IS THE TIME TO COME TO THE AID

応答 ET:

NOW IS THE TIME TO COME TO THE AID

説明: 入力端末は、エコー・モードにされ、テスト・モードが終わるまで、メッセージ入力を出力として受け取り続けます。

/TEST コマンドの例 2

入力 ET:

/TEST MFS

応答 ET:

DFS058I TEST COMMAND COMPLETED

説明: 入力端末は MFSTEST モードにされます。

第 27 章 /TRACE コマンド

/TRACE コマンドは、内部 IMS イベントをトレースする IMS 機能に指示を与え、それを制御するために使用します。また、IMS モニターでモニターするアクティビティを開始、停止、および定義します。

LINE、LINK、NODE、UNITYTYPE、TRANSACTION、PROGRAM、PSB、および TCO のキーワードにより作成された情報は、IMS システム・ログに書き込まれます (PSB の場合はタイプ X'5F' レコードで、上記のその他のキーワードの場合はタイプ X'67' レコード)。PI (プログラム分離) と TABLE のトレース情報は、ストレージに保持されるか、またはログ (タイプ X'67' レコード) に記録されます。いずれになるかは、追加キーワードの指定で決まります。MONITOR キーワードは、システム・ログにこのような出力を提供するのではなく IMS モニターを制御するだけです。モニターは、独自の出力データを作成し、これを別個のデータ・セット上に書き込みます。


このコマンドは、バッチ SPOC ユーティリティを使用する IMSplex に対して発行できます。

現在の IMS トレースの状況とオプションは、/DISPLAY TRACE コマンドを使用して表示することができます。

サブセクション:

- 1028 ページの『/TRACE EXIT コマンド』
- 1029 ページの『/TRACE LINE コマンド』
- 1032 ページの『/TRACE LINK コマンド』
- 1035 ページの『/TRACE LUNAME コマンド』
- 1036 ページの『/TRACE MONITOR コマンド』
- 1040 ページの『/TRACE NODE コマンド』
- 1044 ページの『/TRACE OSAMGTF コマンド』
- 1045 ページの『/TRACE PI コマンド』
- 1048 ページの『/TRACE PGM コマンド』
- 1050 ページの『/TRACE PSB コマンド』
- 1051 ページの『/TRACE TABLE コマンド』
- 1056 ページの『/TRACE TCO コマンド』
- 1057 ページの『/TRACE TIMEOUT コマンド』
- 1059 ページの『/TRACE TMEMBER コマンド』
- 1060 ページの『/TRACE TRAN コマンド』
- 1062 ページの『/TRACE TRAP コマンド』
- 1063 ページの『/TRACE UNITYTYPE コマンド』

関連概念:

 IMS 報告書の使用 (システム管理)

関連資料:

1355 ページの『UPDATE PGM コマンド』

/TRACE EXIT コマンド

/TRACE EXIT コマンドは、ユーザー出口トレースを識別するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 1029 ページの『使用上の注意』

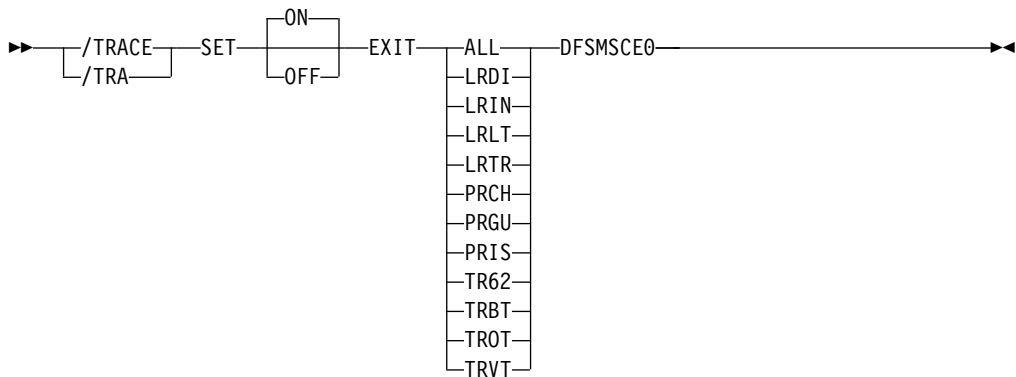
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 349. /TRACE EXIT コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/TRACE	X	X	X
EXIT	X		X
SET	X	X	X

構文



キーワード

以下のキーワードは、/TRACE EXIT コマンドに有効です。

DFSMSCEO

TM および MSC メッセージ経路指定および制御ユーザー出口。 /TRACE EXIT コマンドでこのキーワードが使用されている場合は、トレースの結果、IMS は、出口ルーチンが呼び出されたときに、タイプ 6701-MSEA および 6701-MSEB のログ・レコードをログ・データ・セットに書き込みます。トレースがエントリー・ポイントでアクティブの場合に、出口が呼び出されると、

6701-MSEA レコードがログに記録されます。出口が IMS に戻ると、
6701-MSEB レコードがログに記録されます。

使用上の注意

EXIT キーワードを使用するときには、次のいずれかのパラメーターを指定して、オンまたはオフにする必要があります。

ALL トレースをすべてのエントリー・ポイントでオンまたはオフにします。

LRDI リンク受信直接経路指定 (Link Receive Direct Routing) 出口エントリー・ポイントの呼び出し。

LRIN リンク受信中間 (Link Receive Intermediate) 出口エントリー・ポイントの呼び出し。

LRLT リンク受信 LTERM (Link Receive LTERM) 出口エントリー・ポイントの呼び出し。

LRTR リンク受信トランザクション (Link Receive Transaction) 出口エントリー・ポイントの呼び出し。

PRCH プログラム・ルーティング CHNG 呼び出し (Program Routing CHNG Call) 出口エントリー・ポイントの呼び出し。

PRGU プログラム・ルーティング GU 呼び出し (Program Routing GU Call) 出口エントリー・ポイントの呼び出し。

PRIS プログラム・ルーティング ISRT 呼び出し (Program Routing ISRT Call) 出口エントリー・ポイントの呼び出し。

TR62 端末経路指定 LU 62 (Terminal Routing LU62) 出口エントリー・ポイントの呼び出し。

TRBT 端末経路指定 非 VTAM (Terminal Routing non-VTAM) 出口エントリー・ポイントの呼び出し。

TROT 端末経路指定 OTMA (Terminal Routing OTMA) 出口エントリー・ポイントの呼び出し。

TRVT 端末経路指定 VTAM (Terminal Routing VTAM) 出口エントリー・ポイントの呼び出し。

/TRACE LINE コマンド

/TRACE LINE コマンドは、回線に関するイベントをトレースするために使用します。

サブセクション:

- 1030 ページの『環境』
- 1030 ページの『構文』
- 1030 ページの『キーワード』

- 1032 ページの『例』

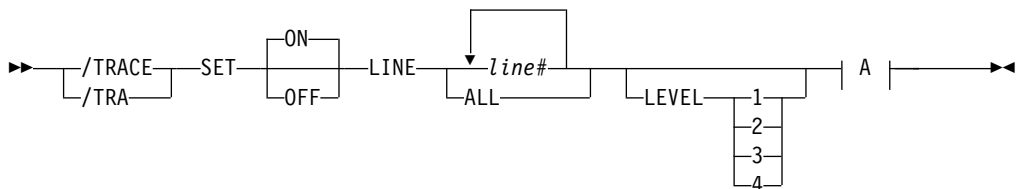
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

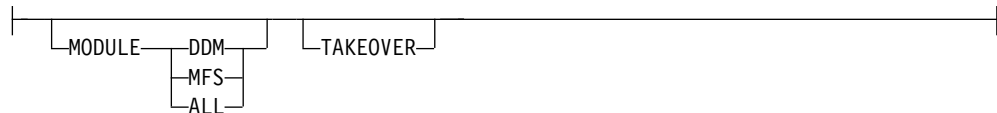
表 350. /TRACE LINE コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/TRACE	X	X	X
LEVEL	X		X
LINE	X		X
MODULE	X		X
SET	X	X	X
TAKEOVER	X		X

構文



A:



キーワード

以下のキーワードは、/TRACE LINE コマンドに有効です。

LEVEL

このキーワードは、LINE、LINK、NODE、または UNITYTYPE トレース機能を拡張します。LEVEL 指定は、IMS システム全体のためのものであり、別の値を指定して /TRACE を再発行するか、または IMS 制御領域を再始動することによってのみ変更されます。

LEVEL は、望みの制御ブロック・トレース情報の範囲を示します。指定された制御ブロックは、該当する時にのみトレースされます。すべてのレベルは、数値的にそれ以下のレベルも含んでいます。次のリストは、レベルと関連ブロックを示しています。

レベル ブロック

- 1 CLB (DECB) または LLB(MSC)

- CTB または LTB(MSC)
- IOB (非 VTAM 回線用) または IOSB (チャンネル間リンク用 MSC)
- 2 CNT または LNB(MSC)
 - CXB
 - CRB
 - CIB
 - CCB
 - PD スタック
- 3 キュー・マネージャー・バッファ―
 - 入出力回線バッファ―
 - LXB (チャンネル間リンクおよびプロセッサ―・ストレージ間用)
- 4 保管域セット (IMS ディスパッチング)

最初の /TRACE SET ON コマンドが LEVEL を指定しない場合には、デフォルトの 4 が使われます。以降のコマンドで LEVEL を指定すると、デフォルトが変更されます。

MODULE

このキーワードは、LINE、LINK、NODE、または UNITYTYPE トレース機能を拡張するために使用されます。MODULE 指定は、IMS システム全体のためのものであり、別の値を指定して /TRACE を再発行するか、または IMS 制御領域を再始動することによってのみ変更されます。

MODULE はどのモジュールがその制御ブロックをトレースするかを示します。

ALL 装置依存のモジュール (DDM) と MFS の両方

DDM コミュニケーション・アナライザーと装置依存のモジュールのインターフェース

MFS コミュニケーション・アナライザーおよびメッセージ形式サービス (MFS) モジュール・インターフェース

最初の /TRACE SET ON コマンドが MODULE を指定しない場合には、デフォルトの ALL が使われます。以降のコマンドで MODULE を指定すると、デフォルトが変更されます。

TAKEOVER

テークオーバー中のみトレースを制御し、通常のトレースとは別個になっています。TAKEOVER トレースは、LINE、LINK、NODE、および UNITYTYPE のキーワードに設定することができます。

TAKEOVER は、XRF 環境でのみ適用されます。SET OFF を指定して TAKEOVER を使用すると、トレースはテークオーバーの前にオフになります。出力メッセージが端末についてデキューされる場合、その端末についてはテークオーバー・トレースは停止されます。

通常のトレースとテークオーバー・トレースがいずれも入力された場合には、最も新しい設定が前の設定をオーバーライドします。例えば、通常のトレースがま

ず最初に入力されていた場合は、テークオーバー・トレースが通常のトレースをオーバーライドします。これは、通常のトレースまたは TAKEOVER のいずれかが有効になれば、両方が同時に有効にはなれないことを意味しています。

/TRACE TAKEOVER は、XRF アクティブ・システムからのみ出すことができます。これは、代替システムまたは非 XRF システムから入力された場合にはリジェクトされます。再始動およびテークオーバーを超えてリカバリーされるため、コールド・スタートまでに 1 回だけ入力するだけで済みます。トレースは、セッションがテークオーバーのときにアクティブである場合にのみ行われず。

例

以下の式は、/TRACE LINE コマンドの例です。

回線 4 のすべての物理端末について、メッセージ・フォーマット・サービス・モジュール、およびコミュニケーション・アナライザーのレベル 4 制御ブロック・トレースをオンにします。

入力 ET:

```
/TRACE SET ON LINE 4 LEVEL 4 MODULE MFS
```

応答 ET:

```
DFS058I TRACE COMMAND COMPLETED
```

/TRACE LINK コマンド

/TRACE LINK コマンドは、論理リンクに関するイベントをトレースするために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 1033 ページの『構文』
- 1033 ページの『キーワード』
- 1034 ページの『例』

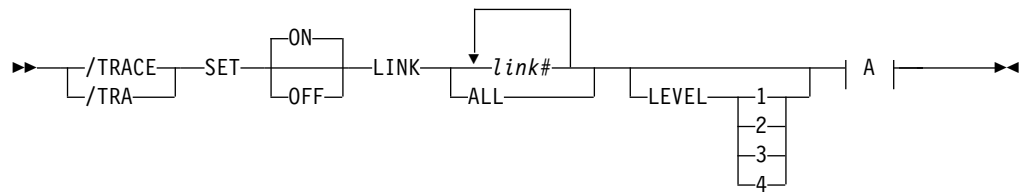
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

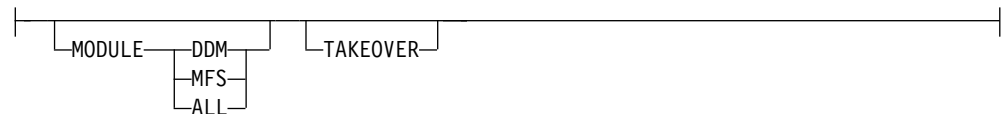
表 351. /TRACE LINK コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/TRACE	X	X	X
LEVEL	X		X
LINK	X		X
MODULE	X		X
SET	X	X	X
TAKEOVER	X		X

構文



A:



キーワード

以下のキーワードは、/TRACE LINK コマンドに有効です。

LEVEL

このキーワードは、LINE、LINK、NODE、または UNITYTYPE トレース機能を拡張します。LEVEL 指定は、IMS システム全体のためのものであり、別の値を指定して /TRACE を再発行するか、または IMS 制御領域を再始動することによってのみ変更されます。

LEVEL は、望みの制御ブロック・トレース情報の範囲を示します。指定された制御ブロックは、該当する時にのみトレースされます。すべてのレベルは、数値的にそれ以下のレベルも含んでいます。次のリストは、レベルと関連ブロックを示しています。

レベル ブロック

- 1 CLB (DECB) または LLB(MSC)
 CTB または LTB(MSC)
 IOB (非 VTAM 回線用) または IOSB (チャンネル間リンク用 MSC)
- 2 CNT または LNB(MSC)
 CXB
 CRB
 CIB
 CCB
 PD スタック
- 3 キュー・マネージャー・バッファー
 入出力回線バッファー
 LXB (チャンネル間リンクおよびプロセッサ・ストレージ間用)
- 4 保管域セット (IMS ディスパッチング)

最初の /TRACE SET ON コマンドが LEVEL を指定しない場合には、デフォルトの 4 が使われます。以降のコマンドで LEVEL を指定すると、デフォルトが変更されます。

MODULE

このキーワードは、LINE、LINK、NODE、または UNITYTYPE トレース機能を拡張するために使用されます。MODULE 指定は、IMS システム全体のためのものであり、別の値を指定して /TRACE を再発行するか、または IMS 制御領域を再始動することによってのみ変更されます。

MODULE はどのモジュールがその制御ブロックをトレースするかを示します。

ALL 装置依存のモジュール (DDM) と MFS の両方

DDM コミュニケーション・アナライザと装置依存のモジュールのインターフェース

MFS コミュニケーション・アナライザおよびメッセージ形式サービス・モジュール・インターフェース

最初の /TRACE SET ON コマンドが MODULE を指定しない場合には、デフォルトの ALL が使われます。以降のコマンドで MODULE を指定すると、デフォルトが変更されます。

TAKEOVER

テークオーバー中のみトレースを制御し、通常のトレースとは別個になっています。TAKEOVER トレースは、LINE、LINK、NODE、および UNITYTYPE のキーワードに設定することができます。

TAKEOVER は、XRF 環境でのみ適用されます。SET OFF を指定して TAKEOVER を使用すると、トレースはテークオーバーの前にオフになります。出力メッセージが端末についてデキューされる場合、その端末についてはテークオーバー・トレースは停止されます。

通常のトレースとテークオーバー・トレースがいずれも入力された場合には、最も新しい設定が前の設定をオーバーライドします。例えば、通常のトレースがまず最初に入力されていた場合は、テークオーバー・トレースが通常のトレースをオーバーライドします。これは、通常のトレースまたは TAKEOVER のいずれかが有効になれば、両方が同時に有効にはなれないことを意味しています。

/TRACE TAKEOVER は、XRF アクティブ・システムからのみ出すことができます。これは、代替システムまたは非 XRF システムから入力された場合にはリジェクトされます。再始動およびテークオーバーを超えてリカバリーされるため、コールド・スタートまでに 1 回だけ入力するだけで済みます。トレースは、セッションがテークオーバーのときにアクティブである場合にのみ行われず。

例

以下の式は、/TRACE LINK コマンドの例です。

論理リンクについてトレースをオンにします。

入力 ET:

/TRACE SET ON LINK 2 LEVEL 4 MODULE ALL

応答 ET:

DFS058I TRACE COMMAND COMPLETED

/TRACE LUNAME コマンド

/TRACE LUNAME コマンドは、特定の LU 名、またはその LU 名の TP 名のトレースを活動化および非活動化するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『使用上の注意』

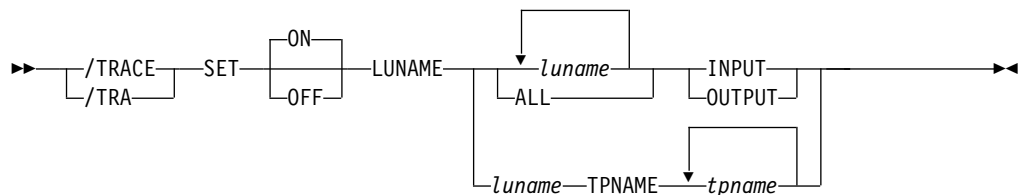
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 352. /TRACE LUNAME コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/TRACE	X	X	X
INPUT	X		X
LUNAME	X		X
OUTPUT	X		X
SET	X	X	X

構文



使用上の注意

このコマンドを指定すると、トレース・エントリーが LUMI トレース・テーブルに書き込まれるようになります。この理由で、後続の /TRACE SET ON LUNAME コマンドによって作成されるトレース・エントリー用テーブルを作成するため、/TRACE SET ON TABLE LUMI コマンドをまず入力しなければなりません。トレース・エントリーは次の場合に書き込まれます。

- LU 6.2 モジュールへ入るとき/そこから出るとき
- APPC 呼び出しを行うとき
- エラーが検出されたとき

INPUT と OUTPUT のキーワードは、LU 6.2 装置のトレース・データの量を制御するための柔軟性をオペレーターに提供します。

キーワード INPUT を LUNAME キーワードを用いて指定すると、入力および同期アウトバウンド・アクティビティーについてトレースを活動化し、あるいは非活動化することを示します。キーワード INPUT でパラメーター ALL を指定すると、これ以後、LU 6.2 入力と同期アウトバウンド・アクティビティーもトレースされることとなります。

キーワード OUTPUT を LUNAME キーワードを用いて指定すると、非同期アウトバウンド・アクティビティーについてトレースを活動化し、あるいは非活動化することを示します。OUTPUT でパラメーター ALL を指定すると、これ以後、LU 6.2 非同期アウトバウンド・アクティビティーもトレースされることとなります。

INPUT と OUTPUT のどちらも指定しないことは、入力および同期的ならびに非同期的アウトバウンド・アクティビティーについて INPUT とトレースの両方が活動化されるか非活動化されることと同じです。この場合、パラメーター ALL を指定すると、将来のすべての LU 6.2 インバウンド・アクティビティー、同期および非同期アウトバウンド・アクティビティーもトレースされることとなります。

ネットワーク修飾 LU 名は、LUNAME キーワードではオプションです。LU 名がネットワーク修飾 LU 名でなく、TP 名が指定されていない場合は、LU 名が指定した LU 名に一致するシステム内のすべてのネットワーク修飾 LU 名についてのトレースが活動化または非活動化されます。

指定されたリソースが存在せず、トレースが活動化されている場合は、その状況を保持するために 1 つの構造が作成されます。

/TRACE MONITOR コマンド

/TRACE MONITOR コマンドは、IMS モニターを活動化または非活動化するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 1037 ページの『構文』
- 1037 ページの『キーワード』
- 1038 ページの『使用上の注意』
- 1039 ページの『例』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

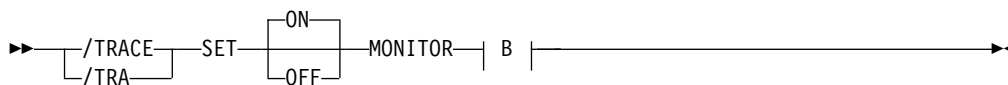
表 353. /TRACE MONITOR コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/TRACE	X	X	X
MONITOR	X	X	X

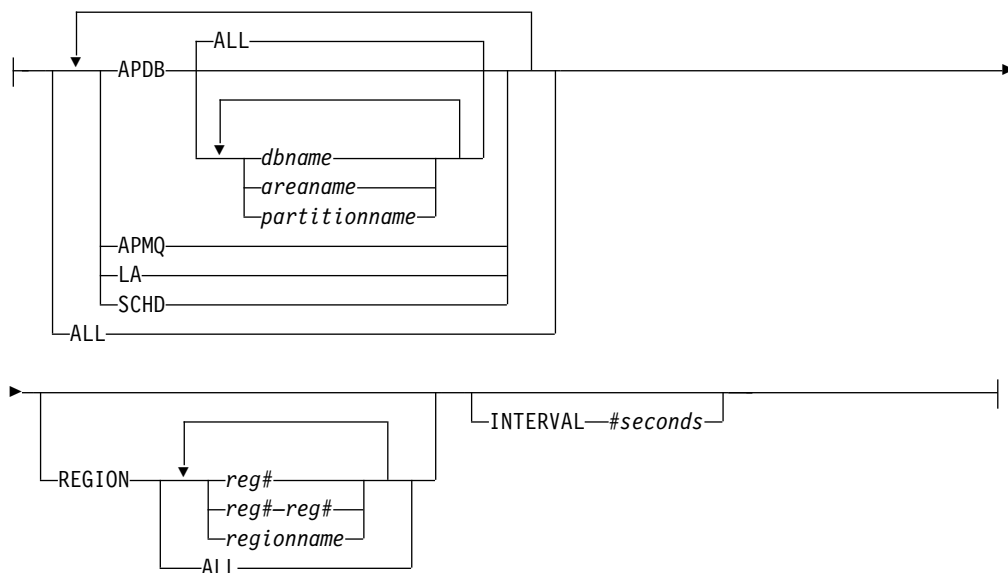
表 353. /TRACE MONITOR コマンドおよびキーワードの有効環境 (続き)

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
SET	X	X	X

構文



B:



キーワード

モニターを活動化する場合、次の MONITOR パラメーターを 1 つ以上指定して、モニターするイベントを示す必要があります。

ALL

リストにあるアクティビティをすべてモニターします。

APDB

アプリケーション・プログラムとデータベース間のアクティビティ (高速機能のアクティビティを含む) をモニターします。モニターには、外部サブシステム・データベースに対するすべてのアプリケーション・プログラムの要求が含まれています。モニターは、オプションで、データベース名またはエリア名を指定することによって、全機能データベースまたは区画のサブセット、高速機能 DEDB と MSDB、およびこれらの DEDB を構成するエリアに限定することができます。

ALL パラメーターを指定して、すべてのデータベース、エリア、および区画を示すか、あるいは、データベース名、エリア名、および区画名を明示的に入力することができます。

APMQ

アプリケーション・プログラムとメッセージ・キュー間のアクティビティ (高速機能のアクティビティを含む) をモニターします。

INTERVAL

秒数で入力された一定のインターバルの間、イベントをモニターします。

INTERVAL は、それ以降はモニター・ログ・レコードが書き込まれることがなくなる時間の期間を定義します。

モニター継続時間は、24 時間 (86,400 秒) より短くなければなりません。

INTERVAL を指定しない場合は、モニターは、/TRACE SET OFF MONITOR コマンドが出されるか、IMS がシャットダウンされるまで、続行されます。

IMS モニターは、定義されたインターバルが経過した後で、最初にモニター・ログ・レコードを書き込もうとする試行が行われるまではオフにされないの、INTERVAL は、モニターがいつオフにされるかを定義しません。

LA 回線と論理リンクのイベントをモニターします。

REGION

特定従属領域に関連したイベントをモニターします。領域は、現在、アクティブである場合もあれば、アクティブでない場合もあります。それぞれの領域は、次のように指定することができます。

- 領域番号は 1 から 999 (*reg#*) まで。この番号は、IMS を立ち上げたときに指定されていた MAXPST を超えることはできません。
- 1 から 999 までの領域番号の範囲 (*reg#-reg#*)。この番号は、IMS を立ち上げたときに指定されていた MAXPST を超えることはできません。
- 領域名 (*regionname*)。

REGION が指定されていない場合、あるいは REGION ALL が指定された場合、すべての従属領域のアクティビティがモニターされます。

SCHD

高速機能のアクティビティを含むイベントのスケジュールと終了をモニターします。

使用上の注意

以下の表に示すように、MONITOR キーワード上に、ALL、APDB、APMQ、INTERVAL、LA、REGION、および SCHD パラメーターの任意の組み合わせを指定することができます。

以下の表には、MONITOR キーワード・パラメーターを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 354. MONITOR キーワードのパラメーター環境

キーワード・パラメーター	DB/DC	DBCTL	DCCTL
ALL	X	X	X
APDB	X	X	

表 354. MONITOR キーワードのパラメーター環境 (続き)

キーワード・パラメーター	DB/DC	DBCTL	DCCTL
APMQ	X		X
INTERVAL	X	X	X
LA	X		X
REGION	X	X	X
SCHD	X	X	X

IMS モニターの報告書出力は、指定するキーワードまたはパラメーターによって異なります。必要なレコードが除外されていると、報告書の各セクションがわかりにくくなる場合があります。例えば、SCHD パラメーターなしで APDB パラメーターを指定すると、PSB と PCB の関係は正しく表されません。IMS 回線アクティビティを含まない総合的 DL/I 呼び出し報告書を取得するために指定すべき正しいパラメーターは APDB、APMQ、および SCHD です。

モニターは、次のいずれかが生じるまでログ・レコードを書き込みます。

- /TRACE SET OFF MONITOR が入力される。
- INTERVAL パラメーターで指定された時間間隔に達した。
- IMS がシャットダウンされる。

モニターを非活動化する場合は、パラメーターは不要です。入力されたパラメーターは、ALL を除いてすべて無視されます。ALL がデフォルトです。モニターを再活動化する場合は、MONITOR キーワード・パラメーターの新規のセットを選択する必要があります。

APDB *dbname* オプションを使用して、TYPE62 モニター・ログ・レコードをデータベース名でフィルターに掛けることはできません。

例

以下に示すのは /TRACE MONITOR コマンドの例です。

入力 ET:

```
/TRACE SET ON MONITOR ALL
```

応答 ET:

```
DFS058I TRACE COMMAND COMPLETED
DFS2500I DATASET DFSDCMON SUCCESSFULLY ALLOCATED
DFS2212I DC MONITOR STARTED
```

説明: モニターが活動化され、すべてのイベントがモニターされます。

入力 ET:

```
/TRACE SET OFF MONITOR
```

応答 ET:

```
DFS058I TRACE COMMAND COMPLETED
DFS2500I DATASET DFSDCMON SUCCESSFULLY DEALLOCATED
DFS2212I DC MONITOR STOPPED
```

説明: モニターが非活動化されます。

入力 ET:

```
/TRACE SET ON MONITOR LA
```

応答 ET:

```
DFS058I TRACE COMMAND COMPLETED
```

説明: モニターが活動化されます。回線と論理リンクのアクティビティーがモニターされます。前回のモニターの活動化によるイベントのモニターは、もはや適用されません。

/TRACE NODE コマンド

/TRACE NODE コマンドは、1 つ以上のノードに関するイベントをトレースするために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 1041 ページの『キーワード』
- 1042 ページの『使用上の注意』
- 1043 ページの『例』

環境

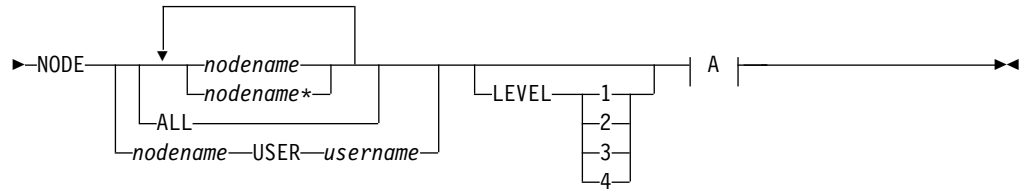
以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 355. /TRACE NODE コマンドおよびキーワードの有効環境

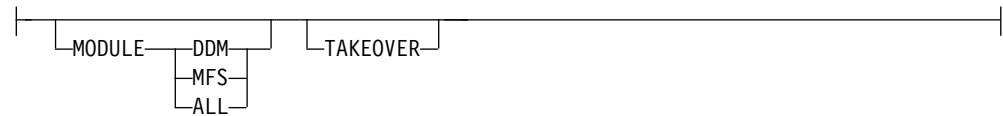
コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/TRACE	X	X	X
LEVEL	X		X
MODULE	X		X
NODE	X		X
SET	X	X	X
TAKEOVER	X		X
USER	X		X

構文





A:



キーワード

以下のキーワードは、/TRACE NODE コマンドに有効です。

LEVEL

このキーワードは、LINE、LINK、NODE、または UNITYTYPE トレース機能を拡張します。LEVEL 指定は、IMS システム全体のためのものであり、別の値を指定して /TRACE を再発行するか、または IMS 制御領域を再始動することによってのみ変更されます。

LEVEL は、望みの制御ブロック・トレース情報の範囲を示します。指定された制御ブロックは、該当する時にのみトレースされます。すべてのレベルは、数値的にそれ以下のレベルも含んでいます。次のリストは、レベルと関連ブロックを示しています。

レベル ブロック

- 1 CLB (DECB) または LLB(MSC)
 CTB または LTB(MSC)
 IOB (非 VTAM 回線用) または IOSB (チャンネル間リンク用 MSC)
- 2 CNT または LNB(MSC)
 CXB
 CRB
 CIB
 CCB
 PD スタック
- 3 キュー・マネージャー・バッファ
 入出力回線バッファ
 LXB (チャンネル間リンクおよびプロセッサ・ストレージ間用)
- 4 保管域セット (IMS ディスパッチング)

最初の /TRACE SET ON コマンドが LEVEL を指定しない場合には、デフォルトの 4 が使われます。以降のコマンドで LEVEL を指定すると、デフォルトが変更されます。

MODULE

このキーワードは、LINE、LINK、NODE、または UNITYTYPE トレース機能を拡張するために使用されます。MODULE 指定は、IMS システム全体のためのものであり、別の値を指定して /TRACE を再発行するか、または IMS 制御領域を再始動することによってのみ変更されます。

MODULE はどのモジュールがその制御ブロックをトレースするかを示します。

ALL 装置依存のモジュール (DDM) と MFS の両方

DDM コミュニケーション・アナライザーと装置依存のモジュールのインターフェース

MFS コミュニケーション・アナライザーおよびメッセージ形式サービス・モジュール・インターフェース

最初の /TRACE SET ON コマンドが MODULE を指定しない場合には、デフォルトの ALL が使われます。以降のコマンドで MODULE を指定すると、デフォルトが変更されます。

TAKEOVER

テークオーバー中のみトレースを制御し、通常のトレースとは別個になっています。TAKEOVER トレースは、LINE、LINK、NODE、および UNITYTYPE のキーワードに設定することができます。

TAKEOVER は、XRF 環境でのみ適用されます。SET OFF を指定して TAKEOVER を使用すると、トレースはテークオーバーの前にオフになります。出力メッセージが端末についてデキューされる場合、その端末についてはテークオーバー・トレースは停止されます。

通常のトレースとテークオーバー・トレースがいずれも入力された場合には、最も新しい設定が前の設定をオーバーライドします。例えば、通常のトレースがまず最初に入力されていた場合は、テークオーバー・トレースが通常のトレースをオーバーライドします。これは、通常のトレースまたは TAKEOVER のいずれかが有効になれば、両方が同時に有効にはなれないことを意味しています。

/TRACE TAKEOVER は、XRF アクティブ・システムからのみ出すことができます。これは、代替システムまたは非 XRF システムから入力された場合にはリジェクトされます。再始動およびテークオーバーを超えてリカバリーされるため、コールド・スタートまでに 1 回だけ入力するだけで済みます。トレースは、セッションがテークオーバーのときにアクティブである場合にのみ行われず。

使用上の注意

USER キーワードが指定されず、既存のノードに適用される場合、NODE パラメーターは総称になれます。総称ノード・パラメーターは動的ノードを作成させません。

ISC ノードの場合、USER キーワードを使用しない /TRACE NODE nodename は、後で動的に割り振られる動的 ISC セッションも含めて、NODE nodename に関するすべてのハーフセッションに適用されます。

存在しないノードについては、USER キーワードを使用しない /TRACE SET ON NODE nodename は、ノードがアクティブになる時にトレース要求の知識が維持されるように動的 NODE nodename を作成します。ノードがアクティブになるまで、/DISPLAY NODE は UNK (不明) のタイプを示します。トレースは、後でオフにされ、一時的ノードがまだ存在している場合、次のチェックポイントで削除されます。

NODE および **USER** パラメーターを一緒に使用する場合の制約事項:

- 次のような場合にのみ、NODE USER キーワードの対を使用したコマンドは有効です。
 - USER が NODE にサインオンされています。
 - ISC 環境で、USER を NODE に割り振られています。
 - ノードおよびユーザーは既に存在しています。
- /TRACE NODE USER コマンドは、ISC および非 ISC のノードおよびユーザーに対して有効です。

グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持される場合、/TRACE NODE はグローバル・トレース状況をノードに設定し、トレース状況をローカルに設定します。グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持されない場合、/TRACE NODE はトレース状況をローカルに設定します。ETO 環境内に該当ノードが存在しない場合は、IMS はそのノードを作成し、ローカル・ノード用のトレース状況を設定します。

例

以下に示すのは /TRACE NODE コマンドの例です。

以下の例は、トレース状況データを保持するための一時ノードを IMS が作成する方法を示しています。

/TRACE コマンドは、まだ存在していない動的 ISC NODE である DTSLU607 に対して出され、トレース状況を保持するために一時的ノードが作成されます。いったん ISC 並列セッション IMSUS01 と IMSUS02 が割り振られると、トレース状況はこの両方に適用されます。

入力 ET:

```
/TRACE SET ON NODE DTSLU607
```

応答 ET:

```
DFS058 TRACE COMMAND COMPLETED
```

入力 ET:

```
/DISPLAY NODE DTSLU607
```

応答 ET:

```

NODE-USR TYPE  CID      RECD ENQCT DEQCT  QCT  SENT
DTSLU607 UNK   00000000    0    0    0    0    0 TRA
*90127/091634*

```

入力 ET:

```
/DISPLAY NODE DTSLU607
```

応答 ET:

```

NODE-USR TYPE  CID      RECD ENQCT DEQCT  QCT  SENT
DTSLU607 LUT6
-N/A      UNK   00000000    0    0    0    0    0 TRA
-IMSUS01  01000002    0    0    0    0    0 SIGN(IMSUS01 )
                                IDLE CON TRA PRI
-IMSUS02  01000004    0    0    0    0    0 SIGN(IMSUS02 )
                                IDLE CON TRA PRI
*90127/091432*

```

以下の例では、ISC ノード LU6NDPA に対して /TRACE コマンドが発行されています。応答 ET の TYPE 列の値 TCP は、ISC ノードが VTAM ではなく TCP/IP を使用していることを示します。

入力 ET:

```
/TRACE SET ON NODE LU6NDPA
```

応答 ET:

```
DFS058I 12:28:44 TRACE COMMAND COMPLETED IMS1
```

入力 ET:

```
/DISPLAY NODE LU6NDPA
```

応答 ET:

```

DFS000I  NODE-USR TYPE  CID      RECD ENQCT DEQCT  QCT  SENT
DFS000I  LU6NDPA  TCP
DFS000I  -N/A          *****    0    0    0    0    0 IDLE
TRA STATIC  IMS1
DFS000I  -N/A          *****    0    0    0    0    0 IDLE
TRA STATIC  IMS1
DFS000I  -N/A          *****    0    0    0    0    0 IDLE
TRA STATIC  IMS1
DFS000I  *12065/122852*  IMS1

```

/TRACE OSAMGTF コマンド

/TRACE SET OSAMGTF コマンドは、OSAM Buffer Handle GTF (汎用トレース機能) サブルーチンを活動化または非活動化するために使用します。活動化されると、OSAMGTF トレースは、OSAM バッファ・ハンドラーに対するすべての IMS 要求について、z/OS 汎用トレース機能トレース・エントリを生成します。

サブセクション:

- 1045 ページの『環境』
- 1045 ページの『構文』

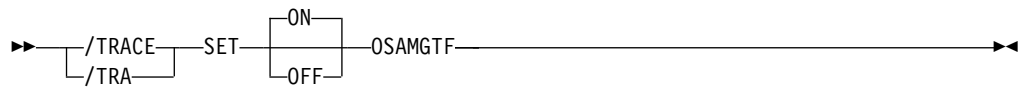
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 356. /TRACE OSAMGTF コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/TRACE	X	X	X
OSAMGTF	X	X	
SET	X	X	X

構文



/TRACE PI コマンド

/TRACE PI コマンドは、プログラム分離トレース・エントリーをトレース・テーブルに書き込むために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 1046 ページの『キーワード』
- 1046 ページの『使用上の注意』
- 1047 ページの『例』

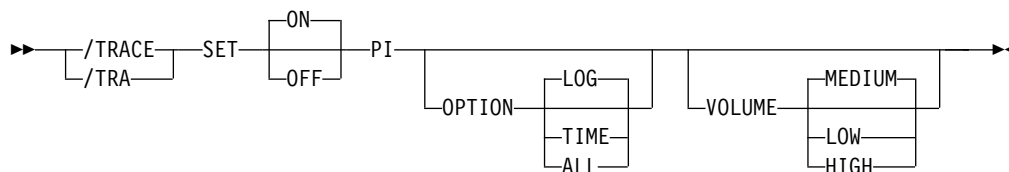
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 357. /TRACE PI コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/TRACE	X	X	X
OPTION	X	X	X
PI	X	X	
SET	X	X	X
VOLUME	X	X	X

構文



キーワード

以下のキーワードは、/TRACE PI コマンドに有効です。

OPTION

次に挙げるプログラム分離トレース・オプションのいずれか 1 つに対する要求を示すために使用します。

ALL LOG と TIME の両方を要求します。

LOG トレースされたデータをシステム・ログに書き込むように要求します。SET OFF の場合、トレースは続けられますが、どのバッファもシステム・ログに転送されません。LOG がデフォルトです。

ログ・オプションには、IMS OLDS 以外のデータ・セットに対する外部トレースができる可能性も含まれています。指定した場合、DASD 外部トレースが第 1 優先順位、TAPE 外部トレースが第 2 優先順位、そして IMS OLDS が第 3 優先順位をもちます。OLDS への外部トレースは、オペレーターの承認がない場合には行われません。

EXTERNAL トレースは、DASD/TAPE タイプに関する代替システムについてのみ使用可能ですが、OLDS については使用可能ではありません。

TIME WAIT が必要な場合、それぞれの ENQ/DEQ 要求トレース・レコードに追加時間フィールドを組み込むように要求します。このフィールドには、経過待ち時間が入ります。OFF に設定した場合は、トレースは続けられますが時刻のみが記録されます。

高速機能のエントリーには経過待ち時間はありません。

VOLUME

指定した PI トレース・テーブルに書き込まれるエントリーの量を指定します。LOW (少量)、MEDIUM (中程度の量) (デフォルト)、HIGH (大量)。

使用上の注意

PI トレース・エントリーは、DL/I およびロック・アクティビティ・トレース・エントリーと同じトレース・テーブルに書き込まれます。PI トレース・エントリーには、プログラム分離 ENQ/DEQ 呼び出しと DL/I 呼び出しに関する情報が含まれています。/TRACE TABLE DLI が作成するトレース・エントリーには、DL/I 呼び出しに関する別の情報が入っており、同じトレース・テーブル内の別個のエントリーとして書き込まれます。LOCK トレースを開始すると、PI トレースもが行われます。

OPTION キーワードを使用しない PI を入力した場合、プログラム分離トレースは、ログに記録されずにストレージに保持されています。プログラム分離トレースを使って統計とパフォーマンス・データを提供する場合、OPTION(ALL) を入力してください。

以下の表には、さまざまな /TRACE コマンド・フォーマットがリストされ、コマンドがトレース、ロギング、および追加時間フィールドに影響を及ぼすかどうかを表しています。

表 358. /TRACE コマンド・フォーマット

コマンド	トレース	ロギング	追加時間フィールド
/TRACE SET ON PI	あり	なし	なし
/TRACE SET OFF PI	なし	なし	なし
/TRACE SET ON PI OPTION ¹	あり	あり	なし
/TRACE SET OFF PI OPTION ¹	あり	なし	なし
/TRACE SET ON PI OPTION TIME	あり	なし	あり
/TRACE SET OFF PI OPTION TIME	あり	なし	なし
/TRACE SET ON PI OPTION ALL	あり	あり	あり
/TRACE SET OFF PI OPTION ALL	あり	なし	なし

注:

1. /TRACE SET ON | OFF PI OPTION LOG と同じコマンドです。

例

以下に示すのは /TRACE PI コマンドの例です。

例 1

プログラム分離トレースをオンにし、トレース・レコードに追加時間フィールドを組み込み、トレース情報をログに記録します。

入力 ET:

```
/TRACE SET PI OPTION ALL
```

応答 ET:

```
DFS058I TRACE COMMAND COMPLETED
```

例 2

プログラム分離トレース・データのロギングをオフにしますが、ストレージ内でトレースを続けます。

入力 ET:

```
/TRACE SET OFF PI OPTION LOG
```

応答 ET:

DFS058I TRACE COMMAND COMPLETED

例 3

プログラム分離トレースを停止します。

入力 ET:

/TRACE SET OFF PI

応答 ET:

DFS058I TRACE COMMAND COMPLETED

/TRACE PGM コマンド

/TRACE PGM コマンドは、特定のプログラムのデータ通信 (DC) の DL/I 部分をトレースするために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『使用上の注意』
- 1049 ページの『同等の IMS タイプ 2 コマンド』

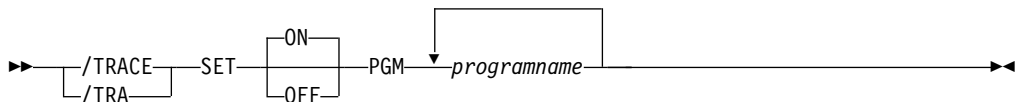
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 359. /TRACE PGM コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/TRACE	X	X	X
PGM	X	X	X
SET	X	X	X

構文



使用上の注意

ユーザー・アプリケーション・プログラムにより出される TPPCB に対するそれぞれの DL/I 呼び出しは、DC 呼び出しハンドラー DFSDLA30 に入ったときとそこから出るときにトレースされます。DFSDLA30 に入ったときに 6701-LA3A タイプのレコードが書き込まれ、DFSDLA30 から出るときに 6701-LA3B レコードのタイプが書き込まれます。

それぞれのレコードには、次に示すような項目が、もし該当すれば、含まれています。

- TPPCB
- 入出力域の最高 64 バイト
- SMB
- PST

トレース中のバッチ・メッセージ・プログラム (BMP) が IBM IMS Queue Control Facility for z/OS である場合、6701-MRQB レコードは、IMS Queue Control Facility モジュール DFSQMRQ0 によってログに記録されます。IMS Queue Control Facility BMP のデフォルト・プログラム名は MRQPSB であり、MSGQUEUE システム定義マクロでオーバーライドすることができます。

6701-MRQB レコードに記録される項目は、次のとおりです。

- TPPCB
- AIB
- 入出力域
- PST
- QTPDST
- QSAPWKAD
- QMBA
- PSTDCA
- REG14-12

CPI Communications ドリブン・トランザクション・プログラムが、代替 PCB を含む PSB を指定する DL/I APSB 呼び出しを出す場合は、PGM キーワードのみが適用されます。


同等の IMS タイプ 2 コマンド

以下の表は、各種の /TRACE PGM コマンドと、類似の機能を実行する IMS タイプ 2 コマンドを示しています。

表 360. /TRACE PGM コマンドと同等のタイプ 2 コマンド

タスク	/TRACE PGM コマンド	類似の IMS タイプ 2 コマンド
プログラムのトレースを開始する。	/TRACE SET ON PGM <i>pgmname</i>	UPDATE PGM NAME(<i>pgmname</i>) START(TRACE)
プログラムのトレースを停止する。	/TRACE SET OFF PGM <i>pgmname</i>	UPDATE PGM NAME(<i>pgmname</i>) STOP(TRACE)

関連概念:

 キュー制御機能メッセージ・リキユアーの問題の診断 (診断)

関連資料:

 IMS Queue Control Facility overview
1355 ページの『UPDATE PGM コマンド』

/TRACE PSB コマンド

/TRACE PSB コマンドは、指定された PSB について出されたすべての全機能 IMS DL/I データベース呼び出しを記録するために使用します。/TRACE SET ON PSB を使用して PSB のトレースを開始した場合、FP/DC/SAA 呼び出しを取り込むことはできません。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 1051 ページの『使用上の注意』
- 1051 ページの『例』

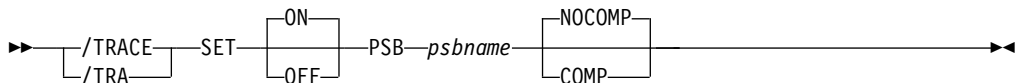
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 361. /TRACE PSB コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/TRACE	X	X	X
COMP	X	X	
NOCOMP	X	X	
PSB	x	X	
SET	X	X	X

構文



キーワード

以下のキーワードは、/TRACE PSB コマンドに有効です。

COMP

PCB とデータ比較ステートメント・イメージを生成させるために、/TRACE SET PSB コマンドで使用されます。

/TRACE SET PSB *psbname* COMP コマンドは、DBCTL 環境の BMP に対してのみ適用されます。

NOCOMP

PCB とデータ比較ステートメント・イメージの生成を阻止します。NOCOMP がデフォルトです。

使用上の注意

CPI Communications ドリブン・トランザクション・プログラムが PSB を割り振る DL/I APSB 呼び出しを出す場合にのみ、LU 6.2 では PSB キーワードが適用されます。

このキーワードを使用した結果得られた情報は、X'5F' ログ・レコードに書き込まれます。

例

以下の式は、/TRACE PSB コマンドの例です。

PSB AALST について出したすべての DL/I 呼び出しをトレースします。

入力 ET:

```
/TRACE SET ON PSB AALST COMP
```

応答 ET:

```
DFS058I TRACE COMMAND COMPLETED
```

/TRACE TABLE コマンド

/TRACE TABLE コマンドは、指定されたトレース・テーブルへのオンライン・トレースを開始または停止するために、SET キーワードと共に使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 1052 ページの『構文』
- 1052 ページの『キーワード』
- 1054 ページの『使用上の注意』
- 1055 ページの『例』

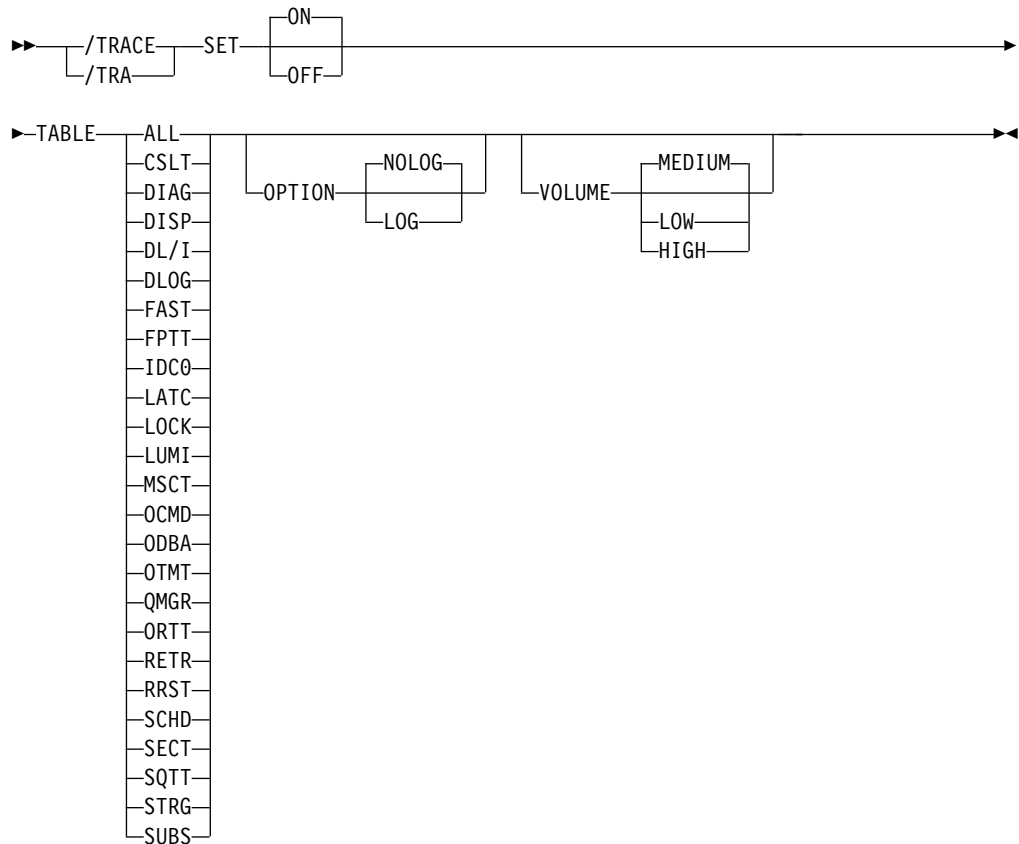
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 362. /TRACE TABLE コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/TRACE	X	X	X
OPTION	X		X
SET	X	X	X
TABLE	X	X	X
VOLUME	X	X	X

構文



キーワード

以下のキーワードは、/TRACE TABLE コマンドに有効です。

OPTION

トレース・テーブルをログに記録するかどうかを示します。

NOLOG

トレース・テーブルをログに記録しないことを示します。つまり、再使用されたトレース・テーブルの記録はありません。NOLOG がデフォルトです。

DL/I、LOCK、および PI のトレース情報には、同じトレース・テーブルが使用されます。このテーブルがログに記録されるかどうかは、DL/I、PI、または LOCK のいずれかに入力された最後の /TRACE コマンドのロギング・オプションによって決まります。

LOG

トレース・テーブルを再使用する (折り返す) 前にシステム・ログに書き込むように要求します。

ログ・オプションには、IMS OLDS 以外のデータ・セットに対する外部トレースができる可能性も含まれています。指定した場合、DASD 外部トレースが第 1 優先順位、TAPE 外部トレースが第 2 優先順位、そして IMS

OLDS が第 3 優先順位をもちます。OLDS への外部トレースは、オペレーターの承認がない場合には行われません。このオプションは、検索トレースおよび高速機能トレース (デフォルト) では無視されます。

FPTRACE には固有の SYSOUT が存在します。外部トレースは、DASD/TAPE タイプの場合にのみ代替システムで実行できますが、OLDS の場合は実行できません。

VOLUME

指定したトレース・テーブルに書き込まれるエントリーの量を指定します。LOW (少量)、MEDIUM (中程度の量) (デフォルト)、HIGH (大量)。

以下のいずれかの TABLE キーワード・パラメーターを使用して、活動化または非活動化するトレースを指定できます。

ALL

すべてのトレース・テーブルへのトレースを使用可能にすべきか使用不可にすべきかを示します。これはデフォルトです。

CSLT

CSL トレースを活動化または非活動化することを示します。

DIAG

/DIAGNOSE コマンド・トレース・テーブルを活動化または非活動化することを示します。

DISP

ディスパッチャーのトレースを活動化または非活動化することを示します。

DL/I

DL/I トレースを活動化または非活動化することを示します。

DLOG

ロギング・トレースを活動化または非活動化することを示します。

FAST

高速機能トレースを活動化または非活動化することを示します。

FPTRACE DD ステートメントを従属領域 JCL に組み込み、トレース出力の宛先を定義し、オペレーター・コマンド /TRACE SET ON TABLE FAST を出すことによって、高速機能トレースは活動化されます。

推奨事項: FPTRACE の出力は大きいため、このトレースはテスト環境でのみ実行してください。

FPTT

高速機能テーブル・トレースを活動化または非活動化することを示します。

IDC0

DFSCNXA0 および DFSIDC00 のモジュール内のエラーのトレースを活動化または非活動化することを示します。

LATC

ラッチ・トレースを活動化または非活動化することを示します。

LOCK

LOCK と PI のトレースを活動化または非活動化することを示します。

LUMI

LU 6.2 マネージャー・トレースを活動化または非活動化することを示します。
/TRACE SET ON TABLE LUMI は、トレース・エンタリー用の LUMI トレース・テーブルを作成するために /TRACE SET ON LUNAME コマンドを入力する前に、最初に入力する必要があります。

MSCT

MSC トレースを活動化または非活動化することを示します。

OCMD

OM コマンド・トレースを活動化または非活動化することを示します。

ODBA

ODBA トレース・テーブルを活動化または非活動化することを示します。

ODBA は、バッチ、DCCTL のいずれの環境でも無効です。

ORTT

オンライン・リカバリー・システム・トレースを活動化または非活動化することを示します。

OTMT

IMS Open Transaction Manager Access (OTMA) トレースを活動化または非活動化することを示します。

QMGR

キュー・マネージャーのトレースを活動化または非活動化することを示します。

RETR

DL/I 検索トレースを活動化または非活動化することを示します。

RRST

リソース・リカバリーのトレースを活動化または非活動化することを示します。

SCHD

スケジューラー・トレースを活動化または非活動化することを示します。

SECT

セキュリティ・トレース・テーブルを活動化または非活動化することを示します。

SQTT

共用キューのトレースを活動化または非活動化することを示します。 SQTT は、共用キュー環境でのみ有効です。

STRG

ストレージ・マネージャーのトレースを活動化または非活動化することを示します。

SUBS

外部サブシステム・トレースを活動化または非活動化することを示します。

使用上の注意

TABLE キーワード・パラメーターは、活動化または非活動化する特定のトレースを示します。 DL/I、LOCK、および PI トレースは、同じトレース・テーブルを共有します。しかし、DL/I トレースをオンにしても、LOCK トレースはオンになりません。逆の場合も同じです。

オンライン /TRACE コマンドで、トレース・テーブル内の次のトレースをオンまたはオフにすることができます。

以下の表は、トレース・テーブルが有効な環境を示しています。

表 363. 有効なトレース・テーブルおよび環境

トレース・テーブル	DB/DC	DBCTL	DCCTL
ALL	X	X	X
CSLT	X	X	X
DIAG	X	X	X
DISP	X	X	X
DL/I	X	X	X
DLOG	X	X	X
FAST	X	X	X
FPTT	X	X	X
IDC0	X		X
LATC	X	X	X
LOCK	X	X	
LRTT	X	X	X
LUMI	X		X
MSCT	X		X
OCMD	X	X	X
ODBA	X	X	
ORTT	X		X
OTMT	X	X	
QMGR	X		X
RETR	X	X	
RRST	X		X
SCHD	X	X	X
SECT	X	X	X
SQTT	X		X
STRG	X	X	X
SUBS	X	X	X

例

以下に示すのは /TRACE TABLE コマンドの例です。

/TRACE TABLE コマンドの例 1

DL/I トレース・テーブル内のオンライン・トレースをオンにします。

入力 ET:

```
/TRACE SET ON TABLE DL/I
```

応答 ET:

DFS058I TRACE COMMAND COMPLETED

/TRACE TABLE コマンドの例 2

ディスパッチャーのトレース・テーブルをオンにし、それらをシステム・ログに書き込みます。

入力 ET:

```
/TRACE SET ON TABLE DISP OPTION LOG
```

ディスパッチャーのトレース・テーブルがもはや必要でない場合。

入力 ET:

```
/TRACE SET OFF TABLE DISP
```

応答 ET:

```
DFS058I TRACE COMMAND COMPLETED
```

/TRACE TABLE コマンドの例 3

ストレージ・マネージャーのトレース・テーブルをオンにします。

入力 ET:

```
/TRACE SET ON TABLE STRG
```

応答 ET:

```
DFS058I TRACE COMMAND COMPLETED
```

ストレージ・マネージャーのトレース・テーブルがもはや必要でない場合。

入力 ET:

```
/TRACE SET OFF TABLE STRG
```

応答 ET:

```
DFS058I TRACE COMMAND COMPLETED
```

/TRACE TABLE コマンドの例 4

セキュリティー・トレース・テーブルへのオンライン・トレースをオンにするには、次のようにします。

入力 ET:

```
/TRACE SET ON TABLE SECT
```

応答 ET:

```
DFS058I TRACE COMMAND COMPLETED
```

/TRACE TCO コマンド

/TRACE TCO コマンドは、TCO (時間制御オペレーション) アクティビティをトレースするために使用します。TCO キーワードを使った最初の */TRACE* コマンドでは、デフォルトのモジュールとレベル情報が使用されます。

TCO トレースは、基本的には DC LINE または NODE トレースであり、作成された情報は、X'67' ログ・レコード・タイプにも書き込まれます。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』

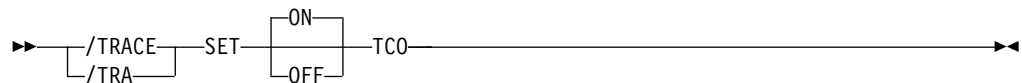
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 364. /TRACE TCO コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/TRACE	X	X	X
SET	X	X	X
TCO	X	X	X

構文



/TRACE TIMEOUT コマンド

/TRACE TIMEOUT コマンドは、入出力タイムアウト検出機能を開始または停止するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 1058 ページの『構文』
- 1058 ページの『キーワード』
- 1058 ページの『使用上の注意』

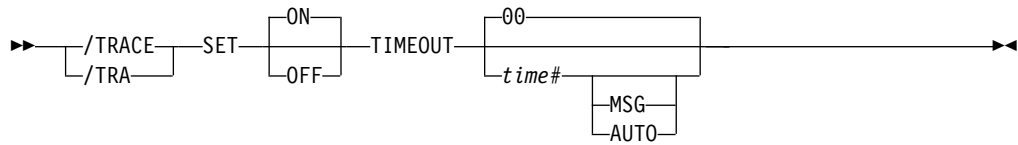
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 365. /TRACE TIMEOUT コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/TRACE	X	X	X
AUTO	X		X
MSG	X		X
SET	X	X	X
TIMEOUT	X		X

構文



キーワード

以下のキーワードは、/TRACE TIMEOUT コマンドに有効です。

time#

入出力応答の期限が経過しているかどうかを判別するために使用される時間 (分数)。この分数が過ぎると、応答は時間切れです。この範囲は、1 から 60 までの数字で、デフォルト値は 0 です。

time# が 0 の場合、または指定されていない場合、1 つのノードに対して入出力が開始されると、その状況を、/DISPLAY TIMEOVER コマンドを使用して表示できるように、そのノードはキューに入れられます。ノードが応答を受け取らず、時間が経過した場合、ユーザーには通知は行われず、ノードは再活動化されません。

time# が 0 でない場合には、以下のキーワードを使うことができます。

MSG

入出力が *time#* の分数より長くかかった場合、メッセージがマスター端末に対して出されることを示します。メッセージは時間が経過したことを示します。

AUTO

入出力の所要時間が *time#* 分を超えている場合に、IMS はマスター端末にメッセージを出し、そして、VTAMVARY NET,INACT および VARY NET,ACT を実行します。共用されない操作可能な装置については、/OPNDST が実行されます。ISC ノードの場合は、メッセージは出されませんが、セッションの自動 (AUTO) 再始動は行われず、VTAM VARY コマンドは出されません。

使用上の注意

タイムアウトが発生した場合、時間または取るべきアクションについて変更したい時は、タイムアウト検出機能がアクティブである間に、/TRACE SET ... TIMEOUT コマンドを入力することができます。ただし、ノードが入力または出力を送受信中の場合は、ノードは /TRACE ... TIMEOUT コマンドの直前の設定によって機能します。これが好ましくない場合は、/TRACE SET ... TIMEOUT を再入力する前に、/TRACE SET OFF TIMEOUT コマンドを入力する必要があります。

IMS の初期設定時にタイムアウト・トレース機能が失敗した場合は、エラー・メッセージが出されて /TRACE SET ... TIMEOUT コマンドはリジェクトされます。

VTAM TIMEOUT 入出力機能が、IMS シャットダウン中に自動的に開始されます。これは 1 分間および AUTO に設定されます。

/TRACE TMEMBER コマンド

/TRACE TMEMBER コマンドは、IMS Open Transaction Manager Access (OTMA) クライアントに関する OTMA クライアント・アクティビティをトレースするために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 1060 ページの『使用上の注意』
- 1060 ページの『例』

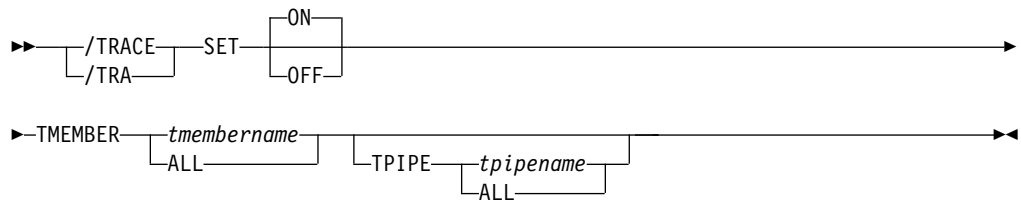
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 366. /TRACE TMEMBER コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/TRACE	X	X	X
SET	X	X	X
TMEMBER	X		X
TPIPE	x		X

構文



キーワード

以下のキーワードは、/TRACE TMEMBER コマンドに有効です。

TPIPE

OTMA クライアント用のトランザクション・パイプ・アクティビティをトレースするために使用されます。

/TRACE TMEMBER TPIPE コマンドを処理しているときに、IMS は、トレース状況の一時トランザクション・パイプを作成します (まだ存在していない場合)。IMS は、トランザクション・パイプに対する最初のメッセージを送信または受信する時に、そのトランザクション・パイプの同期状況を設定します。

指定されたメンバーがスーパーメンバーである場合は、そのスーパーメンバーのトランザクション・パイプのトレース状況が更新されます。指定されたメンバー

が、保留キュー出力をスーパーメンバーによって管理されている通常メンバーである場合は、その通常メンバーのトランザクション・パイプとスーパーメンバーのトランザクション・パイプの両方のトレース状況が更新されます。

使用上の注意

指定されたメンバーがスーパーメンバーである場合は、そのスーパーメンバーのトレース状況が更新されます。指定されたメンバーが、保留キュー出力をスーパーメンバーによって管理されている通常メンバーである場合は、その通常メンバーとスーパーメンバーの両方のトレース状況が更新されます。トレース状況は、コマンドを処理する IMS でのみ更新されます。指定されたメンバーが、保留キュー出力をスーパーメンバーによって管理されている通常メンバーである場合、その通常メンバーとスーパーメンバーの両方のトレース状況を更新できなかったときには、どちらのメンバーの状況も更新されません。そのトレース状況を更新できなかった通常メンバーの名前が含まれている DFS058I COMMAND COMPLETED EXCEPT メッセージが発行されます。

トランザクション・パイプ・アクティビティーも含め、すべてのメンバー・アクティビティーをトレースするために、TRACE SET ON/OFF TMEMBER xxxx コマンドが発行されます。このコマンドは、TRACE SET ON/OFF TMEMBER xxxx TPIPE ALL コマンドのスーパーセットです。

例

以下の式は、/TRACE TMEMBER コマンドの例です。

入力 ET:

```
/TRACE SET ON TMEMBER CLIENT1 TPIPE TPIPESY
```

応答 ET:

```
DFS058I 15:45:05 TRACE COMMAND COMPLETED   SYS3  
DFS996I *IMS READY*   SYS3
```

/TRACE TRAN コマンド

/TRACE TRAN コマンドは、特定のトランザクションのデータ通信 (DC) の DL/I 部分をトレースするために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 1061 ページの『構文』
- 1061 ページの『使用上の注意』
- 1061 ページの『同等の IMS タイプ 2 コマンド』
- 1062 ページの『例』

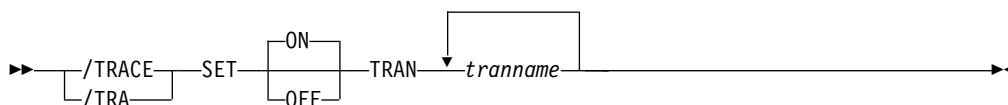
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 367. /TRACE TRAN コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/TRACE	X	X	X
SET	X	X	X
TRAN	X		X

構文



使用上の注意

ユーザー・アプリケーション・プログラムにより出される TPPCB に対するそれぞれの DL/I 呼び出しは、DC 呼び出しハンドラー DFSDLA30 に入ったときとそこから出るときにトレースされます。DFSDLA30 に入ったときに、タイプ 6701-LA3A レコードが書き込まれ、DFSDLA30 から出るときに、タイプ 6701-LA3B レコードが書き込まれます。

さらに、共用キュー環境では、トランザクションに使用可能なメッセージがあるという通知を CQS から受け取るたびに、タイプ 6701-ITQA レコードがモジュール DFSITQS0 によって書き込まれます。

タイプ 6701-LA3A および 6701-LA3B レコードには、それぞれ以下の項目が含まれます (該当する場合)。

- TPPCB
- 入出力域の最高 64 バイト
- スケジューラー・メッセージ・ブロック (SMB)
- 区画仕様テーブル (PST)

それぞれのタイプ 6701-ITQA レコードには、以下の項目が含まれます。

- レコードを書き込んだ IMS の IMSID
- トランザクションに処理するメッセージがあることを通知するために DFSITQS0 へのキューに入れられた AWE
- SMB

同等の IMS タイプ 2 コマンド

以下の表は、各種の /TRACE TRAN コマンドと、類似の機能を実行する IMS タイプ 2 コマンドを示しています。

表 368. /TRACE TRAN コマンドと同等のタイプ 2 コマンド

タスク	/TRACE TRAN コマンド	類似の IMS タイプ 2 コマンド
トランザクションのトレースを開始する。	/TRACE SET ON TRAN tranname	UPDATE TRAN NAME(tranname) START(TRACE)

表 368. /TRACE TRAN コマンドと同等のタイプ 2 コマンド (続き)

タスク	/TRACE TRAN コマンド	類似の IMS タイプ 2 コマンド
トランザクションのトレースを停止する。	/TRACE SET OFF TRAN <i>trannname</i>	UPDATE TRAN NAME(<i>trannname</i>) STOP(TRACE)

例

以下の式は、/TRACE TRAN コマンドの例です。

モジュール DFSDLA30 を呼び出してトランザクション APPLE を処理する時は、常に PCB、入出力域、および PST をログに記録します。

入力 ET:

```
/TRACE SET ON TRAN APPLE
```

応答 ET:

```
DFS058I TRACE COMMAND COMPLETED
```

関連資料:

1429 ページの『UPDATE TRAN コマンド』

/TRACE TRAP コマンド

/TRACE TRAP コマンドは、MFS ブロックの上書きを検出するために使用します。/TRACE が使用されている場合は、IMS は、MFS ブロック内で上書きを検出しようとしています。

上書きが発生している場合は、IMS は警告メッセージを送ります。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』

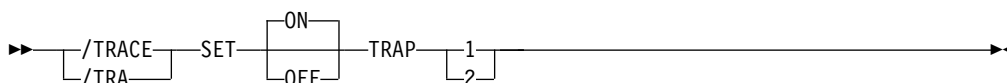
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。


表 369. /TRACE TRAP コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/TRACE	X	X	X
SET	X	X	X
TRAP	X		X

構文



関連資料:

 [トレース・レコード \(診断\)](#)

/TRACE UNITYPE コマンド

/TRACE UNITYPE コマンドは、指定されたタイプの物理端末に関連したイベントをトレースするために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 1064 ページの『使用上の注意』

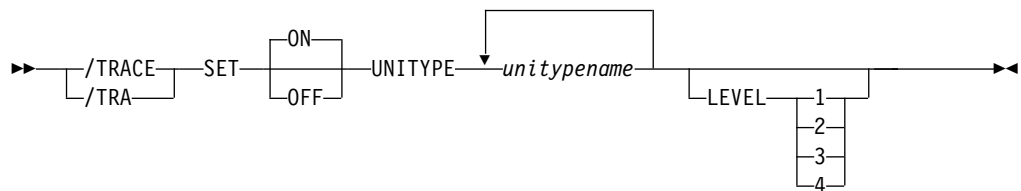
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 370. /TRACE UNITYPE コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/TRACE	X	X	X
LEVEL	X		X
SET	X	X	X
UNITYPE	X		X

構文



キーワード

以下のキーワードは、/TRACE UNITYPE コマンドに有効です。

LEVEL

このキーワードは、LINE、LINK、NODE、または UNITYPE トレース機能を拡張します。LEVEL 指定は、IMS システム全体のためのものであり、別の値を指定して /TRACE を再発行するか、または IMS 制御領域を再始動することによってのみ変更されます。

LEVEL は、望みの制御ブロック・トレース情報の範囲を示します。指定された制御ブロックは、該当する時にのみトレースされます。すべてのレベルは、数値的にそれ以下のレベルも含んでいます。次のリストは、レベルと関連ブロックを示しています。

レベル ブロック

- 1 CLB (DECB) または LLB(MSC)
 CTB または LTB(MSC)
 IOB (非 VTAM 回線用) または IOSB (チャンネル間リンク用 MSC)
- 2 CNT または LNB(MSC)
 CXB
 CRB
 CIB
 CCB
 PD スタック
- 3 キュー・マネージャー・バッファ
 入出力回線バッファ
 LXB (チャンネル間リンクおよびプロセッサ・ストレージ間用)
- 4 保管域セット (IMS ディスパッチング)

最初の /TRACE SET ON コマンドが LEVEL を指定しない場合には、デフォルトの 4 が使われます。以降のコマンドで LEVEL を指定すると、デフォルトが変更されます。

MODULE

このキーワードは、LINE、LINK、NODE、または UNITYPE トレース機能を拡張するために使用されます。MODULE 指定は、IMS システム全体のためのものであり、別の値を指定して /TRACE を再発行するか、または IMS 制御領域を再始動することによってのみ変更されます。

MODULE はどのモジュールがその制御ブロックをトレースするかを示します。

ALL 装置依存のモジュール (DDM) と MFS の両方

DDM コミュニケーション・アナライザと装置依存のモジュールのインターフェース

MFS コミュニケーション・アナライザおよびメッセージ形式サービス・モジュール・インターフェース

最初の /TRACE SET ON コマンドが MODULE を指定しない場合には、デフォルトの ALL が使われます。以降のコマンドで MODULE を指定すると、デフォルトが変更されます。

使用上の注意

UNITYPE キーワードは、特定のタイプの全端末をトレースするために使用されます。パラメーター (*unitypename*) は、/DISPLAY NODE および /DISPLAY

LINE/PTERM コマンドによって TYPE 欄に表示された ID と類似しています。以下の表は、UNITYTYPE パラメーターの端末タイプを示しています。

表 371. UNITYTYPE パラメーターと端末タイプ

UNITYTYPE パラメーター	端末タイプ
2260R	2260/2265 REMOTE
3286	3284/3286
2980	2980
3270R	3270 REMOTE
3270L	3270 LOCAL
RDR/PTR	LOCAL SYSIN/SYSOUT
FIN	3600
3277	3270 VTAM
SLU1	SLU TYPE 1
SLU2	SLU TYPE 2
SLUP	SLU TYPE P
LUT6	LU TYPE 6
NTO	NTO
CONSOLE	z/OS SYSTEM CONSOLE
TWX	TWX SWITCHED
3275SW	3270 SWITCHED
MSCMTM	MSC メモリー間通信
MSCCTC	MSC チャネル間通信
MSCTCPIP	MSC TCP/IP 通信
MSCVTAM	MSC VTAM 通信

グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持される場合、/TRACE UNITYTYPE は、特定のタイプのノードすべてにグローバル・トレース状況を設定します。そのためには、すべての IMS システムで非アクティブ静的ノードが処理されるようにすることが必要です。UNITYTYPE キーワードには、総称パラメーターを指定する場合と同じ効果があります。グローバル・リソース情報が Resource Manager に保持されない場合、/TRACE UNITYTYPE はトレース状況をローカルに設定します。

第 28 章 /UNLOCK コマンド

/UNLOCK コマンドは、ほとんどの場合、以前に /LOCK コマンドでロックされていたリソースを解放するために使用されます。

端末が交換回線通信ネットワーク上にあり、物理端末または論理端末の切断が生じた場合は、その物理端末と照会論理端末に対して暗黙の /UNLOCK 処理が行われます。

ISC が使用されている場合、/UNLOCK コマンドは、割り振られたユーザーが割り当てられた論理端末でのみ使用できます。

このコマンドは、バッチ SPOC ユーティリティーを使用する IMSplex に対して発行できます。

/UNLOCK SYSTEM は、マスター端末または XRF システムのシステム・コンソールから入力された場合にのみ有効です。

リソース名は、DATABASE、LTERM、PROGRAM、および TRANSACTION のキーワードについて、SAF でのパスワード保護機能によって定義することができます。DFSPBxxx IMS.PROCLIB メンバーでパラメーター LOCKSEC=Y (N がデフォルト) が指定されている場合、IMS は SAF およびユーザー出口を呼び出します。該当リソースが SAF に定義されていないか、または定義されていてユーザーに許可されている場合は、コマンドが処理されます。リソースが SAF に定義されているが、その使用が許可されていない場合は、コマンドはリジェクトされ、DFS3689W メッセージが出されます。

パスワード・ブラケット内で指定されるピリオドは、区切り文字として扱われません。

サブセクション:

- 『/UNLOCK DB コマンド』
- 1069 ページの『/UNLOCK LTERM コマンド』
- 1070 ページの『/UNLOCK NODE コマンド』
- 1071 ページの『/UNLOCK PGM コマンド』
- 1072 ページの『/UNLOCK PTERM コマンド』
- 1073 ページの『/UNLOCK SYSTEM コマンド』
- 1075 ページの『/UNLOCK TRAN コマンド』

/UNLOCK DB コマンド

/UNLOCK DB コマンドは、アンロックされるデータベースを指定します。

サブセクション:

- 1068 ページの『環境』
- 1068 ページの『構文』

ん)。/DBR コマンドが HALDB マスターに対して出された場合は、/DISPLAY DB コマンドの表示出力は HALDB マスターを示しますが (STOPPED のように)、区画の状況は表示しません。

それぞれの区画は、その HALDB マスターのアクセス制限を継承します。/DBD コマンドが HALDB マスターに対して出された場合は、そのすべての区画がクローズします。そのいずれの区画に対しても後で参照が行われると、区画のアクセスが UPDATE または EXCLUSIVE であっても、区画が入力用にオープンすることになります。DBRC の許可状態は、限定されたアクセスを反映しています。

このコマンドは APPC クライアントおよび OTMA クライアントで発行できません。

/UNLOCK DB は、マスター端末、システム・コンソール、TCO スクリプト、または AOI アプリケーション・プログラムから入力された場合にのみ有効です。

データベースが静止している間は、このコマンドを正常に処理することはできません。

同等の IMS タイプ 2 コマンド

以下の表は、各種の /UNLOCK DB コマンドと、類似の機能を実行する IMS タイプ 2 コマンドを示しています。

表 373. /UNLOCK DB コマンドと同等のタイプ 2 コマンド

タスク	/UNLOCK DB コマンド	類似の IMS タイプ 2 コマンド
データベースをアンロックする。	/UNLOCK DB <i>dbname</i>	UPDATE DB NAME(<i>dbname</i>) SET(LOCK(OFF))

例

以下の式は、/UNLOCK DB コマンドの例です。

入力 ET:

```
/UNLOCK DB TREEFARM
```

応答 ET:

```
DFS058I UNLOCK COMMAND COMPLETED
```

説明: データベース TREEFARM はアンロックされ、使用可能です。

関連資料:

1114 ページの『UPDATE DB コマンド』

/UNLOCK LTERM コマンド

/UNLOCK LTERM コマンドは、アンロックされる論理端末を指定します。このキーワードは、入力物理端末とその物理端末に割り当てられた論理端末に対してのみ適用されます。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『使用上の注意』

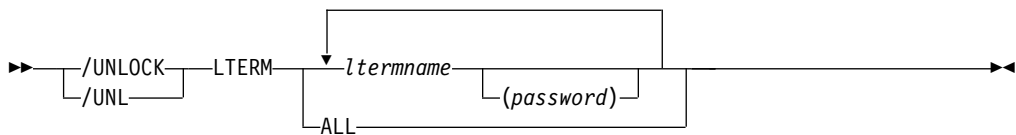
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 374. /UNLOCK LTERM コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/UNLOCK	X	X	X
LTERM	X		X

構文



使用上の注意

/UNLOCK LTERM ALL コマンドは、入力物理端末に関連するすべての論理端末がパスワードをもっていない場合のみ使用されます。

/UNLOCK LTERM は、入力物理端末に対してのみ適用されます。

/UNLOCK LTERM は、OM API からは使用できません。

/UNLOCK NODE コマンド

/UNLOCK NODE コマンドは、アンロックされる VTAM ノードを指定します。このキーワードは、入力物理端末とその物理端末に割り当てられた論理端末に対してのみ適用されます。

サブセクション:

- 『環境』
- 1071 ページの『構文』
- 1071 ページの『使用上の注意』

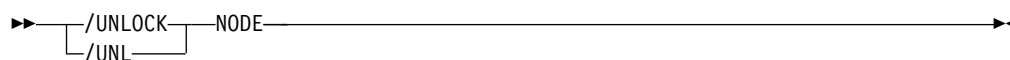
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 375. /UNLOCK NODE コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/UNLOCK	X	X	X
NODE	X		X

構文



使用上の注意

/UNLOCK NODE は、入力物理端末に対してのみ適用されます。

/UNLOCK NODE は、OM API からは使用できません。

/UNLOCK PGM コマンド

/UNLOCK PGM コマンドは、アンロックされるアプリケーション・プログラムを指定します。

このコマンドは APPC クライアントおよび OTMA クライアントで発行できません。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 1072 ページの『使用上の注意』
- 1072 ページの『同等の IMS タイプ 2 コマンド』
- 1072 ページの『例』

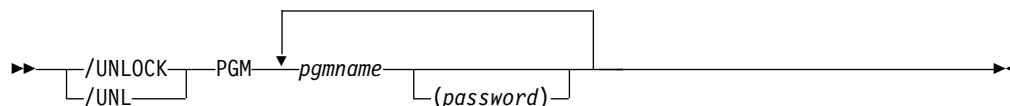
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 376. /UNLOCK PGM コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/UNLOCK	X	X	X
PGM	X	X	X

構文



使用上の注意

/UNLOCK PGM コマンドは、マスター端末、システム・コンソール、TCO スクリプト、または AOI アプリケーション・プログラムから入力された場合にのみ有効です。

同等の IMS タイプ 2 コマンド

以下の表は、各種の /UNLOCK PGM コマンドと、類似の機能を実行する IMS タイプ 2 コマンドを示しています。

表 377. /UNLOCK PGM コマンドと同等のタイプ 2 コマンド

タスク	/UNLOCK PGM コマンド	類似の IMS タイプ 2 コマンド
プログラムをアンロックする。	/UNLOCK PGM <i>pgmname</i>	UPDATE PGM NAME(<i>pgmname</i>) SET(LOCK(OFF))

例

以下の式は、/UNLOCK PGM コマンドの例です。

入力 ET:

```
/UNLOCK PGM APPLETRE
```

応答 ET:

```
DFS058I UNLOCK COMMAND COMPLETED
```

説明: アプリケーション・プログラム APPLETRE はアンロックされ、実行可能です。

関連資料:

1355 ページの『UPDATE PGM コマンド』

/UNLOCK PTERM コマンド

/UNLOCK PTERM コマンドは、アンロックされる物理端末を指定します。このキーワードは、入力物理端末とその物理端末に割り当てられた論理端末に対してのみ適用されます。

このコマンドは APPC クライアントおよび OTMA クライアントで発行できません。

サブセクション:

- 1073 ページの『環境』
- 1073 ページの『構文』
- 1073 ページの『使用上の注意』
- 1073 ページの『例』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 378. /UNLOCK PTERM コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/UNLOCK	X	X	X
PTERM	X		X

構文

▶▶ /UNLOCK PTERM
└─┬─┘
 /UNL

使用上の注意

/UNLOCK PTERM は、入力物理端末に対してのみ適用されます。

/UNLOCK PTERM は、OM API からは使用できません。

例

以下の式は、/UNLOCK PTERM コマンドの例です。

入力 ET:

```
/UNLOCK PTERM
```

応答 ET:

```
DFS058I UNLOCK COMMAND COMPLETED
```

説明: このコマンドを入力した物理端末はアンロックされます。

/UNLOCK SYSTEM コマンド

/UNLOCK SYSTEM コマンドは、XRF 複合システムで新規に作成されたアクティブ・システムに、入出力防止の完了を通知します。

サブセクション:

- 『環境』
- 1074 ページの『構文』
- 1074 ページの『使用上の注意』
- 1074 ページの『例』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 379. /UNLOCK SYSTEM コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/UNLOCK	X	X	X
SYSTEM	X		X

構文

```

▶▶ /UNLOCK SYSTEM ◀◀
   └─┬─┘
     /UNL
  
```

使用上の注意

入出力防止は、障害が起きたアクティブ・システムがデータベースへ書き込みができないようにするために、テークオーバー時に開始されます。次に代替システムは、データベースの保全性を確保するためと、新規のトランザクション処理をできるだけ早く使用可能にするために、入出力の許容を開始します。 /UNLOCK SYSTEM は、入出力許容フェーズの処理を終了させます。

/UNLOCK SYSTEM は、マスター端末または XRF システムのシステム・コンソールから入力された場合にのみ有効です。

例

以下の式は、/UNLOCK SYSTEM コマンドの例です。

次の 3 つの図は、新規に作成されたアクティブ・システムでの /UNLOCK SYSTEM コマンドの使用を示したものです。それぞれの図は、新規に作成されたアクティブ・システム IMSB のフォーマット設定されたマスター画面を示します。

以下の表は、処理の入出力許容フェーズ (入出力防止待ち) で新規に作成されたアクティブ・システムの画面を示しています。データベース DD41M803 に入出力許容 EEQE があります。

```

02/05/15 16:19:03 RSENAME: DFSRSENM ACTIVE AWAITING I/O PREVENTION IMSB
DFS994I *CHKPT 85135/152931**SIMPLE**
DFS3499I ACTIVE DDNAMES: MODBLKSA IMSACBA FORMATA MODSTAT ID: 11
DFS3804I LAST CHKPT ID VALID FOR RESTART: 85135/161847-BUILDQ: 85135/161213
DFS994I TAKEOVER COMPLETED.
DFS3859I 16:18:29 PRIORITY 4 SESSIONS SWITCHED.
DFS3860I 16:18:29 ALL TERMINAL SESSIONS SWITCHED.
-----
データベース
DD41M803
  ERROR DD  TYPE  BLOCK
  DD41M803 IOT   0000003F
*85135/161902*
                                     PASSWORD:
/dis db dd41m803 bkerr
  
```

図 3. 入出力許容フェーズの処理

以下の図は、/UNLOCK SYSTEM コマンドを使用して、入出力防止が完了したことを新規に作成されたアクティブ・システムに通知する画面を示しています (XRF

システム状況行には、もはや処理が入出力許容により低下しなくなったことが示されています)。

```
02/05/15 16:34:14 RSENAME: DFSRSENM ACTIVE IMSB
DFS994I *CHKPT 85135/161847**SIMPLE**
DFS3499I ACTIVE DDNAMES: MODBLKSA IMSACBA FORMATA MODSTAT ID: 11
DFS3804I LAST CHKPT ID VALID FOR RESTART: 85135/161847-BUILDQ: 85135/161213
DFS058 16:34:14 UNLOCK COMMAND IN PROGRESS
DFS0488I - UNLOCK COMMAND COMPLETED. RC = 00
DFS3860I 15:29:19 ALL TERMINAL SESSIONS SWITCHED.
-----
PASSWORD:
/unlock system
```


図 4. /UNLOCK SYSTEM コマンド

以下の図は、/UNLOCK SYSTEM 処理の一環として、データベース DD41M803 の入出力許容 EEQE が削除されたことを示す画面です。

```
02/05/15 16:35:00 RSENAME: DFSRSENM ACTIVE IMSB
DFS994I *CHKPT 85135/161847**SIMPLE**
DFS3499I ACTIVE DDNAMES: MODBLKSA IMSACBA FORMATA MODSTAT ID: 11
DFS3804I LAST CHKPT ID VALID FOR RESTART: 85135/161847 - BUILDQ: 85135/161213
DFS058 16:34:14 UNLOCK COMMAND IN PROGRESS
DFS0488I - UNLOCK COMMAND COMPLETED. RC = 00
DFS3860I 16:18:29 ALL TERMINAL SESSIONS SWITCHED.
-----
データベース
DD41M803
NO EEQE OR INCOMPLETE BACKOUT INFORMATION AVAILABLE
*85135/163500*
PASSWORD:
/dis db dd41m803 bkerr
```

図 5. /UNLOCK SYSTEM の処理の一部として削除された EEQE

関連概念:

 XRF プロセスのテークオーバー・フェーズ (システム管理)

/UNLOCK TRAN コマンド

/UNLOCK TRAN コマンドは、アンロックされるトランザクション・コードを指定します。

サブセクション:

- 1076 ページの『環境』
- 1076 ページの『構文』
- 1076 ページの『使用上の注意』
- 1076 ページの『同等の IMS タイプ 2 コマンド』
- 1076 ページの『例』

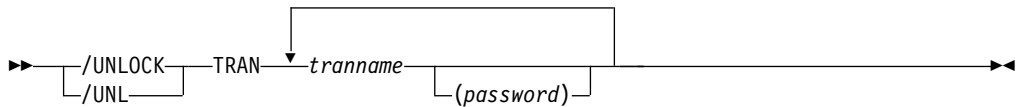
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 380. /UNLOCK TRAN コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
/UNLOCK	X	X	X
TRAN	X		X

構文



使用上の注意

/UNLOCK TRAN コマンドは、高速機能専用または CPI Communications ドリブン・トランザクション・プログラムには使用できません。

このコマンドは APPC クライアントおよび OTMA クライアントで発行できません。

/UNLOCK TRAN コマンドは、マスター端末、システム・コンソール、TCO スクリプト、または AOI アプリケーション・プログラムから入力された場合にのみ有効です。

同等の IMS タイプ 2 コマンド

以下の表は、各種の /UNLOCK TRAN コマンドと、類似の機能を実行する IMS タイプ 2 コマンドを示しています。

表 381. /UNLOCK TRAN コマンドと同等のタイプ 2 コマンド

タスク	/UNLOCK TRAN コマンド	類似の IMS タイプ 2 コマンド
トランザクションをアンロックする。	/UNLOCK TRAN <i>tranname</i>	UPDATE TRAN NAME(<i>tranname</i>) SET(LOCK(OFF))

例

以下の式は、/UNLOCK TRAN コマンドの例です。

入力 ET:

```
/UNLOCK TRAN SEED
```

応答 ET:

```
DFS058I UNLOCK COMMAND COMPLETED
```

説明: トランザクション SEED はアンロックされ、スケジュール可能です。

関連資料:

1429 ページの『UPDATE TRAN コマンド』

第 29 章 UPDATE コマンド

IMS UPDATE コマンドを使用して、IMS リソースまたはリソース記述子を更新します。

これらのコマンドは、TSO SPOC、IBM Management Console for IMS and DB2 for z/OS、IMS Application Menu の Manage Resources オプション、またはその他の OM API を介してコマンドを発行するユーザー作成プログラムを介して発行することができます。また、これらのコマンドは、バッチ SPOC ユーティリティを使用して、IMSplex に対して発行することもできます。

UPDATE コマンドは以下のとおりです。

- 『UPDATE AREA コマンド』
- 1095 ページの 『UPDATE DATAGRP コマンド』
- 1114 ページの 『UPDATE DB コマンド』
- 1146 ページの 『UPDATE DBDESC コマンド』
- 1153 ページの 『UPDATE IMS コマンド』
- 1167 ページの 『UPDATE IMSCON コマンド』
- 1283 ページの 『UPDATE LE コマンド』
- 1289 ページの 『UPDATE MSLINK コマンド』
- 1302 ページの 『UPDATE MSNAME コマンド』
- 1310 ページの 『UPDATE MSPLINK コマンド』
- 1321 ページの 『UPDATE ODBM コマンド』
- 1339 ページの 『UPDATE OLREORG コマンド』
- 1345 ページの 『UPDATE OTMADESC コマンド』
- 1355 ページの 『UPDATE PGM コマンド』
- 1374 ページの 『UPDATE PGMDESC コマンド』
- 1386 ページの 『UPDATE POOL コマンド』
- 1399 ページの 『UPDATE RM コマンド』
- 1410 ページの 『UPDATE RTC コマンド』
- 1417 ページの 『UPDATE RTCDESC コマンド』
- 1429 ページの 『UPDATE TRAN コマンド』
- 1467 ページの 『UPDATE TRANDESC コマンド』

UPDATE AREA コマンド

UPDATE AREA コマンドは、エリア・リソースの状況を変更するために使用します。

UPDATE AREA コマンドが発行された場合、コマンドは、そのコマンドの経路指定先の IMS によってのみ処理されます。このコマンドは、エリアを共有している IMSplex 内の他の IMS 上のエリアをプリロードまたは事前オープンしません。

UPDATE AREA コマンドは OM により経路指定されます。OM は、特定の経路指定が指定されていない限り、すべてのアクティブな DB/DC または DBCTL IMS システムを宛先として、このコマンドを経路指定します。OM は、1 つの IMS をコマンド・マスターとして選択します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 1081 ページの『キーワード』
- 1085 ページの『使用上の注意』
- 1086 ページの『同等の IMS タイプ 1 コマンド』
- 1086 ページの『出力フィールド』
- 1087 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1091 ページの『例』

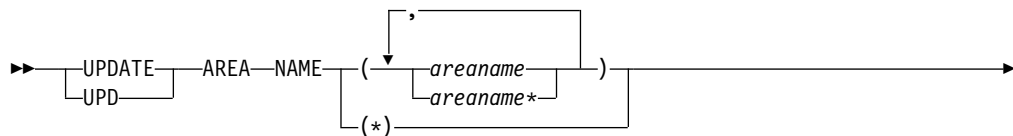
環境

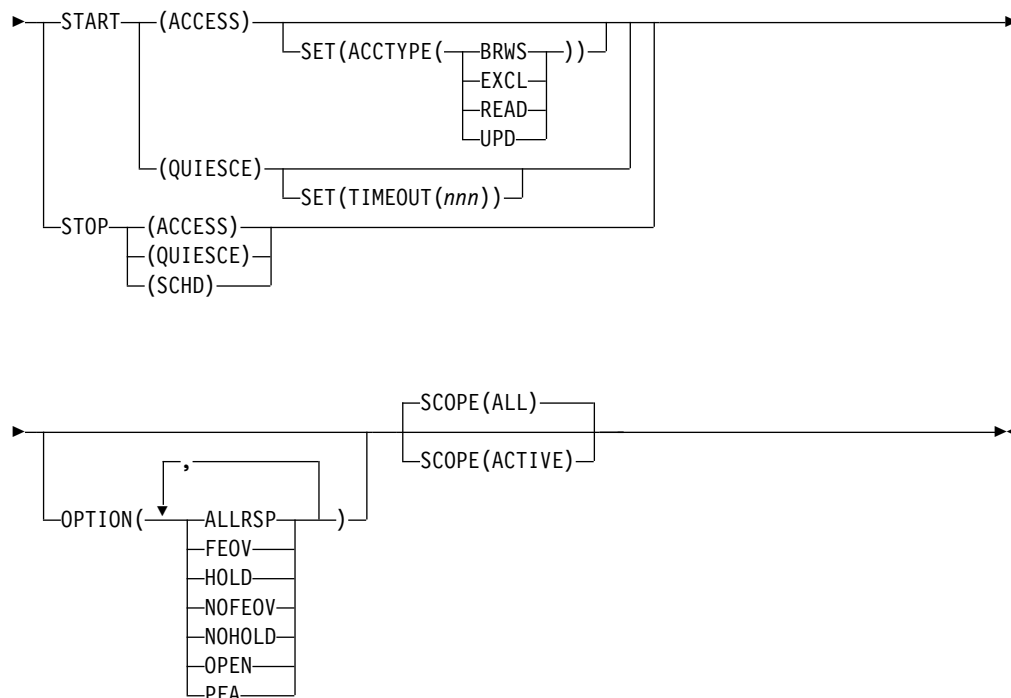
以下の表には、UPDATE AREA コマンドおよびキーワードを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 382. UPDATE AREA コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
UPDATE AREA	X	X	
NAME	X	X	
OPTION	X	X	
SCOPE	X	X	
START	X	X	
STOP	X	X	

構文





キーワード

以下のキーワードは、UPDATE AREA コマンドに有効です。

NAME()

処理される特定のエリアの名前、または処理されるエリアのグループを指定します。

ワイルドカード・パラメーターを指定することができます。総称またはワイルドカード・パラメーターに一致するエリア名が処理されます。特定名またはワイルドカード名の場合は、処理されたすべてのエリア名について応答行が戻されます。

NAME(*) は、システム内のすべてのエリアにコマンドを適用することを示します。NAME(*) を指定した場合は、エラーになったエリア名のみについて応答行が戻されます。NAME(*) と OPTION(ALLRSP) を同時に指定した場合は、処理されたすべてのエリア名について応答行が戻されます。

OPTION()

実行する追加の機能を指定します。以下は追加機能のリストです。

ALLRSP

コマンドで処理されたすべてのエリアについて応答行を戻すことを示します。ALLRSP は、NAME(*) を指定した場合のみ有効です。デフォルトのアクションでは、エラーになったエリアについてのみ応答行が戻されます。

FEOV コマンド処理が完了した後で、ボリュームの終わりを強制することを示します。IMS ログは次の OLDS に切り替わり、STOP(QUIESCE) が指定されない限りは単純チェックポイントが取られます。この切り替えには、ログ保存を目的とするリカバリー・

ポイントとしてのマークが付けられます。STOP(QUIESCE) が指定された場合は、単純チェックポイントは取られません。

FEOV は、START(QUIESCE) OPTION(NOHOLD)、STOP (ACCESS)、または STOP(QUIESCE) を指定した場合のみ有効です。

START(QUIESCE) OPTION(NOHOLD) または STOP(QUIESCE) を指定した場合は、OPTION(FEOV) がデフォルトです。

静止処理では、静止ポイントの到達後にボリュームの終わりが強制され、静止が解放される前にログが切り替えられるため、新しい更新はすべて新しい IMS ログに記録されます。この処理は、START(QUIESCE) OPTION(NOHOLD) による静止の停止処理時、または STOP(QUIESCE) が発行されて前の START(QUIESCE) OPTION(HOLD) から静止が解放されるときに発生します。

HOLD

QUIESCE が正常に実行された後に、エリアを静止状態のままにすることを指定します。DEDB エリアの静止を解放するには、後から STOP(QUIESCE) を発行する必要があります。HOLD は、START(QUIESCE) キーワードを指定した場合に有効です。このキーワードは、NOHOLD キーワードと同時に指定できません。

NOFEOV

コマンド処理の完了後にボリュームの終わりを強制しないことを示します。IMS ログは次の OLDS に切り替わらず、単純チェックポイントは取られません。

NOFEOV は、START(QUIESCE) OPTION(NOHOLD)、STOP (ACCESS)、または STOP(QUIESCE) を指定した場合のみ有効です。STOP(ACCESS) と一緒に指定された場合、OPTION(NOFEOV) がデフォルトです。

NOHOLD

QUIESCE が正常に実行された後に、エリアの静止状態を自動的に解放することを指定します。HOLD と NOHOLD のいずれも指定しなかった場合は、NOHOLD が指定されます。NOHOLD は、START(QUIESCE) キーワードを指定した場合に有効です。このキーワードは、HOLD キーワードと同時に指定できません。

OPEN

DEDB エリアが DBRC に PREOPEN として登録されていない場合でも、NAME() パラメーターに指定されている DEDB エリア・データ・セットを開くように指定します。OPTION(OPEN) は、このコマンドを受け取るすべての IMS システムによってローカルで処理され、RM でグローバル状況として維持されません。

PFA DEDB エリアの RECON データ・セット内に、それ以降の許可を阻止する「Prevent Further Authorization (PFA)」状況を設定またはリセットします。DEDB エリアへのアクセスを可能にするには、UPDATE AREA START(ACCESS) で PFA オプションを使用します。DEDB エリアへのアクセスを阻止するには、UPDATE AREA STOP (ACCESS|SCHD) で PFA オプションを使用します。

OPTION(PFA) を指定した場合、コマンド・マスター IMS でコマンドが正常に実行された場合にのみ、マスター IMS は RECON を更新します。

SCOPE()

IMS がどこへ変更を適用するかを指定します。デフォルトは ALL です。

ALL

コマンドの経路指定先のアクティブな IMS システムに、変更が適用されます。ユーザーがグローバル・エリア状況を維持するように指定している場合は、RM で維持されている値を更新することにより、変更はグローバルにも適用されます。RM 状況は、コマンド・マスター IMS によってのみ更新されます。グローバル・エリア状況が維持されていない場合は、コマンド・アクションは SCOPE(ACTIVE) コマンドと同じです。

このオプションは静止機能には適用されません。QUIESCE の有効範囲は、常に IMSplex 全体の使用エリアのすべてのインスタンスです。

DEDB エリアでは、QUIESCE のグローバル状況はありません。

START(QUIESCE) または STOP(QUIESCE) に SCOPE(ALL) を使用しても、このエリアのグローバル状況は変更されません。

ACTIVE

コマンドの経路指定先のアクティブな IMS システムに、変更が適用されます。RM リソース構造内に維持されているグローバル状況情報は、SCOPE(ACTIVE) コマンドでは変更されません。

このオプションは静止機能には適用されません。QUIESCE の有効範囲は、常に IMSplex 全体の使用エリアのすべてのインスタンスです。QUIESCE を IMSplex のサブセットにのみ適用することはできません。

SCOPE(ALL) が指定されている場合、アクティブな IMS システムでローカルに、および RM でグローバルに、情報を更新する UPDATE AREA コマンド・キーワードには、以下のものがあります。

- START(ACCESS)
- STOP(SCHD)
- STOP(ACCESS)

SET() 変更される属性値を指定します。

ACCTYPE()

指定されたエリアについてのアクセス・インテントを指定します。このキーワードを指定できるのは、START(ACCESS) を指定した場合のみです。このキーワードは、DEDB のデータベース・アクセス・インテントをオーバーライドします。

以下のいずれかのキーワードを指定することができます。

BRWS

指定されたエリアは、この IMS サブシステムでは読み取り専用処理に使用できることを指定します。このサブシステムでエリアを使用できるのは、GO (PROCOPT=GO) という PCB 処理オプション

をもつプログラムだけです。GO 処理オプションを使用してデータにアクセスするプログラムは、コミットされていないデータにアクセスする可能性があります。これは、共用 IMS サブシステムがエリアを更新中である可能性があるためです。エリアは読み取り専用処理用にオープンされます。

EXCL

指定されたエリアを、この IMS サブシステムで排他的に使用することを指定します。この排他的アクセスは、エリアが DBRC に登録してあるときのみ保証されます。

READ

指定されたエリアは、この IMS サブシステムで読み取り処理に使用できることを指定します。更新意図をもつプログラムは、スケジュールすることはできませんが、エリアを更新することはできません。READ の ACCTYPE では、データは保安全性付きの読み取りで読み取られ (ロックが行われます)、GO 処理オプションを使用するプログラムだけでなく、すべてのプログラムがデータにアクセスできます。これが、BRWS の ACCTYPE とは異なる点です。エリアは読み取り用にオープンされます。

UPD

指定されたエリアは、この IMS サブシステムでは読み取り処理に加えて更新処理にも使用できることを指定します。

TIMEOUT (nnn)

DEDB エリア静止でタイムアウトが発生するまでの秒数を指定します。タイムアウト値に指定できる範囲は、1 から 999 秒です。TIMEOUT パラメーター値は、IMS PROCLIB データ・セットの DFSCGxxx メンバー内の DBQUIESCETO パラメーターをオーバーライドすることができます。TIMEOUT パラメーターが省略され、DBQUIESCETO パラメーターが指定されない場合、デフォルトのタイムアウト値は 30 秒です。TIMEOUT キーワードは、START(QUIESCE) キーワードを指定した場合に有効です。

START()

開始する属性を指定します。

ACCESS

割り振りまたは再割り振りする DEDB の特定のエリアを指定します。

仮想記憶オプション (VSO) エリアについては、UPDATE AREA START(ACCESS) を使用することにより、PREOPEN オプションで定義されているエリアを事前オープンすることができます。

PRELOAD オプションで定義されている VSO エリアの場合は、このコマンドを使用すると、エリアは、そのエリアの共用レベルに応じて、z/OS データ・スペースまたは XES 構造のいずれかにロードされます。仮想ストレージ内にある VSO エリアに対しては、このコマンドは無効です。

QUIESCE

コマンドに指定された DEDB エリアを静止し、新しいリカバリ

ー・ポイントを設定することを指定します。QUIESCE の有効範囲は、常に IMSplex 全体の使用エリアのすべてのインスタンスです。QUIESCE を IMSplex のサブセットにのみ適用することはできません。

STOP()

停止する属性を指定します。

ACCESS

指定された DEDB エリアのアクセスと更新を停止し、それらのエリアをクローズします。

VSO エリアを対象とする UPDATE AREA STOP(ACCESS) コマンドは、データ・スペースまたは XES 構造からエリアを除去し、更新を強制的に DASD に書き戻します。

UPDATE AREA STOP(ACCESS) コマンドによりクローズされたエリアをオープンして再割り振りするには、UPDATE AREA START(ACCESS) コマンドが必要です。

QUIESCE

コマンドに指定された DEDB エリアの静止を解放して、再び使用可能にすることを指定します。

コマンドを正常に完了するためにはリストされた各エリア・リソースが静止されている必要がある START(QUIESCE) とは異なり、STOP(QUIESCE) は、一部のリソースが静止状態になっていない、あるいは静止状態から解放することができない場合であっても、リストされた各リソースの処理を続行することができます。そのような静止状態になっていない、あるいは静止状態から解放できないリソースでは、コマンドは、それらの各リソースに対して応答行を返します。

SCHD

エリアに関連したデータ・セットをクローズして割り振り解除することを指定します。

注: UPDATE AREA STOP(SCHD) により停止されたエリアを再割り振りするには、UPDATE AREA START(ACCESS) が必要です。

HSSP 処理中に UPDATE AREA STOP(SCHD) が処理された場合は、エリアは現在のコミット処理の完了後に解放されます。コマンドを出したときに何らかのイメージ・コピー・オプションが処理中だった場合は、継続して行われるシステム操作が影響を受けることがあります。

z/OS データ・スペースまたは XES 構造内にある VSO DEDB エリアに対して UPDATE AREA STOP(SCHD) コマンド・アクションを使用した場合は、結果としてデータ・スペースまたは XES 構造から VSO エリアが除去され、DASD に更新が書き込まれます。

使用上の注意

UPDATE AREA コマンドを指定できるのは、OM API を使用する場合のみです。このコマンドは XRF 代替システムでは許可されません。

UPDATE AREA START(Access) および UPDATE AREA STOP(SCHD) コマンドはリカバリー可能であり、X'22' ログ・レコードが書き込まれますが、UPDATE AREA STOP(Access) コマンドはリカバリー不能です。

UPDATE AREA コマンドが適用される DEDB エリアごとに、新規のログ・レコード X'594C' が書き込まれます。これには、グローバル状況とグローバル・コマンドのタイム・スタンプも含まれます。

UPDATE AREA コマンドは、ゼロ以外の完了コードと一緒に CCTXT を返すように拡張されています。CCTXT は最大 32 バイトで、完了コードの意味に関する情報が入っています。UPDATE AREA SCOPE(ALL) コマンドは、グローバル状況更新の完了コードを含む応答行を戻します。そのコードの CCTXT は、GBL CC です。

データベースが静止している間は、STOP(QUIESCE) 以外のキーワードを指定した場合、このコマンドを正常に処理することはできません。

同等の IMS タイプ 1 コマンド

以下の表は、各種の UPDATE AREA コマンドと、類似の機能を実行するタイプ 1 IMS コマンドを示しています。

表 383. UPDATE AREA コマンドと同等のタイプ 1 コマンド

UPDATE AREA コマンド	類似の IMS タイプ 1 コマンド
UPDATE AREA NAME(name) STOP(Access)	/DBR AREA areaname
UPDATE AREA NAME(name) START(Access)	/START AREA areaname
UPDATE AREA NAME(name) STOP(SCHD)	/STOP AREA areaname

出力フィールド

以下の表には、UPDATE AREA 出力フィールドが記載されています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、ERR が示されています。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 384. UPDATE AREA コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	キーワード	意味
AREA	N/A	エリア名。エリア名は常に戻されます。
CCTXT	error	完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
CC	N/A	出力行の完了コード。完了コードは常に戻されます。
GBL	SCOPE(ALL)	応答行がグローバル更新に関するものであることを示します。

表 384. UPDATE AREA コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	キーワード	意味
EERT	ERR	完了コードにさらに詳細な意味を付け加えるために戻されるエラー・テキストであり、これにはサービスからの戻りコードが含まれることがあります。ゼロ以外の完了コードの場合には、エラー・テキストが戻されることがあります。
MBR	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。エリア情報が表示された IMS の IMS ID。IMS ID は常に戻されます。

戻りコード、理由コード、および完了コード

IMS 戻りコードと理由コードは、UPDATE AREA コマンドによって OM に戻されます。UPDATE AREA コマンドの結果として戻される OM 戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 385. UPDATE AREA コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE AREA コマンドは正常に完了しました。
X'00000008'	X'00002014'	エリア名パラメーターに無効文字が検出されたため、UPDATE AREA コマンドは処理されません。
X'00000008'	X'00002040'	UPDATE AREA コマンドで、複数のキーワードまたは無効な組み合わせのフィルターが指定されました。例えば、以下のキーワードの組み合わせは正しくありません。 <ul style="list-style-type: none"> • START(ACCESS) および STOP(ACCESS) • STOP(ACCESS) および OPTION(OPEN) • STOP(SCHD) および OPTION(OPEN) • OPTION(NOFEOV,FEOV) 入力コマンドを検査し、正しい組み合わせを再入力してください。
X'00000008'	X'00005000'	IMODULE GETSTOR ストレージを取得できなかったため、UPD AREA コマンド処理は終了しました。

表 385. UPDATE AREA コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'0000000C'	X'00003000'	UPDATE AREA コマンドは、少なくとも 1 つのリソース名については正常に実行されました。1 つ以上のリソース名について、UPDATE AREA コマンドは正常に実行されていません。完了コードに、エラーの理由とリソース名が示されています。UPDATE AREA コマンドにより戻される可能性がある完了コードは、1089 ページの表 386 にリストされています。
X'0000000C'	X'00003004'	指定されたリソース名のすべてについて、UPDATE AREA コマンドが成功しませんでした。完了コードに、エラーの理由とリソース名が示されています。UPDATE AREA コマンドにより戻される可能性がある完了コードは、1089 ページの表 386 にリストされています。
X'00000010'	X'0000400C'	入力されたコマンドの変形は XRF 代替システムでは無効なため、UPDATE AREA コマンドは処理されません。
X'00000010'	X'00004024'	高速機能がインストールされていないため、UPDATE AREA コマンドは処理されません。
X'00000010'	X'00004025'	高速機能エリアが定義されていないため、UPDATE AREA コマンドがリジェクトされました。
X'00000010'	X'00004200'	IMS のシャットダウンが進行中であるため、コマンドは処理されません。
X'00000010'	X'00004208'	RMENV=NO に対して無効なコマンド。
X'00000010'	X'00004400'	RECON データ・セットの MINVERS が 11.1 ではありません。
X'00000014'	X'00005001'	WKAP または MAIN プール・ストレージを取得できなかったため、UPDATE AREA コマンド処理は終了しました。
X'00000014'	X'00005004'	DFSCOMD 応答バッファを取得できなかったため、UPDATE AREA コマンド処理は終了しました。
X'00000014'	X'00005008'	DFSPPOOL ストレージを取得できなかったため、UPDATE AREA コマンド処理は終了しました。
X'00000014'	X'0000500C'	AWE を取得できなかったため、UPDATE AREA コマンド処理は終了しました。
X'00000014'	X'00005FFF'	内部エラーが原因で、UPDATE AREA コマンド処理は終了しました。
X'02000008'	X'0000203C'	無効な TIMEOUT 値が指定されました。1 から 999 までの数値を指定する必要があります。

以下の表には、完了コードの説明が記載されています。UPDATE AREA コマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 386. UPDATE AREA コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、コマンドは正常に完了しました。
0C	COMMAND COMPLETE FOR NONE	このエラーは、すべてのエリアで静止処理を実行できなかった場合に返されます。
10	NO RESOURCE FOUND	リソースが見つかりません。
11	DUPLICATE RESOURCE NAME	コマンドで同じリソース名が複数回指定されているため、そのリソース名は無視されました。
17	ANOTHER CMD IN PROGRESS	このエラーは、別のデータベース・コマンドが進行中であったために、静止処理を開始できなかった場合に返されます。
53	NO RM ADDRESS SPACE	このエラーは、RM のアドレス・スペースが存在しないために、静止処理を開始できなかった場合に返されます。
55	NO FAST PATH INSTALLED	高速機能がインストールされていないため、コマンドは失敗しました。
81	DBRC ERROR	このエラーは、QUIESCE コマンド処理中に予期しない DBRC エラーが発生した場合に返されます。
90	INTERNAL ERROR	内部エラーが原因で、入力されたコマンドは処理されませんでした。
91	TIMEOUT ERROR	このエラーは、静止処理をタイムアウト期間内に完了できなかった場合に返されます。静止の処理がタイムアウト値を超えたか、処理に関与する IMSplex コンポーネントに障害が起きたか、ハングしている可能性があります。例えば、QUERY IMSPLEX コマンドを発行するか、z/OS システム・ログを調べて、IMSplex コンポーネントの状態を確認します。
92	COMMAND PROCESSING ERROR	コマンド・エラーが原因で、入力されたコマンドは処理されませんでした。エラーを説明するための固有の完了コードは生成できませんでした。エラー・テキストに、メッセージ番号と、完了コードに変換できなかった戻りコードが示されています。
A5	PREVENT FURTHER AUTH ON	データベースまたはエリアは「以後の許可禁止」として DBRC に対して定義されているため、入力されたコマンドは処理されませんでした。
A9	DB OR AREA AUTHORIZATION ERROR	DBRC に対するエリア許可が失敗しました。
D1	DATABASE WRITE ERROR	このエラーは、データベースで書き込みエラーが発生したために、静止処理を完了できなかった場合に返されます。
D2	DATABASE NEEDS BACKOUT	このエラーは、データベースでバックアウトが必要であったために、静止処理を完了できなかった場合に返されます。

表 386. UPDATE AREA コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
D3	DATABASE OR AREA NEEDS RECOVERY	このエラーは、データベースでリカバリーが必要であったために、静止処理を完了できなかった場合に返されます。
D9	COMMAND PROCESSING ERROR	エリア・オープンが失敗したため、該当エリア名について UPDATE AREA START(ACCESS) コマンドを処理できませんでした。
E0	DATABASE OR AREA IN RECOVERY	データベースまたはエリアはリカバリー中のため、コマンドは処理されませんでした。
E5	PARTICIPANTS UNABLE TO QUIESCE	このエラーは、静止処理を IMSplex 全体で正常に完了できなかった場合に返されます。この完了コードを受け取った IMS は、静止処理に参加しましたが、これを実行できませんでした。
E6	QUIESCE COMMUNICATION FAILURE	このエラーは、IMSplex 全体の通信に障害が発生したために静止処理を完了できなかった場合に返されます。通信障害を発生させた RM、OM、または SCI に問題がある可能性があります。
E7	CMD NOT ALLOWED	このエラーは、QUIESCE コマンドが進行中であったために、データベース・コマンドを処理できなかった場合に返されます。
E8	DATABASE HAS INTENT TO REORGANIZE	このエラーは、データベースを再編成する意図があることを RECON データ・セットが示しているため、静止処理を開始できなかった場合に返されます。
E9	DB IN WRONG STATE TO BE QUIESCED	このエラーは、指定されたりソースの状態が不良であるため、静止処理を続行できない場合に返されます。
EF	DATABASE IS IN ERROR	このエラーは、データベースでエラーが発生したために、静止処理を完了できなかった場合に返されます。
F0	NO AREA LOCK	エリア・ロックを取得できなかったため、コマンド処理は失敗しました。
F1	AREA NOT STOPPED	エリアが停止していないため、入力されたコマンドは処理されませんでした。
F2	PRELOAD IS ACTIVE FOR AREA	エリアについてプリロードがアクティブなため、コマンドは処理されませんでした。
F3	UNRESOLVED INDOUBTS FOR AREA	エリアについて未解決の未確定が存在するため、入力されたコマンドは処理されませんでした。
F4	ALLOCATION FAILED	AREA 名について割り振りが失敗しました。
F5	AREA NEEDS RECOVERY	エリアはリカバリーを必要としているため、コマンド処理は失敗しました。
F6	ADS NUMBER DISCREPANCY	IMS により割り振られた ADS の番号と DBRC が認識している ADS の番号の間に矛盾があるため、該当エリアについてコマンドが失敗しました。矛盾を訂正し、コマンドを再発行して、データ・セットを割り振り解除してください。

表 386. UPDATE AREA コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
F7	AREA IS NOT LOADED INTO CF	エリアのオープンに失敗したため、エリアはカップリング・ファシリティにロードされませんでした。
F8	AREA HAS I/O TOLERATED CI	エリアには入出力許容 CI があるため、コマンドは処理されませんでした。
F9	AREA HAS SECOND CI EEQE	エリアには第 2 の CI EEQE があるため、コマンドは処理されませんでした。
FC	UTILITY ACTIVE ON AREA	このエラーは、エリアがユーティリティで使用中の場合に返されます。
FD	AREA HAS EEQE	このエラーは、エリアに拡張エラー・キュー・エレメント (EEQE) がある場合に返されます。
FE	AREA HAS EQE	このエラーは、エリアにエラー・キュー・エレメント (EQE) がある場合に返されます。
190	DB ACCESS LESS THAN AREA ACCESS.	DEADB アクセスがエリア・アクセスより小さい値であるため、リソースに対するコマンドは失敗します。
191	AREA ACCESS ALREADY AT LEVEL.	エリア・アクセスが既にそのエリア・アクセス・レベルにあるため、リソースに対するコマンドは失敗します。
192	AREA IN USE-UTIL.	エリアに対してユーティリティが実行中であるため、リソースに対するコマンドは失敗します。

例

以下は、UPDATE AREA コマンドの例です。

UPDATE AREA コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPD AREA NAME(DB21AR1*) STOP(ACCESS)
```

TSO SPOC 出力:

```
AreaName MbrName  CC
DB21AR1  IMS2      0
DB21AR1  SYS3      0
DB21AR10 IMS2      0
DB21AR10 SYS3      0
DB21AR11 IMS2      0
DB21AR11 SYS3      0
```

OM API 入力:

```
CMD(UPD AREA NAME(DB21AR1*) STOP(ACCESS))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M  </omname>
<omvsn>1.2.0</omvsn>
<xm1vsn>1  </xm1vsn>
```

```

<statime>2003.132 16:17:33.260435</statime>
<stotime>2003.132 16:17:33.281165</stotime>
<staseq>B968A333F5A93283</staseq>
<stoseq>B968A333FAB8DC83</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10091733</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS2 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>AREA </kwd>
<input>UPD AREA NAME(DB21AR1*) STOP(ACCESS) </input>
</cmd>
<cmdsphdr>
<hdr s1bl="AREA" l1bl="AreaName" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="ERRT" l1bl="ErrorText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="16" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>AREA(DB21AR1 ) MBR(IMS2 ) CC( 0) </rsp>
<rsp>AREA(DB21AR10) MBR(IMS2 ) CC( 0) </rsp>
<rsp>AREA(DB21AR11) MBR(IMS2 ) CC( 0) </rsp>
<rsp>AREA(DB21AR1 ) MBR(SYS3 ) CC( 0) </rsp>
<rsp>AREA(DB21AR10) MBR(SYS3 ) CC( 0) </rsp>
<rsp>AREA(DB21AR11) MBR(SYS3 ) CC( 0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: このコマンドは、指定されたエリア名に一致するすべてのエリアに対するアクセスを停止し、それらのエリアを使用不能にします。エリア・データ・セットはクローズされ、割り振り解除されます。

UPDATE AREA コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
UPD AREA NAME(*) STOP(SCHD)
```

TSO SPOC 出力:

```

Log for . . . : UPD AREA NAME(*) STOP(SCHD)
IMSpIplex . . . . . : PLEX1
Routing . . . . . :
Start time . . . . : 2003.132 09:22:15.79
Stop time . . . . . : 2003.132 09:22:17.53
Return code . . . . : 00000000
Reason code . . . . : 00000000
Command master. . . : IMS2

```

OM API 入力:

```
CMD(UPD AREA NAME(*) STOP(SCHD))
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.2.0</omvsn>

```



```

<xmlvsn>1 </xmlvsn>
<statime>2003.132 16:22:15.799896</statime>
<stotime>2003.132 16:22:17.536107</stotime>
<staseq>B968A44169058C8E</staseq>
<stoseq>B968A44310E6BE2D</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10092215</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS2 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>AREA </kwd>
<input>UPD AREA NAME(*) STOP(SCHD) </input>
</cmd>
</imsout>

```

説明: このコマンドは IMS2 および SYS3 に経路指定され、両方の IMS システムで正常に実行されています。NAME(*) の場合のデフォルトのアクションでは、エラーになったエリア名についてのみ応答行が戻されることになっているため、この例では応答行は戻されていません。OPTION(ALLRSP) を指定すれば、コマンドで処理されたすべてのエリア名を表示することができます。

UPDATE AREA コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
UPD AREA NAME(DD01AR0) STOP(ACCESS) SCOPE(ALL)
```

TSO SPOC 出力:

AreaName	MbrName	CC	Global
DD01AR0	IMS1	0	Y
DD01AR0	IMS1	0	
DD01AR0	IMS2	0	

説明: エリア DD01AR0 に対する UPDATE AREA STOP(ACCESS) コマンドは、IMS1 と IMS2 で正常に処理されています。コマンド・マスター IMS1 は、グローバル状況を正常に更新しています。

UPDATE AREA コマンドの例 4

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE AREA NAME(DB22AR0,DB22AR1,DB22AR2,DB22AR3) START(ACCESS) OPTION(OPEN)
```

TSO SPOC 出力:

AreaName	MbrName	CC	CCText
DB22AR0	IMS1	0	
DB22AR1	IMS1	0	
DB22AR2	IMS1	A9	DB OR AREA AUTHORIZATION ERROR
DB22AR3	IMS1	A9	DB OR AREA AUTHORIZATION ERROR

説明: このコマンドは、DEDB エリアが DBRC に PREOPEN として登録されていない場合でも、NAME() パラメーターに指定されている DEDB エリア・データ・セットを開きます。OPTION(OPEN) は、このコマンドを受け取るすべての IMS システムによってローカルで処理され、RM でグローバル状況として維持されません。

UPDATE AREA コマンドの例 5

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE AREA NAME(AXYZ01) START(QUIESCE) OPTION(HOLD)
```

TSO SPOC 出力:

AreaName	MbrName	CC
AXYZ01	IM02	0
AXYZ01	IM01	0
AXYZ01	IM03	0

説明: これは QUIESCE を正常に終了し、DEDB エリアで保持する場合の例です。

UPDATE AREA コマンドの例 6

TSO SPOC 入力:

```
UPD AREA NAME(AXYZ01) STOP(QUIESCE)
```

TSO SPOC 出力:

AreaName	MbrName	CC
AXYZ01	IM03	0
AXYZ01	IM02	0
AXYZ01	IM01	0

説明: これは DEDB エリアに対して静止を解放する場合の例です。

UPDATE AREA コマンドの例 7

TSO SPOC 入力:


```
UPDATE AREA NAME(D0010001) START(ACCESS) SET(ACCTYPE(READ))
```


TSO SPOC 出力:

AreaName	MbrName	CC
D0010001	IMS1	0


説明: DEDB DEDBJ0001 は、「更新」のデータベース・アクセスを持っています。DEDB DEDBJ001 のエリア D0010001 のアクセスは、「更新」から「読み取り」に変更されました。

関連概念:

 データベース、DEDB エリア、およびトランザクションに対するグローバル情報の保守 (システム管理)

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

891 ページの『/START AREA コマンド』

948 ページの『/STOP AREA コマンド』

UPDATE DATAGRP コマンド

UPDATE DATAGRP コマンドを使用して、データ・グループのメンバーの状況を変更することができます。

サブセクション:

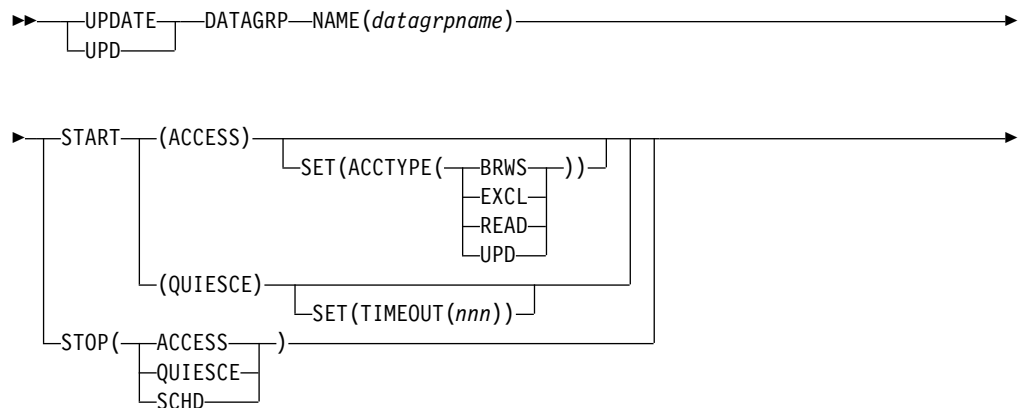
- 『環境』
- 『構文』
- 1096 ページの『キーワード』
- 1100 ページの『使用上の注意』
- 1101 ページの『同等の IMS タイプ 1 コマンド』
- 1101 ページの『出力フィールド』
- 1102 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1110 ページの『例』

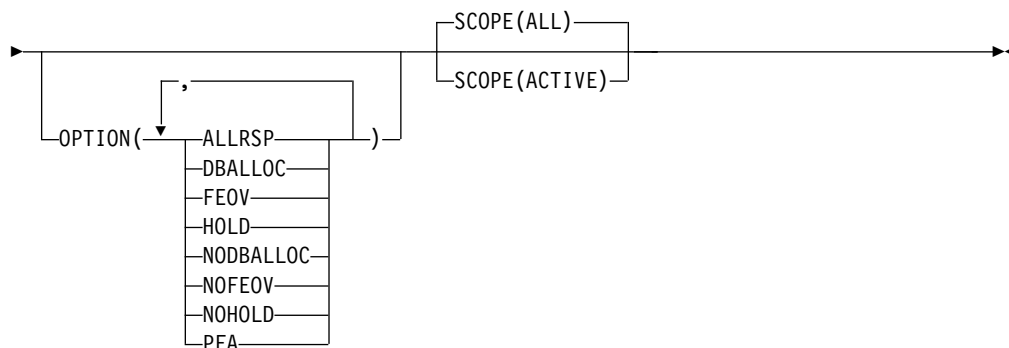
環境

以下の表には、UPDATE DATAGRP コマンドおよびキーワードを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
UPDATE DATAGRP	X	X	
NAME	X	X	
OPTION	X	X	
SCOPE	X	X	
START	X	X	
STOP	X	X	

構文





キーワード

以下のキーワードは、UPDATE DATAGR コマンドに有効です。

NAME()

処理するデータ・グループの名前を指定します。

OPTION()

実行する追加の機能を指定します。以下は追加機能のリストです。

ALLRSP

データ・グループのメンバーのうち、このコマンドで処理されたすべてのメンバー (すべてのデータベース、エリア、またはその両方) について、応答行を戻すことを指示します。

デフォルトのアクションは、エラーになったデータベースまたはエリア、あるいはその両方についてのみ、応答行を戻すということです。常に、データ・グループ名を含む応答行が戻されます。

DBALLOC

データ・グループ内のデータベースを、それぞれの開始時に割り振ることを指示します。

DBALLOC を指定できるのは、START(ACCESS) を指定した場合のみです。

DBALLOC または NODBALLOC のいずれか一方のみを指定できます。

FEOV コマンド処理が完了した後で、ボリュームの終わりを強制することを示します。IMS ログは次の OLDS に切り替わり、STOP(QUIESCE) が指定されない限りは単純チェックポイントが取られます。この切り替えには、ログ保存を目的とするリカバリー・ポイントとしてのマークが付けられます。STOP(QUIESCE) が指定された場合は、単純チェックポイントは取られません。

FEOV は、START(QUIESCE) OPTION(NO HOLD)、STOP(ACCESS)、または STOP(QUIESCE) を指定した場合のみ有効です。

START(QUIESCE) OPTION(NO HOLD) または STOP(QUIESCE) を指定した場合は、OPTION(FEOV) がデフォルトです。

静止処理では、静止ポイントの到達後にボリュームの終わりが強制され、静止が解放される前にログが切り替えられるため、新しい更新はすべて新しい IMS ログに記録されます。この処理は、START(QUIESCE) OPTION(NO HOLD) による静止の停止処理時、または STOP(QUIESCE) が発行されて前の START(QUIESCE) OPTION(HOLD) から静止が解放されるときに発生します。

HOLD

QUIESCE が正常に実行された後に、データ・グループ・メンバーを静止状態のままにすることを指定します。データ・グループ・メンバーの静止を解放するには、後から STOP(QUIESCE) を発行する必要があります。このキーワードは、START(QUIESCE) キーワードを指定した場合に有効です。HOLD は、NO HOLD キーワードと同時に指定できません。

NODBALLOC

データ・グループ内のデータベースを、それぞれの開始時に割り振らないことを指示します。データベースは、スケジュールされる時に割り振られます。

NODBALLOC を指定できるのは、START(ACCESS) を指定した場合のみです。NODBALLOC は、OPTION(DBALLOC) が指定されていない場合の UPDATE DATAGRP コマンドのデフォルトのアクションです。

DBALLOC または NODBALLOC のいずれか一方のみを指定できます。

NOFEOV

コマンド処理の完了後にボリュームの終わりを強制しないことを示します。IMS ログは次の OLDS に切り替わらず、単純チェックポイントは取られません。

NOFEOV は、START(QUIESCE) OPTION(NO HOLD)、STOP(ACCESS)、または STOP(QUIESCE) を指定した場合のみ有効です。STOP(ACCESS) と一緒に指定された場合、OPTION(NO FEOV) がデフォルトです。

NOHOLD

QUIESCE が正常に実行された後に、データ・グループ・メンバーの静止状態を自動的に解放することを指定します。HOLD および NOHOLD のいずれも指定しなかった場合は、NOHOLD が指定されます。このキーワードは、START(QUIESCE) キーワードを指定した場合に有効です。NOHOLD は、HOLD と同時に指定できません。

SCOPE()

IMS がどこへ変更を適用するかを指定します。

ACTIVE

SCOPE(ACTIVE) は、現在アクティブな、コマンドの経路指定先の IMS システムに変更を適用することを指定します。

このオプションは静止機能には適用されません。QUIESCE の有効範囲は、常に IMSplex 全体の使用データ・グループのすべてのインスタンスです。QUIESCE を IMSplex のサブセットにのみ適用することはできません。

ALL SCOPE(ALL) は、アクティブなすべての IMS システムに変更を適用することを指定します。

このオプションは静止機能には適用されません。QUIESCE の有効範囲は、常に IMSplex 全体の使用データ・グループ・メンバーのすべてのインスタンスです。データ・グループまたはそのメンバーでは、QUIESCE のグローバル状況はありません。

START(QUIESCE) または STOP(QUIESCE) に SCOPE(ALL) を使用しても、データ・グループ・メンバーのグローバル状況は変更されません。

現時点では、ACTIVE と ALL はどちらも結果は同じです。

SET() 変更する属性値を指定するか、またはデータベース状態を設定します。

ACCTYPE

指定されたデータベースについてのアクセス・インテントを指定します。このキーワードを指定できるのは、START(ACCESS) を指定した場合のみです。このキーワードは、システム定義時に指定されているデータベース・アクセス・インテントをオーバーライドします。

BRWS

指定されたデータベースは、この IMS サブシステムでは読み取り専用処理に使用できることを指定します。このサブシステムでデータベースを使用できるのは、GO (PROCOPT=GO) という PCB 処理オプションをもつプログラムだけです。GO 処理オプションを使用してデータにアクセスするプログラムは、コミットされていないデータを見ることがあります。これは、別のプログラムがデータベースを更新中の場合があるためです。データベースは読み取り専用処理用にオープンされます。

EXCL 指定されたデータベースを、この IMS サブシステムで排他的に使用することを指定します。この排他的アクセスは、データベースが DBRC に登録してあるときのみ保証されます。

READ

指定されたデータベースは、この IMS サブシステムでは読み取り専用処理に使用できることを指定します。更新意図をもつプログラムは、スケジュールすることはできますが、データベースを更新することはできません。READ の ACCTYPE では、データは保全性付きの読み取りで読み取られ (ロッキングが行われます)、GO 処理オプションを使用するプログラムだけでなく、すべてのプログラムがデータ

にアクセスできます。これが、BRWS の ACCTYPE とは異なる点です。データベースは読み取り専用処理用にオープンされます。

UPD この IMS サブシステムでは、指定されたデータベースを読み取り処理のみでなく更新にも使用できることを指定します。

TIMEOUT(*nnn*)

データ・グループの静止処理でタイムアウトが発生するまでに待機する秒数を指定します。タイムアウト値に指定できる範囲は、1 から 999 秒です。TIMEOUT パラメーター値は、IMS PROCLIB データ・セットの DFSCGxxx メンバー内の DBQUIESCETO パラメーターをオーバーライドすることができます。TIMEOUT パラメーターが省略され、DBQUIESCETO パラメーターが指定されない場合、デフォルトのタイムアウト値は 30 秒です。TIMEOUT キーワードは、START(QUIESCE) キーワードを指定した場合に有効です。

START()

開始する属性を指定します。

ACCESS

指定されたデータ・グループ名をもつメンバーを開始することを指定します。データ・グループ内のデータベースおよびエリアに対して行われるアクションの説明については、UPDATE AREA START(ACCESS) および UPDATE DB START(ACCESS) を参照してください。

OPTION キーワードを使用して、START(ACCESS) と共に実行する追加機能を指定することができます。

QUIESCE

コマンドに指定されたデータ・グループを静止し、新しいリカバリー・ポイントを設定することを指定します。QUIESCE の有効範囲は、常に IMSplex 全体の使用データ・グループのすべてのインスタンスです。

STOP()

停止される属性を指定します。

ACCESS

指定されたデータ・グループのメンバーに対してオフライン処理を行うことを指定します。データ・グループ内のデータベースおよびエリアに対して行われるアクションの説明については、UPDATE AREA STOP(ACCESS) および UPDATE DB STOP(ACCESS) を参照してください。

QUIESCE

データ・グループ・メンバーの静止を解放して、コマンドに指定されたデータ・グループを再び使用可能にすることを指定します。

コマンドを正常に完了するためにはリストされた各データ・グループ・リソースが静止されている必要がある START(QUIESCE) とは

異なり、STOP(QUIESCE) は、一部のリソースが静止状態になっていない、あるいは静止状態から解放することができない場合であっても、リストされた各リソースの処理を続行することができます。そのような静止状態になっていない、あるいは静止状態から解放できないリソースでは、コマンドは、それらの各リソースに対して応答行を返します。

SCHD

指定されたデータ・グループ名をもつメンバーを停止することを指定します。データ・グループ内のデータベースおよびエリアに対して行われるアクションの説明については、UPDATE AREA STOP(ACCESS) および UPDATE DB STOP(ACCESS) を参照してください。

使用上の注意

UPDATE DATAGRP コマンドは、OM API を介してのみ指定でき、DB/DC および DBCTL 環境でのみ処理できます。また、UPDATE DATAGRP コマンドは XRF 代替システムでは使用できません。

UPDATE DATAGRP コマンドが出されるときに、このコマンドは経路指定される先の IMS システムに対してのみ適用されます。データ・グループ内のデータベースまたはエリアを共有している、IMSplex 内の他の IMS システムには、このコマンドは適用されません。UPDATE DATAGRP コマンドの経路指定は、OM が行います。OM は、特定の経路指定が指定されていない限り、すべてのアクティブな DB/DC または DBCTL IMS システムを宛先として、このコマンドを経路指定します。OM は、1 つの IMS をコマンド・マスターとして選択します。

指定したデータ・グループ名について、それぞれの IMS から応答行が戻されます。さらに、エラーになったそれぞれのデータ・グループ・メンバーについても、応答行が戻されます。OPTION(ALLRSP) が指定されていない限り、正常に処理されたデータ・グループ・メンバーについては応答行は戻されません。

データ・グループは、INIT.DBDSGRP コマンドにパラメーター GRPNAME および DBGRP (DB グループを定義する場合)、MEMBERS (DBDS グループを定義する場合)、または RECOVGRP (リカバリー・グループを定義する場合) を指定して使用することで、RECON データ・セット内に定義します。UPDATE コマンドの DATAGRP キーワードでは、DBDS グループまたは DB グループ (DL/I データベースまたは DEDB エリア) のいずれかを指定することができます。

UPDATE DATAGRP コマンドで DBDS グループ名と共に ACCESS キーワードが指定されている場合、ACCESS キーワードは DBDS グループ内の高速機能 DEDB エリアに関連付けられた高速機能 DEDB データベースには適用されません。高速機能 DEDB データベースに対して ACCESS キーワードを使用する意図であるならば、DATAGRP パラメーターは、エリア名を含まないデータ・グループ名でなければなりません。

データベースが静止している間は、STOP(QUIESCE) 以外のキーワードを指定した場合、このコマンドを正常に処理することはできません。

同等の IMS タイプ 1 コマンド

以下の表は、各種の UPDATE DATAGRP コマンドと、類似の機能を実行するタイプ 1 IMS コマンドを示しています。

表 387. UPDATE DATAGRP コマンドと同等のタイプ 1 コマンド

UPDATE DATAGRP コマンド	類似の IMS タイプ 1 コマンド
UPDATE DATAGRP NAME(name) STOP(ACCESS)	/DBR DATAGRP datagrpname
UPDATE DATAGRP NAME(name) START(ACCESS)	/START DATAGRP datagrpname
UPDATE DATAGRP NAME(name) STOP(SCHD)	/STOP DATAGRP datagrpname

出力フィールド

以下の表は、UPDATE DATAGRP 出力フィールドを示しています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、ERR が示されています。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 388. UPDATE DATAGRP コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	キーワード	意味
AREA	N/A	エリア名。エリア名が戻されるのは、データ・グループ内にエリアが 1 つ以上ある場合です。
CC	N/A	出力行の完了コード。完了コードは常に戻されます。
CCTXT	<i>error</i>	完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
DB	N/A	データベース名。データベース名が戻されるのは、データ・グループ内にデータベースが 1 つ以上ある場合です。
DG	N/A	データ・グループ名。データ・グループ名は常に戻されます。
ERRT	ERR	完了コードにさらに詳細な意味を付け加えるために戻されるエラー・テキストであり、これにはサービスからの戻りコードが含まれることがあります。エラー・テキストが戻されるのは、完了コードがゼロ以外の場合のみです。
MBR	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。データベース情報が表示された IMS の IMS ID。IMS ID は常に戻されます。

戻りコード、理由コード、および完了コード

IMS 戻りコードと理由コードは、UPDATE DATAGRPF コマンドによって OM に戻されます。UPDATE DATAGRPF コマンドの結果として戻される OM 戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 389. UPDATE DATAGRPF コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE DATAGRPF コマンドは正常に完了しました。
X'00000008'	X'00002004'	UPDATE DATAGRPF コマンドで、無効なキーワードまたは複数のキーワードが指定されています。
X'00000008'	X'00002014'	データ・グループ名に無効文字が検出されたため、UPDATE DATAGRPF コマンドは処理されません。
X'00000008'	X'00002040'	UPDATE DATAGRPF コマンドで、複数のフィルター値またはキーワード値が指定されています。複数のキーワード値、または無効な組み合わせのフィルターが指定されていました。例えば、START(ACCESS) と STOP(ACCESS) が指定されたか、または OPTION(DBALLOC,NODBALLOC) が指定されています。入力コマンドを検査し、正しい組み合わせを再入力してください。
X'00000008'	X'00005000'	IMODULE GETSTOR ストレージを取得できなかったため、UPD DATAGRPF コマンド処理は終了しました。
X'00000008'	X'0000501C'	IMODULE GETMAIN ストレージを取得できなかったため、UPD DATAGRPF コマンド処理は終了しました。
X'0000000C'	X'00003000'	UPDATE DATAGRPF コマンドは、データ・グループ内の少なくとも 1 つのメンバーについては正常に実行されました。データ・グループ内の 1 つ以上のメンバーについて、UPDATE DATAGRPF コマンドが正常に実行されていません。完了コードに、エラーの理由とデータ・グループ・メンバー名が示されています。UPDATE DATAGRPF コマンドにより戻される可能性がある完了コードのリストは、UPDATE DATAGRPF 完了コード表に示されています。
X'0000000C'	X'00003004'	UPDATE DATAGRPF コマンドは、データ・グループ内のメンバーのすべてについて、正常に実行されていません。完了コードに、エラーの理由とデータ・グループ・メンバー名が示されています。UPDATE DATAGRPF コマンドにより戻される可能性がある完了コードのリストは、UPDATE DATAGRPF 完了コード表に示されています。

表 389. UPDATE DATAGRPF コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000010'	X'0000400C'	UPDATE DATAGRPF コマンドが XRF 代替システムでは無効なため、処理されませんでした。
X'00000010'	X'00004200'	IMS のシャットダウンが進行中であるため、コマンドは処理されません。
X'00000010'	X'00004208'	RMENV=NO に対して無効なコマンド。
X'00000010'	X'00004400'	RECON データ・セットの MINVERS が 11.1 ではありません。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できなかったため、UPDATE DATAGRPF コマンド処理は終了しました。
X'00000014'	X'00005008'	DFSPOOL ストレージを取得できなかったため、UPDATE DATAGRPF コマンド処理は終了しました。
X'00000014'	X'0000500C'	AWE を取得できなかったため、UPDATE DATAGRPF コマンド処理は終了しました。
X'00000014'	X'00005014'	BCB ストレージを取得できなかったため、UPDATE DATAGRPF コマンド処理は終了しました。
X'00000014'	X'00005FFF'	内部エラーが原因で、UPDATE DATAGRPF コマンド処理は終了しました。
X'02000008'	X'0000203C'	無効な TIMEOUT 値が指定されました。1 から 999 までの数値を指定する必要があります。

以下の表には、完了コードの説明が記載されています。UPDATE DATAGRPF コマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 390. UPDATE DATAGRPF コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、コマンドは正常に完了しました。
8	COMMAND COMPLETE FOR SOME	一部。コマンドは、DEDB の一部のエリアについてはエラーを伴って完了しました。エラーがあったエリア名について応答行が戻されます。
C	COMMAND COMPLETE FOR NONE	なし。コマンドは、DEDB のすべてのエリアについて、エラーを伴って完了しました。エラーがあったエリア名について応答行が戻されません。
10	NO RESOURCES FOUND	リソースが見つかりません。データベース名が無効であるか、指定されたワイルドカード・パラメーターがどのデータベース名にも一致しません。
11	DUPLICATE RESOURCE NAME	重複リソース名。 コマンドで同じリソース名が複数回指定されているため、そのリソース名は無視されました。

表 390. UPDATE DATAGRP コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
17	ANOTHER CMD IN PROGRESS	このエラーは、別のデータベース・コマンドが進行中であったために、静止処理を開始できなかった場合に返されます。
23	DB STOP ACCESS IN PROGRESS	データベースへのアクセスを停止するための /DBRECOVERY、または UPDATE DB STOP(ACCESS) コマンドが進行中です。これはデータベースをオフラインにします。
25	DB STOP UPDATES IN PROGRESS	データベースの更新を停止するための /DBDUMP または UPDATE DB STOP(UPDATES) コマンドが進行中です。
26	DEDB STOP IN PROGRESS	DEDB に対して、データベースのスケジューリングを停止するための /DBRECOVERY、/ STOP、または UPDATE DB STOP(SCHD) コマンドが進行中です。
31	NOT ALLOWED FOR A DEDB	データベースは DEDB です。入力されたコマンドは、IMS 環境内の DEDB に対しては無効です。
32	NOT ALLOWED FOR AN MSDB	データベースは MSDB です。入力されたコマンドは、IMS 環境内の MSDB に対しては無効です。
33	NOT ALLOWED FOR A HALDB MASTER	<p>HALDB マスターに対して無効なコマンド。コマンド OPTION は、HALDB マスターに対しては無効です。しかし、構造の再作成が必要で、さらにコマンドで指定した HALDB マスターが 1 つのみであった場合は、区画構造の再作成が実行されます。コマンドに複数のデータベース名がリストされている場合は、再作成は試行されません。</p> <p>コマンドに複数のデータベース名がリストされていても、HALDB マスター以外はすべて無効なものであった場合は、必要であれば再作成が試行されます。</p>
48	NOT ALLOWED FOR IMS RESOURCE	指定された UPDATE コマンドは、IMS 記述子およびリソースに対しては使用できません。DFSDSDB1 は、IMS 記述子の一例です。更新できる唯一の IMS 記述子属性は、DEFAULT(Y) です。
53	NO RM ADDRESS SPACE	このエラーは、RM のアドレス・スペースが存在しないために、静止処理を開始できなかった場合に返されます。
55	NO FAST PATH INSTALLED	高速機能がインストールされていないため、コマンドは失敗しました。
65	DMB POOL STORAGE ERROR	DMB プール・ストレージ・エラー。DMB プール・ストレージ要求障害が原因でコマンドは失敗しました。

表 390. UPDATE DATAGRPF コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
66	DMB POOL FULL	DMB プールがいっぱい。DMB プールがいっぱいであるため、コマンドは失敗しました。
6C	NOT ALLOWED FOR A HALDB PARTITION	UPDATE コマンドは、HALDB 区画の常駐オプションの変更を指定しました。常駐オプションは、マスターに対してのみ有効であり、区画に対しては無効です。
6F	REFERENCED BY PROGRAM	常駐オプションを変更するために、UPDATE DB コマンドが発行されています。現在、そのデータベースを参照中のスケジュール済みプログラムがあります。UPD コマンドは失敗します。
76	RECOVER CMD ACTIVE	データベース・リカバリー・サービスを使用して 1 つ以上のデータベースをリカバリーするために、/RECOVER START コマンドが進行中です。
81	DBRC ERROR	DBRC エラー。
90	INTERNAL ERROR	内部エラーが原因で、入力されたコマンドは処理されませんでした。
91	TIMEOUT ERROR	このエラーは、静止処理をタイムアウト期間内に完了できなかった場合に返されます。
92	COMMAND PROCESSING ERROR	コマンド処理エラー。コマンド・エラーが原因で、入力されたコマンドは処理されませんでした。エラーを説明するための固有の完了コードは生成できませんでした。エラー・テキストに、メッセージ番号と、完了コードに変換できなかった戻りコードが示されています。
A0	DYNAMIC ALLOCATION FAILED	動的割り振りが失敗しました。DB について動的割り振りが失敗したため、入力されたコマンドは処理されませんでした。
A1	DB IS AUTHORIZED BY BATCH	データベースはバッチにより許可されています。データベースはバッチにより許可されているため、入力されたコマンドは処理されませんでした。
A2	DB IS AUTHORIZED BY ANOTHER IMS	データベースは他の IMS により許可されています。データベースは、アクティブかまたは異常終了している他の IMS により許可されており、その許可状態と現在の許可要求との間に互換性がないため、入力されたコマンドは処理されませんでした。
A3	AUTHORIZATION CHANGE FAILED	許可変更が失敗しました。DBRC CHNGAUTH 要求の結果がエラーになりました。
A4	DATABASE NOT REGISTERED TO DBRC	データベースは DBRC に登録されていません。データベースが DBRC に登録されていないため、コマンド処理は失敗しました。

表 390. UPDATE DATAGRP コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
A5	PREVENT FURTHER AUTH ON	以後の許可禁止がオン。データベースまたはエリアは、以後の許可禁止として DBRC に対して定義されているため、入力されたコマンドは処理されませんでした。
A6	INVALID DATABASE RECORD IN RECON	RECON 内の無効なデータベース・レコード。データベース使用互換性の評価プロセスで無効なパラメーターが検出されたため、入力されたコマンドは処理されませんでした。データベース・レコードが RECON データ・セット内では無効である可能性があります。
A7	DBRC UNAUTH FAILED FOR CHNGAUTH	許可変更中に DBRC UNAUTH が失敗しました。許可変更要求での UNAUTH 処理中にエラーが発生したため、コマンドは処理されませんでした。
A8	INVALID DB RECORD IN RECON	RECON 内の無効なデータベース・レコード。データベース許可レベルを変更するために、UPDATE DB SET(ACCTYPE) コマンドが入力されました。許可変更処理中に、DBRC によりエンコードされた状態 0 が戻されました。
A9	DB OR AREA AUTHORIZATION ERROR	データベースまたはエリアの許可エラー。データベースの場合は、データベース許可エラーが原因で、入力されたコマンドは処理されませんでした。エリアの場合は、DBRC に対するエリア許可が失敗しました。
AA	DB IN USE-BMP	データベースは BMP により使用中のため、UPDATE DB コマンドはリジェクトされました。
AB	DB IN USE-DBCTL LONG THREAD	データベースは長時間実行 DBCTL スレッドにより使用中のため、UPDATE DB コマンドはリジェクトされました。
AC	FP AREA HELD-LONG BUSY WAIT	DEDB のエリアが長時間使用中待ち状態にあるため、UPDATE DB コマンドはリジェクトされました。
AD	DYNAMIC UNALLOCATION FAILED	動的割り振り解除エラーが原因で、UPDATE DB コマンドは正常に実行されませんでした。
AE	DYNAMIC ALLOCATION ERROR	動的割り振りエラーが原因で、UPDATE DB コマンドは正常に実行されませんでした。SVC99 は出されません。
C1	OLR DDIR MISSING OR DFSPNT ZERO	データベースについて不明な DMB が参照されました。データベースについて不明なデータ管理ブロックが参照されているため、コマンドは処理できません。システム・コンソールに出されている DFS564I メッセージを参照して、参照できない DMB 名を判別してください。

表 390. UPDATE DATAGRP コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
CC	OLR IS ACTIVE FOR DATABASE	データベースに対して OLR がアクティブになっています。データベースに対して OLR がアクティブになっているため、コマンドは失敗しました。
D0	DATABASE CLOSE ERROR	データベース・クローズ・エラー。データベースのクローズ・エラーが原因でコマンド処理が失敗しました。
D1	DATABASE WRITE ERROR	データベース書き込みエラー。データベースの書き込みエラーが原因でコマンド処理が失敗しました。
D2	DATABASE NEEDS BACKOUT	データベースはバックアウトを必要としています。データベースがバックアウトを必要としているため、コマンド処理は失敗しました。
D3	DATABASE OR AREA NEEDS RECOVERY	データベースまたはエリアのリカバリーが必要。データベースまたはエリアはリカバリーを必要としているため、コマンド処理は失敗しました。
D4	DATABASE NEEDS IMAGE COPY	データベースのイメージ・コピーが必要。データベースがイメージ・コピーを必要としているため、コマンド処理は失敗しました。
D5	DATABASE HAS NO BACKOUTS	データベースにはバックアウトはありません。データベースについてバックアウトが存在しないため、コマンド処理は失敗しました。
D6	DATABASE IN USE	データベースは使用中です。DEDB に対して SET(ACCTYPE) が指定されましたが、DEDB は領域内で使用中のため、許可レベルを変更できません。
D7	DB I/O PREVENTION NOT COMPLETE	データベース入出力防止が完了していません。データベースは、XRF テークオーバーにより拡張され、入出力防止が完了していないため、開始できません。
D8	DATABASE BACKOUTS PENDING	データベース・バックアウトが保留中です。データベースについて再始動可能バックアウトが保留中のため、データベースについて指定されているアクセス・タイプを変更できません。
D9	DATABASE/AREA OPEN FAILED	データベースまたはエリアのオープンが失敗しました。データベースまたはエリアを開くときにエラーが発生したため、コマンドは失敗しました。
DA	DATABASE BEING RECALLED BY HSM	データベースは HSM から再呼び出しされています。データベースは HSM から再呼び出しされているため、コマンド処理は失敗しました。

表 390. UPDATE DATAGRP コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
DB	PARTITION OPEN FAILED	区画オープンが失敗しました。マスターがオフラインのため、区画オープンが失敗しました。これは、区画が削除されて区画構造の再作成が行われている場合にも起こる可能性があります。区画構造の再作成を完了させるには、UPD DB NAME(haldbmst) START(ACCESS) OPTION(OPEN) コマンド (ここで、haldbmst はその区画のマスター) を発行するか、その区画のキー範囲内のキーに対する修飾 GU 呼び出しを発行します。list.recon を使用すると、当該の区画が存在しているか削除済みかを判別できます。
DC	HALDB PARTITION BUILD FAILURE	データベース区画作成障害。DDIR または DMB 用のデータベース区画の作成が失敗しました。システム・コンソールに送られている DFS0415I メッセージを参照して、失敗の理由を判別してください。
DD	HALDB PARTITION INIT FAILURE	データベース区画の初期設定が失敗しました。DDIR または DMB 用のデータベース区画の初期設定が失敗しました。詳しくは、システム・コンソールに送られている DFS0415 メッセージを参照してください。
DE	ACBLIB READ FAILURE	ACBLIB 読み取り障害。ACBLIB の読み取り中にエラーが起きたため、コマンドは処理されませんでした。
DF	DB DIRECTORY INIT FAILURE	データベース・ディレクトリーの初期設定が失敗しました。データベース・ディレクトリーの初期設定が失敗したため、コマンドは処理されませんでした。
E0	DATABASE OR AREA IN RECOVERY	データベースまたはエリアがリカバリー中です。データベースまたはエリアはリカバリー中のため、コマンドは処理されませんでした。
E1	DATABASE HAS NOT BEEN DBR'ED	データベースの常駐オプションを変更する UPDATE コマンドが、DBR が完了していないデータベースに対して発行されませんでした。
E2	PARALLEL DB OPEN NOT COMPLETE	再始動並列 DB オープンが完了していません。データベースについて並列 DB オープン再始動が完了していないため、コマンドは処理されませんでした。
E5	PARTICIPANT UNABLE TO QUIESCE	このエラーは、静止処理を IMSplex 全体で正常に完了できなかった場合に返されます。この完了コードを受け取った IMS は、静止処理に参加しましたが、これを実行できませんでした。

表 390. UPDATE DATAGRP コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
E6	QUIESCE COMMUNICATION FAILURE	このエラーは、IMSplex 全体の通信に障害が発生したために静止処理を完了できなかった場合に返されます。通信障害を発生させた RM、OM、または SCI に問題がある可能性があります。
E7	CMD NOT ALLOWED	このエラーは、QUIESCE コマンドが進行中であつたために、データベース・コマンドを処理できなかった場合に返されます。
E8	DATABASE HAS INTENT TO REORGANIZE	このエラーは、データベースを再編成する意図があることを RECON データ・セットが示しているため、静止処理を開始できなかった場合に返されます。
E9	DB IN WRONG STATE TO BE QUIESCED	このエラーは、指定されたりソースの状態が不良であるため、静止処理を続行できない場合に返されます。
EE	DATABASE BACKOUT ERROR	データベース・バックアウト・エラー。データベースのバックアウト・エラーが原因でコマンド処理が失敗しました。
EF	DATABASE IS IN ERROR	データベースにエラーがあります。データベースにエラーが発生したため、入力されたコマンドは処理されませんでした。
F0	NO AREA LOCK	AREA ロックなし。エリア・ロックを取得できなかったため、コマンド処理は失敗しました。
F1	AREA NOT STOPPED	エリアは停止されていません。AREA は停止されていないため、入力されたコマンドは処理されませんでした。
F2	PRELOAD IS ACTIVE FOR AREA	AREA についてプリロードがアクティブです。AREA についてプリロードがアクティブなため、コマンドは処理されませんでした。
F3	UNRESOLVED INDOUBTS FOR AREA	AREA について未確定が未解決。AREA について未解決の未確定が存在するため、入力されたコマンドは処理されませんでした。
F4	ALLOCATION FAILED	割り振りが失敗しました。AREA 名について割り振りが失敗しました。
F5	AREA NEEDS RECOVERY	エリアはリカバリーを必要としています。エリアはリカバリーを必要としているため、コマンド処理は失敗しました。
F6	ADS NUMBER DISCREPANCY	ADS 番号の矛盾。IMS により割り振られた ADS の番号と DBRC が認識している ADS の番号の間に矛盾があるため、該当エリアについてコマンドが失敗しました。矛盾を訂正し、コマンドを再発行して、データ・セットを割り振り解除してください。
F7	AREA IS NOT LOADED INTO CF	エリアが CF にロードされていません。AREA OPEN が失敗したため、エリアはカップリング・ファシリティーにロードされませんでした。

表 390. UPDATE DATAGRP コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
F8	AREA HAS I/O TOLERATED CI	エリアには入出力許容 CI があります。 AREA には入出力許容 CI があるため、コマンドは処理されませんでした。
F9	AREA HAS 2ND CI EEQE	エリアには第 2 の CI EEQE があります。 AREA には第 2 の CI EEQE があるため、コマンドは処理されませんでした。
FC	UTILITY ACTIVE ON AREA	このエラーは、エリアがユーティリティで使用中の場合に返されます。
FD	AREA HAS EEQE	このエラーは、エリアに拡張エラー・キュー・エレメント (EEQE) がある場合に返されます。
FE	AREA HAS EQE	このエラーは、エリアにエラー・キュー・エレメント (EQE) がある場合に返されます。

例

以下に示すのは UPDATE DATAGRP コマンドの例です。

UPDATE DATAGRP コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPD DATAGRP NAME(GROUP1) STOP(ACCESS)
```

TSO SPOC 出力:

```
DataGroup DBName AreaName MbrName CC
GROUP1          IMSA          0
GROUP1          IMS1          8
GROUP1  DEDBJN03  IMS1          C
GROUP1  DEDBJN03 DB3AREA0  IMS1         F0
```

OM API 入力:

```
CMD(UPD DATAGRP NAME(GROUP1) STOP(ACCESS))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.2.0</omvsn>
<xmlvsn>1 </xmlvsn>
<statime>2003.129 22:45:55.898843</statime>
<stotime>2003.129 22:45:55.990001</stotime>
<staseq>B965346AB45DB229</staseq>
<stoseq>B965346ACA9F1263</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10154555</rqsttkn1>
<rc>0200000C</rc>
<rsn>00003000</rsn>

</ctl>
<cmderr>
<mbr name="IMS1 ">
<typ>IMS </typ>
<styp>DBDC </styp>
```

```

<rc>0000000C</rc>
<rsn>00003000</rsn>
<rsntext>At least one request successful</rsntext>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>IMSA </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>DATAGRP </kwd>
<input>UPD DATAGRP NAME(GROUP1) STOP(ACCESS) </input>
</cmd>
<cmdsphdr>
<hdr s1bl="DG" l1bl="DataGroup" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="DB" l1bl="DBName" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="AREA" l1bl="AreaName" scope="LCL" sort="a" key="4"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="ERRT" l1bl="ErrorText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="16" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DG(GROUP1 ) MBR(IMSA ) CC( 0) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJN03) AREA(DB3AREA0) DG(GROUP1 ) MBR(IMS1 ) CC( F0)
</rsp>
<rsp>DB(DEDBJN03) DG(GROUP1 ) MBR(IMS1 ) CC( C) </rsp>
<rsp>DG(GROUP1 ) MBR(IMS1 ) CC( 8) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: このコマンドは、データ・グループ GROUP1 のすべてのメンバーへのアクセスを停止し、それらのメンバーをオフラインにします。エラーになったすべてのデータベースまたはエリアについて、コマンド応答行が戻されます。コマンドが正常に実行されたメンバーについては、応答行は戻されません。

UPDATE DATAGRP コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
UPD DATAGRP NAME(GROUP1) START(ACCESS) OPTION(ALLRSP)
```

TSO SPOC 出力:

DataGroup	DBName	AreaName	MbrName	CC
GROUP1			IMSA	0
GROUP1		DB21AR1	IMSA	0
GROUP1	BE3PARTS		IMSA	0
GROUP1	DEDBJN03		IMSA	0
GROUP1			IMS1	0
GROUP1		DB21AR1	IMS1	0
GROUP1	BE3PARTS		IMS1	0
GROUP1	DEDBJN03		IMS1	0

OM API 入力:

```
CMD(UPD DATAGRP NAME(GROUP1) START(ACCESS) OPTION(ALLRSP))
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.2.0</omvsn>
<xmlvsn>1 </xmlvsn>
<statime>2003.129 22:46:51.490484</statime>
<stotime>2003.129 22:46:51.672332</stotime>
<staseq>B965349FB88B4445</staseq>
<stoseq>B965349FE4F0C36A</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10154651</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMSA </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>DATAGRP </kwd>
<input>UPD DATAGRP NAME(GROUP1) START(ACCESS) OPTION(ALLRSP) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="DG" l1bl="DataGroup" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="DB" l1bl="DBName" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="AREA" l1bl="AreaName" scope="LCL" sort="a" key="4"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="ERRT" l1bl="ErrorText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="16" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DB(DEDDBJN03) DG(GROUP1 ) MBR(IMSA ) CC( 0) </rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) DG(GROUP1 ) MBR(IMSA ) CC( 0) </rsp>
<rsp>AREA(DB21AR1 ) DG(GROUP1 ) MBR(IMSA ) CC( 0) </rsp>
<rsp>DG(GROUP1 ) MBR(IMSA ) CC( 0) </rsp>
<rsp>DB(DEDDBJN03) DG(GROUP1 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) </rsp>
<rsp>DB(BE3PARTS) DG(GROUP1 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) </rsp>
<rsp>AREA(DB21AR1 ) DG(GROUP1 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) </rsp>
<rsp>DG(GROUP1 ) MBR(IMS1 ) CC( 0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: このコマンドは、データ・グループ GROUP1 のすべてのメンバーへのアクセスを開始し、それらを使用可能にします。 OPTION(ALLRSP) を指定して処理されたすべてのデータベースまたはエリアについて、コマンド応答行が戻されます。

UPDATE DATAGRP コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE DATAGRP NAME(DBGXYZ) START(QUIESCE) OPTION(HOLD)
```

TSO SPOC 出力:

DataGroup	DBName	MbrName	CC
DBGXYZ	DB1XYZ	IM02	0
DBGXYZ	DB2XYZ	IM02	0
DBGXYZ		IM02	0
DBGXYZ	DB1XYZ	IM01	0
DBGXYZ	DB2XYZ	IM01	0

DBGXYZ		IM01	0
DBGXYZ	DB1XYZ	IM03	0
DBGXYZ	DB2XYZ	IM03	0
DBGXYZ		IM03	0

説明: これはデータ・グループに対して静止後保持を正常に終了した場合の例です。

UPDATE DATAGRP コマンドの例 4

TSO SPOC 入力:

UPD DATAGRP NAME(DBGXYZ) START(QUIESCE)

TSO SPOC 出力:

DataGroup	DBName	MbrName	CC
DBGXYZ	DB1XYZ	IM02	0
DBGXYZ	DB2XYZ	IM02	0
DBGXYZ		IM02	0
DBGXYZ	DB1XYZ	IM01	0
DBGXYZ	DB2XYZ	IM01	0
DBGXYZ		IM01	0
DBGXYZ	DB1XYZ	IM03	0
DBGXYZ	DB2XYZ	IM03	0
DBGXYZ		IM03	0

説明: これはデータ・グループに対して静止後解放を正常に終了した場合の例です。

UPDATE DATAGRP コマンドの例 5

TSO SPOC 入力:


UPD DATAGRP NAME(DBGXYZ) STOP(QUIESCE)

TSO SPOC 出力:


DataGroup	DBName	MbrName	CC
DBGXYZ	DB1XYZ	IM02	0
DBGXYZ	DB2XYZ	IM02	0
DBGXYZ		IM02	0
DBGXYZ	DB1XYZ	IM01	0
DBGXYZ	DB2XYZ	IM01	0
DBGXYZ		IM01	0
DBGXYZ	DB1XYZ	IM03	0
DBGXYZ	DB2XYZ	IM03	0
DBGXYZ		IM03	0

説明: これはデータ・グループに対して静止を解放する場合の例です。

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

897 ページの『/START DATAGRP コマンド』

955 ページの『/STOP DATAGRP コマンド』

UPDATE DB コマンド

UPDATE DB コマンドは、データベースに関する状況情報または定義情報を更新するために使用します。UPDATE DB を使用することにより、例えば、データベースを使用可能にしたりオフラインにしたりするほか、スケジューリングの停止、更新の停止、およびデータベースのロックとアンロックを行うことができます。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 1115 ページの『キーワード』
- 1127 ページの『使用上の注意』
- 1130 ページの『同等の IMS タイプ 1 コマンド』
- 1130 ページの『出力フィールド』
- 1131 ページの『戻りコードおよび理由コード』
- 1143 ページの『例』

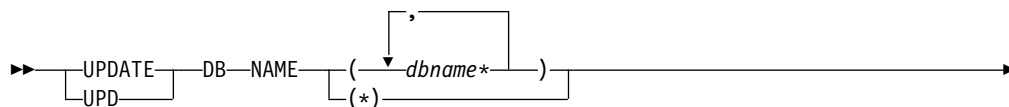
環境

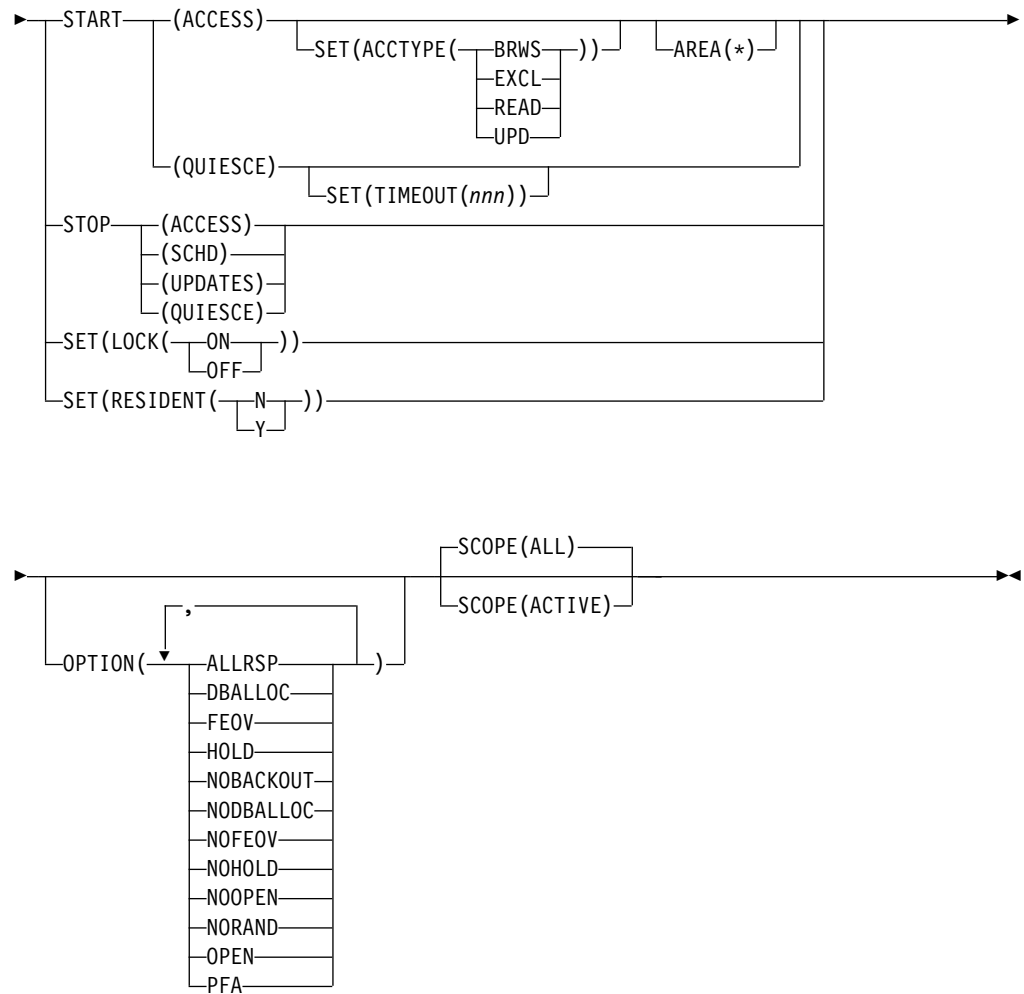
以下の表には、UPDATE DB コマンドおよびキーワードを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 391. UPDATE DB コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
UPDATE DB	X	X	
NAME	X	X	
OPTION	X	X	
SCOPE	X	X	
SET	X	X	
START	X	X	
STOP	X	X	

構文





キーワード

以下のキーワードは、UPDATE DB コマンドに有効です。

AREA(*)

処理されるデータベースのエリアを指定するか、あるいは、AREA(*) を指定して、データベース内のすべてのエリアにコマンドを適用することを示します。

UPDATE DB START(ACCESS) AREA(*) コマンドは、DEDB とそのエリアのすべてを開始し、DEDB に対して新規のアプリケーションをスケジューリングできるようにします。

DEDB 以外のデータベースの場合、AREA(*) キーワードは無視されます。AREA(*) キーワードと NAME(*) キーワードの両方を指定することはできません。AREA(*) キーワードを START(ACCESS) SET(ACCTYPE) キーワードと共に指定すると、すべての DEDB エリアが START(ACCESS) SET(ACCTYPE) キーワードによって停止された後、再始動されます。

NAME()

1 から 8 文字のデータベース名 (DBD 名) を指定します。名前にはワイル

ドカードを指定することができます。名前は反復可能なパラメーターです。指定された NAME パラメーターが固有またはワイルドカード名の場合、処理されたすべてのリソース名についてコマンド応答が戻されます。NAME(*) の場合、エラーになったリソース名についてのみ、コマンド応答が戻されます。OPTION(ALLRSP) を NAME(*) と同時に指定すれば、処理されたすべてのリソース名についてコマンド応答が取得できます。

NAME(*) は、IMSpIex コマンドについて、そのコマンドがすべてのデータベース・リソースに適用されることをユーザーが指定できるようにするために設計された方法です。

総称またはワイルドカード・パラメーターに一致するデータベース名が処理されます。特定名またはワイルドカード名を指定した場合は、処理されたすべてのデータベース名について応答行が戻されます。

指定されたデータベースが DEDB である場合は、その DEDB 名について応答行が戻されます。また、DEDB 内のエラーになったすべてのエリアについても、応答行が戻されます。コマンド・アクションが正常に実行された DEDB のエリアについては、応答行は戻されません。

OPTION()

UPDATE DB コマンドとともに実行される追加の機能を指定します。

ALLRSP

コマンドで処理されたすべてのリソースについて応答行を戻すことを示します。デフォルトのアクションでは、エラーになったリソースについてのみ応答行が戻されます。これは、NAME(*) または AREA(*) を指定した場合のみ有効です。ALLRSP は、他の NAME 値では無視されます。

DBALLOC

データベースをその開始時に割り振ることを指示します。

DBALLOC を指定できるのは、START(ACCESS) を指定した場合のみです。DBALLOC は、コマンドで特定のデータベース名が指定されている場合のデフォルトのアクションです。DBALLOC または NODBALLOC のいずれか一方のみを指定できます。

OPTION(DBALLOC) は HALDB マスターに対しては無効です。

FEOV コマンド処理が完了した後で、ボリュームの終わりを強制することを示します。

IMS ログは次の OLDS に切り替わり、STOP(QUIESCE) が指定されない限りは単純チェックポイントが取られます。この切り替えには、ログ保存を目的とするリカバリー・ポイントとしてのマークが付けられます。STOP(QUIESCE) が指定された場合は、単純チェックポイントは取られません。

FEOV は、START(QUIESCE) OPTION(NOHOLD)、STOP(QUIESCE)、STOP(UPDATES)、または STOP(ACCESS) を指定した場合のみ有効です。

START(QUIESCE) OPTION(NOHOLD) または STOP(QUIESCE) を指定した場合は、OPTION(FEOV) がデフォルトです。

START(QUIESCE) または STOP(QUIESCE) を指定する場合、OPTION(FEOV) はデフォルトです。つまり、ボリュームの終わりは静止ポイントに到達した後で強制されます。静止が解放される前にログが切り替えられるため、新しい更新はすべて新しい IMS ログに記録されます。ログの切り替えは、STOP(QUIESCE) が発行されて前の START(QUIESCE) OPTION(HOLD) から静止が解放されるときに実行されます。

HOLD

QUIESCE が正常に実行された後に、データベースを静止状態のままにすることを指定します。データベースの静止を解放するには、後から STOP(QUIESCE) を発行する必要があります。

OPTION(HOLD) は、START(QUIESCE) キーワードを指定した場合に有効です。OPTION(HOLD) は、OPTION(NOHOLD) と同時には指定できません。

NOBACKOUT

DBRC に登録されていないデータベースのバックアウト再始動を抑制することを指示します。

NOBACKOUT を指定できるのは START(ACCESS) を指定した場合のみであり、NAME(*) の場合は無効です。

OPTION(NOBACKOUT) は、HALDB マスターに対しては無効です。

NODBALLOC

データベースをその開始時に割り振らないことを指示します。

データベースは、スケジュールされるときに割り振られます。

NODBALLOC を指定できるのは、START(ACCESS) を指定した場合のみです。NODBALLOC は、NAME(*) を指定した場合のデフォルトのアクションです。DBALLOC または NODBALLOC のいずれか一方のみを指定できます。OPTION(NODBALLOC) は、HALDB マスターの場合は無視されます。

NOFEOV

コマンド処理の完了後にボリュームの終わりを強制しないことを示します。IMS ログは次の OLDS に切り替わらず、単純チェックポイントは取られません。

OPTION(NOFEOV) を指定できるのは、START(QUIESCE) OPTION(NOHOLD)、STOP(ACCESS)、STOP(QUIESCE)、または STOP(UPDATES) を指定する場合のみです。START(QUIESCE) または STOP(QUIESCE) を指定する場合を除いては、OPTION(NOFEOV) がデフォルトです。

NOHOLD

QUIESCE が正常に実行された後に、データベースの静止状態を自動的に解放することを指定します。HOLD も NOHOLD も指定されていない場合は、NOHOLD が想定されます。

OPTION(NOHOLD) は、START(QUIESCE) キーワードを指定した場合に有効です。OPTION(NOHOLD) は、OPTION(HOLD) と同時には指定できません。

NOOPEN

データベースをその開始時にオープンしないことを指示します。

NOOPEN を指定できるのは、START(ACCESS) を指定した場合のみです。NOOPEN は、データベースが EEQE をもっていない場合のデフォルトのアクションです。

OPEN または NOOPEN のいずれか一方のみを指定できます。

OPTION(NOOPEN) は、HALDB マスターに対しては無効です。

NORAND

UPDATE DB STOP(ACCESS) コマンドの処理中にもランダムマイザーをロードしたままにすることを示します。

このオプションを使用すると、ランダムマイザーの連続的なアンロードと再ロードにより拡張共通サービス域 (ECSA) がフラグメント化される問題が解決されます。

制約事項: OPTION(NORAND) は、高速機能 DEDB に対してのみ機能します。全機能データベースの場合は無視されます。

OPTION(NORAND) 状況は、グローバル・データベース状況が維持されている場合、RM リソース構造内に維持されません。UPDATE DB STOP(ACCESS) OPTION(NORAND) コマンドが高速機能 DEDB に対して発行されると、STOACC 状況が RM リソース構造に保管されます。グローバル STOACC 状況が適用されると、ランダムマイザーはアンロードされます。

OPEN

データベースをその開始時にオープンすることを指示します。

OPEN を指定できるのは、START(ACCESS) を指定した場合のみです。START(ACCESS) OPTION(OPEN) を指定すると、ランダムマイザー・ルーチンまたは選択区画ルーチンがロードされます。

ランダムマイザーは、データベースによって初めて参照されたときにメモリーにロードされます。ランダムマイザーを参照しているデータベースが他にはないときに、ランダムマイザーをメモリーから削除すると、ランダムマイザーはメモリーから削除されます。

OPEN は、NAME(*) と一緒には、または NODBALLOC を指定した場合は、指定できません。OPEN または NOOPEN を指定できます。OPTION(OPEN) は、HALDB マスターに対しては無効です。しかし、構造の再作成が必要で、さらにコマンドで指定した HALDB マスターが 1 つのみであった場合は、区画構造の再作成が実行されます。コマンドに複数のデータベース名がリストされている場合は、再作成は試行されません。

UPDATE DB AREA(*) START(ACCESS) OPTION(OPEN) コマンドは、エリアが DBRC で PREOPEN として登録されていない場合でも、NAME() キーワードで指定されている 1 つ以上の DEDB 下のすべてのエリアを開始して開きます。OPTION(OPEN) は、こ

のコマンドを受け取るすべての IMS システムによってローカルで処理され、RM でグローバル状況として維持されません。

PFA データベースの RECON に、それ以降の許可を阻止する「Prevent Further Authorization」(PFA) 状況、または読み取り専用「read-only」状況を設定またはリセットします。データベースへのアクセスを可能にするには、UPDATE DB START(ACCESS) コマンドで PFA オプションを使用します。データベースへのアクセスを阻止するには、UPDATE DB STOP (ACCESS|SCHD|UPDATES) コマンドで PFA オプションを使用します。PFA はオプションです。OPTION(PFA) を指定した場合、マスター IMS でコマンドが正常に実行された場合にのみ、コマンド・マスターは RECON データ・セットを更新します。コマンドを受信する他の IMS システムはすべてローカルで処理します。SET(LOCK(ON|OFF)) では OPTION(PFA) は無効です。

SCOPE()

IMS がどこへ変更を適用するかを指定します。

ALL

現在アクティブな、コマンドの経路指定先 IMS システムに、変更が適用されます。また、RM で維持されている値を更新することにより、変更はグローバルにも適用されます。RM が保管しているグローバル状況は、一部の IMS 再始動後も伝搬されることがあります。IMS システムの始動時に、IMS は RM からグローバル状況情報を取得します。RM 内にグローバル状況を維持することで、IMS システムは、エリアについて特定の設定や状況を指定しなくても始動できます。

このコマンドで更新される状況または属性が RM によってグローバルに維持されていない場合、コマンドは SCOPE(ACTIVE) が指定された場合と同様に処理されます。このコマンドがグローバルとローカルの両方の状況または属性を更新する場合、RM はグローバルの状況または属性のみを更新します。

ユーザーは、グローバル・エリア状況を RM 内に維持する必要があるかどうかを指定する必要があります。この指定は、IMS の初期設定時に、DFSDFxxx または DFSCGxxx PROCLIB メンバーのいずれかに PLEXPARM(GSTSDB(Y)) を指定することで行えます。UPD IMSSET(LEXPARM(GSTSDB(Y)) コマンドを使用して、それを動的に変更することもできます。グローバル・データベース状況を維持するように指定しない場合、GLOBAL キーワードは以前のリリースと同様に処理され、グローバル状況は更新されません。

制約事項: SCOPE(ALL) は静止機能には適用されません。QUIESCE の有効範囲は、常に IMSplex 全体の使用データベースのすべてのインスタンスです。データベースでは、QUIESCE のグローバル状況はありません。START(QUIESCE) および STOP(QUIESCE) では、SCOPE(ALL) の機能は SCOPE(ACTIVE) と同じです。

ACTIVE

コマンドの経路指定先のアクティブな IMS システムに、変更が適用さ

れます。RM リソース構造内に維持されているグローバル状況情報は、SCOPE(ACTIVE) コマンドでは変更されません。

制約事項: SCOPE(ACTIVE) は静止機能には適用されません。QUIESCEの有効範囲は、常に IMSplex 全体の使用データベースのすべてのインスタンスです。

RM は、一部のデータベース属性と値のグローバル状況情報を維持しています。IMSは、コマンドやその他の内部イベントに基づいて、RM 内のこれらの値を更新します。SCOPE(ALL) が指定されている場合、コマンドを処理する各 IMS システムは、それぞれのローカル制御ブロック内の情報を更新します。IMS コマンド・マスターのみが RM を呼び出して、グローバルに情報を更新します。

SCOPE(ALL) が指定されている場合、アクティブな IMS システムでローカルに、および RM でグローバルに、情報を更新する UPDATE DB コマンド・キーワードには、以下のものがあります。

- START(ACCESS)
- START(ACCESS) SET(ACCTYPE())
- STOP(ACCESS|SCHD|UPDATES)
- SET(LOCK(ON|OFF))

グローバル状況が維持されている場合、UPD DB START(ACCESS) STOP(ACCESS,SCHD,UPDATES) SCOPE(ALL) は、X'4C' ログ・レコードを書き込んで、グローバル状況およびグローバル・タイム・スタンプを含めます。

SET() 変更する属性値を指定するか、またはデータベース状態を設定します。

ACCTYPE

指定されたデータベースについてのアクセス・インテントを指定します。ACCTYPE() を指定できるのは、START(ACCESS) も指定されている場合のみです。このキーワードは、システム定義時に指定されているデータベース・アクセス・インテントをオーバーライドします。

UPDATE DB START(ACCESS) SET(ACCTYPE) コマンドを HALDB マスター・データベースに対して発行すると、マスター・データベースのアクセス・インテントが設定されます。データベース内の区画のアクセス・インテントの設定は、影響を受けません。UPDATE DB START(ACCESS) SET(ACCTYPE) コマンドを 1 つ以上の HALDB 区画に対して発行すると、それらの区画のアクセス・インテントが設定されます。マスター・データベースのアクセス・インテントは、影響を受けません。

各区画には、その区画自体とマスター・データベースの両方のアクセス制限があるため、マスター・データベースのアクセス・インテントを更新するときに、区画のアクセス・インテントを更新しなければならない場合があります。例えば、マスター・データベースと区画すべてに読み取り (READ) のアクセス・インテントが設定されており、マスター・データベースとすべての区画のアクセス・インテントを更新 (UPD) のアクセス・インテントに変更したい場合

は、マスター・データベースと各区画に対して UPDATE DB START(ACCESS) SET(ACCTYPE) コマンドを発行します。

BRWS

データベースは、この IMS サブシステムでは読み取り専用処理に使用できます。このサブシステム上のデータベースを使用できるプログラムは、GO (PROCOPT=GO) という PCB 処理オプションをもつデータベースだけです。GO 処理オプションを使用してデータにアクセスするプログラムは、コミットされていないデータを見ることがあります。これは、共用する IMS サブシステムがデータベースを更新中の場合があるためです。データベースは読み取り専用処理用にオープンされます。

EXCL データベースはこの IMS サブシステムによって排他的に使用されます。この排他的アクセスは、データベースが DBRC に登録してあるときのみ保証されます。

READ

データベースは、この IMS サブシステムでは読み取り専用処理に使用できます。更新意図をもつプログラムは、スケジュールすることはできますが、データベースを更新することはできません。アクセス・タイプ READ では、データは保全性付きの読み取りで読み取られ (ロッキングが行われず)、GO 処理オプションを使用するプログラムだけでなく、すべてのプログラムがデータにアクセスできます。これが、アクセス・タイプ BRWS とは異なる点です。データベースは読み取り専用処理用にオープンされます。

UPD データベースは、IMS サブシステムで読み取り処理だけでなく更新にも使用されます。

RESIDENT

常駐オプションを指定します。RESIDENT(N) オプションは直ちに有効になります。RESIDENT(Y) オプションは、次の再始動時に有効になります。ただし、この IMS で実行中の緊急時再始動の開始点であるチェックポイントの後でデータベースが RESIDENT(Y) として更新された場合を除きます。ACBLIB に DEDB として定義されているデータベースは、指定された RESIDENT 値に関係なく、DEDB のロード時に常に RESIDENT(Y) 属性を設定します。DEDB の場合、RESIDENT(N) はリジェクトされます。

N 指定されたデータベース・リソースに関連する DMB は、ストレージに常駐にされません。DMB はスケジュールされた時間にロードされます。

Y 指定されたデータベース・リソースに関連する DMB は、次の IMS の再始動時にストレージに常駐にされます。次の IMS の再始動時に、IMS は DMB をロードし、それを初期化します。常駐データベースはローカル・ストレージ内でアクセスされるため、ACBLIB への入出力が不要になります。オンライン環境では、DMB 制御ブロックは ACBLIB に保管されます。DLI/SAS アドレス・スペースが存在する場合、DLI/SAS

が DMB をロードします。それ以外の場合、DMB をロードするのは IMS 制御領域です。このため、DMB は対応するデータベース・リソースの存在に依存することになります。

この属性を変更するには、データベースが停止されていることが必要です。UPDATE DB SET(RESIDENT(Y|N)) コマンドを発行する前に、データベースを停止するために /DBR DB コマンドまたは UPDATE DB STOP(ACCESS) コマンドを発行することが必要な場合があります。

MODBLKS のオンライン変更が使用可能な場合 (DFSDFxxx または DFSCGxxx が MODBLKS=OLC で定義されているか、MODBLKS が定義されていない場合)、SET(RESIDENT) を指定した UPDATE コマンドは無効です。RESIDENT 属性が変更されると、UPDATE DB コマンドは MODBLKS データベースを「動的」に変更します。これらのコマンドはリカバリー可能です。

LOCK

指定されたデータベースをロックおよびアンロックします。

SET(LOCK(ON|OFF)) と同時に NAME(*) を指定することはできません。

ON 現在スケジュール済みのプログラムには影響を与えずに、以後スケジュールされるプログラムをロックし、データベースにアクセスできないようにします。データベースはクローズされません。

共用副次索引データベースの場合は、最初の副次索引またはそれ以降の副次索引に対する UPDATE DB SET(LOCK(ON)) は、指定されたデータベースのみに影響を与えます。

オフ 指定されたデータベースをアンロックし、UPDATE DB SET(LOCK(ON)) コマンドの効果をリセットします。最初の副次索引またはそれ以降の副次索引に対する UPDATE DB SET(LOCK(OFF)) は、指定されたデータベースのみに影響を与えます。

TIMEOUT(*nnn*)

データベースの静止処理でタイムアウトが発生するまでに待機する秒数を指定します。タイムアウト値に指定できる範囲は、1 から 999 秒です。TIMEOUT パラメーター値は、IMS PROCLIB データ・セットの DFSCGxxx メンバー内の DBQUIESCETO パラメーターをオーバーライドすることができます。TIMEOUT パラメーターが省略され、DBQUIESCETO パラメーターが指定されない場合、デフォルトのタイムアウト値は 30 秒です。TIMEOUT キーワードは、START(QUIESCE) キーワードを指定した場合に有効です。

START0

開始する属性を指定します。

ACCESS

UPDATE DB START(ACCESS) コマンドはデータベースを開始し、トランザクションまたはプログラムからのデータベースへのアクセスを許可します。UPDATE DB START(ACCESS) コマンドは、前の UPDATE DB STOP(ACCESS)、UPDATE DB STOP(SCHD)、または UPDATE DB STOP(UPDATE) により行われたアクションをリセットします。SET(ACCTYPE) が指定されていない限り、アクセス・インテントは、システム定義時に指定されているデータベース・アクセス・インテントに設定されます。

UPDATE DB START(ACCESS) コマンドは、DEADB 以外のすべてのデータベースを割り振りまたは割り振り解除するために使用できます。DEADB については、UPDATE AREA コマンドを使用して、DEADB エリアを割り振りまたは割り振り解除することができます。

DEADB の場合は、UPDATE DB START(ACCESS) コマンドを使用すると、DBD ソース内で指定されているアンロード済みのランダムマイザーが再ロードされます。

特定の HALDB 区画に対して UPDATE DB START(ACCESS) コマンドを指定した場合は、その区画が「EEQE をもっている、OPEN キーワードが指定されている、あるいは前に許可されたが割り振られていない」ということがない限り、割り振られません。データ・セットを割り振るために取られるアクションは、マスター・データベースの状況とその可用性によって異なります。

UPDATE DB START(ACCESS) コマンドを HALDB マスター・データベースに対して発行すると、区画が停止またはオフライン状態でない限り、区画へのアクセスが有効になります。このコマンドは、マスター・データベースの状況を更新します。このコマンドは、区画の状況は更新しません。区画が停止またはオフライン状態である場合、その区画は停止またはオフラインのままであるため、明示的に開始する必要があります。ACCTYPE パラメーターが使用された場合、マスター・データベースのアクセス・インテント設定は設定されますが、データベース内の区画のアクセス・インテント設定は影響を受けません。

UPDATE DB START(ACCESS) コマンドを HALDB 区画に対して発行すると、コマンドは区画の状況を更新します。このコマンドは、マスター・データベースの状況は更新しません。ACCTYPE パラメーターが使用された場合、区画のアクセス・インテント設定は設定されますが、マスター・データベースのアクセス・インテント設定は影響を受けません。

UPDATE DB START(ACCESS) コマンドは、中断されているトランザクションについて USTOPPED 状況をリセットすることがあります。トランザクションが中断状態にあり、そのトランザクションの処理プログラムが開始済みのデータベースにアクセスできる場合は、UPDATE DB START(ACCESS) コマンドを使用すると、

USTOPPED 属性がリセットされます。そのトランザクションについて中断キュー上にあるメッセージは、通常の処理キューに転送されます。

前に動的バックアウト障害または緊急時再始動バックアウト障害が起きている場合は、UPDATE DB START(ACCESS) コマンドは再度バックアウトを行おうとします。

データベースが DBRC に登録されている場合は、バッチ・バックアウトが正常に実行されると、DBRC に通知されます。その場合は、UPDATE DB START(ACCESS) コマンドが出されたときに、失敗したバックアウトの再試行は行われません。

バッチ・プログラムによりアクセスされているデータベースについては、UPDATE DB START(ACCESS) コマンドは処理されません。

HIDAM データベースの場合は、索引 DBD とデータ・エリア DBD の両方について、UPDATE DB START(ACCESS) コマンドを出す必要があります。このデータベースにバックアウト障害が発生した場合は、このコマンドによりそのバックアウトが再試行されます。

共用副次索引データベースの場合は、最初の副次索引またはそれ以降の副次索引に対して UPDATE DB START(ACCESS) を出すことにより、前の UPDATE DB STOP(SCHD) および UPDATE DB STOP(UPDATES) コマンド・アクションを取り消すことができます。

OPTION キーワードを指定すれば、START(ACCESS) で追加の機能を実行することができます。START(ACCESS) と共に指定できるのは、OPTION(DBALLOC | NODBALLOC)、OPTION(NOBACKOUT)、OPTION(NOOPEN | OPEN) です。OPTION キーワードは HALDB マスターに対しては無効です。

QUIESCE

コマンドに指定されたデータベースを静止し、新しいリカバリー・ポイントを設定することを指定します。QUIESCE の有効範囲は、常に IMSplex 全体の使用データベースのすべてのインスタンスです。QUIESCE を IMSplex のサブセットにのみ適用することはできません。

STOP()

停止される属性を指定します。

ACCESS

データベースのオフライン処理を開始します。この処理により、データベースはクローズされて割り振り解除され、DBRC に対するデータベースの許可が取り消されます。UPDATE DB STOP(ACCESS) の効力をリセットするには、UPDATE DB START(ACCESS) コマンドが必要です。

UPDATE DB STOP(ACCESS)、UPDATE DB STOP(UPDATES)、または UPDATE DB STOP(SCHD) を指定すると、ランダムイザ・ルーチンまたは選択区画ルーチンがメモリーから削除されることがあります。

STOP(ACCESS) のデフォルトのアクションは、OPTION(NOFEOV) です。この場合は、IMS ログは次の OLDS に切り替わらず、単純チェックポイントは取られません。このコマンドで OPTION(FEOV) を指定すれば、次の OLDS に切り替わり、IMS 単純チェックポイントを取ることができるようになります。

UPDATE DB STOP(ACCESS) コマンドを HALDB マスター・データベースに対して発行すると、処理はデータベース全体に作用します。つまり、IMS は、すべての区画データ・セットをクローズして割り振り解除し、データベース内のすべての区画を無許可にします。このコマンドは、マスター・データベースの状況を更新します。このコマンドは、区画の状況は更新しません。

UPDATE DB STOP(ACCESS) コマンドを区画に対して発行すると、区画内のすべてのデータ・セットがクローズされて割り振り解除され、区画は無許可になります。このコマンドは、区画の状況も更新します。このコマンドは、マスター・データベースの状況は更新しません。HALDB データベース内の区画のサブセットへのアクセスを停止する場合にのみ、区画に対して UPDATE DB STOP(ACCESS) を発行してください。データベース全体へのアクセスを停止する場合は、区画に対してではなく、マスター・データベースに対してコマンドを発行してください。

VSAM データ・セット・ハードウェア・エラーが発生した場合、UPDATE DB STOP(ACCESS) コマンドはデータ・セットの割り振りを解除しません。共用副次索引データベースの場合は、最初の副次索引に対する UPDATE DB STOP(ACCESS) は、副次索引データ・セットを共用するすべてのデータベースに影響を与えます。以降の副次索引に対する UPDATE DB STOP(ACCESS) コマンドは、指定されたデータベースに対してのみ影響を与えます。

QUIESCE

コマンドに指定されたデータベースの静止を解放して、再び使用可能にすることを指定します。

コマンドを正常に完了するためにはリストされた各データベース・リソースが静止されている必要がある START(QUIESCE) とは異なり、STOP(QUIESCE) は、一部のリソースが静止状態になっていない、あるいは静止状態から解放することができない場合であっても、リストされた各リソースの処理を続行することができます。そのような静止状態になっていない、あるいは静止状態から解放できないリソースでは、コマンドは、それらの各リソースに対して応答行を返します。

SCHD

現在スケジュール済みのプログラムには影響を与えずに、以後スケジュールされるプログラムを停止して、データベースにアクセスできないようにします。データベースはクローズされません。

UPDATE DB STOP(SCHD) コマンドの効力をリセットするには、UPDATE DB START(ACCESS) コマンドを使用できます。

DEDB または MSDB に対してこのコマンドを出した場合は、そのデータベースを使用しているプログラムはスケジュールされません。他のデータベースの場合は、プログラムは引き続きスケジュールされます。ただし、INIT 呼び出しが出された場合は、データベースに対する呼び出しを行うと、3303 疑似異常終了または BA 状況コードが発生します。

MPP 領域により使用中のデータベースに対して UPDATE DB STOP(SCHD) コマンドを出した場合は、コマンドはその領域が現在のメッセージの処理を完了した後で処理されます。現在のメッセージ処理が完了すると、アプリケーション・プログラムは、まだ処理すべきメッセージが残っていても、残っているメッセージはないことを示す QC 状況を受け取ります。

BMP 領域により使用中のデータベースに対して UPDATE DB STOP(SCHD) コマンドを出した場合は、コマンドはリジェクトされます。

HALDB マスター・データベースに対して UPDATE DB STOP(SCHD) コマンドを出した場合は、それ以降にスケジュールされたプログラムについて、データベース内のすべての区画へのアクセスが停止されます。このコマンドは、マスター・データベースの状況を更新します。このコマンドは、区画の状況は更新しません。

HALDB 区画に対して UPDATE DB STOP(SCHD) コマンドを出した場合は、区画の状況が更新されます。このコマンドは、マスター・データベースの状況は更新しません。UPDATE DB STOP(SCHD) コマンドは、停止したい HALDB データベース内の区画または区画のサブセットに対してのみ使用してください。データベース全体を停止する場合は、区画に対してではなく、マスター・データベースに対してコマンドを発行してください。

DBCTL システムでは、PSB をスケジュールするときに、CCTL は LONG または SHORT を指定できます。LONG スレッドにより使用中のデータベースに対して UPDATE DB STOP(SCHD) コマンドを出した場合は、コマンドはリジェクトされます。SHORT スレッドにより使用中のデータベースに対してコマンドを出した場合は、スレッドはコマンドが処理される前に完了します。

共用副次索引データベースの場合は、最初の副次索引またはそれ以降の副次索引に対する UPDATE DB STOP(SCHD) は、指定されたデータベースのみに影響を与えます。

UPDATES

トランザクションまたはプログラムを停止するか、指定された DL/I データベースを更新できないようにします。

STOP(UPDATES) は、DEDB または MSDB に対しては無効です。

UPDATE DB STOP(UPDATES) コマンドの効力をリセットするには、UPDATE DB START(ACCESS) コマンドが必要です。

UPDATE DB STOP(UPDATES) コマンドが処理されると、指定されたデータベースを使用しているメッセージ処理領域は、それぞれのトランザクションの処理が完了した時点で終了し、データベースをクローズして入力専用でオープンできるように準備します。メッセージ処理領域がプログラムを終了すると、データベースのデータ・セットはクローズされます。

OPTION(FEOV) を指定すると、IMS ログは強制的に次の OLDS に切り替えられます。この切り替えには、ログ保存を目的とするリカバリー・ポイントとしてのマークが付けられます。IMS は単純チェックポイントも出します。OPTION(NOFEOV) (これがデフォルト) はこのアクションをオーバーライドします。

コマンドの処理が終わると、トランザクションのスケジューリングが再開されます。どのトランザクションも、指定されたデータベースを更新することは許されません。更新意図をもつプログラムはスケジュールされますが、DL/I データベースに対する更新呼び出しを行うと、3303 疑似異常終了か、BA または BB 状況コードが発生します。これらの疑似異常終了または状況コードが戻されるのは、アプリケーション・プログラムが、INIT STATUS GROUPA または GROUPB 呼び出しを使用して、データの使用不能に関する状況コードを受け入れる用意が整っていることを IMS に通知した場合に限られます。

最初の副次索引での UPDATE DB STOP(UPDATES) は、副次索引データ・セットを共用するすべてのデータベースに影響を与えます。以降の副次索引での UPDATE DB STOP(UPDATES) コマンドは、指定されたデータベースに対してのみ影響を与えます。

UPDATE DB STOP(UPDATES) コマンドを HALDB マスター・データベースに対して発行すると、すべての区画データ・セットがクローズされて再オープンされ、データベース内のすべての区画が再許可されます。このコマンドは、マスター・データベースの状況も更新します。このコマンドは、区画の状況は更新しません。

UPDATE DB STOP(UPDATES) コマンドを区画に対して発行すると、区画内のすべてのデータ・セットがクローズされて再オープンされ、区画が再許可されます。このコマンドは、区画の状況も更新します。このコマンドは、マスター・データベースの状況は更新しません。UPDATE DB STOP(UPDATES) は、HALDB データベース内の区画のサブセットに対する更新を停止したい場合にのみ発行してください。データベース全体に対する更新を停止する場合は、区画に対してではなく、マスター・データベースに対してコマンドを発行してください。

使用上の注意

UPDATE DB コマンドは、OM API を介してのみ指定でき、DB/DC および DBCTL 環境でのみ処理できます。UPDATE DB コマンドが出されるときに、このコマンドは経路指定される先の IMS システムに対してのみ適用されます。IMSplex 内で同じデータベースを共用している他の IMS システムのうち、コマン

ドを受信していないシステムでは、コマンドは処理されません。OM は、1 つの IMS をコマンド・マスターとして選択します。

このコマンドは、XRF 代替システムおよび FDBR 領域では許可されません。

リソースは、DELETE コマンドまたは MODBLKS に対するオンライン変更を使用して削除されない限り、IMS の存続期間中存在しています。リソースの更新は、IMS ウォーム・スタートまたは緊急時再始動を越えて、リカバリー可能です。IMS がコールド・スタートする場合、IMS の稼働中にエクスポートされた定義をコールド・スタートがインポートしない限り、データベースのランタイム・リソース定義属性 (RESIDENT など) に対する更新は失われます。

オンライン変更処理 (すべてのデータベースが削除されるか、どのデータベースも削除されないかのいずれか) とは異なり、各データベースが個別に更新されます。データベースの一部のランタイム・リソース定義値は、そのデータベースが使用中でない場合にのみ更新できます。データベースが使用中の場合、更新は失敗します。この規則の例外は、状況です。データベースの状況は、データベースが使用中の間に更新できます。複数の IMS システムを持つシスプレックス環境では、一部の IMS システムでは更新に成功し、他の IMS システムでは失敗する場合があります。

ランタイム・リソース定義属性には、RESIDENT が含まれます。

MSDB および DEDB の場合、RESIDENT 属性のようなランタイム・リソース定義属性を変更する UPDATE DB コマンドはリジェクトされます。

UPDATE DB コマンドは、ゼロ以外の完了コードと一緒に CCTXT を戻します。CCTXT は最大 32 バイトで、完了コードの意味に関する情報が入っています。UPDATE DB SCOPE(ALL) コマンドは、グローバル状況更新の完了コードを含む応答行を戻します。そのコードの CCTXT は、GBL CC です。

UPDATE コマンドで指定されたすべての属性が既にそのリソースに定義されている場合、更新は実際には行われず、リソースは静止されず、ログ・レコードは作成されず、ゼロの完了コードが戻されます。これにより、アクションを行う必要がないときに、不要なオーバーヘッドを回避できます。

このコマンドを入力する場合、データベース名は既存の非 HALDB、HALDB マスター、または HALDB 区画のいずれかにすることができます。HALDB 区画に対するコマンドは、/START DATABASE および UPDATE DB START(ACCESS) コマンドを除き、非 HALDB に対するコマンドとまったく同じ働きをします。HALDB 区画は、「それが前に許可されたが割り振られていない、OPEN キーワードが指定されている、または区画が EEQE をもっている」ということがない限り、コマンドの実行中に割り振られません。区画は最初の参照時に割り振られます。

HALDB データベースの場合、IMS は、区画の状況とマスター・データベースの状況を別々に追跡します。例えば、区画が停止されていて、マスター・データベースは開始されていることがあります。また、区画が開始されていて、マスター・データベースは停止されていることもあります。区画のオープン、許可、またはスケジューリングの前に、IMS は必ず区画とマスター・データベースの状況を検査します。区画とマスター・データベースのいずれかがアクションを妨げる状況になっている場合、IMS はそのアクションを実行しません。

各区画には、それ自体とマスター・データベースのアクセス制限が設定されます。例えば、マスター・データベースに読み取り (READ) のアクセス・インテントが設定されていて、いずれかの区画に更新 (UPD) のアクセス・インテントが設定されている場合、区画を更新することはできません。また、マスター・データベースに更新 (UPD) のアクセス・インテントが設定されていて、いずれかの区画に読み取り (READ) のアクセス・インテントが設定されている場合も、区画を更新できません。停止またはロックなど、アクセス制限に影響を与える他の状況にも同様の考慮事項が適用されます。

例外: HALDB マスター・データベースに更新アクセス権 (UPD) が設定されている場合、区画に、マスターのアクセス権を超える排他的 (EXCL) のアクセス・インテントを設定することができます。

区画名を指定して発行されるコマンドは、区画の状況にのみ影響を与えます。マスター・データベースに対して発行されるコマンドは、マスター・データベースの状況にのみ影響を与えます。そのため、マスター・データベースを開始しても、その区画の状況は更新されません。区画が停止されている場合は、停止されたままになります。HALDB 区画は、明示的に停止される場合は、明示的に再び開始される必要があります。キーワード ALL が指定されたタイプ 1 コマンド、NAME(*) が指定されたタイプ 2 コマンド、および HALDB マスターに対するコマンドは、それぞれの HALDB 区画の STOPPED (QUERY DB では STOACC、STOSCHD、または STOUPDS として表示) および LOCKED 標識を変更しません。

コマンドのターゲットが HALDB マスターである場合、処理はすべての HALDB 区画を対象に行われます。例えば、IMS コマンドが HALDB マスターでの UPDATE DB STOP(ACCESS) である場合は、すべての HALDB 区画がクローズされ、割り振り解除され、無許可にされます。ただし、停止状況はマスター・データベースでのみ設定されます。QUERY DB コマンドが発行される場合、HALDB マスターのみが STOACC の状況を表示します (各 HALDB 区画は、それ自体が停止された場合を除き、STOACC を表示しません)。UPDATE DB STOP(ACCESS) コマンドが HALDB マスターに対して出された場合は、/DISPLAY DB コマンドの表示出力は HALDB マスターを示しますが (STOPPED のように)、区画の状況は表示しません。

UPD DB NAME(partname) START(ACCESS) コマンド (ここで、*partname* は追加された HALDB 区画で、区画構造の再作成はまだ行われていないとします) の実行中にこれを受け取った場合は、UPD DB NAME(haldbmst) START(ACCESS) OPTION(OPEN) (*haldbmst* はその区画のマスター) および UPD DB NAME(partname) START(ACCESS) コマンドを続けて発行するか、その新規または再定義された区画のキー範囲内のキーに対する呼び出しを発行します。これにより、区画構造の再作成が実行されて、その区画を使用できるようになります。

制約事項:

- HALDB オンライン再編成 (OLR) が、IMS システム上の HALDB 区画に対して実行中の間は、同じ IMS システム上のその区画に対して、UPDATE DB START(ACCESS | QUIESCE) および UPDATE DB STOP(ACCESS | QUIESCE | SCHD | UPDATES) コマンドを処理することはできません。

- OLR がその区画のいずれかを再編成している間は、UPDATE DB START(ACCESS) SET(ACCTYPE(UPD)) および UPDATE DB STOP(ACCESS | UPDATES) コマンドを HALDB マスターに対して発行することはできません。
- データベースが静止している間は、このコマンドを正常に処理することはできません。
- DEDB 変更ユーティリティを使用して新たに追加されたエリアがある DEDB データベースに対して /DBRECOVERY DB コマンドまたは UPDATE DB STOP(ACCESS) コマンドを発行する場合、新たに追加されたエリアに DEDB 名でアクセスしない PCB が PSB 内に存在する場合は、ACCESS オプションを使用して DEDB データベースを開始することが必要になる場合があります。そのような状況では、以下のいずれかのコマンドを発行します。
 - /STA DB ACCESS=UP
 - UPDATE DB START(ACCESS) SET(ACCTYPE(UPD))

同等の IMS タイプ 1 コマンド

以下の表は、各種の UPDATE DB コマンドと、類似の機能を実行するタイプ 1 IMS コマンドを示しています。

表 392. UPDATE DB コマンドと同等のタイプ 1 コマンド

UPDATE DB コマンド	類似の IMS タイプ 1 コマンド
UPDATE DB NAME(<i>name</i>) STOP(UPDATES)	/DBD DB <i>dbname</i>
UPDATE DB NAME(<i>name</i>) STOP(ACCESS)	/DBR DB <i>dbname</i>
UPDATE DB NAME(<i>name</i>) START(ACCESS)	/START DB <i>dbname</i>
UPDATE DB NAME(<i>name</i>) STOP(SCHD)	/STOP DB <i>dbname</i>
UPDATE DB NAME(<i>name</i>) SET(LOCK(ON))	/LOCK DB <i>dbname</i>
UPDATE DB NAME(<i>name</i>) SET(LOCK(OFF))	/UNLOCK DB <i>dbname</i>

出力フィールド

以下の表は、UPDATE DB 出力フィールドを示しています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 393. UPDATE DB の出力フィールド

ショート・ラベル	キーワード	意味
AREA	<i>error</i>	コマンドの処理中にエラーになった DEDB のエリア名。
CC	N/A	完了コード。
CCTXT	<i>error</i>	完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
DB	DB	データベース名。
ERRT	<i>error</i>	診断情報を含むエラー・テキスト。エラー・テキストはゼロ以外の完了コードに戻すことができ、完了コードをさらに説明する情報を含んでいます。
GBL	GBL	応答行がグローバル更新に関するものであることを示します。
MBR	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。データベース情報が表示された IMS の IMS ID。IMS ID は常に戻されます。

戻りコードおよび理由コード

IMS 戻りコードと理由コードは、UPDATE DB コマンドによって OM に戻されます。UPDATE DB コマンドの結果として戻される OM 戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 394. UPDATE DB コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。NAME(*) が OPTION(ALLRSP) なしで指定される場合、出力行は戻されません。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'00000008'	X'00002004'	UPDATE DB コマンドで、無効なキーワードまたはフィルター、あるいは複数のキーワードが指定されています。
X'00000008'	X'00002008'	キーワードの数が無効です。SET、START、または STOP キーワードのいずれかが必要です。
X'00000008'	X'00002011'	NAME(*) キーワードと共に複数のキーワードを指定することはできないため、UPDATE DB コマンドの処理は終了しました。
X'00000008'	X'00002014'	データベース名パラメーターに無効文字が検出されたため、UPDATE DB コマンドは処理されません。

表 394. UPDATE DB コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000008'	X'00002040'	UPDATE DB コマンドで、複数のフィルター値またはキーワード値が指定されています。複数のキーワード値、または無効な組み合わせのフィルターが指定されていました。例えば、UPDATE DB NAME(dbname) START(ACCESS) OPTION(NORAND) または UPDATE DB NAME(dbname) STOP(UPDATES) OPTION(NORAND) です。
X'00000008'	X'00002048'	無効な SET 属性。
X'0000000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。NAME(*) が OPTION(ALLRSP) なしで指定されている場合、ゼロ以外の完了コードをもつリソースについてのみ出力行が戻されます。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'0000000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。完了コードに、エラーの理由とリソース名が示されています。UPDATE DB コマンドにより戻される可能性がある完了コードのリストは、UPDATE DB 完了コード表に示されています。
X'00000010'	X'00004000'	再始動が進行中のため、UPDATE DB コマンドは処理されません。
X'00000010'	X'0000400C'	XRF 代替システムではコマンドは無効です。
X'00000010'	X'00004024'	高速機能がインストールされていないため、UPDATE DB コマンドは処理されません。
X'00000010'	X'00004120'	オンライン変更フェーズが進行中です。
X'00000010'	X'00004124'	同じタイプの別の処理 (QUIESCE が指定された別のコマンドなど) が既に進行中であったため、START(QUIESCE) または STOP(QUIESCE) が指定された UPDATE DB コマンドは拒否されました。他の処理が完了するまで待機してください。
X'00000010'	X'000041F0'	IMS チェックポイントが進行中のため、UPDATE DB コマンドは処理されません。
X'00000010'	X'000041F4'	MSDB チェックポイントが進行中のため、UPDATE DB コマンドは処理されません。
X'00000010'	X'000041F8'	テークオーバーが進行中のため、UPDATE DB コマンドは処理されません。
X'00000010'	X'00004200'	IMS のシャットダウンが進行中であるため、コマンドは処理されません。
X'00000010'	X'00004208'	RMENV=NO に対して無効なコマンド。
X'00000010'	X'00004300'	MODBLKS のオンライン変更が有効なため、コマンドが許可されません (DFSDFxxx または DFSCGxxx が MODBLKS=OLC で定義されているか、または MODBLKS が定義されていません)。

表 394. UPDATE DB コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000010'	X'00004320'	別の UPDATE DB START(QUIESCE) または UPDATE DB STOP(QUIESCE) コマンドが進行中であるため、UPDATE DB コマンドは処理されませんでした。
X'00000010'	X'00004325'	DB 静止フェーズが進行中です。
X'00000010'	X'00004400'	RECON データ・セットの MINVERS が 11.1 ではありません。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できませんでした。
X'00000014'	X'00005008'	DFSPOOL ストレージを取得できませんでした。
X'00000014'	X'00005000'	IMODULE GETSTOR ストレージを取得できなかったため、UPD DB コマンド処理は終了しました。
X'00000014'	X'0000500C'	AWE を取得できませんでした。
X'00000014'	X'00005014'	BCB ストレージを取得できなかったため、UPDATE DB コマンド処理は終了しました。
X'00000014'	X'0000501C'	IMODULE GETMAIN ストレージを取得できなかったため、UPD DB コマンド処理は終了しました。
X'00000014'	X'00005FFF'	内部エラーが原因で、UPDATE DB コマンド処理は終了しました。

完了コード

以下の表には、完了コードの説明が記載されています。UPDATE DB コマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 395. UPDATE DB コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、コマンドは正常に完了しました。
8	COMMAND COMPLETE FOR SOME	一部。コマンドは、DEDB の一部のエリアについてはエラーを伴って完了しました。エラーがあったエリア名について応答行が戻されます。
C	COMMAND COMPLETE FOR NONE	なし。コマンドは、DEDB のすべてのエリアについて、エラーを伴って完了しました。エラーがあったエリア名について応答行が戻されます。このエラーは、すべてのデータベースで静止処理を実行できなかった場合に返されます。
10	NO RESOURCES FOUND	データベース名が無効であるか、指定されたワイルドカード・パラメーターがどのデータベース名にも一致しません。

表 395. UPDATE DB コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
17	ANOTHER CMD IN PROGRESS	このエラーは、別のデータベース・コマンドが進行中であったために、静止処理を開始できなかった場合に返されます。
23	DB STOP ACCESS IN PROGRESS	データベースへのアクセスを停止するための /DBRECOVERY、または UPDATE DB STOP(ACCESS) コマンドが進行中です。これはデータベースをオフラインにします。
25	DB STOP UPDATES IN PROGRESS	データベースの更新を停止するための /DBDUMP または UPDATE DB STOP(UPDATES) コマンドが進行中です。
26	DEDB STOP IN PROGRESS	DEDB に対して、データベースのスケジューリングを停止するための /DBRECOVERY、/STOP、または UPDATE DB STOP(SCHD) コマンドが進行中です。
31	NOT ALLOWED FOR A DEDB	データベースは DEDB です。入力されたコマンドは、IMS 環境内の DEDB に対しては無効です。
32	NOT ALLOWED FOR AN MSDB	データベースは MSDB です。入力されたコマンドは、IMS 環境内の MSDB に対しては無効です。
33	NOT ALLOWED FOR A HALDB MASTER	HALDB マスターに対して無効なコマンド。コマンド OPTION は、HALDB マスターに対しては無効です。しかし、構造の再作成が必要で、さらにコマンドで指定した HALDB マスターが 1 つのみであった場合は、区画構造の再作成が実行されます。コマンドに複数のデータベース名がリストされている場合は、再作成は試行されません。 コマンドに複数のデータベース名がリストされていても、HALDB マスター以外はすべて無効なものであった場合は、必要であれば再作成が試行されます。
48	NOT ALLOWED FOR IMS RESOURCE	指定された UPDATE コマンドは、IMS 記述子およびリソースに対しては使用できません。DFSDSDB1 は、IMS 記述子の一例です。更新できる唯一の IMS 記述子属性は、DEFAULT(Y) です。

表 395. UPDATE DB コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
53	NO RM ADDRESS SPACE	このエラーは、RM のアドレス・スペースが存在しないために、コマンドを処理できなかった場合に返されます。
55	NO FAST PATH INSTALLED	高速機能がインストールされていません。高速機能がインストールされていないため、コマンドは失敗しました。
65	DMB POOL STORAGE ERROR	DMB プール・ストレージ・エラー。DMB プール・ストレージ要求障害が原因でコマンドは失敗しました。
66	DMB POOL FULL	DMB プールがいっぱい。DMB プールがいっぱいであるため、コマンドは失敗しました。
6C	NOT ALLOWED FOR A HALDB PARTITION	UPDATE コマンドは、HALDB 区画の常駐オプションの変更を指定しました。常駐オプションは、マスターに対してのみ有効であり、区画に対しては無効です。
6F	REFERENCED BY PROGRAM	常駐オプションを変更するために、UPDATE DB コマンドが発行されています。現在、そのデータベースを参照中のスケジュール済みプログラムがあります。UPDATE コマンドは失敗します。
76	RECOVER CMD ACTIVE	データベース・リカバリー・サービスを使用して 1 つ以上のデータベースをリカバリーするために、/RECOVER START コマンドが進行中です。
81	DBRC ERROR	DBRC エラー。
8C	RESOURCE IS STOPPED	データベースは停止しています。UPDATE DB、/STOP DB、/DBRECOVERY などのコマンドによって、またはエラーなど他の理由によって、データベースが停止されたことが考えられます。
90	INTERNAL ERROR	内部エラー。内部エラーが原因で、入力されたコマンドは処理されませんでした。
91	TIMEOUT ERROR	このエラーは、静止処理をタイムアウト期間内に完了できなかった場合に返されます。

表 395. UPDATE DB コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
92	COMMAND PROCESSING ERROR	コマンド処理エラー。エラーが原因で、入力されたコマンドは処理されませんでした。エラーを説明するための固有の完了コードは生成できませんでした。エラー・テキストに、メッセージ番号と、完了コードに変換できなかった戻りコードが示されています。
A0	DYNAMIC ALLOCATION FAILED	動的割り振りが失敗しました。DBの動的割り振りが失敗したため、入力されたコマンドは処理を完了していません。一部のコマンド処理は、エラーが検出される前に完了する場合があります。
A1	DB IS AUTHORIZED BY BATCH	データベースはバッチにより許可されています。データベースはバッチにより許可されているため、入力されたコマンドは処理を完了していません。一部のコマンド処理は、エラーが検出される前に完了する場合があります。
A2	DB IS AUTHORIZED BY ANOTHER IMS	データベースは他の IMS により許可されています。データベースは、別のアクティブの、または異常終了した IMS によって許可されており、その許可状態と現在の許可要求との間に互換性がないため、入力されたコマンドは処理を完了していません。
A3	AUTHORIZATION CHANGE FAILED	許可変更が失敗しました。DBRC CHNGAUTH 要求の結果がエラーになりました。
A4	DATABASE NOT REGISTERED TO DBRC	データベースは DBRC に登録されていません。データベースが DBRC に登録されていないため、コマンド処理は完了していません。一部のコマンド処理は、エラーが検出される前に完了する場合があります。
A5	PREVENT FURTHER AUTH ON	以後の許可禁止がオン。データベースまたはエリアは DBRC に対して「以後の許可禁止」として定義されているため、入力されたコマンドは処理を完了していません。一部のコマンド処理は、エラーが検出される前に完了する場合があります。

表 395. UPDATE DB コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
A6	INVALID DATABASE RECORD IN RECON	RECON データ・セット内の無効なデータベース・レコード。データベース使用互換性の評価プロセスで無効なパラメーターが検出されたため、入力されたコマンドは処理を完了していません。データベース・レコードが RECON データ・セット内では無効である可能性があります。一部のコマンド処理は、エラーが検出される前に完了する場合があります。
A7	DBRC UNAUTH FAILED FOR CHNGAUTH	許可変更中に DBRC 許可取り消しが失敗しました。許可変更要求での UNAUTH 処理中にエラーが発生したため、コマンドは処理を完了していません。
A8	INVALID DB RECORD IN RECON	RECON 内の無効なデータベース・レコード。データベース許可レベルを変更するために、UPDATE DB SET(ACCTYPE) コマンドが入力されました。許可変更処理中に、DBRC によりエンコードされた状態 0 が戻されました。一部のコマンド処理は、エラーが検出される前に完了する場合があります。
A9	DB OR AREA AUTHORIZATION ERROR	データベースまたはエリアの許可エラー。データベースの場合は、データベース許可エラーが原因で、入力されたコマンドは処理を完了していません。エリアの場合は、DBRC に対するエリア許可が失敗しました。一部のコマンド処理は、エラーが検出される前に完了する場合があります。
AA	DB IN USE-BMP	データベースは BMP によって使用中のため、UPDATE DB コマンドは正常に実行されませんでした。一部のコマンド処理は、エラーが検出される前に完了する場合があります。
AB	DB IN USE-DBCTL LONG THREAD	データベースは長時間実行 DBCTL スレッドによって使用中のため、UPDATE DB コマンドは正常に実行されませんでした。一部のコマンド処理は、エラーが検出される前に完了する場合があります。

表 395. UPDATE DB コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
AC	FP AREA HELD-LONG BUSY WAIT	DEADB の AREA が長時間使用中待ち状態にあるため、UPDATE DB コマンドは正常に実行されませんでした。一部のコマンド処理は、エラーが検出される前に完了する場合があります。
AD	DYNAMIC UNALLOCATION FAILED	動的割り振り解除エラーが原因で、UPDATE DB コマンドは正常に実行されませんでした。一部のコマンド処理は、エラーが検出される前に完了する場合があります。
AE	DYNAMIC ALLOCATION ERROR	動的割り振りエラーが原因で、UPDATE DB コマンドは正常に実行されませんでした。SVC99 は出されません。一部のコマンド処理は、エラーが検出される前に完了する場合があります。
C1	OLR DDIR MISSING OR DFSPNT ZERO	データベースについて不明な DMB が参照されました。データベースについて不明なデータ管理ブロックが参照されているため、コマンドは処理できません。システム・コンソールに出されている DFS564I メッセージを参照して、参照できない DMB 名を判別してください。
CC	OLR IS ACTIVE FOR DATABASE	データベースに対して OLR がアクティブになっています。データベースに対して OLR がアクティブになっているため、コマンドは失敗しました。
D0	DATABASE CLOSE ERROR	データベース・クローズ・エラー。データベースのクローズ・エラーが原因でコマンド処理が失敗しました。
D1	DATABASE WRITE ERROR	データベース書き込みエラー。データベースの書き込みエラーが原因でコマンド処理が失敗しました。
D2	DATABASE NEEDS BACKOUT	データベースはバックアウトを必要としています。データベースがバックアウトを必要としているため、コマンド処理は失敗しました。
D3	DATABASE OR AREA NEEDS RECOVERY	データベースまたはエリアのリカバリーが必要。データベースまたはエリアはリカバリーを必要としているため、コマンド処理は失敗しました。

表 395. UPDATE DB コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
D4	DATABASE NEEDS IMAGE COPY	データベースのイメージ・コピーが必要。データベースがイメージ・コピーを必要としているため、コマンド処理は失敗しました。
D5	DATABASE HAS NO BACKOUTS	データベースにはバックアウトはありません。データベースについてバックアウトが存在しないため、コマンド処理は失敗しました。
D6	DATABASE IN USE	データベースは使用中です。DEDB に対して SET(ACCTYPE) が指定されましたが、DEDB は領域内で使用中のため、許可レベルを変更できません。
D7	DB I/O PREVENTION NOT COMPLETE	データベース入出力防止が完了していません。データベースは、XRF テークオーバーにより拡張され、入出力防止が完了していないため、開始できません。
D8	DATABASE BACKOUTS PENDING	データベース・バックアウトが保留中です。データベースについて再始動可能バックアウトが保留中のため、データベースについて指定されているアクセス・タイプを変更できません。
D9	DATABASE/AREA OPEN FAILED	データベース・オープンが失敗しました。データベース・オープン中のエラーが原因で、コマンドは失敗しました。DFS0730I メッセージを参照して、失敗の理由を判別してください。
DA	DATABASE BEING RECALLED BY HSM	データベースは HSM から再呼び出しされています。データベースは HSM から再呼び出しされているため、コマンド処理は失敗しました。
DB	PARTITION OPEN FAILED	区画オープンが失敗しました。マスターがオフラインのため、区画オープンが失敗しました。これは、区画が削除されて区画構造の再作成が行われている場合にも起こる可能性があります。区画構造の再作成を完了させるには、 UPD DB NAME(haldbmst) START(ACCESS) OPTION(OPEN) コマンド (ここで、haldbmst はその区画のマスター) を発行するか、その区画のキー範囲内のキーに対する修飾 GU 呼び出しを発行します。 list.recon を使用すると、当該の区画が存在しているか削除済みかを判別できます。

表 395. UPDATE DB コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
DC	HALDB PARTITION BUILD FAILURE	データベース区画作成障害。 DDIR または DMB 用のデータベース区画の作成が失敗しました。システム・コンソールに送られている DFS0415I メッセージを参照して、失敗の理由を判別してください。
DD	HALDB PARTITION INIT FAILURE	データベース区画の初期設定が失敗しました。 DDIR または DMB 用のデータベース区画の初期設定が失敗しました。詳しくは、システム・コンソールに送られている DFS0415I メッセージを参照してください。
DE	ACBLIB READ FAILURE	ACBLIB 読み取り障害。 ACBLIB の読み取り中にエラーが起きたため、コマンドは処理されませんでした。
DF	DB DIRECTORY INIT FAILURE	データベース・ディレクトリーの初期設定が失敗しました。データベース・ディレクトリーの初期設定が失敗したため、コマンドは処理されませんでした。
E0	DATABASE OR AREA IN RECOVERY	データベースまたはエリアはリカバリー中。データベースまたはエリアはリカバリー中のため、コマンドは処理されませんでした。
E1	DB MUST BE STOPPED AND OFFLINE	属性を変更するには、データベースを停止してオフラインにする必要があります。UPDATE DB SET(RESIDENT(Y N)) コマンドを発行する前に、/DBR DB コマンドまたは UPDATE DB STOP(ACCESS) コマンドを発行してデータベースを停止し、オフラインにする必要がある場合があります。
E2	PARALLEL DB OPEN NOT COMPLETE	再始動並列 DB オープンが完了していません。データベースについて並列 DB オープン再始動が完了していないため、コマンドは処理されませんでした。
E5	PARTICIPANT UNABLE TO QUIESCE	このエラーは、静止処理を IMSplex 全体で正常に完了できなかった場合に返されます。この完了コードを受け取った IMS は、静止処理に参加しましたが、これを実行できませんでした。

表 395. UPDATE DB コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
E6	QUIESCE COMMUNICATION FAILURE	このエラーは、IMSpIex 全体の通信に障害が発生したために静止処理を完了できなかった場合に返されます。通信障害を発生させた RM、OM、または SCI に問題がある可能性があります。
E7	CMD NOT ALLOWED	このエラーは、QUIESCE コマンドが進行中であったために、データベース・コマンドを処理できなかった場合に返されます。
E8	DATABASE HAS INTENT TO REORGANIZE	このエラーは、データベースを再編成する意図があることを RECON データ・セットが示しているため、静止処理を開始できなかった場合に返されます。
E9	DB IN WRONG STATE TO BE QUIESCED	このエラーは、指定されたリソースの状態が不良であるため、静止処理を続行できない場合に返されます。
EE	DATABASE BACKOUT ERROR	データベース・バックアウト・エラー。データベースのバックアウト・エラーが原因でコマンド処理が失敗しました。
EF	DATABASE IS IN ERROR	データベースにエラーがあります。データベースにエラーが発生したため、入力されたコマンドは処理されませんでした。
F0	NO AREA LOCK	AREA ロックなし。エリア・ロックを取得できなかったため、コマンド処理は失敗しました。
F1	AREA NOT STOPPED	エリアは停止されていません。AREA は停止されていないため、入力されたコマンドは処理されませんでした。
F2	PRELOAD IS ACTIVE FOR AREA	AREA についてプリロードがアクティブです。AREA は停止されていないため、入力されたコマンドは処理されませんでした。
F3	UNRESOLVED INDOUBTS FOR AREA	AREA について未確定が未解決。AREA について未解決の未確定が存在するため、入力されたコマンドは処理されませんでした。
F4	ALLOCATION FAILED	割り振りが失敗しました。AREA 名について割り振りが失敗しました。

表 395. UPDATE DB コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
F5	AREA NEEDS RECOVERY	エリアはリカバリーを必要としています。エリアはリカバリーを必要としているため、コマンド処理は失敗しました。
F6	ADS NUMBER DISCREPANCY	ADS 番号の矛盾。IMS により割り振られた ADS の番号と DBRC が認識している ADS の番号の間に矛盾があるため、該当エリアについてコマンドが失敗しました。矛盾を訂正し、コマンドを再発行して、データ・セットを割り振り解除してください。
F7	AREA IS NOT LOADED INTO CF	エリアは CF にロードされませんでした。AREA OPEN が失敗したため、エリアはカップリング・ファシリティにロードされませんでした
F8	AREA HAS I/O TOLERATED CI	エリアには入出力許容 CI があります。AREA には入出力許容 CI があるため、コマンドは処理されませんでした。
F9	AREA HAS 2ND CI EEQE	エリアには第 2 の CI EEQE があります。エリアには第 2 の CI EEQE があるため、コマンドは処理されませんでした。
FC	UTILITY ACTIVE ON AREA	このエラーは、エリアがユーティリティで使用中の場合に返されます。
FD	AREA HAS EEQE	このエラーは、エリアに拡張エラー・キュー・エレメント (EEQE) がある場合に返されます。
FE	AREA HAS EQE	このエラーは、エリアにエラー・キュー・エレメント (EQE) がある場合に返されます。
196	DB has an in-doubt EEQE	このエラーは、未確定の EEQE があるデータベースに対して UPDATE DB STOP(ACCESS) コマンドが発行され、IMS PROCLIB データ・セットの DFSVSMxx メンバーに NODBR キーワードが指定されていた場合に返されます。
1D7	IMPORT CHANGE LIST ERROR	リソースは、IMSRSC リポジトリー内の変更リストからのインポート処理中であるか、変更リストから正常にインポートされませんでした。リソースは、リポジトリーから正常にインポートされるまでは、更新することができません。

例

以下に示すのは UPDATE DB コマンドの例です。

UPDATE DB コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE DB NAME(DEDBJ00%,BADNAME,BAD*) SET(RESIDENT(Y))
```

TSO SPOC 出力:

```
Response for: UPDATE DB NAME(DEDBJ00%,BADNAME,BAD*) SET(RESIDENT(Y))
DBName  MbrName  CC  CCText
BAD*    IMS1     10 NO RESOURCES FOUND
BADNAME IMS1     10 NO RESOURCES FOUND
DEDBJ001 IMS1     E1 DATABASE HAS NOT BEEN DBR"D
DEDBJ002 IMS1      0
DEDBJ003 IMS1     E1 DATABASE HAS NOT BEEN DBR"D
DEDBJ004 IMS1     E1 DATABASE HAS NOT BEEN DBR"D
DEDBJ005 IMS1      0
DEDBJ006 IMS1     E1 DATABASE HAS NOT BEEN DBR"D
DEDBJ007 IMS1     E1 DATABASE HAS NOT BEEN DBR"D
DEDBJ008 IMS1     E1 DATABASE HAS NOT BEEN DBR"D
DEDBJ009 IMS1     E1 DATABASE HAS NOT BEEN DBR"D
```

OM API 入力:

```
CMD(UPDATE DB NAME(DEDBJ00%,BADNAME,BAD*) SET(RESIDENT(Y)))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.3.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2006.311 00:34:47.028100</statime>
<stotime>2006.311 00:34:47.031559</stotime>
<staseq>BFAADA74E4584E87</staseq>
<stoseq>BFAADA74E5307115</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10163446</rqsttkn1>
<rc>0200000C</rc>
<rsn>00003000</rsn>
<rsnmsg>CSLN054I</rsnmsg>
<rsntxt>None of the clients were successful.</rsntxt>
</ctl>
<cmderr>
<mbr name="IMS1 ">
<typ>IMS </typ>
<styp>DBDC </styp>
<rc>0000000C</rc>
<rsn>00003000</rsn>
<rsntxt>At least one request successful</rsntxt>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>DB </kwd>
<input>UPDATE DB NAME(DEDBJ00%,BADNAME,BAD*) SET(RESIDENT(Y)) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="DB" l1b1="DBName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
```

```

<hdr s1bl="AREA" l1bl="AreaName" scope="LCL" sort="a" key="4"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="GBL" l1bl="Global" scope="GBL" sort="d" key="2" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="y" />
<hdr s1bl="ERRT" l1bl="ErrorText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="16" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DB(DEDBJ001) MBR(IMS1) CC( E1) CCTXT(DATABASE HAS NOT BEEN DBR"D)
  </rsp>
<rsp>DB(BADNAME ) MBR(IMS1) CC( 10) CCTXT(NO RESOURCES FOUND) </rsp>
<rsp>DB(BAD* ) MBR(IMS1) CC( 10) CCTXT(NO RESOURCES FOUND) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJ002) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJ003) MBR(IMS1) CC( E1) CCTXT(DATABASE HAS NOT BEEN DBR"D)
  </rsp>
<rsp>DB(DEDBJ004) MBR(IMS1) CC( E1) CCTXT(DATABASE HAS NOT BEEN DBR"D)
  </rsp>
<rsp>DB(DEDBJ005) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>DB(DEDBJ006) MBR(IMS1) CC( E1) CCTXT(DATABASE HAS NOT BEEN DBR"D)
  </rsp>
<rsp>DB(DEDBJ007) MBR(IMS1) CC( E1) CCTXT(DATABASE HAS NOT BEEN DBR"D)
  </rsp>
<rsp>DB(DEDBJ008) MBR(IMS1) CC( E1) CCTXT(DATABASE HAS NOT BEEN DBR"D)
  </rsp>
<rsp>DB(DEDBJ009) MBR(IMS1) CC( E1) CCTXT(DATABASE HAS NOT BEEN DBR"D)
  </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: 一部のデータベースを常駐にするように更新します。データベース DEDBJ002 と DEDBJ005 の更新は、完了コード 0 で示されているように、正常に行われています。いくつかのデータベースの更新は、完了コード E1 で失敗しています。ランタイム・リソース定義属性を変更するには、/DBRECOVERY コマンドを使用してデータベースをオフラインにしておく必要があるからです。データベース BADNAME およびパラメーター BAD* の更新は、完了コード 10 で失敗しています。データベース BADNAME は存在せず、また BAD で始まるデータベース名はないからです。

UPDATE DB コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE DB NAME(DEDBJN22) AREA(*) START(ACCESS) OPTION(OPEN)
```

TSO SPOC 出力:

DBName	MbrName	CC	Cctext
DEDBJN22	IMS1	C	
DB22AR0	IMS1	0	
DB22AR1	IMS1	A9	DB OR AREA AUTHORIZATION ERROR

説明: この例で、CC=A9 は DBRC が許可要求に対してゼロ以外の戻りコードを返したことを示します。

UPDATE DB コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
UPD DB NAME(DEDBJN22) START(QUIESCE) OPTION(HOLD) SET(TIMEOUT(60))
```

TSO SPOC 出力:

DBName	MbrName	CC
DEDBJN22	IMS1	0
DEDBJN22	IMS2	0
DEDBJN22	IMS3	0

説明: これは、3 つの IMS システム間で調整されている高速機能 DEDB DEDBJN22 の静止を正常に完了して保持する場合の例です。

UPDATE DB コマンドの例 4

TSO SPOC 入力:

```
UPD DB NAME(DEDBJN22) STOP(QUIESCE)
```

TSO SPOC 出力:

DBName	AreaName	MbrName	CC	CCText
DEDBJN22		IMS1	C	COMMAND COMPLETE FOR NONE
DEDBJN22	DB22AR0	IMS1	E9	DB IN WRONG STATE TO BE QUIESCED
DEDBJN22	DB22AR1	IMS1	E9	DB IN WRONG STATE TO BE QUIESCED
DEDBJN22	DB22AR2	IMS1	E9	DB IN WRONG STATE TO BE QUIESCED
DEDBJN22	DB22AR3	IMS1	E9	DB IN WRONG STATE TO BE QUIESCED
DEDBJN22	DB22AR4	IMS1	E9	DB IN WRONG STATE TO BE QUIESCED

説明: この例では、DEDB の静止を解放しようと試みています。DEDB DEDBJN22 は、5 つのエリアから構成されています。どのエリアも静止状態を保持していなかったため、コマンドは失敗しました。DEDB に解放する必要がある状態のエリアがなかったため、DEDB 名に対して CC=C (COMMAND COMPLETE FOR NONE) を示す応答行が返されています。応答行は、各エリアに対しても返されています。

UPDATE DB コマンドの例 5

TSO SPOC 入力:


```
UPD DB NAME(DEDBJN22) STOP(QUIESCE)
```

TSO SPOC 出力:


DBName	AreaName	MbrName	CC	CCText
DEDBJN22		IMS1	8	COMMAND COMPLETE FOR SOME
DEDBJN22	DB22AR0	IMS1	E9	DB IN WRONG STATE TO BE QUIESCED
DEDBJN22	DB22AR3	IMS1	E9	DB IN WRONG STATE TO BE QUIESCED
DEDBJN22	DB22AR4	IMS1	E9	DB IN WRONG STATE TO BE QUIESCED

説明: この例では、DEDB の静止を解放しようと試みています。DEDB DEDBJN22 は、5 つのエリアから構成されています。コマンドは、DB22AR1 および DB22AR2 の静止のみを解放することができたため、部分的に成功しました。この例では、DB22AR0、DB22AR3、および DB22AR4 は静止状態ではありませんでした。DEDB の一部のエリアしか解放する必要がある状態ではなかったため、DEDB 名に対して CC=8 (COMMAND COMPLETE FOR SOME) を示す応答行が返されています。応答行は、処理できなかった各エリアに対しても返されています。


関連概念:


 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連タスク:

 UPDATE コマンドを使用した、ランタイム・データベース・リソース定義および記述子定義の更新 (システム定義)

関連資料:

 /LOCK コマンド (コマンド)

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

900 ページの『/START DB コマンド』

956 ページの『/STOP DB コマンド』

1067 ページの『/UNLOCK DB コマンド』

UPDATE DBDESC コマンド

UPDATE DBDESC コマンドは、データベース記述子を更新するために使用します。記述子は、記述子またはリソースの作成に使用できるモデルです。

記述子の更新では、UPDATE コマンドで明示的に指定された属性のみが変更されます。指定されなかった属性は、既存の値を保持します。CREATE コマンドで LIKE(DESC(descriptor_name)) を指定することにより、この記述子をモデルとして使用して、任意のデータベース・リソースまたは記述子を作成できます。この記述子を使用して既に作成された記述子またはリソースは、更新されません。

サブセクション:

- 『環境』
- 1147 ページの『構文』
- 1147 ページの『キーワード』
- 1149 ページの『使用上の注意』
- 1149 ページの『出力フィールド』
- 1150 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1152 ページの『例』

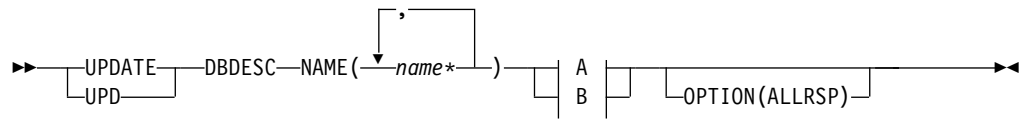
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

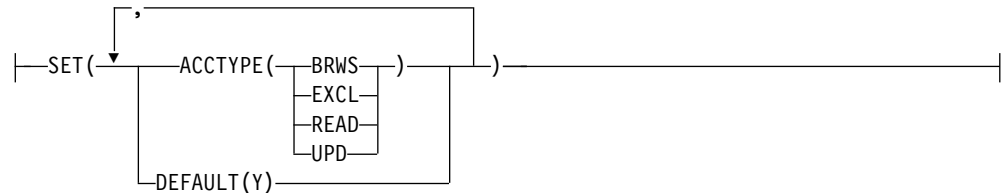
表 396. UPDATE DBDESC コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
UPDATE DBDESC	X	X	
NAME	X	X	
OPTION	X	X	
SET	X	X	

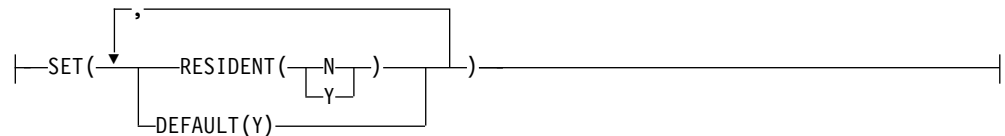
構文



A:



B:



キーワード

以下のキーワードは、UPDATE DBDESC コマンドに有効です。

NAME

データベース記述子の名前 (1 から 8 文字) を指定します。名前にはワイルドカードを指定することができます。名前は反復可能なパラメーターです。指定された NAME パラメーターが固有またはワイルドカード名の場合、処理されたすべての記述子名についてコマンド応答が戻されます。NAME(*) の場合、エラーになった記述子名についてのみ、コマンド応答が戻されます。

OPTION(ALLRSP) を NAME(*) と同時に指定すれば、処理されたすべての記述子名についてコマンド応答が取得できます。

OPTION

コマンドとともに実行される追加の機能を指定します。

ALLRSP

コマンドで処理されたすべての記述子について、応答行を戻すことを指示します。デフォルトのアクションでは、エラーになった記述子についてのみ応答行が戻されます。これは、ワイルドカード文字を含む名前にも有効です。ALLRSP は、他の NAME 値では無視されます。

SET

変更される属性値を指定します。

ACCTYPE

この記述子を使用して作成されたデータベースのアクセス・インテントを指定します。

BRWS

データベースは、この IMS サブシステムでは読み取り専用処理に使用できます。このサブシステムでデータベースを使用できるのは、GO (PROCOPT=GO) という PCB 処理オプションをもつプログラムだけです。GO 処理オプションを使用してデータにアクセスするプログラムは、コミットされていないデータを見ることがあります。これは、共用する IMS サブシステムがデータベースを更新中の場合があるためです。データベースは読み取り専用処理用にオープンされます。

EXCL

データベースはこの IMS サブシステムによって排他的に使用されます。この排他的アクセスは、データベースが DBRC に登録してあるときのみ保証されます。

READ

データベースは、この IMS サブシステムでは読み取り専用処理に使用できます。更新意図をもつプログラムは、スケジュールすることはできませんが、データベースを更新することはできません。アクセス・タイプ READ では、データは保全性付きの読み取りで読み取られ (ロッキングが行われます)、GO 処理オプションを使用するプログラムだけでなく、すべてのプログラムがデータにアクセスできます。これが、アクセス・タイプ BRWS とは異なる点です。データベースは読み取り専用処理用にオープンされます。

UPD

データベースは、IMS サブシステムで読み取り処理だけでなく更新にも使用されます。

DEFAULT(Y)

この記述子をデフォルトとして指定します。これは、既存のデフォルト記述子を DEFAULT(N) にリセットします。LIKE キーワードなしで記述子が作成される時、CREATE コマンドで指定されない属性は、デフォルト記述子に定義されている値を取ります。リソース・タイプのデフォルトとして、記述子 1 つだけが定義できます。IMS は、DFSDSDB1 と呼ばれるデータベース記述子を定義しています。ここでは、すべての属性がデフォルト値で定義されています。ユーザー定義記述子をデフォルトに定義すると、現在のデフォルト記述子がオーバーライドされます。デフォルトにできるデータベース記述子は一度に 1 つに限られるため、1 つのデータベース名のみを DEFAULT(Y) で指定できます。

RESIDENT

この記述子を使用して作成されたデータベースの常駐オプションを指定します。RESIDENT(Y) オプションは、次の再始動時に有効になります。ただし、この IMS で実行中の緊急時再始動の開始点であるチェックポイントの後でデータベースが RESIDENT(Y) として更新された場合を除きます。ACBLIB に DEDB として定義されているデータベースは、指定された RESIDENT 値に関係なく、DEDB のロード時に常に RESIDENT(Y) 属性を設定します。DEDB の場合、RESIDENT(N) はリジェクトされます。

N 指定されたデータベース・リソースに関連する DMB は、ストレージに常駐にされません。DMB はスケジュールされた時間にロードされません。

- Y 指定されたデータベース・リソースに関連する DMB は、次回の IMS の再始動時にストレージに常駐にされます。次回の IMS の再始動時に、IMS は DMB をロードし、それを初期化します。常駐データベースはローカル・ストレージからアクセスされるため、ACBLIB への入出力が不要になります。オンライン環境では、DMB 制御ブロックは ACBLIB に保管されます。DLI/SAS アドレス・スペースが存在する場合、DLI/SAS が DMB をロードします。それ以外の場合、DMB をロードするのは IMS 制御領域です。このため、DMB は対応するデータベース・リソースの存在に依存することになります。

使用上の注意

記述子は、DELETE コマンドを使用して削除されない限り、IMS の存続期間中存在着ています。記述子は、IMS ウォーム・スタートまたは緊急時再始動を越えて、リカバリー可能です。IMS がコールド・スタートする場合、IMS が稼働中にエクスポートされた定義をコールド・スタートがインポートしない限り、記述子は失われます。

UPDATE コマンドで指定されたすべての属性が既にその記述子に定義されている場合、更新は実際には行われず、記述子は静止されず、ログ・レコードは作成されず、ゼロの完了コードが戻されます。これにより、アクションを行う必要がないときに、不要なオーバーヘッドを回避できます。

UPDATE DBDESC コマンドは、OM API を介してのみ出すことができます。このコマンドは DB/DC システムおよび DBCTL システムに適用されます。

UPDATE DBDESC コマンドは、XRF 代替または FDBR 領域では無効です。MODBLKS のオンライン変更が使用可能な場合 (DFSDFxxx または DFSCGxxx が MODBLKS=OLC で定義されているか、MODBLKS が定義されていない場合)、UPDATE DBDESC コマンドは無効です。

このコマンドはリカバリー可能です。

各記述子が個別に更新されます。個別の更新は、オンライン変更の機能 (すべての記述子が更新されるか、どの記述子も更新されないかのいずれか) とは異なります。記述子が現在使用中でない場合には、正常に更新できます。記述子が使用中の場合、更新は失敗します。シスプレックス環境では、一部の IMS システムでは更新に成功し、他の IMS システムでは失敗する場合があります。記述子が使用中になるのは、その記述子を参照する別のコマンドが進行中である場合です。

記述子が IMS 定義のデータベース記述子 (DFSDB1) である場合、更新できる唯一の属性は、DEFAULT 属性です。

出力フィールド

以下の表には、UPDATE DBDESC 出力フィールドが記載されています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 397. UPDATE DBDESC コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	キーワード	意味
CC	N/A	完了コード。
CCTXT	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードを簡潔に説明する完了コード・テキスト。
DESC	DBDESC	データベース記述子名。
ERRT	<i>error</i>	診断情報を含むエラー・テキスト。エラー・テキストはゼロ以外の完了コードに戻すことができ、完了コードをさらに説明する情報を含んでいます。
OLDDEF	DBDESC	古いデフォルト記述子名 (DEFAULT(Y) を指定して、この記述子をデフォルトに更新する場合)。古いデフォルトの記述子は、もはやデフォルトではありません。

戻りコード、理由コード、および完了コード

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 398. UPDATE DBDESC コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各記述子の行と、その完了コードを含んでいます。NAME(*) が OPTION(ALLRSP) なしで指定される場合、出力行は戻されません。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'00000004'	X'00002008'	キーワードの数が無効です。SET キーワードのいずれかが必要です。
X'00000008'	X'00002048'	無効な SET 属性。
X'00000008'	X'00002133'	複数の name パラメーターが DEFAULT(Y) に指定されています。一度に 1 つの記述子のみをデフォルトにできます。
X'0000000C'	X'00003000'	一部の記述子ではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各記述子の行と、その完了コードを含んでいます。NAME(*) が OPTION(ALLRSP) なしで指定されている場合、ゼロ以外の完了コードをもつ記述子についてのみ出力行が戻されます。詳しくは、完了コード表を参照してください。

表 398. UPDATE DBDESC コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'0000000C'	X'00003004'	コマンドはどの記述子でも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各記述子の行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'00000010'	X'0000400C'	XRF 代替システムではコマンドは無効です。
X'00000010'	X'00004120'	オンライン変更フェーズが進行中です。
X'00000010'	X'00004310'	トランザクション入力編集ルーチン・テーブル用のストレージを取得できませんでした。このエラーを修正するには、コールド・スタートが必要です。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できませんでした。
X'00000014'	X'00005008'	DFSPOOL ストレージを取得できませんでした。
X'00000014'	X'0000500C'	AWE を取得できませんでした。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。以下の表には、完了コードの説明が記載されています。

表 399. UPDATE DBDESC コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		データベース・リソースまたはデータベース・リソース記述子に対するコマンドは正常に完了しました。
17	ANOTHER CMD IN PROGRESS	なし。コマンドは、DEDB のすべてのエリアについて、エラーを伴って完了しました。エラーがあったエリア名について応答行が戻されます。
48	NOT ALLOWED FOR IMS RESOURCE	指定された UPDATE コマンドは、IMS 記述子およびリソースに対しては使用できません。DFSDB1 は、IMS 記述子の一例です。更新できる唯一の IMS 記述子属性は、DEFAULT(Y) です。
6C	NOT ALLOWED FOR A HALDB PARTITION	UPDATE コマンドは、HALDB 区画の常駐オプションの変更を指定しました。常駐オプションは、マスターに対してのみ有効であり、区画に対しては無効です。
8A	WILDCARD PARAMETER NOT SUPPORTED	ワイルドカード・パラメーターが DEFAULT(Y) で指定されました。一度に 1 つの記述子のみをデフォルトにできます。

表 399. UPDATE DBDESC コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
1D7	IMPORT CHANGE LIST ERROR	記述子は、IMSRSC リポジトリ内の変更リストからのインポート処理中であるか、変更リストから正常にインポートされませんでした。記述子は、リポジトリから正常にインポートされるまでは、更新することができません。

例

以下に示すのは UPDATE DBDESC コマンドの例です。

UPDATE DBDESC コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE DBDESC NAME(*) SET(RESIDENT(Y)) OPTION(ALLRSP)
```

TSO SPOC 出力:

```
Response for: UPDATE DBDESC NAME(*) SET(RESIDENT(Y)) OPTION(ALLRSP)
DescName MbrName  CC CText
BRWSDDESC IMS1      0
DESC001  IMS1      0
DESC002  IMS1      0
DESC003  IMS1      0
DESC004  IMS1      0
DESC005  IMS1      0
DFSDSDB1 IMS1      48 NOT ALLOWED FOR IMS RESOURCE
EXCLDESC IMS1      0
RESDESC  IMS1      0
```

OM API 入力:

```
CMD(UPDATE DBDESC NAME(*) SET(RESIDENT(Y)) OPTION(ALLRSP))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.3.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2006.312 23:27:37.656606</statime>
<stotime>2006.312 23:27:37.661922</stotime>
<staseq>BFAD4F2D1B11EC8E</staseq>
<stoseq>BFAD4F2D1C5E294E</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10152737</rqsttkn1>
<rc>0200000C</rc>
<rsn>00003008</rsn>
<rsnmsg>CSLN054I</rsnmsg>
<rsntxt>None of the clients were successful.</rsntxt>
</ctl>
<cmderr>
<nbr name="IMS1 ">
<typ>IMS </typ>
<styp>DBDC </styp>
<rc>0000000C</rc>
<rsn>00003000</rsn>
<rsntxt>At least one request successful</rsntxt>
```


```

</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>DBDESC </kwd>
<input>UPDATE DBDESC NAME(*) SET(RESIDENT(Y)) OPTION(ALLRSP) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="DESC" l1b1="DescName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll=
  "no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="ERRT" l1b1="ErrorText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="16" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DESC(EXCLDESC) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>DESC(DESC004 ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>DESC(DESC005 ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>DESC(DESC001 ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>DESC(RESDESC ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>DESC(BRWSDESC) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>DESC(DESC002 ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>DESC(DESC003 ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>DESC(DFSDSDB1) MBR(IMS1) CC( 48) CCTXT(NOT ALLOWED FOR IMS
RESOURCE) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>


```

説明: すべてのデータベース記述子を常駐にするように更新します。ほとんどのデータベース記述子については、完了コード 0 で示されているように、更新は正常に完了しました。IMS 定義の記述子 DFSDSDB1 の更新は、完了コード 48 NOT ALLOWED FOR IMS RESOURCE で失敗しました。DFSDSDB1 で更新できる唯一の属性は DEFAULT(Y) であるからです。

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

UPDATE IMS コマンド

UPDATE IMS コマンドは、ローカルおよびグローバルの IMS 属性を更新するために使用します。これには、IMSplex 内のエリア、データベース、およびトランザクションのグローバル状況が含まれます。また、UPDATE IMS コマンドを使用して、IMS が IMSRSC リポジトリを使用できるようにすることもできます。

IMSplex 内のグローバル PLEXPARM 値を変更するには、UPDATE IMS SET(PLEXPARM()) コマンドを使用します。IMSplex 内の 1 つ以上の IMS システムのローカル LCLPARM 値を変更するには、UPDATE IMS SET(LCLPARM()) コマンドを使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 1155 ページの『キーワード』
- 1160 ページの『使用上の注意』
- 1161 ページの『出力フィールド』
- 1162 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1164 ページの『例』

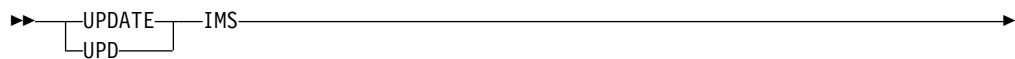
環境

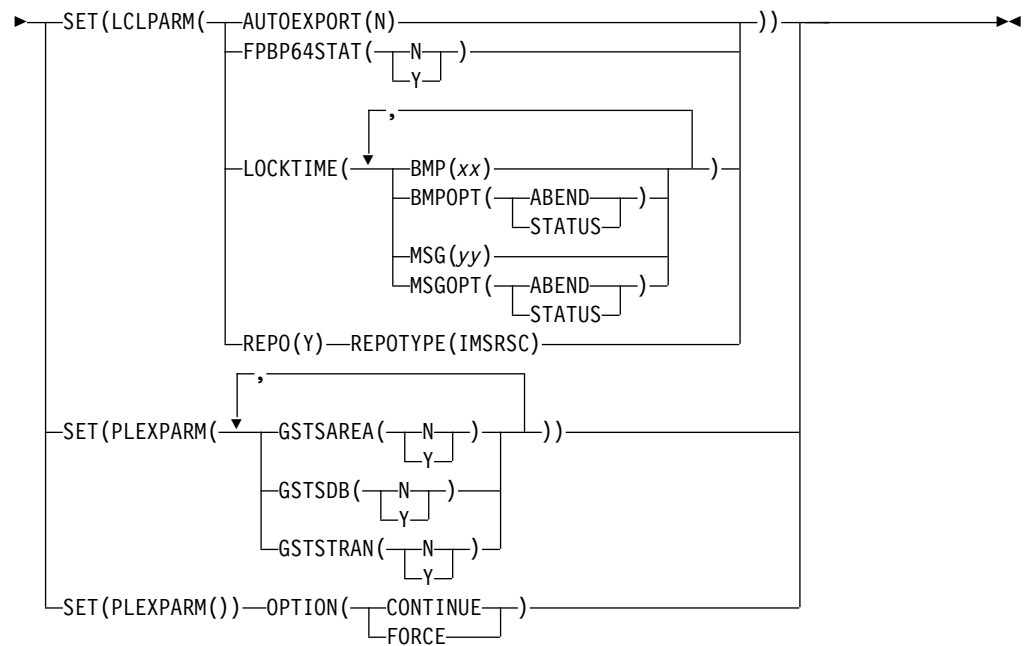
以下の表には、UPDATE IMS コマンドおよびキーワードを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 400. UPDATE IMS コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
UPDATE IMS	X	X	X
SET	X	X	X
OPTION	X	X	X

構文





キーワード

以下のキーワードは、UPDATE IMS コマンドに有効です。

LCLPARAM()

ローカル・パラメーターの値を変更することを指定します。LCLPARAM() キーワードは、UPDATE IMS SET() コマンドの PLEXPARAM() キーワードと相互に排他的です。

UPDATE IMS SET(LCLPARAM()) コマンドを使用して、各 IMS システムのローカル・パラメーター (FPBP64STAT など) を変更できます。

UPDATE IMS SET(LCLPARAM()) コマンドの場合、OM からコマンドを受け取ったすべての IMS システムがコマンドを処理します。

以下のいずれかのオプションを指定します。

AUTOEXPORT(N)

システム・チェックポイント中の自動エクスポート処理を使用不可にすることを指定します。AUTOEXPORT キーワードは、IMSRSC リポジトリの有無に関係なく DRD 環境で有効です。

RDDS データ・セットを使用できる DRD ユーザーは、リポジトリへのマイグレーションが正常に実行された後、UPDATE IMS SET(LCLPARAM(AUTOEXPORT(N))) コマンドを使用できます。このコマンドを使用すると、システム・チェックポイントでの自動エクスポートによるプロセッサ使用量が削減されます。

AUTOEXPORT(N) は、IMSRSC リポジトリと RDDS の両方が使用可能に設定されている場合、その両方への自動エクスポートをオフにします。IMS シャットダウン時にリポジトリへの自動エクスポート中にエラーがあった場合は、UPDATE IMS SET(AUTOEXPORT(N)) コマンドを使用してリポジトリへの自動エクスポートをオフにし、IMS シャットダウンを再試行することができます。

UPDATE IMS SET(AUTOEXPORT(N)) コマンドによって加えた変更は、IMS の再始動までのみ有効です。IMS での AUTOEXPORT 設定を永続的に変更するには、DFSDFxxx PROCLIB メンバーで AUTOEXPORT 設定を変更します。

AUTOEXPORT(N) キーワードを指定した UPDATE IMS コマンドが発行された後も、引き続き EXPORT コマンド、IMPORT コマンド、および自動インポート時にシステム RDDS データ・セットを使用できます。ただし、インポート時および自動インポート時には、特に AUTOEXPORT がオフになっている場合は、RDDS に現行データが含まれていることを確認してください。

RDDS または IMSRSC リポジトリ、あるいはその両方への自動エクスポートは、DFSDFxxx PROCLIB メンバーに対して AUTOEXPORT=RDDS | REPO | AUTO を指定し、IMS をコールド・スタートすることで使用可能にすることができます。

RDDS への自動エクスポートを使用可能にするには、DFSDFxxx PROCLIB メンバーに対して AUTOEXPORT=N を指定してから IMS を始動します。

FPBP64STAT

従属領域の作業単位 (UOW) ごとの高速機能 64 ビット・バッファ使用統計を OLDS に書き込むかどうかを指定します。高速機能 64 ビット・バッファ使用量は、X'5945' ログ・レコードに記録されています。

N X'5945' ログ・レコード内の従属領域の作業単位ごとの高速機能 64 ビット・バッファ使用統計を OLDS に書き込みません。

Y X'5945' ログ・レコード内の従属領域の作業単位ごとの高速機能 64 ビット・バッファ使用統計を OLDS に書き込みます。

LOCKTIME

IMS LOCKTIME 値を指定します。以下のキーワードとパラメーターを任意に組み合わせて、LOCKTIME 値を指定できます。

BMP(xx)

BMP 領域に対するロック要求がタイムアウトになるまでに IMS が待機する時間の長さを指定します。BMP 領域には、IMS BMP 領域と JBP 領域が含まれます。時間を秒単位で表す値は、1 から 32767 の範囲です。

BMPOPT(ABEND | STATUS)

IMS がタイムアウトになったタスクを異常終了するか (ABEND)、状況コードをアプリケーションに返すか (STATUS) を指定します。

MSG(yy)

MSG 領域に対するロック要求がタイムアウトになるまでに IMS が待機する時間の長さを指定します。MSG 領域には、IMS MPP 領域、JMP 領域、および IFP 領域、ならびに DRA スレッドが含まれます。時間を秒単位で表す値は、1 から 32767 の範囲です。

MSGOPT(ABEND | STATUS)

IMS がタイムアウトになったタスクを異常終了するか (ABEND)、状況コードをアプリケーションに返すか (STATUS) を指定します。

IMS LOCKTIME 値の更新は、IRLM 内のロック・タイムアウト値には影響を与えません。IRLM 内のロック・タイムアウト値を変更するには、既存の MODIFY IRLM コマンドを使用します。

推奨事項: 通常は、IMS と IRLM の両方に同じタイムアウト値を使用してください。IMS 内で 2 つの値を使用している場合、IRLM タイムアウト値を 2 つの IMS 値のうちの低い方の値に設定すると、IMS と IRLM を連動させることができます。同じ IRLM に対して複数の IMS が識別されている場合、ワークロードの条件によっては、IMS システム間で異なるタイムアウト値を使用することが必要な場合があります。そのような場合は、以下のことに注意してください。

- IRLM でより低いタイムアウト値を使用すると、ロック要求は、待機に費やされる時間が最低の IMS LOCKTIME 値に等しくなるまで待つこととなります。
- IRLM でより高いタイムアウト値を使用すると、IRLM は、IRLM タイムアウト値を超えるまで IMS を呼び出さないため、ロック要求は、IMS 時間を過ぎて待つこととなります。

REPO(Y)

IMS のリポジトリの使用を有効にします。

REPOTYPE(IMSRSC)

有効にするリポジトリのタイプ。REPO(Y) では REPOTYPE は必須です。

コマンドの処理時に、IMS は RM に接続し、リポジトリ・サービスでの IMS のリポジトリの使用を有効にします。RM でリポジトリの使用が有効になっていない場合、UPDATE IMS コマンドの結果はエラーになります。最初に UPDATE RM コマンドを発行して、RM でのリポジトリの使用を有効にする必要があります。

リポジトリの使用を無効にするには、IMS をコールド・スタートする必要があります。

IMS の初期設定時には、DFSDFxxx PROCLIB メンバーの REPOSITORY セクションで REPOSITORY=(TYPE=IMSRSC) ステートメントが定義されている場合にのみ、リポジトリの使用が有効です。したがって、UPDATE IMS SET(LCLPARM(REPO(Y) REPOTYPE(IMSRSC))) コマンドが正常に処理された場合は、IMS を再始動する前に REPOSITORY=(TYPE=IMSRSC) ステートメントを追加しておく必要があります。リポジトリの使用を無効にできるのは、IMS のコールド・スタートを介してのみであるからです。

IMS の再始動時に、再始動の前に IMSRSC リポジトリが使用可能にされたことが IMS ログ・レコードに示されており、REPOSITORY=(TYPE=IMSRSC) ステートメントが定義されていない場合、IMS は U0168 異常終了コードおよび X'1C'エラー・コードで終了します。

XRF 複合システムの場合、IMS アクティブ・システムでコマンドを入力すると、コマンドは IMS 代替システムで処理されます。コマンドを正常に実行するには、IMS アクティブ・システムと代替システムの両方

で、それぞれの DFSDFxxx PROCLIB メンバーの REPOSITORY セクションに REPOSITORY=(TYPE=IMSRSC) ステートメントを追加する必要があります。

IMS が IMSRSC リポジトリに接続した後、IMS の初期化中に使用された DFSDFxxx メンバー内で AUTOEXPORT=AUTO または REPO が明示的に指定された場合にも、IMSRSC リポジトリへの自動エクスポートが使用可能になります。

自動エクスポートは、DFSDFxxx メンバー内で指定された AUTOEXPORT_IMSID= 値に基づいて行われます。AUTOEXPORT_IMSID= が DFSDFxxx メンバー内で指定されていない場合、自動エクスポート対象の AUTOEXPORT_IMSID は THIS_IMS に設定されます。

AUTOEXPORT_IMSID=ALL を指定する場合は、DFSDFxxx メンバーを変更してリポジトリ・セクションと AUTOEXPORT_IMSID=ALL を追加し、IMS を再始動する必要があります。

AUTOEXPORT=AUTO または REPO を DFSDFxxx メンバー内で明示的に指定しなかった場合、IMSRSC リポジトリへの自動エクスポートは UPD IMS コマンドによって使用可能になりません。DFSDFxxx メンバーを変更して、AUTOEXPORT=AUTO または REPO と AUTOEXPORT_IMSID= キーワードを追加し、IMS を再始動する必要があります。

PLEXPARAM()

グローバル・パラメーターの値を変更することを指定します。LCLPARAM キーワードは、UPDATE IMS SET() コマンドの PLEXPARAM キーワードと相互に排他的です。

UPDATE IMS SET(PLEXPARAM()) コマンドは、IMSplex 内に維持されているエリア、データベース、およびトランザクションのグローバル状況を変更するために使用できます。コマンドが正常に実行された場合、RM グローバル PLEXPARAM エントリー内の値が、各 IMS システム内に維持されている値と共に更新されます。

UPDATE IMS SET(PLEXPARAM()) コマンドの場合、IMSplex 内のすべての IMS システムがコマンドを受け取りますが、コマンド・マスター IMS のみがコマンドを処理します。マスター以外の IMS システムは、OM から送信されたコマンドを処理しません。代わりに、コマンド・マスター IMS が IMSplex 内のすべての IMS システム間の変更を調整します。

以下のリソースの 1 つ以上を指定します。

GSTSAREA

IMSplex 内でエリア状況を維持する方法を指定します。

- N** エリア・リソースに関するグローバル状況は RM 内に維持されません。RM 内のエリア・リソースに関するすべてのグローバル状況が削除されます。
- Y** エリア・リソースに関するグローバル状況が RM 内に維持されます。

後続の UPD AREA SCOPE(ALL) コマンドまたは GLOBAL キーワードを含むタイプ 1 エリア・コマンドで、グローバル状況が維持されます。

GSTSDB

IMSplex 内でデータベース状況を維持する方法を指定します。

- N** データベース・リソースに関するグローバル状況は RM 内に維持されません。RM 内のデータベース・リソースに関するすべてのグローバル状況が削除されます。
- Y** データベース・リソースに関するグローバル状況が RM 内に維持されます。後続の UPD DB SCOPE(ALL) コマンドまたは GLOBAL キーワードを含むタイプ 1 データベース・コマンドで、グローバル状況が維持されます。

GSTSTRAN

IMSplex 内でトランザクション状況を維持する方法を指定します。

- N** トランザクション・リソースに関するグローバル状況は RM 内に維持されません。RM 内のトランザクション・リソースに関するすべてのグローバル状況が削除されます。
- Y** トランザクション・リソースに関するグローバル状況が RM 内に維持されます。後続の UPD TRAN SCOPE(ALL) コマンドで、グローバル状況が維持されます。

OPTION()

UPDATE IMS SET コマンドのオプションを指定します。

CONTINUE

IMS が、以前に入力され、完了前にエラーが発生した UPDATE IMS SET コマンドの処理を続行する必要があることを示します。コマンドは、処理を続行できる時点になればなりません。そうでない場合、コマンドは打ち切られます。

OPTION(CONTINUE) が指定されている場合、PLEXPARM パラメーターでパラメーターを渡すことはできません。

FORCE

DBCTL ウォーム・スタンバイ環境では、スタンバイ・システムが再始動処理を終了していなかったために UPD IMS コマンドが失敗する場合は、OPTION(FORCE) を使用できます。OPTION(FORCE) を指定すると、IMS が再始動モードにある場合でも、UPD IMS コマンドを完了することができます。OPTION(FORCE) が指定されると、再始動モードにある IMS は参加せず、UPD IMS 値を更新しません。このオプションは、その他の IMS システムで UPD IMS コマンドを終了できるようにするだけです。

DBCTL スタンバイは、再始動してアクティブになった時点で、グローバル・エントリーを再読み取りして、現行の PLEXPARM 値を取得します。DBCTL 以外のスタンバイ・システムが再始動を終了しなかったときに OPTION(FORCE) を使用した場合、IMS は UPD IMS コマンドを実行しないため、結果は予想通りにならないことがあります。これは、PLEXPARM 値の不一致によるエラーをもたらす可能性があります。

使用上の注意

UPDATE IMS SET コマンドは、OM API を介して発行する必要があるタイプ 2 コマンドです。コマンドは OM に対して ROUTE=ALL として定義されます。OM は、コマンドを IMSplex 内のすべての IMS システムに経路指定します。このコマンドはリカバリー可能コマンドではありません。

コマンドがログ・レコードから処理される唯一のケースは、XRF 代替システムの場合です。XRF 代替システムでは、XRF アクティブ・システムの X'220E' ログ・レコードを読み取って、XRF アクティブと同調します。XRF 環境でも、テークオーバーが発生して IMS の再始動が必要な場合 (/ERE または /NRE) には、コマンドはリカバリーされません。DFSDFxxx PROCLIB メンバーを変更して、REPOSITORY セクションに REPOSITORY=(TYPE=IMSRSC) ステートメントを含める必要があります。これを行わないと、IMS は U0168 異常終了コードおよび X'1C'エラー・コードで終了します。

一般に、UPDATE IMS コマンドに対してゼロ以外の戻りコードを受け取った場合は、UPD IMS SET(PLEXPARM()) OPTION(CONTINUE) コマンドを入力する必要があります。これは、コマンドを完了するか、コマンドを取り消してクリーンアップするかのいずれかを、必要に応じて行うように IMS に指示します。UPD IMS SET(PLEXPARM()) OPTION(CONTINUE) コマンドからの理由コードは、元の UPD IMS コマンドの状態を示している場合があります。コマンドが元の UPD IMS コマンドの状態を判別できない場合、理由コードにその旨が示されます。ユーザーは、QUERY IMS コマンドを使用して、グローバル IMSplex パラメーターの状態を調べることができます。

UPD IMS コマンドの処理中にエラーが発生した場合、UPDATE IMS SET(PLEXPARM()) OPTION(CONTINUE) コマンドが発行されて正常に完了するまでは、別の新しい UPD IMS コマンドを処理することはできません。

UPDATE IMS コマンドでゼロ以外の戻りコードを受け取る原因となったエラー条件が解決されていないと、UPDATE IMS SET(PLEXPARM()) OPTION(CONTINUE) コマンドは引き続き同じエラー条件を検出することになります。コマンドをクリーンアップして別の UPDATE IMS コマンドを入力する前に、エラー条件を解決しておく必要があります。

このコマンドは、FDBR システムまたは XRF 代替システムでは無効です。ただし、FDBR システムと XRF 代替システムは、グローバル PLEXPARM 値を内部で維持しており、QUERY IMS SHOW (PLEXPARM) コマンドを使用すると、それぞれの値を報告します。FDBR システムは、完了コード ICC_NA または 1 を戻します。その他の IMS システムでは UPD IMS コマンドを完了することができます。

IMS が再始動中の場合、UPD IMS SET コマンドは許可されません。コマンドは失敗し、'B0' の戻りコードが発行されます。IMS が再始動処理を完了した後で、UPD IMS コマンドを発行する必要があります。

REPO(Y) が指定されている場合、一部のエラー状態の結果として、DFS3308E、DFS4400E、DFS4457E、またはその他のエラー・メッセージが、コマンド応答のメッセージ出力として送信されます。これらのメッセージを使用すると、エラーの原因を診断するのに役立つことがあります。

出力フィールド

以下の表は、UPDATE IMS の出力フィールドを示します。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

有効範囲

出力フィールドの有効範囲を識別します。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 401. UPDATE IMS コマンドの出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
CC	CC	n/a	n/a	出力行の完了コード。完了コードは常に戻されます。
LPARM	LclParmName	LCLPARM	LCL	変更中のローカル・パラメーターの名前。コマンドで入力された内容に応じて、このパラメーターの複数のサブパラメーターが変更されることがあります。
MBR	MbrName	n/a	n/a	出力行を作成した IMS の IMS ID。IMS ID は常に戻されます。
CCTXT	CCText	n/a	LCL	完了コードに関する詳しい情報を提供するための完了コード・テキスト。CC テキストには、サービスからの戻りコードが含まれている可能性があります。CC テキストは、完了コードがゼロ以外の場合にのみ戻されます。
PARMNAME	ParmName	PARMNAME	LCL	変更中のグローバル・パラメーターの名前。コマンドで入力された内容に応じて、このパラメーターの複数のサブパラメーターが変更されることがあります。
REPOTP	RepositoryType	LCLPARM, REPO	LCL	リポジトリのタイプ。

戻りコード、理由コード、および完了コード

UPDATE IMS コマンドの結果として戻されることのある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに対して標準的です。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 402. UPDATE IMS コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE IMS コマンドは正常に完了しました。
X'00000004'	X'00001000'	IMS システムがコマンド・マスターではないため、この IMS システムでは UPDATE IMS コマンドは処理されませんでした。リソース情報は戻されません。
X'00000004'	X'00001020'	UPD IMS OPTION(CONTINUE) はクリーンアップを終了しましたが、状態は不明です。ユーザーは、コマンドをやり直すか再発行する必要があります。
X'00000008'	X'00002004'	UPDATE IMS SET() コマンドで、LCLPARM キーワードと PLEXPARM キーワードの両方が指定されました。LCLPARM と PLEXPARM は、相互に排他的なキーワードです。
X'00000008'	X'00002008'	UPDATE IMS コマンドで、PLEXPARM キーワードも LCLPARM キーワードも指定されませんでした。グローバル・パラメーター用の PLEXPARM またはローカル・パラメーター用の LCLPARM を指定してください。
X'00000008'	X'00002040'	UPDATE IMS コマンドで、複数のフィルター値が指定されています。
X'0000000C'	X'00003004'	No requests were successful.
X'00000010'	X'00004000'	IMS の再始動が完了していないため、UPDATE IMS コマンドは処理されません。
X'00000010'	X'00004004'	CQS アドレス・スペースがありません。
X'00000010'	X'0000400C'	XRF 代替システムではコマンドは無効です。
X'00000010'	X'00004018'	リソース構造がないか、リソース構造が使用できません。
X'00000010'	X'0000401C'	FDBR 領域ではコマンドは無効です。
X'00000010'	X'00004100'	リソース構造が満杯です。
X'00000010'	X'00004104'	RM が利用不可のため、UPDATE IMS コマンドは処理されません。
X'00000010'	X'00004108'	SCI が利用不可のため、UPDATE IMS コマンドは処理されません。

表 402. UPDATE IMS コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000010'	X'00004124'	処理ステップが進行中のため、UPDATE IMS コマンドは処理されません。
X'00000010'	X'00004128'	RM 処理ステップが何も進行中でないため、UPDATE IMS コマンドは処理されません。
X'00000010'	X'00004200'	IMS のシャットダウンが進行中のため、UPDATE IMS コマンドは処理されません。
X'00000010'	X'00004208'	RMENV=NO に対して無効なコマンド。
X'00000010'	X'0000420C'	コマンド・マスター以外でのエラー。マスター以外の IMS 上のエラーが原因で UPD IMS を完了できませんでした。
X'00000010'	X'00004300'	REPO(Y) または AUTOEXPORT(N) の場合、動的リソース定義 (MODBLK=DYN) が使用可能でないため、コマンドはリジェクトされます。
X'00000010'	X'00004501'	RM はリポジトリには使用できません。
X'00000014'	X'00005000'	IMODULE GETSTOR ストレージを取得できなかったため、UPDATE IMS コマンドは処理されません。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できなかったため、UPDATE IMS コマンド処理は終了しました。
X'00000014'	X'00005100'	RM 要求エラーのため、UPDATE IMS コマンドは処理されません。
X'00000014'	X'00005104'	CQS エラーが原因で、UPDATE IMS コマンドは処理されませんでした。
X'00000014'	X'00005108'	SCI 要求エラーのため、UPDATE IMS コマンドは処理されません。
X'00000014'	X'0000510C'	別の処理が進行中のため、UPDATE IMS コマンドは処理されません。
X'00000014'	X'00005110'	リポジトリ・エラー。
X'00000014'	X'00005FFF'	IMS 内部エラーが原因で、UPDATE IMS コマンドは処理されませんでした。

UPDATE IMS コマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 403. UPDATE IMS コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		UPDATE IMS コマンドは正常に完了しました。
1		コマンドは IMS には適用されません。
55	NO FASTPATH INSTALLED	高速機能がインストールされていないため、コマンドは適用されません。

表 403. UPDATE IMS コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
B0		IMS の再始動が完了していません。IMS が再始動を完了しなかったため、UPD IMS コマンドを完了することができませんでした。UPD IMS SET(PLEXPARM()) OPTION(CONTINUE) で UPD IMS コマンドを終了する必要があります。IMS が再始動処理を終了した後で、UPD IMS SET(PLEXPARM(...)) を発行する必要があります。
BB		RMENV=NO であるため、コマンドは適用されません。
146	INVALID KEYWORD FOR DCCTL	コマンドは DCCTL システムには適用されません。
147	FPBP64 NOT ENABLED	高速機能 64 ビット・バッファ・マネージャーが使用可能になっていないため、コマンドは適用されません。

例

以下に示すのは UPDATE IMS コマンドの例です。

UPDATE IMS コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE IMS SET(PLEXPARM(GSTSAREA(Y),GSTSDB(Y),GSTSTRAN(N)))
```

TSO SPOC 出力:

Response for UPDATE IMS SET(PLEXPARM(GSTSAREA(Y),GSTSDB(Y),GSTSTRAN(N)))

ParmName	MbrName	CC
PLEXPARM	PRODIMS1	0
PLEXPARM	PRODIMS2	0
PLEXPARM	SYS3	0

説明: UPD IMS コマンドは、IMSplex 内の 3 つのアクティブな IMS システム (PRODIMS1、PRODIMS2、および SYS3) で正常に処理され、RM 内で正常に更新されています。

UPDATE IMS コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE IMS SET(PLEXPARM(GSTSTRAN(Y)))
```

TSO SPOC 出力:

Response for UPDATE IMS SET(PLEXPARM(GSTSTRAN(Y)))

ParmName	MbrName	CC	GSTSTRAN
PLEXNAME	PRODIMS1	0	Y
PLEXNAME	PRODIMS2	0	Y
PLEXNAME	SYS3	0	Y

説明: UPD IMS コマンドは、IMSpIex 内の 3 つのアクティブな IMS システム (PRODIMS1、PRODIMS2、および SYS3) で正常に処理され、RM 内で正常に更新されています。

UPDATE IMS コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE IMS SET(PLEXPARM(GSTSTRAN(N)))
```

TSO SPOC 出力:

```
Response for: UPDATE IMS SET(GSTSTRAN(Y))
MbrName  CC  GSTSTRAN CCText
SYS3      0  Y
PRODIMS1  0  Y
PRODIMS2 16  Y          IMS TIMED OUT
```

UPDATE IMS コマンドの例 4

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE IMS SET(LCLPARM(FBPB64STAT(Y)))
```

TSO SPOC 出力:

ParmName	LclParmName	MbrName	CC
LCLPARM	FPBP64STAT	IMS1	0
LCLPARM	FPBP64STAT	IMS2	0

説明: この例では、UPDATE IMS コマンドは FPBP64STAT ロギングをオンにしています。

UPDATE IMS コマンドの例 5

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE IMS SET(LCLPARM(FBPB64STAT(N)))
```

TSO SPOC 出力:

ParmName	LclParmName	MbrName	CC
LCLPARM	FPBP64STAT	IMS1	0
LCLPARM	FPBP64STAT	IMS2	0

説明: この例では、UPDATE IMS コマンドは FPBP64STAT ロギングをオフにしています。

UPDATE IMS コマンドの例 6

TSO SPOC 入力:

```
UPD IMS SET(LCLPARM(LOCKTIME(MSG(40),MSGOPT(ABEND),BMP(30),
BMPOPT(STATUS))))
```

TSO SPOC 出力:

ParmName	LclParmName	MbrName	CC
LCLPARM	LOCKTIME	IMS1	0
LCLPARM	LOCKTIME	IMS2	0

説明: この例では、UPDATE IMS コマンドは IMS LOCKTIME 値を更新しています。

UPDATE IMS コマンドの例 7

TSO SPOC 入力:

```
UPD IMS SET(LCLPARM(REPO(Y) REPOTYPE(IMSRS))
```

TSO SPOC 出力:

ParmName	LclParmName	RepositoryType	MbrName	CC
LCLPARM	REPO	IMSRS	IMS1	0
LCLPARM	REPO	IMSRS	IMS2	0

OM API 入力:

```
CMD(UPD IMS SET(LCLPARM(REPO(Y) REPOTYPE(IMSRS))))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.190 01:45:07.574341</statime>
<stotime>2011.190 01:45:07.618879</stotime>
<staseq>C80A9624D1245C48</staseq>
<stoseq>C80A9624DC03F148</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10184507</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>IMS </kwd>
<input>UPD IMS SET(LCLPARM(REPO(Y) REPOTYPE(IMSRS)) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="PARM" l1b1="ParmName" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="L Parm" l1b1="LclParmName" scope="LCL" sort="a" key="2"
  scroll="no" len="10" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="REPOTP" l1b1="RepositoryType" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>PARM(LCLPARM) L Parm(REPO ) REPOTP(IMSRS ) MBR(IMS1) CC(
  0) </rsp>
<rsp>PARM(LCLPARM) L Parm(REPO ) REPOTP(IMSRS ) MBR(IMS2) CC(
  0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>
```

説明: この例では、IMS1 と IMS2 は、REPOTYPE=IMSRSC のリポジトリを使用できます。ユーザーは QUERY IMS コマンドを発行して、リポジトリ名を取得する必要があります。

UPDATE IMS コマンドの例 8

TSO SPOC 入力:


```
UPDATE IMS SET(LCLPARM(AUTOEXPORT(N))
```

TSO SPOC 出力:


ParmName	LclParmName	MbrName	CC
LclParm	AUTOEXPORT	IMS1	0
LclParm	AUTOEXPORT	IMS2	0


説明: この例では、IMS1 と IMS2 は、次のチェックポイントでの AUTOEXPORT が使用不可にされています。

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

 IMS PROCLIB データ・セットの DFSDFxxx メンバー (システム定義)

UPDATE IMSCON コマンド

UPDATE IMSCON コマンドは、1 つ以上の IMS Connect リソースの状況または構成定義を更新するために使用します。

TYPE は、更新する IMS Connect リソースのタイプを指定する必須キーワードです。デフォルトの TYPE パラメーターはありません。

UPDATE IMSCON コマンドは、OM が特定の IMS Connect をコマンド・マスターとして指定しているかどうかに関係なく、OM によるコマンドの経路指定先のすべての IMS Connect によって処理されます。

サブセクション:

- 1168 ページの『UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) コマンド』
- 1173 ページの『UPDATE IMSCON TYPE(CLIENT) コマンド』
- 1178 ページの『UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンド』
- 1191 ページの『UPDATE IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンド』
- 1195 ページの『UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンド』
- 1210 ページの『UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンド』
- 1217 ページの『UPDATE IMSCON TYPE(ISC) コマンド』
- 1224 ページの『UPDATE IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンド』
- 1229 ページの『UPDATE IMSCON TYPE(LINK) コマンド』
- 1234 ページの『UPDATE IMSCON TYPE(MSC) コマンド』

- 1240 ページの『UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) コマンド』
- 1246 ページの『UPDATE IMSCON TYPE(PORT) コマンド』
- 1258 ページの『UPDATE IMSCON TYPE(RACFUID) コマンド』
- 264 ページの『QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンド』
- 1268 ページの『UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンド』
- 1276 ページの『UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンド』

関連資料:

📄 同等の IMS Connect WTOR、z/OS、およびタイプ 2 コマンド (コマンド)

UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) コマンドは、IMS Open Database Manager (ODBM) に関連付けられた IMS 別名の属性を設定または変更するために使用します。

サブセクション:

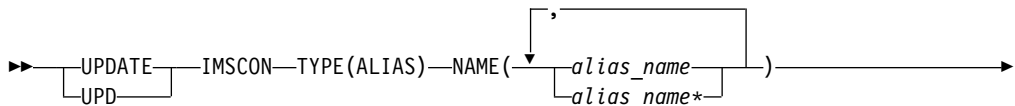
- 『環境』
- 『構文』
- 1169 ページの『キーワード』
- 1169 ページの『使用上の注意』
- 1170 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』
- 1170 ページの『出力フィールド』
- 1171 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1172 ページの『例』

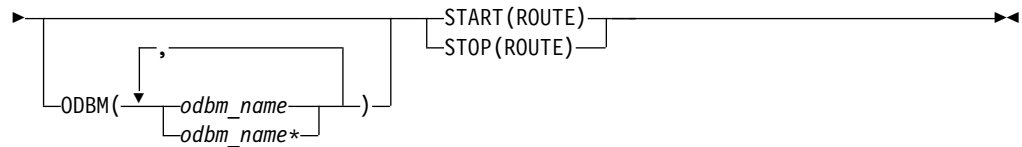
環境

UPDATE IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文





キーワード

以下のキーワードは、UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) コマンドに有効です。

NAME

IMS 別名の名前を指定します。単一の別名、またはコンマで区切った別名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

ODBM

更新する IMS ODBM の名前を指定します。単一の ODBM 名、または、コンマで区切った ODBM 名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。このキーワードはオプションです。

START (ROUTE) | STOP (ROUTE)

指定した IMS 別名に関連付けられた IMS ODBM へのメッセージ・ルーティングを使用可能または使用不可にする相互に排他的なキーワード。

START (ROUTE)

指定した IMS 別名に関連付けられた IMS ODBM へのメッセージ・ルーティングを使用可能にします。別名は、クライアントからのメッセージの送信先となる IMS データ・ストアを表します。START (ROUTE) キーワードは、指定した IMS 別名をアクティブに設定して、IMS Connect がその別名に経路指定できるようにします。

UPDATE IMSCON TYPE (ODBM) コマンドは、IMS Connect と IMS ODBM の間の通信を開始するのに対して、UPDATE IMSCON TYPE (ALIAS) コマンドは、指定された IMS 別名をアクティブに設定して、IMS Connect がその別名に経路指定できるようにします。

STOP (ROUTE)

指定した IMS 別名に関連付けられた IMS ODBM へのメッセージ・ルーティングを使用不可にします。STOP (ROUTE) キーワードは、指定された別名を非アクティブに設定して、IMS Connect がその別名に経路指定できないようにします。START (ROUTE) キーワードを指定することにより、経路指定を再開できます。

STOP (ROUTE) キーワードを使用して特定の別名へのメッセージの経路指定を停止した後で、UPDATE IMSCON TYPE (ODBM) STOP (COMM) コマンドに続いて UPDATE IMSCON TYPE (ODBM) START (COMM) を発行すると、別名の状況が失われます。言い換えると、別名は UPDATE IMSCON TYPE (ODBM) コマンドの後で再びアクティブになります。

使用上の注意

UPDATE IMSCON TYPE (ALIAS) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

このコマンドを使用して IMS Connect リソースに加えられた変更は、IMS Connect が再始動されると失われます。

同等の **WTOR** コマンドおよび **z/OS** コマンド

以下の表には、UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect WTOR (Write to Operator with Reply) コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

注:

- IMS Connect WTOR コマンドは、未解決の IMS Connect 応答メッセージに対する応答です。
- IMS Connect z/OS コマンドは、z/OS (MVS) インターフェースを介して、IMS Connect *jobname* を使用して発行されます。

表 404. UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) NAME(<i>alias_name</i>) ODBM(<i>odbm_name</i>) START(COMM)	STARTIA <i>alias_name</i> <i>odbm_name</i>	UPDATE ALIAS NAME(<i>aliasName</i>) ODBM(<i>odbmName</i>) START(ROUTE)
UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) NAME(<i>alias_name</i>) ODBM(<i>odbm_name</i>) STOP(COMM)	STOPIA <i>alias_name</i> <i>odbm_name</i>	UPDATE ALIAS NAME(<i>aliasName</i>) ODBM(<i>odbmName</i>) STOP(ROUTE)

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されます。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドには、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 405. UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
ALIAS	AliasName	N/A	ODBM のインスタンスに対して定義された IMS データ・ストアの別名。別名は常に戻されます。

表 405. UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。表 407を参照してください。
CCTXT	CCText	error	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。
ODBM	ODBMName	ODBM	別名に関連付けられた ODBM の名前。

戻りコード、理由コード、および完了コード

UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) コマンドの結果として返される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 406. UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 407. UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) コマンドは正常に完了しました。

表 407. UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
10	NO RESOURCES FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。

例

UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UDPATE IMSCON TYPE(ALIAS) NAME(IMS1) ODBM(ODBMA) START(ROUTE)
```

TSO SPOC 出力:

```
AliasName  MbrName  CC    ODBMName
IMS1       HWS1       0     ODBMA
```

OM API 入力:

```
CMD ( UDPATE IMSCON TYPE(ALIAS) NAME(IMS1) ODBM(ODBMA) START(ROUTE) )
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2010.298 15:34:49.371591</statime>
<stotime>2010.298 15:34:49.372641</stotime>
<staseq>C6C83044FA3C7630</staseq>
<stoseq>C6C83044FA7E1E70</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10083449</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>UPD IMSCON TYPE(ALIAS) NAME(IMS1) ODBM(ODBMA) START(ROUTE)
</input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="ALIAS" l1b1="AliasName" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="ODBM" l1b1="ODBMName" scope="LCL" sort="a" key="3"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
```



```

</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>ALIAS(IMS1 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) ODBM(ODBMA )
</rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: IMS 別名、IMS1 に関連付けられた IMS Open Database (ODBM)、ODBMA、へのメッセージ・ルーティングが使用可能に設定されました。

関連資料:

➡ STARTIA コマンド (コマンド)

➡ STOPIA コマンド (コマンド)

UPDATE IMSCON TYPE(CLIENT) コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(CLIENT) コマンドは、特定の TCP/IP ポートを使用するクライアントとの通信を終了するために使用します。

サブセクション:

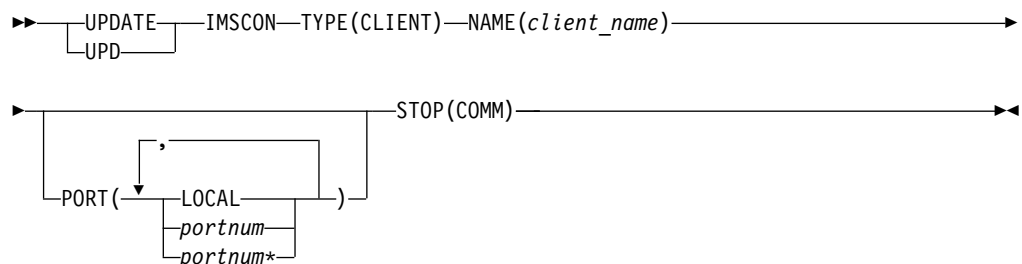
- 『環境』
- 『構文』
- 1174 ページの『キーワード』
- 1174 ページの『使用上の注意』
- 1176 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』
- 1175 ページの『出力フィールド』
- 1175 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1177 ページの『例』

環境

UPDATE IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文



キーワード

以下のキーワードは、UPDATE IMSCON TYPE(CLIENT) コマンドに有効です。

NAME

クライアントの名前を指定します。

PORT

クライアントが IMS Connect との TCP/IP 接続用に使用しているポートを指定します。

このポート番号は、TCP/IP 構成ステートメントの PORT、PORTID、または CICSSPORT サブステートメントで定義されているポート番号、または HWSCFGxx 構成メンバー内で ODACCESS 構成ステートメントの DRDAPORT サブステートメントで定義されているポート番号に一致していなければなりません。

IMS TM Resource Adapter によって使用されるローカル・ポートでフィルターに掛けるには、PORT(LOCAL) を指定します。ポート番号にはワイルドカードを使用することもできます。

SSL ポートは、ポート番号の末尾に文字「S」を付けて表示されます。SSL ポートでフィルターに掛けるには、ポート番号の末尾に文字「S」を付けて、または付けずに、ポート番号を指定します。

ODBM 用に定義されているポートは、ポート番号の末尾に文字「D」を付けて表示されます。ODBM ポートでフィルターに掛けるには、ポート番号の末尾に文字「D」を付けて、または付けずに、ポート番号を指定します。

ISC over TCPIP 用に定義されているポート (CICSSPORT) は、ポート番号の末尾に文字「C」を付けて表示されます。CICSSPORT でフィルターに掛けるには、ポート番号の末尾に文字「C」を付けて、または付けずに、ポート番号を指定します。

STOP (COMM)

特定の TCP/IP ポートを使用するクライアントとの通信を停止します。

使用上の注意

UPDATE IMSCON TYPE(CLIENT) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

このコマンドを使用して IMS Connect リソースに加えられた変更は、IMS Connect が再始動されると失われます。

クライアントが送られてくる応答メッセージを受け入れることができないとき、または、クライアントが存在しない応答メッセージを待っているとき (例えば、エラーが原因で、応答メッセージがクライアントに送り返される前に失われたとき) には、UPDATE IMSCON TYPE(CLIENT) コマンドを使用してください。

該当のクライアントについて進行中の作業が終了します。

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されます。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドには、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 408. UPDATE IMSCON TYPE(CLIENT) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。1176 ページの表 410 を参照してください。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
CLID	ClientID	N/A	クライアントの名前。クライアント名は常に戻されます。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。
PORT	Port	N/A	クライアントがアクティブであるポート番号。 以下のいずれかの文字がポート番号の末尾に追加されている場合、そのポートが特定の目的に専用であることを示します。 C CICS ポートを識別します。 D ODBM ポートを識別します。 S SSL ポートを識別します。 ポート番号の代わりに「LOCAL」と表示される場合、そのポートは IMS TM Resource Adapter が使用するローカル・ポートです。

戻りコード、理由コード、および完了コード

UPDATE IMSCON TYPE(CLIENT) コマンドの結果として返される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 409. UPDATE IMSCON TYPE(CLIENT) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE IMSCON TYPE(CLIENT) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C000014'	X'00005008'	コマンド・プロセッサは、BPEGETM を介したストレージの取得に失敗しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 410. UPDATE IMSCON TYPE(CLIENT) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、UPDATE IMSCON TYPE(CLIENT) コマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。

同等の **WTOR** コマンドおよび **z/OS** コマンド

以下の表には、UPDATE IMSCON TYPE(CLIENT) コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect WTOR (Write to Operator with Reply) コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

注:

- IMS Connect WTOR コマンドは、未解決の IMS Connect 応答メッセージに対する応答です。
- IMS Connect z/OS コマンドは、z/OS (MVS) インターフェースを介して、IMS Connect *jobname* を使用して発行されます。

表 411. UPDATE IMSCON TYPE(CLIENT) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(CLIENT) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(CLIENT) NAME(<i>client_name</i>) PORT(<i>portid</i>) STOP(COMM)	STOPCLNT <i>portid</i> <i>clientid</i>	DELETE PORT NAME(<i>portName</i>) CLIENT(<i>clientName</i>)

例

UPDATE IMSCON TYPE(CLIENT) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPD IMSCON TYPE(CLIENT) NAME(CLIENT01) PORT(9999) STOP(COMM)
```

TSO SPOC 出力:

```
ClientName      Port      MbrName      CC
CLIENT01       9999      HWS1         0
```

OM API 入力:

```
CMD(UPD IMSCON TYPE(CLIENT) NAME(CLIENT01) PORT(9999) STOP(COMM))
```


OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xm1vsn>20 </xm1vsn>
<statime>2010.298 02:09:29.445456</statime>
<stotime>2010.298 02:09:29.446600</stotime>
<staseq>C6C77C43814502A2</staseq>
<stoseq>C6C77C43818C84E2</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10190929</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>UPD IMSCON TYPE(CLIENT) NAME(CLIENT01) PORT(9999) STOP(COMM)
</input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="CLID" l1b1="ClientID" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="PORT" l1b1="Port" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
```

```
<cmdrspdata>
<rsp>CLID(CLIENT01) PORT(9999 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>
```

説明: ポート 9999 上のクライアント CLIENT01 との通信が終了しました。

関連資料:

 [STOPCLNT コマンド \(コマンド\)](#)

 [IMS Connect DELETE CLIENT コマンド \(コマンド\)](#)

UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドは、オプション QUIESCE または FORCE を使用した IMS Connect の終了、回線トレース・データ・セットのオープンおよびクローズ、ならびに ODBM 登録、パスワード・サポート、RACF、および z/OS リソース・リカバリー・サービス (RRS) などの機能の使用可能化および使用不可化を行うために使用します。

サブセクション:

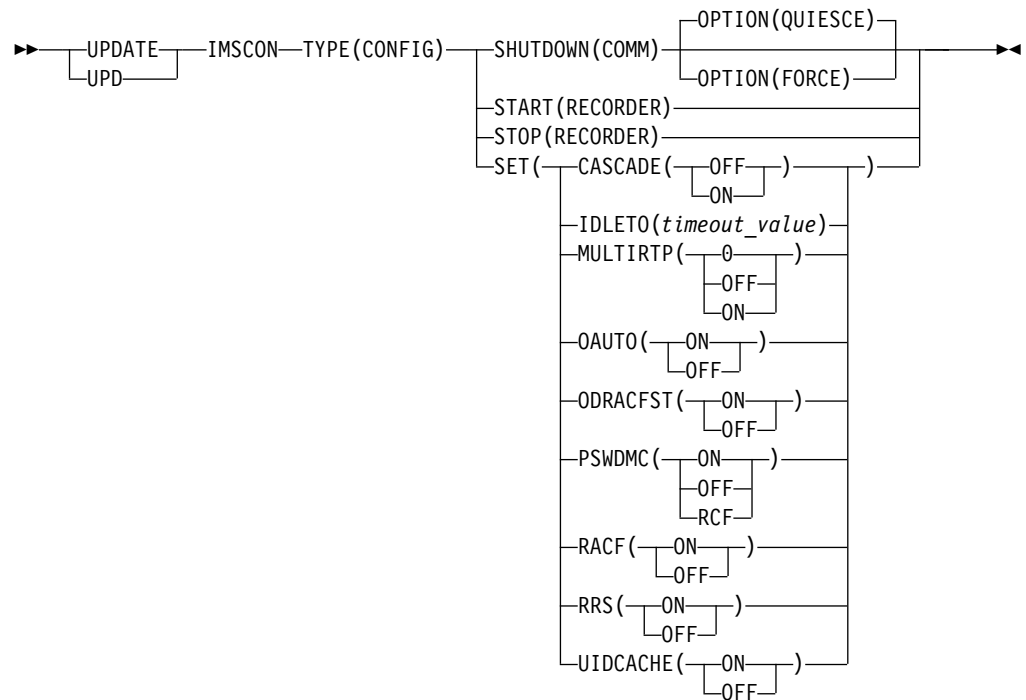
- 『環境』
- 『構文』
- 1179 ページの『キーワード』
- 1183 ページの『使用上の注意』
- 1184 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』
- 1185 ページの『出力フィールド』
- 1186 ページの『戻りコードおよび理由コード』
- 1186 ページの『完了コード』
- 1186 ページの『例』

環境

UPDATE IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文



キーワード

以下のキーワードは、UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドに有効です。

SHUTDOWN (COMM)

IMS Connect はすべてのクライアント接続およびデータ・ストア接続を制御された方法で終了させることを指定します。

OPTION

SHUTDOWN のオプションを指定します。

QUIESCE

すべてのクライアントおよびデータ・ストア接続を制御された方法で終了させます。SHUTDOWN キーワードでパラメーターを指定しないと、デフォルトでは QUIESCE が使用されます。

IMS Connect が停止する前に、進行中の作業や、処理のためにキューに入れられている作業はすべて完了します。このコマンドが入力されて受け入れられた後は、新規の作業は受け入れられません。

IMS Connect は、以下の順序でシャットダウンされます。

1. クライアントおよびブラウザーに関連したすべてのアクティブな作業単位が完了する。
2. IMS Connect と IMS の間の通信が終了する。
3. IMS Connect が終了する。

FORCE

すべてのクライアントおよびデータ・ストア接続を即時に終了させます。このキーワードは、接続されたクライアントに対して実行中のすべての IMS アプリケーションを強制的に異常終了させます。

SET

変更される属性値を指定します。

CASCADE=

IMS TM Resource Adapter から TCP/IP 接続を介して、IMS Connect と異なる z/OS イメージ上の IMS TM システムまたは IMS DB/DC システムに至るグローバル 2 フェーズ・コミット (synclevel=syncpoint) トランザクションのカスケードのサポートについて、IMS Connect のデフォルト設定を定義します。LOCAL オプション接続を介して受信されたトランザクションのカスケードは、サポートされません。

データ・ストア接続の定義における CASCADE の指定は、IMS Connect システム構成の CASCADE 指定をオーバーライドします。CASCADE の値を指定しないデータ・ストア接続定義はすべて、IMS Connect システム構成からの CASCADE 指定を継承します。

IMS Connect の次の再始動まで、UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(CASCADE()) コマンドによって行われた CASCADE 指定は、HWS 構成ステートメントの CASCADE 指定をオーバーライドします。

CASCADE パラメーターの適用対象は、IMS Connect と IMS TM が異なる z/OS イメージ上にあるときに、これらの間のグローバル RRS トランザクションのカスケードに対するサポートのみです。IMS Connect CASCADE パラメーターの指定は、他のコンポーネントやサブシステム (例えば、共用キュー環境内の IMS サブシステム) 間のサポートには影響を与えません。

OFF

デフォルトで、データ・ストア接続は、IMS Connect とは異なる z/OS イメージで実行されている IMS TM および IMS DB/DC システムへの、グローバル 2 フェーズ・コミット (synclevel=syncpoint) トランザクションのカスケードをサポートしないことを指定します。

synclevel=syncpoint トランザクションが、IMS Connect とは異なる LPAR に置かれている IMS システムに経路指定される場合、IMS Connect は、戻りコード 4 および理由コード NCASCADE でそのトランザクションを拒否します。

ON デフォルトで、データ・ストア接続は、IMS Connect とは異なる z/OS イメージで実行されている IMS TM および IMS DB/DC システムへの、グローバル 2 フェーズ・コミット (synclevel=syncpoint) トランザクションのカスケードをサポートすることを指定します。

IMS Connect と IMS が同じ LPAR 上にある場合、カスケード・トランザクション・サポートを使用せずにトランザクションは処理されません。IMS Connect と IMS が異なる LPAR 上にある場合、カスケード・トランザクション・サポートを使用してトランザクションは処理されます。

IDLETO

IMS TM との通信用に定義されたポートについて、RECV 状態で次のメッセージを待機しているアイドル中のオープン・ソケット接続のグローバル・タイムアウト間隔を指定します。グローバル・タイムアウト値は、ポート定

義で IDLETO= を指定することにより、PORT= パラメーターで定義されている個々のポートごとにオーバーライドできます。

タイムアウト間隔が満了すると、IMS Connect はソケット接続を非アクティブと見なしてクローズします。

タイムアウト間隔の単位は、100 分の 1 秒です。有効なタイムアウト値は、0 から 2 147 483 647 (X'7FFFFFFF') です。値 0 はこのタイムアウト機能を無効にします。この場合、非アクティブ接続はタイムアウトになりません。

このパラメーターはオプションであり、持続ソケット接続にのみ適用されます。

MULTIRTP=

OTMA の複数の RESUME TPIPE (MULTIRTP) のサポートに関する IMS Connect のデフォルト指定を設定します。

MULTIRTP のサポートに関する IMS Connect のデフォルト指定は、DATASTORE 定義に MULTIRTP 値を指定することで個々の DATASTORE 接続でオーバーライドできます。

HWS ステートメントでも DATASTORE ステートメントでも MULTIRTP が指定されていない場合、OTMA の MULTIRTP 値によってデフォルトが定義されます。

0 数字「0」は、IMS 構成から既存の MULTIRTP 指定を削除して、デフォルトではデータ・ストア・クライアント・ビッド要求に MULTIRTP のサポートに関する指定が含まれないようにします。MULTIRTP のサポートは、DATASTORE 定義または、PROCLIB データ・セットの DFSYDTx メンバー内の OTMA クライアント記述子によって決定されます。

OFF

IMS Connect では単一のアクティブな RESUME TPIPE 要求のみをサポートする OTMA T パイプが求められることを IMS Connect クライアント・ビッド要求が示すように指定します。T パイプ上の出力メッセージは順次に送信されます。

ON IMS Connect クライアント・ビッド要求では、複数のアクティブな RESUME TPIPE 要求を並行してサポートできる OTMA TPIPE が必要であることを指定します。1 つの T パイプに複数の DATASTORE 接続からの複数のアクティブな RESUME TPIPE 要求がある場合、OTMA は、受信状態にある最初の使用可能な DATASTORE 接続でコールアウト・メッセージまたは CM0 出力メッセージを送信します。

OAUTO

ODBM のインスタンスが IMSplex 内でアクティブにされたときに、IMS Connect が ODBM に自動的に接続するかどうかを指定します。

ON IMS Connect は、IMSplex に入る以後のすべての ODBM に接続します。このオプションは、IMS Connect 構成メンバーの ODBMATOCONN= パラメーターに指定することができます。

OFF

IMS Connect は、IMSplex に入る以後のすべての ODBM に登録され

ません。IMS Connect の ODBM に対する自動接続をオフにした後、UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) START(COMM) または同等のコマンドを使用して手動で ODBM に接続し、ODBM のインスタンスとの通信をオープンすることができます。

ODRACFST

IMS Connect が ODBM クライアントから IMS DB への接続を認証するために RACROUTE REQUEST=VERIFY コマンドを発行した場合に RACF 統計が記録されて更新されるかどうかを示します。

このキーワードは、HWSCFGxx 構成メンバーの HWS ステートメントで RACF=Y が指定されている場合にのみ使用されます。

ON IMS Connect が ODBM クライアントから IMS DB への接続を認証するために RACROUTE REQUEST=VERIFY コマンドを発行した場合に RACF 統計が記録されて更新されます。ログオンが成功すると、メッセージも発行されます。ODRACFST=Y を指定すると、RACROUTE REQUEST=VERIFY コマンドで IMS Connect によって STAT=ASIS パラメーターが使用されます。STAT=ASIS を使用すると、RACF のメッセージおよび統計は、RACF コマンド SETROPTS 上のインストール済み環境の現行オプションによって制御されます。

RACF 統計を使用可能にした後、統計は、RACF によってシステム管理機能 (SMF) データ・セットまたはログ・ストリームに 1 日 1 回まで記録されます。RACF 統計の記録に使用される SMF データ・セットまたはログ・ストリームは、RACF 構成で指定されます。

OFF

IMS Connect が ODBM クライアントから IMS DB への接続を認証するために RACROUTE REQUEST=VERIFY コマンドを発行した場合に RACF 統計は記録されません。また、統計も更新されず、ログオンが成功してもメッセージは発行されません。ODRACFST=N を指定すると、RACROUTE REQUEST=VERIFY コマンドで IMS Connect によって STAT=NO パラメーターが使用されます。STAT=NO パラメーターが使用されると、RACF コマンド SETROPTS で指定されたオプションは無視されます。

RACROUTE REQUEST=VERIFY マクロ呼び出しの STAT= パラメーターについて詳しくは、IBM z/OS 資料の『z/OS Security Server RACROUTE マクロ解説書』を参照してください。

PSWDMC

IMS Connect の大/小文字混合パスワードのサポートをオンまたはオフに設定するかどうか、あるいは、それが RACF の大/小文字混合パスワード指定に依存するかどうかを指定します。

ON IMS Connect の大/小文字混合パスワードのサポートを使用可能にします。

OFF

IMS Connect の大/小文字混合パスワードのサポートを使用不可にします。大/小文字混合パスワードのサポートが使用不可の場合、IMS Connect はパスワード内の小文字をすべて大文字に変換します。

RCF

RACF での大/小文字混合パスワード指定に依存します。その指定がオフの場合、IMS Connect はパスワード内の小文字をすべて大文字に変換します。

RACF

RACF フラグをオンまたはオフのどちらにするのかを指定します。

ON RACF ユーザー識別・検査を使用可能にします。

OFF

RACF ユーザー識別・検査を使用不可にします。

RRS

z/OS リソース・リカバリー・サービス (RRS) をオンまたはオフのどちらにするかを指定します。RRS は、2 フェーズ・コミット・サポート用として必要です。

ON IMS Connect と RRS の間の通信を使用可能にします。

OFF

IMS Connect と RRS の間の通信を使用不可にします。

UIDCACHE

RACF 認証が使用可能な場合、RACF ユーザー ID キャッシングが使用されるかどうかを指定します。

ON RACF 認証が使用可能な場合、RACF ユーザー ID キャッシングを使用可能にします。

OFF

RACF 認証が使用可能な場合、RACF ユーザー ID キャッシングを使用不可にします。

START(RECORDER)

IMS Connect の回線トレース・データ・セットを開始します。このキーワードは、STOP(RECORDER) と相互に排他的です。

STOP(RECORDER)

IMS Connect の回線トレース・データ・セットを停止します。このキーワードは、START(RECORDER) と相互に排他的です。

使用上の注意

UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

このコマンドを使用して IMS Connect リソースに加えられた変更は、IMS Connect が再始動されると失われます。

同等の **WTOR** コマンドおよび **z/OS** コマンド

以下の表には、UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect WTOR (Write to Operator with Reply) コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

注:

- IMS Connect WTOR コマンドは、未解決の IMS Connect 応答メッセージに対する応答です。
- IMS Connect z/OS コマンドは、z/OS (MVS) インターフェースを介して、IMS Connect *jobname* を使用して発行されます。

表 412. UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SHUTDOWN(COMM)	CLOSEHWS	SHUTDOWN MEMBER
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SHUTDOWN(COMM) OPTION(FORCE)	CLOSEHWS FORCE	SHUTDOWN MEMBER OPTION(FORCE)
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SHUTDOWN(COMM) OPTION(QUIESCE)	CLOSEHWS QUIESCE	SHUTDOWN MEMBER OPTION(QUIESCE)
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(OAUTO(ON))	SETOAUTO YES	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(OAUTO(ON))
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(OAUTO(OFF))	SETOAUTO NO	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(OAUTO(OFF))
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(PSWDMC(ON))	SETPWMC ON	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(PSWDMC(ON))
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(PSWDMC(OFF))	SETPWMC OFF	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(PSWDMC(OFF))
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(PSWDMC(RCF))	SETPWMC RCF	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(PSWDMC(RCF))
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(RACF(ON))	SETRACF ON	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(RACF(ON))
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(RACF(OFF))	SETRACF OFF	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(RACF(OFF))
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(RRS(ON))	SETRRS ON	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(RRS(ON))

表 412. UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド (続き)

UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(RRS(OFF))	SETRRS OFF	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(RRS(OFF))
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(UIDCACHE(ON))	SETUIDC ON	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(UIDCACHE(ON))
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(UIDCACHE(OFF))	SETUIDC OFF	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(UIDCACHE(OFF))
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) START(RECORDE)	RECORDER OPEN	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) START(TRACE)
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) STOP(RECORDE)	RECORDER CLOSE	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) STOP(TRACE)

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 413. UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。1186 ページの表 415 を参照してください。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。

戻りコードおよび理由コード

UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドの結果として返される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 414. UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C000008'	X'000020C0'	コマンドで IDLETO 値が指定されましたが、有効範囲外でした。コマンドはリジェクトされました。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。

完了コード

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 415. UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。

例

UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(RRS(ON))
```

TSO SPOC 出力:

```
MbrName CC
HWS1 0
```

OM API 入力:

```
CMD(UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(RRS(ON)))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2010.298 02:12:57.587305</statime>
<stotime>2010.298 02:12:57.590267</stotime>
<staseq>C6C77D0A01269015</staseq>
<stoseq>C6C77D0A01DFB355</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10191257</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>UPD IMSCON TYPE(CONFIG) SET(RRS(ON)) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MBR(HWS1 ) CC( 0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>
```

説明: RRS は IMS Connect (HWS1) に対して使用可能にされています。

UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SHUTDOWN(COMM) OPTION(FORCE)
```

TSO SPOC 出力:

```
MbrName CC
HWS1 0
```

OM API 入力:

```
CMD(UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SHUTDOWN() OPTION(FORCE))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
```

```

<statime>2010.298 02:14:58.410022</statime>
<stotime>2010.298 02:15:14.132658</stotime>
<staseq>C6C77D7D3AE26562</staseq>
<stoseq>C6C77D8C396B2020</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10191458</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>UPD IMSCON TYPE(CONFIG) SHUTDOWN(COMM) OPTION(FORCE) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MBR(HWS1 ) CC( 0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: IMS Connect (HWS1) はシャットダウンされています。

UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) START(RECORDER)
```

TSO SPOC 出力:

```
MbrName CC
HWS1 0
```

OM API 入力:

```
CMD(UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) START(RECORDER))
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2010.298 02:32:07.499478</statime>
<stotime>2010.298 02:32:07.503090</stotime>
<staseq>C6C78152A56D6F7E</staseq>
<stoseq>C6C78152A64F223E</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10193207</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>UPD IMSCON TYPE(CONFIG) START(RECORDER) </input>

```



```

</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MBR(HWS1          ) CC(  0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: IMS Connect 回線トレース・データ・セットはオープンされています。

UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドの例 4

以下の例では、SET(ODRACFST(ON)) キーワードを使用して、IMS Connect が ODBM クライアントに RACROUTE REQUEST=VERIFY 呼び出しを発行すると RACF 統計が使用可能になるように、RACF 統計オプションを更新します。

TSO SPOC 入力:

```
UPD IMSCON TYPE(CONFIG) SET(ODRACFST(ON))
```

TSO SPOC 出力:

```

MbrName          CC
HWS1              0

```

OM API 入力:

```
CMD(UPD IMSCON TYPE(CONFIG) SET(ODRACFST(ON)))
```

OM API 出力:

```

<?xml version="1.0"?>
<!DOCTYPE imsout SYSTEM "imsout.dtd">
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.7.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2017.111 00:36:43.850434</statime>
<stotime>2017.111 00:36:43.850679</stotime>
<staseq>D26B2BC6296C2F69</staseq>
<stoseq>D26B2BC6297B7EE9</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10173643</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>UPD IMSCON TYPE(CONFIG) SET(ODRACFST(ON)) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"

```

```

    scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MBR(HWS1          ) CC(  0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドの例 5

以下の例では、グローバル・レベルの IDLETO 値を 1000 つまり 10 秒に更新します。

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(IDLETO(1000))
```

TSO SPOC 出力:

```

MbrName          CC
HWS1              0

```

OM API 入力:

```
CMD(UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(IDLETO(1000)))
```







OM API 出力:

```

<cmd>
<master>HWS1  </master>
<userid>USRT002 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>IMSCON  </kwd>
<input>UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(IDLETO(1000)) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MBR(HWS1          ) CC(  0) </rsp>
</cmdrspdata>

```

関連資料:

-  [CLOSEHWS コマンド \(コマンド\)](#)
-  [SETOAUTO コマンド \(コマンド\)](#)
-  [SETPWMC コマンド \(コマンド\)](#)
-  [SETRACF コマンド \(コマンド\)](#)
-  [SETRRS コマンド \(コマンド\)](#)
-  [RECORDER コマンド \(コマンド\)](#)

関連情報:

IBM z/OS Knowledge Center

使用上の注意

UPDATE IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

このコマンドを使用して IMS Connect リソースに加えられた変更は、IMS Connect が再始動されると失われます。

同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、UPDATE IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect WTOR (Write to Operator with Reply) コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

注:

- IMS Connect WTOR コマンドは、未解決の IMS Connect 応答メッセージに対する応答です。
- IMS Connect z/OS コマンドは、z/OS (MVS) インターフェースを介して、IMS Connect *jobname* を使用して発行されます。

表 416. UPDATE IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(CONVERTER) NAME(<i>converter_name</i>) OPTION(REFRESH)	REFRESH CONVERTER NAME(<i>converter_name</i>)	UPDATE CONVERTER NAME(<i>converter_name</i>) OPTION(REFRESH)

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 417. UPDATE IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンド出力フィールド

ショート・			
ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。表 419を参照してください。
CCTXT	CCText	error	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
CVTR	Converter	N/A	XML コンバーターの名前。名前は常に戻されます。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。

戻りコード、理由コード、および完了コード

UPDATE IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンドの結果として返される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 418. UPDATE IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C000014'	X'00005008'	コマンド・プロセッサは、BPEGETM を介したストレージの取得に失敗しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 419. UPDATE IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、UPDATE IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンドは正常に完了しました。

表 419. UPDATE IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
10	NO RESOURCES FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。

例

UPDATE IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE IMSCON TYPE(CONVERTER) NAME(IMSPHBKD) OPTION(REFRESH)
```

TSO SPOC 出力:

```
Converter  MbrName CC
IMSPHBKD   HWS1    0
```

OM API 入力:

```
CMD(UPDATE IMSCON TYPE(CONVERTER) NAME(IMSPHBKD) OPTION(REFRESH))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2010.298 16:32:25.126708</statime>
<stotime>2010.298 16:32:25.140495</stotime>
<staseq>C6C83D24A4734B82</staseq>
<stoseq>C6C83D24A7D0F602</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10093225</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>UPD IMSCON TYPE(CONVERTER) NAME(IMSPHBKD) OPTION(REFRESH)
</input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="CVTR" l1b1="Converter" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
```

```

<cmdrspdata>
<rsp>CVTR(IMSPHBKD) MBR(HWS1          ) CC(  0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: XML コンバーター IMSPHBKD は正常にリフレッシュされました。

関連資料:

 REFRESH CONVERTER コマンド (コマンド)

 IMS Connect UPDATE CONVERTER コマンド (コマンド)

UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドは、IMS Connect と IMS OTMA データ・ストアの間の通信を開始または停止するため、またはデータ・ストア属性を変更するために使用します。

サブセクション:

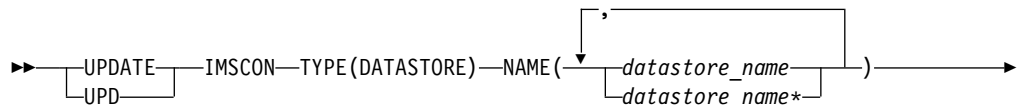
- 『環境』
- 『構文』
- 1196 ページの『キーワード』
- 1200 ページの『使用上の注意』
- 1200 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』
- 1201 ページの『出力フィールド』
- 1201 ページの『戻りコードおよび理由コード』
- 1202 ページの『完了コード』
- 1206 ページの『例』

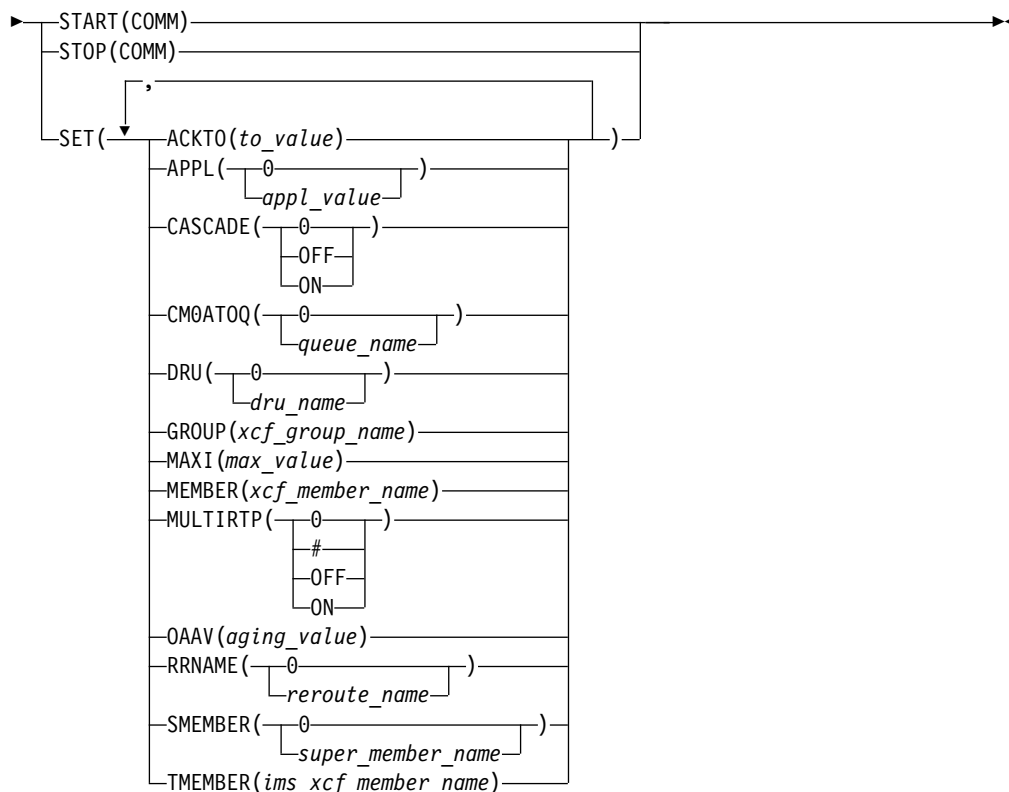
環境

UPDATE IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文





キーワード

以下のキーワードは、UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドに有効です。

NAME

更新する 1 つ以上のデータ・ストア名を指定します。単一のデータ・ストア名、または、コンマで区切ったデータ・ストア名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

SET

変更される属性値を指定します。

ACKTO

CM0 および CM1 出力メッセージ、および IMS 間トランザクション・メッセージに対する OTMA への確認応答のタイムアウト間隔を数値で指定します。

タイムアウト間隔は秒数です。範囲は 0 から 255 までです。タイムアウト値が 0 の場合、OTMA ACK タイムアウトはデフォルト値の 120 秒に設定されます。

APPL

PTKTDATA ステートメント内で RACF に対して定義された APPL 名 (1 から 8 文字の英数字の名前) を指定します。

文字ストリング「0」が指定されると、APPL 名はブランクに設定されます。

CASCADE=

このデータ・ストア接続に限り、IMS TM Resource Adapter から TCP/IP 接続を介して、IMS Connect と異なる z/OS イメージ (LPAR) 上の IMS TM システムまたは IMS DB/DC システムに至るグローバル 2 フェーズ・コミット (synclevel=syncpoint) z/OS リソース・リカバリー・サービス・トランザクションのカスケードに対するサポートを使用可能または使用不可にします。LOCAL オプション接続を介して受信されたトランザクションのカスケードは、サポートされません。

CASCADE パラメーターの適用対象は、IMS Connect と IMS TM が異なる z/OS イメージ上にあるときに、これらの間のグローバル RRS トランザクションのカスケードに対するサポートのみです。IMS Connect CASCADE パラメーターの指定は、他のコンポーネントやサブシステム (例えば、共用キュー環境内の IMS サブシステム) 間のサポートには影響を与えません。

データ・ストア接続の定義における CASCADE の指定は、IMS Connect システムに対して有効な CASCADE の値をオーバーライドします。

IMS Connect の次の再始動まで、UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) SET(CASCADE()) コマンドによって行われた CASCADE 指定は、DATASTORE 構成ステートメントの CASCADE 指定をオーバーライドします。

データ・ストア接続定義の CASCADE 指定を変更するには、事前に UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) STOP(COMM) コマンドまたは同様の WTOR または z/OS MODIFY コマンドを発行して、IMS Connect のデータ・ストア接続を停止しておく必要があります。

0 数字「0」が指定されると、データ・ストア接続の定義から CASCADE 指定が削除されます。データ・ストア接続は、IMS Connect システム構成で有効な CASCADE 値を継承します。

オフ

IMS Connect とは異なる LPAR 上で稼働している IMS TM システムまたは IMS DB/DC システムへのグローバル 2 フェーズ・コミット (synclevel=syncpoint) RRS トランザクションのカスケードのサポートを使用不可にします。synclevel=syncpoint トランザクションが、IMS Connect とは異なる LPAR に置かれている IMS システムに経路指定される場合、IMS Connect は、戻りコード 4 および理由コード NCASCADE でそのトランザクションを拒否します。

サポートが使用不可に設定される場合、このデータ・ストア接続で synclevel=syncpoint トランザクションを IMS に送信できるのは、IMS Connect と IMS が同じ LPAR にある場合のみです。

ON IMS Connect とは異なる LPAR 上で稼働している IMS TM システムまたは IMS DB/DC システムへのグローバル 2 フェーズ・コミット (synclevel=syncpoint) RRS トランザクションのカスケードのサポートを使用可能にします。

IMS Connect は、IMS システムが同じ LPAR 上にあるかどうかを検出します。IMS Connect と IMS が異なる LPAR 上で実行している場合、2 フェーズ・コミット処理では、カスケード・トランザクションが

使用されます。IMS Connect と IMS が同じ LPAR 上で実行している場合、2 フェーズ・コミット処理では、カスケード・トランザクションが使用されません。

CMOATOQ

OTMA CM0 ACK タイムアウト・キューの名前を 1 から 8 文字の英数字で指定します。この値は、OTMA のデフォルト値 DFS\$\$TOQ と、IMS Connect 構成メンバーの HWS ステートメントで設定される任意の値を両方ともオーバーライドします。

文字ストリング「0」が指定されると、キュー名はブランクに設定されません。

DRU

OTMA に渡される OTMA 宛先解決ユーザー出口の名前を 1 から 8 文字の英数字で指定します。

文字ストリング「0」が指定されると、DRU 名はブランクに設定されません。

GROUP

IMS OTMA の z/OS システム間カップリング・ファシリティ (XCF) グループの名前を 1 から 8 文字の英数字で指定します。IMS Connect は、この値を使用して、XCF グループに参加します。

IMS Connect と IMS は、通信するために同じ XCF グループに入る必要があるため、このグループ名は、IMS 始動 JCL (例えば、"OTMA=Y,GRNAME=&GROUP,USERVAR=&MEMBER",...) の中で IMS に定義した XCF グループ名 (GRNAME) と同じである必要があります。

MAXI

OTMA 入力メッセージのフラッディング制御値を数値で指定します。

範囲は 0 から 9999 までです。値 0 を指定すると、OTMA のデフォルト値である 5000 が使用されます。1 から 200 までの値を指定した場合、OTMA の最小値である 200 が使用されます。

MEMBER

GROUP パラメーターで使用された XCF グループ内で IMS Connect を識別する XCF メンバーの名前を 1 から 16 文字の英数字で指定します。この名前は、その XCF グループの中で IMS Connect と通信するために IMS が使用する XCF 名です。IMS Connect のためのこの XCF メンバー名は、同一 XCF グループ内のメンバーであるすべてのデータ・ストア定義の中で固有なものである必要があります。

MULTIRTP

IMS Connect が IMS データ・ストアとの DATASTORE 接続を確立するときに、IMS Connect が複数のアクティブな RESUME TPIPE 要求 (MULTIRTP) をサポートする OTMA T パイプを要求するかどうかを指定します。

文字ストリング「0」以外の MULTIRTP 値を指定すると、IMS Connect システム構成で有効な MULTIRTP 値がオーバーライドされます。IMS Connect システム構成で有効な MULTIRTP 値を受け入れる場合は、MULTIRTP(0) を指定します。

MULTIRTP キーワードには以下の値が有効です。

- 0 数字「0」が指定されると、データ・ストア接続の定義から MULTIRTP 指定が削除されます。データ・ストア接続は、IMS Connect システム構成で有効な MULTIRTP 値を継承します。IMS Connect システムで MULTIRTP 値を指定しない場合、このデータ・ストア接続の T パイプが複数のアクティブな RESUME TPIPE 要求をサポートするかどうかは OTMA クライアント記述子によって決定されます。
- # OTMA クライアント記述子がこのデータ・ストア接続の MULTIRTP 値を決定することを指定します。

オフ

このデータ・ストア接続の T パイプで、複数のアクティブな RESUME TPIPE 要求のサポートを無効にします。

- ON このデータ・ストア接続の T パイプで、複数のアクティブな RESUME TPIPE 要求のサポートを有効にします。

OAAV

OTMA アクセサ環境エレメント (ACEE) のエージング値を数値で指定します。この OTMA ACEE エージング値に到達すると、OTMA は次に IMS Connect から受信する入力メッセージを処理する前に、ACEE をリフレッシュします。

OTMA ACEE のエージング値は秒単位で指定します。範囲は 0 から 999999 までです。0 を指定した場合、OTMA はデフォルト値の 999999 を使用します。1 から 300 までの値を指定した場合、OTMA は値 300 (秒) を使用します。

RRNAME

クライアント・リルート要求の代替宛先の名前を 1 から 8 文字の英数字で指定します。

文字ストリング「0」が指定されると、代替宛先名はデフォルト設定の HWS\$DEF に設定されます。

SMEMBER

この IMS データ・ストアが属する OTMA スーパー・メンバーの名前を 1 から 4 文字で指定します。指定した場合、この値は IMS PROCLIB データ・セットの HWSCFGxx メンバーの HWS ステートメント内の SMEMBER パラメーターの属性値をオーバーライドします。

文字ストリング「0」が指定されると、この IMS データ・ストアに対して指定される SMEMBER の値はブランクに設定され、このデータ・ストアに対してスーパーメンバー機能は使用不可になります。

TMEMBER

この IMS Connect が XCF グループ内で通信する IMS の XCF メンバーの名前を 1 から 16 文字の英数字で指定します。このターゲット・メンバー名は、IMS がその XCF グループに加わる時に使用するメンバー名と同じである必要があります。IMS のための XCF メンバー名は、IMS 始動 JCL (例えば、「"...,OTMA=Y,GRNAME=&GROUP,OTMANM=&TMEMBER,..."」) で指定されます。

START(COMM) | STOP(COMM)

指定されたデータ・ストアとの通信を開始または停止するために使用する相互に排他的なキーワード。

START (COMM)

指定されたデータ・ストアとの通信を開始します。

STOP (COMM)

指定されたデータ・ストアとの通信を停止します。

使用上の注意

UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

このコマンドを使用して IMS Connect リソースに加えられた更新は、IMS Connect が再始動されると失われます。ただし、次の再始動の前に、その更新が IMS PROCLIB データ・セットの HWSCFGxx メンバー内の対応する構成ステートメントにも適用された場合は除きます。

UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドによって APPL と RRNAME を除くすべての属性を更新する前に、データ・ストアを停止する (NOTACTIVE 状態にする) 必要があります。

UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドの SET() キーワードで指定された属性は、DATASTORE ステートメントの同じ属性の指定をオーバーライドします。

同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect WTOR (Write to Operator with Reply) コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

注:

- IMS Connect WTOR コマンドは、未解決の IMS Connect 応答メッセージに対する応答です。
- IMS Connect z/OS コマンドは、z/OS (MVS) インターフェースを介して、IMS Connect *jobname* を使用して発行されます。

表 420. UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド:

UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(<i>datastore_name</i>) START(COMM)	OPENDS <i>datastore_id</i> STARTDS <i>datastore_id</i>	UPDATE DATASTORE NAME(<i>datastoreName</i>) START(COMM)

表 420. UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド (続き):

UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(<i>datastore_name</i>) STOP(COMM)	STOPDS <i>datastore_id</i>	UPDATE DATASTORE NAME(<i>datastoreName</i>) STOP(COMM)
UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(<i>datastore_name</i>) SET()	ありません。	ありません。

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 421. UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。1202 ページの『完了コード』を参照してください。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
DS	DataStore	N/A	データ・ストア名。データ・ストア名は常に戻されます。
ERRT	ErrorText	<i>error</i>	診断情報を提供するエラー・テキスト。エラー・テキストはゼロ以外の完了コードに戻すことができ、完了コードをさらに説明します。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。

戻りコードおよび理由コード

UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドの結果として返される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 422. UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'00000008'	X'00002044'	START() と STOP() の両方のキーワードを含んでいため、コマンドはリジェクトされました。これらのキーワードはどちらか 1 つのみ使用できます。
X'00000008'	X'00002094'	RRNAME パラメーター値に無効文字が含まれています。
X'00000008'	X'0000209C'	SET() キーワードは、キーワード START() または STOP() とともに使用することはできません。
X'00000008'	X'000020A0'	MEMBER パラメーター値に無効文字が含まれています。
X'00000008'	X'000020A4'	GROUP パラメーター値に無効文字が含まれています。
X'00000008'	X'000020A8'	SMEMBER パラメーター値に無効文字が含まれています。
X'00000008'	X'000020AC'	TMEMBER パラメーター値に無効文字が含まれています。
X'00000008'	X'000020B0'	APPL パラメーター値に無効文字が含まれています。
X'00000008'	X'000020B4'	CM0ATOQ パラメーター値に無効文字が含まれています。
X'00000008'	X'000020B8'	DRU パラメーター値に無効文字が含まれています。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力には、リソースごとに 1 行が表示され、各行にはリソースの完了コードが表示されます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力には、リソースごとに 1 行が表示され、各行にはリソースの完了コードが表示されません。

完了コード

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 423. UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドは正常に完了しました。

表 423. UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
3	Some attributes not updated	一部の属性に対してコマンドが正常に実行されました。IMS Connect が設定に失敗した属性ごとに、それぞれの完了コードを示す別個の出力行があります。
9	Data store table create failed	START(COMM) 処理中に、IMS Connect がデータ・ストア・テーブル (DST) 制御ブロックを作成できませんでした。 詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWSD0212E メッセージを参照してください。
A	TRWB creation failed	コマンドは、データ・ストアのスケジューラー・コントローラー・スレッド、送信スレッド、または受信スレッド用の TWU 制御ブロックの作成を試行しましたが、BPECBGET 要求は失敗しました。 コマンド出力には、以下のいずれかのメッセージも含まれる可能性があります。 <ul style="list-style-type: none"> • HWSD0212E • HWSD0222W
B	Data store table enqueue failed	START(COMM) 処理中に、IMS Connect がデータ・ストアのアクティブ・キューに対して DST 制御ブロックのエンキューを試行しましたが、要求は失敗しました。 詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWSD0212E メッセージを参照してください。
C	Create scheduler thread failed	START(COMM) 処理中に、IMS Connect がデータ・ストアのスケジューラー・コントローラー・スレッドの作成を試行しましたが、BPETHDCR 要求は失敗しました。 詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWSD0212E メッセージを参照してください。
D	Data store is in shutdown	データ・ストアがシャットダウン中だったため、IMS Connect はデータ・ストアを開始できませんでした。 詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWSD0222W メッセージを参照してください。
E	Data store block create failed	START(COMM) 処理中に、IMS Connect はデータ・ストアを開始できませんでした。これは、データ・ストアの送信スレッドまたは受信スレッドに対してデータ・ストア・ブロック (DSB) を作成しようとして失敗したためです。 詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWSD0222W メッセージを参照してください。

表 423. UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
F	Create xmit/recv thread failed	START(COMM) 処理中に、IMS Connect がデータ・ストアの送信スレッドまたは受信スレッドの作成を試行しましたが、BPETHDCR 要求は失敗しました。 詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWSD0222W メッセージを参照してください。
10	リソースが見つかりません	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されたか、リソースが現在アクティブではない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。
11	Resource is stopped	STOP(COMM) 処理中に、データ・ストアが既に停止していたため、IMS Connect がデータ・ストアを停止できませんでした。
12	Resource is not stopped	START(COMM) 処理中に、データ・ストアが停止していないため、IMS Connect がデータ・ストアを開始できませんでした。
1A	BPEGETM error	START(COMM) 処理中に、IMS Connect は BPEGETM サービスからのストレージの取得に失敗しました。 コマンド出力にはメッセージ HWSO1205W も含まれる可能性があります。
25	IXCQUERY call failed	START(COMM) 処理中に、XCF グループ・メンバーを照会するための IXCQUERY の呼び出しに失敗しました。IMS Connect は、XCF グループへの参加を引き続き試行します。IMS Connect が XCF グループに参加できる場合は、待機している対象のメンバーも XCF グループに参加したことを示す通知を待ちます。その XCF グループ・メンバーも参加したとき、IMS Connect はデータ・ストアへの接続に進みます。 コマンド出力には、以下のいずれかのメッセージも含まれる可能性があります。 <ul style="list-style-type: none">• HWSO1210W• HWSD0292I
26	IXCJOIN call failed	START(COMM) 処理中に、IMS Connect が IXCJOIN の呼び出しによって XCF グループに参加しようとしたときに、エラーが発生しました。 コマンド出力にはメッセージ HWSO1220W も含まれる可能性があります。

表 423. UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
27	Client BID process failed	<p>START(COMM) 処理中に、IMS Connect が OTMA に対するクライアント BID 処理を実行したとき、エラーが発生しました。</p> <p>コマンド出力には、以下のいずれかのメッセージも含まれる可能性があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • HWSO1310W • HWSO1320W
28	IXCLEAVE call failed	<p>START(COMM) 処理中に、IMS Connect が IXCLEAVE の呼び出しによって XCF グループを離脱しようとしたときに、エラーが発生しました。</p> <p>コマンド出力にはメッセージ HWSO1315W も含まれる可能性があります。</p>
29	XCF group member not active	<p>START(COMM) 処理中に、IMS Connect は XCF グループ・メンバーがアクティブでないことを検出しました。IMS Connect は、XCF グループへの参加を引き続き試行します。IMS Connect が XCF グループに参加できる場合は、待機している対象のメンバーも XCF グループに参加したことを示す通知を待ちます。その XCF グループ・メンバーも参加したとき、IMS Connect はデータ・ストアへの接続に進みます。</p> <p>コマンド出力にはメッセージ HWSO1215W も含まれる可能性があります。</p>
2A	C512 block creation failed	<p>START(COMM) 処理中に、IMS Connect が BPECBGET サービスからタイプ C512 のストレージ・ブロックを取得しようとしたとき、エラーが発生しました。</p> <p>コマンド出力にはメッセージ HWSO1305W も含まれる可能性があります。</p>
2B	RACF UTOKEN extraction failed	<p>START(COMM) 処理中に、IMS Connect が IMS Connect のこのインスタンスに対する UTOKEN を抽出したとき、エラーが発生しました。</p> <p>コマンド出力にはメッセージ HWSO1325W も含まれる可能性があります。</p>
4E	MEMBER/group combo is duplicate	<p>指定された MEMBER パラメーター値が、既存のデータ・ストア MEMBER 値と重複しています。</p>
4F	Member/GROUP combo is duplicate	<p>指定された GROUP パラメーター値と、このデータ・ストアの現行 MEMBER 値は、指定された XCF グループの既存のデータ・ストア定義と重複しています。</p>

例

UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(IMS1) START(COMM)
```

TSO SPOC 出力:

```
DataStore MbrName CC  
IMS1      HWS1      0
```

OM API 入力:

```
CMD(UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(IMS1) START(COMM))
```

OM API 出力:

```
<imsout>  
<ctl>  
<omname>OM10M </omname>  
<omvsn>1.5.0</omvsn>  
<xmlvsn>20 </xmlvsn>  
<statime>2010.298 02:34:53.534886</statime>  
<stotime>2010.298 02:34:53.536353</stotime>  
<staseq>C6C781F0FD6A67A5</staseq>  
<stoseq>C6C781F0FDC61CA5</stoseq>  
<rqsttkn1>USRT001 10193453</rqsttkn1>  
<rc>00000000</rc>  
<rsn>00000000</rsn>  
</ctl>  
<cmd>  
<master>HWS1 </master>  
<userid>USRT001 </userid>  
<verb>UPD </verb>  
<kwd>IMSCON </kwd>  
<input>UPD IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(IMS1) START(COMM) </input>  
</cmd>  
<cmdrsphdr>  
<hdr s1b1="DS" l1b1="DataStore" scope="LCL" sort="a" key="1"  
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />  
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"  
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />  
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"  
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />  
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"  
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />  
</cmdrsphdr>  
<cmdrspdata>  
<rsp>DS(IMS1 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) </rsp>  
</cmdrspdata>  
</imsout>
```

説明: IMS Connect (HWS1) とデータ・ストア (IMS1) の間の通信が開始されます。

UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(IMS1)  
SET(ACKTO(100),CMOATOQ(TIMEOUT1))
```

TSO SPOC 出力:

```
DataStore MbrName      CC
IMS1      HWS1         0
```

OM API 入力:

```
CMD(UPD IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(IMS1)
SET(ACKTO(100),CM0ATOQ(TIMEOUT1)))
```

OM API 出力:

```
<?xml version="1.0"?>
<!DOCTYPE imsout SYSTEM "imsout.dtd">
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.7.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2014.232 22:21:09.203929</statime>
<stotime>2014.232 22:21:09.204176</stotime>
<staseq>CDA274E167BD9188</staseq>
<stoseq>CDA274E167CD0188</stoseq>
<rqsttkn1>USRT002 10152109</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT002 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE)
NAME(IMS1)SET(ACKTO(100),CM0ATOQ(TIMEOUT1)) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="DS" l1b1="DataStore" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="4"
dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="ERRT" l1b1="ErrorText" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="yes"
len="16" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DS(IMS1 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>
```

説明: データ・ストア IMS1 との通信について、ACKTO 属性は 100 に設定され、CM0ATOQ 属性は TIMEOUT1 に設定されます。

UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(IMS*)
SET(ACKTO(120),MAXI(6000))
```

TSO SPOC 出力:

DataStore	MbrName	CC	CCText	ErrorText
IMS1	HWS1	0		
IMS2	HWS1	14	Resource is not stopped	ACKTO
IMS2	HWS1	14	Resource is not stopped	MAXI

OM API 入力:

```
CMD(UPD IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(IMS*)
SET(ACKTO(120),MAXI(6000))
```

OM API 出力:

```
<?xml version="1.0"?>
<!DOCTYPE imsout SYSTEM "imsout.dtd">
<imsout>
  <ctl>
    <omname>OM10M </omname>
    <omvsn>1.7.0</omvsn>
    <xmlvsn>20 </xmlvsn>
    <statime>2014.232 22:16:11.548664</statime>
    <stotime>2014.232 22:16:11.548920</stotime>
    <staseq>CDA273C589FF8082</staseq>
    <stoseq>CDA273C58A0F8882</stoseq>
    <rqsttkn1>USRT002 10151611</rqsttkn1>
    <rc>0200000C</rc>
    <rsn>00003008</rsn>
    <rsnmsg>CSLN054I</rsnmsg>
    <rsntxt>None of the clients were successful.</rsntxt>
  </ctl>
  <cmderr>
    <mbr name="HWS1 ">
      <typ>IMSCON </typ>
      <rc>0C00000C</rc>
      <rsn>00003000</rsn>
      <rsntxt>At least one request successful </rsntxt>
    </mbr>
  </cmderr>
  <cmd>
    <master>HWS1 </master>
    <userid>USRT002 </userid>
    <verb>UPD </verb>
    <kwd>IMSCON </kwd>
    <input>UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(IMS*)
      SET(ACKTO(120),MAXI(6000)) </input>
  </cmd>
  <cmdrsphdr>
    <hdr s1b1="DS" l1b1="DataStore" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
      len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
    <hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
      len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
    <hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="4"
      dtype="INT" align="right" skipb="no" />
    <hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
      len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
    <hdr s1b1="ERRT" l1b1="ErrorText" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="yes"
      len="16" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
  </cmdrsphdr>
  <cmdrspdata>
    <rsp>DS(IMS1 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) </rsp>
    <rsp>DS(IMS2 ) MBR(HWS1 ) CC( 14) CCTXT(Resource is not stopped)
      ERRT(ACKTO ) </rsp>
    <rsp>DS(IMS2 ) MBR(HWS1 ) CC( 14) CCTXT(Resource is not stopped)
      ERRT(MAXI ) </rsp>
  </cmdrspdata>
</imsout>
```

説明: コマンドは、文字「IMS」で始まるすべてのデータ・ストアに対して、ACKTO 属性と MAXI 属性を設定しようとしています。データ・ストア IMS1 について、ACKTO 属性は 120 に設定され、MAXI 属性は 6000 に設定されます。データ・ストア IMS2 については、リソース・データ・ストア IMS2 が停止してい

ないため、属性の更新は失敗しました。それぞれの IMS データ・ストアに対して IMS Connect が設定に失敗した属性ごとに、出力行が 1 つずつあります。

UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドの例 4

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(IMS1)
SET(MEMBER(HWS2),SMEMBER(0))
```

TSO SPOC 出力:

DataStore	MbrName	CC CText	ErrorText
IMS1	HWS1	3	Some attributes not updated
IMS1	HWS1	4E	Duplicate XCF member name HWS2

OM API 入力:

```
CMD(UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(IMS1)
SET(MEMBER(HWS2),SMEMBER(0)))
```

OM API 出力:

```
<?xml version="1.0"?>
<!DOCTYPE imsout SYSTEM "imsout.dtd">
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.7.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2014.232 22:38:47.819937</statime>
<stotime>2014.232 22:38:47.820244</stotime>
<staseq>CDA278D2FAEA1192</staseq>
<stoseq>CDA278D2FAFD4792</stoseq>
<rqsttkn1>USRT002 10153847</rqsttkn1>
<rc>0200000C</rc>
<rsn>00003008</rsn>
<rsnmsg>CSLN054I</rsnmsg>
<rsntxt>None of the clients were successful.</rsntxt>
</ctl>
<cmderr>
<mbr name="HWS1 ">
<typ>IMSCON </typ>
<rc>0C00000C</rc>
<rsn>00003004</rsn>
<rsntxt>No requests were successful </rsntxt>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT002 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(IMS1)
SET(MEMBER(HWS2),SMEMBER(0)) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="DS" l1b1="DataStore" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="ERRT" l1b1="ErrorText" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="yes"
```

```

len="16" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DS(IMS1 ) MBR(HWS1 ) CC( 4E) CCTXT(Duplicate XCF member name)
ERRT(HWS2 ) </rsp>
<rsp>DS(IMS1 ) MBR(HWS1 ) CC( 3) CCTXT(Some attributes not updated)
</rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: このコマンドは、データ・ストア IMS1 の MEMBER 属性と SMEMBER 属性を設定しようとしています。一部の更新は正常に実行されました。正常に実行されなかった属性更新ごとに、別個の CC が表示されます。IMS Connect は、IMS1 と同じ XCF グループ内にある別のデータ・ストアが、MEMBER() 内で指定されたものと同じメンバー名 HWS2 を持っていることを検出しました。このため、MEMBER は設定されませんでした。SMEMBER 属性は、関連する CC が示されていないので、正常に設定されました。

関連資料:

-  OPENDS コマンド (コマンド)
-  STARTDS コマンド (コマンド)
-  STOPDS コマンド (コマンド)
-  IMS Connect UPDATE DATASTORE コマンド (コマンド)

UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンドは、IMS Connect と指定された IMSplex の間の通信を開始または停止するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 1211 ページの『構文』
- 1211 ページの『キーワード』
- 1212 ページの『使用上の注意』
- 1216 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』
- 1212 ページの『出力フィールド』
- 1213 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1216 ページの『例』

環境

UPDATE IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

使用上の注意

UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) NAME(*imsplexName*) STOP(COMM) が発行されると、IMSplex に対して現在進行中の作業が終了し、IMSplex との通信およびそのスレッドが終了します。進行中のメッセージはすべて拒否され、エラー・メッセージが要求側に返されます。STOPIP は、IMSplex との通信の即時終了を必要とするようなすべてのエラー状態に対して使用できます。

IMS Connect が ISC TCP/IP リンクをサポートしており、STOP(COMM) キーワードが使用されている場合、IMS Connect は各 ISC に関する通知を IMS に送信し、すべての ISC 並列セッションが ISC リンク上で終了したことを IMS に通知します。

IMS Connect が MSC IMS 間 TCP/IP 接続をサポートしており、STOP(COMM) キーワードが使用されている場合、IMS Connect は各 MSC 物理リンクについて IMS に通知を送信し、その物理リンク上のすべての MSC 論理リンクが終了したことを IMS に知らせます。

START(COMM) キーワードは、後に IMSplex との通信を開始するために使用します。

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 424. UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。1213 ページの表 426 を参照してください。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。

表 424. UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・			
ラベル	長ラベル	キーワード	意味
IMSPLX	IMSpIex	N/A	IMSpIex 名。IMSpIex 名は常に戻されます。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。

戻りコード、理由コード、および完了コード

UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンドの結果として返される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 425. UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 426. UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンドは正常に完了しました。
9	Data store table create failed	START(COMM) 処理中に、IMS Connect が IMSpIex との通信のためにデータ・ストア・テーブル (DST) 制御ブロックを作成できませんでした。 詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWSD0212E メッセージを参照してください。

表 426. UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
A	TRWB creation failed	<p>コマンドは、IMSplex との通信のためにスケジューラー・コントローラー・スレッド、送信スレッド、または受信スレッド用の TWU 制御ブロックの作成を試行しましたが、BPECBGET 要求は失敗しました。</p> <p>コマンド出力には、以下のいずれかのメッセージも含まれる可能性があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • HWS0212E • HWSM0522W
B	Data store table enqueue failed	<p>START(COMM) 処理中に、IMS Connect が IMSplex との通信のためにアクティブ・キューに対して DST 制御ブロックのエンキューを試行しましたが、要求は失敗しました。</p> <p>詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWS0212E メッセージを参照してください。</p>
C	Create scheduler thread failed	<p>START(COMM) 処理中に、IMS Connect が IMSplex との通信のためにスケジューラー・コントローラー・スレッドの作成を試行しましたが、BPETHDCR 要求は失敗しました。</p> <p>詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWS0212E メッセージを参照してください。</p>
D	Data store is in shutdown	<p>IMS Connect は、IMSplex との通信がシャットダウン中のため、IMSplex との通信を開始できませんでした。</p> <p>詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWSM0522W メッセージを参照してください。</p>
E	Data store block create failed	<p>START(COMM) 処理中に、IMS Connect は IMSplex との通信を開始できませんでした。これは、IMSplex との通信のために送信スレッドまたは受信スレッドに対してデータ・ストア・ブロック (DSB) を作成しようとして失敗したためです。</p> <p>詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWSM0522W メッセージを参照してください。</p>
F	Create xmit/recv thread failed	<p>START(COMM) 処理中に、IMS Connect が IMSplex との通信のために送信スレッドまたは受信スレッドの作成を試行しましたが、BPETHDCR 要求は失敗しました。</p> <p>詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWSM0522W メッセージを参照してください。</p>

表 426. UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
10	リソースが見つかりません	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。
11	Resource is stopped	STOP(COMM) 処理中に、IMSpIex との通信が既に停止していたため、IMS Connect が IMSpIex との通信を停止できませんでした。
12	Resource is not stopped	START(COMM) 処理中に、IMSpIex との通信が停止していなかったため、IMS Connect が IMSpIex との通信を開始できませんでした。
1A	BPEGETM error	START(COMM) 処理中に、IMS Connect は BPEGETM サービスからのストレージの取得に失敗しました。 コマンド出力にはメッセージ HWSI1705W も含まれる可能性があります。
2C	IMS Connect is waiting for SCI	START(COMM) 処理中に、IMS Connect は IMSpIex との通信のために SCI が使用できないことを検出しました。IMS PROCLIB データ・セットの HWSCFGxx メンバーの ODACCESS ステートメントで ODBMAUTOCONN=Y が指定されていたために、IMS Connect は SCI が使用可能になるまで待機しています。 コマンド出力にはメッセージ HWSX0940A も含まれる可能性があります。
2D	Deregistration from SCI failed	START(COMM) 処理中に、IMS Connect が IMSpIex との通信のために SCI からの登録取り消しを試行したとき、エラーが発生しました。 コマンド出力にはメッセージ HWSI1815W も含まれる可能性があります。
2E	Registration to SCI failed	START(COMM) 処理中に、IMS Connect が IMSpIex との通信のために SCI への登録を試行したとき、エラーが発生しました。 コマンド出力にはメッセージ HWSI1720W も含まれる可能性があります。
2F	SCI is not available	START(COMM) 処理中に、IMS Connect は IMSpIex との通信のために SCI が使用できないことを検出しました。 コマンド出力にはメッセージ HWSI1816W も含まれる可能性があります。

同等の **WTOR** コマンドおよび **z/OS** コマンド

以下の表には、UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect WTOR (Write to Operator with Reply) コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

注:

- IMS Connect WTOR コマンドは、未解決の IMS Connect 応答メッセージに対する応答です。
- IMS Connect z/OS コマンドは、z/OS (MVS) インターフェースを介して、IMS Connect *jobname* を使用して発行されます。

表 427. UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド:

UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) NAME(<i>imsplex_name</i>) START(COMM)	OPENIP <i>imsplex_id</i> STARTIP <i>imsplex_id</i>	UPDATE IMSPLEX NAME(<i>imsplex_name</i>) START(COMM)
UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) NAME(<i>imsplex_name</i>) STOP(COMM)	STOPIP <i>imsplex_id</i>	UPDATE IMSPLEX NAME(<i>imsplex_name</i>) STOP(COMM)

例

UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) NAME(PLEX1) STOP(COMM)
```

TSO SPOC 出力:

```
MbrName  IMSPlex  CC
HWS1     PLEX1    0
```

OM API 入力:

```
CMD(UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) NAME(PLEX1) STOP(COMM))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2010.298 02:39:37.778072</statime>
<stotime>2010.298 02:39:37.787961</stotime>
<staseq>C6C7830010B98787</staseq>
<stoseq>C6C7830013239087</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10193937</rqsttkn1>
<rc>02000004</rc>
<rsn>00001014</rsn>
<rsnmsg>CSLN055I</rsnmsg>
<rsntxt>At least one request completed with warning(s).</rsntxt>
</ctl>
<cmderr>
```

```

<mbr name="HWS1  ">
<typ>IMSCON </typ>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>UPD IMSCON TYPE(IMSPLEX) NAME(PLEX1) STOP(COMM) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr slbl="IMSPLEX" llbl="IMSpIex" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr slbl="MBR" llbl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr slbl="CC" llbl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr slbl="CCTXT" llbl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>IMSPLEX(PLEX1 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: IMS Connect (HWS1) と IMSpIex (PLEX1) 間の通信は停止されています。

関連資料:

- [➡ OPENIP コマンド \(コマンド\)](#)
- [➡ STARTIP コマンド \(コマンド\)](#)
- [➡ STOPIP コマンド \(コマンド\)](#)
- [➡ IMS Connect UPDATE IMSPLEX コマンド \(コマンド\)](#)

UPDATE IMSCON TYPE(ISC) コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(ISC) コマンドは、ISC リンク上の通信を停止または再開するために使用します。

サブセクション:

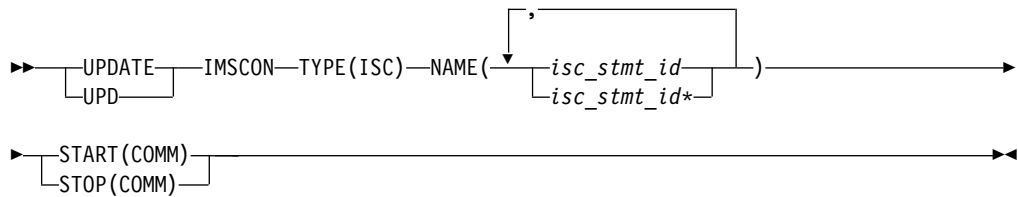
- 1218 ページの『環境』
- 1218 ページの『構文』
- 1218 ページの『キーワード』
- 1218 ページの『使用上の注意』
- 1219 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』
- 1219 ページの『出力フィールド』
- 1220 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1223 ページの『例』

環境

UPDATE IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文



キーワード

以下のキーワードは、UPDATE IMSCON TYPE(ISC) コマンドに有効です。

NAME

ISC リンクを定義する ISC ステートメントの ID を指定します。単一の ISC リンク ID、またはコンマで区切った ISC リンク ID のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

START (COMM)

ISC リンク上の ISC 通信が終了した後、リンク上の通信を開始または再開します。コマンドの完了後、ISC リンクの状況は「ACTIVE」に設定されます。

START(COMM) は、STOP(COMM) と同時には指定できません。

STOP (COMM)

ISC リンク上のすべての通信を終了します。コマンドの完了後、ISC リンクの状況は「NOTACTIVE」に設定されます。STOP(COMM) は、START(COMM) と同時には指定できません。

使用上の注意

推奨事項: ISC リンク上にアクティブな ISC セッション (ISCUUSER) がある場合、UPDATE IMSCON TYPE(ISC) コマンドは発行しないでください。アクティブ・セッションがある場合は、このコマンドを発行する前に、IMS から /QUIESCE または /CLSDST コマンドを使用してシャットダウンする必要があります。セッションを IMS で終了しても IMS Connect 内でアクティブと表示される場合は、UPDATE IMSCON TYPE(ISC) コマンドを発行してそれらをクリーンアップすることができます。

UPDATE IMSCON TYPE(ISC) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

このコマンドを使用して IMS Connect リソースに加えられた変更は、IMS Connect が再始動されると失われます。

UPDATE IMSCON TYPE(ISC) STOP(COMM) コマンドが発行されると、IMS Connect は、以下の操作を実行します。

- アクティブな並列セッションを停止し、指定された ISC リンク上でこれ以上の通信が行われないようにします。
- ISC リンク上の通信が停止されたことを IMS に通知します
- ISC リンクの状況を NOT ACTIVE に変更します
- メッセージ HWSG4005I を発行します

同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、UPDATE IMSCON TYPE(ISC) コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect WTOR (Write to Operator with Reply) コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

注:

- IMS Connect WTOR コマンドは、未解決の IMS Connect 応答メッセージに対する応答です。
- IMS Connect z/OS コマンドは、z/OS (MVS) インターフェースを介して、IMS Connect *jobname* を使用して発行されます。

表 428. UPDATE IMSCON TYPE(ISC) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(ISC) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(ISC) NAME(<i>isc_stmt_id</i>) START(COMM)	ありません。	ありません。
UPDATE IMSCON TYPE(ISC) NAME(<i>isc_stmt_id</i>) STOP(COMM)	ありません。	ありません。

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 429. UPDATE IMSCON TYPE(ISC) コマンド出力フィールド

ショート・			
ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。1221 ページの表 431 を参照してください。
CCTXT	CCText	error	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。
ISC	ISCName	N/A	ISC リンクの名前。この名前は、IMS Connect 構成メンバー内の ISC ステートメントの ID キーワードで定義されています。 ISC 名は常に戻されます。

戻りコード、理由コード、および完了コード

UPDATE IMSCON TYPE(ISC) コマンドの結果として返される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 430. UPDATE IMSCON TYPE(ISC) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE IMSCON TYPE(ISC) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C000008'	X'00002004'	無効なキーワードまたはキーワード・パラメーターが指定されました。
X'0C000008'	X'00002014'	NAME() パラメーターに無効な文字が指定されました。
X'0C000008'	X'00002018'	NAME キーワードは指定されませんでした、UPDATE IMSCON TYPE(ISC) コマンドには必須のキーワードです。
X'0C000008'	X'00002020'	STOP キーワードおよび START キーワードのどちらも指定されませんでした。これらのいずれかを指定する必要があります。
X'0C000008'	X'00002044'	コマンドで STOP キーワードと START キーワードの両方が指定されました。これらのいずれか一方のみを指定することができます。

表 430. UPDATE IMSCON TYPE(ISC) コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C000014'	X'00005000'	コマンド・プロセッサは、BPECBGET を介したストレージの取得に失敗しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 431. UPDATE IMSCON TYPE(ISC) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、UPDATE IMSCON TYPE(ISC) コマンドは正常に完了しました。
8	Command processing error	ISC オープン/クローズ・コントローラーがアクティブではないため、コマンドは ISC リンクを開始できませんでした。このエラーは、IMS Connect の初期化の前半または IMS Connect の終了の後半で発生する可能性があります。
9	Datastore table create failed	START(COMM) 処理中に、IMS Connect がデータ・ストア・テーブル (DST) 制御ブロックを作成できませんでした。詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWSD0212E メッセージを参照してください。
A	TRWB creation failed	コマンドは、ISC リンクのスケジューラー・コントローラー・スレッド、送信スレッド、または受信スレッド用の TWU 制御ブロックの作成を試行しましたが、BPECBGET 要求は失敗しました。詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWSD0212E または HWSD0222W メッセージを参照してください。
B	Datastore table enqueue failed	START(COMM) 処理中に、IMS Connect が ISC リンクのアクティブ・キューに対して DST 制御ブロックのエンキューを試行しましたが、要求は失敗しました。詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWSD0212E メッセージを参照してください。
C	Create scheduler thread failed	START(COMM) 処理中に、IMS Connect が ISC リンクのスケジューラー・コントローラー・スレッドの作成を試行しましたが、BPETHDCR 要求は失敗しました。詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWSD0212E メッセージを参照してください。

表 431. UPDATE IMSCON TYPE(ISC) コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
D	Datastore is in shutdown	IMS Connect は、ISC リンクがシャットダウン中であったため、ISC リンクを開始できませんでした。詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWSD0222W メッセージを参照してください。
E	Datastore block create failed	START(COMM) 処理中に、ISC リンクの送信スレッドまたは受信スレッド用の DSB 制御ブロックの作成に失敗したため、IMS Connect が ISC リンクを開始できませんでした。詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWSD0222W メッセージを参照してください。
F	Create xmit/recv thread failed	START(COMM) 処理中に、IMS Connect が ISC リンクの送信スレッドまたは受信スレッドの作成を試行しましたが、BPETHDCR 要求は失敗しました。詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWSD0222W メッセージを参照してください。
10	NO RESOURCES FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。
11	Resource is stopped	STOP(COMM) 処理中に、リンクが既に停止していたため、IMS Connect が ISC リンクを停止できませんでした。
12	Resource is not stopped	START(COMM) 処理中に、リンクが停止していないため、IMS Connect が ISC リンクを開始できませんでした。
1A	BPEGETM error	START(COMM) 処理中に、IMS Connect は BPEGETM サービスからのストレージの取得に失敗しました。詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWSG4230E メッセージを参照してください。
1B	IMSPLEX resource is stopped	START(COMM) 処理中に、関連する IMSplex リソースが IMS Connect で停止されていないため、IMS Connect が ISC リソースを開始できませんでした。IMSPlex は、IMS Connect WTO コマンド STARTIP、または同等の IMS Connect z/OS MODIFY または IMS タイプ 2 コマンドを使用して開始することができます。詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWSG4015E メッセージを参照してください。

例

UPDATE IMSCON TYPE(ISC) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE IMSCON TYPE(ISC) NAME(LU6TCP1) STOP(COMM)
```

TSO SPOC 出力:

```
ISCName  MbrName  CC  
LU6TCP1  HWS1     0
```

OM API 入力:

```
CMD(UPDATE IMSCON TYPE(ISC) NAME(LU6TCP1) STOP(COMM))
```

OM API 出力:

```
<imsout>  
<ctl>  
<omname>OM10M </omname>  
<omvsn>1.6.0</omvsn>  
<xmlvsn>20 </xmlvsn>  
<statime>2012.034 22:40:43.734518</statime>  
<stotime>2012.034 22:40:43.736309</stotime>  
<staseq>C9127498505F6590</staseq>  
<stoseq>C912749850CF5390</stoseq>  
<rqsttkn1>USRT001 10144043</rqsttkn1>  
<rc>00000000</rc>  
<rsn>00000000</rsn>  
</ctl>  
<cmd>  
<master>HWS1 </master>  
<userid>USRT001 </userid>  
<verb>UPD </verb>  
<kwd>IMSCON </kwd>  
<input>UPD IMSCON TYPE(ISC) NAME(ISC12XX) STOP(COMM) </input>  
</cmd>  
<cmdrsphdr>  
<hdr s1b1="ISC" l1b1="ISCName" scope="LCL" sort="a" key="1"  
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />  
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"  
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />  
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"  
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />  
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"  
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />  
</cmdrsphdr>  
<cmdrspdata>  
<rsp>ISC(LU6TCP1 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) </rsp>  
</cmdrspdata>  
</imsout>
```

説明: IMS Connect (HWS1) と ISC LU6TCP1 の間の通信は停止されています。


関連資料:

799 ページの『第 7 章 /QUIESCE コマンド』

264 ページの『QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンド』

195 ページの『QUERY IMSCON TYPE(ISC) コマンド』

206 ページの『QUERY IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンド』

 [ISC ステートメント \(システム定義\)](#)

ます。単一の ISC リンク ID、またはコンマで区切った ISC リンク ID のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

ISC は、オプションのキーワードです。指定した場合、コマンドは指定されたリンク ID に関連付けられたユーザー・セッションにのみ適用されます。省略した場合には、コマンドはすべてのリンク ID に関連付けられたユーザー・セッションに適用されます。

NAME

ISC ユーザー・セッション名を指定します。単一の ISC ユーザー名、またはコンマで区切った ISC ユーザー名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

STOP (COMM)

ISC ユーザーの通信を停止します。

使用上の注意

UPDATE IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

このコマンドを使用して IMS Connect リソースに加えられた変更は、IMS Connect が再始動されると失われます。

UPDATE IMSCON TYPE(ISCUSER) STOP(COMM) コマンドは、ISC ユーザー・セッションは既に完了しているが、ユーザー・セッションに関連付けられた IMS Connect リソースが正常にクリーンアップされなかった場合に、そのユーザー・セッションに関連付けられた IMS Connect リソースをクリーンアップするために使用します。

推奨事項: ISC ユーザー・セッションを終了するには、IMS コマンド /QUIESCE NODE を使用します。UPDATE IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンドは、終了した ISC ユーザー・セッションに関連付けられた IMS Connect リソースが正常にクリーンアップされなかった場合にのみ使用してください。

UPDATE IMSCON TYPE(ISCUSER) STOP(COMM) コマンドが発行されると、IMS Connect は、以下の操作を実行します。

- ISC ユーザー・セッション上の通信を停止します
- ユーザー・セッション上の通信が停止されたことを IMS に通知します
- ユーザー・セッションに関連付けられた制御ブロックを削除し、関連のストレージを解放します
- メッセージ HWSG4010I を発行します

別の ISC リンク上で同じユーザー・セッション名を使用しているユーザー・セッションを誤って停止するのを防ぐには、ターゲット ISC リンクの ID を **ISC** キーワードで指定することで、コマンド処理を特定の ISC リンクに制限します。

UPDATE IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンドが複数の ISC リンクに対して発行された場合、あるいは *isc_link_id* 値が省略された場合は、IMS Connect は、指定された ISC ユーザ名に一致するすべての ISC ユーザー・セッションを各 ISC リンク上で停止します。

IMS Connect インスタンスに対して定義されている ISC リンクに割り当てられた ISC ユーザー・セッションに関する情報を表示するには、IMS タイプ 2 コマンド QUERY IMSCON TYPE(ISCUSER) または QUERY IMSCON TYPE(ISC) を使用します。

同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンドには、同等の IMS Connect WTOR (Write to Operator with Reply) コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドはありません。

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されます。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドには、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 432. UPDATE IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。1227 ページの表 434 を参照してください。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。CCText フィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
IUSER	ISCUser	N/A	終了された ISC ユーザー・セッションを指定します。ID は常に戻されます。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。
ISC	ISCName	N/A	終了されたユーザー・セッションに関連付けられた ISC リンクの ID。ISC ステートメントの ID パラメーターで定義された ID は常に戻されます。

戻りコード、理由コード、および完了コード

UPDATE IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンドの結果として返される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 433. UPDATE IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力には、リソースごとに 1 行が表示され、各行にはリソースの完了コードが表示されます。
X'0C000008'	X'00002004'	無効なキーワードまたはキーワード・パラメーターが指定されました。
X'0C000008'	X'00002014'	NAME() パラメーターに無効な文字が指定されました。
X'0C000008'	X'00002018'	NAME キーワードは指定されませんでした、UPDATE IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンドには必須のキーワードです。
X'0C000008'	X'00002020'	STOP キーワードは必ず指定します。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力には、リソースごとに 1 行が表示され、各行にはリソースの完了コードが表示されます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力には、リソースごとに 1 行が表示され、各行にはリソースの完了コードが表示されます。
X'0C000014'	X'00005000'	コマンド・プロセッサは、BPECBGET を介したストレージの取得に失敗しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 434. UPDATE IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、UPDATE IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンドは正常に完了しました。
8	Command processing error	内部処理エラーのため、ISCUSER リソースを処理できませんでした。詳しくは、コマンドの戻りコードおよび理由コードを参照してください。

表 434. UPDATE IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
10	NO RESOURCES FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されたか、リソースが現在アクティブではない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。

例

以下の例では、コマンドは、ISC リンク ISCLINK1 に関連付けられた ISC ユーザー・セッション ISCUSER1 を停止します。

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE IMSCON TYPE(ISCUSER) NAME(ISCUSER1) STOP(COMM)
```

TSO SPOC 出力:

```
ISCUser  ISCName  MbrName          CC
ISCUSER1 ISCLINK1 HWS1                0
```

OM API 入力:

```
CMD(UPDATE IMSCON TYPE(ISCUSER) NAME(ISCUSER1) STOP(COMM))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M  </omname>
<omvsn>1.6.0</omvsn>
<xm1vsn>20  </xm1vsn>
<statime>2012.335 17:33:09.520770</statime>
<stotime>2012.335 17:33:09.535112</stotime>
<staseq>CA8CA13CBF18231A</staseq>
<stoseq>CA8CA13CC2988D9A</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10093309</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1  </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>IMSCON  </kwd>
<input>UPD IMSCON TYPE(ISCUSER) NAME(ISCUSER1) STOP(COMM) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="IUSER" l1b1="ISCUser" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="ISC" l1b1="ISCName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
```



```

scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>IUSER(ISCUSER1) ISC(ISCLINK1) MBR(HWS1          ) CC(  0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

関連資料:

- 264 ページの『QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンド』
- 195 ページの『QUERY IMSCON TYPE(ISC) コマンド』
- 206 ページの『QUERY IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンド』
- 799 ページの『第 7 章 /QUIESCE コマンド』

- [🔗](#) ISC ステートメント (システム定義)
- [🔗](#) RMTCICS ステートメント (システム定義)

UPDATE IMSCON TYPE(LINK) コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(LINK) コマンドは、IMS Connect 内の MSC 物理リンクに割り当てられた MSC 論理リンク上の通信を停止するために使用します。

サブセクション:

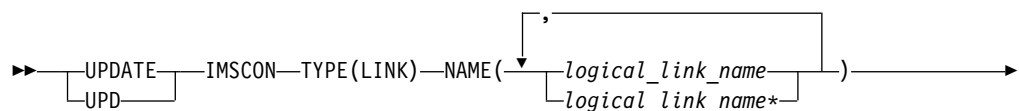
- 『環境』
- 『構文』
- 1230 ページの『キーワード』
- 1230 ページの『使用上の注意』
- 1231 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』
- 1232 ページの『出力フィールド』
- 1232 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1233 ページの『例』

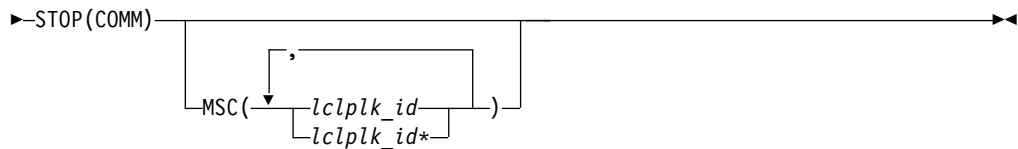
環境

UPDATE IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文





キーワード

以下のキーワードは、UPDATE IMSCON TYPE(LINK) コマンドに有効です。

MSC

MSC ステートメントの LCLPLKID パラメーターで定義された、MSC 物理リンク ID を指定します。単一の MSC 物理リンク名、またはコンマで区切った MSC 物理リンク名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

これは、オプションのキーワードです。指定した場合、コマンドは指定された物理リンク ID に関連付けられた論理リンクにのみ適用されます。省略した場合には、コマンドはすべての物理リンク ID に関連付けられた論理リンクに適用されます。

NAME

MSC 論理リンク名を指定します。単一の MSC 論理リンク名、またはコンマで区切った MSC 論理リンク名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

STOP (COMM)

論理リンクに関連付けられている MSC の論理リンク通信を停止します。

使用上の注意

UPDATE IMSCON TYPE(LINK) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

このコマンドを使用して IMS Connect リソースに加えられた変更は、IMS Connect が再始動されると失われます。

UPDATE IMSCON TYPE(LINK) コマンドは、MSC 論理リンクは既に終了しているが、そのリンクに関連付けられた IMS Connect リソースが正常にクリーンアップされなかった場合に、MSC 論理リンクに関連付けられているリソースをクリーンアップするために使用します。

推奨事項: MSC 論理リンクを終了するには、IMS コマンド /PSTOP を使用してください。UPDATE IMSCON TYPE(LINK) コマンドは、既に終了している MSC 論理リンクに関連付けられた IMS Connect リソースが正常にクリーンアップされていない場合のみ使用してください。

UPDATE IMSCON TYPE(LINK) コマンドが発行されると、IMS Connect は以下の操作を実行します。

- MSC 論理リンク上の通信を停止します
- 論理リンク上の通信が停止されたことを IMS に通知します
- 論理リンクに関連付けられた制御ブロックを削除し、関連のストレージを解放します
- メッセージ HWSF3310I を発行します

別の物理リンク上で同じ論理リンク名を使用している論理リンクを誤って停止するのを避けるには、ターゲット物理リンクの名前を *lclplk_id* 値として指定することで、コマンドの処理を特定の物理リンクに制限します。

UPDATE IMSCON TYPE(LINK) コマンドが複数の物理リンクに対して発行されるか、あるいは *lclplk_id* 値が省略されている場合、IMS Connect は、UPDATE IMSCON TYPE(LINK) コマンドで指定された *logical_link_name* に一致するすべての MSC 論理リンク上の通信を停止します。

IMS Connect インスタンスに対して定義された MSC 物理リンクに割り当てられている MSC 論理リンクに関する情報を表示するには、以下のいずれかのコマンドを使用します。

- IMS タイプ 2 コマンド・フォーマットで、QUERY IMSCON TYPE(LINK) または QUERY IMSCON TYPE(MSC)
- WTOR コマンド・フォーマットで、VIEWMSC
- z/OS MODIFY コマンド・フォーマットで、QUERY MSC

同等の **WTOR** コマンドおよび **z/OS** コマンド

以下の表には、UPDATE IMSCON TYPE(LINK) コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect WTOR (Write to Operator with Reply) コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

注:

- IMS Connect WTOR コマンドは、未解決の IMS Connect 応答メッセージに対する応答です。
- IMS Connect z/OS コマンドは、z/OS (MVS) インターフェースを介して、IMS Connect *jobname* を使用して発行されます。

表 435. UPDATE IMSCON TYPE(LINK) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(LINK) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(LINK) NAME(<i>logical_link_name</i>) STOP(COMM)	STOPLINK <i>logical_link_name</i>	DELETE LINK NAME(<i>linkName</i>)
UPDATE IMSCON TYPE(LINK) NAME(<i>logical_link_name</i>) MSC(<i>lclplk_id</i>) STOP(COMM)	STOPLINK <i>logical_link_name lclplk_id</i>	DELETE LINK NAME(<i>linkname</i>) LCLPLKID(<i>lclPlkid</i>)

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 436. UPDATE IMSCON TYPE(LINK) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたりソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。1233 ページの表 438 を参照してください。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
LINK	リンク	N/A	終了した MSC 論理リンクを指定します。ID は常に戻されます。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。
MSC	MscName	N/A	終了した論理リンクに関連付けられている MSC 物理リンクの ID。ID (これは LCLPLKID パラメーターで定義されています) は、常に戻されます。

戻りコード、理由コード、および完了コード

UPDATE IMSCON TYPE(LINK) コマンドの結果として返される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 437. UPDATE IMSCON TYPE(LINK) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE IMSCON TYPE(LINK) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。

表 437. UPDATE IMSCON TYPE(LINK) コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 438. UPDATE IMSCON TYPE(LINK) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、UPDATE IMSCON TYPE(LINK) コマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。

例

UPDATE IMSCON TYPE(LINK) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE IMSCON TYPE(LINK) NAME(MSCLINK1) STOP(COMM)
```

TSO SPOC 出力:

```
Link      MscName  MbrName  CC
MSCLINK1 MSC12    HWS1     0
```

OM API 入力:

```
CMD(UPDATE IMSCON TYPE(LINK) NAME(MSCLINK1) STOP(COMM))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2010.298 02:42:55.240634</statime>
<stotime>2010.298 02:42:55.245578</stotime>
<staseq>C6C783BC615BAEFC</staseq>
<stoseq>C6C783BC6290A27C</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10194255</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
```




```

</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>UPD IMSCON TYPE(LINK) NAME(MSCLINK1) STOP(COMM) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="LINK" l1b1="Link" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MSC" l1b1="MscName" scope="LCL" sort="a" key="1"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>LINK(MSCLINK1) MSC(MSC12 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: 論理リンク (MSCLINK1) に関連付けられている MSC (MSC12) の通信は停止されています。

関連資料:

-  STOPLINK コマンド (コマンド)
-  IMS Connect DELETE LINK コマンド (コマンド)
-  MSC ステートメント (システム定義)

UPDATE IMSCON TYPE(MSC) コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(MSC) コマンドは、MSC 通信が終了された後で MSC 通信を再開したり、MSC 物理リンク (関連のすべての論理リンクを含む) へのすべての通信を終了したりするために使用します。

サブセクション:

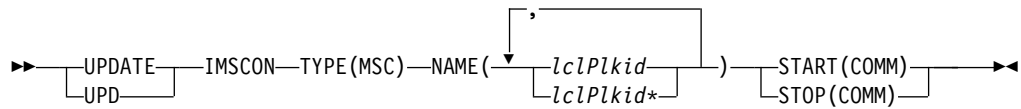
- 『環境』
- 1235 ページの『構文』
- 1235 ページの『キーワード』
- 1235 ページの『使用上の注意』
- 1236 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』
- 1236 ページの『出力フィールド』
- 1237 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1239 ページの『例』

環境

UPDATE IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文



キーワード

以下のキーワードは、UPDATE IMSCON TYPE(MSC) コマンドに有効です。

NAME

MSC ステートメントの LCLPLKID パラメーターで定義された、MSC 物理リンク ID を指定します。単一の MSC 物理リンク名、またはコンマで区切った MSC 物理リンク名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

START (COMM)

MSC 物理リンクの MSC 通信が UPDATE IMSCON TYPE(MSC) STOP(COMM) コマンドで終了された後、MSC 通信を開始または再開します。コマンドの完了後、MSC 物理リンクの MSC 通信の状況は「ACTIVE」に設定されます。START(COMM) は、STOP(COMM) と同時には指定できません。

STOP (COMM)

MSC 物理リンク (関連のすべての論理リンクを含む) へのすべての通信を終了します。コマンドの完了後、MSC 物理リンクの MSC 通信の状況は「NOTACTIVE」に設定されます。STOP(COMM) は、START(COMM) と同時には指定できません。

使用上の注意

UPDATE IMSCON TYPE(MSC) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

UPDATE IMSCON TYPE(MSC) STOP(COMM) コマンドが発行されると、IMS Connect は、以下の操作を実行します。

- 指定された MSC 物理リンク上の通信を停止します。これには、その物理リンクに割り当てられているすべての MSC 論理リンク上の通信が含まれます。
- 物理リンク上の通信が停止されたことを IMS に通知し、IMS でも物理リンクおよびその論理リンクに割り当てられているすべての論理リンクを終了できるようにします。
- MSC 物理リンクおよびそれに関連する論理リンクの状況を NOT ACTIVE に変更します。

- TCP/IP 汎用リソースの場合、物理リンクの IMS システムへの類似性をクリアします。
- メッセージ HWSF3305I を発行します。

同等の **WTOR** コマンドおよび **z/OS** コマンド

以下の表には、UPDATE IMSCON TYPE(MSC) コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect WTOR (Write to Operator with Reply) コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

注:

- IMS Connect WTOR コマンドは、未解決の IMS Connect 応答メッセージに対する応答です。
- IMS Connect z/OS コマンドは、z/OS (MVS) インターフェースを介して、IMS Connect *jobname* を使用して発行されます。

表 439. UPDATE IMSCON TYPE(MSC) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(MSC) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(MSC) NAME(<i>lclPlkid</i>) START(COMM)	STARTMSC <i>lclPlkid</i>	UPDATE MSC NAME(<i>lclPlkid</i>) START(COMM)
UPDATE IMSCON TYPE(MSC) NAME(<i>lclPlkid</i>) STOP(COMM)	STOPMSC <i>lclPlkid</i>	UPDATE MSC NAME(<i>lclPlkid</i>) STOP(COMM)

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 440. UPDATE IMSCON TYPE(MSC) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。1237 ページの表 442 を参照してください。

表 440. UPDATE IMSCON TYPE(MSC) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CCTXT	CCText	error	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。
MSC	MscName	N/A	MSC 物理リンク名。MSC 物理リンク名は常に返されます。

戻りコード、理由コード、および完了コード

UPDATE IMSCON TYPE(MSC) コマンドの結果として返される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 441. UPDATE IMSCON TYPE(MSC) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE IMSCON TYPE(MSC) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 442. UPDATE IMSCON TYPE(MSC) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、UPDATE IMSCON TYPE(MSC) コマンドは正常に完了しました。
9	Data store table create failed	START(COMM) 処理中に、IMS Connect がデータ・ストア・テーブル (DST) 制御ブロックを作成できませんでした。 詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWSD0212E メッセージを参照してください。

表 442. UPDATE IMSCON TYPE(MSC) コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
A	TRWB creation failed	<p>コマンドは、MSC 物理リンクのスケジューラー・コントローラー・スレッド、送信スレッド、または受信スレッド用の TWU 制御ブロックの作成を試行しましたが、BPECBGET 要求は失敗しました。</p> <p>コマンド出力には、以下のいずれかのメッセージも含まれる可能性があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • HWS0212E • HWS0222W
B	Data store table enqueue failed	<p>START(COMM) 処理中に、IMS Connect が MSC 物理リンクのアクティブ・キューに対して DST 制御ブロックのエンキューを試行しましたが、要求は失敗しました。</p> <p>詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWS0212E メッセージを参照してください。</p>
C	Create scheduler thread failed	<p>START(COMM) 処理中に、IMS Connect が MSC 物理リンクのスケジューラー・コントローラー・スレッドの作成を試行しましたが、BPETHDCR 要求は失敗しました。</p> <p>詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWS0212E メッセージを参照してください。</p>
D	Data store is in shutdown	<p>MSC 物理リンクがシャットダウン中であったため、IMS Connect は MSC 物理リンクを開始できませんでした。</p> <p>詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWS0222W メッセージを参照してください。</p>
E	Data store block create failed	<p>START(COMM) 処理中に、IMS Connect は MSC 物理リンクを開始できませんでした。これは、MSC 物理リンクの送信スレッドまたは受信スレッドに対してデータ・ストア・ブロック (DSB) を作成しようとして失敗したためです。</p> <p>詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWS0222W メッセージを参照してください。</p>
F	Create xmit/recv thread failed	<p>START(COMM) 処理中に、IMS Connect が MSC 物理リンクの送信スレッドまたは受信スレッドの作成を試行しましたが、BPETHDCR 要求は失敗しました。</p> <p>詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWS0222W メッセージを参照してください。</p>

表 442. UPDATE IMSCON TYPE(MSC) コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
10	リソースが見つかりません	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。
11	Resource is stopped	STOP(COMM) 処理中に、MSC 物理リンクが既に停止していたため、IMS Connect が MSC 物理リンクを停止できませんでした。
12	Resource is not stopped	START(COMM) 処理中に、MSC 物理リンクが停止していなかったため、IMS Connect が MSC 物理リンクを開始できませんでした。
1A	BPEGETM error	START(COMM) 処理中に、IMS Connect は BPEGETM サービスからのストレージの取得に失敗しました。 コマンド出力にはメッセージ HWSE3130W も含まれる可能性があります。
2F	SCI is not available	START(COMM) 処理中に、IMS Connect は MSC との通信のために SCI が使用できないことを検出しました。 コマンド出力にはメッセージ HWSF3315E も含まれる可能性があります。

例

UPDATE IMSCON TYPE(MSC) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE IMSCON TYPE(MSC) NAME(MSC12) STOP(COMM)
```

TSO SPOC 出力:

```
MscName  MbrName  CC
MSC12    HWS1        0
```

OM API 入力:

```
CMD(UPDATE IMSCON TYPE(MSC) NAME(MSC12) STOP(COMM))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2010.298 02:45:18.138130</statime>
<stotime>2010.298 02:45:18.155690</stotime>
<staseq>C6C78444A871292C</staseq>
```

```

<stoseq>C6C78444ACBAA9AC</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10194518</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>UPD IMSCON TYPE(MSC) NAME(MSC12) STOP(COMM) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="MSC" l1b1="MscName" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>MSC(MSC12 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: IMS Connect (HWS1) と MSC (MSC12) の間の通信は停止されています。

関連資料:

- [🔗 STARTMSC コマンド \(コマンド\)](#)
- [🔗 STOPMSC コマンド \(コマンド\)](#)
- [🔗 IMS Connect UPDATE MSC コマンド \(コマンド\)](#)

UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) コマンドは、IMS Connect と IMS Open Database Manager (ODBM) の間の通信を開始および停止するために使用します。

UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) コマンドは、IMS Connect と ODBM の間で通信が失敗した後で、ODBM との通信を再確立するために使用します。例えば、IMS Connect 内の ODBM に関するすべてのアクティビティが終了した場合、このコマンドを使用して通信を再開します。

サブセクション:

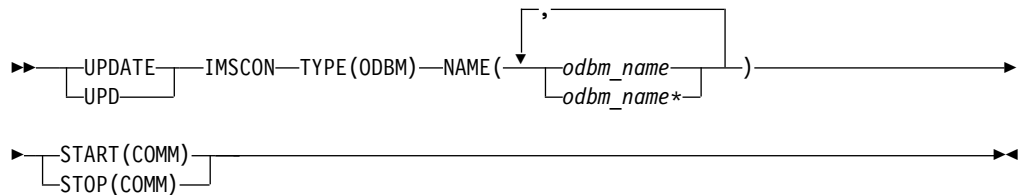
- 1241 ページの『環境』
- 1241 ページの『構文』
- 1241 ページの『キーワード』
- 1241 ページの『使用上の注意』
- 1242 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』
- 1242 ページの『出力フィールド』
- 1243 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1245 ページの『例』

環境

UPDATE IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文



キーワード

以下のキーワードは、UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) コマンドに有効です。

NAME

更新する 1 つ以上の IMS ODBM の名前を指定します。単一の ODBM 名、または、コンマで区切った ODBM 名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

START (COMM) | STOP (COMM)

IMS ODBM との通信を開始または停止することを指定します。

START (COMM)

IMS ODBM との通信を開始します。START(COMM) は、STOP(COMM) と同時には指定できません。

STOP (COMM)

IMS ODBM との通信を停止します。STOP(COMM) は、START(COMM) と同時には指定できません。

使用上の注意

UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) コマンドは、ODBM との通信の即時終了を必要とする、任意のタイプのエラー状態に対して使用します。ODBM について現在進行中の作業が終了し、その ODBM との通信およびスレッドが終了します。

同等の **WTOR** コマンドおよび **z/OS** コマンド

以下の表には、UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect WTOR (Write to Operator with Reply) コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

注:

- IMS Connect WTOR コマンドは、未解決の IMS Connect 応答メッセージに対する応答です。
- IMS Connect z/OS コマンドは、z/OS (MVS) インターフェースを介して、IMS Connect *jobname* を使用して発行されます。

表 443. UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UDPATE IMSCON TYPE(ODBM) NAME(<i>odbm_name</i>) START(COMM)	STARTOD <i>odbm_name</i>	UPDATE ODBM NAME(<i>odbmName</i>) START(COMM)
UDPATE IMSCON TYPE(ODBM) NAME(<i>odbm_name</i>) STOP(COMM)	STOPOD <i>odbm_name</i>	UPDATE ODBM NAME(<i>odbmName</i>) STOP(COMM)

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 444. UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたりソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。1243 ページの表 446 を参照してください。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。

表 444. UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) コマンド出力フィールド (続き)

ショート・			
ラベル	長ラベル	キーワード	意味
ODBM	ODBMName	N/A	ODBM の名前。ODBM 名は常に戻されます。

戻りコード、理由コード、および完了コード

UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) コマンドの結果として返される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 445. UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 446. UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・ テキスト	意味
0		該当リソースについて、UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) コマンドは正常に完了しました。
9	Data store table create failed	START(COMM) 処理中に、IMS Connect がデータ・ストア・テーブル (DST) 制御ブロックを作成できませんでした。 詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWSD0212E メッセージを参照してください。

表 446. UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・ テキスト	意味
A	TRWB creation failed	<p>コマンドは、ODBM データ・ストアのスケジューラー・コントローラー・スレッド、送信スレッド、または受信スレッド用の TWU 制御ブロックの作成を試行しましたが、BPECBGET 要求は失敗しました。</p> <p>コマンド出力には、以下のいずれかのメッセージも含まれる可能性があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • HWS0212E • HWSM0522W
B	Data store table enqueue failed	<p>START(COMM) 処理中に、IMS Connect が ODBM データ・ストアのアクティブ・キューに対して DST 制御ブロックのエンキューを試行しましたが、要求は失敗しました。</p> <p>詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWS0212E メッセージを参照してください。</p>
C	Create scheduler thread failed	<p>START(COMM) 処理中に、IMS Connect が ODBM データ・ストアのスケジューラー・コントローラー・スレッドの作成を試行しましたが、BPETHDCR 要求は失敗しました。</p> <p>詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWS0212E メッセージを参照してください。</p>
D	Data store is in shutdown	<p>データ・ストアがシャットダウン中だったため、IMS Connect は ODBM データ・ストアを開始できませんでした。</p> <p>詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWSM0522W メッセージを参照してください。</p>
E	Data store block create failed	<p>START(COMM) 処理中に、IMS Connect は ODBM データ・ストアを開始できませんでした。これは、データ・ストアの送信スレッドまたは受信スレッドに対してデータ・ストア・ブロック (DSB) を作成しようとして失敗したためです。</p> <p>詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWSM0522W メッセージを参照してください。</p>
F	Create xmit/recv thread failed	<p>START(COMM) 処理中に、IMS Connect が ODBM データ・ストアの送信スレッドまたは受信スレッドの作成を試行しましたが、BPETHDCR 要求は失敗しました。</p> <p>詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWSM0522W メッセージを参照してください。</p>
10	リソースが見 つかりません	<p>リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されたか、リソースが現在アクティブではない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。</p>

表 446. UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・ テキスト	意味
11	Resource is stopped	STOP(COMM) 処理中に、ODBM が既に停止していたため、IMS Connect が ODBM を停止できませんでした。
12	Resource is not stopped	START(COMM) 処理中に、ODBM が停止していないため、IMS Connect が ODBM を開始できませんでした。
1A	BPEGETM error	START(COMM) 処理中に、IMS Connect は BPEGETM サービスからのストレージの取得に失敗しました。 コマンド出力にはメッセージ HWSQ2230W も含まれる可能性があります。
2F	SCI is not available	START(COMM) 処理中に、IMS Connect は ODBM との通信のために SCI が使用できないことを検出しました。 コマンド出力には、以下のいずれかのメッセージも含まれる可能性があります。 <ul style="list-style-type: none"> • HWSN1915E • HWSQ2250W
30	IMSA creation failed	START(COMM) 処理中に、IMS Connect が BPECBGET サービスからタイプ IMSA のストレージ・ブロックを取得しようとしたとき、エラーが発生しました。 コマンド出力にはメッセージ HWSQ2230W も含まれる可能性があります。
31	Registration to ODBM failed	START(COMM) 処理中、ODBM への登録時に IMS Connect にエラーが発生しました。 コマンド出力にはメッセージ HWSQ2240W も含まれる可能性があります。
32	Deregistration to ODBM failed	START(COMM) 処理中、ODBM からの登録取り消し時に IMS Connect にエラーが発生しました。 コマンド出力にはメッセージ HWSQ2245W も含まれる可能性があります。

例

UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UDPATE IMSCON TYPE(ODBM) NAME(ODBMA) START(COMM)
```

TSO SPOC 出力:

```
ODBMName MbrName CC
ODBMA    HWS1     0
```

OM API 入力:



```
CMD(UDPATE IMSCON TYPE(ODBM) NAME(ODBMA) START(COMM))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xm1vsn>20 </xm1vsn>
<statime>2010.298 15:54:38.327140</statime>
<stotime>2010.298 15:54:38.328400</stotime>
<staseq>C6C834B2DA964FEC</staseq>
<stoseq>C6C834B2DAE507AC</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10085438</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>UPD IMSCON TYPE(ODBM) NAME(ODBMA) START(COMM) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="ODBM" l1b1="ODBMName" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>ODBM(ODBMA ) MBR(HWS1 ) CC( 0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>
```

説明: IMS Connect (HWS1) と IMS ODBM (ODBMA) の間の通信が再開されます。

関連資料:

-  STARTOD コマンド (コマンド)
-  STOPOD コマンド (コマンド)

UPDATE IMSCON TYPE(PORT) コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(PORT) コマンドを使用して、TCP/IP ポートの listen を終了し、TCP/IP 接続を再確立して TCP/IP ポートの listen を可能にするか、またはポート属性を変更します。

サブセクション:

- 1247 ページの『環境』
- 1247 ページの『構文』
- 1247 ページの『キーワード』
- 1250 ページの『使用上の注意』
- 1250 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』
- 1250 ページの『出力フィールド』
- 1251 ページの『戻りコードおよび理由コード』

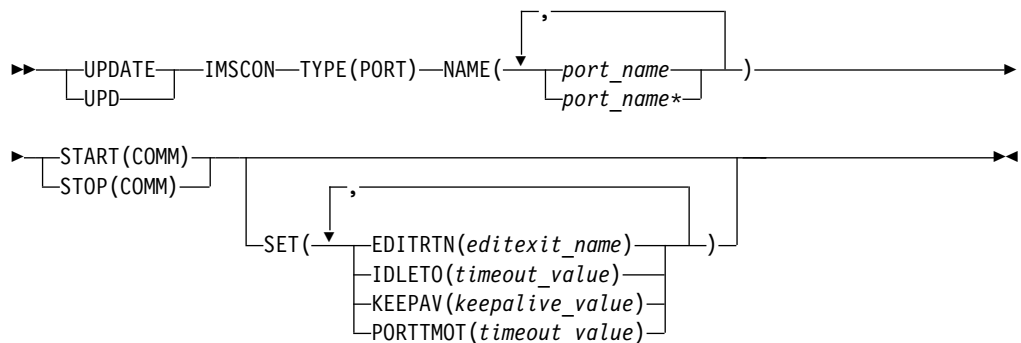
- 1252 ページの『完了コード』
- 1253 ページの『例』

環境

UPDATE IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文



キーワード

以下のキーワードは、UPDATE IMSCON TYPE(PORT) コマンドに有効です。

NAME

1 つ以上のポートの名前を指定します。単一ポート名、またはコンマで区切ったポート名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。ポート名は、IMS Connect PROCLIB メンバー内の構成ステートメントのいずれか、または CREATE IMSCON TYPE(PORT) コマンドを使用して IMS Connect に対して定義されたポートと一致している必要があります。

IMS TM Resource Adapter によって使用されるローカル・ポートを更新するには、NAME(LOCAL) を指定します。

SSL ポートは、ポート番号の末尾に文字「S」を付けて表示されます。SSL ポートを更新するには、ポート番号の末尾に文字「S」を付けて、または付けずに、ポート番号を指定します。

ODBM 用の DRDA ポートは、ポート番号の末尾に文字「D」を付けて表示されます。DRDA ポートを更新するには、ポート番号の末尾に文字「D」を付けて、または付けずに、ポート番号を指定します。

ISC リンク上で CICS サブシステムからのメッセージを受信するために CICSPOINT として定義されたポートは、ポート番号の末尾に文字「C」が付加

されて表示されます。CICSSPORT ポートを更新するには、ポート番号の末尾に文字「C」を付けて、または付けずに、ポート番号を指定します。

SET()

変更される属性値を指定します。SET() キーワードは、キーワード START() または STOP() と組み合わせて使用することはできません。

EDITRTN(*editexit_name*)

IMS Connect の標準メッセージ形式に準拠していないメッセージを変更できる、ポート・メッセージ編集出口ルーチンの名前を 1 から 8 文字の英数字で指定します。出口ルーチンは、IMS Connect から JOBLIB、STEPLIB、または LinkList によってアクセス可能であることが必要です。

ポート・メッセージ編集出口ルーチンと EDITRTN 属性は、通常のポートに対してのみ有効です。無効なポート・タイプは、LOCAL、ODBM、SSL、および CICS です。

EDITRTN 属性を設定するには、UPD IMSCON TYPE(PORT) STOP(COMM) コマンドを発行してポートを NOTACTIVE 状態にする必要があります。必要な場合は、EDITRTN 属性を指定してコマンドを実行する前に、STOP(COMM) 属性を指定してコマンドを実行します。

指定されたポート・メッセージ編集出口ルーチンを IMS Connect がロードできない場合は、ポートの開始時に事前に定義されたポート・メッセージ編集出口ルーチン (定義されている場合) を使用します。

ポート・メッセージ編集出口ルーチンの使用を不可にするには、EDITRTN パラメーターの値としてゼロを使用してください (EDITRTN(0))。BPE DISPLAY USEREXIT コマンドの出力には前に設定されたポート・メッセージ編集出口ルーチンの名前が引き続き表示されますが、IMS Connect はポート・メッセージ編集出口ルーチンを呼び出しません。

BPE REFRESH USEREXIT コマンドを使用して既存のポート・メッセージ編集出口ルーチンをリフレッシュすると、IMS Connect ポートがアクティブになっている場合に予期しない結果が生じる可能性があります。これは、コマンドの完了直後に出口の新規コピーが使用可能になるからです。これは、現在接続されている TCP/IP クライアントの入出力両方のメッセージに影響を及ぼします。BPE REFRESH USEREXIT コマンドは BPE によって処理されるので、IMS Connect は出口の旧バージョンに対して TERM 呼び出しを発行せず、出口の新バージョンに対して INIT 呼び出しを発行しません。BPE REFRESH USEREXIT コマンドを使用してポートの編集出口ルーチンを更新する代わりに、ポート・メッセージ編集出口ルーチンの現行の名前を指定して UPD IMSCON TYPE(PORT) SET(EDITRTN) コマンドを使用することを試してください。

IDLETO

このポート上のオープン・ソケット接続について、RECV 状態で次のメッセージを待機しているアイドル中の接続のタイムアウト間隔を指定します。タイムアウト間隔が満了すると、IMS Connect はソケット接続を非アクティブと見なしてクローズします。

タイムアウト間隔の単位は、100 分の 1 秒です。有効なタイムアウト値は、-1 から 2 147 483 647 (X'7FFFFFFF') です。値 0 は、このタイムアウト機能を無効にします。この場合、非アクティブ接続はタイムアウトになりません。

値 -1 は、ポート上の接続がグローバル・レベルのアイドル・タイムアウト値を使用することを指定します。

-1 が指定されていない限り、ポート・レベルのアイドル・タイムアウト値は、グローバル・レベルのアイドル・タイムアウト値をオーバーライドしません。

このパラメーターはオプションであり、持続ソケット接続にのみ適用されません。

IDLETO パラメーターは、IMS TM との通信に使用されるポートに対してのみ有効です。これらのポートは、IMS Connect HWSCFGxx 構成メンバーの TCPIP ステートメント内の PORT= パラメーターおよび PORTID= パラメーター、または CREATE IMSCON TYPE(PORT) コマンドによって定義されます。

KEEPAV(keepalive_value)

このポート上のソケットの TCP/IP キープアライブ間隔を数値で指定します。キープアライブ間隔の単位は秒です。範囲は 0 秒から 2,147,460 秒までです。ゼロが指定された場合は、TCP/IP スタックの間隔値が使用されません。

KEEPAV 属性は、通常ポート、DRDA ポート、および CICS ポートに対してのみ有効です。無効なポート・タイプは、LOCAL および SSL です。

PORTTMOT(timeout_value)

IMS Connect が、DRDA ポートで接続しているクライアント・アプリケーションからの次の入力メッセージを待つ時間を数値で指定します。この時間が経過すると、IMS Connect はクライアントを切断します。タイムアウト間隔の単位は、100 分の 1 秒です。範囲は 0 から 2,147,483,647 (100 分の 1 秒単位) です。値がゼロの場合、タイムアウト機能は無効になります。

PORTTMOT 属性は、DRDA ポートに対してのみ有効です。無効なポート・タイプは、LOCAL、通常、SSL、および CICS です。

START(COMM) | STOP(COMM)

ポート上の通信を開始または停止することを指定します。

START(COMM)

ポート上の通信を開始します。UPDATE IMSCON TYPE(PORT)

START(COMM) コマンドは、IMS Connect と TCP/IP ポートの間の通信は停止しているが、IMS Connect はまだ終了していない場合に使用します。

STOP(COMM)

ポート上の通信を停止します。既存のクライアントに対して現在進行中の作業は続行できます。ポート上での新規の要求メッセージに対する listen のみが、即時に終了されます。既存の作業が完了した後は、ポートはアクティブではなくなります。

使用上の注意

UPDATE IMSCON TYPE(PORT) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

このコマンドを使用して IMS Connect リソースに加えられた更新は、IMS Connect が再始動されると失われます。ただし、次の再始動の前に、その更新が IMS PROCLIB データ・セットの HWSCFGxx メンバー内の対応する構成ステートメントにも適用された場合は除きます。

UPDATE IMSCON TYPE(PORT) SET(EDITRTN()) コマンドを使用してポートの EDITRTN 属性を更新するには、ポートを停止する (NOTACTIVE 状態にする) 必要があります。

同等の **WTOR** コマンドおよび **z/OS** コマンド

以下の表には、UPDATE IMSCON TYPE(PORT) コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect WTOR (Write to Operator with Reply) コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

注:

- IMS Connect WTOR コマンドは、未解決の IMS Connect 応答メッセージに対する応答です。
- IMS Connect z/OS コマンドは、z/OS (MVS) インターフェースを介して、IMS Connect *jobname* を使用して発行されます。

表 447. UPDATE IMSCON TYPE(PORT) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド :

UPDATE IMSCON TYPE(PORT) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(PORT) NAME(<i>port_name</i>) START(COMM)	OPENPORT <i>port_id</i> STARTPT <i>port_id</i>	UPDATE PORT NAME(<i>port_name</i>) START(COMM)
UPDATE IMSCON TYPE(PORT) NAME(<i>port_name</i>) STOP(COMM)	STOPPORT <i>port_id</i>	UPDATE PORT NAME(<i>port_name</i>) STOP(COMM)

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。 N/A (適用)

外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 448. UPDATE IMSCON TYPE(PORT) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたりソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
ERRT	ErrorText	<i>error</i>	診断情報を提供するエラー・テキスト。エラー・テキストはゼロ以外の完了コードに戻すことができ、完了コードをさらに説明します。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。
PORT	Port	N/A	ポート番号。ポート番号は常に戻されます。 以下のいずれかの文字がポート番号の末尾に追加されている場合、そのポートが特定の目的に専用であることを示します。 C CICS ポートを識別します。 D ODBM ポートを識別します。 S SSL ポートを識別します。 ポート番号の代わりに「LOCAL」と表示される場合、そのポートは、IMS TM Resource Adapter が使用するローカル・ポートです。

戻りコードおよび理由コード

UPDATE IMSCON TYPE(PORT) コマンドの結果として返される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 449. UPDATE IMSCON TYPE(PORT) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE IMSCON TYPE(PORT) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。

表 449. UPDATE IMSCON TYPE(PORT) コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'02000008'	X'0000203C'	入力されたコマンドに、無効なキーワード・パラメーター値が含まれています。コマンドはリジェクトされました。
X'0C000008'	X'0000209C'	SET() キーワードは、キーワード START() または STOP() と組み合わせて使用することはできません。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。

完了コード

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 450. UPDATE IMSCON TYPE(PORT) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、UPDATE IMSCON TYPE(PORT) コマンドは正常に完了しました。
3	Some attributes not updated	一部の属性に対してコマンドが正常に実行されました。IMS Connect が設定に失敗した属性ごとに、それぞれの完了コードを示す別個の出力行があります。
10	リソースが見つかりません	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。
11	Resource is stopped	STOP(COMM) 処理中に、ポートが既に停止していたため、IMS Connect がポートを停止できませんでした。
12	Resource is not stopped	START(COMM) 処理中に、ポートが既に開始されていたため、IMS Connect がポートを開始できませんでした。
14	Resource is not stopped	リソースが停止されていません。ErrorText 列に表示されている属性を更新するには、まずリソースを停止する必要があります。
17	Attribute is invalid for rsc	ErrorText 列に表示されている属性は、この特定のポートに対しては無効です。例えば、この属性は CICS ポートまたは DRDA ポートでサポートされていない可能性があります。この属性は設定できません。

表 450. UPDATE IMSCON TYPE(PORT) コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
12	Resource is not stopped	リソースが停止されていません。このリソースの属性を更新するには、最初にそのリソースを停止する必要があります。
37	Continuing to retry command	IMS Connect がコマンドの処理中にエラーを検出しました。引き続き、バックグラウンドでコマンドの処理を再試行します。コマンドの出力には、コマンドが失敗した理由を示すために、以下のいずれかのメッセージも含まれる場合があります。 <ul style="list-style-type: none"> • HWSP1400W • HWSP1402W • HWSP1405W • HWSP1415I • HWSP1415E • HWSP1420E • HWSP1485E • HWSS0771W • HWSS0777W
38	Unable to start port scheduler	IMS Connect はポート・スケジューラーを開始できませんでした。コマンド出力にはメッセージ HWSS0712W も含まれます。
3D	Start process was interrupted	START(COMM) 処理が別のコマンドによって中断されたか、IMS Connect がシャットダウンしているためです。コマンドの出力にはメッセージ HWSS0770I が含まれます。
4B	Unable to load port edit routine	IMS Connect は、ポート・メッセージ編集出口ルーチンをロードできませんでした。ポート・メッセージ編集出口ルーチンの名前が、ErrorText 列に表示されます。
4C	Unable to update attribute	IMS Connect は、ErrorText 列に表示されている属性を更新できませんでした。

例

UPDATE IMSCON TYPE(PORT) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UDPATE IMSCON TYPE(PORT) NAME(9999) START(COMM)
```

TSO SPOC 出力:

```
Port  MbrName  CC
9999  HWS1      0
```

OM API 入力:

```
CMD(UDPATE IMSCON TYPE(PORT) NAME(9999) START(COMM))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xm1vsn>20 </xm1vsn>
<statime>2010.298 02:49:44.222509</statime>
<stotime>2010.298 02:49:44.225852</stotime>
<staseq>C6C785426A72DABA</staseq>
<stoseq>C6C785426B43C87A</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10194944</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>UPD IMSCON TYPE(PORT) NAME(9999) START(COMM) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="PORT" l1b1="Port" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>PORT(9999 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>
```

説明: IMS Connect、HWS1 は、現在 TCP/IP ポート 9999 で listen していません。

UPDATE IMSCON TYPE(PORT) コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE IMSCON TYPE(PORT) NAME(9999) START(COMM)
```

TSO SPOC 出力:

```
IMSp1ex . . . . . : PLEX1
Routing . . . . . : HWS1
Start time . . . . : 2013.253 16:52:42.35
Stop time . . . . . : 2013.253 16:52:42.35
Return code . . . . : 0200000C
Reason code . . . . : 00003008
Reason text . . . . : None of the clients were successful.
Command master. . . : HWS1
```

MbrName	Return Code	Reason Code	Reason text
HWS1	0C00000C	00003004	No requests were successful

```
MbrName Messages
-----
HWS1 HWSP1415E TCP/IP SOCKET FUNCTION CALL FAILED; F=GETSOCK , R=-1, E=112,
M=SDOT, ID=9999
```

説明: IMS Connect、HWS1 は、TCP/IP ソケット関数呼び出しが失敗したため、TCP/IP ポート 9999 で通信を開始できませんでした。

UPDATE IMSCON TYPE(PORT) コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE IMSCON TYPE(PORT) NAME(9999)
SET(KEEPAV(120000))
```

TSO SPOC 出力:

Port	MbrName	CC
9999	HWS1	0

OM API 入力:

```
CMD(UPD IMSCON TYPE(PORT) NAME(9999)
SET(KEEPAV(120000)))
```

OM API 出力:

```
<?xml version="1.0"?>
<!DOCTYPE imsout SYSTEM "imsout.dtd">
<imsout>
<ctl>
<omname>OMIOM </omname>
<omvsn>1.7.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2014.232 16:09:50.846238</statime>
<stotime>2014.232 16:09:50.846556</stotime>
<staseq>CDA221E31B91EFD4</staseq>
<stoseq>CDA221E31BA5CD54</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10090950</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>UPDATE IMSCON TYPE(PORT) NAME(9999) SET(KEEPAV(120000)) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="PORT" l1b1="Port" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="4"
dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>PORT(9999 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>
```

説明: ポート 9999 のキープアライブ間隔 (KEEPAV) 属性は 120,000 秒に設定されています。

UPDATE IMSCON TYPE(PORT) コマンドの例 4

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE IMSCON TYPE(PORT) NAME(9999,7777)
SET(KEEPAV(120000),EDITRTN(HWSEDT0),PORTTMOT(6000))
```

TSO SPOC 出力:

Port	MbrName	CC CCText	ErrorText
7777D	HWS1	3 Command complete for some	
7777D	HWS1	17 Attribute is invalid for rsc	EDITRTN
9999	HWS1	3 Command complete for some	
9999	HWS1	14 Resource is not stopped	EDITRTN
9999	HWS1	17 Attribute is invalid for rsc	PORTTMOT

OM API 入力:

```
CMD(UPDATE IMSCON TYPE(PORT) NAME(9999,7777)
SET(KEEPAV(120000),EDITRTN(HWSEDT0),PORTTMOT(6000)))
```

OM API 出力:

```
<?xml version="1.0"?>
<!DOCTYPE imsout SYSTEM "imsout.dtd">
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.7.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2014.232 16:26:34.861722</statime>
<stotime>2014.232 16:26:34.862037</stotime>
<staseq>CDA225A09C89AE52</staseq>
<stoseq>CDA225A09C9D50D2</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10092634</rqsttkn1>
<rc>0200000C</rc>
<rsn>00003008</rsn>
<rsnmsg>CSLN054I</rsnmsg>
<rsntxt>None of the clients were successful.</rsntxt>
</ctl>
<cmderr>
<mbr name="HWS1 ">
<typ>IMSCON </typ>
<rc>0C00000C</rc>
<rsn>00003004</rsn>
<rsntxt>No requests were successful </rsntxt>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>UPDATE IMSCON TYPE(PORT) NAME(9999,7777)
SET(KEEPAV(120000),EDITRTN(HWSEDT0),PORTTMOT(6000)) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="PORT" l1b1="Port" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes" len="4"
dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="ERRT" l1b1="ErrorText" scope="LCL" sort="a" key="3" scroll="no"
len="16" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>PORT(9999 ) MBR(HWS1 ) CC( 14) CCTXT(Resource is not
stopped) ERRT(EDITRTN ) </rsp>
```

```

<rsp>PORT(9999 ) MBR(HWS1 ) CC( 17) CCTXT(Attribute is invalid
for rsc) ERRT(PORTTMOT ) </rsp>
<rsp>PORT(9999 ) MBR(HWS1 ) CC( 3) CCTXT(Command complete for
some) </rsp>
<rsp>PORT(7777D ) MBR(HWS1 ) CC( 17) CCTXT(Attribute is invalid
for rsc) ERRT(EDITRTN ) </rsp>
<rsp>PORT(7777D ) MBR(HWS1 ) CC( 3) CCTXT(Command complete for
some) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

このコマンドは、通常ポート 9999、および DRDA ポート 7777 に対して KEEPAV、EDITRTN、および PORTTMOT の各属性を設定しようとしています。

DRDA ポート 7777 に対しては、一部の更新は正常に実行されました。正常に実行されなかった属性更新ごとに、別個の完了コードが表示されます。ポート・メッセージ編集出口ルーチン (EDITRTN) 属性は DRDA ポートに対しては無効なので、設定されません。キープアライブ間隔 (KEEPAV) 属性と DRDA ポート・タイムアウト (PORTTMOT) 属性は、関連する完了コードが返されていないので、正常に設定されています。

DRDA ポート 7777 に関しては、ポート・メッセージ編集出口ルーチン (EDITRTN) 属性は DRDA ポートに対しては無効なので、これらの属性はポート 7777 に対しては設定されません。

UPDATE IMSCON TYPE(PORT) コマンドの例 5

次の例では、ポート 9999 上の接続のアイドル・タイムアウト値が、3000、つまり 30 秒に更新されます。

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE IMSCON TYPE(PORT) NAME(9999) SET(IDLETO(3000))
```

TSO SPOC 出力:

Port	MbrName	CC
9999	HWS1	0

OM API 入力:

```
CMD(UPDATE IMSCON TYPE(PORT) NAME(9999) SET(IDLETO(3000)))
```

OM API 出力:

```

<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT002 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>UPDATE IMSCON TYPE(PORT) NAME(9999) SET(IDLETO(3000)) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="PORT" l1b1="Port" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="ERRT" l1b1="ErrorText" scope="LCL" sort="a" key="3"

```

```

scroll="no" len="16" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>PORT(9999 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) </rsp>
</cmdrspdata>

```

関連資料:

-  OPENPORT コマンド (コマンド)
-  STARTPT コマンド (コマンド)
-  STOPPORT コマンド (コマンド)
-  IMS Connect UPDATE PORT コマンド (コマンド)

UPDATE IMSCON TYPE(RACFUID) コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(RACFUID) コマンドは、ユーザー ID キャッシュ内の 1 つ以上の RACF ユーザー ID をリフレッシュするために使用します。

サブセクション:

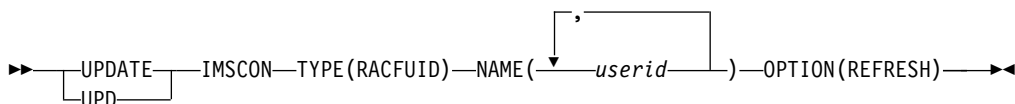
- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 1259 ページの『使用上の注意』
- 1259 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』
- 1259 ページの『出力フィールド』
- 1260 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1261 ページの『例』

環境

UPDATE IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文



キーワード

以下のキーワードは、UPDATE IMSCON TYPE(RACFUID) コマンドに有効です。

NAME

リフレッシュするユーザー ID キャッシュ内の 1 つ以上の RACF ユーザー ID を指定します。単一の RACF ユーザー ID、またはコマンドで区切った RACF ユーザー ID のリストを指定できます。名前にはワイルドカードは使用できません。

OPTION(REFRESH)

指定された RACF ユーザー ID をリフレッシュします。

使用上の注意

UPDATE IMSCON TYPE(RACFUID) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

このコマンドを使用して IMS Connect リソースに加えられた変更は、IMS Connect が再始動されると失われます。

同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、UPDATE IMSCON TYPE(RACFUID) コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect WTOR (Write to Operator with Reply) コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

注:

- IMS Connect WTOR コマンドは、未解決の IMS Connect 応答メッセージに対する応答です。
- IMS Connect z/OS コマンドは、z/OS (MVS) インターフェースを介して、IMS Connect *jobname* を使用して発行されます。

表 451. UPDATE IMSCON TYPE(RACFUID) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(RACFUID) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(RACFUID) NAME(<i>userid</i>) OPTION(REFRESH)	REFRESH RACFUID NAME(<i>userid</i>)	UPDATE RACFUID NAME(<i>userid</i>) OPTION(REFRESH)

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。 N/A (適用

外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されません。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 452. UPDATE IMSCON TYPE(RACFUID) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。1261 ページの表 454 を参照してください。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
UID	UserID	N/A	RACF ユーザー ID の名前。名前は常に戻されます。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。

戻りコード、理由コード、および完了コード

UPDATE IMSCON TYPE(RACFUID) コマンドの結果として返される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 453. UPDATE IMSCON TYPE(RACFUID) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE IMSCON TYPE(RACFUID) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C000014'	X'00005008'	コマンド・プロセッサは、BPEGETM を介したストレージの取得に失敗しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 454. UPDATE IMSCON TYPE(RACFUID) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、UPDATE IMSCON TYPE(RACFUID) コマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。

例

UPDATE IMSCON TYPE(RACFUID) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE IMSCON TYPE(RACFUID) NAME(USRT001) OPTION(REFRESH)
```

TSO SPOC 出力:

```
UserID MbrName CC
USRT001 HWS1 0
```

OM API 入力:

```
CMD ( UPDATE IMSCON TYPE(RACFUID) NAME(USRT001) OPTION(REFRESH) )
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2010.298 16:40:40.833976</statime>
<stotime>2010.298 16:40:40.835055</stotime>
<staseq>C6C83EFD62BB82A8</staseq>
<stoseq>C6C83EFD62FEFD28</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10094040</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>UPD IMSCON TYPE(RACFUID) NAME(USRT001) OPTION(REFRESH) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="UID" l1b1="UserID" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
```

```

</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>UID(USRT001 ) MBR(HWS1          ) CC(  0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: RACF ユーザー ID の USRT001 が正常にリフレッシュされました。

関連資料:

-  REFRESH RACFUID コマンド (コマンド)
-  IMS Connect UPDATE RACFUID コマンド (コマンド)

UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドは、IMS Connect インスタンスとリモート CICS サブシステム間の通信を停止または再開するために使用します。

推奨事項: UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドを発行する前に、接続上にアクティブな ISC セッション (ISCUSER) がないことを確認してください。アクティブ・セッションがある場合は、IMS から /QUIESCE または /CLSDST コマンドを使用してシャットダウンする必要があります。セッションを IMS で終了しても IMS Connect 内でアクティブと表示される場合は、UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドを使用してそれらをクリーンアップします。

サブセクション:

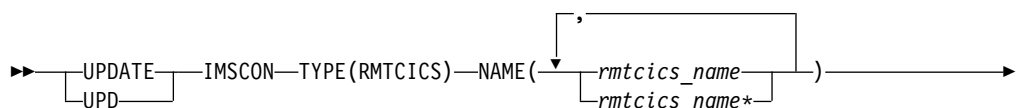
- 『環境』
- 『構文』
- 1263 ページの『キーワード』
- 1263 ページの『使用上の注意』
- 1264 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』
- 1265 ページの『出力フィールド』
- 1265 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1267 ページの『UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドの例』

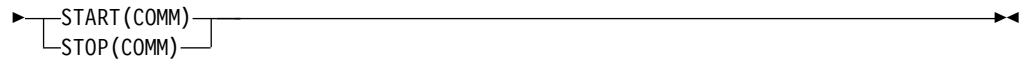
環境

UPDATE IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文





キーワード

以下のキーワードは、UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドに有効です。

NAME

更新する 1 つ以上のリモート CICS 接続名を指定します。単一のリモート CICS 接続名、またはコンマで区切ったリモート CICS 接続名のリストを指定できます。名前にワイルドカード文字を使用することができます。

START(COMM) | STOP(COMM)

リモート CICS 接続の通信を開始または停止するために使用する相互に排他的なキーワード。

START(COMM)

指定されたリモート Starts the named remote CICS 接続を IMS Connect で開始します。このコマンドを発行すると、IMS Connect とリモート CICS の間の TCP/IP 接続が有効になります。ただし、ISC リンクも UPDATE IMSCON TYPE(ISC) STOP(COMM) コマンドで停止されていた場合は、ISC の通信を完全に有効にするには、UPDATE IMSCON TYPE(ISC) START(COMM) コマンドも発行する必要があります。

STOP(COMM)

リモート CICS 接続上の通信を停止します。

UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) STOP(COMM) コマンドが発行されると、IMS Connect は、以下の操作を実行します。

- コマンドで指定された接続上のリモート CICS インスタンスとのすべての通信を停止します。
- リモート CICS インスタンスへの接続が停止されたことを IMS に通知し、IMS が影響を受けたすべての ISC 並列セッションをシャットダウンできるようにします。
- 既存のソケット接続を終了し、UPDATE RMTCICS START(COMM) が発行されるまで、新規のソケット接続を防止します。
- 接続の状況を STOPPED に変更します。
- メッセージ HWSV4405I を発行します。

IMS Connect が STOPPED 状態の接続があることを示すメッセージを受け取ると、IMS Connect は NAK 応答を IMS に返し、メッセージ HWSG4040W を発行します。IMS は、キューの先頭にメッセージを保持します。

使用上の注意

UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

このコマンドを使用して IMS Connect リソースに加えられた変更は、IMS Connect が再始動されると失われます。

UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) START(COMM) コマンドが発行されると、IMS Connect は、リモート CICS インスタンスへの指定された接続上で通信を再開します。IMS Connect は、CICS のリモート・インスタンスとの通信用に新規ソケットがオープンされるまで、接続の状況を NOT ACTIVE に変更します。

UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) START(COMM) コマンドは、リモート CICS インスタンスとの接続上の通信が以前に UPDATE RMTCICS STOP(COMM) コマンドによって停止されている場合にのみ必要です。

ISC 通信の場合、UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) START(COMM) コマンドは IMS Connect 内の TCP/IP 通信のみを再開し、ISC リンクの停止状況を変更しません。ISC リンクが UPDATE IMSCON TYPE(ISC) STOP(COMM) コマンドによって停止されている場合は、UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) START(COMM) コマンドを発行した後に、UPDATE IMSCON TYPE(ISC) START(COMM) コマンドも発行して IMS Connect で ISC リンクを再開する必要があります。

推奨事項: ISC 通信を再開する場合、TCP/IP 通信が再開する前に IMS が ISC メッセージを IMS Connect に送信することを防ぐために、必ず UPDATE IMSCON TYPE(ISC) START(COMM) コマンドを発行する前に UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) START(COMM) コマンドを発行してください。

ローカル IMS Connect インスタンスに定義されているリモート CICS インスタンスへの現行接続に関する情報を表示するには、QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドを使用します。

同等の **WTOR** コマンドおよび **z/OS** コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドには、同等の WTOR コマンドおよび z/OS MODIFY コマンドはありません。

注:

- IMS Connect WTOR コマンドは、未解決の IMS Connect 応答メッセージに対する応答です。
- IMS Connect z/OS コマンドは、z/OS (MVS) インターフェースを介して、IMS Connect *jobname* を使用して発行されます。

表 455. UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) NAME(*) START(COMM)	ありません。	ありません。

表 455. UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド (続き)

UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) NAME(<i>rmtcics_name</i>) STOP(COMM)	ありません。	ありません。

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 456. UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。1266 ページの表 458を参照してください。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されません。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。
RCICS	RmtCICS	N/A	操作するリモート CICS 接続の ID。ID は常に戻されます。

戻りコード、理由コード、および完了コード

UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドの結果として返される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 457. UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C000008'	X'00002004'	無効なキーワードまたはキーワード・パラメーターが指定されました。
X'0C000008'	X'00002014'	NAME() パラメーターに無効な文字が指定されました。
X'0C000008'	X'00002018'	NAME キーワードは指定されませんでした、UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドには必須のキーワードです。
X'0C000008'	X'00002020'	STOP キーワードおよび START キーワードのどちらも指定されませんでした。これらのいずれかを指定する必要があります。
X'0C000008'	X'00002044'	コマンドで STOP キーワードと START キーワードの両方が指定されました。これらのいずれか一方のみを指定することができます。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C000014'	X'00005000'	コマンド・プロセッサは、BPECBGET を介したストレージの取得に失敗しました。
X'0C000014'	X'00005050'	コマンド・プロセッサは、RMTCICS 接続を停止できませんでした。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 458. UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドは正常に完了しました。
A	TRWB creation failed	コマンドは RMTCICS 接続用の TWU ブロックの作成を試行しましたが、失敗しました。コマンド出力に含まれているメッセージ HWSV4415W を参照してください。
C	Create scheduler thread failed	コマンドは RMTCICS スケジューラー用の BPE スレッドの作成を試行しましたが、失敗しました。コマンド出力に含まれているメッセージ HWSV4415W を参照してください。

表 458. UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
10	No Resources Found	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されているか、あるいはリソースが現在アクティブでない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。
11	Resource is stopped	コマンドは、RMTCICS 接続が既に停止されていたため、これを停止できませんでした。
12	Resource is not stopped	コマンドは、RMTCICS 接続が停止されていなかったため、これを開始することができませんでした。
1A	BPEGETM error	コマンドは、RMTCICS 接続に必要なストレージの取得を試行しましたが、BPEGETM の試行に失敗しました。コマンド出力に含まれているメッセージ HWSV4630W を参照してください。
1E	BPEATTCH failed	コマンドは RMTCICS 接続用の TCB の接続を試行しましたが、BPEATTCH の試行に失敗しました。コマンド出力に含まれているメッセージ HWSV4415W を参照してください。
1F	BPX1GAI get ipaddr failed	コマンドは CICS システムの IP アドレスの取得を試行しましたが、TCP/IP に対する BPX1GAI 呼び出しは失敗しました。コマンド出力に含まれているメッセージ HWSV4600E を参照してください。
23	BPX1GAI invalid IPV4/6 struct	コマンドは CICS システムの IP アドレスの取得を試行しましたが、TCP/IP に対する BPX1GAI 呼び出しは IPv4 でも IPv6 でもない無効な IP アドレス構造を返しました、コマンド出力に含まれているメッセージ HWSV4600E を参照してください。
24	BPX1FAI free structure failed	コマンドは BPX1GAI 呼び出しで TCP/IP によって返されたストレージを返そうと試みましたが、ストレージを解放するための BPX1FAI 呼び出しは失敗しました。コマンド出力に含まれているメッセージ HWSV4600E を参照してください。

UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドの例

以下の例では、UPDATE IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンドを使用してリモート CICS 接続 CONNECT2 を開始しています。

TSO SPOC 入力:

```
UPD IMSCON TYPE(RMTCICS) NAME(CICS4) START(COMM)
```

TSO SPOC 出力:

```
RmtCICS MbrName      CC
CICS4   HWS1         0
```

OM API 入力:

```
CMD ( UPD IMSCON TYPE(RMTCICS) NAME(CICS4) START(COMM) )
```

OM API 出力:


```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.6.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2012.230 23:13:59.998357</statime>
<stotime>2012.230 23:14:00.007729</stotime>
<staseq>CA08E99671795E1A</staseq>
<stoseq>CA08E99673C31A9A</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10161359</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>UPD IMSCON TYPE(RMTCICS) NAME(CICS4) START(COMM) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="RCICS" l1b1="RmtCICS" scope="LCL" sort="a" key="2"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>RCICS(CICS4 ) MBR(HWS1 ) CC( 0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>
```

関連資料:

264 ページの『QUERY IMSCON TYPE(RMTCICS) コマンド』

206 ページの『QUERY IMSCON TYPE(ISCUSER) コマンド』

1217 ページの『UPDATE IMSCON TYPE(ISC) コマンド』

 [RMTCICS ステートメント \(システム定義\)](#)

UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンドは、リモート IMS Connect 接続が停止された後で通信を使用可能にしたり、リモート IMS Connect 接続の通信を停止したりするために使用します。

サブセクション:

- 1269 ページの『環境』
- 1269 ページの『構文』
- 1269 ページの『キーワード』
- 1270 ページの『使用上の注意』
- 1271 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』

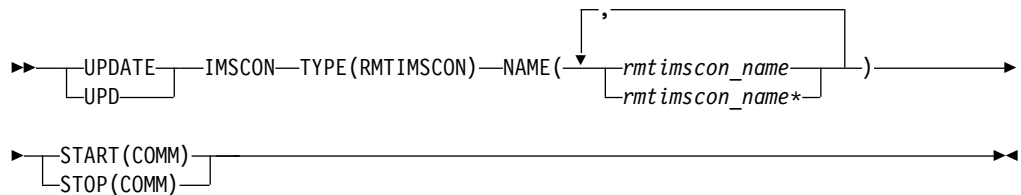
- 1271 ページの『出力フィールド』
- 1272 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1275 ページの『例』

環境

UPDATE IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文



キーワード

以下のキーワードは、UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンドに有効です。

NAME

更新する 1 つ以上のリモート IMS Connect 接続名を指定します。単一のリモート IMS Connect 接続名、またはコンマで区切ったリモート IMS Connect 接続名のリストを指定できます。名前にはワイルドカードを使用することができます。

START(COMM) | STOP(COMM)

リモート IMS Connect 接続の通信を開始または停止するために使用する相互に排他的なキーワード。

START(COMM)

リモート IMS Connect 接続の通信を開始します。このコマンドの発行後、OTMA とリモート IMS Connect の通信が使用可能になります。MSC 用の通信を使用可能にするには、MSC 通信が UPDATE IMSCON TYPE(MSC) STOP(COMM) コマンドで使用不可にされていた場合にリモート IMS Connect への MSC 物理リンクを確立するために、さらに UPDATE IMSCON TYPE(MSC) START(COMM) を発行することが必要な場合があります。

STOP(COMM)

リモート IMS Connect 接続の通信を停止します。

UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) STOP(COMM) コマンドが発行されると、IMS Connect は、以下の操作を実行します。

- コマンドで指定された接続上のリモート IMS Connect インスタンスとのすべての通信を停止します。
- リモート IMS Connect インスタンスへの接続が停止されたことを IMS に通知し、IMS が影響を受けたすべての MSC 論理リンクをシャットダウンできるようにします。
- 既存のソケット接続を終了し、UPDATE RMTIMSCON START(COMM) コマンドまたは同等のコマンドが発行されるまで、新規のソケット接続を防止します。
- 接続の状況を STOPPED に変更します。
- メッセージ HWST3505I を発行します。

UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) STOP(COMM) コマンドが発行された後、IMS Connect が STOPPED 状態の接続についてメッセージを受け取った場合、IMS Connect は NAK 応答を OTMA に返し、メッセージ HWST3575W を発行します。OTMA は、キューの先頭にメッセージを保持します。

使用上の注意

UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) START(COMM) コマンドが発行されると、IMS Connect は、リモート IMS Connect インスタンスへの指定された接続上で通信を再開します。IMS Connect は、IMS Connect のリモート・インスタンスとの通信用に新規ソケットがオープンされるまで、接続の状況を NOT ACTIVE に変更します。

UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) START(COMM) コマンドが必要になるのは、リモート IMS Connect インスタンスとの接続上の通信が STOPRMT コマンドまたは UPDATE RMTIMSCON STOP(COMM) コマンドによって以前に停止されている場合に限られます。

指定された RMTIMSCON 接続が AUTOCONN=Y で定義されている場合、UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) START(COMM) コマンドが発行されると、IMS Connect はリモート IMS Connect へのソケット接続を自動的に作成します。IMS Connect がオープンするソケット接続の数は、RESVSOC パラメーターで決定されます。

OTMA 通信は、IMS Connect が UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) START(COMM) コマンドを実行するとすぐに再開できます。

MSC 通信の場合、UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) START(COMM) コマンドは IMS Connect 内の TCP/IP 通信のみを再開し、MSC リンクの停止状況を変更しません。MSC リンクが UPDATE IMSCON TYPE(MSC) STOP(COMM) コ

マンド、WTOR コマンド STOPMSC、または IMS Connect z/OS コマンド UPDATE MSC STOP(COMM) によって停止されている場合、UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) START(COMM) コマンドを発行した後、さらに IMS Connect で UPDATE IMSCON TYPE(MSC) START(COMM) コマンド、STARTMSC コマンド、または UPDATE MSC START(COMM) コマンドを発行して、MSC リンクを再開する必要があります。

推奨事項: MSC 通信を再開する際には、TCP/IP 通信が再開される前に IMS が MSC メッセージを IMS Connect に送信するのを防止するために、必ず UPDATE IMSCON TYPE(MSC) START(COMM) コマンドまたは同等のコマンドを発行する前に UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) START(COMM) コマンドを発行してください。

ローカル IMS Connect インスタンスに対して定義されているリモート IMS Connect インスタンスへの現行の接続に関する情報を表示するには、QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンド、VIEWRMT コマンド、または QUERY RMTIMSCON コマンドを使用します。

同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect WTOR (Write to Operator with Reply) コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

注:

- IMS Connect WTOR コマンドは、未解決の IMS Connect 応答メッセージに対する応答です。
- IMS Connect z/OS コマンドは、z/OS (MVS) インターフェースを介して、IMS Connect *jobname* を使用して発行されます。

表 459. UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) NAME(<i>rmtimscon_name</i>) START(COMM)	STARTRMT <i>rmtimsconName</i>	UPDATE RMTIMSCON NAME(<i>rmtimsconName</i>) START(COMM)
UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) NAME(<i>rmtimscon_name</i>) STOP(COMM)	STOPRMT <i>rmtimsconName</i>	UPDATE RMTIMSCON NAME(<i>rmtimsconName</i>) STOP(COMM)

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 460. UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。1273 ページの表 462を参照してください。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されません。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMS Connect の ID。ID は常に戻されます。
RIC	RmtImmsCon	N/A	操作するリモート IMS Connect 接続の ID。ID は常に戻されます。

戻りコード、理由コード、および完了コード

UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンドの結果として返される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 461. UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'0C000014'	X'00005008'	コマンド・プロセッサは、BPEGETM を介したストレージの取得に失敗しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 462. UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンドは正常に完了しました。
A	TRWB creation failed	<p>コマンドは、リモート IMS Connect 接続の通信を確立するために、スケジューラー・コントローラー・スレッド、送信スレッド、または受信スレッド用の TWU 制御ブロックの作成を試行しましたが、BPECBGET 要求は失敗しました。</p> <p>コマンド出力にはメッセージ HWST3515W も含まれる可能性があります。</p>
C	Create scheduler thread failed	<p>START(COMM) 処理中に、IMS Connect がリモート IMS Connect 接続の通信を確立するためにスケジューラー・コントローラー・スレッドの作成を試行しましたが、BPETHDCR 要求は失敗しました。</p> <p>詳しくは、コマンド応答メッセージに含まれる HWST3515W メッセージを参照してください。</p>
10	リソースが見つかりません	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されたか、リソースが現在アクティブではない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。
11	Resource is stopped	STOP(COMM) 処理中に、リモート IMS Connect 接続の通信が既に停止していたために、IMS Connect はリモート IMS Connect 接続の通信を停止できませんでした。
12	Resource is not stopped	START(COMM) 処理中に、リモート IMS Connect 接続の通信が停止していなかったために、IMS Connect はリモート IMS Connect 接続の通信を開始できませんでした。

表 462. UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
3D	Start process was interrupted	<p>START(COMM) 処理が別のコマンドによって中断されたか、IMS Connect がシャットダウンしているためです。</p> <p>コマンド出力には、さらに以下のメッセージが 1 つ以上含まれている場合もあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • HWST3510E • HWST3530W • HWST3540E • HWST3560W • HWST3700E • HWST3730W
42	Started, connection(s) failed	<p>リモート IMS Connect 接続の通信が開始されましたが、要求されたソケット接続の少なくとも 1 つを開始する際に問題が生じました。これらの接続は、IMS PROCLIB データ・セットの HWSCFGxx メンバー内で、RMTIMSCON ステートメントの RESVSOC パラメーターに指定されています。IMS Connect は、失敗したソケット接続の確立を再試行していません。</p>
43	Started, retrying connection(s)	<p>リモート IMS Connect 接続の通信が開始されましたが、要求されたソケット接続の少なくとも 1 つを開始する際に問題が生じました。これらの接続は、IMS PROCLIB データ・セットの HWSCFGxx メンバー内で、RMTIMSCON ステートメントの RESVSOC パラメーターに指定されています。IMS Connect は、失敗したソケット接続の確立を再試行しています。</p> <p>コマンド出力には、さらに以下のメッセージが 1 つ以上含まれている場合もあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • HWST3530W • HWST3540E • HWST3560W • HWST3700E • HWST3730W

表 462. UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
44	Started, retry failed	<p>リモート IMS Connect 接続の通信が開始されましたが、要求されたソケット接続の少なくとも 1 つを開始する際に問題が生じました。これらの接続は、IMS PROCLIB データ・セットの HWSCFGxx メンバー内で、RMTIMSCON ステートメントの RESVSOC パラメーターに指定されています。また、失敗したソケット接続を再確立するためにスレッドを開始する試行にも失敗しました。</p> <p>コマンド出力には、さらに以下のメッセージが 1 つ以上含まれている場合もあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • HWST3530W • HWST3540E • HWST3560W • HWST3700E • HWST3730W
49	Unable to start RMTIMSCON	<p>IMS Connect は、リモート IMS Connect 接続の通信を開始できませんでした。</p> <p>コマンド出力には、さらに以下のメッセージが 1 つ以上含まれている場合もあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • HWST3505I • HWST3510E • HWST3700E • HWST3730W
4A	Started, unable to notify OTMA	<p>リモート IMS Connect 接続の通信が開始されましたが、IMS Connect がリモート IMS Connect 接続の通信を開始したことを OTMA に通知しようとしたときにエラーが発生しました。</p> <p>コマンド出力には、さらに以下のメッセージが 1 つ以上含まれている場合もあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • HWST3530W • HWST3540E • HWST3560W • HWST3700E • HWST3730W

例

UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) NAME(CONNECT2) START(COMM)
```

TSO SPOC 出力:

```
RmtImScn   MbrName   CC
CONNECT2   HWS1         0
```

OM API 入力:




```
CMD(UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) NAME(CONNECT2) START(COMM))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2010.298 02:55:46.185267</statime>
<stotime>2010.298 02:55:46.189428</stotime>
<staseq>C6C7869B9C4335C2</staseq>
<stoseq>C6C7869B9D474302</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10195546</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>UPD IMSCON TYPE(RMTIMSCON) NAME(CONNECT2) START(COMM) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="RIC" l1b1="RmtImScn" scope="LCL" sort="a" key="2"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>RIC(CONNECT2) MBR(HWS1 ) CC( 0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>
```

説明: CONNECT2 のリモート IMS Connect 接続が開始されています。

関連資料:

-  STARTRMT コマンド (コマンド)
-  STOPRMT コマンド (コマンド)
-  IMS Connect UPDATE RMTIMSCON コマンド (コマンド)

UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドは、リモート IMS Connect インスタンスまたはリモート CICS サブシステムとの指定された接続上にある送信ソケット・クライアントを終了するために使用します。

サブセクション:

- 1277 ページの『環境』

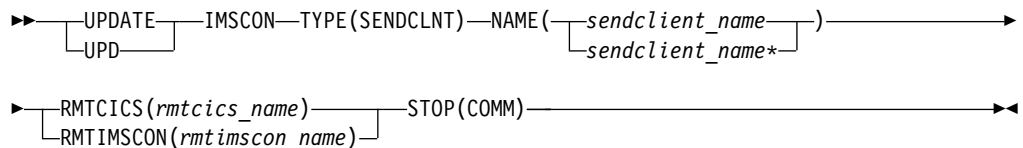
- 『構文』
- 『キーワード』
- 『使用上の注意』
- 1278 ページの『同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド』
- 1279 ページの『出力フィールド』
- 1280 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1281 ページの『例』

環境

UPDATE IMSCON コマンドは、IMS Connect に対してのみ適用可能です。このコマンドを実行するには、以下の条件が満たされなければなりません。

- IMS Connect は Common Service Layer (CSL) Structured Call Interface (SCI) によって通信できるように構成され、アクティブである必要があります。
- Structured Call Interface (SCI) および Operations Manager (OM) によるタイプ 2 のコマンド環境が、アクティブである必要があります。

構文



キーワード

以下のキーワードは、UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドに有効です。

NAME

終了する送信ソケットのクライアント ID を指定します。単一の送信クライアント名またはワイルドカード名を指定できます。

RMTICICS

送信クライアントがあるリモート CICS 接続を指定します。RMTICICS キーワードまたは RMTIMSCON キーワードのいずれかを指定する必要があります。

RMTIMSCON

送信クライアントがあるリモート IMS Connect 接続を指定します。RMTICICS キーワードまたは RMTIMSCON キーワードのいずれかを指定する必要があります。

STOP (COMM)

指定されたりモート IMS Connect 接続の送信ソケット・クライアントを終了します。

使用上の注意

UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

コマンドが実行される IMSplex が ACTIVE な状態の場合のみ、IMS Connect は IMS Connect のタイプ 2 のコマンドを処理することができます。

このコマンドを使用して IMS Connect リソースに加えられた変更は、IMS Connect が再始動されると失われます。

UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドは、別の IMS Connect インスタンスまたはリモート CICS サブシステムとの接続上にある送信ソケットを終了するために使用します。

終了する必要がある送信ソケットの ID を識別するには、QUERY IMSCON TYPE(SENDCLNT) タイプ 2 コマンドを使用します。

接続が別の IMS Connect インスタンスとの接続である場合、オプションで次の IMS Connect コマンドを使用して、送信クライアント・ソケットを識別することができます。

- WTOR コマンド・フォーマットで、VIEWRMT
- z/OS MODIFY コマンド・フォーマットで、QUERY RMTIMSCON

ソケット接続が MSC リンク用に使用されている場合は、ソケットを終了するために UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドを使用しないでください。UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドを発行すると、MSC リンクが切断されます。代わりに、IMS から IMS コマンドの /PSTOP LINK を発行することで MSC リンクを停止します。このコマンドは、IMS Connect 内の関連する送受信ソケットを自動的に終了します。

MSC メッセージ用に使用される送信ソケットを終了する代替方式は、IMS Connect WTOR コマンド STOPLINK または IMS Connect z/OS 変更コマンド DELETE LINK を使用する方法です。これらのコマンドは、MSC リンクで使用される送信ソケットおよび受信ソケットを終了します。これと同等の IMS タイプ 2 コマンドは、UPDATE IMSCON TYPE(LINK) です。

UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドが発行されたときに、ソケット接続が OTMA メッセージに使用されており、送信ソケット接続が RECV 状態である場合、IMS Connect は、OTMA に対して NAK を発行した後、送信ソケット接続を終了します。OTMA は、メッセージを送達不能キュー HWS\$DLQ に転送します。

ISC リンクに使用されているソケット接続を終了するために UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドを使用しないでください。UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドは、ISC リンクを切断します。代わりに、IMS から IMS コマンドの /QUIESCE NODE USER を発行することで ISC リンクを停止します。このコマンドは、IMS Connect 内の関連する送受信ソケットを自動的に終了します。

同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect WTOR (Write to Operator with Reply) コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

注:

- IMS Connect WTOR コマンドは、未解決の IMS Connect 応答メッセージに対する応答です。
- IMS Connect z/OS コマンドは、z/OS (MVS) インターフェースを介して、IMS Connect *jobname* を使用して発行されます。

表 463. UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) NAME(<i>sendclient_name</i>) RMTIMSCON(<i>rmtimscon_name</i>) STOP(COMM)	STOPSCLN <i>rmtimscon sendclient</i>	DELETE RMTIMSCON NAME(<i>rmtimsconname</i>) SENDCLNT(<i>clientid</i>)
UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) NAME(<i>sendclient_name</i>) RMTICICS(<i>rmtcics_name</i>) STOP(COMM)	STOPSCLN <i>rmtcics sendclient</i>	同等の z/OS コマンドはありません

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

TSO SPOC 画面上に表示される列見出しを含みます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されます。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドには、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 464. UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	IMS Connect が指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示す、完了コード。完了コードは常に戻されます。1281 ページの表 466を参照してください。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。CCTXT フィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
RIC	RmtImsCon	RMTIMSCON	操作するリモート IMS Connect 接続の ID。
RCICS	RmtCICS	RMTCICS	操作するリモート CICS 接続の ID。
SCL	SendClnt	N/A	終了する送信ソケットのクライアント ID。SCL フィールドは常に戻されます。

戻りコード、理由コード、および完了コード

UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドの結果として返される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 465. UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドは正常に完了しました。コマンド出力には、リソースごとに 1 行が表示され、各行にはリソースの完了コードが表示されます。
X'0C000008'	X'00002004'	無効なキーワードまたはキーワード・パラメーターが指定されました。
X'0C000008'	X'00002010'	RMTIMSCON キーワードまたは RMTICICS キーワードで総称名が指定されました。固有名のみを指定することができます。
X'0C000008'	X'00002014'	NAME() パラメーターに無効な文字が指定されました。
X'0C000008'	X'00002018'	NAME キーワードは指定されませんでしたが、UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドには必須のキーワードです。
X'0C000008'	X'0000201C'	RMTIMSCON キーワードおよび RMTICICS キーワードのどちらも指定されませんでした。これらのキーワードのいずれかを指定する必要があります。
X'0C000008'	X'00002020'	STOP キーワードは必ず指定します。
X'0C000008'	X'0000202C'	RMTIMSCON キーワードおよび RMTICICS キーワードの両方が指定されました。これらのキーワードは、いずれか 1 つのみを指定することができます。
X'0C000008'	X'00002133'	RMTIMSCON キーワードまたは RMTICICS キーワードで複数の名前が指定されました。1 つの名前のみを指定することができます。
X'0C00000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力には、リソースごとに 1 行が表示され、各行にはリソースの完了コードが表示されます。
X'0C00000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力には、リソースごとに 1 行が表示され、各行にはリソースの完了コードが表示されます。
X'0C000014'	X'00005000'	コマンド・プロセッサは、BPECBGET を介したストレージの取得に失敗しました。

表 465. UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'0C000014'	X'00005050'	内部処理エラーのため、コマンド・プロセッサが失敗しました。詳しくは、コマンドで返されたエラー・メッセージまたはシステム・コンソールに表示されたエラー・メッセージを参照してください。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 466. UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	リソース名が、要求を処理しているクライアントに認識されません。リソース名が誤って入力されたか、リソースが現在アクティブではない可能性があります。ワイルドカードがコマンド内で指定されていた場合、該当する名前がありませんでした。正しいスペルのリソース名がコマンド上に指定されていることを確認してください。

例

UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) RMTIMSCON(rmtimscon) コマンドの例

以下の例では、送信クライアント・ソケット OTM12345 が停止されます。停止される送信ソケットは、リモート IMS Connect 接続 CONNECT2 上にあります。

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) NAME(OTM12345) RMTIMSCON(CONNECT2) STOP(COMM)
```

TSO SPOC 出力:

```
SendClient RmtImsCon MbrName CC
OTM12345 CONNECT2 HWS1 0
```

OM API 入力:

```
CMD(UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) NAME(OTM12345) RMTIMSCON(CONNECT2) STOP(COMM))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2010.298 03:01:07.108399</statime>
<stotime>2010.298 03:01:07.112686</stotime>
<staseq>C6C787CDAAA2F767</staseq>
<stoseq>C6C787CDABAE8C7</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10200107</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
```

```

<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) NAME(OTM12345) RMTIMSCON(CONNECT2)
STOP(COMM) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="SCL" l1b1="SendClnt" scope="LCL" sort="n" key="1"
scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="RIC" l1b1="RmtImsCon" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>SCL(OTM12345) RIC(CONNECT2) MBR(HWS1 ) CC( 0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) RMTICICS(rmtcics) コマンドの例

以下の例では、送信クライアント・ソケット ISC98765 が停止されます。停止される送信ソケットは、リモート CICS 接続 CICSА1 上にあります。

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) NAME(ISC98765) RMTICICS(CICSA1) STOP(COMM)
```

TSO SPOC 出力:

SendClnt	RmtCICS	MbrName	CC
ISC98765	CICSA1	HWS1	0

OM API 入力:

```
CMD(UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) NAME(ISC98765) RMTICICS(CICSA1) STOP(COMM) )
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.6.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2012.339 23:27:56.704048</statime>
<stotime>2012.339 23:27:56.707079</stotime>
<staseq>CA91F7FFA1530C9C</staseq>
<stoseq>CA91F7FFA210779C</stoseq>
<rqsttkn1>USRT001 10152756</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>HWS1 </master>
<userid>USRT001 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>IMSCON </kwd>
<input>UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) NAME(ISC98765) RMTICICS(CICSA1)


```

```

STOP(COMM) </input>
</cmd>
<cmdsphdr>
<hdr s1b1="SCL" l1b1="SendClnt" scope="LCL" sort="n" key="1"
scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="RCICS" l1b1="RmtCICS" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdsphdr>
<cmdspdata>
<rsp>SCL(ISC98765) RCICS(CICSA1 ) MBR(HWS1          ) CC( 0) </rsp>
</cmdspdata>
</imsout>

```

関連資料:

 [STOPSCLN コマンド \(コマンド\)](#)

 [IMS Connect DELETE SENDCLNT コマンド \(コマンド\)](#)

UPDATE LE コマンド

UPDATE LE コマンドは、言語環境プログラム (LE) ランタイム・パラメーターのオーバーライドを定義するために、あるいは LE オーバーライド処理を使用可能/使用不可にするためのシステム・オプションを変更するために使用します。

パラメーターは、トランザクション・コード、LTERM 名、ユーザー ID、または、MPP および JMP 領域用のプログラム名により、フィルターに掛けることができます。また、このパラメーターは IFB 領域、BMP 領域、および JBP 領域のプログラム名によってフィルター操作することができます。メッセージ・ドリブン BMP 領域は、トランザクション・コード上でフィルターに掛けることもできます。どのパラメーターの組み合わせを使用しても、ランタイム・パラメーターが適用されるアプリケーション・インスタンスを限定できます。テーブル内の最初の有効なエントリーが使用されます。新規のエントリーは、テーブル内のフリー・スペースの場所に依じて、既存のエントリーの前か後に追加されます。

サブセクション:

- 『環境』
- 1284 ページの『構文』
- 1284 ページの『キーワード』
- 1285 ページの『使用上の注意』
- 1286 ページの『出力フィールド』
- 1286 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1287 ページの『例』

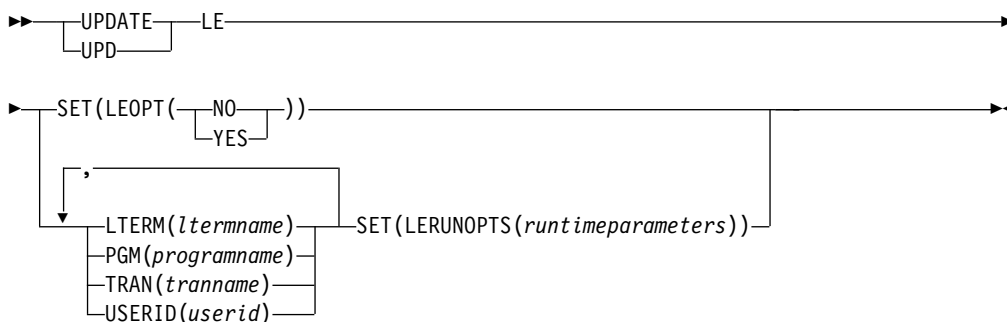
環境

以下の表には、UPDATE LE コマンドおよびキーワードを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 467. UPDATE LE コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
UPDATE LE	X	X	X
LTERM	X	X	X
PGM	X	X	X
SET	X	X	X
TRAN	X	X	X
USERID	X	X	X

構文



キーワード

以下のキーワードは、UPDATE LE コマンドに有効です。

LTERM()

パラメーターが定義される LTERM の名前 (1 から 8 文字) を指定します。

PGM()

パラメーターが定義されるプログラムの名前 (1 から 8 文字) を指定します。

SET() 属性またはパラメーターの更新を指定します。

LEOPT()

IMSplex 内のすべてのアクティブな IMS システムについて、LE ランタイム・パラメーターを動的にオーバーライドできるかどうかを指定します。YES は、IMS システムがオーバーライドを許可して、DL/I INQY 呼び出しによりランタイム・パラメーターを検索できるようにすることを示します。NO は、IMS システムがパラメーターの動的オーバーライドを許可しないことを示します。

このオプションを使用すれば、IMS システムを停止せずに、DFSCGxxx PROCLIB メンバーに指定されている LEOPT=Y|N オプションをオーバーライドすることができます。

ランタイム・オーバーライドが使用不可にされている (つまり、LEOPT=N を指定して IMS が開始されているか、または UPD LE SET(LEOPT(NO)) コマンドが出されている) 場合、UPD LE

SET(LERUNOPTS()) または DEL LE コマンドが出されるたびに、ランタイム・パラメーター・テーブルは更新され続けます。その後、UPD LE SET(LEOPT(YES)) コマンドが指定された場合、時間のオーバーライドが使用不可にされている間に行われた変更はすべて有効になります。

このコマンドは、IMSplex 内でアクティブになっているすべての IMS システムに、自動的に経路指定されます。ユーザーは、単一の IMS に経路指定されるように OM 経路指定をオーバーライドすることはできません。

LERUNOPTS()

LE 動的ランタイム・パラメーターを指定します。指定された TRAN、LTERM、USERID、または PGM について既存のパラメーターのセットが検出された場合は、その既存のパラメーター・ストリングは新規のパラメーター・ストリングで完全に置き換えられます。パラメーターは、既存のストリングには付加されません。ストリングは、指定されたフィルターが既存のエントリーと完全一致する場合に置き換えられるだけです。

既存のエントリーがない場合は、パラメーターを収容するだけ十分に大きな、最初の未使用のエントリーが更新に使用されます。未使用のエントリーとは、DEL LE コマンドによって既に削除されたエントリーです。未使用のエントリーがない、あるいは大きさが不十分な場合、ストレージは新規エントリーに対して割り振られ、そのエントリーはテーブルの一番上に追加されます。

UPDATE LE SET(LERUNOPTS()) コマンドは、LEOPT システム・オプションに関係なく処理されます。これは、IMS は、DL/I INQY 呼び出しを介して検索されることがなくても、ランタイム・パラメーター・テーブル項目を作成し続けることを意味します。

このコマンドは、IMSplex 内でアクティブになっているすべての IMS システムに、自動的に経路指定されます。ユーザーは、単一の IMS のパラメーターをオーバーライドすることはできません。

TRAN()

パラメーターが定義されるトランザクションの名前 (1 から 8 文字) を指定します。

USERID()

どのユーザーに対してパラメーターを定義するか (ユーザー ID の 1 文字から 8 文字の名前) を指定します。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager API を介してのみ指定することができます。このコマンドのコマンド構文は XML で定義されており、OM と通信する自動化プログラムで使用できます。

OM はコマンドの経路指定をオーバーライドし、IMSplex 内のすべての IMS システムへコマンドを経路指定します。ユーザー指定の経路リストは無視されます。

リソース・フィルター (TRAN、LTERM、USERID、または PGM) の少なくとも 1 つは指定しなければなりません。

出力フィールド

以下の表には、UPDATE LE 出力フィールドが記載されています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、ERR が示されています。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 468. UPDATE LE コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	キーワード	意味
CC	N/A	出力行の完了コード。完了コードは常に戻されます。
MBR	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー (IMS ID)。メンバー名は常に戻されます。

戻りコード、理由コード、および完了コード

このコマンドの結果として戻される OM の戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるコマンドすべてに対して標準的です。IMS 戻りコードと理由コードは、UPDATE LE コマンドによって OM に戻されます。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE LE コマンドは正常に完了しました。
X'00000008'	X'00002008'	コマンドでキーワードが指定されませんでした。最低 1 つのキーワードが必要です。SET(LERUNOPTS()) が指定された場合、少なくとも 1 つのリソース名を指定する必要があります。
X'00000008'	X'00002010'	アスタリスク記号またはパーセント記号がフィルター名に指定されました。このコマンドでは、ワイルドカードはサポートされていません。
X'00000008'	X'00002014'	フィルター名に無効文字が指定されました。
X'00000008'	X'00002040'	無効なフィルターがコマンドで指定されました。SET(LEOPT()) が指定された場合は、他のリソース名を指定することはできません。
X'00000010'	X'00004040'	パラメーター・オーバーライド・ヘッダーが初期設定されていません。再始動が完了した後、コマンドを再試行してください。

戻りコード	理由コード	意味
X'00000014'	X'00005000'	IMODULE GETSTOR からのストレージの取得を行うことはできません。
X'00000014'	X'00005010'	ラッチを取得できません。
X'00000014'	X'00005FFF'	内部 IMS エラー - これは発生してはならないエラーです。

以下の表には、UPDATE LE コマンドで戻される可能性のある完了コードが記載されています。

表 469. UPDATE LE コマンドの完了コード

完了コード	意味
0	UPDATE LE コマンドは、指定されたリソースに対して正常に完了しました。

例

以下に示すのは UPDATE LE コマンドの例です。

UPDATE LE コマンドの例 1

以下のフィルターおよびパラメーターは、リストされた順に処理される UPD LE SET(LERUNOPTS()) コマンド上で指定されると仮定します。

1. TRAN(PART) LTERM(TERM2) SET(LERUNOPTS(hhhh))
2. TRAN(PART) LTERM(TERM2) SET(LERUNOPTS(iiii))
3. LTERM(TERM2) USERID(BETTY) SET(LERUNOPTS(gggg))
4. TRAN(PART) LTERM(TERM1) USERID(BOB) SET(LERUNOPTS(ffff))
5. TRAN(PART) LTERM(TERM1) USERID(BARBARA) SET(LERUNOPTS(eeee))
6. PGM(DFSSAM02) SET(LERUNOPTS(dddd))
7. TRAN(PART) LTERM(TERM1) SET(LERUNOPTS(cccc))
8. TRAN(PART) USERID(BETTY) SET(LERUNOPTS(bbbb))
9. TRAN(PART) PGM(DFSSAM02) SET(LERUNOPTS(aaaa))

既存のエントリーが更新されることになる、エントリーのマッチングの規則は以下のとおりです。

- UPDATE LE で定義されるフィルターの数は、エントリー内で定義されるフィルターの数と一致しなければなりません。
- UPDATE LE で定義されるフィルター値は、エントリー内で定義されるフィルター値と完全一致しなければなりません。

以下の表は、コマンド処理の最後の、パラメーター・オーバーライド・テーブル項目の論理表記です。表には、トランザクション名、LTERM、USERID、プログラム、および LERUNOPTS がエントリーごとに記載されています。

表 470. UPDATE LE のパラメーター・オーバーライド・テーブル項目の例 1

項目番号	TRAN	LTERM	USERID	PROGRAM	LERUNOPTS
1	PART			DFSSAM02	aaaa
2	PART		BETTY		bbbb
3	PART	TERM1			cccc
4				DFSSAM02	dddd
5	PART	TERM1	BARBARA		eeee
6	PART	TERM1	BOB		ffff
7		TERM2	BETTY		gggg
8	PART	TERM2			iiii

UPDATE LE コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
UPD LE TRAN(IAPMDI26) USERID(USRT001)
SET(LERUNOPTS(RPTOPTS=((ON),NOOVR),RPTSTG=((OFF),NOOVR)))
```

TSO SPOC 出力:

```
MbrName    CC
SYS3       0
```

OM API 入力:

```
CMD(UPD LE TRAN(IAPMDI26) USERID(USRT001)
SET(LERUNOPTS(RPTOPTS=((ON),NOOVR),RPTSTG=((OFF),NOOVR))))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.1.0</omvsn>
<xm1vsn>1 </xm1vsn>
<statime>2002.163 17:56:10.220516</statime>
<stotime>2002.163 17:56:10.221547</stotime>
<staseq>B7C4CA4EDBFE420E</staseq>
<stoseq>B7C4CA4EDC3EB382</stoseq>
<rqsttkn1>USRT002 10105610</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>SYS3 </master>
<userid>USRT002 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>LE </kwd>
<input>UPD LE TRAN(IAPMDI26) USERID(USRT001)
SET(LERUNOPTS(RPTOPTS=((ON),NOOVR),RPTSTG=((OFF),NOOVR)))
</input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="A" key="1" scroll="NO" len="8"
dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES" len="4"
dtype="INT" align="right" />
</cmdrsphdr>
```


```

<cmdrspdata>
<rsp>MBR(SYS3 ) CC( 0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>


```

説明: UPDATE LE コマンドは、LE ランタイム・オプションのテーブルにエントリーを追加します。このコマンドにより追加されるエントリーは、ユーザー ID およびトランザクションの 2 つのフィルターを定義します。トランザクションは IAPMDI26 に、ユーザー ID は USRT001 に設定されます。このテーブル項目のランタイム・オプション・ストリングは、RPTOPTS=((ON),NOOVR),RPTSTG=((OFF),NOOVR) です。出力は、IMS メンバー SYS3 がコマンドを処理し、戻りコード 0 を戻したことを示しています。

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

316 ページの『QUERY LE コマンド』

UPDATE MSLINK コマンド

UPDATE MSLINK コマンドは、MSC 論理リンク属性を設定または変更するために、あるいは指定された論理リンクの状況を変更するために使用します。

UPDATE MSLINK コマンドは、タイプ 1 コマンドまたはタイプ 2 コマンドのいずれも可能です。

サブセクション:

- 『環境』
- 1290 ページの『構文』
- 1291 ページの『キーワード』
- 1297 ページの『使用上の注意』
- 1298 ページの『出力フィールド』
- 1299 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1301 ページの『例』

環境

以下の表には、UPDATE MSLINK コマンドおよびキーワードを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 471. UPDATE MSLINK コマンドおよびキーワードの有効環境

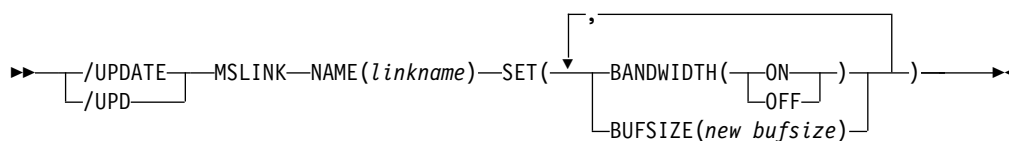
コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
UPDATE MSLINK	X		X
NAME	X		X
SET	X		X

表 471. UPDATE MSLINK コマンドおよびキーワードの有効環境 (続き)

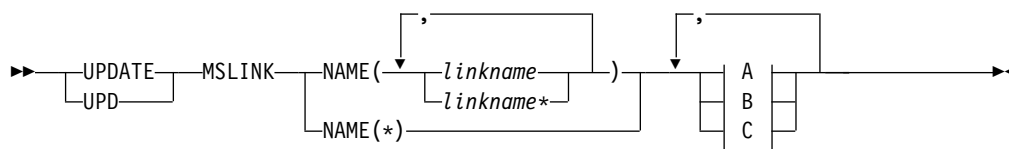
コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
START	X		X
STOP	X		X
OPTION	X		X

構文

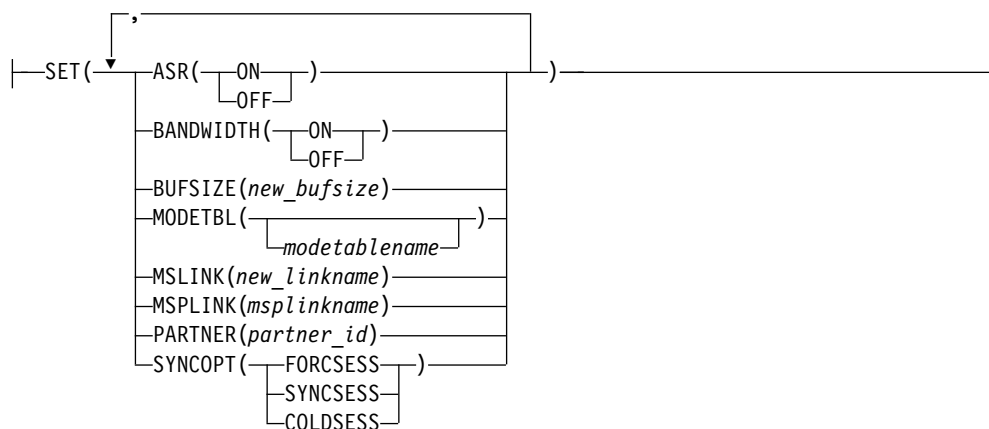
タイプ 1 コマンド構文



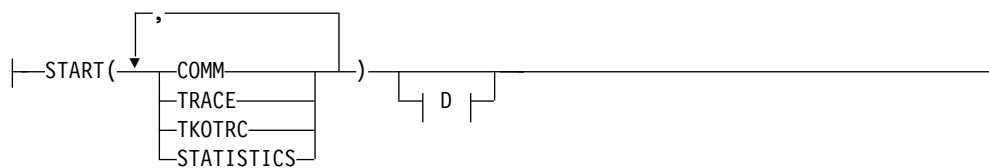
タイプ 2 コマンド構文



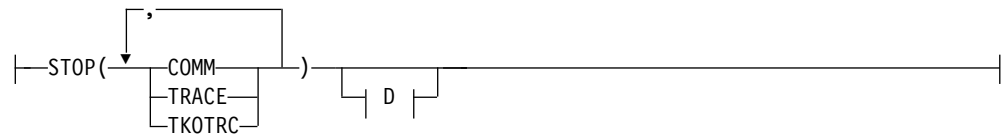
A:



B:



C:



D:



キーワード

以下のキーワードは、UPDATE MSLINK コマンドに有効です。

NAME()

処理される MSC 論理リンクの名前 (1 から 8 文字) を指定します。NAME キーワードにはワイルドカード・パラメーター (*) を指定できます。ワイルドカード名に一致する論理リンク名が処理されます。有効な名前の例として、NAME(*) と NAME(abc*) があります。

SET()

属性またはパラメーターの更新を指定します。SET() パラメーターと STOP(COMM) パラメーターの両方を指定することはできません。

ASR()

VTAM のセッション障害通知機能が使用されている場合、VTAM リンクの自動セッション再始動 (ASR) 指定を変更します。ASR パラメーターを使用すると、リンクの自動セッション再始動指定に対して定義されているシステム定義オプションをオーバーライドできます。

非 VTAM MSC リンクの場合は、ASR 指定を変更することはできません。

ASR 指定を変更する前に、論理リンクを停止してください。

ON 論理リンクは自動セッション再始動を使用することを指定します。該当のリンクに ASR の状況が表示されていても、必ずしもそのリンクの自動セッション再始動が活動化されているとは限りません。ネットワークを VTAM に対して定義する際に、VTAM の APPL 定義ステートメントで SONSCIP=YES も指定する必要があります。リンクの両側で ASR オプションを使用している場合にのみ、ASR は機能します。

オフ

論理リンクは自動セッション再始動を使用しないことを指定します。

BANDWIDTH()

論理リンクが帯域幅モードを使用するかどうかを指定します。

BANDWIDTH キーワードは、TCP/IP タイプの物理リンクに割り当てられた論理リンクには適用されません。TCP/IP 物理リンクは、常に帯域幅モードで動作します。TCP/IP 物理リンクに対して SET(BANDWIDTH(OFF)) を指定すると、コマンドはリジェクトされます。

帯域幅モードを使用可能にするためのシステム定義オプションはありません。デフォルトでは、論理リンクは帯域幅モード・オフで初期化されます。帯域幅モードを変更するには、最初に論理リンクを停止する必要があります。リンクが状況 ERE を表示してはなりません。

ON 論理リンクは帯域幅モードを使用することを指定します。

オフ

論理リンクは帯域幅モードを使用しないことを指定します。

BUFSIZE()

論理リンクの入出力バッファ・サイズを変更します。最小バッファ・サイズは 1024、最大バッファ・サイズは 65536 です。

BUFSIZE 値を変更する前に、論理リンクを停止する必要があります。論理リンクのバッファ・サイズは、MSPLINK 定義で BUFSIZE= キーワードを使用して指定されたバッファ・サイズと同じ指定要件に従います。

MODETBL()

START(COMM) パラメーターを使用せずに MODETBL() パラメーターを指定すると、リンクのデフォルト・モード・テーブル名が変更されます。このデフォルトは、通常、システム定義で確立されます。このフィールドを nul 状態 (システム定義でモード・テーブル名が指定されなかった場合と同じ状態) にリセットするには、MODETBL() を指定します。

START(COMM) パラメーターと MODETBL() パラメーターの両方を指定した場合、指定されたモード・テーブル名は、START(COMM) セッションに対してのみ使用されます。セッションが終了すると、リンク・モード・テーブル名はデフォルト・モード・テーブル名に戻ります。

モード・テーブル名は、VTAM MSC セッションを活動化する際に使用されるモード・テーブル項目を決めます。非 VTAM セッションでは MODETBL キーワードを使用できません。

MODETBL 値を変更する前に、論理リンクを停止する必要があります。

MSLINK()

指定された論理リンクの新しいリンク名 (1 から 8 文字の英数字) を指定します。MSLINK パラメーターを指定する場合、1 つだけ NAME パラメーターを指定できます。新しいリンク名は、論理リンク名として既に存在してはなりません。コマンドが正常に実行されると、NAME キーワードで指定されたリンク名はもはや無効になります。

MSLINK 名を変更する前に、論理リンクを停止する必要があります。

IMSRSC リポジトリが使用可能になっている環境で論理リンクに対してコマンドが正常に実行されると、以前の論理リンク名を参照する MSC 論理リンク・パスが新しい論理リンク名を使用するように更新され、更新済みのマークと、エクスポートが必要であるというマークが付けられます。新規の論理リンクと更新された論理リンク・パスは、次の IMS チェックポイント

ト時に自動的にエクスポートされます。以前の MSC 論理リンク名の定義が IMSRSC リポジトリに存在する場合は、名前が更新された論理リンクが次の IMS チェックポイント時にリポジトリにエクスポートされる前に、リポジトリからその定義を削除してください。以前の MSC 論理リンク名の定義を IMSRSC リポジトリから削除するには、DELETE DEFN コマンドを使用します。

MSPLINK()

この論理リンクを割り当てる MSC 物理リンクの名前 (1 から 8 文字) を入力します。入出力の目的のために、論理リンクを物理リンクに割り当てます。指定される物理リンク名は、既に存在していなければなりません。

MSPLINK を変更する前に、論理リンクを停止する必要があります。論理リンクを TCP/IP 物理リンクまたは VTAM 物理リンクに割り当てる場合は、物理リンクも停止する必要があります。TCP/IP 物理リンクおよび VTAM 物理リンクは、UPD MSPLINK NAME(*plnkname*) STOP(LOGON) を発行することによって停止できます。TCP/IP 物理リンクが TCP/IP 汎用リソース用に使用されている場合は、UPD MSPLINK NAME(*plnkname*) STOP(GENLOGON) コマンドを使用して物理リンクを停止できます。

論理リンクが TCP/IP 物理リンクに割り当てられると、論理リンクの帯域幅モードはオンになります。TCP/IP 物理リンク上では帯域幅モードは常にオンであり、オフにすることはできません。

論理リンクを CTC または MTM リンクに割り当てる場合は、ターゲットの物理リンクに現在割り当てられている論理リンクも停止する必要があります。

PARTNER()

2 文字の英字のパートナー ID を指定します。このパートナー ID により、2 つのシステム内の 2 つの関連した論理リンクが常に論理的および物理的に接続されることが確実にになります。両方のシステムが、同じパートナー ID の論理リンクを持っていなければなりません。指定される新しいパートナー ID は、既に存在してはなりません。

PARTNER キーワードを変更するには、NAME キーワードで 1 つだけ論理リンクを指定できます。

PARTNER キーワードを変更する前に、論理リンクを停止する必要があります。

SYNCOPT()

指定された論理リンクについて、オーバーライドするシステム定義オプションを指定します。このキーワードを使用してユーザーは、次回に UPDATE MSLINK コマンドが発行されるまで、または IMS がコールド・スタートされるまで、再同期を強制するために定義されているシステム定義オプションをオーバーライドできます。

SYNCOPT() は、TCP/IP リンクおよび VTAM リンクに対してのみ有効です。

SYNCOPT を変更する前に、論理リンクを停止する必要があります。

FORCSESS

セッション再始動モードとメッセージ・シーケンス番号の間の一致に関

係なく、セッション開始を完了することを指定します。FORCSESS パラメーターを使用すると、メッセージが失われたり、重複したりすることがあります。

SYNCSESS

セッション再始動モードとメッセージ・シーケンス番号が一致する場合にのみ、セッション開始を完了することを指定します。

COLDSESS

MSLINK の動的フラグおよびフィールドをすべてゼロにリセットして、セッション再始動モードを COLD にリセットします。これにより、リンクのコールド・セッション開始が可能になります。セッションのウォーム・スタートを試みても失敗する場合、COLDSESS パラメーターを使用してください。

COLDSESS パラメーターを使用すると、メッセージが失われたり、重複したりすることがあります。

COLDSESS オプションを指定したコマンドを発行する前に、最初にリンクを停止します。COLDSESS を指定するときは、それをリンクの両サイドで使用する必要があります。

COLDSESS パラメーターは、SYNCSESS または FORCSESS の現行設定をオーバーライドしません。

START()

指定された MSC 論理リンクを開始するか、指定された論理リンクのトレースを開始します。

COMM

指定された MSC 論理リンクを開始し、IMS がメッセージの送受信を開始できるようにします。

CTC リンクまたは MTM リンクの場合は両方のシステムで、また TCP/IP リンクまたは VTAM リンクの場合は一方のシステムで、UPDATE MSLINK コマンドが入力されるまでは、IMS システム間の通信は開始されません。

COMM パラメーターは、START() と STOP() の両方に指定することはできません。論理リンクは停止されてアイドル状態にあり、割り当てられた物理リンクはオープン状態でなければなりません (QUERY コマンドの出力に表示されます)。

TRACE

指定された論理リンクに関連した内部 IMS イベントのトレースをオンにします。同等のタイプ 1 の /TRACE コマンドとは異なり、UPDATE コマンドではトレース・レベルを指定できません。代わりに、IMS はデフォルト・レベルの 4 を使用します。QUERY MSLINK コマンドを使用して、現在の IMS トレースの状況およびオプションを表示できます。TRACE は、START() と STOP() の両方に指定することはできません。

注: タイプ 2 コマンド UPDATE MSLINK NAME(*linkname*)

START(TRACE) は、前回に /TRACE SET (ON) LINK コマンドが発行されたときに使用されたのと同じレベルおよびモジュールの設定を使用しま

す。最後のコールド・スタート以降に /TRACE SET (ON) LINK コマンドが発行されていない場合、このコマンドはデフォルトの MODULE=ALL と LEVEL=4 を使用します。

TKOTRC

テークオーバー時のトレースを使用可能にします。このトレースは、通常のトレースとは別に行われます。このキーワードは、XRF 環境にのみ適用されます。START() のもとの、TRACE と TKOTRC の両方を指定することはできません。TKOTRC は、START() と STOP() の両方に指定することはできません。

STATISTICS

MSC 論理リンクに対して統計サポートを提供します。これらの統計を使用して、リンクのパフォーマンスを判別したり、リンクおよびメッセージ・キューのバッファ・サイズを最適なサイズに調整したり、リンクのパフォーマンスを向上させたりすることができます。各論理リンク (MSLINK) は、統計を保持する作業域を持っています。

STOP()

指定された MSC 論理リンクを停止するか、指定された論理リンクのトレースを停止します。

COMM

指定された MSC 論理リンクを停止し、IMS がメッセージの送受信を停止できるようにします。別の IMS システム内のパートナー・リンクは自動的に停止します。COMM は、START() と STOP() の両方に指定することはできません。STOP(COMM) と SET() の両方を同時に指定することはできません。

TRACE

指定された論理リンクに関連した内部 IMS イベントのトレースをオフにします。QUERY MSLINK コマンドを使用して、現在の IMS トレースの状況およびオプションを表示できます。TRACE は、START() と STOP() の両方に指定することはできません。

TKOTRC()

テークオーバー中のトレースを使用不可にします。このトレースは、通常のトレースとは別に行われます。このキーワードは、XRF 環境にのみ適用されます。TKOTRC は、START() と STOP() の両方に指定することはできません。

OPTION()

UPDATE MSLINK コマンドのオプションを指定します。OPTION は、START(STATISTICS) または STOP(COMM) と一緒にのみ有効です。

FORCE

CTC リンク、TCP/IP リンク、および VTAM リンクに対する STOP(COMM) と一緒にのみ指定できます。FORCE パラメーターは、セッションが終了しても、通常の UPDATE STOP(COMM) 処理後に MSC リンクがクリーンアップされず、IMS が PSTOP IDLE 状況にならない場合に使用します。

FORCE パラメーターを使用した後、NAME(linkname | *)
START(COMM) オプションを指定した UPDATE MSLINK コマンドを発
行して、リンクを再始動します。

TCP/IP リンクの場合、FORCE オプションは、パートナー IMS システム
でリンクがシャットダウンされた後、正常にシャットダウンされなかった
MSC TCP/IP リンクをシャットダウンするのに役立ちます。FORCE オプ
ションを使用する前にリンクを正常にシャットダウンする必要はありません。

さらに FORCE は、ローカル IMS Connect インスタンスに対して
TCP/IP リンクのセッションをクリーンアップすることを通知し、VTAM
に対して VTAM リンクのセッションをクリーンアップすることを通知しま
す。

IMS では、TCP/IP リンクに対する FORCE オプションを処理する場合、
以下のアクションを実行します。

- コマンドが発行された IMS 内でリンクをシャットダウンします
- 送信ソケットをクリーンアップすることを、ローカル IMS Connect イ
ンスタンスに通知します
- エラー・メッセージを発行します
- リンクを ERE IDLE 状況にします

VTAM リンクの場合、FORCE パラメーターを一部のネットワーク・コマ
ンドと一緒に使用して、IMS 内の VTAM リンクをクリーンアップするこ
とができます。

RESET | NORESET

UPDATE MSLINK() START(STATISTICS) OPTION(RESET) コマンドを発
行すると、リンク統計をリセットして、開始時刻を現在時刻に設定します。
バッファ・サイズや帯域幅モードなど各種のリンク特性を変更する場合と
は異なり、統計値をリセットする (リセット・モードにする) ために、論理
リンクを停止してアイドル状態にする必要はありません。

OPTION(RESET)、OPTION(CHKPT,RESET)、および OPTION(CHKPT,
NORESET) は、START(STATISTICS) と共に指定できます。

RESET

CHKPT なしで指定された場合は、指定された論理リンクの統計を即時
にリセットすることを示します。CHKPT と共に指定された場合は、指
定の論理リンクの統計を各システム・チェックポイントでリセットする
ことを示します。これは QUERY MSLINK コマンドで報告される統計
にのみ適用されます。システム・チェックポイントでログ・レコードに
記録される統計は、IMS の存続期間中は累積され、UPDATE MSLINK
コマンドによってリセットされません。

NORESET

CHKPT と共に指定された場合は、指定の論理リンクの統計をどのシス
テム・チェックポイントでもリセットしないことを示します。これは
QUERY MSLINK コマンドで報告される統計にのみ適用されます。シ

システム・チェックポイントでログ・レコードに記録される統計は、IMS の存続期間中は累積され、UPDATE MSLINK コマンドによってリセットされません。

CHKPT

RESET と共に指定された場合は、指定の論理リンクの統計を各システム・チェックポイントでリセットすることを示します。NORESET と共に指定された場合は、指定の論理リンクの統計をどのシステム・チェックポイントでもリセットしないことを示します。これは QUERY MSLINK コマンドで報告される統計にのみ適用されます。システム・チェックポイントでログ・レコードに記録される統計は、IMS の存続期間中は累積され、UPDATE MSLINK コマンドによってリセットされません。

OPTION(CHKPT,RESET) および OPTION(CHKPT, NORESET) は、START(STATISTICS) と共に指定できます。

使用上の注意

タイプ 2 の UPDATE MSLINK コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。このコマンドは DB/DC および DCCTL システムに適用されます。

UPDATE MSLINK コマンドの構文は XML で定義されており、OM と通信する自動化プログラムに使用できます。

SET(MSPLINK(*msplinkname*)) とともに指定された CREATE MSLINK NAME(*mslinkname*) コマンドは、コマンド内で指定された少なくとも 1 つの論理リンク属性 (ASR、BACKUP、MODETBL、または SYNCOPT) が物理リンク・タイプと競合する場合はリジェクトされます。ただし、論理リンクの作成後、UPDATE MSLINK コマンドまたは /MSASSIGN コマンドを使用して、任意のタイプの物理リンクに再度割り当てることができます。特定の物理リンク・タイプに適用される属性を指定して定義された論理リンクが、これらの属性をサポートしない別の物理リンク・タイプに再度割り当てられた場合、リンクが開始されるとこれらの属性は無視されます。

UPDATE MSLINK コマンドを使用して、論理リンクの ASR、BANDWIDTH、BUFSIZE、MODETBL、MSLINK、MSPLINK、PARTNER、および SYNCOPT の各属性を更新する場合、リンクにはエクスポートが必要であるというマークが付けられます。エクスポートが必要な論理リンクを表示するには、QUERY MSLINK SHOW(EXPORTNEEDED) コマンドを発行します。IMSRSC リポジトリが使用可能になっている場合は、次の IMS チェックポイント時に MSC 論理リンクが自動的にエクスポートされます。

UPDATE MSLINK コマンドと他のコマンドとの比較

以下の表は、各種の UPDATE MSLINK コマンドと、類似の機能を実行するタイプ 1 IMS コマンドを示しています。

表 472. UPDATE MSLINK コマンドと同等のタイプ 1 コマンド

UPDATE MSLINK コマンド	類似の IMS コマンド
UPDATE MSLINK NAME(linkname linkname* *) SET(ASR(ON OFF))	/CHANGE LINK link # ALL ASR ON OFF
UPDATE MSLINK NAME(linkname linkname* *) SET(MODETBL (modetablename))	/CHANGE LINK link # ALL MODE(modename NONE)
UPDATE MSLINK NAME(linkname) SET(MSLINK(linkname))	類似のタイプ 1 IMS コマンドが存在しません。
UPDATE MSLINK NAME(linkname linkname* *) SET(MSPLINK (msplinkname))	/MSASSIGN LINK link # MSPLINK msplinkname
UPDATE MSLINK NAME(linkname linkname* *) SET(PARTNER(partner_id))	類似のタイプ 1 IMS コマンドが存在しません。
UPDATE MSLINK NAME(linkname linkname* *) SET(SYNCOPT(FORCSESS))	/CHANGE LINK link# ALL FORCSESS
UPDATE MSLINK NAME(linkname linkname* *) SET(SYNCOPT(SYNCSSESS))	/CHANGE LINK link# ALL SYNCSSESS
UPDATE MSLINK NAME(linkname linkname* *) SET(SYNCOPT(COLDSSESS))	/CHANGE LINK link# ALL COLDSSESS
UPDATE MSLINK NAME(linkname linkname* *) START(COMM)	/RSTART LINK link # ALL
UPDATE MSLINK NAME(linkname linkname* *) SET(MODETBL (modetablename)) START(COMM)	/RSTART LINK link# ALL MODE modename
UPDATE MSLINK NAME(linkname linkname* *) START(TRACE)	/TRACE SET ON OFF LINK link # ALL
UPDATE MSLINK NAME(linkname linkname* *) START(TKOTRC)	/TRACE SET ON LINK link # ALL TAKEOVER
UPDATE MSLINK NAME(linkname linkname* *) STOP(COMM)	/PSTOP LINK link # ALL
UPDATE MSLINK NAME(linkname linkname* *) STOP(COMM) OPTION(FORCE)	/PSTOP LINK link # PURGE or /PSTOP LINK link # FORCE
UPDATE MSLINK NAME(linkname linkname* *) STOP(COMM,TRACE) OPTION(FORCE)	/PSTOP LINK link # FORCE /TRA SET OFF LINK link#

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。ゼロ以外の完了コードの場合に表示される出力フィールドには *error* が表示されます。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されていません。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 473. UPDATE MSLINK コマンドの出力フィールドの説明

ショート・ラベル	キーワード	意味
CC	N/A	完了コード。
CCTXT	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
LINKN	N/A	論理リンク番号
MBR	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。
MSL	N/A	論理リンク名。

戻りコード、理由コード、および完了コード

UPDATE MSLINK コマンドの結果として戻されることのある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに対して標準的です。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 474. UPDATE MSLINK コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE MSLINK コマンドは正常に完了しました。
X'00000008'	X'0000200C'	更新するリソースが見つかりませんでした。指定されたリソース名が無効であるか、指定されたフィルターに一致するリソースがありません。
X'00000008'	X'00002040'	UPDATE MSLINK コマンドで、複数のフィルター値が指定されています。
X'00000008'	X'00002044'	START パラメーターと STOP パラメーターに同じ属性値が指定されているため、UPDATE MSLINK コマンドは処理されません。
X'00000008'	X'00002048'	無効な SET 属性が指定されています。
X'00000008'	X'00002133'	複数の論理リンク名が指定されており、これはコマンドで指定された SET フィルターに対して無効であるため、UPDATE MSLINK コマンドは処理されません。
X'00000008'	X'00002134'	UPDATE MSLINK コマンドは SET(MSPLINK (<i>msplinkname</i>)) を指定しましたが、 <i>msplinkname</i> が存在しません。
X'0000000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。完了コードについて詳しくは、以下の表を参照してください。
X'0000000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。完了コードについて詳しくは、以下の表を参照してください。

表 474. UPDATE MSLINK コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000010'	X'00004000'	IMS の再始動中はコマンドは無効です。
X'00000010'	X'0000400C'	XRF 代替システムではコマンドは無効です。
X'00000010'	X'0000402C'	非 MSC 対応システムではコマンドは無効です。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できなかったため、UPDATE MSLINK コマンド処理は終了しました。
X'00000014'	X'00005008'	DFSPOOL ストレージを取得できませんでした。
X'00000014'	X'00005010'	ラッチを取得できませんでした。

UPDATE MSLINK コマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

UPDATE MSLINK コマンドがタイプ 2 コマンドとして入力された場合、完了コードを含むメッセージが出されます。以下の表にリストされているコードは、タイプ 1 UPDATE MSLINK コマンド用です。

表 475. UPDATE MSLINK コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、UPDATE MSLINK コマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	MSLINK 名が無効であるか、指定されたワイルドカード・パラメーターがどのリソース名にも一致しません。
11	RESOURCE ALREADY EXISTS	SET(MSLINK(linkname)) で指定されたリンク名は、既に論理リンクとして存在します。
62	HIOP STORAGE ERROR	IMS は HIOP プールからストレージを取得できませんでした。
8D	RESOURCE IS NOT STOPPED	論理リンクが停止されていません。指定された更新のためには、リンクが停止している必要があります。
100	INV SET KEYWORD FOR LINK TYPE	SET() で指定されたキーワードは、対応する物理リンク・タイプに対して無効です。
101	TARGET MSPLINK NOT STOPPED	SET(MSPLINK()) で指定されたターゲット物理リンクが停止されていません。
102	TARGET MSLINK NOT STOPPED	SET(MSPLINK()) で指定されたターゲット物理リンクに現在割り当てられている論理リンクが停止されていません。
103	NEW PARTNER ID ALREADY EXISTS	SET(PARTNER()) で指定された新規パラメーター ID は既に存在します。
104	MSLINK NOT ASSIGNED TO MSPLINK	論理リンクが物理リンクに割り当てられていないため、更新を実行できません。

表 475. UPDATE MSLINK コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
105	MSPLINK NOT OPEN	割り当てられた物理リンクがオープンされていないため、更新を実行できません。
106	INVALID OPTION FOR LINK TYPE	OPTION() で指定されたキーワードは、対応する物理リンク・タイプに対して無効です。
107	OPTION=FORCE ALREADY IN EFFECT	その論理リンクに対して OPTION(FORCE) が既に呼び出されています。

例

以下に示すのは UPDATE MSLINK コマンドの例です。

UPDATE MSLINK コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPD MSLINK NAME(STAR1L, STAR2L, STAR3L*) SET(SYNCOPT(FORCSESS),
ASR(OFF),MODETBL(),MSPLINK(STAR1)) START(COMM,TRACE)
```

TSO SPOC 出力:

```
MSLink   MbrName LinkNum CC CCText
STAR1L   IMSA    12      0
STAR2L   IMSA    10     NOT FOUND
STAR3L   IMSA     5      0
STAR3L1  IMSA     6      0
STAR3L2  IMSA     7      0
```

説明: この UPDATE MSLINK コマンドは、以下のことを行うために発行されています。

1. 指定された論理リンク (STAR1L と、STAR3L* (STAR3L, STAR3L1、および STAR3L2) に一致する論理リンク) のシステム定義オプションをオーバーライドする。 STAR2L は不明です。
2. 指定された論理リンクの自動セッション再始動指定を OFF に変更する。
3. 指定された論理リンクのモード・テーブル名を NONE にリセットする。
4. 指定された論理リンクを物理リンク STAR1 に割り当てる。
5. 指定されたリンク上で IMS がメッセージの送受信を開始できるようにする。
6. 制御ブロックのトレース情報のトレースを使用可能にする。

UPDATE MSLINK コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:


```
UPDATE MSLINK NAME(LNK12V02) SET(BANDWIDTH(ON), BUFSIZE(4096))
```

TSO SPOC 出力:


```
MSLink           MSLink#   MbrName   CC
LNK12V02         10        IMS1      0
```

説明: このコマンドは、バッファ・サイズを 4096 に変更し、帯域幅をオンにします。


関連概念:


 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連タスク:

 MSC リンク統計を使用したリンクの問題の診断 (診断)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

 複数のリソースに類似機能があるコマンドのリスト (オペレーションおよびオートメーション)

UPDATE MSNAME コマンド

UPDATE MSNAME コマンドは、MSC 論理リンク・パス属性を設定または変更するために、あるいは指定された論理リンク・パスの状況を変更するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 1303 ページの『構文』
- 1303 ページの『キーワード』
- 1305 ページの『使用上の注意』
- 1305 ページの『同等の IMS タイプ 1 コマンド』
- 1306 ページの『出力フィールド』
- 1306 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1308 ページの『例』

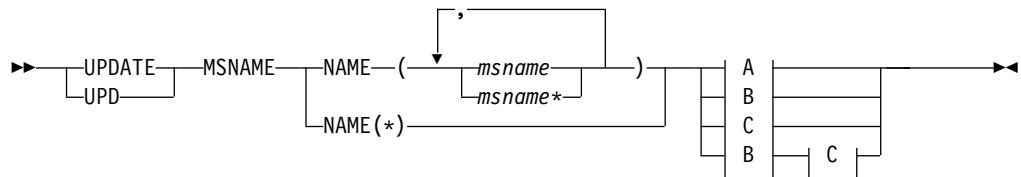
環境

以下の表には、UPDATE MSNAME コマンドおよびキーワードを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

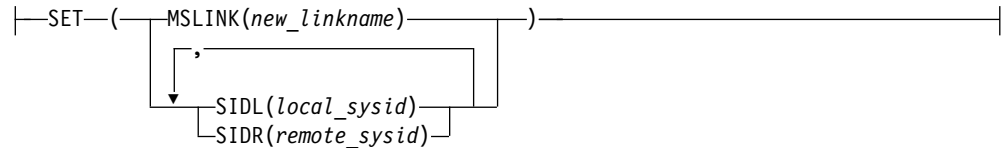
表 476. UPDATE MSNAME コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
UPDATE MSNAME	X		X
NAME	X		X
SET	X		X
START	X		X
STOP	X		X

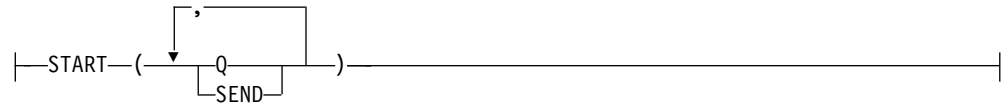
構文



A:



B:



C:



キーワード

以下のキーワードは、UPDATE MSNAME コマンドに有効です。

NAME()

処理される MSC 論理リンク・パスの名前 (1 から 8 文字) を指定します。NAME キーワードにはワイルドカード (*) を指定できます。有効な名前の例として、NAME(*) と NAME(abc*) があります。

SET()

属性またはパラメーターの更新を指定します。静的に定義された MSNAME の属性のみ変更できます。動的な MSNAME は変更できません。

MSLINK()

入出力の目的で、指定された論理リンク・パスを論理リンクに割り当てます。この論理リンク・パスを割り当てる MSC 論理リンクの名前 (1 から 8 文字) を入力します。指定される論理リンク名は、既に存在していません。

ソース論理リンク (MSNAME が現在割り当てられている場所) とターゲット論理リンク (MSNAME の割り当て先) の両方を停止する必要があります。

SIDL()

複数システム構成内のローカル・システムのシステム ID を指定します。指定する値は 1 から 2036 までの数値でなければなりません。新しく指定する値は、現在未定義であるか、このシステム上にローカル SID として既に定義されている必要があります。SID は、既にリモートとして定義されているではありません。

1 つのコマンドでは、1 つだけの論理リンク・パスの SIDL 値を変更できます。したがって、SIDL パラメーターを指定する場合、1 つだけ NAME パラメーターを指定できます。

SIDL を変更するには、論理リンクと論理リンク・パスを停止する必要があります。

論理リンク・パスの SIDL 値または SIDL 値を変更するには、以下の手順で行います。

1. /DIS ASMT MSNAME または QUERY MSNAME SHOW(SYSID) で、論理リンク・パスの既存の SID 値を確認します。

SIDL の確認についてのみ、オペレーターは、現行の SIDL 値がシステム内の最低の SIDL 値ではないことを確認する必要があります。それがシステム内の最低の SIDL 値であり、システム内に同じ SIDL を持つ他の論理リンク・パスがない場合、その SIDL は変更できません。システム内の最低の SIDL は変更できないからです。

2. /DIS SYSID TRAN または QUERY TRAN SHOW(MSNAME) で、既存の SID 値を持つトランザクションがないことを確認します。
3. ステップ 2 でトランザクションが見つかった場合、/MSASSIGN TRAN TO MSNAME、UPDATE TRAN SET(MSNAME())、または UPDATE TRAN SET(SIDR(),SIDL()) を使用して、トランザクションを新しい有効なシステムに割り当てます。
4. UPDATE MSNAME SET(SIDR(),SIDL()) を使用して、論理リンク・パスの SID 値を変更します。ただし、新しい SIDL 値がシステム内の現行の最低 SIDL より低い場合、この変更は許可されません。システム内の最低の SIDL は変更できず、最低の SIDL はシステム内に残す必要があります。

SIDR()

複数システム構成内のリモート・システムのシステム識別を指定します。指定する値は 1 から 2036 までの数値でなければなりません。指定する新しい値は、このシステム上に現在未定義でなければなりません (既にリモートまたはローカルとして定義されているではありません)。

1 つのコマンドでは、1 つだけの論理リンク・パスの SIDR 値を変更できます。したがって、SIDR パラメーターを指定する場合、1 つだけ NAME パラメーターを指定できます。

SIDR を変更するには、論理リンクと論理リンク・パスを停止する必要があります。

論理リンク・パスの SIDR 値または SIDL 値を変更するには、以下の手順で行います。

1. /DIS ASMT MSNAME または QUERY MSNAME SHOW(SYSID) で、論理リンク・パスの既存の SID 値を確認します。
2. /DIS SYSID TRAN または QUERY TRAN SHOW(MSNAME) で、既存の SID 値を持つトランザクションがないことを確認します。
3. ステップ 2 でトランザクションが見つかった場合、/MSASSIGN TRAN TO MSNAME、UPDATE TRAN SET(MSNAME())、または UPDATE TRAN SET(SIDR(),SIDL()) を使用して、トランザクションを新しい有効なシステムに割り当てます。
4. UPDATE MSNAME SET(SIDR(),SIDL()) を使用して、論理リンク・パスの SID 値を変更します。

START()

開始する属性を指定します。START パラメーターと STOP パラメーターを同じ属性で指定することはできません。

Q 論理リンク・パスへのキューイングを開始し、指定された論理リンク・パスの入力を開始します。

SEND

指定された論理リンク・パスへのメッセージの送信を開始します。

STOP()

停止する属性を指定します。START パラメーターと STOP パラメーターを同じ属性で指定することはできません。

Q 論理リンク・パスへのキューイングを停止し、指定された論理リンク・パスの入力を停止します。

SEND

指定された論理リンク・パスへのメッセージの送信を停止します。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。このコマンドは DB/DC および DCCTL システムに適用されます。

このコマンドの構文は XML で定義されており、OM と通信する自動化プログラムで使用できます。

UPDATE MSNAME コマンドを使用して、MSC 論理リンク・パスの MSLINK、SIDL、および SIDR の各属性を更新する場合、論理リンク・パスにはエクスポートが必要であるというマークが付けられます。エクスポートが必要な論理リンク・パスを表示するには、QUERY MSNAME SHOW(EXPORTNEEDED) コマンドを発行します。IMSRSC リポジトリが使用可能になっている場合は、次回の IMS チェックポイント時に MSC 論理リンク・パスが自動的にエクスポートされます。

同等の **IMS** タイプ 1 コマンド

以下の表は、各種の UPDATE MSNAME コマンドと、類似の機能を実行するタイプ 1 IMS コマンドを示しています。

表 477. UPDATE MSNAME コマンドと同等のタイプ 1 コマンド

UPDATE MSNAME コマンド	類似の IMS タイプ 1 コマンド
UPDATE MSNAME NAME(msname) SET(MSLINK(linkname))	/MSASSIGN MSNAME msname TO LINK link #
UPDATE MSNAME NAME(msname) SET(SIDR(remote_sysid))	類似のタイプ 1 IMS コマンドが存在しませ ん。
UPDATE MSNAME NAME(msname) SET(SIDL(local_sysid))	類似のタイプ 1 IMS コマンドが存在しませ ん。
UPDATE MSNAME NAME(msname msname* *) START(Q,SEND)	/START MSNAME msname msname* ALL
UPDATE MSNAME NAME(msname msname* *) STOP(Q,SEND)	/STOP MSNAME msname msname* ALL
UPDATE MSNAME NAME(msname msname* *) STOP(Q),START(SEND)	/PURGE MSNAME msname msname* ALL

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。ゼロ以外の完了コードの場合に表示される出力フィールドには *error* が表示されます。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されていません。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 478. UPDATE MSNAME コマンドの出力フィールドの説明

ショート・ラベル	キーワード	意味
CC	N/A	完了コード。
CCTXT	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
MBR	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。
MSN	N/A	論理リンクパス名。

戻りコード、理由コード、および完了コード

UPDATE MSNAME コマンドの結果として戻される戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通の標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 479. UPDATE MSNAME コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE MSNAME コマンドは正常に完了しました。
X'00000008'	X'0000200C'	更新するリソースが見つかりませんでした。指定されたリソース名が無効であるか、指定されたフィルターに一致するリソースがありません。
X'00000008'	X'00002040'	UPDATE MSNAME コマンドで、複数のフィルター値が指定されています。
X'00000008'	X'00002044'	START フィルターと STOP フィルターに同じ属性値が指定されているため、UPDATE MSNAME コマンドは処理されません。
X'00000008'	X'00002126'	SIDL() の値が無効です。有効な値は 1 から 2036 です。
X'00000008'	X'00002128'	SIDR() の値が無効です。有効な値は 1 から 2036 です。
X'00000008'	X'00002136'	MSLINK() で指定された名前は、有効な論理リンク名ではありません。
X'0000000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。完了コードについて詳しくは、以下の表を参照してください。
X'0000000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。完了コードについて詳しくは、以下の表を参照してください。
X'00000010'	X'00004000'	IMS の再始動中はコマンドは無効です。
X'00000010'	X'0000400C'	XRF 代替システムではコマンドは無効です。
X'00000010'	X'0000402C'	非 MSC 対応システムではコマンドは無効です。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できなかったため、UPDATE MSNAME コマンド処理は終了しました。
X'00000014'	X'00005008'	DFSPOOL ストレージを取得できませんでした。
X'00000014'	X'00005010'	ラッチを取得できませんでした。

UPDATE MSNAME コマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 480. UPDATE MSNAME コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、UPDATE MSNAME コマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	MSNAME 名が無効であるか、指定されたワイルドカード・パラメーターがどのリソース名にも一致しません。

表 480. UPDATE MSNAME コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
45	INVALID SIDR VALUE	SIDR() で指定された値が無効です。値はこのシステム内で現在未定義でなければなりません。
83	INVALID SIDL VALUE	SIDL() で指定された値が無効です。値はこのシステム内で現在未定義またはローカルでなければなりません。
B7	USE MANAGER ERROR	IMS は USE マネージャーを使用して内部エラーを検出しました。
102	TARGET MSLINK NOT STOPPED	MSLINK() で指定されたリンクが停止していないため、更新を完了できません。
109	INVALID FOR DYNAMIC MSNAME	NAME() で指定された論理リンク・パスが動的であるため、更新を完了できません。共用キュー・システム内で作成された動的論理リンク・パスに対しては、更新は無効です。動的論理リンク・パスは、共用キュー・グループ内の他の IMS システム上にものみ定義されている論理リンク・パスを表します。
10A	SOURCE MSLINK NOT STOPPED	指定された論理リンク・パスの割り当て先の論理リンクが停止していないため、更新を完了できません。
10B	MSC RESOURCE IS IN USE	論理リンク・パスに関連したリモート・トランザクションまたは lterm に未確定メッセージ・アクティビティがあるため、更新を完了できません。
10D	INVALID SIDL, LESS THAN LOW SIDL	SIDL() で指定された値が無効です。値はこのシステム内の現行の最低のローカル SID より低い値であってはなりません。
10E	LAST MSNAME FOR LOW SIDL	現行の SIDL 値は最低のローカル SIDL 値であり、これはこのローカル SIDL 値を持つ唯一の論理リンク・パスであるため、この論理リンク・パスの現行のローカル SIDL 値は変更できません。
10F	SIDL STILL LOCAL IN REMOTE TRAN	このローカル SIDL 値で定義されたりリモート・トランザクションがあり、これはこのローカル SIDL 値を持つ唯一の論理リンク・パスであるため、この論理リンク・パスの現行のローカル SIDL 値は変更できません。
110	SIDR STILL LOCAL IN REMOTE TRAN	このリモート SIDR 値で定義されたりリモート・トランザクションがあるため、この論理リンク・パスの現行のリモート SIDR 値は変更できません。

例

以下に示すのは UPDATE MSNAME コマンドの例です。

UPDATE MSNAME コマンドの例 1

TSO SPOC 入力: UPD MSNAME NAME(STAR1N1,STAR2N1) STOP(Q,SEND)

TSO SPOC 出力:

```
MSName MbrName CC
STAR1N1 IMSA 0
STAR2N1 IMSA 0
```

説明: この UPDATE MSNAME コマンドは、指定された論理リンク・パスへのメッセージのキューイングおよび送信を停止するために発行されています。これにより、別の UPD MSNAME コマンドによって属性を変更することが可能になります。

UPDATE MSNAME コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
UPD MSNAME NAME(STAR1N1) SET(SIDR(10),SIDL(20))
```

TSO SPOC 出力:

```
MSName MbrName CC
STAR1N1 IMSA 0
```

説明: この UPDATE MSNAME コマンドは、以下のことを行うために発行されています。

- リモート・システムを識別する (これは SIDR(10) で表されています)。
- ローカル・システムを SIDL(20) として識別する (メッセージをこのシステムに経路指定して戻すために)。

UPDATE MSNAME コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:


```
UPD MSNAME NAME(STAR1N1) SET(MSLINK(STAR3L))
```

TSO SPOC 出力:


```
MSName MbrName CC
STAR1N1 IMSA 0
```

説明: この UPDATE MSNAME コマンドは、指定された論理リンク・パス STAR1N1 を STAR3L に割り当てるために発行されています。


関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

 /MSASSIGN コマンド (コマンド)

 複数のリソースに類似機能があるコマンドのリスト (オペレーションおよびオートメーション)

917 ページの『/START MSNAME コマンド』

UPDATE MSPLINK コマンド

UPDATE MSPLINK コマンドは、MSC 物理リンク属性を設定または変更するために、あるいは指定された物理リンクの状況を変更するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 1311 ページの『キーワード』
- 1316 ページの『使用上の注意』
- 1317 ページの『同等の IMS タイプ 1 コマンド』
- 1317 ページの『出力フィールド』
- 1318 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1319 ページの『例』

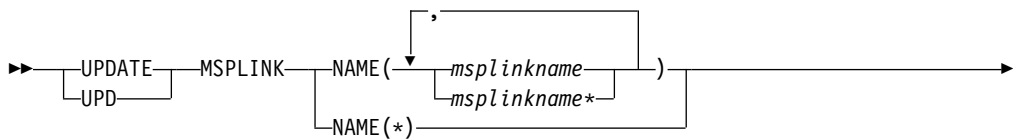
環境

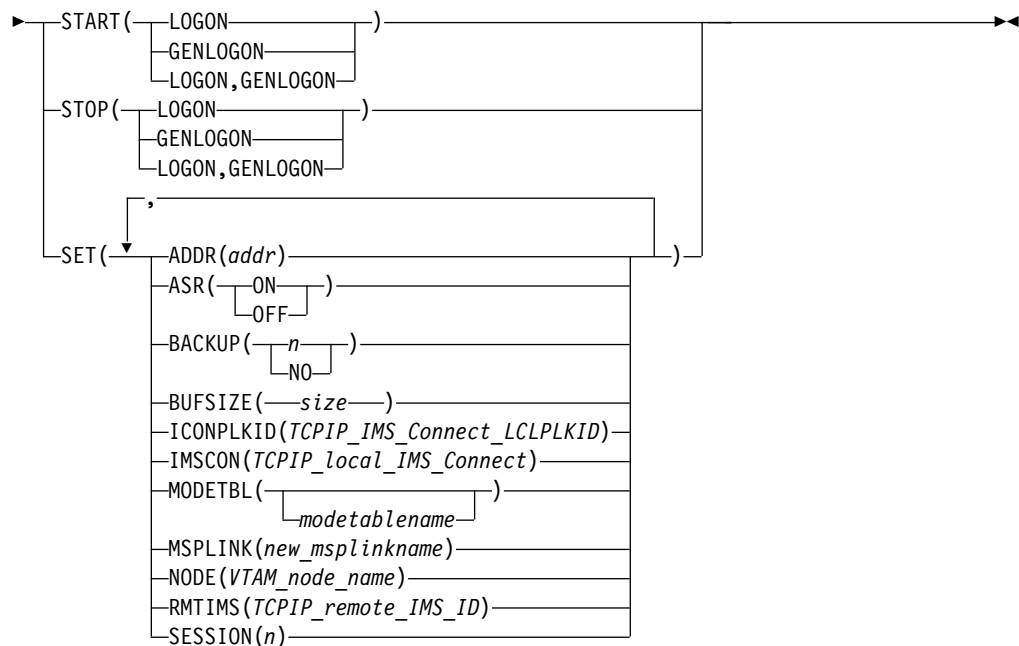
以下の表には、UPDATE MSPLINK コマンドおよびキーワードを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 481. UPDATE MSPLINK コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
UPDATE MSPLINK	X		X
NAME	X		X
SET	X		X
START	X		X
STOP	X		X

構文





キーワード

以下のキーワードは、UPDATE MSPLINK コマンドに有効です。

NAME()

処理される MSC 物理リンクの名前 (1 から 8 文字) を指定します。名前にはワイルドカード (*) を指定できます。有効な名前の例として、NAME(*) と NAME(abc*) があります。

SET()

物理リンクの属性を設定します。必須パラメーターとオプション・パラメーターは、定義している物理リンクのタイプによって異なります。

ASR()、MODETBL()、および NODE() は、VTAM リンクに固有のパラメーターです。

ADDR()

チャンネル間アダプターのアドレスを指定します。アドレス値は、16 進 3 桁または 4 桁とすることができます。このオペランドは CTC リンク・タイプに対してのみ有効です。

ADDR 値は、IMS システム内で定義されているすべての CTC 物理リンク間で固有であることが必要です。

ADDR 値を変更する前に、割り当てられた論理リンクを停止してください。

CTC アダプターと同じチャンネルに接続されているすべてのデバイスは、代替チャンネルを通じてアクセス可能であることが必要です。また、システム・リソース (例えば、ページング・デバイス) を CTC アダプターと同じチャンネルに接続しないでください。

ASR()

VTAM のセッション障害通知機能が使用されている場合、指定された VTAM 物理リンクに割り当てられた各論理リンクの自動セッション再始動 (ASR) 指定を変更します。ASR パラメーターを使用すると、リンクの自動セッション再始動指定に対して定義されているシステム定義オプションをオーバーライドできます。

非 VTAM MSC リンクの場合は、ASR 指定を変更することはできません。

ASR 指定を変更する前に、物理リンクとそれに割り当てられた各論理リンクを停止してください。

ON 論理リンクは自動セッション再始動を使用することを指定します。該当のリンクに ASR の状況が表示されていても、必ずしもそのリンクの自動セッション再始動が活動化されているとは限りません。ネットワークを VTAM に対して定義する際に、VTAM の APPL 定義ステートメントで SONSCIP=YES も指定する必要があります。リンクの両側で ASR オプションを使用する場合にのみ、ASR は機能します。

オフ

論理リンクは自動セッション再始動を使用しないことを指定します。

BACKUP()

XRF 対応の IMS システムの場合、XRF テークオーバー後の TCP/IP リンクおよび VTAM リンクの自動再始動を制御します。BACKUP 値を変更する前に、物理リンクとそれに割り当てられた各論理リンクを停止してください。

n セッション再確立の優先順位を設定する 1 から 7 の範囲内の整数。

NO BACKUP=NO を指定すると、MSC 物理リンクの自動再始動は抑止されます。

BACKUP は IMS が TCP/IP リンクや VTAM リンクを再始動する順序の優先順位を設定しますが、アクティブ要求は任意の順序で実行される可能性があります。これは、VTAM 内部の競合やペーシング、インターネット・プロトコル・ネットワーク・トラフィックなどの可変要因によるものです。

BACKUP は、CREATE MSPLINK、CREATE MSLINK、または UPDATE MSPLINK の各コマンドを使用して設定できる MSC 物理リンク属性です。QUERY MSPLINK コマンドと QUERY MSLINK コマンドを使用して、物理リンクの BACKUP 値を表示できます。

重要: BACKUP は物理リンク属性ですが、CREATE MSLINK NAME(*linkname*) SET(MSPLINK(*msplinkname*)) コマンドによって、指定した物理リンクの BACKUP 値を変更することもできます。QUERY MSPLINK コマンドを使用して、更新された BACKUP 値を表示できます。また、QUERY MSLINK コマンドを使用して、物理リンクに割り当てられた MSC 論理リンク (新しく作成された論理リンクを含む) を指定することにより、更新された BACKUP 値を表示することもできます。

BUFSIZE()

この物理リンクに割り当てられた各論理リンクの入出力バッファのサイズを指定します。すべてのリンク・タイプで、バッファ・サイズの有効範囲は 1024 から 65536 バイトです。物理リンクの両端にある IMS システムは、同じバッファ・サイズを指定する必要があります。

VTAM および TCP/IP リンクの場合、BUFSIZE 値を変更する前に、物理リンクとそれに割り当てられた各論理リンクを停止してください。

物理リンクの両端にある IMS システムは、同じバッファ・サイズを指定する必要があります。バッファ・サイズが等しくない場合は、論理リンクの再開は失敗し、メッセージ DFS3218 が出力されます。

IMS は MSC リンク・バッファを、BUFSIZE パラメーターで指定されたサイズに初期設定します。

帯域幅モードを使用している場合、1024 の BUFSIZE 値は、1 つのバッファを使用して複数のメッセージを送信するには小さすぎます。少なくとも 4096 の値を指定してください。

個々の論理リンクのバッファ・サイズは、タイプ 2 コマンド UPDATE MSLINK NAME (*linkname*) SET(BUFSIZE(*new_bufsize*)) を使用して変更できます。

ICONPLKID()

TCP/IP 物理リンクの場合、IMS Connect が MSC 物理リンクを認識する、1 文字から 8 文字の英数字の ID を定義します。この ID は、IMS Connect に対して物理リンクを定義する MSC 構成ステートメントの LCLPLKID パラメーターで IMS Connect に対して定義された ID に一致していなければなりません。

ICONPLKID キーワードを使用して、MSC 物理リンクが別の IMS Connect MSC 構成ステートメントを参照するように変更することができます。

この ID は、MSLINK マクロの LCLPLKID キーワードで指定することもできます。

IMSCON()

TCP/IP 物理リンクの場合、この物理リンクの TCP/IP 接続を管理するローカル IMS Connect インスタンスの IMSplex 名を指定します。IMSCON には、1 文字から 8 文字の英数字値を指定できます。

IMSCON キーワードを使用して、MSC 物理リンクが使用する IMS Connect インスタンスを切り替えることができます。

MODETBL()

この物理リンクのデフォルトの VTAM ログオン・モード・テーブル項目 (ログオン・モード・テーブル) の名前を変更します。これは、この物理リンクに現在割り当てられている各論理リンクの名前を変更します。この名前は通常、システム定義で設定されます。このフィールドをヌル状態 (システム定義でモード・テーブル名が指定されなかった場合と同じ状態) にリセットするには、MODETBL() を指定します。

非 VTAM MSC リンクに対しては、SET(MODETBL) パラメーターは使用できません。

MODETBL 値を変更する前に、物理リンクとそれに割り当てられた各論理リンクを停止する必要があります。

MSPLINK()

この物理リンクの新しいリンク名 (1 から 8 文字の英数字) を指定します。このキーワードを使用して、予約リンクの名前を実名に変更し、それを活性化することもできます。MSPLINK() で指定される名前は固有でなければなりません。コマンドが正常に実行されると、NAME キーワードで指定された古い物理リンク名は無効になります。

MSPLINK 名を変更するには、1 つだけ NAME パラメーターを指定できます。

MSPLINK を変更する前に、物理リンクを停止する必要があります。

IMSRSC リポジトリが使用可能になっている環境で物理リンクに対してコマンドが正常に実行されると、以前の物理リンク名を参照する論理リンクが新しい物理リンク名を使用するように更新され、更新済みのマークと、エクスポートが必要であるというマークが付けられます。新規の物理リンクと更新された論理リンクは、次回の IMS チェックポイント時に自動的にエクスポートされます。以前の MSC 物理リンク名の定義が IMSRSC リポジトリに存在する場合には、DELETE DEFN コマンドを使用して削除する必要があります。

NODE()

VTAM 回線のリモート VTAM ノード (APPLID) 名 (1 から 8 文字の英数字) を指定します。このノードは、リンクの他方の端にあるリモート IMS システムの VTAM ノード名です。このノードは、リモート IMS システムの VTAM APPL ステートメント上のラベルです。XRF 複合システムと通信する MSC VTAM リンクの場合、ノード名は、パートナー XRF 複合システムに関連付けられている VTAM USERVAR でなければなりません。

NODE 値を変更する前に、物理リンクとそれに割り当てられた各論理リンクを停止する必要があります。

RMTIMS()

TCP/IP 物理リンクの場合、この物理リンクの接続先のリモート IMS システムを定義します。リモート IMS システムの IMSID を、1 文字から 8 文字の英数字で入力します。

RMTIMS キーワードを使用して、MSC 物理リンクが参照するリモート IMS システムを変更することができます。

SESSION()

TCP/IP および VTAM の物理リンク・タイプに限り、その物理リンクに対してアクティブにすることができる並列セッションの数を指定します。1 から 1018 の範囲内の値を入力します。

現在必要な数より大きな数を指定しておく、後でより多くの論理リンクを物理リンクに動的に割り当てることができます。

論理並列セッションは物理リンクと同じ量のストレージを制御ブロックとバッファに使用するので、多数の並列セッションを割り振ると、過度の量の共通ストレージ域が使用される場合があります。どれくらいの量の共通ストレージ域が必要になりそうかを事前に判別してください。

論理リンクが物理リンクに既に割り当てられていて、SESSION に対して指定した値が現在割り当てられている論理リンクの数より少ない場合、開始できる論理リンクの数は新しく指定された SESSION 値までに限られます。物理リンクに割り当てられた残りの論理リンクを開始することはできません。

START()

開始する属性を指定します。

GENLOGON

TCP/IP 汎用リソース・グループに参加している IMS システムの場合、このコマンドを処理する IMS システムが、指定された物理リンク上の汎用リソース・グループに対する論理リンク接続要求の受け入れを再開できるようにします。

START(GENLOGON) は LOGON から独立しています。LOGON は、TCP/IP 汎用リソース・グループを使用しないリンクに対して使用されます。STOP(LOGON) が以前に発行されている場合は、GENLOGON パラメーターとは別にまたは一緒に START(LOGON) を発行しないと、IMS システムは、TCP/IP 汎用リソースを使用しない論理リンクの開始および受け入れを再開することはできません。

LOGON

MSC の TCP/IP 物理リンク・タイプおよび VTAM 物理リンク・タイプ専用。TCP/IP タイプのリンクの場合、START(LOGON) は、物理リンクに割り当てられた論理リンクを開始できるようにします。VTAM タイプのリンクの場合、START(LOGON) は、論理リンクが物理リンクにログオンできるようにします。START(LOGON) と STOP(LOGON) は相互に排他的です。

START(LOGON) は、GENLOGON から独立しています。GENLOGON は、TCP/IP 汎用リソース・グループを使用するリンクに対して使用されます。STOP(GENLOGON) が以前に発行されている場合は、LOGON パラメーターとは別にまたは一緒に START(GENLOGON) を発行しないと、IMS システムは TCP/IP 汎用リソースを使用する論理リンクの開始および受け入れを再開することはできません。

STOP()

停止する属性を指定します。

GENLOGON

TCP/IP 汎用リソース・グループに参加している IMS システムの場合、このコマンドを処理する IMS システムが、指定された TCP/IP 物理リンクを開始したり、受け入れたりするのを阻止します。

STOP(GENLOGON) キーワードは、TCP/IP 汎用リソース・グループに参加している IMS システムに定義された TCP/IP タイプの物理リンクにのみ適用されます。

STOP(GENLOGON) は、既にセッション中のリンクには影響を与えません。

STOP(GENLOGON) は、ローカル IMSplex 内で、リモート・リンク再始動からの再始動メッセージが受け入れられる場所を制御するために使用しま

す。リンク類似性を確立する必要がある IMS システムを除き、TCP/IP 汎用リソース・グループ内のすべての IMS システムに対して STOP(GENLOGON) を発行します。

UPDATE MSPLINK NAME(*plnkname*) STOP(GENLOGON) コマンドが発行された後、QUERY MSPLINK は、STOGENLGN のローカル状況を表示します。

STOP(GENLOGON) は、IMS システムが汎用リソース・グループを使用しないリンクを受け入れることは阻止しません。GENLOGON は LOGON から独立しており、STOP() キーワードで両方を一緒に指定すると、IMS システムは、TCP/IP 汎用リソースを使用するかどうかに関係なく、すべてのリンクの開始または受け入れを阻止できます。

LOGON

MSC の TCP/IP 物理リンク・タイプおよび VTAM 物理リンク・タイプ専用。

TCP/IP リンクの場合、STOP(LOGON) は、このコマンドを処理する IMS システムが、物理リンクを開始したり、リンク・パートナーからの物理リンクに対する開始要求を受け入れたりするのを阻止します。LOGON キーワードは、TCP/IP 汎用リソース用に使用されている TCP/IP 物理リンクには影響を与えません。

LOGON キーワードは、TCP/IP 汎用リソースで使用される物理リンクに対して使用する GENLOGON キーワードから独立しています。STOP() キーワードで両方のキーワードを一緒に指定すると、IMS システムは、TCP/IP 汎用リソースを使用するかどうかに関係なく、すべてのリンクの開始または受け入れを阻止できます。

VTAM リンクの場合、STOP(LOGON) は、物理リンクへのログオンを阻止します。START(LOGON) と STOP(LOGON) は相互に排他的です。

UPDATE MSPLINK NAME(*plnkname*) STOP(LOGON) コマンドが発行された後、QUERY MSPLINK コマンドは STOLGN のローカル状況を表示します。

STOP(LOGON) は、既にセッション中のリンクには影響を与えません。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。このコマンドは DB/DC および DCCTL システムに適用されます。

このコマンドの構文は XML で定義されており、OM と通信する自動化プログラムで使用できます。

TYPE は更新できません。MSC 物理リンク・タイプを更新したい場合は、最初に DELETE MSPLINK コマンドでそのリンクを削除し、次に CREATE MSPLINK SET(TYPE()) コマンドを使用して再びリンクを作成します。

MTM タイプのリンクを使用すると、同じ z/OS システム内で稼働している IMS システム同士を、ハードウェア・リンクを使用せずに接続できます。

属性 ADDR、ASR、BACKUP、BUFSIZE、ICONPLKID、IMSCON、MODETBL、MSPLINK、NODE、RMTIMS、および SESSION に対して UPDATE MSPLINK を実行すると、MSC 物理リンクにはエクスポートが必要であるというマークが付けられます。これは、QUERY MSPLINK SHOW (EXPORTNEEDED) コマンドを使用して表示できます。IMSRSC リポジトリが使用可能になっている場合は、次回の IMS チェックポイント時に MSC 物理リンクが自動的にエクスポートされます。

同等の IMS タイプ 1 コマンド

以下の表は、各種の UPDATE MSPLINK コマンドと、類似の機能を実行するタイプ 1 IMS コマンドを示しています。

表 482. UPDATE MSPLINK コマンドと同等のタイプ 1 コマンド

UPDATE MSPLINK コマンド	類似の IMS タイプ 1 コマンド
UPDATE MSPLINK NAME(<i>msplinkname</i>) SET(ASR(ON OFF))	類似のタイプ 1 IMS コマンドが存在しません。
UPDATE MSPLINK NAME(<i>msplinkname</i>) SET(ICONPLKID(<i>iconplkid</i>))	類似のタイプ 1 IMS コマンドが存在しません。
UPDATE MSPLINK NAME(<i>msplinkname</i>) SET(IMSCON(<i>imsconname</i>))	類似のタイプ 1 IMS コマンドが存在しません。
UPDATE MSPLINK NAME(<i>msplinkname</i>) SET(MODETBL(<i>modetablename</i>))	類似のタイプ 1 IMS コマンドが存在しません。
UPDATE MSPLINK NAME(<i>msplinkname</i>) SET(MSPLINK(<i>new_msplinkname</i>))	類似のタイプ 1 IMS コマンドが存在しません。
UPDATE MSPLINK NAME(<i>msplinkname</i>) SET(NODE(<i>VTAM_node_name</i>))	類似のタイプ 1 IMS コマンドが存在しません。
UPDATE MSPLINK NAME(<i>msplinkname</i>) SET(RMTIMS(<i>rmtims</i>))	類似のタイプ 1 IMS コマンドが存在しません。
UPDATE MSPLINK NAME(<i>msplinkname</i> *) START(LOGON)	/RSTART MSPLINK <i>msplinkname</i> ALL
UPDATE MSPLINK NAME(<i>msplinkname</i> *) STOP(LOGON)	/PSTOP MSPLINK <i>msplinkname</i> ALL
UPDATE MSPLINK NAME(<i>msplinkname</i> *) START(GENLOGON)	類似のタイプ 1 IMS コマンドが存在しません。
UPDATE MSPLINK NAME(<i>msplinkname</i> *) STOP(GENLOGON)	類似のタイプ 1 IMS コマンドが存在しません。

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。ゼロ以外の完了コードの場合に表示される出力フィールドには *error* が表示されます。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されていません。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 483. UPDATE MSPLINK コマンドの出力フィールドの説明

ショート・ラベル	キーワード	意味
CC	N/A	完了コード。
CCTXT	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
MBR	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。
MSPL	N/A	物理リンク名。

戻りコード、理由コード、および完了コード

UPDATE MSPLINK コマンドの結果として戻される戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 484. UPDATE MSPLINK コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE MSPLINK コマンドは正常に完了しました。
X'00000008'	X'00002040'	UPDATE MSPLINK コマンドで、複数のフィルター値が指定されています。
	X'00002154'	ADDR 値は無効です。
	X'00002164'	ノードは、ローカル VTAM ノード名であってはなりません。
	X'00002169'	RMTIMS 値は、ローカル・システム ID と同じにすることはできません。
X'0000216A'	X'0000216A'	SESSION 値は無効です。
	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。完了コードについて詳しくは、以下の表を参照してください。
X'0000000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。完了コードについて詳しくは、以下の表を参照してください。
	X'0000400C'	XRF 代替システムではコマンドは無効です。
X'00000010'	X'0000402E'	コマンドは XRF システム上でのみ有効です。
	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できなかったため、UPDATE MSPLINK コマンド処理は終了しました。
X'00000014'	X'00005008'	DFSPOOL ストレージを取得できませんでした。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 485. UPDATE MSPLINK コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		UPDATE MSPLINK コマンドは、リソースに対して正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	MSPLINK 名が無効であるか、指定されたワイルドカード・パラメーターがどのリソース名にも一致しません。
11		MSPLINK() で指定されたリンク名は、既に物理リンクとして存在します。
8D		物理リンクが停止されていません。指定された更新のためには、リンクが停止している必要があります。
100	INV SET KEYWORD FOR LINK TYPE	SET() で指定されたキーワードは、対応する物理リンク・タイプに対して無効です。
10C	INVALID START/STOP FOR LINK TYPE	START() または STOP() で指定されたキーワードは、対応する物理リンク・タイプに対して無効です。
200	NO DDNAME AVAILABLE FOR CRE	DFSM00000 から DFSM99999 までのすべての DDNAME が使用中です。
201	UNABLE TO ALLOCATE DEVICE	CTC 装置の動的割り振りが失敗しました。
202	UNABLE TO OPEN CTC DEVICE	CTC DCB のオープンが失敗しました。
203	ADDR IS NOT A CTC DEVICE	指定されたアドレスにある装置が CTC アダプターではありません。
204	UNAVAILABLE CTC DEVICE	ADDR パラメーターで指定されたアドレスでは CTC 装置が使用可能ではありません。
21B	UNABLE TO DEALLOCATE DEVICE	CTC 装置の動的割り振り解除が失敗しました。
21C	UNABLE TO CLOSE CTC DEVICE	CTC DCB のクローズに失敗しました。

例

以下に示すのは UPDATE MSPLINK コマンドの例です。

UPDATE MSPLINK コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPD MSPLINK NAME(STAR1) SET(MODETBL(LOGON12B), NODE(APPL12B), ASR(ON))
```

TSO SPOC 出力:

```
MSName  MbrName CC
STAR1   IMSA     0
```

説明: この UPDATE MSPLINK コマンドは、以下のことを行うために発行されています。

1. VTAM ログオン・モード・テーブル項目を LOGON12B に変更する。
2. リンクの他方の端にあるリモート・システムの VTAM ノード名を APPL12B に変更する。
3. システム定義で設定された自動セッション再始動定義をオーバーライドする。

UPDATE MSPLINK コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
UPD MSPLINK NAME(STAR1, STAR2, STAR2B*) START(LOGON)
```

TSO SPOC 出力:

MSName	MbrName	CC	CCTEXT
STAR1	IMSA	0	
STAR2	IMSA	10	NOT FOUND
STAR2B	IMSA	0	
STAR2B11	IMSA	0	
STAR2B12	IMSA	0	

説明: このコマンドは、指定された物理リンク STAR1、STAR2B、STAR2B11、および STAR2B12 のログオンを可能にします。STAR2 は不明です。

UPDATE MSPLINK コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
UPD MSPLINK NAME(PLNK12TA) STOP(LOGON,GENLOGON)
```

TSO SPOC 出力:

MSName	MbrName	CC	CCTEXT
PLNK12TA	IMS1	0	

説明: このコマンドは、IMS1 が、指定された物理リンク PLNK12TA 上の論理リンクを開始したり、受け入れたりすることを阻止します。GENLOGON は、TCP/IP 汎用リソースを使用するリンクに適用されます。LOGON パラメーターは、明示的に IMS1 を指定するリンクに適用されます。

IMS1 で、次の QUERY MSPLINK NAME(PLNK12TA) SHOW(ALL) コマンドを発行すると、以下のような状況が返されます。

MSPLink	MbrName	CC	Type	RmtIms	LclImsCon	LclPlkID	LclStat
PLNK12TA	IMS1	0	TCPIP	IMS2	HWS1	MSC12	STOGENLGN

UPDATE MSPLINK コマンドの例 4

TSO SPOC 入力:

```
UPD MSPLINK NAME(*) STOP(LOGON,GENLOGON)
```

TSO SPOC 出力:

```
MSPLink MbrName CC CText
PLNK12C IMS1 10C INVALID START/STOP FOR LINK TYPE
PLNK12M IMS1 10C INVALID START/STOP FOR LINK TYPE
PLNK12TA IMS1 0
PLNK12V IMS1 0
```

説明:


上の例では、各リンクは異なる MSC 物理リンク・タイプです。

- PLNK12C は CTC リンク
- PLNK12M は MTM リンク
- PLNK12TA は TCPIP リンク
- PLNK12V は VTAM リンク


CTC および MTM のリンク・タイプでは、コマンドはリジェクトされます。これらは LOGON および GENLOGON のコマンド・オプションをサポートしないためです。コマンドが処理された後は、以下の QUERY MSPLINK NAME(*) SHOW(STATUS) コマンドの出力例に示されているように、TCPIP タイプおよび VTAM タイプのリンクのみが STOGENLGN および STOLGN の状況を示します。


```
MSPLink MbrName CC Lc1Stat
PLNK12C IMS1 0
PLNK12M IMS1 0
PLNK12TA IMS1 0 STOGENLGN
PLNK12V IMS1 0 STOLGN
```

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

 複数のリソースに類似機能があるコマンドのリスト (オペレーションおよびオートメーション)

UPDATE ODBM コマンド

UPDATE ODBM コマンドは、Open Database Manager (ODBM) 設定を変更するために使用します。

サブセクション:

- 1322 ページの『UPDATE ODBM START(CONNECTION) コマンド』
- 1325 ページの『UPDATE ODBM START(TRACE) コマンド』
- 1328 ページの『UPDATE ODBM STOP(CONNECTION) コマンド』
- 1331 ページの『UPDATE ODBM STOP(TRACE) コマンド』
- 1334 ページの『UPDATE ODBM TYPE(CONFIG) コマンド』

UPDATE ODBM START(CONNECTION) コマンド

UPDATE ODBM START(CONNECTION) コマンドは、データ・ストアおよび Open Database Manager (ODBM) の別名への接続を開始するために使用します。

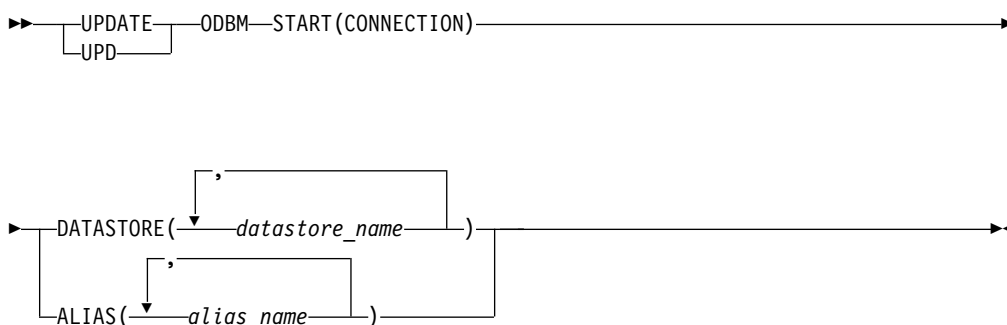
サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 1323 ページの『使用上の注意』
- 1323 ページの『出力フィールド』
- 1323 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1324 ページの『例』

環境

UPDATE ODBM コマンドは、CSL Open Database Manager (ODBM) に対してのみ適用可能です。このコマンドを発行するには、CSL type-2 コマンド環境が使用可能に設定されており、ODBM インスタンスがアクティブである必要があります。

構文



キーワード

以下のキーワードは、UPDATE ODBM START(CONNECTION) コマンドに有効です。

ALIAS()

1 から 4 文字の別名を指定します。別名にはワイルドカードを指定することができます。複数の別名を指定することができます。

ALIAS() にはデフォルトがありません。ALIAS キーワードを指定すると、*alias_name* で指定されたすべての別名への ODBM 接続が開始されます。

ALIAS() と DATASTORE() は相互に排他的です。

DATASTORE()

1 から 4 文字のデータ・ストア名を指定します。データ・ストア名にはワイルドカードを指定することができます。複数のデータ・ストア名を指定することができます。

DATASTORE() にはデフォルトがありません。DATASTORE キーワードを指定すると、*datastore_name* で指定されたすべてのデータ・ストアと、それらに関連付けられた別名への ODBM 接続が開始されます。DATASTORE() と ALIAS() は相互に排他的です。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

このコマンドの構文は XML で定義されており、OM と通信する自動化プログラムで使用できます。

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。ゼロ以外の完了コードの場合に表示される出力フィールドには *error* が表示されます。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されていません。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 486. UPDATE ODBM START(CONNECTION) コマンドの出力フィールドの説明

ショート・ラベル	キーワード	意味
ALIAS	ALIAS	IMS データ・ストア接続に関連付けられた 1 から 4 文字の別名。
CC	N/A	完了コード。
CCTXT	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
DSTR	N/A	データ・ストア名。
MBR	N/A	コマンドを処理した ODBM メンバーの名前。

戻りコード、理由コード、および完了コード

UPDATE ODBM START(CONNECTION) コマンドの結果として戻される戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 487. UPDATE ODBM START(CONNECTION) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPD ODBM START(CONNECTION) コマンドは正常に完了しました。

表 487. UPDATE ODBM START(CONNECTION) コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'04000008'	X'00002004'	無効なコマンド・キーワードまたは無効なコマンド・キーワードの組み合わせ。
X'04000008'	X'00002008'	キーワードの数が足りません。
X'04000008'	X'00002014'	リソース名の無効文字。
X'04000008'	X'0000203C'	無効なパラメーターが指定されました。
X'0400000C'	X'00003000'	At least one request was successful.
X'0400000C'	X'00003004'	No requests were successful.
X'04000014'	X'00005034'	OM 応答バッファ要求は失敗しました。
X'04000014'	X'00005038'	CSLDCMD0 GETBUF 要求はコマンド・バッファの取得に失敗しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 488. UPDATE ODBM START(CONNECTION) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		UPDATE ODBM START(CONNECTION) コマンドは正常に完了しました。
1	INVALID CHARACTER, RESOURCE NAME	コマンド入力のリソース名に無効文字があります。
3	DATASTORE NOT AVAILABLE	データ・ストア接続を開始することに失敗しました。データ・ストアが使用不能です。
4	DATASTORE CONNECTION FAILED	データ・ストア接続を開始することに失敗しました。この完了コードにはメッセージ CSL4006W が付随し、AIB 戻りコード、AIB 理由コード、および AIB エラー拡張について説明しています (注を参照)。
5	DATASTORE NOT RRS CAPABLE	データ・ストア接続を開始することに失敗しました。データ・ストアが RRS に対応していません。
10	NO RESOURCES FOUND	リソースが見つからなかった。

注: コマンドは、<rsp> および </rsp> タグでカプセル化されます。メッセージ CSL4006W は、<msg> および </msg> タグの中に返されます。

例

UPDATE ODBM START(CONNECTION) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

UPD ODBM START(CONNECTION) DATASTORE(*)

TSO SPOC 出力:

MbrName	DatastoreName	CC
ODBM010D	IMS1	0
ODBM010D	IMS2	0
ODBM020D	IMS3	0

説明: UPDATE コマンドは、ODBM に認識されているすべてのデータ・ストアとの接続を開始します。

UPDATE ODBM START(CONNECTION) コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
UPD ODBM START(CONNECTION) ALIAS(IO1A,IO1B)
```

TSO SPOC 出力:

MbrName	AliasName	CC	DatastoreName
ODBM010D	IO1A	0	IMS1
ODBM010D	IO1B	0	IMS1

説明: UPDATE コマンドは、別名が IO1A または IO1B である ODBM メンバーとの ODBM 接続を開始します。

UPDATE ODBM START(TRACE) コマンド

UPDATE ODBM START(TRACE) コマンドは、ODBM トレースの開始を要求するために使用します。

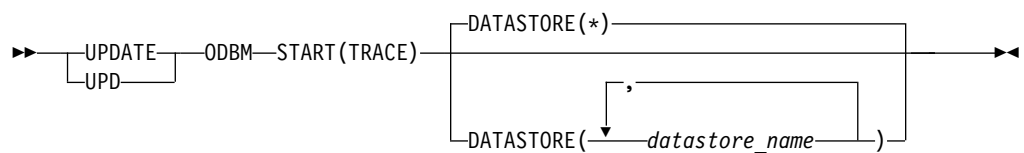
サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 1326 ページの『キーワード』
- 1326 ページの『使用上の注意』
- 1326 ページの『出力フィールド』
- 1326 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1327 ページの『例』

環境

UPDATE ODBM コマンドは、CSL Open Database Manager (ODBM) に対してのみ適用可能です。このコマンドを発行するには、CSL type-2 コマンド環境が使用可能に設定されており、ODBM インスタンスがアクティブである必要があります。

構文



キーワード

以下のキーワードは、UPDATE ODBM START(TRACE) コマンドに有効です。

DATASTORE()

1 から 4 文字のデータ・ストア名を指定します。データ・ストア名にはワイルドカードを指定することができます。*datastore_name* は、反復可能なパラメータです。デフォルトは DATASTORE(*) です。これは、ODBM に認識されているすべてのデータ・ストア名に適用されます。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

このコマンドの構文は XML で定義されており、OM と通信する自動化プログラムで使用できます。

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。ゼロ以外の完了コードの場合に表示される出力フィールドには *error* が表示されます。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されていません。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 489. UPDATE ODBM START(TRACE) コマンドの出力フィールドの説明

ショート・ラベル	キーワード	意味
ALIAS	N/A	別名。
CC	N/A	完了コード。
CCTXT	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
DSTR	N/A	データ・ストア名。
MBR	N/A	コマンドを処理した ODBM メンバーの名前。

戻りコード、理由コード、および完了コード

UPDATE ODBM START(TRACE) コマンドの結果として戻される戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 490. UPDATE ODBM START(TRACE) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE ODBM START(TRACE) コマンドは正常に完了しました。
X'04000008'	X'00002004'	無効なコマンド・キーワードまたは無効なコマンド・キーワードの組み合わせ。
X'04000008'	X'00002008'	キーワードの数が足りません。
X'04000008'	X'00002014'	リソース名の無効文字。
X'04000008'	X'0000203C'	無効なパラメーターが指定されました。
X'0400000C'	X'00003000'	At least one request was successful.
X'0400000C'	X'00003004'	No requests were successful.
X'04000014'	X'00005034'	OM 応答バッファ要求は失敗しました。
X'04000014'	X'00005038'	CSLDCMD0 GETBUF 要求はコマンド・バッファの取得に失敗しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 491. UPDATE ODBM START(TRACE) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		UPDATE ODBM START(TRACE) コマンドは正常に完了しました。
1	INVALID CHARACTER, RESOURCE NAME	コマンド入力のリソース名に無効文字があります。
10	NO RESOURCES FOUND	リソースが見つからなかった。

例

UPDATE ODBM START(TRACE) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPD ODBM START(TRACE) DATASTORE(IMS1,IMS2)
```

TSO SPOC 出力:

MbrName	DatastoreName	CC
ODBM010D	IMS1	0
ODBM010D	IMS2	0

説明: UPDATE コマンドは、データ・ストア IMS1 および IMS2 の ODBM トレースを開始します。

UPDATE ODBM START(TRACE) コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

UPD ODBM START(TRACE) DATASTORE(*)

TSO SPOC 出力:

MbrName	DatastoreName	CC
ODBM010D	IMS1	0
ODBM010D	IMS2	0
ODBM020D	IMS3	0

説明: UPDATE コマンドは、ODBM に認識されているすべてのデータ・ストアの ODBM トレースを開始します。

UPDATE ODBM STOP(CONNECTION) コマンド

UPDATE ODBM STOP(CONNECTION) コマンドは、データ・ストアおよび Open Database Manager (ODBM) の別名への接続を停止するために使用します。

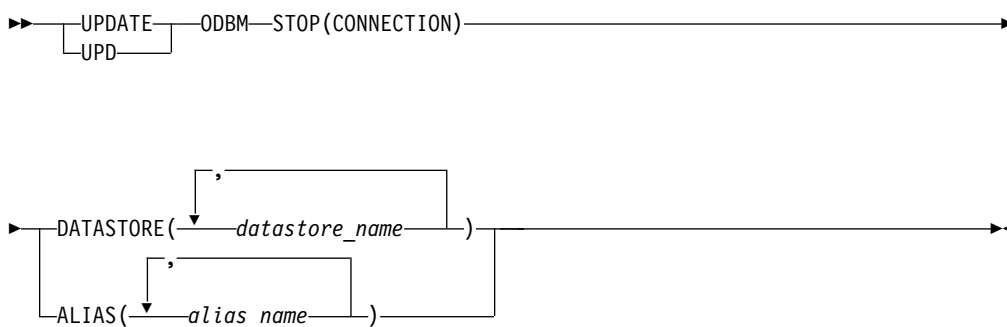
サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 1329 ページの『使用上の注意』
- 1329 ページの『出力フィールド』
- 1330 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1331 ページの『例』

環境

UPDATE ODBM コマンドは、CSL Open Database Manager (ODBM) に対してのみ適用可能です。このコマンドを発行するには、CSL type-2 コマンド環境が使用可能に設定されており、ODBM インスタンスがアクティブである必要があります。

構文



キーワード

以下のキーワードは、UPDATE ODBM STOP(CONNECTION) コマンドに有効です。

ALIAS()

1 から 4 文字の別名を指定します。別名にはワイルドカードを指定することができます。複数の別名を指定することができます。

ALIAS() にはデフォルトがありません。ALIAS キーワードを指定すると、*alias_name* で指定されたすべての別名への ODBM 接続が停止されます。ALIAS() と DATASTORE() は相互に排他的です。

DATASTORE()

1 から 4 文字のデータ・ストア名を指定します。データ・ストア名にはワイルドカードを指定することができます。複数のデータ・ストアを指定することができます。

DATASTORE() にはデフォルトがありません。DATASTORE キーワードを指定すると、*datastore_name* で指定されたすべてのデータ・ストアと、それらに関連付けられた別名への ODBM 接続が停止されます。DATASTORE() と ALIAS() は相互に排他的です。

データ・ストアとの接続を開始するには、UPDATE ODBM START(CONNECTION) DATASTORE() コマンドを発行する必要があります。UPDATE ODBM STOP(CONNECTION) DATASTORE() コマンドの発行後に実際のデータ・ストア・サブシステムがリサイクルされても、ODBM は、UPDATE ODBM START(CONNECTION) DATASTORE() コマンドが発行されるまで、データ・ストアとの接続を試行しません。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

このコマンドの構文は XML で定義されており、OM と通信する自動化プログラムで使用できます。

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。ゼロ以外の完了コードの場合に表示される出力フィールドには *error* が表示されます。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されていません。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 492. UPDATE ODBM STOP(CONNECTION) コマンドの出力フィールドの説明

ショート・ラベル	キーワード	意味
ALIAS	ALIAS	IMS データ・ストア接続に関連付けられた 1 から 4 文字の別名。
CC	N/A	完了コード。
CCTXT	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。

表 492. UPDATE ODBM STOP(CONNECTION) コマンドの出力フィールドの説明 (続き)

ショート・ラベル	キーワード	意味
DSTR	N/A	データ・ストア名。
MBR	N/A	コマンドを処理した ODBM メンバーの名前。

戻りコード、理由コード、および完了コード

UPDATE ODBM STOP(CONNECTION) コマンドの結果として返される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 493. UPDATE ODBM STOP(CONNECTION) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE ODBM STOP(CONNECTION) コマンドは正常に完了しました。
X'04000008'	X'00002004'	無効なコマンド・キーワードまたは無効なコマンド・キーワードの組み合わせ。
X'04000008'	X'00002008'	キーワードの数が足りません。
X'04000008'	X'00002014'	リソース名の無効文字。
X'04000008'	X'0000203C'	無効なパラメーターが指定されました。
X'0400000C'	X'00003000'	At least one request was successful.
X'0400000C'	X'00003004'	No requests were successful.
X'04000014'	X'00005034'	OM 応答バッファ要求は失敗しました。
X'04000014'	X'00005038'	CSLDCMD0 GETBUF 要求はコマンド・バッファの取得に失敗しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 494. UPDATE ODBM STOP(CONNECTION) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		UPDATE ODBM STOP(CONNECTION) コマンドは正常に完了しました。
1	INVALID CHARACTER, RESOURCE NAME	コマンド入力のリソース名に無効文字があります。

表 494. UPDATE ODBM STOP(CONNECTION) コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
6	DATASTORE DISCONNECT FAILED	データ・ストア接続を停止することに失敗しました。この完了コードにはメッセージ CSL4007W が付随し、AIB 戻りコード、AIB 理由コード、および AIB エラー・テキストについて説明しています (注を参照)。
10	NO RESOURCES FOUND	リソースが見つからなかった。

注: コマンドは、<rsp> および </rsp> タグでカプセル化されます。メッセージ CSL4007W は、<msg> および </msg> タグの中に返されます。

例

UPDATE ODBM STOP(CONNECTION) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPD ODBM STOP(CONNECTION) DATASTORE(IMS*)
```

TSO SPOC 出力:

MbrName	DatastoreName	CC
ODBM010D	IMS1	0
ODBM010D	IMS2	0
ODBM020D	IMS3	0

説明: UPDATE コマンドは、名前が「IMS」から始まるすべてのデータ・ストアとの接続を停止します。

UPDATE ODBM STOP(CONNECTION) コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
UPD ODBM STOP(CONNECTION) ALIAS(IO*)
```

TSO SPOC 出力:

MbrName	AliasName	CC	DatastoreName
ODBM010D	I01A	0	IMS1
ODBM010D	I01B	0	IMS1
ODBM010D	I02A	0	IMS2
ODBM010D	I02B	0	IMS2
ODBM020D	I03A	0	IMS3
ODBM020D	I03B	0	IMS3

説明: UPDATE コマンドは、別名が「IO」から始まる ODBM メンバーとの ODBM 接続を停止します。

UPDATE ODBM STOP(TRACE) コマンド

UPDATE ODBM STOP(TRACE) コマンドは、ODBM トレースの停止を要求するために使用します。

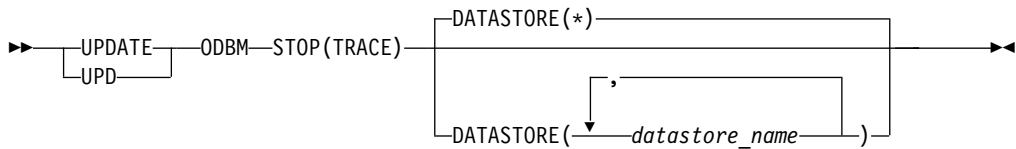
サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 『使用上の注意』
- 『出力フィールド』
- 1333 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1334 ページの『例』

環境

UPDATE ODBM コマンドは、CSL Open Database Manager (ODBM) に対してのみ適用可能です。このコマンドを発行するには、CSL type-2 コマンド環境が使用可能に設定されており、ODBM インスタンスがアクティブである必要があります。

構文



キーワード

以下のキーワードは、UPDATE ODBM STOP(TRACE) コマンドに有効です。

DATASTORE()

1 から 4 文字のデータ・ストア名を指定します。データ・ストア名にはワイルドカードを指定することができます。*datastore_name* は、反復可能なパラメータです。デフォルトは DATASTORE(*) です。これは、ODBM に認識されているすべてのデータ・ストア名に適用されます。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

このコマンドの構文は XML で定義されており、OM と通信する自動化プログラムで使用できます。

出力フィールド

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。ゼロ以外の完了コードの場合に表示される出力フィールドには *error* が表示されます。

N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されていません。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 495. UPDATE ODBM STOP(TRACE) コマンドの出力フィールドの説明

ショート・ラベル	キーワード	意味
ALIAS	N/A	別名。
CC	N/A	完了コード。
CCTXT	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
DSTR	N/A	データ・ストア名。
MBR	N/A	コマンドを処理した ODBM メンバーの名前。

戻りコード、理由コード、および完了コード

UPDATE ODBM STOP(TRACE) コマンドの結果として戻される戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 496. UPDATE ODBM STOP(TRACE) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE ODBM STOP(TRACE) コマンドは正常に完了しました。
X'04000008'	X'00002004'	無効なコマンド・キーワードまたは無効なコマンド・キーワードの組み合わせ。
X'04000008'	X'00002008'	キーワードの数が足りません。
X'04000008'	X'00002014'	リソース名の無効文字。
X'04000008'	X'0000203C'	無効なパラメーターが指定されました。
X'0400000C'	X'00003000'	At least one request was successful.
X'0400000C'	X'00003004'	No requests were successful.
X'04000014'	X'00005034'	OM 応答バッファ要求は失敗しました。
X'04000014'	X'00005038'	CSLDCMD0 GETBUF 要求はコマンド・バッファの取得に失敗しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 497. UPDATE ODBM STOP(TRACE) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		UPDATE ODBM STOP(TRACE) コマンドは正常に完了しました。

表 497. UPDATE ODBM STOP(TRACE) コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
1	INVALID CHARACTER, RESOURCE NAME	コマンド入力のリソース名に無効文字があります。
10	NO RESOURCES FOUND	リソースが見つからなかった。

例

UPDATE ODBM STOP(TRACE) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPD ODBM STOP(TRACE) DATASTORE(*)
```

TSO SPOC 出力:

MbrName	DatastoreName	CC
ODBM010D	IMS1	0
ODBM010D	IMS2	0
ODBM020D	IMS3	0

説明: UPDATE コマンドは、ODBM に認識されているすべてのデータ・ストアの ODBM トレースを停止します。

UPDATE ODBM TYPE(CONFIG) コマンド

UPDATE ODBM TYPE(CONFIG) コマンドは、アクティブな ODBM 構成を更新するために使用します。

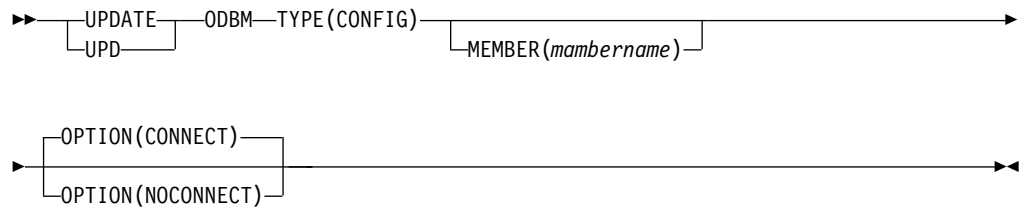
サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 1335 ページの『キーワード』
- 1335 ページの『使用上の注意』
- 1336 ページの『出力フィールド』
- 1336 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1338 ページの『例』

環境

UPDATE ODBM コマンドは、CSL Open Database Manager (ODBM) に対してのみ適用可能です。このコマンドを発行するには、CSL type-2 コマンド環境が使用可能に設定されており、ODBM インスタンスがアクティブである必要があります。

構文



キーワード

以下のキーワードは、UPDATE ODBM TYPE(CONFIG) コマンドに有効です。

MEMBER()

3 文字の CSLDCxxx 接尾部を指定します。これはアクティブな ODBM 構成を更新するために使用する ODBM 構成の PROCLIB メンバーを識別します。デフォルトは現行 CSLDCxxx メンバーです。

注: 新しい CSLDCxxx メンバーを使用してアクティブな ODBM 構成を更新する場合は、その新規メンバーが現行 ODBM 構成 PROCLIB メンバーになります。また、ODBM の再始動時に、ODBMCFG= パラメーターを EXEC ステートメント上または、CSLDIxxx 初期設定 PROCLIB メンバー内で使用すると、ODBM が構成されます。

OPTION()

アクティブな ODBM 構成の更新後に、データ・ストアとの接続を試行するかどうかを指定します。

CONNECT

アクティブな ODBM 構成の更新後に、新しい構成内のすべてのデータ・ストアと接続し、それらのデータ・ストアに関連付けられたすべての別名を使用可能にすることを指定します。CONNECT がデフォルトです。

NOCONNECT

アクティブな ODBM 構成の更新後に、接続を試行しないことを指定します。データ・ストアとの接続を開始するには、UPDATE ODBM START(CONNECTION) DATASTORE() コマンドを発行する必要があります。UPDATE ODBM TYPE(CONFIG) OPTION(NOCONNECT) コマンドの発行後に実際のデータ・ストア・サブシステムが始動またはリサイクルされても、ODBM は、UPDATE ODBM START(CONNECTION) DATASTORE() コマンドが発行されるまで、データ・ストアとの接続を試行しません。

TYPE(CONFIG)

アクティブな ODBM 構成を更新することを指定します。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ発行できます。

このコマンドの構文は XML で定義されており、OM と通信する自動化プログラムで使用できます。

UPDATE ODBM TYPE(CONFIG) コマンドを使用すると、現行または代替の CSLDCxxx ODBM 構成 PROCLIB メンバーの更新済みコピーをロードすることで、ユーザーはアクティブな ODBM 構成を更新できます。

UPD ODBM TYPE(CONFIG) コマンドを処理する前に、このコマンドが経路指定されるすべての ODBM ですべてのデータ・ストア接続を停止する必要があります。

出力フィールド

以下の表は、UPDATE ODBM の出力フィールドを示します。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。ゼロ以外の完了コードの場合に表示される出力フィールドには *error* が表示されます。N/A (適用外) は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されていません。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 498. UPDATE ODBM TYPE(CONFIG) コマンドの出力フィールドの説明

ショート・ラベル	キーワード	意味
CC	N/A	完了コード。
CCTXT	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
CFG	N/A	新規アクティブ構成を確立するために使用される ODBM 構成 PROCLIB メンバー (CSLDCxxx)。
MBR	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。出力行を作成した ODBM の ODBM ID。

戻りコード、理由コード、および完了コード

UPDATE ODBM TYPE(CONFIG) コマンドの結果として返される可能性のある戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 499. UPDATE ODBM TYPE(CONFIG) コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE ODBM TYPE(CONFIG) コマンドは正常に完了しました。
X'04000008'	X'00002004'	無効なコマンド・キーワードまたは無効なコマンド・キーワードの組み合わせ。

表 499. UPDATE ODBM TYPE(CONFIG) コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'04000008'	X'00002008'	キーワードの数が足りません。
X'04000008'	X'00002014'	リソース名の無効文字。
X'04000008'	X'0000203C'	無効なパラメーターが指定されました。
X'0400000C'	X'00003000'	At least one request was successful.
X'0400000C'	X'00003004'	No requests were successful.
X'04000014'	X'00005000'	CSLDALCB 割り振りが失敗しました。
X'04000014'	X'0000500C'	CSLDDSCB 割り振りが失敗しました。
X'04000014'	X'00005010'	BPEGETM が構文解析作業域の獲得に失敗しました。
X'04000014'	X'00005028'	BPEPARSE 内部エラー。
X'04000014'	X'00005034'	OM 応答バッファ要求は失敗しました。
X'04000014'	X'00005038'	CSLDCMD0 GETBUF 要求はコマンド・バッファの取得に失敗しました。
X'04000014'	X'00005088'	CSLDPRP 割り振りが失敗しました。
X'04000014'	X'0000508C'	BPERDPDS 内部障害。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 500. UPDATE ODBM TYPE(CONFIG) コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、UPDATE ODBM TYPE(CONFIG) コマンドは正常に完了しました。
1	INVALID CHARACTER, RESOURCE NAME	コマンド入力のリソース名に無効文字があります。
3	DATASTORE NOT AVAILABLE	データ・ストア接続を開始することに失敗しました。データ・ストアが使用不能です。
4	DATASTORE CONNECTION FAILED	データ・ストア接続を開始することに失敗しました。この完了コードにはメッセージ CSL4006W が付随し、AIB 戻りコード、AIB 理由コード、および AIB エラー・テキストについて説明しています。
5	DATASTORE NOT RRS CAPABLE	データ・ストア接続を開始することに失敗しました。データ・ストアが RRS に対応していません。
8	CONFIGURATION FILE NOT FOUND	CSLDCxxx IMS PROCLIB メンバーを見つけることができませんでした。
9	THIS ODBM NOT DEFINED	CSLDCxxx IMS PROCLIB メンバー内で、現行 ODBM 定義を見つけることができませんでした。
A	DUPLICATE ODBM DEFINED	現行 ODBM に対して複数の ODBM 定義が検出されました。

表 500. UPDATE ODBM TYPE(CONFIG) コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
B	DATASTORES NOT DEFINED	現行 ODBM 定義にデータ・ストアが定義されていません。
C	DUPLICATE DATASTORES DEFINED	現行 ODBM 定義内でデータ・ストア名が重複しています。
D	DATASTORE NAME INVALID	現行 ODBM 定義内のデータ・ストア名に無効文字が含まれています。
E	DUPLICATE ALIAS DEFINED	現行 ODBM 定義内のデータ・ストア定義で別名が重複しています。
F	ALIAS NAME INVALID	現行 ODBM 定義内に定義されている別名に無効文字が含まれています。
10	NO RESOURCES FOUND	リソースが見つからなかった。
11	BPEPARSE ERROR	CSLDCxxx IMS PROCLIB メンバーの構文解析時に、BPEPARSE が失敗しました。この完了コードには BPE0003E が付随します。
12	DATASTORES NOT STOPPED	UPD ODBM TYPE(CONFIG) コマンドを発行する前に、現行 ODBM へのデータ・ストア接続が停止されませんでした。

例

UPDATE ODBM TYPE(CONFIG) コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPD ODBM TYPE(CONFIG) MEMBER(009) OPTION(NOCONNECT)
```

TSO SPOC 出力:

```
MbrName      CC  ConfigName
ODBM010D     0   CSLDC009
ODBM010D     0   CSLDC009
ODBM020D     0   CSLDC009
```

説明: MEMBER(009) キーワードは、ODBM01 と ODBM02 の両方の構成に CSLDC009 を使用することを示します。これを実行するには、両方の ODBM 構成を CSLDC009 PROCLIB メンバーに指定しておく必要があります。NAME() キーワードを使用する場合、目的の結果を得るには、このコマンドのルーティングに注意が必要です。

UPDATE ODBM TYPE(CONFIG) コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
UPD ODBM TYPE(CONFIG)
```

TSO SPOC 出力:

MbrName	CC	ConfigName
ODBM010D	0	CSLDC001
ODBM010D	0	CSLDC001
ODBM020D	0	CSLDC002

説明: この例は、現行構成メンバーがそれぞれ ODBM1 には CSLDC001 および ODBM2 には CSLDC002 が指定されていることを示します。

UPDATE OLREORG コマンド

UPDATE OLREORG コマンドは、所有されている HALDB オンライン再編成 (OLR) の速度、DEL または NODEL データ・セット後処理フラグ、あるいは REL または NOREL リリース OLR 所有権後処理フラグを変更するために使用します。

このコマンドをタイプ 1 コマンドとして出した場合は、コマンド応答は DFS0725I 事前編集メッセージとして戻されます。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 1340 ページの『キーワード』
- 1341 ページの『使用上の注意』
- 1342 ページの『/UPDATE OLREORG のコマンド応答』
- 1342 ページの『出力フィールド』
- 1342 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1343 ページの『例』

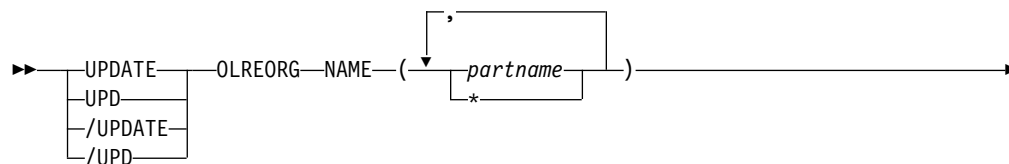
環境

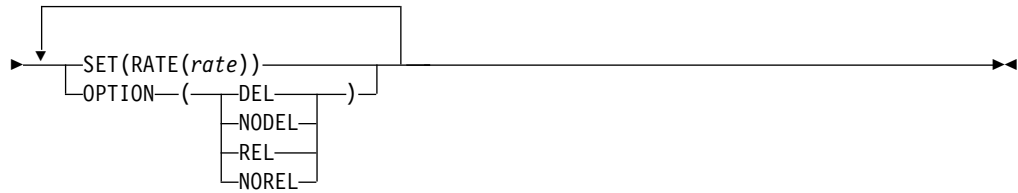
以下の表には、UPDATE OLREORG コマンドおよびキーワードを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 501. UPDATE OLREORG コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
UPDATE OLREORG	X	X	
NAME	X	X	
SET	X	X	
OPTION	X	X	

構文





キーワード

以下のキーワードは、UPDATE OLREORG コマンドに有効です。

NAME()

更新する 1 つ以上の PHDAM または PHIDAM HALDB 区画を指定します。

このコマンドのタイプ 1 バージョンの場合は、区画名は 1 つしか指定できません。

すべての HALDB 区画を表す NAME(*) 以外には、ワイルドカード文字 (*) を含むパラメーターは許されません。

SET(RATE)

HALDB OLR が実行される速度を指定します。

rate

rate 値には、1 から 100 までの値を指定することができます。

RATE パラメーターは、再編成を実行する強度を制御するために使用できます。これは、再編成の速度と、システムの残り部分への効果の両方に影響を与えます。rate に指定する値は、レコードをコピーするために当てられる経過時間のパーセントです。残りの時間は、コピー処理において、他の IMS 作業およびシステム全体への再編成の影響を最小限にするために、意図的に導入される遅延です。

システムに対するオンライン再編成の影響は、使用可能なシステム・リソース、合計システム使用率 (他のオンライン再編成も含む)、合計ロギング量、ログ競合、および、この再編成について要求された実行強度によって異なります。これらの同じ要因は、再編成が実行される速度にも影響を与えます。

rate 値 50 は、経過時間の 50% をレコードのコピーに費やし、残りの 50% を遅延に費やすことを指定します。この場合、再編成には、rate 値として 100 を指定した場合の約 2 倍の時間がかかります。

OPTION()

DEL、NODEL、REL、または NOREL の各オプションを指定できます。

DEL | NODEL

オンライン再編成の完了時に非アクティブ・データ・セットの削除を試みるかどうかを指示します。DEL と NODEL は、相互に排他的なキーワードです。

DEL

オンライン再編成の完了時に非アクティブ・データ・セットの削除を試みます。データ・セットの作成者または作成日時に関係なく、削除の試行が行われます。

NODEL

オンライン再編成の完了時に非アクティブ・データ・セットの削除を試みません。

HALDB オンライン再編成が完了前に停止した場合、DEL または NODEL キーワードは記憶されないため、停止した HALDB OLR を再開するために出す INITIATE OLREORG コマンドで指定する必要があります。

REL | NOREL

IMS システムは、シャットダウン時または終了時に、再編成の制御を保持するか、解放するかを指定します。REL と NOREL は、相互に排他的なキーワードです。

REL

IMS システムは、オンライン再編成が完了する前に終了した場合、OLR の所有権を解放することを指定します。このキーワードを指定すると、別の IMS システムが中断状態の再編成の制御を取ることができます。

RECON データ・セット内の区画データベース・レコードが更新されて、所有する IMS (OLRIMSID=*ssid*) がオンライン再編成処理を終了するか、それ自体が異常終了した場合に OLR の再開を許可することが示されます。区画データベース・レコードのリストに、RELEASE OLR OWNERSHIP が表示されます。

IMS 上で OLR がアクティブで稼働中のときに IMS が異常終了し、OLR 所有権の解放が要求されている場合、IMS は OLR 所有権の解放を要求できなかったため、LIST.DB コマンドでは、OLRIMSID=*ssid* (OLRIMSID=NULL の代わりに) および RELEASE OLR OWNERSHIP が表示されます。

XRF 環境での OLR 所有権解放の要求: XRF 環境では、OLR がアクティブ IMS 上で稼働中に OLR 所有権の解放が要求された場合には、XRF テークオーバーの発生後に新しいアクティブ IMS 上で OLR は自動的に再開されません。新しいアクティブ IMS 上で、INIT OLREORG コマンドを再発行する必要があります。

NOREL

IMS システムは、シャットダウン時または終了時に、再編成の制御を保持することを指定します。

使用上の注意

データベースの構造を変更するために、ALTER オプションを指定してオンライン再編成を開始した場合、IMS は、データベース内のすべての区画を再編成します。このケースでは、データベース内のすべての区画のオンライン再編成を更新する必要がある場合は、例えば UPDATE OLREORG NAME(*) SET(RATE(*rate*)) のように NAME キーワードでアスタリスクを指定します。HALDB マスター・データベースの名前を指定することはできません。タイプ 1 またはタイプ 2 の形式の UPDATE OLREORG コマンドを使用して、変更処理を更新することができます。ただし、変更されたデータベースを共用する場合、そのデータベースを共用するすべての IMS システムに送信できるのはタイプ 2 コマンドのみです。

/UPDATE OLREORG のコマンド応答

/UPDATE OLREORG コマンドをタイプ 1 コマンドとして入力した場合は、コマンド応答はメッセージ・フォーマットで戻されます。

コマンドが正常に完了すると、メッセージ DFS0725I が完了コード 0 とともにシステム・コンソールとマスター端末に返されます。コマンドの結果がエラーになった場合は、ゼロ以外の完了コードまたはエラー・メッセージが、マスター端末とシステム・コンソールに戻されます。

```
DFS0725I INITIATE|UPDATE|TERMINATE OLREORG COMMAND FOR DB dbnamexx COMPLETE.  
CC= nn  
  where: dbnamexx is the HALDB partition name entered on the command  
         nn       is the completion code
```

出力フィールド

このセクションでは、UPDATE OLREORG コマンドに対する OM API からの応答について説明します。以下の表には、UPDATE OLREORG 出力フィールドが記載されています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンド・キーワードを識別します。

N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 502. UPDATE OLREORG コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	キーワード	意味
PART	N/A	区画名。
MBR	N/A	コマンド応答行を作成した IMS。
CC	N/A	完了コード。

戻りコード、理由コード、および完了コード

UPDATE OLREORG コマンドの結果として戻される OM の戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 503. UPDATE OLREORG コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE OLREORG コマンドは正常に完了しました。
X'00000004'	X'00001010'	フィルターに一致するものではありません。
X'00000008'	X'00002008'	指定されたキーワードの数が足りません。

表 503. UPDATE OLREORG コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000008'	X'00002040'	フィルターが指定されなかったか、無効なフィルターまたは不十分な数のフィルターが指定されました。
X'0000000C'	X'00003000'	At least one request was successful.
X'0000000C'	X'00003004'	成功した要求はありません。
X'00000010'	X'0000400C'	コマンドは XRF 代替システムで出されました。
X'00000014'	X'00005000'	GETMAIN エラーが発生しました。

以下の表には、完了コードの説明が記載されています。UPDATE OLREORG コマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。HALDB 区画に対して行われた各アクションごとに、1 つずつ完了コードが戻されます。

表 504. UPDATE OLREORG コマンドの完了コード

完了コード	意味
0	区画に対する UPDATE OLREORG コマンドが正常に完了しました。
10	リソース名が無効です。
14	リソースが区画名ではありません。
1C	リソースは区分副次索引です。
24	進行中の HALDB OLR はありません。
CF	パラメーター値の競合、または無効なパラメーター値。
1E0	DBRC OLRREL OLRNOREL が失敗しました。

例

以下に示すのは UPDATE OLREORG コマンドの例です。

UPDATE OLREORG の例 1

入力 ET:

```
/UPD OLREORG NAME(PDHDOKA) SET(RATE(25))
```

応答 ET:

```
DFS0725I UPDATE OLREORG COMMAND FOR DB PDHDOKA COMPLETE. CC= 0
```

説明: 区画 PDHDOKA に対して、OLR 速度を 25 に変更する UPDATE OLREORG コマンドが出されます。コマンド応答のメッセージ DFS0725 に示されているように、このコマンドは正常に実行されています。

UPDATE OLREORG の例 2

TSO SPOC 入力:

```
UPD OLREORG NAME(PDHDOKA,PDHDOKB) SET(RATE(25))
```

TSO SPOC 出力:

Partition	MbrName	CC
PDHDOKA	IMSA	0
PDHDOKA	IMS1	24
PDHDOKB	IMSA	0
PDHDOKB	IMS1	24

OM API 入力:

```
CMD (UPD OLREORG NAME(PDHDOKA,PDHDOKB) SET(RATE(25)))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.2.0</omvsn>
<xmlvsn>1 </xmlvsn>
<statime>2003.168 21:17:57.712194</statime>
<stotime>2003.168 21:17:57.713062</stotime>
<staseq>B996297E02942007</staseq>
<stoseq>B996297E02CA6487</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10141757</rqsttkn1>
<rc>0200000C</rc>
<rsn>00003000</rsn>
</ctl>
<cmderr>
<mbr name="IMS1 ">
<typ>IMS </typ>
<styp>DBDC </styp>
<rc>0000000C</rc>
<rsn>00003004</rsn>
<rsntext>No requests were successful</rsntext>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>IMSA </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>OLREORG </kwd>
<input>UPD OLREORG NAME(PDHDOKA,PDHDOKB) SET(RATE(25)) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="PART" l1b1="Partition" scope="LCL" sort="A" key="1"
scroll="NO" len="9" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="NO"
len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="N" key="0" scroll="YES"
len="4" dtype="INT" align="right" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp> PART(PDHDOKA ) MBR(IMSA ) CC( 0) </rsp>
<rsp> PART(PDHDOKB ) MBR(IMSA ) CC( 0) </rsp>
<rsp> PART(PDHDOKA ) MBR(IMS1 ) CC( 24) </rsp>
<rsp> PART(PDHDOKB ) MBR(IMS1 ) CC( 24) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>
```

説明: 区画 PDHDOKA および PDHDOKB に対して、OLR 速度を 25 に更新する UPDATE OLREORG コマンドが出されます。このコマンドは、OLR が進行中である IMSA については正常に実行されましたが、OLR が進行中ではない IMS1 については失敗しました。IMS1 については、応答として完了コード 24 が戻されています。

関連概念:

🔗 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

🔗 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

UPDATE OTMADESC コマンド

UPDATE OTMADESC コマンドは、IMS の再始動なしに既存の OTMA 宛先記述子を更新するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 1346 ページの『キーワード』
- 1351 ページの『使用上の注意』
- 1351 ページの『出力フィールド』
- 1352 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1353 ページの『例』

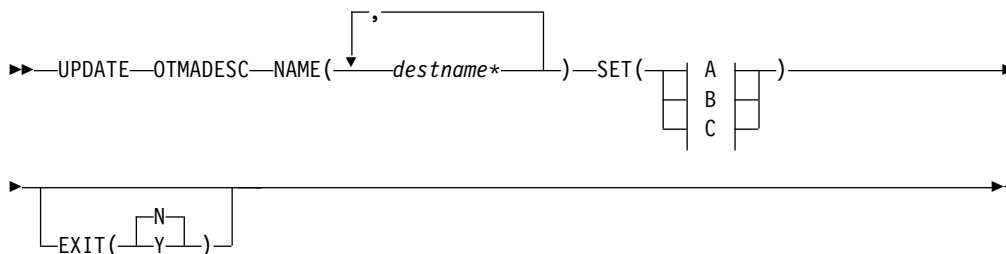
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

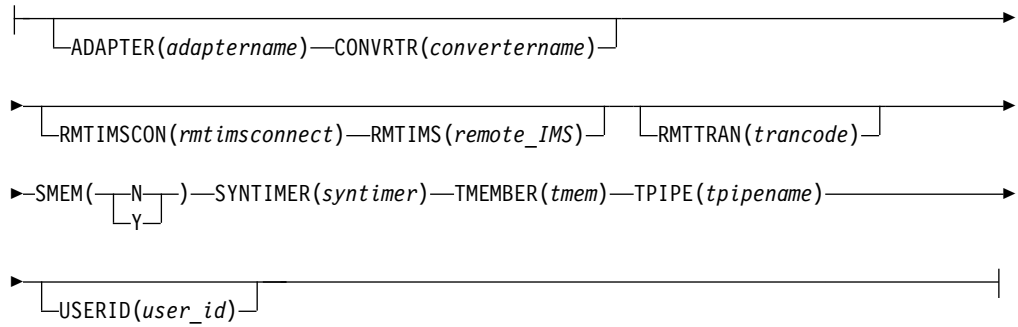
表 505. UPDATE OTMADESC コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
UPDATE OTMADESC	X		X
NAME	X		X
SET	X		X

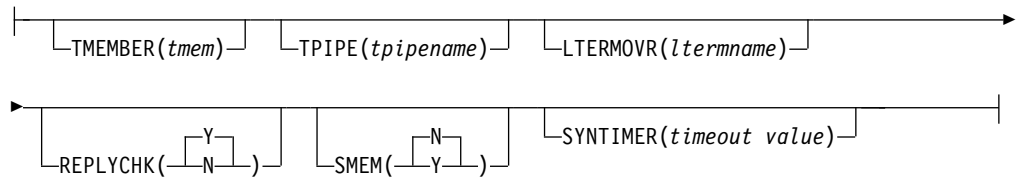
構文



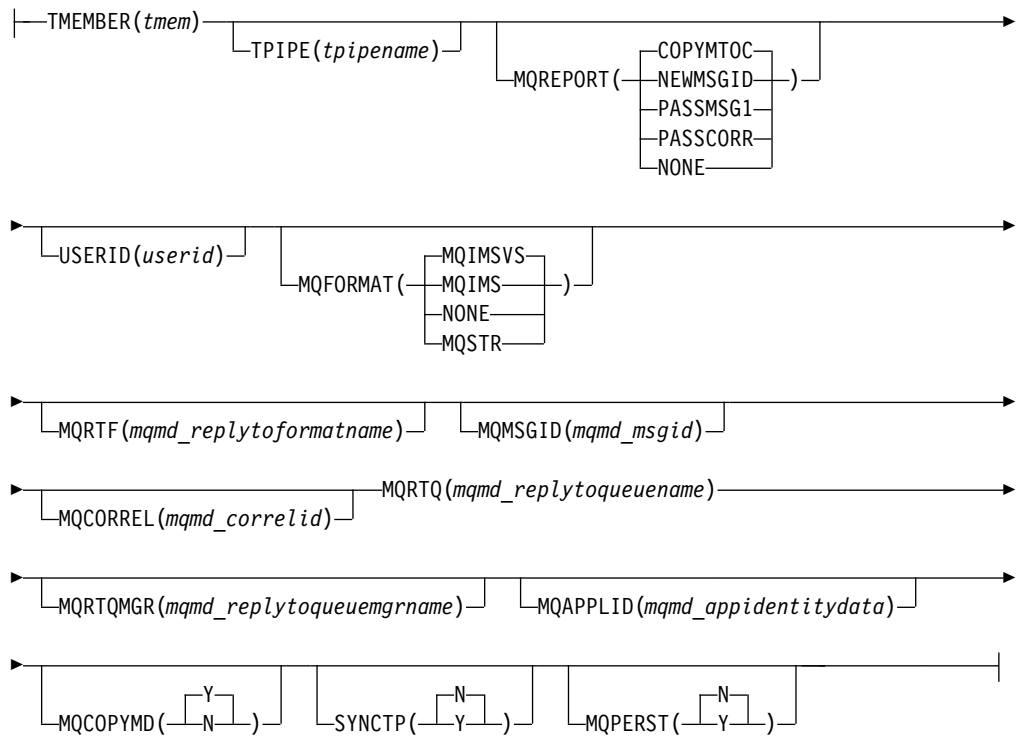
A (Descriptor TYPE=IMSCON):



B (Descriptor TYPE=IMSTRAN):



C (Descriptor TYPE=MQSERIES):



キーワード

以下のキーワードは、UPDATE OTMADESC コマンドに有効です。

NAME(*destname**)

値を変更できない必須キーワードです。

SET()

少なくとも以下のキーワードを 1 つ指定して、記述子の更新を指定します。更新は NAME キーワードで指定されたそれぞれの記述子名に適用されます。記述子名にアスタリスクを付加すると、更新はマスクしている名前のグループには適用されません。

ADAPTER(*adaptername*)

TYPE(IMSCON) のオプション・パラメーターで、IMS Connect アダプターを指定します。 *adaptername* は、1 から 8 文字のアダプター名です。このキーワードの値をクリアするには、ADAPTER() のように、値なしでキーワードを指定します。ADAPTER キーワードを削除すると、CONVRTR キーワードも削除されます。ADAPTER および TYPE(NONOTMA) は、同時には指定できません。

CONVRTR(*convertername*)

ADAPTER キーワードが指定されている場合のみ、必須パラメーターです。 *convertername* は、アダプターが使用する 1 から 8 文字のコンバーター名です。ADAPTER キーワードの値を削除すると、このキーワードの値は自動的に削除されます。ADAPTER キーワードなしに、あるいは TYPE(NONOTMA) と同時にこのキーワードをコーディングすることは無効です。

EXIT(N|Y)

TYPE=IMSTRAN の場合、これは IMS ユーザー出口 (DFSCMUX0) が遅延メッセージの記述子ルーティング情報をオーバーライドできるかどうかを示すために使用されるオプション・パラメーターです。

その他の記述子タイプの場合、これは OTMA ルーティング出口 (DFSYPX0 および DFYDRU0) が ALT IOPCB からの記述子交換宛先をオーバーライドできるかどうかを指定するために使用されるオプション・パラメーターです。

LTERMVR(*ltermname*)

TYPE=IMSTRAN の場合、アプリケーション I/O PCB で指定された名前をオーバーライドする論理端末名の指定に使用するオプション・パラメーターです。AIB の AIBRSNM2 フィールドでオーバーライド名も指定された場合、その名前が記述子内の名前の代わりに使用されます。記述子および AIB のどちらにもオーバーライド名が含まれていない場合、IMS アプリケーション端末シンボリック (PSTSYMBO) が宛先トランザクションのデフォルトの論理端末として使用されます。

MQAPPLID(*mqmd_appidentitydata*)

TYPE=MQSERIES の場合、これは MQMD_APPLIDENTITYDATA フィールドの 1 文字から 32 文字の値を指定するオプション・パラメーターです。このフィールドは、受信側 IBM MQ アプリケーションにデータを渡すために使用されます。デフォルトは 32 個のブランクです。

MQCOPYMD(Y | N)

TYPE=MQSERIES の場合、これは MQ IMS ブリッジからの MQMD データ構造の元の入力値を出力メッセージにコピーするかどうかを指定するオプション・パラメーターです。

MQCORREL(*mqmd_correlid*)

TYPE=MQSERIES の場合、これは MQMD_CORRELID フィールドの 1 文字から 24 文字の値を指定するオプション・パラメーターです。MQREPORT パラメーターの値が PASSCORR の場合、この値が受信側 IBM MQ アプリケーションに直接渡されます。デフォルトは 0 です。

MQFORMAT(MQIMSVS | MQIMS | NONE | MQSTR)

TYPE=MQSERIES の場合、これは MQMD_FORMAT フィールドの値を指定するオプション・パラメーターです。デフォルトは MQIMSVS です。

MQMSGID(*mqmd_msgid*)

TYPE=MQSERIES の場合、これは MQMD_MSGID フィールドの 1 文字から 24 文字の値を指定するオプション・パラメーターです。MQREPORT パラメーターの値が PASSMSG1 の場合、この値が受信側 IBM MQ アプリケーションに直接渡されます。

MQPERST(N | Y)

TYPE=MQSERIES の場合、これは、この記述子を使用するメッセージは SYNC TPIPE 上で持続的であるかどうかを指定するオプション・パラメーターです。このパラメーターを Y に設定することは、DFSYDRU0 出口ルーチンの出力フラグ値に X'40'を設定することと類似しています。

MQREPORT(COPYMTOC | NEWMSGID | PASSMSG1 | PASSCORR | NONE)

TYPE=MQSERIES の場合、これは、この記述子を使用するメッセージの MQMD_REPORT フィールド値を指定するオプション・パラメーターです。デフォルトは COPYMTOC です。サポートされる各値は、以下のよう
に、MQMD データ構造内の同等の値に対応しています。

パラメーター値

同等の MQMD 構造値

NEWMSGID

MQRO_NEW_MSG_ID

PASSMSG1

MQRO_PASS_MSG_ID

COPYMTOC

MQRO_COPY_MSG_ID_TO_CORREL_ID

PASSCORR

MQRO_PASS_CORREL_ID

PASSMSCO

MQRO_PASS_MSG_ID および MQRO_PASS_CORREL_ID

NONE

MQRO_NONE

MQRTF(*mqmd_replytoformat*)

TYPE=MQSERIES の場合、これは MQMD_REPLYTOFORMAT フィールドの 1 文字から 8 文字の値です。デフォルトは 0 です。

MQRTQ(*mqmd_replytoqueue*)

TYPE=MQSERIES の場合、これは MQMD_REPLYTOQ フィールドの 1 文字から 48 文字の値を指定する必須パラメーターです。

MQRTQMGR(mqmd_replytoqueueanagername)

TYPE=MQSERIES の場合、これは MQMD_REPLYTOQMGR フィールドの 1 文字から 48 文字の値を指定するオプション・パラメーターです。このパラメーターが指定されていない場合、MQSeries® はローカル・キュー・マネージャーを使用します。

REPLYCHK(Y|N)

IMS アプリケーションが同期プログラム間通信要求のための IOPCB に応答するかどうかを指定します。REPLYCHK=YES のときに、ICAL ターゲット・アプリケーションが IOPCB に応答しないか、別のトランザクションに切り替えない場合、IMS は ICAL 呼び出しに対して、タイムアウトの代わりに、エラー戻りコード X '0100'を、理由コード X'0110'および拡張理由コード X '0014'と共に返します。デフォルトは Y です。

RMTIMS

(オプション) ALTPCB 出力メッセージのリモート宛先 IMS システムの 1 文字から 8 文字の名前。RMTIMS 値は、RMTIMSCON パラメーターで指定されたりモート IMS Connect インスタンスの構成メンバー内で、DATASTORE ステートメントの ID パラメーターで指定された値と一致していなければなりません。このパラメーターは、TYPE(IMSCON) が指定されている場合にのみ有効です。このパラメーターの値をクリアするには、例えば RMTIMS() のように、値なしでパラメーターを指定します。RMTIMS の値をクリアすると、RMTIMSCON の値もクリアされます。

RMTIMSCON

(オプション) RMTIMS パラメーターで指定されたりモート IMS システムの TCP/IP 通信を管理するリモート IMS Connect インスタンスへの接続の 1 文字から 8 文字の名前。この値は、OTMA ALTPCB 出力メッセージの発信元の IMS システムの TCP/IP 通信を管理しているローカル IMS Connect インスタンスの構成ファイル内で、RMTIMSCON ステートメントの ID パラメーターで指定された値と一致していなければなりません。このパラメーターは、TYPE(IMSCON) が指定されている場合にのみ有効です。このパラメーターの値をクリアするには、例えば RMTIMSCON() のように、値なしでパラメーターを指定します。RMTIMSCON の値をクリアすると、RMTIMS の値もクリアされます。

RMTRAN

(オプション) RMTIMS パラメーターで指定されたりモート宛先 IMS システムで使用するトランザクション名の 1 文字から 8 文字の名前。このパラメーターが RMTIMSCON パラメーターおよび RMTIMS パラメーターと共に指定されている場合、IMS OTMA はトランザクション処理のためにリモート IMS システムに ALTPCB 出力メッセージを送信します。このパラメーターは、TYPE(IMSCON) が指定されている場合にのみ有効です。このパラメーターの値をクリアするには、例えば RMTRAN() のように、値なしでパラメーターを指定します。

SMEM(N | Y)

オプション・パラメーターで、Y または N のいずれかの値を指定します。これは、TMEMBER パラメーターで指定された TMEMBER 名がスーパーメンバーであるかどうかを示します。このキーワードの値をクリアするには、SMEM() のように、値なしでキーワードを指定します。SMEM() を削

除すると、デフォルトの SMEM(N) が指定されます。TMEMBER 名がスーパーメンバーである場合、TMEMBER 名の長さは最大 4 文字です。SMEM および TYPE(NONOTMA) は、同時には指定できません。

SYNCTP(N | Y)

TYPE=MQSERIES の場合、このパラメーターは、この記述子を使用するメッセージ用に SYNC TPIPE を作成する必要があるかどうかを指定します。このパラメーターを Y に設定することは、DFSYDRU0 出口ルーチンの出力フラグ値に X'80'を設定することと類似しています。

SYNTIMER(*syntimer*)

同期コールアウト処理用のオプション・パラメーターです。同期コールアウト処理では、指定された時間内にクライアントからの ACK/NAK または応答が OTMA によって受信されなかった場合、要求は取り消されます。この値は、100 分の 1 秒 (10 ミリ秒) の単位で表します。この値には、最大長 6 桁の数値を指定できます。値の範囲は 0 から 999999 で、ゼロを指定すると、デフォルトの 10 秒 (100 分の 1 秒の 1000 倍) が指定されます。SYNTIMER() または SYNTIMER() と指定すると、タイムアウト値は、指定しない場合と同様にリセットされます。

TYPE(IMSTRAN) が指定されている場合、このパラメーターは、同期プログラム間通信 ICAL 呼び出しのタイムアウト値です。タイムアウト値が AIB インターフェースでも指定されている場合、IMS はタイムアウト値を比較して低い方の値を使用します。

TMEMBER(*tmem*)

TYPE(IMSCON) の場合は必須パラメーター。記述子の TYPE を IMSCON から NONOTMA に変更すると、このキーワードの値は削除されます。記述子の TYPE を NONOTMA から IMSCON に変更する場合、TMEMBER キーワードをコーディングする必要があります。*tmem* は、16 文字の OTMA TMEMBER 名または 4 文字のスーパーメンバーです。TMEMBER および TYPE(NONOTMA) は、同時には指定できません。

TYPE(IMSTRAN) の場合はオプション・パラメーター。*tmem* 値は、1 文字から 16 文字の OTMA TMEMBER 名です。IMS は、同期プログラム間通信からの遅延応答を、この OTMA TMEMBER へのキューに入れます。TPIPE パラメーターが記述子で指定されていない場合、この宛先名がデフォルト OTMA TPIPE 名として使用されます。

TPIPE(*tpipename*)

TYPE(IMSCON) を指定する場合のオプション・パラメーターで、1 から 8 文字の TPIPE 名を指定します。このキーワードの値を削除するには、TPIPE() のように、値なしでキーワードを指定します。このキーワードを指定しない場合、TPIPE 名は NAME キーワードで指定された宛先名になります。TPIPE および TYPE(NONOTMA) は、同時には指定できません。

1 文字から 8 文字の TPIPE 名を指定する、TYPE(IMSTRAN) のオプション・パラメーター。このパラメーターのデフォルトは宛先名になります。IMS は、同期プログラム間通信からの遅延応答を、この OTMA TPIPE へのキューに入れます。TPIPE が指定されている場合は、TMEMBER パラメーターの値が必要です。

USERID

TYPE=IMSCON の場合、これはオプションの 1 文字から 8 文字の RACF ユーザー ID です。このパラメーターが RMTIMSCON、RMTTRAN、および RMTIMS の各パラメーターと共に指定されている場合、リモート宛先 IMS システムは、この USERID 値を使用してトランザクション許可を実行します。OTMA 宛先記述子で指定された USERID の値は、OTMA ALTPCB への ISRT 呼び出しを発行した IMS アプリケーション・プログラムで提供されたユーザー ID をオーバーライドします。このパラメーターは、TYPE(IMSCON) が指定されている場合にのみ有効です。

TYPE=MQSERIES の場合、これは MQMD データ構造内の MQMD_USERIDENTIFIER フィールドと一致する、1 文字から 8 文字のユーザー ID です。このフィールドを使用して、OTMA 記述子は MQMD 構造内のデフォルト・ユーザー ID をオーバーライドすることができます。PST からの IMS ユーザー ID 値を使用するには、値 *USERID* を指定します。

使用上の注意

UPDATE OTMADESC コマンドは、DFSYDTx に組み込まれた、あるいは、CREATE OTMADESC コマンドを使用して追加された、既存の宛先ルーティング記述子を変更するために使用します。変更を追跡するためにログ・レコードが書き込まれます。これは、ある IMS の再始動から別の IMS の再始動まで保持されます。また、このログ・レコードは、XRF 代替環境への更新の現行性を追跡する場合にも使用されます。チェックポイント・レコードは X4035 であり、CREATE、UPDATE、および DELETE の各コマンドのログ・レコードは X221B です。

UPDATE OTMADESC コマンドは、宛先記述子の TYPE 値を変更することはできません。記述子のタイプを変更したい場合は、CREATE OTMADESC コマンドを使用するか、IMS.PROCLIB データ・セットの DFSYDTx メンバーを変更して、新規記述子を作成してください。その後、既存の記述子を削除することができます。

出力フィールド

以下の表は、UPDATE OTMADESC の出力フィールドを示します。表の各列は、以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

フォーマット設定済み出力の出力フィールド用列見出しが含まれます。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 506. UPDATE OTMADESC コマンドの出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	出力行の完了コード。完了コードは、IMS が、指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示します。詳しくは、『戻りコード、理由コード、および完了コード』を参照してください。完了コードは常に戻されます。
CCTXT	CCText	N/A	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
DEST	DestName	NAME	宛先名。
MBR	MbrName	N/A	メンバー名。

戻りコード、理由コード、および完了コード

IMS 戻りコードと理由コードは、UPDATE OTMADESC コマンドによって OM に返されます。UPDATE OTMADESC コマンドの結果として返される可能性のある OM 戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに返される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 507. UPDATE OTMADESC コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、1353 ページの表 508 を参照してください。
X'02000008'	X'00002000'	コマンドに無効な verb が含まれているか、verb に登録されているクライアントがありません。
X'02000008'	X'00002004'	コマンドに無効な 1 次キーワードが含まれているか、キーワードに登録されているクライアントがありません。
X'02000008'	X'00002028'	コマンドは無効なキーワードを含んでいます。
X'02000008'	X'0000202C'	コマンドは不明な定位置パラメーターを含んでいます。
X'02000008'	X'00002034'	コマンドは不完全なキーワード・パラメーターを含んでいます。
X'02000008'	X'00002038'	コマンドには必須パラメーターが欠落しています。
X'02000008'	X'0000203C'	コマンドは無効なキーワード・パラメーター値を含んでいます。

以下の表には、完了コードの説明が記載されています。このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 508. UPDATE OTMADESC コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0	コマンドは正常に完了しました	該当リソースについて、UPDATE OTMADESC コマンドは正常に完了しました。
151	Descriptor not found	記述子名が存在しません。
153	Adapter blank, Convtrtr not blank	ADAPTER キーワードの値は空白で、CONVRTR キーワードの値は空白ではありません。これらのキーワードは両方とも空白であるか、または両方とも有効な名前を指定する必要があります。
154	Adapter not blank, Convtr blank	ADAPTER キーワードの値は空白ではなく、CONVRTR キーワードの値も空白ではありません。これらのキーワードは両方とも空白であるか、または両方とも有効な名前を指定する必要があります。
156	SMEM=Y, super mbr name GT 4 char	TMEMBER キーワードのスーパーメンバー名は最大長が 4 文字でなければなりません。
159	TMEMBER is required for IMSCON	タイプが NONOTMA から IMSCON に変更されていますが、TMEMBER の値が空白です。
162	Descriptor not available for upd	更新処理中に、他のユーザーにより記述子が削除されました。
167	SYNTIMER must have numeric value	タイムアウト値は、括弧で囲んだ数字で表された値でなければなりません。
169	SYNTIMER has nonnumeric value	英字など、数字以外の文字が値に含まれてはなりません。

例

以下に示すのは UPDATE OTMADESC コマンドの例です。

UPDATE OTMADESC コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE OTMADESC NAME(OTMACL*,OTMACL99) SET(TYPE(NONOTMA))
```

TSO SPOC 出力:

```
DestName  MbrName  CC
OTMACL99  IMSA      0
OTMACL*   IMSA      0
```

説明: この UPDATE コマンドは、出力タイプを NONOTMA に変更します。このキーワードは、他のすべてのキーワード (TMEM や TPIPE など) を削除します。これは、その他のキーワードが TYPE(NONOTMA) に関連しないためです。

UPDATE OTMADESC コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE OTMADESC NAME(OTMACL*,OTMACL99) SET(TPIPE(HWS1TP02))
```

TSO SPOC 出力:

DestName	MbrName	CC
OTMACL99	IMSA	0
OTMACL*	IMSA	0

説明: この UPDATE コマンドは、TPIPE 名を HWS1TP02 に変更します。OTMACL99 の TPIPE 名は HWS1TP01 から HWS1TP02 に変更され、OTMACL* の TPIPE は HWS1TP02 に設定されます。

UPDATE OTMADESC コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE OTMADESC NAME(OTMACL*) SET(TPIPE())
```

TSO SPOC 出力:

DestName	MbrName	CC
OTMACL*	IMSA	0

説明: この UPDATE コマンドは、記述子 OTMACL* に対して TPIPE() のコーディングによりその TPIPE 名を削除します。UPDATE コマンドのアスタリスクにより、アスタリスクでマスクされる名前のグループは更新されません。更新されるのは、宛先ルーティング記述子のテーブル内の OTMACL* 項目のみです。OTMACL99 は更新されません。

UPDATE OTMADESC コマンドの例 4

TSO SPOC 入力:


```
UPDATE OTMADESC NAME(OTMACL01) SET(RMTIMS(IMS3) RMTTRAN(TRAN03))
```

TSO SPOC 出力:

DestName	MbrName	CC
OTMACL01	IMS1	0

説明: IMS1 に対して UPDATE OTMADESC コマンドが発行されると、このコマンドは、宛先リモート IMS システムの名前を IMS3 に変更し、IMS3 上でメッセージを処理するためにスケジュールされるトランザクションを TRAN03 に変更します。

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

UPDATE PGM コマンド

UPDATE PGM コマンドは、プログラム・リソースを更新するために使用します。

プログラム・リソースは、DB/TM 環境の制御下で実行されるアプリケーション・プログラム、ならびに DBCTL を介してデータベースにアクセスするアプリケーション・プログラムのリソース要件を定義します。プログラム・リソースとトランザクションの組み合わせにより、アプリケーション・プログラムのスケジューリング要件およびリソース要件を定義します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 1356 ページの『キーワード』
- 1364 ページの『使用上の注意』
- 1365 ページの『同等の IMS タイプ 1 コマンド』
- 1365 ページの『出力フィールド』
- 1366 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1372 ページの『例』

環境

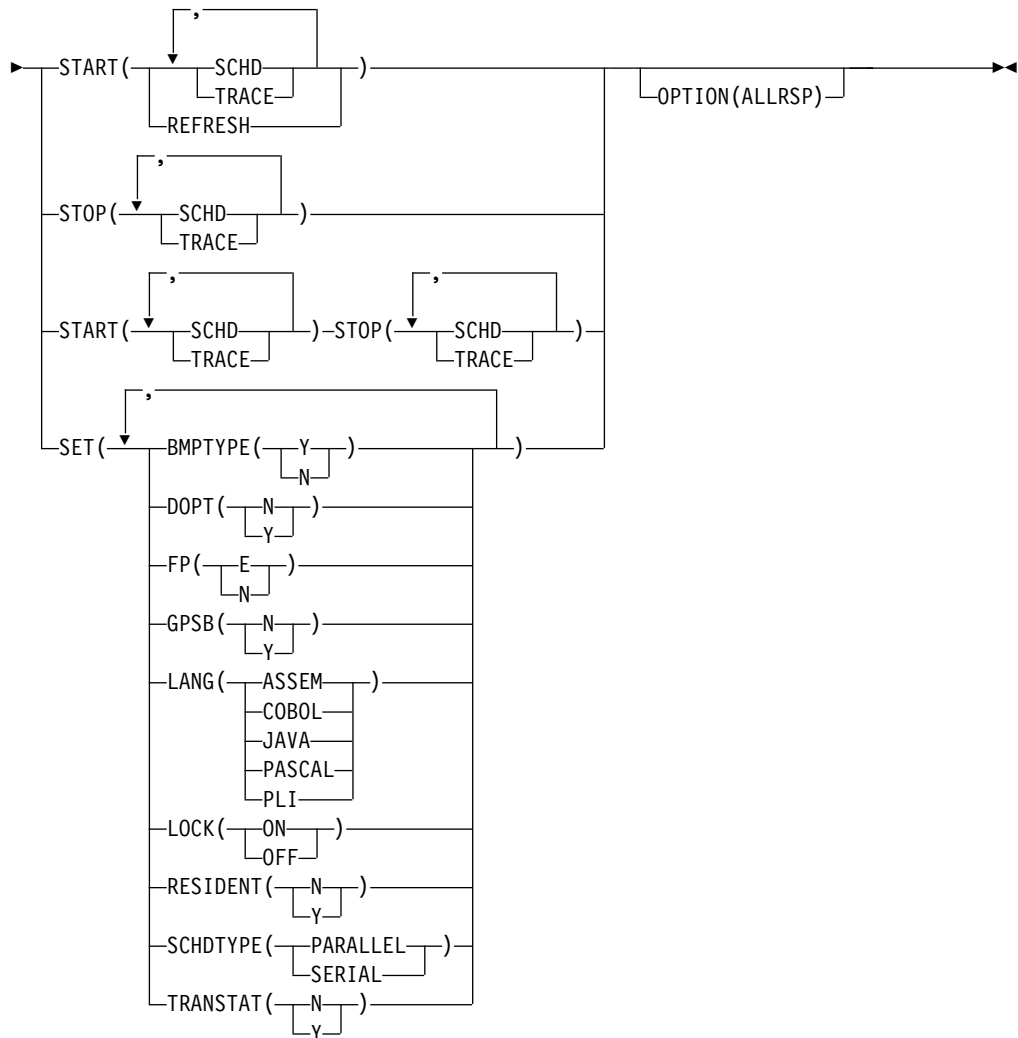
以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/BC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 509. UPDATE PGM コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
UPDATE PGM	X	X	X
NAME	X	X	X
OPTION	X	X	X
SET	X	X	X
START	X	X	X
STOP	X	X	X

構文





キーワード

以下のキーワードは、UPDATE PGM コマンドに有効です。

NAME

プログラムの名前 (1 から 8 文字) を指定します。名前にはワイルドカードを指定することができます。名前は反復可能なパラメーターです。指定された NAME パラメーターが固有またはワイルドカード名の場合、処理されたすべてのリソース名についてコマンド応答が戻されます。NAME(*) の場合、エラーになったリソース名についてのみ、コマンド応答が戻されます。

OPTION(ALLRSP) を NAME(*) と同時に指定すれば、処理されたすべてのリソース名についてコマンド応答が取得できます。

OPTION

コマンドとともに実行される機能を指定します。

ALLRSP

コマンドで処理されたすべてのリソースについて応答行を戻すことを示します。デフォルトのアクションでは、エラーになったリソースについてのみ応

答行が戻されます。これは、NAME(*) を指定した場合のみ有効です。
ALLRSP は、他の NAME 値では無視されます。

SET

変更される属性値を指定します。

BMPTYPE

BMP タイプのオプション。プログラムが BMP タイプ領域で実行されるか (Y)、されないか (N) を指定します。BMP タイプ領域は、BMP 領域または JBP 領域です。この属性を更新すると、プログラムはコマンド処理中のスケジューリングを停止します。

DB2 ストアード・プロシージャ、WebSphere Application Server の下で実行されるプログラム、および ODBA インターフェースの他のユーザーによってスケジュールされる PSB は、BMPTYPE Y または N で定義できます。

Y プログラムは BMP タイプ領域で実行されます。IMS BMP 領域または JBP 領域で実行される可能性があります。関連のトランザクションには、ゼロの通常優先順位値および限界優先順位値が割り当てられます。

N プログラムは BMP タイプ領域で実行されません。プログラムは、IMS TM MPP、JMP、または IFP 領域で実行するか、あるいは ODBA または DRA インターフェースを使用できます。この指定は、IMS TM MPP、JMP、および IFP 領域で実行されるプログラム、あるいは DBCTL を使用する CICS プログラムおよび DRA インターフェースの他のユーザーによってスケジュールされる、PSB に対して使用する必要があります。これはデフォルトです。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- FP(E) と BMPTYPE(Y) は相互に排他的です。

DOPT

動的オプションを指定します。

N このプログラムに関連する PSB は、動的に位置指定されません。PSB の制御ブロックは ACBLIB または IMS カタログ内に存在する必要があります。そうでないとプログラムが NOTINIT 状況に設定され、スケジュールを設定できません。

Y このプログラムに関連する PSB は、動的に位置指定されます。この PSB に関連するプログラムがスケジュールされるたびに、PSB の最新のコピーがロードされます。プログラムが終了すると、この PSB は PSB プールから削除されます。

PSB がトランザクションの処理に必要なまで、ACBLIB 内、または (ACB の IMS 管理が使用可能な場合) IMS カタログ内に PSB の ACB が存在している必要はありません。PSB の新しいバージョンは、ACBLIB または IMS カタログにいつでも定義および追加できます。PSB の次回スケジュール時に、IMS は ACB の新しいバージョンをロードします。

PSB が参照する DBD の制御ブロックが ACBLIB または IMS カタログに存在しない場合は、DOPT PSB をスケジュールに入れることはできません。

この属性をアップデートすると、コマンドの処理の期間にプログラムがスケジューリングを停止します。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- DOPT(Y) と GPSB(Y) は相互に排他的です。
- DOPT(Y) と LANG(JAVA) は有効な組み合わせです。
- LANG は DOPT(Y) と LANG(JAVA) の場合を除いて、GPSB(N) とは無効です。
- LANG(JAVA)、DOPT(Y)、および GPSB(N) は有効な組み合わせです。
- RESIDENT(Y) と DOPT(Y) は相互に排他的です。
- SCHDTYPE(PARALLEL) と DOPT(Y) は相互に排他的です。

FP 高速機能オプションを指定します。

- E** プログラムは、高速機能専用アプリケーション・プログラムです。これは、入力待ち (WFI) アプリケーション・プログラムを暗黙的に定義します。このプログラムを使用可能にするためには、ユーザーの入力編集/経路指定出口ルーチンで割り当てることができるトランザクション また宛先コードのいずれかを、高速機能専用アプリケーションに対して定義する必要があります。
- N** プログラムは、高速機能専用アプリケーション・プログラムではありません。FP(N) が指定されている場合、高速機能のリソースまたはコマンドを使用しようとする、予測不能な結果が生じることがあります。

このプログラムを参照している宛先コードまたはトランザクションが競合する属性を持っている場合、この属性の更新はリジェクトされます。この属性を更新するには、属性を参照する宛先コードおよびトランザクションを削除することが必要な場合があります。この属性をアップデートすると、コマンドの処理の期間にプログラムがスケジューリングを停止します。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- FP(E) では、高速機能が定義されていることが必要です。
- LANG(JAVA) と FP(E) は相互に排他的です。
- BMPTYPE(Y) と FP(E) は相互に排他的です。

GPSB

生成 PSB オプションを指定します。

- N** プログラムに関連する PSB は IMS によって生成されません。PSB の制御ブロックは ACBLIB または (ACB の IMS 管理が使用可能な場合) IMS カタログ内に存在する必要がある、そうでないとプログラムが NOTINIT 状況に設定され、スケジュールを設定できません。
- Y** プログラムに関連付けられた PSB とアプリケーション制御ブロック (ACB) は、IMS によって生成されます。すべての環境のスケジューリング・プロセスでは、入出力 PCB と変更可能な代替 PCB を含んでいる PSB が生成されます。

PSB と ACB を生成したり、PSB を定義する DDL をサブミットしたりする必要はありません。PSB の ACB は、ACBLIB または (ACB の

IMS 管理が使用可能な場合) IMS カタログからロードされません。このため、ACBLIB または IMS カタログから ACB を取得するための入出力は不要です。

生成された PSB には、IOPCBbbb という名前の入出力 PCB と、TPPCB1bb という名前の変更可能な代替 PCB が含まれています。変更可能な代替 PCB では、アプリケーションは、CHNG 呼び出しを使用して出力宛先を変更し、入力宛先以外の宛先に出力を送信することができます。

この属性をアップデートすると、コマンドの処理の期間にプログラムがスケジューリングを停止します。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- DOPT(Y) と GPSB(Y) は相互に排他的です。
- DOPT(Y) と LANG(JAVA) は有効な組み合わせです。
- GPSB(Y) は LANG が必要です。
- LANG は DOPT(Y) と LANG(JAVA) の場合を除いて、GPSB(N) とは無効です。
- LANG(JAVA)、DOPT(Y)、および GPSB(N) は有効な組み合わせです。
- RESIDENT(Y) と GPSB(Y) は相互に排他的です。

LANG

GPSB 用のプログラムの言語インターフェースを指定するか、あるいは DOPT(Y) プログラムで Java 言語を使用するように定義します。

Java 言語を使用する DOPT プログラムを定義するには、プログラムを DOPT(Y) と LANG(JAVA) で定義する必要があります。DOPT PSB は IMS の再始動時にはロードされず、プログラムがスケジュールされるたびにロードされます。プログラムが初めてスケジュールされる場合、プログラムが領域にスケジュールされ、PSB がロードされるまでは、IMS には言語が分かりません。DOPT(Y) プログラムに対して LANG(JAVA) が定義されていない場合、プログラムは非 Java 領域に誤ってスケジュールされます。

LANG パラメーターとその意味を以下の表に示します。

LANG パラメーター	意味
ASSEM	アセンブリー言語
COBOL	COBOL
JAVA	Java
PASCAL	Pascal
PLI	PL/I

この属性をアップデートすると、コマンドの処理の期間にプログラムがスケジューリングを停止します。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- LANG は DOPT(Y) と LANG(JAVA) の場合を除いて、GPSB(N) とは無効です。
- DOPT(Y) と LANG(JAVA) は有効な組み合わせです。

- LANG(JAVA)、DOPT(Y)、および GPSB(N) は有効な組み合わせです。
- FP(E) と LANG(JAVA) は相互に排他的です。

LOCK

LOCK 状況をオンまたはオフに設定することを指定します。SET(LOCK(ON | OFF)) は、他の SET 属性と一緒に指定することはできません。SET(LOCK(ON | OFF)) は、START キーワードまたは STOP キーワードと一緒に指定できます。

ON プログラムをロックして、スケジュールされるのを阻止します。

オフ

プログラムをアンロックして、スケジュールできるようにします。

RESIDENT

常駐オプションを指定します。RESIDENT(N) オプションは直ちに有効になります。RESIDENT(Y) オプションは、次の再始動時に有効になります。ただし、そのプログラムの PSB に関連する ACB がないなどのエラーが検出された場合、あるいはこの IMS で実行中の緊急時再始動の開始点であるチェックポイントの後でプログラムが RESIDENT(Y) として更新された場合を除きます。

N プログラムに関連する PSB は、ストレージに常駐ではありません。PSB はスケジュールされた時間にロードされます。

Y プログラムに関連する PSB は、IMS のコールド・スタート時または再始動時に、ストレージに常駐にされます。IMS は PSB をロードし、それを初期化します。

常駐 PSB はローカル・ストレージ内でアクセスされるため、ACB を取得するための入出力を回避できます。

この属性をアップデートすると、コマンドの処理の期間にプログラムがスケジューリングを停止します。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- DOPT(Y) と RESIDENT(Y) は相互に排他的です。
- GPSB(Y) と RESIDENT(Y) は相互に排他的です。

SCHDTYPE

このアプリケーション・プログラムは、同時に複数のメッセージ領域またはバッチ・メッセージ領域にスケジュールできるかどうかを指定します。

PARALLEL

アプリケーション・プログラムは、同時に複数の領域にスケジュールできます。

SERIAL

アプリケーション・プログラムは、一度に 1 つの領域にのみスケジュールできます。

このプログラムを参照しているトランザクションが 65535 以外の並列限界カウントで定義されている場合、この属性を SCHDTYPE(SERIAL) に更新すると、リジェクトされます。

この属性をアップデートすると、コマンドの処理の期間にプログラムがスケジューリングを停止します。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- DOPT(Y) と SCHDTYPE(PARALLEL) は相互に排他的です。

TRANSTAT

トランザクション・レベル統計をログに記録するかどうかを指定します。指定された値は、プログラムが JBP または非メッセージ・ドリブン BMP である場合にのみ意味を持ちます。Y が指定されている場合、トランザクション・レベル統計は X'56FA' ログ・レコード内のログに書き込まれます。

N トランザクション・レベル統計をログに記録しません。

Y トランザクション・レベル統計をログに記録します。

UPDATE PGM または UPDATE PGMDESC コマンドで TRANSTAT キーワードを使用することにより、ユーザーは、システム・デフォルトまたは TRANSTAT パラメーターの現行値をオーバーライドすることができます。UPDATE PGM コマンドで TRANSTAT キーワードを省略した場合は、プログラムの現行のトランザクション・レベル統計の設定は変更されません。

START

開始される属性を指定します。

SCHD

アプリケーション・プログラムのスケジューリングを開始します。もしくは、データベースまたは DMB がスケジューリング障害以降に作成された場合、無効なデータベースまたは DMB のために NOTINIT 状況が設定されていれば、その NOTINIT 状況をリセットします。プログラムが次回にスケジュールされた時点でまだデータベースまたは DMB が無効である場合、プログラムは再度 NOTINIT 状況のマークを付けます。

TRACE

アプリケーション・プログラムのデータ通信 (DC) の DL/I 部分のトレースを開始します。ユーザー・アプリケーション・プログラムにより出される TPPCB に対するそれぞれの DL/I 呼び出しは、DC 呼び出しハンドラー DFSDLA30 に入ったときとそこから出るときにトレースされます。DFSDLA30 に入ったときに 6701-LA3A タイプのレコードが書き込まれ、DFSDLA30 から出るときに 6701-LA3B レコードのタイプを書き込まれます。

各レコードには、以下の項目が含まれています (該当する場合)。

- TPPCB
- 入出力域の最高 64 バイト
- SMB
- PST

トレース中のバッチ・メッセージ・プログラム (BMP) が IBM IMS Queue Control Facility for z/OS (5697-E99) である場合、6701-MRQB レコードは、IMS Queue Control Facility モジュール DFSQMRQ0 によってログに

記録されます。IMS Queue Control Facility BMP のデフォルト・プログラム名は MRQPSB であり、MSGQUEUE システム定義マクロでオーバーライドすることができます。

6701-MRQB レコードに記録される項目は、次のとおりです。

- TPPCB
- AIB
- 入出力域
- PST
- QTPDST
- QSAPWKAD
- QMBA
- PSTDCA
- REG14-12

REFRESH

プログラムがスケジュールされている領域がポストされるよう指定します。これにより、プログラムの次のスケジュールで、新しいリフレッシュされたプログラムのコピーを取得することができます。

UPDATE PGM START(REFRESH) コマンドは、以下の領域タイプでスケジュールされたプログラムについてサポートされます。

- プログラムがスケジュールされており、プログラムが DFSMPLxx PROCLIB メンバーによってプリロードされていない MPP 疑似入力待ち (PWFI) 領域
- 指定されたプログラム名がスケジュールされている JMP PWFI 領域
- プログラムがスケジュールされており、WFI=YES として定義されたトランザクションを実行している MPP、JMP、およびメッセージ・ドリブン BMP の各領域

UPDATE PGM START(REFRESH) コマンドは、以下の領域タイプについてはサポートされません。

- プログラムが DFSMPLxx PROCLIB メンバーによってロードされた MPP 領域
- IFP 領域
- JBP 領域
- 非メッセージ・ドリブン BMP 領域

UPDATE PGM START(REFRESH) コマンドは、DBCTL 環境内や XRF 代替システムでは無効です。

UPDATE PGM START(REFRESH) コマンドの処理中、領域が SUBQ6 上で WAIT-MESSAGE 状況または WAIT-INPUT 状況でメッセージを待っている場合、領域はポストされ、プログラムは QC 状況コードを受け取ります。領域がアクティブであり、メッセージを処理中である場合、プログラムは現行の作業が処理された後、次の GU 呼び出しが行われる前に QC 状況コードを受け取ります。プログラムのキュー上に新しい作業が存在する場合、次の

GU 呼び出しは、プログラムがコマンドの発行前に PGMLIB 内でリフレッシュされているなら、そのリフレッシュされたプログラムを取得します。

xx パラメーターを指定してコーディングされた MPP 領域の場合、指定されたプログラム名が従属領域 BLDL リスト内に存在すると、そのプログラムは領域がポストされたときに BLDL リストから除去されます。ポストされた JMP 領域の場合、JVM は自動的にリサイクルされた後、再ロードされます。これにより、プログラムの次のスケジュールで Java プログラムのリフレッシュされたコピーを取得することができます。JVM が再ロードされると、DFSJVMMS (JVMOPMAS=)、DFSJVMEV (ENVIRON=)、DFSJVMAP の各構成メンバーがリフレッシュされるか、または //STDENV DD ステートメントが使用される場合は、Java 環境変数およびオプションを指定するシェル・スクリプトが再ロードされます。Java プログラムの場合、クラス・パスに対する変更は、UPDATE PGM START(REFRESH) コマンドによってもリフレッシュすることができます。

アプリケーション・プログラムが変更されており、プログラムが新規の変更を取得する必要がある場合は、UPDATE PGM START(REFRESH) コマンドを使用できます。プログラムがスケジュール変更された場合、プログラムはアプリケーション・プログラムの変更を取得します。

領域がポストされた場合でも、他の作業をスケジュールするために MPP 領域および JMP 領域は使用可能のまま残ります。BMP 領域で実行されているプログラムは、UPDATE PGM START(REFRESH) コマンドが発行されたときに QC 状況を受け取ります。QC 状況コードを受け取ると、以下のようになります。

- プログラムが QC 状況コードを正しく処理して終了した場合、BMP 領域は終了するため、この領域を再始動する必要があります。
- プログラムが QC 状況コードを処理せず、終了もせずに後続の GU/CHKP 呼び出しを発行した場合、後続の GU/CHKP 呼び出しの処理中にプログラムは U330 異常終了を受け取ります。領域を再始動する必要があります。

領域が再始動されると、領域は更新されたプログラムを PGMLIB から取得します。

プログラムに別名プログラムが定義されている場合は、プログラムの次のスケジュールでリフレッシュされたコピーをロードできるように、コマンドでプログラム名と別名プログラム名の両方を指定する必要があります。

UPDATE PGM START(REFRESH) コマンドは、DRD 環境と非 DRD 環境のどちらにも適用できます。このコマンドは、コマンドを受け取る各 IMS によって処理されます。コマンド処理は、そのプログラムがスケジュールされているすべての IMS システム間で調整されるわけではありません。

UPDATE PGM START(REFRESH) コマンドは、DBF#FPU0 などの IMS 内部プログラムや QCF MRQPSB 用の IMS PSB に対しては許可されません。

NAME(*) が START(REFRESH) で指定され、OPTION(ALLRSP) が指定されていない場合、コマンド応答は、PWFI 領域や WFI=YES トランザクショ

ンがある領域でスケジュールされているプログラム名のみで構成されます。OPTION(ALLRSP) が指定された場合、IMS 内のすべてのプログラム名が戻されます。

UPDATE PGM START(REFRESH) コマンドは、コマンドを受け取るすべての IMS システムによって処理されます。

START(REFRESH) キーワードは、START(SCHD)、START(TRACE)、SET()、および STOP() と一緒に使用することはできません。

STOP

停止する属性を指定します。

SCHD

アプリケーション・プログラムのスケジューリングを停止します。

TRACE

アプリケーション・プログラムのデータ通信 (DC) の DL/I 部分のトレースを停止します。

使用上の注意

リソースは、DELETE コマンドを使用して削除されない限り、IMS の存続期間中存在着ています。リソースは、IMS ウォーム・スタートまたは緊急時再始動を越えて、リカバリー可能です。IMS がコールド・スタートする場合、IMS が稼働中にエクスポートされた定義をコールド・スタートがインポートしない限り、リソースは失われます。

UPDATE PGM コマンドは、OM API を介してのみ出すことができます。このコマンドは DB/DC、DBCTL および DCCTL システムに適用されます。

このコマンドは、XRF 代替または FDBR 領域では無効です。MODBLKS のオンライン変更が使用可能な場合 (DFSDFxxx または DFSCGxxx が MODBLKS=OLC で定義されているか、MODBLKS が定義されていない場合)、SET() を指定した UPDATE コマンドは無効です (ただし、SET(LOCK()) および SET(TRANSTAT()) は除きます)。

このコマンドはリカバリー可能です。

キーワード START、STOP、SET(LOCK(ON|OFF))、および SET(TRANSTAT(Y|N)) と一緒に使用する場合を除き、UPDATE コマンドは IMS 定義のリソースに対しては許可されません。UPDATE PGM コマンドの場合、これは高速機能ユーティリティー・プログラム DBF#FPU0 を意味します。

BMPTYPE、DOPT、FP、GPSB、LANG、RESIDENT、SCHDTYPE、または TRANSTAT 値が変更される場合、UPDATE PGM コマンドは MODBLKS プログラムを、UPDATE の定義タイプを持つ動的プログラムに変更します。

オンライン変更処理 (すべてのプログラムが更新されるか、どのプログラムも更新されないかのいずれか) とは異なり、各プログラムが個別に更新されます。プログラムのほとんどのランタイム・リソース定義値は、そのプログラムが使用中でない場合にのみ更新できます。プログラムが使用中の場合、更新は失敗します。

プログラムの状況 (LOCK、START、STOP) は、プログラムが使用中の間に更新できます。

UPDATE コマンドで指定されたすべての属性が既にそのリソースに定義されている場合、更新は実際には行われず、リソースは静止されず、ログ・レコードは作成されず、ゼロの完了コードが戻されます。これにより、アクションを行う必要がないときに、不要なプロセッサの使用を回避できます。

MODBLKS のオンライン変更が使用可能な場合、プログラム属性 BMPTYPE、DOPT、FP、GPSB、LANG、RESIDENT、および SCHDTYPE は更新できません。

同等の IMS タイプ 1 コマンド

以下の表は、各種の UPDATE PGM コマンドと、類似の機能を実行するタイプ 1 IMS コマンドを示しています。

表 510. UPDATE PGM コマンドと同等のタイプ 1 コマンド

UPDATE コマンド	類似の IMS タイプ 1 コマンド
UPDATE PGM START(REFRESH)	/PSTOP REGION TRAN xxx

出力フィールド

以下の表には、UPDATE PGM 出力フィールドが記載されています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 511. UPDATE PGM コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	完了コード
CCTXT	CCText	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードを簡潔に説明する完了コード・テキスト。
ERRT	ErrorText	<i>error</i>	診断情報を含むエラー・テキスト。エラー・テキストはゼロ以外の完了コードに戻すことができ、完了コードをさらに説明する情報を含んでいます。
JOB	JobName	START(REFRESH)	ポストされたプログラムのジョブ名。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。

表 511. UPDATE PGM コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
PGM	PgmName	PGM	プログラム名。
RGNN	RgnNum	START(REFRESH)	プログラムがスケジュールされている領域番号。
RGNT	RgnType	START(REFRESH)	プログラムがスケジュールされている領域タイプ。

戻りコード、理由コード、および完了コード

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 512. UPDATE PGM コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。NAME(*) が OPTION(ALLRSP) なしで指定される場合、出力行は戻されません。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'00000004'	X'00002008'	キーワードの数が無効です。SET、START、または STOP キーワードのいずれかが必要です。
X'00000008'	X'00002040'	START(REFRESH) が START(TRACE) または START(SCHD) と一緒に指定されました。
X'00000008'	X'00002044'	START フィルターと STOP フィルターに同じ属性値が指定されているため、UPDATE PGM コマンドは処理されません。属性 SCHD および TRACE は、START または STOP キーワードと一緒にのみ (両方ではない) 指定できます。START STOP 属性は 1 つのみ、コマンド上に指定されていることを確認してください。
X'00000008'	X'00002048'	無効な SET 属性。
X'00000008'	X'00002106'	DOPT(Y) と RESIDENT(Y) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002107'	DOPT(Y) と SCHDTYPE(PARALLEL) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'0000210B'	FP(E) と BMPTYPE(Y) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'0000210D'	FP(E) と LANG(JAVA) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002113'	GPSB(Y) と DOPT(Y) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002114'	GPSB(N) と LANG は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002115'	GPSB(Y) と RESIDENT(Y) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002132'	DOPT(Y) は、LANG(JAVA) を除いて、LANG と一緒にの使用はサポートされません。

表 512. UPDATE PGM コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'0000000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。NAME(*) が OPTION(ALLRSP) なしで指定される場合、ゼロ以外の完了コードのリソースのみが戻されます。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'0000000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'00000010'	X'0000400C'	XRF 代替システムではコマンドは無効です。
X'00000010'	X'00004017'	DBCTL 環境では無効です。
X'00000010'	X'00004024'	高速機能が定義されていないため、FP(E) は無効です。
X'00000010'	X'00004120'	オンライン変更フェーズが進行中です。
X'00000010'	X'00004300'	MODBLKS のオンライン変更が有効なため、コマンドが許可されません (DFSDFxxx または DFSCGxxx が MODBLKS=OLC で定義されているか、または MODBLKS が定義されていません)。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できませんでした。
X'00000014'	X'00005008'	DFSPOOL ストレージを取得できませんでした。
X'00000014'	X'0000500C'	AWE を取得できませんでした。
X'00000014'	X'00005010'	ラッチを取得できませんでした。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。以下の表には、完了コードの説明が記載されています。

表 513. UPDATE PGM コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味	エラー・テキスト
0		プログラムに対するコマンドは正常に完了しました。	
10	NO RESOURCES FOUND	プログラム名が無効であるか、指定されたワイルドカード・パラメーターがどのプログラム名にも一致しません。	

表 513. UPDATE PGM コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味	エラー・テキスト
17	ANOTHER CMD IN PROGRESS	このプログラムに対して別のコマンド (DELETE または UPDATE など) が進行中です。これは、固有またはワイルドカードの複数のパラメーターでプログラムが指定されている場合、このコマンドを意味する場合があります。	
29	DOPT=Y/RESIDENT=Y CONFLICT	動的 DOPT(Y) オプションは、常駐 RESIDENT(Y) オプションと競合するため、プログラムの更新は失敗しました。	
2A	DOPT=Y/PARALLEL CONFLICT	動的 DOPT(Y) オプションは、並列スケジュール SCHDTYPE(PARALLEL) オプションと競合するため、プログラムの更新は失敗しました。	
2F	FP=E/BMPTYPE=Y CONFLICT	高速機能専用 FP(E) オプションは、BMP タイプ BMPTYPE(Y) と競合するため、プログラムの更新は失敗しました。	
36	RTC/FP=N PGM CONFLICT	非高速機能オプション FP(N) は、このプログラムを参照する高速機能専用トランザクションと競合するため、プログラムの更新は失敗しました。	
37	FP=E/LANG=JAVA CONFLICT	高速機能専用 FP(E) オプションは、Java 言語 LANG(JAVA) と競合するため、プログラムの更新は失敗しました。	
3E	FP=N/FP=E PGM CONFLICT	高速機能専用 FP(E) オプションは、このプログラムを参照する非高速機能トランザクションと競合するため、プログラムの更新は失敗しました。	<i>trannname</i> (8 文字)

表 513. UPDATE PGM コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味	エラー・テキスト
3F	FP=P/BMPTYPE=Y CONFLICT	BMP タイプのプログラムは、このプログラムを参照する高速機能専用トランザクションと競合するため、プログラムの更新は失敗しました。	<i>trannname</i> (8 文字)
40	PARLIM/ SCHDTYPE=SERIAL CONFLICT	プログラムを参照するトランザクションが 65535 以外の PARLIM 値を持っているため、SCHDTYPE 値を SERIAL に変更することはできません。プログラム定義は更新されません。	
43	GPSB=Y/DOPT=Y CONFLICT	生成 PSB GPSB(Y) オプションは、動的 DOPT(Y) オプションと競合するため、プログラムの更新は失敗しました。	
46	GPSB=N/LANG CONFLICT	生成 PSB オプション N (GPSB(N)) は、言語オプション (LANG()) と競合しません。プログラム定義は更新されません。	
47	GPSB=Y/RESIDENT=Y CONFLICT	生成 PSB GPSB(Y) オプションは、常駐 RESIDENT(Y) オプションと競合するため、プログラムの更新は失敗しました。	
48	Not allowed for IMS resources	指定されたコマンドは、IMS 定義のリソースに対しては使用できません。	
73	PROGRAM SCHEDULED	プログラムがスケジュールされています。	

表 513. UPDATE PGM コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味	エラー・テキスト
7A	RTC/FP=N PGM CONFLICT	FP(N) として更新する予定のプログラムは、そのプログラムを参照する宛先コードと競合します。宛先コード名がエラー・テキストとして戻されます。 推奨アクション: DELETE RTC コマンドまたは DELETE TRAN (FP 専用トランザクションに関連する場合) を発行して、宛先コードを削除します。あるいは UPDATE RTC コマンドを発行して、プログラムを別の名前に更新します。	rtcodename (8 文字)
97	DOPT=Y/LANG CONFLICT	動的オプション DOPT(Y) オプションは、指定された LANG と競合するため、プログラムの更新は失敗しました。DOPT(Y) は LANG(JAVA) と一緒の使用のみサポートされます。	
99	NOT INITIALIZED	プログラムが正常に初期化されていないため、プログラムの更新は失敗しました。QRY PGM SHOW(STATUS) コマンドを使用すると、NOTINIT 状況の理由に関する追加情報が戻されます。	
B9	REQUIRES LANG	指定された DOPT(Y) または GPSB(Y) オプションは、言語 LANG を指定するか、LANG が既に定義済みである必要があるため、プログラムの更新は失敗しました。	
BA	Not allowed for MRQ PSB	指定されたコマンドは、QCF に使用される MRQ PSB に対しては使用できません。	

表 513. UPDATE PGM コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味	エラー・テキスト
1D7	IMPORT CHANGE LIST ERROR	リソースは、IMSRSC リポ ジトリー内の変更リストか らのインポート処理中であ るか、変更リストから正常 にインポートされませんで した。リソースは、リポジ トリーから正常にインポー トされるまでは、更新する ことができません。	
220	Program is not scheduled	指定されたプログラム名 は、どの領域にもスケジュー ールされておらず、したが ってポストすることができ ません。	
221	Not supported for region type	指定されたプログラム名 は、サポートされていない 領域タイプでスケジュール されています。IFP および JBP の領域タイプはサポー トされていません。	
222	Stop Region Pending	領域に対して /STOP REGION コマンドが保留中 であり、領域は終了しよう としているため、UPDATE PGM START(REFRESH) コ マンドは処理されません。	
223	Not PWFI region or WFI=Y tran	指定されたプログラム名 は、PWFI 領域または WFI=N トランザクション がある非 PWFI 領域でスケ ジュールされていないた め、ポストされません。	
224	Preloaded in DFSMPLxx list	指定されたプログラムは、 DFSMPLxx プリロード・リ ストに含まれているために 従属領域にプリロードされ ており、したがってポスト されません。	
225	Non message driven BMP region	指定されたプログラムは非 メッセージ・ドリブン BMP 領域でスケジュールされて います。	

例

以下に示すのは UPDATE PGM コマンドの例です。

UPDATE PGM コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE PGM NAME(BADNAME,AUTPSB2,CDEBS,BMP011,BAD*) SET(SCHDTYPE(PARALLEL))
```

TSO SPOC 出力:

```
Response for: UPDATE PGM NAME(BADNAME,AUTPSB2,CDEBS,BMP011,BAD*) SET(SCHDTYPE(PARALLEL))
PgmName MbrName CC CCText
AUTPSB2 IMS1 0
BAD* IMS1 10 NO RESOURCES FOUND
BADNAME IMS1 10 NO RESOURCES FOUND
BMP011 IMS1 2A DOPT=Y/PARALLEL CONFLICT
CDEBS IMS1 0
```

OM API 入力:

```
CMD(UPDATE PGM NAME(BADNAME,AUTPSB2,CDEBS,BMP011,BAD*) SET(SCHDTYPE(PARALLEL)))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.3.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2006.311 00:55:21.981467</statime>
<stotime>2006.311 00:55:21.981970</stotime>
<staseq>BFAADF0EA2A1B548</staseq>
<stoseq>BFAADF0EA2C12E48</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10165521</rqsttkn1>
<rc>0200000C</rc>
<rsn>00003008</rsn>
<rsnmsg>CSLN054I</rsnmsg>
<rsntxt>None of the clients were successful.</rsntxt>
</ctl>
<cmderr>
<mbr name="IMS1 ">
<typ>IMS </typ>
<styp>DBDC </styp>
<rc>0000000C</rc>
<rsn>00003000</rsn>
<rsntxt>At least one request successful</rsntxt>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>PGM </kwd>
<input>UPDATE PGM NAME(BADNAME,AUTPSB2,CDEBS,BMP011,BAD*)
SET(SCHDTYPE(PARALLEL)) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="PGM" l1b1="PgmName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
```



```

<hdr s1b1="ERRT" l1b1="ErrorText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>PGM(BADNAME ) MBR(IMS1) CC( 10) CCTXT(NO RESOURCES FOUND) </rsp>
<rsp>PGM(AUTPSB2 ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>PGM(CDEBS ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>PGM(BMP011 ) MBR(IMS1) CC( 2A) CCTXT(DOPT=Y/PARALLEL CONFLICT)
</rsp>
<rsp>PGM(BAD* ) MBR(IMS1) CC( 10) CCTXT(NO RESOURCES FOUND) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: 同時に複数の領域にスケジュールできるように、いくつかのプログラムを更新しています。プログラム AUTPSB2 と CDEBS の更新は、完了コード 0 で示されているように、正常に完了しました。プログラム BMP011 の更新は、完了コード 2A で失敗しました。これは、SCHDTYPE(PARALLEL) 属性が、プログラム BMP011 に既に定義されている DOPT(Y) 属性と競合することを示しています。プログラム BADNAME およびパラメーター BAD* の更新は、完了コード 10 で失敗しています。プログラム BADNAME は存在せず、また BAD で始まるプログラム名はないからです。

UPDATE PGM コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
UPD PGM NAME(PGM*,PGX) START(REFRESH)
```

TSO SPOC 出力:

PgmName	MbrName	CC	CCText	RgnNum	RgnType	JobName
PGMA	IMS1	0		1	MPP	MPP1
PGMA	IMS1	0		3	MPP	MPP2
PGMA1	IMS1	221	Not supported for region type	2	IFP	IFP1
PGMA2	IMS1	223	Not PWFI region or WFI=Y tran	8	MPP	MPP3
PGMB	IMS1	220	Program is not scheduled			
PGMMPL1	IMS1	224	Preloaded in DFSMPLxx list	9	MPP	MPP4
PGMNBMP1	IMS1	225	Non message driven BMP region	10	BMP	BMP1
PGMY	IMS1	0		4	JMP	JMP1
PGX	IMS1	10	Name not found			

OM API 入力:

```
CMD(UPD PGM NAME(PG*) START(REFRESH))
```

説明: PGMA は領域 ID 1 および 3 でスケジュールされており、これらの領域はポストされます。PGMA1 は領域 2 でスケジュールされており、領域 2 は IFP であるためにリフレッシュすることができません。PGMA2 は領域 8 でスケジュールされており、領域 8 は PWFI でなく、WFI=YES トランザクションを実行していないため、ポストされません。PGMB は、現時点ではスケジュールされていません。PGMMPL1 は MPP でスケジュールされており、DFSMPLxx PROCLIB メンバーにプリロードされているため、ポストされません。PGMNBMP1 は、ポストされない非メッセージ・ドリブン BMP でスケジュールされています。PGMY は作業を処理中の領域 4 でスケジュールされており、この領域は作業が完了するとポストされます。PGX は有効なプログラムではありません。

UPDATE PGM コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

UPD PGM NAME(*) START(REFRESH)

TSO SPOC 出力:


PgmName	MbrName	CC	CCText	RgnNum	RgnType	JobName
PGM1	IMS1	0		6	MPP	MPP1
PGMA	IMS1	0		1	MPP	MPP2
PGMA	IMS1	0		3	MPP	MPP3
PGMA1	IMS1	221	Not supported for region type	2	IFP	IFP1
PGMA2	IMS1	223	Not PWFI region or WFI TRAN	8	MPP	MPP4
PGMY	IMS1	0		4	JMP	JMP1


OM API 入力:

CMD(UPD PGM NAME(PGM*) START(REFRESH))


説明: OPTION(ALLRSP) が NAME(*) と一緒に指定されていないため、PWFI 領域または WFI= YES トランザクションがある領域でスケジュールされているプログラム名のみが戻されます。APGM1 は領域 ID 6 でスケジュールされており、この領域はポストされます。PGMA は領域 ID 1 および 3 でスケジュールされており、これらの領域はポストされます。PGMA1 は領域 2 でスケジュールされており、この領域は IFP であるためにポストすることができません。PGMA2 は領域 8 でスケジュールされており、領域 8 は PWFI でなく、WFI=YES トランザクションを実行していないため、ポストされません。PGMY は作業を処理中の領域 4 でスケジュールされており、この領域は作業が完了するとポストされます。

関連概念:


 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)


 キュー制御機能メッセージ・リキュアーの問題の診断 (診断)

関連タスク:

 UPDATE コマンドを使用した、ランタイム・アプリケーション・プログラム・リソース定義および記述子定義の更新 (システム定義)

関連資料:

 /LOCK コマンド (コマンド)

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

922 ページの『/START PGM コマンド』

973 ページの『/STOP PGM コマンド』

1027 ページの『第 27 章 /TRACE コマンド』

1071 ページの『/UNLOCK PGM コマンド』

1048 ページの『/TRACE PGM コマンド』

 IMS Queue Control Facility overview

UPDATE PGMDESC コマンド

UPDATE PGMDESC コマンドは、プログラム記述子を更新するために使用します。記述子は、記述子またはリソースの作成に使用できるモデルです。

記述子の更新では、UPDATE コマンドで明示的に指定された属性のみが変更されます。指定されなかった属性は、既存の値を保持します。CREATE LIKE(DESC(descriptor_name)) コマンドを指定することにより、この記述子をモデルとして使用して、任意のプログラム・リソースまたは記述子を作成できます。この記述子を使用して既に作成された記述子またはリソースは、更新されません。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 1376 ページの『キーワード』
- 1380 ページの『使用上の注意』
- 1381 ページの『出力フィールド』
- 1381 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1384 ページの『例』

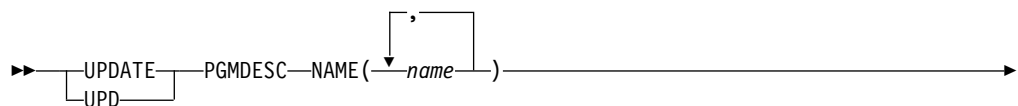
環境

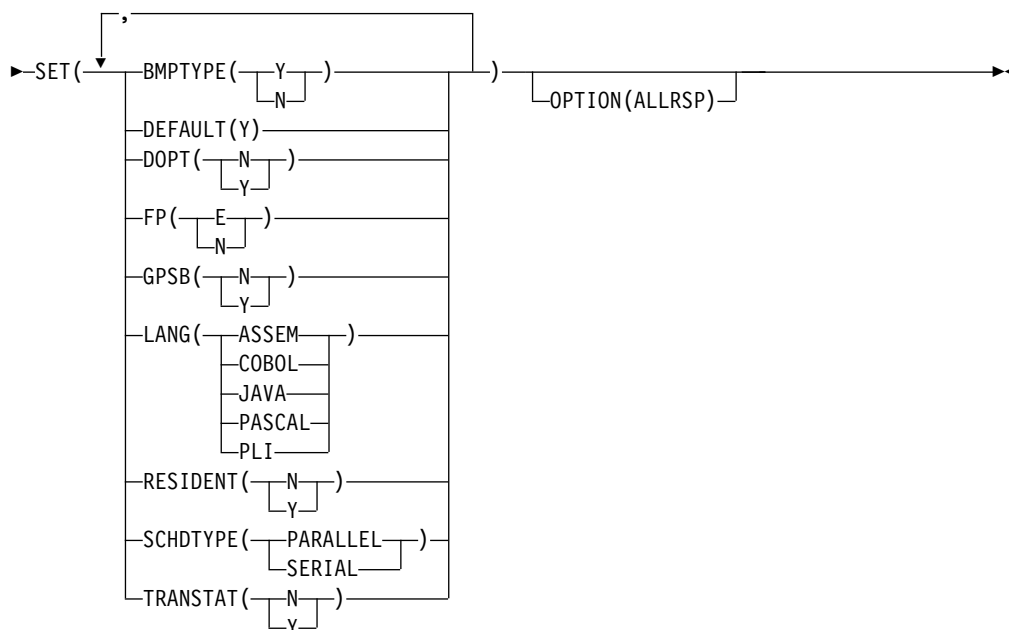
以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/BC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 514. UPDATE PGMDESC コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
UPDATE PGMDESC	X	X	X
NAME	X	X	X
OPTION	X	X	X
SET	X	X	X

構文





キーワード

以下のキーワードは、UPDATE PGMDESC コマンドに有効です。

NAME

プログラム記述子の名前 (1 から 8 文字) を指定します。名前にはワイルドカードを指定することができます。名前は反復可能なパラメーターです。指定された NAME パラメーターが固有またはワイルドカード名の場合、処理されたすべての記述子名についてコマンド応答が戻されます。NAME(*) の場合、エラーになった記述子名についてのみ、コマンド応答が戻されます。

OPTION(ALLRSP) を NAME(*) と同時に指定すれば、処理されたすべての記述子名についてコマンド応答が取得できます。

OPTION

コマンドとともに実行される追加の機能を指定します。

ALLRSP

コマンドで処理されたすべての記述子について、応答行を戻すことを指示します。デフォルトのアクションでは、エラーになった記述子についてのみ応答行が戻されます。これは、NAME(*) を指定した場合のみ有効です。

ALLRSP は、他の NAME 値では無視されます。

SET

変更される属性値を指定します。

BMPTYPE

BMP タイプのオプション。プログラムが BMP タイプ領域で実行されるかどうかを指定します。BMP タイプ領域は、BMP 領域または JBP 領域です。

DB2 ストアード・プロシージャ、WebSphere Application Server の下で実行されるプログラム、および ODBA インターフェースの他のユーザーのそれぞれによってスケジュールされる PSB は、BMPTYPE Y または N で定義できます。

Y プログラムは BMP タイプ領域で実行されます。これは、IMS BMP 領域または JBP 領域で実行できます。関連のトランザクションには、ゼロの通常優先順位値および限界優先順位値が割り当てられます。

N プログラムは BMP タイプ領域で実行されません。プログラムは、IMS TM MPP、JMP、または IFP 領域で実行するか、あるいは ODBA または DRA インターフェースを使用できます。この指定は、IMS TM MPP、JMP、および IFP 領域で実行されるプログラム、あるいは DBCTL を使用する CICS プログラムおよび DRA インターフェースの他のユーザーによってスケジュールされる、PSB に対して使用する必要があります。これはデフォルトです。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- BMPTYPE(Y) と FP(E) は相互に排他的です。

DEFAULT(Y)

この記述子をデフォルトとして指定します。これは、既存のデフォルト記述子を DEFAULT(N) にリセットします。LIKE キーワードなしで記述子またはリソースが作成される時、CREATE コマンドで指定されない属性は、デフォルト記述子に定義されている値を取ります。リソース・タイプのデフォルトとして、記述子 1 つだけが定義できます。IMS は、DFSDSPG1 と呼ばれるプログラム記述子を定義しています。ここでは、すべての属性がデフォルト値で定義されています。ユーザー定義記述子をデフォルトに定義すると、現在のデフォルト記述子がオーバーライドされます。デフォルトにできるプログラム記述子は一度に 1 つに限られるため、1 つの記述子名のみを DEFAULT(Y) で指定できます。

DOPT

動的オプションを指定します。

N このプログラムに関連する PSB は、動的に位置指定されません。PSB の制御ブロックは ACBLIB または IMS カタログ内に存在する必要がある、そうでないとプログラムが NOTINIT 状況に設定され、スケジュールを設定できません。

Y このプログラムに関連する PSB は、動的に位置指定されます。この PSB に関連するプログラムがスケジュールされるたびに、PSB の最新のコピーがロードされます。プログラムが終了すると、この PSB は PSB プールから削除されます。

PSB がトランザクションの処理に必要なまで、ACBLIB 内、または (ACB の IMS 管理が使用可能な場合) IMS カタログ内に PSB の ACB が存在している必要はありません。PSB の新しいバージョンは、ACBLIB または IMS カタログにいつでも定義および追加できます。PSB の次回スケジュール時に、IMS は ACB の新しいバージョンをロードします。

PSB が参照する DBD の制御ブロックが ACBLIB または IMS カタログに存在しない場合は、DOPT PSB をスケジュールに入れることはできません。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- DOPT(Y) と GPSB(Y) は相互に排他的です。
- DOPT(Y) と LANG(JAVA) は有効な組み合わせです。
- LANG は DOPT(Y) と LANG(JAVA) の場合を除いて、GPSB(N) とは無効です。
- LANG(JAVA)、DOPT(Y)、および GPSB(N) は有効な組み合わせです。
- RESIDENT(Y) と DOPT(Y) は相互に排他的です。
- SCHDTYPE(PARALLEL) と DOPT(Y) は相互に排他的です。

FP 高速機能オプションを指定します。

E プログラムは、高速機能専用アプリケーション・プログラムです。これは、入力待ち (WFI) アプリケーション・プログラムを暗黙的に定義します。このプログラムを使用可能にするためには、ユーザーの入力編集/経路指定出口ルーチンで割り当てることができるトランザクション また宛先コードのいずれかを、高速機能専用アプリケーションに対して定義する必要があります。

N プログラムは、高速機能専用アプリケーション・プログラムではありません。FP(N) が指定されている場合、高速機能のリソースまたはコマンドを使用しようとすると、予測不能な結果を招きます。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- FP(E) では、高速機能が定義されていることが必要です。
- LANG(JAVA) と FP(E) は相互に排他的です。
- BMPTYPE(Y) と FP(E) は相互に排他的です。

GPSB

生成 PSB オプションを指定します。

N プログラムに関連する PSB は IMS によって生成されません。PSB の制御ブロックは ACBLIB または (ACB の IMS 管理が使用可能な場合) IMS カタログ内に存在する必要があるため、そうでないとプログラムが NOTINIT 状況に設定され、スケジュールを設定できません。

Y プログラムに関連付けられた PSB とアプリケーション制御ブロック (ACB) は、IMS によって生成されます。すべての環境のスケジューリング・プロセスでは、入出力 PCB と変更可能な代替 PCB を含んでいる PSB が生成されます。

PSB と ACB を生成したり、PSB を定義する DDL をサブミットしたりする必要はありません。PSB の ACB は、ACBLIB または (ACB の IMS 管理が使用可能な場合) IMS カタログからロードされません。このため、ACBLIB または IMS カタログから ACB を取得するための入出力は不要です。

生成された PSB には、IOPCBbbb という名前の入出力 PCB と、TPPCB1bb という名前の変更可能な代替 PCB が含まれています。変更

可能な代替 PCB では、アプリケーションは、CHNG 呼び出しを使用して出力宛先を変更し、入力宛先以外の宛先に出力を送信することができます。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- DOPT(Y) と GPSB(Y) は相互に排他的です。
- DOPT(Y) と LANG(JAVA) は有効な組み合わせです。
- GPSB(Y) は LANG が必要です。
- LANG は DOPT(Y) と LANG(JAVA) の場合を除いて、GPSB(N) とは無効です。
- LANG(JAVA)、DOPT(Y)、および GPSB(N) は有効な組み合わせです。
- RESIDENT(Y) と GPSB(Y) は相互に排他的です。

LANG

GPSB 用のアプリケーション・プログラムの言語インターフェースを指定します。

LANG パラメーターとその意味を以下の表に示します。

LANG パラメーター	意味
ASSEM	Assembler
COBOL	COBOL
JAVA	Java
PASCAL	Pascal
PLI	PL/I

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- LANG は DOPT(Y) と LANG(JAVA) の場合を除いて、GPSB(N) とは無効です。
- DOPT(Y) と LANG(JAVA) は有効な組み合わせです。
- LANG(JAVA)、DOPT(Y)、および GPSB(N) は有効な組み合わせです。
- FP(E) と LANG(JAVA) は相互に排他的です。

RESIDENT

常駐オプションを指定します。

- N** プログラムに関連する PSB は、ストレージに非常駐にされます。PSB はスケジュールされた時間にロードされます。
- Y** プログラムに関連する PSB は、即時にストレージに常駐にされます。IMS は PSB をロードし、それを初期化します。PSB が PSB プールから除去されます (該当する場合)。常駐 PSB はローカル・ストレージ内でアクセスされるため、ACB を取得するための入出力は不要になります。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- DOPT(Y) と RESIDENT(Y) は相互に排他的です。
- GPSB(Y) と RESIDENT(Y) は相互に排他的です。

SCHDTYPE

このアプリケーション・プログラムは、同時に複数のメッセージ領域またはバッチ・メッセージ領域にスケジュールできるかどうかを指定します。

PARALLEL

アプリケーション・プログラムは、同時に複数の領域にスケジュールできます。

SERIAL

アプリケーション・プログラムは、一度に 1 つの領域にのみスケジュールできます。

このプログラムを参照しているトランザクションが 65535 以外の並列限界カウントで定義されている場合、この属性を SCHDTYPE(SERIAL) に更新すると、リジェクトされます。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- DOPT(Y) と SCHDTYPE(PARALLEL) は相互に排他的です。

TRANSTAT

トランザクション・レベル統計をログに記録するかどうかを指定します。指定された値は、プログラムが JBP または非メッセージ・ドリブン BMP である場合にのみ意味を持ちます。Y が指定されている場合、トランザクション・レベル統計は X'56FA' ログ・レコード内のログに書き込まれます。

N トランザクション・レベル統計をログに記録しません。

Y トランザクション・レベル統計をログに記録します。

UPDATE PGMDESC コマンドで TRANSTAT キーワードを使用することにより、ユーザーは、システム・デフォルトまたは TRANSTAT パラメーターの現行値をオーバーライドすることができます。UPDATE PGMDESC コマンドで TRANSTAT キーワードを省略した場合は、プログラムの現行のトランザクション・レベル統計の設定は変更されません。

使用上の注意

UPDATE コマンドで指定されたすべての属性が既にその記述子に定義されている場合、更新は実際には行われず、記述子は静止されず、ログ・レコードは作成されず、ゼロの完了コードが戻されます。これにより、アクションを行う必要がないときに、不要なオーバーヘッドを回避できます。

記述子は、DELETE コマンドを使用して削除されない限り、IMS の存続期間中存在しています。記述子は、IMS ウォーム・スタートまたは緊急時再始動を越えて、リカバリー可能です。IMS がコールド・スタートする場合、IMS が稼働中にエクスポートされた定義をコールド・スタートがインポートしない限り、記述子は失われます。

UPDATE PGMDESC コマンドは、OM API を介してのみ出すことができます。このコマンドは DB/DC、DBCTL および DCCTL システムに適用されます。

このコマンドは、XRF 代替または FDBR 領域では無効です。MODBLKS のオンライン変更が使用可能な場合 (DFSDFxxx または DFSCGxxx が MODBLKS=OLC で定義されているか、MODBLKS が定義されていない場合)、UPDATE PGMDESC コマンドは無効です。

このコマンドはリカバリー可能です。

記述子が IMS 定義のプログラム記述子 (DFS DSPG1) である場合、更新できる属性は、DEFAULT (SET(DEFAULT(Y))) 属性と TRANSTAT (SET(TRANSTAT (Y|N|))) 属性だけです。

各記述子が個別に更新されます。個別の更新は、オンライン変更の機能 (すべての記述子が更新されるか、どの記述子も更新されないかのいずれか) とは異なります。

出力フィールド

以下の表には、UPDATE PGMDESC 出力フィールドが記載されています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 515. UPDATE PGMDESC コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	キーワード	意味
CC	N/A	完了コード
CCTXT	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードを簡潔に説明する完了コード・テキスト。
DESC	PGMDESC	プログラム記述子名。
ERRT	<i>error</i>	診断情報を含むエラー・テキスト。エラー・テキストはゼロ以外の完了コードに戻すことができ、完了コードをさらに説明する情報を含んでいます。
MBR	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。
OLDDEF	PGMDESC	古いデフォルト記述子名 (DEFAULT(Y) を指定して、この記述子をデフォルトに更新する場合)。古いデフォルトの記述子は、もはやデフォルトではありません。

戻りコード、理由コード、および完了コード

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 516. UPDATE PGMDESC コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各記述子の行と、その完了コードを含んでいます。 NAME(*) が OPTION(ALLRSP) なしで指定される場合、出力行は戻されません。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'00000004'	X'00002008'	キーワードの数が無効です。SET キーワードが必要です。
X'00000008'	X'00002048'	無効な SET 属性。
X'00000008'	X'00002106'	DOPT(Y) と RESIDENT(Y) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002107'	DOPT(Y) と SCHDTYPE(PARALLEL) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'0000210B'	FP(E) と BMPTYPE(Y) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'0000210D'	FP(E) と LANG(JAVA) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002113'	GPSB(Y) と DOPT(Y) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002114'	GPSB(N) と LANG は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002115'	GPSB(Y) と RESIDENT(Y) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002132'	DOPT(Y) は、LANG(JAVA) を除いて、LANG と一緒の使用はサポートされません。
X'00000008'	X'00002133'	複数の name パラメーターが DEFAULT(Y) に指定されています。一度に 1 つの記述子のみをデフォルトにできます。
X'0000000C'	X'00003000'	一部の記述子ではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各記述子の行と、その完了コードを含んでいます。 NAME(*) が OPTION(ALLRSP) なしで指定される場合、ゼロ以外の完了コードの記述子のみが戻されます。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'0000000C'	X'00003004'	コマンドはどの記述子でも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各記述子の行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'00000010'	X'0000400C'	XRF 代替システムではコマンドは無効です。
X'00000010'	X'00004024'	高速機能が定義されていないため、FP(E) は無効です。
X'00000010'	X'00004120'	オンライン変更フェーズが進行中です。
X'00000010'	X'00004300'	MODBLKS のオンライン変更が有効なため、コマンドが許可されません (DFSDFxxx または DFSCGxxx が MODBLKS=OLC で定義されているか、または MODBLKS が定義されていません)。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できませんでした。
X'00000014'	X'00005008'	DFSPOOL ストレージを取得できませんでした。
X'00000014'	X'0000500C'	AWE を取得できませんでした。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。以下の表には、完了コードの説明が記載されています。

表 517. UPDATE PGMDESC コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		プログラム記述子に対するコマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	プログラム記述子名が無効であるか、指定されたワイルドカード・パラメーターがどのプログラム記述子名にも一致しません。
17	ANOTHER CMD IN PROGRESS	このプログラム記述子に対して別のコマンド (DELETE または UPDATE など) が進行中です。これは、固有またはワイルドカードの複数のパラメーターで記述子が指定されている場合、このコマンドを意味する場合があります。
29	DOPT=Y/RESIDENT=Y CONFLICT	動的 DOPT(Y) オプションは、常駐 RESIDENT(Y) オプションと競合するため、プログラム記述子の更新は失敗しました。
2A	DOPT=Y/PARALLEL CONFLICT	動的 DOPT(Y) オプションは、並列スケジュール SCHDTYPE(PARALLEL) オプションと競合するため、プログラム記述子の更新は失敗しました。
2F	FP=E/BMPTYPE=Y CONFLICT	高速機能専用 FP(E) オプションは、BMP タイプ BMPTYPE(Y) と競合するため、プログラム記述子の更新は失敗しました。
37	FP=E/LANG=JAVA CONFLICT	高速機能専用 FP(E) オプションは Java 言語 LANG(JAVA) と競合するため、プログラム記述子の更新は失敗しました。
40	PARLIM/SCHDTYPE=SERIAL CONFLICT	プログラムを参照するトランザクションが 65535 以外の PARLIM 値を持っているため、SCHDTYPE 値を SERIAL に変更することはできません。プログラム定義は更新されません。
43	GPSB=Y/DOPT=Y CONFLICT	生成 PSB GPSB(Y) オプションは、動的 DOPT(Y) オプションと競合するため、プログラム記述子の更新は失敗しました。
46	GPSB=N/LANG CONFLICT	生成 PSB オプション N (GPSB(N)) は、言語オプション (LANG()) と競合します。プログラム定義は更新されません。
47	GPSB=Y/RESIDENT=Y CONFLICT	生成 PSB GPSB(Y) オプションは、常駐 RESIDENT(Y) オプションと競合するため、プログラム記述子の更新は失敗しました。
48	NOT ALLOWED FOR IMS RESOURCE	指定された UPDATE コマンドは、IMS 記述子およびリソースに対しては使用できません。DFSDSPG1 は、IMS 記述子の一例です。更新できる唯一の IMS 記述子属性は、DEFAULT(Y) です。

表 517. UPDATE PGMDESC コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
8A	WILDCARD PARAMETER NOT SUPPORTED	ワイルドカード・パラメーターが DEFAULT(Y) で指定されました。一度に 1 つの記述子のみをデフォルトにできます。
97	DOPT=Y/LANG CONFLICT	動的オプション DOPT(Y) オプションは、指定された LANG と競合するため、プログラム記述子の更新は失敗しました。DOPT(Y) は LANG(JAVA) と一緒に使用のみサポートされます。
1D7	IMPORT CHANGE LIST ERROR	記述子は、IMSRSC リポジトリ内の変更リストからのインポート処理中であるか、変更リストから正常にインポートされませんでした。記述子は、リポジトリから正常にインポートされるまでは、更新することができません。

例

以下に示すのは UPDATE PGMDESC コマンドの例です。

UPDATE PGMDESC コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE PGMDESC NAME(*) SET(BMPTYPE(Y)) OPTION(ALLRSP)
```

TSO SPOC 出力:

```
Response for: UPDATE PGMDESC NAME(*) SET(BMPTYPE(Y)) OPTION(ALLRSP)
DescName MbrName  CC CText
DESC001  IMS1          0
DESC002  IMS1          0
DESC003  IMS1          0
DESC004  IMS1          0
DESC005  IMS1          0
DFS DSPG1  IMS1          48 NOT ALLOWED FOR IMS RESOURCE
DOPTDESC IMS1          0
FPEDESC  IMS1          2F FP=E/BMPTYPE=Y CONFLICT
GPSBDESC IMS1          0
PARLDESC IMS1          0
RESDESC  IMS1          0
TLSDESC  IMS1          0
```

OM API 入力:

```
CMD(UPDATE PGMDESC NAME(*) SET(BMPTYPE(Y)) OPTION(ALLRSP))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.3.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2006.312 23:30:46.559300</statime>
<stotime>2006.312 23:30:46.559923</stotime>
<staseq>BFAD4FE141E44D08</staseq>
<stoseq>BFAD4FE1420B3F48</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10153046</rqsttkn1>
```


```

<rc>0200000C</rc>
<rsn>00003008</rsn>
<rsnmsg>CSLN054I</rsnmsg>
<rsntxt>None of the clients were successful.</rsntxt>
</ctl>
<cmderr>
<mbr name="IMS1  ">
<typ>IMS      </typ>
<styp>DBDC    </styp>
<rc>0000000C</rc>
<rsn>00003000</rsn>
<rsntxt>At least one request successful</rsntxt>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>IMS1  </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>PGMDESC      </kwd>
<input>UPDATE PGMDESC NAME(*) SET(BMPTYPE(Y)) OPTION(ALLRSP) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="DESC" l1bl="DescName" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1bl="ERRT" l1bl="ErrorText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DESC(DESC004 ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>DESC(DESC005 ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>DESC(DESC001 ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>DESC(DOPTDESC) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>DESC(RESDESC ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>DESC(DFSDSPG1) MBR(IMS1) CC( 48) CCTXT(NOT ALLOWED FOR IMS RESOURCE) </rsp>
<rsp>DESC(TLSDESC ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>DESC(DESC002 ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>DESC(PARLDESC) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>DESC(DESC003 ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>DESC(FPEDESC ) MBR(IMS1) CC( 2F) CCTXT(FP=E/BMPTYPE=Y CONFLICT)
  </rsp>
<rsp>DESC(GPSBDESC) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: すべてのプログラム記述子を BMPTYPE(Y) に更新します。ほとんどのプログラム記述子については、完了コード 0 で示されているように、更新は正常に完了しました。IMS 定義の記述子 DFSDSPG1 の更新は、完了コード 48 で失敗しました。DFSDSPG1 について更新できる唯一の属性は DEFAULT(Y) であるからです。プログラム記述子 FPEDESC の更新は、完了コード 2F で失敗しました。BMPTYPE(Y) 属性は、プログラム記述子 FPEDESC に対して既に定義されている高速機能専用 FP(E) 属性と競合するからです。

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

UPDATE POOL コマンド

UPDATE POOL コマンドは、OSAM サブプールまたは VSAM サブプールを動的に追加、更新、または削除したり、高速機能 64 ビット・バッファ・マネージャで使用されるストレージに関連する値を指定したりするために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 1388 ページの『UPDATE POOL TYPE(FPBP64) の使用上の注意』
- 1389 ページの『UPDATE POOL TYPE(DBAS) の使用上の注意』
- 1390 ページの『出力フィールド』
- 1392 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1394 ページの『例』

環境

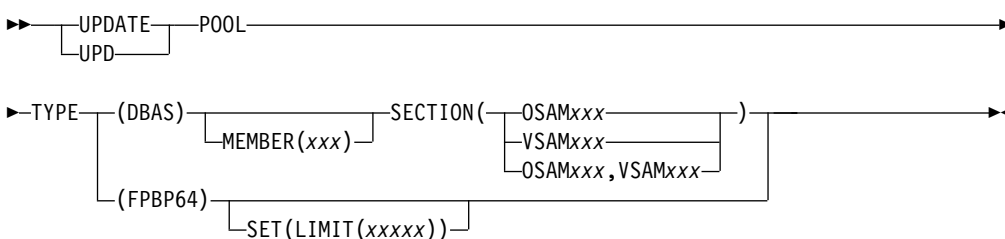
以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 518. UPDATE POOL コマンドおよびキーワードの有効環境:

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
UPDATE POOL	X	X	X
MEMBER	X	X	
SECTION	X	X	
SET	X	X	X
TYPE	X	X	X

制約事項: 動的データベース・バッファ・プール機能は、DBCTL ウォーム・スタンバイ環境ではサポートされません。

構文



キーワード

以下のキーワードは、UPDATE POOL コマンドに有効です。

TYPE()

この必須キーワードは、発行する UPDATE POOL コマンドのタイプを指定します。

DBAS

このオプションは、コマンドが OSAM サブプールまたは VSAM サブプールを動的に追加、更新、または削除することを指定します。TYPE(DBAS) は、TYPE() キーワードの他のオプションと相互に排他的です。複数のオプションを指定した場合、コマンドは構文エラーでリジェクトされます。

UPDATE POOL TYPE(DBAS) コマンドは、DCCTL 環境に対しては無効です。

FPBP64

このオプションは、コマンドが高速機能 64 ビット・バッファ・マネージャーで使用されるストレージに関する値を設定または変更することを指定します。TYPE(FPBP64) は、TYPE() キーワードの他のオプションと相互に排他的です。複数のオプションを指定した場合、コマンドは構文エラーでリジェクトされます。

SET()

変更される属性値を指定します。このキーワードは、TYPE(FPBP64) が指定されている場合にのみ有効です。

LIMIT

高速機能 64 ビット・バッファ・マネージャーで使用される 64 ビット・ストレージの最大量を指定します。

xxxxx

値は以下のようにバイト、キロバイト、またはメガバイトの単位で指定できます。

- xxxxx - バイト単位で値を指定します。最大値は 2,147,483,647 バイトです。
- xxxxxK - キロバイト単位で値を指定します。最大値は 2,097,151 キロバイトです。
- xxxxxM - メガバイト単位で値を指定します。最大値は 2,047 メガバイトです。

有効範囲は、2 ギガバイトから 1 メガバイトを引いた値から、IMS 始動時のバッファ・プールの初期サイズまでです。

また、IMS PROCLIB データ・セットの DFSDFxxx メンバーでパラメーター FPBP64M を指定することによって、IMS の始動時にこの値を設定することもできます。

MEMBER(xxx)

このキーワードは、TYPE(DBAS) が指定されている場合にのみ有効です。このパラメーターはオプションです。MEMBER キーワードの xxx には、DFSDFxxx メンバー名の接尾部を表す 1 文字から 3 文字の英数字値を指定します。OSAM および VSAM のサブプール定義について、識別された DFSDFxxx メンバーが読み取られて解析されます。このキーワードを指定しないと、システム初期設定時に DBA によって指定された DFSDFxxx メンバーがデフォルトとして使用されます。システム初期設定時に指定された DFSDFxxx

メンバーは、システム・コンソールまたはログのメッセージ DFS1929I から判別できます。MEMBER キーワードで無効な xxx 値が指定されている場合、または DFSDFxxx メンバーが見つからない場合、コマンドは失敗します。

注: このキーワードはオプションであり、デフォルトでは、コマンドは常にシステム初期設定時に指定された DFSDFxxx メンバーを参照します。通常は、システム初期設定時に指定された DFSDFxxx メンバーが唯一の使用可能なメンバーでなければなりません。このキーワードの目的は、テストのために代替 DFSDFxxx メンバー (システム・デフォルトとは異なる) をコマンドで指示できるようにすることです。その他のケースでは、MEMBER キーワードは省略されるものと想定されています。

SECTION()

このキーワードは、TYPE(DBAS) が指定されている場合にのみ有効です。TYPE(DBAS) が指定されている場合、これは必須です。このキーワードは、サブプール定義に関して読み取る DFSDFxxx メンバー内のセクション名を指定します。その後には有効なセクション名が続いていなければなりません。このキーワードでは、以下のタイプのセクション名の一方または両方を指定できます。

OSAMxxx

DFSDFxxx メンバー内の OSAM セクションを読み取って処理することを指定します。xxx 値は、OSAM セクション名の 1 文字から 3 文字の英数字の接尾部です。示された OSAM セクションは、DFSDFxxx メンバー内に存在している必要があり、有効な OSAM サブプール定義ステートメントを含んでいなければなりません。コマンドでは OSAM セクション名を 1 つだけ指定できます。

VSAMxxx

DFSDFxxx メンバー内の VSAM セクションを読み取って処理することを指定します。xxx 値は、VSAM セクション名の 1 文字から 3 文字の英数字の接尾部です。示された VSAM セクションは、DFSDFxxx メンバー内に存在している必要があり、有効な VSAM サブプール定義ステートメントを含んでいなければなりません。コマンドでは VSAM セクション名を 1 つだけ指定できます。

DBD アソシエーションを再割り当てする場合 (例えば、データベース・データ・セットのアソシエーションを 1 つのサブプールから別のサブプールに変更する場合)、データベースを停止して再始動する必要があります。停止して再始動する理由は、データ・セットのオープン時にサブプールの割り当てが行われるようにするためです。

UPDATE POOL TYPE(FPBP64) の使用上の注意

UPDATE POOL TYPE(FPBP64) SET(LIMIT(xxxxx)) コマンドによって変更できる値は、リカバリー可能ではありません。

必要な場合は、IMS の再始動後に、UPDATE POOL TYPE(FPBP64) SET(LIMIT(xxxxx)) コマンドを入力します。このコマンドは DFSDFxxx メンバー内の FPBP64M で設定された値を更新するので、IMS のコールド・リスタートの前に、FPBP64M 値を新しい値に更新することができます。

UPDATE POOL TYPE(DBAS) の使用上の注意

コマンドの成功、失敗、または部分的な成功の判別

IMS PROCLIB データ・セットの DFSDFxxx メンバーの OSAMxxx セクションまたは VSAMxxx セクションに、複数の変更要求があることがあります。UPDATE POOL TYPE(DBAS) コマンドは、変更要求を順次に処理します。UPDATE POOL TYPE(DBAS) コマンドが完了すると、その結果は成功、失敗、または部分的成功のいずれかになります。

UPDATE POOL TYPE(DBAS) コマンドは、発行した後で取り消したり、打ち切ったりすることはできません。

このコマンドは、TSO SPOC タイムアウトが発生する前に完了することも、後に完了することもあり、以下のようになります。

- コマンドが TSO SPOC タイムアウトの発生前に完了した場合、その結果が TSO SPOC の各変更要求の横に、その要求の成功、失敗、または部分的成功を示す完了コードと共に表示されます。
- コマンドが TSO SPOC タイムアウトの発生後に完了する場合、コマンドはバックグラウンドで実行を続行します。TSO SPOC は、コマンドで要求された各変更の完了コードを表示するために使用できなくなります。

ターゲットを指定した一連の QUERY POOL TYPE(DBAS) コマンドを発行すると、要求された変更の成否を判別することができます。

緊急時再始動後も QUERY POOL TYPE(DBAS) コマンドを使用して、要求された変更の成否を判別できます。

さらに、Operations Manager (OM) 監査証跡を使用して、どの変更が成功し、どの変更が失敗し、どの変更が部分的に成功したかを判別することも可能です。トークン rqsttkn1 を使用すると、OM 監査証跡内のコマンドをコマンド応答に関連付けることができます。

ストレージが使用不可の場合のコマンドの完了

場合によっては、UPDATE POOL TYPE(DBAS) コマンドで要求されたストレージを満たせないことがあります。IMS は、コマンドを取り消すことも打ち切ることもできないため、コマンドを満たすための次善の解決策を見つけようとします。このことは、要求されたサブプール変更に対して、要求より少ないストレージが割り振られる結果になる可能性があることを意味しています。

UPDATE POOL TYPE(DBAS) コマンドで要求されたストレージを満たせない場合、OSAM および VSAM はどちらも、より少量のストレージを見つけるための一連の試みを行います。

UPDATE POOL TYPE(DBAS) コマンドの結果として、削減されたバッファークラスタが割り振られた場合、その状態を示すために X'EC' 完了コードが表示されます。

VSAM バッファークラスタのバッファークラスタの最小数は 3 です。VSAM クラスタがこの最小数のバッファークラスタを割り振ることができない場合、このクラスタを使用しているデ

ータベースは、バッファの割り当てがないままにされます。これらのすべてのデータベースに対して、内部 /DBRECOVERY コマンドが発行されます。UPD POOL コマンドを再発行して、バッファ・プールを作成する必要があります。その後で /STA DB コマンドを発行して、バッファ・プール接続を再確立する必要があります。

長時間実行される **BMP** がコマンドに与える影響

VSAM の場合、チェックポイントを取らない、長時間実行されるバッチ・メッセージ処理 (BMP) プログラムは、コマンドを完了できるかどうかに影響を与えます。このコマンドは取り消すことも、打ち切ることもできないからです。最終的にサブプールが BMP によって解放されてコマンドを完了できるか、もしくは、サブプールが BMP によって解放されず、コマンドは変更のためにサブプールが使用可能になるのを無期限に待つかのどちらかです。この影響は、同じ VSAM ローカル共用リソース・プール内にある (つまり、同じ POOLID ステートメントの制御下にある) すべてのサブプールに適用されます。

ターゲット・サブプールの解放について、OSAM と VSAM では異なるメカニズムが使用されています。一般に、OSAM はターゲット・サブプールが所有されなくなるのを待つのにに対して、VSAM はターゲット・サブプールに対する DL/I アクティビティがコミット・ポイントに達するのを待ちます。このコマンドにはタイムアウトがないため、このコマンドによる影響を受けるサブプールが含まれた区画指定テーブル (PST) はすべて、このコマンドが完了するまで待ちます。

データベース・データ・セットを多数のサブプール間に分散すると、個々のサブプールに対する変更の影響を軽減できる傾向があります。

バッファ・プール統計およびデータベース・データ・セットの再割り当て

UPDATE POOL TYPE(DBAS) コマンドの後のバッファ・プール統計の取り扱い、VSAM の場合と OSAM の場合では異なっています。VSAM の場合、バッファ・プール統計はリセットされ、古い統計は持ち越されません。このコマンドを発行する前に、VSAM バッファ・プール統計に対して QUERY POOL コマンドを発行することをお勧めします。OSAM 統計は持ち越され、このコマンドでリセットされることはありません。

データベース・データ・セットを 1 つのバッファ・プールから別のバッファ・プールに再割り当てするときは、データベース・データ・セットをクローズして、再オープンする必要があります。OSAM の場合、データベース・データ・セットのクローズと再オープンが明示的に行う必要があります。言い換えると、これはコマンドの一部として実行されません。VSAM の場合も、データベース・データ・セットをクローズして再オープンする必要があります。ただし、データベース・データ・セットの再割り当てに加えて、それに対応するターゲット・バッファ・プールへの変更 (例えば、バッファ数の増加) がある場合には、データベース・データ・セットのクローズとオープンがコマンドによって暗黙的に行われます。

出力フィールド

以下の表は、UPDATE POOL の出力フィールドを示します。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

フォーマット設定済み出力の出力フィールド用列見出しが含まれます。

SHOW パラメーター

フィールドを生成させる SHOW キーワードのパラメーターを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*Error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 519. UPDATE POOL コマンドの出力フィールド

ショート・ラベル	SHOW パラメーター	パラメーター	意味
BUFS	BufSize	<i>Error</i>	バッファー・サイズ
CC	CC	N/A	完了コード。完了コードは、IMS が、指定されたリソースに対するコマンドを処理できたかどうかを示します。完了コードは常に戻されます。
CCTXT	CCText	<i>Error</i>	ゼロ以外の完了コードを簡潔に説明する完了コード・テキスト。このフィールドは、エラー完了コードの場合のみ戻されます。
ERRT	ErrorText	<i>Error</i>	診断情報を含むエラー・テキスト。エラー・テキストはゼロ以外の完了コードに戻すことができ、完了コードをさらに説明する情報を含んでいます。
ID	PoolId	<i>Error</i>	OSAM サブプール ID または VSAM 共用プール ID。
MBR	MbrName	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。データベース情報が表示された IMS の IMS ID。IMS ID は常に戻されます。
SEC	Section	<i>Error</i>	処理された DFSDFxxx メンバーのセクション。
STMT	Stmt	<i>Error</i>	OSAM 定義ステートメントまたは VSAM 定義ステートメント

UPDATE POOL TYPE(DBAS) コマンドの出力ヘッダーの例を以下に示します。

- 正常に実行された UPDATE POOL TYPE(DBAS) コマンドの出力ヘッダー:

```
Section MbrName CC  
-----
```

- エラーのある UPDATE POOL TYPE(DBAS) コマンドの出力ヘッダー:

```
Section MbrName CC CCText Stmt BufSize PoolId ErrorText  
-----
```

戻りコード、理由コード、および完了コード

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 520. UPDATE POOL コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。
X'00000008'	X'00002004'	無効なコマンド・キーワードまたは無効なコマンド・キーワードの組み合わせ
X'00000008'	X'00002014'	メンバー名の無効文字。
X'00000008'	X'00002040'	無効なオプションが指定されました。
X'00000008'	X'00002122'	無効な PDS メンバー名。指定された DFSDFxxx メンバーが見つかりませんでした。
X'00000008'	X'0000212B'	無効なセクション名。
X'00000008'	X'0000212C'	PDS メンバーに読み取りエラーがありました。
X'0000000C'	X'00003000'	At least one request was successful.
X'0000000C'	X'00003004'	No requests were successful.
X'00000010'	X'00004000'	IMS の再始動が進行中です。
X'00000010'	X'0000400C'	コマンドが XRF 代替 IMS では無効であるため、失敗しました。
X'00000010'	X'00004016'	このコマンドは DCCTL 環境では無効であるために失敗しました。
X'00000010'	X'0000401C'	このコマンドは FDR 領域では無効であるために失敗しました。
X'00000010'	X'00004024'	FP=N が始動パラメーターに含まれるため、コマンドが失敗しました。
X'00000010'	X'00004404'	FPBP64=N が始動パラメーターに含まれるため、コマンドが失敗しました。
X'00000010'	X'0000440C'	コマンドに、現在使用中のストレージよりも小さいストレージ使用量制限が指定されました。ストレージ使用量制限は変更されません。
X'00000014'	X'00005000'	IMODULE GETSTOR エラー。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD0 GETBUF エラー。
X'00000014'	X'00005FFF'	環境の初期化中の予期しない内部エラー。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。以下の表には、完了コードの説明が記載されています。

表 521. UPDATE POOL コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		コマンドは正常に完了しました。

表 521. UPDATE POOL コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
8	COMMAND COMPLETE FOR SOME	コマンドは正常に完了しました。重複パラメーターは無視されます。
B		UPDATE POOL TYPE(FPBP64) SET(LIMIT(xxxx)) コマンドで、現在使用中のものよりも小さいストレージ使用量制限が指定されました。ストレージ使用量制限は変更されません。
10	NO RESOURCES FOUND	指定されたリソース (サブプール、DBD、または DCB) が見つからないか、定義されていません。
11	DUPLICATE RESOURCE ALREADY EXISTS	重複する IOBF ステートメントまたは POOLID ステートメントが指定されました。重複ステートメントは無視されます。
4A	IN USE	指定されたサブプールは現在使用中です。
60	GETMAIN STORAGE ERROR	サブプール ID テーブルに対する GETMAIN 呼び出しに失敗しました。
64	GETSTOR STORAGE ERROR	バッファ、サブプール、またはカップリング・ファシリティーに対する GETSTOR 呼び出しに失敗しました。
B2	IMS STATE ERROR	IMS は、IMS シャットダウンを実行する状態になっていません。
EA	DYNAMIC BUFFER POOL FAILURE	<p>バッファ・サイズに指定されたハイパースペースが 4 KB 未満です。DBD ステートメントの DSNUM 値が無効です。この結果、以下のいずれかになりました。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ロックされたバッファ • 過剰な数のロックされたバッファ • 削減されたバッファ割り振り • サブプールまたはバッファのページ固定エラー • 無効なバッファ・サイズの CF エラー
EB	RESOURCE UNABLE TO BE QUIESCED	リソースに対するアクティビティーをコマンドで静止できませんでした。リソースはバッファまたはサブプールの可能性があります。
EC	REDUCED BUFFER ALLOCATION	指定された数のバッファを割り振ることができません。削減された数のバッファが使用されます。
ED	MINIMUM BUFFER ALLOCATION	指定された数のバッファを割り振ることができません。最小数のバッファが使用されます。
1C0	POOLID ERROR IN DFSDF MEMBER	IMS PROCLIB データ・セットの DFSDFxxx メンバー内の POOLID ステートメントを処理できません。エラーに関する追加情報については、コマンド出力の「ErrorText」列を参照してください。

表 521. UPDATE POOL コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
1C1	DBD ERROR IN DFSDF MEMBER	IMS PROCLIB データ・セットの DFSDFxxx メンバー内の DBD ステートメントを処理できません。エラーに関する追加情報については、コマンド出力の「ErrorText」列を参照してください。

例

以下に示すのは UPDATE POOL コマンドの例です。

UPDATE POOL コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPD POOL TYPE(FPBP64) SET(LIMIT(1000M))
```

TSO SPOC 出力:

```
Pool Type      MbrName  CC
FPBP64         SYS3     0
```

OM API 入力:

```
CMD(UPD POOL TYPE(FPBP64) SET(LIMIT(1000M)))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.4.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2008.318 21:54:49.340430</statime>
<stotime>2008.318 21:54:49.340724</stotime>
<staseq>C34A9721FEE0EC72</staseq>
<stoseq>C34A9721FEF34C72</stoseq>
<rqsttkn1>USRT004 10135449</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>SYS3 </master>
<userid>USRT004 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>POOL </kwd>
<input>UPD POOL TYPE(FPBP64) SET(LIMIT(1000M)) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr slbl="BTYP" llbl="Pool Type" scope="LCL" sort="a" key="1"
scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr slbl="MBR" llbl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="1"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr slbl="CC" llbl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="no"
len="4" dtype="CHAR" align="right" />
<hdr slbl="CCTXT" llbl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>btyp(FPBP64) MBR(SYS3 ) CC( 0)</rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>
```

説明: 高速機能 64 ビット・バッファ・マネージャーのバッファ使用量制限が 1000M (1 GB) に変更され、コマンドは正常に終了しました。

UPDATE POOL コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE POOL TYPE(DBAS) MEMBER(001) SECTION(OSAM001,VSAMTUE)
```

TSO SPOC 出力:

Section	MbrName	CC
OSAM001	IMS1	0
VSAMTUE	IMS1	0

説明: これは、DFSDFxxx メンバーの OSAM001 セクションおよび VSAMTUE セクションを使用して OSAM サブプールおよび VSAM サブプールを動的に再構成するための UPDATE POOL コマンドの成功した呼び出しの例を示しています。

UPDATE POOL コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE POOL TYPE(DBAS) MEMBER(001) SECTION(OSAM001,VSAMTUE)
```

TSO SPOC 出力:

Section	MbrName	CC	CCText	Stmt	BufSize	PoolID	ErrorTxt
OSAM001	IMS1	8	COMMAND COMPLETE FOR SOME				
OSAM001	IMS1	11	RESOURCE ALREADY EXISTS	IOBF	1024	OSM2	PARSED ENTRY INV
VSAMTUE	IMS1	0					

説明: これは、DFSDFxxx メンバーの OSAM001 セクションおよび VSAMTUE セクションを使用して OSAM サブプールおよび VSAM サブプールを動的に再構成するための UPDATE POOL コマンドの部分的に成功した呼び出しの例を示しています。OSAM001 セクション内の定義の一部 (ただし、全部ではない) が正常に完了していません。

UPDATE POOL コマンドの例 4

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE POOL TYPE(DBAS) MEMBER(001) SECTION(OSAM123,VSAM123)
```

TSO SPOC 出力:

Section	MbrName	CC	CCText	Stmt	BufSize	PoolID	ErrorTxt
OSAM123	IMS1	0					
VSAM123	IMS1	C	COMMAND COMPLETE FOR NONE				
VSAM123	IMS1	1C0	POOLID ERROR IN DFSDF MEMBER	POOLID	4096	VB10	DLET POOL 0 INV
VSAM123	IMS1	1C0	POOLID ERROR IN DFSDF MEMBER	POOLID	8192	VB10	DLET POOL 0 INV
VSAM123	IMS1	1C0	POOLID ERROR IN DFSDF MEMBER	POOLID	1024	VB11	DLET POOL 0 INV
VSAM123	IMS1	1C0	POOLID ERROR IN DFSDF MEMBER	POOLID	8192	VB11	DLET POOL 0 INV
VSAM123	IMS1	1C0	POOLID ERROR IN DFSDF MEMBER	POOLID	2048	VB12	DLET POOL 0 INV
VSAM123	IMS1	1C0	POOLID ERROR IN DFSDF MEMBER	POOLID	8192	VB12	DLET POOL 0 INV
VSAM123	IMS1	1C0	POOLID ERROR IN DFSDF MEMBER	POOLID	16384	VB12	DLET POOL 0 INV
VSAM123	IMS1	1C0	POOLID ERROR IN DFSDF MEMBER	POOLID	32768	VB12	DLET POOL 0 INV

説明: これは、DFSDFxxx メンバーの OSAM123 セクションおよび VSAM123 セクションを使用して OSAM サブプールおよび VSAM サブプールを動的に再構成するための UPDATE POOL コマンドの失敗した呼び出しの例を示しています。VSAM123 セクション内の定義のどれも正常に実装されませんでした。

UPDATE POOL コマンドの例 5

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE POOL TYPE(DBAS) MEMBER(001) SECTION(OSAMFEB,VSAMTUE)
```

TSO SPOC 出力:

```
Log for . . . : UPDATE POOL TYPE(DBAS) MEMBER(001) SECTION(OSAMFEB,VSAMFEB)
```

```
IMSpIex . . . . . : PLEX1
Routing . . . . . :
Start time . . . . : 2011.013 22:10:26.70
Stop time . . . . . : 2011.013 22:10:26.78
Return code . . . . : 0200000C
Reason code . . . . : 00003004
Reason text . . . . : No requests were successful.
Command master . . : IMS1
```

MbrName	Return Code	Reason Code	Reason text
-----	-----	-----	-----
IMS1	00000008	0000212B	Invalid section

説明: これは、DFSDFxxx メンバーの OSAM123 セクションおよび VSAMTUE セクションを使用して OSAM サブプールおよび VSAM サブプールを動的に再構成するための UPDATE POOL コマンドの失敗した呼び出しの例を示しています。UPDATE POOL コマンドの発行時に無効なセクション名が指定されたために、障害が発生しました。

UPDATE POOL コマンドの例 6

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE POOL TYPE(DBAS) MEMBER(001) SECTION(OSAM001,VSAMTUE)
```

TSO SPOC 出力:

```
Log for . . . : UPDATE POOL TYPE(DBAS) MEMBER(001) SECTION(OSAM001,VSAMTUE)
```

```
IMSpIex . . . . . : PLEX1
Routing . . . . . :
Start time . . . . : 2011.013 22:16:35.12
Stop time . . . . . : 2011.013 22:16:35.36
Return code . . . . : 0200000C
Reason code . . . . : 00003008
Reason text . . . . : None of the clients were successful.
Command master . . : IMS1
```

MbrName	Return Code	Reason Code	Reason text
-----	-----	-----	-----
IMS1	00000008	0000212C	PDS member read error

```
MbrName Messages
-----
IMS1 BPE0003E AN ERROR OCCURRED PARSING PROCLIB MEMBER DFSDF001
IMS1 BPE0003E AT LINE 29, CHARACTER 14
IMS1 BPE0003E FAILING TEXT: "VXRBF=(2048,9,D)"
IMS1 BPE0003E INVALID KEYWORD DETECTED
```

説明: これは、DFSDFxxx メンバーの OSAM001 セクションおよび VSAMTUE セクションを使用して OSAM サブプールおよび VSAM サブプールを動的に再構成

するための UPDATE POOL コマンドの失敗した呼び出しの例を示しています。
DFSDfxxx メンバーの読み取り中に構文解析エラーが発生しました。

UPDATE POOL コマンドの例 7

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE POOL TYPE(DBAS) SECTION(OSAM123) MEMBER(001)
```

TSO SPOC 出力:

```
Log for . . . : UPDATE POOL TYPE(DBAS) SECTION(OSAM123) MEMBER(0...
```

```
IMSpIex . . . . . : PLEX1
Routing . . . . . :
Start time. . . . : 2011.014 10:28:04.48
Stop time . . . . : 2011.014 10:28:59.24
Return code . . . : 00000000
Reason code . . . : 00000000
Reason text . . . :
Command master. . : IMS1
```

MbrName Messages

```
-----
IMS1      DFS3127I WRITE ERROR OCCURRED ON THE RESTART DATA SET
```

説明: これは、DFSDfxxx メンバーの OSAM123 セクションを使用して OSAM サブプールを動的に再構成するための UPDATE POOL コマンドの失敗した呼び出しの例を示しています。再始動データ・セット (RDS) で書き込みエラーが発生しました。

UPDATE POOL コマンドの例 8

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE POOL TYPE(DBAS) SECTION(VSAM003)
```

TSO SPOC 出力:

Section	MbrName	CC	CCText	Stmt	BufSize	PoolId	ErrorText
VSAM003	IMS1	8	COMMAND COMPLETE FOR SOME				
VSAM003	IMS1	8	COMMAND COMPLETE FOR SOME	VSRBF	1024	VSM2	DUP

説明: これは、DFSDfxxx メンバーの VSAM003 セクションを使用して VSAM サブプールを動的に再構成するための UPDATE POOL コマンドの成功した呼び出しの例を示しています。IMS は、VSM2 の POOLID ステートメントの 1 つに対して条件コード 8 を受け取りました。これは、同じ POOLID 下に重複する VSRBF が指定されたためです。ステートメントの残りは引き続き処理されます。条件コード 8 は、この状態では警告メッセージとして扱われます。

UPDATE POOL コマンドの例 9

DFSDfxxx メンバーでの指定:

```
<SECTION=OSAM001>
IOBF=(512,100,N,N)
IOBF=(1024,1000,N,Z,OSM1,Y)
IOBF=(2048,5000,Y,Y,OSM2,A)
IOBF=(4096,5000,N,Y,OSM3,N)
IOBF=(32K,32767,N,N,OSM9,N)
```

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE POOL TYPE(DBAS) SECTION(OSAM001) MEMBER(XYZ)
```

TSO SPOC 出力:

```
Log for . . : UPDATE POOL TYPE(DBAS) SECTION(OSAM001) MEMBER(XYZ) More: >
```

```
IMSpIex . . . . . : PLEX1
Routing . . . . . :
Start time . . . . : 2009.117 10:24:25.06
Stop time . . . . . : 2009.117 10:24:25.07
Return code . . . . : 02000008
Reason code . . . . : 00002004
Reason text . . . . : Invalid command keyword or invalid command keyword combination
Command master. . . :
```

MbrName Messages

```
-----
IMS1 BPE0003E AN ERROR OCCURRED PARSING PROCLIB MEMBER DFSDFXYZ
IMS1 BPE0003E AT LINE 22, CHARACTER 18
IMS1 BPE0003E FAILING TEXT: "Z,OSM1,Y"
IMS1 BPE0003E UNKNOWN KEYWORD VALUE DETECTED
```

説明: この例では、UPDATE POOL コマンドの呼び出し時に、DFSDFXYZ メンバー内の OSAM001 セクションが解析されています。DFSDFXYZ メンバー内の 2 番目の IOBF ステートメントに、無効なオプションの「Z」が指定されています。

関連概念:

- [🔗 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 \(システム・プログラミング API\)](#)
- [🔗 VSAM サブプール定義 \(システム定義\)](#)
- [🔗 VSAM および OSAM サブプールの指定 \(システム定義\)](#)
- [🔗 OSAM サブプール定義 \(システム定義\)](#)
- [🔗 OSAM および VSAM データベース・バッファの調整 \(データベース管理\)](#)
- [🔗 VSAM バッファのモニター \(データベース管理\)](#)
- [🔗 動的データベース・バッファ・プールの概要 \(データベース管理\)](#)

関連タスク:

- [🔗 OSAM バッファ \(データベース管理\)](#)

関連資料:

- [🔗 コマンド・キーワードとその同義語 \(コマンド\)](#)
 - [🔗 IMS PROCLIB データ・セットの DFSDFxxx メンバー \(システム定義\)](#)
- 601 ページの『QUERY POOL コマンド』

UPDATE RM コマンド

UPDATE RM コマンドは、Resource Manager (RM) による IMSRSC リポジトリの使用を動的に使用可能または使用不可にするために使用します。

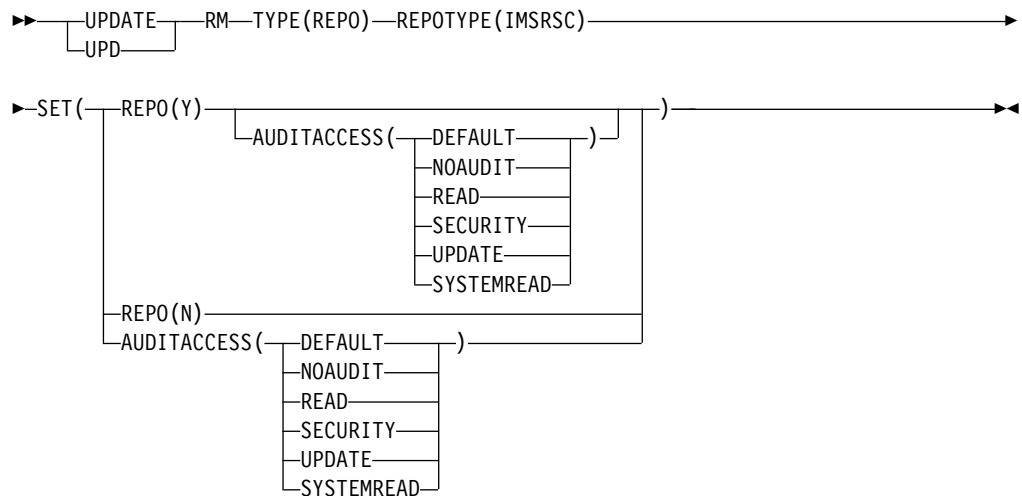
サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 1402 ページの『使用上の注意』
- 1402 ページの『出力フィールド』
- 1402 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1406 ページの『例』

環境

UPDATE RM コマンドは、Common Service Layer (CSL) RM アドレス・スペースで処理されます。

構文



キーワード

以下のキーワードは、UPDATE RM コマンドに有効です。

TYPE

更新するリソース・タイプを指定します。唯一の有効値は REPO です。

REPOTYPE

更新するリポジトリ・タイプを指定します。唯一の有効値は IMSRSC です。

SET

変更するパラメーターを指定します。

AUDITACCESS

指定されたリポジトリのリポジトリ監査アクセス・レベルを指定しま

す。これを REPO(Y) と一緒に指定することで、デフォルト以外の AUDITACCESS 値を設定したり、IMSpIex の AUDITACCESS レベルを変更したりすることができます。

REPO(Y) と一緒に SET(AUDITACCESS()) キーワードが指定され、リポジトリ・サーバー (RS) に AUDIT LOG が定義されていない (FRPCFG PROCLIB メンバー内で AUDIT=YES が指定されていない) 場合、指定された AUDITACCESS(x) 値は無視され、RM で AUDITACCESS が NOAUDIT に設定されます。REPO(Y) なしで SET(AUDITACCESS()) キーワードが指定され、RS に AUDIT LOG が定義されていない場合、コマンドを実行するとエラー理由コードが発行されます。

AUDIT LOG (AUDIT=YES) で RS が定義されている場合、指定された AUDITACCESS 値が、IMS PROCLIB データ・セットの FRPCFG メンバー内の AUDIT_DEFAULT= キーワードで設定されたデフォルトの監査アクセス・レベルをオーバーライドします。指定できる値は、以下のとおりです。

DEFAULT

監査アクセス・レベルを、FRPCFG メンバー内の AUDIT_DEFAULT パラメーターで指定された値に設定します。

NOAUDIT

メンバー・アクセスを監査しません。

SECURITY

セキュリティ障害のみ監査します。

UPDATE

更新意図を持つメンバー・アクセスを監査します。

READ

読み取り意図または更新意図を持つメンバー・アクセスを監査します。READ の監査アクセス規則の下では、システム読み取り要求については、読み取り監査レコードは生成されません。

SYSTEMREAD

システム・レベルの読み取り意図または更新意図を持つメンバー・アクセスを監査します。更新要求の前のシステムによるリソース定義の読み取りは、システム読み取り 要求として識別されます。SYSTEMREAD の監査アクセス規則の下では、システム読み取り要求を含む、すべての読み取り要求が監査されます。

REPO

変更するリポジトリ属性を指定します。

Y 指定されたリポジトリ・タイプのリポジトリを使用するように RM を更新します。

TYPE(IMSRS) リポジトリの REPOSITORY= 指定を取得するために、RM 初期設定 PROCLIB メンバー (CSLRlxxx) (これは RM の初期設定中に使用され、RM 始動パラメーター RMINIT= で指定されています) が再読み取りされます。

UPDATE RM コマンドを発行する前に、RM 始動パラメーター RMINIT= で指定される、CSLRIxxx メンバー内の REPOSITORY セクションを変更内容で更新しておく必要があります。

コマンド・マスター RM は、TYPE(IMSRSC) リポジトリーについて、CSLRIxxx メンバー内の REPOSITORY セクションを再読み取りします。コマンドの処理中に、RM はリポジトリー・サーバー (RS) に登録されます (RM が既に登録されていない場合)。RM は、CSLRIxxx メンバーの REPOSITORY セクションに指定されている名前のリポジトリーに接続します。

コマンドがコマンド・マスター RM で正常に実行されると、コマンド・マスター RM は、変更内容を IMSplex 内の他のアクティブ RM に連絡します。IMSplex 内のすべての RM が同一のリポジトリー設定を持つようになります。

CSL25xxx メッセージが、コマンド・マスター RM と非マスター RM の両方のシステム・コンソールに表示されます。また、CSL2510E または CSL2511E などのエラー・メッセージも、UPDATE RM コマンドを発行した OM API に送信されます。

RM がリソース構造を使用するように定義されている場合、コマンド・マスター RM は、リソース構造を更新して、接続先のリポジトリー名とリポジトリー・タイプを使用するようにします。変更の後で再始動される後続の RM は、リソース構造から読み取られる同じリポジトリー名およびリポジトリー・タイプに接続されるようになります。

- N 指定されたリポジトリー・タイプのリポジトリーを使用しないように RM を更新します。RM は、リポジトリー・タイプに指定されたリポジトリーから切断されます。

コマンドがコマンド・マスター RM で正常に実行されると、コマンド・マスター RM は、変更内容を IMSplex 内の他のアクティブ RM に連絡します。IMSplex 内のすべての RM が同一のリポジトリー設定を持つようになります。

CSL25xxx メッセージが、コマンド・マスター RM と非マスター RM の両方のシステム・コンソールに表示されます。また、CSL2510E または CSL2511E などのエラー・メッセージも、UPDATE RM コマンドを発行した OM API に送信されます。

RM がリソース構造を使用するように定義されている場合、コマンド・マスター RM はリソース構造を更新して、リポジトリー名およびリポジトリー・タイプを削除します。RM がどのリポジトリーにも接続されていない場合、RM はリポジトリー・サーバーから登録解除されます。

UPDATE RM SET(REPO(N)) の処理中は、RMINIT パラメーターも CSLRIxxx メンバーも読み取られません。

UPDATE RM SET(REPO(N)) コマンドを発行する前、または発行した直後に、CSLRIxxx メンバーを変更して、リポジトリー・タイプ用の REPOSITORY= ステートメントを削除する必要があります。REPOSITORY= ステートメントが削除されず、UPDATE RM

SET(REPO(N)) コマンドの発行後に RM が開始された場合、IMSpIex 内のすべての RM が、RM の始動中にリポジトリに再接続されます。

使用上の注意

UPDATE RM コマンドは、Operations Manager (OM) API を介してのみ指定できます。

UPDATE RM コマンドは、OM に対して ROUTE=ANY として定義されます。コマンドは、コマンドを受け取るコマンド・マスター RM によって処理されます。このコマンドは、PROCLIB メンバー内の指定されたセクションを再読み取りおよび再処理することを指定します。

出力フィールド

以下の表には、UPDATE RM 出力フィールドが記載されています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 522. UPDATE RM コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	意味
CC	CC	N/A	出力行の完了コード。完了コードは常に戻されます。
CCTXT	CCText	N/A	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
MBR	MbrName	N/A	リソース・マネージャー名。
REPONM	RepositoryName	N/A	リポジトリ名。
REPOTYPE	RepositoryType	N/A	リポジトリ・タイプ。

戻りコード、理由コード、および完了コード

IMS 戻りコードと理由コードは、UPDATE RM コマンドによって OM に戻されます。UPDATE RM コマンドの結果として返される可能性のある OM 戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 523. UPDATE RM コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE RM コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、表 524を参照してください。
X'03000004'	X'00001004'	UPDATE RM コマンドは、コマンド・マスターによってのみ処理されます。その他のすべてのシステムでは無視されます。
X'03000008'	X'0000203C'	UPDATE RM コマンドで、無効なキーワード・パラメーターが指定されました。
X'03000008'	X'00002522'	RS に対して監査ログが定義されておらず、SET(AUDITACCESS(x)) が指定されており、REPO(Y) が指定されていないため、RM は UPDATE RM コマンドを処理することができません。
X'0300000C'	X'00003000'	一部のリソースでは UPDATE RM コマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、表 524を参照してください。
X'0300000C'	X'00003004'	UPDATE RM コマンドは、どのリソースに対しても正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、表 524を参照してください。
X'03000010'	X'00004504'	リポジトリが RM に対して定義されていないため、RM は UPDATE RM コマンドを処理できません。
X'03000014'	X'00005030'	コマンド応答用のストレージを取得できませんでした。
X'03000014'	X'00005108'	CQSBRWSE バッファ割り振りが失敗しました。

以下の表には、完了コードの説明が記載されています。

表 524. UPDATE RM コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		該当リソースについて、UPDATE RM コマンドは正常に完了しました。
38	CQS UNEXPECTED ERROR	SET(REPO(Y)) の場合、CQS に対する照会呼び出しが、CSLRPGBL の照会に失敗しました。 CQS エラーに関する詳細を示した CSL2050E メッセージが、コマンド出力に含まれています。
60	REPOSITORY ALREADY CONNECTED	SET(REPO(Y)) の場合、リポジトリは既に接続されています。
61	CONFIGURATION FILE NOT FOUND	SET(REPO(Y)) の場合、CSLRIxxx 構成ファイルが見つかりませんでした。
62	REPOSITORY SECTION NOT FOUND	SET(REPO(Y)) の場合、CSLRIxxx 内に REPOSITORY セクションが定義されていませんでした。

表 524. UPDATE RM コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
63	PARSE ERROR IN CONFIGURATION	SET(REPO(Y)) の場合、BPE 構文解析プログラムが CSLRIxxx 内の REPOSITORY セクションの解析時にエラーを返しました。 解析エラーに関する詳細を示した BPE0003E メッセージが、コマンド出力に含まれています。
64	DUPLICATE REPOSITORY DEFINED	SET(REPO(Y)) の場合、コマンドで指定されたりポジトリ・タイプは、CSLRIxxx に複数回定義されていました。
65	INVALID CHARACTERS IN REPO NAME	SET(REPO(Y)) の場合、CSLRIxxx 内のリポジトリ定義で指定されたりポジトリ名に無効文字が含まれていました。
66	INVALID REPOSITORY NAME	SET(REPO(Y)) の場合、CSLRIxxx 内のリポジトリ定義で無効なりポジトリ名 (「CATALOG」) が指定されました。
67	INVALID CHARACTERS IN GROUP NAME	SET(REPO(Y)) の場合、CSLRIxxx 内のリポジトリ定義で指定された XCF グループ名に無効文字が含まれていました。
68	REPOSITORY DEFINITION NOT FOUND	SET(REPO(Y)) の場合、コマンドで指定されたりポジトリ・タイプが CSLRIxxx または CSLRPGBL で見つかりません。
69	GROUP NAME MISMATCH IN REPO DEFN	SET(REPO(Y)) の場合、CSLRIxxx 内のリポジトリ定義で指定された XCF グループ名が、CSLRPGBL 内の XCF グループ名と一致していませんでした。
6A	REGISTER TO REPO SERVER FAILED	SET(REPO(Y)) の場合、RM はリポジトリ・サーバーに登録しようとしたましたが、登録の試行が失敗しました。 登録の失敗に関する詳細を示した CSL2510E メッセージが、コマンド出力に含まれています。
6B	CONNECT TO REPOSITORY FAILED	SET(REPO(Y)) の場合、RM はリポジトリへの接続を試行しましたが、試行が失敗しました。 接続の失敗に関する詳細を示した CSL2511E メッセージが、コマンド出力に含まれています。
6C	UPDATE OF CSLRPGBL FAILED	SET(REPO(Y)) の場合、RM はリポジトリに正常に接続されましたが、リソース構造内の CSLRPGBL リソースを更新しようとして失敗しました。 オペレーターは、CQS およびリソース構造の状況を判別し、コマンドを再入力して、接続処理を完了させる必要があります。
6D	REPOSITORY NOT CONNECTED	SET(REPO(N)) の場合、RM がリポジトリに接続されていません。リポジトリは、これまで接続されたことがないか、あるいは以前に切断されています。

表 524. UPDATE RM コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
6E	DISCONN FROM REPOSITORY FAILED	SET(REPO(N)) の場合、RM はリポジトリからの切断を試行しましたが、試行が失敗しました。 切断の失敗に関する詳細を示した CSL2511E メッセージが、コマンド出力に含まれています。
6F	DEREGISTER REPO SERVER FAILED	SET(REPO(N)) の場合、RM はリポジトリ・サーバーから登録解除しようとしたのですが、登録解除の試行が失敗しました。 登録解除の失敗に関する詳細を示した CSL2510E メッセージが、コマンド出力に含まれています。
70	REMOVE FROM CSLRPGBL FAILED	SET(REPO(N)) の場合、RM はリポジトリから正常に切断されましたが、リソース構造内の CSLRPGBL リソースを更新しようとして失敗しました。 オペレーターは、CQS およびリソース構造の状況を判別し、コマンドを再入力して、切断処理を完了させる必要があります。
71	READ OF PROCLIB MEMBER FAILED	BPERDPDS は、CSLRixxx PROCLIB メンバーの読み取りに失敗しました。
72	UNABLE TO GET PSAN LATCH	コマンド・プロセッサは、PSAN ラッチを取得できませんでした。
73	UNABLE TO GET PCAN LATCH	コマンド・プロセッサは、PCAN ラッチを取得できませんでした。
74	UNABLE TO LOAD MODULES	BPELOAD は、指定されたりポジトリに必要なモジュールをロードするのに失敗しました。
75	AUDIT ACCESS UPDATE FAILED	SET(AUDITACCESS()) の場合、RM はリポジトリ内の監査アクセス値を更新しようとしたのですが、更新の試行が失敗しました。
76	REFRESH OF CSLRPGBL FAILED	SET(AUDITACCESS()) の場合、RM はリポジトリ内の監査アクセス値を正常に更新しましたが、リソース構造内の CSLRPGBL リソースをリフレッシュしようとして失敗しました。 オペレーターは、CQS およびリソース構造の状況を判別し、コマンドを再入力して、リフレッシュ処理を完了させる必要があります。
77	DOWNLEVEL RM IN IMSPLEX	SET(REPO(Y)) の場合、RM は IMSplex 内で IMS バージョン 11 以前の RM を検出したため、リポジトリに接続することができません。IMSplex 内のすべての RM システムが IMS バージョン 12 以降のシステムでなければなりません。

表 524. UPDATE RM コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
78	NO SCI ADDRESS SPACE	SET(REPO(Y)) の場合、RM は SCI を照会して IMSplex の状況を取得しようとしたが、SCI が使用不可でした。 SCI エラーに関する詳細を示した CSL2050E メッセージが、コマンド出力に含まれています。
79	UNEXPECTED SCI ERROR	SET(REPO(Y)) の場合、RM は SCI を照会して IMSplex の状況を取得しようとしたが、照会は予期しない戻りコードを返して失敗しました。 SCI エラーに関する詳細を示した CSL2050E メッセージが、コマンド出力に含まれています。

例

以下に示すのは UPDATE RM コマンドの例です。

UPDATE RM コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE RM TYPE(REPO) REPOTYPE(IMSRSC) SET(REPO(Y))
```

TSO SPOC 出力:

```
RepositoryType MbrName      CC RepositoryName
IMSRSC          RM3RM        0 IMSRSC_REPOSITORY
```

OM API 入力:

```
CMD(UPDATE RM TYPE(REPO) REPOTYPE(IMSRSC) SET(REPO(Y)) )
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.187 16:55:47.880310</statime>
<stotime>2011.187 16:55:48.214072</stotime>
<staseq>C8079C197D976B1A</staseq>
<stoseq>C8079C19CF1383C8</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10095547</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmderr>
<mbr name="RM2RM  ">
<typ>RM </typ>
<styp>MULTRM </styp>
<rc>02000004</rc>
<rsn>00001008</rsn>
<rsntxt>Command not routed to this command processing client. Client
is not master.</rsntxt>
</mbr>
<mbr name="RM1RM  ">
```

```

</typ>RM      </typ>
<styp>MULTRM </styp>
<rc>02000004</rc>
<rsn>00001008</rsn>
<rsntxt>Command not routed to this command processing client. Client
is not master.</rsntxt>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>RM3RM </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>RM      </kwd>
<input>UPDATE RM TYPE(REPO) REPOTYPE(IMSRSC) SET(REPO(Y)) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="REPOTYP" l1bl="RepositoryType" scope="LCL" sort="a" key="1"
scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1bl="REPONM" l1bl="RepositoryName" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="44" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>REPOTYP(IMSRSC ) MBR(RM3RM) CC( 0) REPONM(IMSRSC_REPOSITORY
) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: リポジトリに対する UPDATE RM SET(REPO(Y)) コマンドが、コマンド・マスター RM の RM3 によって処理されています。コマンド応答は、コマンド・マスター RM でリポジトリが正常に使用可能にされたことを示しています。さらに、RM はリソース構造を使用しているため、コマンド応答には、IMSpIex 内でリポジトリが使用可能であることを示すためにリソース構造が更新されていること、および RM1 と RM2 (IMSpIex 内の他の RM) にディレクティブが送信されて、それらがリポジトリを使用できるようになったことが示されています。QUERY RM コマンドを発行すると、IMSpIex 内のすべての RM でリポジトリが使用可能になっていることを確認できます。

UPDATE RM コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE RM TYPE(REPO) REPOTYPE(IMSRSC) SET(AUDITACCESS(UPDATE))
```

TSO SPOC 出力:

```
RepositoryType MbrName      CC RepositoryName
IMSRSC          RM3RM       0 IMSRSC_REPOSITORY
```

OM API 入力:

```
CMD(UPDATE RM TYPE(REPO) REPOTYPE(IMSRSC) SET(AUDITACCESS(UPDATE)) )
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>

```

```

<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.187 17:01:05.705662</statime>
<stotime>2011.187 17:01:05.773423</stotime>
<staseq>C8079D4897ABED80</staseq>
<stoseq>C8079D48A836F750</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10100105</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmderr>
<mbr name="RM2RM ">
<typ>RM </typ>
<styp>MULTRM </styp>
<rc>02000004</rc>
<rsn>00001008</rsn>
<rsntxt>Command not routed to this command processing client. Client
is not master.</rsntxt>
</mbr>
<mbr name="RM1RM ">
<typ>RM </typ>
<styp>MULTRM </styp>
<rc>02000004</rc>
<rsn>00001008</rsn>
<rsntxt>Command not routed to this command processing client. Client
is not master.</rsntxt>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>RM3RM </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>RM </kwd>
<input>UPDATE RM TYPE(REPO) REPOTYPE(IMSRS) SET(AUDITACCESS(UPDATE))
</input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="REPOTYP" l1b1="RepositoryType" scope="LCL" sort="a" key="1"
scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="REPONM" l1b1="RepositoryName" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="44" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>REPOTYP(IMSRS ) MBR(RM3RM) CC( 0) REPONM(IMSRS_REPOSITORY
) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明: UPDATE RM SET(AUDITACCESS()) コマンドが、コマンド・マスター RM の RM3 によって処理されています。コマンド応答は、リポジトリ内の auditaccess 値が更新されて後続の監査要求に使用されることを示しています。さらに、RM はリソース構造を使用しているため、コマンド応答には、リソース構造内の監査アクセス値が更新されたこと、および RM3 によってディレクティブが RM1 と RM2 (IMSplex 内の他のアクティブ RM) に送信されて、それらの監査アクセス値が更新されたことが示されています。

UPDATE RM コマンドの例 3

TSO SPOC 入力:

```
UPD RM TYPE(REPO) REPOTYPE(IMSRSC) SET(REPO(N))
```

TSO SPOC 出力:

```
RepositoryType MbrName      CC RepositoryName
IMSRSC          RM3RM        0 IMSRSC_REPOSITORY
```

OM API 入力:

```
CMD(UPD RM TYPE(REPO) REPOTYPE(IMSRSC) SET(REPO(N)) )
```




OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.5.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2011.187 16:36:18.444602</statime>
<stotime>2011.187 16:36:18.542958</stotime>
<staseq>C80797BE3AD3A85E</staseq>
<stoseq>C80797BE52D6ED15</stoseq>
<rqsttkn1>USRT005 10093618</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmderr>
<mbr name="RM2RM ">
<typ>RM </typ>
<styp>MULTRM </styp>
<rc>02000004</rc>
<rsn>00001008</rsn>
<rsntxt>Command not routed to this command processing client. Client
  is not master.</rsntxt>
</mbr>
<mbr name="RM1RM ">
<typ>RM </typ>
<styp>MULTRM </styp>
<rc>02000004</rc>
<rsn>00001008</rsn>
<rsntxt>Command not routed to this command processing client. Client
  is not master.</rsntxt>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>RM3RM </master>
<userid>USRT005 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>RM </kwd>
<input>UPD RM TYPE(REPO) REPOTYPE(IMSRSC) SET(REPO(N)) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="REPOTYP" l1b1="RepositoryType" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="REPONM" l1b1="RepositoryName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="44" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
```


```
<rsp>REPOTYP(IMSRSC ) MBR(RM3RM) CC( 0) REPONM(IMSRSC_REPOSITORY
) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>
```

説明: リポジトリに対する UPDATE RM SET(REPO(N)) コマンドが、コマンド・マスター RM の RM3 によって処理されています。コマンド応答は、コマンド・マスター RM でリポジトリが使用可能ではなくなったことを示しています。さらに、RM はリソース構造を使用しているため、コマンド応答には、リポジトリが IMSplex 内で使用可能ではないことを示すためにリソース構造が更新されること、および他の RM にディレクティブが送信されて、それらのリポジトリの使用が無効にされたことが示されています。

関連概念:

-  CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)
-  IMSRSC リポジトリを含む CSL RM の初期化 (システム管理)
-  IMSRSC リポジトリの CSL RM 管理 (システム管理)

関連資料:

-  コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

UPDATE RTC コマンド

UPDATE RTC コマンドは、高速機能宛先コードを更新するために使用します。高速機能入力編集/経路指定出口ルーチン (DBFHAGU0) で高速機能宛先コードを使用することにより、トランザクションを処理のために別のアプリケーション・プログラムに経路指定することができます。

サブセクション:

- 『環境』
- 1411 ページの『構文』
- 1411 ページの『キーワード』
- 1412 ページの『使用上の注意』
- 1413 ページの『出力フィールド』
- 1414 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1416 ページの『例』

環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/BC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

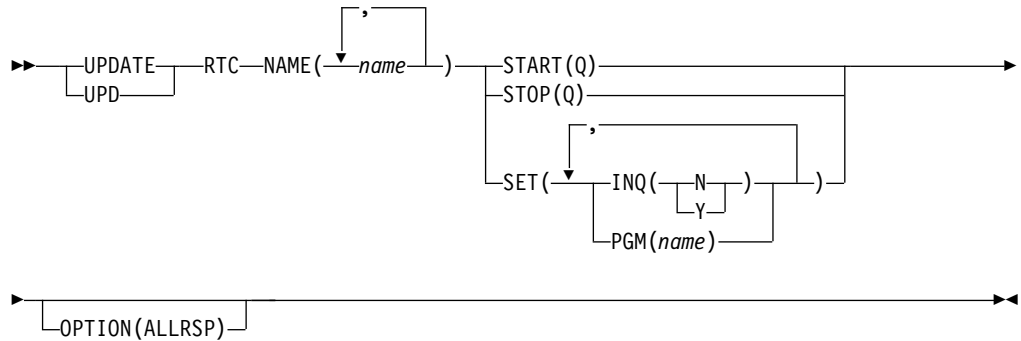
表 525. UPDATE RTC コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
UPDATE RTC	X		X
NAME	X		X

表 525. UPDATE RTC コマンドおよびキーワードの有効環境 (続き)

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
OPTION	X		X
SET	X		X
START	X		X
STOP	X		X

構文



キーワード

以下のキーワードは、UPDATE RTC コマンドに有効です。

NAME

宛先コードの名前 (1 から 8 文字) を指定します。名前にはワイルドカードを指定することができます。名前は反復可能なパラメータです。指定された NAME パラメータが固有またはワイルドカード名の場合、処理されたすべてのリソース名についてコマンド応答が戻されます。NAME(*) の場合、エラーになったリソース名についてのみ、コマンド応答が戻されます。OPTION(ALLRSP) を NAME(*) と同時に指定すれば、処理されたすべてのリソース名についてコマンド応答が取得できます。

OPTION

コマンドとともに実行される追加の機能を指定します。

ALLRSP

コマンドで処理されたすべてのリソースについて応答行を戻すことを示します。デフォルトのアクションでは、エラーになったリソースについてのみ応答行が戻されます。これは、NAME(*) を指定した場合のみ有効です。ALLRSP は、他の NAME 値では無視されます。

SET

変更される属性値を指定します。

INQ

照会オプションを指定します。

N これは照会宛先コードではありません。

Y これは照会宛先コードです。宛先コードに関連するメッセージは、すべて照会トランザクションです。このオプションは、データベースを変更しないプログラムに対してのみ指定する必要があります。照会トランザクションの処理中は、プログラムはデータベースへの挿入、削除、または置換の呼び出しを出すのを禁止されます。

この属性を更新すると、コマンドが処理されている期間、宛先コードを静止します。

PGM

宛先コードに関連付けられたアプリケーション・プログラムの名前。このプログラムは存在し、かつ **N** の **BMPTYPE** で定義されていなければなりません。

この属性を更新すると、コマンドが処理されている期間、宛先コードを静止します。

START

開始される属性を指定します。

Q メッセージのキューイングを開始します。

STOP

停止する属性を指定します。

Q メッセージのキューイングを停止します。

使用上の注意

リソースは、**DELETE** コマンドを使用して削除されない限り、**IMS** の存続期間中存在しています。リソースは、**IMS** ウォーム・スタートまたは緊急時再始動を越えて、リカバリ可能です。**IMS** がコールド・スタートする場合、**IMS** が稼働中にエクスポートされた定義をコールド・スタートがインポートしない限り、リソースは失われます。

UPDATE RTC コマンドは、**OM API** を介してのみ出すことができます。高速機能がシステムにインストールされていなければなりません。このコマンドは **DB/DC** および **DCCTL** システムに適用されます。

このコマンドは、**XRF** 代替または **FDBR** 領域では無効です。**MODBLKS** のオンライン変更が使用可能な場合 (**DFSDFxxx** または **DFSCGxxx** が **MODBLKS=OLC** で定義されているか、**MODBLKS** が定義されていない場合)、**SET()** を指定した **UPDATE RTC** コマンドは無効です。

このコマンドはリカバリ可能です。

INQ または **PGM** 属性が変更されると、**UPDATE RTC** コマンドは **MODBLKS** 宛先コードを「動的」に変更します。

オンライン変更処理 (すべての宛先コードが更新されるか、どの宛先コードも更新されないかのいずれか) とは異なり、各宛先コードが個別に更新されます。宛先コードのランタイム・リソース定義は、その宛先コードが使用中でない場合にのみ更新できます。宛先コードが使用中の場合、更新は失敗します。この規則の例外は、状況です。宛先コードの状況は、宛先コードが使用中の間に更新できます。シスプ

レックス環境では、一部の IMS システムでは更新に成功し、他の IMS システムでは失敗する場合があります。更新が成功する可能性を最大限にするために、更新を試みる前に、以下のステップを実行してください。

- QRY RTC SHOW(WORK) コマンドを使用して、進行中の作業を確認し、作業が終了するのを待つか、進行中の作業に対処します。QUERY RTC コマンドの出力フィールドを参照して、例えば、削除が失敗する原因になる可能性がある作業を調べます。作業の例としては、その宛先コードに対してコマンドが進行中であること、あるいは宛先コードがアクティブであることがあります。
- プログラムがスケジュールされている場合、宛先コードは更新できません。プログラムがスケジュールされている場合は、UPDATE RTC コマンドを発行する前に、その領域を停止する必要があります。

ランタイム・リソース定義属性には、INQ および PGM が含まれます。UPDATE コマンドで指定されたすべての属性が既にそのリソースに定義されている場合、更新は実際には行われず、リソースは静止されず、ログ・レコードは作成されず、ゼロの完了コードが戻されます。

MODBLKS のオンライン変更が使用可能な場合、宛先コード属性 (INQ、PGM) は更新できません。

出力フィールド

以下の表には、UPDATE RTC 出力フィールドが記載されています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 526. UPDATE RTC コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	キーワード	意味
CC	N/A	完了コード。
CCTXT	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードを簡潔に説明する完了コード・テキスト。
ERRT	<i>error</i>	診断情報を含むエラー・テキスト。エラー・テキストはゼロ以外の完了コードに戻すことができ、完了コードをさらに説明する情報を含んでいます。
MBR	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。
RTC	RTC	宛先コード名。

戻りコード、理由コード、および完了コード

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 527. UPDATE RTC コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。NAME(*) が OPTION(ALLRSP) なしで指定される場合、出力行は戻されません。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'00000008'	X'00002008'	必須キーワードが指定されませんでした。
X'00000008'	X'00002123'	無効なプログラム名。
X'00000008'	X'00002048'	無効な SET 属性。
X'0000000C'	X'00003000'	一部のリソースではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。NAME(*) が OPTION(ALLRSP) なしで指定される場合、ゼロ以外の完了コードのリソースのみが戻されます。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'00000010'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'00000010'	X'0000400C'	XRF 代替システムではコマンドは無効です。
X'00000010'	X'00004024'	高速機能が定義されていません。
X'00000010'	X'00004120'	オンライン変更フェーズが進行中です。
X'00000010'	X'00004300'	MODBLKS のオンライン変更が有効なため、コマンドが許可されません (DFSDFxxx または DFSCGxxx が MODBLKS=OLC で定義されているか、または MODBLKS が定義されていません)。
X'00000010'	X'0000431C'	プログラムは静止しています。プログラムを静止できません。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できませんでした。
X'00000014'	X'00005008'	DFSPOOL ストレージを取得できませんでした。
X'00000014'	X'0000500C'	AWE を取得できませんでした。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。以下の表には、完了コードの説明が記載されています。

表 528. UPDATE RTC コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		宛先コードに対するコマンドは正常に完了しました。

表 528. UPDATE RTC コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
10	NO RESOURCES FOUND	宛先コード名が無効であるか、指定されたワイルドカード・パラメーターがどのリソース名にも一致しません。
17	ANOTHER CMD IN PROGRESS	この宛先コードに対して別のコマンド (DELETE または UPDATE など) が進行中です。これは、固有またはワイルドカードの複数のパラメーターでリソースが指定されている場合、このコマンドを意味する場合があります。もしくは、宛先コードがプログラム名を更新しており、そのプログラムに対して別のコマンドが進行中です。
39	FP=E TRAN FOR RTC EXISTS	宛先コードは IMS によって高速機能専用トランザクション用に作成されており、UPDATE RTC コマンドを使用して更新することはできません。宛先コードの属性は、高速機能専用トランザクション用の UPDATE TRAN コマンドを使用するのみ更新できます。
61	DFSBCB STORAGE ERROR	DFSBCB ストレージ・エラー。RCTE 制御ブロック用のストレージを取得できませんでした。
73	PROGRAM SCHEDULED	プログラムがスケジュールされています。
7A	RTC/FP=N PGM CONFLICT	指定されたプログラムは高速機能専用ではありません。
90	INTERNAL ERROR	内部エラー。
99	NOT INITIALIZED	宛先コードが初期化されていないため、宛先コードの更新は失敗しました。QUERY RTC STATUS(NOTINIT) を使用すると、宛先コードが初期化されていない理由 (例えば、関連するプログラムが定義されていないなど) が表示されます。定義エラーを訂正し、宛先コードを初期化するために UPD RTC START(Q)コマンドを発行してください。

表 528. UPDATE RTC コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
1D7	IMPORT CHANGE LIST ERROR	リソースは、IMSRSC リポジトリ内の変更リストからのインポート処理中であるか、変更リストから正常にインポートされませんでした。リソースは、リポジトリから正常にインポートされるまでは、更新することができません。

例

以下に示すのは UPDATE RTC コマンドの例です。

UPDATE RTC コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPD RTC NAME(BADNAME,FPTRN02,SMQFP7*,BAD*) SET(PGM(DBFSAMP3))
```

TSO SPOC 出力:

```
Response for: UPD RTC NAME(BADNAME,FPTRN02,SMQFP7*,BAD*) SET(PGM(DBFSAMP3))
RtcName MbrName CC CText
BAD* IMS1 10 NO RESOURCES FOUND
BADNAME IMS1 10 NO RESOURCES FOUND
FPTRN02 IMS1 0
SMQFP7A IMS1 0
SMQFP7B IMS1 0
SMQFP7C IMS1 0
SMQFP71 IMS1 0
SMQFP72 IMS1 0
SMQFP73 IMS1 0
```

OM API 入力:

```
CMD(UPDATE RTC NAME(BADNAME,FPTRN02,SMQFP7*,BAD*) SET(PGM(DBFSAMP3)))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.3.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2006.311 23:50:02.663055</statime>
<stotime>2006.311 23:50:02.663790</stotime>
<staseq>BFAC125257C8FB80</staseq>
<stoseq>BFAC125257F6E500</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10155002</rqsttkn1>
<rc>0200000C</rc>
<rsn>00003008</rsn>
<rsnmsg>CSLN054I</rsnmsg>
<rsntxt>None of the clients were successful.</rsntxt>
</ctl>
<cmderr>
<mbr name="IMS1 ">
<typ>IMS </typ>
<styp>DBDC </styp>
<rc>0000000C</rc>
<rsn>00003000</rsn>
<rsntxt>At least one request successful</rsntxt>
```


```

</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>RTC </kwd>
<input>UPD RTC NAME(BADNAME,FPTRN02,SMQFP7*,BAD*) SET(PGM(DBFSAMP3))
</input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="RTC" l1bl="RtcName" scope="LCL" sort="a" key="1" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>RTC(BADNAME ) MBR(IMS1) CC( 10) CCTXT(NO RESOURCES FOUND) </rsp>
<rsp>RTC(FPTRN02 ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>RTC(SMQFP7A ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>RTC(BAD* ) MBR(IMS1) CC( 10) CCTXT(NO RESOURCES FOUND) </rsp>
<rsp>RTC(SMQFP7B ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>RTC(SMQFP7C ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>RTC(SMQFP71 ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>RTC(SMQFP72 ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>RTC(SMQFP73 ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>


```

説明: プログラムのいくつかの宛先コードを更新するために UPDATE RTC コマンドが発行されています。ほとんどの宛先コードについては、完了コード 0 で示されているように、更新は正常に完了しました。宛先コード BADNAME およびパラメーター BAD* の更新は、完了コード 10 で失敗しています。宛先コード BADNAME は存在せず、また BAD で始まる宛先コード名はないからです。

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

926 ページの『/START RTC コマンド』

983 ページの『/STOP RTC コマンド』

UPDATE RTCDESC コマンド

UPDATE RTCDESC コマンドは、高速機能宛先コード記述子を更新するために使用します。

記述子は、記述子またはリソースの作成に使用できるモデルです。記述子の更新では、UPDATE コマンドで明示的に指定された属性のみが変更されます。指定されなかった属性は、既存の値を保持します。CREATE LIKE(DESC(descriptor_name)) コマンドを指定することにより、この記述子をモデルとして使用して、任意の宛先コ

ード・リソースまたは記述子を作成できます。この記述子を使用して既に作成された記述子またはリソースは、更新されません。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 『キーワード』
- 1419 ページの『使用上の注意』
- 1420 ページの『出力フィールド』
- 1421 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1422 ページの『例』

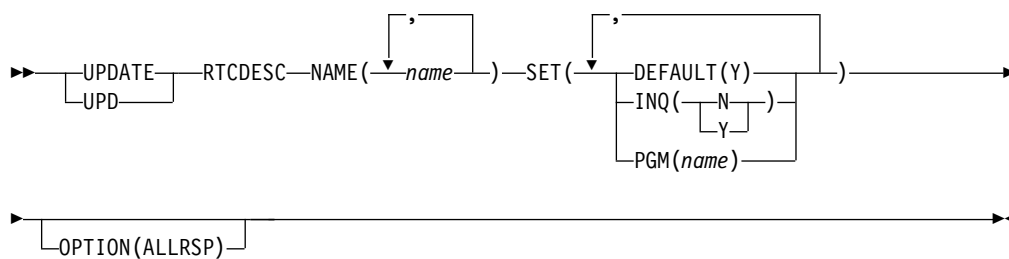
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 529. UPDATE RTCDESC コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
UPDATE RTCDESC	X		X
NAME	X		X
OPTION	X		X
SET	X		X

構文



キーワード

以下のキーワードは、UPDATE RTCDESC コマンドに有効です。

NAME

宛先コード記述子の名前 (1 から 8 文字) を指定します。名前にはワイルドカードを指定することができます。名前は反復可能なパラメーターです。指定された NAME パラメーターが固有またはワイルドカード名の場合、処理されたすべての記述子名についてコマンド応答が戻されます。NAME(*) の場合、エラーになった記述子名についてのみ、コマンド応答が戻されます。

OPTION(ALLRSP) を NAME(*) と同時に指定すれば、処理されたすべての記述子名についてコマンド応答が取得できます。

OPTION

コマンドとともに実行される追加の機能を指定します。

ALLRSP

コマンドで処理されたすべての記述子について、応答行を戻すことを指示します。デフォルトのアクションでは、エラーになった記述子についてのみ応答行が戻されます。これは、NAME(*) を指定した場合のみ有効です。ALLRSP は、他の NAME 値では無視されます。

SET

変更される属性値を指定します。

DEFAULT(Y)

この記述子をデフォルトとして指定します。これは、既存のデフォルト記述子を DEFAULT(N) にリセットします。LIKE キーワードなしで記述子またはリソースが作成される時、CREATE コマンドで指定されない属性は、デフォルト記述子に定義されている値を取ります。リソース・タイプのデフォルトとして、記述子 1 つだけが定義できます。IMS は、DBFDSRT1 と呼ばれる宛先コード記述子を定義しています。ここでは、すべての属性がデフォルト値で定義されています。ユーザー定義記述子をデフォルトに定義すると、現在のデフォルト記述子がオーバーライドされます。デフォルトにできる宛先コード記述子は一度に 1 つだけなので、1 つの宛先コード記述子名のみ DEFAULT(Y) で指定できます。

INQ

照会オプションを指定します。

N これは照会宛先コードではありません。

Y これは照会宛先コードです。宛先コードに関連するメッセージは、すべて照会トランザクションです。この値は、データベースを変更しないプログラムに対してのみ指定する必要があります。照会トランザクションの処理中は、プログラムはデータベースへの挿入、削除、または置換の呼び出しを出すのを禁止されます。

PGM

宛先コードに関連付けられたアプリケーション・プログラムの名前。このプログラムは存在し、かつ N の BMPTYPE で定義されていなければなりません。

使用上の注意

UPDATE コマンドで指定されたすべての属性が既にその記述子に定義されている場合、更新は実際には行われず、記述子は静止されず、ログ・レコードは作成されず、ゼロの完了コードが戻されます。これにより、アクションを行う必要がないときに、不要なオーバーヘッドを回避できます。

記述子は、DELETE コマンドを使用して削除されない限り、IMS の存続期間中存在しています。記述子は、IMS ウォーム・スタートまたは緊急時再始動を越えて、リ

カバリー可能です。IMS がコールド・スタートする場合、IMS が稼働中にエクスポートされた定義をコールド・スタートがインポートしない限り、記述子は失われます。

UPDATE RTCDESC コマンドは、OM API を介してのみ出すことができます。高速機能がシステムにインストールされていなければなりません。このコマンドは DB/DC および DCCTL システムに適用されます。

このコマンドは、XRF 代替または FDBR 領域では無効です。MODBLKS のオンライン変更が使用可能な場合 (DFSDFxxx または DFSCGxxx が MODBLKS=OLC で定義されているか、MODBLKS が定義されていない場合)、UPDATE RTCDESC コマンドは無効です。

これらのコマンドはリカバリー可能です。

記述子が IMS 定義の宛先コード記述子 (DBFDSRT1) である場合、更新できる唯一の属性は、DEFAULT 属性です。

各記述子が個別に更新されます。個別の更新は、オンライン変更の機能 (すべての記述子が更新されるか、どの記述子も更新されないかのいずれか) とは異なります。

出力フィールド

以下の表は、UPDATE RTCDESC の出力フィールドを示しています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 530. UPDATE RTCDESC コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	キーワード	意味
CC	N/A	完了コード。
CCTXT	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードを簡潔に説明する完了コード・テキスト。
DESC	RTCDESC	宛先コード記述子名。
ERRT	<i>error</i>	診断情報を含むエラー・テキスト。エラー・テキストはゼロ以外の完了コードに戻すことができ、完了コードをさらに説明する情報を含んでいます。
MBR	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。
OLDDEF	RTCDESC	古いデフォルト記述子名 (DEFAULT(Y) を指定して、この記述子をデフォルトに更新する場合)。古いデフォルトの記述子は、もはやデフォルトではありません。

戻りコード、理由コード、および完了コード

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 531. UPDATE RTCDESC コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各記述子の行と、その完了コードを含んでいます。NAME(*) が OPTION(ALLRSP) なしで指定される場合、出力行は戻されません。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'00000008'	X'00002008'	必須キーワードが指定されませんでした。
X'00000008'	X'00002123'	無効なプログラム名。
X'00000008'	X'00002048'	無効な SET 属性。
X'00000008'	X'00002133'	複数の name パラメーターが DEFAULT(Y) に指定されています。1 度に 1 つの記述子のみをデフォルトにできます。
X'0000000C'	X'00003000'	一部の記述子ではコマンドが正常に実行されましたが、それ以外では失敗しました。コマンド出力は、各記述子の行と、その完了コードを含んでいます。NAME(*) が OPTION(ALLRSP) なしで指定される場合、ゼロ以外の完了コードの記述子のみが戻されます。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'00000010'	X'00003004'	コマンドはどの記述子でも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各記述子の行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'00000010'	X'0000400C'	XRF 代替システムではコマンドは無効です。
X'00000010'	X'00004024'	高速機能が定義されていません。
X'00000010'	X'00004120'	オンライン変更フェーズが進行中です。
X'00000010'	X'00004300'	MODBLKS のオンライン変更が有効なため、コマンドが許可されません (DFSDFxxx または DFSCGxxx が MODBLKS=OLC で定義されているか、または MODBLKS が定義されていません)。
X'00000010'	X'0000431C'	プログラムは静止しています。プログラムを静止できません。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できませんでした。
X'00000014'	X'00005008'	DFSPOOL ストレージを取得できませんでした。
X'00000014'	X'0000500C'	AWE を取得できませんでした。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。以下の表には、完了コードの説明が記載されています。

表 532. UPDATE RTCDESC コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		宛先コード記述子に対するコマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	宛先コード記述子名が無効であるか、指定されたワイルドカード・パラメーターがどの記述子名にも一致しません。
17	ANOTHER CMD IN PROGRESS	この宛先コード記述子に対して別のコマンド (DELETE または UPDATE など) が進行中です。これは、固有またはワイルドカードの複数のパラメーターでリソースが指定されている場合、このコマンドを意味する場合があります。
48	NOT ALLOWED FOR IMS RESOURCE	指定された UPDATE コマンドは、IMS 記述子およびリソースに対しては使用できません。DBFDSRT1 は、IMS 記述子の一例です。更新できる唯一の IMS 記述子属性は、DEFAULT(Y) です。
61	DFSBCB STORAGE ERROR	DFSBCB ストレージ・エラー。RCTE 制御ブロック用のストレージを取得できませんでした。
7A	RTC/FP=N PGM CONFLICT	指定されたプログラムは高速機能専用ではありません。
8A	WILDCARD PARAMETER NOT SUPPORTED	ワイルドカード・パラメーターが DEFAULT(Y) で指定されました。1 度に 1 つの記述子のみをデフォルトにできます。
90	INTERNAL ERROR	内部エラー。
1D7	IMPORT CHANGE LIST ERROR	記述子は、IMSRSC リポジトリ内の変更リストからのインポート処理中であるか、変更リストから正常にインポートされませんでした。記述子は、リポジトリから正常にインポートされるまでは、更新することができません。

例

以下に示すのは UPDATE RTCDESC コマンドの例です。

UPDATE RTCDESC コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPD RTCDESC NAME(*) SET(PGM(BMPFPE01)) OPTION(ALLRSP)
```

TSO SPOC 出力:

```

Response for: UPD RTCDESC NAME(*) SET(PGM(BMPFPE01)) OPTION(ALLRSP)
DescName MbrName    CC CCText
DBFDSRT1 IMS1      7A RTC/FP=N PGM CONFLICT
DESC001  IMS1      7A RTC/FP=N PGM CONFLICT
DESC002  IMS1      7A RTC/FP=N PGM CONFLICT
DESC003  IMS1      7A RTC/FP=N PGM CONFLICT
DESC004  IMS1      7A RTC/FP=N PGM CONFLICT
DESC005  IMS1      7A RTC/FP=N PGM CONFLICT
RTCDESC1 IMS1      7A RTC/FP=N PGM CONFLICT

```

OM API 入力:

```
CMD(UPDATE RTCDESC NAME(*) SET(PGM(BMPFPE01)) OPTION(ALLRSP))
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.3.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2006.312 00:04:22.046943</statime>
<stotime>2006.312 00:04:22.047492</stotime>
<staseq>BFAC1585EA4DF64A</staseq>
<stoseq>BFAC1585EA70488A</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10160422</rqsttkn1>
<rc>0200000C</rc>
<rsn>00003008</rsn>
<rsnmsg>CSLN054I</rsnmsg>
<rsntxt>None of the clients were successful.</rsntxt>
</ctl>
<cmderr>
<mbr name="IMS1  ">
<typ>IMS </typ>
<styp>DBDC </styp>
<rc>0000000C</rc>
<rsn>00003004</rsn>
<rsntxt>No requests were successful</rsntxt>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>RTCDESC </kwd>
<input>UPD RTCDESC NAME(*) SET(PGM(BMPFPE01)) OPTION(ALLRSP) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="DESC" l1b1="DescName" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="32" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DESC(DESC004 ) MBR(IMS1) CC( 7A) CCTXT(RTC/FP=N PGM CONFLICT)
</rsp>
<rsp>DESC(DESC005 ) MBR(IMS1) CC( 7A) CCTXT(RTC/FP=N PGM CONFLICT)
</rsp>
<rsp>DESC(DESC001 ) MBR(IMS1) CC( 7A) CCTXT(RTC/FP=N PGM CONFLICT)
</rsp>
<rsp>DESC(RTCDESC1) MBR(IMS1) CC( 7A) CCTXT(RTC/FP=N PGM CONFLICT)
</rsp>
<rsp>DESC(DBFDSRT1) MBR(IMS1) CC( 7A) CCTXT(RTC/FP=N PGM CONFLICT)

```


```

</rsp>
<rsp>DESC(DESC002 ) MBR(IMS1) CC( 7A) CCTXT(RTC/FP=N PGM CONFLICT)
</rsp>
<rsp>DESC(DESC003 ) MBR(IMS1) CC( 7A) CCTXT(RTC/FP=N PGM CONFLICT)
</rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>


```

説明: すべての宛先コード記述子がプログラム BMPFPE01 を参照するように更新するために、UPDATE RTCDESC コマンドが発行されています。宛先コードは非高速機能プログラムには関連付けることができないため、すべての完了コードの更新が、完了コード 7A で失敗しています。

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

UPDATE TRACE コマンド

UPDATE TRACE コマンドは、タイプ 2 トレースの設定を変更するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 1425 ページの『キーワード』
- 1426 ページの『使用上の注意』
- 1426 ページの『出力フィールド』
- 1427 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1428 ページの『例』

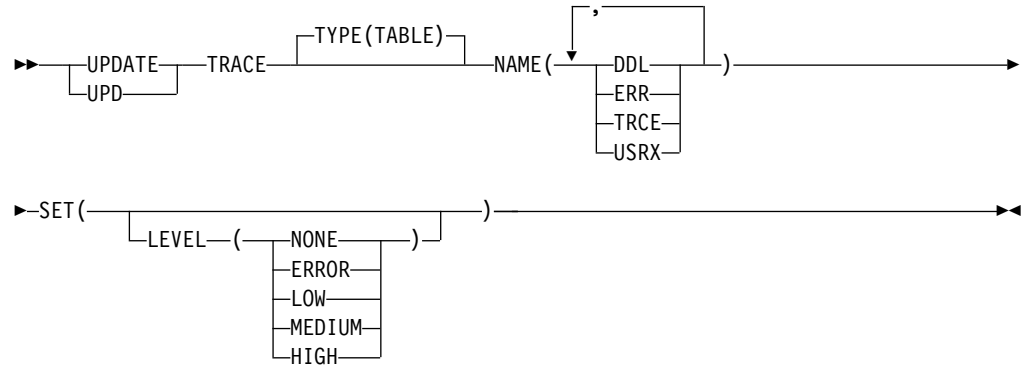
環境

以下の表には、UPDATE TRACE コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/BC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 533. UPDATE TRACE コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
UPDATE TRACE	X	X	X
LEVEL	X	X	X
NAME	X	X	X
TYPE	X	X	X

構文



キーワード

以下のキーワードは、UPDATE TRACE コマンドに有効です。

NAME

更新するタイプ 2 トレースの名前 (1 から 4 文字) を指定します。単一のトレース名、またはコンマで区切った複数のトレース名のリストを指定できます。

NAME キーワードには以下の値が有効です。

DDL データ定義言語 (DDL) トレース・テーブル。

ERR エラー・トレース・テーブル。

TRCE トレース・サービス・トレース・テーブル。

USRX ユーザー出口サービス・トレース・テーブル。

SET

変更される属性値を指定します。

LEVEL

指定されたトレースの新しいトレース・レベルを設定するオプション・パラメーター。LEVEL が省略された場合は、指定されたトレースのレベルは変更されません。

重要: トレース・タイプ ERR のレベルを変更することはできません。

IMS は、ERR トレースの場合、エラー診断が取り込まれるようにレベルを HIGH に設定します。ERR トレースについて指定されたレベルはいずれも無視されます。

トレースのトレース・レベルが元々 NONE であり、その後他のレベルに更新された場合は、必要に応じてトレース・ストレージが割り振られ、トレースがオンになります。

IMS システムが再始動されると、UPDATE TRACE コマンドを使用してトレース・ストレージに対して行われた変更はリカバリーされません。代わりに、IMS PROCLIB データ・セットの DFSDFxxx メンバーの

DIAGNOSTICS_STATISTICS セクションで定義されているパラメーターが使用されます。

以下のレベルを指定できます。

NONE

トレースはアクティブではありません。このコマンドの発行時にトレースがアクティブである場合、そのトレースはオフになりますが、トレース・ストレージの割り振りは解除されません。

ERROR

エラー条件または例外条件のトレースのみがテーブルに書き込まれます。

LOW

主要なイベント・トレース・エントリーのみがテーブルの中に書き込まれます。

MEDIUM

主要なイベント・トレース・エントリーと一部のマイナーなイベント・トレース・エントリーがテーブルの中に書き込まれます。

HIGH

すべてのトレース・エントリーがテーブルの中に書き込まれます。

TYPE

トレース・タイプを指定します。

TABLE

タイプ 2 テーブル・トレースを指定します。これはデフォルト値です。

使用上の注意

このコマンドは、Operations Manager API を介してのみ出すことができます。このコマンドは DB/DC、DBCTL および DCCTL システムに適用されます。

UPDATE TRACE コマンドのコマンド出力は XML で定義されており、OM と通信する自動化プログラムで使用できます。出力には、UPDATE TRACE コマンドで指定されたトレースごとに 1 つの項目が含まれています。コマンドは、IMSplex のデフォルト経路指定として、IMSplex 内のすべての IMS システムに経路指定されます。

出力フィールド

以下の表には、UPDATE TRACE 出力フィールドが記載されています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

長ラベル

XML 出力で生成された長ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。

有効範囲

出力フィールドの有効範囲を識別します。

意味

出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 534. UPDATE TRACE コマンドの出力フィールド

ショート・ラベル	長ラベル	キーワード	有効範囲	意味
CC	CC	N/A	N/A	出力行の完了コード。完了コードは常に戻されます。
CCTXT	CCText	<i>error</i>	N/A	ゼロ以外の完了コードを簡潔に説明する完了コード・テキスト。
MBR	MbrName	N/A	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。メンバー名は常に戻されます。
NAME	TraceName	NAME	LCL	トレース名。
TYPE	TraceType	TYPE	LCL	トレースのタイプ。

戻りコード、理由コード、および完了コード

UPDATE TRACE コマンドの結果として戻される戻りコードと理由コードは、OM API を介して入力されるすべてのコマンドに共通する標準コードです。

以下の表には、UPDATE TRACE コマンドの戻りコード、理由コード、およびコードの説明が記載されています。

表 535. UPDATE TRACE コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	UPDATE TRACE コマンドは正常に完了しました。
X'00000008'	X'00002040'	UPDATE TRACE コマンドが失敗しました。フィルターが指定されなかったか、無効なフィルターまたは不十分な数のフィルターが指定されました。
X'0000000C'	X'00003000'	UPDATE TRACE コマンドは、少なくとも 1 つのトレースについては正常に実行されました。1 つ以上のトレースについて、UPDATE TRACE コマンドが失敗しました。完了コードに、エラーの理由が示されています。UPDATE TRACE コマンドにより戻される可能性がある完了コードのリストは、UPDATE TRACE 完了コード表に示されています。
X'0000000C'	X'00003004'	指定されたすべてのトレースについて、UPDATE TRACE コマンドが失敗しました。完了コードに、エラーの理由が示されています。UPDATE TRACE コマンドにより戻される可能性がある完了コードのリストは、UPDATE TRACE 完了コード表に示されています。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できなかったため、UPDATE TRACE コマンド処理は終了しました。
X'00000014'	X'00005FFF'	内部エラーが原因で、UPDATE TRACE コマンド処理は終了しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。

表 536. UPDATE TRACE コマンドの完了コード

完了コード	意味
0	UPDATE TRACE コマンドは、トレースに対して正常に完了しました。
10	リソースが見つかりません。この場合、リソースはトレース名です。指定されたトレースはどれも、コマンドを処理した IMS システムに認識されません。トレースの入力に誤りがある可能性があります。正しいスペルのトレースがコマンド上に指定されていることを確認してください。
5F	トレース名に無効文字が使用されています。指定された 1 つまたは複数の名前からすべての無効文字を削除してください。
8A	ワイルドカードはサポートされていません。 NAME パラメーターでワイルドカードが指定されました。指定された 1 つまたは複数のトレース名からすべてのワイルドカード文字 * および % を除去してください。
250	トレース割り振りエラー。トレースを割り振ることができませんでした。

例

TSO SPOC 入力:

```
UPD TRACE TYPE(TABLE) NAME(TRCE,ERR) SET(LEVEL(LOW))
```

TSO SPOC 出力:

```
Response for: UPD TRACE TYPE(TABLE) NAME(TRCE,ERR) SET(LEVEL(LOW))
TraceName MbrName CC TraceType
ERR IMS1 0 Table
ERR IMS2 0 Table
TRCE IMS1 0 Table
TRCE IMS2 0 Table
```

OM API 入力:

```
CMD(UPD TRACE TYPE(TABLE) NAME(TRCE,ERR) SET(LEVEL(LOW)))
```

OM API 出力:

```
<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.7.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2017.180 20:30:29.245120</statime>
<stotime>2017.180 20:30:29.258457</stotime>
<staseq>D2C2F74A440C002B</staseq>
<stoseq>D2C2F74A474D932B</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10133029</rqsttkn1>
<rc>00000000</rc>
<rsn>00000000</rsn>
</ctl>
<cmd>
<master>IMS2 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>TRACE </kwd>
<input>UPD TRACE TYPE(TABLE) NAME(TRCE,ERR) SET(LEVEL(LOW)) </input>
</cmd>
```



```

<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="NAME" l1b1="TraceName" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="4" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="no" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
<hdr s1b1="TYPE" l1b1="TraceType" scope="LCL" sort="n" key="0"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" skipb="yes" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>NAME(ERR ) MBR(IMS2) CC( 0) TYPE(Table ) </rsp>
<rsp>NAME(TRCE) MBR(IMS2) CC( 0) TYPE(Table ) </rsp>
<rsp>NAME(ERR ) MBR(IMS1) CC( 0) TYPE(Table ) </rsp>
<rsp>NAME(TRCE) MBR(IMS1) CC( 0) TYPE(Table ) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>

```

説明:

UPDATE TRACE コマンドは IMS1 と IMS2 に送られます。IMS1 および IMS2 はどちらもコマンドを処理し、ERR テーブル・トレースおよび TRCE テーブル・トレースについて正常な完了コードを返しました。ERR テーブル・トレースのレベルは常に HIGH に設定されており、ERR テーブル・トレースについてはコマンドが無視されるため、ERR テーブル・トレースのレベルは変更されていないことに注意してください。

UPDATE TRAN コマンド

UPDATE TRAN コマンドは、トランザクション・リソースを更新するために使用します。

サブセクション:

- 『環境』
- 1430 ページの『構文』
- 1432 ページの『キーワード』
- 1454 ページの『使用上の注意』
- 1456 ページの『同等の IMS タイプ 1 コマンド』
- 1457 ページの『出力フィールド』
- 1458 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1465 ページの『例』

環境

以下の表には、UPDATE TRAN コマンドおよびキーワードを出すことができる環境 (DB/DC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

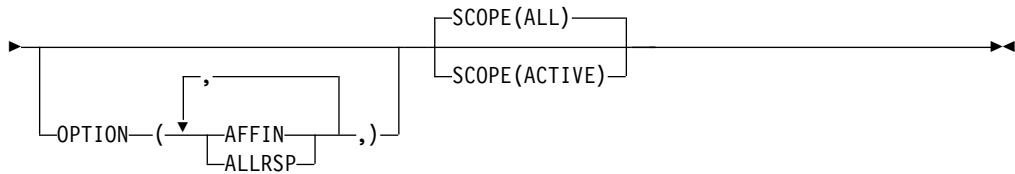
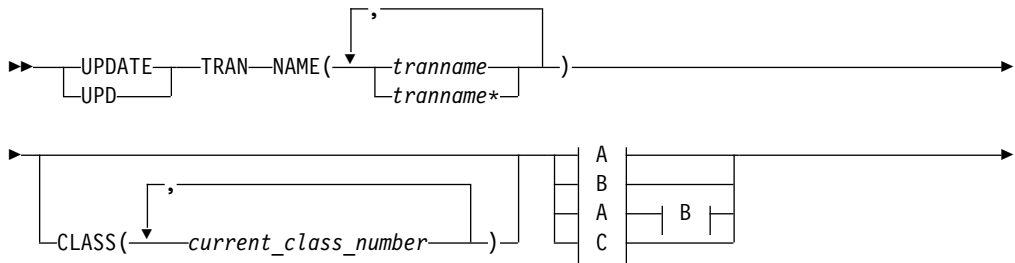
表 537. UPDATE TRAN コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
UPDATE TRAN	X		X
CLASS	X		X

表 537. UPDATE TRAN コマンドおよびキーワードの有効環境 (続き)

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
NAME	X		X
OPTION	X		X
SCOPE	X		X
SET	X		X
START	X		X
STOP	X		X

構文



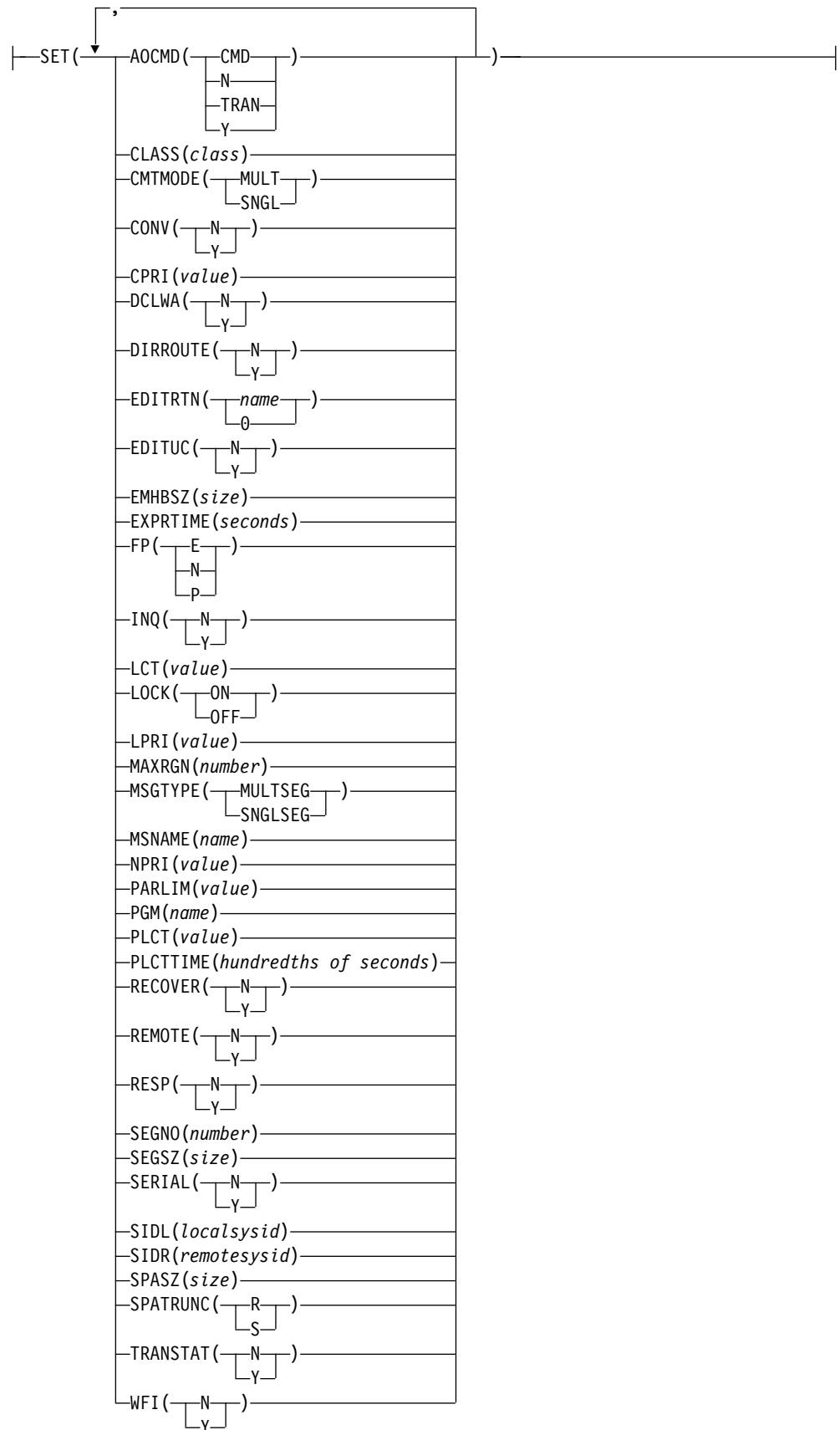
A:



B:



C:



キーワード

以下のキーワードは、UPDATE TRAN コマンドに有効です。

CLASS()

更新される、1 つ以上の指定済みクラスと関連したトランザクションを選択します。

NAME(*tranname*)

トランザクションの名前 (1 から 8 文字) を指定します。*tranname* には、ワイルドカードを指定できます。*tranname* は、反復可能なパラメーターです。指定された NAME パラメーターが固有またはワイルドカード名の場合、処理されたすべてのリソース名についてコマンド応答が戻されます。NAME(*) の場合、エラーになったリソース名についてのみ、コマンド応答が戻されます。OPTION(ALLRSP) を NAME(*) と同時に指定すれば、処理されたすべてのリソース名についてコマンド応答が取得できます。

OPTION()

実行する追加の機能を指定します。以下は追加機能のリストです。

AFFIN

AFFIN は、START(SCHD) または STOP(SCHD) を指定した場合に有効です。

START(SCHD) と共に使用された場合、OPTION(AFFIN) は、トランザクションが IMS へのローカル類似性を持っており、ローカル類似性キューにインタレストを登録するために通知要求を行う必要があることを示します。共用キュー (SQ) 環境で、ローカル IMS への類似性を持つトランザクションに関するメッセージは、ローカル IMSID または RSENAME (XRF) が付加されたトランザクション名から成るキュー名を使用して、カップリング・ファシリティに置かれます。通常のトランザクション登録 (ブランクが付加されたトランザクション名から成るキュー名の登録) に加えて、ローカル類似性登録 (ローカル IMSID または RSENAME (XRF) が付加されたトランザクション名から成るキュー名の登録) が行われます。キューにインタレストを登録すると、メッセージが処理のためにキューに入れられたときに IMS[™] に通知されます。

STOP(SCHD) と共に使用された場合、OPTION(AFFIN) は、IMS がトランザクションのローカル類似性キューに登録されているインタレストを抹消する必要があることを示します。

OPTION(AFFIN) を指定してトランザクションを開始すると、ローカル類似性状況 (AFFIN) が設定されます。これは、IMS がコールド・スタートされるまで、トランザクションに対して設定されたままになります。QUERY TRAN NAME(*tranname*) SHOW(ALL) コマンドを実行すると、状況は AFFIN と表示されます。その後、UPDATE TRAN NAME(*tranname*) STOP(SCHD) コマンドまたは UPDATE TRAN NAME(*tranname*) START(SCHD) コマンドが実行されると、OPTION(AFFIN) が指定されているかどうかにかかわらず、通常のトランザクション・キューとローカル類似性トランザクション・キューの両方で、インタレストの登録が反転します。

ローカル類似性状況は、IMS コールド・スタートが実行されると維持されません。コールド・スタート処理の終わりに、共用キュー通知が行われる場合、IMS は通常のトランザクション・キューのみにインタレストを登録します。IMS は、ローカル類似性キューにはインタレストを登録しません。そのため、ローカル類似性キューにあるメッセージをスケジュールできません。UPDATE TRAN START(SCHD) OPTION(AFFIN) コマンドは、通知要求を行って IMSID のローカル類似性キューにインタレストを登録することによって、この状況を訂正します。

DFSMSCE0 ユーザー・メッセージ・ルーティング出口を使用して共用キュー環境での入力トランザクション・メッセージのローカル類似性が設定される場合に、IMS 制御領域を停止した後、コールド・スタートした場合には、UPDATE TRAN NAME(*trannname*) START(SCHD) OPTION(AFFIN) コマンドを実行し、通知要求を行って IMSID のローカル類似性キューにインタレストが登録されるようにする必要があります。

ALLRSP

コマンドで処理されたすべてのリソースについて応答行を戻すことを示します。デフォルトのアクションでは、エラーになったリソースについてのみ応答行が戻されます。これは、NAME(*) を指定した場合のみ有効です。ALLRSP は、他の NAME 値では無視されます。

SCOPE()

IMS がどこへ変更を適用するかを指定します。デフォルトは ALL です。

ALL

コマンドの経路指定先のアクティブな IMS システムに、変更が適用されます。ユーザーがグローバル・エリア状況を維持するように指定している場合は、RM で維持されている値を更新することにより、変更はグローバルにも適用されます。RM 状況は、コマンド・マスター IMS によってのみ更新されます。グローバル・エリア状況が維持されていない場合は、コマンド・アクションは SCOPE(ACTIVE) コマンドと同じです。

ACTIVE

コマンドの経路指定先のアクティブな IMS システムに、変更が適用されます。

RM は、一部のトランザクションのグローバル状況情報を維持しています。IMS は、コマンドに基づいて RM 内の情報を更新します。SCOPE(ALL) が指定されている場合、コマンドを処理する各 IMS システムは、それぞれのローカル制御ブロック内の情報を更新します。IMS コマンド・マスターのみが RM を呼び出して、グローバルに情報を更新します。

SET()

変更される属性値を指定します。トランザクションが共用される場合、トランザクションは、それが定義されているすべてのシステムで同じ特性を持っていないければなりません。これらの特性には、以下のものが含まれます。

- 非会話型または会話型
- SPA サイズ (会話型の場合)
- 単一セグメント・メッセージまたは複数セグメント・メッセージ
- 非照会または照会

- リカバリー可能またはリカバリー不能

AOCMD

変更する AOI オプションを指定します。これは、トランザクションがタイプ 1 AOI CMD 呼び出しまたはタイプ 2 AOI ICMD 呼び出しを発行できるかどうかを示します。AOCMD が CMD、TRAN、または Y として定義され、AOI1 実行パラメーターが AOI1=N として定義されている場合、許可検査は行われず、トランザクションには CMD 呼び出しおよび ICMD 呼び出しの発行が許可されます。

CMD

トランザクションによるタイプ 1 AOI CMD 呼び出しおよびタイプ 2 AOI ICMD 呼び出しの発行が許可されることを示します。AOI1 実行パラメーターが C、R、または A として定義されている場合、許可検査は、どのトランザクションが特定のコマンドを発行できるかに基づいて行われます。この場合、コマンド (または、コマンドの最初の 3 文字) が RACF または同等製品に対してユーザーとして定義されていることが必要です。タイプ 1 AOI トランザクションは TIMS クラスのもとにプロファイルとして定義され、トランザクションごとに、それが発行できるコマンドが指定されていなければなりません。AOCMD(CMD) の定義は、AOCMD(TRAN) の定義に比べて、作成する必要があるユーザー ID の数が少なく済みます。ただし、AOCMD(CMD) の定義では、より多数のリソース・プロファイルを作成または変更する必要があります。

- N トランザクションによるタイプ 1 AOI CMD 呼び出しの発行が許可されないことを示します。トランザクションにはタイプ 2 AOI ICMD 呼び出しの発行が許可されます。

TRAN

トランザクションによるタイプ 1 AOI CMD 呼び出しおよびタイプ 2 AOI ICMD 呼び出しの発行が許可されることを示します。AOI1 実行パラメーターが C、R、または A として定義されている場合、トランザクション・コードが許可に使用されます。最初の許可検査の結果として、アクセス機能環境エレメント (ACEE) が作成されます。この環境は、将来の許可検査で使用するために保持されます。タイプ 1 AOI トランザクションは、RACF または同等製品に対してユーザーとして定義されていることが必要です。これにより、タイプ 1 AOI トランザクションからの発行が許可されるコマンドごとに、トランザクションが RACF PERMIT ステートメントで指定されるようになります。AOI トランザクションを RACF に対してユーザーとして指定する際に、RACF に既に定義されているユーザーの名前と競合することがあります。これが起きた場合には、トランザクション名または既存のユーザー名のどちらかを変更する必要があります。

- Y トランザクションによるタイプ 1 AOI CMD 呼び出しおよびタイプ 2 AOI ICMD 呼び出しの発行が許可されることを示します。AOI1 実行パラメーターが C、R、または A として定義されている場合、ユーザー ID またはプログラム名が許可に使用されます。一部の環境では、Get Unique 呼び出しがまだ行われていない場合、プログラム名が許可に使用されます。

この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションへのメッセージのキューイングが停止されます。メッセージをトランザクションのキューに入れようとするときリジェクトされます。また、この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションのスケジューリングも停止されます。コマンドが正常に完了するには、進行中の作業およびキューに入れられたメッセージ (非共用キュー) があってはなりません。

CLASS

トランザクション・クラスを指定します。これは、スケジューリングするトランザクションを選択するために使用される属性の 1 つです。そのクラス用に使用可能なメッセージ処理領域があれば、トランザクションをスケジュールできます。値は 1 から 999 までの数値です。この値は、IMSCTRL マクロの MAXCLAS= キーワードで示された値 (指定またはデフォルト) を超えてはなりません。

CPI-C トランザクションは、非 CPI-C トランザクションに使われたのとは異なるメッセージ・クラスで定義してください。IMS は、トランザクション・クラス内のすべての CPI-C トランザクションを優先順位ゼロとして扱います。

CMTMODE

データベースの更新および非急送出力メッセージがコミットされる時期を指定します。このオペランドは緊急時再始動に影響を与えます。

MULT

データベースの更新および非急送出力メッセージは、アプリケーション・プログラムが正常に終了した時点、処理限界カウントに達した時点、あるいは、疑似 WFI 従属領域の場合は、キューにそれ以上メッセージがなくなった時点でのみ、コミットされます。例えば、プログラムの単一のスケジュールで 5 つのトランザクションが処理される場合、5 番目のトランザクションが完了し、プログラムが終了した時点でのみ、5 つすべてがコミットされます。トランザクションのコミットが完了するまでは、更新されたデータベース・レコードのロックは解放されず、非急送出力メッセージは出力用のキューに入れられません。メッセージをコミットする前にアプリケーションが異常終了した場合、緊急時再始動は、そのコミット・スコープ内で処理されたすべてのメッセージを再キューイングし、それらを再処理のために使用できるようにします。

トランザクションの結果としてアプリケーションが外部サブシステム (DB2 など) を呼び出す場合、外部サブシステムによって提供されるコミット確認出口は、CMTMODE(MULT) がサポートされるかどうかを判断することができます。「IMS V15 出口ルーチン」のコミット確認出口ルーチンの下の資料を参照してください。

SNGL

データベースの更新および非急送出力メッセージは、アプリケーション・プログラムがそれぞれのトランザクションの処理を完了した時点でコミットされます。IMS は、アプリケーション・プログラムが次のメッセージを要求した (入出力 PCB に GU を発行した) 時点、またはアプリケーション・プログラムが終了した時点のいずれかで、コミット処理を呼び出します。メッセージをコミットする前にアプリケーションが異

常終了した場合、緊急時再始動は、そのコミット・スコープ内で処理されたすべてのメッセージを再キューイングし、それらを再処理のために使用できるようにします。メッセージをコミットする前にアプリケーションが異常終了した場合、緊急時再始動は、異常終了の前に処理中であつたメッセージを再キューイングし、それを再処理のために使用できるようにします。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- CONV(Y) と CMTMODE(MULT) は相互に排他的です。
- WFI(Y) と CMTMODE(MULT) は相互に排他的です。

この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションへのメッセージのキューイングが停止されます。メッセージをトランザクションのキューに入れようとするときリジェクトされます。また、この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションのスケジューリングも停止されます。コマンドが正常に完了するには、進行中の作業およびキューに入れられたメッセージ (非共用キュー) があつてはなりません。

CONV

会話オプションを指定します。

N トランザクションは会話型ではありません。

Y トランザクションは会話型です。トランザクション・メッセージは、会話型プログラム宛に送られます。会話型プログラムは、複数のステップで構成されるトランザクションを処理します。会話型プログラムは、端末からメッセージを受け取り、端末に応答しますが、トランザクションからのデータをスクラッチパッド域 (SPA) に保管します。端末の担当者が追加データを入力するとき、プログラムは前回のメッセージから保管したデータを SPA 内に持っているため、端末の担当者がそのデータを再度入力しなくても要求の処理を続行することができます。

この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションへのメッセージのキューイングが停止されます。メッセージをトランザクションのキューに入れようとするときリジェクトされます。また、この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションのスケジューリングも停止されます。コマンドが正常に完了するには、進行中の作業およびキューに入れられたメッセージ (非共用キュー) があつてはなりません。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- CONV(Y) には SPASZ および SPATRUNC が必要です。
- CMTMODE(MULT) と CONV(Y) は相互に排他的です。
- FP(E) と CONV(Y) は相互に排他的です。
- RECOVER(N) と CONV(Y) は相互に排他的です。
- SPASZ と CONV(N) は相互に排他的です。
- SPATRUNC と CONV(N) は相互に排他的です。

CPRI

現在のトランザクション優先順位に新しい値を指定します。CPRI キーワードを BMP トランザクションに対して使うことはできません。BMP トランザクションの優先順位は常に 0 でなければならないからです。新規の

CPRI 値が有効になるのは、次にトランザクションがスケジュールされたときです。有効な CPRI パラメーターの値は、0 から 14 までの数値です。

DCLWA

ログ先書きオプションを指定します。

N IMS はログ先書きを実行しません。入力メッセージの保全性、および出力メッセージと関連のデータベース更新の整合性が不要でない場合に、N を指定してください。DCLWA は、応答モードまたは高速機能の入力処理には適用されず、IMS の実行時に無視されます。

Y IMS は、リカバリー可能な、非応答入力メッセージおよびトランザクションの出力メッセージに対して、ログ先書きを実行する必要があります。これにより、以下のことが確実にになります。

- IMS の障害後、IMS が入力を受信を確認する前に、非応答入力トランザクションがリカバリー可能になります。
- IMS が関連の出力応答メッセージを送信する前に、データベースの変更がリカバリー可能になります。
- 関連の入力確認応答または出力応答が端末に送信される前に、ログ・バッファ内の情報が IMS ログに書き込まれます。

すべての VTAM 端末タイプに対して DCLWA(Y) を定義してください。

この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションへのメッセージのキューイングが停止されます。メッセージをトランザクションのキューに入れようとするときリジェクトされます。また、この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションのスケジューリングも停止されます。コマンドが正常に完了するには、進行中の作業およびキューに入れられたメッセージ (非共用キュー) があってはなりません。

DIRROUTE

MSC 直接経路指定オプションを指定します。

N トランザクションを処理しているアプリケーション・プログラムには、トランザクションを発信したシステムが通知されません。発信元の LTERM の名前が、入出力 PCB に入れられます。

Y 複数 IMS システム構成で MSC 直接経路指定が使用されている場合、トランザクションを処理しているアプリケーション・プログラムに、トランザクションを発信したシステムが通知されます。発信元システムに戻る論理パスに対応した MSNAME が、入出力 PCB に入れられます。

この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションへのメッセージのキューイングが停止されます。メッセージをトランザクションのキューに入れようとするときリジェクトされます。また、この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションのスケジューリングも停止されます。コマンドが正常に完了するには、進行中の作業およびキューに入れられたメッセージ (非共用キュー) があってはなりません。

EDITRTN

プログラムがメッセージを受信する前にメッセージを編集する、トランザクション入力編集ルーチンの 1 文字から 8 文字の名前を指定します。この名前は、英字で始まっていなければなりません。指定された編集ルーチン(ロード・モジュール)は、IMS システム定義ステージ 2 の実行前に、USERLIB データ・セットに常駐している必要があります。このルーチンは、システム定義 TYPE EDIT= パラメーターで定義されたものと同じであってはなりません。

EDITRTN は、高速機能利用可能トランザクションが IMS に経路指定される場合に使用されます。

LU 6.2 装置からの入力の場合は、EDIT で指定されたトランザクション入力編集ルーチンの代わりに、ユーザー編集出口ルーチン DFSLUEE0 が呼び出されます。

この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションへのメッセージのキューイングが停止されます。メッセージをトランザクションのキューに入れようとするときリジェクトされます。また、この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションのスケジューリングも停止されます。コマンドが正常に完了するには、進行中の作業およびキューに入れられたメッセージ(非共用キュー)があってはなりません。

トランザクション定義から編集ルーチン名を除去するには、EDITRTN(0) を指定します。

FP(E) と EDITRTN は相互に排他的です。

EDITUC

大文字への編集オプションを指定します。

N 入力データは大文字に変換されません。端末から入力されたとおりに、大文字および小文字で構成することができます。

Y

入力データは、処理プログラムに提供される前に大文字に変換されます。FP(E) または FP(P) の場合、トランザクションは、編集/経路指定出口ルーチンに提供される前に大文字に変換されます。

VTAM 端末に対して EDITUC(Y) を指定すると、組み込み装置制御文字が伝送されなくなります。

この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションへのメッセージのキューイングが停止されます。メッセージをトランザクションのキューに入れようとするときリジェクトされます。また、この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションのスケジューリングも停止されます。コマンドが正常に完了するには、進行中の作業およびキューに入れられたメッセージ(非共用キュー)があってはなりません。

EMHBSZ

高速機能トランザクションを実行するために必要な EMH バッファサイズを指定します。これは EMHL 実行パラメーターをオーバーライドします。EMHBSZ が指定されない場合、EMHL 実行パラメーター値が使用されます。値は 0 から 30 720 までの数値です。

この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションへのメッセージのキューイングが停止されます。メッセージをトランザクションのキューに入れようとするときリジェクトされます。また、この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションのスケジューリングも停止されます。コマンドが正常に完了するには、進行中の作業およびキューに入れられたメッセージ (非共用キュー) があってはなりません。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- EMHBSZ>0 は、高速機能が定義されていることが必要です。
- FP(N) と EMHBSZ>0 は相互に排他的です。

EXPRTIME

IMS が入力トランザクションを取り消すために使用できる経過時間を秒単位で指定します。トランザクションが IMS に実行依頼された後で、トランザクションの停止や、起こり得るシステム・スローダウンのために、そのトランザクションの処理が遅れる可能性があります。その場合、トランザクションが処理される前に、ユーザーまたはクライアント・アプリケーションがタイムアウトになる可能性があります。結局、IMS がそのトランザクションをスケジュールに入れて処理するときには、その応答メッセージはもう必要なくなっています。トランザクションに経過時間が指定された場合、IMS は入力トランザクションに有効期限切れのフラグを立てて、システムが不要なトランザクションの処理のために CPU サイクルを浪費しないようにすることができます。

値は 0 から 65535 の範囲の数値 (秒単位) です。デフォルトは 0 です。この場合、このトランザクションに有効期限は設定されません。このトランザクション有効期限属性は、すべての IMS TM インターフェースでサポートされます。

制約事項: トランザクション有効期限の検査は、高速機能トランザクション、IMS 会話型トランザクション、およびプログラム間通信トランザクションの GU 時には実行されません。

FP 高速機能オプションを指定します。

E トランザクションは高速機能として排他的に処理されます。プログラムは高速機能専用として定義されていなければなりません。

N トランザクションは高速機能処理の候補ではありません。プログラムは、非高速機能として定義されていなければなりません。FP(N) が指定されている場合、高速機能のリソースまたはコマンドを使用しようとすると、予測不能な結果が生じることがあります。

P

トランザクションは高速機能処理の潜在的な候補です。高速機能利用可能トランザクションは、高速機能専用アプリケーションと非高速機能アプリケーションの 2 つのアプリケーションのもとで実行できなければなりません。このトランザクションを経路指定できる宛先の高速機能専用アプリケーションを定義する必要があります。高速機能利用可能トランザクションは、ユーザー出口/経路指定出口で処理することにより、そのトランザクションが実際に IMS 高速機能で処理すべきものかどうかを判別する必要があります。IMS 高速機能で処理すべきものである場

合、編集/経路指定出口ルーチンは、トランザクションに宛先コードを関連付けます。この宛先コードは、どの高速機能アプリケーション・プログラムがそのトランザクションを処理するかを示します。

PGM() で定義されたプログラムは、高速機能専用として定義されてはなりません。

この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションへのメッセージのキューイングが停止されます。メッセージをトランザクションのキューに入れようとするときリジェクトされます。また、この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションのスケジューリングも停止されます。コマンドが正常に完了するには、進行中の作業およびキューに入れられたメッセージ (非共用キュー) があってはなりません。

トランザクションを FP(E) から FP(N) に、または FP(N) から FP(E) に更新するためには、同じ FP() 属性を持つプログラムを指すようにトランザクションを更新することも必要です。プログラム属性を更新しないと、プログラム競合によりコマンドは失敗します。

高速機能専用 FP(E) トランザクションを高速機能利用可能 FP(P) または非高速機能 FP(N) トランザクションに更新し、限界カウントが指定されていない場合、限界カウントは 65535 に設定されます。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- CONV(Y) と FP(E) は相互に排他的です。
- EDITRTN と FP(E) は相互に排他的です。
- EMHBSZ>0 と FP(N) は相互に排他的です。
- FP(E) と FP(P) は、高速機能が定義されていることが必要です。
- MSGTYPE(MULTSEG) と FP(E) は相互に排他的です。
- MSGTYPE(MULTSEG) と FP(P) は相互に排他的です。
- MSNAME と FP(E) は相互に排他的です。
- RECOVER(N) と FP(E) は相互に排他的です。
- RECOVER(N) と FP(P) は相互に排他的です。
- RESP(N) と FP(E) は相互に排他的です。
- RESP(N) と FP(P) は相互に排他的です。
- SIDL と FP(E) は相互に排他的です。
- SIDR と FP(E) は相互に排他的です。

INQ

照会オプションを指定します。

N これは照会トランザクションではありません。

Y

これは照会トランザクションです。INQ(Y) を指定する場合、RECOVER() パラメーターを使用して、IMS の緊急時再始動または正常再始動の際にこのトランザクションをリカバリーする必要があるかどうかも指定できます。

この値は、入力された場合にデータベースを変更しないトランザクションに対してのみ指定する必要があります。プログラムは、INQ(Y)として定義されたトランザクションの処理がスケジュールされた場合、データベースに対して ISRT、DLET、または REPL 呼び出しを出すのを禁止されます。

IMS トランザクションが INQ(Y) で定義されている場合、アプリケーション・プログラムは SQL INSERT、DELETE、または UPDATE を実行できません。

この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションへのメッセージのキューイングが停止されます。メッセージをトランザクションのキューに入れようとするときリジェクトされます。また、この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションのスケジューリングも停止されます。コマンドが正常に完了するには、進行中の作業およびキューに入れられたメッセージ (非共用キュー) があってはなりません。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- RECOVER(N) と INQ(N) は相互に排他的です。

LCT

限界カウントを指定します。これは、キューに入れられて処理を待っている入力トランザクションの数と比較する際に、通常優先順位値または限界優先順位値がこのトランザクションに割り当てられるかどうかを決める数値です。値は 1 から 65535 までの数値です。デフォルトは、65535 です。

BMP によって処理されるトランザクションの場合、限界カウント値は無視されます。

共用キュー環境では、限界カウント値は無視されます。

限界カウント値は、FP 専用トランザクションには適用されず、無視されます。

LOCK

LOCK 状況をオンまたはオフに設定することを指定します。SET(LOCK(ON | OFF)) は、他の SET 属性と一緒に指定することはできません。

SET(LOCK(ON | OFF)) は、START キーワードまたは STOP キーワードと一緒に指定できます。

ON トランザクションをロックして、スケジュールされるのを阻止します。

LOCK(ON) は、高速機能専用トランザクションに対しては指定できませんが、高速機能利用可能トランザクションには指定できます。

LOCK(ON) は、CPI Communications ドリブン・プログラムのトランザクションに対しては指定できません。

オフ

トランザクションをアンロックして、スケジュールできるようにします。

LPRI

限界優先順位を指定します。これは、キューに入れられて処理を待っている入力トランザクションの数が、限界カウント値に等しいかより大きくなった場合に、このトランザクションが引き上げられるスケジューリング優先順位

です。スケジューリング優先順位は、スケジューリングするトランザクションの選択に使用される属性です。同じクラスで定義されている場合、優先順位の高いトランザクションが優先順位の低いものよりも先にスケジュールされます。値は 0 から 14 までの数字が可能です。

限界優先順位が使用され、スケジューリング優先順位が限界優先順位に引き上げられている場合、このトランザクション名のためにエンキューされているすべてのメッセージが処理されるまでは、優先順位は通常優先順位に引き下げられません。このトランザクションには限界優先順位を適用したくない場合は、通常優先順位と限界優先順位を等しい値に定義し、限界カウントを 65535 に設定します。

トランザクションがバッチ・メッセージ・プログラム (BMP) によって排他的に処理される場合、限界優先順位を 0 として定義します。PGM() で指定されたプログラムがバッチのプログラム・タイプで定義されている場合、現行優先順位は強制的に 0 にされます。ただし、バッチ・メッセージ処理領域 (BMP) は、0 以外の現行スケジューリング優先順位を持つトランザクションを処理できます。

この優先順位は、このトランザクションが作成してリモート・システムの宛先に送信するメッセージの優先順位も管理します。NPRI 定義のもとの MSC の優先順位に関する説明も参照してください。

BMP によって処理されるトランザクションの場合、限界優先順位値は無視されます。

共用キュー環境では、限界優先順位値は無視されます。

MAXRGN

提供されたトランザクションに対して同時にスケジュールできる領域の最大数に、新しい値を指定します。この場合のトランザクションは、並列スケジューリング (ロード・バランシング) に適格である必要があります。

MAXRGN パラメーターの値は、0 から MAXPST= 制御領域パラメーターに指定されている数値までの範囲内の値でなければなりません。

このキーワードは、トランザクションを処理するために同時にスケジュールできるメッセージ処理プログラム (MPP) 領域の数を制限します。MPP 領域の数が制限されていない場合、1 つのトランザクションがすべての使用可能な領域を独占する可能性があります。この値は、0 から MAXPST= 制御領域パラメーターで指定した値の間の数値です。MAXRGN(0) は、制限がないことを意味します。

アプリケーション・プログラムのスケジューリング・タイプを SERIAL として定義する場合は、MAXRGN キーワードを省略するか、値を 0 として定義してください。

以下のキーワードの組み合わせは、相互に排他的です。

- PARLIM(65535) と 0 より大きい MAXRGN 値
- SERIAL(Y) と 0 より大きい MAXRGN 値

MSGTYPE

メッセージ・タイプ (単一セグメントまたは複数セグメント) を指定します。これは、着信メッセージが完了と見なされ、後続の処理のためにアプリケーション・プログラムに経路指定できるようになる時点を指定します。

複数 IMS システム構成で MSC 直接経路指定が使用される場合、IMS は、メッセージとそのメッセージを処理する宛先トランザクションの両方が、ともに単一セグメントまたは複数セグメントのどちらかであることを確認しません。

MULTSEG

着信メッセージは、複数のセグメントの長さにできます。これは、メッセージ終結標識を受け取るまで、つまり MFS によって完全なメッセージが作成されるまでは、アプリケーション・プログラムへのスケジューリングに適格ではありません。

SNGLSEG

着信メッセージは、1 セグメントの長さです。これは、端末オペレーターがセグメント終結を示した時点で、スケジューリングに適格になります。

この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションへのメッセージのキューイングが停止されます。メッセージをトランザクションのキューに入れようとするときリジェクトされます。また、この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションのスケジューリングも停止されます。コマンドが正常に完了するには、進行中の作業およびキューに入れられたメッセージ (非共用キュー) があってはなりません。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- FP(E) と MSGTYPE(MULTSEG) は相互に排他的です。
- FP(P) と MSGTYPE(MULTSEG) は相互に排他的です。

MSNAME

複数 IMS システム構成 (MSC) 内の論理リンク・パスの名前 (1 から 8 文字) を指定します。論理リンク・パスは、任意の 2 つの IMS システム間のパスです。IMS システムは、論理リンク・パスに関連付けられたリモート・システム ID とローカル・システム ID によって識別されます。リモート・システム ID は、このパスを使用しているメッセージが処理されるシステムを識別します。ローカル・システム ID は、このシステムを識別します。トランザクションをリモート・トランザクションに変更する、あるいは MSC パスを変更する、UPDATE TRAN コマンドでは、新規の MSNAME は既に定義済みでなければなりません。

この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションへのメッセージのキューイングが停止されます。メッセージをトランザクションのキューに入れようとするときリジェクトされます。また、この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションのスケジューリングも停止されます。コマンドが正常に完了するには、進行中の作業およびキューに入れられたメッセージ (非共用キュー) があってはなりません。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- FP(E) と MSNAME は相互に排他的です。
- SIDL と MSNAME は相互に排他的です。
- SIDR と MSNAME は相互に排他的です。

NPRI

通常のスケジューリング優先順位を指定します。スケジューリング優先順位は、スケジューリングするトランザクションの選択に使用される属性です。同じクラスで定義されている場合、優先順位の高いトランザクションが優先順位の低いものよりも先にスケジュールされます。通常優先順位は、エンキューされて処理を待っている入力トランザクションの数が限界カウンタの値を下回る場合に、スケジューリング優先順位としてトランザクションに割り当てられます。値は 0 から 14 までの数字が可能です。デフォルトは、1 です。

この優先順位は、このトランザクションが作成してリモート・システムの宛先に送信するメッセージの優先順位も管理します。

トランザクションがバッチ・メッセージ・プログラム (BMP) によって排他的に処理される場合は、通常優先順位を 0 としてコーディングします。

トランザクションがバッチ・メッセージ・プログラム (BMP) によって排他的に処理される場合は、限界優先順位を 0 として定義します。PGM() で指定されたアプリケーション・プログラムがバッチのプログラム・タイプで定義されている場合、現行優先順位は強制的に 0 にされます。ただし、バッチ・メッセージ処理領域 (BMP) は、0 以外の現行スケジューリング優先順位を持つトランザクションを処理できます。

リモート・トランザクションの場合、トランザクションを処理システムに送信するために優先順位が使用されます。これは MSC リンク・メッセージ優先順位 と呼ばれます。MSC リンク・メッセージ優先順位グループには、以下の 3 つがあります。

- 低
- 中
- 高

低優先順位グループは、入力端末システム内の基本要件で構成されます。このグループには、リモート・トランザクション優先順位 0 から 6 が割り当てられます。中優先順位グループは、2 次要求、応答、中間システム内の基本要件、および入力端末システム内の基本要件で構成されます。このグループには、リモート・トランザクション優先順位 7 が割り当てられます。高優先順位グループは、入力端末システム内の基本要件で構成されます。このグループのメッセージには、リモート・トランザクション優先順位 8 から 14 が割り当てられます。各グループ内でのメッセージの優先順位は、基本要件の場合は、入力端末システム内のトランザクションまたはリモート・トランザクションの現行の優先順位値に基づき、2 次要求および応答の場合は、最終処理システムに基づきます。

MSC 構成内では、トランザクションの優先順位が、MSC リンク経由でこのトランザクションによって挿入されたメッセージを送信するために使用される優先順位を決定します。トランザクションが同じ宛先に複数のメッセージを挿入し (例えば、プリンターへのページ)、これらのメッセージを挿入された順序で送信する必要がある場合は、通常優先順位値と限界優先順位値を同じにする必要があります。通常優先順位値と限界優先順位値が同一でない場合、前に挿入されたメッセージより高い優先順位で挿入されたメッセージが、最初に宛先に到着する可能性があります。(この制約事項は、同じメッセージの複数のセグメントには適用されません。)

BMP によって処理されるトランザクションの場合、通常優先順位値は無視されます。

PARLIM

並列処理限界カウントを指定します。これは、このトランザクションに関して現在スケジュールされているそれぞれのアクティブ・メッセージ領域によって、現在キューに入れることができるがまだ処理されていないメッセージの最大数です。これは、関連のアプリケーションのスケジューリング・タイプが並列として定義されている場合に使用されるしきい値です。現行のトランザクション・エンキュー・カウントが、このトランザクションに現在スケジュールされている領域数を PARLIM 値に掛けた値を超えるたびに、追加の領域がスケジュールされます。

値は 0 から 32767 までの数値、または 65535 です。PARLIM(0) は、入力メッセージごとに新しい領域がスケジュールされることを示します。このスケジューリング条件 (メッセージ数が 0 より大きい) は、常に満たされるからです。PARLIM(0) を指定する場合は、MAXRGN 値を指定して、特定のトランザクションを処理するためにスケジュールできる領域の数を制限する必要があります。PARLIM(65535) は、並列処理は使用不可であることを意味し、IMS は一度に 1 つの領域にのみトランザクションをスケジュールすることを許可します。

PARLIM に指定される値は、メッセージ処理プログラム (MPP) にのみ適用されます。バッチ・メッセージ処理プログラム (BMP) ではサポートされません。

アプリケーションを SERIAL として定義するか、スケジューリング・タイプを SERIAL として定義する場合は、PARLIM(65535) を定義してください。

共用キュー環境では (スケジューリング・タイプが PARALLEL の場合)、65535 以外の PARLIM 値を指定すると、正常に実行された連続 GU カウントが、このトランザクションに現在スケジュールされている領域数を PARLIM 値に掛けた値を超えるたびに、新しい領域がスケジュールされます。共用キュー環境では、キュー・カウントの代わりに、正常に実行された連続 GU カウントが使用されます。MAXRGN で指定された最大領域数まで、新しい領域が継続してスケジュールされます。

注: 共用キュー環境では、PARLIM 値の振る舞いは、非共用キュー環境とは異なります。非共用キュー環境では、トランザクションのキュー項目数 (現在キューに入れられているメッセージの数) が PARLIM 値と比較される値として使用され、別の領域をスケジュールする時期が判別されます。IMS は、キューが増加するにつれてスケジュールに入れる領域の数を増やすことにより、入力トランザクションのキューの増加に対応します。

共用キュー環境では、キューは共通キュー・サーバー (CQS) によって管理される共用キュー・カップリング・ファシリティ構造内にあるため、個々の IMS はキューの項目数を認識しません。トランザクション・キューは、多数のさまざまな IMS システムによって追加される可能性があります。IMS は、キューに最初のメッセージが入れられたとき (つまり、キューが空でなくなったとき) にのみ通知を受けます。IMS は、最初のメッセージの後

に、後続のメッセージがキューに置かれるたびに通知を受けるわけではありません。共用キュー環境では、PARLIM の比較は、キュー項目数ではなく、各 IMS が保持している、その IMS によるトランザクションの成功した連続 GU 呼び出し数のカウンターに突き合わせて行われます。IMS は、CQS から絶えずメッセージを受け取る時は、CQS の要求に応じて追加の領域をスケジュールに入れます。このように、共用キュー環境では、IMS は処理アクティビティーに基づいてメッセージのキュー項目数を推定しますが、実際のキュー項目数は認識しません。

共用キュー環境における PARLIM 値 0 は、最も即応性のある設定です。PARLIM(0) では、トランザクション・キューからすべてのメッセージが処理されるまで、または最大領域値 (MAXRGN) の限度に達するまで、メッセージ領域が確実にスケジュールされます。しかし、PARLIM(0) では、多数の不要なスケジュール (つまり、偽のスケジュール) が行われる可能性があります。偽のスケジュールが発生するのは、メッセージ領域がスケジュールされたが、キューにはそれ以上のメッセージがないことが分かった場合です。これは特に、PARLIM(0) の場合に起こります。その理由は、get unique (GU) が正常に実行されるたびに、IMS は追加の領域をスケジュールに入れて、ほかのメッセージがあるかどうか確認するためにキューの読み取りを試みる必要があるからです。キューが空になるまで、GU が正常に実行されるたびにこの処理が継続され、空になった時点で後続の GU カウントが 0 にリセットされます。この原因は、トランザクション・キューに入れられたメッセージの数を IMS が認識していないことです。

PARLIM をゼロより大きい値に設定すると、偽のスケジュールの数を減らすことができます。この場合、IMS はキューが空になることなく連続していくつかのメッセージを受け取った後でのみ、新しいメッセージ領域をスケジュールに入れるからです。PARLIM を 2 以上の値に設定すると、低ボリュームで比較的迅速に実行されるトランザクション (したがって、キュー項目数は通常 1) の偽のスケジュールを削減するのに役立ちます。これは、最初の領域が少なくとも 2 つのメッセージを連続して受け取るまで、2 番目の領域をスケジュールしないからです。ただし、0 より大きい PARLIM 値は、不要なスケジュールを減らすことができる一方で、即応性に劣ることに注意してください。トランザクションが長時間実行されたり、その処理が遅れたりした場合 (例えば、ロック競合により)、そのトランザクションが実行されている間、連続 GU カウントは変更されず、追加のメッセージ領域はスケジュールされません。その結果、現在スケジュールされているメッセージが完了するまで、この同じトランザクションの他のメッセージの処理が遅れることがあります。この遅延は、トランザクションの処理のためにメッセージ領域が利用可能である場合でも起きる可能性があります。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- MAXRGN>0 と PARLIM(65535) は相互に排他的です。
- SERIAL(Y) と、0 から 32767 までの PARLIM は、相互に排他的です。

PGM

トランザクションに関連付けられたアプリケーション・プログラムの名前を指定します。トランザクションが REMOTE(Y) として定義されていない限り、プログラムは存在していなければなりません。

この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションへのメッセージのキューイングが停止されます。メッセージをトランザクションのキューに入れようとするときリジェクトされます。また、この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションのスケジューリングも停止されます。コマンドが正常に完了するには、進行中の作業およびキューに入れられたメッセージ (非共用キュー) があってはなりません。

PLCT

処理限界カウントを指定します。これは、アプリケーション・プログラムを再ロードせずに、IMS が処理のためにアプリケーション・プログラムに送信するメッセージの最大数です。値は 0 から 65535 までの数値でなければなりません。PLCT(0) は、アプリケーションに送信されるメッセージの最大数は 1 であり、アプリケーション・プログラムは後続のメッセージを受信する前に再ロードされることを意味します。PLCT(65535) は、単一のプログラム・ロードで処理されるメッセージの数に制限はないことを意味します。1 から 65535 までの値は、迅速にスケジュールを変更して処理するのに適しています。

この値は、1 つのアプリケーション・プログラムが単一のスケジューリング・サイクルで処理できるメッセージの数を決めるために使用されます。アプリケーション・プログラムが、示された数のメッセージを要求し、受信した場合、後続の要求は、次の 2 つのアクションのどちらかの結果になります。

1. IMS は、以下のいずれかの条件を満たしている場合、「これ以上メッセージがない」ことを示します。
 - 領域が MPP でない。
 - 現在スケジュールされているモードが CMTMODE(SNGL) でない。
 - その領域に対して、等しいかより高い優先順位のトランザクションがエンキューされている。

IMS は、実際には、そのアプリケーション・プログラム用にエンキューされた他のメッセージを持っている可能性があります。アプリケーション・プログラムは、それ以上メッセージがないことを示す標識を受け取った場合は、終了する責任があります。アプリケーション・プログラムの終了により、それが占有していた領域をスケジュール変更のために利用できるようになります。この機能により、IMS は、前のトランザクションの処理中にシステムに入力された、より高い優先順位のトランザクションのスケジューリングが可能になります。さらに、等しい優先順位のトランザクションがエンキューされている場合、それらを先入れ先出し (FIFO) ベースでスケジューリングできるようになります。

2. 領域は迅速にスケジュールを変更し、以下のすべての条件が満たされているアプリケーションに次のメッセージを戻します。
 - 領域が MPP である。
 - トランザクションが CMTMODE(SNGL) である。
 - 等しいかより高い優先順位のトランザクションがエンキューされていない。
 - そのアプリケーション用のメッセージがまだエンキューされている。

PLCTTIME

処理限界カウント時間を指定します。これは、単一のトランザクション (または、メッセージ) を処理するために許容される時間の長さ (100 分の 1 秒単位) です。この数値は、メッセージ処理領域で各メッセージの処理に許容される最大 CPU 時間を指定します。

バッチ・メッセージ・プログラム (BMP) は、この設定の影響を受けません。

値は 1 から 6553500 の範囲の数値 (100 分の 1 秒単位) です。6553500 の値は、アプリケーション・プログラムには制限時間がないことを意味します。

高速機能が使用されている場合、このキーワードは、特定のトランザクション名について、プログラムが単一のトランザクション・メッセージを処理するために許容される時間の長さ (100 分の 1 秒単位) を指定します。時間は、トランザクション処理中に経過する実時間 (累算タスク時間ではなく) を表します。実時間が使用されるのは、入力端末が応答モードにあり、応答が送信されるまでは別のトランザクションを入力できないためです。この場合、PLCT() は無視されます。

この値は、アプリケーション・プログラムのループを制御します。プログラムとトランザクション間の実行時間の値を最適化する必要はありません。ただし、割り当てられた時間値が、予想されるトランザクション当たりの実行時間を下回ってはなりません。スケジュールされたアプリケーション・プログラムが PLCTTIME() と PLCT() の積を超えた場合、アプリケーション・プログラムは異常終了します。 DFSMPR プロシージャで IMS STIMER 値が 2 に指定されている場合、領域は DL/I 呼び出しが完了するまで異常終了しません。

重要: アプリケーション・プログラムでは、STIMER タイマー・サービスを使用してはなりません。IMS は、トランザクションの実行時間を計測するために STIMER タイマー・サービスを使用します。アプリケーション・プログラムが MVS STIMER マクロを発行すると、IMS によって設定された STIMER タイマー・サービスが取り消されます。アプリケーション・プログラムのタイマー要求には、代わりに STIMERM マクロを使用してください。

RECOVER

リカバリー・オプションを指定します。

N トランザクションはリカバリーされません。

Y IMS 緊急時再始動または正常再始動の際に、トランザクションはリカバリーされます。

この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションへのメッセージのキューイングが停止されます。メッセージをトランザクションのキューに入れようとするときリジェクトされます。また、この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションのスケジューリングも停止されます。コマンドが正常に完了するには、進行中の作業およびキューに入れられたメッセージ (非共用キュー) があってはなりません。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- CONV(Y) と RECOVER(N) は相互に排他的です。
- FP(E) と RECOVER(N) は相互に排他的です。
- FP(P) と RECOVER(N) は相互に排他的です。
- INQ(N) と RECOVER(N) は相互に排他的です。

REMOTE

リモート・オプションを指定します。

- N** トランザクションはリモートではありません。トランザクションはローカルであり、ローカル・システムで実行されます。
- Y** トランザクションはリモートです。トランザクションはリモート・システムで実行されます。

この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションへのメッセージのキューイングが停止されます。メッセージをトランザクションのキューに入れようとするときリジェクトされます。また、この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションのスケジューリングも停止されます。コマンドが正常に完了するには、進行中の作業およびキューに入れられたメッセージ (非共用キュー) があってはなりません。

ローカル・トランザクションでは、SIDR 値が SIDL 値に等しく設定されている必要があります。トランザクションをリモートからローカルに更新する場合、REMOTE(N) と共に、SIDR キーワードと SIDL キーワードを指定して、リモート SYSID をローカル SYSID に等しく設定する必要があります。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- REMOTE(Y) は、MSNAME もしくは SIDR と SIDL を必要とします。

RESP

応答モード・オプションを指定します。

- N** トランザクションは応答モードではありません。デフォルトの OPTIONS=TRANRESP を指定しているか、デフォルトを受け入れる端末の場合、このトランザクションが入力された後、入力が停止してはなりません。
- Y** トランザクションは応答モードです。トランザクションの入力元の端末は保留にされ、応答を受信するまで、それ以上の入力を阻止します。デフォルトの OPTIONS=TRANRESP を指定しているか、デフォルトを受け入れる端末の場合、このトランザクションが入力された後、このトランザクションが応答メッセージを端末に戻すまでは、追加メッセージは許可されません。応答モードは、個々の端末の定義によって、強制または無効にすることができます。応答モードで稼働しないすべての端末では、オンライン処理時に RESP(Y) は無視されます。

この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションへのメッセージのキューイングが停止されます。メッセージをトランザクションのキューに入れようとするときリジェクトされます。また、この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションのスケジューリングも停止されます。コ

マンドが正常に完了するには、進行中の作業およびキューに入れられたメッセージ (非共用キュー) があってはなりません。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- FP(E) と RESP(N) は相互に排他的です。
- FP(P) と RESP(N) は相互に排他的です。

SEGNU

セグメント数を指定します。これは、アプリケーション・プログラムからの Get Unique (GU) 呼び出し当たりの、メッセージ・キューに入れることができるアプリケーション・プログラム出力セグメントの最大数です。値は 0 から 65535 までの数字が可能です。SEGNU(0) が定義されている場合、実行時にオンライン・システムによってセグメント数は検査されません。

SEGNU は、CPI Communications ドリブン・トランザクションには指定できません。

SEGSZ

セグメント・サイズを指定します。これは、1 つの出力セグメントに許されるバイトの最大数です。値は 0 から 65535 までの数字が可能です。SEGSZ(0) が定義されている場合、実行時にオンライン・システムによってセグメント・サイズは検査されません。

LU 6.2 装置への最大出力メッセージ・セグメントは 32767 です。トランザクションが LU 6.2 装置に出力を送信することが予想される場合は、SEGSIZE パラメーターを 32767 より大きくしてはなりません。ただし、これはコマンドの処理中は実行されません。IMS は、出力時点までメッセージの宛先の装置タイプを判別できないからです。

SEGSZ は、CPI Communications ドリブン・トランザクションには指定できません。

SERIAL

シリアル・オプションを指定します。

- N** トランザクションのメッセージは、逐次処理されません。メッセージは並列で処理できます。U3303 疑似アベンドの後、メッセージは中断キューに入れられます。障害が繰り返し発生してトランザクションが USTOP で停止されるまで、スケジューリングが続行されます。
- Y** トランザクションのメッセージは、逐次処理されます。U3303 疑似アベンドでは、メッセージは中断キューに入れられるのではなく、トランザクション・メッセージ・キューの前に置かれ、トランザクションは USTOP で停止します。/START または UPD TRAN コマンドでトランザクションまたはクラスが開始されると、トランザクションの USTOP は除去されます。

この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションへのメッセージのキューイングが停止されます。メッセージをトランザクションのキューに入れようとするときリジェクトされます。また、この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションのスケジューリングも停止されます。コマンドが正常に完了するには、進行中の作業およびキューに入れられたメッセージ (非共用キュー) があってはなりません。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- MAXRGN>0 と SERIAL(Y) は相互に排他的です。
- PARLIM 値 0 から 32767 と SERIAL(Y) は、相互に排他的です。

SIDL

複数 IMS システム (MSC) 構成内のローカル・システムのシステム ID (SYSID) を指定します。ローカル・システムは、応答の返送先の発信元システムです。値は 1 から 2036 までの数値 (MSC が使用可能な場合) または 0 (MSC が使用不可の場合) です。ローカル SYSID は、任意のまたはすべての MSNAME またはトランザクションに定義できます。

SIDL パラメーターは、MSPLINK マクロ・ステートメントの TYPE= キーワードで指定されたリンク・タイプ (CTC、MTM、TCP/IP、VTAM) から独立しています。

この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションへのメッセージのキューイングが停止されます。メッセージをトランザクションのキューに入れようとするときリジェクトされます。また、この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションのスケジューリングも停止されます。コマンドが正常に完了するには、進行中の作業およびキューに入れられたメッセージ (非共用キュー) があってはなりません。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- SIDL と SIDR が対で指定され、かつ、この IMS のローカル・システム ID に等しい値でない限り、FP(E) と SIDL は相互に排他的です。
- MSNAME と SIDL は相互に排他的です。
- SIDL 値は、この IMS に対して定義されている必要があります。

SIDR

複数 IMS システム (MSC) 構成内のリモート・システムのシステム ID (SYSID) を指定します。リモート・システムは、アプリケーション・プログラムを実行するシステムです。値は 1 から 2036 までの数値 (MSC が使用可能な場合) または 0 (MSC が使用不可の場合) です。指定されたりリモート SYSID は、MSNAME に対しても定義されている必要があります。

SIDR パラメーターは、MSPLINK マクロ・ステートメントの TYPE= キーワードで指定されたリンク・タイプ (CTC、MTM、TCP/IP、VTAM) から独立しています。

ローカル・トランザクションでは、SIDR 値が SIDL 値に等しく設定されている必要があります。トランザクションをリモートからローカルに更新する場合、リモート SYSID をローカル SYSID に設定する必要があります。

この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションへのメッセージのキューイングが停止されます。メッセージをトランザクションのキューに入れようとするときリジェクトされます。また、この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションのスケジューリングも停止されます。コマンドが正常に完了するには、進行中の作業およびキューに入れられたメッセージ (非共用キュー) があってはなりません。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- SIDL と SIDR が対で指定され、かつ、この IMS のローカル・システム ID に等しい値でない限り、FP(E) と SIDR は相互に排他的です。
- MSNAME と SIDR は相互に排他的です。
- SIDR 値は、この IMS に対して定義されている必要があります。

SPASZ

会話型トランザクションのスクラッチパッド域 (SPA) のサイズ (バイト単位) を指定します。値は 16 から 32767 までの数値です。

この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションへのメッセージのキューイングが停止されます。メッセージをトランザクションのキューに入れようとするときリジェクトされます。また、この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションのスケジューリングも停止されます。コマンドが正常に完了するには、進行中の作業およびキューに入れられたメッセージ (非共用キュー) があってはなりません。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- CONV(N) と SPASZ は相互に排他的です。
- FP(E) と SPASZ は相互に排他的です。

SPATRUNC

会話型トランザクションのスクラッチパッド域 (SPA) の切り捨てオプションを指定します。これは、より小さい SPA で定義されたトランザクションへのプログラム間通信の後、SPA データを切り捨てるか、保存するかどうかを定義します。

会話の最初の開始時、およびプログラム間通信時に、SPATRUNC オプションが検査され、指定に応じて設定またはリセットされます。オプションが設定されると、それは会話の存続期間の間、またはそのオプションをリセットする必要があることを指定したトランザクションへのプログラム間通信が発生するまで、設定されたままです。

プログラム間通信が発生した場合、新しいトランザクションの切り捨てデータ・オプションが最初に検査され、その仕様が会話に対して設定されて、出力メッセージに挿入される SPA に使用されます。新しいトランザクションでこのオプションが指定されていない場合、会話に対して現在有効なオプションが使用されます。

S より小さい SPA で定義されたトランザクションへのプログラム間通信が行われる場合でも、IMS は SPA 内のデータをすべて保存します。より小さい SPA を持つトランザクションには、切り捨てられたデータは見えませんが、より大きい SPA を持つトランザクションに切り替えられたときに、切り捨てられたデータは使用されます。

R 切り捨てられたデータは保存されません。

この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションへのメッセージのキューイングが停止されます。メッセージをトランザクションのキューに入れようとするときリジェクトされます。また、この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションのスケジューリングも停止されます。コマンドが正常に完了するには、進行中の作業およびキューに入れられたメッセージ (非共用キュー) があってはなりません。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- CONV(N) と SPATRUNC は相互に排他的です。
- FP(E) と SPATRUNC は相互に排他的です。

TRANSTAT

メッセージ・ドリブン・プログラムのトランザクション・レベル統計をログに記録するかどうかを指定します。Y が指定されている場合、トランザクション・レベル統計は X'56FA' ログ・レコード内のログに書き込まれます。

N トランザクション・レベル統計をログに記録しません。

Y トランザクション・レベル統計をログに記録します。

UPDATE TRAN コマンドで TRANSTAT キーワードを使用することにより、ユーザーは、システム・デフォルトまたは TRANSTAT パラメーターの現行値をオーバーライドすることができます。UPDATE TRAN コマンドで TRANSTAT キーワードを省略した場合は、現行のトランザクション・レベル統計の設定は変更されません。

WFI

入力待ちオプションを指定します。この属性は、常に入力待ちトランザクションとして動作する、高速機能トランザクションには適用されません。

N これは、入力待ちトランザクションではありません。

Y これは、入力待ちトランザクションです。WFI トランザクションを処理するメッセージ処理またはバッチ処理アプリケーション・プログラムは、通常どおりにスケジュールされ、呼び出されます。処理するトランザクションが WFI として定義されている場合、プログラムは、使用可能な入力メッセージを処理した後も主ストレージに残ることが許可されます。以下の場合、QC 状況コード (これ以上メッセージがない) が戻されます。すなわち、PROCLIM カウント (PLCT) に達した場合、スケジュールされたトランザクション、データベース、プログラム、またはクラスの状況を変更するためにコマンドが入力された場合、トランザクションで使用されるデータベースに関するコマンドが入力された場合、あるいは IMS がチェックポイント・シャットダウンで終了した場合です。

この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションへのメッセージのキューイングが停止されます。メッセージをトランザクションのキューに入れようとするトリジェクトされます。また、この属性を更新すると、コマンドの進行中はトランザクションのスケジューリングも停止されます。コマンドが正常に完了するには、進行中の作業およびキューに入れられたメッセージ (非共用キュー) があってはなりません。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- MODE(MULT) と WFI(Y) は相互に排他的です。

START ()

開始される属性を指定します。

Q トランザクションのキューイングを開始するために、ローカルおよびグローバル状況を更新します。この変更は、ネットワークまたは端末から、または

QUEUE TRAN コマンドを使用して、DB/DC 環境または DCCTL 環境に入力されたトランザクションにのみ適用されます。

SCHD

トランザクションのスケジューリングを開始するために、ローカルおよびグローバル状況を更新します。この変更は、DB/DC 環境または DCCTL 環境でスケジュールされるトランザクションに適用されます。

共用キュー環境では、UPD TRAN START(SCHD) コマンドの結果、IMS はそのトランザクションに対するインタレストを登録することになります。これは、そのトランザクションはその IMS でスケジュールできることを示します。UPDATE TRAN NAME(*) START(SCHD) コマンドは、既に CQS に登録されているトランザクションは登録しません。

SUSPEND

トランザクションに中断キュー上のメッセージが含まれている場合、その中断キューは作動可能キューに自動的に転送されます。

TRACE

特定のトランザクションについてデータ通信 (DC) の DL/I 部分を取り込む、トランザクション・トレースを開始します。情報は、6701 ログ・レコードとして IMS ログに書き込まれます。

STOP()

停止される属性を指定します。

Q トランザクションのキューイングを停止するために、ローカルおよびグローバル状況を更新します。この変更は、ネットワークまたは端末から、または QUEUE TRAN コマンドを使用して、DB/DC 環境または DCCTL 環境に入力されたトランザクションにのみ適用されます。

SCHD

トランザクションのスケジューリングを停止するために、ローカルおよびグローバル状況を更新します。この変更は、DB/DC 環境または DCCTL 環境でスケジュールされるトランザクションに適用されます。

UPDATE TRAN STOP(SCHD) コマンドは、トランザクションのスケジューリングを停止しますが、トランザクションの処理は、限界カウントに達するまで続行されます。限界カウントが大きい場合は、処理インターバルが長くなります。

共用キュー環境では、UPD TRAN STOP(SCHD) コマンドを発行すると、結果として、IMS はそのトランザクションに対するインタレストを登録抹消することになります。これは、そのトランザクションをその IMS でスケジュールに入れることができないことを示します。

TRACE

トランザクション・トレースを停止します。

使用上の注意

リソースは、DELETE コマンドを使用して削除されない限り、IMS の存続期間中存在しています。リソースは、IMS ウォーム・スタートまたは緊急時再始動を越え

て、リカバリー可能です。IMS がコールド・スタートする場合、IMS が稼働中にエクスポートされた定義をコールド・スタートがインポートしない限り、リソースは失われます。

START(TRACE) と STOP(TRACE) を除き、UPDATE TRAN コマンドは IMS のウォーム・スタートまたは緊急時再始動を越えて、リカバリー可能です。IMS がコールド・スタートした場合、トランザクション定義が RDDS にエクスポートされ、コールド・スタート時に RDDS からインポートされない限り、トランザクションの定義属性に対する更新は失われます。

UPDATE TRAN コマンドは、OM API を介してのみ出すことができます。このコマンドは DB/DC および DCCTL システムに適用されます。

このコマンドは、XRF 代替または FDBR 領域では無効です。

以下の値が変更される場合、UPDATE TRAN コマンドは MODBLKS トランザクションを「動的」に変更します。

AOCMD、CMTMODE、CONV、DCLWA、DIRROUTE、EDITRTN、EDITUC、EMHBSZ、FP、INQ、MSGTYPE、MSNAME、PLCTTIME、PGM、RECOVER、REMOTE、RESP、SERIAL、SPASZ、SPATRUNC、TRANSTAT、または WFI 値。

オンライン変更処理 (すべてのトランザクションが更新されるか、どのトランザクションも更新されないかのいずれか) とは異なり、各トランザクションが個別に更新されます。トランザクションの一部のランタイム・リソース定義値は、そのトランザクションが使用中でない場合のみ更新できます。

トランザクションの状況 (LOCK、START、STOP) は、トランザクションが使用中の間に更新できます。

MODBLKS のオンライン変更が使用可能な場合、次のトランザクション属性は更新できません。

AOCMD、CMTMODE、CONV、DCLWA、DEFAULT、DIRROUTE、EDITRTN、EDITUC、EMHBSZ、FP、INQ、MSGTYPE、MSNAME、PGM、PLCTTIME、RECOVER、REMOTE、RESP、SERIAL、SIDL、SIDR、SPASZ、SPATRUNC、WFI。

UPDATE コマンドで指定されたすべての属性が既にそのリソースに定義されている場合、更新は実際には行われず、リソースは静止されず、ログ・レコードは作成されず、ゼロの完了コードが戻されます。これにより、アクションを行う必要がないときに、不要なオーバーヘッドを回避できます。

共用メッセージ・キュー環境では、トランザクションの共用メッセージ・キュー上にメッセージがあっても、UPDATE TRAN コマンドはトランザクションを更新します。この IMS 上で更新しているトランザクションとは異なる会話、高速機能、応答モード、またはシリアル・トランザクション属性を使用してメッセージが共用メッセージ・キューに入れられた場合、この IMS は共用メッセージ・キュー上のメッセージにアクセスできません。

UPDATE TRAN NAME(traname) SET(REMOTE(N),SIDR(localsysid),SIDL(localsysid)) コマンドは、リモート・システム ID をローカル・システム ID と同

じ値に設定します。これは、コマンド /MSASSIGN TRAN tranname TO LOCAL と同等です。SIDR/SIDL または MSNAME が指定されない UPDATE TRAN NAME(tranname) SET(REMOTE(N)) コマンドは、ローカルおよびリモート・システム ID を変更せず、したがって /MSASSIGN TRAN tranname TO LOCAL コマンドと同等ではありません。

同等の IMS タイプ 1 コマンド

以下の表は、各種の UPDATE TRAN コマンドと、類似の機能を実行するタイプ 1 IMS コマンドを示しています。

表 538. UPDATE TRAN コマンドと同等のタイプ 1 コマンド

UPDATE コマンド	類似の IMS タイプ 1 コマンド
UPDATE TRAN(name) START(Q) STOP(SCHD)	/PSTOP TRAN <i>name</i>
UPDATE TRAN NAME(name) START(SCHD) STOP(Q)	/PURGE TRAN <i>name</i>
UPDATE TRAN NAME(name) START(Q,SCHD,SUSPEND)	/START TRAN <i>name</i>
UPDATE TRAN NAME(name) STOP(Q,SCHD)	/STOP TRAN <i>name</i>
UPDATE TRAN NAME(name) START(TRACE)	/TRACE SET ON TRAN <i>name</i>
UPDATE TRAN NAME(name) STOP(TRACE)	/TRACE SET OFF TRAN <i>name</i>
UPDATE TRAN NAME(name) SET(CLASS(<i>new_class_number</i>))	/ASSIGN TRAN <i>name</i> TO CLS <i>new_class_number</i>
UPDATE TRAN NAME(name) SET(CPRI(<i>new_current_priority</i>))	/ASSIGN CPRI <i>new_current_priority</i> TO TRAN <i>name</i>
UPDATE TRAN NAME(name) SET(LCT(<i>new_limit_count</i>))	/ASSIGN LCT <i>new_lmct_number</i> TO TRAN <i>name</i>
UPDATE TRAN NAME(name) SET(LPRI(<i>new_limit_priority</i>))	/ASSIGN LPRI <i>new_lpri_number</i> TO TRAN <i>name</i>
UPDATE TRAN NAME(name) SET(NPRI(<i>new_normal_priority</i>))	/ASSIGN NPRI <i>new_npri_number</i> TO TRAN <i>name</i>
UPDATE TRAN NAME(name) SET(PARLIM(<i>new_parallel_limit</i>))	/ASSIGN PARLIM <i>new_parmlim_number</i> TO TRAN <i>name</i>
UPDATE TRAN NAME(name) SET(PLCT(<i>new_processing_limit</i>))	/ASSIGN PLCT <i>new_plmct_number</i> TO TRAN <i>name</i>
UPDATE TRAN NAME(name) SET(SEGNO(<i>new_segment_number</i>))	/ASSIGN SEGNO <i>new_segno_number</i> TO TRAN <i>name</i>
UPDATE TRAN NAME(name) SET(SEGSZ(<i>new_segment_size</i>))	/ASSIGN SEGSZ <i>new_segsize_number</i> TO TRAN <i>name</i>
UPDATE TRAN NAME(name) SET(MAXRG(<i>new_max_regions</i>))	/CHANGE TRAN <i>name</i> MAXRGN <i>new_maxrgn_number</i>

出力フィールド

以下の表には、UPDATE TRAN 出力フィールドが記載されています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味

出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 539. UPDATE TRAN コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	キーワード	意味
CC	N/A	完了コード。
CCTXT	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
CONVID	TRAN	完了コード 'C'1A' で更新が失敗する原因になった、トランザクションに関連する会話の会話 ID。更新を再試行する前に、この情報を使用して会話を終了できます。
ERRT	<i>error</i>	診断情報を含むエラー・テキスト。エラー・テキストはゼロ以外の完了コードに戻すことができ、完了コードをさらに説明する情報を含んでいます。
GBL	SCOPE(ALL)	応答行がグローバル更新に関するものであることを示します。
LU	TRAN	完了コード 'C'1A' で更新が失敗する原因になったトランザクション会話に関連する APPC LU 名。更新を再試行する前に、この情報を使用して会話を終了できます。
MBR	N/A	出力行を作成した IMSplex メンバー。トランザクション情報が表示された IMS の IMS ID。IMS ID は常に戻されます。
NODE	TRAN	完了コード 'C'1A' で更新が失敗する原因になったトランザクション会話に関連する静的ノードの名前。更新を再試行する前に、この情報を使用して会話を終了できます。
TMEM	TRAN	完了コード 'C'1A' で更新が失敗する原因になったトランザクション会話に関連する OTMA tmember 名。更新を再試行する前に、この情報を使用して会話を終了できます。
TPIP	TRAN	完了コード 'C'1A' で更新が失敗する原因になったトランザクション会話に関連する OTMA T パイプ名。更新を再試行する前に、この情報を使用して会話を終了できます。

表 539. UPDATE TRAN コマンド出力フィールド (続き)

ショート・ラベル	キーワード	意味
TRAN	N/A	トランザクション名。トランザクション名は常に表示されます。
USER	TRAN	完了コード 'C'1A' で更新が失敗する原因になったトランザクション会話に関連する動的ユーザーのユーザー名。更新を再試行する前に、この情報を使用して会話を終了できます。

戻りコード、理由コード、および完了コード

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 540. UPDATE TRAN コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。NAME(*) が OPTION(ALLRSP) なしで指定される場合、出力行は戻されません。詳しくは、1461 ページの表 541 を参照してください。
X'00000004'	X'00002008'	キーワードの数が無効です。SET、START、または STOP キーワードのいずれかが必要です。
X'00000008'	X'0000200C'	更新されるべきリソースは検出されませんでした。指定されたリソース名が無効であるか、指定されたフィルターに一致するリソースがありませんでした。有効なリソースを指定して UPDATE TRAN コマンドを出したことを確認してください。
X'00000008'	X'00002040'	UPDATE TRAN コマンドで、複数のフィルター値が指定されています。SET フィルターまたは START STOP フィルターのいずれか 1 つのみがコマンド上に指定されていることを確認してください。
X'00000008'	X'00002044'	START フィルターと STOP フィルターに同じ属性値が指定されているため、UPDATE TRAN コマンドは処理されません。属性「Q」および「SCHD」は、START または STOP のどちらかのみ指定することはできますが、両方には指定できません。例えば、UPDATE TRAN START(Q) STOP(Q) は無効ですが、UPDATE TRAN START(Q) STOP(SCHD) は有効です。START STOP 属性は 1 つのみ、コマンド上に指定されていることを確認してください。
X'00000008'	X'00002048'	無効な SET 属性が指定されているため、UPDATE TRAN コマンドは処理されません。コマンドで正しい SET 属性を指定したことを確認してください。

表 540. UPDATE TRAN コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000008'	X'0000204C'	無効な CLASS 値が指定されているため、UPDATE TRAN コマンドは処理されません。正しい CLASS 値がコマンド上に指定されていることを確認してください。
X'00000008'	X'00002050'	無効な CPRI 値が指定されているため、UPDATE TRAN コマンドは処理されません。正しい CPRI 値がコマンド上に指定されていることを確認してください。
X'00000008'	X'00002054'	無効な LCT (限界カウント) 値が指定されているため、UPDATE TRAN コマンドは処理されません。正しい LCT 値がコマンド上に指定されていることを確認してください。
X'00000008'	X'00002058'	無効な LPRI 値が指定されているため、UPDATE TRAN コマンドは処理されません。正しい LPRI 値がコマンド上に指定されていることを確認してください。
X'00000008'	X'0000205C'	無効な MAXGN 値が指定されているため、UPDATE TRAN コマンドは処理されません。正しい MAXRGN 値がコマンド上に指定されていることを確認してください。
X'00000008'	X'00002060'	無効な NPRI 値が指定されているため、UPDATE TRAN コマンドは処理されません。正しい NPRI 値がコマンド上に指定されていることを確認してください。
X'00000008'	X'00002064'	PARLIM 値が無効であるため、UPDATE TRAN コマンドは処理されません。PARLIM 値がコマンド上に指定されていることを確認してください。
X'00000008'	X'00002068'	PLCT 値が無効であるため、UPDATE TRAN コマンドは処理されません。正しい PLCT 値がコマンド上に指定されていることを確認してください。
X'00000008'	X'00002100'	CMTMODE(MULT) と WFI(Y) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002101'	CONV(Y) と CMTMODE(MULT) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002103'	CONV(N) と、SPASZ>0 および SPATRUNC は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002104'	CONV(Y) と RECOVER(N) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002105'	CONV(Y) には SPASZ および SPATRUNC が必要です。
X'00000008'	X'00002108'	無効な EDITRTN 名です。
X'00000008'	X'0000210A'	無効な EMHBSZ です。以下のいずれかの状態が発生しました。 <ul style="list-style-type: none"> 指定された EMHB サイズが、最大サイズの 30720 より大きい 指定された EMHB サイズに X'5901' ログ・レコード接頭部の長さを加えたものが、ログのバッファ一・サイズより大きい
X'00000008'	X'0000210C'	FP(E) と EDITRTN は相互に排他的です。

表 540. UPDATE TRAN コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000008'	X'0000210E'	FP(E) または FP(P) と、MSC キーワード MSNAME または SIDR と SIDL とは、相互に排他的です。
X'00000008'	X'0000210F'	FP(E) または FP(P) と MSGTYPE(MULTSEG) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002110'	FP(N) と EMHBSZ > 0 は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002111'	FP(E) または FP(P) と RECOVER(N) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002112'	FP(E) または FP(P) と RESP(N) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002116'	INQ(N) と RECOVER(N) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002119'	MSC キーワードの MSNAME または SIDL/SIDR と、このトランザクションに関連する高速機能専用 (FP(E)) として定義されているアプリケーション・プログラムは、相互に排他的です。
X'00000008'	X'0000211A'	無効な MSNAME 名です。
X'00000008'	X'0000211B'	MSNAME と、SIDL および SIDR とは、相互に排他的です。
X'00000008'	X'0000211D'	MAXRGN>0 と PARLIM(65535) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'0000211E'	MAXRGN>0 と SERIAL(Y) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002121'	PARLIM 値と SERIAL(Y) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002125'	REMOTE(Y) が指定されている場合、SIDR 値はリモート SYSID であり、SIDL 値はローカル SYSID でなければなりません。MSNAME キーワードも、SIDR キーワードと SIDL キーワードも、明示的に指定されていない場合、既存のトランザクション定義からの SIDR 値と SIDL 値が使用されます。REMOTE(N) が指定されている場合、SIDR 値は SIDL 値に等しくなければなりません。SIDR 値と SIDL 値が明示的に指定されていない場合、既存のトランザクション定義からの値が使用されます。MSNAME キーワードは REMOTE(N) と一緒に指定することはできません。
X'00000008'	X'00002126'	SIDL 値は無効です。
X'00000008'	X'00002127'	SIDL/SIDR は、対として指定する必要があります。SIDL が単独で指定されたか、SIDR が単独で指定されたかのいずれかです。
X'00000008'	X'00002128'	SIDR 値は無効です。
X'0000000C'	X'00003000'	コマンドは一部のリソースで正常に実行されました。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。NAME(*) が OPTION(ALLRSP) なしで指定されている場合、ゼロ以外の完了コードをもつリソースについてのみ出力行が戻されます。詳しくは、1461 ページの表 541 を参照してください。

表 540. UPDATE TRAN コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'0000000C'	X'00003004'	コマンドはどのリソースでも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各リソースの行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、表 541 を参照してください。
X'00000010'	X'0000400C'	XRF 代替システムではコマンドは無効です。
X'00000010'	X'00004024'	高速機能が定義されていません。FP(E)、FP(P)、または EMHBSZ >0 は無効です。
X'00000010'	X'00004120'	オンライン変更フェーズが進行中です。
X'00000010'	X'00004300'	MODBLKS のオンライン変更が有効なため、コマンドが許可されません (DFSDFxxx または DFSCGxxx が MODBLKS=OLC で定義されているか、または MODBLKS が定義されていません)。
X'00000010'	X'00004310'	トランザクション入力編集ルーチン・テーブル用のストレージを取得できませんでした。このエラーを修正するには、コールド・スタートが必要です。
X'00000010'	X'00004314'	トランザクション入力編集ルーチンをロードできませんでした。
X'00000010'	X'00004318'	新規のトランザクション入力編集ルーチンを追加できませんでした。ルーチンの最大数である 255 個に既に達しています。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できませんでした。
X'00000014'	X'00005008'	DFSPPOOL ストレージを取得できませんでした。
X'00000014'	X'0000500C'	AWE を取得できませんでした。
X'00000014'	X'00005010'	ラッチを取得できませんでした。
X'00000014'	X'000050FF'	UPDATE TRAN または UPDATE TRANDESC コマンド処理は、内部エラーが原因で終了しました。

UPDATE TRAN コマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。完了コードは個々のリソースに対する各アクションごとに戻されます。UPDATE TRAN コマンドでは、以下の表に示された完了コードが戻される可能性があります。

表 541. UPDATE TRAN コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		トランザクションに対するコマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	トランザクション名が無効であるか、指定されたワイルドカード・パラメーターがどのリソース名にも一致しません。

表 541. UPDATE TRAN コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
17	ANOTHER CMD IN PROGRESS	このトランザクションに対して別のコマンド (DELETE または UPDATE など) が進行中です。これは、固有またはワイルドカードの複数のパラメーターでリソースが指定されている場合、このコマンドを意味する場合があります。もしくは、トランザクションがプログラム名を更新しており、そのプログラムに対して別のコマンドが進行中です。
19	CMTMODE=MULT/ WFI=Y CONFLICT	複数コミット・モード CMTMODE(MULT) オプションは、入力待ち WFI(Y) オプションと競合するために、トランザクションの更新は失敗しました。
1A	IN CONVERSATION	トランザクションは会話中です。会話中の会話 ID と端末が別々に戻されます。端末は、静的ノード、ノードとユーザー、動的ユーザー、APPC LU 名、または OTMA tmember と T パイプです。 推奨アクション: 会話を終了します。
1B	CONV=Y/ CMTMODE=MULT CONFLICT	会話 CONV(Y) オプションは、複数コミット・モードと競合するため、トランザクションの更新は失敗しました。
1E	CONV=N/SPASZ/ SPATRUNC CONFLICT	非会話 CONV(N) オプションは、SPA サイズまたは SPA 切り捨てオプションと競合するため、トランザクションの更新は失敗しました。
1F	CONV=Y/RECOVER=N CONFLICT	会話 CONV(Y) オプションは、リカバリー不能 RECOVER(N) オプションと競合するため、トランザクションの更新は失敗しました。
2F	FP=E/BMPTYPE=Y CONFLICT	高速機能専用 FP(E) オプションは、バッチ BMPTYPE(Y) として定義されたプログラムと競合するため、トランザクションの更新は失敗しました。
30	QUEUE-ONLY TRANSACTION	このトランザクションはキュー専用トランザクションであるため、このリソースに対しては UPDATE TRAN コマンドは無効です。
34	NOT ALLOWED FOR A CPIC TRAN	指定されたトランザクションは CPIC トランザクションであるため、このリソースに対しては UPDATE TRAN コマンドは無効です。
35	FP=E/EDITRTN CONFLICT	高速機能専用 FP(E) オプションは、編集ルーチン EDITRTN と競合するため、トランザクションの更新は失敗しました。
36	FP=E/FP=N PGM CONFLICT	高速機能専用 FP(E) オプションは、非高速機能 FP(N) として定義されたプログラムと競合するため、トランザクションの更新は失敗しました。

表 541. UPDATE TRAN コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
38	NOT ALLOWED FOR A BMP	指定されたトランザクションに関連した PSB は BMP であるため、このリソースに対しては UPDATE TRAN コマンドは無効です。
3A	FP=E OR P/MSC KEYWORD CONFLICT	高速機能専用 FP(E) または高速機能利用可能 FP(P) オプションは、MSC MSNAME、SIDR/SIDL オプションと競合するため、トランザクションの更新は失敗しました。
3B	FP/MSGTYPE=MULTSEG CONFLICT	高速機能専用 FP(E) または高速機能利用可能 FP(P) オプションは、メッセージ・タイプ複数セグメント MSGTYPE(MULTSEG) オプションと競合するため、トランザクションの更新は失敗しました。
3C	MAXRGN/ PARLIM=65535 CONFLICT	最大領域カウント MAXRGN 値は、並列限界カウント PARLIM 値 65535 (並列処理が使用不可であることを意味する) と競合するため、トランザクションの更新は失敗しました。 MAXRGN>0 と PARLIM(65535) は一緒に使用できません。
3E	FP=N/FP=E PGM CONFLICT	非高速機能 FP(N) オプションは、高速機能専用 FP(E) として定義されたプログラムと競合するため、トランザクションの更新は失敗しました。
3F	FP=P/BMPTYPE=Y CONFLICT	高速機能利用可能プログラム FP(P) は、バッチ BMPTYPE(Y) として定義されたプログラムと競合するため、トランザクションの更新は失敗しました。
40	PARLIM/ SCHDTYPE=SERIAL CONFLICT	トランザクションに関連する PSB が、並列スケジューリングをもっていないものとして定義されているため、PARLIM はリソースに応じて変更できません。
41	FP=E OR P/RECOVER=N CONFLICT	高速機能専用 FP(E) または高速機能利用可能 FP(P) オプションは、リカバリー不能 RECOVER(N) オプションと競合するため、トランザクションの更新は失敗しました。
42	FP=E OR P/RESP=N CONFLICT	高速機能専用 FP(E) または高速機能利用可能 FP(P) オプションは、応答モード RESP(N) オプションと競合するため、トランザクションの更新は失敗しました。
44	TRANSACTION BUSY	指定されたトランザクションは現在スケジュール中であるため、このリソースについては UPDATE TRAN コマンドを処理できません。
45	INVALID SIDR VALUE	SID 番号が無効なため、このリソースについては UPDATE TRAN コマンドを完了できませんでした。

表 541. UPDATE TRAN コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
49	INQ=N/RECOVER=N CONFLICT	非照会 INQ(N) オプションはリカバリー不能 RECOVER(N) オプションと競合するため、トランザクションの更新は失敗しました。
4A	IN USE	トランザクションは使用中です。キューイングが進行中です (端末入力またはプログラム間通信のいずれか)
4F	INVALID MAXRGN VALUE	最大領域 MAXRGN 値が無効です。
5E	MAXRGN GT 0/SERIAL=Y CONFLICT	ゼロ以外の最大領域値は、シリアル SERIAL(Y) オプションと競合するため、トランザクションの更新は失敗しました。
61	DFSBCB STORAGE ERROR.	DFSBCB ストレージを取得できませんでした。
6A	FP=P/FP=E PGM CONFLICT	高速機能利用可能 FP(P) として更新されるトランザクションは、既に高速機能専用 FP(E) として定義されているプログラムと競合します。
6B	PARLIM/SERIAL=Y CONFLICT	並列限界 PARLIM 値は、シリアル SERIAL(Y) オプションと競合するため、トランザクションの更新は失敗しました。
6D	INVALID PROGRAM NAME	指定されたプログラム名が無効です。
73	PROGRAM SCHEDULED	プログラムがスケジュールされています。
79	REMOTE/SIDR/SIDL/ MSNAME CONFLICT	REMOTE 値と MSNAME キーワードの間、または SIDR 値と SIDL 値の間に競合があるため、トランザクションの更新は失敗しました。
85	SUSPENDED	トランザクションは中断キュー上にあります。
87	TRAN QUEUEING	トランザクションは、キューに入れられたメッセージを持っています (非共用キュー環境)。
89	TRAN SCHEDULED	トランザクションはスケジュールされています。
90		内部エラーが原因で、UPD TRAN コマンドは完了しませんでした。
99	NOT INITIALIZED	トランザクションが正常に初期化されていなかったため、トランザクションの更新は失敗しました。QUERY TRAN STATUS(NOTINIT) は、トランザクションが初期化されていない理由 (例えば、プログラムが存在しない) を表示します。この問題を修正し、UPDATE TRAN START(SCHD,Q) コマンドを発行して、トランザクションを初期化します。
9B	FASTPATH TRAN NOT SUPPORTED	このトランザクションは高速機能専用 FP(E) であるため、トランザクションの更新は失敗しました。

表 541. UPDATE TRAN コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
B3	TRAN ELIGIBLE FOR SCHEDULING	トランザクションはスケジューリングに適格であり、更新することはできません。UPDATE を再試行する前に、UPDATE TRAN STOP(Q,SCHD) コマンドを使用してトランザクションを停止することが必要な場合があります。
B5	ROUTING CODE ALREADY EXISTS	高速機能専用 FP(E) オプションは、そのトランザクション名で既に存在する宛先コードと競合するため、トランザクションの更新は失敗しました。
BF	FP=E/CONV KEYWORD CONFLICT	高速機能専用 FP(E) と会話キーワード (CONV(Y)、SPASZ、および SPATRUNC を含む) は、相互に排他的です。FP 専用トランザクションは、会話型として定義することはできません。
145	MESSAGE IN PROGRESS ACROSS LINK	トランザクション用のメッセージが MSC リンクを介して進行中であるため、トランザクションの更新は失敗しました。
1D7	IMPORT CHANGE LIST ERROR	リソースは、IMSRSC リポジトリ内の変更リストからのインポート処理中であるか、変更リストから正常にインポートされませんでした。リソースは、リポジトリから正常にインポートされるまでは、更新することができません。

例

以下に示すのは UPDATE TRAN コマンドの例です。

UPDATE TRAN コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPDATE TRAN NAME(BADNAME,AOBMP,APOL17,CPI%,BAD*) SET(WFI(Y))
```

TSO SPOC 出力:

```
Response for: UPDATE TRAN NAME(BADNAME,AOBMP,APOL17,CPI%,BAD*)
Trancode MbrName  CC CText
AOBMP    IMS1      0
APOL17   IMS1     19 CMTMODE=MULT/WFI=Y CONFLICT
BAD*     IMS1     10 NO RESOURCES FOUND
BADNAME  IMS1     10 NO RESOURCES FOUND
CPI1     IMS1      0
CPI2     IMS1      0
CPI3     IMS1      0
CPI4     IMS1      0
```

OM API 入力:

```
CMD(UPDATE TRAN NAME(BADNAME,AOBMP,APOL17,CPI%,BAD*) SET(WFI(Y)))
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.3.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2006.312 00:07:49.667460</statime>
<stotime>2006.312 00:07:49.668362</stotime>
<staseq>BFAC164BEAE846C0</staseq>
<stoseq>BFAC164BEB20A400</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10160749</rqsttkn1>
<rc>0200000C</rc>
<rsn>00003008</rsn>
<rsnmsg>CSLN054I</rsnmsg>
<rsntxt>None of the clients were successful.</rsntxt>
</ctl>
<cmderr>
<mbr name="IMS1 ">
<typ>IMS </typ>
<styp>DBDC </styp>
<rc>0000000C</rc>
<rsn>00003000</rsn>
<rsntxt>At least one request successful</rsntxt>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>TRAN </kwd>
<input>UPDATE TRAN NAME (BADNAME,AOBMP,APOL17,CPI%,BAD*,AOBMP)
SET(WFI(Y)) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1bl="TRAN" l1bl="Trancode" scope="LCL" sort="a" key="1"
scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="MBR" l1bl="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1bl="CC" l1bl="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1bl="CCTXT" l1bl="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1bl="GBL" l1bl="Global" scope="GBL" sort="d" key="2" scroll="yes"
len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="y" />
<hdr s1bl="ERRT" l1bl="ErrorText" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1bl="CONVID" l1bl="ConvID" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1bl="NODE" l1bl="NodeName" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1bl="USER" l1bl="UserName" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1bl="LU" l1bl="LUName" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="24" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1bl="TMEM" l1bl="TMember" scope="LCL" sort="n" key="0"
scroll="yes" len="16" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1bl="TPIP" l1bl="TPipe" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
len="8" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>TRAN(BADNAME ) MBR(IMS1) CC( 10) CCTXT(NO RESOURCES FOUND) </rsp>
<rsp>TRAN(AOBMP ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>TRAN(APOL17 ) MBR(IMS1) CC( 19) CCTXT(CMTMODE=MULT/WFI=Y CONFLICT) </rsp>
<rsp>TRAN(CPI1 ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>TRAN(BAD* ) MBR(IMS1) CC( 10) CCTXT(NO RESOURCES FOUND) </rsp>
<rsp>TRAN(CPI2 ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>

```

```
<rsp>TRAN(CPI3      ) MBR(IMS1) CC(    0) </rsp>
<rsp>TRAN(CPI4      ) MBR(IMS1) CC(    0) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>
```

説明: 複数のトランザクションを「入力待ち」に更新します。いくつかのトランザクションは、完了コード 0 で示されているように、正常に更新されました。トランザクション APOL17 の更新は、完了コード 19 で失敗しました。WFI(Y) 属性は、APOL17 に対して既に定義されている CMTMODE(MULT) 属性と競合するからです。トランザクション BADNAME およびパラメーター BAD* に対する更新は、完了コード 10 で失敗しています。トランザクション BADNAME は存在せず、また BAD で始まるトランザクション名はないからです。

UPDATE TRAN コマンドの例 2

TSO SPOC 入力:


```
UPDATE TRAN NAME(APOL12) START(SCHD) OPTION(AFFIN)
```

TSO SPOC 出力:


```
Trancode MbrName  CC
APOL12   IMS1     0
```

説明: 類似性をもってトランザクション APOL12 が開始されます。


関連概念:


 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連タスク:

 UPDATE コマンドを使用した、ランタイム・トランザクション・リソース定義および記述子定義の更新 (システム定義)

関連資料:

 /LOCK コマンド (コマンド)

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)


23 ページの『第 3 章 /PSTOP コマンド』

936 ページの『/START TRAN コマンド』

993 ページの『/STOP TRAN コマンド』

1060 ページの『/TRACE TRAN コマンド』

1075 ページの『/UNLOCK TRAN コマンド』

 コミット確認出口ルーチン (出口ルーチン)

UPDATE TRANDESC コマンド

UPDATE TRANDESC コマンドは、トランザクション記述子を更新するために使用します。記述子は、記述子またはリソースの作成に使用できるモデルです。

記述子の更新では、UPDATE コマンドで明示的に指定された属性のみが変更されます。指定されなかった属性は、既存の値を保持します。CREATE

LIKE(DESC(descriptor_name)) コマンドを指定することにより、この記述子をモデルとして使用して、任意のトランザクション・リソースまたは記述子を作成できます。この記述子を使用して既に作成された記述子またはリソースは、更新されません。

サブセクション:

- 『環境』
- 『構文』
- 1470 ページの『キーワード』
- 1486 ページの『使用上の注意』
- 1486 ページの『出力フィールド』
- 1487 ページの『戻りコード、理由コード、および完了コード』
- 1490 ページの『例』

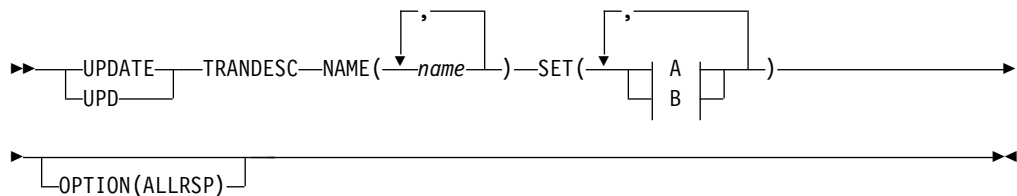
環境

以下の表には、コマンドおよびキーワードを使用することができる環境 (DB/BC、DBCTL、および DCCTL) がリストされています。

表 542. UPDATE TRANDESC コマンドおよびキーワードの有効環境

コマンド/キーワード	DB/DC	DBCTL	DCCTL
UPDATE TRANDESC	X		X
NAME	X		X
OPTION	X		X
SET	X		X

構文



A:

AOCMD (<input type="checkbox"/> CMD <input type="checkbox"/>)
<input type="checkbox"/> N <input type="checkbox"/> TRAN <input type="checkbox"/> Y
CLASS (<i>class</i>)
CMTMODE (<input type="checkbox"/> MULT <input type="checkbox"/> SNGL)
CONV (<input type="checkbox"/> N <input type="checkbox"/> Y)
DCLWA (<input type="checkbox"/> N <input type="checkbox"/> Y)
DEFAULT (Y)
DIRROUTE (<input type="checkbox"/> N <input type="checkbox"/> Y)
EDITRTN (<i>name</i>)
EDITUC (<input type="checkbox"/> N <input type="checkbox"/> Y)
EMHBSZ (<i>size</i>)
EXPTIME (<i>seconds</i>)
FP (<input type="checkbox"/> E <input type="checkbox"/> N <input type="checkbox"/> P)
INQ (<input type="checkbox"/> N <input type="checkbox"/> Y)
LCT (<i>value</i>)
LPRI (<i>value</i>)
MAXRGN (<i>number</i>)
MSGTYPE (<input type="checkbox"/> MULTSEG <input type="checkbox"/> SNGLSEG)
MSNAME (<i>name</i>)
NPRI (<i>value</i>)
PARLIM (<i>value</i>)
PGM (<i>name</i>)
PLCT (<i>value</i>)
PLCTIME (<i>hundredths of seconds</i>)
RECOVER (<input type="checkbox"/> N <input type="checkbox"/> Y)

B:

REMOTE (<input type="checkbox"/> N <input type="checkbox"/> Y)
RESP (<input type="checkbox"/> N <input type="checkbox"/> Y)
SEGNO (<i>number</i>)
SEGSZ (<i>size</i>)
SERIAL (<input type="checkbox"/> N <input type="checkbox"/> Y)
SIDL (<i>localsysid</i>)
SIDR (<i>remotesysid</i>)
SPASZ (<i>size</i>)
SPATRUNC (<input type="checkbox"/> R <input type="checkbox"/> S)
TRANSTAT (<input type="checkbox"/> N <input type="checkbox"/> Y)
WFI (<input type="checkbox"/> N <input type="checkbox"/> Y)

キーワード

以下のキーワードは、UPDATE TRANDESC コマンドに有効です。

NAME

トランザクション記述子の名前 (1 から 8 文字) を指定します。名前にはワイルドカードを指定することができます。名前は反復可能なパラメーターです。指定された NAME パラメーターが固有またはワイルドカード名の場合、処理されたすべての記述子名についてコマンド応答が戻されます。NAME(*) の場合、エラーになった記述子名についてのみ、コマンド応答が戻されます。OPTION(ALLRSP) を NAME(*) と同時に指定すれば、処理されたすべての記述子名についてコマンド応答が取得できます。

OPTION

コマンドとともに実行される追加の機能を指定します。

ALLRSP

コマンドで処理されたすべての記述子について、応答行を戻すことを指示します。デフォルトのアクションでは、エラーになった記述子についてのみ応答行が戻されます。これは、NAME(*) を指定した場合のみ有効です。ALLRSP は、他の NAME 値では無視されます。

SET

変更される属性値を指定します。トランザクションが共用される場合、トランザクションは、それが定義されているすべてのシステムで同じ特性を持っていないければなりません。これらの特性には、以下のものが含まれます。

- 非会話型または会話型
- SPA サイズ (会話型の場合)
- 単一セグメント・メッセージまたは複数セグメント・メッセージ
- 非照会または照会
- リカバリー可能またはリカバリー不能

AOCMD

AOI オプションを指定します。これは、トランザクションがタイプ 1 AOI CMD 呼び出しまたはタイプ 2 AOI ICMD 呼び出しを発行できるかどうかを示します。AOCMD が CMD、TRAN、または Y として定義され、AOI1 実行パラメーターが AOI1=N として定義されている場合、許可検査は行われず、トランザクションには CMD 呼び出しおよび ICMD 呼び出しの発行が許可されます。

CMD

トランザクションによるタイプ 1 AOI CMD 呼び出しおよびタイプ 2 AOI ICMD 呼び出しの発行が許可されることを示します。AOI1 実行パラメーターが C、R、または A として定義されている場合、許可検査は、どのトランザクションが特定のコマンドを発行できるかに基づいて行われます。この場合、コマンド (または、コマンドの最初の 3 文字) が RACF または同等製品に対してユーザーとして定義されていることが必要です。タイプ 1 AOI トランザクションは TIMS クラスのもとにプロファイルとして定義され、トランザクションごとに、それが発行できるコマンドが指定されていなければなりません。AOCMD(CMD) の定義は、AOCMD(TRAN) の定義に比べて、作成する必要があるユー

ザー ID の数が少なくても済みます。ただし、AOCMD(CMD) の定義では、より多数のリソース・プロファイルを作成または変更する必要があります。

- N トランザクションによる AOI タイプ 1 CMD 呼び出しの発行が許可されないことを示します。トランザクションには AOI タイプ 2 ICMD 呼び出しの発行が許可されます。

TRAN

トランザクションによるタイプ 1 AOI CMD 呼び出しおよびタイプ 2 AOI ICMD 呼び出しの発行が許可されることを示します。AOI1 実行パラメーターが C、R、または A として定義されている場合、トランザクション・コードが許可に使用されます。最初の許可検査の結果として、アクセス機能環境エレメント (ACEE) が作成されます。この環境は、将来の許可検査で使用するために保持されます。タイプ 1 AOI トランザクションは、RACF または同等製品に対してユーザーとして定義されていることが必要です。これにより、タイプ 1 AOI トランザクションからの発行が許可されるコマンドごとに、トランザクションが RACF PERMIT ステートメントで指定されるようになります。AOI トランザクションを RACF に対してユーザーとして指定する際に、RACF に既に定義されているユーザーの名前と競合することがあります。これが起きた場合には、トランザクション名または既存のユーザー名のどちらかを変更する必要があります。

- Y トランザクションによるタイプ 1 AOI CMD 呼び出しおよびタイプ 2 AOI ICMD 呼び出しの発行が許可されることを示します。AOI1 実行パラメーターが C、R、または A として定義されている場合、ユーザー ID またはプログラム名が許可に使用されます。一部の環境では、Get Unique 呼び出しがまだ行われていない場合には、プログラム名が許可に使用されます。

CLASS

トランザクション・クラスを指定します。これは、スケジューリングするトランザクションを選択するために使用される属性の 1 つです。そのクラス用に使用可能なメッセージ処理領域があれば、トランザクションをスケジュールできます。値は 1 から 999 までの数値です。この値は、IMSCTRL マクロの MAXCLAS= キーワードで示された値 (指定またはデフォルト) を超えてはなりません。

CPI-C トランザクションは、非 CPI-C トランザクションに使われたのとは異なるメッセージ・クラスで定義してください。IMS は、トランザクション・クラス内のすべての CPI-C トランザクションを優先順位ゼロとして扱います。

CMTMODE

データベースの更新および非急送出力メッセージがコミットされる時期を指定します。このオペランドは緊急時再始動に影響を与えます。

MULT

データベースの更新および非急送出力メッセージは、アプリケーション・プログラムが正常に終了した時点、処理限界カウントに達した時点、あるいは、疑似 WFI 従属領域の場合は、キューにそれ以上メッセ

ージがなくなった時点でのみ、コミットされます。例えば、プログラムの単一のスケジュールで 5 つのトランザクションが処理される場合、5 番目のトランザクションが完了し、プログラムが終了した時点でのみ、5 つすべてがコミットされます。トランザクションのコミットが完了するまでは、更新されたデータベース・レコードのロックは解放されず、非急送出力メッセージは出力用のキューに入れられません。メッセージをコミットする前にアプリケーションが異常終了した場合、緊急時再始動は、そのコミット・スコープ内で処理されたすべてのメッセージを再キューイングし、それらを再処理のために使用できるようにします。

トランザクションの結果としてアプリケーションが外部サブシステム (DB2 など) を呼び出す場合、外部サブシステムによって提供されるコミット確認出口は、CMTMODE(MULT) がサポートされるかどうかを判別することができます。「IMS V15 出口ルーチン」のコミット確認出口ルーチンの下の資料を参照してください。

SNGL

データベースの更新および非急送出力メッセージは、アプリケーション・プログラムがそれぞれのトランザクションの処理を完了した時点でコミットされます。IMS は、アプリケーション・プログラムが次のメッセージを要求した (入出力 PCB に GU を発行した) 時点、またはアプリケーション・プログラムが終了した時点のいずれかで、コミット処理を呼び出します。メッセージをコミットする前にアプリケーションが異常終了した場合、緊急時再始動は、そのコミット・スコープ内で処理されたすべてのメッセージを再キューイングし、それらを再処理のために使用できるようにします。メッセージをコミットする前にアプリケーションが異常終了した場合、緊急時再始動は、異常終了の前に処理中であったメッセージを再キューイングし、それを再処理のために使用できるようにします。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- CONV(Y) と CMTMODE(MULT) は相互に排他的です。
- WFI(Y) と CMTMODE(MULT) は相互に排他的です。

CONV

会話オプションを指定します。

N トランザクションは会話型ではありません。

Y トランザクションは会話型です。トランザクション・メッセージは、会話型プログラム宛に送られます。会話型プログラムは、複数のステップで構成されるトランザクションを処理します。会話型プログラムは、端末からメッセージを受け取り、端末に応答しますが、トランザクションからのデータをスクラッチパッド域 (SPA) に保管します。端末の担当者が追加データを入力するとき、プログラムは前回のメッセージから保管したデータを SPA 内に持っているため、端末の担当者がそのデータを再度入力しなくても要求の処理を続行することができます。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- CONV(Y) には SPASZ および SPATRUNC が必要です。
- CMTMODE(MULT) と CONV(Y) は相互に排他的です。

- INQ(Y) と CONV(Y) は相互に排他的です。
- RECOVER(N) と CONV(Y) は相互に排他的です。
- SPASZ と CONV(N) は相互に排他的です。
- SPATRUNC と CONV(N) は相互に排他的です。

DCLWA

ログ先書きオプションを指定します。

N N を指定すると、IMS はログ先書きを実行しません。入力メッセージの保全性、および出力メッセージと関連のデータベース更新の整合性が不要でない場合に、N を指定してください。DCLWA は、応答モードまたは高速機能の入力処理には適用されず、IMS の実行時に無視されます。

Y Y を指定すると、IMS は、リカバリー可能な、非応答入力メッセージおよびトランザクション出力メッセージに対して、ログ先書きを実行します。これにより、以下のことが確実にになります。

- IMS で障害が発生した場合に非応答入力トランザクションをリカバリー可能にして、その後で IMS が入力を受信を確認します。
- データベース変更をリカバリー可能にした後で、IMS が関連の出力応答メッセージを送信します。
- 関連の入力確認応答または出力応答が端末に送信される前に、ログ・バッファ内の情報が IMS ログに書き込まれます。

すべての VTAM 端末タイプに対して DCLWA(Y) を定義してください。

DEFAULT(Y)

この記述子をデフォルトとして指定します。これは、既存のデフォルト記述子を DEFAULT(N) にリセットします。LIKE キーワードなしで記述子が作成されるとき、CREATE コマンドで指定されない属性は、デフォルト記述子に定義されている値を取ります。リソース・タイプのデフォルトとして、記述子 1 つだけが定義できます。IMS は、DFSDSTR1 と呼ばれるトランザクション記述子を定義しています。ここでは、すべての属性がデフォルト値で定義されています。ユーザー定義記述子をデフォルトに定義すると、現在のデフォルト記述子がオーバーライドされます。デフォルトにできるトランザクション記述子は一度に 1 つに限られるため、1 つのトランザクション記述子名のみを DEFAULT(Y) で指定できます。

DIRROUTE

MSC 直接経路指定オプションを指定します。

N トランザクションを処理しているアプリケーション・プログラムには、トランザクションを発信したシステムが通知されません。発信元の LTERM の名前が、入出力 PCB に入れられます。

Y 複数 IMS システム構成で MSC 直接経路指定が使用されている場合、トランザクションを処理しているアプリケーション・プログラムに、トランザクションを発信したシステムが通知されます。発信元システムに戻る論理パスに対応した MSNAME が、入出力 PCB に入れられます。

EDITRTN

プログラムがメッセージを受信する前にメッセージを編集する、トランザクション入力編集ルーチンの 1 文字から 8 文字の名前を指定します。この名前は、英数字 (A から Z、0 から 9、#、\$、および @) でなければなりません。名前は英字 (A から Z、#、\$、@) で始まる必要があります。ブランク、コンマ、ピリオド、ハイフン、または等号は含めることができません。ワイルドカード文字 * または % を含めることはできません。

指定する編集ルーチンは、システム定義プロセス中に TRANSACT マクロの EDIT= パラメーターを使用して定義された編集ルーチン、または新規のルーチンを使用できます。新規ルーチンの場合、そのルーチンは RESLIB 連結データ・セットの 1 つに常駐している必要があります。最大 255 個の入力編集ルーチンがサポートされます。

コマンドで指定された編集ルーチンが IMS にとって新規のものである場合、IMS は RESLIB からルーチンをロードしようとします。ロードに失敗すると、コマンドはリジェクトされます。指定された編集ルーチンが既に IMS に対して定義されている場合、ルーチンの新規コピーをロードするか、既存のコピーを使用するかを決定します。ルーチンはシステムに生成されたが、そのルーチンを参照しているトランザクションがない場合、IMS は最初に RESLIB からそのモジュールの新規コピーをロードしようとします。ロードに成功した場合、編集ルーチンの動的コピーが使用されます。生成されたコピーは、IMS がコールド・スタートされない限り、再び使用することはできません。動的ルーチンのロードに失敗した場合は、生成されたコピーが使用されます。編集ルーチンがシステム内に生成されており、他のトランザクションがそれを参照している場合は、そのモジュールの生成されたコピーが使用されます。

EDITRTN は、高速機能利用可能トランザクションが IMS に経路指定される場合に使用されます。

LU 6.2 装置からの入力の場合は、EDITRTN で指定されたトランザクション入力編集ルーチンの代わりに、ユーザー編集出口ルーチン DFSLUEE0 が呼び出されます。

FP(E) と EDITRTN は相互に排他的です。

トランザクション定義から編集ルーチン名を除去するには、EDITRTN() パラメーターに対してゼロの値 (EDITRTN(0)) を指定できます。

EDITUC

大文字への編集オプションを指定します。

- N** 入力データは大文字に変換されません。端末から入力されたとおりに、大文字および小文字で構成することができます。
- Y** 入力データは、処理プログラムに提供される前に大文字に変換されます。FP(E) または FP(P) の場合、トランザクションは、編集/経路指定出口ルーチンに提供される前に大文字に変換されます。

VTAM 端末に対して EDITUC(Y) を指定すると、組み込み装置制御文字が伝送されなくなります。

EMHBSZ

高速機能トランザクションを実行するために必要な EMH バッファ・サイズを指定します。これは EMHL 実行パラメーターをオーバーライドしま

す。EMHBSZ が指定されない場合、EMHL 実行パラメーター値が使用されます。値は 12 から 30720 までの数値です。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- EMHBSZ>0 は、高速機能が定義されていることが必要です。
- FP(N) と EMHBSZ>0 は相互に排他的です。

EXPRTIME

IMS が入力トランザクションを取り消すために使用できる経過時間を秒単位で指定します。トランザクションが IMS に実行依頼された後で、トランザクションの停止や、起こり得るシステム・スローダウンのために、そのトランザクションの処理が遅れる可能性があります。その場合、トランザクションが処理される前に、ユーザーまたはクライアント・アプリケーションがタイムアウトになる可能性があります。結局、IMS がそのトランザクションをスケジュールに入れて処理するときには、その応答メッセージはもう必要なくなっています。トランザクションに経過時間が指定された場合、IMS は入力トランザクションに有効期限切れのフラグを立てて、システムが不要なトランザクションの処理のために CPU サイクルを浪費しないようにすることができます。

値は 0 から 65535 の範囲の数値 (秒単位) です。デフォルトは 0 です。この場合、このトランザクションに有効期限は設定されません。このトランザクション有効期限属性は、すべての IMS TM インターフェースでサポートされます。

制約事項: トランザクション有効期限の検査は、高速機能トランザクション、IMS 会話型トランザクション、およびプログラム間通信トランザクションの GU 時には実行されません。

FP 高速機能オプションを指定します。

- E** トランザクションは高速機能として排他的に処理されます。プログラムは高速機能専用として定義されていなければなりません。
- N** トランザクションは高速機能処理の候補ではありません。プログラムは、非高速機能として定義されていなければなりません。FP(N) が指定されている場合、高速機能のリソースまたはコマンドを使用しようとすると、予測不能な結果が生じることがあります。
- P** トランザクションは高速機能処理の潜在的な候補です。高速機能利用可能トランザクションは、高速機能専用アプリケーションと非高速機能アプリケーションの 2 つのアプリケーションのもとで実行できなければなりません。このトランザクションを経路指定できる宛先の高速機能専用アプリケーションを定義する必要があります。高速機能利用可能トランザクションは、ユーザー出口/経路指定出口で処理することにより、そのトランザクションが実際に IMS 高速機能で処理すべきものかどうかを判別する必要があります。IMS 高速機能で処理すべきものである場合、編集/経路指定出口ルーチンは、トランザクションに宛先コードを関連付けます。この宛先コードは、どの高速機能アプリケーション・プログラムがそのトランザクションを処理するかを示します。

PGM() で定義されたプログラムは、高速機能専用として定義されてはなりません。

トランザクションを FP(E) から FP(N) に、または FP(N) から FP(E) に更新するためには、同じ FP() 属性を持つプログラムを指すようにトランザクションを更新することも必要です。プログラム属性を更新しないと、プログラム競合によりコマンドは失敗します。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- EDITRTN と FP(E) は相互に排他的です。
- EMHBSZ>0 と FP(N) は相互に排他的です。
- FP(E) と FP(P) は、高速機能が定義されていることが必要です。
- MSGTYPE(MULTSEG) と FP(E) は相互に排他的です。
- MSGTYPE(MULTSEG) と FP(P) は相互に排他的です。
- MSNAME と FP(E) は相互に排他的です。
- RECOVER(N) と FP(E) は相互に排他的です。
- RECOVER(N) と FP(P) は相互に排他的です。
- RESP(N) と FP(E) は相互に排他的です。
- RESP(N) と FP(P) は相互に排他的です。
- SIDL と FP(E) は相互に排他的です。
- SIDR と FP(E) は相互に排他的です。

INQ

照会オプションを指定します。

N これは照会トランザクションではありません。

Y これは照会トランザクションです。INQ(Y) を指定する場合、RECOVER() パラメーターを使用して、IMS の緊急時再始動または正常再始動の際にこのトランザクションをリカバリーする必要があるかどうかも指定できます。

このオプションは、入力された場合にどのデータベースも変更しないトランザクションに対してのみ指定する必要があります。プログラムは、INQ(Y) として定義されたトランザクションの処理がスケジュールされた場合、データベースに対して ISRT、DLET、または REPL 呼び出しを出すのを禁止されます。

IMS トランザクションが INQ(Y) で定義されている場合、アプリケーション・プログラムは SQL INSERT、DELETE、または UPDATE を実行できません。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- CONV(Y) と INQ(Y) は相互に排他的です。
- RECOVER(N) と INQ(N) は相互に排他的です。

LCT

限界カウントを指定します。これは、キューに入れられて処理を待っている入力トランザクションの数と比較する際に、通常優先順位値または限界優先順位値がこのトランザクションに割り当てられるかどうかを決める数値です。値は 1 から 65 535 までの数値です。デフォルトは 65 535 です。

BMP によって処理されるトランザクションの場合、限界カウント値は無視されます。

共用キュー環境では、限界カウント値は無視されます。

LPRI

限界優先順位を指定します。これは、キューに入れられて処理を待っている入力トランザクションの数が、限界カウント値に等しいかより大きくなった場合に、このトランザクションが引き上げられるスケジューリング優先順位です。スケジューリング優先順位は、スケジューリングするトランザクションの選択に使用される属性です。同じクラスで定義されている場合、優先順位の高いトランザクションが優先順位の低いものよりも先にスケジュールされます。値は 0 から 14 までの数字が可能です。

限界優先順位が使用され、スケジューリング優先順位が限界優先順位に引き上げられている場合、このトランザクション名のためにエンキューされているすべてのメッセージが処理されるまでは、優先順位は通常優先順位に引き下げられません。このトランザクションには限界優先順位を適用したくない場合は、通常優先順位と限界優先順位を等しい値に定義し、限界カウントを 65535 に設定します。

トランザクションがバッチ・メッセージ・プログラム (BMP) によって排他的に処理される場合は、限界優先順位を 0 として定義します。PGM() で指定されたプログラムがバッチのプログラム・タイプで定義されている場合、現行優先順位は強制的に 0 にされます。ただし、バッチ・メッセージ処理領域 (BMP) は、0 以外の現行スケジューリング優先順位を持つトランザクションを処理できます。

この優先順位は、このトランザクションが作成してリモート・システムの宛先に送信するメッセージの優先順位も管理します。NPRI 定義のものとの MSC の優先順位に関する説明も参照してください。

BMP によって処理されるトランザクションの場合、限界優先順位値は無視されます。

共用キュー環境では、限界優先順位値は無視されます。

MAXRGN

最大領域カウントを指定します。これは、トランザクションを処理するために同時にスケジュールできるメッセージ処理プログラム (MPP) 領域の数を制限します。MPP 領域の数が制限されていない場合、1 つのトランザクションがすべての使用可能な領域を独占する可能性があります。この値は、0 から MAXPST= 制御領域パラメーターで指定した値の間の数値です。MAXRGN(0) は、制限がないことを意味します。

アプリケーション・プログラムのスケジューリング・タイプを SERIAL として定義する場合は、MAXRGN キーワードを省略するか、値を 0 として定義してください。

以下のキーワードの組み合わせは、相互に排他的です。

- PARLIM(65535) と 0 より大きい MAXRGN 値
- SERIAL(Y) と 0 より大きい MAXRGN 値

MSGTYPE

メッセージ・タイプ (単一セグメントまたは複数セグメント) を指定します。これは、着信メッセージが完了と見なされ、後続の処理のためにアプリケーション・プログラムに経路指定できるようになる時点指定します。

複数 IMS システム構成で MSC 直接経路指定が使用される場合、IMS は、メッセージとそのメッセージを処理する宛先トランザクションの両方が、ともに単一セグメントまたは複数セグメントのどちらかであることを確認しません。

MULTSEG

着信メッセージは、複数のセグメントの長さになります。これは、メッセージ終結標識を受け取るまで、つまり MFS によって完全なメッセージが作成されるまでは、アプリケーション・プログラムへのスケジューリングに適格ではありません。

SNGLSEG

着信メッセージは、1 セグメントの長さです。これは、端末オペレーターがセグメント終結を示した時点で、スケジューリングに適格になります。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- FP(E) と MSGTYPE(MULTSEG) は相互に排他的です。
- FP(P) と MSGTYPE(MULTSEG) は相互に排他的です。
- RESP(Y) と MSGTYPE(MULTSEG) は相互に排他的です。

MSNAME

複数 IMS システム構成 (MSC) 内の論理リンク・パスの名前 (1 から 8 文字) を指定します。論理リンク・パスは、任意の 2 つの IMS システム間のパスです。IMS システムは、論理リンク・パスに関連付けられたリモート・システム ID とローカル・システム ID によって識別されます。リモート・システム ID は、このパスを使用しているメッセージが処理されるシステムを識別します。ローカル・システム ID は、このシステムを識別します。トランザクションをリモート・トランザクションに変更する、あるいは MSC パスを変更する、UPDATE TRAN コマンドでは、新規の MSNAME は既に定義済みでなければなりません。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- FP(E) と MSNAME は相互に排他的です。
- SIDL と MSNAME は相互に排他的です。
- SIDR と MSNAME は相互に排他的です。

NPRI

通常のスケジューリング優先順位を指定します。スケジューリング優先順位は、スケジューリングするトランザクションの選択に使用される属性です。同じクラスで定義されている場合、優先順位の高いトランザクションが優先順位の低いものよりも先にスケジューリングされます。通常優先順位は、エンキューされて処理を待っている入力トランザクションの数が限界カウンタの値を下回る場合に、スケジューリング優先順位としてトランザクションに割り当てられます。値は 0 から 14 までの数字が可能です。デフォルトは、1 です。

この優先順位は、このトランザクションが作成してリモート・システムの宛先に送信するメッセージの優先順位も管理します。

トランザクションがバッチ・メッセージ・プログラム (BMP) によって排他的に処理される場合は、通常優先順位を 0 としてコーディングします。

トランザクションがバッチ・メッセージ・プログラム (BMP) によって排他的に処理される場合、限界優先順位を 0 として定義します。PGM() で指定されたアプリケーション・プログラムがバッチのプログラム・タイプで定義されている場合、現行優先順位は強制的に 0 にされます。ただし、バッチ・メッセージ処理領域 (BMP) は、0 以外の現行スケジューリング優先順位を持つトランザクションを処理できます。

リモート・トランザクションの場合、トランザクションを処理システムに送信するために優先順位が使用されます。これは MSC リンク・メッセージ優先順位 と呼ばれます。MSC リンク・メッセージ優先順位グループには、以下の 3 つがあります。

- 低
- 中
- 高

低優先順位グループは、入力端末システム内の基本要件で構成されます。このグループには、リモート・トランザクション優先順位 0 から 6 が割り当てられます。中優先順位グループは、2 次要求、応答、中間システム内の基本要件、および入力端末システム内の基本要件で構成されます。このグループには、リモート・トランザクション優先順位 7 が割り当てられます。高優先順位グループは、入力端末システム内の基本要件で構成されます。このグループのメッセージには、リモート・トランザクション優先順位 8 から 14 が割り当てられます。各グループ内でのメッセージの優先順位は、基本要件の場合は、入力端末システム内のトランザクションまたはリモート・トランザクションの現行の優先順位値に基づき、2 次要求および応答の場合は、最終処理システムに基づきます。

MSC 構成内では、トランザクションの優先順位が、MSC リンク経由でこのトランザクションによって挿入されたメッセージを送信するために使用される優先順位を決定します。トランザクションが同じ宛先に複数のメッセージを挿入し (例えば、プリンターへのページ)、これらのメッセージを挿入された順序で送信する必要がある場合は、通常優先順位値と限界優先順位値を同じにする必要があります。通常優先順位値と限界優先順位値が同一でない場合、前に挿入されたメッセージより高い優先順位で挿入されたメッセージが、最初に宛先に到着する可能性があります。(この制約事項は、同じメッセージの複数のセグメントには適用されません。)

BMP によって処理されるトランザクションの場合、通常優先順位値は無視されます。

PARLIM

並列処理限界カウントを指定します。これは、このトランザクションに関して現在スケジュールされているそれぞれのアクティブ・メッセージ領域によって、現在キューに入れることができるがまだ処理されていないメッセージの最大数です。これは、関連のアプリケーションのスケジューリング・タイプが並列として定義されている場合に使用されるしきい値です。現行のトラ

ンザクション・エンキュー・カウントが、このトランザクションに現在スケジュールされている領域数を PARLIM 値に掛けた値を超えるたびに、追加の領域がスケジュールされます。

値は 0 から 32767 までの数値、または 65535 です。PARLIM(0) は、入力メッセージごとに新しい領域がスケジュールされることを示します。このスケジューリング条件 (メッセージ数が 0 より大きい) は、常に満たされるからです。PARLIM(0) を指定する場合は、MAXRGN 値を指定して、特定のトランザクションを処理するためにスケジュールできる領域の数を制限する必要があります。PARLIM(65535) は、並列処理は使用不可であることを意味し、IMS は一度に 1 つの領域にのみトランザクションをスケジュールすることを許可します。

PARLIM に指定される値は、メッセージ処理プログラム (MPP) にのみ適用されます。バッチ・メッセージ処理プログラム (BMP) ではサポートされません。

アプリケーションを SERIAL として定義するか、スケジューリング・タイプを SERIAL として定義する場合は、PARLIM(65535) を定義してください。

共用キュー環境では (スケジューリング・タイプが PARALLEL の場合)、65535 以外の PARLIM 値を指定すると、正常に実行された連続 GU カウントが、このトランザクションに現在スケジュールされている領域数を PARLIM 値に掛けた値を超えるたびに、新しい領域がスケジュールされます。共用キュー環境では、キュー・カウントの代わりに、正常に実行された連続 GU カウントが使用されます。MAXRGN で指定された最大領域数まで、新しい領域が継続してスケジュールされます。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- MAXRGN>0 と PARLIM(65535) は相互に排他的です。
- SERIAL(Y) と PARLIM 値 0 から 32767 は、相互に排他的です。

PGM

トランザクションに関連付けられたアプリケーション・プログラムの名前を指定します。トランザクションが REMOTE(Y) として定義されていない限り、プログラムは存在していなければなりません。

PLCT

処理限界カウントを指定します。これは、アプリケーション・プログラムを再ロードせずに、IMS が処理のためにアプリケーション・プログラムに送信するメッセージの最大数です。値は 0 から 65535 までの数値でなければなりません。PLCT(0) は、アプリケーションに送信されるメッセージの最大数は 1 であり、アプリケーション・プログラムは後続のメッセージを受信する前に再ロードされることを意味します。PLCT(65535) は、単一のプログラム・ロードで処理されるメッセージの数に制限はないことを意味します。1 から 65535 までの値は、迅速にスケジュールを変更して処理するのに適しています。

この値は、1 つのアプリケーション・プログラムが単一のスケジューリング・サイクルで処理できるメッセージの数を決めるために使用されます。ア

アプリケーション・プログラムが、示された数のメッセージを要求し、受信した場合、後続の要求は、次の 2 つのアクションのどちらかの結果になります。

1. IMS は、以下のいずれかの条件を満たしている場合、「これ以上メッセージがない」ことを示します。
 - 領域が MPP でない。
 - 現在スケジュールされているモードが CMTMODE(SNGL) でない。
 - その領域に対して、等しいかより高い優先順位のトランザクションがエンキューされている。

IMS は、実際には、そのアプリケーション・プログラム用にエンキューされた他のメッセージを持っている可能性があります。アプリケーション・プログラムは、それ以上メッセージがないことを示す標識を受け取った場合は、終了する責任があります。アプリケーション・プログラムの終了により、それが占有していた領域をスケジュール変更のために利用できるようになります。この機能により、IMS は、前のトランザクションの処理中にシステムに入力された、より高い優先順位のトランザクションのスケジューリングが可能になります。さらに、等しい優先順位のトランザクションがエンキューされている場合、それらを先入れ先出し (FIFO) ベースでスケジューリングできるようになります。

2. 領域は迅速にスケジュールを変更し、以下のすべての条件が満たされているアプリケーションに次のメッセージを戻します。
 - 領域が MPP である。
 - トランザクションが CMTMODE(SNGL) である。
 - 等しいかより高い優先順位のトランザクションがエンキューされていない。
 - そのアプリケーション用のメッセージがまだエンキューされている。

PLCTTIME

処理限界カウント時間を指定します。これは、単一のトランザクション (または、メッセージ) を処理するために許容される時間の長さ (100 分の 1 秒単位) です。この数値は、メッセージ処理領域で各メッセージの処理に許容される最大 CPU 時間を指定します。

バッチ・メッセージ・プログラム (BMP) は、この設定の影響を受けません。

値は 1 から 6553500 の範囲の数値 (100 分の 1 秒単位) です。6553500 の値は、アプリケーション・プログラムには制限時間がないことを意味します。

高速機能が使用されている場合、これは、特定のトランザクション名について、プログラムが単一のトランザクション・メッセージを処理するために許容される時間の長さ (100 分の 1 秒単位) を指定します。時間は、トランザクション処理中に経過する実時間 (累算タスク時間ではなく) を表します。実時間が使用されるのは、入力端末が応答モードにあり、応答が送信されるまでは別のトランザクションを入力できないためです。この場合、PLCT() は無視されます。

この値は、アプリケーション・プログラムのループを制御します。プログラムとトランザクション間の実行時間の値を最適化する必要はありません。ただし、割り当てられた時間値が、予想されるトランザクション当たりの実行時間を下回ってはなりません。スケジュールされたアプリケーション・プログラムが PLCTIME() と PLCT() の積を超えた場合、アプリケーション・プログラムは異常終了します。 DFSMPR プロシージャで IMS STIMER 値が 2 に指定されている場合、領域は DL/I 呼び出しが完了するまで異常終了しません。

アプリケーション・プログラムでは、STIMER タイマー・サービスを使用してはなりません。IMS は、トランザクションの実行時間を計測するために STIMER タイマー・サービスを使用します。アプリケーション・プログラムが MVS STIMER マクロを発行すると、IMS によって設定された STIMER タイマー・サービスが取り消されます。アプリケーション・プログラムのタイマー要求には、代わりに STIMERM マクロを使用してください。

RECOVER

リカバリー・オプションを指定します。

N トランザクションはリカバリーされません。

Y IMS 緊急時再始動または正常再始動の際に、トランザクションはリカバリーされます。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- CONV(Y) と RECOVER(N) は相互に排他的です。
- FP(E) と RECOVER(N) は相互に排他的です。
- FP(P) と RECOVER(N) は相互に排他的です。
- INQ(N) と RECOVER(N) は相互に排他的です。

REMOTE

リモート・オプションを指定します。

N トランザクションはリモートではありません。トランザクションはローカルであり、ローカル・システムで実行されます。

Y トランザクションはリモートです。トランザクションはリモート・システムで実行されます。

REMOTE(Y) は、MSNAME もしくは SIDR と SIDL を必要とします。

RESP

応答モード・オプションを指定します。

N トランザクションは応答モードではありません。デフォルトの OPTIONS=TRANRESP を指定しているか、デフォルトを受け入れる端末の場合、このトランザクションが入力された後、入力が停止してはなりません。

Y トランザクションは応答モードです。トランザクションの入力元の端末は保留にされ、応答を受信するまで、それ以上の入力を阻止します。デフォルトの OPTIONS=TRANRESP を指定しているか、デフォルトを受け入れる端末の場合、このトランザクションが入力された後、このトランザクションが応答メッセージを端末に戻すまでは、追加メッセージは

許可されません。応答モードは、個々の端末の定義によって、強制または無効にすることができます。応答モードで稼働しないすべての端末では、オンライン処理時に RESP(Y) は無視されます。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- FP(E) と RESP(N) は相互に排他的です。
- FP(P) と RESP(N) は相互に排他的です。
- MSGTYPE(MULTSEG) と RESP(Y) は相互に排他的です。

SEGNU

セグメント数を指定します。これは、アプリケーション・プログラムからの Get Unique (GU) 呼び出し当たりの、メッセージ・キューに入れることができるアプリケーション・プログラム出力セグメントの最大数です。値は 0 から 65535 までの数字が可能です。SEGNU(0) が定義されている場合、実行時にオンライン・システムによってセグメント数は検査されません。

SEGSZ

セグメント・サイズを指定します。これは、1 つの出力セグメントに許されるバイトの最大数です。値は 0 から 65535 までの数字が可能です。SEGSZ(0) が定義されている場合、実行時にオンライン・システムによってセグメント・サイズは検査されません。

LU 6.2 装置への最大出力メッセージ・セグメントは 32767 です。トランザクションが LU 6.2 装置に出力を送信することが予想される場合は、SEGSIZE パラメーターを 32767 より大きくしてはなりません。ただし、これはコマンドの処理中は実行されません。IMS は、出力時点までメッセージの宛先の装置タイプを判別できないからです。

SERIAL

シリアル・オプションを指定します。

- N** トランザクションのメッセージは、逐次処理されません。メッセージは並列で処理できます。U3303 疑似アベンドの後、メッセージは中断キューに入れられます。障害が繰り返し発生してトランザクションが USTOP で停止されるまで、スケジューリングが続行されます。
- Y** トランザクションのメッセージは、逐次処理されます。U3303 疑似アベンドでは、メッセージは中断キューに入れられるのではなく、トランザクション・メッセージ・キューの前に置かれ、トランザクションは USTOP で停止します。/START または UPD TRAN コマンドでトランザクションまたはクラスが開始されると、トランザクションの USTOP は除去されます。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- MAXRGN>0 と SERIAL(Y) は相互に排他的です。
- PARLIM 値 0 から 32767 と SERIAL(Y) は、相互に排他的です。

SIDL

複数 IMS システム (MSC) 構成内のローカル・システムのシステム ID (SYSID) を指定します。ローカル・システムは、応答の返送先の発信元シス

テムです。値は 1 から 2036 までの数値です。ローカル SYSID は、任意のまたはすべての MSNAME またはトランザクションに定義できます。

SIDL パラメーターは、MSPLINK マクロ・ステートメントの TYPE= キーワードで指定されたリンク・タイプ (CTC、MTM、TCP/IP、VTAM) から独立しています。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- SIDL と SIDR が対で指定され、かつ、この IMS のローカル・システム ID に等しい値でない限り、FP(E) と SIDL は相互に排他的です。
- MSNAME と SIDL は相互に排他的です。
- SIDL 値は、この IMS に対して定義されている必要があります。

SIDR

複数 IMS システム (MSC) 構成内のリモート・システムのシステム ID (SYSID) を指定します。リモート・システムは、アプリケーション・プログラムを実行するシステムです。値は 1 から 2036 までの数値です。指定されたリモート SYSID は、MSNAME に対しても定義されている必要があります。

SIDR パラメーターは、MSPLINK マクロ・ステートメントの TYPE= キーワードで指定されたリンク・タイプ (CTC、MTM、TCP/IP、VTAM) から独立しています。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- SIDL と SIDR が対で指定され、かつ、この IMS のローカル・システム ID に等しい値でない限り、FP(E) と SIDR は相互に排他的です。
- MSNAME と SIDR は相互に排他的です。
- SIDR 値は、この IMS に対して定義されている必要があります。

SPASZ

会話型トランザクションのスクラッチパッド域 (SPA) のサイズ (バイト単位) を指定します。値は 16 から 32767 までの数値です。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- CONV(N) と SPASZ は相互に排他的です。

SPATRUNC

会話型トランザクションのスクラッチパッド域 (SPA) の切り捨てオプションを指定します。これは、より小さい SPA で定義されたトランザクションへのプログラム間通信の後、SPA データを切り捨てるか、保存するかどうかを定義します。

会話の最初の開始時、およびプログラム間通信時に、SPATRUNC オプションが検査され、指定に応じて設定またはリセットされます。オプションが設定されると、それは会話の存続期間の間、またはそのオプションをリセットする必要があることを指定したトランザクションへのプログラム間通信が発生するまで、設定されたままです。

プログラム間通信が発生した場合、新しいトランザクションの切り捨てデータ・オプションが最初に検査され、その仕様が会話に対して設定されて、出

力メッセージに挿入される SPA に使用されます。新しいトランザクションでこのオプションが指定されていない場合、会話に対して現在有効なオプションが使用されます。

S より小さい SPA で定義されたトランザクションへのプログラム間通信が行われる場合でも、IMS は SPA 内のデータをすべて保存します。より小さい SPA を持つトランザクションには、切り捨てられたデータは見えませんが、より大きい SPA を持つトランザクションに切り替えられたときに、切り捨てられたデータは使用されます。

R 切り捨てられたデータは保存されません。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- CONV(N) と SPATRUNC は相互に排他的です。

TRANSTAT

メッセージ・ドリブン・プログラムのトランザクション・レベル統計をログに記録するかどうかを指定します。Y が指定されている場合、トランザクション・レベル統計は X'56FA' ログ・レコード内のログに書き込まれます。

N トランザクション・レベル統計をログに記録しません。

Y トランザクション・レベル統計をログに記録します。

UPDATE TRAN または UPDATE TRANDESC コマンドで TRANSTAT キーワードを使用することにより、ユーザーは、システム・デフォルトまたは TRANSTAT パラメーターの現行値をオーバーライドすることができます。UPDATE TRAN または UPDATE TRANDESC コマンドで TRANSTAT キーワードを省略した場合は、現行のトランザクション・レベル統計の設定は変更されません。

WFI

入力待ちオプションを指定します。この属性は、常に入力待ちトランザクションとして動作する、高速機能トランザクションには適用されません。

N これは、入力待ちトランザクションではありません。

Y これは、入力待ちトランザクションです。WFI トランザクションを処理するメッセージ処理またはバッチ処理アプリケーション・プログラムは、通常どおりにスケジュールされ、呼び出されます。処理するトランザクションが WFI として定義されている場合、プログラムは、使用可能な入力メッセージを処理した後も主ストレージに残ることが許可されます。以下の場合、QC 状況コード (これ以上メッセージがない) が戻されます。すなわち、PROCLIM カウント (PLCT) に達した場合、スケジュールされたトランザクション、データベース、プログラム、またはクラスの状態を変更するためにコマンドが入力された場合、トランザクションで使用されるデータベースに関するコマンドが入力された場合、あるいは IMS がチェックポイント・シャットダウンで終了した場合です。

キーワードの組み合わせ規則には次のものがあります。

- MODE(MULT) と WFI(Y) は相互に排他的です。

使用上の注意

UPDATE コマンドで指定されたすべての属性が既にその記述子に定義されている場合、更新は実際には行われず、記述子は静止されず、ログ・レコードは作成されず、ゼロの完了コードが戻されます。これにより、アクションを行う必要がないときに、不要なオーバーヘッドを回避できます。

記述子は、DELETE コマンドを使用して削除されない限り、IMS の存続期間中存在しています。記述子は、IMS ウォーム・スタートまたは緊急時再始動を越えて、リカバリー可能です。IMS がコールド・スタートする場合、IMS が稼働中にエクスポートされた定義をコールド・スタートがインポートしない限り、記述子は失われます。各記述子が個別に更新されます。個別の更新は、オンライン変更の機能 (すべての記述子が更新されるか、どの記述子も更新されないかのいずれか) とは異なります。

UPDATE TRANDESC コマンドは、OM API を介してのみ出すことができます。このコマンドは DB/DC および DCCTL システムに適用されます。

このコマンドは、XRF 代替または FDBR 領域では無効です。MODBLKS のオンライン変更が使用可能な場合 (DFSDFxxx または DFSCGxxx が MODBLKS=OLC で定義されているか、MODBLKS が定義されていない場合)、UPDATE TRANDESC コマンドは無効です。

このコマンドはリカバリー可能です。

更新される記述子が IMS 定義のトランザクション記述子 (DFSSTR1) である場合、変更できる唯一の属性は、DEFAULT 属性です。

出力フィールド

以下の表には、UPDATE TRANDESC 出力フィールドが記載されています。表の各列は以下のとおりです。

ショート・ラベル

XML 出力で生成されたショート・ラベルが記載されています。

キーワード

フィールドを生成させるコマンドのキーワードを識別します。N/A は、常に戻される出力フィールドの場合に表示されています。エラーが発生した場合のみ戻される出力フィールドについては、*error* が表示されます。

意味 出力フィールドの簡略説明を提供します。

表 543. UPDATE TRANDESC コマンド出力フィールド

ショート・ラベル	キーワード	意味
CC	N/A	完了コード。
CCTXT	<i>error</i>	ゼロ以外の完了コードの意味を簡潔に説明する完了コード・テキスト。
DESC	TRANDESC	トランザクション記述子名。
ERRT	<i>error</i>	診断情報を含むエラー・テキスト。エラー・テキストはゼロ以外の完了コードに戻すことができ、完了コードをさらに説明する情報を含んでいます。

戻りコード、理由コード、および完了コード

以下の表は、戻りコードと理由コード、およびコードの簡単な説明を示しています。コマンドに戻される戻りコードまたは理由コードは、CSL 要求からのエラーを示すこともあります。

表 544. UPDATE TRANDESC コマンドの戻りコードと理由コード

戻りコード	理由コード	意味
X'00000000'	X'00000000'	コマンドは正常に完了しました。コマンド出力は、各記述子の行と、その完了コードを含んでいます。NAME(*) が OPTION(ALLRSP) なしで指定される場合、出力行は戻されません。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'00000004'	X'00002008'	キーワードの数が無効です。SET キーワードが必要です。
X'00000008'	X'00002100'	CMTMODE(MULT) と WFI(Y) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002101'	CONV(Y) と CMTMODE(MULT) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002102'	CONV(Y) と INQ(Y) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002103'	CONV(N) と、SPASZ>0 および SPATRUNC は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002104'	CONV(Y) と RECOVER(N) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002105'	CONV(Y) には SPASZ および SPATRUNC が必要です。
X'00000008'	X'00002108'	無効な EDITRTN 名です。
X'00000008'	X'0000210C'	FP(E) と EDITRTN は相互に排他的です。
X'00000008'	X'0000210E'	FP(E) または FP(P) と、MSC キーワード MSNAME または SIDR と SIDL とは、相互に排他的です。
X'00000008'	X'0000210F'	FP(E) または FP(P) と MSGTYPE(MULTSEG) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002110'	FP(N) と EMHBSZ > 0 は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002111'	FP(E) または FP(P) と RECOVER(N) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002112'	FP(E) または FP(P) と RESP(N) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002116'	INQ(N) と RECOVER(N) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002119'	MSC キーワードの MSNAME または SIDL/SIDR と、このトランザクションに関連する高速機能専用 (FP(E)) として定義されているアプリケーション・プログラムは、相互に排他的です。
X'00000008'	X'0000211A'	無効な MSNAME 名です。
X'00000008'	X'0000211B'	MSNAME と、SIDL および SIDR とは、相互に排他的です。

表 544. UPDATE TRANDESC コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000008'	X'0000211D'	MAXRGN>0 と PARLIM(65535) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'0000211E'	MAXRGN>0 と SERIAL(Y) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002121'	PARLIM 値と SERIAL(Y) は相互に排他的です。
X'00000008'	X'00002125'	REMOTE(Y) は、MSC キーワードの MSNAME、または SIDR と SIDL を必要とします。
X'00000008'	X'00002126'	SIDL 値は無効です。
X'00000008'	X'00002127'	SIDL/SIDR は、対として指定する必要があります。SIDL が単独で指定されたか、SIDR が単独で指定されたかのいずれかです。
X'00000008'	X'00002128'	SIDL 値は無効です。
X'00000008'	X'00002133'	複数の name パラメーターが DEFAULT(Y) に指定されています。1 度に 1 つの記述子のみをデフォルトにできます。
X'0000000C'	X'00003000'	コマンドは一部の記述子で正常に実行されました。コマンド出力は、各記述子の行と、その完了コードを含んでいます。NAME(*) が OPTION(ALLRSP) なしで指定されている場合、ゼロ以外の完了コードをもつ記述子についてのみ出力行が戻されます。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'0000000C'	X'00003004'	コマンドはどの記述子でも正常に実行されませんでした。コマンド出力は、各記述子の行と、その完了コードを含んでいます。詳しくは、完了コード表を参照してください。
X'00000010'	X'0000400C'	XRF 代替システムではコマンドは無効です。
X'00000010'	X'00004024'	高速機能が定義されていません。FP(E)、FP(P)、または EMHBSZ >0 は無効です。
X'00000010'	X'00004120'	オンライン変更フェーズが進行中です。
X'00000010'	X'00004300'	MODBLKS のオンライン変更が有効なため、コマンドが許可されません (DFSDFxxx または DFSCGxxx が MODBLKS=OLC で定義されているか、または MODBLKS が定義されていません)。
X'00000010'	X'00004310'	トランザクション入力編集ルーチン・テーブル用のストレージを取得できませんでした。このエラーを修正するには、コールド・スタートが必要です。
X'00000010'	X'00004314'	トランザクション入力編集ルーチンをロードできませんでした。
X'00000010'	X'00004318'	新規のトランザクション入力編集ルーチンを追加できませんでした。ルーチンの最大数である 255 個に既に達しています。
X'00000014'	X'00005004'	DFSOCMD 応答バッファを取得できませんでした。
X'00000014'	X'00005008'	DFSPOOL ストレージを取得できませんでした。
X'00000014'	X'0000500C'	AWE を取得できませんでした。

表 544. UPDATE TRANDESC コマンドの戻りコードと理由コード (続き)

戻りコード	理由コード	意味
X'00000014'	X'00005010'	ラッチを取得できませんでした。
X'00000014'	X'000050FF'	内部エラーが原因で、UPDATE TRANDESC コマンド処理は終了しました。

このコマンドの処理に固有のエラーは、完了コードとして戻されます。以下の表には、完了コードの説明が記載されています。

表 545. UPDATE TRANDESC コマンドの完了コード

完了コード	完了コード・テキスト	意味
0		トランザクション記述子に対するコマンドは正常に完了しました。
10	NO RESOURCES FOUND	トランザクション記述子名が無効であるか、指定されたワイルドカード・パラメーターがどの記述子名にも一致しません。
17	ANOTHER CMD IN PROGRESS	このトランザクション記述子に対して別のコマンド (DELETE または UPDATE など) が進行中です。これは、固有またはワイルドカードの複数のパラメーターで記述子が指定されている場合、このコマンドを意味する場合もあります。
19	CMTMODE=MULT/WFI=Y CONFLICT	複数コミット・モード CMTMODE(MULT) オプションは、入力待ち WFI(Y) オプションと競合するために、トランザクション記述子の更新は失敗しました。
1B	CONV=Y/CMTMODE=MULT CONFLICT	会話 CONV(Y) オプションは、複数コミット・モードと競合するため、トランザクション記述子の更新は失敗しました。
1E	CONV=N/SPASZ/SPATRUNC CONFLICT	CONV(N) オプションは、SPA サイズまたは SPA 切り捨てオプションと競合するため、トランザクション記述子の更新は失敗しました。
1F	CONV=Y/RECOVER=N CONFLICT	会話 CONV(Y) オプションは、リカバリー不能 RECOVER(N) オプションと競合するため、トランザクション記述子の更新は失敗しました。
27	NOT ALLOWED FOR DEFAULT DESCRIPTOR	デフォルト記述子はランタイム・リソース定義属性を更新できないため、トランザクション記述子の更新は失敗しました。
2F	FP=E/BMPTYPE=Y CONFLICT	高速機能専用 FP(E) オプションは、バッチ BMPTYPE(Y) として定義されたプログラムと競合するため、トランザクション記述子の更新は失敗しました。
35	FP=E/EDITRTN CONFLICT	高速機能専用 FP(E) オプションは、編集ルーチン EDITRTN と競合するため、トランザクション記述子の更新は失敗しました。
36	FP=E/FP=N PGM CONFLICT	高速機能専用 FP(E) オプションは、非高速機能 FP(N) として定義されたプログラムと競合するため、トランザクション記述子の更新は失敗しました。
38	NOT ALLOWED FOR A BMP	トランザクション記述子に関連する PSB は BMP であるため、このリソースに対しては UPDATE TRAN コマンドは無効です。
3A	FP=E OR P/MSK KEYWORD CONFLICT	高速機能専用 FP(E) または高速機能利用可能 FP(P) オプションは、MSC MSNAME、SIDR/SIDL オプションと競合するため、トランザクション記述子の更新は失敗しました。
3B	FP/MSGTYPE=MULTSEG CONFLICT	高速機能専用 FP(E) または高速機能利用可能 FP(P) オプションは、メッセージ・タイプ複数セグメント MSGTYPE(MULTSEG) オプションと競合するため、トランザクション記述子の更新は失敗しました。
3C	MAXRGN/PARLIM=65535 CONFLICT	最大領域カウント MAXRGN 値は、並列限界カウント PARLIM 値 65535 (並列処理が使用不可であることを意味する) と競合するため、トランザクション記述子の更新は失敗しました。 MAXRGN>0 と PARLIM(65535) は一緒に使用できません。
3E	FP=N/FP=E PGM CONFLICT	非高速機能 FP(N) オプションは、高速機能専用 FP(E) として定義されたプログラムと競合するため、トランザクション記述子の更新は失敗しました。
3F	FP=P/BMPTYPE=Y CONFLICT	高速機能利用可能プログラム FP(P) は、バッチ BMPTYPE(Y) として定義されたプログラムと競合するため、トランザクション記述子の更新は失敗しました。
40	PARLIM/SCHDTYPE=SERIAL CONFLICT	トランザクションに関連する PSB が、並列スケジューリングをもっていないものとして定義されているため、PARLIM はリソースに応じて変更できません。
41	FP=E OR P/RECOVER=N CONFLICT	高速機能専用 FP(E) または高速機能利用可能 FP(P) オプションは、リカバリー不能 RECOVER(N) オプションと競合するため、トランザクション記述子の更新は失敗しました。

表 545. UPDATE TRANDESC コマンドの完了コード (続き)

完了コード	完了コード・テキスト	意味
42	FP=E OR P/RESP=N CONFLICT	高速機能専用 FP(E) または高速機能利用可能 FP(P) オプションは、応答モード RESP(N) オプションと競合するため、トランザクション記述子の更新は失敗しました。
48	NOT ALLOWED FOR IMS RESOURCE	指定された UPDATE コマンドは、IMS 記述子およびリソースに対しては使用できません。DFSDSTR1 は、IMS 記述子の一例です。更新できる唯一の IMS 記述子属性は、DEFAULT(Y) です。
49	INQ=N/RECOVER=N CONFLICT	非照会 INQ(N) オプションはリカバリー不能 RECOVER(N) オプションと競合するため、トランザクション記述子の更新は失敗しました。
4F	INVALID MAXRGN VALUE	最大領域 MAXRGN 値が無効です。
5E	MAXRGN GT 0/SERIAL=Y CONFLICT	ゼロ以外の最大領域値は、シリアル SERIAL(Y) オプションと競合するため、トランザクション記述子の更新は失敗しました。
61	DFSBCB STORAGE ERROR.	DFSBCB ストレージを取得できませんでした。
6B	PARLIM/SERIAL=Y CONFLICT	並列限界 PARLIM 値は、シリアル SERIAL(Y) オプションと競合するため、トランザクション記述子の更新は失敗しました。
6D	INVALID PROGRAM NAME	
79	REMOTE/SIDR/SIDL/MSNAME CONFLICT	リモート REMOTE(Y) オプションは、MSC キーワード (MSNAME または SIDR/SIDL など) を必要とするため、トランザクション記述子の更新は失敗しました。
8A	WILDCARD PARAMETER NOT SUPPORTED	ワイルドカード・パラメーターが DEFAULT(Y) で指定されました。1 度に 1 つの記述子のみをデフォルトにできます。
1D7	IMPORT CHANGE LIST ERROR	記述子は、IMSRSC リポジトリ内の変更リストからのインポート処理中であるか、変更リストから正常にインポートされませんでした。記述子は、リポジトリから正常にインポートされるまでは、更新することができません。

例

以下に示すのは UPDATE TRANDESC コマンドの例です。

UPDATE TRANDESC コマンドの例 1

TSO SPOC 入力:

```
UPD TRANDESC NAME(*) SET(FP(E)) OPTION(ALLRSP)
```

TSO SPOC 出力:

```
Response for: UPD TRANDESC NAME(*) SET(FP(E)) OPTION(ALLRSP)
DescName MbrName CC CText
CONVDESC IMS1 3B FP/MSGTYPE=MULTSEG CONFLICT
DESC001 IMS1 3B FP/MSGTYPE=MULTSEG CONFLICT
DESC002 IMS1 3B FP/MSGTYPE=MULTSEG CONFLICT
DESC003 IMS1 3B FP/MSGTYPE=MULTSEG CONFLICT
DESC004 IMS1 3B FP/MSGTYPE=MULTSEG CONFLICT
DESC005 IMS1 3B FP/MSGTYPE=MULTSEG CONFLICT
DESC101 IMS1 0
DESC102 IMS1 0
DESC103 IMS1 0
DESC104 IMS1 0
DESC105 IMS1 0
DESC201 IMS1 3B FP/MSGTYPE=MULTSEG CONFLICT
DESC202 IMS1 3B FP/MSGTYPE=MULTSEG CONFLICT
DESC203 IMS1 3B FP/MSGTYPE=MULTSEG CONFLICT
DESC204 IMS1 3B FP/MSGTYPE=MULTSEG CONFLICT
DESC205 IMS1 3B FP/MSGTYPE=MULTSEG CONFLICT
DFSDSTR1 IMS1 3B FP/MSGTYPE=MULTSEG CONFLICT
FPPDESC IMS1 0
FPPDESC IMS1 36 FP=E/FP=N PGM CONFLICT
MSCDESC IMS1 3A FP=E OR P/MSC KEYWORD CONFLICT
```

OM API 入力:

```
CMD(UPDATE TRANDESC NAME(*) SET(OPTION(ALLRSP)))
```

OM API 出力:

```

<imsout>
<ctl>
<omname>OM10M </omname>
<omvsn>1.3.0</omvsn>
<xmlvsn>20 </xmlvsn>
<statime>2006.312 22:26:57.314733</statime>
<stotime>2006.312 22:26:57.315449</stotime>
<staseq>BFAD419D67BADF8C</staseq>
<stoseq>BFAD419D67E79D0C</stoseq>
<rqsttkn1>USRT011 10142657</rqsttkn1>
<rc>0200000C</rc>
<rsn>00003008</rsn>
<rsnmsg>CSLN054I</rsnmsg>
<rsntxt>None of the clients were successful.</rsntxt>
</ctl>
<cmderr>
<mbr name="IMS1 ">
<typ>IMS </typ>
<styp>DBDC </styp>
<rc>0000000C</rc>
<rsn>00003000</rsn>
<rsntxt>At least one request successful</rsntxt>
</mbr>
</cmderr>
<cmd>
<master>IMS1 </master>
<userid>USRT011 </userid>
<verb>UPD </verb>
<kwd>TRANDESC </kwd>
<input>UPD TRANDESC NAME(*) SET(FP(E)) OPTION(ALLRSP) </input>
</cmd>
<cmdrsphdr>
<hdr s1b1="DESC" l1b1="DescName" scope="LCL" sort="a" key="1"
  scroll="no" len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="MBR" l1b1="MbrName" scope="LCL" sort="a" key="2" scroll="no"
  len="8" dtype="CHAR" align="left" />
<hdr s1b1="CC" l1b1="CC" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="4" dtype="INT" align="right" skipb="no" />
<hdr s1b1="CCTXT" l1b1="CCText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1b1="GBL" l1b1="Global" scope="GBL" sort="d" key="2" scroll="yes"
  len="1" dtype="CHAR" align="left" skipb="y" />
<hdr s1b1="ERRT" l1b1="ErrorText" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="*" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1b1="CONVID" l1b1="ConvID" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="4" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1b1="NODE" l1b1="NodeName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1b1="USER" l1b1="UserName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="8" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1b1="LU" l1b1="LUName" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="24" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1b1="TMEM" l1b1="TMember" scope="LCL" sort="n" key="0"
  scroll="yes" len="16" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
<hdr s1b1="TPIP" l1b1="TPipe" scope="LCL" sort="n" key="0" scroll="yes"
  len="8" dtype="CHAR" skipb="yes" align="left" />
</cmdrsphdr>
<cmdrspdata>
<rsp>DESC(DESC102 ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>DESC(DESC004 ) MBR(IMS1) CC( 3B) CCTXT(FP/MSGTYPE=MULTSEG CONFLICT) </rsp>
<rsp>DESC(DESC205 ) MBR(IMS1) CC( 3B) CCTXT(FP/MSGTYPE=MULTSEG CONFLICT) </rsp>
<rsp>DESC(DFSDSTR1) MBR(IMS1) CC( 3B) CCTXT(FP/MSGTYPE=MULTSEG CONFLICT) </rsp>
<rsp>DESC(DESC201 ) MBR(IMS1) CC( 3B) CCTXT(FP/MSGTYPE=MULTSEG CONFLICT) </rsp>
<rsp>DESC(FPPDESC ) MBR(IMS1) CC( 36) CCTXT(FP=E/FP=N PGM CONFLICT)
</rsp>

```


```

<rsp>DESC(DESC103 ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>DESC(DESC005 ) MBR(IMS1) CC( 3B) CCTXT(FP/MSGTYPE=MULTSEG CONFLICT) </rsp>
<rsp>DESC(DESC001 ) MBR(IMS1) CC( 3B) CCTXT(FP/MSGTYPE=MULTSEG CONFLICT) </rsp>
<rsp>DESC(DESC202 ) MBR(IMS1) CC( 3B) CCTXT(FP/MSGTYPE=MULTSEG CONFLICT) </rsp>
<rsp>DESC(DESC104 ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>DESC(CONVDESC) MBR(IMS1) CC( 3B) CCTXT(FP/MSGTYPE=MULTSEG CONFLICT) </rsp>
<rsp>DESC(DESC002 ) MBR(IMS1) CC( 3B) CCTXT(FP/MSGTYPE=MULTSEG CONFLICT) </rsp>
<rsp>DESC(DESC203 ) MBR(IMS1) CC( 3B) CCTXT(FP/MSGTYPE=MULTSEG CONFLICT) </rsp>
<rsp>DESC(MSCDESC ) MBR(IMS1) CC( 3A) CCTXT(FP=E OR P/MSC KEYWORD CONFLICT) </rsp>
<rsp>DESC(DESC105 ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>DESC(DESC101 ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>DESC(FPEDESC ) MBR(IMS1) CC( 0) </rsp>
<rsp>DESC(DESC003 ) MBR(IMS1) CC( 3B) CCTXT(FP/MSGTYPE=MULTSEG CONFLICT) </rsp>
<rsp>DESC(DESC204 ) MBR(IMS1) CC( 3B) CCTXT(FP/MSGTYPE=MULTSEG CONFLICT) </rsp>
</cmdrspdata>
</imsout>


```


説明: すべてのトランザクション記述子を高速機能専用を更新するために、UPDATE TRANDESC コマンドが発行されています。一部のトランザクション記述子は更新に成功し、その他は失敗しました。一部のトランザクション記述子の更新は、完了コード 0 で示されているように、正常に実行されました。トランザクション記述子 FPPDESC の更新は、完了コード 36 で失敗しました。これは、FP(E) 属性が FPPDESC によって参照されるプログラムに定義されている FP(N) と競合することを示しています。トランザクション記述子 MSCDESC の更新は、完了コード 3A で失敗しました。これは、FP(E) 属性が記述子 MSCDESC に既に定義されている MSC 設定と競合することを示しています。一部のトランザクション記述子の更新は、完了コード 3B で失敗しました。これは、FP(E) 属性がトランザクションに対して既に定義されている MSGTYPE(MULTSEG) と競合することを示しています。

関連概念:

 CSL 要求の戻りコードおよび理由コードの解釈方法 (システム・プログラミング API)

関連資料:

 コマンド・キーワードとその同義語 (コマンド)

 コミット確認出口ルーチン (出口ルーチン)

VSO エリアの場合は、/VUNLOAD コマンドは IMS の再始動後も持続するの
で、/START AREA コマンドによってのみリセットできます。これは、すべての共
用パートナー間の整合性に関する共用 VSO 域について当てはまります。これは、
他のシステムがカップリング・ファシリティからアクセスしている時に、あるシ
ステムが DASD からのデータにアクセスするのを阻止します。

単一のカップリング・ファシリティ構造を共用する複数の VSO DEDB エリアの
場合は、/VUNLOAD AREA コマンドが出されると、以下のアクションのいずれか
が行われることがあります。

- 構造内にエリアが 1 つしかない場合 (単一エリア構造かまたはエリアが 1 つだ
けの多重エリア構造の場合) は、そのエリアが VSO から取り出され、構造は削
除されます。 /VUNLOAD AREA コマンドを出している IMS は、そのエリア
を共用している他の IMS システムに、その構造から切断するよう通知します。
- 構造内に複数のエリアがある場合は、VSO から 1 つのエリアが取り出される
と、そのエリアは CI から分離され、構造から削除されます。 /VUNLOAD
AREA を出している IMS は、そのエリアを共用している他の IMS システム
に、IMS がまだ構造内の他のエリアを共用しているかどうかに応じて、構造から
分離または切断するように通知します。

このコマンドは、バッチ SPOC ユーティリティを使用する IMSplex に対して発
行できます。

例

入力 ET:

```
/VUNLOAD
```

応答 ET:

```
NC0000000 FPEC 03070 09:58:03.52 01 00000290 R 14,/VUN AREA DD01AR0
NR8400000 FPEC 03070 09:58:03.52 JOB00116 00000090 IEE600I REPLY TO 14 IS;/VUN AREA DD01AR0
N 8400000 FPEC 03070 09:58:03.53 JOB00116 00000090 DFS058I 09:58:03 VUNLOAD COMMAND IN PROGRESS SYS3
W 8400000 FPEC 03070 09:58:03.53 JOB00116 00000090 *17 DFS996I *IMS READY* SYS3
N 8400000 FPEC 03070 09:58:04.42 JOB00116 00000090 DFS2823I AREA DD01AR0
DISCONNECT FROM STR: DD01AR0STR1 SUCCESSFUL SYS3
N 8400000 FPEC 03070 09:58:04.42 JOB00116 00000090 DFS0488I VUN COMMAND COMPLETED. AREA= DD01AR0 RC= 0 SYS3
```

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。本書の他言語版を IBM から入手できる場合があります。ただし、ご利用にはその言語版の製品もしくは製品のコピーを所有していることが必要な場合があります。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510

東京都中央区日本橋箱崎町19番21号

日本アイ・ビー・エム株式会社

法務・知的財産

知的財産権ライセンス渉外

IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Director of Licensing
IBM Corporation
North Castle Drive, MD-NC119
Armonk, NY 10504-1785
US

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

記載されている性能データとお客様事例は、例として示す目的でのみ提供されています。実際の結果は特定の構成や稼働条件によって異なります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名前はすべて架空のものであり、類似する個人や企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態を提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生的創作物にも、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

© (お客様の会社名) (年).

このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。

© Copyright IBM Corp. _年を入れる_.

商標

IBM、IBM ロゴおよび [ibm.com](http://www.ibm.com)[®] は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、<http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml> をご覧ください。

Adobe、Adobe ロゴ、PostScript ロゴは、Adobe Systems Incorporated の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Oracle やその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

製品資料に関するご使用条件

これらの資料は、以下のご使用条件に同意していただける場合に限りご使用いただけます。

適用される条件

このご使用条件は、IBM Web サイトのすべてのご利用条件に追加して適用されます。

個人使用

これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、非商業的な個人による使用目的に限り複製することができます。ただし、IBM の明示的な承諾をえずに、これらの資料またはその一部について、二次的著作物を作成したり、配布 (頒布、送信を含む) または表示 (上映を含む) することはできません。

商業的使用

これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、お客様の企業内に限り、複製、配布、および表示することができます。ただし、IBM の明示的な承諾をえずにこれらの資料の二次的著作物を作成したり、お客様の企業外で資料またはその一部を複製、配布、または表示することはできません。

権利

ここで明示的に許可されているもの以外に、資料や資料内に含まれる情報、データ、ソフトウェア、またはその他の知的所有権に対するいかなる許可、ライセンス、または権利を明示的にも黙示的にも付与するものではありません。

資料の使用が IBM の利益を損なうと判断された場合や、上記の条件が適切に守られていないと判断された場合、IBM はいつでも自らの判断により、ここで与えた許可を撤回できるものとさせていただきます。

お客様がこの情報をダウンロード、輸出、または再輸出する際には、米国のすべての輸出入 関連法規を含む、すべての関連法規を遵守するものとします。

IBM は、これらの資料の内容についていかなる保証もしません。これらの資料は、特定物として現存するままの状態を提供され、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任なしで提供されます。

IBM オンライン・プライバシー・ステートメント

サービス・ソリューションとしてのソフトウェアも含めた IBM ソフトウェア製品（「ソフトウェア・オファリング」）では、製品の使用に関する情報の収集、エンド・ユーザーの使用感の向上、エンド・ユーザーとの対話またはその他の目的のために、Cookie はじめさまざまなテクノロジーを使用することがあります。多くの場合、ソフトウェア・オファリングにより個人情報が収集されることはありません。IBM の「ソフトウェア・オファリング」の一部には、個人情報を収集できる機能を持つものがあります。ご使用の「ソフトウェア・オファリング」が、これらの Cookie およびそれに類するテクノロジーを通じてお客様による個人情報の収集を可能にする場合、以下の具体的事項をご確認ください。

この「ソフトウェア・オファリング」は、Cookie もしくはその他のテクノロジーを使用して個人情報を収集することはありません。

この「ソフトウェア・オファリング」が Cookie およびさまざまなテクノロジーを使用してエンド・ユーザーから個人を特定できる情報を収集する機能を提供する場合、お客様は、このような情報を収集するにあたって適用される法律、ガイドライン等を遵守する必要があります。これには、エンドユーザーへの通知や同意の要求も含まれますがそれらには限られません。

このような目的での Cookie を含む様々なテクノロジーの使用の詳細については、IBM の『IBM オンラインでのプライバシー・ステートメント』（<http://www.ibm.com/privacy/details/jp/ja/>）の『クッキー、ウェブ・ビーコン、その他のテクノロジー』および『IBM Software Products and Software-as-a-Service Privacy Statement』（<http://www.ibm.com/privacy/details>）を参照してください。

参考文献

この参考文献のリストには、IMS 15 ライブラリーのすべての資料が記載されています。

表題	頭字語	資料番号
IMS V15 アプリケーション・プログラミング	APG	SC27-6778
IMS V15 アプリケーション・プログラミング API	APR	SC27-6779
IMS V15 コマンド 第 1 巻: IMS コマンド A-M	CR1	SC27-6780
IMS V15 コマンド 第 2 巻: IMS コマンド N-V	CR2	SC27-6781
IMS V15 コマンド 第 3 巻: IMS コンポーネント および z/OS コマンド	CR3	SC27-6782
IMS V15 コミュニケーションおよびコネクション	CCG	SC27-6783
IMS V15 データベース管理	DAG	SC27-6784
IMS V15 データベース・ユーティリティー	DUR	SC27-6785
IMS Version 15 Diagnosis	DGR	GC27-6786
IMS V15 出口ルーチン	ERR	SC27-6787SC43- 3856
IMS V15 インストール	INS	SC27-6788
IMS Version 15 Licensed Program Specifications	LPS	GC27-6799
IMS V15 メッセージおよびコード 第 1 巻: DFS メッセージ	MC1	GC27-6789
IMS V15 メッセージおよびコード 第 2 巻: DFS 以外メッセージ	MC2	GC27-6790
IMS V15 メッセージおよびコード 第 3 巻: IMS 異常終了コード	MC3	GC27-6791
IMS V15 メッセージおよびコード 第 4 巻: IMS コンポーネント・コード	MC4	GC27-6792
IMS V15 オペレーションおよびオートメーション	OAG	SC27-6793
IMS V15 リリース計画	RPG	GC27-6794
IMS V15 システム管理	SAG	SC27-6795
IMS V15 システム定義	SDG	GC27-6796
IMS V15 システム・プログラミング API	SPR	SC27-6797
IMS V15 システム・ユーティリティー	SUR	SC27-6798

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アクセシビリティ
キーボード・ショートカット x
機能 x
アクティブ・システム
マスター端末表示画面 1002

[カ行]

キーボード・ショートカット x
高可用性ラージ・データベース (HALDB)
UPDATE OLREORG
ALTER オプションが指定された場合の OLR の更新 1341

高速機能

専用トランザクション

PSTOP コマンド 28

端末応答モードのリセット 858

RSTART コマンド 858

START コマンド 919

高速機能 (Fast Path)

可能性のあるトランザクション

PSTOP コマンド 28

メッセージ・ドリブン・プログラム

PURGE コマンド 37

領域

STOP REGION コマンド 975

構文 582, 720, 999, 1005, 1017, 1023, 1154

構文図

読み方 viii

コマンド

前提知識 vii

NRESTART 1

OPNDST コマンド 13

PSTOP コマンド 23

PURGE 35

QUIESCE コマンド 799

RCLSDST コマンド 803

RCOMPT コマンド 805

RDISPLAY コマンド 809

RECOVER 811

REFRESH USEREXIT 833

RELEASE コマンド 841

コマンド (続き)

RESET コマンド 843

RMCHANGE コマンド 845

RMDELETE コマンド 845

RMGENJCL コマンド 845

RMINIT コマンド 845

RMLIST コマンド 845

RMNOTIFY コマンド 845

RMxxxxxx コマンド 845

RSTART コマンド 857

SECURE 865

SET コマンド 871

SIGN 875

SMCOPY コマンド 885

SSR コマンド 887

START コマンド 889

STOP コマンド 945

SWITCH コマンド 999

TEST コマンド 1023

TRACE 1027

UNLOCK コマンド 1067

UPDATE 1079

VUNLOAD 1493

[サ行]

サインオン

端末要求

受け入れるコマンド 876

RACF 876

システム初期設定パラメーター、表示 7, 889

システム・コンソール

UNLOCK DB コマンド 1069

UNLOCK PGM コマンド 1071

UNLOCK TRAN コマンド 1075

事前設定モード

リセット 872

RCLSDST コマンド 803

SET コマンド 872

START コマンド 919

商標 1495, 1497

制御ブロック

トレース

情報 1030, 1033, 1041, 1064

モジュール 1031, 1034, 1042, 1064

セキュリティ

定義

コールド・スタート時 7

[タ行]

代替システム

マスター端末表示画面 1001

タイプ 1 コマンド

/TERMINATE OLREORG

コマンド応答 1019

例 1020

タイプ 2 コマンド

QUERY 41

QUEUE 785

TERMINATE 1005

UPDATE 1079

データ共有 (data sharing)

NRESTART コマンド 4

動的データベース・バッファ・プール

QUERY POOL コマンド 601

UPDATE POOL コマンド 1386

特記事項

商標 1495, 1497

特記事項 1495

トランザクション許可

端末が必要とするサインオン 876

[ナ行]

入出力許容

表示画面 1074

[ハ行]

パフォーマンス

/TRACE を用いたデータ生成 1046

パラメーター

システム初期設定、表示 7, 889

表示画面

アクティブ・システム 1002

代替システム 1001

入出力許容 (I/O toleration) 1074

EEQE (エラー・キュー・エレメントの拡張) 1075

UNLOCK SYSTEM 1075

[マ行]

マスター端末 (master terminal)

UNLOCK DB コマンド 1069

UNLOCK PGM コマンド 1071

UNLOCK TRAN コマンド 1075

[ラ行]

例

OM API
TERMINATE OLREORG 1021
QUERY STRUCTURE コマンド 669
QUERY TRACE コマンド 674
QUERY TRAN コマンド 708
TERMINATE OLREORG コマンド
1021
/TRACE コマンド 1032

A

ABDUMP キーワード
SWITCH コマンド 1000
ACCESS キーワード
START コマンド 898, 901
ACTIVE キーワード
SWITCH コマンド 1000
ALLENTRIES キーワード
RECOVER コマンド
REMOVE キーワード 819
STOP キーワード 828
AOI アプリケーション・プログラム
UNLOCK DB コマンド 1069
UNLOCK PGM コマンド 1071
UNLOCK TRAN コマンド 1075
APPC キーワード
PURGE コマンド 36
APPC パラメーター
SECURE コマンド 866, 867
APPL キーワード
SIGN コマンド 878
AREA キーワード
RECOVER コマンド 814
REMOVE キーワード 819
STOP キーワード 828

B

BACKUP キーワード
SWITCH コマンド 1000
BISYNC リンク
連続モードのリセット 24
BUILDQ キーワード
NRESTART コマンド 3

C

CAGROUP キーワード
RECOVER コマンド
ADD 814
REMOVE キーワード 819
STOP キーワード 828

CANCEL キーワード
STOP コマンド 948, 977
CHECK パラメーター
SECURE コマンド 867, 868
CHECKPOINT キーワード
NRESTART コマンド 4
SWITCH コマンド 1000
CMDAUTH キーワード
NRESTART コマンド 4
CMDAUTHE キーワード
NRESTART コマンド 4
CONVERSATION キーワード
RELEASE コマンド 841
SET コマンド 871
CTC (チャンネル間)
リンク (link)
RSTART コマンド 859

D

DATAGROUP キーワード
RECOVER コマンド
REMOVE キーワード 819
DB キーワード
RECOVER コマンド
ADD 814
REMOVE キーワード 819
STOP キーワード 828
DBALLOC キーワード
START コマンド 899, 903
DBDS キーワード
RECOVER コマンド
ADD 815
REMOVE キーワード 819
STOP キーワード 829
DBDSGRP キーワード
RECOVER コマンド
ADD 815
REMOVE キーワード 819
STOP キーワード 829
DBRC (データベース・リカバリー管理)
845
修飾子
RMxxxxxx コマンド 846
RMCHANGE コマンド 845, 848
RMDELETE コマンド 848
RMGENJCL コマンド 848
RMINIT コマンド 848
RMLIST コマンド 848
RMNOTIFY コマンド 848
RMxxxxxx コマンド 845
DFSMSCE0 キーワード
/TRACE コマンド 1028

E

EEQE (エラー・キュー・エレメントの拡張)
表示画面 1075
ERRORABORT キーワード
RECOVER コマンド
START 823
ERRORCONT キーワード
RECOVER コマンド
START 823

F

FORCE キーワード
PSTOP コマンド 25
SWITCH コマンド 1000
FORMAT キーワード
NRESTART コマンド 4
FPPROG キーワード
PURGE コマンド 37
FPRGN キーワード
PURGE コマンド 37
FULL パラメーター
SECURE コマンド 867, 868

G

GLOBAL キーワード
START コマンド 892, 903
STOP コマンド 949
GROUP キーワード
NEWPW コマンド 879
SIGN コマンド 878

H

HALDB (高可用性ラージ・データベース)
UPDATE OLREORG
ALTER オプションが指定された場合の OLR の更新 1341
HIDAM データベース
開始 906

I

ID キーワード
OPNDST コマンド 14
IMS Connect
クライアント
表示 145
QUERY IMSCON
TYPE(CLIENT) 145
ISC
QUERY IMSCON コマンド 195

IMS Connect (続き)
 ISCUSER
 QUERY IMSCON コマンド 207
 QUERY IMSCON コマンド
 ISC 195
 ISCUSER 207
 UPDATE IMSCON
 TYPE(CONFIG) 1178
 IMS キーワード 1154
 ISC
 QUERY IMSCON コマンド
 ISCUSER 207
 ISC (システム間連絡)
 ノード (node)
 シャットダウンおよび割り振り解除
 800
 RCOMPT コマンド
 有効なパラメーター 806
 STOP NODE USER コマンド 970

J

JOIN パラメーター
 SECURE コマンド 868

L

LEVEL キーワード
 /TRACE コマンド 1030, 1033, 1041,
 1063
 LINE キーワード
 PSTOP コマンド 24
 PURGE コマンド 37
 RSTART コマンド 858
 TEST コマンド 1024
 LINK キーワード
 PSTOP コマンド 24
 RSTART コマンド 859
 LOCAL キーワード
 START コマンド 893, 899, 904
 STOP コマンド 950
 LOGOND キーワード
 OPNDST コマンド 15
 LOPEN キーワード
 RSTART コマンド 858
 LTERM キーワード
 PSTOP コマンド 26
 PURGE コマンド 37
 RMxxxxxx コマンド 846
 SET コマンド 872
 LU 6.2 装置
 解放する会話 841

M

MASTER パラメーター
 RDISPLAY コマンド 809
 SMCOPY コマンド 885
 MFS キーワード
 TEST コマンド 1023
 MFSTEST モード
 TEST コマンド 1024
 MODE キーワード
 OPNDST コマンド 15
 RSTART コマンド 859
 MODULE キーワード
 /TRACE コマンド 1031, 1034, 1042,
 1064
 MONITOR キーワード
 /TRACE コマンド
 パラメーター環境テーブル 1038
 MPP (メッセージ処理プログラム)
 指定領域内の処理の停止 976
 MRQ (メッセージ・リキュアー・プログ
 ラム)
 MRQ BMP プログラム名のデフォル
 ト 1048
 NRESTART BUILDQ コマンドの失敗
 4
 MSDB (主記憶データベース)
 チェックポイント・データ・セット 5
 NRESTART コマンド 5
 STOP DATABASE コマンド 956
 MSDBLOAD キーワード
 NRESTART コマンド 5
 MSNAME キーワード
 PURGE コマンド 37
 MSPLINK キーワード
 PSTOP コマンド 26
 RSTART コマンド 859
 MTM
 リンク (link)
 RSTART コマンド 859
 MULTSIGN キーワード
 NRESTART コマンド 5
 MVS/ESA
 STOP JES2 CANCEL コマンド 977
 STOP MVS/ESA CANCEL コマンド
 977

N

NOBACKOUT キーワード
 START コマンド 904
 NOBUILDQ キーワード
 NRESTART コマンド 3
 NOCHECK キーワード
 RECOVER コマンド
 START 824

NOCMDAUTH キーワード
 NRESTART コマンド 5
 NOCMDAUTHE キーワード
 NRESTART コマンド 5
 NODBALLOC キーワード
 START コマンド 899, 903
 NODE キーワード
 OPNDST コマンド 15
 QUIESCE コマンド 799
 RSTART コマンド 859
 TEST コマンド 1024
 NONE パラメーター
 SECURE コマンド 867, 868
 NOPFA キーワード
 STOP コマンド 951
 NOTRANAUTH キーワード
 NRESTART コマンド 5
 NOUSER キーワード
 NRESTART コマンド 6
 npassphr キーワード
 SIGN コマンド 879, 880
 NRESTART コマンド
 環境 1
 キーワード 3
 構文 1
 再始動
 セキュリティーの定義 7
 使用上の注意 6
 説明 1
 データ共用で 4
 例 8
 BUILDQ キーワード 3
 CHECKPOINT キーワード 4
 CMDAUTH キーワード 4
 CMDAUTHE キーワード 4
 FORMAT キーワード 4
 MSDBLOAD キーワード 5
 MULTSIGN キーワード 5
 NOBUILDQ キーワード 3
 NOCMDAUTH キーワード 5
 NOCMDAUTHE キーワード 5
 NOTRANAUTH キーワード 5
 NOUSER キーワード 6
 SNGLSIGN キーワード 6
 TRANAUTH キーワード 6
 USER キーワード 6
 nuserpw キーワード
 SIGN コマンド 879, 880

O

OFF キーワード
 SIGN コマンド 877
 OFFLINE キーワード
 RECOVER コマンド
 ADD 812

OFFLINE キーワード (続き)
RECOVER コマンド (続き)
START 823
OLC キーワード 1005
OLDS キーワード
SWITCH コマンド 1000
OLREORG キーワード 1017
ON パラメーター
SIGN コマンド 876
OPNDST コマンド
環境 13
キーワード 14
構文 13
使用上の注意 18
説明 13
例 18
ID キーワード 14
LOGOND キーワード 15
MODE キーワード 15
NODE キーワード 15
Q キーワード 17
UDATA キーワード 17
USER キーワード 17
USERD キーワード 18
OTMA キーワード
SECURE コマンド 867

P

passphr キーワード
SIGN コマンド 879
PassTicket キーワード
SIGN コマンド 879
PGMDESC キーワード 582
PITR キーワード
RECOVER コマンド
START 824
PROCLIB ライブラリー
STOP SUBSYS コマンド 986
PROFILE パラメーター
SECURE コマンド 867, 868
PSTOP コマンド
環境 23
キーワード 24
構文 24
使用上の注意 28
説明 23
同等の IMS タイプ 2 コマンド 28
例 29
FORCE キーワード 25
LINE キーワード 24
LINK キーワード 24
LTERM キーワード 26
MSPLINK キーワード 26
PURGE キーワード 24
REGION キーワード 27

PSTOP コマンド (続き)
TRAN キーワード 27
PTERM キーワード
TEST コマンド 1024
PURGE キーワード
PSTOP コマンド 24
PURGE コマンド
環境 35
キーワード 36
構文 35
使用上の注意 38
説明 35
同等の IMS タイプ 2 コマンド 38
例 38
APPC キーワード 36
FPPROG キーワード 37
FPRGN キーワード 37
LINE キーワード 37
LTERM キーワード 37
MSNAME キーワード 37
TRAN キーワード 37

Q

Q キーワード
OPNDST コマンド 17
QUERY AREA コマンド
パラメーター 46
QUERY DB コマンド
パラメーター 57
QUERY LE コマンド
キーワード 317
QUERY MEMBER コマンド
状況条件 355
属性 354
QUERY OLC コマンド
パラメーター 515
QUERY OLREORG コマンド
パラメーター 524
QUERY POOL コマンド
動的データベース・バッファ・プ
ール、モニター 601
IMS 64 ビット・ストレージ・マネー
ジャー・プール、モニター 601
QUERY STRUCTURE コマンド
例 669
QUERY TRACE コマンド
例 674
QUERY TRAN コマンド
パラメーター 678
例 708
QUERY コマンド 582, 720
環境
TRAN キーワード 676
AREA キーワード
環境 42

QUERY コマンド (続き)
AREA キーワード (続き)
完了コード 50
キーワード 43
構文 43
出力フィールド 48
使用上の注意 46
状況条件 46
説明 42
戻りコード 50
理由コード 50
類似の IMS コマンド 48
例 51
DB キーワード
環境 56
完了コード 79, 81
キーワード 57
構文 57
コマンドの比較 67
出力フィールド 67
使用上の注意 66
状況条件 75
説明 56
戻りコード 79
理由コード 79
類似の IMS コマンド 67
例 82
NAME() 57
SHOW() 58
STATUS() 64
DBDESC キーワード
環境 109
完了コード 120
キーワード 110
構文 110
出力フィールド 114
使用上の注意 114
説明 109
戻りコード 120
理由コード 120
例 122
IMS キーワード
環境 127
完了コード 131
キーワード 127
構文 127
出力フィールド 128
使用上の注意 128
説明 126
戻りコード 131
理由コード 131
例 132
IMSCON TYPE(ALIAS) キーワード
環境 139
完了コード 142
キーワード 140

QUERY コマンド (続き)

IMSCON TYPE(ALIAS) キーワード (続き)

構文 139
出力フィールド 141
使用上の注意 141
説明 139
同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド 141
戻りコード 142
理由コード 142
例 143

IMSCON TYPE(CLIENT) キーワード

環境 145
完了コード 152
キーワード 146
構文 145
出力フィールド 150
使用上の注意 150
説明 145
同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド 153
戻りコード 152
理由コード 152
例 153

IMSCON TYPE(CONFIG) キーワード

環境 159
完了コード 168
キーワード 159
構文 159, 172
出力フィールド 163
使用上の注意 162, 173
説明 158
同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド 163
戻りコード 168
理由コード 168
例 168

IMSCON TYPE(CONVERTER) キーワード

環境 172
完了コード 175
キーワード 173
出力フィールド 174
説明 172
同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド 174
戻りコード 175
理由コード 175
例 176

IMSCON TYPE(DATASTORE) キーワード

環境 177
完了コード 186
キーワード 178
構文 177

QUERY コマンド (続き)

IMSCON TYPE(DATASTORE) キーワード (続き)

出力フィールド 181
使用上の注意 181
説明 177
同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド 181
戻りコード 186
理由コード 186
例 186

IMSCON TYPE(IMPSPLEX) キーワード

環境 190
完了コード 193
キーワード 191
構文 191
出力フィールド 192
使用上の注意 192
説明 190
同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド 192
戻りコード 193
理由コード 193
例 194

IMSCON TYPE(ISCUSER) キーワード

環境 207
完了コード 213
キーワード 208
構文 207
出力フィールド 211
使用上の注意 211
説明 207
同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド 211
戻りコード 213
理由コード 213
例 214

IMSCON TYPE(ISC) キーワード

環境 196
完了コード 203
キーワード 197
構文 196
出力フィールド 201
使用上の注意 200
説明 195
同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド 201
戻りコード 203
理由コード 203
例 204

IMSCON TYPE(LINK) キーワード

環境 216
完了コード 221
キーワード 217
構文 216

QUERY コマンド (続き)

IMSCON TYPE(LINK) キーワード (続き)

出力フィールド 219
使用上の注意 219
説明 216
同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド 219
戻りコード 221
理由コード 221
例 222

IMSCON TYPE(MSC) キーワード

環境 225
完了コード 231
キーワード 225
構文 225
出力フィールド 229
使用上の注意 228
説明 224
同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド 228
戻りコード 231
理由コード 231
例 232

IMSCON TYPE(ODBM) キーワード

環境 234
完了コード 239
キーワード 235
構文 234
出力フィールド 237
使用上の注意 237
説明 234
同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド 237
戻りコード 239
理由コード 239
例 239

IMSCON TYPE(PORT) キーワード

環境 241
完了コード 250
キーワード 242
構文 241
出力フィールド 248
使用上の注意 247
説明 241
同等の WTOR コマンドおよび z/OS コマンド 247
戻りコード 250
理由コード 250
例 251

IMSCON TYPE(RMTCICS) キーワード

環境 265
完了コード 271
キーワード 266
構文 265

QUERY コマンド (続き)

IMSCON TYPE(RMTCICS) キーワード (続き)

出力フィールド 269
 使用上の注意 265
 説明 264
 同等の WTOR コマンドおよび
 z/OS コマンド 266
 戻りコード 271
 理由コード 271
 例 272

IMSCON TYPE(RMTIMSCON) キーワード

環境 275
 完了コード 283
 キーワード 275
 構文 275
 出力フィールド 280
 使用上の注意 279
 説明 274
 同等の WTOR コマンドおよび
 z/OS コマンド 279
 戻りコード 283
 理由コード 283
 例 284

IMSCON TYPE(SENDCLNT) キーワード

環境 287
 完了コード 292
 キーワード 288
 構文 287
 出力フィールド 290
 使用上の注意 290
 説明 286
 同等の WTOR コマンドおよび
 z/OS コマンド 290
 戻りコード 292
 理由コード 292
 例 293

IMSCON TYPE(UOR) キーワード

環境 296
 完了コード 301
 キーワード 296
 構文 296
 出力フィールド 299
 使用上の注意 298
 説明 295
 同等の WTOR コマンドおよび
 z/OS コマンド 298
 戻りコード 301
 理由コード 301
 例 302

IMSPLEX キーワード

環境 305
 完了コード 311
 キーワード 306

QUERY コマンド (続き)

IMSPLEX キーワード (続き)

構文 306
 出力フィールド 310
 使用上の注意 308
 状況条件 308
 説明 305
 メンバー・サブタイプ 309
 メンバー・タイプ 309
 戻りコード 311
 理由コード 311
 例 312

LE キーワード

環境 317
 完了コード 319
 キーワード 317
 構文 317
 出力フィールド 319
 使用上の注意 318
 説明 317
 戻りコード 319
 理由コード 319
 例 320

LTERM キーワード

環境 325
 完了コード 340
 キーワード 326
 構文 325
 コマンドの比較 336
 出力フィールド 336
 使用上の注意 335
 状況 339
 説明 324
 戻りコード 340
 理由コード 340
 類似の IMS コマンド 336
 例 343

MEMBER キーワード

環境 352
 完了コード 369
 キーワード 353
 構文 353
 出力フィールド 368
 使用上の注意 354
 説明 352
 戻りコード 369
 理由コード 369
 例 370

MSLINK キーワード

環境 375
 完了コード 375
 キーワード 375
 構文 375
 出力フィールド 375
 使用上の注意 375
 説明 375

QUERY コマンド (続き)

MSLINK キーワード (続き)

戻りコード 375
 理由コード 375
 例 375

MSNAME キーワード

環境 414
 完了コード 424
 キーワード 415
 構文 415
 出力フィールド 421
 使用上の注意 420
 説明 414
 戻りコード 424
 理由コード 424
 例 427, 429

MSPLINK キーワード

環境 431
 完了コード 446
 キーワード 433
 構文 432
 出力フィールド 439
 使用上の注意 439
 説明 431
 戻りコード 446
 理由コード 446
 例 450

NODE キーワード

環境 460
 完了コード 479
 キーワード 462
 構文 460
 コマンドの比較 469
 出力フィールド 470
 使用上の注意 468
 状況 476
 説明 460
 戻りコード 479
 理由コード 479
 類似の IMS コマンド 469
 例 481

ODBM TYPE(ALIAS) キーワード

環境 487
 完了コード 488
 キーワード 487
 構文 487
 出力フィールド 488
 使用上の注意 488
 説明 487
 戻りコード 488
 理由コード 488
 例 489

ODBM TYPE(CONFIG) キーワード

環境 490
 完了コード 492
 キーワード 490

QUERY コマンド (続き)

ODBM TYPE(CONFIG) キーワード
(続き)

構文 490
出力フィールド 491
使用上の注意 491
説明 490
戻りコード 492
理由コード 492
例 493

ODBM TYPE(DATASTORE) キーワ
ード

環境 495
完了コード 497
キーワード 495
構文 495
出力フィールド 496
使用上の注意 496
説明 494
戻りコード 497
理由コード 497
例 498

ODBM TYPE(SCIMEMBER) キーワ
ード

環境 499
完了コード 501
キーワード 499
構文 499
出力フィールド 500
使用上の注意 500
説明 499
戻りコード 501
理由コード 501
例 501

ODBM TYPE(THREAD) キーワード

環境 502
完了コード 506
キーワード 503
構文 502
出力フィールド 505
使用上の注意 505
説明 502
戻りコード 506
理由コード 506
例 507

ODBM TYPE(TRACE) キーワード

環境 510
完了コード 512
キーワード 511
構文 511
出力フィールド 511
使用上の注意 511
説明 510
戻りコード 512
理由コード 512
例 512

QUERY コマンド (続き)

ODBM キーワード
説明 138, 486, 1167

OLC キーワード
環境 513
完了コード 517
キーワード 513
構文 513
出力フィールド 515
使用上の注意 514
説明 513
戻りコード 517
理由コード 517
例 519

OLREORG キーワード

環境 523
完了コード 527
キーワード 524
構文 523
出力フィールド 527
使用上の注意 526
説明 523
戻りコード 527
理由コード 527
例 528

OTMADESC キーワード

環境 530
完了コード 539
キーワード 532
構文 530
出力フィールド 538
使用上の注意 537
説明 530
戻りコード 539
理由コード 539
例 540

OTMATI キーワード

環境 544
完了コード 550
キーワード 545
構文 544
出力フィールド 548
使用上の注意 548
説明 544
戻りコード 550
理由コード 550
例 551

PGM キーワード

環境 553
完了コード 572
キーワード 554
構文 554
出力フィールド 561
使用上の注意 560
説明 553
戻りコード 572

QUERY コマンド (続き)

PGM キーワード (続き)
理由コード 572

例 574
PGMDESC キーワード
環境 582
完了コード 594
キーワード 583
出力フィールド 588
使用上の注意 587
説明 582
戻りコード 594
理由コード 594
例 596

POOL キーワード

環境 601
完了コード 613
キーワード 603
構文 602
出力フィールド 605
使用上の注意 604
説明 601
戻りコード 613
理由コード 613
例 614

RM キーワード

環境 626
完了コード 628
キーワード 626
構文 626
出力フィールド 627
使用上の注意 627
説明 626
戻りコード 628
理由コード 628
例 629

RTC キーワード

環境 633
完了コード 643
キーワード 634
構文 634
出力フィールド 639
使用上の注意 639
説明 633
戻りコード 643
理由コード 643
例 645

RTCDESC キーワード

環境 652
完了コード 660
キーワード 653
構文 652
出力フィールド 657
使用上の注意 656
説明 652
戻りコード 660

QUERY コマンド (続き)

RTCDDESC キーワード (続き)

理由コード 660
例 662

STRUCTURE キーワード

環境 665
完了コード 667
キーワード 666
構文 665
出力フィールド 666
使用上の注意 666, 672
説明 665
戻りコード 667
理由コード 667

TRACE キーワード

完了コード 673
キーワード 671
構文 670
出力フィールド 672
説明 670
戻りコード 673
理由コード 673

TRAN キーワード

環境 676
完了コード 705
構文 676
出力 692
使用上の注意 691
説明 675
他の IMS コマンドとの類似性 692
戻りコード 705
理由コード 705

TRANDESC キーワード

環境 720
完了コード 738
キーワード 721
出力フィールド 730
使用上の注意 729
説明 720
戻りコード 738
理由コード 738
例 740

USER キーワード

環境 746
完了コード 760
キーワード 747
構文 746
コマンドの比較 753
出力フィールド 753
使用上の注意 752
状況 758
説明 746
戻りコード 760
理由コード 760
類似の IMS コマンド 753
例 762

QUERY コマンド (続き)

USEREXIT キーワード

環境 766
完了コード 770
キーワード 767
構文 766
出力フィールド 769
使用上の注意 769
説明 766
戻りコード 770
理由コード 770
例 771

USERID キーワード

環境 774
完了コード 780
キーワード 775
構文 774
コマンドの比較 778
出力フィールド 778
使用上の注意 777
状況 780
説明 774
戻りコード 780
理由コード 780
類似の IMS コマンド 778
例 782

QUEUE コマンド

LTERM キーワード

環境 785
完了コード 788
構文 786
出力フィールド 788
使用上の注意 787
説明 785, 786
戻りコード 788
理由コード 788
例 790

TRAN キーワード

環境 791
完了コード 794
キーワード 791
構文 791
出力フィールド 794
使用上の注意 793
説明 791
戻りコード 794
理由コード 794
例 796

QUIESCE コマンド

環境 799
キーワード 799
構文 799
説明 799, 800
例 800
NODE キーワード 799
USER キーワード 799

R

RACF (リソース・アクセス管理機能)

SIGN ON コマンド 876

RCF= パラメーター

NRESTART COLDSYS コマンドでオーバーライドする 7

RCLSDST コマンド

環境 803
構文 803
説明 803
例 804

RCOMPT コマンド

環境 805
構文 805
使用上の注意 806
説明 805
例 806

RCVTIME キーワード

RECOVER コマンド
START 824

RCVTOKEN キーワード

RECOVER コマンド
REMOVE キーワード 818
START 823
/RECOVER コマンド
ADD 814

RDISPLAY コマンド

環境 809
キーワード 809
構文 809
使用上の注意 809
同等の IMS タイプ 2 コマンド 810
例 810
MASTER パラメーター 809

READNUM キーワード

RECOVER コマンド
START 823

RECOVER コマンド 811

ADD キーワード
環境 811
キーワード 812
構文 812
使用上の注意 815
説明 811
例 816
AREA 814
CAGROUP 814
DB 814
DBDS キーワード 815
DBDSGRP キーワード 815
OFFLINE キーワード 812
RCVTOKEN 814
RECOVGRP キーワード 815
STAGLOBAL キーワード 813
STALOCAL キーワード 813

- RECOVER コマンド (続き)
 ADD キーワード (続き)
 USEAREA 813
 USEDDBDS キーワード 813
 REMOVE キーワード
 環境 817
 キーワード 818
 構文 818
 使用上の注意 820
 説明 817
 例 820
 ALLENTRIES キーワード 819
 AREA キーワード 819
 CAGROUP キーワード 819
 DATAGROUP キーワード 819
 DB キーワード 819
 DBDS キーワード 819
 DBDSGRP キーワード 819
 RCVTOKEN キーワード 818
 RECOVGRP キーワード 820
 START キーワード
 環境 822
 キーワード 823
 構文 823
 使用上の注意 824
 説明 822
 例 825
 ERRORABORT 823
 ERRORCONT 823
 NOCHECK キーワード 824
 OFFLINE キーワード 823
 PITR キーワード 824
 RCVTIME 824
 RCVTOKEN 823
 READNUM 823
 STAGLOBA 824
 STALOCAL 824
 STOP キーワード
 環境 827
 キーワード 828
 構文 828
 使用上の注意 829
 説明 827
 例 829
 ALLENTRIES キーワード 828
 AREA キーワード 828
 CAGROUP キーワード 828
 DB キーワード 828
 DBDS キーワード 829
 DBDSGRP キーワード 829
 RECOVGRP キーワード 829
 SAVE キーワード 828
 TERMINATE キーワード
 環境 830
 構文 831
 使用上の注意 831
- RECOVER コマンド (続き)
 TERMINATE キーワード (続き)
 説明 830
 例 831
 RECOVGRP キーワード
 RECOVER コマンド
 ADD キーワード 815
 REMOVE キーワード 820
 STOP キーワード 829
 REFRESH USEREXIT コマンド
 環境 833
 完了コード 837
 構文 833
 出力フィールド 836
 使用上の注意 835
 説明 833
 戻りコード 837
 理由コード 837
 例 838
 REFRESH コマンド
 USEREXIT キーワード
 キーワード 833
 REGION キーワード
 PSTOP コマンド 27
 /STOP コマンド
 reg# パラメーター 975
 reg#-#reg パラメーター 975
 reg# パラメーター
 /STOP コマンド
 REGION キーワード 975
 reg#-#reg パラメーター
 /STOP コマンド
 REGION キーワード 975
 RELEASE コマンド
 環境 841
 キーワード 841
 構文 841
 使用上の注意 841
 説明 841
 例 842
 CONVERSATION キーワード 841
 LU 6.2 装置 841
 RESET コマンド
 環境 843
 構文 843
 説明 843
 例 843
 RMxxxxxx コマンド
 キーワード 846
 構文 846
 説明 845
 RS パラメーター
 NRESTART コマンド 4
 RSTART コマンド
 環境 857
 キーワード 858
- RSTART コマンド (続き)
 構文 857
 説明 857, 860
 同等の IMS タイプ 2 コマンド 860
 例 860
 LINE キーワード 858
 LINK キーワード 859
 LOPEN キーワード 858
 MODE キーワード 859
 MSPLINK キーワード 859
 NODE キーワード 859
 USER キーワード 860
- ## S
- SAVE キーワード
 RECOVER コマンド
 STOP キーワード 828
 SECURE コマンド 869
 環境 865
 キーワード 866
 構文 865
 説明 865
 例 868
 ACEEAGE パラメーター 866
 APPC パラメーター 867
 CHECK パラメーター 867, 868
 FULL パラメーター 867, 868
 JOIN パラメーター 868
 NONE パラメーター 867, 868
 OTMA キーワード 867
 PROFILE パラメーター 867, 868
 SET コマンド
 環境 871
 キーワード 871
 構文 871
 使用上の注意 872
 説明 871
 例 873
 CONVERSATION キーワード 871
 LTERM キーワード 872
 TRANSACTION キーワード 872
 SGN= パラメーター
 NRESTART COLDSYS コマンドでオーバーライドする 7
 SIGN コマンド
 環境 875
 キーワード 876
 構文 875
 使用上の注意 880
 説明 875
 例 881
 APPL キーワード 878
 GROUP キーワード 878
 NEWPW キーワード 879
 npassphr キーワード 879, 880

SIGN コマンド (続き)

nuserpw キーワード 879, 880
 OFF キーワード 877
 ON パラメーター 876
 passphr キーワード 879
 PassTicket キーワード 879
 USERD キーワード 879
 userpw キーワード 879
 VERIFY キーワード 880

SMCOPY コマンド

環境 885
 キーワード 885
 構文 885
 使用上の注意 886
 説明 885
 例 886
 MASTER パラメーター 885
 TERMINAL キーワード 886

SNGLSIGN キーワード

NRESTART コマンド 6

SSM キーワード

START コマンド 930

SSR コマンド

環境 887
 構文 887
 使用上の注意 887
 説明 887
 例 887

STAGLOBAL キーワード

RECOVER コマンド
 ADD キーワード 813
 START 824

STALOCAL キーワード

RECOVER コマンド
 ADD キーワード 813
 START 824

START コマンド

説明 889
 ACCESS キーワード 898, 901
 APPC キーワード
 環境 891
 構文 891
 説明 890
 AREA キーワード
 環境 891
 キーワード 892
 構文 892
 使用上の注意 893
 説明 891
 同等の IMS タイプ 2 コマンド
 894
 例 894

AUTARCH キーワード

環境 895

AUTOARCH キーワード

キーワード 895

START コマンド (続き)

AUTOARCH キーワード (続き)

構文 895
 説明 895
 例 896

CLASS キーワード

環境 896
 構文 896
 説明 896
 例 896

DATABASE キーワード

DBALLOC キーワード 899
 LOCAL キーワード 899
 NODBALLOC キーワード 899

DATAGRP キーワード

環境 897
 キーワード 898
 構文 897
 使用上の注意 899
 説明 897
 同等の IMS タイプ 2 コマンド
 900

DB キーワード

環境 900
 キーワード 901
 構文 901
 使用上の注意 905
 説明 900
 同等の IMS タイプ 2 コマンド
 908
 例 908

DBALLOC キーワード 903
 NODBALLOC キーワード 903

DC キーワード

環境 910
 構文 911
 説明 910

DESC キーワード

環境 911
 構文 911
 説明 911

GLOBAL キーワード 892, 903

LINE キーワード

環境 911
 構文 912
 使用上の注意 912
 説明 911
 例 913

LOCAL キーワード 893, 904

LTERM キーワード

環境 914
 構文 914
 使用上の注意 914
 説明 914
 例 914

START コマンド (続き)

LUNAME キーワード

環境 915
 キーワード 915
 構文 915
 使用上の注意 916
 説明 915

MADSIOT キーワード

環境 916
 構文 916
 使用上の注意 917
 説明 916

MSNAME キーワード

環境 917
 構文 918
 説明 917
 例 918

NOBACKOUT キーワード 904

NODE キーワード

環境 918
 構文 919
 使用上の注意 919
 説明 918
 例 920

OLDS キーワード

環境 920
 構文 921
 説明 920
 例 921

OTMA キーワード

環境 921
 構文 922
 使用上の注意 922
 説明 921
 例 922

PGM キーワード

環境 923
 構文 923
 使用上の注意 923
 説明 922
 同等の IMS タイプ 2 コマンド
 923
 例 923

REGION キーワード

環境 924
 構文 924
 使用上の注意 924
 説明 924
 例 925

RTC キーワード

環境 927
 構文 927
 使用上の注意 927
 説明 926
 同等の IMS タイプ 2 コマンド
 927

START コマンド (続き)

RTC キーワード (続き)

例 927

SB キーワード

環境 928

構文 928

説明 928

例 928

SLDSREAD キーワード

環境 929

構文 929

説明 929

SSM キーワード 930

SUBSYS キーワード

環境 930

キーワード 930

構文 930

使用上の注意 930

説明 929

例 931

SURV キーワード

環境 931

構文 931

使用上の注意 931

説明 931

THREAD キーワード

環境 932

構文 932

使用上の注意 932

説明 932

TMEM キーワード

環境 933

キーワード 933

構文 933

説明 933

例 936

TPIPE キーワード 935

TRAN キーワード

環境 936

構文 937

使用上の注意 937

説明 936

同等の IMS タイプ 2 コマンド

938

例 938

USER キーワード

環境 939

構文 940

使用上の注意 940

説明 939

例 940

VGR キーワード

環境 941

キーワード 942

構文 942

説明 941

START コマンド (続き)

WADS キーワード

環境 942

構文 942

説明 942

STOP コマンド

説明 945

ADS キーワード

環境 947

構文 947

使用上の注意 947

説明 946

APPC キーワード

環境 947

キーワード 948

構文 948

使用上の注意 948

説明 947

AREA キーワード

環境 949

キーワード 949

構文 949

使用上の注意 951

説明 948

同等の IMS タイプ 2 コマンド

951

例 952

AUTOARCH キーワード

環境 952

構文 952

説明 952

例 953

BACKUP キーワード

環境 953

構文 953

説明 953

CANCEL キーワード 948, 977

CLASS キーワード

環境 954

構文 954

使用上の注意 954

説明 953

例 954

DATAGRP キーワード

環境 955

構文 955

使用上の注意 955

説明 955

同等の IMS タイプ 2 コマンド

955

DB キーワード

環境 956

構文 956

使用上の注意 956

説明 956

STOP コマンド (続き)

DB キーワード (続き)

同等の IMS タイプ 2 コマンド

959

例 959

DC キーワード

環境 961

構文 961

使用上の注意 961

説明 961

DESC キーワード

環境 962

構文 962

説明 962

GLOBAL キーワード 949

JES2 CANCEL 977

LINE キーワード

環境 962

構文 963

使用上の注意 963

説明 962

例 963

LOCAL キーワード 950

LTERM キーワード

環境 964

構文 965

使用上の注意 965

説明 964

例 965

LUNAME キーワード

環境 966

構文 966

使用上の注意 966

説明 965

MADSIOT キーワード

環境 967

構文 967

使用上の注意 967

説明 967

MSNAME キーワード

環境 968

構文 968

説明 968

例 968

MVS/ESA CANCEL 977

NODE キーワード

環境 969

構文 969

使用上の注意 969

説明 969

例 971

NOPFA キーワード 951

OLDS キーワード

環境 971

構文 971

使用上の注意 972

STOP コマンド (続き)

OLDS キーワード (続き)

説明 971
例 972

OTMA キーワード

環境 972
構文 972
使用上の注意 973
説明 972
例 973

PGM キーワード

環境 973
構文 974
使用上の注意 974
説明 973
同等の IMS タイプ 2 コマンド

974
例 974

REGION TRANSACTION キーワード

停止状態 WFI モード 976

REGION キーワード

環境 975
キーワード 975
構文 975
説明 974
例 977

RTC キーワード

環境 983
構文 983
使用上の注意 983
説明 983
同等の IMS タイプ 2 コマンド
983

SB キーワード

環境 984
構文 984
説明 984
例 984

SLDSREAD キーワード

環境 985
構文 985
説明 985

SUBSYS キーワード

環境 986
構文 986
使用上の注意 986
説明 985
例 986

SURV キーワード

環境 987
キーワード 987
構文 987
説明 987

THREAD キーワード

環境 988
キーワード 988

STOP コマンド (続き)

THREAD キーワード (続き)

構文 988
使用上の注意 989
説明 988
例 989

TMEM キーワード

環境 991
キーワード 991
構文 991
使用上の注意 992
説明 991
例 992

TPIPE キーワード

OTMA 991

TRAN キーワード

環境 993
構文 993
使用上の注意 993
説明 993
同等の IMS タイプ 2 コマンド
994
例 994

USER キーワード

環境 995
構文 995
使用上の注意 996
説明 995
例 996

VGR キーワード

環境 997
構文 998
使用上の注意 998
説明 997

WADS キーワード

環境 998
構文 998
説明 998

SWITCH コマンド 999

環境 999
キーワード 1000
説明 999
例 1001

ABDUMP キーワード 1000

ACTIVE キーワード 1000

BACKUP キーワード 1000

CHECKPOINT キーワード 1000

FORCE キーワード 1000

OLDS キーワード 1000

SYSTEM キーワード 1000

WADS キーワード 1000

SYSTEM キーワード

SWITCH コマンド 1000

T

TAKEOVER キーワード

/TRACE コマンド 1031, 1034, 1042

TCP/IP

クライアント

QUERY IMSCON

TYPE(CLIENTS) 145

リンク (link)

RSTART コマンド 859

IMS Connect

QUERY IMSCON

TYPE(CLIENTS) 145

TERMINAL キーワード

SMCOPY コマンド 886

TERMINATE OLC コマンド

エラー処理 1007

出力フィールド 1008

TERMINATE OLREORG コマンド

環境 1017

例 1021

TERMINATE コマンド 1005, 1017

OLC キーワード

環境 1005

完了コード 1009

出力フィールド 1008

使用上の注意 1005

説明 1005

戻りコード 1009

理由コード 1009

例 1015

OLREORG キーワード

完了コード 1020

キーワード 1018

出力フィールド 1019

使用上の注意 1018

説明 1017

戻りコード 1020

理由コード 1020

例 1020

TEST コマンド 1023

環境 1023

キーワード 1023

使用上の注意 1024

説明 1023

例 1025

LINE キーワード 1024

MFS キーワード 1023

NODE キーワード 1024

PTERM キーワード 1024

USER キーワード 1024

TPIPE キーワード

START コマンド 935

STOP コマンド 991

/TRACE コマンド 1059

TRACE コマンド
 説明 1027
 例 1032
 DFSMSCE0 キーワード 1028
 EXIT キーワード
 環境 1028
 キーワード 1028
 構文 1028
 使用上の注意 1029
 説明 1028
 LEVEL キーワード 1030, 1033, 1041,
 1063
 LINE キーワード
 環境 1030
 キーワード 1030
 構文 1030
 説明 1029
 例 1032
 LINK キーワード
 環境 1032
 キーワード 1033
 構文 1033
 説明 1032
 例 1034
 LUNAME キーワード
 環境 1035
 構文 1035
 使用上の注意 1035
 説明 1035
 MODULE キーワード 1031, 1034,
 1042, 1064
 MONITOR キーワード
 環境 1036
 キーワード 1037
 構文 1037
 使用上の注意 1038
 説明 1036
 パラメーター環境テーブル 1038
 例 1039
 NODE キーワード
 環境 1040
 キーワード 1041
 構文 1040
 使用上の注意 1042
 説明 1040
 例 1043
 OSAMGTF キーワード
 環境 1045
 構文 1045
 説明 1044
 PGM キーワード
 環境 1048
 構文 1048
 使用上の注意 1048
 説明 1048

TRACE コマンド (続き)
 PGM キーワード (続き)
 同等の IMS タイプ 2 コマンド
 1049
 PI キーワード
 環境 1045
 キーワード 1046
 構文 1045
 使用上の注意 1046
 説明 1045
 例 1047
 PSB キーワード
 環境 1050
 キーワード 1050
 構文 1050
 使用上の注意 1051
 説明 1050
 例 1051
 TABLE キーワード
 環境 1051
 キーワード 1052
 構文 1052
 使用上の注意 1054
 説明 1051
 例 1055
 TAKEOVER キーワード 1031, 1034,
 1042
 TCO キーワード
 環境 1057
 構文 1057
 説明 1057
 TIMEOUT キーワード
 環境 1057
 キーワード 1058
 構文 1058
 使用上の注意 1058
 説明 1057
 TMEMBER キーワード
 環境 1059
 キーワード 1059
 構文 1059
 使用上の注意 1060
 説明 1059
 例 1060
 TPIPE キーワード 1059
 TRAN キーワード
 環境 1060
 構文 1061
 使用上の注意 1061
 説明 1060
 同等の IMS タイプ 2 コマンド
 1061
 例 1062
 TRAP キーワード
 環境 1062
 構文 1062

TRACE コマンド (続き)
 TRAP キーワード (続き)
 説明 1062
 UNITYPE キーワード
 環境 1063
 キーワード 1063
 構文 1063
 使用上の注意 1064
 説明 1063
 TRAN キーワード
 PSTOP コマンド 27
 PURGE コマンド 37
 TRANAUTH キーワード
 NRESTART コマンド 6
 TRANDESC キーワード 720
 TRANSACTION キーワード
 SET コマンド 872
 TRN= パラメーター
 NRESTART COLDSYS コマンドでオ
 ーバーライドする 7

U

UDATA キーワード
 OPNDST コマンド 17
 UNLOCK コマンド
 システム・コンソールより入力 1067
 マスター端末より入力 1067
 AOI アプリケーション・プログラムよ
 り入力 1069, 1071, 1075
 DB キーワード
 環境 1068
 構文 1068
 使用上の注意 1068
 説明 1067
 同等の IMS タイプ 2 コマンド
 1069
 例 1069
 LTERM キーワード
 環境 1070
 構文 1070
 使用上の注意 1070
 説明 1069
 NODE キーワード
 環境 1070
 構文 1071
 説明 1070
 PGM キーワード
 環境 1071
 構文 1071
 説明 1071
 同等の IMS タイプ 2 コマンド
 1072
 例 1071
 PTERM キーワード
 環境 1073

UNLOCK コマンド (続き)

PTERM キーワード (続き)

構文 1073

説明 1072

例 1073

SYSTEM キーワード

環境 1073

構文 1074

使用上の注意 1074

説明 1073

表示画面フォーマット 1075

例 1074

TRAN キーワード

環境 1075

構文 1075

使用上の注意 1075

説明 1075

同等の IMS タイプ 2 コマンド
1076

例 1075

UPDATE AREA コマンド

パラメーター 1081

類似の IMS コマンド 1086

UPDATE DATAGRП コマンド

類似の IMS コマンド 1101

UPDATE DB コマンド

同等の IMS コマンド 1130

パラメーター 1115

UPDATE LE コマンド

パラメーター 1284

UPDATE OLREORG コマンド

例 1343

UPDATE PGM コマンド

同等の IMS コマンド 1365

UPDATE POOL コマンド

動的データベース・バッファ・プー
ル、モニター 1386

UPDATE TRAN コマンド

同等の IMS コマンド 1456

パラメーター 1432

UPDATE コマンド 1154

タイプ 2 1079

AREA キーワード

環境 1080

完了コード 1087, 1088

キーワード 1081

構文 1080

出力フィールド 1086

使用上の注意 1085

説明 1079

戻りコード 1087

戻りコードおよび理由コード 1087

理由コード 1087

類似の IMS コマンド 1086

例 1091

UPDATE コマンド (続き)

DATAGRП キーワード

環境 1095

完了コード 1102

キーワード 1096

構文 1095

出力フィールド 1101

使用上の注意 1100

説明 1095

戻りコード 1102

理由コード 1102

類似の IMS コマンド 1101

例 1110

DB キーワード

環境 1114

完了コード 1131, 1133

キーワード 1115

構文 1114

出力フィールド 1130

使用上の注意 1127

説明 1114

同等の IMS コマンド 1130

戻りコード 1131

戻りコードおよび理由コード 1131

理由コード 1131

例 1143

DBDESC キーワード

環境 1146

完了コード 1150

キーワード 1147

構文 1147

出力フィールド 1149

説明 1146

戻りコード 1150

理由コード 1150

例 1152

IMS キーワード

環境 1154

完了コード 1162

キーワード 1155

出力フィールド 1161

使用上の注意 1160

説明 1154

戻りコード 1162

理由コード 1162

例 1164

IMSCON TYPE(ALIAS) キーワード

環境 1168

完了コード 1171

キーワード 1169

構文 1168

出力フィールド 1170

使用上の注意 1169

説明 1168

同等の WTOR コマンドおよび

z/OS コマンド 1170

UPDATE コマンド (続き)

IMSCON TYPE(ALIAS) キーワード

(続き)

戻りコード 1171

理由コード 1171

例 1172

IMSCON TYPE(CLIENT) キーワード

環境 1173

完了コード 1175

キーワード 1174

構文 1173

出力フィールド 1175

使用上の注意 1174

説明 1173

同等の WTOR コマンドおよび

z/OS コマンド 1176

戻りコード 1175

理由コード 1175

例 1177

IMSCON TYPE(CONFIG) キーワード

環境 1178

完了コード 1186

キーワード 1179

構文 1178

出力フィールド 1185

使用上の注意 1183

説明 1178

同等の WTOR コマンドおよび

z/OS コマンド 1184

戻りコード 1186

理由コード 1186

例 1186

IMSCON TYPE(CONVERTER) キー

ワード

環境 1191

完了コード 1193

キーワード 1191

構文 1191

出力フィールド 1192

使用上の注意 1192

説明 1191

同等の WTOR コマンドおよび

z/OS コマンド 1192

戻りコード 1193

理由コード 1193

例 1194

IMSCON TYPE(DATASTORE) キー

ワード

環境 1195

完了コード 1201

キーワード 1196

構文 1195

出力フィールド 1201

使用上の注意 1200

説明 1195

UPDATE コマンド (続き)

IMSCON TYPE(DATASTORE) キーワード (続き)

同等の WTOR コマンドおよび
z/OS コマンド 1200
戻りコード 1201
理由コード 1201
例 1206

IMSCON TYPE(IMSPLEX) キーワード

環境 1210
完了コード 1213
キーワード 1211
構文 1210
出力フィールド 1212
使用上の注意 1212
説明 1210
同等の WTOR コマンドおよび
z/OS コマンド 1216
戻りコード 1213
理由コード 1213
例 1216

IMSCON TYPE(ISCUSER) キーワード

環境 1224
完了コード 1227
キーワード 1224
構文 1224
出力フィールド 1226
使用上の注意 1225
説明 1224
同等の WTOR コマンドおよび
z/OS コマンド 1226
戻りコード 1227
理由コード 1227
例 1228

IMSCON TYPE(ISC) キーワード

環境 1218
完了コード 1220
キーワード 1218
構文 1217
出力フィールド 1219
使用上の注意 1218
説明 1217
同等の WTOR コマンドおよび
z/OS コマンド 1219
戻りコード 1220
理由コード 1220
例 1223

IMSCON TYPE(LINK) キーワード

環境 1229
完了コード 1232
キーワード 1230
構文 1229
出力フィールド 1232
使用上の注意 1230
説明 1229

UPDATE コマンド (続き)

IMSCON TYPE(LINK) キーワード (続き)

同等の WTOR コマンドおよび
z/OS コマンド 1231
戻りコード 1232
理由コード 1232
例 1233

IMSCON TYPE(MSC) キーワード

環境 1234
完了コード 1237
キーワード 1235
構文 1234
出力フィールド 1236
使用上の注意 1235
説明 1234
同等の WTOR コマンドおよび
z/OS コマンド 1236
戻りコード 1237
理由コード 1237
例 1239

IMSCON TYPE(ODBM) キーワード

環境 1240
完了コード 1240
キーワード 1240
構文 1240
出力フィールド 1240
使用上の注意 1240
説明 1240
同等の WTOR コマンドおよび
z/OS コマンド 1242
戻りコード 1240
理由コード 1240
例 1240

IMSCON TYPE(PORT) キーワード

環境 1246
完了コード 1246
キーワード 1246
構文 1246
出力フィールド 1246
使用上の注意 1246
説明 1246
同等の WTOR コマンドおよび
z/OS コマンド 1250
戻りコード 1246
理由コード 1246
例 1246

IMSCON TYPE(RACFUID) キーワード

環境 1258
完了コード 1260
キーワード 1258
構文 1258
出力フィールド 1259
使用上の注意 1259
説明 1258

UPDATE コマンド (続き)

IMSCON TYPE(RACFUID) キーワード (続き)

同等の WTOR コマンドおよび
z/OS コマンド 1259
戻りコード 1260
理由コード 1260
例 1261

IMSCON TYPE(RMTCICS) キーワード

環境 1262
完了コード 1262
キーワード 1262
構文 1262
出力フィールド 1262
使用上の注意 1262
説明 1262
同等の WTOR コマンドおよび
z/OS コマンド 1264
戻りコード 1262
理由コード 1262
例 1262

IMSCON TYPE(RMTIMSCON) キーワード

環境 1268
完了コード 1268
キーワード 1268
構文 1268
出力フィールド 1268
使用上の注意 1268
説明 1268
同等の WTOR コマンドおよび
z/OS コマンド 1271
戻りコード 1268
理由コード 1268
例 1268

IMSCON TYPE(SENDCLNT) キーワード

環境 1276
完了コード 1276
キーワード 1276
構文 1276
出力フィールド 1276
使用上の注意 1276
説明 1276
同等の WTOR コマンドおよび
z/OS コマンド 1278
戻りコード 1276
理由コード 1276
例 1276

LE キーワード

環境 1283
完了コード 1286, 1287
キーワード 1284
構文 1284
出力フィールド 1286

UPDATE コマンド (続き)

LE キーワード (続き)

使用上の注意 1285
説明 1283
戻りコード 1286
理由コード 1286
例 1287

MSLINK キーワード

環境 1289
完了コード 1299
キーワード 1291
構文 1290
出力フィールド 1298
使用上の注意 1297
説明 1289
戻りコード 1299
理由コード 1299
例 1301

MSNAME キーワード

環境 1302
完了コード 1306
キーワード 1303
構文 1303
出力フィールド 1306
説明 1302
戻りコード 1306
理由コード 1306
例 1308

MSPLINK キーワード

環境 1310
完了コード 1318
キーワード 1311
構文 1310
出力フィールド 1317
使用上の注意 1316
説明 1310
戻りコード 1318
理由コード 1318
例 1319

ODBM START(CONNECTION) キーワード

環境 1322
完了コード 1323
キーワード 1322
構文 1322
出力フィールド 1323
使用上の注意 1323
説明 1322
戻りコード 1323
理由コード 1323
例 1324

ODBM START(TRACE) キーワード

環境 1325
完了コード 1326
キーワード 1326
構文 1325

UPDATE コマンド (続き)

ODBM START(TRACE) キーワード (続き)

出力フィールド 1326
使用上の注意 1326
説明 1325
戻りコード 1326
理由コード 1326
例 1327

ODBM STOP(CONNECTION) キーワード

環境 1328
完了コード 1330
キーワード 1328
構文 1328
出力フィールド 1329
使用上の注意 1329
説明 1328
戻りコード 1330
理由コード 1330
例 1331

ODBM STOP(TRACE) キーワード

環境 1332
完了コード 1333
キーワード 1332
構文 1332
出力フィールド 1332
使用上の注意 1332
説明 1331
戻りコード 1333
理由コード 1333
例 1334

ODBM TYPE(CONFIG) キーワード

環境 1334
完了コード 1336
キーワード 1335
構文 1334
出力フィールド 1336
使用上の注意 1335
説明 1334
戻りコード 1336
理由コード 1336
例 1338

ODBM キーワード

説明 1321

OLREORG キーワード

環境 1339
完了コード 1342
キーワード 1340
構文 1339
コマンド応答 1342
出力フィールド 1342
使用上の注意 1341
説明 1339
戻りコード 1342
理由コード 1342

UPDATE コマンド (続き)

OLREORG キーワード (続き)

例 1343

OTMADESC キーワード

環境 1345
完了コード 1352
キーワード 1346
構文 1345
出力フィールド 1351
使用上の注意 1351
説明 1345
戻りコード 1352
理由コード 1352
例 1353

PGM キーワード

環境 1355
完了コード 1366
キーワード 1356
構文 1355
出力フィールド 1365
使用上の注意 1364
説明 1355
同等の IMS コマンド 1365
戻りコード 1366
理由コード 1366
例 1372

PGMDESC キーワード

環境 1375
完了コード 1381
キーワード 1376
構文 1375
出力フィールド 1381
使用上の注意 1380
説明 1375
戻りコード 1381
理由コード 1381
例 1384

POOL キーワード

環境 1386
完了コード 1392
キーワード 1386
構文 1386
出力フィールド 1390
使用上の注意 1388
説明 1386
戻りコード 1392
理由コード 1392
例 1394

RM キーワード

環境 1399
完了コード 1402
キーワード 1399
構文 1399
出力フィールド 1402
使用上の注意 1402
説明 1399

UPDATE コマンド (続き)

RM キーワード (続き)

戻りコード 1402

理由コード 1402

例 1406

RTC キーワード

環境 1410

完了コード 1414

キーワード 1411

構文 1411

出力フィールド 1413

使用上の注意 1412

説明 1410

戻りコード 1414

理由コード 1414

例 1416

RTCDDESC キーワード

環境 1418

完了コード 1421

キーワード 1418

構文 1418

出力フィールド 1420

使用上の注意 1419

説明 1417

戻りコード 1421

理由コード 1421

例 1422

TRACE キーワード 1428

環境 1424

完了コード 1427

キーワード 1425

構文 1424

出力フィールド 1426

使用上の注意 1426

説明 1424

戻りコード 1427

理由コード 1427

TRAN キーワード

環境 1429

完了コード 1458, 1461

キーワード 1432

構文 1430

出力フィールド 1457

使用上の注意 985, 1454

説明 1429

同等の IMS コマンド 1456

戻りコード 1458

理由コード 1458

例 1465

TRANDESC キーワード

環境 1468

完了コード 1487

キーワード 1470

構文 1468

出力フィールド 1486

使用上の注意 1486

UPDATE コマンド (続き)

TRANDESC キーワード (続き)

説明 1467

戻りコード 1487

理由コード 1487

例 1490

USEAREA キーワード

/RECOVER コマンド

ADD 813

USEDDBDS キーワード

RECOVER コマンド

ADD キーワード 813

USER キーワード

NRESTART コマンド 6

OPNDST コマンド 17

QUIESCE コマンド 799

RSTART コマンド 860

TEST コマンド 1024

USERD キーワード

OPNDST コマンド 18

SIGN コマンド 879

userpw キーワード

SIGN コマンド 879

V

VTAM (仮想記憶通信アクセス方式)

端末

作動可能状態または作動不能状態

806

セッション開始 18

切断 803

リンク (link)

RSTART コマンド 859

MSC リンク

PSTOP MSPLINK コマンド 26

VUNLOAD コマンド

環境 1493

構文 1493

使用上の注意 1493

説明 1493

入力フォーマット 1493

W

WADS キーワード

SWITCH コマンド 1000

wait-for-input モード

メッセージ処理の停止 976

X

XRF (拡張回復機能)

代替システム

START REGION コマンド 925

[特殊文字]

/NRESTART コマンド

環境 1

キーワード 3

構文 1

使用上の注意 6

説明 1

例 8

/OPNDST コマンド

環境 13

キーワード 14

構文 13

使用上の注意 18

説明 13

例 18

/PSTOP コマンド

環境 23

キーワード 24

構文 24

使用上の注意 28

説明 23

例 29

/PURGE コマンド

環境 35

キーワード 36

構文 35

使用上の注意 38

説明 35

例 38

/QUIESCE コマンド

環境 799

キーワード 799

構文 799

説明 799, 800

例 800

/RCLSDST コマンド

環境 803

構文 803

説明 803

例 804

/RCOMPT コマンド

環境 805

構文 805

使用上の注意 806

説明 805

例 806

/RDISPLAY コマンド

環境 809

キーワード 809

構文 809

使用上の注意 809

例 810

/RECOVER コマンド 811

ADD キーワード

RCVTOKEN 814

/RECOVER コマンド (続き)	/SET コマンド (続き)	/START コマンド (続き)
ADD キーワード (続き)	説明 871	DB キーワード (続き)
USEAREA 813	例 873	構文 901
START	/SIGN コマンド	使用上の注意 905
ERRORABORT キーワード 823	環境 875	説明 900
/RELEASE コマンド	キーワード 876	例 908
環境 841	構文 875	DC キーワード
キーワード 841	使用上の注意 880	環境 910
構文 841	説明 875	構文 911
使用上の注意 841	例 881	説明 910
説明 841	/SMCOPY コマンド	DESC キーワード
例 842	環境 885	環境 911
/RESET コマンド	キーワード 885	構文 911
環境 843	構文 885	説明 911
構文 843	使用上の注意 886	LINE キーワード
説明 843	説明 885	環境 911
例 843	例 886	構文 912
/RMCHANGE コマンド	/SSR コマンド	使用上の注意 912
使用上の注意 848	環境 887	説明 911
/RMDELETE コマンド	構文 887	例 913
使用上の注意 848	使用上の注意 887	LTERM キーワード
/RMGENJCL コマンド	説明 887	環境 914
使用上の注意 848	例 887	構文 914
/RMINIT コマンド	/START コマンド	使用上の注意 914
使用上の注意 848	説明 889	説明 914
/RMLIST コマンド	APPC キーワード	例 914
使用上の注意 848	環境 891	LUNAME キーワード
/RMNOTIFY コマンド	構文 891	環境 915
使用上の注意 848	説明 890	構文 915
/RMxxxxxx コマンド	AREA キーワード	使用上の注意 916
環境 846	環境 891	説明 915
キーワード 846	キーワード 892	MADSIOT キーワード
構文 846	構文 892	環境 916
使用上の注意 848	使用上の注意 893	構文 916
説明 845	説明 891	使用上の注意 917
例 848	例 894	説明 916
DBRC 修飾子 846	AUTARCH キーワード	MSNAME キーワード
DBRC に渡されるパラメーター 846	環境 895	環境 917
LTERM キーワード 846	AUTOARCH キーワード	構文 918
/RSTART コマンド	構文 895	説明 917
環境 857	説明 895	例 918
キーワード 858	例 896	NODE キーワード
構文 857	CLASS キーワード	環境 918
説明 857, 860	環境 896	構文 919
例 860	構文 896	使用上の注意 919
/SECURE コマンド	説明 896	説明 918
環境 865	例 896	例 920
キーワード 866	DATAGRP キーワード	OLDS キーワード
構文 865	環境 897	環境 920
説明 865	キーワード 898	構文 921
例 868	構文 897	説明 920
/SET コマンド	使用上の注意 899	例 921
環境 871	説明 897	OTMA キーワード
キーワード 871	DB キーワード	環境 921
構文 871	環境 900	構文 922
使用上の注意 872	キーワード 901	使用上の注意 922

/START コマンド (続き)

OTMA キーワード (続き)

説明 921

例 922

PGM キーワード

環境 923

構文 923

使用上の注意 923

説明 922

例 923

REGION キーワード

環境 924

構文 924

使用上の注意 924

説明 924

例 925

RTC キーワード

環境 927

構文 927

使用上の注意 927

説明 926

例 927

SB キーワード

環境 928

構文 928

説明 928

例 928

SLDSREAD キーワード

環境 929

構文 929

説明 929

SUBSYS キーワード

環境 930

キーワード 930

構文 930

使用上の注意 930

説明 929

例 931

SURV キーワード

環境 931

構文 931

使用上の注意 931

説明 931

THREAD キーワード

環境 932

構文 932

使用上の注意 932

説明 932

TMEM キーワード

環境 933

キーワード 933

構文 933

説明 933

例 936

TRAN キーワード

環境 936

/START コマンド (続き)

TRAN キーワード (続き)

構文 937

使用上の注意 937

説明 936

例 938

USER キーワード

環境 939

構文 940

使用上の注意 940

説明 939

例 940

VGR キーワード

環境 941

キーワード 942

構文 942

説明 941

WADS キーワード

環境 942

構文 942

説明 942

/STOP コマンド

説明 945

ADS キーワード

環境 947

構文 947

使用上の注意 947

説明 946

APPC キーワード

環境 947

キーワード 948

構文 948

使用上の注意 948

説明 947

AREA キーワード

環境 949

キーワード 949

構文 949

使用上の注意 951

説明 948

例 952

AUTOARCH キーワード

環境 952

構文 952

説明 952

例 953

BACKUP キーワード

環境 953

構文 953

説明 953

CLASS キーワード

環境 954

構文 954

使用上の注意 954

説明 953

例 954

/STOP コマンド (続き)

DATAGRP キーワード

環境 955

構文 955

使用上の注意 955

説明 955

DB キーワード

環境 956

構文 956

使用上の注意 956

説明 956

例 959

DC キーワード

環境 961

構文 961

使用上の注意 961

説明 961

DESC キーワード

環境 962

構文 962

説明 962

LINE キーワード

環境 962

構文 963

使用上の注意 963

説明 962

例 963

LTERM キーワード

環境 964

構文 965

使用上の注意 965

説明 964

例 965

LUNAME キーワード

環境 966

構文 966

使用上の注意 966

説明 965

MADSIOT キーワード

環境 967

構文 967

使用上の注意 967

説明 967

MSNAME キーワード

環境 968

構文 968

説明 968

例 968

NODE キーワード

環境 969

構文 969

使用上の注意 969

説明 969

例 971

OLDS キーワード

環境 971

/STOP コマンド (続き)

OLDS キーワード (続き)

構文 971
使用上の注意 972
説明 971
例 972

OTMA キーワード

環境 972
構文 972
使用上の注意 973
説明 972
例 973

PGM キーワード

環境 973
構文 974
使用上の注意 974
説明 973
例 974

REGION キーワード

環境 975
キーワード 975
構文 975
説明 974
例 977
reg# パラメーター 975
reg#-#reg パラメーター 975

RTC キーワード

環境 983
構文 983
使用上の注意 983
説明 983

SB キーワード

環境 984
構文 984
説明 984
例 984

SLDSREAD キーワード

環境 985
構文 985
説明 985

SUBSYS キーワード

環境 986
構文 986
使用上の注意 986
説明 985
例 986

SURV キーワード

環境 987
キーワード 987
構文 987
説明 987

THREAD キーワード

環境 988
キーワード 988
構文 988
使用上の注意 989

/STOP コマンド (続き)

THREAD キーワード (続き)

説明 988
例 989

TMEM キーワード

環境 991
キーワード 991
構文 991
使用上の注意 992
説明 991
例 992

TRAN キーワード

環境 993
構文 993
使用上の注意 993
説明 993
例 994

USER キーワード

環境 995
構文 995
使用上の注意 996
説明 995
例 996

VGR キーワード

環境 997
構文 998
使用上の注意 998
説明 997

WADS キーワード

環境 998
構文 998
説明 998

/SWITCH コマンド 999

環境 999
キーワード 1000
説明 999
例 1001

/TERMINATE OLREORG コマンド

コマンド応答 1019
タイプ 1 1019, 1020
例 1020

/TEST コマンド 1023

環境 1023
キーワード 1023
使用上の注意 1024
説明 1023
例 1025

/TRACE コマンド

説明 1027
例 1032
DFSMSCE0 キーワード 1028
EXIT キーワード
環境 1028
キーワード 1028
構文 1028
使用上の注意 1029

/TRACE コマンド (続き)

EXIT キーワード (続き)

説明 1028

LEVEL キーワード 1030, 1033, 1041, 1063

LINE キーワード

環境 1030
キーワード 1030
構文 1030
説明 1029
例 1032

LINK キーワード

環境 1032
キーワード 1033
構文 1033
説明 1032
例 1034

LUNAME キーワード

環境 1035
構文 1035
使用上の注意 1035
説明 1035

MODULE キーワード 1031, 1034, 1042, 1064

MONITOR キーワード

環境 1036
キーワード 1037
構文 1037
使用上の注意 1038
説明 1036
パラメーター環境テーブル 1038
例 1039

NODE キーワード

環境 1040
キーワード 1041
構文 1040
使用上の注意 1042
説明 1040
例 1043

OSAMGTF キーワード

環境 1045
構文 1045
説明 1044

PGM キーワード

環境 1048
構文 1048
使用上の注意 1048
説明 1048

PI キーワード

環境 1045
キーワード 1046
構文 1045
使用上の注意 1046
説明 1045
例 1047

/TRACE コマンド (続き)

PSB キーワード

環境 1050
キーワード 1050
構文 1050
使用上の注意 1051
説明 1050
例 1051

TABLE キーワード

環境 1051
キーワード 1052
構文 1052
使用上の注意 1054
説明 1051
例 1055

TAKEOVER キーワード 1031, 1034,
1042

TCO キーワード

環境 1057
構文 1057
説明 1057

TIMEOUT キーワード

環境 1057
キーワード 1058
構文 1058
使用上の注意 1058
説明 1057

TMEMBER キーワード

環境 1059
キーワード 1059
構文 1059
使用上の注意 1060
説明 1059
例 1060

TPIPE キーワード 1059

TRAN キーワード

環境 1060
構文 1061
使用上の注意 1061
説明 1060
例 1062

TRAP キーワード

環境 1062
構文 1062
説明 1062

UNITYPE キーワード

環境 1063
キーワード 1063
構文 1063
使用上の注意 1064
説明 1063

/UNLOCK コマンド

DB キーワード

環境 1068
構文 1068
使用上の注意 1068

/UNLOCK コマンド (続き)

DB キーワード (続き)

説明 1067
例 1069

LTERM キーワード

環境 1070
構文 1070
使用上の注意 1070
説明 1069

NODE キーワード

環境 1070
構文 1071
説明 1070

PGM キーワード

環境 1071
構文 1071
説明 1071
例 1071

PTERM キーワード

環境 1073
構文 1073
説明 1072
例 1073

SYSTEM キーワード

環境 1073
構文 1074
使用上の注意 1074
説明 1073
例 1074

TRAN キーワード

環境 1075
構文 1075
使用上の注意 1075
説明 1075
例 1075

/VUNLOAD コマンド

環境 1493
構文 1493
使用上の注意 1493
説明 1493



プログラム番号: 5635-A06
5655-DS5
5655-TM4

Printed in Japan

SC43-4285-00



日本アイ・ビー・エム株式会社
〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19-21

Spine information:

IMS バージョン 15.1.0

コマンド 第 2 巻: IMS コマンド N - V

